Deltaプロファイル

極

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅｌｔａプロファイル

【Ｎコード】
Ｎ３８５５Ｃ

【作者名】
極

【あらすじ】
世界最強（？）の魔法使いだった俺は世界を守るとかいう在り来たりな理由で死んだ、と思っていた。そして目が覚めると、俺は戦争真っ最中の世界に飛ばされていた。人間と人間と化け物の醜い争い、俺の戦いはまだ終わってなかった。

第1話　争い、再び（前書き）

この小説は状況や場面によって視点が様々に変わり読みにくいと思われます。
なので、これは一つの「物語」として読んでいただければ幸いです。

第1話　争い、再び

――「最強の魔法使いと言われたこの俺が、まさかこんな所で死ぬとは……」

男が一人、崩壊していく世界の中で立ち尽くしていた。

周りは宇宙のような幻想的な光景が広がり、立っている大地には次々に亀裂が走っていく。

「自分の身を犠牲にして世界を救う、ねぇ。悪くはないけど、何か在り来たりな最後だな」

もうすぐ死ぬというのに男は緊張感の欠片も見せず一人で喋り続けている。

と、その時。ついに男の立っている地面にも亀裂が走りだすと男の足場が崩れていくとともに何も無い空間、無の世界に男の体は吸い込まれていく。

「高橋甲斐斗、暁に死す。とかしてみたかったもんだなぁ……」

男には生きたいという感情もたしかにあった、だが死んだら死んだでそれでもいいと思っている。

死ねば、実の姉に会えるのだから――。

――ＮＦ（Ｎｅｗ　Ｆａｃｅ）軍がＢＮ（Ｂａｃｋ　Ｎｕｍｂｅｒｓ）軍と激しい衝突を見せる。

だがＮＦはＢＮの策略にはまり危機が迫っていた。その為圧倒的な戦力を持っているはずのＮＦは撤退を余儀なくされている。

この世界の戦争はデルタマシンナーズ（Ｄシリーズ）という人型機動兵器を使って戦争を行なうのが主流。

素早い動きが可能、戦車や戦闘機より遥かに高機動、高性能を誇る機体である。

そして今、その機体を駆使して戦場で戦っている一人の青年がいた。

――全ては計算外の事だった、相手の機体は僅か一機。
十機以上いたはずの仲間の機体は殆ど破壊され、今ではたった四機程になっている。
「アステル少尉、今すぐ後退をしてください！このままでは全滅してしまいます！」
通信でオペレーターのルフィスの声が聞こえてくる。
でもノイズが激しく、モニターに映し出される彼女の姿もぶれてしまってよく見えない。
「仲間がまだ戦っているのに、僕だけ逃げる訳にはいかないよ」
「駄目です、少尉の乗っている機体は破損が酷すぎます！直ちに後退してください！」
僕の乗り込んでいる機体の各部データが目の前にモニターに映し出された。
胸部の装甲を損傷、機体の左腕も吹き飛ばされているのが見てわかる。
「大丈夫、まだ戦えるよ。それより、味方の機体が戦線離脱するまで戦闘を継続するから、オペレート頼みます」
「りょ、了解！あ、じゃありません！今すぐ――ッ！？」
その時、ルフィスが何かに気づいた素振りを見せる。
「Ｂ３の位置に味方機三機確認！ＳＯＳ信号を出しています！」
「こちらカイト・アステル。了解しました、直ちに現地に向かいます」
ＳＯＳ信号となると、敵と交戦中だと予測できる。
それにしても相手は一体何者何だ、たった一機で僕達の部隊を半壊させるなんて……。
僕は信号を出していた場所へと近づいていくと、遠くの方で微かに見える三機のＮＦの機体『ギフツ』が立っていた。
そして機関銃（マシンガン）を片手にひたすら『何か』を撃ち続けているのが見えた。
『何々だあの機体は！』

『あれは多分ＢＮの新型機体、まさかここに現れるなんて……！』
何を撃っているのかはこの距離からでは確認できない、僕は更に出力を上げて仲間の元へと向かう。
その時、既にレーダーに映る味方機の数は三機から二機に減っていた。
『くそっ！当たれよ！当たれよおぉっ！！』
一機のギフツが追い詰められ、機関銃を乱れ撃ちしている。
それでも『何か』には掠りもしない。一気に距離を縮められ、一本の剣がコクピットを貫く。
『あああああッ！！』
貫かれた機体は爆発を起こし、その爆発の後で僕はやっと現地に到着する事が出来た。
レーダーに映し出されているＮＦのマークが一つしか反応していない。
「そんな、あと一機しか残ってないなんて……」
目の前には負傷した一機のギフツが膝を曲げて座り込んでいた。
僕はすぐさま通信を繋げて撤退を呼びかける。
だがギフツは一向に動く気配を見せなかった、するとノイズ音ともに力の無い女性の声が聞こえてきた。
『私の機体ではもう無理です、私を置いて少尉は早く撤退してください！』
「仲間を見捨てるなんて僕には出来ない！」
『お願いします、アステル少尉、早く――――！』
「待ってて、今すぐ助けるから！」
僕の機体が一歩前に足を踏み出すと、まるでそれが引き金だったかのように何処からともなく風が吹き起こり機体が揺らされる。
『これはっ！？早く逃げ――――』
それを最後に女性の声が聞こえなくなり、ノイズ音だけが僕の耳に入ってくる。
そして機体を揺るがした風は爆風へと変わり、レーダーに反応する

最後の印が消えた。
「そんなっ、一体何が……」
爆風が風に流されると、そこには先程まで立っていたはずのギフツが無残にも破壊されており、機体の残骸が当りに散らばっていた。
目の前で仲間が殺された。何人も何人も……向かってくる敵はたった一機だけなのに。
すると目の前のモニターの映像が変わり、もう一度ルフィスが映る。
「アステル少尉、第五機動隊は少尉を除いて全滅しました、お願いします直ちに撤退をしてください！」
僕だけ撤退、僕だけ生き残るのか……。
「少尉！？後ろにＢＮ機の反応がっ！」
ルフィスの声に機体を後ろに振り返らせる、そこにはＢＮの新型機体であろう機体が僕の後方にある崖の上に立っていた。
その姿をメインカメラに捉え機体の姿がはっきりと見てわかる。
崖上からすっと飛び降りてくるＢＮの機体、白銀の装甲を身に纏う騎士のような姿に、白色のマントが風で靡いている。
そして青い目を光らせるその機体は、まるで僕の様子を窺うかのようにこちらを見つめたまま動かない。
「あの機体が、僕の部隊を……」
僕の心は怒りや驚きよりも恐怖の方が大きかった。
その場から逃げ出したい気持ちはたしかにある。でも僕は軍人、死んでいった仲間の為にも戦わなければならない。
「ルフィス、今から僕はあの新型と戦うから、戦闘データを記録して」
驚いた様子のルフィスは僕を見つめてくる、全く予想通りの反応だ。
「な、何を言っているんですか！撤退命令が出ているんです！命令違反になります！」
「今の僕の機体であの新型から逃げれそうもないから、ここで戦うしかないよ」
それだけ告げて僕は通信のスイッチを切る。

そうだ、僕は戦うんだ。
相手はたった一機、やれる、僕ならやれる。
戦って、勝って、戻って、姉さんの元に、皆の元に帰るんだ。
「少尉！……少尉？そんな、アステル少尉！」

――いくら応答を呼びかけても返事は無い、アステルがスイッチを切っている以上通信は出来ない。
アステルの乗るギフツ、敵の新型のＤシリーズ。
互いは見つめ、睨みあい、両者隙を見せない。

――僕の足は微かに震えていた。
必死に止めようとしても止まらない、それ所か汗が僕の頬を伝う。
荒野には静かに風が吹き、機体の周りに砂塵が舞い上がる。
「僕はこんな所で、死ぬ気は無いッ！」
ギフツの右腕から小型のナイフが飛び出し、そのナイフを掴む。
ナイフを握り締めながら僕は、敵の新型に接近していく。
相手もそれと同時に剣を構え、凄まじい速さで僕の機体に近づいてきた。
相手が突き出した剣を何とか避けるものの、敵は二本の剣を使う為に簡単には近づけない。
小型ナイフでは歯が立たず、相手が振り下ろす剣を弾こうとするが逆に一撃で腕を破壊され、機体の持っていたナイフが手から吹き飛ばされてしまう。
負傷した機体では相手の剣を避けるのが精一杯だった、
一旦距離を置こうとして後退するが、その動きに合わせてＢＮの機体は一気に近づいて来る。
「は、速い！？」
機体の足を振り上げ、蹴りを繰り出そうとするが、敵の機体は僕の動きを完全に先読みし瞬く間に剣で機体の足を切り捨てられる。
その衝撃で機体が大きく揺れ、機内に頭を打ち付けてしまうものの

必死に体勢を立て直そうと機体を動かそうとしたが、片足を失ったギフツはもはや動く事が出来なくなっていた。
後部に付いてある機関銃に手を掛けようとした時、敵の左手に持っている剣がギフツの右腕を貫く。
右腕も機能停止となり、武器も取る事が出来ない。
頭から流れる一筋の血、とても暖かく、気持ち悪い感触。
「血？ぼ、僕は死にたくない……死にたくないっ！」
機体は仰向けのまま動かない。
まるで機体は死を受け入れるかのように止まっていた。
「た、助けて！嫌だ！嫌だぁっ！！」
こんな所で死にたくない！死にたくない！死にたくない！！
新型は右手に持っている剣をギフツの胸部に突き立てると、それをゆっくりと下ろしていく。
機体の胸部に穴を開け、ゆっくりと刺し込まれてくる剣先は徐々に胸部の装甲を貫き、そして僕の目の前に剣先が現れた。
「た、助けて！姉さん、姉さん！姉さ――」

――ある音と共に、東部軍事基地のオペレート室にいたルフィスは涙ぐむ顔を両手で覆った。
その時、既にＮＦ軍第五機動隊の最後の印がレーダーから消えていた。

第1話　争い、再び（後書き）

正式名ＭＦＥ－ギフツ（Ｎｅｗ　Ｆａｃｅ製）
全長－１７ｍ　機体色－茶　動力－光学電子磁鉱石
主に階級が少尉以下の軍人が搭乗する機体。
特徴：左右の腕に備えられている仕込みナイフ。

第2話　嘘、記憶

――閉じていた目蓋開いて見えた景色は、真っ白に塗られた壁だった。
顔を横に向ければ小さな机の上に花瓶が置かれている。
暖かい光が窓辺から射し込んでいて、その輝かしい部屋で俺は目を覚ました。
目蓋に射し込んでくる光は余りにも眩しい。　右手で目元を擦った後、ふと自分の腕を見てみると腕には包帯やら点滴やら色々と付けられている。
その時ふと俺は思った、ここは一体何処なんだ？
……たしか世界が崩壊した後に俺はそれに飲み込まれて……よく憶えてないな。
とりあえず回りを見渡してみるが、白い普通の部屋が広がっているだけ。
なんで俺はこんな部屋にいる、それにこの点滴は何なんだ？
ベッドから起き上がる事は出来るが、体全身や両足がとても痛くベッドから出る事が出来ない。
すると部屋にある扉が開き、そこから白衣を着た女性が現れた。
「あっ」
あっという言葉と共に現れた女性、ベットから出ようとする俺を見て立ち竦んでいた。
すると女性は突然目に涙を浮かべると、手に持っているカルテを落としてしまう。
すぐに拾うと思ったが、その女性は俺を見つめたままカルテを拾おうとしない。
「あの、それ落ちたけど。って、え？」
もう一度、もう一度その女性の顔をよく確認してみる。
間違いない、間違えるはずがない。俺はこの女性を知っている。こ

の女性は――――。
「姉……さん？」
その一言が女性の耳に届いたとき、女性の表情は曇りから一気に晴れへと変わった。
「カイト！気がついたのね！」
満面の笑みを見せながら一気に俺に抱きついてくる姉さん。
暖かい、姉さんに抱きしめられて俺の体は更に暖かくなる。
俺の目の前で、今、こんな近くで……姉さんが動いている。
信じられない、死んだはずの姉さんが俺を抱きしめている。
なるほど、ここは天国なのか、俺はあの時に死んで。それで姉さんの所に来たのか。
ようやくぼやけた思考で理解出来た、これで安心できる。
「ずっと心配してた、カイトの機体が破壊されたって聞いた時なんて、私、もう……」
……はて、機体が破壊された？何の事だ。
天国行きの船でも破壊されたのか？まぁ生きた人間は誰も天国を見た事が無いからな、あっても知らないだろう。
所で、なんで俺天国にいるのに点滴を打ってるんだ？
てか死んでるのに抱きしめられて苦しい。
「でも良かった、本当に。カイトが無事で……あ、そうだ。飲み物でも買って来るから少し待っててね」
すぐに俺から離れ笑顔のまま落としたカルテを拾うと、机の上で軽くカルテを叩いて綺麗に揃える。
そして俺に軽く頭を下げた後、部屋から出て行ってしまった。

――――生きてるのか、俺。
恐る恐る自分の左頬を強くつねってみる。
痛い痛い！痛てえッ！何をやっているんだ、俺は馬鹿か。
こんなに強くつねるんじゃなかった。
と、一人でボケとツッコミが出来るんなら生きてる証拠だ。

頭と頬が少し痛むが、状況を整理してみる。
俺はあの時の戦いで力を使い果たし、次元の狭間にでも吸い込まれて……。
だとすると、ここは俺がいた世界じゃないって事か。
それなら俺の元いた世界に魔法で帰ればいいだけじゃないか。
でも、なんで姉さんがこの世界に？
まぁ考えてみれば、他の世界にはその人に似ている人なんていくらでもいる。
んー……俺が元の世界に帰ったら、姉さん悲しむかな。姉さんと一緒にいたいなー。
なーんて思ったが、何を考えているんだ俺は、あの女性は姉さんじゃない、ただのそっくりさんだろ。
俺が一人頭を抱えている時、俺の病室のドアが勢いよく開く。
「カイトー！メロンソーダ買ってきたよ！」
そこは普通、水とかじゃないのか。なんで炭酸なんだ。
と、ツッコミを入れる人がいるかもしれないが、俺はメロンソーダ派だから大丈夫だぜ。
「あ、ありがとう」
渡された紙コップには沢山の小さな氷が入っていた。
氷って一応水だから、入れちゃうと味が薄くなるんだよ。
そんなどうでもいい事を考えながら渡された飲み物を飲む。
「私これから行く所があるの、だからもう行かなくちゃいけないから」
「俺の事は心配いらないよ、安静にして寝てるから」
「俺……？まぁいいや、安静にしてるのよ？それじゃ」
姉さんがまた部屋を出て行ってしまう、何も聞けなかった。
何々だこの世界は……とりあえず俺は痛みを堪えながらベットから降りてみる。
何とか足は動く、だがやはり痛い。それに全身に重りを乗せているかのように体が重い。

とりあえずこの世界は別世界で、そしてさっきの女性は俺の姉さんのそっくりさん、って事でいいか。
一歩ずつ痛みを堪えながら歩いていき、ドアノブに手が触れる。
と同時に扉は開かれるが、俺が開けた訳ではない。外から誰かが扉を開けたのだ。
「アステル少尉!?」
扉が開いた場所、つまり俺の目の前に一人の小柄な少女が立っている。
するとこの少女も突然涙目になると、今度は俺に敬礼をしはじめた。

「いえ、おかえりなさい、カイトさん」
「た、ただいま」
とは言ったものの、誰だこの少女は、少尉?俺が少尉?
嫌な予感がする、何か面倒な事が起きる前にここから逃げなければ。

「セレナさんから聞きましたよ、大した怪我も無くてよかったですね」
「待て、今何て言った?」
「えっ、セレナさんからカイトさんの意識を取り戻したと聞いて、怪我もなくて……」
姉さんの名前はセレナ、そしてその弟の名前がカイトだと?
どうなってやがる、なんで姉さんの名前が同じ何だ、しかもその弟も俺と同じ名前。
「あ、まだ体調はまだ調ってないんですからベットで安静にしていてください!」
「い、いや。ちょっとトイレに行こうと思ってね」
苦笑いをしながら何とか病室を出てみる。
白い壁に白い廊下、見た所ここは病院なのだろう。あちらこちらにパジャマ姿の人が見える。
「すぐ戻ってくるから、ははは……」

点滴の管を刺したまま、重い体を引きずりながら一歩ずつトイレのある方へと歩いていく。
少女は一言「お気をつけて」と言って、俺を見送ってくれた。
トイレに行くそぶりを見せた後、とりあえずトレイの横にある階段を点滴を持ちながら下りていく。
どうやらここは二階らしい、一歩づつ階段を下りてロビーの様な所に出る。
ロビーはさすがに人が多い、とりあえず新聞が束になって置いてあったので読んでみる事にした。
誰も座っていないソファに座ると、新聞を広げてみる。
６月１日、ＮＦ１００年。
１００年ねぇ、サッパリわからん。
この『ＮＦ』って何々だ、何かの言葉を略した様にも見えるが。
新聞の記事には今後の政治について、天気予報、四コマ漫画。
普通の新聞だな。
だが政治についての事は重要だ。
どうやらこの世界は戦争をしているらしい、何処の世界でも争いは絶えないものだということがよくわかる。
でもまぁ正直俺は他の世界の戦争何てどうでもいい。さっさと自分の元いた世界に帰るだけだ。
新聞をソファに置いて立ち上がり、点滴の刺さっている右腕を前に突き出して目を瞑る。
短い間だったが、この世界とはさよならだ。
「転移魔法発動ッ！」
その瞬間、俺の足元に複数の光る陣が出現。
陣が強烈な光を放つと共に俺の体を光が覆い隠して元の世界に帰れた……らいいのにな。
……うん、何も起こらない。何も発動しない。ロビーにいる人達全員が俺に視線を向けて来る。
もう一度言う、何も起こらないし、何も起きない、何も。

見るな、俺を見るな、そんな可哀想な者を見る目で俺を見るなっ！
「ママー、あのお兄ちゃん変な事言ってるよー」
「しっ！指さしちゃだめでしょ！」
「えーっ、だってあのお兄ちゃんが～」
母親が女の子の手を引いて病院から出て行く。
ああ、俺はきっと脳に重い病気でも抱えている人間だとでも思われているのだろう。
さすがにこの恥かしさには耐えれない、俺は体勢を低くしながら病院を後にした。
とは言っても、右腕には点滴の管もささってるし。
私服姿でもないから、病院の敷地内から出る事は無理だろう。
病院を出ると大きな庭があり、中央には噴水まである。
そして病院の周りを囲むかのように木が並んでいた。
何とも平和な雰囲気を漂わせている、俺は大きな噴水の横にあるベンチに腰掛けた。
「て、転移魔法、発動……」
今度は小声で、誰にも聞かれないようにボソボソと言ってみる。
しかし、先ほどと同じで何も起こらない。
以前は使えていたはずの魔法が使えなくなっている。
この俺が魔法が使えない？んな馬鹿な、冗談きつい。
だが使えないって事は、元いた世界に帰れない。
元いた世界には戻ると約束したのに、これではどうしようもないな。
俺は一生この世界で生きる事になるのか？
……考え方を変えてみよう、案外それも悪くは無いのかもしれない、この世界にはこんな綺麗な所があるのだ、それに俺は少尉らしいし仕事もある。
そういえば少尉って、俺は軍人なのか？
俺はもう一度病院に戻った、俺が読んで新聞の隣には、もう一種類の新聞が置いてあった。
隣の新聞を手に取り、また噴水のある中庭に戻る。

ベンチに座ってゆっくりと新聞を開いてみる。
なるほど、これはこの国の軍事の事について書かれているのか。
ふと新聞に書かれてある一つの記事に目が止まる。
記事の内容によれば昨日、カイト・アステルという男が一人生還したらしい。
どうやら昨日、コイツは敵軍と戦い部隊は隊長を残して全滅したのか。
親切に二人の顔写真まで貼られてある。
そこには俺の顔写真と、セレナ・アステルという名の女性の顔写真が写っていた。
カイト・アステル、セレナ・アステル、二人は兄弟、か。
やっぱり、俺の姉ではなかった。俺の姉はもう死んでるもんな。
ん、いやまて。カイト・アステル？誰だこの男は。
俺が今ここにいるとしたら、カイト・アステルという男は何処にいる？
その記事には更に詳しい事が書かれてあり、俺は新聞紙を顔に近づけながらその記事を読んでいった。
カイト・アステルは機体を破壊されて爆発、炎上を起こしたらしい。
その時はＢＮの連中がまだ近くにいたので生存確認は出来ない為、数時間後調査をしてみた所。
機体の周辺でほぼ瀕死の状態のカイト・アステルを確認。
激戦の中、唯一生き残びたカイト・アステル少尉はすぐさま病院へと運ばれて……。

――大体話しはわかった。何というか、運が悪すぎる。
これは俺の予想だが、多分カイト・アステルは死んだ。
俺は別の世界に飛ばされ、運悪くこの世界のその場に現れてしまった。
俺とこのアステルって奴は顔がそっくりで、しかも名前まで似てい

る。
アステルと間違えられた俺は病院送りにされ、気が付き、今に至るって事か。
笑えねえ。
生きていると思われている人間は死に、全くの赤の他人の俺が来てしまった。
俺はあの人達に真実を言っても信じてもらえるだろうか。
絶対に無理だ、戦闘の時強いショックを受けて記憶を失っている。
となるのがオチだな。
いや、だがその方がまだマシだろう。死んだと言うより記憶を失っていると言った方が都合が良い。
「カイトさーん！何処ですかー！？」
丁度彼女も来たようだ、話してみるか。
「俺ならここにいるぞー」
力無くへらへらと笑みをみせ、左手を軽く振ってみせる。
どうやら彼女は俺に気づいたらしく、すぐこっちに来てくれた。
「カイトさん、トイレに行ったんじゃなかったんですか？私ずっと待ってたんですよ」
彼女はそう言って寂しそうな表情を見せる。
こんな事、本当は言いたくはない。
だからって、このまま騙す訳にはいかんだろ。
「ああ、ごめん。所でさ……君は誰？」

――テーブルが並び、壁には3台程自動販売機が並んでいる休憩室。
その部屋で、赤髪の女性がテーブルに着いて缶コーヒーを飲んでいた。
「アステル少尉が記憶喪失だと？」
女性が缶コーヒーを机に置くと、その横にいる背の小さな少女は数枚の書類を目に通していく。

「みたいですよ、そうここには書かれてますけど」
「本当に何も覚えてないのか？」
「えーと、覚えてる事と言えばお姉さんの名前は憶えていたらしいです」
「セレナ・アステルの名前だけ覚えているのか」
赤髪の女性は深いため息を吐くと、飲み終えた缶をゴミ箱にそっと捨てる。
そして女性は立ち上がると机の上に置いてあった黒い帽子を深く被り、休憩室を後にした。
するとそれを見た背の小さな少女は急いで女性の後についていく。
「少佐ー、何処に行くのー？」
「アステル少尉のお見舞いだ。最近忙しくて行けなかったからな」
「えっ、でもアステル少尉は記憶が」
「私は前から見舞いに行こうと前から思っていた、今更行かない訳にもいかん。由梨音も来てくれるか？」
「もちろんです！」

――「これで終わりっと」
今俺がしていたのは精神鑑定らしい、ただのマークシートのテストにも見えたが。
ああ、それにしても。誰も俺の病室に来なくなったな。
あの少女、名前ルフィスだっけ。かなり傷ついてた。
やっぱ言うんじゃなかったのかもしれないな……だがいずれ分かることだし良いよね……。
それに一番傷ついたのは姉さんの方だろう。俺はこれからどうなるんだろうか。
「失礼しまーっす！」
元気の良い少女の声と共に勢い良く扉が開けると二人の女が病室に入ってくる。
一人は背の低い少女と、もう一人は黒色の軍服と黒色帽子を被って

いる怪しい女、一体何者だ？
「初めまして！私の名前は高橋由梨音（たかはしゆりね）と言います！アステル少尉！」

「あ、ああ。初めまして」
何とも元気そうで明るい少女、軍服を着ているんだが、この子も軍人なのだろうか。
それで、その横にいる怖そうな人は誰なの。
見た所赤い髪は背中の辺りまで伸びている為、女性だと思うが。
「何をやっているカイト、記憶喪失だと？嘘を言うならもう少し上手い嘘を言え」
「はい？」
女性は徐に背中に右手を伸ばすと、なにやらものすごい物騒な物を取り出してきた。
刀、その刃先を俺の顔に向けてくる。
「私の名前を言え、言わないと斬る」
そんな事言われても分かる訳が無い。
だが女性の目は真剣そのもの、まるで鷹の眼のように俺を睨みつけている。
「どうした、さっさと言え」
いや言えないし、というか分からない。
こうなればデタラメに言ってみるしかねえ、俺はその女性の顔をじっと見つめた。
女性は視線を逸らさずに俺の目を見てくる。その時、俺の口から言葉が漏れてしまった。
「あか、げ」
「あっ……」
俺が漏らした言葉に反応したのは由梨音の方だった。
何だ、何々だあかげって。自分に聞きたい、問い詰めてみたいものだ！
髪が赤くて綺麗だったから赤毛って言ったのか？俺は。

「貴様、やはり記憶喪失というのは嘘だな！？」
女性はものすごい剣幕で俺を睨み、刀を握る力が強くなるのがわかった。
あれ、怒ってるって事はもしかして名前は当たっていたのか？
そんな俺を見て、赤髪の女性が口を開く。
「私の名前は赤城（あかぎ）だ、あれ程間違えるなと言ったのにまだその名で私を呼ぶかっ！？」
って違うのかよ！などと一人ツッコミを入れている場合じゃない。
今にも俺の首を吹き飛ばしそうな勢いで刀を振り下ろそうとする女性、
そしてそれを必死に止めようと頑張っている健気な少女。
名前間違えられたぐらいで怒りすぎだろ。そりゃ俺も間違えられたら少しは怒るけど。
二人を見て大体わかる、この二人もカイト・アステルと親しき仲だったのだろう。
でも俺は皆が知っているカイトじゃない、全くの別人だ。
「由梨音、帰るぞ」
「えっ、もう？」
由梨音が部屋についている時計を見ている。
二人が来てまだ１０分程しかたっていない。
「仕事が山積みだからな」
「はーい、それじゃ、アステル少尉！さようなら～」
「ああ、さよなら」
嵐のように訪れ、嵐のように去っていったが、何しに来たんだ、あいつ等。
特に何もせずに帰っていったがやはり軍人か。
俺も軍人らしいから、傷が治れば戦場に行く事になるのだろうか。
だが記憶が無いとなると軍復帰は無理か？一生病院暮らしをするのだろうか。
この世界は戦争の真っ最中、軍人であれば何時何処で死んでも不思

議ではない。
何処の世界もそうだ、数々の世界を渡ってきた俺は、本当に平和な世界何て見た事が無い。
どんなに美しい世界でも。
どんなに優れた世界でも。
どんなに楽しい世界でも。
やがて争いが起こり、世界は終焉を迎えるもんだ。

第2話　嘘、記憶（後書き）

ＮｅｗＦａｃｅ（ＮＦ）
争いのない、戦争のない世界を実現する為の組織。
その為に全ての国を支配下に置く事で叶うとされている。
ＮＦの目標は一つ、平和な世界にする事。

第3話　戦い、化け物

――あれから数日、体調の方はすっかり良くなってきた。
腕に刺さっていた点滴の管も外れ、体に巻かれていた包帯も取り外されている。
何とか自由に病院を歩き回れるようになったが、病院の外に出ることを許されていない。
そんなある日、突然ルフィスが俺の病室に現れた。
「おはようございます」
前のような笑みはない、無理もないか、俺は記憶を失っている設定何だから。
「ああ、君はたしか……」
「ルフィスですよ、前に言いました」
「憶えてる憶えてる、それで今日はどうしたの？」
「はい、アステル少尉。これが貴方の軍服です」
ベッドの上に置かれた軍服は少し重く感じられた。
「アステル少尉は東部の基地に移されたんですよ、早速着替えてください」
入院していたのに、いきなり軍事基地に移されるのか？
「部屋の外で待ってますね、着替え終わったら出てきてください」
伝える事を全て言って病室から出て行ってしまうルフィス。
やっぱり前に会った時より少し冷たくなったな……。
そんな事を一人考えている間に俺は青色の軍服を身に纏っていた。
ルフィスという女性が着ていた軍服は緑、軍服の色で階級が決まっているのだろうか。
俺は病室のドアをゆっくりと開けると、ルフィスは壁にもたれ掛かりながら不安げな表情して待っていた。
そんな表情で出てきた俺の姿を足先から頭のてっぺんまでじっくり見つめてくると、少しその不安が消えたように見えた。

「さ、さあ行きましょう。ついてきてください」
ルフィスはすぐに俺から目を逸らし、一階に下りる階段へと向かう。
その後ろを俺は服の襟を直しながらついていく。
一階に下りて病院を出ると、黒い車が俺を待っていた。
ルフィスがその車の助手席に乗り込んだので、とりあえず俺は後部座席に乗り込む。
そして俺が乗り込んだ途端、開いていたドアが勝手にしまり。ものすごいスピードで車が走り出した。
「Dシリーズに乗れるかテストを行います、コレは説明書です。読んでおいてください」
そう言ってルフィスは俺に辞典ぐらい分厚い書類をいきなり渡してくる。
そしてその一ページ目には何かロボットのような機械の絵が書かれてあった。
「Dシリーズって何？」
「簡単に言うと人型機動兵器、デルタマシンナーズの事です」
簡単に答えられてしまうが、よくわからない。
とりあえず今渡された書類を目に通せば何かわかるかもしれない。
とはいっても、俺は字を読むのが少し苦手だ。
けれど渡された分厚い書類を俺は丁寧に一枚ずつ読んでいく。
……まぁこんだけ分厚いんだ、読めば少しは理解出来る。つまりDシリーズと言うのは戦争の道具という事だろ。
戦車や戦闘機より高性能で頑丈、この世界の戦争の基本はコレを使って戦う事だろう。
俺はその分厚い書類をずっと見ていた、この世界がどれほど科学が進んでいるのかもよくわかる。
「着きました、降りてください」
ルフィスの声でふと我にかえると、ルフィスが車から降りていた。
俺が書類に目を通している間に配属先の軍事基地に到着していたの

だ。
この世界の街並みでもじっくり見てみようと思っていたのだが見れなかったなぁ。

――俺の目の前には大きな建物が聳え立ち、巨大な門が見える。
基地周辺は大きく分厚いコンクリートの壁で囲まれている、多分監視カメラとか沢山ついてるんだろうな。
何か基地というより要塞にも見える。ん？基地も要塞も一緒か？
そんなどうでもいい事を考えながら俺はルフィスについていくと、基地の中央に聳えている建物には入らず。
その横に建てられている建物に案内された。
「あの、俺は一体何処に向かってるの」
「さっき言った通りです、Ｄシリーズに乗れるかテストを行う為の試験場に来ました」
そして俺が建物に入った瞬間、凄まじい音が部屋中に響き渡っていた。
案内された部屋は一枚だけガラス張りになっており、そのガラスの先に見えるのは書類に描かれていた通りの機体が戦っていた。
かなり広いスペースだ、これ程大きな建物を作るとは……。
「今、赤城少佐と伊達中尉が模擬戦をしている所です。もうすぐ終わると思うので待ってください」
部屋には椅子が置いてあり、それに座るルフィス。
俺はガラスの前に立ち、二人の戦いを見てみる事にした。
それにしても、何だこの動きは。この機体の中に人が乗っているというのか？
俺が思っていた以上の速さで機体が動いている。
両機が持っている剣と盾。
互いの剣が激しくぶつかりあい、両者一歩も引かない。
と思ったが、一機が相手のサーベルを弾き飛ばす。
剣を弾かれた機体は背中に付いているアサルトライフルを手にして

銃口を向けるが
相手の機体は高速で左右に動きながら接近し、照準が合わない。
引き金を引いた瞬間、剣は銃口を切断。
銃口を切り捨てた時に剣を胸部に突き立てた。
胸部、それはコクピットが付けられている場所、Dシリーズの心臓であり脳だ。
「赤城少佐、伊達中尉。そろそろお時間ですので交代してもらえないでしょうか……？」
ルフィスが二人の乗っている機体に呼びかける。
剣を突き立てていた機体はゆっくりと剣を腰に戻し、後退する。
それに合わせてもう一機の機体も格納庫に移動していった。
「アステル少尉、パイロットスーツに着替えてください」
そう言うと、ルフィスは指を指して部屋を教えてくれた。
あの機体の動きを見て俺はほんの少し興奮していた、あれ程の動きが可能な乗り物に乗れるのだから男なら興奮して当然！
俺は言われるまま指を指された部屋に入っていくと、一人の男が青い軍服に着替えている途中だった。
多分先ほど模擬戦をしていた人だろう。
「ん、君はたしかアステル少尉だよね、久しぶり」
先に話しかけてきたのは相手の方だった。
とても優しそうに見える男だけど、本当にさっきの模擬戦をしていた男なのだろうか。
「っあ、記憶を無くしてるんだったっけ。ごめん」
「ああ、いえ」
「これからDシリーズのテストだよね？頑張って、応援してるよ」
「どうも」
やはり何とも優しそうな雰囲気を出している。
名前はたしか伊達　武蔵だったっけ、俺より一つ上の階級か。
伊達中尉が軍服に着替え終わり部屋から出て行く。
そういえば、伊達中尉と戦っていた赤城少佐と言うのは、この前数

分で部屋を出ていったあの赤髪の女の事か。
果たしてどちらが勝ったんだろうか、あの勝負。誰がどの機体に乗っていたのかわからなかったし。
『アステル少尉、早く着替えてください。時間がありません』
ルフィスの怒りの警告でやっと我に返った。
最近どうも一人で考え込む事が多い、急いでパイロットスーツらしき服を慌てながら着ていく。
怒られないように早く機体に乗らなければならない。
俺は急いで更衣室を後にすると格納庫には既に機体の準備が出来ていた。
しかし、俺が乗る機体は何とも地味な色をした機体、先ほど戦っていた機体より遥かにダサイ。

――『アステル少尉が乗る機体はギフツです。早く乗り込んでください。テストを始めます』
んな事言われてもなぁ。取りあえずコクピットに乗り込んでみる。
広くもなければ狭くもない、何とも言えない空間である。
あれ、どうやってハッチ閉めるんだっけ。
書類読んで覚えたのにすっかりど忘れをしてしまった。
取りあえずそれっぽいスイッチを押してみる。
その瞬間、機体のメインカメラが光りはじめ、急にハッチが閉まる。

『ＭＰＴ　Ｓｔａｎｄｂｙ　ＯＫ』
目の前に広がっていた黒い壁が一面モニターに変わり。
頭の上などについてあるスイッチにもランプが付いてコクピット席が明るくなった。
その光景に俺は少し感動してしまった、こんなのアニメでしか見た事無いぞ。
よ、よし。取りあえず電源が付いたんだし、動かしてみないと。
するとモニターの横に小型のモニターにルフィスが映しだされた。

『アステル少尉、前進して試験場に移動してください』
俺が操縦桿を前に倒していくと機体は一歩ずつ歩き始め前進していく。
何とか試験場に移動すると遠くの方に人型の板のような物が現れる。

『射撃データを取ります、人型の板に現れる赤い点を狙って撃って下さい』
ルフィスの映像が小型モニターに現れたまま、ずっとこちらの様子を見ている。
「了解」
機体の腰に付いてある小銃を手に取り、何とか構えてみせる。
あんな遠くの的を、しかもあの赤い点を小銃で撃てだと？
何とかターゲットをロックオンして小銃を発砲する。
『ターゲットに当たっていません。もう一度お願いします』
弾丸は的を大きく外れてしまう。
いや無理だろ、的が遠すぎる。
やはり機械まかせでロックオンしても駄目だという事か。
そうだ、俺がいつもしていたゲームのようにすれば。
ちなみに俺はゲームで負けた事が無い、その実力を今ここで発揮するしかないな。
今度こそ正確に撃ち抜いてみせる、俺は心を落ち着かせて引き金を引いた。
放たれた弾丸は一直線に飛んでいき、そしてターゲットの頭部に弾丸が貫通する。
「おっ、おお！当たったぞ！」
当たった喜びでつい声が出てしまった。
正直当たるとは思っていなかったがまさか当たるとは、やはり俺は素質があるに違いない。
コクピットで一人うれしさを隠せないそんな俺にルフィスが一言。
『あの、頭部ではなくて胸部を狙うんですけど……』

「え？」
ターゲットの板、赤い点は胸部で点滅している。
『頭部に当てる事は良いですが、今は胸部の赤い点を狙って下さい』
呆れた様子のルフィス、モニターの前で大きくため息をつく。
射撃テストはこの後も続いたが余りいい結果を出せなかった。
『射撃テストの結果、四十点程ですね』
「なっ、四十点って低くない？」
『続いては近接戦のテストを行ないます、ここで高得点を取らなければ降格です。頑張ってください』
俺の言葉を無視して次のテストに移りやがった、って。降格だと？
『少尉の階級の方は射撃、近接、機動、合計で百八十点以上を取らないと階級を落とされます』
「ちょっとまて、俺は記憶を失っているんだぞ！いきなりこんな機体を動かせる訳が無いだろ！」
『だから、頑張ってください……』
俺に見せたルフィスの悲しげで不安な表情。
何々だその顔は　彼女は俺に少尉でいてほしいとでも思っているのだろうか、
しかし俺は記憶を失っていて彼女の事を憶えていないんだぞ。
「頑張れって言われたら、頑張るしかないな」
悲しげな彼女をよそに、元気良く笑顔を見せた。
『少尉……』
そうだ、今の事だけを今考えるんだ。今するべき事、今なすべき事を。
「近接と機動のテスト、七十点以上取ればいいんだろ？」
『はい、ですが今のアステル少尉では』
「まぁ俺を信じろ、必ず取ってやるよ」
『あっ……』
機体の前に何枚かの板が現れる。

次のテストは銃器を使わずにどれだけ早く、正確に板を壊せるかのテストだ。
やってやろうじゃねえか、俺が本気出せば不可能な事など無い。

――その時、ルフィスとのモニター映像が消えてしまう。
一人オペレーター室で涙を流しているルフィス、必死に両手で涙を止めようとするが、止まってはくれなかった。
本当にアステル少尉は記憶を無くしたのか。
似ている、余りにもアステル少尉に似すぎていた。
それなのに、彼は覚えていない、全て忘れているのだ。

――悪いが、こんな所で降格してたまるか、負けるとかそういうのは大嫌いでな。
死んだアステルの為にも俺はカイト・アステルになり。この世界で生きて行くのも悪くは無い。
「おらよっ！」
俺は次々に右手に持っているナイフで胸部を刺していくギフツ。予想外の素早い動きでターゲットの急所を仕留めていく。
ターゲットの板が現れていくが、まるで出てくるのがわかっているかのごとく全て破壊していく。

――「赤城、あの動き」
先ほど赤城と模擬戦をしていた武蔵（むさし）が甲斐斗の乗っている機体の動きに興味を示していた。
「ああ、あの機体、記憶を無くしたアステル少尉が乗っている機体のはずだが」
二人が見ている中、試験場でひたすらターゲットを壊していく機体を見ている二人。
武蔵と赤城はその機体の動きを真剣に見ている。
「へー、記憶無くしてアレだけの動きをね。すごいと思わない？」

武蔵が振り返り、後ろにいる赤城に問いかけてみた。
「たしかにな……」
赤城は甲斐斗の乗っている機体を見ながら静かに答えた。
振り返っていた武蔵は体勢を戻し、また甲斐斗の機体を眺める。
「もし自分が記憶を無くして。いきなりあんな物に乗れなんか言われて乗れるかな」
その言葉に反応を示す赤城、甲斐斗の機体を見ている武蔵の背中に視線を送る。
「何が言いたいんだ？」
赤城の問いに武蔵は何も答えない。そんな武蔵の態度に赤城はただ黙って試験を見ている武蔵の背中を見つめる事しか出来なかった。

――「これでラストッ」
ターゲットの板が出てきた瞬間、胸部をナイフを突き刺して破壊した。
『近接戦のテスト結果が出ました、八十二点です！』
「どんなもんよ！」
『すごいですアステル少尉！この勢いで機動試験も高得点を期待しています！』
しだいに笑みを見せてくれるようになるルフィス。
その表情を見て俺も俄然やる気が出てくる。
「最後の機動テスト、内容は……」
モニターに映し出される指令、次々に現れる障害物を避けながら目的地に到達する事。
「なるほど、障害物競走みたいなもんか」
既に準備ＯＫ、早速機動テストを行なおうとした時。事件は起こった。
試験場内にけたたましいサイレン音と共にアナウンスが鳴り響く。
『Ｕｒｇｅｎｔ　Ｏｒｄｅｒ　Ｂ４エリアに　ＥＲＲＯＲ確認。Ｂ４エリアに　ＥＲＲＯＲ確認』

「エラーって、機械の不具合でも起きたのか？」
俺の目の前にあるモニターにルフィスの姿が映る。
『機械の不具合ではありません……敵です、アステル少尉もすぐに現地に急行してください！』
「お、俺もコレに乗って戦場に行くのか？」
『はい、今回のテストは一時中断。アステル少尉の実力なら大丈夫だと思います』
おいおい、早速実戦を行なえるなんて。これは運が良いのか悪いのか。
だがこれで俺の実力を発揮できるじゃねえか、テストより実戦が一番だぜ。
「了解、それで何処に行けばいいんだ？」
『今からＢ４エリアのＭＡＰをそちらの機体に送ります、赤城隊長の部隊に合流してください』
コクピットに付いているモニターにＭＡＰが表示され、自軍の機体の位置と数が青い点で表示される。
試験場に着いている門が開くと、俺は出力全開で外に飛びだしていった。

――既にＮＦ軍の機体が十機程現場に到着しており、各機付近の探索をしている。
その時、赤城の乗っているデルタのコクピットのモニターに隊員の映像が流れる。
「赤城隊長、現場にいたはずの四機のギフツの反応がありません」
「何？各機警戒して付近を探索しろ。奴等はまだ近くにいる」
荒れ果てた市街地、建物には大きな亀裂が端いる。
植物も無く人影も見当たらない、ただ砂嵐が街を駆け巡る。
赤城はコクピットの黒いスイッチを押し、武蔵の乗っている機体に呼びかける。
「伊達中尉、そちらの現在の状況を報告してくれ」

赤城のモニターにコクピットで寝ている武蔵の映像が流れる。
その姿を呆れた様子で見ている。
「武蔵……」
「寝てないよ」
閉じていた目蓋をパチリと明け、赤城を見ながら少し笑みを見せた。

「中尉、今度から任務中で寝ると減給にするぞ」
「いや、だから寝てな――」
突然武蔵の映っているモニターの映像が乱れ、交信が途絶える。
「なっ、応答しろ。武蔵！」
映像が映らないが、何かの音が聞こえてくる。発砲音である。
すると、他の場所を探索しに行っていた部隊の兵士から通信が入る。

「あ、赤城隊長！南西部でＥＲＲＯＲに……ああ！来るな！来るなぁあああああっ！！」
何か動く物にひたすらマシンガンを発砲していく兵士。
赤城が必死に兵士を呼びかける。
「落ち着け！一度後退をしろ！」
兵士は完全に混乱している、弾丸が尽きるまでひたすらマシンガンを撃ち続ける。
「ひいっ、奴等が機体に張り付きました！装甲がああ！あああああッ！！」
兵士の乗っていた機体のハッチが開い……いや、違う。開いたのではない。
穴が空いている、そこから何か動く物が見えるが上手く見えない。
装甲に空いている穴は少しずつ大きくなる。
「すぐに向かう！それまで……」
赤城がモニターに映っていた兵士の姿を見ようとした時、モニターから兵士の姿が無い。
スピーカーからは何かが削れ、砕けていく音が聞こえて来る。

「赤城少佐ー！援軍に参りました！」
聞き覚えのある声が赤城のスピーカーから聞こえてくる、由梨音の声である。
赤城のモニターに由梨音の姿が現れる。
「由梨音？お前はＥＲＲＯＲ掃討部隊には入っていないはずだ、何故ここにいる」
その時、由梨音の映像が流れている横に甲斐斗の映像が映し出される。
「援軍に来ました、赤城少佐」
「なっ、何故お前が戦場に出て来ている！」
『申し訳ありません、つい日頃の癖で……。私が出撃を許可してしまいました』
今度はルフィスの映像が流れる、赤城のモニターには三人の操縦席が映っている。
「アステルは記憶を無くしているんだぞ、それなのに実戦に出るなど……」
するとまた赤城のモニターに人影が映る。
「こちら武蔵、援軍は大歓迎だよ」
「武蔵、大丈夫か？」
「俺は大丈夫、でも味方三機がやられてね……」
『Ｂ４エリアのＭＡＰを解析、自分及び敵の位置を表示します』
ルフィスの乗っているのは普通の機体では無い。
特殊なレーダーを取り付けており、正確な地形、味方・敵の位置と数を正確に伝える事が出来る。
――赤城、由梨音、そして俺の乗っている機体のモニターに現在の状況が映し出された。
自軍の数は七、敵の数は二十。武蔵は現在十体程の敵と戦っている。
「敵の数二十って。相手はどれだけの戦力何だ？ＢＮはそれ程強い

のか？」
俺の発言の誤りを指摘するルフィス。
『違います、今私達の戦っているのはＢＮではありません』
「何？それじゃ今から俺達は何と戦うんだ？」
その時だった、俺の機体を囲むかのようにして赤い点が集まりだす。

『ＥＲＲＯＲです』
俺の機体を囲むかのようにして突然地面から現れた生物。その姿は余りにも酷く、醜かった。
人間のような肉の色、２本の足と４本の腕で地べたを這いずり回る。
皮膚が透けており、赤い血肉と太い血管が体内に張り巡らされている。
目は無く、血のように真っ赤な歯茎を剥き出しにしている。
「なっ、何々だよあの化け物！？」
急いで背中に付いている機関銃を手に取ると、俺は躊躇い無く引き金を引き射撃を始めた。
数匹が撃ち殺され、辺りに血や肉片が飛び散っていく。だが残りのＥＲＲＯＲが俺の機体に近づいて来る。その動きは何とも不気味で、見た事が無い。
「化け物か」
『アステル少尉、ここは危険だ。戦闘が無理な場合は下がっていいぞ』
赤城隊長から通信が来た、たしかに。素人がこんな物を見たら身動き取れないな。
だが俺は違う、俺は素人じゃない。何故かニヤニヤと不敵な笑みを浮かべてしまう。
「こちらアステル、大丈夫です。出来ます」
『アステル少尉？』
全ての交信のスイッチを無断でＯＦＦに切り替える。

「気持ち悪いんだよ、さっさと死ね！」
俺は腕に装備してある小型ナイフを両手に取ると、次々に近づいてくるＥＲＲＯＲを小型ナイフで片っ端から殺しまくる。
機体に張り付いてくる奴まで全てナイフで斬り、刺し殺していった。
気づけば俺の機体の周りにいたＥＲＲＯＲの反応が全て消えている。
化け物に負ける訳無えだろ、何たって俺は最強だからなっと、素の自分を出しすぎた。最近こんな喋り方してなかったからな。
俺は切っていた交信スイッチを全てＯＮに切り替える。
「どうですか、俺の近接戦の力。見ていただけましたか」
その場にいた全員が黙っている、驚きで唖然としているのだろう。
少しやりすぎた感もあったが、戦えることをアピールするのには丁度良かったか？
「それにしても何なんですか、あの化け物は、気持ち悪いですね」
化け物もそうだが、俺の動きも少し不気味に見られていたかもしれない。
当然皆は何も答えてはくれなか、赤城は俺達に命令を下す。
「話は後だ、各機武蔵中尉の護衛に向かうぞ！」
各機、赤城の機体についていくが、俺はついていかなかった。
ＭＡＰには数個の巣穴が確認できる、先にここを叩いておくべきだ。

――その間に数匹のＥＲＲＯＲと格闘を繰り広げている武蔵。
ＬＲＳで機体に近づいてくるＥＲＲＯＲを片っ端からぶった斬っている。
だが数が多い、斬っても斬ってもまだ出てくる。
武蔵の機体の後ろから数匹のＥＲＲＯＲが忍び寄っている。
「このーっ！」

由梨音の機体の手に持つ機関銃が武蔵の後ろにいたＥＲＲＯＲを撃ち抜いていく。
武蔵の隣に赤城と由梨音の機体、そして2機の兵士の機体が集合する。
「無事か？」
武蔵のモニターに赤城と由梨音の姿が映る。
「俺は大丈夫。でも仲間が……」
赤城達を囲むかのように建物の影から複数のＥＲＲＯＲが姿を見せる。
各機のモニターに赤城の姿が映しだされた。
「全機、周辺のＥＲＲＯＲを掃討後、奴等が出てきた穴を破壊する」

『了解！』
「あーそれなら巣穴なら俺が破壊しましたよ」
今度は全機のモニターに甲斐斗の姿が映し出された。
「奴等の出てきた巣穴にたっぷりと手榴弾を落としておきました、後はこの周辺にいる化け物を倒すだけです」
『アステル少尉、だから赤城少佐と別行動を……』
一人納得するルフィス。
赤城が新しく全機に指令を送る。
「皆聞いての通りだ、この地区のＥＲＲＯＲを掃討後、基地に戻るぞ」
「それとアステル少尉、貴様は命令違反として減給だ」
「げ、減給！？」
ギフツが後部に付いてあるマシンガンを手に取ると。
武蔵と赤城は後部に付いているアサルトライフルを手に取って構える。
そういえば、赤城と武蔵の乗っている機体は俺達の乗っている機体とは形が違う。
これは上位階級の人間が乗れる機体なのか……？

『あっ、アステル少尉！センサーに反応ありです！』
モニターにルフィスの姿が映り、ＭＡＰに緑色の点が現れる。
「また敵か？」
『いえ、人間の反応が探知されました。直ちに救助に向かってください！』
何でこんな荒れ果てた市街地に民間人がいるのかね、まぁいいか。
っと、今度は赤城から通信が入る。
『油断するなよ、何処からＥＲＲＯＲがいつ出て来るかわからないからな』
「了解」

――早速俺は生体反応を示した場所に向かってみた。
どうやらこの荒れ果てた市街地の中心部で反応しているらしい。
起動した時のスイッチをもう一度押してみると簡単にハッチが開き、俺はすぐさまその場に降りて付近の探索をしてみる。
「って、言ってもなー。何処にいるんだよ」
『アステル少尉、聞こえますか？今から私がじ、ぉ……』
え、ちょ。何か場所でも伝えてくれると思ったら機械の故障か？
耳に付けてある装置を軽く叩いてみるがルフィスの声が聞こえなくなる。
「ルフィスー、応答してくれー」
返事は返ってこない。
どうやら機械の故障だろう、ちゃんと整備ぐらいしといてほしいもんだ。
仕方が無いから一つずつ崩れかけの建物に入って行く事にした。
「おーい！誰かいないかー？いたら返事してくれー」
自分の声が建物内に響くだけ、耳元で風が通っていく程の音しか聞こえない。
何か静か過ぎて不気味だな、不気味な生き物は殺したが。
（けて……）

その時だった、微かに聞こえてくる少女の声。
（たす、けて……）
少女の声が耳に届いた時、声の主がいる場所が一発で分かった。
まるで操られているかのように俺は走り出し、声の主の下へと急いだ。
たどり着いた場所は教会、しかし白く塗られていたはずの壁は茶色く染まり、ガラスなども割れている。
壁には大きな亀裂も走っているため、中に入るのは少し危険な感じを漂わせる。
「ここにいるのか？」
門を開けて、慎重な足つきで教会の中に入っていく。
少しサビついた匂いが漂う教会、本当は神聖な場所だろうが、今は汚い廃墟にしか見えん。
「おーい、誰かいないのかー？」
うん、返事など返ってこない、だがこの建物に誰かがいるのはわかる。
「ん？」
教会の一番奥に誰かがその場に座り込んでいるのが見え、急いで少女の元に駆けつけた。
「お前だろ、俺を呼んだのって」
すこし大きめの服に身を纏い、青く綺麗な髪は大きく丸く角のある帽子を被っている。
少女は壁にもたれ掛かりながら静かに震えていた。
空ろな瞳は涙で濡れている。よほどここにいる事が恐怖だったのだろうか。
「大丈夫だって、助けに来たんだから」
甲斐斗が優しく手を差し伸べるが、差し伸べられた手を避ける少女。
「いや、だからさ。助けに来たんだって……」
次の言葉を出そうとした時、教会の天井の一部が崩れ落ちる、その

穴から何かが降って来る。
はぁはぁと犬のように舌を出し、ゴキブリのように地べたを這いずり回る生き物。
「出やがったな、化け物がっ！」
ん？また何かが落ちて。いやまた何か落ちて、っておいおいおいちょっと待て。
教会の天井に空いたから次々に落ちてくる、うん。いや多過ぎろ。
さっきまでからっぽだった教会内、何故か５匹程のＥＲＲＯＲが壁とかに張り付いているし。
俺が入ってきた入り口はＥＲＲＯＲが封鎖していやがる。
何だ、軽く死ねる状況じゃないか。ははは。
笑ってる場合か？　まて、落ち着け。
いやいや、落ち着いている場合じゃないだろ。
武器は何も持ってないし、こんな化け物どうしろって言うんだ？
ゲームならここで電源を切ってはい終了といきたい所だがな。
等と冗談を言える程俺に余裕は無い。
自分でもわかるぐらい額から汗が噴き出し、その場からどう逃げようかと必死に考える。
「はぅ！？」
俺は後ろでしゃがみ込んでいた少女を軽々と抱きかかえてると、もう一方の裏口に全速力で向かった
何とか裏口を通り、教会の外に出るのに成功。
よし、後は俺が乗ってきた機体に戻って、あの化け物をぶち殺してやって……。
「嘘だろ……？」
無いぞ、何も。何も無いぞ！
俺が乗ってきたはずのギフツが無い。
そんな馬鹿な事があるか、絶対にこの場所に止めて置いたはずだ。
ん……何だ、何か鈍い音が聞こえてくる。何かが砕かれていくような音が。

俺はその音の方にゆっくりと振り向いてみた瞬間、目の前が真っ白になった。
「んな……」
俺が乗って来たギフツを数匹のＥＲＲＯＲが装甲を砕いて食べている。
何か酸の様な物を吐き出して装甲を溶かしていくＥＲＲＯＲの姿も確認できた。
「お、おい。ルフィス、応答してくれ！ルフィス！」
いくら叫ぼうが、聞こえてくるのはノイズ音しか聞こえてこなかった。
い、今の俺に何が出来る？何も出来ないだろ。
「赤城少佐！早くこのピンチを救ってくれよ！」
もし近くにいるのであれば機体の機動音が聞こえるはずだ。
しかし、全く機械音が聞こえてこない。
「あの」
抱きかかえている少女が口を開いた。
だが体と共に声も震えており、不安をあらわにしていた。
「ごめんなさい、ごめんなさい……」
「えっ、あ。お前のせいじゃないって。逃げてみせるから」
俺が少女を見て話しているとき、奴等は頭上から襲い掛かってきた。
きもい、まじで近寄るなッ！
ＥＲＲＯＲは目の無い顔で俺を睨みつけているように見える。
ヒタヒタと２本の腕と４本の……めんどい、６本の不気味な足で近づいてくるＥＲＲＯＲ。
「いや待てって。話せばわかるって、な？何事も話し合えば……」
だがＥＲＲＯＲは近づいてくる、奴等に言葉など通じないのか。
――訳もわからん世界に飛ばされて、記憶喪失のフリをしたあげく。

ロボットに乗せられて、んで化け物に食われてはい終了。
俺の中の恐怖が怒りに変わっていく。
そんな勝手に、こんな簡単に、死んでたまるかよ……。
俺が魔法さえ使えれば、こんな奴等今すぐにでも消し炭にしてやるというのにッ！
「あの」
『貴方は何故死にたくない、何故生きたいのですか？』
頭に直接語りかけように、女性の声が聞こえてくる。
その声は俺に同じ質問を繰り返す。
『貴方は何故死にたくない？何故生きたいのですか？』
何だ、この声、誰の声だよ。つうか、そんな事聞いてどうするんだよ。
まぁ答えてやる、何故死にたくないか、何故生きたいか。
「俺は死にたくない、何故なら生きたいからだ」
って答えになってないな。
『何故そこまで生きようとするのですか、死ねば楽になれますよ』
「……死んで楽になれるなら、俺は喜んで死ぬけどな」
「誰だか知らんが、あんたは生きていて楽しい事とか嬉しかった事とか無かったのか？」
『楽しかった事もありません、うれしかった事もありません』
「辛い事や悲しい事もあるかもしれないけどな。
だが、生きていれば必ず楽しい事や嬉しい事があるんだよ」
『本当に？』
「ああ、なんなら俺がそれを見せてやってもいい。だから……」
俺の周りを数匹のＥＲＲＯＲが囲んでいる、もはや何処にも逃げ場は無い。
だがな、逃げ場なんて必要無いんだよ。
ゆっくりと閉じていた目蓋を開き、今、この場の現実を見る。
「運が悪かったな、化け物」
抱きかかえていた少女は気を失っているかのように目を閉じている。

俺は後ろを向き、その少女をゆっくりと地面に寝かせた。
「今お前等の目の前にいるのは、最強と言われた男だ」
その瞬間、一番前にいたＥＲＲＯＲが俺の頭を食い千切ろうと喰らいかかる。
「あー、お前等って目が無かったっけ」
黒い残光が見えた時、既にＥＲＲＯＲの首は吹き飛んでいた。
首が無いＥＲＲＯＲは地面をのたうち回り、やがて動かなくなる。
所詮生き物、首を吹き飛ばせば死ぬもんだな。
「どうした、それで終わりか。纏めて掛かって来いよ」
俺の一言と共に、囲んでいた数匹のＥＲＲＯＲが一斉に飛びかかってきた。

――赤城達の部隊が甲斐斗の下に駆けつけるが、無残に食い散らされた機体の残骸を発見する。
『そんなっ、私が、私がアステル少尉を……』
蘇る記憶、あの時みたいに、アステル少尉が……。
「落ち着いて、ルフィス。まだ少尉が死んだとは限らないよ」
その時だった、各機体の通信から聞こえてくる声。
「あ、が…す……」
ノイズ音と共にスピーカーから何者かの声が微かに聞こえてくる。
「あの、聞こえて、応答ねがい……ます……」
『アステル少尉?!』
通信の場所を検索し、無事甲斐斗のいる場所を探し当てた赤城達。
甲斐斗は大きく手を振りながら身の安全が大丈夫である事を確認させる。
だが赤城達は驚かされた、甲斐斗の姿は全身血を浴びており。
周辺はＥＲＲＯＲの残骸があたり一面に飛び散っている。
ＥＲＲＯＲは鋭利な刃物で斬られたかのように綺麗に真っ二つにされていた。

「赤城少佐、無事に民間人の救助に成功しました」
赤城の機体に少し笑顔で敬礼を済ませた甲斐斗。
甲斐斗の明るい顔とは裏腹に、赤城達はこの場の状況を信じる事が出来なかった、一人で。どうやってＥＲＲＯＲを不安が謎となり、信じるものも信じられなくなる。
「とりあえず無事で良かった、詳しい話は基地に戻ってから聞かせてもらおうか」
武蔵中尉の乗る機体が片手を甲斐斗の足元に伸ばした。
甲斐斗は少女を抱きかかえたまま、武蔵中尉の乗る機体の手の平の上に移動した。

――とりあえず初任務終了って事だ。

第3話　戦い、化け物（後書き）

―ＥＲＲＯＲ―
未だ謎に包まれている生物。
様々な形、種類のＥＲＲＯＲが存在する。
虫のように地面から湧き出る事もあり、以前作られた地下都市に巣があると考えられている。
人間のような形のＥＲＲＯＲもいれば虫のようなＥＲＲＯＲも存在しており、数、種類は未だ不明。

第4話　兵士、使命

――薄暗い牢屋、その中にこの俺甲斐斗と俺が助けた少女が閉じ込められていた。
少女は毛布で体を覆い、部屋の片隅で座りながら恐怖の余り小刻みに震えている。
「おい、体調が悪いのか？」
俺が手を指し伸ばすが少女は俺の腕から逃げるように離れ、もう一方の部屋の片隅に移動していく。
「お、おいって。別に何もしねーよ」
何だこの少女は、出会った時から思っていたが不思議な少女だ。
荒れた市街地の中、たった一人で何をしていたんだ？
ここに連れてこられる時も相当怯えている様子だったし。
「んじゃさ、名前教えてくれないかな」
少女は何も答えようとしない、仕方が無いのでまずは俺が名前を言う事にしてみた。
「俺は甲斐斗、最強の魔法使いだった男だ」
俺が名前を言った途端、大きく反応を見せた少女。俺の姿をまじまじと見ている。
驚きを隠せない様子である。俺の名前がどうかしたのだろうか。
名前の後の『魔法使い』って単語に反応したのかな？
「まぁ、気軽に甲斐斗って呼んでくれ。それで君の名前は？」
「なま、え？」
その言葉に首をかしげる少女。
「もしかして自分の名前がわからないのか？」
俺が近づこうとすると少女はまたうつむき、体を丸くして部屋の片隅で震える。
この子は一体何者なんだ、俺があの時。力を少しだけ取り戻したのもこの子が関係しているというのに。

名前か、名前が無いと、自分の存在を……。
「アステル少尉、出てください」
一人の兵士が牢屋の鍵を開けてくる、俺だけ釈放されるのだろうか。
俺が牢屋から出るとまた鍵を閉められる、ふと牢屋を見ると少女は寂しそうな眼差しを俺に送っていた。
「ん？大丈夫、すぐ戻るから」
俺は少女にそう言葉をかけて、牢獄を後にした。
少し歩いていくと見知らぬ部屋に連れていかれた。
その部屋には上級階級の人達が集まっていた、軍服を見ればわかる。
U形の机、その机に軍人達が座っている、その中に赤城少佐や伊達中尉の姿もあった。
「なんですか一体、どうして俺が軍に戻ると同時に牢屋に入れられなくちゃ……」
「言葉を慎め、アステル少尉」
どうやら俺の意見など聞くつもりは無さそうだ。
「貴様、本当に記憶を無くしているのか？」
俺はその一言にいち早く反応してしまった。やっぱり、暴れすぎたか？
だがアレだけの事でバレたとは考えにくい、ここは記憶喪失で押し通すしかないな。
「何も覚えていません」
「何も憶えてない？では何故Dシリーズの操作を行なえるのだ」
一つも質問に答えればまた新しい質問をされる。
俺からも色々と質問したいものだ、この世界の事、そしてあの化け物の事。
「操作方法を教えてもらい、多少の訓練をしたから動かせました」
とは答えたものの、俺への質問攻めは続く。
「では、Ｂ４エリアで起こった事について。詳しく聞かせてもらおうか」
「憶えていません」

「なにぃ？」
部屋には軍人達は戸惑いの様子を見せる。
当たり前だ、その場にいた人間がその場の事を憶えていないなど理由にならない。
「いや、だから憶えていません」
一人の軍人が俺を鋭く睨んでくる。
「そんな言葉が、我等に通用するとでも思っているのかね。君は」
「大佐、彼は記憶を失った人間ですよ、脳に軽い障害を持ってもおかしくないと思われますが」
俺のフォローをしようとしてくれる伊達中尉、でも脳に障害って……。
だがここにいるおっさん達に伊達中尉の言葉は通じなかった。
「伊達中尉！貴様は黙ってろ！」
うざい、うるさい、だから俺は軍が嫌いなんだよ。
お偉いさんは力も無いくせに偉そうにグダグダと、腹が立ってきた。
今すぐにでも殺したいが、とりあえずおっさんを睨みながら反抗してみた。
「それじゃあ、憶えていない事を話せと言われて、お前は話せるか？」
「なっ！？上官に向かって何だその口の聞き方は！」
次々に怒り出す上官達、赤城少佐と伊達中尉は顔色変えず俺の様子を見ている。
「たかが少尉の分際で偉そうに……」
「憶えている事は何もありません、部屋に戻らせてもらえませんか？」
そう言って部屋を出ようとした、だが一人の女性が呼び止める。
「待て」
赤城少佐だった、俺は何故か歩き出した足を止めてしまう。
「本当に何も憶えていないのか？本当に全て忘れてしまったのか？」

この答えを言わなくてもよかったと思うが、俺はもうアステルで生きていこうと思っている。
「貴方達の知っているカイト・アステルは、もうこの世にいません」
そう言葉を残した後、俺は一人部屋から出て行った。

――「っとか言っちゃってさ、俺当分ここから出られないわ」
そして現在に至り、へらへらと牢屋の中で笑いながら少女に話しかける。
少女は相変わらず怯えているが、俺の話しは聞いてくれているようだ。
「ああ、そうだ。嘘だと思うけど面白い話をしてやろう」
「はなし？」
少し興味を見せる少女、俺の話しに耳を傾けた。
「俺は最強の男なんだぜ？」
「えっ……？」
きょとんとした表情で俺を見つめてくる、まぁどこで言っても大抵そういうリアクションされるよ。
「これがまた作り話じゃないんだよ」
それから俺の世界の話しを彼女に聞かせてあげた。
と言っても、彼女は真剣に聞かない。というか聞いていないかったもしれないが。
俺は誰かに、本当の事を聞いてほしかったのだろう。
俺が元々いた世界は魔法の世界だった。
科学と魔法が同じ文明を築いてきた世界。
でも俺は『転移魔法』というもう一つの別の世界に行ける魔法を使い、別の世界に飛んだ。
その世界に魔法は無く、科学だけが発展していた世界だった。
とは言っても、それ程高度な科学力は無かった世界だったけどね。
俺はその世界で平和に暮らせると思っていたんだが。

まぁ色々と戦いに巻き込まれたあげく、この世界に何故か飛ばされてしまった。
「剣と魔法の壮絶なバトル！弾けるアクション！」
こんな話を突然されてもリアクション取れるはずがないよな。
もしかして俺ってまたおかしな人間とか思われてるんじゃないのか……？
その時だった、小さな笑いが牢屋の中に聞こえた。
小さな微笑を見せた少女、笑っている、今まで寂しそうにしていた少女が笑っている。
「お、面白かった？」
こくりと小さく頷く少女。
果たしてこの子は俺の話を本当の話しとして聞いていたのか。
それとも作り話として聞いていたのだろうか。
「はなし、もっと」
「えっ？」
予想外だ、まさかこの話に少女から興味を示すとは。
少女の正体を知るには仲良くならないといけないからな。
この少女は絶対に、何か重要な事を知っているはずだから。
あの時の声、あの時の力、あの時の事、俺は忘れはしない。
俺はその後も魔法とか色々な話しをしてあげた、少女が眠りにつくまで。

――――大きくため息をつき、コーヒーカップを手に取る赤城。
自室で長椅子に腰かけ、くつろいでいる。
由梨音はその様子を見て心配そうな顔をしていた。
「何かあったんですか？」
「ちょっと、な」
元気が無い、誰が見てもそれがわかる。
さっき由梨音が入れたコーヒーも既に飲み干していた。
「由梨音、コーヒー」

「ええっ、もう4杯目だよ？」
由梨音が止めようとするが、空のコーヒーカップを由梨音の前に突き出す。
「コーヒー」
「だ、だめだってば！」
由梨音も負けじと抵抗する。
赤城はコーヒーカップを持ったまま、由梨音を見つめて……いや、睨んでいる。
「由梨音軍曹を減給にする」
「ほぇえええっ！？」
『減給』と言うの言葉に驚きを見せる。
すると赤城はゆっくりと席を立ち、コーヒーメーカーを使って自分のカップにコーヒーを注ごうとする
「冗談だ、自分で入れる」
「えっ、ああ！ま、待ってください！」
両手で顔を隠す由梨音、その場から逃げ出したい状況に今立たされているんだろう。
赤城がコーヒーメーカーの電源をＯＮにしても動かない。
「ん？」
もう一度押してみるが、やはり動かない。
何度も押してみるがまったく動こうとしない。
それ所かコーヒーメーカーが勝手に振動、そして内部から爆破音が聞こえてくると、小さな煙を上がり始めた。
「由梨音、まさかお前……」
赤城が後ろを振り向いてみると由梨音が何度も頭を下げていた。
「ご、ごめんなさい！ごめんなさい！」
確信犯、謝るという事は由梨音が壊したに違いないだろう。
丁度その時、武蔵が赤城の部屋に入ってくる。
「赤城少佐、例のレポートが出来ました」
「伊達中尉～、助けてくださぃ～」

すぐさま武蔵の後ろに隠れる由梨音、涙目で必死に武蔵に助けを求める。
だがそれとは裏腹に赤城は相当怒っている様子だ。
「由梨音、一体何台壊せば気が済むんだ？」
怒りを表に出していないが、雰囲気が明らかに違う。
赤城の背後からは黒い殺気が溢れ出ているかのように由梨音には見えた。
「って事は、由梨音さん。また壊しちゃったのか」
武蔵がそう言って後ろに隠れている由梨音を見ると、由梨音は大きく頭を下げて頷きながら武蔵の背中から離れない。
武蔵はこれまで由梨音が壊してきたコーヒーメーカーの数を頭の中で数えてみる。
「たしかこれで、八台目だっけ」
怒られて当たり前だと思ってしまう武蔵だったが、一体どうやったら八台ものコーヒーメーカーを壊せるのか、そっちのほうも気になってしまう。
「全部私の給料で購入した物だぞ！それなのに！」
「まぁ抑えて抑えて。由梨音さん俺が赤城と話をつけておくから。今のうちに自販機でコーヒーでも買ってきてくれないかな」
「は、はい！」
急いで赤城の部屋を出て行く由梨音。
「あ、こら待て！由梨――」
赤城が一歩前出た時、武蔵が赤城の右腕を掴むと同時に引っ張り、彼女の体に抱き寄せた。
そのまま赤城は武蔵に倒れこむように抱きついてしまう、武蔵は赤城の体をしっかりと抱きかかえている
「少し落ち着いたら？」
武蔵の言葉と息が赤城の耳元にかすかにかかる。
「あっ、ああっ！！」
さっきまで普通だった赤城の顔は、自分の赤髪のように真っ赤にな

り。
抱きしめている武蔵を両手で突き放し、何処からともなく大きな刀を手にする。
「上官に向かって何をしてるんだ貴様ぁあッ！！」
「いや！だから落ち着いてって言ってるんだって！」
部屋の中で刀をぶんぶんと勢い良く振り回し、武蔵はその刀を必死に避けていく。
その時、運悪く由梨音が部屋に入ってきてしまう。
「赤城少佐！コーヒーを買って来ました！」
「由梨音さん、タイミング悪すぎます！」
赤城の振り下ろした刀が由梨音の目の前で止まった。
「買ってきまし――――」
缶コーヒーを握っている由梨音の手が小刻みに震えている。
「はわわ……」
突然の出来事で、硬直してしまう由梨音。
そのまま後ろに倒れようとするが、武蔵がすぐに後ろに回りこみ受け止めた。
「あ、ありがとうございます。武蔵中尉」
「すまなかった由梨音、ケガは無いか？」
赤城は握っていた剣を壁に掛けると由梨音の側に近づいてくる。
「赤城少佐、ココロ、コーヒーをどうぞ」
「……これで許したと思うなよ」
由梨音はすぐに買ってきた缶コーヒーを赤城に手渡すと、赤城は早速缶を開けて自分の席に戻ろうとする。
何とか騒動は静まり、武蔵は由梨音が壊したコーヒーメーカーをその場で解体して修理を試みる。
その様子を武蔵の横で心配そうに見ている由梨音。
赤城はまた長椅子に座り、美味しそうに由梨音の買ってきたコーヒーを飲んでいた。
武蔵の姿を見ながら、昔の事を思い出していた。あの事件の事も。

「わぁ！直りましたよ！赤城少佐！」
壊れていたはずのコーヒーメーカーが動き、空のコップにコーヒーを注ぐ。
「いやー今回はそんなに破損が酷くなかったから、何とか直せたよ」

「ありがとうございます！伊達中尉！」
何度も頭を下げてお礼の気持ちを示す由梨音。
「うん、今度は壊さないように気をつけて。それじゃ」
笑顔を見せた後、少佐の部屋を後にする武蔵。
由梨音は直ったばっかりのコーヒーメーカーを嬉しそうに眺めていた。
その頃、甲斐斗の寝ている牢屋には一人の少女が来ていた。
「アステル少尉」
寝ているのにも関わらず、誰かが甲斐斗の名前を呼んでいる。
その声で目が覚めた甲斐斗は、半開きの目蓋を手で擦りながら牢屋の外にいる人が誰か確認する。
「ルフィス？」
「ＥＲＲＯＲについて書かれている書類を持ってきました」
ルフィスはそう言うと書類を牢屋の中に入れ、すぐに立ち去ろうとする。
「ちょっと待て」
甲斐斗がそれを止めようと声をかけると、立ち去ろうとしていたルフィスは足を止め、後ろに振り向いてくれた。
「ルフィス、お前は俺の事。いや、アステル少尉の事。どう思ってるんだ？それとも、どう思っていたんだ？」
聞きたかった、回りの人達と色々と話しをしてみたかったが時間が無かった。
彼女にとってカイト・アステルは特別な存在な気がする事ぐらい甲斐斗でもわかる。
牢屋の中に入っている今だからこそルフィスと話す事が出来る、聞

くのなら今しかないと思ったのだろう。
ルフィスは甲斐斗を見つめながら、そっと口を開いた。
「大好きです」
……思っていた通り、この子とアステルの関係は簡単なもんではなかった。
甲斐斗の予想はルフィスとアステルは友達以上恋人未満の関係、それとも恋人なのかもしれないと思っていた。
「そうか、記憶を無くす前は。二人とも仲が良かったんだな」
これではっきりとわかった、彼女は苦しんでいる、甲斐斗にはそうとしか見えない。
好きだった人は記憶を無くして自分の事を忘れている。
でも自分はよく憶えている、その人の思い出を。
だけどこの気持ちを伝えることは出来ない、伝えてもその人は全くの別人。
それなら、今の甲斐斗はどうしてあげるべきなのだろうか。
甲斐斗は頭の中で思考を巡らし、何か気の利いた言葉を言えないかと悩んでいた。
記憶を無くしている以前に甲斐斗は全くの別人。
どうすればいい、今目の前で苦しんでいる彼女をどうしてあげればいい。
どうせならアステルは死んでいた方が良かったのかもしれない。
記憶を無くしているなど余りにも残酷すぎる、ましてや甲斐斗は別人だ。
「ごめん」
この空気が耐え切れなかったのだろう、甲斐斗は小さく謝ってしまった。
「変な事を聞いてごめん、それと、残酷な事を言うようで辛いけど。もう、君の知っているアステルはこの世にいない」
甲斐斗は小さく下げた頭を上げると、彼女の目には涙が溜まって、いや。既に涙がこぼれ落ちていた。

そんな彼女を甲斐斗は見る事は出来なかった、再び頭を下げて視線を足元に置き、足元が見える範囲しか顔を上げれない。
一粒一粒、彼女の足元に落ちる涙しか見えない。
今、彼女は甲斐斗をどう見ているのだろう。
甲斐斗は酷い事を言ったのか、しかしこれを言わなければ彼女はずっと苦しむと甲斐斗は思ったのだ。
アステルを重ねて暮らし続ける日々など、所詮それは作り物、本物ではない。
すると、足は視界から消えてドアの閉まる音が聞こえた、ルフィスが出て行ったのだろう。
どんなにアステルに似ていようと甲斐斗とアステルは全くの別人、それは揺るがない真実だ。
甲斐斗はルフィスに渡された書類を手に取りページを捲る。
ＥＲＲＯＲ、ＮＦ歴１００年に入ってから突然現れた正体不明の化け物。
性別不明、目的不明、何もかも不明な化け物。
地中から突然現れた奴らは人々を次々に襲う。
その数は半端なく、更に様々な種類のＥＲＲＯＲが確認されている。

現在確認出来ているのは3種類。
昔作られた地下都市に巣を作っている事が現在確認されている。
って、場所わかってんならさっさと潰しに行けよ、と心の中で突っ込みを入れる甲斐斗。
なんでこんなややこしい世界に飛んでしまったんだろうか、ああ、帰りたい、今すぐ元の世界に帰りたい……。
甲斐斗は冷たい牢屋の中、眠りにつくまでこの世界の事について考えていた。

――おぼろげな記憶、荒れ果てた市街地に二人の少年と少女、そ

して母親らしき人物がいた。
街は銃弾が飛び交い、爆薬が次々に投下されている。
周りには死体が転がっており、敵兵の姿も見える。
そんな中、一人の女性が二人の子供の手を引きながら走っていた。
男の子と女の子、二人は母親の手をしっかりと握り締めている。
「神よ、私達をどうかお助けください、お願いします……」
母親が呟きながらも、戦場の中を走る。
上空では戦闘機が飛び交い、爆弾や撃墜された戦闘機が街に降り注ぐ。
足が血だらけになっても走るのを止めない、その足に靴は履かれていなくても。
だが願いは虚しく消える、逃げ切る事は出来なかった。
母親の足を一発の弾丸が撃ち抜く。
瓦礫の上に倒れこむ女性、子供達は必死に母親を起こそうとする。
撃ち抜かれた足から血が噴出し、母親の足に激痛が走った。もはや立つ力も残ってはいない。
子供達の後ろからは数人の敵兵が歩いて来る。
「お願いします、この子達だけは助けてください……」
血が流れ出る足を曲げ、敵兵の足元で土下座をする母。
必死に、何度も頭を下げていた。子供達はその母親の姿をただ見つめる事しかできない。
「隊長、この者達は女と子供です。殺す必要は無いのでは」
一人の兵士が、隊長らしき人物と話をしている。
隊長は煙草を吸いながら兵士の顔を睨みつけた。
「お前、本部の命令を忘れたのか？この街にいる『ＢＮ』を全員排除する、それが本部の命令だ」
「しかし、この人達がまだ『ＢＮ』と決まった訳ではありません、それに……」
「新米が何を偉そうに、命令に逆らう気か？」
腰に付けてある小銃を取り出し、兵士の顔面に小銃を突きつけた。

小銃を突きつけられた兵士の視線は動かさず、隊長と睨み合いをしている。
「子供達だけは助けてください、お願いします、お願いします……」
直も頭を下げ続ける母親。
その時、小銃の引き金は引かれた。
火薬が小さく爆発する音と共に、頭を下げていた母親の頭部を撃ちぬく。
「うるさいんだよ、ＢＮが」
引き金を引いたのは隊長だった、ためらいも無く子供の前で母親を殺したのだ。
子供達は動けない、本当は母親に抱き縋りたい。
でも、恐怖と悲しみ、そして母親が殺された事で体が動かなかった。
女の子の方は無言のまま涙を流し、死んだ母親の右手を握る。
「ママ？マ、マ……？」
「隊長？！貴方と言う方は！」
「これは命令だ、貴様。軍人の癖に軍の命令を聞けないのか？」
「それはっ！」
「これは戦争だ、奇麗事を言う暇があれば国の為に結果を出せ」
「お前等……」
一人立ちはだかる少年、怒りの眼差しで兵士達を睨んでいる。
両手を強く握り締め、自分の爪が手の平に食い込み、血が滲み出る程だった。
「よくも、よくも母さんを、母さんを！」
「っち、ガキの癖に。何々だその目は」
容赦なく小銃を構え、少年に銃口を向ける。
だが少年は怯えない、憎しみの目で睨み続ける。
「危ない！」
その時だった、少年達と兵士の頭上から一機の戦闘機が炎を纏い落

ちてきたのだ。
戦闘機は墜落し、その場にいた兵士達と少年少女を吹き飛ばした。

東部軍事基地を肉眼で確認できる程の距離、岩場に機体を隠し、機体の足元で作っていた簡易テントの中で青年は目を覚ます。
「またあの夢か……」
『羅威先輩！羅威先輩！』
無線機から羅威の名前を呼ぶ声が聞こえてくる、寝ていた体を起こし、急いで無線機に状況を報告する。
「こちら守玖珠羅威、予定通りのポイントで待機中」
『もぉーっ！こんな時によく眠れますね！』
無線機からは怒ったような口調で女性が喋りかけてくる。
「俺は数時間前からずっとこの場所にいるんだ、退屈でな」
『だからって何暢気に寝てるんですか！』
「そう怒るなって、それより予定時刻が迫ってきているが準備の方は大丈夫か？」
腕時計を確認してみる羅威、時計の針は9を指している。
『準備は全て整いました、あとはあの方の指示を待つだけです』
「紳の指示を待つだけか、了解」
『えっ、えええ！風霧総司令官を呼び捨てですか？！』
「あの人がそう言っていいって言ってくれたんだよ」
『なんで羅威先輩みたいな人に……』
「紳は俺の全てを理解して分かってくれた一人の理解者だからな」
『何カッコつけようとしてるんですか？！通信を切ります！』
何故か勝手に通信を切られた、羅威は無線機を耳に見つけたまま呆然としている。
小さなため息をつくと、テントから出てみる。夜空に星は無く、暗闇だけが辺りに漂っていた。
首に掛けてあるペンダントを優しく握り、大空を見上げた。
「この作戦で和解すればそれで良し、だが決裂すれば……」

青年は握っていたペンダントを強く握り締める、憎しみと怒りの眼差しを東部軍事基地に向けた。

「俺がＮＦを潰す」

第４話　兵士、使命（後書き）

－Ｂａｃｋ　Ｎｕｍｂｅｒｓ－（ＢＮ）
１００年程前にこの世界を滅ぼしたといわれる『神』と戦う為の組織。
少しずつ軍事力が増し、強大な組織へと変わった。
世界を滅ぼしたといわれる『神』という名の兵器がいつこの世界に現れても戦えるようにしている。
だが、未だに『神』という名の兵器が現れず、兵器が無い平和な世界を求めるＮＦと武力衝突をしている。

第5話　混乱、崩壊

――――「難しい本ばっかりだな」
今俺は図書館にいる。もちろん見張りつきだが、本ぐらいは読ませてくれるらしいので来てみた。
何百何千という本が本棚に並べてあり、色々と本を手に取ってページを捲ってみる。
さすが軍の図書館だけあって面白そうな本が全然無い。
色々な本を見てみるが、お目当ての本が全く見つからない。
仕方が無いので俺の見張りをしている兵士に聞いてみる事にした。
「あ、ちょっといいですか、探してる本が中々見つからないんだけど」
「ん？どんな本を探しているんすか？」
「絵本」
俺の一言に兵士は固まった。まるで笑いを堪えるかのように。
「え、絵本？ここにはそんな本が置いてあるわけ無いだろ」
そうだよな、軍の図書館に絵本何かあるわけねえよな。
「そうか、んじゃ眠ってくれ」
「うぐっ！？」
何か見張りの兵士の様子を見ていると無性に腹が立ってきたので腹を殴って気絶させてみた。
どうやら一撃で効いたらしい、図書館の隅でぐったりと倒れてしまう。
だらしない兵士だ、腹に一発打ち込まれただけで倒れるとは。
さて、これからどうする、脱出、というより脱獄か。
ここは居心地が悪すぎる、この基地に心残りは無い、と言えば嘘にはなる、姉さんの事だ。
心のどこかで引っかかっていた。もう一度姉さんに会いたい。
……何を考えているんだ俺は、姉さんはもう死んだだろ。そんなの

わかっている。
でも、まぁ少し様子を見に行くぐらいならいいか。
俺は誰にも見つからないようこっそりと図書館を抜け出し姉のいる医務室へと向かった。
兵士に見つからないように慎重に移動していき、やっとの思いで医務室へと辿り着く。
医務室の扉を少しだけ開けて中の様子を窺ってみる。
どうやら誰もいないようだ、俺は物音をたてず静かに医務室の中に入った。
部屋の真ん中には白いテーブルが置かれており、その席に腰を下ろす。
見渡してみてもやっぱりいない。　いないのなら仕方が無い、さっさとここから出て行くか。
もう一度少し回りを見渡して俺が立ち上がろうとした時、奥の部屋からカルテを手に持った姉さんが部屋に戻ってきた。
「あ、貴方は……」
姉さんは驚いた表情で見つめてくる。同様に俺も姉さんを見つめていた。
やはり夢じゃなかった、姉さんは今。俺の目の前で動いている。生きている。
「姉さん、会いたかった」
「私も……貴方から来てくれるなんて」
姉さんも俺に会いたがっていたのか？
「ねぇ、少し目を瞑っててくれないかしら」
姉さんは両手の指を合わながら、俺に笑顔を見せてくれる。
「え、うん。いいけど」
俺は言われるまま目蓋を閉じた。
何だろう、何か俺にプレゼントでもくれるのかな？
ああ、本当は姉さんの側にずっといてあげたい。いや、ずっと側にいたいんだ。

何か物音が聞こえてくると、ふと硬い物が俺の額に当てられた。
「さようなら」
小さく呟いた悲しい一言に、俺はつい閉じていた目蓋を開けてしまった。

――それと同時にある計画が実行された。
『作成開始です、先輩は出撃してください』
「了解した、『我雲（がうん）』出撃するぞ」
作戦決行の時間が来た、既に準備が整っていた為すぐに動ける体制であった。
羅威が我雲の電源を入れると。画面上に様々な情報が現れ、作戦命令もそこに書かれていた。
モニター上に現れる女性の姿、無線機の声の主である。
『先輩、無事を祈ります』
怒ったような口調だが、何処か不安な表情を見せる。
『あ、言っておきますけど。別に心配してません、先輩なら大丈夫だって、信じてますから』
その女性に微笑みをかける羅威。
モニターのむこうにいる女性は顔を赤らめてそっぽを向いてしまう。

「生きて戻ってくるさ」
モニターに違う女性の姿が映し出され、通信が入ってくる。
『羅威、準備は良い？』
「大丈夫だ。それよりエリル、この作戦は新型のテストもある。気合入れてけよ」
『そんなの言われなくてもわかってるって、さぁ行くわよ！』

――彼等ＢＮの動きを察知したＮＦも、素早く反応をしてみせる。
『レーダーに反応有り、ＢＮの機体を確認しました』
放送は東部軍事基地全域に響き渡り。ＮＦ軍のギフツが次々と格納

庫から出撃していく。
「相手は一機、何かの罠かもしれない。各機気をつけよ」
一人の隊長らしき人物が各機に通信を交わす。真正面から東部軍事基地に接近してくる機体。
各機に指示が送られた『敵機体の周りを囲み、撃破か捕獲する事』
『我雲』ＢＮ軍主力の機体であり、全身を灰色にカラーコーティングされている。
たった1機の我雲はあっというまに6機のギフツに囲まれ、銃口を向けられる。
観念したのであろうか、我雲はブーストを止めてその場に止まってしまう。
我雲はまったく動きを見せない、ＮＦ機も警戒しながら少しずつ近づいていく。
「こいつ、観念して動かないのか？」
「っま、馬鹿だよな。一機で東部軍事基地を攻めにくるなんて、笑っちま・・・」
喋っていた一人の兵士からの通信が途絶える、兵士の乗るギフツの腹部に剣が突き刺さり、爆発を起こしたのだ。
その場にいた兵士達は何が起こったのかわからず、ただ爆発するギフツをモニターで見ていた。
「なっ、隊長！これは……」
そしてまた一機、隣にいるギフツが爆発を起こす。
目の前にいる我雲は動いていない、しかしＮＦ軍の機体は次々に破壊されていく。
『こちらルフィス、一体どうしたのですか？！』
東部軍事基地のオペレート室からルフィスの通信が来た。
レーダーには青6と赤1の反応だったはずが、今では青3、赤1となっている。
ルフィスのモニターに兵士の姿が映し出される。
「わからない！突然味方の機体が――――」

その瞬間、一本の剣がコクピットを貫き、モニターに映っている兵士が巨大な剣で殺される。
『各機撤退してください！レーダーで探知できない何かがそこに……』
「ぐうぁあああッ！」
聞こえてくる兵士の断末魔、そしてその死ぬ瞬間を目の当たりにするルフィス。
その光景を見て咄嗟に一瞬吐き気に襲われ口を押さえるように手を翳した。
我雲の周りを囲んでいたギフツの姿はもう無い、全機破壊され、爆発炎上をしている。
さっきまで動きを見せなかった我雲、また東部軍事基地に接近していく。
「一瞬で6機のギフツが……」
『ルフィス、出撃するからハッチを開けて』
オペレート室のモニターに武蔵の姿が映し出される。
『待ってください、上からの指示を待たなければ』
「指示を待ってる暇何て無いよ、あの機体を止めないと」
『し、しかし』
「ルフィス、頼む」
真剣な目つきでルフィスの目を見つめてくる。
その緊迫に押され、出撃を許可してしまう。
『わかりました』
ルフィスがスイッチを押して格納庫のハッチが開かれる。
武蔵の乗る機体が出撃し、我雲の下に向かう。

――その様子を何人もの兵士達が席に着いて司令室で見ている。
兵士達の後ろにある大きな座席では、何人もの立派な軍服に身を包んだ方が座っていた。
「こちらの機体が一機で現地に向かっています」

「何ぃ？何処の馬鹿だ、指示も出していないというのに」
「相手は一機だろうが！何故６機のギフツが撃墜された！」
『恐らくステルス機能だと思われます』
司令室のモニターに武蔵が映し出され、司令室にいた兵士達の視線が一斉に集まる。。
「出撃したのは貴様か！命令違反だぞ！」
『命令違反？俺は命令など何も聞いてませんが、いつ命令を出したんですか？』
「貴様、上官に向かってそんな口を聞いて、わかってるんだろうな」

「……はぁ」
司令室のモニターに映っていた武蔵の映像が消える。
武蔵と言い合っていた軍人は自分より位の高い人達に頭を下げ始める。
「見苦しい所をお見せして申し訳ありません……」
上官席に座っている軍人達が次々に口を開き始める。
「全くだ、東部は見苦しい。噂どおりの軍部だ」
「命令を平気で違反するような兵士しかいないのかね？ここは」
上官達の言葉に何も言えない軍人達。

――東部軍事基地に着実に近づいていく我雲、その先に武蔵の乗る機体が待機していた。
武蔵は機体の背中に付いているＬＲＳを抜き取る。
ゆっくりとＬＲＳを構え、真正面から近づいてくる我雲を待つ。
「ＮＦ主力機の登場だ、エリル。頼んだぞ」
我雲に乗る羅威が誰かと通信をしている。
『任せなさい、一撃で落としてやるわよ！』
羅威の乗る我雲が更に加速して行き、武蔵の乗る機体に向かって行った。

――甲斐斗は激痛に耐えながらもゆっくりと目蓋を開けた、視界が良く見えず、赤色に滲んでいた。
その赤い視界の中を目の前にいる自分に引き金を引いた姉の姿を見る。
あまりの激痛で言葉が出ない、あまりに突然な事で思考が働かない。
「姉さん、どうし、て？」
流血する左目、抑えていた左腕は流れる血で赤く染まる。
「喋らないで！貴方は、貴方はカイトじゃない！！」
又も引き金は引かれ、今度は右肩を撃ち抜いた。
甲斐斗は撃たれた反動で椅子から転げ落ちる、それでも甲斐斗はずっとセレナの方を見つめている。
「あ、貴方は！皆の心を踏みにじった！だからッ！」
その言葉を聞いて甲斐斗の緊張が走る、自分のついていた嘘がばれているからだ。
「皆の事をずっと騙して、カイトのふりをしてきたなんて、許せないッ！」
セレナの怒り満ち溢れた目からは涙を流していた。
銃口は甲斐斗に向けたまま、またいつ発砲してもおかしくない。
「どうしてそれを……」
「残念だったね、偽者さん」
セレナの後ろから男の声が聞こえてくると、声の男が甲斐斗の目の前に現れる。
「なっ」
甲斐斗は一瞬息を呑んだ、自分の目の前に現れた男が自分と良く似た男だったからだ。
それは正真正銘のカイト・アステルだった。
「お前、死んだはずじゃ！？」
「僕は死んでいない、ＢＮに捕まっていただけだよ」
その言葉にてっきり死んだと思っていた甲斐斗に言い知れぬ感情が押し寄せてくる。

甲斐斗にとって喜ぶ事なのか、悲しむ事なのか、しかし喜びや悲しみより、怒りの感情しか甲斐斗の中には無かった。
「僕は何とかＢＮの目をごまかして脱走、ここに戻って来たって訳さ。まさか僕のスパイがここにいるとは思ってなかったけどね」
アステルは上着の内ポケットから拳銃を取り出すとその銃口を甲斐斗の頭に向ける。
「姉さんの気持ち、皆の気持ちを踏みにじったお前を、僕は許さない！」
「ま、待て。俺は……」
今更本当の事を話した所でどうにかなる状況ではなくなっていた。
「安心して、次の一発で楽にしてやる」
アステルが銃を構える。銃口の先は頭部、甲斐斗の頭を一発撃ち抜く気だろう。
「待てって、俺はお前の敵じゃ……」
「言ったはずだ、許さないと」
その指は躊躇（ためら）い無く引き金を引く。だが撃たれた弾丸は俺の頭部には当たらず、頬を掠めるだけだった。
「姉さん？」
横にいたセレナがアステルの体を突き飛ばしたのだ。
「止めて、止めて。カイトを殺さないで、二人は確かに違うけど、やっぱり目の前でカイトが死ぬのは嫌……」
セレナの心中もわかる、例え中身は違ったとしても外見は同じ。
セレナから見れば自分の弟が殺される所など見たくも無い。
先程より冷静になったセレナは自分のしてしまった事を悔いている。

「わかったよ、姉さん。姉さんの見えない所で始末する」
アステルは甲斐斗の足を掴むと、もう一つ隣の部屋に引きずっていく。
医務室の隣の部屋、薬品棚が並んでいる部屋。引きずられた後は甲斐斗の血で汚れていった。

セレナは膝をつき、両手で顔を隠しながら泣いている。そのすすり泣く声が二人の耳にもかすかに聞こえてくる。
「最後に一言言いたいなら、聞いてあげるよ」
その言葉を聞いて甲斐斗は座ったまま壁にもたれ掛かり、へらへらと力無く笑った。
「良かったよ、お前が生きてて」
「えっ？」
「お前死んだら、姉さん悲しむだろ」
「何を言っている、お前の姉じゃない、僕の姉さんだ！」
頭に銃口を向けて狙いを定めるアステル。その手はかすかに震えていた。
「じゃあ感謝するんだな、その姉さんに」
「何？」
アステルが動揺した素振りを見せた時。
甲斐斗は下を向いたまま素早くその場からたち上がった。
「もしお前が姉さんの弟じゃなけりゃ、俺に殺されてたよ」
甲斐斗の右目が赤く光り、不敵な笑みを見せる。
その表情にアステルの体が固まってしまう。そして彼の握っていた銃が真っ二つに斬り落とされる。
「な……っ！？」
甲斐斗の右手には巨大な黒光りする剣が握られていた。
そして、その刃先がアステルの首に突きつけられる。
「本当は殺したいが、姉さんの悲しむ姿は見たくない。
生きろ、絶対に生きて姉さんを泣かすな。泣かしたら俺が殺す」
甲斐斗の右目はアステルの両目を見ていた。
その眼で睨まれたアステルは身動き一つとれない。
だがそれは甲斐斗も同じだった、左目の激痛が更に痛みが増してきており、意識が朦朧としていた。
「教えてやるよ、俺の名前。高橋甲斐斗、他の世界から来た人間だ」

アステルの首に突きつけていた剣を放し、部屋の壁を手に持っている剣で斬り飛ばす。
壁は騒音と共に大きく穴を明け、その穴を伝って隣の部屋に移動していった。
「一体あいつは……」
しばし放心状態のアステル、何も無い空間から剣が現れた事も信じられないが、彼自身何者なのかがわからなかった。
だがセレナの事が気になり隣の部屋に戻ると、セレナは一人座り込んで泣いていた。
「大丈夫、僕は死なないよ。姉さんを一人にはさせない」
セレナの体をそっと抱きしめるアステル。
それと同じようにセレナもアステルを抱きしめ返した。

――基地内の通路にはＮＦの軍服を着ている何人もの人が血塗れで倒れていた。
その中を一人、白銀の髪の青年が歩いている。
すると青年の右腕についている機械が突然音を鳴らし、女の声が聞こえてきた。
『若様、羅威とエリルは無事に作戦を遂行しているもようです』
青年は何も答えずにただ歩く。
両手に血塗られた2本の細い剣を持ち、一番大きな奥の部屋へと向かっていた。
その時、横の通路から数人のＮＦの軍人が姿を見せた。
が、兵士が気づいた時、青年の握られている剣が兵士の喉を貫く。
隣にいた兵士がその事に気づく間にもう一本の剣で兵士の胸を貫いた。
青年は足を止めず、何事も無いように歩いていく。
さっきまで生きていた兵士は既に即死、苦しむ暇も無く死んでいった。その時、剣を持つ青年の後ろに人影が現れる。
「全く、ここの兵士は弱すぎるなぁ、紳さんもそう思いますよね」

後ろからきた青年は剣を持つ青年に話しかけるが無視されてしまう。

『穿真（せんま）、貴様のような若造が若様の名を容易く言うなッ！』

穿真の腕に着いている装置にさっきの女の声で無線が入る。

「げ、聞いてたのかよ」

『当たり前だッ！もし今度無礼な事を言ってみろ！その時は私がこの手で貴様を――』

「セーシュ、静かにしろ」

さっきまで何も言わなかった青年が口を開いた。

そして奥の部屋の扉へと辿り着く。

「邪魔するぜーっ！」

穿真が司令室の中に入り、その後に風霧が司令室に入る。

声と共に、司令室にいた軍人達が一斉に声の方を顔を向ける。

「な、何だ貴様はッ！」

風霧は顔色一つ変えない、司令室にいた兵士達が一斉に銃を構える。

「風霧紳……と、言えばわかるだろ」

その名前に司令室にいた兵士達が全員反応を示した。

一人のＮＦの幹部らしき人間が声を上げる。

「ＢＮの創始者がこんな所に何をしに来た！見張りは一体何をしているんだ！？」

その言葉にいち早く反応を見せる穿真。

「いや、俺もいるんだけど。まぁいいや、話しがあってここに来たんだ」

穿真が懐から数枚の折りたたんだ書類を抜き取る。

その書類をＮＦ東軍の幹部に渡した。

「ＥＲＲＯＲについての書類か？」

「その通り、そこにも書かれている通りに。奴等は繁殖して桁違いな数に増えてきている」

「それで、我々ＮＦの力を必要としているのかね？」

「簡単に言えばそう言うこと。でも違うねぇ」
場は静まり返っていたが、ふつふつとＮＦ幹部の笑い声が聞こえてくる。
「何を突然と思ってみたら、そんな馬鹿げた事か！」
渡された書類を破り捨てる幹部。
破られた紙は宙を舞いながら紳の足元に落ちる。
「ＥＲＲＯＲ掃討作戦は既に進められているのだよ、貴様等の手を借りずともな」
「我々は誇り高きＮＦの軍人、目的は全世界の平和」
「武器を持たない理想の世界を作り上げる組織なんだぞ？」
「だが、それを邪魔するのが貴様等ＢＮだ」
座席に座っていたＮＦの幹部達が立ち上がり、紳の前に出て行く。
「邪魔なんてしてねえだろ！昔から俺達に伝えられた事を今実現しなきゃいけねんじゃねえのかッ！？」
穿真が怒りの剣幕でＮＦの幹部達を威嚇するが……。
「数百年たった今、『神』とやらの兵器は姿を見せていないが？」
「そ、それはなぁ！」
ＮＦの幹部達の言葉攻めにタジタジの穿真。
「穿真、もういい。お前達、今我々と協力を誓わなければ未来は無い」
両手の剣を構える紳、それと合わせて二人を囲んでいる兵士達が銃口を紳に向ける。
ＮＦの幹部はニヤニヤと笑みを見せながら勝ち誇った顔をしている。

「安心しろ、お前の死でＢＮとＮＦの決着は終わる、奴等を撃てッ！」
その命令に、その場にいたＮＦの兵士達は何の反応も示さない、誰一人として引き金を引こうとしない。
その場が固まってしまったかのようである。
ＮＦの幹部達は何が起こったのかわっていない。

「ど、どうした？奴等を撃つのだ、命令だぞ！」
慌てふためいているＮＦ幹部をよそに、紳は冷静に右腕についている装置で無線を使う。
「唯（ゆい）、今の会話を全て聞いたな。これで理解したか？」
『えと、それは……』
「返事が無いぞ」
『は、はい……』
少女の小さな返事と共に、無線の電源を切る。
司令室にいるオペレーター達が一斉に立ち上がり、中央にいるＮＦ幹部達に銃口を向ける。
そして紳達を囲んでいた兵士達も一斉に幹部達に銃口を向ける。
「な、何故我々に銃を向ける！？」
穿真がその光景をケラケラと笑いながら見つめている。
「うっわ、まだ気づいてないのか？このおっさん達鈍いねぇ」
「ま、まさか……」
「そのまさか、ここにいる兵士達全員ＢＮだけど？」
一瞬にして顔色が青ざめるＮＦの幹部。
紳が幹部に背を向け、司令室から出て行こうとする。
それに続いて穿真もニヤニヤと笑みを見せ、後ろからついていく。
司令室の扉が開いた時、紳が言葉を漏らす。
「殺せ」
司令室を出て扉が閉まった瞬間、司令室の中で一斉に銃声が鳴り響く。
「言ったはずだ、協力しなければ、未来は無いと……」
そう呟きながら紳は顔色一つ変えず、次の部屋へと向かっていった。

――その異変にいち早く気づいたのがルフィスだった。
いくら無線で呼びかけても司令室からは全く応答が来ない。
司令室で何か起こったのか、だとすれば警報が鳴るはず。

だがその時だった、けたたましい警報音が東部軍事基地に鳴り響く。

――警報が鳴り響いている、厄介ごとに巻き込まれる前にこの基地から脱獄したかったが、何だよ、これ。

俺が通る通路に何人もの兵士達が殺されていた。

近くの部屋に入ってみると、その部屋の中にも死体が転がっている。

殺されすぎだろ、軍の人間は何をやってやがる。

まぁ死体に構ってる暇何て無い、それにこれは俺にとっては好機だ。

またややこしい事が起きる前に、さっさと逃げるしかない。

俺は包帯で左目を覆っているが、既に包帯は赤い血に染まっていた、右肩からも血が流れ意識が飛びそうだ。

勿論脱出する前に、俺は少女が閉じ込められている牢獄へと急いだ。

見張りをしていた兵士すらその場から消えていたのは幸いだった。

それにしても、こんな簡単に侵入されるんじゃあＮＦもたいした事なさそうだな。

俺が牢獄に入ると牢屋の片隅で寝ている少女を発見、自慢の愛剣で檻をぶった切る。

「おーい、起きろー。おーい」

「ん、ぅ……」

眠そうに俺の声に反応を示している。

ああ、眠ってくれてたほうが上手く逃げれそうな気もしてきた。

ＮＦとＢＮの関係がまだ詳しくわからない、ここまで争うとなるとやはり理由があるはずだ。

そんな事を考えながら俺は少女を背負うと全力で格納庫へ走っていった。

第5話　混乱、崩壊（後書き）

正式名ＭＦＥ－我雲（Ｂａｃｋ　Ｎｕｍｂｅｒｓ製）
全長－１７ｍ　機体色－灰　動力－光学電子磁鉱石
機体の性能はほぼギフツと同じであるが、外見は多少違う。
ＢＮの兵士達は主にこの機体に搭乗する。
特徴：腰の左右に付いてあるハンドグレネード

第6話　終わり、始まる

――伊達武蔵の乗る機体、正式名称ＭＦＥ－リバイン。ＮＦの主力機とされている機体であるが、そのリバインが今に加速し、基地周辺に現れた我雲へと突っ込んでいく。
我雲は体勢を変え、何とかＮＦの機を避けようとするが。
その瞬間、リバインは持っていたＬＲＳ（Ｌｏｎｇ　Ｒａｎｇｅ　Ｓａｂｅｒ）を我雲が進む方向とは逆の方向に投げ、何もいない所にＬＲＳが飛んでいく。
一見そこには何もいないはずだが、ＬＲＳはその空間に突き刺さると激しい火花と電流が走り、隠されたその姿が映し出された。
『ステルスフレームが破壊された！？そんなっ……！』
その場に何もなかったはずの場所に赤紫色をした機体が突如姿を見せる。
リバインの投げたＬＲＳはその機体の左肩に突き刺さっていた。
「エリル！大丈夫か！？」
『私は大丈夫、だけど左腕とステルスフレームが負傷したみたい……』
丁度その時、基地から駆けつけた数機のギフツがこちらに近づいてくるのが見えてくる。
それを見た我雲の操縦者羅威は操縦桿を引くとその場から後退していく。
「援軍のお出ましだ、奴等を基地から離すぞ。出来るか？」
『機動回路には問題ないから大丈夫、やってみる』
武蔵にとってステルス機の探し方など簡単な事、砂塵が一つしか舞っていないという事は我雲の真後ろに機体があるという事。
これなら怪しまれず我雲に近づいて来る機体を確実に破壊できる。
恐らく武蔵が我雲を狙っていたらあの敵機に背後に回られて機体は破壊されていただろう。

武蔵がとどめを刺そうと背部の銃を手に取り、負傷したステルス機に銃口を向けると、
ステルス機と我雲がリバインに背を向けて一気に加速して去っていく。
「引いたか、良い判断だ」
その時、リバインの後方からはようやく数機のギフツが到着する。
既に出撃命令が出ていた部隊の兵士達が援軍に来たのだ。
負傷した敵をそう簡単に逃がす訳にいかない、リバインが最前列に並び敵機を追おうとすると、その後ろから数機のギフツもついてくる。
だが武蔵はリバインは急に止めるとすぐさま本部に通信を試みた。
通信は繋がり、オペレート室にいるルフィスがモニターに映しだされる。
「ルフィス、本部に異常は無いかい？」
オペレート室にスピーカーから聞こえてくる武蔵の声。
『こちらルフィス、異常はありません、中尉は引き続き逃げたＢＮ機を追ってください』
「本当に？」
その言葉にルフィスは小さく反応を示したが返事は決まっていた。
『……はい』
「了解、引き続き逃げたＢＮ機を追ってみるよ。何かあったらすぐ連絡してね」
通信のスイッチを切り、モニターからルフィスの姿が消える。

ルフィスも同様にスイッチを切り、小さくため息をすると同時に冷や汗が頬に流れる。
「これで、いいんですか……？」
「いいよいいよー、名演技だったよ」
扉にもたれ掛かり、ルフィスに銃口を向けている穿真。
そんな穿真に対してルフィスは何もする事が出来ない。

「貴方達の目的は一体、何故こんな所に……」
前を向いたまま穿真に話しかけるルフィス、穿真は銃口を向けたまま答えた。
「NFと和平交渉をしに来ただけさ」
その言葉を言い終えた瞬間穿真は銃の引き金を引くと、銃弾はルフィスではなくモニターに穴を開けた。
「そ、それならどうしてこんな事を！」
「君の上官達が無能でねぇ、交渉を断っちゃったんだよ」
「だからこの基地にあるデータをもらおうと思ってね」
その言葉を聞いた途端、ルフィスは大きく溜め息を吐いた。
「貴方馬鹿ですか……」
「おいおい、銃を向けられてるのに馬鹿は無いだろ？」
笑いながら怒ったような表情になる穿真、銃口の位置は変えずしっかりと銃を握り締めている。
「たしかに今は、そちらが有利です。しかしここはNF5大基地の1つです。それがわかりますか。
さっきの警報で異変に気づいた兵士達は銃を手に取り、この基地になだれ込みますよ。
そうなると形勢逆転、貴方達は袋のネズミになる、という事です」

「ガキの癖によく考えてるじゃん、んじゃその前にお前を殺しておこうかな？」
そう言って穿真が銃の引き金を引こうとした時、血飛沫と共に銃を握っていた右手が地面に落ちる。
「へっ？」
驚いた様子で足元に落ちた自分の右手を見つめる穿真、銃を握り締めたまま足元に落ちる手、自分の右手を見れば手首から先が無く、鼓動に合わして血が噴出していた。
「え……ええあ、うわぁっ！うわぁあああああ！？」
オペレート室に穿真の断末魔が響きわたる。その発狂を聞いたルフ

ィスは咄嗟に後ろを振り向くと、そこには右手首を抑えながら地面に座りこむようにして痛みに穿真が震えていた。
そして穿真が背にしていた扉が切り落ちると、そこから一人の女性が現れた。
「扉と俺の手をっ……！」
扉が壊れると共に、オペレート室に入ってくる一人の女性。
黒い軍服身に纏う赤い長髪の女性、黒い帽子を深く被っている。
その女性の右手にはあの部屋においてあった刀が握り締められている。
「赤城少佐！？」
赤城は地面に落ちている右手を無視して穿真に近づいていく。
勢い良く穿真の胸倉を掴み、睨みつける。
「貴様、目的を言え」
「えっ、あ…ああ……」
自分の右手が切り落とされた事と、焼けるような激痛で言葉が出ない。
「手を斬り落とされた程度で混乱するとは、無様だな」
赤城は掴んでいた胸倉を放すと穿真の体を簡単に突き飛ばす。
突き飛ばされた穿真は勢い良く倒れてしまい身動きがとれなかった。
「ルフィス、怪我は」
「あ、ありがとうございます。私は大丈夫です」
座席から立とうとした時、自分の意思とは逆にその場に座り込んでしまう。
「あ、あはは……腰が抜けちゃいました」
さっきまで自分が死ぬかもしれない状況に立たされていた事と。
人間の右手が切り落とされ、大量の血を見た事によって軽いショック状態になっていた。
「すみません、私軍人なのに……」
右手に握っていた刀をその場に置き、そっとルフィスを抱きかかえる。

突然抱き抱えられたルフィスはその場で慌てふためいてしまう。
「えっ、少佐!?」
「安心しろ、これから医務室に連れていくから」
ルフィスを抱きかかえたまま立ち上がり、その場を後にしようとする赤城。
その時、既に穿真の姿は消えていた。斬り落とされた右手も一緒に。

「でもＢＮがまだこの基地に……」
「大丈夫だ、さっきの警報で既に軍は動いている」
赤城の前から武装をしたＮＦの兵士が付近を探索しながら近づいてくる。
既に東部軍事基地には戦闘態勢が出来ていた。

――「ふぅ、やっとここまで来れた。後はどれをパクろうかな」
混乱に紛れて逃げ出した俺は少女を背負い、やっと格納庫にまで来れた。
俺は急いでギフツに乗り込み、機体電源のスイッチを入れてみる。
機動したギフツはメインカメラを光らせ、一歩ずつ前進して行く。
ルフィスを自分の膝に座らせ、多少せまいが何とか機体を動かす事が出来た、後は逃げるだけだ。
背中に装備されているグレネードを手に取り、格納庫のゲートをためらい無く爆破する。
格納庫から出てみると数十人の兵士が東部軍事基地を探索している姿が見える。
「おい！あのギフツがゲートを破壊したぞ！」
「ＢＮが奪った機体かもしれない、各隊員はギフツに乗れ！」
その兵士達が格納庫に入っていき、次々にギフツに乗り込んでいく。

ゲート爆破するんじゃなかった……と、今更思うが仕方が無い。
俺の乗る機体のモニターにこの近くの地図のＭＡＰが表示される。

荒野・街・森・海・森。森か、ここなら姿を隠せるかもしれない。
ブーストをフル機動させ、一気に基地から離れていく。
レーダーを確認してみると、追ってくる機体も無いみたいだし。何とか逃げ切れたみたいだ。
まぁ、俺を相手にするより基地に入る奴等と戦っているんだろう。
逃げる為の餌にさせてもらった。
こんな簡単に脱出できるとは、夢にも思ってなかったがな。
何だろうな、そういえば乗ってから何か変な音が聞こえる。
まるで一秒一秒時計のように進んでいるかのように。
その音は足元から聞こえていた、右足を上げてその場所を確認してみる。
『１５』
『１４』
『１３』
『１２』
よく映画でみる光景だ、奥の方に見える赤いデジタル式の時計。まるで時限式の爆弾じゃないか。
っはは、爆弾ねぇ。誰だい？こんなイタズラしたのは。
『１０』
『９』
『８』
賭けるか、これが爆弾か、それともそうじゃないのか。
俺はこう見えても運は良い方だと……思わない。
『７』
『６』
「やっぱ無理！」
森が見えた、だがこれ以上ギフツに乗っておくのは非常にまずすぎる。
俺は急いで機体を止めハッチを開けると共に少女を抱きかかえたまま飛び降りた。

飛び降りたまでは良かったんだが、地面とかなり距離がある。
着地のさいに右足首に激痛が走った。だが今はそんな事を気にしている場合ではない。
俺は力の限り走った、ギフツから少しでも遠くに行く為に。
その瞬間、俺の後ろにあるギフツが凄まじい閃光と共に爆発した。

――「ん、何だこの音は」
一人の隊員が電子音に気づいた時、既に遅かった。
隊員達が乗っているギフツが次々に閃光を放ち、爆発していく。
爆風に巻き込まれてく兵士達、格納庫が爆発で吹き飛ぶ。
基地が揺れる、けたたましい爆音と振動。
医務室の棚に置かれている薬品が地面に落ちていく。
「爆発音？外で何が……」
赤城が医務室に着いている窓を開けてみる、そこには爆発したギフツの残骸がいたる所に散乱している。
その中に、見覚えのある機体が姿を見せた。ＢＮの機体である。
「奴等、いつのまに！？」
「赤城少佐、私は大丈夫だから基地の防衛を」
医務室にある大きな白いベットで寝込んでいるルフィス。
「すまない……！」
医務室を後にする赤城、急いでギフツの残っている格納庫へと向かう。
『ＮＦの皆さん、聞いてください』
一人の青年の声が基地内に響き渡る、それは一つの我雲からだった。
『我々の力を理解してもらえたと思います、しかし我々は貴方達との戦いは望んでいません』
ＮＦの兵士達がざわめき始める。
『人間同士で争うなど馬鹿げています、今こそ人類の力を合わせてＥＲＲＯＲと戦うべきです！』

『しかし、突然このような事を言われても理解しがたい事はわかっています、それならせめて……』
「何を言ってやがる！基地をめちゃくちゃにして！何人もの兵士を殺しやがって！」
「お前達はそんなやり方しか出来ないのか！ＢＮはあの時武器を捨てなかった！これは世界の破滅を意味していたんだ！」
「ＥＲＲＯＲが今年になって出現しだしたのも、和平交渉を結ばなかったＢＮが悪いんだろが！」
基地にいる兵士達が次々に叫びだし、一機の我雲に何人ものマシンガンを発砲する。
だが、いくら兵士達が銃を撃とうと我雲には傷一つ付かない。
我雲に乗っている青年は黙ってしまう。
その時、我雲のコクピットについてあるモニターにあの男の姿が映し出された。
『愁（しゅう）、貴様は何を言っている』
「紳さん……！」
『貴様のした行動は命令違反だ、先に基地に戻れ』
「しかし俺は！」
『戻れ』
「っ！わかりました……」
表情を変えない紳、その言葉で愁は何も反論できなかった。
愁の乗る機体は旋回して東部基地から出て行く。
それに続いてＢＮの機体が次々に基地から離れていった。
白銀の機体はマントをなびかせ、東部軍事基地の様子を見ている。
いたる所から火災が発生しており、何人もの兵士が倒れていた。
白儀も基地から離れようと後ろに振り返った時。一機の機体が立ちふさがる。
「ここは通さん！」
赤城の乗っている機体リバイン。武蔵も乗っていたＮＦの主力機だ。

背中に装着されているＬＲＳを手に取り、戦闘態勢に入る。
白義もまた、背中に装着されている二本の白銀のＬＲＳを手に取る。
互いの機体が睨みあっているかのような光景がそこにはあった。。
「この白銀の機体、カイトの部隊がやられた機体か……それならっ！」
リバインが背中についているアサルトライフルを手にし、白儀目掛けて引き金を引く。
白義は凄まじい速さで左右に動きで弾丸を避け、一気にリバインとの距離を縮めてくる。
「情報どおり凄まじい速さだな」
左手に持っていたアサルトライフルを投げ捨て、腰についているハンドグレネードを相手の動きを予測して投げる。
赤城の予測どおり手榴弾が白儀の目の前で爆発する。爆煙が白儀の周りに立ち込める。
白義との距離が近い為、少し距離を置き。煙が晴れるまで様子を見ている。
「タイミングは合っていた、直撃なら動けないはずだが……」
その時、爆煙を吹き飛ばしながら真正面から一気に接近してくる白義。
機体は背中になびいていたマントで覆い隠していた。
「やはり来たか！」
白儀は一本のＬＲＳを振り下ろし、それを一本のＬＲＳで耐えるリバイン。
だが相手のＬＲＳの数は二本、もう一方のＬＲＳがデルタの右腕を切り落とす。
その瞬間、振り下ろしていたＬＲＳでデルタの左腕をも切り落とす。
「ぐっ、両腕が……っ！」
後退しようとブーストをつけるが、機体に張り付いてくるかのよう

に白義が接近していくる。
白義はＬＲＳをクロスさせ、リバインの頭部を切断した。
もはやリバインの姿は足だけが着いている何とも奇妙な格好になってしまう。
バランスを崩し、その場に仰向けに転倒してしまう。
急いで起き上がろうとするが、両手を失っており立ち上がる事すら出来ない。
勝負はついた、白儀がＬＲＳの刃先を胸部に突きつける。
「っ！？」
一瞬で赤城の全身を恐怖が包み込む、もはや声も出す事も出来なかった。

「赤城ッ！」
リバインと白儀のコクピットに響く男の声。
その声と同時に白儀の背後からリバインがＬＲＳを振り上げながら飛び掛る。
後ろからの攻撃を難なく交わす白儀、飛び掛ってきた機体を破壊しに向かう。
だがそのリバインは、赤城が操縦していたリバインとは違う素早い動きをしている。
白儀が振るＬＲＳの動きを読み、左手に持つ盾を上手く使いながら白儀と対等に戦っている。
……閉じていた目蓋をゆっくりと開けてみる。まだ自分は生きてい事がわかった
モニターには白儀とリバインが一対一で対等に戦っている映像が映し出されていた。
「武蔵中尉！？どうしてここにいる」
赤城のモニターに映し出される武蔵の映像、多少映像が乱れているが何とか通信は出来る。
「ルフィスの様子が何か変だと思って俺だけ基地に戻ってきた、ま

さかこんな状況になっているとはね……」
「わかった、今はその機体との戦闘に集中しろ」
「了解」
赤城はコクピットを開き、機体から降りる。
その間にも白儀と武蔵の乗るリバインが激しい戦いを繰り広げていた。
互いの機体の剣が激しくぶつかりあい、火花を散らす。白儀の素早い動きに、冷静に対応していく武蔵。
「この動き、東軍最強の名の者か？……面白い」
「これがＢＮの新型、出来る」
武蔵は今戦っている白銀の機体のデータを分析、解析している。
素早さ、敏捷性、反応速度、全てがリバインの性能を超えている。
いや、機体の性能だけではない、あの白銀の機体に乗っているパイロットの力も影響している。
「厄介な相手だ、ここで終わらせてもらう」
互いの機体が剣を構え、跳びかかろうとした時。
武蔵の乗る機体の背後から数機のギフツが姿を見せる。
ギフツはマシンガンを構え、白義に一斉射撃を開始する。
すると白義は銃弾に当たる前に旋回し、風のように東部軍事基地を後にした。
白義が去った後は、基地では何故か異様な静けさが広がり、微かな悲鳴と炎上する音が聞こえてくる。
「伊達中尉！大丈夫ですか！？」
「よくやった、武蔵」
武蔵のコクピットのモニターに由梨音と赤城の姿が映し出される。
「援護は由梨音さんと赤城少佐ですか、助かりました……」
――「これは……」
その後、武蔵と共に司令室に戻ってきた赤城と由梨音だったがそこには無残に横たわる兵士達の死体が散乱していた。

その中には司令官等の位の高い軍人までもが死んでいる。
「ＢＮは司令室までも占領していたのか」
「赤城少佐、基地内で爆発したギフツ及びリバインのコクピットに爆発物らしき物を確認したそうです」
由梨音が今格納庫に残っている機体の数を書いている書類、そして死亡者の人数が書かれた書類を赤城に渡す。
一枚の書類を見ていると、もう一枚の書類は横にいた武蔵に取られてしまう。
「死者が５０名以上、あんな短時間にそれだけの人数を殺されたのか……」
「武蔵中尉？貴方は火災の消火に当たっていたのでは」
「火災は全て消しましたよ、それより……」
兵士が司令室に散乱している死体を一体ずつタンカーで運び出していく。
死体には何発もの銃弾が撃ち困れており、服は赤黒い血で染まっていた。
「ＢＮは急に、何故この基地を狙ってきたのか。余りにも突然過ぎだと思う」
赤城は小さく溜め息を吐き司令室を出ようとする。
「わからん。だが、今日の出来事は……」
「今日の出来事は、まだ始まりに過ぎないと思います」
司令室の入り口から青年の声が聞こえてくる。
その声に武蔵と由梨音が振り向き、赤城は顔を上げた。
「アステル少尉！？」」
司令室の入り口に立っている青年、それは紛れもなくカイト・アステルの姿だった。
「伊達中尉、由梨音、赤城少佐、皆お久しぶりです」
「アステル、記憶は……」
「はい、全て思い出しました」

第6話　終わり、始まる（後書き）

正式名ＭＦＥ－リバイン（Ｎｅｗ　Ｆａｃｅ製）
全長－１８ｍ　機体色－青　動力－光学電子磁鉱石
階級が中尉以上の兵士が搭乗可能のＮＦの最新型の機体。
特徴：左手には盾を装備、背中に2本のＬＲＳが備え付けられている。

第7話　一時、罪

アステルが記憶を取り戻し会議室に部隊面子が集まると、アステルから詳しい話を聞いていた。
牢獄の中で眠りについていた彼は、眠りから覚めてみると全ての記憶を取り戻していた。
周りを見渡してみると牢屋の柵が破壊されていたので牢獄から出て司令室に向かうと赤城達と出会った、と言う事らしい。
「何にせよ！アステル少尉の記憶が戻ってよかったですね！」
由梨音が嬉しそうにコップのコーヒーを皆に配っていく。
アステルはコーヒーに2個程角砂糖を入れてマドラーで掻き混ぜていく。
「皆に聞きたいんだけど、僕が記憶を失ってた時。僕は何をしていました？」
そのアステルの質問にいち早く答えたのは武蔵だった。
「すごかったよ、Dシリーズの操作をマニュアルを見ただけで動かせたし、特に戦闘なんて初めてとは思えなかったね」
その言葉にさらに赤城が言葉を付け足す。
「本当に記憶喪失かどうか少し疑う程だったよ」
「そうですか、わかりました。所でルフィスは今何処に」
「ルフィスなら私が医務室に連れて行ったから、多分まだそこにいると思うが」
アステルはコップに入ったコーヒーを一気に飲み干すと、勢い良く席から立ち上がり、
すぐさま部屋を出て行こうとするが、扉の前で止まると赤城に頭を下げた。
「ありがとうございます！ルフィスにも伝えたいので行って来ますね」
「ああ、そうするといいさ」

「いってらっしゃ～い！」
由梨音が手を振りながら笑顔でアステルを見送る、アステルは会議室から出てすぐさま医務室へと向かった。

その時もまだアステルは悩み、考えていた。
自分と同じ姿のあの男は一体、目的は……何故同じの姿をしていたんだ。
奴の目的は一体、どうして皆を騙し。自分になりすましていた、やはりＢＮのスパイなのか。
ならばあの時殺していたはず。
色々な考えがアステルの脳裏を過ぎる、だが今は考えるの止めよう、今はルフィスに会いに行くのが先決だ。
全速力で医務室まで走り、医務室についた時は少し息切れていた。
医務室に入るが人影が見えない、ベットで寝ているんだと思って仕切りのカーテンを捲って顔を覗かす。
「ルフィ――――」
「きゃっ！」
カーテンを捲って中に入ろうとした時、同時に互いがぶつかり合ってしまい、
ぶつかった二人は後ろに尻餅をついてしまう。
「痛てて、ご、ごめん。大丈夫？」
「痛たた……って、アステル少尉！」
アステルの目の前で倒れているのはルフィスだった。
どうやら体調が良くなりベットを降りて部屋から出ようとした時にアステルとぶつかってしまたようだ。
「アステル少尉！？どうしてここにいるんですか」
「待って！」
すると、突然アステルが手を広げてルフィスを止める。
視線をルフィスから放し、顔を赤くしていた。
「その前に、足閉じてくれないかな……」

「え、あっ！」
ルフィスはアステルに向けて自分が足を開いている事に気づき、顔を赤らめながら大慌てで足を閉じる。
「でさ、僕の記憶が戻ったよ」
「えっ？」
「皆の事も、姉さんの事も、ルフィスの事も。全部思い出したんだよ」
ルフィスは唖然としている、ただただアステルの顔を見つめていた。

すると、アステルが真面目な眼つきをし、口を開いた。
「東部軍事基地第五独立機動部隊、カイト・アステル少尉。隊長は赤毛さんで副隊長は伊達中尉」
そう言うとアステルのまた柔らかい表情に戻り、笑顔に変わる。
「これで信じてく――」
その時、床に仰向けで倒されるアステル、ルフィスが勢い良く抱きついたのだ。
「良かった……少尉、記憶が戻って、本当に……」
我慢していたのか、一気に涙が零れ落ちていく、うれしいはずなのに涙が止まらない。
「……アステル少尉？」
しかし、倒されたままアステルが一向に動かない。
ふと顔を覗いてみると明らかに意識が飛びかかっている、倒した衝撃で後頭部を強打したらしい。
「アステル少尉！？申し訳ございません、つい……」
「いいっていいって。心配かけてごめんね」
ルフィスの頭を優しく撫でるアステル、これでまたいつも通りの暮らしが続くはずだ。

――「ぐっ！」
「自分がした事をわかっているのか」

戦闘を終えたＢＮ、基地に戻るや否やある一室でＢＮの兵士愁は紳に顔面を殴り飛ばされた。
誰の部屋かはわからないが、愁は殴り飛ばされて地面に倒れている。
「愁、命令を出していない時に勝手な行動をするなとあれ程言ったはずだ」
腰にかけてあるサーベルを抜き取り、それを青年、愁の目の前で振り上げた。
とっさに目を瞑ってしまう愁。だがその時、紳の声が愁の耳に入った。
「目を背けるな」
その言葉で微か目を開けるが、目の前にはサーベルを顔の前に突き出した紳がそこに立っている。
「見ろ、そして機会を窺え。生き残る為に」
振り上げたサーベルを腰の鞘に戻し、その部屋から出て行ってしまう紳。
愁は床に座り込んだまま、紳の後ろ姿を見つめ続けていた。
「俺のした事は、間違っていた事なのかな……」
「軍人としては間違っているかもしれない、だが俺は人としては間違ってないと思うぞ」
紳が出て行った出口とは別の入り口から青年が姿を見せた。
座り込んでいる愁に手を貸し、引き上げる。
「羅威、囮作戦ご苦労様。怪我は無かったか？」
「お前こそ敵の本部に乗り込んだんだ、大丈夫だったのか。俺の方が心配してたぞ」
「っはは、それもそうだね」
その笑顔は少し力無いように羅威には見えた。あれだけ叱られたのだから落ち込むのも無理は無い。
まだ明かされぬＢＮの真実、今日の出来事によりＢＮとＮＦの関係は更に悪化していくだろう。

――さて、こんな世界の事なんてどうでもいい俺はＮＦからギフツを奪い取って森に逃走成功。
機体は爆発したが何とか森まで逃げる事ができた。
「やれやれ、どうしてこんな事に……」
俺は木が生い茂る森の中、滝の側で休憩していた。
血塗られた包帯を水で洗い、撃たれた肩。そして左目を覆うようにして包帯を巻きつける。
体に巻きつける再、滝の水温で冷やされた包帯が傷に染みる。
左目が痛い、って俺に左目はもう無いか。
さて、これからどうしたものか。
とりあえず食糧確保と……って、何で俺はサバイバル何かしてんだよ。
やはり街に行った方が良かったのかもしれないなぁ。
って、今更そんな事考えても無駄だ、今を考えて行動していくしかない。
食料を探さないといけない、血を流しすぎた、何か食べないと体がもたない。
腹減ったしなぁ、そうだ、あの少女をま、ず……。
薄れゆく意識、凄まじい眠気が俺を襲った。とにかくもう眠りたい。

俺はまるで死ぬかのように目蓋を閉じた。
そして次に俺が目を覚ました時、眩い光が俺の右目に入ってくる。
目蓋を閉じていてもわかった。眩しいほどの光。
「んっ、あれ」
生い茂っていた森林も朝日に照らされ、輝かしく光、森を照らす。
どうやら眠っていたらしい、眠っている間にあの世に行かなくてよかった。
って、あの少女の姿が見当たらない。

周りを見渡すかぎリ、あの綺麗な青髪をした少女が何処にもいない。
俺は何とかその場から立ち上がり、あの少女を探しに行かなければならない。
しかし、ここは森。どっちに行けばいいんだ。
ふう、考えたって仕方ない。とりあえず川に沿って行ってみるか。
滝から落ちた水は川に沿って何処かに向かっている。
海かな、んなわけないか。俺はそんなに地理には詳しくないからよくわからない。
それにしても、こんな世界にもこんな綺麗な森があるのか。
そしてこんなに綺麗な水があるじゃないか。
川の中に何かが泳いでいる。食料が泳いでるじゃねえか。
もちろんそれは魚の事。魚が川の中で泳いでいる、見た所大きさも丁度良くおいしそうだ。
そういえば何も食べてなかったからな。
たしかに食料は必要、だがまずはあの子を探さなければいけない。
……俺は目の前で泳ぐ食料を後にして少女を探す事にした。
少女を探しながら食料と言う名の欲望と戦っていた時、ようやく川のふもとまで来れた。
俺の目の前に広がる大きな湖、巨大とは言わんが、そこそこ大きい湖だ。
湖の周りには綺麗なお花畑が広がっているのが一目でわかった。
色とりどりの花が湖の横で咲いている。
「ほー、こんな綺麗な花畑があるなんてな……ここ天国じゃないよな」
こんな綺麗な景色を見たのは久しぶりだ、俺は花畑へと足を進めた。
すると、花畑に見覚えのある帽子が動いている。あの少女の帽子だ。
「やれやれ」

俺は花畑で走り回っている少女の左腕を掴んだ。
「捕まえた、一人でこんな所に来たら駄目だろ」
腕を掴んだ途端、彼女は走るのを止めた。
少女は俺に背を向けたまま、左腕だけが俺の方に向いている。
黙ったまま、何も言わず、何も動かず。風で花達が微かに揺れているだけだった。
「どうかしたのか？」
何も喋らないのでさすがに心配になり。自分から声をかけてみた。
「貴方は、人の、ましたか」
俺の耳に何かが聞こくる、小さく細い声。だがそれは紛れもなく少女の声。
「んっ？」
少女が振り返った、だが振り返った少女の目はまるで別人だった。
「貴方は今まで、何人の人間を殺してきましたか？」
「えっ……」
次に目蓋を開いた時、少女は俺の目の前から消えていた。
だが俺の目蓋にはあの少女の顔が焼きついている。
それだけではない、さっきまで自分がいた花畑がただの荒地になっていた。
辺りの森は枯れて腐敗し、地面には血塗られた土しか残っていない。
空は濁り、太陽の光が薄暗く、虫や鳥の鳴声も聞こえない。
「なっ、何だよ、これ」
さっきまで自分がいた光景はとは全く違う、まるで違う世界に飛ばされたかのような感じがした。
しいて言えばそこは地獄だ。俺の横には、あの大きな湖が存在した。
荒地の中に広がある。
その大きさと、あまりの事で言葉が出なかった、まるで人間の血を溜めたかのような赤い湖が俺の目の前にある。
急激な吐き気とめまいが俺を襲い、その場に伏せこんでしまう。

物音が何一つ立たないその荒地に、何かの音が聞こえる。
湖からだった、赤い湖から何かが俺に近づいてくるのだ。
それは死体だ、軍服を身に纏った死体が俺にゆっくりと近づいてくる。
一人じゃない、何人者兵士の死体が血を流しながら俺に近づいてくる。
兵士だけじゃない、女や子供、老人と思われる死体まで。近づいてくる。
近づいて来る、来る。俺の頭の中であの出来事が蘇る。
死体は切り落とされた腕から血を流しながら近づき、もう一体の死体は頭が無い。
「く、来るな……僕に近づいて来るなぁっ！誰か！誰か助けてっ！」
僕は叫んだ、でも誰も助けには来ない。
死体達が僕を睨んでくる、ち、違う。この人達を殺したのは僕じゃ……。
だ、だって。姉さんを！お前達が姉さんを殺したんだろ！？
『いいえ、彼等は殺していません。軍を守ろうとし、勇敢に敵に立ち向かった兵士です』
「お前何なんだよ！何処にいるんだよ！何言ってんだよ！？」
冷たくい赤い手が僕の足を掴む、振りほどこうとどんなに足に力を入れても、決して放しはしない。
何本もの腕が、まるで花のように俺に伸びてくる。何本も何本も…
…僕を掴もうと腕を伸ばしている。
「だ、だって。僕は、僕はぁ！憎かったんだ！姉さんを殺した奴等が！」
――甲斐斗、彼には二つ名前がある。一つは高橋甲斐斗、そしてもう一つはカイト・スタルフ。

姉が死ぬまではカイト・スタルフとして生きていた、だから今は高橋甲斐斗という名前。
甲斐斗の心は、姉が死んだ時壊れた。
小さい頃から姉と二人で暮らしてきた、互いに笑い、怒り、泣き、喜び。
高橋甲斐斗にとって姉は、かかせない存在だった。
甲斐斗の右手に、あの巨大な黒光りする剣が現れる。
自分の体を掴もうと、何本も伸びてくる手を一気に剣で切り落とした。
湖から這い上がる死体、甲斐斗に向かってくる死体、前に出てくる者を全て斬り捨てていく。
「うぜぇんだよ、俺の邪魔をする奴は誰だろうと殺す」
血みどろの死体達は甲斐斗から逃げる、だが奴は逃がさない。
次々に逃げる死体を斬っていく甲斐斗。今の奴等から見て、甲斐斗は『悪魔』に見えているだろう。

――俺を否定する奴、俺の邪魔をする奴、俺を傷つける奴、俺に逆らう奴。怒りや悲しみ、恐怖が来る前に、皆殺しにすれば早い話じゃないか。
皆殺して、皆死ねば、皆いなくなって、俺だけになって、そして……そしてぇっ！
「あはは……あはははは！あはははは――――」
俺は顔や服が血に染まり、大空に顔を向けて奇声のような笑い声を繰り返していた。
何も無い荒地の上で、喉が枯れて、喉が潰れて声が出なくなるまで、死ぬまで……。

「っ、うっぐっ……」
痛い、頭が割れそう…だ……。
というか、割れた？　何だったんだ今のは。

「ここ、は」
湖、それに花畑じゃないか。
俺は気を失っていたのか。
駄目だ、頭が痛い……。
「かいと？」
「うおっ！？」
倒れている俺の顔の目の前に、あの少女の顔が俺を覗き込むようにして現れる。
頭には帽子ではなく綺麗な花で出来た冠を被り、きょとんとした様子で俺の顔を見つめていた。
「よ、良かった。無事でなにより」
さっきまで頭が痛かったのに、今は全く痛みを感じない。
少女が俺の頭に何かを被せてくる、良い匂い、花で作られた冠だ。
「かいと、たすけてくれた」
「って、君はあの時起きてたのか？」
少女は笑顔で頷いた、するとまた何処かに立ち去ってしまう。
「お、おい。何処行くんだ」
俺は倒れている体を起こし、周りの様子を見てみる。
そこには、さっき自分が見た花畑と湖が広がっていた。
荒野でもなければ、赤い湖でもなく。木を生い茂り、空は青い。
「ふぅ、あれ。あの子何処に……」
すると、いつも帽子を被っている少女が帽子を外し、その帽子を逆さまにして両手に持っている。
俺に走りながら近寄る少女、俺の目の前に逆さの帽子を突き出した。

「たべて」
帽子の中を見てみると、色鮮やかな木の実や果物らしき物が沢山入っていた。
この時ようやく気づいた、この子は俺は寝ている間。俺の為にずっと食べ物を探していたと。

「ありがと」
帽子の中から取り出した、木の実を口に入れてみる。
「あ、美味い」
ふと、美味しさに本音が零れ落ちた。
野菜は大嫌いだが、これは旨い。自然と口の中に入れてしまう。
それから俺は帽子の中にある木の実や果物を食べた、もちろん俺の隣にいる少女と一緒に。
俺達二人は木の実を食べ終わると、一緒に木の実や食べれそうな物を探しに森に入った。
俺は探しても食べ物が全く見つからない、だけど少女が行く所は全て木の実や果物があった。
森に入ると時間の流れが速い気がする、気が付くと辺りは暗くなっていた。
俺達は急いで森から出ると、湖の側の草原で横になり、今日は寝る事にした。
「えーと、君の名前。俺が勝手につけていいかな？」
「なまえ？」
俺の方を頭を傾ける少女、じっと横顔を見つめてくる。
「そ、名前、俺は甲斐斗って言うだろ？」
「なまえ、かいと」
うれしそうな表情を優しく浮かべているのが俺にもわかった。
「本当に？絶対変とか言わないでくれよ？」
「なまえ、なまえ」
「えーとな、ミシェルってのは……どうかな、いや。嫌なら別の名前にするぞ！？」
慌てて名前を変えようとした時、小さな寝息が俺の頬にかかる。
寝てる、まぁ無理もない。一日中森を歩き回ったんだから。
ミシェルの体に、自分が来ていた上着を被せると、俺も目蓋を閉じた。

今日はもう寝よう、この子と一緒に、安らかに。

第7話　一時、罪（後書き）

甲斐斗（かいと）
元最強の魔法使いだった青年（？）。
この世界に来てから魔法という魔法は一切使えない。
だが自慢の愛剣はいつでも出現させる力を持つ。
性格は明るく、前向きであり、優しい一面も見られるが、残虐な一面の方が多い。
少し人間離れの生命力と力を持っている。

第8話　無実、現実

――あれから一日、何とか逃げきった後森についた俺はそこで一夜を過ごした。
光が俺を照らし出し、眩い光が大量に俺の瞳に差し込んでくる。
俺は寝ていた体を起こして目蓋を擦る、あぁ、だるい。
鳥達は羽ばたき、森林の呼吸、光り輝く太陽、まさに朝だな！
こんな天気が良い朝に起きたのだ、ラジオ体操でもしたいもんだ。
俺はまず左目の部分を覆う包帯を湖の水で洗いに行く。
「ふぉあっ！？」
湖の水は冷たく、包帯を巻いたとたんについその冷たさに驚いて変な声が出てしまったが、気にしない。
俺は大きななあくびを数回した後、まだ寝ているミシェルを起こさずに木の実探しに向かった。
あんな気持ちよさそうな寝顔してたら起こせるわけないしな。
昨日は俺だけ探し出せなかったからなぁ、今日ぐらいは俺が探してやるぜ！
さて、一人でテンションを上げた事だし美味い物探すぞ。
とりあえず昨日探した所とは別の場所の森に入っていく。
それにしても空気が美味しい。本当に自然というもの素晴らしい。
しかし、人間の『科学』が発展していくと同時に『自然』が失われていく。
人間が快適な生活を送る為には自然は犠牲にならないといけないからな、しかし自然が無くなると言う事は
人間が死ぬと言う事をわかっていない、地球に張り付く寄生虫、それはまさに人間じゃないか。
ん～ますます腹が減ってきた。頭を使うのは止めよう。
いつものように一人で何かを考えながら森の奥に進んでいくと赤く小さな実が沢山なっている小さな木を発見した。

発見したのは良いとして、果たしてこの実は食べれるのだろうか、昨日は適当に食べて毒らしき実は無かったが……。

とりあえず見た目は綺麗な実、多分食べれそうだ。
とは言うものの、やはり毒だったら怖い。
俺は恐る恐る木の実は取り、一個口の中に入れてみた。
口に入れた途端、甘い果実の汁が出てきって、うおおおお！！？
「苦っげぇえええええ！」
っは！良く見るとこの果実が生っている木の下には動物が白骨化した形跡が。
てか辺りに骨が散らばってやがる。
あ、危ねぇ。気を失う程の苦さだったな、これは。
昨日はよくこんな物を見つけなかった、あの子が探し出した木の実はどれも美味しかったし。
あの子、そういえば名前を決めようと思って俺が言ってみたけど寝てたっけ。
ミシェルって名前、変かな。他の名前にでもしてみようかな。
そんな事を小さな木の前で考え込んでいた時、何者かが俺に近づいて来るのを感じた。
足音が段々と近づいてくる、俺はその場から少し離れた茂みに隠れて身を潜め、誰なのか様子を見てみる。
するとあの苦い木の実があった小さな木の前に少年が現れる。
歳は１３、１４程だろうか。腰には剣を指しており、頭にはローブを被っている。
いつの時代の人間だおい。
明らかにこの世界の人間じゃなさそうなんだが、俺の前にいるその少年はあの俺が食べた赤い木の実を次々に取っていく。
おいおい、まさかそれを食べる気か？しかもあんなに持っていって……死ぬ気かッ！？
だがその前にあの少年は何者だ、何故こんな街外れのこんな森にい

るんだ、しかもあの格好は……。
少年が木の実を抱えて立ち去っていく、俺はその少年にばれないように後をついていく事にした。

少年の後を付いていくと、大きな洞窟の中に少年が入っていく。
俺もその大きな洞窟の中に入り、少年の後を追う。
俺は隠れそうな岩場に身を潜める、少年が立ち止まり、何か話しているのからだ。
誰に話しかけているのか気になる所だが、俺の角度からはその話し相手が見えない。
「大丈夫、じっとして。痛くても我慢してね」
少年は持ってきた赤い木の実を布に入れ、すり潰していく。
なるほど、あの赤い木の実は食べ物じゃなくて消毒効果を持つものだったのか。
お、俺はそんな物を朝っぱらから食ったのかよ、腹大丈夫かな……。
自分の腹に手を当てて心配そうな顔をしていたその時、けたたましい声が洞窟の内に響きわたる。
何かが咆哮した、狼？違う、虎？違う、人間？絶対に違う。
とり合えず関わるのは止めよう。もう何かに巻き込まれるのはごめんだ。
俺はそう想い一歩後ずさりしたが、この一歩がまずかった。
パキッ――――。
運悪く後ろに置いてあった、木の枝を折ってしまった、俺ほど運が悪い男はそういないだろう。
その木の枝が折れた音は洞窟内に響き渡った。
「誰かそこにいるのか！？」
誰が答えるかばーか！俺は全速力でいちもくさんに洞窟から出て行く。
俺は長距離走は苦手だが短距離走なら誰にも負けん。追いついてこられるなら追いついて来いっての。

とか心の中で思ってたら本当に追いかけてきやがった、明らかに俺の後ろを誰かが走ってくる。
走り続けると森を抜けてしまう、そこには大きな湖が広がっていた。
元の場所に戻ってきたのだ。
やばい、逃げれないし隠れられない。
「こうなれば！」
俺は走っていた足を急に止め、後ろに振り向いた。
「待て！俺は怪しい者じゃない！」
尾行、脱走をしている時点で怪しいけど、だが俺は怪しい人じゃない。
少年も足を止め、俺の顔を見つめる。
「ＮＦの兵士、まさかここまで来ていたなんて」
「ＮＦの兵士？何処にいるんだ？」
「お前だよ！」
あ、そうだった。俺は牢屋の中にＮＦの軍服を着ていたまま過ごしていたんだ。
パイロットスーツも着ずにギフツに乗り込んで逃げたんだった。
「見られたのなら仕方が無い、死んでもらう！」
この少年、俺と戦う気か？その腰に付けてある小さな剣でこの俺と？
笑わせるな、貴様のようなガキが俺を倒せると思うなよ。
いくら魔法は無くともお前のようなガキに負ける俺様ではない。
すると少年は上着に隠していた拳銃を構えて俺に銃口を向けてきた。
……おい待て、その腰についてある剣はフェイクか？ただの飾り物か？
「ちょ、ちょいと待て！俺はＮＦの兵士……というかＮＦでもない！」
「その軍服を着ておいてＮＦの兵士じゃないなんて、僕を騙せると思ってるのか！」
ごもっとも、その通り。だが俺は本当にＮＦの兵士じゃない。
一応説得をしてみるしかないな。

「待てって、じゃあ仮に俺がＮＦの兵士だとしよう。
ＮＦの兵士がこんな森の中、一人で、武器も持たず、機体にも乗らず、しかも負傷している。
明らかにおかしいとおもうだろ？」
よし、これは効いたな。後は俺がＮＦの兵士でない事を熱く語れば……。
「僕とマルスを追っている途中に機体を破壊されて、この森に来たんだろ！」
このガキぃ、意外と頭良いじゃねえか。
マルスというのは多分この少年の友達か何かだろう、それにしても何故この少年達はＮＦに追われているんだ？
それに機体を破壊されって、一体。いや待て、もしかすると。
「待て、俺はＢＮの兵士だ。ＮＦの基地に潜入していたんだが。逃げる途中に機体を破壊されてこの森にたどり着いたんだよ！」
ＮＦと敵対しているというのであれば、ＢＮの兵士であれば、もしかすれば！
「兵士……やはり兵士かっ！ＮＦもＢＮも関係無い！」
あれ、あれれ？何かもっと悪くなったような。だが俺はここで撃たれて死ぬ気はない。
少年が俺に銃口を向け、引き金を引こうとした時、一喝入れてみた。
「剣士たるもの銃など使わず剣で来い！」
その言葉に引き金を引こうとした指の動きが止まった。
って、止まるって事はこいつは剣士なのか？何故こんな時代の世界に剣士がいるんだ。
まぁこれで隙が出来たな……。
その瞬間、俺は右手に黒剣を呼び出し少年の持つ銃を切り落とした。
そして後ろに倒れる少年の首に刃先を突きつける。
「卑怯だぞ！それに何処からそんな剣を！」
「黙って俺の話を聞け、お前この世界の人間じゃないな」
「ど、どうしてそれを！？」

ビンゴのようだ、ようやく数少ない仲間に出会えた。
「俺もこの世界の人間じゃないからだ」
「ほ、本当に?!」
やはりこの少年は他の世界の者か。
俺がこの世界に存在する以上他の世界の者がここにいても不思議ではない。
俺はさらに詳しい話を聞こうとした時、さっきまで日光が俺たちに降り注いでいたというのに突然日陰に……。
「マルス!?」
少年が空目掛けてその名前を言った、俺も少年が見ている方向を見上げ、そしてその光景に俺は唖然とした。
「っな、嘘だろ?」
俺達を覆い隠す程の巨大な体、鷹のような眼で俺を睨み、空を飛んでいる。
上空から俺を見下ろす、その生き物は……。
「龍……?」
ああ、それは一言で言える。
だが今この状況、そしてこの現状を俺は一言では言えない。
龍なんて架空の生き物は見た事が無かった、俺は幻想を見ているのか?
上空を飛んでいる龍は大きな口を開き、その口から火炎が吹かれる。
俺はどうする事も出来なかった、俺に力など無い。訳のわからないまま炎に包まれた。
大体何々だよ、いきなり龍とか、そんなのあり…かよ……。
炎に包まれた俺は、全身を炙られる程の激痛が走り、息苦しさを感じる。
体は無意識に水を求め、意識が朦朧とする中、俺は迷わず湖に身を投げた。
目の前に広がる光景など何も無い、薄暗い視界しか広がらない。

――「マルス！何て事をするんだ！！」
甲斐斗を追っていた少年は湖の中を覗き込む、だが甲斐斗の姿は見当たらない。
少年の隣にはマルスと言う名の龍が一緒に湖に目を向けている。
大きな口に長い首、ヒゲも生えており何処からどう見てもドラゴンだった。
「彼は僕と同じ他の世界の者だったんだよ！それなのに！」
その時である、先ほどの炎が森に燃え移り、次々に木が燃えて行く。
火の移りは早く、次々に周りの草花を灰にしていくが。
少年はそれに構う事なく、龍の背中に乗ると何処かへ飛び去っていった。
龍が飛び去ると同時に、何か不気味な生き物が次から次へと湖に周辺に集まってきた。
そう、それはＥＲＲＯＲだった、奇怪な動きをしながら火災の起こっている場所にＥＲＲＯＲが集う。
そのＥＲＲＯＲの姿はＰｅｒｓｏｎ態、甲斐斗達を襲ったあの化け物だ。
Ｐｅｒｓｏｎ態は長く酸の垂れる舌を使い、燃えている草花を溶かし。
燃え盛る木々を強靭な顎で噛み砕きながら食べていく。
それはあっという間の出来事だった、さっきまで燃えていた木はもうなく、草むらの火も消えていた。
火が消えると湖周辺に集まったＰｅｒｓｏｎ態が次々に森の奥へと消えていく。
しかし、一匹のＰｅｒｓｏｎ態があるものを見つけた。湖の側にある花畑、そしてその横で寝ている少女の姿を。
少女は何も知らずに、暖かい日差しを受けながら心地よく眠っている。
そして奴等は少女を起こさないように物音を立てず、少しずつ近づいていく。

Ｐｅｒｓｏｎ態はその手で少女の体を掴もうとした。

――――「化け物が、汚い手で触んじゃねえよ」

黒い斬光がＰｅｒｓｏｎ態の手首に走った時、その手は吹き飛ばされた。

吹き飛んだ手は湖の中に落ち、沈んでいく。

「ったく、寝ている少女にイタズラすんなっての……」

次に黒い斬光が見えた時、既にＰｅｒｓｏｎ態の首は宙を舞っていた。

俺は生きている、高橋甲斐斗はまだ生きている。

ＥＲＲＯＲの仲間が近寄ってくる前に、この子を抱いて何処か安全な場所に移動しなければならない。

それにしてもこの子は、こんな危険な時だというのにすやすや寝ている。

俺は焼き焦げた両腕で少女を抱き、森深くに身を潜めた。

――――「んっ……」

少女は目を覚ました、何か不思議そうに辺りを見回している。

自分が寝ていた所とは別の所で寝ていた為である。

寝ていた場所のすぐ近くに川が流れており、その川をじっと見つめている甲斐斗の姿があった。

少女は起き上がり、小さな足で少しずつ甲斐斗の背後から近づいていく。

甲斐斗は相変わらず川を見つめながら岩場に座っている。

「かいと！」

少し驚かそうと思い、後ろから名前を読んで背中を軽く押した。

甲斐斗の体は押された反動で前かがみになり、顔面から川へ倒れる。

体全身が川の中に沈み、何一つ動きを見せない。

「かいと……？」

甲斐斗は何も答えない、甲斐斗の耳に少女の声は届いていない。

川のせせらぎは震える少女の声を掻き消した。

第8話　無実、現実（後書き）

正式名Ｐｅｒｓｏｎ態（第一種ＥＲＲＯＲ）
全長―３～４ｍ　重量－約１８０ｋｇ
４本の手、２本の足を使い地べたを這い蹲りながら移動する。
人間のように頭、胴体、手、足。などのパーツは人間と同じだが、
人間とはかけ離れた姿をしている。
強靭なアゴと歯を持ち、戦車の装甲だろうと噛み砕く事ができる。
また、Ｐｅｒｓｏｎ態の舌からは高濃度な酸が滴り落ちている為に
溶かす場合もある。
目が無くとも敵の位置を正確に判断でき、その能力は未だ謎である。

第9話　仲間、部隊

「はぁ……」
赤城が一人休憩室の座席に座り、新聞を広げている。
そして缶コーヒーを片手に、新聞に書かれている内容に目を通していた。
「赤城少佐～ため息ばかりついてどうかしたんですか～？」
いつものようにお気楽な感じで現れる由梨音。
赤城の座っていた座席の隣に勝手に座ってくる。
由梨音はいつも炭酸の強いジュースを買って飲む、赤城も一度飲んだ事があるが余りの刺激の強さにそれ以来飲むのを止めた。
「悩みがあるなら私がいつでも相談相手になりますよ！」
「そうか、だが由梨音に話す悩みは無い」
「そんなぁ！私にどんどん少佐の悩みを打ち明けてくださいよー！」
赤城は思う、由梨音だけには絶対に悩み事を話さない、話したくない。
それに年下に悩みを打ち明けるというのは何処となく嫌である。
「あ、由梨音に赤城じゃないか」
すると、今度は休憩室に武蔵が入ってきた。
「武蔵、私を呼び捨てにしたな。減給だ」
「あはは、それは困るなぁ」
しかし武蔵の顔は笑っており、自販機の前まで歩いていくと自動販売機のお金を入れ始めた。
もはや「減給」という言葉に聞きなれているかのようだ。
「伊達中尉！新しく『超刺激炭酸ミルクオーレ』が出たんですよ、一緒に飲みませんか！」
由梨音は立ち上がると目を輝かせながらその自販機の置いてある超（略オーレを指差す。
「ま、また今度にしておくよ。今はコーヒーが飲みたい気分だから」

「え～、では私が今飲んでいる奴を一口飲んでみてください！この美味しさは他では味わえませんよ！」
そう言うと由梨音が飲みかけの超ミルクオーレを武蔵に差し出す。
「う～ん、一口ぐらいなら飲んでみようかな」
由梨音の握っている缶を武蔵が取ろうとした瞬間、由梨音の手にあった缶が姿を消す。
「あれ？」
武蔵と由梨音が同じリアクションをすると、二人の隣にいつのまにか赤城が立っていた。
赤城は由梨音が持っていたはずの缶を手に持っており、そのジュースの中身を全て自分が飲み干す。
そのあまりの突然の出来事に二人は呆気にとら顔をしている。
「ぐっ……由梨音、休憩は終わりだ、部屋に戻る、ぞ……」
自分が飲んでいたコーヒーの缶と由梨音が飲んでいた缶を二つゴミ箱に捨てると
何事もなかったかのように休憩室から出て行ってしまう。
「あ、赤城少佐！待ってくださいよー！」
由梨音は急いで赤城の後を追い、休憩室から出て行ってしまう。
一人休憩室に取り残される武蔵。
後ろに振り向き、自動販売機のボタンを押し落ちてきた缶コーヒーを取り出すと、一人静かに飲むのであった。

「あと３０分後に会議がある、それまでにこの書類を纏めておかなければ」
いつもの部屋に戻り、机の上に山積みされている書類を一枚一枚目を通していく。
「赤城少佐～、なんでさっき私の飲んでたミルクオーレを全部飲んだんですか？」
由梨音が不思議そうに赤城に問いかけるが、赤城は書類を黙って見ていく。

すると、赤城は自分が読んでいた書類の山を由梨音に手渡す。
「由梨音、この書類のコピーを頼む」
「ええっ！わかりました。でも赤城少佐、私のミルク……」
「早くしないと減給にするぞ」
「は、はい～！」

それから３０分後、書類もまとめ終わり、二人は会議室に向かう。
由梨音が会議室のドアを開けるが、その会議室には誰一人いない。
「あ、あれ？」
由梨音がきょとんとした顔で会議室を見渡している、その間に赤城は会議室に入っていく。
赤城が会議室につくと口を開く。
「言ってなかったかな、会議があるのは第五独立機動部隊の隊員だけだ」
「え、じゃあこのコピーした書類は？」
「皆に見てもらうためにコピーした書類だ、各人数机の上に置いといてくれ」
赤城少佐がそう言った時、会議室にまた誰かが入ってくる。
「あ、伊達中尉にノイドさん！」
金髪の髪の毛が逆立っている青年ノイド。階級は曹長です。
二人が赤城少尉と向かい合うように席に座り、二人で何か雑談を始めました。
次に会議室に訪れたのがアステル少尉とルフィス。
「ルフィス～！」
突然ルフィスに抱きつき、頬をこすり合わす由梨音。
「ゆ、由梨音さん！いきなり何するんですか！？」
「ただしてみたかっただけ～」
「由梨音、そろそろ席に付け」
由梨音は急いで赤城と隣の席に付き、アステル達も席に付く。
そして会議室のドアがまた開かれた。白い軍服を纏った一人の男と、

緑色の軍服着ている少女が入ってくる。
その瞬間、会議室で座っていた全員の隊員が席を立ち、武蔵以外白い軍服を着ている男に敬礼する。
武蔵は驚いた様子で白い軍服を身にまとっている男を見つめる。
「騎佐久(きさく)！どうしてここに！？」
「久しぶりですね、武蔵」
瓜野(うりの)騎佐久(きさく)、知っているのは多分赤城と武蔵だけだろう。
由梨音、アステル、ルフィス、ノイド。４人は騎佐久が南部基地に配属された後に配属されたから知らないだろう。
「南部に配属されたはずだろ、何故東部基地に……」
「それに関しても、色々と話すから。まずは席に着いて」
武蔵は騎佐久に敬礼を済ませた後、席についた。
会議室の壁についてある大きな画面に映像が映る。
「さて、まずは何故私がここにいるのか。東部基地にいた上位クラスの階級を持つ人がほとんど殺されたのは知っているな」
「東部基地に人手が足りない為に私が仮配属された、そしてこの子もだ」
騎佐久の隣に立っていた少女が自己紹介を始める。
「南部から東部軍事基地第五独立機動部隊に配属されました、レン・スクルスと言います。よろしくおねがいします」
「っほー、この部隊にまた可愛い少女が入ってきたな」
ノイドが武蔵の耳元で小声で言って見るが、武蔵は呆れた表情だった。
「皆仲良くしてやってくれ、さて会議はこれにて終了だ」
「なっ！？」
全員が同じリアクションを取り、騎佐久の方を首を向ける。
「伊達中尉、少し話しがあるから私と来てくれないか？」
「わかりました」
会議室から武蔵と騎佐久が出て行き、その場に残される一同。
すると赤城は席を立ち、レンの所に向かう。

「第五独立機動部隊隊長の赤城だ、よろしくな」
そう言うといつも両手の黒い手袋を外し、右手を指し伸ばす。それは握手を意味していた。
「よ、よろしくお願いします！」
「私は高橋由梨音！よろしく～！」
次々に部隊の人達が握手してくれて、少し不安だったレンの顔も明るくなってくる。
「私はルフィスって言います、それにしても驚きましたよね。この部隊に同い年の人達が沢山いて」
ルフィスが優しくレンに話しかける、由梨音も笑顔で頷き、レンも笑顔で答える。
「はい、実は騎佐久少将が私の配属先をここにしてくれたんです」
3人が仲良く話している中、アステルとノイドが二人ブツブツと何か話している。
「なぁカイト、俺達の部隊にはあんな可愛い少女達が3人もいるんだぜ？」
「そうだね、それがどうかしたの？」
アステルの肩に腕を掛けて顔を近づけるノイド。
「俺達って運が良いよなぁ。こんな女性達に囲まれたハーレム部隊でさぁ～」
「あ、ああ……そうだね。てか3人って、女性なら赤城さんもいるでしょ」
「あの人はもうラブラブじゃん？あの人と」
「んー、それもそうだね。赤城さんはもうあの人と……」
風の起こらないはずの室内で風は起きた。
二人の目の前に立っていた机が真っ二つに斬られる。
アステルとノイドは綺麗に真っ二つにされた机をまじまじと見つめる。
しかし、その様子に一番驚いたのはレンだった。
「えっ、ええっ？」

「あちゃー、赤城少佐を怒らせちゃった。二人とも！医務室にでも行こっか！」
「そうですね、セレナさんにも話しておきたかったし、アステル少尉。さようなら」
3人は配られた書類を持つと。
由梨音とルフィスはレンを連れて、逃げるように会議室を出て医務室へと向かう。
「お前達、私の話しをしていなかったか？」
「し、してないっすよ！いやマジで！」
ノイドが必死に無実を主張するが、赤城はゆっくりと二人に近づいてくる。
そしてアステルは自分の身の安全をまずは確保しようと武装解除を呼びかけた。
「待って赤城さん！まずはその刀をしまって！」
「あ、カイトは言ってたかも！俺は言ってないけどな！」
「えっ？卑怯だよそういうの！ノイドさんが先に言って――」
赤城はゆっくりと二人に近づいてくる。
その凄まじい威圧感と殺気に圧倒される二人、まるで蛇に睨まれたカエルのようである。
「貴様等二人は……」
赤城が刀を振り上げる、その刃先は不気味に光る。
カイトとノイドは震えながら必死に主張するが赤城の耳にはそんな言葉はとどかない。
二人は壁にまで追い込まれ、そして赤城が言い放った。
「減給だッ！」
そして両手で握る大きな刀を振り下ろす。
「う、うわぁあああああっ！！」
会議室に響き渡る二人の悲鳴、これもいつもの事だ。
――「あらあら、また赤城さんを怒らせたの？」

「まぁ怒らせたのはアステル少尉とノイド曹長だけどね～」
テーブルに着いている4人、テーブルの上には洋菓子と紅茶が人数分置かれている。
由梨音はその洋菓子をおいしそうに遠慮無しにどんどん食べていく。
「えーと、レンちゃんだっけ。私は医務担当でセレナ・アステルって言うの。よろしくね」
レンの方を向くと、優しい笑顔を見せる。
「よ、よろしくお願いします、セレナさん、って。セレナさんってもしかして……」
「カイトさんのお姉さんなんだよ、驚いた？」
ルフィスは紅茶を一口少しだけ口にしてまたテーブルの上にカップを戻した。

――その頃休憩室には二人の男がテーブルの座席に座っている、それは武蔵と騎佐久だった。
互いは無言のまま見つめ、いや。睨みあっているようにも見えた。
だが二人は下を向き、小さく肩が揺れ、何かをこらえているかのようにも見える。
そして次の瞬間、休憩室に二人の笑い声は広がる。
「ったく、久しぶりじゃないか武蔵！」
「騎佐久こそ、元気そうで良かったよ！」
二人は笑いながら握手を交わした。
さっきまでのピリピリとした真剣な雰囲気は何処へやら。
「それにしても、騎佐久はすごいね。南部から東部まで来るなんて」
「すごいかもしれんが、結構大変なんだぞ。お偉いさんも楽じゃない」
「でもまぁ、騎佐久が敬語で喋ってた事が一番驚いたんだけどね」
「何だそりゃ、それはそうと。東部は大変だな。
たった一日でここまで東部基地をここまで追い詰められるなんて」
「俺が基地にいない間に、まさかここまでされているとは思ってい

なかったよ」
「お前がいない時を狙った。ってのは俺の考えすぎかな。
っま、これから数日だけこの基地の面倒を見るから、短い間だがよろしくな」
騎佐久がまた手を指し伸ばす。
握手だと思い、武蔵が右手を指し伸ばした時。騎佐久が武蔵の右手首を握る。
その瞬間武蔵の体は宙に浮く。軽く一本背負いをされたのだ。
しかし武蔵は床に左手の手の平を当てて衝撃を吸収した後一回転するように着地した。
武蔵の右肩を何かが掠める、騎佐久の突き出した右足がかすかに肩にあたったのだ。
すぐさま体勢を建て直し、騎佐久と向き合う。
「俺がいない間に、動きが少し鈍ってるかと思ってたが。どうやらその心配は無さそうだな」
「騎佐久こそ、俺がいないから少し動作が遅くなってるかと思ってたけど、大丈夫そうだね」
二人がニヤリと笑い、互いに近づき己の拳と蹴りを駆使しながら戦う。
周りにおいてあるテーブルや椅子が吹き飛んでいくが、二人は気にせずに戦っている。
その休憩室に何も知らない赤城が入ってくる。
「騎佐久少将！伊達中尉！二人とも何を？！」
「いやー、赤城も久しぶり。相変わらず綺麗だね。少将とか堅苦しいから呼び捨てでいいぞ」
武蔵と格闘しながら赤城と話している騎佐久。
「貴方は南部軍事基地の機動部隊指揮官。騎佐久少将でありまして……」
「数ヶ月前はそうじゃなかったろ？」
「し、しかし……」

赤城が対応に困っている時、隙をついて武蔵が騎佐久の懐に入った。
「騎佐久、俺と戦っている時によそ見をしないほうがいい」
武蔵の右手の拳が騎佐久の腹部に直撃する。
騎佐久の足がよろめき、動きが鈍くなる。
「騎佐久少将！」
その場に座り込む騎佐久の体を支える赤城。
「伊達中尉！指揮官である方になんて事を！」
武蔵が頭をかきながら、何て言えばいいだろうか考えている。
「その前に、騎佐久。腹に何を入れてるんだ？」
「ああ、やっぱりわかったか」
座り込んでいる騎佐久が自分の着ているコートを脱ぐと、
騎佐久の腹部には防弾チョッキらしき黒い服を着いていた。
「何時我が身に危険な事が起きるかわからないからな、普段いつも防弾チョッキを着ているのさ」
呆れた様子で騎佐久を見ている武蔵だが、逆に尊敬の眼差しを送っている赤城。
まさか同じ事をしようとか思っていないだろうか。
騎佐久は脱いだコートをまた着て立ち上がると、出口に向かっていく。
「武蔵も赤城も元気そうで良かったよ、それじゃ。俺は……いや、私は仕事があるからな」
そう言うと、何事も無かったかのように休憩室を出て行ってしまった。
「さて、俺も自分の部屋に戻ろうかな」
武蔵も休憩室から出ようとした時、武蔵の着ている服の襟を赤城が引っ張る。
「伊達中尉、その前に何かする事があると思うんだが」
休憩室に散乱している机、椅子。それを指差す赤城。
「俺一人でこれを全部片付けるの？」
「もちろんですよ」

「……了解」
武蔵が渋々片付けを開始する、すると何故か赤城も一緒になって片付けを手伝ってくれる。
「手伝ってくれるんだ」
「ああ、やはり二人で片付けた方が早く終わるからな」
「そうか、ありがとね」
武蔵が小さくお礼を言うが。
赤城は黙ったまま散らかっている休憩室を片付けていた。

――その頃、散々悲惨な運命をたどってきた青年はＢＮの医務室に運び込まれていた。
「信じられない、本当に生きているのか、これが……」
「私だって信じられません、しかし彼は生きている、生きようと頑張っています！」
薄暗い部屋の天井に明かりが着いている、様々な機械が一つのベットを囲んでいる。
心電図に点滴、見るからにここは医務室なのだろう。
一つの白いベットの上で横になっている男、全身包帯を巻かれ、包帯にはいたる所から血が滲み出している。
男の顔にも包帯が巻かれており、もはや誰なのかすら判別がつかない。
「絶対に死なせません、救える命は絶対に救ってみせます！」
「頑張ってくれ、俺は少女の所に行って事情を聞いてくるよ」
薄暗い医務室から出て行く青年、その医務室にはまだ女性が残っていた。
汚れた包帯を新しい包帯に取替えていく、男は動く事すら、周りを見渡す事も出来ない。

――アリスと森に探索に行って見れば。まさかこんな事になるとは。

青年は薄暗い通路を歩き、ある一室にたどり着く。
頑丈なドア、その横にはカードを読み込むスキャナも着いている。
自分の持っている専用のＩＤカードをスライドさせ、ドアを開ける。
その部屋は小さい割にベットが置いてあり、トイレもバスタブも着いている。
この事を紳に報告するべきなのか、まずはあの子の話しを聞こう。
ベットの上で体操座りをして小さくなっている少女、きっと怖がっているんだろうと思う。
「安心して、俺は君に何も危害を加えない。君の名前を教えてくれるかな、俺の名前は愁、魅剣（みつるぎ）　愁（しゅう）って言うんだけど」
少女は俺の目を見つめながら、ピクリとも動かない。
その目は悲しさと辛さがまじった瞳に俺には見えた。
「ミシェル……」
少女からもれた言葉、この子の名前はミシェルと言うらしい。
「ミシェル、良い名前だね」
そう言って頭を撫でようとしたが、俺の手から逃げるようにその手を避けてしまう。
「あ、ごめん。怖かったよね」
少女は黙ったまま、小さくなっている。
取りあえずこの子にさっきまでの出来事を教えてもらうしかない。
「ねぇ、ミシェルはどうしてあの森にいたんだい？」
「わかんない……」
やはりこの子は何も話してくれなかった。
俺が我雲に乗せて連れて行く時、何度聞いても答えてくれない、でも名前は教えてくれた。
この子は一体、どうしてあの森に。そしてあの男は……。
「うっ、かい…と……ううぅ」
ベットの上にいた少女が急に泣き顔になり、いつ泣き出しても不思議ではない。
だが少女は誰かの名前を言った、『かいと』と。

「君と一緒にいた男の人の名前、かいとって言うの？」
「うんっ……」
取りあえず名前がわかったんだ、調べてみる事にしてみよう。
彼女はＢＮ、それともＮＦ？スパイとは考えにくい。
「かいと、だいじょうぶ？」
その涙に濡れた瞳は本物だ、やはりスパイなんかじゃないと思う。
「大丈夫、今手当てをしているから、ね。心配いらないよ」
俺はその少女の不安を取り除く事で精一杯だった。

第9話　仲間、部隊（後書き）

赤城

黒い軍服に赤い長髪が印象的な女性。

東部軍事基地第五独立機動部隊の隊長である。

大人びた性格でいつも冷静な彼女だが、女性らしい一面もよく見せる。

コーヒーが好きであり、自分の部屋にコーヒーメーカーを置いているがよく由梨音に破壊（？）されている。

第10話　心、不能

――僕は、まだ生きているのか。
熱い、痒い、痛い、苦しい、助けて、助けてよ。
何でこんな目にあわなくちゃいけないんだよ、どうしてだよ……。
僕は沢山人を殺したよ……だから死ななくちゃいけないの？
罪を償う為には苦しみながら死なないといけないの？
人を殺したら罪人？僕は罪人？僕は殺人鬼？僕は何をしたいの？
僕はただ姉さんと平和に、二人で、楽しく過ごしたかっただけだよ。
それなのに、その生活を壊したのは誰だ。軍だ、人間だ。姉さんは殺されたんだ。
だから僕が姉さんの仇をとったんだ、姉さんを苦しめた奴を皆殺したんだ。
僕はしてはいけない事をしたのかもしれない。でも憎かったんだ、殺したかったんだよ。
「うるせえ、黙、れ」

――「えっ、今何か喋った……？」
女性は声のした方を振り向く、ベットの上で横になっている男はピクリとも動いていない。
薄暗い医務室には心電図の短調な音しか聞こえない。
「たしかに喋ったような……気のせいかな？」
その瞬間包帯に巻かれていた男が起き上がった。
何の物音も建てず、ただ起き上がったのだ。その行動を見て少し驚く。
男は包帯が巻かれた指で右目を隠している包帯を千切ると大きな目玉だけがゴロゴロと動かして部屋を見回す。
目の動きが止まった。部屋の片隅で、驚いている女性を見つめている。

その目は不気味にも思えた、だが……。
「あ、あの。気が付きましたか……？」
男は何も答えない、その無を見つめているような目玉だけがアリスを見ている。
「助けて……」
声なのだろうか、機械から流れるような音、無機質な声が彼女の耳に届いた。
「助けて、たすけて、たすけてたすけて……」
それはまるで、壊れたテープレコーダーの用に、ひたすら同じ声が流れ出ている。
二人は無意識に助けを求めていた。
その場から逃げ出したいという感情が溢れてきた。
男はベットの横の机の上に置いてあるメスを一つ取る。
銀色の光沢を光らせたメスを握り締め、ベットから降りる。
「ま、待って。落ち着いて、私は貴方の治療を！」
人間とは、こんな簡単に壊れるものなのだろうか。
いや、すでに壊れていたのかもしれない。この男の場合は。
苦しまない為には壊して殺すしかない、そうしないと自分がもうもたない。
一人になれば怖くない、一人なら、誰もいないから傷つきはしない。
「止めて！来ないで！」
だが男が止まる事は無い、男はゆっくりとメスを振り上げていく。
だがそれと同時に部屋のドアが開き、愁がこの部屋に入ってきた。

――「アリスさん！」
包帯だらけのミイラ男がメスを振り上げアリスに襲い掛かろうとしていた。
俺はすぐさまその男の腹に蹴りを入れる、だが男は怯まない。
男は全く動じずに目だけを動かして俺を見つめてくる
「愁！危ない！」

男は何事も無かったかのようにメスを俺に振り下ろす。
俺はそのメスを避けようとしたが、刃先が肩を掠り俺の肩から血がにじみ出る。
その男は人間の目をしてはいなかった、一目で正気では無い事がわかる。
何故俺達に襲い掛かる、混乱しているのか？
考えている間も男はメスを振り回して俺に近づいてくる。
「待て！俺達は敵じゃない！落ち着くんだ！」
言って聞いてくれれば最初から苦労はしない。
男は聞いてはくれない。なおもメスを振り回してくる。
みぞを蹴っても気絶しない男をどうやって止めれば……。
「えいっ！」
何かが刺さる音が聞こえた。
さっきまでメスを振り回していた男の動きがピタリと止まり、気を失うようにしてベットの上に倒れこむ。
ふと愁がアリスの方を見てみると、今まで見た事の無い程でかい注射器を両手で持っている。
「アリスさん、それって……」
「はぁ～、怖かった。聞いてくれなかったのでこの特製の麻酔で眠らせました」
アリスは自慢気に注射器を見せてくるけど、怖いよその姿。
「明らかにその巨大注射器で刺すと致死量になるような……」
「大丈夫です、私は医者ですよ？」
ベットの上で横たわっているミイラ男。
詳しい事情も聞くことが出来なかった、起きた時にまた暴れださなければいいけど。
この男とあのミシェルって言う少女は一体何者だろうか。
「この事は紳さんに話しておくべきかな？」
「あの方に話す程の事でも無いと思いますけど……」
「うーん、紳さんには話さなくていいかな。羅威に話してみるね」

愁は医務室を後にし、羅威の元へ向かう。
そして今もあの少女は、部屋のベットの上で毛布に包まりながら震えていた。

――薄暗い格納庫に何台もの我雲が並べられてある。
その並んでいる我雲とは別に、赤紫色をした機体が見えた。
「ぼ、僕の開発した機体が……」
一人の青年がその機体を見て大きくため息をつく。
すると、機体の胸部についているコクピットのハッチが開き中から紫色の髪を伸ばした女性がワイヤーを使いゆっくりと降りてくる。
「無花果のシステムを確認してみたけど異常無しだったわよ」
その言葉に更に大きくため息を吐いてしまう青年。
「異常無しって、ステルスフレーム破壊されてるじゃん」
「それを直すのがラース、貴方の仕事でしょ？さっさと直しちゃってね」
「あんたは鬼か？ステルスフレームをさっさと直せだって？
エリル、言っておくけど無花果の装甲は我雲より薄いんだよ。機動・回避重視に設計されてるんだから。
だから無花果には様々なオプション機能がついている。それを有効活用して……」
一人腕を組みながら下を俯いてブツブツと語りだしたラース、あの語りモードになると誰の話も聞きはしない。
ラースの話なんて真面目に聞いていると耳にタコが出来てしまう。
エリルはラースに気づかれないようにそそくさとその場から離れていった。

――自分の部屋に戻ろうとエリルが通路を歩いていると、見慣れた後姿が見える。
気づかれないように後ろからゆっくりと近づいていくと、思いっき

り青年の背中を突き飛ばした。
「やっほ！」
「うわっ？！」
後ろから突然押し出され、前に倒れこんでしまう青年。
「愁、大丈夫？」
青年はゆっくりと立ち上がり、服についた汚れを払い落としていく。
「エリルさん、突然何ですか。痛てて……」
「いやー、何ボーッとしてるのかなーってね。ほら、森に行ってきたんでしょ？何かあったの？」
「うっ、それは……」
「何その分かりやすいリアクション。何かあったの？何々？教えて教えて」
「な、何でもないですよー」
「何で棒読みなのよ、それに喋り方ぎこちないし」
愁が嘘をついているか、ついていないかなんて。顔や喋り方を見ればすぐにわかってしまう。
エリルは愁に顔を近づけて更に歩み寄る。
「ほら、教えなさいよー、何があったの！」
「別に何もないって、本当に！」
「お前等何やってんだ」
声のした方向に二人が向いてみると、そこには羅威が立っていた。
「羅威！愁が何かを隠してるのよ、だから今それを吐かせようとしてるの」
「俺ーは何ーも隠してなーい」
「その変なカタコト喋りで嘘だって事がすぐにわかるのよ！」
愁の胸倉を掴み、押したり引いたり繰り返していくエリル。
すると、愁とエリルの間に羅威が割り込んでいく。
「エリル、少し落ち着け。別に愁が隠し事してもいいだろ。お前だって人には言えない事が山ほどあるはずだ」
「山ほどって何よ、たしかに言えない事もあるけど……」

「そういう事だ、行くぞ愁」
羅威はフラフラな状態の愁の襟を掴み、廊下に引きずりながら連れて行ってしまう。
「助かったよ羅威、エリルってああなると早々止めれないからね」
「引きずられながら喋るな、立って歩け。それで、話があるって言ってただろ」
「ああ、うん。実は俺とアリスさんが森に探索に行ってよね。その時に森に人がいてさ」
「人がいただと？あの森にか？」
「青年と少女の二人、事情を聞こうにも青年は重傷で意識不明、少女は何も喋ってくれなくてね」

――羅威と愁が医務室に向かってみる。
羅威から見れば腐りかけの死体が横たわっているようにしか見えなかった。
全身包帯に包まれ、心電図には弱々しい心臓の鼓動が表示されている。
「生きてるのか、これ」
「ちゃんと生きているよ、でもちょっとした事がきっかけで意識がまだ戻らなくて……」
「ちょっとした事？」
「いや、その……何でもないよ」
明らかに何かをしでかしたに違いない、愁の顔に大きく『嘘』という字が見える。
それにしてもよく生きているものだ。これだけ外傷が酷いというのに。
「それで、少女の方は何処にいるんだ」
「別室で休ませてる、今アリスさんが詳しい事を聞こうと色々話してると思うけど」
早速俺達は医務室を後にして少女がいる別室に移動する。

羅威と愁が別室の中に入るとアリスと少女と……セーシュの姿があった。
「えっ、セーシュさんがどうしてここに!?」
驚いた様子で愁がセーシュを見ていると、アリスが申し訳なさそうに両手を合わせる。
「ごめん愁!バレちゃった」
「別にバレたらいけない事なのか?」
羅威がそう問いかけると愁は苦笑いしながら答えてきた。
「いや、この事がセーシュさんに知られるって事は絶対に紳さんにこの事が知られてしまうと思って……」
すると、さっきまで黙っていたセーシュが突然口を開く。
何やら不満気で怒ったような顔をしている。
「何だ?私に、いや。若様に知られてはそんなにマズイ事なのか?」
セーシュはじっと愁の目を見つめながら喋っているが、愁は目を合わそうとはしない。
「いや、別にマズくはないけどさ、知られると色々とめんどくさい事が起こりそうで……」
「何だそれは、若様を侮辱しているのかッ!」
いきなり懐から拳銃を取り出そうとするセーシュ。
「待て待て、何でそーなるの!俺がいつ紳さん侮辱したの?!」
というか既に拳銃を取り出して狙いを定めている。
「誰であろうと若様を侮辱する者は許さんッ!」
「落ち着け!まずは落ち着けーっ!」
「お前等二人とも落ち着け」
羅威が愁とセーシュの頭を叩いたおかげで何とかセーシュも俺も落ち着きを取り戻した。
「セーシュ、子供の前で銃なんて出すなよ」
自分が今拳銃を握っている事にようやく気づくセーシュ。
後ろを振り返ると涙目でこちらを見ている少女がいた。
体はかすかに震え、不安な表情を浮かばせている。

「ふむ、これは失礼した」
セーシュは急いで手に持っている拳銃を懐に戻す。
怖がっている少女を優しい笑みを浮かべて抱きしめるアリス。
優しく頭を撫でてあげている。
「それで、この少女の事も、あの男の事も紳さんに話すのか？」
羅威がセーシュに問いかけると、即答が返ってきた。
「当たり前だ、どんな些細な事も伝えろと若様に言われているのでな」
「だとさ、愁。諦めるんだな」
「え、何。何で俺が、俺何か悪い事した？」
羅威が頭をかきながら小さくため息をついて、話を続けてきた。
「お前さ、普通何かあったら上の人に伝えるのは当たり前だろ。確実に呼び出し食らうな」
そしてセーシュが更に俺に追い討ちを掛けてくる。
「当然だ、お前は軍の命令に違反して背いている、前の戦いの時も命令違反をしたそうではないか」
「そ、それは……」
「いや、若様が手を下す事でもあるまい。その時は私がお前の命をもらう！」
「縁起でも無い事言わないで下さい、貴方の場合冗談なのか本気なのかわからないんですよ！」
「おいセーシュ」
羅威が怒鳴ったような声でセーシュの名前を呼ぶ。
さすが羅威、いくら冗談でもそんな事を言っているセーシュを叱ってくれるんだ。
「俺は愁の友だ、せめて俺に殺らせてくれないか」
「何、何でそこで羅威も加わるの。もうこの話止めよう？」
「そうだな、それなら愁の始末は羅威。お前に任せる」
「無視するなって！てかおかしいよ！この会話おかしいって！」
愁が羅威とセーシュの話を聞いていくたびに心に余裕が無くなって

くる。
段々二人の会話が冗談に聞こえなくなってきた。
「アリス助けてくれ、俺このままだと本当に首が飛ぶかもしれない！」
「その時は私が一生懸命治療してあげますので大丈夫ですよ」
彼女は首の飛んだ愁をどう治療するのだろうか逆に気になってしまう。
「俺、自分の部屋に戻るね……」
愁は一言そういい残すと部屋を後にした。死ぬ前に部屋の掃除しないといけないからだろう。

――愁がいなくなり、部屋には羅威達が残されていたが、腕組みをしている羅威の口元が少し笑っていた。
「本当、愁はからかいがいのある奴だ」
その言葉にセーシュも笑みを漏らし、呆れたような口調で答える。
「全くだ、あれだけ冗談を真に受ける奴もいないだろうに、見ていて飽きないな。さて、早速若様に伝えに行くか」
「え？」

――今愁達がいるこの基地は要塞方第3基地。
昔あった市街地にバリケードを張り、街の至る所にカメラと機関銃などの武器が備えられている。
この基地はＮＦの基地からそう遠くもなく、あの森からも近い。数時間車を走らせばＢＮの市街地にも戻る事が出来る便利な場所。
「これでよしっと」
見違える程に自分の部屋を掃除してしまった。
「少し、寝よ」
倒れるようにベットに倒れこむ愁。
日頃の疲れが溜まっていたのか、目蓋が重く感じて目を閉じて心地よく眠りについた。

第１０話　心、不能（後書き）

正式名ＭＦＥ－無花果　（Ｂａｃｋ　Ｎｕｍｂｅｒｓ製）
全長－１６ｍ　機体色－赤紫　動力－光学電子磁鉱石
エリル・ミスレイアの専用機体である。
ステルスフレームにより機体の色を自由自在に変化させる事が可能。
色だけでなくその場の景色に溶け込める為、初めは偵察用に開発された機体だった。
装甲を少なくする事により機体を軽量化に成功、より素早い動きが可能となっている。
特徴：右腕に搭載されているマルチプルランチャー。

第11話　約束、戦い

――――「神よ、どうか私達をお救い下さい」
教会の中で一人の少女が佇んでいると、神を象った石像の前に跪く。
白いフードに身を包み、優しく両手を合わせ祈りを込めている。
「唯(ゆい)、どうしてここにいる」
教会の中に響く青年の冷たい声。
少女がゆっくりと後ろを振り返ると、教会の入り口から紳が向かって来ていた。
「お、お兄様。私は今神様にお祈りを……」
「ここには二度と入るなと言ったはずだ」
紳は表情を変えず、鋭く冷たい目で少女を睨み続ける。
「でも、一日一回は神様にお祈りをしないと」
「祈ってどうなる」
「神に祈る事で、人々は幸福に――――」
小さな風と共に少女の被っていたフードに切り傷が付くと同時に少女の背にあった石像に亀裂が走る。
その時既に紳は腰に付いている鞘に収められていたサーベルを抜き取っていた。
そしてサーベルをまた静かに鞘へと戻した時、亀裂の入った石像は見るも無残に砕け散り崩れていく。
崩れる音を聞き唯が後ろを振り返ると、無残に砕け散った石像の破片が足元に散乱していた。
「あっ、ああ…何てことを……」
さっきまで祈りを込めていた神の石像が粉々にされ、動揺を隠せない唯。
っそいて悲しさで震える手で石像の破片を集めようと手を伸ばし、一つの大きな破片を拾おうとした時、紳の右足がその破片を踏み潰す。

「神が俺達に何をしてくれた」
「か、神は私達に……」
「憎しみと悲しみ、そして怒りと絶望を与えてくれたな」
「そんな事はありません！神はきっと私達をお救いくださ――」
唯を黙らせるかのように紳は腕を伸ばすと唯の首元を掴み、ゆっくりと持ち上げていく。
「いい加減にしろ」
必死にその手を離そうと唯は両手に力を入れるが、紳の腕はビクともしない。
「ひっ、ぐ……ぅ」
紳の目には憎しみの過去しか映っていなかった。
もはや唯の姿など眼中に無い。首を握り締める手に段々と力が加わっていく。
「お兄、さ…ま……」
唯の頬に涙が流れ、紳の右腕に零れ落ちる。
「若様！その手を離してください！」
聞きなれた女性の声が聞こえる、だがそれが誰の声なのか既に紳にはわからない。
その時、女性の後ろから、一人の男性が現れると、勢いよく紳を殴り飛ばす。
唯の首を掴んでいた手が急に離れ、それと同時に紳が壁に向かって吹き飛ばされた。
「ダン様！？若様に何を！」
「こうするしか無かっただろ」
「けほっ、けほっ……」
「姫様！お怪我はありませんか！」
急いで唯に駆け寄るセーシュ、すぐさま唯を抱きかかえる。
「セーシュ、お前は唯を医務室に連れて行け。紳は俺にまかせろ」
「すまない、ここは任せた。が、一つ言っておく、若様に危害を加えたら許さんぞ」

セーシュは唯を抱きかかえ、すぐさま教会を後にした。
「わかっているさ」
その場に教会の壁にもたれ掛かるようにして倒れている紳と、一人の男性が残された。
男性は胸ポケットの中に入っている煙草の箱を取り出し、その中から一本の煙草を取り出す。
黒色のライターで煙草に火を点け、一服する。
「紳、お前さんも吸うかい？少しは気が楽になるぜぇ」
紳は何も答えないまま、俯いて壁にもたれ掛かっていた。

――「アリス！」
体がぐったりとしている唯を抱きかかえ、アリスのいる医務室へと駆け込むセーシュ。
お菓子を食べていたアリスが突然の事に驚き、手に持っていたお菓子が床に落ちる。
アリスはセーシュの様子を見て、ただならぬ事だとすぐにわかった。
「セーシュさん！早く姫様を横に寝かせて！」
セーシュは苦しそうな唯を白いベットにそっと寝かせる。
その間にネルは酸素マスクをすぐに唯の口に付けて固定した。
「姫様、姫様ぁ……」
ぐったりと横たわっている唯の左手を握り締めるセーシュ。
その目には涙を浮かべていた。
「セーシュさん、一体何があったんですか？」
「私にもわからない、姫様を探していると若様が姫様を……」
その時、ＢＮの基地に鳴り響く一つの警報。
警報と共に女性の声がスピーカーから聞こえてくる。
『全員戦闘配備！ＥＲＲＯＲがこの基地に攻めて来ました！』
「なっ、こんな時に。アリス、後は任せた」
「は、はい！」

――その警報を聞いて颯爽と無花果に乗り込むエリル。
すると、コクピットについてあるモニターにラースの姿が映る。
「ラース！ちゃんと直ったんでしょうね？」
『んな短時間で直ってる訳無いだろ、ステルス機能無しで何とかしてくれ』
「直しとけって言ったじゃないの！」
『そんな短時間で直せたら苦労しないよ、もう壊して戻ってこないでくれ』
『お前達、お喋りはそこまでにしとけ』
エリルのモニターにラースと他にコクピット席に座っている羅威と愁の映像が映る。
『羅威、気張りすぎるのも体に良くは無いよ』
『これから戦闘に入るんだぞ？油断をするな、穿真のようになるぞ』
穿真の名前を聞くと、愁が悲しげな反応を少し見せた。
愁はだまって通信を切り、全機戦闘態勢に入る。
『エリル・ミスレイア。無花果出るよ！』
『守玖珠羅威。我雲で出る』
『魅剣愁（みつるぎしゅう）。同じく我雲出ます！』
三人のモニターに、一人の少女の姿が映し出された。
『皆！頑張ってください！！』
モニターに映し出された少女、羅威は無視してそのまま我雲を発進させる。
愁は発進した後、配置につくとその女性に話しかけた。
「彩野さん、オペレートしっかり頼みます」
『任せてください！早速今から現在の状況のデータを各機に転送します！』
「大声でうるさいぞ彩野、もう少し静かに喋れ」
『先輩！私の仕事は皆にきっちり・はっきり物事を伝える事で――』
うるさいので羅威はすぐさま彩野の通信を切る。

送られたデータがモニターに表示されていく。
その送られてくる数値に各機体に乗るＢＮの兵士達が困惑する。
「羅威、これは一体……」
『ＥＲＲＯＲがいつもより多いな。だが気にするな、いつも通り俺達は任務を果すだけだ』
何時もどおり、羅威は慌てずにマイペースで物事を考えている。
俺は羅威や皆と幾度となく厳しい戦場を潜り抜けてきた、やるしかない。
「彩野（あやの）さん、既に対地ミサイルを撃ちましたか？」
『はい、ＥＲＲＯＲの数はミサイル攻撃で若干減りましたけど。速度を落とさずにまっすぐこの基地に向かってきています！』
既にＥＲＲＯＲは市街地を要塞化している基地に向かってきていた。
数十機の我雲が市街地に隠れて待機している。
ＥＲＲＯＲを基地内におびき寄せ、一斉に始末する作戦だ。
俺も羅威と同じビルの屋上で待機している。
屋上から遠くを見ると、ＥＲＲＯＲの大群がこちらに近寄ってくるのがよくわかる。
段々と近づいてくるＥＲＲＯＲ、次第に緊張が高まり、レバーを握っている手に汗が滲む。
『ＥＲＲＯＲ！来ます！』

――彩野さんの声と共に市街地の周りに張られてあったバリケードが破壊され。
次々に市街地にＥＲＲＯＲが侵入し始める。
「羅威、行くよっ！」
「遅れるなよ、愁」
俺と羅威は我雲の出力を上げ、一気にビルから急降下する。
ビルの下には既に何十匹ものＰｅｒｓｏｎ態が俺達に向かってきた。
羅威と俺は同時に背中に付いてあるグレネードランチャーを取り、一気に撃ちつくす。

次々に吹き飛ばされていくＰｅｒｓｏｎ態、血肉が辺りに飛び散ってゆく。
着地と同時に右手に持っている撃ち尽くしたグレネードを投げ捨て、マシンガンに切り替える。
残骸の上を這いずり回りながら近づいてくるＰｅｒｓｏｎ態、何時見ても気味が悪い。
奴等はニタニタと、まるで笑っているかのような顔をして近づいてくるからだ。
「こっの化け物がぁあっ！」
俺は声を張り上げて次々に現れれるＰｅｒｓｏｎ態を撃ち殺していく。
「おい愁、ビルから離れろ！」
羅威の通信が入ったと同時に、機体が突然大きく揺れた。
動かそうとしても我雲が思い通りに動かない。
その時、メインカメラにＰｅｒｓｏｎ態の顔が映る、まるで俺を笑っているかのような顔ですぐそこにいる。
「うわぁっ！？」
動かない、レバーをいくら動かそうと我雲が動いてくれない。
既に俺の機体には何体ものＰｅｒｓｏｎ態が取り付いているのかっ？！
「羅威！こいつ等をどうにかしてくれ！！」
『奴等はビルの屋上から降ってきている、待ってくれ。それにしても何時の間に……っち』
次々にビルの屋上から落ちてくるＰｅｒｓｏｎ態、それをただひたすら撃ち抜いていく羅威。
だが奴等は上からも、右からも左からもどんどん押し寄せてくる。
「っち、数が多いな」
Ｐｅｒｓｏｎ態が我雲の右腕を切り離す。
このままでは我雲がバラバラにされるのも時間の問題だった。
「おい羅威！どうにかならないのか！？」

「俺もこっちで精一杯何だよ……だが安心しろ、間に合ったぞ」
一斉に鳴り響く発砲音、次々にＰｅｒｓｏｎ態が撃ち殺されていく。
俺の我雲に取り付いていたＰｅｒｓｏｎ態も次々に撃ち抜かれていった。
我雲のモニターに何人ものＢＮの兵士達、我雲のパイロット達の映像が映し出される。
『助けにきたぞ、大丈夫か！？』
「た、助かった……」
「こちら羅威、援軍感謝します」
『よし、全員で中央に向かったＥＲＲＯＲを掃討しに行くぞ』
援軍に来てくれた方達と共に、中心部に向かおうとした時。
一人のパイロットのコクピットの扉が突然開く。
『えっ、うわっあああああああ！！』
パイロットが何かに怯えた表情で、必死に手足を動かして逃げようとしている。
だがそのパイロットの姿は何か黒い物が入ってきたと同時に姿を消した。
スピーカーから断末魔と骨が噛み砕かれる音がかすかに聞こえる。
兵士の声は最初は大きかったが、段々と弱々しく。唸っていく。
そしてさっきまでそこにいた我雲の姿が消えていた。
「愁、気をつけろ。何かがいる……」
その時だった、何か素早い獣のような生き物が次々に現れ、俺達の部隊を囲んだ。
それはあっという間の出来事だ、俺達は何一つ身動きがとれない。
『何だこの化け物は！』
『これが新種のＥＲＲＯＲ、Ｂｅａｓｔ態か』
援軍が来て、我雲の数が合計で七機。
でも一機は既にやられ現在六機、たった六機の我雲で十匹以上のＢｅａｓｔ態と戦う事になるなんて……。
それにしても何て大きさだ、人間を一口で食べてしまいそうな大き

な口に、鋭い爪と牙を持っている。
体の至る所から蛆虫が沸いているようにも見えるけど、あれは触手なのか？
その時、彩野さんからの通信が入り、モニターに彩野さんの姿が映る。
『た、大変です！Ｗｏｒｍ態が！Ｗｏｒｍ態が中央に向かっています！！』
「なっ、俺達以外で中央に向かえる兵士達はいないのですか！？」
『どの部隊も現在Ｂｅａｓｔ態・Ｐｅｒｓｏｎ態と交戦中です、少しでも引けば一気に攻め入られます！』
『信じられません、まさかこれ程の数で攻めてくるなんて……このままではこの基地が落とされるのも時間の問題です！』
今にも泣き出しそうな顔をしている彩野さん、だが一人の男の声が彩野さんの不安を吹き飛ばす。
「弱気になるな、彩野」
『先輩……』
「この基地は落とさせはしない、俺の命に変えてもな」
「出たな、羅威の決め台詞！」
『えっ、愁さん？』
少しきょとんとした、いつも彩野さんの顔に戻る。
それを見て軽く笑う羅威。
「愁、その勢いで行くぞ！」
「ああっ！」
この状況はピンチだ、もしかすれば死ぬかもしれない。
だが俺達は……こんな所で死ぬ訳には行かない。
死ぬ覚悟も出来ている、だが、俺は生きる覚悟も出来ているんだ。
――皆が戦場で戦う中、アリスはあのミイラ男がふと気になり唯がいる医務室とは別の医務室へと向かっていた。
医務室の鍵を開けようと鍵を持ってきていたが、その必要は無かっ

た。
ドアはぶち破られ、砕け散っている。
部屋を覗き込むとベットの上で横になっていたはずの男の姿が消えている。
全身に包帯を巻き、動ける程まだ回復していないはず……。
「そんな、いなくなってる……」
ふと見ると、包帯男が寝ていたベットの上になにやら手紙のような物が置かれていた。
その手紙を手に取る、数行の文で、お礼の言葉が並べられていたのだ。
「あの人、案外良い人なのかな」

――「いい加減にしろよ！」
数発のマシンガンの弾丸がＢｅａｓｔ態の体を撃ち抜いていく。
だがＢｅａｓｔ態は怯むことなく次々に俺達に集団で襲いかかってる。
既に何人もの仲間が殺られ、餌食となっていった。
手足を引きちぎられた我雲は何も出来ず、パイロットが脱出しようとハッチを開けた所でＢｅａｓｔ態が一気に噛み殺す。
それだけではない、まだ生き残っているＰｅｒｓｏｎ態も動き。
兵士達が次々に体を食い千切られ、バラバラになっていく。
俺は嫌だ、絶対に食い殺されてたまるかっ！
「羅威！このラインを維持するにはもう限界がっ！」
『ここを奴等に素通りさせる訳にはいかない、守れ』
「簡単に行ってくれるなぁ、ったく！」
だけど、既に限界が来ていた。
『っうあ！Ｐｅｒｓｏｎ態が取り付きやがったっ、魅剣！助けてくれ……！』
俺のモニターにもがいている一機の我雲を映し出される。
我雲を埋め尽くす程、Ｐｅｒｓｏｎ態が既に群がっていた。

『こいつ等俺を見て笑ってる、笑っていやがるっ』
パイロットのモニターには不気味に笑うＰｅｒｓｏｎ態の顔しか映っていない。
「待ってろ、今すぐ助けてやるからなっ！」
我雲に無数に張り付いているＰｅｒｓｏｎ態にマシンガンの銃口を向ける愁。
だが、それに気づいたＢｅａｓｔ態が一気に近づいて我雲の左足に噛み付く。
「邪魔だ！」
肩に装備されているＬＲＳを左手に持ち、Ｂｅａｓｔ態の頭部にＬＲＳを突き刺す。
「化け物に構ってる暇は無い、早く助けないと！」
だが、次々に現れるＰｅｒｓｏｎ態、そしてＢｅａｓｔ態。
マシンガンの弾も尽き、もはやＬＲＳで戦うしか無い。
「愁、もうよせ、無理だ」
『うわあああああああああっ！！』
羅威の通信と共に、俺に助けを求めていた兵士の悲鳴が聞こえてきた。
ボロボロに溶かされた我雲、その中から一人の兵士が現れる。
ＥＲＲＯＲから逃げようと機体を捨てて無我夢中で走りだす。
「まだ生きてる！助けられる！！」
『行くな』
俺が我雲のブーストを一気に展開しようとした、だが羅威から通信が入り俺を止めようとする。
「なっ、まだ生きてる！助けられるかもしれないんだぞ！？」
『あれは餌だ』
「餌……？」
『魅剣！俺はここだ！早く助けてくれえっ！！』
愁達に向かって走り出す兵士、だがＰｅｒｓｏｎ態がその兵士の周りに群がってくる。

だが何故か殺しはしない。何故か生かしている。
『あの化け物、俺達をこっちに誘ってやがる』
「ＥＲＲＯＲがそんな事を？」
「あいつ等、段々と知能が高くなっているような気がする。これは罠だ、助けに行った所で殺されるだけだぞ」
「でも、それじゃあ！今助けを求めているアイツを見捨てろって言うのか？！」
『た、助けてくれよぉッ！俺達仲間だろッ！？嫌だ……俺は死にたくない！食い殺されたくないいっ！』
無線から聞こえてくる助けを求める声、その声は震えており、恐怖に満ちていた。
「羅威、俺には……仲間を見捨てる事なんて無理だッ！！」
俺の心には迷いが無かったと言うと嘘になる。
だけど、今１％でも助けられる可能性があるとすれば、俺はその１％に掛ける。
どんなにピンチでも、どんなに危険でも、仲間を見捨てはしない。
『おまっ！？ＬＲＳ片手に何が出来るって言うんだ！今すぐ戻れ！』
「仲間を助けたらすぐに戻るさっ！」
『馬鹿がッ！死にたくなければ今すぐ戻って来いッ！』
俺は羅威の言葉に耳を貸さなかった。例え銃が無くても、このＬＲＳがあれば俺は行ける。
俺に襲い掛かってくるＥＲＲＯＲをギリギリの所で攻撃を交わし、次々に斬り捨てていく。
そして少しずつ、仲間に近づいている！
「待ってろよ、絶対に……絶対に助けてやるからなっ！」
ＥＲＲＯＲの返り血を浴び、血みどろになっていく我雲。
ようやく兵士の元に移動できた我雲は、ＬＲＳを背中に戻すと左手を兵士の前に差し出す。
「早く乗れ！」
『あ、ああ！ありがとう魅剣！』

兵士は涙目で俺にお礼を言ってくれる。
だが、まだ俺は危険区域にいる、周りにはまだ沢山のＥＲＲＯＲが潜んでいるからだ。
後は逃げるだけ、羅威と早く中央に向かわないと。
『本当に助けてきてくれて、ありがとうなっ』
「俺達仲間じゃないか、仲間を見捨てる事何て絶対にしない」
『魅剣……』

――『―ＥＲＲＯＲ―』
その時、モニターが突然赤くなり、『ＥＲＲＯＲ』の単語が一つ映し出される。
何が起こったのかわからない、故障なのか、俺の左手に乗っている兵士の姿も赤く見えてしまう。
「モニターの故障？」
『どうした、何かあったのか？』
「いや、モニターが少し故障したみたい、大丈夫だよ」
『お、おい。魅剣、何してんだ？』
「えっ？俺は何も……」
モニターを見ると、そこには兵士を握り締めていく我雲の左手が映っていた。
『魅剣？苦しいって、苦…しい……』
訳がわからない、俺は何も触ってないし、何もしていない。
レバーをいくら引いても、左手が兵士を離そうとしない。
それ所か、兵士を握り締めていく左手が更に力を込めて握り締めいく。
『じゅ、ぐるじ、ぐるぎぃ……』
段々と兵士の顔が変形していくのがわかった。
体の骨が鈍い音を鳴らしながら折れて、砕けていく。
「何でだ！？何で離さないんだよ！」
いくらレバーを引こうが、押そうが我雲の左手を動かす事が出来な

い。
目の前では赤いモニターに全身の骨が砕かれていき、口から血を吐き散らす兵士の姿しか映っていない。
『ぐるぎいッ、じぎゅギァッ！？ダズゲデ、ジュ』
その時だった。
内臓が押し出されて口から次々に吐き出され、眼球が吹き飛ぶ。
耳や目、鼻や口……いたる所から血と臓器が溢れ出す。
「あ、あぁ……あああ！うあああああああああああああっ！！！」
に、握り潰した？今さっき、助けたばかりの仲間を、我雲が、俺が？
助け出された兵士の安心した顔が愁の脳裏に映し出される。
だが、今目の前に移っているのは変わり果てた仲間の姿。
「違うんだッ！俺は、俺は何もしてない！勝手に機体が！機体がっ！」
『―ＥＲＲＯＲ―』
『―ＥＲＲＯＲ―』
『―ＥＲＲＯＲ―』
次々にモニターに映し出される『ＥＲＲＯＲ』
機体が揺れ始める、愁がモニターに目を向けると何匹ものＰｅｒｓｏｎ態が我雲に取り付いている。
ニタニタと、まるで愁を笑っているかのように不気味に歯を見せる。
「く、来るなあッ！！笑うなあああっ！！うあああああああああああ！！」
もはや理性を失い、混乱している愁。
数々のスイッチを押し、レバーを引きまくる。
だが我雲は何の動きもしない。
「羅威！助けてくれっ！羅威ッ！！」
通信を取ろうとする愁、だが画面はＥＲＲＯＲのまま変わらず。
モニターからはノイズ音しか聞こえてこない。
「お、俺は。食い殺される、のか？」

コクピットの中に、何かが引きちぎられる音が聞こえる。
鉄が引き裂かれていく音、奴等はゆっくりと俺に向かって、邪魔な装甲を剥ぎ取り、俺を食い殺しに来る。
「死ぬのか、俺……」
死ぬ覚悟は出来ていると俺は言った。
でも……やっぱ怖い、死ぬのが怖い。
体を千切られて、俺は食い殺される、のか？
羅威の言った事をちゃんと聞いておけば良かった……。
最後の装甲は剥ぎ取られた、コクピットはむき出しの状態となり、輝かしい太陽の光が愁を照らし出した。
「皆…ごめん……」

第１１話　約束、戦い（後書き）

魅剣（みつるぎ）　愁（しゅう）

正義感が強く、争いを好まない性格。

人類をＥＲＲＯＲから守る為にＢＮに志願し、世界を守ろうとしている。

人間同士の争いは好まず、例え相手がＮＦだろうと説得をしだす時も少なくない。

第１２話　復活、侵食

――段々と明るさに目が慣れてくる。
本当はこのまま目蓋を閉じていたかった。
俺が少しずつ目蓋を開けていくと、そこに奴等はいた。
何匹ものＰｅｒｓｏｎ態が我雲に張り付き、俺を見ている。
もはや何もいえなかった。俺はただ死を、殺されるのを待つだけだ。
そしてＰｅｒｓｏｎ態は大きな口を開けて、俺を頭から一気に丸呑みしようした。
終わった……俺は思い切り目蓋を閉じた。
だけどその時、一人の男の声が俺の耳に聞こえてきた。
「目を背けるな」
「えっ……」
「見ろ、そして機会を窺え。生き残る為にな」
この言葉、紳さん？
俺が目を開けた瞬間、俺を丸呑みしようとしていたＰｅｒｓｏｎ態の頭が真っ二つに斬り落とされた。
そしてそこには紳さんではなく、全身黒い服に身を包み、頭に包帯を巻いた青年が立っていた。
「あ、貴方はっ」
「恩を返しに来た、それだけだ」
その時、俺の胸倉を強引に掴むと一気に上空へと放り投げた。
「ええっ？！」
片手で数メートルも投げ飛ばされる。
放り投げられた俺は自分が何をされたのかわからなかった。
『もらった――っ！』
エリルの声が聞こえる、この時を待っていたかのように無花果がビルを飛び越えて俺の体を掴む。
「うぉわっ？！」

『エリル、ナイスキャッチだ』
『間一髪とはまさにこの事ね』
無花果と羅威の乗る我雲が合流し、中央へと向かう。

――――『愁、あんた大丈夫？どっか怪我してない？』
「あ、ああ。大丈夫・・・ありがとう、助かったよ」
愁は少し放心状態になっている、無理も無い。
あの男、そしてエリルがいなければ殺されていただろう。
『羅威、あの我雲の上にいた男って一体誰？』
『多分医務室にいた奴だと思うが』
『医務室？もしかして愁が隠していた事ってあの男の事？』
『いや、それは……』
『ふーん、まぁいいわ。詳しい話は後で聞かせてもらうから』
『今は中央の防衛ラインを死守しに行くぞ』
『ちょっとまって、私達が中央に向かったらここの防衛ラインは誰が守るのよ』
『中央が落とされば全てが終わる、中央だけは絶対に守りきらなければならない』

――――愁の乗っていた我雲が段々と侵食され、肉のような物が次々に我雲の中に入っていく。
「気味の悪い化け物だ、この機体を取り込む気か？」
包帯の巻いている男はまだ我雲の上に立っていた。
だが、すぐさま愁の座っていた操縦席に座り始める。
もはや原型を止めない程に侵食されていく我雲。
そのまま肉は移動していき、コクピットをも取り込んでいく。
そんな状況の中、男軽く笑って見せた。
「好都合だ」

――――横一列に並ぶ戦車、押し寄せるＰｅｒｓｏｎ態を次々に吹き

飛ばしていく。
「撃て！弾など腐るほどある！撃ち続けろっ！！」
だが、Ｐｅｒｓｏｎ態にまぎれて、数匹のＷｏｒｍ態が姿を表した。
動きは遅い、だが芋虫のように少しずつ近づいて来る姿を見ると恐怖が段々と増してくる。
戦車隊の集中砲火をもろともせずに、確実に近づいてきている。
そして、口の辺りだろうか。数本の巨大な触手がズルズルと出てきた。
数本の触手からはまた何十本もの赤く細い触手が現れる。
巨大な触手が垂れ落ちる強力な酸。その触手は一斉に伸ばす。
並んでいた戦車は次々に溶かされていく。
戦車から降りて逃げようとする兵士達、だが触手から出ている赤色の細い触手は逃がさない。
逃げようとする人間の体に細い触手が何十本も突き刺さっていく。
細い触手についているわずかな酸で人間の体を溶かし。
その解けた肉や臓器、血などを吸い上げていくのだ。
この残酷な殺し方は既に皆は知っている。
だからもし赤い触手が自分を刺そうとした時、今手に持っている銃で自分の頭を撃ちぬく。
そのほうが楽なのだ、これほど楽な死に方は無い。
『俺が虫を殺る、お前は好きにしろ』
「はっ、若様の護衛をさせていただきます」
中央の基地の格納庫から3機の機体が姿を見せる。
『白儀』、そして見慣れぬ2体の機体がその白儀の両サイドに立っている。
両肩に足元まで延びているシールドが特徴的であり、白儀の右側にいる機体は大きな薙刀を持っている。
「ダン様は好きに行動してくれて構いません、私は若様をお守りします」
『俺の仕事は紳を守る事だ、俺も協力するぜ』

「でしたら、機体の中で煙草を吸うのは止したほうが……」
『こうした方が俺は落ち着くのさ、一本いるか？』
「いりません」
まだ聞いている途中だが、通信を強引に切られるダン。
通信に切れたモニターの前で一服している。
『さて、お仕事しますかねぇ』

――「も、もう無理だ！」
次々に殺されていくＢＮの兵士達。
手に持っている銃を奴等に撃とうが、奴等は怯まずに兵士達に近づいてくる。
兵士達は次々に自分の頭部に弾丸を撃ち込んでいく。
だが、中には死を迷い。ためらう兵士もいた。
兵士達はひたすら走り、奴等から逃げようとする。
道には無残に破壊された我雲が何体も倒れている。
既にコクピットはＰｅｒｓｏｎ態に食い破られ、見るも無残な状態になっている。
奴等がこちらに振り向く、その顔は笑っていた。
何体ものＰｅｒｓｏｎ態が俺達を笑っている、何がおかしい。何故笑う。
そして、俺と共に逃げていた仲間達の気が狂い始めた。
一人はマシンガンを持ってＰｅｒｓｏｎ態の集団中に一人撃ちながら走っていく。
だがその兵士を誰も止める事はない。
奇声を発しながら、ニタニタと笑ってくるＰｅｒｓｏｎ態に銃を撃ちつくす。
例え弾が無くなろうとも、何度も何度も引き金を引いている。
そして強力な酸の舌が、一瞬で兵士の頭を溶かした。
ふと周りを見てみると、血と肉が散乱している。
山積みになっているＰｅｒｓｏｎ態、Ｂｅａｓｔ態の死骸。

奴等は死んでも、俺達を笑っていた……。
その時だった、俺達の目の前を何かが通り抜ける。
それはまるで風のように、何が起こったのか理解できなかった。
「セーシュ隊長!?」
「お前達、よくここまで生き残った、後は我等に任せろ」
兵士達の前に全身白色の機体、『ハルバード守護式』の姿があった。
「化け物供め、兵士達の晴らせぬ恨み、この『守護式』で晴らしてくれようぞ」
次々に走り寄って来るＰｅｒｓｏｎ態、守護式は巨大な薙刀を振り下ろし、周りのＰｅｒｓｏｎ態を一撃で一掃する。
そして肩のレールガンで兵士達に近づいていくＢｅａｓｔ態とＰｅｒｓｏｎ態を次々に吹き飛ばしていく。
だが、一匹のＢｅａｓｔ態が守護式の後ろに回りこんでいた。
その時、一発の弾丸がＢｅａｓｔ態の頭部を吹き飛ばす、返り血を浴びる守護式、純白の機体が血で汚れる。
『セーシュさんよ、これが一服した俺の力よ』
もう一体の『守護式』、両手にリボルバーを握っている。
離れた距離から一撃でＢｅａｓｔ態を仕留めた男、さすが『守護式』に乗る程の力を持っている。
「感謝いたします、我は若様の害になるものを引き続き排除しに向かう」
『おいおい、少し興奮しすぎじゃねえか?喋り方おかしくなってるぞ』
「はっ、すみません。つい癖で……」
――Ｗｏｒｍ態が中央に向かっている途中、前方に一つの機体の姿が見える。
その機体、白銀の鎧を身に纏い、純白なマントを靡かせ立ちはだかる『白義』。
何匹ものＷｏｒｍ態が一斉に触手を伸ばし『白義』に襲いかかる。。

紳はギリギリの所で触手を交わし、二本のＬＲＳで触手を断ち斬っていく。
何本もの触手が飛び交う中、全ての触手を回避していき、そして確実にＷｏｒｍ態に接近していく。
「虫、か」
右手に持っているＬＲＳをＷｏｒｍ態の頭部に突き刺す。
そのままＷｏｒｍ態の頭上を越え、体にそってＷｏｒｍ態を切り捨てる。
一瞬で真っ二つにされるＷｏｒｍ態。そして白義はその死骸を踏み台にして上空に舞い上がる。
高らかに舞い上がる白義、そして両手に持っているＬＲＳを同時に投げ込んだ。
ＬＲＳはそのまま一直線に飛び、両サイドにいたＷｏｒｍ態の頭部に深く突き刺さる。
ＬＲＳを投げ捨てたと同時に両腰に付いてあるハンドグレネードを投げ落とす。
Ｗｏｒｍ態の周りにいたＰｅｒｓｏｎ態が次々に爆発に巻き込まれていく。
その時、ＬＲＳが頭部に刺さった一体のＷｏｒｍ態は直も生きており、中央に近づいていくのがわかる。
白義は落下すると同時にＷｏｒｍ態の目の前で着地、触手が出る前にＬＲＳで突き抜けられた頭部にグレネードを強引に突っ込む。
予めピンを外しており、頭部に入れて離れた瞬間に爆発を起こし、肉片が辺りに飛び散る。
中央に向かおうとしていたＷｏｒｍ態、Ｐｅｒｓｏｎ態が白義一機で全滅してした。
「少ない、な……」
――――『あいつ等どうするの！？まだ追って来るよ！』
中央へと向かおうとする無花果と我雲。

だが後ろからは夥しい数のＥＲＲＯＲが追って来ている。
「俺が時間を稼ぐ、お前は愁を連れて中央に向かえ」
『時間を稼ぐって、あんたもう弾が無いでしょ！』
「ＬＲＳと盾があれば十分だ、それに俺は時間を稼ぐだけ、すぐに俺も中央に向かう」
その時、コクピットについてあるモニターにセーシュの姿が映し出される。
『その必要は無い、中央の防衛ラインは若様と私達が食い止めた、お前達は残りのＥＲＲＯＲを排除してくれ』
「ちょ、セーシュ！『お前達』って、このエリアにはもう私と羅威しかいないのよ？！」
『それなら援軍が来るまでしばし持ちこたえろ、何処のエリアも今交戦中だ』
「了解、ＥＲＲＯＲを掃討する。だがエリルは愁を連れて一度中央に戻ってくれ」
そう言い終えると、羅威は通信を切り、ＬＲＳを片手に装備する。
愁は考えていた、俺が皆に迷惑をかけてしまった、本当なら俺も羅威と戦いたい。
この場に羅威一人を置いて行ってしまって、本当にそれでいいのだろうか……。
「……エリルさん、俺は一人で中央に戻る。ここで下ろしてくれ！」
『はぁ？何馬鹿な事言ってるの、もしＥＲＲＯＲに襲われたらどうするのよ！』
当然反対されると思っていた。
でも、ここを羅威だけに任せる訳にはいかない。
「大丈夫、エリルさんと羅威がここを防衛してくれればＥＲＲＯＲは俺の所には来ない。
それに羅威を一人にする方がよっぽど危険すぎる！エリルさん、お願いします！」
『愁、何を言っている。俺の事は気にせずにさっさと行け、奴等が

もう来ているぞ』
既にＥＲＲＯＲ達がざわざわと蠢きながら我雲に近づいてきていた。
足元に群がってくるＰｅｒｓｏｎ態を踏み潰し、ＬＲＳを片っ端から斬っていく。
だが数が多い、Ｐｅｒｓｏｎ態の群れが機体に取り付けば確実に食い殺される。
「エリルさん！お願いします！ここに残って羅威と戦ってください！」
『……ダメよ。一度中央に戻るわ』
「エリルさん！」
羅威の乗る我雲に背を向けて、発進する無花果。
俺は無花果に軽く握られ、抜け出す事さえ出来なかった。

――――「行ったか」
迫り来るＥＲＲＯＲ達の前で、一歩も引かない羅威。
「鬼ごっこの始まりだ」
波のように押し寄せてくるＥＲＲＯＲ、腰に付いてある手榴弾を２つ手に取り、その波の中に放り投げる。
その手榴弾に気づいたＢｅａｓｔ態はその場から離れる、だがＰｅｒｓｏｎ態はそれには気づかず押し寄せてくる。
「言っておくが、俺が鬼だ」
手榴弾が爆破、辺りにＰｅｒｓｏｎ態の肉片が散乱する。
我雲は一気にブーストを展開、手榴弾で穴の開いたＥＲＲＯＲの中に特攻していく。
今だけはＢｅａｓｔ態が回りにいない、Ｐｅｒｓｏｎ態の数を少しでも減らすなら今しかない。
飛びついてくるＰｅｒｓｏｎ態をシールドで弾き、ＬＲＳで次々に斬っていく。
しかし敵は一匹でも一種でもない。
手榴弾を交わしたＢｅａｓｔ態が一斉に羅威の乗る我雲へと走って

くる。
斬っても斬ってもＰｅｒｓｏｎ態の数が一向に減らない。
それ所か奴等が増えていかのように思えてくる。
「我雲の出力を舐めるな」
次々に飛び掛ってくるＢｅａｓｔ態を、華麗に避けていく羅威。
すれ違いざまに一匹のＢｅａｓｔ態の頭部を斬り落とす。
「よし、後は……」
『―ＥＲＲＯＲ―』
羅威の目の前のモニターに突如とＥＲＲＯＲと書かれた映像が映りだす。
一匹のＰｅｒｓｏｎ態が我雲の背後に取り付いていたのだ。
「いつのまに?!くそっ！」
機体を左右に揺さぶり、必死に背後に取り付いたＥＲＲＯＲを振り落とそうとするが、一向に落ちない。
それ所か、背後から機体の装甲を食い破っている。
「直接俺を殺す気か、それとも……」
『―ＥＲＲＯＲ―』
『―ＥＲＲＯＲ―』
『―ＥＲＲＯＲ―』
コクピットの席に付いてある非常用の赤いランプが点滅し始めた。
機体の動きが少しずつ鈍くなり、機能が停止していく。
羅威はとっさに機体を後ろに倒し、背後に取り付いているＥＲＲＯＲを機体で押しつぶすが、
その隙に回りにいたＰｅｒｓｏｎ態が次々に取り付いて来る。
必死に操縦桿を動かすがＥＲＲＯＲに身動きを奪われて手足を動かす事さえ出来ない状況だ。
「機動回路が破壊されたかっ」
もう機体を動かす事は出来なくなった。
通信からはノイズ音とＰｅｒｓｏｎ態が装甲を剥いでいる音しか聞こえない。

――今更命乞い等はしない、愁やエリルは無事に基地に戻れたと思うしな。
我雲の装甲が食い破られていく音が大きく聞こえてくる。
次々に胸部に着いている装甲を食いちぎり、そしてハッチをこじ開けた。
俺の目の前には大きな口をしたＰｅｒｓｏｎ態がずっとこっちを見ている。
奴には目は無い、だが何故か視線を感じる。
「例え俺が死んでも俺達ＢＮは、お前等化け物には負けん、絶対にな」
俺が死を覚悟した時。
さっきまでノイズ音が走っていたスピーカーから聞き覚えのある声が聞こえてきた。
『ＮＦをぶっ潰すまでは生きるんじゃなかったのかぁッ！？羅威！』
『俺達が力を合わせて築いて行くんだろがっ！この世界を！』
その時だった、俺の目の前にいたＰｅｒｓｏｎ態の体に次々に風穴が開いていく。
一体だけじゃない、俺の機体に張り付いているＰｅｒｓｏｎ態が全て銃殺されている。
『オラオラオラッ！羅威は殺らしゃしねえよ！』
凄まじい発砲音がコクピット内に響き渡る。
一機の我雲が羅威のモニターに映し出されると、そこには両手にマシンガンを装備し、
俺の機体の近くにいるＰｅｒｓｏｎ態を次々に撃ち抜いていく。
波のように押し寄せるＥＲＲＯＲに怯む事無くマシンガンをひたすら撃ちまくる。
あの声、そしてあのマシンガンをぶっ放す姿。
「穿真か！？どうしてお前が我雲に乗っている！」
『サイボーグ穿真の登場だぜ？』

「……右手の義手は完成したという事か」
『さすが羅威、話が早い。それならさっさとその我雲を起こしにかかれッ！』
「それは無理だ、回路が破壊されているからな」
『だったら「ＡＭＯＳ」に切り替えろ！あれなら関係なく動かせんだろ！』
「なっ、あんな手間の掛かる作業をするのか、今ここで」
『時間は俺が稼ぐ！死にたくなけりゃあさっさと取り掛かれやぁッ！』
相変わらず一言一言がうるさい奴だ。
両手に持っていたマシンガンを全て撃ち尽くした穿真。
手に持っていたマシンガンを左右に投げ捨て、今度は両腰に着いているサブマシンガンを手に取る。
『武器なら腐る程あんだよ！』
穿真が時間を稼いでいる、やるなら今しかない。
『おいまだかっ！？』
羅威のコクピットについてあるモニターに穿真の姿が映し出される。
それと同時に羅威の乗っている我雲がその場に立ち上がる。
装甲が剥ぎ取られ、左腕からは火花が出ている。
「穿真、立つ事と右腕を動かす事しか出来ないが、これで十分だろ」
『って事は、ここでＥＲＲＯＲを食い止める気か。やってやろうじゃねぇか！』
左手に持っているサブマシンガンを羅威の乗る我雲に投げ渡す穿真。
羅威はそのサブマシンガンを受け取るとＥＲＲＯＲの群れに容赦無く銃をぶっ放す。
だが撃った弾丸はＥＲＲＯＲではなく横のビルを撃ち抜いていく。
『何処狙ってんだ馬鹿！弾がもったいねえぞ！』
「っち、反動のブレと誤差修正、銃の重量データを入れなければ……」
『ならさっさと入れろっての！』

そして、ついに穿真の持っていたサブマシンガンの弾がついに切れる。
ほとんどのＰｅｒｓｏｎ態は駆除できたが、まだその後ろにＢｅａｓｔ態の姿が見える。
「弾切れか？」
穿真の乗る我雲は両手に持っていたサブマシンガンも投げ捨てる。
そして背中から2丁のグレネードランチャーを取り出してくると、それをしっかりと構えた。
『俺の攻撃はまだ終わらねえぜ！』
余裕の笑みを見せる穿真、引き金を引くと勢い良くグレネード弾が放たれていく。
素早い動きで避けようとするＢｅａｓｔ態、だが穿真はグレネード弾をピンポイントでＢｅａｓｔ態に当てていく。
その爆発に巻き込まれて吹き飛ばされていくＰｅｒｓｏｎ態。
『お～、俺も射撃の腕が上がったんじゃねえか？』
「ったく」
穿真が振り返ると機体の後ろに血塗れのＢｅａｓｔ態が横たわっている。
『へ？』
そしてデータを入力し終えた我雲がサブマシンガンの銃口をそのＢｅａｓｔ態に向けていた。
「馬鹿野浪、敵が前から来るとは限らんだろ、後ろにも気を配れ」
『あ、ああ。そうだな』
俺も前方ばかり気にしていたから回路を破壊されたんだ。
奴等は群れを成して殺しにかかる、それを憶えておかないとな……。
「穿真のおかげで大分数が減ったな」
『後は残りのＥＲＲＯＲを片付けに行くかぁ！』
「俺は行けんがな」
羅威の乗っている我雲の両足が折れ、胴体がその場に崩れ落ちる。
『っと、まずは羅威を中央まで送るか』

「すまない……」
ハッチの無いコクピット席から羅威が降りてくる。
穿真は我雲の手の平を差し伸べ、その上に羅威が移動する。
その場に座り込んでしまう羅威、全身の力が抜けたような疲労感が一気に押し寄せてきた。
だが、戦いはまだ終わっていない。

第１２話　復活、侵食（後書き）

風霧（かざきり）　紳（しん）

ＢＮ組織の幹部であり、主格。

冷静沈着であり、洞察力も鋭く他人に感情を見せない男。

機体の扱いや実戦経験が豊富であり、機体の扱いは手馴れている。

第１３話　崩壊、誓い

――ＢＮ基地の前にある格納庫に生き残りの部隊の人達が集まっていた、その中にはエリルと愁もいた。
エリルはどこか落ち着かない様子で周りを見渡し、愁は力無く壁にもたれ掛かっている。
すると格納庫に見覚えのある二人の青年、羅威と穿真が戻ってきた。
「羅威！穿真！良かった、無事だったのね」
エリルは真っ先に二人の元に駆ける、穿真は余裕の表情を見せていたが隣に立つ羅威は少し疲れた様子だった。
「大丈夫？」
「ああ、お前等が行った後に穿真が助けに来てくれてな」
「ごめん、本当は愁をここに届けた後に羅威を助けに行きたかったけど……」
「何かあったのか？」
「私達はしてやられたのよ、ＥＲＲＯＲに」
「どういう事だ……？」
羅威達の疑問に答えるようにエリルが今あった出来事を語りだした。
エリル達が基地に戻った時、既に紳やセーシュ達も戦場へと出ており、確実に基地に近づいてくるＥＲＲＯＲを掃討していたはずだった。
防衛ラインを段々と上げていきＥＲＲＯＲを排除していき明らかにＢＮが優勢になりつつあった。
だが、この状況はＥＲＲＯＲの作戦により一変した。
ＥＲＲＯＲは中央基地の地面を突き破ると、大群のＥＲＲＯＲが一気に中央基地内部へとなだれ込んだのだ。
次々に溢れ出すＥＲＲＯＲに基地内は一瞬にして地獄へと変わる。
Ｐｅｒｓｏｎ態は基地にいる負傷して運び込まれている人達や、兵士以外の人間達も容赦無く噛み砕き食い殺していき……。

「反則だよ、地中から来るなんて……私達、何も出来なかった……」
気づいた時には既に多くのＰｅｒｓｏｎ態が皆を喰い殺していた。
負傷して体を動かす事の出来ない人達も、それを治療していた人達も。
そしてＰｅｒｓｏｎ態は次々に基地内に侵入し、多くのＢＮ兵士が命を落とした。
「今、溢れ出てきたＥＲＲＯＲを殲滅し終えてここで待機していた所なの」
その事実を知らされ、驚きを隠せない二人。
「お、俺達がいない間にんな事が起こってたのかよ……くそっ！」
半ば混乱気味の穿真、周りを見ればたしかに兵士の数が少ない。
羅威はその話を聞いて愕然としていた、当たり前だ、あれだけ皆が力を合わせ、命を捨ててまで守ろうとした基地をこうもあっさりに壊滅させられたのだから。
「紳さんやセーシュ達も皆が頑張ったのよ！私だって！皆！でも……」
「エリル、もういい」
エリルの瞳からは涙が零れ落ちていた。
急に膝の力が抜けたかのようにその場に座り込んでしまう。
俺はそんな彼女を抱きしめて上げる事は出来なかった。
格納庫にいる兵士達は皆愕然としている。
無理も無い、俺達は守る事も救う事も何も出来ずに負けたのだから。
格納庫にはわずかな負傷者が運び込まれている。
ＥＲＲＯＲは人間を殺しているのだろうか、それとも人間を食料と思いただ食べているだけなのだろうか。
――――「姫様、体調の方はいいかがですか」
基地にいた唯（ゆい）は既にＥＲＲＯＲに占領された基地からは脱出して格納庫の横にある小屋へと移されていた。
その小屋の周りには銃を持った数名の兵士が立っており、小屋の中

には唯が椅子に座っていた。
不安で暗い表情の唯に、側にいるセーシュはそっと飲み物を渡す。
「はい、私は大丈夫です」
「気分は、具合は？どこか悪い所は……？」
「あの！すこし一人にさせてください」
「わかりました、何かあれば部屋の前にいる兵士に伝えてください」
セーシュは唯の元からゆっくり離れ、そっと部屋を出ていく。
「ダン様、どうしたのですか？」
部屋の前に壁にもたれ掛かりながら一服しているダンの姿があった。
「……俺の勘は案外当る」
「はい？」
最後に大きく白い煙を吹き、自分の吸っている煙草を携帯灰皿に入れる。
「この場はもう駄目だ」
それは起こった、地震かと思う程の強い揺れが兵士達を襲う。
そして地面に開いている穴から大量のＥＲＲＯＲが湧き出してきたのだ。
基地内に響き渡る警報音、戸惑う兵士達。
今、こんな状況、こんな状態で起こる出来事。
「セーシュ、姫様を早く車に乗せろ、この基地から出るぞ」
「ここを放棄するつもりですか？！」
「ああ、今の戦力じゃもう無理だからな」
「まだわかりません！若様と私達がいれば……」
「てめえ等だけで何ができる、諦めろ」
「しかし！この基地は」
「さっさと行動しろ、時間は無いと思え」
そのダンの迫力にセーシュが言葉を失う。
「……わかりました」
まだ基地内には負傷者だっている、助けを求めている人達だっているというのに……。

――その警報は既に格納庫にいた兵士達にも聞こえていた。
羅威、エリル、そして穿真達は自分の機体に乗り込み、負傷した兵士達の避難の手助けをする。
負傷した人達や兵士達、皆が次々に大型の車に乗り込んでいく。その中には愁の姿もあった。
怪我をしていない兵士達は自分達の我雲、戦車に乗り込む。
歩兵部隊の人達はロケット砲を装備して軍車に乗り込み、戦闘態勢をとる。
我雲に乗るパイロット達のモニターにセーシュの姿映し出される。
『全兵士に告ぐ、我等はこの地域を放棄し、一度本部に戻る事となった。
　退却しつつＥＲＲＯＲをなぎ払え、深追いはするな。それでは行くぞ』
『了解』
モニターからセーシュの姿が消えると同時に、今度は穿真とエリルの姿が表示される。
「エリル、戦えるか？」
『当たり前でしょ！私はもう平気、それより避難している車の護衛をしないと』
『護衛はお前に任せるぞ。俺と羅威は少し時間を稼ぐ為に前方に出る』
『……わかった、二人とも無理はしないでよね』
エリルとの通信が途切れ、モニターには穿真の姿がまだ映っていた。
「穿真、俺は嘘を付いた」
『嘘？』
「俺は彩野にこの基地を守るって言ったのに、それを実現できそうにない」
その言葉を聞いた穿真は簡単に答えた。
『なぁに、お前が彩野を守ればそれでいいんだよ』

羅威は黙ったまま、何か考えている顔をしている。
『ん、許してもらえなけりゃ謝ればいいだろ。俺も一緒に謝ってやるからよ』
こんな状況でも笑って見せる穿真、だが羅威の顔は見る見る青冷めていく。
『お、おい。どうしたんだ?』
「彩野はまだ…基地内にいる……」
『……は?』
羅威は急いで基地に通信を試みる。
だが消えてくるのはノイズ音だけしか聞こえてこない。
『ま、待てよ!基地内の人達は皆救助されたんじゃねえのか?!』
「彩野がいる司令室は敵の侵入を防ぐ為の防衛装置が着いてある。
この区域が安全と分かった所で防衛装置は解除される、しかし少しでも危険となれば
防衛装置の働きは継続、基地内に多くのシャッターが下りて敵の侵入を防ぐ事になる」
『なっ、内側から解除する事とか出来ねえのか?!』
「可能かもしれんが時間がかかる……」
既に基地の壁には何体ものＰｅｒｓｏｎ態が張り付いている。
地面の穴からも大量のＥＲＲＯＲが現れてくる、もはやあの流れを止める事は出来ない。
『って事は、彩野達はまだ基地内に閉じ込められてるって事かぁっ?!』
「可能性は高い。穿真、俺は――」
『行くなよ羅威!』
穿真の乗る我雲が羅威の我雲にマシンガンの銃口を向ける。
『いくらお前でも今行けば確実に殺される、死ぬぞ』
「だが俺は約束した、守ると。なら俺はその約束を果しに行くしか……」
『お前が死んだら元も子もねえだろがっ!お前が基地に行く素振り

を見せた時
　お前の我雲の両手両足を吹っ飛ばして胴体だけ持ってこの領域から撤退するぞ。言っておくが俺は本気だ、これ以上仲間を失うのは嫌だからな』
羅威は……まるであの時の愁の立場に立たされた様だった。
あの時愁は一人の兵士を助けようと、自らの危険を顧みずに特攻した。
俺はそれを止めていた、だがもし自分があの立場に立たされたら俺はどうするのだろうか。
そして今、俺はその立場に立たされている。
『羅威！……頼む』
「だが……俺は！」
『危ねえっ！』
我雲に飛び掛るＰｅｒｓｏｎ態をマシンガンで吹き飛ばす穿真。
波のように押し寄せてくるＰｅｒｓｏｎ態、穿真が両手マシンガンを一気にぶっ放す。
次々に押し寄せてくるＰｅｒｓｏｎ態に銃弾の雨を浴びせていく羅威。
それに続いて穿真もマシンガンをぶっ放していく。
「俺は彩野に言ったんだ、命に代えてもこの基地を落とさせないと」
我雲の出力をフル機動して、一気にＰｅｒｓｏｎ態の上を飛び超えていく。
『馬鹿がっ！行くなって言ってんだろが！』
「お前も言っただろ、彩野を守れと」
『はぁ？冷静に判断して行動しろ！お前らしくないぞ！』
穿真からの通信を切る羅威、もはや基地はＰｅｒｓｏｎ態に埋め尽くされていると言っても間違ってはいなかった。
そんな中に、一機の我雲が無謀にも接近している。
着地をすればたちまちＰｅｒｓｏｎ態に取り付かれるだろう。
だがその時だった。基地にへばり付いているＰｅｒｓｏｎ態もろと

も吹き飛ばし、基地の中から一機の機体が姿を見せた。
「我雲！……いや、違う！？」
それは機体と言えるのだろうか、それは『生命体』と言っても過言ではない。
その機体は赤く鋭い眼光で羅威の乗る我雲を見つめていた。

第１３話　崩壊、誓い（後書き）

守玖珠（すくす）　羅威（らい）

冷静沈着で負けず嫌いな性格。

ＮＦの軍人を激しく嫌っており、復讐しようとしてＢＮに所属している。

いつも首から下げられているペンダントの中には一枚の写真が入っており、命より大切な物らしい。

第１４話　死、不安

――全ての防衛装置が作動し防護壁（シャッター）が降りている基地の中、彩野達は司令室に取り残されていた。
現在の状況を確認していると基地内にＥＲＲＯＲが侵入している事がわかる、兵士達は皆武器を取り出しＥＲＲＯＲとの戦闘に備えている。
彩野にも武器が渡された、だが銃は大きく小柄な彼女にとっては余りにも重い。
そんな銃を抱きかかえるようにして持っていると、何人かの兵士達が防護壁を開けようとしていた。
「何をしているんだ、防護壁を開けたら奴等が入ってくるかもしれないだろ！？」
「しかし、ここにいるのも危険だ。早く避難した方がいい」
次第に兵士達が混乱しているのが彩野にもわかった、皆怖いのだ。
「ここで助けを待った方が安全だろ？！すぐ仲間が助けに来てくれる！」
多くの兵士がそれに賛同した、でもなぜだろう。ここにいると生きている心地がしない。
まるで殺される、死の順番を待っているような気がした。
「……わかった、じゃあ俺だけ外に出してくれ。その後この防護壁をまた閉めるといい」
兵士はそういうと、一人で防護壁を開けようと機械に触る。
だがその時だった、司令室の天井から聞こえてくる音。
その音はしだいに増していき、音は大きくなっていく。
ＥＲＲＯＲに入り口も出口も無い、奴等は自分達で穴を開けて侵入してくる。
「す、すぐ上にいやがる！撃て！撃てええっ！」
兵士達は一斉に銃口を天井に向けて発砲する。

途端に司令室は銃声と奴等の奇声が鳴り響く。
そして数人の兵士はシャッターを開けに掛かっている兵士に声をかけた。
「早くシャッターを開けてくれ！早く！」
「もう少しだっ……！」
だが奴等は待ってはくれない。
当等天井に穴が開き、奴等が降りてくる、Ｐｅｒｓｏｎ態が。
長い舌が一瞬にして兵士の首を取り巻き、飲み込む。そしてその死体は女性兵士の前に倒れ込んだ。
「い、嫌ぁあああああ！！」
悲鳴か奇声か分からないほどに叫ぶ女性。
だがその声はすぐに途切れた、もう声が出したくても出せないのだろう。
Ｐｅｒｓｏｎ態の舌は女性兵士の胸を簡単に貫いた。その衝動で女性の口から血が溢れ出している。
なすすべも無く体を咥えられ、強靭なアゴで骨もろとも噛み砕いていく。
その音が彩野の耳にも届いた、彩野は一歩も動けずにその地獄のような光景をただ見つめていた。
「開いたぞ！早く皆逃げるんだ！！」
逃げる……、その一言が彩野を走らせた。
司令室に残りの兵士達が開いたばかりの位置口に走りこむ。
『―ＥＲＲＯＲ―』
開いたばかりのシャッターが上からゆっくりと降り、閉じようとしていた。
彩野は何とか間に合い、司令室から出る事が出来たが。
数名の兵士は司令室に降りてくるＰｅｒｓｏｎ態と戦っていたままだった。
だが、閉じていくシャッターに気づき、一人の兵士が司令室から出ようと走った。

既にシャッターは半分以上降りてきている状態。
兵士は諦めなかった、最後に勢い良く頭から飛び込んだ。
そのまま滑るようにシャッターを潜り抜けようとした。
兵士は何とか間に合った事にホッと胸を撫で下ろす。
Ｐｅｒｓｏｎ態の舌が自分の足を引っ張っている事も知らずに。
次の瞬間、兵士の体は引っ張られ、防護壁の下に体を引きずられる。
兵士は最後まで生き延びようと手を彩野達に伸ばす。
彩野も手を伸ばそうとした時、降りてきた防護壁が兵士の体を切断した。
「あ、ああ…あ……」
目の前の光景に言葉が出ない。
さっきまで話していた人や動いていた人、生きていた人。
笑っていた人が次々に死んでいく光景を見せられている。
「君！大丈夫かっ！？」
司令室から抜け出た一人の兵士が彩野の肩を揺さぶるが、彩野はまるで人形のように動かない。
座り込んだまま、体を切断された兵士、そして床に広がる血を見ていた。
「ここで死んでもいいのかっ！？逃げるぞ！」
「えっ…あ……」
「っち、しょうがない。俺が背負って……」
その時、兵士の首に何かがあたる感覚がした。
「ん？首ぎぃゃ」
それは簡単に落ちた、ゴロゴロと廊下を転がっていく
体はその場に倒れ、血飛沫が上がる。天井から垂れ下がるＰｅｒｓｏｎ態の舌は天井を溶かしていた。
「嫌！嫌ぁ！」
彩野はその場に銃を投げ捨て、一目散に走り出した。
誰もいない廊下と、一人走り続ける彩野。
「先輩！先輩ぃ！助けてください！助けてくださいっ！」

涙をボロボロとこぼしながら一生懸命走っていく。
天井からは不気味に這いずり回る音が、そして自分の後ろから何者かの足音が聞こえてくる。
「あっ！」
勢い良く転んでしまい、必死に立ち上がろうとするが足首に激痛が走る。
そして後ろから来ていた足音が自分の後ろで止まった。
「彩ちゃん待ってよ！走るの早いんだから」
「えっ？」
彩野が振り返ると、そこにはマシンガンを片手に息を切らしているアリスの姿があった。
「アリスさん！？どうしてこんな所に……」
「薬品を取りに基地の中に戻ってきたの、そしたら防護壁が下りて逃げられなくなってね」
「彩ちゃんが走る姿が見えたから後を追いかけたの、さぁ早く。一緒に逃げましょう」
アリスが倒れている彩野に手を指し伸ばし、それに手を伸ばす彩野。
そして気づいてしまった、天井から垂れ下がる舌、その舌はアリスの首目掛けて向かっていた。
「アリスさん危ない！」
「んっ？」
それは簡単に飛ばされた。
飛び散る血、そして床に落ちる舌。
「これぞまさに危機一髪って奴だな」
ミイラ男、ではなくあの男が黒光りする剣を片手にＰｅｒｓｏｎ態の舌を斬り捨て、そのまま剣先を天井に突き刺していた。
「あ、貴方は医務室にいた……」
「ああ、君はたしか俺を助けてくれた女性か、運が良いぜお二人さん。ミシェルを助けに来たついでに恩返しをさせてもらおうか」

――基地にへばり付いているＰｅｒｓｏｎ態もろとも吹き飛ばし、基地の中から一機の機体が姿を見せた。
「我雲！……いや、違う！？」
それは機体と言えるのだろうか、それは『生命体』と言っても過言ではない。
機体は赤く鋭い眼光で羅威の乗る我雲を見ている。
「何だ、こいつはっ……」
すると、前方に見える機体（？）から通信が入る。
映像には一人のミイラ男と彩野とアリスの姿があった。
ちなみにミシェルは彩野とアリスに挟まれている状態だ。
『先輩？先輩ですか？！』
「彩野？どうしてそんな物に乗っている」
『ちょ、出てくるなっての！４人乗ってるんだから狭いんだよ！』
『で、でも先輩が！』
「お前、医務室にいたあの男か」
『ん、ああそうだ。もう詳しい話は後にしてくれ。今はここから逃げるぞ』
「わかった、後でゆっくりと話しを聞かせてもらう」
『話が分かる奴でよかったよ、んじゃ逃げるとするか』
甲斐斗は軽く笑ってみせたが、顔に包帯が巻かれている為に笑ったようには見えなかった。
羅威の乗る我雲は両腰に着いているグレネードを全て外すと、Ｐｅｒｓｏｎ態の群れに投げ込む。
Ｐｅｒｓｏｎ態が吹き飛ばされた隙を狙い、一度地面に着地する２体の機体。
そしてまた勢い良く跳び上がり、Ｐｅｒｓｏｎ態の群れから離れていった。

――「彩野の状態はどうなんだ？」
壁にもたれ掛かり、腕組をしながら目を瞑っている羅威。

ＢＮは別の基地に無事移る事が出来たが、突如甲斐斗の乗る機体の中で気を失う彩野。
そのまますぐに医務室へと運ばれたが現在も意識不明のまま目を覚まさない。
「少しショック状態が強いみたいなの、今はまだ安静にしてないとだめだって」
アリスは悲しげな表情で病室の前にある長い椅子に座っている。
「無理もないよ、人が殺されるのを目の当たりにしたんだから……」
「……さて、俺は行く所がある。彩野の事は頼んだぞ」
「えっ、うん、わかった」
壁からそっと離れると、羅威はアリスに背を向けて歩いていった。
そしてある一室へと入っていく羅威、その部屋には既に穿真や愁の姿があった。
奥には紳やセーシュ、そしてダンとエリルの姿も見える。
「愁、お前は大丈夫か？」
少し元気が無いようにも見える、やはり何かあったのに違いない。
「うん、俺は大丈夫だから」
それとは対照的にいつも元気は穿真、こんな中笑っていられるのもコイツだけかもしれない。
「全然大丈夫そうに見えねえけどなぁ、まぁ元気出せや！」
そう言って愁の背中を数回叩く、愁は本気で痛がっている。
「い、痛いよ穿真！骨折れるって！」
「あ？ああー。俺の右手サイボーグだったの忘れてたわ」
「少しは手加減してよ、痛たた……」
いつもの調子に戻ってきたようだ、後は話を聞かせてもらうか、あの男に。
その時、扉は開かれた、あの包帯男が一人部屋の中に入ってくる。
全員の視線が包帯男に向けられた。
――全く、つくづく付いてない。とりあえず自己紹介でもしてみ

るべきか。
「俺の名前は甲斐斗、さて。質問するならどうぞ」
「お前、もしかしてカイト・アステルではないのか？」
即答で返ってきた質問、それは青紫色の髪を伸ばしている女性からだった。
「セーシュさん、カイト・アステルって？」
茶髪の青年がその女性に問いかけた、どうやら皆が皆知っているという訳でもないらしい。
「捕虜にしていた兵士だ、彼とよく似ていたからな」
「今その兵士は何処に？」
「何者かが牢屋の鍵を開けたのかわからんが、扉が開いていてな、既に逃げられている」
「言っておくが俺はアステルじゃないぞ」
セーシュという名の女性はさらに質問を仕掛けてきた。
「甲斐斗、お前何故あの基地にいたんだ？」
「いた？俺が森で倒れている所をお前達が俺を助けてくれたんじゃないのか？」
その言葉にセーシュが反応を見せた、そして羅威やエリルの視線が愁に向けられる。
「そうそう、愁って言ったっけ。彼に助けてもらったよ」
静まりかえる室内、誰一人声を出さない。
重く暗い沈黙が続いていくような気がした、一人の男が声を上げた。
「魅剣、何故黙っていた」
それはこの室内で一番偉いと思われる男、紳だった。
紳は座ったまま、視線だけを愁に向けている。
「えっ、あ…その……」
何て威圧だ、睨まれている青年は言葉が出ず、焦りを感じている。
「お前のその判断力の無さが、数百名の兵士を殺した。お前が殺した」
「お、俺はそんな、何もしてません！」

「あの時間帯、そして数、種類、そしてＥＲＲＯＲが直接基地に攻め込んできた事。こんな事は初めてだ、魅剣。お前は何故だと思う」
「……わかりません」
「教えてやろう、それはこの男が基地にいたからだ」
その言葉に皆が驚きを見せた。
だが言われている俺はどうも納得いかない。
「おいおい、それじゃあ俺がその基地にいたからＥＲＲＯＲが攻めてきたって事を言いたいのか？」
「そうだ」
この男、なんでこんなに自信満々なんだ？
「冗談じゃない、お前等が勝手に俺を基地に運んだんだろ」
「そうだな、だからお前に責任は無い……魅剣」
「は、はい！」
名前を呼ばれた事に過剰に反応を見せる愁。
「お前はこの部屋から出て行け」
「え……はい、わかりました……」
自分が座っていた席を下に戻すと、敬礼を済ませ、ゆっくりと部屋から出て行ってしまう。
「セーシュ、俺は少し用がある。後は任せた」
そう言うと紳もまた一人部屋を後にした。
「こほん、質問を続ける、お前は何故あの森にいた」
小さな咳払いをした後、また質問を繰り返してくる。
正直、これ以上話をややこしくするわけにはいかないと思った。
実は俺！他の世界から来た魔法使い何だぜ！
なんて言ったって絶対に信じてもらえる事は無いだろう。
「実は、あまり憶えていない」
「憶えていない？」
「わからない、思い出せないんだ……」
頭を抱え込みながら震えてみる、我ながら素晴らしい演技だ。
「俺が何故こんな怪我をしているのかも、どうして森にいたのかも。

憶えていない」
「そうか、わかった」
えらくあっさりと信じたな、それだけ俺の演技が上手いって事か？
セーシュが俺の方に近づいてくると、俺の両手を掴む。
カシャリという音とともに俺の手には手錠がはめられた。
「へ？」
「身元がわからない以上こうさせてもらう、付いて来い」
「ちょ、ちょーっ！？俺は敵じゃないしスパイでもないって！」
俺が必死に抵抗しようとしたが両手が止められている以上何もする事が出来ない。
「安心しろ、これは形だけだ。お前には感謝している」
「えっ？」
耳元で、俺にしか聞こえないような小声で彼女は話してくれた。
「アリスや彩野も、そしてあそこに座っている羅威もお前に感謝している」
「そ、そうか。それならもう少し優しく痛たたっ！」
セーシュは甲斐斗の手錠から下がる紐を掴むとそのまま甲斐斗を連れて部屋から出て行ってしまった。
「ねぇ羅威、穿真。彼の事どう思う？」
エリルが羅威と穿真の元に駆け寄り、今聞いた事について話してみる。
「面白い奴じゃないか？別に俺はスパイとか思ってねーけどなぁ」
穿真はへらへらと笑いながら答えるが、その横に座っている羅威の顔は険しかった。

――紳は彼がＥＲＲＯＲを引き寄せたと言っていた。その話は本当なのだろうか。
それなら何故紳はあれ程までに言い切れたのか、何か俺達が知らない事を知っているのではないか。
羅威の頭に色々な考えが過ぎる中、エリルが目の前に顔を出してく

る。
「ちょっと羅威、聞いてるの？」
「え、ああ。わかっている。それより愁の所に行ってくる」
そう言って羅威もまた部屋を後にした。
「本当にわかってるのかしら」
「まぁ愁の事はアイツに任せりゃいいだろ、それよりあの男が連れていた少女がどんな奴なのか見にいこーぜー」
「もー、こんな時に……でもまぁ、たしかに気になるわね。どんな子かしら」
「決まり、んじゃ行くか」

第１４話　死、不安（後書き）

エリル・ミスレイア
ＢＮの女性兵士で唯一専用機に乗っており、無花果は彼女の専用機体。
性格は明るく、元気強い所を見せるが案外寂しがりやな面もある。

第15話　出会い、別れ

――俺って感謝されて当然だよな。
BNの基地から数人だが兵士を助けたんだ、本当なら皆から感謝の言葉が浴びせられて今頃俺は一人優越感に浸っているはずなのに……。
「なんで牢屋に入れられなくちゃならねえ、ここから出せ！」
だが牢屋の前で椅子に座り書類に目を通していた女は俺を軽く見ただけでまた視線が書類に戻る。
牢屋の中にいる俺をまるで吠える犬のように見てやがった……。
「言っただろ、お前の身元が分からぬ以上自由の身にしておく事はできないと」
何も言わないと思いきや何とか答えてくれたが、まぁごもっとも、その通りだ。
だがいくら何でも牢屋は無いんじゃないのか？もっとこう普通の部屋でいいだろ。
多分俺がいくら吠えてもこのセーシュという女は絶対に俺を牢屋から出してくれないだろう。
「わかった、俺は別にここでもよ……くは無いが、ミシェルは何処にいるんだ」
「ああ、あの少女なら大丈夫だ。安心しろ」
「その言葉、信じてもいいのか」
「信じて構わん」
軍人の言う事など信じてられるか、やはりこの基地から抜け出した方がいいのだろうか。
「さて、私はそろそろ行くかな」
俺の牢屋の鍵が閉まっていることを確認すると、セーシュはそそくさと出て行ってしまう。
この牢屋から出る事は簡単だ、逃げるのも俺一人なら簡単だろう。

ＢＮの奴等は多分俺を悪いようには使わないはずだと思うし、やはりここで暴れるのはまずいか。
となると……やっぱここで辛抱するしかないのか。
「おっと、すまない。そういえば言う事があった」
「あうっ?!」
突然部屋内に戻ってくるセーシュに驚いてつい変な声が出てしまった。
「何をそんなに驚いている、もしかしてお前……」
「何か変な事考えてないか?それより俺に言う事があるんじゃないの」
「そうだな、お前のその包帯。取り替えた方がいいだろう?」
俺の手足、体、そして顔にもグルグルと巻かれている包帯。
真っ白だった包帯に血が滲み、赤茶色に変色しているのが目立っていた。
「取り替えてくれるのか?」
「後１時間後にアリスが来る、と思う。彼女に換えてもらえ。以上だ」
そう言うと女はまた部屋を出て行ってしまう。
彼女も彼女で忙しいのだろう、働く女は逞しいもんだ。

――「羅威、なんでこんな所に俺を……」
「俺が奢る、だから座れ」
俺と愁が今いる場所は軍にある食堂だった、愁は渋々食堂の席に座ると羅威は愁の正面の椅子に座る。
ここに来る前、廊下で一人ボーッと突っ立っている愁を見つけたが見るからに落ち込んでいた。
本当分かりやすい奴だ、どうせ紳に言われた事に自分で自分を責めていたんだろう。
「愁、確かにお前のした事は間違っていたかもしれない、だが俺は――」

「はい、カレー二つお待ち」
俺が話そうとした矢先にカレーは二つ運ばれてくる。
「本当羅威ってカレーが好きだよね」
「あ、ああ。安い、美味い、辛いの三拍子が揃っているからな、って……今はその話じゃ」
そしてまた俺が話そうとした時に愁が先に口を開いた。
「羅威の事だから、俺の事を気遣ってくれたんだよね。心配かけてごめん」
「べ、別に心配なんてしてない……ただ、あまり自分を責めるな」
「わかってるよ、わかってるけど、ね」
自分が兵士達を殺したことに罪悪感を持っているのか？
だが愁が何をした、命を賭けて一人の兵士を助けようとした男だぞ。
「お前の責任じゃない、皆の責任だ、これからの事を考えていけばいい」
「ありがとう羅威、羅威が居てくれて本当に良かった……」
「まっ、さっさとカレーを食べて元気を出す事だな」
愁の皿にはまだカレーが半分以上残っているが、既に羅威は食べ終えていた。
そしてお店の店員を呼び止めるとさらにカレーを注文している。
「でも羅威ってすごいよね、俺は一人じゃ何も出来ないから」
「人は一人じゃ何も出来ない。当たり前だろ」
簡単に言って見せた、そしてテーブルに置かれている水を一口飲む。
愁は呆気に取られたような顔をしていたが、また軽く笑って見せた。

――その頃、穿真達はミシェル達がいる部屋に来ていた。
甲斐斗とは違い、牢屋でもなく普通に一室、窓もあるし風呂やベットまで少し豪華なくらいだった。
部屋の前には武装した兵士の見張りまでついている。
「この子はこんな部屋なのに、どうして甲斐斗は牢屋なのかしら？」
エリルがそう穿真に聞いてみるが、穿真は部屋の隅っこに座ってい

るミシェルと色々喋っていた。
「俺の名前はせーんーま」
「せんま？」
「そうそう！穿真な！」
丁度ミシェルに自分の名前を教えている穿真、自分だけ置いてけぼりされすかさず穿真の襟を引っ張る。
「ちょっと穿真！私の話聞いてるの？」
「聞いてるって、そりゃあ、あんなミイラ男とこんな可愛い女の子なら扱いが違ってもおかしくねーって」
そう言うとまた穿真はミシェルの元に向かい喋りだす。
「それ本気で言ってるの？」
「ほーら見てろよー、ロケットパーンチッ！」
そう言って前に突き出された右手は勢い良く飛ぶと簡単に部屋の壁に穴を開けめり込んだ。
穿真は面白半分でやっているようだが、ミシェルは恐怖のあまり毛布に包まってしまう。
「あ、あれ。怖かった？」
「あんたねぇ、右手が飛んだら誰だって怖いわよ。ってか何その一発芸」
「面白いと思ったんだけどなー」
穿真は笑いながら部屋のめり込んだ右手を引き抜くと、右手首に右手を取り付ける。
穿真の義手は精密かつ頑丈に作られていた、指の動きも人間そっくりであり人工皮膚も張ってある。見た目だけは普通の手と何ら変わり無い。
「かいと、かいとぉ……」
毛布に包まりながら呼び続ける一人の名前。
「大丈夫だって、あのミイラ男は生きてるし、別に何もしねえから」
「そんな事言ったって心配よ、彼とこの子を会わせる事は出来ないのかしら」

「今はまだ無理かもしれねーが、時間が何とかしてくれるかもな」
「……そうね、今はまだ無理よね」
今日出会ったばかりで身元も不明、そんな男を信用しろと言われても無理な話。
やはり少しずつあの甲斐斗という人から話を聞いていかなければならない。
「んじゃ、そろそろ俺達も……」
すると、毛布からひょっこり頭を出して穿真とエリルと見つめだすミシェル。
まるで二人に帰ってほしくないかのようにミシェルの瞳が訴えかけていた。
「か、可愛い――！」
「ちょ、穿真!?」
「いやお前見ろよあの目を！あのうるうるっとした瞳を！」
いきなり全開で発狂しだした穿真は、ミシェルの包まっている部屋の隅にまた戻ってしまう。
「俺はもう少しこの子と遊ぶは～、エリルは先に帰っててていいぜー」
ニコニコと笑顔で手を振っている。明らかにエリルを帰らせようとしている。
「はぁ、わかった。それじゃ私は先に戻るね……このロリコン」
「あ？今何か言っ――」
最後にそう言って部屋を出て行ったエリル。
部屋を出るとやはり両サイドに武装した兵士が立っていた。

――「これはすごい……ＥＲＲＯＲとＤシリーズの融合機体、面白いね」
ラースは一人甲斐斗の乗っていた我雲を見て興奮していた。
ＥＲＲＯＲの肉片は上手い事に我雲のパーツと組み重なり作動している。
もはや我雲の面影は無い、それは一つの、新種のＥＲＲＯＲとして

見てもいいだろう。
だがこの機体そのものにＥＲＲＯＲの人格は無い、いつ動き出しても不思議ではないのだが何故か動き出さない。
「何らかの力がＥＲＲＯＲの侵食を抑えているね。あの甲斐斗という男、一体どんな力を使って止めたんだ……」
この機体をバラバラに解体しようとも思ったが、前より格段に装甲が増して丈夫になっている為に相当な時間が掛かるので断念。
一々解体しているとかなりの時間もかかり、ＥＲＲＯＲともなるといつ動き出すかわからないのでそう簡単にいじる事も出来ない。
それにこの機体、一体誰が乗るというのだろうか。いつコクピットがＥＲＲＯＲに取り込まれても文句は言えない。

――――愁との食事を終えた後、俺は一人ある部屋へと来ていた。
その部屋の扉をゆっくりと開けて中に入っていく、白く透き通ったカーテンは風に靡き、純白のベットが置かれていた。
そしてそのベットには小さく寝息を立てる彩野の姿があった。
だが、俺がドアを開けた音で起こしてしまったのか、体を起こし、閉じていた目蓋をゆっくりと開いてこちらに顔を向ける。
「羅威先輩……」
いつもの笑顔はどうした、いつもの元気はどうした……。
買ってきた果物を机の上に置き、ベットの横に置いてある丸椅子に座る。
「彩野、気分はどうだ」
何故か彩野は俯いたまま俺の顔を見ようとしない。
「彩野？」
顔を覗き込んでみようと彩野に顔を近づけた時、俺の左頬は叩かれた。
咄嗟の出来事に何故叩かれたのかわからなかった、すると徐に顔を上げる彩野の目からは大粒の涙が零れ落ちていた。
「先輩のばか！」

「お、おい。いきなり馬鹿は無いだろ」
叩かれた頬を抑えている俺を彩野はじっと見つめてくる。
たしかに俺は馬鹿だ。彩野一人助ける事が出来なかった。
あれだけ大口を叩いておいて、この結果じゃあ俺はただの大馬鹿者だ。
「私を助けてくれなかった罪は大きいです」
「うっ……すまなかった。俺が未熟なせいでお前を危険に……」
落ち込む俺の肩を指で突っつく彩野、目に涙を浮かべながらも何故か俺との視線をそらす。
「わ、私のわがままを一つ聞いてくれたら……その、許してあげてもいいんですよ？」
「本当か？よし聞こう、何でも言ってくれ」
すると、急にそわそわしだす彩野。何か照れているような顔をしている。
「その、えと……」
「遠慮するな、なんでも聞いてやる」
「そ、それじゃあ！わ、私を……っ！」

――その時、医務室の扉の開く音と共にエリルが部屋の中に入ってきた。
「あ、羅威。やっぱりここにいたのね」
「どうしたんだ？」
「私達にお呼びがかかってるのよ、今すぐ5番ブリーフィングルームに来いってね。ほら、早く行こう」
そう言って部屋を出て行くエリル、羅威もすぐにその後を追おうとした。
彩野は寂しそうな顔をして羅威を背中を見ていたが、急に羅威が足を止める。
ゆっくりとベットの方に歩いてくる羅威、そしてベットで起き上がっている彩野を抱きしめた。

突然の出来事で声も出ず、彩野はただただ抱きしめられている。
「お前のわがままは後で聞いてやる、だから今は安静にしておけ」
抱きしめた後、羅威はそっと彩野に顔を近づけた。
彩野の頬には柔らかく暖かいものが微かに当たる。
無言で去っていく羅威、彩野は呆然とした表情で羅威の背中を見送った。
医務室のドアが閉まると音で意識がはっきりと戻った。
唇が触れた感触がまだ残っている頬にそっと指を当てる彩野、そして小さく微笑んだ。
「先輩、大好きっ……」

――急いで廊下を小走りしていると、呼ばれた部屋へと向かうエリルに間に合う事が出来た。
俺はエリルの横に並ぶと走るのを止めて一緒に歩いてブリーフィングルームへと向かう。
「ごめんね羅威、彩と二人っきりの所邪魔しちゃって」
「邪魔？別にそんな事は無い」
「いい雰囲気だったよね～、何話してたのー？」
横からどんどん話かけてくるエリル、構っているとこっちの身が持たない気がしてきた。
とりあえず軽く流すような返事しか返さなかった。
「ちょっと羅威、聞いてるの？！」
「ん、お前が喋っている間に着いたな、入るぞ」
正直エリルの話を全く聞いてなかった。
部屋の扉が開き、俺とエリルが中に入る。
部屋の中にはおなじみのメンツが既に揃っている状態だった。
「いよぅお二人さん。少し遅かったな」
部屋に入るやいなや早速穿真が話しかけてくる。
こいつは喋ってないと落ち着かないのかもしれないな、エリルと同じだ。

いやまて、穿真が落ち着いている時ってあったか？
自問自答を心の中でしているその時、俺の背中に激痛が走る。
「人の話ちゃんと聞けよなぁお前は！」
「せ、穿真……お前は俺の背中を砕こうとしてるのか？」
「痛かった？少しは手加減したんだけどな～！」
「わかった、わかったからもう席に着こう、な」

――痛む背中を自分で触りながら席に着く羅威。隣には既に愁が座っていた。
「一体何の話なのかな」
「さあ、だが俺達に関係する話と言えば一体……」
「皆集まってくれたみたいだな、これよりブリーフィングを始める」
皆が席につくとタイミングよくセーシュが部屋に入ってきた。
その右手にはアタッシュケースが握られていた、机の上に乗せると話始める。
「ここに集まっている６人は本部からの命令で新しい部隊となる」
場にいる皆が驚きの表情をしているが、セーシュは構わず事を進めた。
アタッシュケースを開けるとその中には６枚のバッチ・ＩＤカード・身分証明書が入っていた。
「お前達は本部直属の特殊部隊員となる、だが本部所属ではない。
戦艦リシュードに乗艦し、各地を転々と回ってもらう」
「これまた急な話じゃねえか、でも本部直属の部隊なんてうれしいな！」
「そうだろう、お前にとってはうれしい話だろうな、さて一人ずつ取りにきてもらおうか」
そう言うと穿真が一目散にセーシュの元に向かい、バッチやＩＤカードをもらう。
次々に皆が席を立ち、セーシュから渡される物を取りに向かう。
羅威も物を受け取り、もらったバッチをぼーっと眺めていた。

そして最後に愁が席を立ち、セーシュの下に向かう。
だが彼女は愁に物を渡そうとはせず、ある封筒を手渡す。
不思議そうにその封筒を開ける愁、中には数枚の書類が入っていた。
「魅剣　愁、今までよく頑張ってくれた、お前にはこの軍を辞めてもらう」
それは余りにも突然で、唐突な話だった。
室内にいた全員がその言葉に反応を見せ、皆の視線がセーシュに集まった。
羅威が急いで室内を見渡す、7人、セーシュを除いて部屋にいる人の数は7人・・・。
「さて、皆に必要な物は配り終えた、また詳しい報告は後日行なう、今日は解散だ」
アタッシュケースを閉じると、セーシュはそのまま部屋を出て行こうとした。
愁は書類を持ったまま、動かなかった。いや、動けなかったのかもしれない。
書類を持つ手がかすかに震え、目の前の現実が頭の中に入ってこなかった。
皆が席に座っている中、一人の男が席を立った。
そしてその男の後ろを通りかかったセーシュの胸倉を掴むとそのまま一気に壁に押し付けた。
「ちょっと羅威！何してるの！？」
すぐさまエリルが止めに掛かろうとしたが穿真が咄嗟にエリルの前に腕を出すと、エリルの足を止めさせた。
羅威はセーシュを睨むようにして胸倉を掴んでいた、だがセーシュは顔色一つ変えずに羅威を見つめている。
「俺達に、納得できるように話してくれないか……愁を解雇する訳を」
「私は知らん、上からの命令だ」
「上からの命令だと？……紳なのか、紳の命令なのかっ！？」

「私は知らんと言っているだろ、その手を離せ守玖珠羅威。上官に向かってそんな事をしていいのか？」
「お前っ！」
理性を抑えきれず、右手を振り上げる羅威、そのままセーシュの顔向けて右手を振り下ろそうとした時、愁が叫んだ。
「羅威！もういいんだ！」
セーシュの顔の横に突き出された拳、羅威が後ろに振り向き愁を見つめる。
「もう、いいんだっ……皆、今までありがとう……」
そう言い残し、愁は手に持っている書類を握り締めながら走って部屋を出て行った。
セーシュは羅威の手を振り解くと、逆に羅威を睨み返した。
「理由が聞きたければ直接若様に聞く事だな、お前の事だ。若様を説得する気だろうがそれは無駄な事だ」
「無駄な事、だと……」
その言葉に羅威の目が変わる、さっきまで睨んでいた目ではなく、驚きの様子だった。
そのままセーシュは部屋を出て行ってしまい、部屋には一つの部隊メンバーだけが残された。

第１５話　出会い、別れ（後書き）

野入（のい）　穿真（せんま）

お調子ものの性格、周りを明るくさせるムードメーカー的存在でもある。

赤城に右手を斬りおとされ今は義手をはめているが。

その性能は桁違いであり、我雲の装甲より硬い金属で作られているらしい。

そして重量もかなりある為に軽く当たるだけで相当痛い。

第16話　波乱、旅立ち

――どうして俺はこの世界に来てしまったのだろうか。
冷たい牢屋の中、ふと疑問に思ってしまった。
俺は最強の魔法使いだった。
どうしてそんな力があったのかを説明しろと言われても説明できないが。
大体、どうしてこの世界に来て魔法が使えなくなったんだ。
魔法さえあれば俺は今頃こんな牢屋から抜け出して元の世界に帰れるのに。
ＮＦだろうがＢＮだろうが俺には知ったこっちゃない。
悪いかもしれんが、この世界で戦争が起ころうが滅亡しようが俺には関係の無い事だ。
・・・いや、俺は世界を助ける為に命を犠牲にしようとしていたな。
だが、どんな世界でも始まりが有り終わりを迎える、これは当然の事だ。
終わりがあって、始まりがある。出会いがあって別れがあるというのと多分同じ。
そんな簡単な定理に当てはめていいものなのかわからないが、俺はそう思う。
この話が全部、夢だったらいいのに――。
――「そんなっ……甲斐斗さん！」
崩壊する世界で、一人の青年が俺の名を叫んでいる。
体中傷だらけ、口元には少し血が付いていて、両手には双剣を握っていた。
そしてその隣にいる、薄く美しい長髪を靡かせている一人の女性。
二人の姿は既にボロボロだった、その場に立っているのがやっとなくらいだ。
「甲斐斗！約束したよね……一緒に帰るって！」

「……ああ、お前等が俺に約束してくれたんだよな。絶対に元の世界に帰るって」
次々に地面に亀裂が走り、広がっていた空は変色しながら縮まっていく。
「違う！甲斐斗だって約束してくれたじゃない！帰ろうよ、甲斐斗っ！」
彼女はそう言って俺に手を指し伸ばしてくる。
だが青年は違った、涙を流しながら俺の決意をわかってくれたらしい。
「だったら今約束してください……必ず、必ず僕達の世界に帰ってくると！」
おいおい、わかってくれたと思ったのに。こいつときたら……。
しゃーねえ、約束してやるよ。帰ってきてやる、絶対に。
俺は力の無い腕を前に突き出し、グッと親指を突きたてた。
その時にはもう二人の姿は消えていた、無事に元の世界に帰れたようだ。
せっかく約束したのに、速攻で約束破る事になるけどな。さて、一足先に天国に行ってみるか。
……ああ、『ここだけ』思い返すと俺って本当にカッコイイじゃないか。
これはもう全米が涙するな、うん。俺カッコイイ。俺カッコイイ！

――――「うへへ、俺ってカッコイイぃ……うへ！」
「っ！って、寝言ですか、ビックリしたぁ」
甲斐斗を起こさないようにそっと牢屋の鍵を開けて部屋に入ってくるアリス。
手には包帯や消毒液などが詰め込まれている救急箱を持っていた。
「甲斐斗さんってナルシストなのかな……、ううん。それより今は包帯を換えてあげないと」
起こさずに包帯を換えようとしているのだろうか、必死に体に巻か

れている包帯を取ろうとしている。
だが甲斐斗が寝返りをうつたびにビビって包帯を取る事が出来ない。
それに負けじと必死に包帯を取ろうとするアリス、寝返り、びびる、
取ろうとする、寝返り、びびる、何これ。
「もう！じっとしていてください！」
「んっ……？誰だお前」
ようやく目が覚め、体を起こす甲斐斗、眠そうに目を擦ると軽くノ
ビをする。
「私の顔を忘れたんですか？アリスですよ！包帯を取替えにきまし
た～」
「おおー、寝ている間にもう1時間たったのか、ご苦労様ー」
「いやー、4時間も遅れて来ちゃいました～」
「は？」
時計、時計は何処だ、今何時だっ！
「今は夜の9時ですね、さぁ、包帯取りますよー」
そう言って彼女は俺の顔に巻かれてある包帯に手を掛ける。
ゆっくりと外されていく包帯、ようやく俺の顔を邪魔していた物が
無くなった。
あー顔でも洗ってサッパリしたいなー、とか思っていると彼女が驚
いた様子で俺の顔を見ていた。
「あれだけの火傷がもう治ってる……」
それは顔だけではなかった、俺の腕や足、体に巻かれている包帯を
取ると、そこに傷は無く、火傷の跡すら無かった。
この人間離れした生命力と治癒能力が俺を長生きさせてくれる秘訣
だ。
「これなら包帯いりませんね」
彼女はせっかく取り出していた包帯を救急箱に戻していく。
「俺の事不気味とか思わないのか？」
「別に思いませんよ、それに甲斐斗さんの顔とっても綺麗だし」
「いやいや、顔が不気味とかじゃなくてだな」

「貴方が誰だろうと関係ありませんよ、甲斐斗さんは私達の命を救ってくれましたよね。
それに、甲斐斗さんは悪い人には見ませんから、とても優しそうな方に見えますよ」
「はは、それは良かった……」
その時、急にアリスがしゃがみ込み、俺の目の前に顔を出してきた。
かすかに良い匂いが漂い、俺の体は固まったままアリスの顔を見つめていた。
アリスの方は軽い笑みを見せながら俺の目を見つめてくる。
「綺麗な目をしてますね」
「へ？」
そう言うと、彼女は照れ笑いをしながら救急箱を持ち上げる。
「てへ。すみません変なこと言っちゃって、それじゃおやすみなさ～い」
「ん、ああ……おやすみ」
よくわからない奴だ、ただ。少し可愛かったのは認めよう。
そういえばさっき彼女は俺の目が綺麗と言っていたが・・・。
ふと右手で右目を覆い隠してみる、・・・見える、はっきりと前が見える。
急いで洗面台においてある鏡を手に取り、自分の顔を凝視した。
そこに左目はあった、ちゃんと動き、しっかり物が見える。
何故、いつから左目が治っていたのか気づかなかった。

――そして波乱に満ちた一日は終わり、希望に満ちて欲しい一日が始まろうとしていた。
朝日の差し込まない薄暗い牢屋にいる甲斐斗はまだ爆睡中。
甲斐斗は爆睡中だが、ＢＮの兵士達は既に起き、訓練に勉強等色々行なっている。
だが羅威達は違う、今日から本部を離れ戦艦に乗って各地を回るのだ。

出発の時間は近い。格納庫にはエリルや穿真、そして昨日ブリーフィングルームに来ていた兵士達が集まっていた。
「コレが戦艦リシュードかぁ、でけぇえなー！」
うれしそうに戦艦を見渡している穿真、多分コイツの心には夢と希望が満ち溢れているだろう。
「おいエリル！さっさと乗ろうぜ！」
穿真が振り返ると、エリルは携帯電話を開いて時間を確認していた。
「ちょっと待ちなさいよ、羅威がまだ来てないみたいないんだから」
「ぁあー？どーせ愁と話してんだろー」
「もぉー、時間後少ししかないのに……私ちょっと羅威呼んでくる」
開いていた携帯を閉じ、ポケットの中に入れて走り出そうとした時、穿真がエリルの腕を掴む。
「お前さぁ、少しは空気読めって」
「……あんたにだけは絶対に言われたくない台詞ね」

――「愁、起きてるか？」
愁のいる部屋の前に俺はいた。
あれから一日がたった、昨日はいくら愁の部屋に行っても何も答えてくれなかった。
だが俺は嫌だ、最後の最後までお前とこんな感じで別れるのは……。
「ポジティブに行こう、愁。お前はこの醜い争いから抜け出せる事が出来たんだ。
お前には弟や妹、両親がいる、家族がいるんだ。守ってやれよ」
部屋からは物音一つ聞こえない、もしかしたらもう愁がいないのかもしれない。
それでも羅威はひたすら話し続けていた、愁が扉の向こうで話を聞いてくれていると信じて。
「そろそろ時間だから俺は行く。……愁、例えここで分かれても俺達は親友だ、それは忘れないでくれ」
またいつか会える。そう信じているし、その時はまた俺がカレーを

奢ってやるからな。

――昨日から一歩も外へ出てないミシェル。
部屋のドアには外側から鍵が閉められて開かず、窓から出たくてもここは2階。
昨日来てくれた穿真やエリルもいなく、一人寂しく毛布に包まっていた。
その時、何やら外で騒がしい音が聞こえてくる。
開かなかったはずのドアがすっと開き、二人の兵士が部屋の中に入ってきた。
軍帽を深く被り、目元が見えない。彼等は部屋に入るや否や部屋の隅で縮こまっているミシェルに近づく。
「探したぜ、第1GM！一緒に来てもらおうか」
怯えながらその兵士を見つめているミシェル。
すると、もう一人の兵士が口を開き、ミシェルに手を指し伸ばした。
「安心して、私達は…貴方の…味方……」
「みか、た？」
「そう言うこった、無理やりでも連れていかせてもらうよっ！」
さっきからよく喋る兵士が毛布に包まったままのミシェルを腰に抱きかかえる。
「後はここから逃げるだけ！さっさと逃げるぞ！」
「あっ、戦艦…格納庫…行かないと……」
「格納庫？やっぱりあの作戦で行く気か？！」
「そうみたい、危険だけど…頑張ろ……」
「っしゃあっ！俄然やる気が沸いてくるぜ！」

――「ふんごっ！？んが、今何時だっ……」
時計が無いのはわかっていたが時計を探して部屋を見渡してみる、
そこにはやっぱり時計は無い。
ああ、やはり夢ではない、この世界は現実だ。

「俺の囚人生活一日目のスタートか」
最近独り言が増えたのかと思うぐらい今日は起きてからよく喋る。
「よっし！今日から気分入れ替えて頑張っていくぞー！」
俺が一人、オーッ！と掛け声を発した瞬間、凄まじい爆音と共に部屋が揺れた。
地震かと思ったが、振動は長く、爆音が何度も聞こえてくる。
どうやら俺は平和な日々に嫌われているらしいな……。

第１６話　波乱、旅立ち（後書き）

アリス・プリセント
医療担当の立派な医者、マイペースで明るい女性。
戦争は嫌いでＢＮもＮＦも好きではないがその事は皆に黙っている。
ただ目の前にいる怪我人を助けたい一心で医者になる決意をした。

第17話　誘拐、集合

――――『緊急警報、本部第2、第3格納庫で火災発生、直ちに消火せよ』

警報が鳴り響き、次々に兵士達が格納庫の消火に取り掛かる。

兵士達が銃を片手に本部内を走り回り、侵入者を探し回っていた。

そして一人の兵士が少女を抱きかかえている彼等に気づき、銃口を向け発砲する。

だが銃弾は彼等には当たらず、長い廊下を走っていった。

「こっちに侵入者がいたぞ！」

兵士達が彼等の後を追おうとした時、一瞬にして防護壁が降りて廊下を遮断する。

「防護壁が下りたって事は、あいつ等も上手くやってるって事か」

余裕の表情で廊下を走り、彼等は一直線に格納庫へと向かっていく。

「にしてもこんな簡単に段取りが進むとはな」

「所詮第2旧本部…楽勝……」

「後はあの戦艦に乗りこんでココから逃げるだけだよな？」

「そう、逃げるだけ……」

長い廊下を抜けて第1格納庫に到着した彼等は驚きを見せた。

新型の機体が新型の戦艦に積み込まれていたからだ。

「なっ、ＢＮの奴等こんな物作ってたのかよ！」

「そうみたい……」

一応彼等はＢＮの軍服を着ているが、ミシェルを抱えていれば普通に怪しいのが見てわかる。

「さて、この子をどうやって隠そうかなぁ」

――――『リシュードに機体を積み込んだ後直ちに出発してください』

「外で騒ぎが起きているが、大丈夫なのか？」

リシュードの司令室、そして艦長席の横で通信を行なっているセー

シュ。
『心配いりません、それより彼等の目的が気になります、もしかすれば新型機の強奪かもしれません、気をつけてください』
「了解した、引き続き艦内の探索を行なわせる」
通信を切ると、今度は艦内に通信を切り替える。
『艦内に侵入者が隠れているかもしれない、引き続き探索を行なってくれ』
「だとさぁ、めんどくせーよなー。それより艦内を冒険しよーぜ！」
めんどくさそうに艦内を回っている穿真、その横に並んで羅威が歩いている。
「お前は速攻で命令無視か」
「いやほら、冒険がてらに探索するのって良くね？」
「用は言い方だな……」
「そういう事ー、んじゃまずは格納庫に行こーぜ」
「新型の機体を見に行きたいのか？」
「おう！もしかしたら俺達の機体かもしれないぜ」
「……興味あるな、行ってみるか」

――『かいと、きて…たすけて……』
その声は小さく、弱々しい、だが俺にはハッキリと聞こえた。
ミシェル、俺に助けを求めているのか？
……そうだ、俺はミシェルと約束した、約束を破る訳にはいかない。
色々とお世話になったこの基地からおさらばするか。
俺は迷う事なく牢屋の壁を黒剣ぶった斬った、が。
どうして俺はこうも運がついてないのだろうか。
壁を壊して通路に出てみると銃を持った何人もの兵士がまるで俺を待ち構えていたかのように立っていた。。
「今すぐ武器を捨てろ！さもなくば撃つぞ！」
一斉に銃口を向けられる、生きた心地がまるでしない。
「ほぉ、お前が引き金を引くのと、俺が剣を振るうスピード、どっ

ちが速いかな？」
「は……？」
まぁたしかにそんな事言われてもそんな顔しか出来ないだろう。
一応彼等はＢＮの兵士。あのアリスって子に免じて命だけは助けている。
俺が一度剣を振るう度に兵士の持っている銃はスクラップ、ただの鉄クズと化す。
逃げている途中後ろから撃たれたら適わんからな。
壊れた銃を呆然と見ている兵士をよそに俺はすぐさま防御壁を斬ってミシェルの元へ向かった。
セーシュめ、俺に信じろと言ったくせにミシェルを危険な目にあわしやがって。
巨大な剣を片手に全速力で走るとかすかに感じる、段々とミシェルに近づいていくのがわかる。
そして通路が抜け出すと、そこには一隻の戦艦があった。
こんな物を作ってるとは、やはり本格的な戦争が始まっているみたいだな。
俺は人目につかぬよう物陰に隠れながら戦艦へと近づいていて行く。

――戦艦に積み込まれた新型機体を嬉しそうに見渡す穿真。
羅威も少し興味があり、新型の機体を見つめていた。
「カ、カッコイイじゃねーか！」
「見た目だけじゃないよ、性能や出力だって我雲より格段に上さ」
一人の男が整備されている機体の陰から現れる。
「ラース！お前も乗ってたのか！」
「新型のメンテナンスはまだ終了してないからね、ああ、完成が待ち遠しい」
「なあ！この機体って俺専用機なのか？！」
「残念だけど、あの新型機は君達の機体じゃないから」
君達、となると羅威の機体でも無い訳だ、穿真が不満そうにラース

を見つめている。
無理も無い、実は前々から自分だけの専用機がほしいと言っていたからな。
実際エリルは無花果を使っている、穿真の気持ちがわからないこともない。
「私を呼んだかしら」
「っ！？」
ふと横を見るとエリルがこちらを睨みようにして立っていた。
お前にもステルス機能がついてるんじゃないか？と思わせる程隣にいたエリルに気づかなかった。
一体いつからそこにいたんだお前は。
「何よその顔ー、驚きすぎじゃない？」
「少し驚いただけだ、それより何で格納庫にいる、お前も新型を見に来たのか？」
「まぁそんな所、ねえラース。あの機体は誰が乗るの？」
「君達の部隊長さんが乗ると聞いているよ、名前はたしか……」
「クロノ・ウェイカーと言います」
声の方向に４人が向くと、二人の兵士がそこに立っていた。
一人は青年そしてもう一人は少女だ。
「は、初めまして。二宮雪音（にのみやゆきね）と言います！よろしくお願いします！」
ペコペコと頭を下げて皆に挨拶をする雪音。その反動で胸ポケットから携帯電話が落ちる。
急いで拾おうとした時、誰よりも早く携帯を拾ってあげる青年がいた。
「俺は野入穿真、よろしくね」
いつもの数倍美化された穿真がそっと雪音に携帯を手渡す。
「あ、はい！よろしくおねがいします！」
雪音は照れ笑いしながら携帯電話を渡されるとまた胸ポケットにしまう。
今度はその子の横にいる青年が自己紹介を始めてきた。

「ここの部隊長に任命されましたクロノと言います、皆これからよろしくお願いします」
何とも礼儀正しい青年である、どこぞのロリコンとは大違いだ。
その場に集まっていたメンバーは軽く自己紹介を済ませていく。
だが、部隊の人数は6人のはず。今ここにいるのはラースを除いて5人しかいない。
クロノに聞いてみると、どうやら後一人の兵士は女性であり、別々で艦内を探索しているらしい。
「話は戻るけどよ、部隊長の機体って事はあの機体はクロノの機体なのか」
「そういう事、さて。僕はそろそろ行くよ、仕事が山積みだからね」
そう言ってラースは自分の肩に手を当てながらその場を去って行った。
「穿真、機体はもう見ただろ、俺達も行くぞ……ん？」
羅威が格納庫から出ようとした時、格納庫の隅の方に置いてある沢山の荷物の山にコソコソと動く人影が見えた。
「誰かそこにいるのか？」
「誰もいませーん！」
「そうか」
どうやら誰もいないようだ。
などとボケている場合ではない、皆の視線が一斉にその人影に集まる。
すると、その二人の兵士はその場から逃げようとするかのように出口に向かって歩いていく。
その内男性の軍服を着ていた一人の兵士の肩には大きな鞄が掛けられている。
「お前等ちょっと待て」
その言葉に足を止める二人の兵士、軍帽を深く被り目を合わせないようにしているのが明様に怪しい。
羅威は一人近づいていき、穿真達は遠くで羅威の様子を見ている。

「な、なんですか？」
「お前達、隅の方でさっき何をしていたんだ？」
「じ、実は手違いで一つ荷物がこっちに紛れてしまたんすよ、それで回収しに来てたのさ」
「そうか、それでその鞄には。何が入っているんだ」
「えーとっすねぇ、えーと……」
兵士が考えている途中、羅威は懐に入れている拳銃を出すとその銃口を目の前の兵士に向けた。
「今すぐ両手を挙げろ、さもなくば撃つ」
それを見ていた穿真達も羅威の様子を見て駆けつける。
鞄を持っていた兵士が床に鞄を下ろした瞬間、既に兵士の両手の甲には鉤爪がついていた。
兵士は体を回転させるかのようにして羅威の手に蹴りをいれ、銃を蹴り落とす。
「ちっ！」
鋭い鉤爪を光らせ、羅威の顔を狙って鉤爪を突き出してくる。
羅威は何とか鉤爪をかわしていくが、一本の鉤爪が羅威の頬を掠めた。
だが羅威はその隙を狙い、兵士の腕、そして胸倉を掴むと一気に投げ倒す。
完璧に決まった一本背負い、すぐさま兵士は体勢を立て直そうと起きあがろうとする。
顔に傷を入れられたお返しにと顔面を殴ろうと拳を振り上げる羅威。
だがさっきの衝撃で兵士の被っていた軍帽が脱げ、はっきりと顔が見える。
「女っ？！」
羅威がためらっている隙に鉤爪が羅威の腕を切り裂く。
そして羅威の顔面に鉤爪を刺し込もうとした時、一発の銃声が格納庫に響き渡った。
「止まりなさい！撃つわよ！」

エリルが銃を構えると同時に穿真も懐から拳銃を取り出し相手に向ける。
「もうお前一発撃ってるけどな！」
「穿真！一々うるさい！」
エリルが発砲した銃声で鉤爪は止まった。
穿真達が銃を構え、二人の兵士に銃口を向けている。
これで終わったかに見えたがそうはいかなかった。
もう一人の方の兵士が鞄を開けると、鞄の中にはあの少女が入っていた。
兵士は少女を立たせると銃口を少女の首に当てる。
「動くと、撃つ」
銃口を突きつけるその女性は表情を変えずこちらを見ていたが、銃を突きつけられている少女は震えている。
「大丈夫、撃たないから……ね」
ミシェルには聞こえるぐらいの小声でこっそりと伝える兵士だが。
その言葉を信じる信じない以前に銃を突きつけられている事に少女は恐怖を感じていた。
「よくやった！これで形勢逆転だな！」
鉤爪を着けている兵士が喜んでいたその時、格納庫の壁を吹き飛ばし一人の男が現れる。
穴から飛び出してきた男、両手には黒剣が握られており、周りを窺っていた。
「っしゃあ、侵入成功。後はミシェルを探すだけ……って、あれ？」
甲斐斗は目の前に広がっている光景はどうも自分に都合の良いものではないとすぐにわかった。ＢＮの兵士が鉤爪をした兵士に銃口を向けていて、その銃口を向けられている兵士の一人はミシェルの首に銃を突きつけていた。

第17話　誘拐、集合（後書き）

ラース・グレイシム
ＢＮの機体設計士でもあり整備士でもある青年。
特殊な武器や兵器を開発する事も大好きであり、よくアニメや漫画を元に作ったりする。
自分の開発した機体がお気に入りだが、その分機体を破壊されたり傷付けられると落ち込んでしまう。

第18話　組織、力

――壁を突き破ってミシェルを助けに来たのは良いが、この状況はどうもややこしい。
俺が左を向けば5人の兵士が銃を構え、右を向けば一人の兵士がミシェルの首に銃を突きつけている。
万が一という事もある、俺が手荒な真似をしてミシェルを危険にさらすわけにもいかない。
後はBNの兵士がどうするかだ。
「甲斐斗、何故お前がここにいる」
敵の兵士に銃口を向けている一人の兵士が俺に話しかけてくる。こいつはたしか羅威といったな。
「ミシェルを助けに来た、それだけだ」
「……わかった、今はあの少女の保護を優先とする」
やけに素直すぎはしないだろうか。
だが今はそれでいい、こいつが話のわかる奴で本当に良かった。
とりあえず侵入者を排除してミシェルを助ける事が先決だ。

――「お前等、要求は何なんだ？」
羅威が銃を構えながら敵兵士に聞いてみる、だが銃を持っている少女は何も答えない。
だが、鉤爪をつけている女性がそれに答えた。
「俺達の要求はこの子だ！」
静まり返る場内、その状況に鉤爪をつけている女性は何が起こったのかわかっていない。
その時ミシェルに銃を突きつけていた兵士が大きなため息をして呟いた。
「馬鹿、大馬鹿、超大馬鹿」
羅威は呆気に取られたような顔をしていたが、甲斐斗はにやりと笑

みを浮かべている。
次の瞬間、剣を振りかざしながら銃を突きつけている兵士に特攻していく甲斐斗。
鉤爪の兵士は必死に止めようと脅しにかかる。
「お、おい！それ以上動くとこの子の命はっ！」
「殺せる訳無えだろがッ！」
銃を突きつけていた兵士はミシェルからそっと離れて振り下ろされる剣をかわす。
そしてかわした時に被っていた帽子が兵士の足元に落ちる。
それを見てまたも驚く羅威、その兵士も女性で。しかもまだ子供だった。
「ミシェル、怪我は無いか？」
こくこくと小さく頷くミシェル、それを見て甲斐斗もほっと胸を撫で下ろした。
「な、なんで近づいてきたんだ？！動くとこの子が殺されてたかもしれないんだぞ？！」
「自分で言っておきながらまだ気づいてないのか」
「ど、どういうことだ？」
「お前達はミシェルを人質にしてたんじゃなく、この子を誘拐しに来た訳だ。
それなら普通に考えてわかるだろ？その子を殺すはずがないってな」
鉤爪をつけている女性、そして穿真とエリルがようやく理解したかのように頷く。
甲斐斗が剣を構えると、今にも兵士に飛び掛ろうとしていた。
「さぁて、後は侵入者の排除のみだ！」
「ああ、そうだな」
羅威がそう言うとその場にいたＢＮの兵士全員が一斉に甲斐斗に向けて銃を構えた。
「……へ？」

銃声を聞いて駆けつけた兵士達も格納庫に集まり、二人の女性兵士と甲斐斗はすぐに身柄を拘束された。
「甲斐斗、お前も侵入者だろ」
「すっかり忘れてました……」

――「クソーッ！ここから出しやがれー！」
必死にドアを叩くが出してもらえるはずもなく、その場に座り込む女性。
俺達3人は御用となり、艦内にある牢屋に閉じ込められてしまった。
ちょうど俺の牢屋の前にある牢屋に二人の侵入者が閉じ込められている。
「ちくしょー！こんな所に閉じ込めやがって！」
「うるさい……」
その横の牢屋でくつろいでいる少女はいたって普通に落ち着いていた。
「元はと言えば……葵（あおい）が馬鹿な事言うから……」
全く以って同感だ。あんな事を普通に言うほうがおかしい。
女だと言うのに言葉使いは荒いし、頭が悪いし、胸はあるが……って何思ってんだ俺は。
「うるせえなぁ、言っちまったんだから仕方無えだろ！」
「なら黙ってて…うるさい……」
「うるさいのはそっちの方だろ！」
「絶対に、貴方の方がうるさい」
「なっ、何だよ絶対ってぇ！」
もう訳のわからない会話になってきた。
「お、おい。ちょっといいか？」
とりあえず二人と話してみよう、俺はよく喋る方の女性に話しかけてみた。
「ああ、何か用か？」
「お前等ってＮＦの軍人なのか？」

「いーや違うね、俺達はＮＦでもＢＮでも無え、言わば第四勢力って奴だ」
こいつ本当に軍人なのか？と思うぐらい一人でベラベラと喋ってくれた。
どうやらまだ表には公表されてないが、ＮＦ、ＢＮ、ＥＲＲＯＲ、そしてもう一つ別の組織があるらしい。
「それで、その組織の目的って何々だ？」
「っへ！いくらなんでもそこまでは言えないな」
いや、目的ぐらいなら別に言っても構わないんじゃないか？
むしろその前に話した事の方がよっぽど重要な事だと思うんだが。
「それじゃあコレは教えてくれ、お前達は何故ミシェルを攫おうとした」
「あの子が必要だからさ」
「必要？どうしてだ？」
「私が…話す……」
今まで黙っていた少女突然を口を開く。
意外な人物が口を開いた事で俺とよく喋る女性は少し驚いていた。
「あのお方は…神、なの……」
そして想定外の意外な言葉が返ってきて俺は焦った。
たしかにミシェルは何か不思議な力を持っている、それは俺もわかる。
だからって人類の希望にまでなっているなんて当然思っていなかった。
「それは本当なのかっ！？」
「嘘よ……」
ポツリと呟いたその言葉に俺は固まっていた。
だが、しだいに俺の心に『殺意』といえるような感情が込み上げてくる。
少女だからって調子のるんじゃねえぞ……。
「あの子は……人類の希望なの」

……嘘よ。とかまた言ってくるのではないかと思い、しばし間をおいてみる。
そんな俺に反応はせずに少女は語りだした。

――むかーし、昔。この世界は平和な世界でした。
子供達は学校へ行き、大人達は働きに行き、多くの家、命、人、家族がありました。
そこでは人々は平和な日々過ごし、生きていました。
でも、段々と世界は腐ってきていました。人間という生き物は身勝手で、自己中心な生き物だからです。
世界は少しずつ異常になり、深刻な状態になっていきました。
それでも、身勝手な人間達はわがままを言い続けていました。
神は考えました、こんな世界になってしまったのは人間がいるからだと。
平和な世界を望む神は考えた結果、人類を滅亡させる事にしたのです。
皆、平和な日々が続いていたから、自分達が死ぬ訳ない、殺されるわけないと思っていました。
でも皆殺されていきました、泣き叫ぶ子供達、町中に転がる死体、崩壊する都市。
この世界に降りた神は神々しく光に包まれていました、それは巨大で大きく、まるで要塞のようでした。
次々に神、そして天使達は人々を殺していきました、迷いはありません、これは世界の平和の為に思った行動だったからです。
それでも人類は諦めませんでした、人類は初めて力を合わせて、神と戦いました。
その結果、人類は簡単に負けました。しかし、神は人々に最後のチャンスを与えてくれた。
１００年後、１００年後にもう一度この世に現れてこの世界を見る。

その時、平和な世界が作られているのなら人類を滅亡させないと約束してくれたのです。
そしてある人は神を信じました、平和な世界の為、武器の無い、争いの無い平和な世界を作ろうと。
そしてある人は神を憎みました、平和な世界の為、人類の脅威である『神』を破壊しようと。

――「それが今のＮｅｗＦａｃｅと、ＢａｃｋＮｕｍｂｅｒｓなのか？」
「そう、そして１００年たった今。奴等が現れた……」
奴等、ＥＲＲＯＲの事。そうか、そうだったのか……。
俺はこの世界の謎がようやくわかった気がした。
ＮＦとＢＮ、互いは平和を望むがやり方が違う、それがまた争いを生んでいる。
「いや、待ってくれ。それとミシェルはどう関係があるんだ？」
そうだ、俺はミシェルが人類の希望なのは何かを聞きたかった。
まさかこの話と何か関係がある事なのか？そうだとしたらミシェルは一体。
俺はいくつか質問を繰り返したが、それ以上彼女は何も喋ろうとしなかった。

第１８話　組織、力（後書き）

正式名Ｂｅａｓｔ態（第ニ種ＥＲＲＯＲ）
全長―１２～１５ｍ
ＥＲＲＯＲの中でも素早く、機敏な動きが可能なＥＲＲＯＲ。
狼のような体型であり、全身に毛が生えている奴も入れば毛が抜け落ちている奴もいる事が確認されている。
鋭い眼は敵を捕らえると死ぬまで殺しに掛かってくる、鼻も良いために隠れている人間を探すのが得意だ。
鋭い牙と爪、そして強力な顎で敵を切り裂き噛み砕く。
眼の色は赤黒く、生き物の目にはとても見えない。

第19話　救助、犯罪

――最後に羅威に別れを言いたかった……。
既に俺は荷物を纏めて基地を出ていた、懐かしい街中を歩いていき、そしてようやく到着する自分の家。俺はゆっくりと扉を開けて家に入った。
その扉を開けた音に気づいたのか、リビンクから駆け寄る足音が聞こえてくる。
「はーい、どちらさまですか……って愁!?」
エプロンを着け、右手にはお玉を持って現れた母さん。
「ただいま、母さん」
するとリビングから弟と妹の二人の声が聞こえてくる。
「お母さんお腹すいた～」
「すいた～」
俺が靴を脱いで上がった途端にドタドタと慌しい足音がリビングから聞こえてくると、二人はドアの開いている隙間からひょっこり顔を出してきた。
「愁にい！」
「愁お兄ちゃん！」
琉（りゅう）と茜（あかね）が俺を見た途端表情が一気に明るくなっていく。
笑顔で俺の所へ走ってくると二人は勢い良く飛びついて抱きついてきた。
「愁にいお帰り！」
「おかえり～！」
見ない内に少し大きく、重くなったのか、やけに二人が重く感じてしまう。
僕は体に引っ付いている琉と茜をゆっくり下ろすと、二人の手を繋ぎながらリビングに戻る。
母さんは丁度昼食を作っている最中だった。

よほどお腹が空いていたのだろうか、俺からぴょんと跳び降りると台所の方に向かって二人は走り出した。
「お母さんご飯まだ～お腹すいた～？」
「すいた～」
「はい！もう出来たからお席についててね」
「はーい！」
琉は引き出しからスプーンを４つ取り出すといつもの食卓にスプーンを並べていく。
そして茜は４人分のガラスコップを両腕いっぱいに抱えると落とさないように慎重に運んでいた。
茜の抱えている４つのコップをそっと持ち上げると俺は机に並べると、茜はうれしそうに笑顔を見せてくれる。
っと。その前にちゃんとうがい手洗いをしないといけない、すっかり忘れていた。
俺は一人洗面所向かうと簡単にうがい手洗いを済ませてくる。
そして皆が座っている食卓に戻り、席についた。
ん、この香り。どこかで……。
机の上に並べられている料理に目をやると、そこには美味しそうなカレーが皿に注がれていた。
「い、いただきます」
両隣では琉と茜が美味しそうにカレー食べているが俺はどうも食欲がわかなかった。
……羅威、最後の最後で俺は逃げた。何も言えなくて本当にごめん。
あの時俺は泣いてたんだ……本当俺は弱虫だよ、何も言えずにただただ泣いていただけなんだから……。
「愁にいたべないの？」
「えっ？」
気がつくと琉が俺の顔を心配に覗き込んでいた。
「い、いや。食べるよ」
軽く笑ってみせながらスプーンを手に取ると、すっと横からスプー

ンが伸びてくる。
「茜があーんしてあげる！」
腕を伸ばして愁の口元にカレーをすくったスプーンを伸ばしてくれていた。
俺はぱくりと差し出されたカレーを食べる。
「おいしかった？」
「うん、とっても美味しかったよ」
俺が悲しい顔をしているといつもにっこりと笑ってきてくれる琉と茜。
俺は無意識に茜の頭を撫でていた。
その後ご飯を食べ終わると、茜と琉に引っ張られて二人の部屋に連れて行かれた。
そして二人が疲れて眠るまで一緒に遊び続けようと思った、二人の笑顔が少しでも俺の心に安らぎを与えてくれるからだ。
しかし、いつしか俺は遊びまわっている二人を見ながら体横にして腕枕をしていた。。
やっぱり子供のパワーはすごい、二人は無邪気に、元気に遊びまわっているのに俺と来たらもう疲れて……。

――――「っ…あれ……」
頭がボーっとしている、部屋にかけられている時計を見ると3時になっている。
俺がその場から立ち上がろうとすると、やけに体が重い気がした。
よく見ると俺の服を掴んだまますやすやと茜と琉眠っている。
二人の手をそっと解くと、眠そうに目を擦りながらリビングへと向かう。
そこには母さんが一人食卓に着いていた。
「もう、愁はすぐに顔出ちゃうんだから。琉と茜に心配させちゃだめでしょ？」
「あ、また顔に出てたのか……」

俺は母さんと向かい合うように席に着くと、母さんの方から話かけてくれた。
「軍で何かあったんでしょう？話してみて」
「それが……辞めたんだ、軍」
「えっ？」
「俺が違反ばかりするから、軍を辞めさせられたんだよ」
「そう……」
母さんは俺を怒ろうともせず、ただただ俺を見つめていた。すると、母さんがうれしそうな表情を浮かべている。
「愁には悪いけど、お母さんはその方が嬉しいな」
そう、母さんはずっと俺の軍の入部を反対していたからだ。
「愁、貴方には弟と妹がいるの。貴方がいないと二人はとても寂しがってるのよ。
愁にいはまだ帰ってこないの？愁お兄ちゃんと遊びたいよ！……って」
「母さん、俺は軍を辞めたんだ。もうこの家から離れないよ」
俺はそっと微笑みかけると、母さんの両手を握り締めた。
そこで改めてわかる、母さんの手はボロボロで、とても小さく感じた。

――「そうだ、俺ちょっと行って来るね」
「えっ、何処に行くの？」
「バイクにでも乗って走りたいんだ」
そう言って俺は玄関においてあるヘルメットを手に取ると家を後にした。
ガレージを思いっきり上げるとそこには新品同様のバイクが置いてあった、母さんがいつも手入れしてくれていたんだろう。
バイクにまたがってヘルメットを被り、バイザーを下ろす。
鍵を差し込むと心地よいエンジン音が鳴り響き、振動が体全体に伝わる。

たまには息抜きも必要だ、羅威も言ってたじゃないか、自分を責めるな……って。

――アクセルを全開にして一気にガレージから出て行く愁。
久しぶりのバイクはやはり良い、直接風を感じられるからだ。
愁の行く道は全て信号は青、バイクは止まる事無く突っ走っていく。
と思ったが、やはり信号に捕まってしまった。
それにしても今日は本当に良い天気だ、こんな日にバイクに乗れる事に少しうれしさを感じていた。
その時、ふとバックミラーを見ると、そこには一人の少女が写っていた。
よほど急いでいるのだろうか、息を切らせながら一生懸命走っているように見える。
でも……何か様子がおかしい、少女が蹲き地面にこける、だが少女はすぐさま立ち上がると走り出す。
そのまま少女は歩道を走り、信号が赤にも関わらず道路を横断しようとした。
横から来ているトラックに気づかずに……。
愁はアクセルを回し、すぐさま少女の元へとバイクを走らせた。
道路を半分渡っときにようやく少女は気づく、横を向くと一台のトラックが自分目掛けて向かって来ていた。
「危ないッ！」
少女がトラックに轢かれそうになった時、愁が少女の洋服を掴む。
そして半ば強引に持ち上げ、何とかトラックとの衝突を防いだ。
だが少女をつかんだ時の衝撃でバイクが不安定となり、体勢を崩してしまう。
愁はバイクから振り落とされる時、少女に怪我をさせないよう強く抱きしめた。
背中から道路に転げ落ち、強く体を道路に叩きつけてしまう。

――痛みがあるのは生きている証拠と聞くが、生きているのかどうかわからない。
「痛っ、痛てて……」
背中が痛い、ヘルメットしているのに頭も痛い。
「い、痛い。です……」
すっかり忘れていた、俺は腕を放すとその少女に無事かどうか聞いてみた。
「君、大丈夫？怪我はない？」
「あ、ありがとうございます！何とお礼の言葉を申していいのやら……」
「ああ、いえ。無事で良かったですね、もう信号無視をしたらだめですよ、それじゃ」
どうやら少女に怪我は無かったらしい、俺は自分の乗ってきたバイクを探す。
ん、あそこの電柱周辺に機械の破片が散乱してる、悲惨だなぁまるで鉄の塊じゃないか。
さて、俺のバイクは一体どこにあるのだろうか。
「ってそんな！俺の、俺のバイクが……！」
バイク本体は煙を上げながら今にも火が付いて爆発しそうな勢いだ……。
「あ、あの！」
俺が悲しみ暮れている所にあの少女が俺に話しかけてきた。
「ん、何？」
「私を助けていただきたいのです、お願いします」
「はい？」
その時だった、一発の銃弾が俺の顔をかすり、煙を上げるバイクに命中する。
それが火種となりバイクは一瞬にして爆破、炎上、俺はその光景を唖然と見ていた。
「あ、あの！早く逃げないと……！？」

――放心状態の愁と少女の前に黒いスーツを来た二人組みの男が現れる。
そして男達は徐に懐から銃を取り出そうとした・・・。
が、愁はその場で立ち上がり、二人の男の顔面を殴り飛ばす。
「君、名前は？」
その光景に少女は目を大きくして驚いていた。
「わ、私ですか？フィリオと申します」
「フィリオさん、貴方は彼等から命を狙われていますね。お守りします」
これだけ事が起これば愁も理解できる。
もう何で命狙われているの？とか、もうそんなの聞きはしない。
とにかくさっさと家に帰りたい、愁はその事で頭が一杯だった。
「えっと、ここから北にある私の家に行って欲しいのですが……」
「うん、わかった。それじゃあ行こうか」
愁は少女を抱き上げると、背中の痛みをこらえながら走り出す。
「ごめん、ちょっとヘルメットとってもらっていいかな」
そう言うと少女は俺のヘルメットはゆっくりと取り外す。
「すみません、私のせいで貴方の大切なバイクが……」
「バイク？ああ、仕方無いよ。それに君を助ける事が出来たから別にいいさ」
そうだ、バイクがどうした。少女を助ける事が出来たんだ、これは素直に喜ぶべきだ。
「あ、そこを左に曲がってください！」
俺が言われた通り左に曲がる、すると俺の目の前にはこの街で一番大きいとも言える程の豪邸がそこにはあった。
広い敷地、大きな壁、大きな門。どうやらこの子はこの家の子らしい。
俺はフィリオさんを門の前で下ろすとすぐにその場から立ち去ろうとした。

「待ってください、お礼をしたいのですが……」
「お礼？そんなの別にいいよ、今日はもう帰りたい気分だから」
「でしたら明日！明日またここに来て下されますか？」
どうやら彼女はどうしてもお礼がしたいらしい。
「何時でも来てくださいね」
俺はフィリオさんに明日行くと言うと走って自分の家に戻っていった。

――その後、家に帰り速攻で自分の部屋に戻る。
琉と茜が俺の部屋に入ってきてはまた遊んでほしいと言ってきたが。もう俺にそんな体力残っていません、お願いです寝させてください。また明日沢山遊んであげるから、だから今日だけは休まして欲しいと説得、わかってくれたようだ。
ああ、母さんにバイクの事何て言えばいいだろうか。そんな事を思いながら俺は眠りについていた。

――それから一日がたち、朝を迎かえる。
俺は起きると一人リビングに向かう、どうやらまだ皆起きていないようだ。
実は昨日の出来事は全部夢じゃないのか、とか思いながら朝のニュースを見ていたら昨日の事件が報道されていた。
『破損したバイクの検証結果がようやく出たもようです、それによりますと犯人の名前は魅剣　愁１８歳。
証言によりますと魅剣容疑者はテロリストを手助けした後警官を殴り飛ばし、テロリストの一味と逃亡したと見られています。
なお、このテロリストは昨日あった第２旧本部の爆破をした者達と関係があるとの事、現在調査を進めています……』
なっ、何を言っているんだ？
テロリスト？俺が昨日テロリストを手助けした？俺は昨日少女を助けただけじゃ・・・。

だがその時だった、俺の家のドアを叩く音が聞こえてくる。
「はい～、こんな朝早くどちら様ですか……」
俺はテレビの電源を消すとその場に隠れながら玄関の様子を窺った。
母さんは既に着替えていたが眠そうな顔をして玄関へと向かう。
ドアの鍵を開けてドアを開けると、そこには数人の警察が立っていた。
「魅剣愁はいるか？」
「ええ、いますけど……どうかしたのですか？」
「逮捕状が出ている、魅剣愁を出せ」
「えっ、どういうことですか。よくわからないんですけど……」
「貴方のお子さんは本部襲撃事件のテロリストの仲間かもしれないということです、中に上がらせてもらいますよ」
「ちょっと待ってください！いきなりそんな……っ！」
母さんが必死に止めようとしたが警察はどんどん家の中に入ってくる。
まさか、あの時助けた少女がテロリストだったというのか？
今はそんな事を考えている暇は無い、どうする、全てを話して無実を証明するしかない。
俺はリビンクから出て警察の元に向かった。
「俺ならここにいます」
すると、俺に気づいた警察は懐かある物を取り出す。
犯人を捕まえにきたのだ、手錠をはめるんだな、と思っていたが甘かった。
警察が出してきたのは拳銃だった、俺は一瞬自分の目を疑ったがそれは紛れもない拳銃だ。
「ちょっと待ってください！抵抗はしませんから……」
俺はすぐさま両手を挙げて降伏したが、警察はニヤリと不敵な笑みを浮かべる。
まさか、本当に撃つはずがない。アレは脅しに過ぎない。俺は自分の心の中でそうであると願った。

「死ね、魅剣愁」
「えっ」
朝、その日の天気も快晴だった。
そんな平和な朝に一発の銃声が鳴り響いた時、警察の撃った銃弾は俺の左肩を掠めた。
俺はその時ようやく理解できた、こいつ等は俺を逮捕しに来たんじゃない、殺しに来たんだと。
俺は血が流れる左肩を右手で抑えながら隣の部屋に走った。
そして俺を逃がすまいと数人の警察は何発も銃を発砲する。
冗談じゃない、本当に冗談ではすまない。
俺はその部屋の開いている窓から飛び降りる。
ちなみにここは2階、彼等は俺が部屋に隠れていると思い捜索していたが。
俺は地面に無事着地すると家から逃げるようにして走った。
どうなってる、俺は昨日人助けをした、ただそれだけなのに・・・。
このまま走ったっていずれは見つかって殺される、隠れようにも何処に隠れればいいのか……。
『何時でも来てくださいね』
昨日助けた少女の声が俺の頭に流れる。
そうだ、彼女だ、彼女が全てを知っているはずだ。
俺は左肩の痛みを堪えながら昨日行った彼女の家に向かった。
「着いた……ここだ」
大きな壁に大きな門、間違いなくここだ。
俺はすぐさま壁についてあるインターホンを連打した。
『はい、どちら様でしょうか?』
女性の声が聞こえてくる、だが昨日の少女の声じゃない。
「昨日フィリオという少女をこの家まで送った者です!彼女に会わせてください!」
『無理です』
「えっ……ええっ?何故ですか!」

『フィリオ様は現在就寝中です、ですから無理です、また時間がたってから起こしになってください、それでは』
「ちょっと待ってください！時間が無いんです！」
何も聞こえてこない、き、切られた。
さすがに我慢の限界だ、ここにいればいずれ彼等に見つかって殺されてしまう。
俺は家の敷地を囲っている大きな壁を見る、壁の高さは大体2メートル位……。
「よっと！」
すぐさま壁をよじ登ると敷地内に侵入。
とにかく彼女から話しを聞きださないと気が済まない。
俺はすぐさま扉を開けて豪邸に入っていく。
広い、まるでお城の中のように豪華で優雅で美しい。
っと、早くフィリオさんに会いにいかないと……。
「ん～、ねむー」
そこに、一人の少女が俺の前を横切っていく。
上はだぼだぼのパジャマを着て、下は下着一枚の姿、左手にはぬいぐるみを持っている。
髪の色、顔立ち、身長……間違いなくこの子だと確信した。
「フィリオさん！」
「ふにゃ？」
愁はすぐさまその子の側に駆け寄り、両肩を掴む。
「一体どういう事なんですか？！貴方はっ……！」
すると少女は愁を睨みつけながら肩を掴んでいる両手を払いのける。
「汚い手で触るなっ！」
「えっ？」
昨日会った時はおしとやかでお上品だった少女が今では全くの別人のような口調で喋ってくる。
「あなた何者よ！あーわかった、さては泥棒ね、そうでしょ！」
「え、いや、泥棒じゃないって。昨日会った事覚えてないんですか

？」

「はぁ？あなたみたいな人顔も見た事無いわよ」

「そんなはずはない！昨日確かに俺と……」

その時、俺の後頭部に何かが当たっているのに気づいた。

ゆっくりと後ろに振り返ってみると、一人の女性が俺の頭に銃を突きつけていた。

俺は……これからどうなるんだ……。

第１９話　救助、犯罪（後書き）

正式名Ｗｏｒｍ態（第三種ＥＲＲＯＲ）
全長―１５～？？？ｍ
ＥＲＲＯＲの中で特に大きく、頑丈な甲殻を持つＥＲＲＯＲ。
芋虫のような形をしており、全身は厚く頑丈な甲殻に守られている。
口の辺りから何本もの触手を伸ばし、一本の巨大な触手から何十本もの細い触手を出す。
触手には高濃度の酸が滴り落ちており、その酸は数滴で戦車の装甲に軽く穴を開ける程である。
また、赤い触手は管のようになっており、酸を吹き出す事も出来れば人間の臓器を吸い上げる事もするが、
何故人間の臓器を吸うのかは未だわかっていないが、彼等の動力源になっているのではないかと推測されている。

第２０話　監禁、救出

「動くと撃ちますよ」
今日はやけに銃を突きつけられる事が多い、そんな事を思いながら俺は銃を握っている女性を見つめていた。
「俺は話をしに来ただけです、怪しい者ではありません！」
「貴方さっきインターホンで話した方ですよね？それなのにこんな朝早く無断侵入をしましたね」
「うっ……そ、それは。もう俺に時間が無いんです！
フィリオさんに会わせてください、そうすれば俺が怪しい人で無い事がわかってもらえます」
必死に説得してわかってもらおうと思い話してみる、だが銃を持っている女性は俺の言葉を信じてはくれなかった。
「貴方のような部外者に会わせる人はいません、それと。貴方を生かしてここから出す訳にもいきません」
「い、今ここで撃つんですか？いいんですか、子供が見てますよ」
本当はこんな事言いたくはない、だけど今は生き残る為に何かしら手段をとらなければ。
「なっ、ちょっとアンタ！今私を子供扱いにしわたわね？！」
少女の方に目をやるとぬいぐるみの首を力一発握り締め、俺を睨んでいる姿があった。
「もう撃っちゃっていいわよ！私別に平気だから」
「わかりました、殺します」
そんな簡単に殺すとか言わないでください！
女性が愁に狙いを定めようとした時、愁はその手を蹴り上げる。
そしてその場で跳んで宙を舞う銃を右手でキャッチすると華麗に着地、そして自分に銃を向けていた女性に銃を向ける。
その余りの速さにその場にいた二人は何が起こったのかよくわからなかった。

「会わせてください、でないと撃ち、ま…っ」
急に激しい目眩が愁を襲う。急に足の力が抜けてふらついてしまう。
そのまま床に膝をつくとその場に倒れこんでしまい、薄らと意識が消えていく……。

――そして気が付くと、俺はふかふかのベットの中で目を覚ましていた。
全身に痛みが走る体を起こして周りを見渡すとそこには綺麗な室内が広がっていた。
「ここは……痛っ」
痛む左肩に目をやると、左肩は綺麗に包帯で巻かれてある。
すると、突然部屋のドアは開き、一人の少女とメイドが室内に入ってきた。
「魅剣様！お気づきになられましたか！」
それは彼女だった、昨日であったフィリオさんだ。
「申し訳ありません、私の妹が多大なご迷惑をおかけして……」
フィリオさんの話によると、今日朝に会った子はフィリオさんの双子の妹らしい。
そう言われてみると髪型や眼つきは少し違っていたような。
「ん、どうして君は俺の名前を知っているの？」
「今朝のニュースを見させていただきました、そしたらそこに昨日の出来事が書いてあり、魅剣様の名前が……」
どうやら今朝のニュースは本当らしい、俺の名前が朝から放送されるなんて。
「あの、魅剣様とかで呼ばなくていいよ、愁って呼んでくれたらいいから」
「そ、そうですか？でしたら愁さん。私は貴方に謝らなければなりません」
深刻な顔をした彼女は俺に深く頭を下げた。
「貴方をこの様な事に巻き込んでしまって、全て私の責任です。本

当に、本当に申し訳ありません……」
「フィリオさん、頭を上げてください」
彼女は顔を上げると、その瞳は微かに潤んでいた。
「俺は貴方を助けた事に後悔していません、そして貴方は俺に謝るような事は何一つしていません。
だからそれ以上頭を下げないでください、俺はただ真実を知りたいだけなんです」
「愁さん……」
「昨日ＢＮの第２旧本部を爆撃したの貴方達なんですか？」
「ええ、私達の仲間が爆破しました、安心してください死者はでていません」
「えっと、昨日はどうして追われていたんですか？」
「私が皆に黙って外出をしていた所ＢＮの兵士にばれてしまって……」
「そ、それじゃあ君は」
その時、タイミングが悪く愁の腹の虫が鳴いてしまう。
急に恥かしくなり、愁の顔が真っ赤になると、それを見てフィリオは小さく笑みを見せた。
「お腹を空かしていたんですね、少し待っていてください。すぐに食事を持ってこさせますので」
「す、すみません。ありがとうございます」
彼女が部屋の中で待機していたメイドに合図をすると女性は深くお辞儀をした後に部屋を出て行った。
「あの、君は一体何者？」
「私の正体を知っても後悔しないですか？私の正体を知れば貴方はもう二度と向こうの暮らしに戻る事は出来ないですよ」
「俺は君の正体を知る為にここまで命張って来たんだから、聞かせてください。君の正体」
この時が俺の運命の分かれ道だったんだろう。
でも俺に迷いは無かった、今までの出来事は彼女の正体にあると確

信していた。
「わかりました……」
そう言うと少女はさっきまでの幼い顔ではなく、真剣な顔つきで俺の目を見つめる。
「私の名前はフィリオ・リシュテルト。Ｓａｖｉｏｒｓの者です」
Ｓａｖｉｏｒｓ、そしてリシュテルト家。やはり聞いたらまずかった事だった。
だが今さら後悔はしない、しかし。まさかＳａｖｉｏｒｓの一員がこの第２旧本部にいるなんて。
「貴方達の事は聞いた事があります、俺は一昨日までＢＮの兵士でしたから」
「愁さんはＢＮの兵士だったのですか？」
「ええ、ですが俺が命令違反ばかりしているので軍を辞めさせられましたけどね」
「そうなのですか……」
「えっと、Ｓａｖｉｏｒｓ、今年になってから表に現れだしたＮＦ、ＢＮに並ぶ新組織ですよね」
「組織は組織ですが、大した力をもっていない組織です、軍事力はＮＦやＢＮに到底敵いません」
「……教えてくれませんか、Ｓａｖｉｏｒｓの。貴方達の目的を」
そう、実はまだＮＦやＢＮはＳａｖｉｏｒｓの目的がわかっていなかった。
ＳａｖｉｏｒｓはＮＦとＢＮ両方とも仲が悪い訳ではなく、軍事企業関係等ではお世話になっているらしい。
だがただの商売屋でもない、彼等にはある目的がある為にＮＦとＢＮに近づいた。
その目的は何なのか、その目的は・・・。
「愁さんは、１００年前にこの世界を滅ぼそうとした神をどう思いますか？」
質問を質問で返され少し戸惑いを見せるが、何とか答えてみせた。

「神……ですか、人類の脅威ですよね。あんな恐ろしい兵器がこの世界のどこかにあると思うと怖いですね」
「そう、神は恐ろしい兵器、神はこの世界を滅ぼそうとしました。
ですが、神は我々人類にチャンス与えてくださいました、この意味がわかりますか」
「神が俺達を生かした訳ですか、何故生かしたんでしょうね」
「神は兵器とお考えでしょう、私もそう思います。ですがあの兵器は人格をもっていました。
これは私の勝手な推測かもしれませんが、はるか昔か、それとも他の世界で神という名の兵器が創られたんだと思います。
ですが、これを創り出した理由は一つ、世界平和の為。世界を守る為だと思うんです」
「ん、それなら神は世界を守る為に人類を滅ぼそうとした？何か矛盾していますね……」
「ええ、ですが神は人を生かした。これは紛れも無い事実です。
愁さん、神は１００年前、１００年後また現れると人類に言って消えました。
ですが今年、丁度１００年目だと言うのに神は姿を表さない、それ所か正体不明の生物が出現しましたよね」
「ＥＲＲＯＲ……ですか」
「そうです、ＥＲＲＯＲは紛れも無く人類の、世界の敵です。ＥＲＲＯＲは数を増やして次々に街を襲っていると聞きます。
もしかすれば人類はＥＲＲＯＲに負け、滅亡するかもしれません。
しかし、それを回避する方法が一つだけあります、それは……」
「未だ眠っている神を起こし、世界の為にＥＲＲＯＲを排除させる事、ですか？」
「その通りです。あ、すみません、長話になってしまいまして」
その時、話が終えたタイミング良くメイドさんが食事を持ってきてくれた。
おぼんには豪華な料理が並べてあり、フィリオが一つの皿を取ると

愁の元まで持ってきてくれる。
見るからにおいしそうなスープ、フィリオはスプーンでそのスープを救い上げると愁の口元に近づけてくれた。
「はい、あーんしてください」
「あっ……」
その光景に愁は昨日の出来事を思い出す、茜が俺にカレーをすくってくれた時の事が。
そして思い出した、今俺はＢＮの爆撃したテロリストの一味とされていると。
国家反逆と言っても間違ってはいない、もしかすれば今頃琉は、茜は…母さんは……。
不安で心配になるとやはり顔に出てしまう愁。
その心配そうな顔を見てフィリオが心配してくれた。
「どうかなされました？」
「あの、母さんや弟達は無事なんでしょうか」
「……ニュースによりますと、軍に身柄を拘束されている様でした」
「なっ！？」
愁がベットから起き上がろうとした時、フィリオが愁の両肩を掴んで押し戻す。
「今私達の方で救出をしようと考えています、ですから今は体を休めてください！」
あっさり止められてしまうと、フィリオはお皿のスープをスプーンですくうとまた愁の口元に近づける。
「じ、自分で食べるから大丈夫だよ」
「むっ、そうですか」
何か悪い事をしてしまった気分だ、彼女は寂しげな表情で皿にスプーンを置く。

――食事が終わると食べ終えた食器を片付けるメイド、また部屋を出て行ってしまう。

「これから俺はどうなるんですか……」
ベットの横に座っている彼女に問いかけてみた。
彼女達の正体を知ってしまったのだ、もう自由に行動はさせてくれないだろう。
「貴方の身柄は私が責任もってお守りしますので、安心してください」
「安心できません」
「えっ？」
「母さんと琉と茜、３人を助け出すまでは安心できません。フィリオさん、俺も救出しに行っても構いませんか？」
「そ、それ……」
愁のそこの言葉にフィリオは眉をひそめた。
たしかに愁が母親を助けたい気持ちはよくわかる、だが彼はＢＮの兵士だった男だ。
存在を知られ、居場所を知られた彼をＢＮの本部に戻してしまって本当に大丈夫なのか。
これは余りにも危険すぎる、もし愁が裏切ってＢＮの立場に着けば……。
「わかりました、貴方にも協力してもらいます」
「本当ですか！？ありがとうございます！」
愁は満面の笑みをしながらフィリオの両手を握り締める。
それに答えてフィリオも軽く笑みを見せた。

――――作戦決行は夜に行なわれた、暗い曇り空の下で愁と３人の兵士が集まっていた。
二人は女性でもう一人は男性のようだ、俺は集まってくれた３人に声をかけてみる。
「あの、無理言って来てしまって何か申し訳ありません……」
すると、一人の女性が笑顔で俺の方を向いてくれるとゆっくりと近づいてきた。

「全然大丈夫やで、家族を助けたいって気持ちはよーくわかったから」
独特の喋り方で話しかけてくる女性、そしてもう一人は静かで冷静そうな女性が近づいてきた。
ん、あれ。この人はたしか今朝俺に銃を突きつけた人だ。
「魅剣、私はお前を信用していない、少しでも妙な素振りを見せたら殺す」
ここまでハッキリと殺すと言われたのは初めてかもしれない。
俺が唖然としていると彼女は俺に背を向けて歩いていく。
そして青年は俺に背を向けたまま何も喋らなかった。
俺と唯一会話をしてくれるのはこの女性だけだ。
「そ、それで。何か作戦などはあるんですか？」
「んーとなぁ君はこの建物内は結構詳しいやろ？」
「ええ、一応ココの兵士でしたから」
「そしたら君に案内してもらおかな、３人がいる部屋は3階にある監禁室らしいから」
「か、監禁室！？どうしてそんな部屋にいるんですか！母さん達は何もしていないのに！」
「う、うちに言われてもなぁ。とにかくそこにおるらしいから、行けるか？」
「任せてください、絶対に助け出します」
愁はまだＢＮを信じている、彼はＢＮを信じて軍に入っていたのだから。
大丈夫、助け出すだけだ、何も心配無い、琉、茜、そして母さん、すぐに助け出すからね。

第２０話　監禁、救出（後書き）

フィリオ・リシュテルト
ＳＶのお嬢様であり、主格の一人。
リシュテルト家の次女であり、妹と兄がいる。
見た目は大人しいが行動力は人一倍あり、思いたった事はすぐ行動に移す。
現在『神』を呼び起こす為に必要な物や人を探し集めている。

第２１話　信じた者、孤独

監禁室は3階に東と西の二部屋あり、二組に分かれて行動する事に。
愁は運悪く銃を突きつけてきた女性とペアを組む事になってしまった、どうやら監視の為らしい。
「あの、名前はなんて言うんですか？」
「名前か、ラティスとでも呼んでくれ」
「わかりましたラティスさん、俺に着いて来てください」
愁は何か懐かしく感じた、雰囲気が少しセーシュさんに似ている気がしたからだ。
その分とてつもなく危険な感じも彼女から漂っていたが。
「あの、警備の人に見つかった場合はどうするんですか？」
「殺す」
「こ、殺す！？」
「安心しろ、私の持っている銃はサイレンサーが着いてある」
安心する所が違うような。
ちなみに何処から侵入するのかというと格納庫からだった。
格納庫の中にある非常階段を上っていけばあっという間に三階に上れる、だが警備兵も多く気づかれずに向かうのは難しい。
愁とラティスは警備兵にバレないよう慎重に格納庫に移動していくと、ふとラティスの右手に視線が行く。
ラティスさんの右手には本当にサイレンサーの付いた銃を握り締めていた。
元はここの兵士だった愁、仲間だった兵士を殺されたくはない。
それから何とか警備兵に見つからないように移動していき、そしてようやく格納庫内に入ることが出来た。
「さすが元ＢＮ兵士、基地内に詳しいおかげで今の所誰にも見つかっていない」
「はい、後は非常階段を上るだけです」

そう言って非常扉を開けた時、非常階段に一人の警備兵が立っていた。
それに気づいた二人、ラティスと警備兵はほぼ同時に銃口を向ける。
すると、銃を持っている警備兵が愁の顔を見て驚きを見せた。
「なっ、魅剣じゃないか！？お前どうしてこんな所に」
驚きを見せたがやはり銃口は愁に向けたままだ。
すると何を思ったのか愁はその警備兵を説得しだした。
「家族を助けたいだけなんです。お願いです、見逃してはくれませんか？」
「お前みたいなスパイを信用しろと？何言ってんだ？」
ラティスには理解しがたい行動にも見えたがその場は黙っている。
「それは違います！俺はスパイなんかじゃないんです！」
「だったらお前の後ろにいるその女性は誰だ」
「この人は俺と一緒に家族を助けに行くのを手助けしてくれているんです。
大体ＢＮはそんな民間人を監禁するような組織ではないはず、平和の為の組織ですよね」
無駄に血を流す戦いは避けたい、この兵士も愁達と共に戦ってきた仲間なのだから。
「家族を助けるだけなんです、お願いします！」
愁は深く頭を下げて警備兵に頼む、それを見ていた警備兵はため息を吐くと愁に向けていた銃を下ろした。
「……実は俺、お前がスパイだなんて信じられなかったんだ。
お前はいつも正直者だったからな、だから俺はお前を信じる、ここは見逃してやるよ」
「ほ、本当ですか？ありがとうございます！」
警備兵の右手を握り締めて感謝の握手を交わす愁、仲間の血を流さずに済んで本当に良かった。
そう思いながら愁は兵士の横を素通りする。
「後はここを上がるだけです、早く行きましょう！」

「そうだな、行くか」
ラティスも銃を下げて愁の後を追うように階段を上ろうとした時だった。
愁が階段を上っていこうと一段足を前に出した時、非常階段に銃声が鳴り響いた。
銃声と言ってもあの火薬が爆発する音ではない、とても綺麗で静かな音だ。
「ラティスさん?」
愁がその音に反応して後ろに振り返る。
そこには頭から血を吹き出しながら壁にもたれ掛かっている警備兵の姿があった。
手足は痙攣しながら少し動いているが顔は既に血で真っ赤に染まり、目が開いたまま動かなくなっていく。
「そんな……どうして発砲したんですか!?」
「早く上がるぞ」
ラティスは何事も無かったかのようにまた階段を上がろうとする。
愁を追い抜いて前に出ようとした時、愁がラティスの腕を掴んだ。
「どうして彼を撃ったんですか!彼は俺達を見逃してくれたんですよ!」
「見逃した?違うな、奴は私が背を向けた所を狙おうとした」
「な、何を言っているんですか、彼は俺達を見逃して……」
「それなら奴の銃の引き金を見てみろ」
ラティスにそう言われて愁は壁にもたれ掛かりながら死んでいる警備兵に目を向けた。
警備兵の人差し指を見ると、警備兵の指は銃の引き金を引く所で硬直して止まっている。
そしてラティスは愁の顔を自分の方に向けさせる。愁はラティスを睨んでいたが彼女は冷静だった。
「何故奴が最初に撃たなかったかわかるか?お前は銃を持っていない、だが私は持っている。

そして私はお前の後ろにいた、もし奴から先に発砲したとしても死ぬのは魅剣、お前だ。
私と奴が同時に発砲したとしても奴の銃弾は私には当たらずに私の前にいたお前に当たるだろう。
武器の無いお前を殺しても意味が無い、もし撃てば私に殺されていたのだからな、これでわかったか？」
「で、でも。彼は俺を信じてるって……」
「何馬鹿な事を言っている、お前はもうＢＮの兵士じゃない。反逆者であり、ＢＮの敵だ」
「でも、俺は……」
「無駄口を叩く暇は無い、他の兵士に気づかれる前に行くぞ」
そう言うとラティスは一人階段を上っていく。
それでも愁は信じられなかった、殺された兵士に申し訳ない気持ちで一杯だった。

――「監禁室はどこだ？」
「たしかあの部屋だったと思う」
それは一番端にある部屋だった、ラティスと愁はその部屋の前まで移動する。
部屋の前につくと辺りに人の気配は無い、急いで部屋の中に入ろうとしたがドアを開くには横にある装置にＩＤカードを入れなければならない。
「ここはＩＤカードが必要だから、俺の持っているカードで開けばいいんだけど……」
ポケットから自分が使っていたＩＤカードを取り出し、機械に入れてみる、だがロックは掛かったままドアは開かなかった。
「やっぱり俺のじゃ無理か……」
「それなら、さっき殺した兵士からＩＤカードを奪ってくればいいだろ」
「あっ、わかりました、取りに行って来ます」

もう一度仲間の死体の所に行かないといけないなんて。
ラティスはその場で誰か来ないか見張る為に部屋の前で待機、
俺はすぐに非常階段を下りると兵士の死体の上着ポケットからＩＤカードを抜き取る、そして急いで階段を駆け上がって行った。
「ありましたよＩＤカード、これでこの部屋に……」
部屋の前に戻ると、そこにはラティスの姿は無かった。
愁が部屋の前から離れてたった1分ぐらいだろうか、たったそれだけの間にラティスの姿は消えていた。
少し通路を移動して探してみるがラティスの姿は何処にも無い。
仕方が無いので愁は兵士のＩＤカードを使い一人で監禁室に入ることにした。
一体彼女は何処に行ってしまったのだろうか、そんな不安を抱きながらカードを装置に差し込む。
部屋の扉が開くと、そこに広がる光景に目を疑った。
そこにいたのは愁の母だった・・・だが、両手に手錠を付けられて両手は天井からぶら下がっている鎖で吊り上げられていた。
そして顔には青く腫れたアザがいくつもあり、口元には血まで付いていた。
「かあ…さん……？」
返事が無い、愁の頭の中は真っ白になっていた。
「しゅ、う」
かすかに聞こえる声、意識が朦朧とする中愁の名前を呼んだ。
「母さん！」
「おっと、動かないでもらおうか」
愁が母の元に駆け寄ろうとした時、男の声が愁の足を止めた。
暗い部屋の奥から現れる数人の兵士達、手には銃を握り締めている。
「まさか本当に来るとはな、魅剣一等兵。待ってい――――」
「これはどういう事ですか？！」
兵士が最後まで話し終わるまでに問いかける、この今の状況が理解できない。

「どうしてこんな事をするんですか、母さんが何をしたと言うのですか！？」
「お前の居場所を吐かせていたんだよ、っま結局何も喋らなかったがな」
「何の罪も無い人をこんなに殴って……こんなに傷つけて……貴方達は何も思わないのですか？！」
「それはこちらも同じだよ魅剣、貴様ＳＶ（Ｓａｖｉｏｒｓ）のスパイだったのだろう？
お前達が仕掛けた爆弾で何人のＢＮ兵士が死んだと思っている」
その言葉に耳を疑った、あの時フィリオはたしかに死者はいないといったはずだ。
「死んだ？死人はいないんじゃ……」
「何寝ぼけた事言ってんだ、格納庫を爆破されて死者が出ないとでも思ってるのか？
……今まで仲間だと信じていたお前に、こんな形で裏切られるなんてな」
「ち、違う。俺は裏切ってなんか無い！俺はその件に関しては何も知らないんだ！」
「そうか、だがＳＶの奴等が何処にいるのか、居場所は知っているよな？」
銃を持った一人の兵士が愁の母に近づいていき、両手に付いてある鎖の鍵を外す。
愁の母は力無く地面に倒れこむ、だが兵士はその髪をつかむと強引に引っ張り上げた。
そして銃口をこめかみに当てるとにやりと不敵な笑みを見せた。
「や、止めろ！母さんを殺さないでくれ！」
「それじゃあ奴等の居場所を吐け、そうすれば放してやる」
「そんなっ！」
「言わないのか？それなら……」
兵士は銃口をずらし引き金を引いた、銃弾は頭ではなく足を撃ちぬ

く。
「あああっ！ぐ、っ……」
余りの激痛に悲鳴が出てしまうが、兵士は構わず引き金を引こうとした。
「わかった！全て話す！話すから母さんに危害を加えるのだけはもう止めてくれ！
頼む、お願いだ……もう全て話すから！」
「ほぉ、親思いの良い子だ。それじゃあ全て話してもらおうか」
愁の目からは涙が零れ落ちていた、全身傷だらけで、しかも足から血を流している母の姿を見ると絶望が自分を襲う。
全部自分のせいだ、あの時一緒に逃げていれば、自分だけ逃げて母さんを置いて行ったから……。
「だから約束してくれ、話したら……俺達を逃がしてくれると」
「良いだろう、これは取引だ。ＳＶの情報を全て言えば見逃してやる」
俺はもう傷つく母の姿を見たくなかった、血を流し、苦痛に苦しんでいる母の姿を。
「街の西に大きな屋敷がある、Ｃ１方面だ、その屋敷が……」
「ふむ、Ｃ１方面の屋敷か。よし分かった」
「俺が知っているのは場所だけだ、後は本当に何も知らない！約束どおり見逃してくれるんだろ！？」
「ああ、約束どおりお前を見逃してやるよ。ほら早く逃げたらどうだ」
「なっ、俺だけじゃない！母さんも一緒だ！」
母の元に駆け寄ろうとしたが、数人の兵士が一斉に俺に銃口を向ける。
「親切にお前の命は助けてやると言っているんだ、素直に逃げたらどうだ？」
「俺一人で逃げるはずないだろ、母さんと一緒だッ！」
「ったく、母さん母さんってお前はマザコンかよ。そんなに言うな

ら二人仲良くあの世に送ってやるよ」
「約束が違う！母さんを帰してく――――」
一発の発砲音、そして一発の弾丸が愁の腹部を撃ちぬいた。
だが両足に力を入れ、何とかその場に踏みとどまった。
自分の撃ちぬかれた腹に目をやると、着ていた服は見る見る赤く染まって行く。
「さて、必要な情報は聞いた。もうこいつ等には用は無い。殺せ」
銃を持っている兵士が銃を構え、一斉に引き金を引こうとした。
だが引き金を引く前に数発の銃声が室内に響く、室内にいた兵士達全員の頭部に弾丸は命中していた。

――――俺の信じていたＢＮは、一体何だったんだ……。
撃ちぬかれた腹を抱えながら何とかその場に立っている愁。
銃声と共に死を覚悟したが自分はまだ生きていた。
「魅剣、生きているようだな」
「ラティスさん、一体今まで何処に」
「お前を試していた」
「はっ……？」
「部屋の外で聞かせてもらった、お前がＳＶに忠誠を誓っているのかどうかな」
何を言っているんだ……こんな時に冗談を言っているのか？
俺があんな状況の中、助けずにずっと聞いていただけと言うのか？
「私が憎いか？助けてくれなかった私が憎くてたまらないか？」
「なっ、何が言いたいんですか……」
「甘えるな、そして自分一人で何も出来ない非力さを悔やめ」
「ぐっ！」
今にも殴り掛かろうと腕に力を入れる愁、だが足に力が入らない。
「お前はこう言いたいだろう、人は一人じゃ非力だ、何も出来ないんだと。
だがそれは甘えだ、非力な人間が何人集まろうとも所詮非力だ」

エリルはそう言うと頭を撃ち抜かれた一人の兵士に近づく。
「お前はＳＶを、お嬢様を裏切った。我々の居場所を喋ったのだからな。
　お前のした事は兵士としては間違っている、だが……」
そしてポケットから手錠の鍵を取るとそれを持って愁の前に投げた。
「人としては間違っていないのかもしれん」
「ラティスさん……」
その言葉でようやく彼女の優しさのようなものをわかりはじめた気がした。
俺はすぐさま鍵を拾い上げると母の元に駆け寄り、すぐに手錠の鍵を外しにかかる。
「母さん！しっかりして！母さん！」
「愁……」
意識が朦朧とする母を背負うと、すぐさま部屋を出て行く。
ラティスは愁の後ろを追いながら追っ手が来ないか辺りを見回しながら走っている。
だがその時、第２旧本部内に高く鳴り響く警報音。天井に着いてある赤いランプが三人を照らした。
「気づかれたか、早く階段を下りましょう！」
「言われなくとも降りる、お前も急げ」
二人は非常階段を下りていくとき、愁が背負っている母が口を開いた。
「ごめんね愁、迷惑かけて……」
「な、何で母さんが謝るんだ！謝りたいのは俺だよ！
　大丈夫、すぐに脱出して手当てをするから、だから！」
焦る気持ちで呼吸が荒くなる中、俺は無我夢中で走り続けた。
基地の外にやって出る事が出来た、だがまだ安心は出来ない。
基地の近くの外で待機していた車に既に乗り込んでいた二人。
そして車の荷台には琉と茜、青年の姿がそこにあった。
琉と茜は気を失っているのか目を瞑って二人でもたれあうようにし

て座っていた。
俺達が車の荷台に乗り込むと同時に一気にアクセルを踏み込み車をかっ飛ばす。
追っての車が基地から出てくるのが見えたが、ラティスが車の中にあった黒い包みに包まれている物を取り出す。
「ＲＲを撃つのは久しぶりだな」
そう言うとためらい無く引き金を引きロケット弾を放つ。
追っての車はかわそうとしたが間に合わず車もろとも木っ端微塵と化す。

――――「愁……」
震えるような声で愁の名前を呼び、両手を握り締めてくる母。
俺は母さんの両手を力強く握り締め返した。
「もうすぐだから。もうすぐ手当てが出来るからね……」
「愁……琉と、茜の事、頼んだわよ。お兄ちゃん何だから、ね」
「な、何言ってるの。変な事言わないでよ母さん、もうすぐだから」
冷たい、握り締めている母の手が冷たい。
「そんな、そんなのって。嘘だろ……起きてよ母さん、ねえ、母さん！」
いくら呼びかけても、もう返事は返ってこない。
それでも愁は名前を呼び続けた。
「わかったよ母さん、俺は琉と茜だけは…絶対に……」
そして愁は振り返り、座っている琉と茜に近づいていた。
二人は目を瞑って深い眠りについている、全く動かずにただただ座っていた。
「琉、茜、大丈夫か？」
愁がそっと二人の肩に手を伸ばし、指先が肩に触れると二人の小さな体は力無く倒れた。
「りゅう？あか、ね？」
母は深い眠りについた、琉と茜の無事を確認した後、二人を愁に託

し。
だが既に二人は、母より早く深い眠りについていた。
「嘘だ…こんな……の、あっ……うあああああああああああっ！！？」
愁が叫び声を上げた瞬間彼の視界が突然真っ暗となる、まるで電源を切ったかのように。

第22話　計画、壱

赤城はいつものようにふかふかの椅子に座りながらコーヒーを飲み、書類に目を通していた。
その横に立っている由梨音はその書類の内容が気になるらしく、横から顔を覗かしている。
「赤城少佐、一体どんな内容の書類何ですか？」
「……知りたいのか？」
「はい！知りたいです！」
すると赤城は空のコップをそっと由梨音に手渡す。
「コーヒー」
「はい！ただいまお持ちします！」
空のコップを受け取るとすぐさまコーヒーを入れてまた赤城の元に戻り、机の上に置く。
「んー、最近肩が……」
そう言うと、たちまち由梨音が椅子に座っている赤城の後ろに移動して両肩を揉んでいく。
だが疲れたのか、そのまま赤城の背中に抱きつくように赤城の両肩を腕を掛けた。
そして赤城の肩から顔を覗かして書類を一緒に見ようとする。
「離れろ、暑苦しい」
「暇なんですよ～、見せてくださいよ～！」
今度は赤城の両肩を掴むと前後に揺らして見せてもらおうとするが、その時赤城の握っていたコップからコーヒーが書類にこぼれてしまった。
「あっ！」
「……由梨音軍曹を減給に処する」
「ほぇえぇっ！？」
由梨音が驚いた衝撃で下がろうとしたが、腕が赤城の首に引っかか

ってしまう。
椅子は簡単に傾き、そのまま二人は後ろに倒れてしまう。だがまだ終わってはいなかった。
赤城の握っていたコップから熱々のコーヒーが服に大量に零れ落ちる。
「ああっ！少佐！？」
いつもポーカーフェイスを保っている赤城だが余りの熱さに一人起き上がるとすぐさま服を脱ぎ始める。
「ご、ごめんなさい！ごめんなさい！」
由梨音は急いでタオルを赤城の服を拭き始めるが、赤城が軍服を脱ぐと白いブラウスは茶色く汚れていた。
それを見た瞬間、赤城特有の殺気が由梨音の体を一瞬で固めた。
「由梨音、腹を切る覚悟。出来たか？」
感じる、これが殺意の波動というものなのか。
赤城は汚れたブラウスのボタンを外し、それを由梨音の頭に投げる。
すると由梨音は新しいブラウスを取りに急いで部屋の隅にあるクローゼットに向った。
「えーと、えーと……」
「どれでもいいから早く渡せ、こんな姿誰かに見られたら……」
――「失礼するよ、赤城。先ほど渡した書類を見てくれたと思うけどＢＮは……」
そんな事を言っていると武蔵が書類を見ながら部屋に入ってきた。
そして顔を上げるとそこには呆気に取られたような顔をした赤城が目の前に立っていた。
「あ、赤城！？」
上は下着一枚の赤城、運が良いのか悪いのか、武蔵はすぐさま後ろを向く。
「武蔵、見た……な？」
「何も見てないよ、あ、俺ちょっと用を思い出したから行ってくる

ね」
とは言ったもののそれは全てを見終わった後だ、脳裏に浮かぶ赤城の下着姿。
だがそれよりも武蔵はこの後自分が何をされるのかという方が不安で頭がいっぱいだった。
武蔵も感じていた、背後から伝わる殺意の波動を。
急いでその場から離れようとした時、軍服の襟が後ろから凄まじい力が引っ張られる。
その勢いのまま後ろに下がり、倒れこむように後ろにある椅子に座り込む。
「止めろ！命だけは、命だけはっ！」
「ＢＮが拠点としていた元市街地がＥＲＲＯＲにより崩壊したのは本当なのか？」
既に新しい純白のブラウスを着て、少しコーヒーのついた書類を手に武蔵に詰め寄っていた。
「あ、ああ。本当だ、偵察部隊が付近を探索した所、既にＥＲＲＯＲの巣と化していたらしい」
赤城のブラウス姿に少し戸惑う武蔵、赤城はいつも黒く大きな軍服を身に纏っている為にどうも体が細く見えてしまう。
「何故ＥＲＲＯＲがあの拠点を攻め込んだ、小さい拠点でもなければ大きな拠点でも無いはず」
「ＥＲＲＯＲがＢＮの拠点に攻め込んだ目的、理由か。たしかにそれは俺も、上層部も疑問を抱いている。
それと、また新たな情報が入った、ＢＮの第２旧本部で事件が起こったらしい」
赤城も椅子に座り、武蔵の話に耳を向ける。
由梨音も修羅場が来なくてほっと一息し、机の上に二つコーヒーカップを置く。
「事件、ですか？」
由梨音も赤城の隣に座り、武蔵の話を聞こうとしていた。

「由梨音、いつもコーヒーありがとね。話によると彼等ＳＶが動き出したようだ」
その言葉にいち早く由梨音が反応した、そして赤城が口を開く。
「その話は私も小耳に挟んだ、たしかに格納庫を爆破して襲撃したらしいな」
「大体そんな感じだ、だが更に詳しく、新しい情報が入ってきた」
「お前はどうしてそんな事を私より早く知っているんだ？」
ふと疑問に思った事を赤城が言って見ると、簡単に答えが返ってきた。
「俺には騎佐久がいるからね、アイツから色々と情報をもらってるのさ。
　さて、その情報というのは二つあってね」
一つ目は爆撃された格納庫とは違う格納庫でＢＮの新型戦艦が出航した事。
二つ目はその次の日にまたもＳＶが基地内に侵入した事だった。
「新型の戦艦か、厄介な物を持っているな……」
赤城は一つ目を悩んでいたが、由梨音は二つ目の事件について興味を示した。
「あの、ＳＶの方達は基地に侵入した後何かしたんですか？」
「それが何もせずに基地を出て行ったらしいよ」
「普通２回も連続で侵入しませんよね、なんでそんな危険な事をしたのかなぁ、って思いますよね！」
「ああ、俺もそう思った」
書類を一通り読み終え、席を立つ赤城。
読み終えた書類を机の上に置くと、机の引き出しからもう一冊の書類を持ってくる。
その書類を武蔵の前に出すと、また自分の席に座り込む。
武蔵から見れば始めてみる書類だった、その書類を手に取ると一枚目には大きく『ＥＤＰ』と書かれていた。
ページを数枚めくっていくと、そこにはＥＲＲＯＲについてや、Ｅ

ＲＲＯＲの拠点等詳しく書かれている。
「赤城、まさか上層部は今度こそＥＲＲＯＲを」
「ああ、削除するつもりだ。そしてその書類が私の手元にあるという事はどういう事なのか、わかるな」
それは全てを物語っていた、『ＥＤＰ』それはＮＦとＥＲＲＯＲの命を賭けた戦いの印。

――医務室には赤城達３人を除く第五独立機動部隊メンバーが全員揃っていた。
「『ＥＤＰ』、僕達の部隊もこれに参加する事になったらしいよ」
先ほど赤城に渡された書類、アステルはそれを皆に配っていく。
誰もが不安な表情で書類を手に取り、どんな内容なのかページを捲ってみる。
「とうとうこの時が来たってもんだな、緊張するぜ」
ノイドが書類の内容を簡単に目を通していくとそれをまた机に上に置くが、対照的にレンやルフィスは真剣な顔つきで内容を読んでいた。
「作戦内容を先に伝えておくね、よく聞いてて」
まず南部軍事基地から更に南東には『ＧＡＴＥ』と言う地下都市に繋がる巨大な門が存在する。
ＥＲＲＯＲは地下都市を巣にしている事もわかっている為に、その門を開けた後、空母から大型の収縮型光学電子パルス砲を放射。
その巨大な門からあふれ出そうとしてくるＥＲＲＯＲをその一撃で消し炭にした後、数百発の爆弾を投下して地下都市ごとＥＲＲＯＲを跡形も無く吹き飛ばしていく。
もちろんこれで全てのＥＲＲＯＲを消す事は出来ない、しかしこれ以上ＥＲＲＯＲが増える事も無いのだ、これはＮＦとして大きな一歩となる。
だが問題点もある、一番の問題点はその『ＧＡＴＥ』にあった。この門を開けるには入り口にある解除装置を作動させなければならな

い。
作動させる方法は二つ。
装置とDシリーズをケーブルで繋ぎ、機体の中からPWコードを打ち込む方法。
もう一つは機体に乗ったまま装置についているPWコードを打ち込む方法の二つだ。
「あの、どうしてそこまでして門を開ける必要があるんでしょうか……」
レンが手を上げてアステルに質問を投げかけていた。
するとレンの横にいたルフィスがその質問に答える。
「この地下都市は人類の避難所を作ろうとして出来た一つの核シェルターなの。
だからこの『GATE』は核を落としても破壊する事が出来ない程頑丈！だから破壊は無理だから開けるしか方法がないの、これで合ってますよね、アステル少尉！」
自信満々で答え、満面の笑みでカイトの方を向くルフィス。
「う、うん。それで合ってるよ」
そしてレンはそんなルフィスに尊敬の眼差しを送っていた。
「皆さん、お菓子でもどうですか」
医務室のキッチンから現れるセレナ、手にはクッキーが並べられているお皿を持っている。
そのお皿を机の上に置くと一目散にアステルが一枚目のクッキーを食べた。
「お前、いつも一枚目はすげぇ早く食べるな……」
そんなノイドをよそにアステルは一枚のクッキーをしっかり噛んで美味しさを味わっていた。
――ニ番の問題点、それは誰が『GATE』を開ける為に解除装置を作動させに向かうか。

第２２話　計画、壱（後書き）

伊達（だて）　武蔵（むさし）

東部軍事基地第五独立機動部隊の副隊長である。

大らかで優しく誠実であり、人一倍真面目な茶髪の青年。

だが彼は『東軍最強』と言われる程の腕の持ち主であり、数々の伝説を残してきた男である。

５ヶ月前の事件により階級は降格され本部から東部基地に移された。

第２３話　決裂、旅

――監獄生活2日目、外の空気が吸いたいです。
ミシェルを助けに乗り込んだが速攻でＢＮに捕まり今俺は艦内にある牢屋の中に閉じ込められていた、もちろん脱出は簡単。と思っていた時が……。
今の俺は後ろに両手を手錠で固定され、体は頑丈なヒモで縛られていた。
「こうなるならさっさと逃げればよかった、あいつ等飯に睡眠薬なんか入れやがってぇ」
「ははは、本当お前まぬけだな」
ああ、また陽気で元気でうるさい女の声が聞こえてきた。
「つうかお前も縛られてんだろが、お前の方がマヌケだっつーの」
俺と同じ牢獄の前隣の部屋にそのうるさい女はいる。
自分だって墓穴を掘ったから今監禁されてるんだろうが……。
「はあ？俺がお前みたいな馬鹿と一緒にすんじゃねーよ」
「どっちが馬鹿だ、大体こんな事になったのは馬鹿な事言ったお前達のせいだろが！」
「んな事知るかよ！ったく終わった事をグジグジうるせえ男は器が小さいなぁっ！」
「う、器が小さいだと！？」
「うるさい……」
そしてまた正面の牢屋にいる少女が呟き、俺達の交戦は一時中断される。
だがまだ喋り相手がいるだけでも良いのかもしれない、一人牢屋の中に閉じ込められるのはつまらないから。
「ああ、そうだ。お前達名前ぐらいは教えてくれないか？」
そうだ名前だ、俺はこいつ等二人の名前を知らない。
「名を名乗る時はまず自分からって事も知らないのかー？全くこれ

だから最近の男は……」
お前も半ば男だろうが、女の癖に男口調な奴め……だが一理ある。
「俺の名前は高橋甲斐斗、んでお前等は？」
するとまずはいつも陽気でうるさい女から自己紹介を始めた。
「俺は葵（あおい）って言うんだ、まぁよろしくな」
「へー、結構女らしい名前だな」
「はぁっ！？お前今何て言っ――」
うるさい女は飛ばして、次はこの少女。
「私の名前は、エコ」
うん、何とも環境に優しそうな名前だ。
さてと、二人の名前もわかった事だしそろそろ本題に入るか。
「それで、お前等二人はこれからどーするんだ」
「んー、ここに入れば多分仲間が助けに来てくれるからな」
仲間？この戦艦に？普通に無理だろ。
「お前今無理とか思っただろ？甘いねぇ俺達ＳＶの力を甘く見てるな」
「助けるつったってどーやって助けるんだ？ここまで来てもらうのか？」
「私達がこの戦艦から脱出した後に助けてもらうのさ」
だからその脱出する方法を聞いている訳だが。
「私達は逃げ出すタイミングを待っているのさ、逃げようと思えばこんな所簡単に出られるね」
「ほー、そ、それならさ。俺も一緒に逃がしてはくれないか？」
「誰がお前みたいな奴助けるか、銃殺刑にでもされてな」
これまた恐ろしく酷い事を言うな、洒落にならん。
と、その時。一人の男が部屋に入ってくるとは葵の牢屋の鍵を開けると外に連れ出す。
「時間だ、着いて来い」
「やれやれ、まーた尋問かよ」
葵は両手両腕を縛られたまま立ち上がるとその男の後についていく。

そして葵が部屋を出るとまたその部屋に鍵を閉められる音が聞こえた。
「尋問かぁ、あの女の事だからべらべら喋るんじゃないのか？」
俺がエコに話しかけてみると、彼女は前より少し話してくれるようにはなっていた。
「多分、大丈夫……」
多分なのか、やはり絶対安心大丈夫って訳でもないらしい。
「今頃、あんな事や、こんな事を……」
あんな事や、こんな事。
よからぬ妄想をするのは俺だけでいい、エコと葵はＳＶの中でも上位階級の兵士らしく、
その分重要な情報も知っているようだ、それにしてもよくあのような女が上に上がれたな。
・・・にしても、両手に手錠、しかも両腕を縛られているんじゃあ何も出来ない。
いつもの俺ならこんな物簡単に壊して逃げれるというのに。
いや、逃げるって。俺は何処に逃げるんだ？
そうだ、俺は元の世界に帰るんじゃなかったのか、この世界に俺の居場所は無い。
そう、あの龍と青年もこの世界に来ていた、この世界に来る方法があるのなら帰れる方法だって必ずある。
「なあ、ちょっと質問してもいいか？」
「何？」
興味無さそうに呟く少女、何か考え事をしているのか、返事が少し遅かった。
「この世界って別世界に行く方法とかある？」
超率直的な質問だが気にしない、これなら確実に俺の聞きたい事が伝わったであろう。
「知ってる」
思わぬ答えが返ってきた、その一言が俺の頭の中で繰り返し聞こる。

まさか、こんな身近に別世界について知っている人がいるなんて……。

「ほ、本当か!?それなら別世界に行く方法を――」

「嘘よ……」

俺の期待は真っ二つに斬られた後ぐしゃぐしゃに踏み潰されて細切れにされた気分だ。

嘘ってもんは言っていい時とそうでない時があんだよ……。

でもまぁ冷静に考えてみればこんな少女に別世界の話なんてしても無駄か。

「でも、私は信じてる。別世界がある事を……」

てっきり信じていないのかと思いきや、意外な言葉をよく発言するな。

「そして、もしあるなら……その世界に行きたい」

その言葉がやけに暗く、重く感じた。

このエコって少女、一体何を考えているんだ。

「どうして別の世界に行きたいんだ?」

すると彼女は口を閉ざし、何も喋ろうとしなかった。

女心というのはよくわからないが、別の世界は絶対にあるから信じてもいい、俺は他の世界を数々回ってきた事だってある。

それに俺はこの世界に飛ばされてきたんだからなぁ。

――その頃、艦内のブリーフィングルームには羅威達部隊メンバーが集まっていた。

「あれ、ここに来いと言った本人が来てねえなぁ遅刻かあ?」

暇そうに椅子にもたれ掛かっている穿真、羅威はその左隣で書類を読んでいた。

「セーシュは今ＳＶの奴等と話している、だから今は無理だ」

「って事は俺達だけで好きに話し合えって事かー、んじゃ隊長さんよろしく!」

そしてその穿真の右隣に座っているクロノの背中をぶっ叩く。

「ぐっ！？穿真さん痛いですよ！痛い痛い！」
「なーにすぐに慣れるって！」
痛がるクロノをよそに笑いながら背中をバシバシと叩いていく穿真。
横に座っている羅威は気の毒そうな顔をしていた。
「慣れる前に背骨が数本持っていかれるかもな」
そんな三人の前に一人の女が現れ、勢いよく机を叩く、その音に３人は驚いてすぐさま顔を上げた。
「３人とも遊んでないでさ、さっさと始めようよ！」
「そ、そうだな。んじゃクロノ、後は頼んだ！」
「え？ああ、わかりました。皆もう集まってるようだしそろそろ始めますね」
既に部隊メンバー６人は揃っていた、羅威が左の前の席に視線を向けると６人目のメンバーがそこに座っている。
クロノは教卓の前に立ち、口を開いた。
「まず僕達の任務を伝えておきますね、リシュードの護衛とＢＮの市街地周辺のＥＲＲＯＲ掃討です。
ＮＦ、もしくＳＶの兵士がこの艦を落としに狙ってくるかもしれないので各自いつでも出撃できるよう機体の整備はしっかりしておきましょう」
「クロノー、部隊名って無いのかー？」
穿真が手を上げて突然質問して来た為に少し戸惑うクロノ。
「部隊名ですか？僕達の部隊名は第壱小隊ですけど」
「んな地味な名前じゃなくて、もっとカッコイイ呼び名とか無いのか？」
「そ、それはまだ無いですね」
どうやらクロノも穿真の話はたじたじのようだ。
「穿真、今はクロノが喋ってるんだ、黙って聞け」
ようやく穿真も黙り、クロノの話が始まる。
話し方と言い性格、たしかに隊長に適している。この部隊の隊長に選ばれたのも納得がいく。

後は戦闘での指示、判断、腕前だな。と、そんな事を考えていたらクロノの話が終わってしまった。
「という事で僕の話はこれで終わりです、長い話を聞いてもらえてありがとうございました」
クロノがそう言って穿真の右隣の席に戻ってくると、その後ろではエリルと雪音が何やら話していた。
「ＮＦの時とＥＲＲＯＲの時で陣形や戦略を変えてちゃんと考えているなんて中々やるじゃない」
「クロノ隊長ってしっかりしてますよね」
「本当、どこぞのばかとは大違いよね～」
「だーれがばかだ、ばーか」
穿真は馬鹿という言葉に反応しすぐさま後ろを振り向く。
「あら、聞こえてたの」
「俺に聞こえるように喋ってただろが」
「っま、別に穿真のことなんて一言も言ってないし、てか馬鹿って言葉に反応したんだから自分が馬鹿だって事認めたわね」
だが穿真はエリルを見ていない、雪音だけを見つめていた。
「雪ちゃん気をつけろよー、こいつうるさくて空気読めないし凶暴だから」
エリルを軽くスルーしてその隣にいる雪音と笑顔で話している穿真。しかし雪音は自分の隣で怒りに震えるエリルが怖くて何も喋れない、顔は笑っているが恐怖で顔が少し引きつっている。
「穿真君、それはちょっと言い過ぎだよ？」
「ん？俺なんて毎日そんな事を毎日言われてるんだぜ？俺って可哀想じゃ……」
「黙ってろこのロリコンがッ！」
その時、雪音の目の前から穿真が消え去る、そして右の方で何かが壁にぶち当たる音が生々しく聞こえてきた。
そっと右を向くと壁にもたれ掛かり、頭から血を流す穿真の姿がそこにはあった。

「穿真君！大丈夫ですか！？」
「雪～、別にいいわよ、そんな奴ほっといても」
「で、でも……」

――相変わらずと言えば相変わらずの奴等だ、見ていて飽きない。
だが俺はいつ穿真が殴り殺されても文句は言えないような気がしてきた。
「おい」
俺はその強気な声に下げていた顔を上げると、そこには6人目のメンバーの女性が立っていた。

――「私、あんたが嫌い」
その言葉にその場にいた部隊メンバー全員の動きが止まる。
羅威も思いもよらぬ事を言われ何を言われたのかまだよくわからなかった。
「前に集まった時に上官を殴ろうとしてたよな？たかが使えない兵士一人をクビにしたぐらいでさ」
その言葉に羅威の眼つきがかすかに変わった。
「使えない兵士だと……？」
「うん、そうよ。魅剣愁と言う奴、彼の戦歴を見てみたが一般兵士以下の戦力だったわよ、それに何度も命令違反してるし」
黙っている羅威に対し女性の言葉はさらに続く。
「今までクビにならなかった方が不思議なくらいよね、今後はあんな無様な事はやめてくれよね？部隊の評価が下がるから」
「……たしかに兵士としては失格なのかもしれない」
「だが愁は誰よりも正義感が強く、純粋な奴だ。そして人としては何も間違った事はしていないと俺は思っている」
「……そんな事どうでもいいのよ、もう彼はいないんだし。私が言いたいのはこれ以上問題を起こさないでって事、わかった？」
羅威は何も言わずただその女性を睨み続けている。

「何よその目、言いたい事があるんなら直接……」
「そこまでにしとけ」
いつの間にか穿真が二人の隣に立っていた、そして腕を伸ばして女の口の前に持っていく。
もう喋るなと言う合図であろう、穿真は小さく首を横に振った。
その場にいた全員がその女性に視線を向けている。
「ふんっ、もういいわよ。私部屋に帰る」
女性はそういい残すと二人に背を向けて部屋から出て行こうとした時、羅威がふと口を開いた。
「俺達はただの兵士かもしれない、だがその前に。俺達は一人の人間だ」
その言葉に女性の足が止まる、だが何か呟くとまた歩き出し、部屋を出て行ってしまった。

第２３話　決裂、旅（後書き）

クロノ・ウェイカー
戦艦リシュードの護衛部隊の隊長。
性格はおとなしく真面目であるが、伝える事ははっきりと伝える。
自分が隊長に任命されて少し戸惑っているようだが、彼なりに頑張ろうとしている。

第２４話　思い、脱出

――ＥＲＲＯＲがよく出没する街にようやく到着したリシュード、早速格納庫に艦を停泊させる。
今日はもう日が沈んでいる為、後日町の周辺にあるＥＲＲＯＲの巣に向かう事となった。
一見普通の町だが外壁が立てられており、小規模の軍事基地も存在している。
最近はＥＲＲＯＲの襲撃が多く不安な為に本部方面の町に移住する人も増えてきているらしい。
だがこの町は物資の補給、生産に重要な町である為に町を放棄する事は出来ない。

――その頃羅威は艦内の食堂で食事をしていた。
無言のままカレーを食べていたが、ふとスプーンを握っている手が止まる。
そしてカレーをじっと見つめながら何かを考えている様子だった。
「何ボーっとしてるの、カレー冷めちゃうわよ」
頭を手の甲でコツンと叩かれると、またカレーを食べ始める羅威。
「ちょっと羅威、返事くらいしてよ。私の声聞こえてないの？」
「ああ」
「聞こえてるじゃん」
エリルはそう言って羅威の向かい側の席に座り、食堂で買ってきたサンドイッチを一口食べる。
「今日あんな事言われたから考えてたんでしょ？別に気にする事ないって。……でもまぁ、初対面だっていうのにいきなりあんな事言われたら腹が立つわよね」
羅威よりエリルの方が腹がたっているのか、眉間にシワを寄せて必死にサンドイッチに食らいついていた。

気にせず羅威は、また考え事をしながらカレーを食べていく。
するとサンドイッチを1個食べ終えたエリルが2個目のサンドイッチを食べようとした時、一つ聞いてみた。
「羅威ってさ、愁といつ出会ったの？」
「たしか6年前ぐらいだったかな」
「ろ、6年前！？どうりで愁と仲が良い訳ね。それで、何処で知り合ったの？」
「あいつと初めて会ったのは病院だった」

――そう、俺と愁が初めて出会ったのは病院の手術室だった。
戦闘機が墜落して爆破した時、俺はまだ生きていた。
だが手足の骨が折れ、腹部には重傷を負っていて、すぐにでも輸血をしなければ死ぬような状況だった。
しかし輸血に用意されていた血は既に無くなっていて、俺はただ死を待つだけだった。
そんな時、俺と大差変わらない少年が同じ手術室に運び込まれてきた。
少年の顔は笑っており、不安や緊張はまるでしていない、その少年から医者は血をもらい俺に輸血してきたんだ。
手術は無事に終了、俺はその少年に命を助けられたんだ。
「その少年が愁だったの？」
「ああ、アイツは俺の命の恩人だ。愁がいなければ俺は死んでいたからな」
「そんな事があったんだ、それで、その後は？」
「ん、まぁその後――」
俺が一人病室で寝ていると、愁が俺の病室に来てくれた。
お礼の言葉を言うと愁は照れてた、そして愁は毎日俺の病室に来てくれるようになってな。
俺が歩けるようにリハビリしている時も必死に俺を応援してくれて助けてくれたんだ。

「それから仲良くなってな、そんな感じだ」
「へ～、そうだったんだ」
俺はエリルにこう話したが少し違う部分もある、俺は愁が病室に来ても何も喋ろうとしなかった。
母が殺された時のショックと、まだ妹が見つかっていないショックで放心状態だった。
だが愁はそんな俺の所に毎日来てはいろんな話をしてきた。
その中でも家族の話はとても楽しそうに話してきて、俺はその話が一番嫌いだったな。
でもしだいに分かってきた、愁は純粋な気持ちで家族の話をしているんだと。

――「さてと」
そんな話をしていると、既に皿に盛られていたカレーは無くなっていた。
俺が皿を片付けに行くとエリルも後ろからついてくる。
「どうした、まだ何か聞きたいことでもあるのか？」
「ううん、別に無いけど」
そのまま食堂を出て行くが、エリルがまだ後ろからついてくる。
俺は気にせず廊下を歩き自室に戻ろうとしていた。
ふと窓の外を見ると、夜の町が綺羅やかに明かりで映し出されていた。
明日はＥＲＲＯＲの巣に向かわなければならない、この町を守る為に。
早く帰って寝るとするか。
「羅威！」
突然俺の名前を真後ろで呼ばれて俺は足を止めて振り返った。
エリルは少しため息をついて見つめてきた。
「あんまり一人で考えすぎないようにね？ここに愁がいなくても私や穿真、部隊の仲間がいるんだからさ、何でも話してよね」

そんな言葉を俺は愁に言ったような気がする。
でも、まさかエリルが俺にそう言ってくるとはな。
「彼女も話せばきっと分かってくれると思うし」
彼女？エリルは名前知らないのだろうか、ちゃんと書類に部隊メンバーの名前が書かれていたぞ。
「彼女って香澄の事か？」
「えっ！どうして名前知ってるの？」
「今日渡された書類に書いてあっただろ」
「あれ、書いてあったのね」
「ちゃんと読んどけよな」

――羅威はまた前を向き、自分の部屋に戻っていこうとした。
だが少し歩いた時、羅威がまた後ろを振り向く。
「エリル、心配かけてすまない。それと……ありがとな」
そう言い残して羅威は自分の部屋に戻っていった。
エリルも安心したのか、腰に手を持っていって一段落終えたよう顔をして羅威の背中を見つめていた。

――牢屋の中にいてもちゃんと飯は出してもらえる、そして晩飯の時間ときた。
食事の時間……食事と行ってもパンやスープ等簡単な物がおぼんの上に並べられているだけの食事である。
俺は一人と飯について文句を言いながらパンをかじっていた。
毎日コッペパンでさすがに飽きてきた、スープに浸して食べるという斬新なアイデアがひらめいたがやめておくことにした。
というか、俺だけ後ろ手に手錠をされているからスープ飲む時は犬のような格好をしなければならない。
だからスープは飲まん、こんな屈辱受けるくらいなら、スープなんか飲まん！
「質素だが味はまぁまぁだな」

「おいし……」
葵とエコのスープの飲む音が聞こえてくる。俺だって飲みたい、コッペパンだけだと腹も減る。
だが、だが……最強のこの俺がそんな犬のようなマネが出来る訳がない。
ま、まぁ。パンだけ食べるとコッペパン本来の甘味がよーくわかり、結構旨いもんだ。
とは言ってもパンをかじる時にどうしても頭下げてパンを銜えなければ。うぐぅ、どっちにしろ犬じゃねえか。
俺が一人そんなどうでもよさそうな事を考えていた時、床に食器が落ちる音が牢屋内に響いた。
その音を聞いてとっさにスープをこぼしたのだと俺は思い葵に話しかけてみた。
「あーもったいねえなぁ、スープこぼしたろ」
うっせーなあ、お前はパンでもかじってろ!と、いつもならそんな言葉が返ってきそうだが何も返事をしない。
二人の牢屋から全く物音がしなくなっていた、一瞬俺は何が起こったのかわからなかったが、耳を澄ましていると何かが聞こえてくる。
……寝息?何二人とも飯食いながら寝てんだ。
と、思ったがこれはアレだ、睡眠薬飲まされたな。スープにでも混ぜられていたんだろう、飲まなくて正解だった。
だが、こんな夜に睡眠薬飲まして何する気だ?俺みたいに後ろ手に手錠されるのだろうか。
すると、いきなり牢屋のドアの開く音が聞こえてきた、何故か俺はとっさに寝たフリをする。
足音を聞くと、どうやら人の数は二人。もしや誰かが助けに来たのか?と思ったけど、それは助けでも何でもなかった。
「よし、こいつ等寝てるぞ」
「どうやら薬が効いたらしいな、お前どの子にする?」
「そうだな~、俺はこの小さい子でいいや」

何だこの会話、あっ、これよく映画とかドラマであるシーンだよな。
それも深夜枠にありそうな。こいつ等の狙いはあの二人か。
エコの牢屋の鍵の開く音が聞こえてくる。そして牢獄のドアの音が閉まる。
まさか、連れ去られた?って事は次は……。
「あいつ行ったな、んじゃ俺は~」
このままでは葵まで連れて行かれる、こいつ等寝ている二人によからぬ事するつもりだ。
と、俺は思っていたが、その時。何故か。何故なのか。俺の牢屋の鍵が開いた。
ん・・・ん?俺?俺ですか?何故に俺?
「久しぶりに楽しめそうだな、むふふ」
そんな事言いながら俺に近づいてくる。
……おかしくないか?これ絶対おかしいよな?普通ここは葵を選んで二人がピンチな所に助っ人登場とかする、
『世界を守る為に命犠牲にしました』ぐらいの在り来たりな展開じゃないのか?
俺は汗かきまくりで寝たフリをしていた、忍び寄る足音は俺の足元で止まり、男は俺の体に掛かっているシーツを剥ぎ取った。
もういっそ寝ていた方が楽だったかもしれない、もう犬になるんで今すぐスープ、いや睡眠薬飲ましてください。
俺が男として諦めかけたその時、葵の寝ているはずの牢屋から何かがぶち壊される音が聞こえてくる。
何が起こったのかわからないまま俺は寝たフリをしていたが、その時俺寝ている背中に男が倒れてきた。
「うおぁあああああ!?嫌だぁあああああ!!」
「ちょ、うっさい!静かにしろよ!他の兵士に気づかれるだろ!」
その声は男の声ではなく、葵の声だった。
俺が後ろに振り向くとやや怒ったような表情で葵が立っていた。
俺に倒れてきた男はどうやら気絶しているようだ。

「た、助かった……」
「それよりな、どーして私には誰も来なかったんだ」
「はい？」
「一人は少女で、一人は男だぁ？なんで俺はエコやお前に負けたんだよ。
俺は胸あんだぞ！こんなにあんのによお！ったくこれだから最近の男はなぁっ！」
胸に手を当てながら俺を怒ってくる、だが今は葵に感謝しよう。
「それより葵、お前睡眠薬で寝てたんじゃないのか？」
「俺はスープ飲んでなかったからな」
「どうして？」
「そ、それは……って今はそんなの関係無え！もうこんな所にいてられるか、脱出するぞ」
「その言葉を待っていた、早く手錠を外してくれ」
「っま、俺は心優しいからな」
倒れている男の腰から鍵束を取り、その中にある鍵を使って甲斐斗の手錠を外す。
「ありがとよ、んじゃ早速エコを助けに行くか」
「助ける？そんな事しなくてもエコなら大丈夫だよ」
何言ってんだ、少女を前にした男は皆獣になっちまうぞ！
「ただいまー」
とか思っている時、既にエコが牢屋の前に立っていた。
「なんでいんの？！」
「ほらな、だから言っただろ」
「いやいや、エコ。お前ってたしか連れ去られたよな？」
「ぶっ飛ばした」
そうですか、ぶっ飛ばしたんですか。もう深い意味は聞かないでおこう。
何にせよ、これで準備は整った、両手も自由になった事だし。
「よし、後はあの子を連れ去って脱出するだけだな」

「そうね」
「あの子の居場所なら俺がわかるから、着いてきてくれ」
「え、何でわかんの？」
「何となくわかるんだよ、いいから着いて来い」
不思議そうに二人が首をかしげるが無理もない。
こうして夜中に俺達３人の誘拐脱出作戦が始まった。

第２４話　思い、脱出（後書き）

エコ

緑色の髪に緑色の瞳が印象的な少女。

大人しそうに見えるが案外活発的であり、親友（？）の葵とよく共に行動する。

第２５話　鬼神、魔神

……やはり脱出するのは夜だな、こういうのは夜に限る。
俺達は今葵とエコの三人でミシェルの元に向かっていた、とりあえずミシェルを取り戻しこの艦から脱出しないとな。
それにしても、ミシェルを狙う者がやけに多い気がするんだが……。
「本当にこっちで合ってるんだろうな？」
「俺に任せろ、こっちだ」
俺達は見つからないようにこそこそと移動などしない全力で走って部屋に向かっていた。
幸いにも兵士に見つかる事無く順調に走っていけたが、やはりミシェルのいる部屋の前には銃を持った兵士が見張りをしていた。
「やっぱ見張りがいるけど。どーする」
俺がそう言って後ろを振り向くと、葵はもうやる気、というか殺る気満々の顔をしていた。
「任せな！」
すると、葵が俺を抜かして一気に見張りの兵士へと近づいていくその速さは並のスピードじゃなかった。
兵士が葵に気づき、銃を向けようとするがその前に鍵爪が見張りの兵士の喉を切り裂く。
声を、そして引き金を引くよりも早く見張りの兵士を倒してしまった。
そしてその倒れた兵士からカードキーを取り出すと、すんなり部屋のドアを開けてしまう。
「うっし、迎えに来たぜ！」
てっきり部屋にはミシェルだけだと思っていたが違った。
そこには三人の兵士が立っていたのだ。

――「貴方は捕まえられているはずのＳＶ！？」

黒髪の青年が懐から銃を取り出そうとした時、葵がその兵士に跳びかかった。
だがその隣にいた一人の兵士が黒髪の青年の前に出て葵の体を殴り飛ばす。
「うぐッ？！」
その力は相当なものだった、部屋の壁に体を打ちつけて身動きが取れなくなっている。
「女を殴るのは嫌なんだけどなぁ、この右手が勝手に動いちまったぜ」
そしてようやくエコと甲斐斗が部屋の中に入ってくると、葵が倒れている事に気づいた。
「なっ、お前甲斐斗じゃねえか。この子を連れ去りに来たのか？」
穿真が甲斐斗を見て驚いた表情を見せたが、拳を構えいつでも甲斐斗に殴りこめる状態だ。
「連れ去る？違うな、助けきたんだよ」
甲斐斗達の前に立ちふさがる者、それは穿真とクロノと雪音の３人だった。
クロノと雪音はとっさに銃を取り出し、甲斐斗達に銃口を向ける。
「大人しくしてください、手荒なマネはしたくありません」
黒髪の青年がそう言ってくるが、その隣にいる青年はやる気満々のようだ。
「お前等、死にたくなければ道を明けな。死にたいならそのままでいいけどな」
そうは言っても、俺の言葉にＢＮ兵士が耳を傾ける訳ないか。
さてと、俺はもうこのＢＮに『恩』は返した。
後は俺の好きに、自由に行かしてもらおう、俺は縛られるのが大嫌いだからな。
この世界について他の世界の俺が深く関わるわけにもいかないが、この世界の戦争等どうでもいい、ただ約束を果すのみ。
甲斐斗が右手を突き出した時、既に右手には大きな黒剣が握り締め

られていた。
例え魔力は失っても、俺にはこの剣一本でもあれば十分戦える。
「そんな物を何処から!?」
「驚くのも当たり前だ、ほら、この剣に体を真っ二つにされたくなければ銃を下ろせ」
「出来ません!私達の命令はこの子を守る事も入っています!」
3人の中で一人小柄な女性が銃を握り締めているのがわかった、女を殺すのは嫌だな。
だからといってこの子だけ残して残りの二人を殺さない訳にもいかない。
「貴方達は何故この子を連れ去ろうとするのですか、目的を言ってください」
当然エコはその質問に返答などしない。
「目的とかそんな事よりさ、まずはこの子自身がどちらに行きたいのかを聞いてみようぜ?
ミシェル、お前はどっちに行きたい」
さっきから部屋の隅で震えながら俺達を見ていたミシェル。
全く、子供の前で銃を取り出すとはな、俺も剣を出したから人の事言えませんが。
「かいと……」
震える声はたしかに俺の名を呼んだ、これで決まりだな。
「よし、よく言った。すぐに助けてやるからな」
「あの子は渡しませんよ、大人しく武器を捨てて投降してください」
「っけ、ミシェルがどちらに行きたいかわかっただろ。さっさとそこを……」
甲斐斗が徐に剣を構え、そして一直線にクロノに向かって走っていく。
「どけえぇえっ!!」
振り下ろされた剣は床を裂き、壁にヒビが入る。
甲斐斗はこの兵士が真っ二つになったと思っていた。

だがそこにクロノの姿は無い、クロノは振り下ろされた剣の横に立っていた。
「抵抗するのであれば仕方ありません。撃たせてもらいます」
数発の銃声が室内に響く、銃弾は全て甲斐斗の脚に撃たれていた。

――「ぐっ……！」
そんな馬鹿な、こんな何の力も持たない男に俺の剣が避けられるだと。
やはり魔力が無ければ俺はただの男に過ぎないのか？
力さえあれば、こんな人間に負けはしないのに……。
「雪音さん、応援を呼んで下さい。命に別状はありませんが早く手当てをしないと」
コイツ、俺を撃ったにも関わらず俺の心配をしてやがる、だったら最初から撃つなよ。
いくら体が頑丈とはいえ、やはり撃たれたら痛いし血だって出る。
俺は床に膝を突くと、その場に剣を刺して何とか立ち上がろうとしたが、力を入れるたびに脚から血が勢いよく噴き出る。
そんな様子にミシェルとその横にいた少女が驚いて怖がっているように俺を見ていた。
「雪音さん、大丈夫ですか？」
「あ、は、はい！すみません、まだ余り慣れてなくて……」
慣れている方がおかしいのかもしれないがな、なんかこの世界の子供は血を見慣れている奴が多い。
「高橋甲斐斗だっけ、お前はいちお愁やアリスを救ってくれたから感謝してるんだぜ？
だから別に大人しくしとけば手荒なマネはしないのになあ」
くそっ、俺は脚を撃たれて動けないし、倒れている葵は未だに動かない。
また俺達は監獄生活に戻らなくちゃいけねえのか？いやまて、まだ俺の後ろにはエコがいるじゃないか。

葵が人間離れした動きをしたように、何か彼女にも特殊な力があるのではないか？

苦痛に顔をゆがめながら俺はそっと後ろを振り向いてみると、エコが普通に両手を上に上げて降参していた。

「エ、エコ。お前何か出来ないのか？」

「無理、無理……」

既にエコもこの状況を見て諦めたのか抵抗する素振りは見せなかった。

俺も半ば諦めかけていたその時だった、突然何者かが部屋に入ってくる足音が聞こえた。

そしてその部屋に入ってきた者を見て俺は目を丸くした、いや俺だけじゃない、その部屋にいた者全員が驚かされただろう。

頭に仮面を被っている男（？）が突然部屋の中に現れたのだ。

「な、何ですか貴方は？動かないでください！」

仮面の男は銃口を向けられているのにも関わらずミシェルの所に行こうとする。

何なんだコイツは、ＳＶの奴等か？だがそれならエコが知っているはずだが。

エコも一体この仮面の人間が誰なのかわからず首をかしげていた。

クロノが仮面の男の脚を狙い引き金を引こうとした時、一瞬のうちに男はクロノと距離を縮め銃を奪い取る。

その速さに呆気にとられたクロノ、そして腹部に激痛が走った。

「ぐっ！」

腹を抱えながら膝を突き痛みを堪えるクロノ。それをただ俺達は呆然と見ている。

「お、おい！待ちやがれ！」

穿真が声を荒げ仮面の男の肩を掴もうとしたが、その肩を掴んだ手を男に掴まれると、簡単に投げ飛ばされる。

そのまま床に投げ飛ばされたが、その時打ち所が悪く頭を強く床に叩きつけてしまい気を失ってしまう。

残るは雪音だけだが、彼女は銃を撃たないとわかっているのか、無視してミシェルを抱きかかえる。
「ま、待ってください！その子は……」
「俺の事より、穿真を早く医務室に連れて行ったほうがいいと思うよ」
穿真の額からは血が流れ出し、わずかながら床に血が広がっていたのだ。
「エコさん、俺はＳＶの者です。助けに来ました」
「痛てて、ったく、女に手を出す男は最低だな」
ようやく目を覚ました葵、殴られた肩をさすりながら立ち上がり、周りを見てみる。
わけのわからない仮面の男はいるし、ＢＮの二人の兵士はぶっ倒れている状況だ。
「誰こいつ」
「味方、助けに来たんだって……」
「見慣れないなぁ、新人か？まぁ今はそんな事いいや、この子も捕まえる事が出来たしさっさと逃げようぜ」
３人がさっさと逃げようと部屋から出て行こうとした時、当然甲斐斗に呼び止められる。
「ちょ、俺置いていくなっ！」
「だったらさっさと来いよ」
こいつ、平然な顔でいいやがる。
大体膝から血が吹き出てんの見てわかんねえのか？
「脚が数発撃たれてるのに走れるかっての」
「んじゃここでお別れだな、後は頑張れよ」
「お、おいおい。冗談だろ？」
「このままＢＮに捕まるわけにもいかないからな、後は自分で何とかしてくれ」
お、おい。ここまで来たのに俺をポイ捨てしやがって。
俺は手を伸ばして助けを求めたが、葵は俺から視線をそらす。

たしかに、これのまま怪我人の俺を連れて行くのは危険だ、それもわかる。
だからって俺が一人ここに取り残されるのはいくらなんでも嫌だ。
「恨むなよ、仕方無えんだ」
そう言い残した後、部屋のドアが閉まった。部屋にはＢＮの兵士３人と俺が取り残されている。
俺はただ閉められたドアを呆然と眺めていたが、その時けたたましい警報音が聞こえてきた。
なんで俺はこんな惨めな目に遭わなくちゃならねえんだ、俺は最強だった男だぞ……。

――――『総員第一戦闘配備、艦内に侵入者発見、侵入者は２番通路を通り艦から出た模様、兵士達は付近を探索してください』
『直ちに第三小隊は機体に乗って付近を探索してください、敵の機体が潜んでいる可能性があります』
格納庫に駆けつけたのは羅威、エリル、香澄の３人だけだった。
本当なら６人集まるはずのメンバーだが何故か到着していない。
「あれ、集まったのこれだけ？クロノや穿真、雪までいないわよ」
エリルは不思議そうに周りを見渡すが穿真達が訪れそうな気配は無い。
「何かあったと考えるべきだな、仕方ない、俺達だけで出るぞ」
羅威達は仕方なく３人で出撃する事となった、羅威と香澄は我雲に乗り込み、エリルは無花果に乗り込む。
３機が出撃した時には既に町にある基地から何体かの我雲が出撃して付近を探索していた。
『あれ、どうして３人しかいないんですか？！たしか部隊人数は６人のはずでは？』
「残りの３人はまだ来ていない、何かあったのかもしれん。今は俺達３人で出撃する」どこか聞きなれた声だ、そして少し懐かしさも感じられる。

このハキハキとした大きな声、まさか……。
「お前、まさか彩野か？」
『あ、わかっちゃいました？そーですよー、彩野ですよー』
我雲のモニターに映し出される彩野、元気そうに笑いながらこちらを見ている。
「なっ、どうしてお前が艦に乗っている？！」
『どうしてって、私は正式なリシュードのオペレーターですよ？まさか先輩、私がここに入るの知らなかったんですか？！』
あの時は愁の事で頭がいっぱいだったからわからなかったし知らなかった。
まさか彩野までこの艦に乗っているとは。
「何出撃中に私語してんの？黙りなさいよ」
モニターに今度は香澄の姿が映し出され、その横にはエリルの姿も映し出された。
「香澄、少し羅威に突っかかりすぎよ。羅威に恨みでもあるの？」
「何言ってるの、私はただ任務中に余計な私語はいらないと思っただけなんだけど」
「ったく、だからさぁ。そういう相手を挑発するような言い方止めた方が……」
羅威の事そっちのけで二人が口喧嘩をしそうになった時、彩野の声が二人を止めた。
『レーダーに反応有り！Ｅ８に我雲１機、アンノウン１機を確認！町から離れようとしています！』
「二人とも聞こえたはずだ、絶対に逃がすな。追うぞ」
羅威は二人を置いてすぐさま発進していく、置いていかれた二人はその後を急いでついていった。
『羅威先輩、アンノウンが停止しました。我雲１機は引き続き逃走中です』
「自分を盾にして仲間を逃がす気か。二人は先回りして我雲を捕らえてくれ、俺はこの機体と会ってみる」

『ちょっと羅威、それって危険じゃない？』
「安心しろ、増援が到着するまで時間を稼ぐだけだ。それより二人は早く我雲を追ってくれ」
『わかった、くれぐれも無理しないでね』

――二人が俺の後ろから離れ、逃げている我雲の所へ向かった。
さて、ＳＶの新型機でもこの目で見させてもらおうか。
思ったよりも早く俺はアンノウン機のいる場所に到着した、その時には既に町から離れた森林まで俺達は来ていた。
その機体は逃げも隠れもせず、堂々と俺の前を立ちふさがっており、我雲やリバインなどの機体よりもより人間型に近い形状をしていた。
緑色の目はコチラの様子を窺っているようにも見られる。
俺はその機体を見てふと気づいた、両手に何も持っていないのだ。
肩にも、腰にも、武器と見られる武器は何一つ見あたらなかった。
「丸腰の新型だと、どういうつもりだ。まさかとは思うが……」
俺がマシンガンの照準を向けた瞬間、機体の目が光を発する。
凄まじい勢いで一気に照準を向けた我雲に向かってきたのだ。
「まさか素手で戦うつもりだとはな、それなら……」
マシンガンを撃ちながら胸部と着いてあるブーストで一気に後ろに後退していく我雲。
これならそう近づかれる事も無い、向こうは飛び道具を何も持っていないのだか、ら――。
貫かれる我雲の腹部、俺は最初何をされたのかわからなかった。
ただ機体が大きく揺れ、画面の至る所に『ＥＲＲＯＲ』の表示が映し出される。
我雲の腹部は爆発し、綺麗に上半身と下半身に分れた。
「うぐぁあああっ！！」
相手はコクピットを狙おうとしたのだろう、だが少し位置がずれて胸部ではなく腹部を貫いた。
乱れる画面、彩野からの通信も聞こえてこない。俺の我雲は何もす

ることが出来ずただ再起不能となった。
だがレーダーだけは微かにまだ動いていた、俺の来た道から次々に増援の我雲が現れてくる。
そして改めて思い知らされた、その機体の機動力を。
増援に来た我雲が次々にレーダーから消えていく、どれも一撃で胸部を貫かれて破壊されている。
そして当等レーダー内にいた味方の機体、全機体の反応がレーダーから消えていた。
頭にある二本の鋭い角、真っ赤な装甲。巨大で鋭い右腕、その姿はまるで『鬼』だった。
「っ、う……」
額に微かな痛みを感じ、そっと手を当ててみる。
暖かくてドロリとした感触、その液体が俺の頭から止め処なく溢れ出てくる。
「やばいな……さっきの衝撃で、切っ……」
――エリル達はようやく逃げている我雲の所まで追いつくことが出来た。
「香澄、あの機体の両手両足を破壊して行動不能にするわよ」
「言われなくてもわかるわよ、さっさと始めましょ」
エリルが香澄にはわからないように小さくため息をつく、そして無花果と我雲が一斉に葵達の乗る我雲へと近づいていった。
その時だった、上空から一機の機体が現れたのは。
灰色のシーツを身に纏い、夜の闇に溶け込んでいるその機体は葵達の乗る我雲の目の前に着地した。
それは甲斐斗が乗っていたＥＲＲＯＲに取り込まれた我雲だった。
そしてその我雲の胸部を鷲掴みにすると、一気にコクピットのハッチを剥ぎ取る。
「なっ、何だよコイツ！」
「ＥＲＲＯＲ？」

コクピットには葵やエコ、そしてミシェルがそこにはいた。
『ミシェルを返してもらうぜ、抵抗すれば殺す』
「か、甲斐斗の声じゃねえかっ！？」
『ああそうだ、甲斐斗だ。早くミシェルを渡せ』
「お前無事に脱出できたんじゃねーか、良かったな！」
葵が相変わらずのペースで話しかけてくるが、甲斐斗は動じない。
むき出しのコクピットの手を差し伸べ、ミシェルを渡すよう命令してくる。
「ま、まぁ待てって。別にとって食ったりしないからな、ここはまず皆で逃げようぜ？」
『なら先にミシェルを渡せ』
今までの甲斐斗とは何か違う気を感じた葵、ここは仕方無くミシェルを渡す事にした。
ミシェルはそっと差し伸べられた手の上に移動すると、ゆっくりと甲斐斗のいるコクピットに手が近づいていく。
コクピットのハッチが開き、ミシェルはそっと中を覗くと、そこには笑顔で自分を迎えてくれた甲斐斗がいた。
「これでもう安心だな、さ、俺の後ろに移動して」
ミシェルも安心したのだろうか、コクコクと小さく頷くと急いで甲斐斗の座っている後ろに移動する。

――「渡したぞ、んじゃ早くこいつ等を追っ払って逃げようぜ」
『ああ、そうだな。たしかに受け取ったよ。んじゃ、死ね』
甲斐斗の乗る機体が天に両手を上げると一瞬にして巨大な黒剣が現れる。
為らい無くその剣を目の前の我雲に向けて振り下ろした。
振り下ろされた剣は我雲の右肩から一気に右足を一刀両断する。
『ミシェル、どうした？』
操縦席に座っている甲斐斗の腕をミシェルが引っ張っていた。
その為剣はズレて振り下ろされ、我雲の右半分だけを斬り落とした

のだ。
「かいと、だめ……」
斬り落とされた我雲はガラクタのように崩れ落ち、その場でスクラップと化した。
そのガラクタから二人の女性、葵とエコが這い蹲りながら出てくる。
エコの頭からは血が流れ、顔半分が真っ赤になっており、葵は左の肩から流れる血を必死に右手で抑えていた。
『ミシェル、俺はね、今まで何人もの人間を殺してきたんだよ』
そう言って機体はまた黒剣を振り上げていく。
『そしてこれは戦争、人が殺す、殺されるのは当たり前の世界だ』
「ちがう、かいと…ちがう……」
『だから俺もこの世界のルールに従って、人を殺す。
俺は最強だ、最強のこの俺に歯向かう者、邪魔者は全て殺す』
振り上げていた剣を振り下ろそうとした時、後方から2機の機体が接近していた。
「貴方もしかして甲斐斗なの？どうして貴方がこんな所でそんな機体に！？」
「アンノウン機に告ぐ、今すぐ武器を捨てて両手を挙げろ！」
甲斐斗の乗る機体は振り向きざまに剣を無花果に振り下ろす。
間一髪の所で無花果を剣を交わして機体の後ろをとる、そして手に持っているマシンガンの銃口を甲斐斗に向けた。
だが引き金を引く前に機体はまた振り向き、その勢いに任せ剣を振るう。
剣先がマシンガンを掠る、ただそれだけでマシンガンに一閃の亀裂が走り、地面に崩れ落ちた。
するとコクピットのモニターにエリルの姿が映し出され、無線で話かけてくる。
「貴方には仲間を助けてもらって感謝してるの、だから私は貴方を殺そうとは思わない！
大人しく基地に戻ってきて！貴方を悪いようにはしないから！」

だがエリルの呼びかけに甲斐斗は何も喋らない、剣を構えると一直線に無花果に向かっていく。
無花果は腰に着いてあるランチャーを手に取り、引き金をひく、すると無数の小型ミサイルが一斉に放たれ、甲斐斗の機体を追尾していく。
しかし、甲斐斗の機体は避ける事なく前に進み、無花果の元へ向かっていた。
「なっ、避けないと死ぬわよ！」
『他人の心配する前に、自分の心配をしろ」
機体の目が赤く光った時、向かって来るミサイルを剣でなぎ払い全て爆発させる。
一瞬にして爆煙に包まれる機体、エリルはそれをただ呆然と見ていた。
「馬鹿ね、このミサイルは爆発と同時に拡散して広範囲に破片が飛び散るようになってるのよ」
あんな近距離で爆発に巻き込まれれば機体はもう動く事は出来ないのだろう。
後はコクピットからあの子を助けるだけ、だと思っていた。
『だからどうした？』
「えっ？」
煙の中から現れる『悪魔』、黒い装甲に赤い目を光らせながら無花果の目の前に現れた。
『言っただろ？自分の心配をしろ、ってな』
甲斐斗が剣を振り下ろそうとした時、一体の機体が甲斐斗の機体を殴り飛ばす。
「か、香澄？助けてくれたの？」
「いや、あれを見て」
無花果の前に現れる機体、それはあのＳＶの新型機体だった。
「ＳＶが、私を助けてくれた……？」
そう思ったとき、そのＳＶの新型が無花果の脚をマシンガンで撃ち

抜く。
その手に持っているマシンガンは我雲の物であった。
「痛っ！一体どっちなのよ!?」
ＳＶの新型はマシンガンを投げ捨てると、殴り飛ばした機体を見つめている。
殴り飛ばされたまま動かない機体、ＳＶの新型は破壊された我雲に近づき、血塗れのエコ達を助けようとして座ろうとした時。
その新型のコクピットのモニターに頭から顔に血が垂れている甲斐斗が映る。
『俺を殴って……タダで帰れると思ってんじゃねぇぞッ！』
倒れていた機体はすぐさま体勢を立て直して立ち上がる。
『面白れぇ、俺は強い奴と戦うのが大好きだ。どちらが強いか決めようぜ？』
その呼びかけに答えるかの如く、鬼は立ち上がった

第２５話　鬼神、魔神（後書き）

葵（あおい）

攻撃的で活発的な女性。銃よりも鉤爪を使って戦う事が多い。

エコとはペアを組んでおり二人で共に行動するようになっている。

第２６話　強さ、敗北

――俺は最強だ、こんな奴に負ける程俺は弱くない。
頭から血が流れているがこんなの怪我の内に入らない、俺にとっては良くある事だ。

――甲斐斗の機体を殴り飛ばした『鬼』は立ち上がり、前に立ちふさがる。
それを見て甲斐斗はニヤリと笑みを浮かべ、『悪魔』は黒剣を構えると、一気に『鬼』の元へと走った。
「その澄ました面をぶった斬ってやろうじゃねえかぁあああッ！！」
闘志を剥き出して戦う甲斐斗、一発目に大きく剣を振り上げた途端に一瞬で剣を振り下ろした。
機体の動きとは考えられないほど早く振り下ろされた剣は簡単に地面を切り裂く。
だが甲斐斗が切り裂きたいのは地面ではない、『鬼』はその剣を振るうスピードより更に早く動き、避けていたのだ。
『悪魔』は止まらない、例え一撃が避けられようとも、次を当てれば……。
目にも止まらぬ速さで剣を振るい、剣先を突き出す『悪魔』。
『鬼』はその攻撃を全て避けていくが、決して反撃はしなかった。
甲斐斗は隙を見せないよう全力で剣を振っているつもりだろうが、剣が大きいため多少の隙は生まれている。
しかし『鬼』はやはり避けるだけ、両腕を上げず足を動かすだけで軽やかに避けていく。
「なんで反撃してこねえんだよ、馬鹿にしてるのか？・・・この俺をッ！！」
彼の態度が気に食わない甲斐斗、完全に頭に血が上り『鬼』を斬ろうと更に機体を加速させていく。

その戦いを見ている香澄は口が開いたまま呆気に取られていた、今までこれ程の戦闘は見た事が無かったからだ。
機体は加速していくたびに強く揺れ、剣を振るうたびに振動していく、だがそれが更に甲斐斗の闘争本能をかきたてた。
「これが戦い、殺し合い！俺とお前、どちらかが死ぬまで俺は剣を振るのを止めない。さぁいったいいつまで逃げれるかなぁっ？！」
『悪魔』は笑みを浮かべる、極限まで加速された機体はついに『鬼』の速さに追いついた。
さすがに『鬼』も避ける事が難しくなり、振り下ろされる剣を手で弾いていく。
その時、甲斐斗の機体に通信が繋がった。相手はあの『鬼』に乗るパイロットからだった。
『これ以上の戦闘は危険です！このまま戦闘を続けたら――』
「お前が死ぬんだろ？」
そして『鬼』の左腕が斬り飛ばされ、宙を舞う。そのまま左腕は空中で爆破、跡形も無く消え去ってしまう。
「安心しろ、次の一撃で殺してやるからよおッ！！」
『悪魔』は剣を突き立てると、止めの一撃を放つかの如く『鬼』の胸部目掛けて剣を突き出した。
『貴方の後ろにいるミシェルが死にますよ！？それでもいいんですかっ！』
その言葉に、『悪魔』の突き出した剣は止まった。
剣先は『鬼』の胸部の目の前でとまると、そのまま動きを見せない。
甲斐斗はふと、我に返った、あれだけ激しい戦いをしていた自分は……。
だが甲斐斗は座席に座り、シートベルトを閉めていたから、だがそれでも頭から血を流した。
だとしたら、その後ろで立っていた少女は――。
「ミシェル！？」
急いで後ろに振り返る甲斐斗、そこには頭から血を流し、口元にも

血が流れ意識が朦朧としながら必死に座席にしがみつこうとしているミシェルの姿があった。
そして血塗れのミシェルと目があった後、少女はその狭い場所で崩れるように倒れてしまう。
『彼女は貴方の名前をずっと呼んでいました、それなのに何故貴方は無視し続けたんですかっ!?』
「なっ、俺の名前を……呼んでた?」
ミシェルはずっと甲斐斗の名前を呼んでいた、何度も、何度も。
だが甲斐斗は戦闘に集中していた為にその声が甲斐斗に届く事はなかった。
甲斐斗は更に機体に加速させ、ミシェルを危機にさらし、この結果に至った。
『甲斐斗さん、その子の為にも憎しみや怒りで戦おうとしないでください……』
その時、レーダーに反応が現れる。BNの援軍が駆けつけてきたのだ。
『鬼』はBNの残骸にいる葵とエコの二人を手の平に乗せると、『悪魔』に背を向けた。
『俺は行きます、そして次会う時、ミシェルを渡してもらいます。覚悟していてください』
『それと、これで恩は返しました』
そう言い残してその場から離れていく『鬼』、『悪魔』も急いでその場から離れていく。
『鬼』の向かう方向とは逆の方向に。
甲斐斗は後悔の念で一杯だった、自分のせいで。自分がミシェルを……。
操縦桿を握る手を震わせながら、甲斐斗は逃げ続けていく、安全な場所へと。

第２６話　強さ、敗北（後書き）

ミシェル
正体不明の青髪少女、神秘的な服に大きな帽子を被っているのが印象的。
臆病で怖がり、何か布があるとそれに包まってしまう性格。
何か力を持っているのか、よく刺客から狙われているが自分を守ってくれる甲斐斗の事を慕っている。

第27話　考え、過ち

慌しい艦内、そこに一人の男がストレッチャーで運ばれていた。
そう、運ばれているのはただ一人の男のみ、彼以外に重度の怪我人は誰もいない。
何故か、理由は簡単、戦った羅威以外の兵士は全員死んでいるからだ。
「羅威先輩！」
少女はその男の名前を呼んだ、だが返事は返ってこない。
扉は閉まり上についてあるランプには赤い明かりが灯る、生か死の時間が始まった。
「彩野！羅威は！？」
手術室の前、そこに第壱小隊でありリシュード護衛部隊でもあるメンバーが集まって来る。
その中にいる穿真の頭には包帯が巻かれているが今はそれ所ではない。
「今手術が始まった所です、あの、先輩、その傷は……」
「ああ、少し頭を切っただけだ。それより羅威は大丈夫なのか？」
「私が見た時は、意識がなくて、頭から血が出てて、それから、それから……」
両手で頭を抱えるとその場に座り込み、震えながら大きく頭を横に振る。
それを見たエリルがすかさず彩野の肩に手を掛け、通路に置いてある椅子に連れて行く。
椅子に座りながらも彩野は頭を抱え、エリルは必死に彩野を落ち着かせようとそっと抱きしめ続けた。
――その場はエリルに任し、穿真達４人はある一室へと向かう。
部屋に入るや否や、部屋の奥に置いてある机の前に向かう穿真、そ

してその机の座席には一人の女性が座っていた。
「俺にはさっぱりわかんねえ、何が起こったのか説明してくれないか、セーシュ」
「私より、現場にいたお前達が知っているのではないか？」
セーシュは両手の肘を机に立てると重る両手を口の前に持ってくる。
「ああ、変な仮面の奴に殴り飛ばされた。そこまでしか憶えてないんでね」
そしてクロノも机の前に立ち、穿真の横に並ぶ。
「不意を付かれました、まさか相手があのような動きをしてくるなんて……全て僕の責任です」
その言葉に後ろに立っていた雪音が驚きを見せるが、横にいる穿真が更に驚きを見せていた。
だがセーシュと香澄は表情を変えずクロノの話を聞いている。
「ちょ、お前いきなり何言ってんだ？全てって言い過ぎだろ」
「僕が彼を取り押さえていれば、こんな事にはなりませんでした」
クロノが彼を取り押さえていれば、たしかにこのような事態にならなかったのかもしれない。
ＢＮの我雲は尽く破壊され、死者を出し、脱獄者を逃がしてしまったあげく少女を奪われてしまった。
「僕が全ての責任を負います、処罰は全て僕に」
すると、その言葉を聞いたセーシュが口を開いた。
「たしかに、お前にも責任はある。だがな、私達にも責任はある
お前は自分が何も出来なかったから処罰を受けようとしているが、私達も何も出来なかったんだ。
艦内を警備をしていた者達、機体で奴を追っていた者達、彼等は何も出来ずに殺されたんだ……」
セーシュは席を立つとクロノの横に立ち、左肩に手を掛ける。
「お前達はまだ生きている、そして羅威もだ。あいつはそう簡単に死ぬような奴ではない。私が保証する。
それと今日はもう晩い、部屋に戻ってゆっくり休め。明日は忙し

くなるぞ」
そう言い残した後、セーシュは部屋を出て行く。
出て行く際に雪音と香澄はセーシュの方を向いて敬礼をし、部屋から出るのを見送った。

――颯爽と闇の荒野を駆け抜ける一体の機体。
「ミシェル、今すぐ、今すぐ安全な所に運んでやるからな・・・な！」
返事が返ってこない、俺はモニターを凝視しながら何処か休める所が無いか探していた。
そして見つけた、木々が生い茂る森、俺は迷わず森に向かう。
だが森は俺を拒むかのように生い茂り、木々が俺の機体の行くてを邪魔しているように思えてくる。
「邪魔するな、俺の…俺の邪魔を……するなッ！」
俺は一人罵声を飛ばした後、右手に持つ黒剣で木々をぶった切って行く。
切られ、なぎ倒されていく木々、それを踏み台にして更に森の奥に進んでいくと森から抜け、大きな川に辿り着いた。
「水！」
機体を跪かせ、後ろに倒れているミシェルを抱きかかえるとすぐさま機体から飛び降りる。
そして川に近づくと跪き、ミシェルの体をそっと寝かせると、甲斐斗は川の水を両手で掬った後、その水を血で汚れたミシェルの髪にそっとかけた。
血で汚れたその髪は赤茶色に汚れ、見るに耐えなかったからだ。
「んっ、ぅ……」
夜の水の冷たさに目を覚ますミシェル、そして髪を洗ってくれている甲斐斗を虚ろな目で見つめる。
髪を洗い終えると、甲斐斗はポケットから包帯を取り出し、それをミシェルの頭に巻きつけていく。

本当は自分の為にもらっていた包帯だが、今はそれ所ではない。
包帯を巻き終えると木の下の草原に抱きかかえて連れて行き、そっと寝かせる。
甲斐斗はその横に座ると、弱々しいミシェルをじっと見つめていた。
「ごめんな、ごめんな……俺、ミシェルにこんな怪我負わして……」
甲斐斗の声は少し震えているようにも聞こえる、すると寝ていたミシェルは目蓋を開けて甲斐斗の顔を見つめてくる。
少女のその顔に甲斐斗の心は罪悪感でいっぱいだった。
そして少女は徐に手を振り上げる、すると何故か甲斐斗はとっさに目を閉じてしまう。
甲斐斗は怯えている、何に怯えているのか、自分のしてしまった過ちに怯えていたのだろうか。
「だいじょうぶ、だよ…かいと……」
そう言ってミシェルは振り上げた手を頭上に下ろし、甲斐斗の頭を優しく撫でる。
甲斐斗はその言葉、そしてその表情、その光景、脳裏にあるあの記憶が重った。
「どうして大丈夫とか言うんだよ！全然大丈夫じゃないのに、どうして……」
見るからに弱々しく、元気も力も感じられない少女の顔は笑っていた。
甲斐斗を安心させるかのように、甲斐斗に心配をかけさせないように……。

――ミシェルを寝かせた後、俺は一人川辺に立っていた。
俺は少女を守る所か危険な目に遭わしてしまった、俺があのまま戦闘を続けていたら更に少女を傷つけていただろう。
傷ついた少女は、俺みたいな身勝手で、人殺しにそっと笑って見せてくれた。
全然大丈夫じゃないのに、心配をさせないようにあんな事言って・・

・。

姉さん、あの時の笑顔と同じだった。今思えばあの笑顔には元気も何も無いように感じられる。

俺はそんな姉さんの事を何も気づいて上げられなかった、いつも心配や迷惑をかけて姉さんを困らしていた。

それでも姉さんは、姉さんは、姉さんは……。

もう止めよう、姉さんの事を考えるのは。俺はよく自分を見失う事が多い気がする。

俺の中に何人もの俺がいるような、今考えてみれば俺はなんであんな事をしたんだ。

その時、俺の脳裏にある一言が繰り返された。

『甲斐斗さん、その子の為にも憎しみや怒りで戦おうとしないでください……』

「憎しみや怒りで戦おうとするな、か」

夜の森で一言呟いた次の瞬間、甲斐斗が右手にあの黒剣を持ち川辺に生えている大木をぶった切る。

静かな森に大木が倒れる音が響いていく、周辺にいた鳥達は一斉にその大木から離れていった。

「俺は今まで憎しみや怒りで戦ってきたんだよ」

何が『憎しみや怒りで戦うな』だ。そんな正義感丸出しの痛い発言をするのは俺の知っている奴でも一人しかいない。

怒りや憎しみの感情は力になる、だがその力をコントロール出来るか出来ないかの問題だけだ。

それにしてもあの『鬼』、うぜえ。俺は結局奴を殺す事が出来なかったしな。

後奴は『その子の為にも』とか言っていたが、俺はミシェルを守る為なら憎しみで人を殺し、怒りで破壊していく事ぐらい簡単にしてやる。

だから俺は今まで通り憎しみや怒りで戦っていく、所詮奴は綺麗事

を並べて自分は正しいとでも思っている一人の兵士に過ぎない。
次会うときは覚悟しろって言ってたな、上等だ、次会った時、あの『鬼』は俺が殺す。
・・・何か俺はまた変な考え方をしていたのかもしれない。
俺の最大の目的はこの世界からの脱出、元の世界に帰る事じゃないか。この世界の事に他世界の人間の俺が余り深く関わりすぎてはいけない。
だから俺は探していく、元の世界に帰る方法、そして魔力を取り戻す方法を。
いやまてよ、もしかしたら俺は魔力を取り戻しているが実は気づいていないだけなのかもしれない。
何かそんな感じがしてきた、もしかしたら今、何か魔法を使えるかもしれない、と。
俺は川辺にある大きな岩の上に立つと両手に力を込め、念じ始めた。
この感覚、そうだ、この感覚だ、両手から全身に漂う魔法の力、今なら出来るかもしれない。
『転移魔法発動ッ！』
その瞬間、俺の足元に複数の光る陣が出現、陣が強烈な光を放つと共に俺の体を光が覆い隠し、無事に元の世界に帰れたらいいのにな。結局何も起こる事は無かった。いや、まぁわかってたんですけどね。
やはり元の世界に帰ることはそう簡単な事じゃないって事か、ああ、今日はもう疲れた。
俺はミシェルの寝ている場所に戻ると木の根元にもたれ掛かり、そっと息を引き取った。
って、死んでどうする。
よし、まだ一人ボケツッコミが出来るなら元気な証拠だ、明日から情報収集していくか、後それと……。
――木の根元に座り込む、甲斐斗に急に睡魔が襲ってきたのだ。

甲斐斗も睡魔には勝てず考えるのを止めて目蓋を閉じ、眠りについた。

――――一人の少女がふかふかのベットの上で目を覚ました。
窓からは眩しい程の朝日が差し込み、あれから一晩だった事がわかる。
ふと横に目をやると椅子に座り、ベットにもたれ掛かりながら寝息を立てている葵がいた。
葵の肩には包帯が巻かれており、ふと自分の頭を触るとやはり包帯が巻かれている。
「葵……」
寝ている葵の頬を摘まむと左右に引っ張る少女、するとようやく葵が目を覚ました。
「何、人の顔で遊んでんだよ」
「何、人のベットで寝てるの？」
「俺はエコが大丈夫かどうか心配してたんだぞ！？」
「そう、ありがとう……」
お礼の言葉を一言言うとエコは葵に背を向ける。
「やけに素直だなぁ。それと体調の方はどうだ？」
「平気、少し頭が痛むだけ。所でここは――――」
その質問に答えようとした時、部屋の扉が開かれた。
「おはようございますエコさん、ここは私のお屋敷ですよ」
「フィリオ……」
部屋にはフィリオとラティスの二人が入ってきた。
エコはベットから降りようと起き上がろうとしたがフィリオがそれを止める。
「無理をなさらずに、今はゆっくりと体を休めてください」
「ありがとう…ございます……」
起き上がろうとしていたエコがまたベットで横になり、毛布に潜っ

ていく。
そして顔だけを覗かせながらフィリオに問いかけてみた。
「フィリオ、あの仮面の人は……」
「私達と共に戦っていくことを誓ってくれた、一人の戦士です」
「戦士……？」
その時、部屋の扉がまた開き、あの仮面の男が現れた。
仮面の男は部屋に入るとすぐさまエコの寝ているベットの横に歩いてくる。
「エコさん、葵さん。貴方達をお守りできなくて申し訳ありませんでした、俺がもう少し早く駆けつけていれば……」
「貴方、誰なの？」
エコの鋭い質問にその男はすぐさま仮面を外した。
仮面を外すと下を向いて顔を左右に少し振り、そして前を向いてエコを見つめる。
「失礼しました、親衛隊所属、魅剣　愁と言います」

第27話　考え、過ち（後書き）

セーシュ・ハリルド
風霧家直属の親衛隊の一人。
様々な銃器を使いこなせる事が出来、身体能力も高い。
冷静で大人しく任務に忠実な所は皆から尊敬されている。

第２８話　導き、前兆

――夜の森と朝の森ってどうしてこんなにも違うのだろうか。
川のせせらぎ、鳥の歌、虫の音色、木々の残骸。
俺は一人昨日通ってきた道を見ていた、木々は一直線に切られている。
昨日俺が来た時に木を切りながらここに来てしまったからだ、今見ると少しやりすぎた気がする。
「おはよーかいと」
すっかり元気になったミシェル、笑顔で俺の元に駆けつけてくる。
「ああ、おはよう」
すっかり元気になって良かった、一時はどうなるかと思ってたけどまたこの笑顔が見れて内心ほっとしている。
「ミシェル、これから俺は色々な所に行って勉強しようと思うんだ、元の世界に帰る方法を探しに。
　っま、ただ探すだけだとつまらないからね。いろんな所を旅していこう」
そうだ、焦る事は無い。少しずつ手がかりを探していけばいいじゃないか。
昨日何で俺はあんなに焦っていたのだろうか、腹が減っていたからだろうか。
「どこいくの？」
「んーと、一度ＮＦの基地に戻ってみようと思うんだ。
　少し時間がかかるかもしれないけど、まずはこの世界について良く調べないとね」
そう、俺はこの世界の事についてなど全く調べる事が出来なかった。
俺は病院にいた後牢屋にいて、その後牢屋にいて、んでその後も牢屋に閉じ込められていたからだ。
だが今の俺は自由、そうだフリーダム！もう誰にも縛られる事のな

い生活が出来るんだぜ。
「よーっし！そうと決まればさっさと行くぜミシェル！俺達の旅はまだ始まったばかりだぜ！」
「うん！」
俺はミシェルを抱きかかえるとすぐさま機体の元に走った。
ハッチに取り付けてあるワイヤーを掴むと自動的にワイヤーが俺達を引き上げてくれる。
そしてコクピットに入るとミシェルをそっと下ろし、俺は操縦席に座った。
「1に安全！2に安全！安全運転でかっ飛ばしていくぞ！」
ハッチを閉じて機体の電源を入れ為スイッチを押す。
・・・スイッチを押す。スイッチを押す！
「あ、あれ。動かない、まさかエネルギー切れ？」
何度押しても電源がつかない、せっかく格好良く決めたっていうのにこりゃ無いぜ。
どうする、動かない機体などただの鉄クズに過ぎないだろ……。
そもそも機体は何の力で動いているんだ、ガソリン？な訳無いよな。
操縦席で一人考えている俺を見ているミシェルは一つのスイッチに指を指した。
「かいと、こーこ」
「ん、これがどうかしたのか？」
試しにそのスイッチを押してみる。
すると、そのスイッチを押した途端機体は爆発、操縦席に乗っていた俺達は跡形も無く吹き飛ばされた、どうやらあのスイッチ、自爆スイッチだったらしい。
……っという展開にはさすがにならないと思った俺はそのスイッチを押してみた。
すると、突然モニターや装置、機器の電源がついていく。
「ぉおおお！ミシェルすげえっ！何か電源ついたぞ！」
いやこれは驚いた、まさか電源が入るとはな。

どうやらこのスイッチを押すとサブエネルギーに切り替わるらしい、長くは持たないが町に向かうのなら十分だ。
「よーっし、んじゃ気を取り直して出発！」

――「そして到着！」
懐かしき東部の市街地、そして遠くに見える東部軍事基地。
さて、このボロボロの服を買い換えなければ、それに美味しい物も食べてみたい。
最近まともな食事をとっていないからだ、さてどうする。
「強盗したらお金稼ぐの簡単だよな・・・」
その言葉に反応したミシェルは驚きの様子で俺を見つめる。
「冗談だって、取りあえず図書館行ってみるかな」
冷暖房完備、熟睡可能、参考資料完備、これなら行っても損は無い。
取りあえずこの世界の科学、文明レベルを見てみなければ・・・。
って、図書館って何処にあるの。
そうだ、俺はこの世界の人間でもなければこの街の人間ですらない。
適当に歩いて探してみるか？いや、それは時間の無駄だし疲れる。
その時、俺の頭の上にある豆電球が現れて光った。何か良い事を思いついたのだ。
「ミシェル、少しベンチに座って休んでてくれないか？すぐ戻るから」
「うん、わかった」
「いいか、見知らぬ奴から話しかけられたら絶対に話したりついていったらダメだぞ！無視だ無視！」
「甲斐斗！つまり俺以外の言う事は何も答えなくていいからな！」
「う、うん……」
俺はそう言い残すと街の奥へ走っていった。
ん、俺の効率良くお金を稼ぐ方法が何かって？んなの決まってるだろ、俺流の稼ぎ方さ。

――街、表は活気だって沢山の人々が溢れている。
だが暗い路地裏にいけばガキが酒飲んでたり、ケンカとかしてたりする。
まぁそんなわけで俺は今社会のゴミ供が集まっている路地裏にいるわけで。
すると、数人の不良が俺に気づいたのか、へらへらと笑いながら歩いてきた。
そして一人の不良が俺に声を掛けてくる。
「おい兄ちゃん、こんな所に来て何してんだ？」
「いやー図書館を探してたんだけど見当たらなくてね、何処にあるか知らない？」
「図書館？お前それココとは逆の方角だろ、馬鹿じゃね？」
なるほど、逆だったか。俺って本当方向音痴だな。
「ありがとさん、んじゃ俺は図書館行くかな」
俺は体を百八十度回転させて路地裏から出て行こうとした時、不良に肩を掴まれた。
「おいおい、教えてやったんだぜ？お礼してもらわないとねぇ」
そう言うとその不良の周りにいた不良達が俺を囲む。
ふ、ここまで俺の思い通りに事が進むとはな。
後はこいつ等をコッペパンにするだけ、じゃなくてコテンパンにするだけだ。
そして不良達から俺がお金をもらうと言う何とも素晴らしい方法だ、俺に相応しい稼ぎ方だな！
なーに、こんなのよくある展開だろ。こんな奴等に負けないよ。
「って事で大丈夫、殺しはしないけど手足の骨が多少折れても悲鳴上げるなよ？」
「んだとこのガキッ！」
不良が俺に殴りかかろうとする、軽く交わした後ボコボコにして終わらせるか。
だが、俺の予定はここで崩れた。

「貴方達！何をしているんですか！？」
一人の少女の声が聞こえてきた、俺はその声の方向に振り向く。
そこには手に小さな鞄を持っている一人の少女が立っていた。
「何だてめえ、ガキは引っ込んでろ！」
不良が俺の胸倉を掴みながら少女を睨みつめる。
しかし少女は怯むことなくこちらに歩いてくる、そして鞄を開けると中から一枚のカードを取り出した。
「私は東部軍事基地所属、レン・スクルスと言います。今すぐその手を離してください」
その言葉を聞いた途端に不良達が慌しくなった。
「ちょっ、マジかよ……」
待ってくれ、逃げないでくれ。ああ、俺の金が逃げていく。
不良達は一目散に逃げる、さっきまで路地裏には何人者不良達がいたというのに今では空き缶や吸殻しか見当たらない。
さてこの子は一体何だ？東部軍事基地所属の者とか言ってたけど。
「アステル少尉、こんな所で何してるんですか！ずっと探してたんですよ！」
『アステル』その言葉を耳にした時俺はよくやく思い出した。
東部軍事基地所属？たしかアステルもその基地に所属していたはずだ。
アステルを知っている人と会ってしまうとは、一体どうすれば。
「私とルフィスさんはずっと待ち合わせの場所で待ってたんです、それなのにアステル少尉は全然来てくれないし」
「それにその服装はどうしたの？それがアステル少尉の私服？」
俺はとっさに悪知恵を働かしてしまった、とにかく今はこの場、この状況を利用するしかない。
「いや、実は洋服を買ってからそっちに寄ろうとしてたんだよ、この服ダサイでしょ？」
「ええ、私から見ればアステル少尉には会ってないと思います……」
「それで買いに行こうと思ったんだけどさ、財布を落としちゃって

ね、探してたらこんな所に来ちゃってて」
「さ、財布落としたんですか!?それなら早く探さないと!ルフィスさんにも連絡しないと!」
レンがとっさに鞄から携帯電話を取り出そうとした時、俺は反射的にその腕を掴んでしまった。
「い、いや。財布落としたなんてバレたらかっこ悪いから、内緒にしていてくれないかな?」
俺ナイス、上手い事言えるじゃん。
「それもそうですね……」
「それでさ、こんな事を頼むのも何だけど。少しお金を貸してもらえないかな?」
女性にお金を借りるなんて普通は駄目だけどな、男的に。
「ええっ?あ、私でよければ少しはお貸しできますよ」
「本当に?ありがとうレンさん。そのお金で洋服を買った後にルフィスの所に会いに行こうか」
「そうですね、そうしましょう!すぐ近くにお店があります、そこで洋服買いましょうね」
っしゃあああッ!と、心の中で叫んでいるが顔は普通のまま。
もちろん喋り方、声、口調はアステルに似せている、顔も似ている為に早々ばれないだろう。
そのまま俺達二人は服屋に直行。
「適当な服をささっと買って来るから、レンさんは先にルフィスさんの所に戻っていてくれないかな?」
「えっ……わかりました。このカードを使ってください。私達は中央公園にいますから早く来てくださいよ?」
「うん、すぐに行くから待っててね」
レンが俺にカードを渡すと店から出て行く。
何か悪い気もするが、今の格好だと色々とまずいからな。このお金は使わせてもらう。
俺は目に付いた黒色の服を一着、長ズボンを一着。自分の今着れる

服を買っていった。
囚人の服、軍人の服、そんなもの俺には似合わない、やはり私服でないとな。
って事で買い物が無事に終わる。
新しい服、うーん中々良い、この世界は服のセンスあるな。
俺はカードを持ったまま店を出る、そしてレンが向かった方向とは逆の方向に体を向けた。
さて、このカードでルフィスに旨い物でも食べさせに……。
「アステル少尉！何処行くんですか？！」
「うおっ？！」
突然後ろから声を掛けられて不覚にも驚いてしまった。
この声はレンの声だ、どうして彼女がここにいるんだぁ、
待ち合わせ場所で待っとけって言ったのに。
俺は溜め息をつくと後ろに振り返る、そこにはやはりレンの姿、そして……。
「カイトさん？」
「ルフィス……」
もう二度と会わないと思っていたが、まさかこんな早く、簡単に会えるとは。
私服姿のルフィスは俺をじっと見つめたまま動かない、やばい、バレた！？
「その洋服とっても似合ってますね」
「えっ？あ、そうかな？」
「はい、とっても似合ってますよ」
彼女は笑っていた、そういえば・・・俺は今までこの子の笑顔を見た事があっただろうか。
前に会った時は元気も余り無く、俺の前では決して笑わなかった。
……駄目だな、やはりここに俺の居場所は無い。俺がここにいればアステルに悪いからな。
あれだ、アステルは何も悪くないじゃねえか。全部俺のせいだ、俺

がいるからアステルに迷惑を掛けちまう。
そっと振り返って二人に背を向けて、このまま走り出してしまえば人ごみに隠れて逃げ切れるだろう。
「レンさん、これ。ありがとうございました」
俺はレンにカードを返すと、そっと二人に背を向けた。
そして俺が走り出そうと前を見た時、奴はそこにいた。

――僕は時間通り公園のベンチに座っていた。
今日はルフィスとレンさんの3人で街案内をする予定、それにしても二人とも遅いなぁ。
「おかしいなぁ、もう時間何だけど。二人とも何処にいるんだろ……」
集合場所はここだったよね、んー……段々と不安が募る。
その時、僕の座っていたベンチの横のベンチで何やら声が聞こえてきた。
「お嬢ちゃん、一人こんな所で何してるの？」
「道に迷ってるの？んじゃ俺達が交番まで送ってあげようか？」
服が派手な不良が数人に見える、だけど体格、服装に似合わない行動をしていた。
やっぱりあんな格好をしていても良い人はいるものなのかな。
だけど少女は下を向いたまま話そうとしない、きっと誰かを待っているんだろう。
少女は小さく首を横に振るが、不良達は少女から離れようとしない、そして一人の不良が少女の腕を掴んだ。
「いいから来いって、一緒に遊んであげるからさ」
嫌がる少女の腕を強引に引き、ベンチに座っている少女を引っ張っていこうとする。
少女は必死に抵抗するが、その豪腕からは離れられない様子だ。
って、僕は何をしているんだ、ただ見ているだけで……助けないと。
両手が汗ばみ緊張する、歩き方もどこかおかしいかもしれないけど、

僕は少女の元へ向かった。
「あ、あの。ちょっと待ってください。この子嫌がってるじゃありませんか」
僕はそう言って少女の腕を掴む男の手を掴んだ。その時不良の手は少女の腕を放す。
「はあ？俺達はただこの子交番に送ってあげようとしてるだけじゃねえか」
「ですから、この子は嫌がっているんです。無理に連れて行くのは駄目だと思うんですけど・・・」
「何だよさっきからグダグダうるせえなあ、お前俺にケンカ売ってるの？」
どうして話しても分かってくれないのだろう、人は分かってもらえない時、いつも力に頼る
「い、いえ。僕はケンカなんか……」
僕の顔に拳が飛んでくる、すかさず避けようと思った時、後ろにいた不良に体を掴まれた。
見事僕の顔に拳は命中、瞬時に歯を食い縛った。
「止めてください……僕はこう見えても軍人ですよ。貴方達を逮捕する事も出来ます」
「お前みたいな奴が軍人とか、軍人馬鹿にしてんのか？！」
そしてもう一発、今度は俺の腹部に拳が命中する、顔面より痛くはないけど、やっぱり痛い。
僕の後ろにいる不良がポケットに手を入れてサイフを抜き取る。
「おい、こいつ結構金持ってるぞ！」
僕のサイフから数枚のお札を取り出した不良、だが僕のサイフに入ってある身分証明書を見て顔色が変り始める。
「こ、こいつ本当に軍人じゃねえかよ！」
「嘘だろ？！ちょっとお前貸せ！」
慌てだす不良達、僕のサイフから取ったお金とサイフを僕の足元に投げ捨てると、一目散にその場から逃げていった。

最初からこうすれば良かったのかもしれないけど、今はもういいや。
格好悪い所をルフィス達に見られなくて良かった、でも僕の横にいる少女には見せてしまったけどね。
足元に散らばっているお金とサイフを拾うと、またポケットの中にしまう。
そしてベンチに座っている少女に声を掛けてみることにした。
「誰か来るのをここで待っているの？」
少女は無言のまま何も喋らない、僕が不審な人に思われているのかもしれない。
「驚かせてごめんね、僕はカイトって言うんだ。君の名前教えてもらえないかな」
すると、少女は僕の方を向いた。
「ミシェル」
「ミシェルちゃん、もしよかったら一緒に交番まで行かない？ここに入たらまた危ない目にあうかもしれないよ」
「いや、君みたいな子を一人で街に置いて行く訳にもいかないから。一緒についてきてくれるかな」
ここから交番はすぐ近くだし、ここにいるより交番でお世話になっているほうが涼しいし安全かな。
それにしても、この子を一人きりにするなんて一体誰なんだろう。
身勝手な人もいるもんだなぁ。
僕がそっと手を指し伸ばすと、少女は僕の手を掴んでくれた。
ルフィス達には悪いけど、まずはこの子を交番に送り届けないと……。
僕はしっかりとその子の手を握り締め交番に向かう為街の中に入っていった。
見渡す限りの人、人。街に来るのは久しぶりだけど、やっぱり人が多いと思う。
その時、ふとルフィスの顔が視界に入った、レンさんもいるじゃないか、二人ともあんな所で何してるんだろう。

誰かと話している？人が多過ぎてよくわからないけど、とりあえずその場所に行ってみる事にした。
人を避けながらルフィス達の元へ向うと、奴はそこにいた。

――甲斐斗とアステル、互いは向き合い、にらみ合っているようにも見える、だが二人とも目の前の光景は信じられず、立ち止まっていた。
周りの人達は歩き、動いている。だが甲斐斗達二人はまるで時が止まっているかのように動かない、動こうとしない。
そんな中、先に口を開いたのは甲斐斗の方だった。
「久しぶりな、カイト・アステル、まだ生きてたかぁ」
「どうしてお前がこんな所にいる！ルフィス達に何をしていた！？」
アステルは懐から迷わず拳銃を取り出すと、甲斐斗に銃口を向けた。

――その光景を見た街の人達は急いでその場から逃げていく、何せ一人の男が銃を出しているのだ、誰だって逃げる。
てか、こんな街中で普通銃を出すか？軍人なら軍人らしく少しぐらい考えて行動しろよ。
そして俺の後ろに立っていたルフィスとレンも異変に気づいた。
懐から銃を取り出し、俺に銃を向けている青年にすかさず銃口を向けた。
だが二人は驚いた表情で銃を構えている、無理もない。さて、ここからが修羅場だな。
「カイトさん？」
「アステル少尉が……二人？」
まるで狐に化かされたかのように、二人は固まっていた。
無理もない、同じ顔の人間が目の前に二人いるのだから。
「ルフィス！レンさん！その男から離れて！そいつは僕じゃない！！」
このままだと奴に蜂の巣にされるか、また牢獄送りになっちまう。

俺はとっさにルフィスの腕を掴むとポケットからナイフを取り出し、そのナイフを首もとに突きつけた。
「おっと動かないでもらおうか、さもなくばこの子の命がどうなるかな？」
明らかに俺は悪役の台詞を吐いている、だが今はそんな事気にしてられない。
面倒な奴等が来る前にミシェルを連れて帰らなければ……。
「かいと！」
「君は危ないから下がってて！」
その時、アステルの後ろにいた少女が俺の前に現れた。
青い髪、大きな帽子、間違いなくミシェルだ。あれ程動くなと言ってたのにどうして……。
だがこれで探しに行く手間が省けたってもんだ。
「ミシェル、俺の所に来るんだ」
すると、俺の元に近づこうとしていたミシェルの腕をアステルが掴む。
そしてアステルは自分の元へ引き寄せるとミシェルの頭に銃を突きつけた。
「おまっ、正気か！？」
「僕は至って正気です、貴方こそ今すぐそのナイフを下ろし、ルフィスを離してください」
こいつ、まだ幼い子供に銃を突きつけやがって。
銃を突きつけられているミシェルは怯えているかと思いきや、あまり抵抗もせずにただ俺達を見ているだけだった。
「僕もこんな事はしたくない、貴方が僕の指示通りにしてくれれば手荒なマネはしないつもりだよ」
「俺もこんな悪役じみた事はしたくないんでな、ミシェルを返せばルフィスも返す」
「それなら先に僕に渡してください、そうすればこの子は貴方に返します」

「返した後どうする？俺達を捕まえるんだろ？俺の言う事を聞かないとコイツ殺すぞ？」
俺は不敵な笑みを見せた後、ナイフの刃をルフィスの顔の前でちらつかせる。
「わ、わかった！この子は返す、だからルフィスに危害を加えるな！」
その時、口を開かなかったルフィスがここで口を開いた。
「アステル少尉！一体この人は誰なんですか？！どうして彼は私達の名前を！アステル少尉の姿を……」
「そ、それはっ……」
アステルが口を閉ざしたが、何故だ？というかルフィスは俺の事を知らないのか？
俺とアステルは全くの別人、アステルはそれを伝えていないと言う事か？
「アステル、俺の事を隠すつもりだったんだろうが残念だったなぁ。まぁ俺には関係の無い話、早くミシェルをこっちに渡せ」
ナイフの刃先をルフィスの首元に突きつけるけど、もちろん殺したりはしない。
「っ……わかった、この子は返す」
アステルはそう言うと掴んでいたミシェルの腕を放す、自由になったミシェルはすぐさま俺の所に来てくれた。
「さぁ返したよ、早くルフィスを放せ！」
それ程ルフィスが大事か、いいだろう。俺もルフィスには色々と世話になったからな。
俺がルフィスを放すと、ルフィスはすぐさまアステルの元に向かう。
「ルフィス、怪我はないかい？」
「は、はい。大丈夫です」
多少戸惑っている様子だ、彼女は今何を考えているのだろうか。
いや、それより今は逃げる事に専念するか。
「それじゃあ俺はここら辺で逃がしてもら――」

おうとおもったが、やっぱり俺の思い通りに事が進む事は無いのだろうか。
街の騒ぎに駆けつけた警察に、銃を俺に向けるアステル。
……いや、まて。どうして俺が逃げる必要があるんだ？
「おいおい、俺は何もしてないんだぞ？どうして銃を向ける、何故捕まえようとするんだ？」
俺は回りにいる警察と周りにいる人達にも聞こえるぐらいの声が喋った。
「それは貴方が！」
「俺が何かしたのか？」
アステルが答えようとした時、俺の横にいるレンが答えた。
「私を騙してお金を使いましたよね！？それは立派な罪です！」
「騙した？俺は別に騙してなんかないね、それに数週間前まで俺は『カイト・アステル』だったんだからな」
「ど、どういう事ですか！？」
「詳しい話はそこのアステルに聞きな、んじゃあばよ」
俺は手に持っていたナイフをアステル目掛けて投げた、アステルは何とかそのナイフをかわす。
そして俺はその隙にミシェルを抱きかかえ、入り組んだ路地の中に走っていった。

アステル達はその場で立ったまま甲斐斗の後を追う事はなかった。
「カイトさん、一体どう言う事なんですか。説明してください……」
ルフィスは疑いの目でアステルを見つめる、納得のいく答えを聞きたがっていた。
アステルは構えていた銃を懐に戻し、黙ったまま下を向く。
「答えてください！あの人は一体誰なんですか！？」
「奴は、その……」
レンも戸惑いながらもアステルの元に向かい、口を開いた。
「アステル少尉、訳を話してくれませんか？私達部隊の皆に」

――その頃、アステル達以外の部隊員は東部軍事基地の格納庫で何かを待っていた。
「伊達中尉、アステル達は休暇なのにどうして俺達は仕事何すか」
ノイドがダルそうに壁にもたれ掛かり、伊達と話していた。
「ノイド曹長はまだ片付けてない仕事とか沢山あったよね、あれ終わらさないと赤城は帰してくれないと思うよ」
「ちくしょう、今頃アステルは両手に花だっていうのに……羨ましい」
すると、格納庫の扉は開き、次々に機体が入っていく。
『ＥＤＰ』の開始は明後日、東部及び南部には次々に機体と武器、弾薬が運び込まれていた。
「んで、どうして俺達は格納庫にいるんすか」
「何でだろうね、赤城に聞いてみようか」
辺りを見回し、赤城を探そうとしたが、すぐ近くに赤城がいる事がわかった。
というかすぐ側で伊達の話をしっかり聞いていた。
「私達がここに呼ばれたのは新型機の事だろう、この部隊の一人が新型に乗るらしい」
赤城は相変わらず厚い軍服を身に纏い、腕組をしながら次々に運び込まれてくる機体を眺めていた。
由梨音は新型と聞いて少し興奮気味に喋る。
「新型ですよ！何しろＮＦがこの作戦の為に創り上げ、高性能を誇る機体らしいですよ！」
「それで、その新型は今どこにあるんだ？」
ノイドが辺りを見回しても、新型らしい新型が見当たらない、見えるのはギフツとリバインぐらいだ。
「もうすぐ運び込まれてくると思うんですけどねぇ、おかしいなぁ」
「っま、新型って言うんだからどーせ乗るのは赤城少佐だと思うけどな」

その時、格納庫内に警報が鳴り響き、アナウンスが入る。
『Ｕｒｇｅｎｔ　Ｏｒｄｅｒ　エリアにＥＲＲＯＲ確認。Ｃ２エリアにＥＲＲＯＲ確認』
Ｃ２エリア、その言葉に兵士達は耳を疑った。Ｃ２エリア基地の一つ隣のエリア。
今までＥＲＲＯＲがＣラインのエリアに入った事は無かった、そもそもＥＲＲＯＲは基地に襲撃をする事などしないのだ。
日に日に凶暴化してくるとも思えるＥＲＲＯＲ、しかも『ＥＤＰ』開始二日前に現れるとは。
赤城はその場にいる兵士達全員に聞こえる声で指揮をとった。
「聞いての通りだ、全隊員戦闘配備。一匹たりともＥＲＲＯＲをＣ１エリアに入れるなっ！」
伊達と赤城は急いでリバインに乗り込み、由梨音とノイドもギフツに乗り込む。
『赤城、どうしてＥＲＲＯＲがこの期に及んでこの基地に攻めてきたと思う？』
赤城のコクピットに取り付けてあるモニターに武蔵の映像が映る。
「私達の戦力を少しでも削ぐ為かもしれんな」
『だとしたら、もしかしたらＥＲＲＯＲは『ＥＤＰ』の作戦日を知っているかもしれない。いくら何でも的確すぎる』
「ＥＲＲＯＲが？どうやって、奴等が作戦日を知っているなどありえない」
『だといいんだけどね、なるべく被害を少なくして、弾の消費を避けないといけない』
「わかっている、だが奴等を基地内に入れる訳にもいかない」
『了解、行こう赤城』
赤城と武蔵の乗るリバインは格納庫から発進するとすぐさまＣ２エリアに向かう。
その後ろには由梨音とノイドの乗るギフツが後から追いかけてくる。
そして次々に他の部隊の隊員が乗るギフツ、リバインがＣ２エリア

へと向かった。

『ＥＤＰ』開始まで残り2日

第２８話　導き、前兆（後書き）

高橋　由梨音
東部軍事基地第五独立機動部隊の隊員。
いつも赤城の側で役に立とうと動くが、それが逆に赤城を困らせる時が多々ある。
性格は部隊の中で一番明るく元気、実は赤城とは数年前から知り合い。
由梨音がいるおかげで余り喋らない赤城の口数も段々と増えるようになった。

第２９話　執念、防衛

――アステルのポケットに入っている携帯が鳴る。それと同時にレンやルフィス達の携帯もなり始める、それは軍からの通達だった。
「軍からの連絡……ルフィス、レンさん。話しは後でします、今は基地に戻りましょう」
アステルの言葉に二人は頷くと、三人は私服のまま基地目掛けて走っていった。

――やれやれ、俺はようやく警察を振り切る事に成功。ミシェルと一緒に図書館に来ていた。
ミシェルは一人椅子に座って絵本を読んでいる。そして俺は一人本を探していた。
歴史の本、この世界がどんな世界なのかを知るにはそれを見たほうが一番早い。
図書館の奥の方においてある本棚にその本が置かれていた。辞書のように厚くは無く薄い、そして色が落ちている。
俺はふとその汚い本を手に取ると、ミシェルが絵本を読んでいた場所に戻ってくる。
ミシェルは絵本を面白そうに読んでくれている、こうやって見ればこの子もただの女の子だなぁ。
って、やっぱりミシェルには何か力があるのか？俺もあるとは思うが、一体どんな力があるのだろうか。
とりあえずその本のページを数枚捲ってみたが、中は真っ白。何も書かれていない。
と、思っていたが。一番最初のページに書かれてあった。
これはどうやら誰かの日記らしい、どうして図書館に日記なんてあるんだ？
とりあえずどんな内容なのか見てみる事にした。

『平成12年、9月1日。
私は決意しました。
……結局この世界に帰ってきてはくれなかった。でも、私はきっと帰って来るのを信じてる。
この日記はこの世界に帰って来る彼に向けて書きます、例えこの日記が消えようとも、私はそれを書くつもりです。
自分を責めないでね。こんな結果になってしまったのは私達の力が足りなかったからなの。
私達は皆で力を合わして、何とか止めようと頑張りました。
でも、皆戦いの中で命を落としていった、空も、美癒も。皆、皆。
貴方の帰りを待っているのはもう私だけです、今でも帰ってこないかと待っているよ。
私は今でも信じてる。甲斐斗が生きてこの世界に帰って来る事を』

――誰だ？
意味がわからない。
違う、俺はわかろうとしてないだけだ、この文を読めば理解できるはずだ。
次のページ、次のページには何が書かれているのか、とにかく続きが知りたい。
俺は微かに震える指先でページを捲った。

『この日記には少し特殊な魔法を掛けておきました、甲斐斗がこの世界に戻ってきた時、必ず甲斐斗の手に本が渡る魔法。
魔法って便利だよね、って歩魅もよく言ってたけど。本当にそうだよね。
甲斐斗がこの日記を読んでいるとき、私はもう死んでいると思います。
出来れば甲斐斗が戻ってくるのを、ずっと待っていたかった。でも

それは叶わない夢。
最後の一つお願いがあるの。私達が守れなかったこの世界を守って。
もう甲斐斗しかいないの、辛いと思う、悲しいと思うでも、私達にはもう甲斐斗しかいないの。
最後　こんな事言　てごめんね。
私も、そ　そろ限界が来た　　。先　皆の所　行っ　から　　ね』

――静かな図書館に、一人の男の罵声が飛んだ。
その声は館内に響き渡り、誰もがその声の方向に目を向けた。
そして一番驚いたのは、甲斐斗のすぐ横にいたミシェルだった。
ミシェルは驚いた様子で目を丸くし、甲斐斗をじっと見つめている。
「かいと？」
弱々しく小さな声は甲斐斗の耳には届かなかった。
甲斐斗は机を簡単に持ち上げてぶん投げると、右手に黒剣が現れる。
「かいと！？」
ミシェルは慌てて甲斐斗を止めようとしたが、甲斐斗は近寄ってくるミシェルを避ける。
「何これ、何だよこの世界は」
甲斐斗が剣を構えると、館内の壁、柱、本棚を次々に斬りつけていく。
もしそこに人がいても、甲斐斗は容赦なく斬り捨てただろう。
館内にいた人達は急いでその場から離れて逃げる、そして警察に通報している人もいた。
だが甲斐斗は止まらない、次々に散っていく本、足元には瓦礫や斬られた本の残骸が溜まっていく。
一通り暴れ終えた甲斐斗は無残に散らばる本の上に座り、傷だらけの壁にもたれ掛かった。
「っぶ！くははは！！やっべ腹痛い」
一人両手で腹を押さえながら笑い出す甲斐斗、その様子を見たミシェルがゆっくりと甲斐斗に近づいていく。

すると、先に甲斐斗からミシェルに声を掛けてくれた。
「聞いてくれよミシェル、俺は違う世界に飛ばされたんだってずーっと思ってたんだよ」
「う、うん……」
甲斐斗は笑っているのに恐怖を感じる、笑みは怒りと悲しみに満ちていた。
「だから俺は元の世界に帰りたかったんだよ、そしたらそう！」
「俺は既にもとの世界に帰ってたんだってよ！１００年後の元の世界になっ！？」
「これは傑作だな！気づかない内に俺は元の世界に戻ってたんだからなぁ！」
「しかもそれが１００年後の世界だってよ！うは、やっべまじ腹痛いわ……」
甲斐斗は一人喋り続ける、その剣幕に圧倒されてミシェルは何も言葉が出なかった。
ケラケラと笑い続ける甲斐斗、ゆっくりと起き上がるとその右の拳で壁をぶん殴る。
壁を殴るものの、壁には傷一つ付かない、それ所か甲斐斗の拳から血が垂れ流れる。

――「ふざけんなよボケがッ！」
俺はやみくもに壁を殴り続けた、ただひたすら、自分の腕が動かなくなるまで。
何の為にここまでやってきたんだよ、元の世界に帰って、皆と会う為じゃないのか。
それなのに、何だよお前等。皆死んだのかよ。皆約束を破って俺一人残して死んだのかよ。
大体何で１００年後なんだよ、俺が眠っていた間、１００年も月日が流れたって言うのか？
俺が何したって言うんだよ、確かに俺は罪を重ねてきた、俺は罪人

だ。だから何だ。
自分の命まで捨てて守った人達、世界があったのに。どうしてこんな仕打ちを受けないといけないんだ……。
俺はあの世界が好きだったよ、皆で遊んで、皆と喋って、皆と暮らして……。
「っつ、痛……」
ふと我に返れたのは拳の痛みのせいだった。興奮していた俺は肩で息をしながら目の前の壁をただ見つめている。
コンクリートの壁を殴り続けた俺の拳は血みどろに汚れ、壁にも沢山の血がついていた。
その痛みと血が、俺を更に奮い立たせた。俺にはもう何も無い、帰る場所、待ってくれる人も。
「クソがぁあああああっ！！」
俺は右手を大きく振り上げると、コンクリートの壁に拳を振り下ろした。
出来る、いつもの俺なら、最強の、この俺なら、こんな壁簡単に壊せる！
俺は微かに笑った、今の俺なら、今の怒りに満ちた俺なら不可能は無い。
そうだ、俺は強い、最強の力を持っていたじゃないか。
俺は自分でそう言い聞かせ、全力で壁をぶん殴った。

――全力で殴った壁はヒビ一つ入らない、それ所か俺の右手の骨にヒビが入ったように思えた。
肉と骨を剥き出したままの拳、電流が走るかのように激痛は一瞬で体中に伝わる。
俺はとっさにその場に伏せて悶え苦しんだ、苦しい、いっそ楽になりたい。
……それで、俺は何の為にこの世界に来たんだよ。
こんな、戦争で荒れた世界、化け物が這いずり回る世界に戻ってき

て、俺に何をしろって言うんだ。
もう止めだ、俺のお話はここまでだ。さようなら。
俺はまた壁にもたれ掛かり、静かに目蓋を閉じようとした。
「甲斐斗、何現実逃避しよとしてるの。気持ちはわかるけど起きて」
目を閉じかけようとした時、女性の声が耳の中に入ってきた。
ミシェル？いや、違う。それに俺の名前を知っているって。一体誰だ。
俺は閉じようとしていた目蓋を止めると、またゆっくりと開いた。
「ユイ……？」
『そう、私、ユイだよ。甲斐斗』
死んだはずのユイが俺の目の前にいる。だが体を透き通っており、まるで幽霊のようだ。
「ユイ！？お前死んだんじゃなかったのか……？」
『甲斐斗がコレを見た時、私はもう死んでると思う。今ここにいる私は私が生きていた前に魔法でメッセージを残したものなの』
俺の質問を全て先読みしているのか？
多分俺が黙っていても勝手にユイが話しだすだろう、俺が日記を開くとともに伝えたいメッセージを言うようになってるんだな。
『今頃甲斐斗は一人で拗ねて怒っている思うけど、私の話しをちゃんと聞いてね』
……何でそこまで読まれてる、本当はどこかに隠れているんじゃないのか。
と言いたいほどユイの言っている事が当たっていた。
『残酷な言い方かもしれないけど、お願い戦って。この世界の為に、皆この世界を守る為に戦ったの』
「誰から守ってたんだよ、誰がお前達を殺したんだ。それを言ってくれ」
『神よ、神が世界の平和の為と言ってこの世界を滅ぼそうとしたの』
『立って。戦って。『今』この世界を守れるのは甲斐斗しかいないの』

『この世界を平和に導いて、甲斐斗』
懐かしい声だ、１００年ぶりに聞いた声と行っても間違いじゃないだろう。
つうか、神って何だよ。神、神って。あの世界を滅ぼそうとしたと言われている兵器の事か？
ユイの声を聞くのが、これで最後になったな。
「わかったよユイ、俺は戦う」
俺は壁にもたれ掛かりながら立ち上がり、体勢を立て直した。
するとユイは笑顔で俺にこう言ってきた。
『何の為に？』
答えは一つしかない、俺はその答えを言ってやった。
「世界を守る為に」

――――『本音は？』
ユイはまた笑顔のまま問いかけてきた、だから俺も笑ってやったよ。
「決まってる、復讐する為だ」
こんな世界、皆がいないんじゃあ守る必要なんて無い。
これからの俺の目的は一つだ、いや。一つにしてやった。世界を守る為に戦うとか。そんな在り来たりな設定はもう飽きたからな。
俺はこんな所で立ち止まる男じゃない、何たって俺は最強の男だからな。

――――その頃、東部に集められていた全ての部隊は出撃し、ＥＲＲＯＲと激戦していた。
予想以上に数が多く、じわじわと市街地や基地に追い詰められていく部隊。
赤城達の部隊も必死に応戦はするが、その数に押され始めていた。
『くそっ！どうしてこんなに数が多いんだよ！？』
迫り来るＰｅｒｓｏｎ態、Ｂｅａｓｔ態に目掛け、ノイドの乗るギフツがマシンガンを片手に撃ちこんでいく。

その横では武蔵の乗るリバインがグレネードを撃ち近辺のＥＲＲＯＲを吹き飛ばしていた。
『予想外だね、ここまで多いとは』
『でも伊達中尉は何か楽そうな顔っすね、なんでそんな余裕があるんすか…・・』
『そう見えるだけで、俺自身結構焦ってるよ』
撃っている最中、Ｐｅｒｓｏｎ態やＢｅａｓｔ態の後ろから波のように現れるＷｏｒｍ態。
武蔵がそれを見た瞬間、撃ち尽くしたグレネードを捨ててＷｏｒｍ態に突撃しに行く。
『ちょ！伊達中尉！無理はしない方がっ！？』
武蔵の行動に赤城からも通信が入ってくる。
『武蔵、一人で勝手に動くな。敵陣に単機で突っ込むなど私は許さない』
『俺は少しでもＥＲＲＯＲの注意を引きつければそれでいいんです』
現在戦況は不利、この状態を何とか打破しなければならなかった。
武蔵の乗るリバインの眼が光ると、右手をＬＲＳに切り替え、盾を前に出して突撃する。
張り付いてきようとするＰｅｒｓｏｎ態を右肩に取り付けられているマシンガンで撃ち抜いていき。
飛びかかるＢｅａｓｔ態をものともせずに次々に斬り捨てて行く。
『さすが伊達中尉、すごい動きだ……俺も頑張らねえとなっ！』
『その意気だノイド曹長。由梨音、私達も二人に負けないよう力を出し切るぞ』
『わかってますよ赤城少佐！私達第五機動独立部隊の力を見せ付けてやりましょう！』
基地から次々にギフツとリバインが出撃、何とか防衛ラインが維持できている状況だが、遠くには民間人が暮らす市街地がある。
何とかここで持ちこたえ、ＥＲＲＯＲを排除していきたい状況だった。

――そんな中、東部軍事基地では異変が起きていた。
アステル達は何とか東部軍事基地に到着すると、急いで格納庫へと向かおうとした。
だが、兵士達が銃を持って次々に格納庫や基地内に入っていくのがアステルの視界に入る。
何が起こっているのかわからず、丁度目の前にいる女性に声を掛けてみた。
「すみません、基地内では一体何が起こっているんですか？」
その大人びた女性はアステルに気づくとそっと振り返り、煙草を吸っていた、そしてアステルの顔を見ると小さく溜め息をする。
「やーっと声かけてもらえたと思ったら……せっかく新型を運んできたって言うのにねぇ」
女性は不満そうな顔をしながら小さく煙草の煙を吐く、アステルは戸惑った表情でその女性を見ていた。
「んーと、実は今基地内にＨｕｍａｎ態が侵入してるらしいわよ、それで今排除しているんですって」
アステルの後ろにいたルフィスとレンが驚きを見せる。
「Ｈｕｍａｎ態って、新しく発見された新種のＥＲＲＯＲですよね。まさか基地内に侵入してるなんて……。
教えていただきありがとうございます、僕達はこれから基地内にいるＨｕｍａｎ態を排除しに行って来ます」
「あ、ちょっとまって。その子は置いてってくれないかしら」
そう言うと女性はレンの腕を掴み、アステル達から引き離す。
「貴方レンちゃんよね、少し用事があるから付き合ってもらえないかしら」
「えっ、私がですか？」
「そう、新型機に乗ってもらわないと困るからぁ」
「し、新型ですか！？私が？！」
「わかりました、レンさんはその機体で出撃してください。僕達は

基地内のＥＲＲＯＲを排除してきます」
驚いているレンを他所にそう言うと、アステルは基地へと走り、ルフィスもその後を追っていった。
基地に向かう二人を見ながら、何故か不敵な笑みをみせる女性
「レンちゃんには死んでもらったら困るからね……」
そう呟くと女性はレンを連れて格納庫とは逆の方向にある建物の中に入っていった。

――赤城達は未だにＥＲＲＯＲと戦っている、だが弾薬がそろそろ尽きて来ていた。
一度補給する為に基地へ戻らなければならないが、今ここで抜ける訳にも行かない……。
『赤城達は一度補給の為に戻って、ここは俺とノイド曹長が食い止めるから』
『最善の案では無いが、今はそうするしか無さそうだ。由梨音、一度基地に戻るぞ』
『二人とも無理はしないでくださいねっ！すぐ戻ってきますから！』
そう言うと赤城と由梨音は二人に背を向けて基地へと戻る。
『伊達中尉、俺は中尉が思ってるほど役には立てないかもしれないっすよ？』
『ノイド曹長も無理はしないでいいよ、二人が戻ってくるまで無理は禁物だから』
「そんな事言って伊達中尉は一人で突撃してるじゃないですか。俺でよければ援護させていただきます」
ノイドはそう言うとＥＲＲＯＲの残骸が転がっている辺りに入っていく、様々なＥＲＲＯＲが重なり、辺りに倒れている。
その中にＷｏｒｍ態もおり、壁のような大きさな為に視界が悪い。
「中尉はこんな中を一人で……って！」
前方に見えるＢｅａｓｔ態の群れ、ノイドはいち早くマシンガンの引き金を引く。

一匹のＢｅａｓｔ態には命中したが、横にいた2匹のＢｅａｓｔ態は軽々弾を避けるとＥＲＲＯＲの死骸を踏み台にしながら2匹のＢｅａｓｔ態は左右から素早く近づいてくる。

『左右から攻めてくるとは少しは頭使ってんな、だがよ！』

片方に向けてマシンガンをぶっ放すノイド、中々弾が当たらないが、集中して狙い定め何とか当ててみせた。

だが後ろからはもう一匹のＢｅａｓｔ態が既に飛びかかって来ていた、ノイドはそれを予測し、左腕に仕込まれているナイフを取り出す。

そしてギフツの左手に掴んだナイフを後ろに振り返ると同時にＢｅａｓｔ態の頭目掛け突き刺す。

『人間様に勝とうなんて思わない事だな！』

Ｂｅａｓｔ態の頭部からは血が吹き出し、大きく吼えた後ゆっくりと倒れて力尽きる。

また2匹、ＥＲＲＯＲの死体が増えてしまった。

「ったく、でかい図体してんのによくあんな早い動きが出来るな……」

一度安全な場所に離れようと機体を旋回させたその時、死んだと思っていたはずのＷｏｒｍ態が突然動き出す。

急いで銃を構えようとした時、それよりも早く触手がコクピット目掛けて突き出された。

『ノイド曹長！大丈夫ですか？！』

武蔵が無線が入るもののノイドの返事が帰ってこない、もう一度呼びかけようとした時、モニターのノイドの姿が映る。

「伊達中尉、これぞ危機一髪って奴っすね。へへへ」

ノイドの乗るギフツは銃を手放し、両手でＷｏｒｍ態の触手を握り締めていた。

触手の先端は少しコクピットに突き刺さっていはいるものの、ノイドに触れる前に何とか止める事が出来ていた。

「本当、油断大敵っすね、今度からはもっと気をつけないと……」
『ノイド！今すぐその触手を放せ！！』
「えっ」
武蔵が叫んだ時には、既に遅かった。
Ｗｏｒｍ態から触手に強力な酸が流れ込む、そしてその大量の酸は一気に噴出し、操縦席に座るノイドが大量の酸を浴びる。
その強力な酸を浴びたノイドは暴れだし、酸から逃げようもがき苦しむ。
だが酸はコクピットのハッチから噴出されており、ノイドは逃げる事も何も出来なかった。
「熱いッ！熱い熱い熱いいッ！あっづうぁあああああ！！」
その光景に武蔵は目を背けた、ただ悲鳴だけがコクピット内に響き渡る。
だがその声も段々と弱くなり、悲鳴が聞こえなくなった時、ノイドは原型を止めていない程に溶かされていた。
『ノイド！そんな…俺が赤城達と一緒に補給に向かわせていれば……ッ！！』
リバインの出力を最大に上昇させ、一気に跳びあがる。
そしてノイドが死んだ場所に着地すると、ノイドの乗っていたギフツに取り付いているＷｏｒｍ態にＬＲＳを突き刺す。
Ｗｏｒｍ態は悲鳴を上げ、リバインに襲い掛かろうとするが武蔵の乗るリバインの素早さについていけず何もする事が出来ない。
『よくもノイドを、この化物共がぁッ！！』
触手を全て斬り落とされ、何も出来る事が無くなったＷｏｒｍ態。
武蔵はＬＲＳをの刃先を突き立てると、勢い良くＷｏｒｍ態の頭部に突き刺す、何度も、何度も。
そして武蔵は気づいていた、自分を囲むようにしてＥＲＲＯＲが集まってきていると言う事を。
その時、突然レンから無線が入る。
『伊達中尉！至急基地に戻ってください、貴方に渡したい物がある

という女性がいます！』
『レンさん！渡したい物というと、例の新型の事ですか？』
『はい！ここは私と隊長達に任せて早く！』
『わかりました、すぐに向かいます』
レンが通信を切ると、レンのモニターに赤城と由梨音の姿が映る。
『あ、赤城少佐！ノイド曹長の機体が……』
由梨音が指を指す方向には、無残にも胸部がボロボロに溶かされたギフツが横たわっていた。
『そんなっ、ノイドが？……くっ、戻るのが一足遅かったか……。レン！新型の力を奴等に見せつけてやるんだ』
『はい隊長！』
そして現れるレンの乗る機体、青色のその機体の背中には六つの新兵器が搭載されていた。
ＥＲＲＯＲとの戦いはまだ、終わらない。

第２９話　執念、防衛（後書き）

正式名ＭＦＥ－アストロス・オーガ　（Ｓａｖｉｏｒｓ製）
全長－１８ｍ　機体色－赤　動力－光学電子磁鉱石
Ｓａｖｉｏｒｓが開発した『３大神機』の１機。
鬼のような姿をしており、頭には目立つように長く鋭い角が２本付けられている。
その素早さはギフツはおろかリバインでさえ着いて来れない。
並外れた敏捷力、飛脚力、突発力を使い一瞬で敵の懐に飛びかかる事が可能。
武装という武装は全くしておらず、拳のみで戦う為近距離戦闘用兵器に属する。
その為拳には特殊な金属を採用。
更に『ＲＥ粒子』を散布する事でＬＲＳを受け止める事や撃ってきた徹甲弾を砕く事も可能となった。

第３０話　本当、目的

――無事に基地に帰還した武蔵、機体を格納庫の手前で止めるとすぐさま機体から降りる。
そして格納庫の中に入ろうとした時、大きな扉の前に眼鏡を掛け、煙草を吸いながら誰かを待っている女性が立っていた。
その女性は武蔵に気づくと銜えていた煙草を指で挟む。
「久しぶりね、伊達君」
「き、君は……」
武蔵はその女性の顔に見覚えがあった。
「ふふっ、感動の再会はもっと静かな所でしたかったわね。もう準備は出来てるわよ」
その途端、格納庫の扉はゆっくりと開き、中からは一機の機体が姿を見せた。
全身茶色にコーティングされたその機体の肩には巨大な大砲が着いているのが印象的だった。
「機体名は『大和（やまと）』。貴方専用の機体よ」
女性は少し笑みを浮かべながら煙草を吸い、その機体を見つめていた。
「ありがとう、神楽（かぐら）。行って来る」

――その頃、ＥＲＲＯＲの前に立ちふさがる一機の機体の眼が光り輝いていた。
操縦席に座っているレンは何故か目を瞑り、意識を集中させている。
そして眼を開いた瞬間、背中に付いてある六つの武器が一斉に発射された。
『飛べっ！フェアリー！』
六つのフェアリーは空高く舞い上がり、そして急降下と共に一斉に攻撃を開始する。

フェアリーから放たれるビームは次々にＥＲＲＯＲを撃ち抜いていく。
装甲の熱いＷｏｒｍ態の皮膚でさえ貫いていき、動きの早いＢｅａｓｔ態にも確実に当てていく。
Ｗｏｒｍ態が無数の触手を一斉に伸ばし、フェアリーを捕まえようとするがフェアリーにはかすりもしない。
その動きと小ささで難なく触手を交わしていくと、またレンが乗る機体の背中に自動的に戻る。
新型の機体の動きを見ていた赤城と由梨音は驚きを隠せない表情をしている。
そして自動で飛び、次々に敵を撃ち抜いていったフェアリーが心強く思えた。
『すごい、これが……私の機体！』
今の所、たった１機でＥＲＲＯＲの群れと互角に戦えているが、奴等は物量で攻めてくる。
『由梨音、私達も負けてはいられないぞ』
『はい！私もレンちゃんに負けないぐらい頑張ります！！』
由梨音の乗るギフツは背中に着いてあるバズーカを手に取ると、ＥＲＲＯＲの群れに次々に撃ち込んでいく。
赤城はその時の爆風に隠れながらＥＲＲＯＲを狙い、敵陣に突っ込みＬＲＳを振るう、そしてアサルトライフルで次々にＥＲＲＯＲを撃ち抜いて行った。
『隊長！第三と第四部隊が押され始めています、このままだとＥＲＲＯＲに囲まれてしまいます！』
『わかった。レン、お前は第三部隊と合流。援護をしてやれ。由梨音は第四部隊も合流しろ』
『隊長、私がここに残ります。隊長は第三部隊と合流を！』
『私はこの部隊の隊長、この場は責任を持って私が対処する。お前達は他部隊と合流を済ませるんだ』
『赤城少佐！いくら何でもこの場を一人でなんて無理ですよ！？』

『いや、レンのおかげで若干数は減った。これぐらいなら私一人で十分だ。
それに、命を張ってこの場を守ろうとしたノイドに。私は背を向ける事は出来ない、これは隊長の責任だ』
『うっ……わかりました。第四部隊と合流します』
レンの乗る青い機体は赤城の乗るリバインに背を向けると、第三部隊の入る場所に飛んでいく。
『赤城少佐！伊達中尉が戻ってくるまで絶対に無理はしたらだめだよ！』
『由梨音、お前も気をつけろ』

――由梨音の乗るギフツも赤城に背を向け、第四部隊のいる場所に向かった。
赤城は足元に落ちているマシンガンを拾うと、両手同時に引き金を引く。
弾丸は這い蹲りながら奇妙に近寄ってくるＰｅｒｓｏｎ態を次々に撃ち抜いていく。
地面から次々に湧き出るＥＲＲＯＲ。Ｐｅｒｓｏｎ態のほかにもＷｏｒｍ態が続々表れる。
Ｗｏｒｍ態の甲羅は硬く厚い、その為銃では破壊が不可能なので重火器を使うかＬＲＳで斬るしか方法が無い。
赤城はリバインの腰に付いているハンドグレネードをＥＲＲＯＲの群れに投げ込むと、盾を前に突き出しながら突進していく。
爆風で中を舞うＥＲＲＯＲの肉片、赤城はそんな物ものともせずに近づいてくるＷｏｒｍ態にＬＲＳを突き刺す。
後ろから走り、飛びかかってくるＢｅａｓｔ態を盾で弾き、肩に着いてある機関銃で撃ち抜く。
そしてＰｅｒｓｏｎ態に取り付かれる前にブースト展開。
一度飛んで安全なエリアに着地し、機体の背中についてあるアサルトライフルを取り出す。

左足の側面が開くとアサルトライフルの弾が内蔵されており、それを掴むと急いで取り付けてリロードを済ませる。
だがその時、リバインが立っていた地面に亀裂が走る。
赤城は急いで飛ぼうとブーストを展開、地面から足が離れた瞬間に無数の触手が地面から伸び出てくる。
その触手に銃を撃つ赤城だが中々当たらず、無数の触手はリバインの両足に巻きつきはじめると、リバインは体勢を崩してしまいそのまま地面に叩きつけられる。
「うぐっ！」
その衝撃で頭を打ちつけられた赤城、額からかすかに血が垂れる。
意識が朦朧とする中、急いでリバインを起き上がらせようとレバーを押し上げるが、
触手に機体を引きずられて上手く立ち上がる事が出来ない。
ＥＲＲＯＲの群れの中に引きずられていくリバイン、Ｗｏｒｍ態の触手から逃れようと必死にもがくがあっという間に引きずられていく。
リバインは咄嗟にＬＲＳを取り出し、その刃を地面に突き刺した。
「まだだ、私はまだ倒れるわけにはいかない！」
何とか動きを止める事が出来た、だがＷｏｒｍ態の触手はリバインの両足に巻きついたまま放そうとしない。
身動きが取れないままのリバイン、それを狙って無数のＰｅｒｓｏｎ態が次々に機体に張り付いてくる。
「考えるんだ、どうすればいいのか。奴が戻ってくるまでに私は――」
『―ＥＲＲＯＲ―』
モニターに映る『ＥＲＲＯＲ』、コクピット内の赤いランプがつくと警告音が流れる。
Ｐｅｒｓｏｎ態が機体の間接のケーブルや骨組みを噛み砕き、機体を解体していく。
そして数匹のＰｅｒｓｏｎ態は機体の背中を噛み砕き、ある物を探

し出していた。
「こんな化け物に背後をとられるぐらいなら私は！」
地面に突き刺さしているＬＲＳを引き抜く赤城、機体は地面に引きずられながらＥＲＲＯＲの群れに引き込まれていくが、
その間に赤城は機体に張り付いているＰｅｒｓｏｎ態を必死に振り払う。
そして自分の足に巻きついている触手はＬＲＳで斬ろうとした時、
赤城の乗るリバインは宙を舞う。
機体は上空に投げ飛ばされる、その間に何とか体勢を立て直して着地を試みる。
多少機体にダメージはあるが何とか着地に成功。
だが、周りを見渡した赤城はその光景に絶望した。
自分の周りを囲む数百程いるＥＲＲＯＲの大群、周りにいるＥＲＲＯＲ全てが赤城を見つめていた。
その時、東部基地からの通信が突然入ってきた。
『全部隊に告ぎます、こちら東部基地を防衛していた壱番隊、弐番隊、八番隊、九番隊が全滅。
基地にＥＲＲＯＲの大群が押し寄せてきています、残されている部隊は全て基地の防衛に回ってください』
「なっ、そんな馬鹿な。市街地の防衛より基地の防衛を最優先する気か？」
今ここで市街地周辺にいる部隊が基地に集まってしまうと、市街地は一体誰が守ると言うんだ。
だが冷静に考えてみればたしかに基地防衛を優先せざる得ない、基地が落とされてしまえば結果的に市街地が壊滅する。
だからと言ってこの場を見過ごすわけにはいかない。
赤城が基地に向かおうとした時、突如通信からオペレーターの声が聞こえてきた。
『基地の前方にアンノウン機が出現！ＥＲＲＯＲの兵器だと思われ……えっ？

アンノウン機がＥＲＲＯＲと交戦中。次々にＥＲＲＯＲの数を減らしていきます！』
そして通信からは違うもう一人の声が聞こえてきた、その声はいつも聞いているあの声だった
『俺がこいつ等の相手してやんよ！だからお前等兵士は市街地の防衛してろ！！』
「そのこえ、アステルしょうい…か……」
赤城がその機体との通信を試みると、すんなり通信は成功。操縦席に座る男の姿がモニターに映し出された。
『残念だが俺は高橋甲斐斗、アステルじゃない、って赤毛！その傷大丈夫なのか！？』
「わたしは赤城だ、なんどいえば……」
『――――！！』
「何……？」
薄い、見るもの全てが薄くブレて見える。
彼は必死に赤城に話しかけるが、声は赤城には届かなかった。
赤城の頭から流れ出る血は止まらず、赤城の着ている軍服をも赤く染めていく。
レーダーに反応有り、ＥＲＲＯＲの大群が一斉に赤城の機体目掛けて進んできていた。
胸の鼓動が早く感じる、自分の死を加速させているかのように。
もはや銃も無い、あるといえば一本のＬＲＳだけ。
意識が朦朧とする中、リバインはＬＲＳを構え、迫り来るＥＲＲＯＲの軍団に向けて刃を向けた。
「私の刀、まだ折れてはいない……」
――――体は簡単に砕け散っていった。
その一発の砲弾はリバインに近づくＥＲＲＯＲの肉体を木っ端微塵にして吹き飛ばしていく。
「赤城、よく頑張ってくれた。ありがとう」

そして一機の機体がリバインの前に現れる。
全身茶色の装甲を身に纏い、右肩にはあの大砲の発射口から煙が漂っている。
「ここからは俺が頑張らないとね、赤城は少し休んでて」
武蔵はそれだけを言うと、リバインに背を向け。ＥＲＲＯＲの群れに機体を向けた。
「ノイドや赤城、皆が命を賭けて守っていてくれたんだ、その思い。無駄にはしない！」
大和の操縦席の壁に光が伝っていき、大和の眼が強く光る。
大砲をＥＲＲＯＲの群れに向けると、一発の砲弾を撃ち込む。
発射されると同時に反動で機体が後ろに進むが、何とか反動に耐えた大和。
砲弾はＥＲＲＯＲが集中的に集まっている場所に到達、地面に触れた瞬間に凄まじい爆発が起こり、その場にいたＥＲＲＯＲを吹き飛ばす。
穴から湧き出るＥＲＲＯＲにも一発の砲弾を撃ち込み穴を破壊、その一発の砲弾を放つたびにレーダーに映るＥＲＲＯＲの数が一気に減っていく。
だが大和やリバインを囲んでいるＥＲＲＯＲはまだ健在だ。
近距離で砲撃すると爆風で赤城の乗るリバインまで被害を被ってしまうからだ。
すると武蔵はモニターの下についてある小さな青色のスイッチを押し、深く目を瞑る。
『―ＳＲＣ発動―』
４匹のＢｅａｓｔ態が大和を囲み、四方から一斉に飛びかかる。
その瞬間、大和は両腰に掛けていた2本の刀を鞘から抜き取ると一斉に飛びかかるＢｅａｓｔ態の首を一瞬にして斬り落とす。
大和がＢｅａｓｔ態と戦っている間にＰｅｒｓｏｎ態がリバインに近づこうとすると、それを見た大和が一瞬にしてＰｅｒｓｏｎ態の全に立ちふさがる。

大和の動きは人のように滑らかに動き、左腕についてある機関銃を使い地面に這い蹲るＰｅｒｓｏｎ態を撃ち抜いていく。
リバイン周辺のＰｅｒｓｏｎ態を一掃すると、Ｗｏｒｍ態の群れがいる方向に砲身を向けて砲弾を撃ち込み、後部のブースターで一機に敵陣の中に入っていく。
ＥＲＲＯＲはその機体に近づく事が出来なかった、完璧な見切り、そして間合い。Ｐｅｒｓｏｎ態やＢｅａｓｔ態がいくら飛びかかろうが大和に触れる事すら出来ない。
Ｗｏｒｍ態が体から一斉に触手を伸ばし、大和を捕まえようとするが、その大和の滑らかで鋭い刀捌きで触手は悉く斬り落とされる。
そしてＷｏｒｍ態に向けてまた一発の砲弾が撃ち込む。だが今までの砲弾とは違い、Ｗｏｒｍ態の厚い殻に穴を開けて一気に貫通する。
「これがＳＲＣの力、まさか本当にこの機能が実現されるなんて……すごいね、神楽」
『それを一回で使いこなす貴方の方がすごいと思うけどねぇ』
神楽との通信が突然繋がり、神楽の姿がモニターに映し出される。
『どう？私が作り出したＳＲＣ機能の力は』
「本当に念じるだけでここまで機体を動かす事が出来るなんて、正直驚いたよ」
『でしょ？まぁその言葉が聞けたら私は満足、今の戦局を伝えるわね』
そう言うと神楽の姿は消え、モニターにはこの地域のＭＡＰが映し出される。
『市街地周辺のエリアにいたＥＲＲＯＲは大分減ってきたわよ、ＥＤＰの為にとっておいた戦力を少し活用したけどね』
『後は基地周辺にいるＥＲＲＯＲ何だけど、あのアンノウン機が未だ交戦中、たった1機でよく頑張るわよねぇ、伊達君にそっくりよ』
「アンノウン機……わかりました、赤城を連れて基地に戻ります。他に何かありますか？」
『そうね、後は基地内にＨｕｍａｎ態が異常な数に増えている事ぐ

らいかしら』
「ありがとう、すぐ向かうから神楽も安全な所に避難してて」
『あら、心配してくれるの？伊達君はいつも優しいわね、でも私は大丈夫よ。そんな簡単に死にはしないから』
『それじゃ、ばいば～い』
神楽が通信の電源を切る、モニターには未だ戦場のＭＡＰが映し出されていた。

――街の外に出た途端、俺は本当に一人でＥＲＲＯＲの相手をしていた。
次々に迫るＥＲＲＯＲをぶった斬っていく感触は最高だ、本当、綺麗に斬れていく。
……俺が今戦っているのは何故。世界を守る為でもない、人助けをする為でもない。
ただ俺は、この醜い化け物を一匹残らずぶち殺したいだけだ。
まぁそれは『おまけ』でしかない、俺の本当の目的は『神』とか言う馬鹿げた名前の兵器を壊すだけだ。
大体何が神だ、馬鹿馬鹿しい、ああ馬鹿馬鹿しい。腹立ってきた。
俺は怒りながらも目的を手に入れた、それだけでも良しとしようか。
「それにしても本当に数が多いなぁこいつ等ッ！」
そう言って俺はＷｏｒｍ態に剣を振り下ろし、真っ二つにしてやった。
既に百匹以上のＥＲＲＯＲを絶対に殺しただろ、それでもまだ沸き続けてやがる。
それにしても犬と芋虫はいいとして、あのＰｅｒｓｏｎ態だっけ。
あいつ等がうざい。
微妙な大きさだしどんどん沸いてきやがる、何か俺も飛び道具がほしいもんだ。
「しゃあねえ、全力で暴れてやる。ゲーセンで鍛えた俺の腕前を思う存分に見せてやるよ！」

そして俺は一気にレバーを前に押し上げた、さぁ奴等の群れの中に飛び込んで暴れてやろうじゃねえか！
そして俺は一気にレバーを前に押し上げた！
……そして俺は一気にレバーを前に押し上げた！
はて、押し上げてんのに全く機体が動かない。立ったまま停止している。
それで俺はよくやくモニターに映っている機体のＥＮゲージが点滅しているのに気づいた。
あー、この機体にはもうＥＮが無いんだった。すっかり忘れていた。
「って余裕かましてる場合じゃなさそうだな」
ゲームは簡単だ、負けそうになれば電源を切ればいい、卑怯とか言うなよ。
だが現実はそうはいかない、奴等が笑みを浮かべながら俺に近づいてくる。
機体を捨てて逃げるか？いや、俺の鈍足じゃ逃げ切れるのは無理そうだ。
となると機体の中に引きこもるしかないー、くそー俺もここまでかー。
……なーんてな！こういうピンチな時にこそ助っ人が登場して俺を助けてくれるっていう展開だな。
というか、なってもらわないと困る。
『そこのアンノウン機、今から砲撃するから、上手く避けてね』
突然男の声で通信が入ってくる、しかも突然の攻撃発言、俺は返事を返そうとしたが間に合わなかった。
一発の砲弾が俺の後ろから迫り来る、避けたくても機体は指一本すら動かせない。
おいおい、まさか俺は援護射撃で死ぬハメになるのか？冗談じゃねえ！
せめて機体を座らせる事さえ出来れば砲弾を避けれるっつうのに！
「ちょっ！？俺の機体動かないんだっつうの、てか撃つの早すぎだ

ろ！」
俺がコクピットで一人慌てていると、砲弾が届く前に無数の物体が俺の機体を囲んだ。
その宙に浮かんでいる物体が一斉に赤色のビームを放ち、俺の乗る機体の両足を簡単に破壊した。
もちろん機体は両足を失った機体は体勢を崩し、その場に倒れこんでしまう。
だがそのおかげで砲弾は機体には当たらず、ＥＲＲＯＲにいる場所へ一直線に飛んでいった。
「と、とりあえず助かった……」
『その機体に乗っているパイロット、大丈夫ですか？応答してください』
女性の声が聞こえる、聞き覚えのある声だ。
掠れた映像に少女の姿が映るが、よく顔がわからない、ほとんど音声しか入ってこない状況だ。
「ああ、俺は無事だが。もう少し助け方ってもんがあるんじゃないのか？」
『えっ？アステル少尉？！どうしてそんな物に乗ってるんですか！？』
「いや、だから俺はアステルじゃねえっての」
すると、今度は男の声が聞こえてきた。これもまた聞いた事のある声だ。
『レンさん、その負傷した機体を持って一度基地に戻るんだ。後は俺に任せて』
『わ、わかりました。伊達中尉お気をつけて下さい』
機体が軽く揺れる、どうやら機体を持ち上げられているようだ。
全く惨めな格好だ、機体が無事ならそのまま逃げたかったのに……。
簡易レーダーを見るとＥＲＲＯＲの反応が次々に消えていくのがわかった。
段々とＥＲＲＯＲの沸く数も減り、基地に攻め込もうとしているＥ

ＲＲＯＲも次々に消えていく、どうやら増援部隊も到着したらしい。
……どうやらもう終わりのようだ、これが戦場か。
今まで戦いと言えば武器や魔法を使い、少人数での戦闘をしていた。
だがこの戦場は何百、何千という人間が命を掛けて戦っている。
とか一人ふつふつと考えていると、また機体が揺れる、機体が地面に置かれたのだろう。
『アステル少尉、一体どういう事なのか説明してもらえますか？今すぐハッチを開けて降りてきてください』
「ったく、何度言えばわかるんだよ……」
俺はハッチを開けると、機体から軽く飛び降りる。
着地をして回りを見渡すとまず目に入ってきたのが銃を構えた兵士。
もう銃を向けられるのは慣れっこだ、さほど驚かない。
「はいはい、お決まりのパターンだな。それで俺はどうなるんだ、また牢屋かぁ？」
「その前に話を聞かせてください。貴方は一体誰なんですか」
青い機体から降りてきた一人の女性、顔を見るとわかった、たしかレンって奴だっけ。
パイロットスーツに身を包み、右手には一丁の銃が握られていた。
「誰って言われてもねぇ、話せば長くなるし、信じてもらえないと思うしな」
というか話したくも無いわ、焼かれるわ牢屋に入れられるわもう散々な目にあってきたからなぁ。
「話してもらえないのなら貴方を拘束させていただきます」
レンの両側には銃を持った兵士、そしてレンもまた俺に銃口を向けてきた。
「おいおい、せっかく大事な基地を守って化け物を倒してやってたのに。それは無いんじゃないのか？」
そう言うと彼女は銃を下ろし、少し頷く。
「うっ、それもそうですね……」
こういう時に俺の知恵は働く、悪知恵と言うのだろうか。

「そんな武器なんかか持たずにさ、話し合いで解決出来る事は話し合いで解決しようじゃないか、な？」

心にも無い事を簡単に言えるのが俺の特徴です。

いや、決してそんな事は無いんだが。結構疲れたし、実はミシェルを街の交番に預けたままだ。

早く帰ってやらないとミシェルが心配するだろうし。こんな所で時間を食う訳にはいかない。

「わかりました、銃を向けて申し訳ありません。一緒に司令室に来てもらえますか？」

司令室か、俺がここにいるとアステルに見つかってしまうかもしれない。

だが彼女は俺を見て驚いていた、と言う事はアステルは俺の存在を皆に喋っていない事になるな。

丁度情報も欲しかった所だ、ついていくことにしよう。

「司令室ねぇ、まぁいいよ。行ってやろうじゃないか」

「ありがとうございます、ではコレをどうぞ」

そう言って彼女は俺に銃を渡す、いいのかよこんな物渡しちゃって。

って、ちょっと待ってくれ。その前に何でこんな物俺に渡す必要があるんだ。

俺を置いて彼女は歩いて行ってしまう、俺は急いでその子の後を追う。

ＥＲＲＯＲとの戦いはまだまだ終わらなさそうだ。

第３０話　本当、目的（後書き）

正式名ＭＦＥ－大和　（Ｎｅｗ　Ｆａｃｅ製）
全長－２２ｍ　機体色－茶　動力－光学電子磁鉱石
神楽ご自慢のＮＦ傑作機、機体のＯＳは全て伊達武蔵専用に設定されている。
装甲は厚く頑丈に作られており、対戦車砲やグレネードをものともしない。
両腰には大和専用の短刀が２本、背中には長刀が装備され、右肩には大砲が備え付けられている。
大砲の砲弾は数種類あり、使い分ける事が可能。
近距離から遠距離まで戦法の対応出来る為万能型とも言える機体に仕上がった。

第３１話　疑心、暗鬼

――僕はどうなっているのかよくわからなかった、何故基地に異常な数のＨｕｍａｎ態がいるのかも。
僕とルフィスは二人で司令室まで向かおうとしていた。
『Ｈｕｍａｎ態』、ＥＲＲＯＲの中でも新種らしく、より人に近い姿をしているらしい。
だけどその姿を実物も映像も写真でも見た事が無い。
とある基地でＨｕｍａｎ態が出現したという記録はわずかに残っていた。
だから映像や写真があると思っていたが、その基地には何も見つからなかった。
生存者はたった数名、その生き残った数名の内ほとんどは気が狂い、まともに話せる状態じゃなかったらしい。
「ルフィス、Ｈｕｍａｎ態はどんな奴か見たことが無い。警戒して行こう」
「わかりました、アステル少尉。でも少し寄りたい所があるんですけど……」
「ん、どこに行くつもりなの？」
「私達私服じゃないですか、一度部屋に戻って軍服に着替え直したいんです」
「Ｈｕｍａｎ態が侵入している所は基地の西側一階、うん。一度装備を整える為にも戻ろうか」
ルフィスと僕の部屋は北側の3階にある、一度そこに戻って基地の状況を確認してみることにした。
僕達は階段を駆け上がる中、銃を持った兵士が次々に階段を下りていく。
「着替え終わったらすぐにアステル少尉の部屋に向かいますね」
そう言って自分の部屋に入っていったルフィス、僕も自分の部屋に

戻り壁についてあるモニターを電源を入れる。
「はぁ……」
ふと溜め息を吐いてしまう、本当なら今日はルフィス達と街を歩いていたはずだったのに。
でも仕方が無いんだよね、僕は軍人だから。皆を守る為に頑張らないと。
高橋甲斐斗……あいつがいるといつも事件が起こる、全てあいつが原因じゃないのだろうか。
そんな事を考えながら僕は私服から制服に着替える、そしてモニターを触りこの基地の状況を確認した。
基地内のＥＲＲＯＲの数は熱源探知でわかるようになっている、もちろん人間の数もだ。
『現在Ｈｕｍａｎ態の数、１階２２１体、２階１０５体、３階４０体、４階０体、５階０体』
『現在基地内にいる兵士達はＨｕｍａｎ態と応戦中ですが圧倒的な数により押されています、このままでは５階に侵入を許してしまいます』
思っていた以上に増えている、ほとんどの兵士が基地周辺にいるＥＲＲＯＲと戦闘中、基地内の兵士が足りないのもわかった。
それでも、やけに基地内に多い気がする。それにどうして３階まで侵入を許してるのだろうか、兵士達は何をしてる？
でもまだ人間の大きさのＥＲＲＯＲとなら生身の人間でも銃があれば十分に戦えるはずだ。
僕はさらにモニターを触りＨｕｍａｎ態の詳しい位置を確認してみる。
『現在１階にいるＥＲＲＯＲは西側の地下から出現中、多数のＥＲＲＯＲが中央に集まっています』
「なっ……中央が突破された？」
『このままだと１階にいるＥＲＲＯＲは北、南、東に分散して囲まれる可能性があります、直ちに排除してください』

そんなっ、このままじゃ2階より上にいる人達は閉じ込められたままじゃないか!?
どうしてこんなに追い詰められるんだ、何故基地内のＥＲＲＯＲを排除できない！こうなったら僕の手でＥＲＲＯＲを。
クローゼットの中に隠してある黒く重い銃を手に取った時、僕は一番大切な事を思い出した。
南側2階の医務室には姉さんがいたんだ。

――懐かしいねぇ、何日ぶりだろうか。この廊下を走るのは。
司令室に向かう為に今レンと俺は走っているんだが、この基地にいた日々を少しずつ思い出していた。
中でも心に残っているのはルフィス、そしてセレナの事だった。
ルフィス、また会って色々と喋ってみたいと思う。でも俺は彼女に嘘をついてしまった。
本当の事を知れば彼女も俺を憎むだろう、あのセレナのように……。
その時だった、俺達が走っている廊下の横の通路から現れる不気味な生き物が現れたのは。
「あ、あれがＨｕｍａｎ態！」
レンはすぐさま銃を構えるが、その姿に俺は唖然としていた。その姿は一言で言うと『気持ち悪い』
全身が赤白く、黒い模様が点々と見えるその皮膚は生き物の皮膚に俺には見えなかった。
それに体全体が大きく、太く長い2本の腕を肩から伸ばし、黒い眼が俺をみつめている。
俺はすぐさま渡されていた銃を構え、ためらう事無く引き金を引いた。もちろん銃弾は化け物の頭部に命中。
……たしかに銃弾は頭部に命中した。だがＨｕｍａｎ態は少しよろめいたかと思うと。
その光のともっていない虚ろな眼はまだしっかりと俺を見つめていた。

「さっさと死ねよ！」
銃を握る手に力が入る、ＥＲＲＯＲの頭部、そして体中に銃口を向けて何度も引き金を引いた。
銃弾はＨｕｍａｎ態の体を貫通しなかった、Ｈｕｍａｎ態はその厚い皮膚に守られており銃弾を生身で受けようとも軽傷しか負わせる事が出来ない。
レンも俺達に向かってくるＨｕｍａｎ態に引き金を引いた、廊下内に無数の発砲音が鳴り響く。
「何だよ、全然銃効かないじゃねえか」
気づけば俺はマガジンに入っている全ての弾を撃ちつくしていた。
レンも同じのようだ、腰に付いてある代えのマガジンを手に取ると俺に渡してくる。
「司令室は5階です、さすがにそこまではＥＲＲＯＲが来てないと思いますので早く上がりましょう」
「ああ。そうだな、早く上がろうぜ」
俺は早く進もうと一歩足を踏み出して通路の角を曲がろうとした時、天井から一斉に防護壁が降りる。
等間隔で次々に降りてくる防護壁、俺とレンは互いに違う場所に閉じ込められてしまった。
って何で閉じ込めらんだよ。
防護壁には丁度顔の位置に一枚のガラスが張られてあるから中の様子がわかる。
レンは壁を触りながら何かを探している様子だ。
「おいおい、これは一体どう言う事だ？」
「た、多分ＥＲＲＯＲの侵入をこれ以上させないようにしたんだと思われます」
「何でＥＲＲＯＲでもない俺達が閉じ込められるんだ、開ける事は出来ないのか？」
「残念ですが私の力では何も出来ません、でもこれでＥＲＲＯＲから襲われる事も無いので安心してください！」

閉じ込められて安心してくださいだぁ？安心できる訳無えだろが。
と、この子に言っても仕方が無いので黙っておく。だからと言って俺はこんな所で立ち止まるのは御免だ。
それにさっきから何か嫌な気を感じる。ここにいると生きている心地がしない。
何だこの気持ち、何を焦っているんだ俺は……。

――「アステル少尉、着替え終わりました」
部屋のドアが開くとそこには軍服に身を包んだルフィスが立っていた。
「……アステル少尉？」
だが部屋の中にアステルの姿は何処にもない、不思議に思いゆっくりと部屋の中に入っていく。
綺麗にハンガーに掛けられている私服、そして開きっ放しのクローゼット。
人の気配は無い部屋……、ルフィスは部屋の奥に入っていくと、壁についてあるモニターに電源が着いている事に気づいた。
画面にはこの基地内の地図、そしてその地図の真ん中にはある一室が映っていた。
「２階医務室……まさかアステル少尉！？」
その頃アステルは重い銃を両手に全力で走っていた。
医務室に近づいていく内に仲間やＨｕｍａｎ態が流したと見られる血が壁や床一面に着いているのが見える。
でもそこに兵士の死体は無く、Ｈｕｍａｎ態の死体も無い。ただ夥しい血が広がっているだけだ。
遠くの方で銃声が聞こえる、各兵士がＨｕｍａｎ態と戦っているんだろう。本当なら僕も参戦しなければならない。
「でも僕には、やる事があるんだ……！」
角を曲がり、後は医務室に行くだけ。
そう思っていた時、アステルの視界に入ってきたのは医務室に入ろ

うとする数体のＨｕｍａｎ態の姿だった。
「その部屋から離れろッ！この化け物！！」
重い銃を両手で構え、医務室に入ろうとするＨｕｍａｎ態に引き金を引いた。
引き金を引いた瞬間に何十発もの弾丸が撃ち出された。
弾丸はＨｕｍａｎ態の体を貫通して肉を吹き飛ばしていく。
Ｍ２４０Ｅ６の徹甲弾の前にはさすがのＨｕｍａｎ態の皮膚も歯が立たなかったようだ。
Ｈｕｍａｎ態の死体を無視してすぐさま医務室に入る。
「姉さん！姉さん！！」
医務室全体に聞こえるぐらいの大声でアステルは名前を叫んだ。
だが返事が帰ってこない、医務室にある寝室のカーテンを勢い良く払いのけた。
ベットには一人の女性兵士の死体が寝ていた。右腕が無く、目蓋を開けたまま死んでいる。
一瞬驚いた様子を見せたアステルだが、無表情でカーテンを閉じる、そして安心したかのように小さな笑みを見せた。
「良かった、姉さんじゃない」、
そう言って次に向かったのは医務室の奥にある部屋、薬品室だった。
室内に入り、セレナがいないか探し始める。すると、一番奥の棚に体を小さくして震えているセレナの姿があった。
蹲りながら座り、下を向いてずっと顔を隠しているセレナ、アステルは手に持っている銃を落とすとすぐさまセレナの元に駆け寄る。

――「姉さん、もう大丈夫だよ。僕が助けに来たから。どこか怪我してない？大丈夫？」
座っている姉さんの前にしゃがみこむと、僕は姉さんの左肩に手を掛けた。
「ねぇ、カイト……」
細々した声が聞こえてくる、姉さんは俯いたまま決して顔を上げな

い。
本当ならすぐさまこの場から二人で逃げたかった。
でも姉さんは逃げる気配がまったく無い。
「姉さんどうしたの？」
そうだ、きっと怯えているんだ。そう思って僕はは右手でセレナの頭をそっと撫でる。
「私、ずっとカイトのお姉さんだよね……」
「えっ、突然どうしたの？姉さんはずっと僕の姉さんだよ。
僕が姉さんの側にずっといてあげる、僕が姉さんをずーっと守るからね」
「本当、に？」
「うん、だから早く逃げよう。姉さん」
ここにいるのは危険だ、またＨｕｍａｎ態が来るかもしれない。
だから早く、早く姉さんをこの場から逃がさないと……。
一向に逃げようとしない姉さんを見て僕は強引に腕を掴み、立ち上がらせようとした。

――「うわぁあああああっ！？」
僕は掴んでいた姉の腕を放し、その場から数歩後ろに下がった。
目の前には顔が融けて、むき出した目で僕を見つめる人がいる。。
口の辺りも融けており、血のようなドロリとした液体が滴り落ちていた。
「助けて、顔が、熱いの……変な生き物がね、とつぜん、わたしの中に……」
ふらついた足つきで僕に近づいてくる。
見ると、腕のいたる所から小さな触手が何本も、何本も出ていた。
左目は僕を見ている、でも右目は眼球をむき出しにしてゴロゴロと動き、周りを見ている。
「いたいの、あついの、たすけて…カイト……」
「えっ…お、お前は誰？何……？」

その一言だけが僕の頭を駆け巡っていた。
誰なの、この生き物は誰なの？この化け物は誰なの？
「カイト？おねえちゃんだ、よ？」
汚らしい触手が出ている腕を伸ばし、僕に近づいてくる。
「ち、違うよ。僕の姉さんはこんな化け物じゃないよ……」
そうだ、僕の知っている姉さんはこんなのじゃない。
美しくて、明るくて、優しくて――。
「わたしはカイトのおねえちゃんだよ…？カイトお願い、助けて」
違うよ、全然違うよ。僕の目の前にいるのは化け物だ、そうだＥＲＲＯＲだ。
僕の姉さんは化け物じゃない僕の姉さんは化け物じゃない僕の姉さんは化け物じゃない。
「そうかわかった！お前は、お前は姉さんの偽者だッ！」
「そん、なっ……」
その言葉に化け物は動揺したように見えた、むき出しの目から汚い液を流れ出す。
それは涙とも言えたかもしれないが、僕にはそうは見えなかった。
「そうやって僕を騙そうとしてるのか？お前みたいな気持ち悪い生き物が姉さんなはずがない！」
僕の偽者がいて姉さんを騙していたのなら、姉さんの偽者がいて僕を騙しにくるんだ。
コイツは僕を騙そうとした化け物だ、気持ち悪い化け物だッ！
「い…や、カイト……わたしは……」
化け物が僕に近づいてくる、腕から赤色の触手を垂らしながら醜い生き物が僕に近づいてくる。
僕はさっき自分が落とした銃を拾うとその化け物の頭部目掛け銃口を向けた。
だけど、照準がブレる。腕や足の震えが止まらない。
違う、これは姉さんじゃない、違う。違う違う違う。姉さんは違う、化け物の姉さん違う。

その時、化け物は立ち止まると。剥き出した目で僕を見つめ、融けた顔でニッコリと笑ってきた。
「カイト、わたしはずっと、カイトのおねえちゃ――――」
だけど僕には、その顔は恐怖と絶望しか与えてはくれなかった。
「あああああああああああッ！！」
けたたましい爆音と共に何十発もの徹甲弾がセレナの肉体を貫いていく。
触手の生えた両腕を吹き飛ばすと、辺りに血が散乱し、肉が飛び散る。
僕の顔や体、握っている銃にも次々に血が付着していく。そしてそれは一瞬の出来事で終わった。
……何度も引き金を引くが、それ以上弾は出ない。
目の前に散乱している血と肉の塊を見ながら僕は肩で息をしていた。
撃つ尽くしたマガジンを捨て。新しいマガジンを銃に取り付けると薬品室から出る事にした。
「姉さん、今助けに行くからね。待っててね……」

――――「アステル少尉！」
医務室を出て廊下を歩いていくと、すぐさま呼び止められた。
声のする方向に顔を向けると、両手に銃を持ったルフィスの姿がそこにあった。
「ルフィス、無事で良かった」
アステルは急いでルフィスの元に駆け寄り、身の安全を確かめる。
「あ、あの。その血、大丈夫ですか……？」
アステルの浴びている血を見て少し不安な顔を見せるルフィス。
だがアステルは逆に少し笑って見せた。
「僕は大丈夫、それよりよくここがわかったね」
「す、すみません。少尉の部屋に勝手に入ってしまって。そしたらモニターにこの場所が映ってて……」
「それで、セレナさんは大丈夫だったんですか？」

「姉さん？大丈夫だよ、今助けに行く所だから」
「えっ、医務室にはいたんじゃ？」
「いなかったよ、いなかった、でも。姉さんの偽者はいたけどね」
ルフィスはいつまでも笑みを続けているアステルに少し不気味さを感じていた。
「偽者？」
「うん、偽者」
アステルの様子が何かおかしい、ルフィスは疑問を抱きながらその医務室の中に入ることにした。
医務室に一歩足を入れただけで血の臭いが肺の奥まで入ってくるのがわかる。
息苦しさと胸苦しさを感じながら少しずつ医務室の中に入っていく、ベットには一人の女性の死体があった。
医務室を見渡してみると死体は一体しかない、アステルの言っている偽者とはこの女性の事なのだろうかと思った。
ルフィスが医務室から出ようとした時、あの薬品室の入り口が視界に入った。
薬品室の中に入っていくルフィス、別に変わった様子は無いと思ったとき、一番の奥の棚に夥しいほどの血が付いているのが見えた。
慎重に一番奥の棚に向かい、そして左に顔を向けた。
「えっ……」
血肉が散乱している光景をどう表現していいのかルフィスには分からなかった。
ただその血みどろの光景が目蓋に焼き付いていくのだけがわかる。
顔を向けたまま動きが止まってしまったルフィス、目の前の光景を理解しようと時間を費やしていたのかもしれない。
一人の人間だろうか、腕や足がバラバラに散らばり、その人間の頭らしき塊が一番部屋の奥に転がっている。
そしてふと足元を見ると、その人間の手が落ちていた。
何か煌く物がある、千切れとんだ手の指に何かはめているのがわっ

た。
その指からそっと物を外すと、この無残に散っている人間が誰なのかがすぐにわかった。
「ゆび、わ」
わかったけど、理解する事が出来ない。理解したくなかった。
段々と足が震え、体全体が震えてくるのが自分でもわかる。
絶望と恐怖はルフィスの頭の中を真っ白にさせ、震える足でその部屋から出ようとした。
「ルフィス、大丈夫？」
振り返ると、そこには血塗れのアステルがニッコリと笑みを見せながら立っていた。
「ア、アス…アステル少、尉……」
思うように声が出ない、体はまるで氷のように冷たく、固まり、思うように動く事も出来ない。
「ん、どうしたの？」
だが、その指輪を握っている腕だけは動かす事が出来た。
ルフィスはゆっくりと手を伸ばすと、アステルの目の前で握ってる指を開いた。
血で汚れた指輪を見たアステルはそれでもまだ微かに笑っている。
「この指輪、誰の物か憶えてないんですか……？」
「よく憶えてるよ、姉さんの指輪だよね。どうしてルフィスがそれを持ってるの？」
ルフィスは指輪を握り締めると、散乱した血肉を指差した。
「こ、この死体の指に、填めてありましたよ……ね？」
時が止まったかのように、二人は沈黙していた。
ルフィスの額から汗が流れ、段々と呼吸が荒くなっていた。
セレナを殺したのがアステルだということにもう気づいているからだ。
アステルはルフィスを見つめたまま動かない、その顔は焦りも恐れも何も感じていない様子だった。

「アステル少尉……この指輪は、去年セレナさんの誕生日に買ってあげた物ですよね……？」
「少尉、一体ここで何があったんですか……何をしていたんですか？！」
つい声が大きくなってしまったルフィス、目には涙を浮かべていた。
どうして、何故アステルがセレナを殺したのか……それがわからなかった。
するとさっきまで沈黙していたアステルが簡単に口を開いた。
「何って、ＥＲＲＯＲを殺しただけだよ」
「ＥＲＲＯＲ？違いますよ！この人はセレナさんですよ？アステル少尉はセレナさんを殺――」
「違うよ、全然違うよ……僕が殺したのはＥＲＲＯＲだよ、姉さんじゃないよ、化け物だよ。
それより姉さんを助けに行こうよ、さぁ……早く！」
壊れてる、外見の殻はまだ剥がれてないけど。
アステルの中身はもう崩壊しているだろう、その手がゆっくりとルフィスの腕を掴んだ時、彼女は反射的にその手を振り払った。
「い、嫌っ！放してください！」
震える体を何とか動かし、ルフィスはアステルから逃げるように薬品室から出て行く。
手を払われたアステルはその場で固まっていたが、すぐさま薬品室を出てルフィスの後を追う。
「待ってよ、一人で動くと危ないよ。僕の側にいないと、危ないよ。
僕から逃げないでくれ……もうここは危険何だ、誰も失いたくないんだ！ルフィス！！」
アステルも急いで部屋から出る、そして血塗れの格好のまま逃げ出したルフィスを追った。
ルフィスには信じられなかった、どうしてあんなに仲の良かった二人が……。
だからルフィスにはわかる、アステルがセレナを殺したのなら、今

のアステルの状態がどんなのかを。

――後ろから聞こえてくるカイトさんの声、段々と近づいてくるのがわかる。

必死に名前を叫んでいる、必死に私を捕まえようと追ってくる。

優しかったカイトさんが実の姉を殺した、気が狂っている、もしかしたら今度は私が殺されるのでは……。

そんな事を考えてしまう私は果たして正しいのか、間違っているのだろうか。わからない。

カイトさんとは1年前から一緒に働いていた、暖かくて、優しくて、時々弱音も吐いていて、それでもカイトさんは強かった。

私がまだ軍に入って間もない頃だった為、わからない事も多く。皆に迷惑を掛けていた時、いつもカイトさんが私に教えてくれた。

不安な表情を浮かべていた私に、優しく教えてくれたカイトさんの笑顔は今でも忘れない。

でも……でも、今のカイトさんは違う。怖い、私の信じていたカイトさんはあんなに怖くない。

私はカイトさんを信じることが出来ず、後ろから追ってくる声から逃げるようにただ走り続けた。

――僕は何をしていたんだ……いや、何をしているんだ。

まるで何かに取り憑かれていたかのような感覚だ、頭の中がボーっとして、自分が何をしていたのかよく思い出せない。

違う、今は考える事は止めるんだ。失う前に、今度こそ自分の力で助けるんだ、守るんだ。

銃を握る両手に力が入る、今はルフィスの事で頭がいっぱいだった、ルフィス、待ってくれ。止まってくれ。

僕は誰も失いたくないんだ、もう誰も死なせたくないんだよ、お願いだよ、ねえ、待ってよ、待ってよ！

ルフィスが僕の視界から消える、曲がり角を曲がったんだ、僕は急

いでルフィスの後を追って角を曲がった時。
悲鳴が廊下内に響いた、尻餅をついて動けないルフィス、そしてその前方にいるのは血塗れのＨｕｍａｎ態の姿があった。
何体ものＨｕｍａｎ態がルフィスを見つめ、ゆっくりと近づいていく。
ルフィスが立ち上がろうとするが足に力が入らないのか、立ち上がろうとするものの立ち上がれない様子だった。
大丈夫、ルフィスは……僕が守る！

「化け物！それ以上ルフィスに近づくなッ！」
銃の引き金を引く指に力が自然と入る、少し引き金を引くだけで簡単に銃弾は発射された。
だがその銃弾がＨｕｍａｎ態に当たる事は無かった。
突然目の前に降りてきた扉に次々に弾が命中する、いくら徹甲弾とはいえ、防衛用シャッターの前には歯が立たなかった。
「なっ、今更扉を下ろして何になるって言うんだ！司令室にいる人達は何をしている！？」
壁についてある小さな窓からはルフィスが立っているのが見える、そして幸いルフィスとＨｕｍａｎ態の間に扉は下りていた。
「でもこれで時間は稼げる、ルフィス待ってて。今僕側の扉を開けるから」
「は、はい。ありがとうございます。アステル少尉」
Ｈｕｍａｎ態は太い腕で何度も扉を殴る、まるで鈍器で殴っているかのような音が次々に聞こえてくる。
その音にルフィスも不安な表情を浮かべていた、僕は急いで壁に着いてある制御装置に手を掛けた。
「大丈夫、すぐに終わるから。そしたら二人で逃げよう」
暗証番号を二つ入れると簡単にアクセス出来た、一枚や二枚の扉を開ける事等簡単な事。
僕はすぐさま2階のを開けた、もちろん僕とルフィスの間にある扉

をだ。
「よし、出来た！すぐに扉が開くから待っててね」
僕とルフィスの間にある扉が動き始めた、ゆっくりと開いていく。
だが余りにも遅い、そして数ｃｍ程扉が開いた時、突然動きが止まった。
わずか数ｃｍ程しか開いていない扉を見て、緊張と焦りが二人を襲う。
「アステル少尉、これは一体……」
その時だった、ゆっくりと扉の開いていく音が聞こえてきた。
でも二人の目の前にある扉は止まったままで動いていない。
扉の開く音がゆっくりとルフィスの後ろから聞こえてくる。
ルフィスが急いで振り返ると、Ｈｕｍａｎ態と自分の間にある扉が段々と開いていくのが見えた。
「アステル少尉！？壁が！防護壁が開いてます！止めてください！！」
扉についてある小さな窓から顔を覗かせる、その顔は恐怖と焦りでいっぱいだった。
目には涙を浮かべ、必死にアステルに助けを求めている。
その表情が返ってアステルを焦らした、いくら装置をいじっても扉を止める事が出来ない。
それ所かルフィスとアステルの間にある扉を開ける事さえ出来なかった。
「早く！早く開けてください！カイトさん！」
細い腕を振り上げ、扉を必死に叩くルフィス。
わずか数ｃｍ程しか開いていない扉の間を通る事は無理。アステルの持っている銃すら渡せなかった。
「おかしい……全然動かない！どんなにやっても閉める事も出来ない！開ける事も出来ないんだよっ！！」
いくら装置をいじっても、それを装置は受け付けてはくれない。もうアステルにはどうする事も出来なかった。

その時、さっきまで焦っていたルフィスは突然冷静になり、そっと呟いた。
「ごめんなさい」
突然ルフィスは涙を流しながらアステルに謝ってきた。
「ルフィス……？」
アステルは不思議そうにルフィスの顔を見ている、何故。どうして謝るのかわからなかった。
「私、カイトさんを疑ってしまったんです、私を殺すんじゃないかって……」
「僕はそんな事しない！何を言ってるんだ！？僕はルフィスを守りたいだけだっ！」
「はい、わかっています。カイトさんの想い。私はこれからもカイトさんを想い続けます、セレナさんと一緒に」
その時、完全に防護壁の開いた音がルフィスとアステルに耳に届いた。
「そ、そんな！ああ……！ルフィス！ルフィスッ！！」
アステルは最後まで必死に装置の前で苦しんでいた。
何十体ものＨｕｍａｎ態がゆっくりとルフィスに近づいてくる。
「カイトさん、私やセレナさんの分まで……頑張って生きてくださいね」
数適の涙がルフィスの瞳が零れ落ちる、でもその顔は微かに笑っていた。
そして懐から取り出す一丁の拳銃、そして銃口をそっと自分の頭に突きつけた。
「や、止めろ。止めてくれ！お願いだ！死なないでくれ！もう僕には君しかいないんだ！ルフィス！！」
自然にアステルの目からも涙が零れ落ちていた、腕で涙を拭って、ずっとルフィスを見つめていた。
ルフィスが涙を零しながら見えた笑み。それはアステルの目にもしっかり映っていた。

「私もカイトさんしかいません。今までありがとうございました。
えへ……最後に一言言わせてください」
「カイトさんの事、大好きです」
それがカイトの見たルフィスの最後の笑み、最後の一言だった。

第３１話　疑心、暗鬼（後書き）

正式名ＭＦＥ－フェリアル　（Ｎｅｗ　Ｆａｃｅ製）
全長－１７ｍ　機体色－青白　動力－光学電子磁鉱石
唯一『フェアリー』を遠隔操作可能、同時に６個の『フェアリー』を操作する事が出来る。
ただし『ＳＲＣ機能』を使わなければ起動不可。
ちなみにこの機体はレン・スクルス専用機であり、レン以外の人間は動かす事が出来ない。

第32話　気、狂

――――「アステル少尉！？」
俺は剣を呼び出すと、目の前の邪魔な防護壁をぶった斬る。
「俺はアステルじゃねえって何度も言ってるだろ」
そして振り向きざまにレンが閉じ込められている扉を破壊した。
「こんな所で閉じ込められるなんて真っ平ご免だ、行くならさっさといくぞ。
　それと、俺はアステルじゃねえ。甲斐斗という立派な名前がある」
俺は階段の前に降りている扉も簡単に破壊してみせた、この剣があれば俺は敵無しかもしれない。
「す、すごい。所でその刃物は何処から？」
「詳しい説明は後でするから行くぞ！」
こんな所で立ち止まる訳にはいかない、何かが俺を急かし焦られているかのように俺は最上階に急ごうとしていた。
レンは斬り落とされた扉の破片の上を飛び越えて階段へ向かう、俺もその後についていく事にした。
この基地内は案外複雑な形をしている、それはまず階段だ。この基地の階段は階ごとにバラバラに分けられており、一気に最上階まで上る事が出来ない。
エレベーターを使おうとしても止まったまま動き出そうともしない、何とも面倒くさい基地だ。
俺とレンが2階に駆け上がったその時、遠くの方でけたたましい銃声が聞こえてくる。
「誰かが戦ってる！甲斐斗さん一緒に来てください！」
銃声の鳴る方へ勝手に走っていくレン、彼女を一人だけにする訳にいかないので俺もその後をついて行く。
それにしても、どうして軍なのに彼女のような少女が軍に入っているのだろうか、ふと不思議に思った。

考えてみれば俺の出会ってきた兵士は大抵が子供である、もちろん大人もいるが明らかに少ない。
……まさかとは思うが、この世界はもう『そこ』まで来ているという事なのか？
だとすれば、この世界は……。。
「ええっと、次はどっちに曲がれば……」
どうやら銃声が聞こえなくなり、レンはどっちに行っていいのかわからないそうだ。
「んーと、右の通路から火薬の匂いがするから右だな」
俺はレンより先に右の通路を曲がり、先に進む。
「そ、そんな事がわかるの？私には何も匂わなかったのに」
ごめん、勘だから君がわかるはずないんだよ。
って、この通路は走った記憶があるぞ。たしか医務室に向かう通路だったかな。
となると、次を曲がってずっと奥に進んでいけば医務室の前の通路に出れるって訳か。
ん、医務室？もしかして……いや、まさかな。
不安を抱えながらも俺は通路を曲がった。
後はここを進んでいけばすぐに医務室にいけるはずだった。

――――「レン！来るなッ！」
甲斐斗が罵声を飛ばし、レンを止めようとしたが間に合わなかった。
「甲斐斗さんどうしたんですか！何かあったんです、か……」
その光景に甲斐斗すらも目を背けたいと思った。だがそれを目に、脳裏に焼きつくまで甲斐斗は見つめていた。
それはレンも同じだった、曲がり角を曲がった瞬間一面に広がる血の海、一歩も動けずにその場の光景をただ見つめていた。
レンはふと足元に何かがあるのを感じ、ゆっくりと視線を下げていく。
赤くて、大きくて、ボールのような丸い物がすぐそこに落ちてあっ

た。
自分の目の前にあったのは、人の生首。
無残にも引きちぎられたルフィスの生首が、虚ろな瞳でレンを見つめていた。
「――――っ！！？」
両手で手を塞ぎ、余りにも衝撃的な事に声すら出す事が出来ない。
それでも見つめ続けられている、虚ろな瞳でずっと、ずっと。
「うっ、ううぅ！」
急激な吐き気に襲われて両手を口元に押さえたまま後ろに下がるレン。
甲斐斗の耳に角の隅の方で嗚咽と、嘔吐して出てきた物がビチャビチャと床に落ちていく音が聞こえる。
「ウヴォェッ…、うっぐ、ぶぉぇ……」
食べた物が次々に口から溢れ出し、酸の強い臭いが辺りに漂う。
それでも甲斐斗はその光景を見続けていた、目の前に広がる光景を否定しながら。
「嘘だ……ルフィスが、そんな、どうして……」
落ちている生首の耳辺りには何かが貫通したかのような穴が開いてあり、赤色と薄いピンク色のした脳が飛び出ている。
「嫌ぁああ……ルフィ、スさん。そん、な、ううっ、ああッ……嫌ぁあああああああッ！！！」
その泣き叫ぶ声で漸く甲斐斗は我に返る、汚物の臭い、自分の後ろで奇声にも聞こえる泣き声。
すぐさま後ろ振り返る、レンが一人壁にもたれ掛かりながら涙を流し、幼い子のように座り込んでわんわん泣いていた。
「お兄ちゃん助けてよお！ううっ、助けてよぉ……怖いよ！お兄ちゃん！お兄ぢゃん！！」
「落ち着けレン！落ち着くんだっ！」
強い口調でそんな事を言って彼女を落ち着かせる事など出来ない事ぐらい甲斐斗は知っていた。

でもこれぐらいしか甲斐斗は言えなかった、あんな物を見ていて落ち着いていられる人間の方が異常だ。
「レン、俺の目を見るんだ。頼む、俺の目を見てくれ」
手に持っていた剣を床に突き刺し、レンの前に座り込む。
甲斐斗は自分の洋服でレンの口元についている汚物をふき取ると、レンは震えながらも必死に甲斐斗と目を合わそうとしている。
「そう……大丈夫、何も怖くない。何も心配無い、な？大丈夫、大丈夫」
優しい微笑みかける甲斐斗、レンの頭を優しく撫でていく。
「おにい、ちゃ……」
レンが一言そう呟くと、目蓋を閉じて甲斐斗に倒れ掛かってきた。
倒れてきた体を押さえる甲斐斗、体は軽く簡単に押さえる事が出来たが。
アレだけ泣き叫んでいた少女が今、甲斐斗の腕の中ですやすやと寝息を立てていた。
「気絶したか…まぁその方が好都合だが……」

――その時だった、俺の後ろから聞こえてくる、血の海を歩く足音が聞こえてきたのは。
俺は何も言わず立ち上がりながらその場で振り返った。
体の周り全てを血で塗りたくり、顔まで真っ赤に血塗られている男が一人銃を持って立っていた。
「アステル……」
気づけば俺は奴を殴り飛ばしていた、奴の持っていた銃が手から落ちる。
倒れたまま起き上がらないアステルに俺はすぐさま近づき胸倉を掴み上げた。
「答えろ！何故ルフィスを助けなかった！？」
俺が罵声を飛ばそうが、奴は何も答えず、虚ろな表情で俺を見つめていた。

「答えろって言ってんだろがッ！」
奴の気に入らない表情、まるで抜け殻のように軽く、力の無い奴を見ていると虫唾が走る。
怒りに震える拳を振り上げ、もう一度アステルの顔目掛け拳を振り下ろした。
「君は、人間が千切られる音を聞いたことある？」
小さい声、だがハッキリと聞こえた。俺の振り下ろした拳は奴の顔面で止まった。
「僕はあるよぉ？すごいんだよ、ブチブチってぇ、それで内臓が次々にボトボトって落ちていくんだぁ。
そしたら扉の隙間から沢山の血が僕の足元に流れてね、ルフィスの体がバラバラになってたんだ。
ルフィスの血ってとっても綺麗なんだよ……」
薄気味悪い笑みを見せながら、奴は俺に語りだした。
こいつ、一人で何を喋っているんだ？目が正気じゃない。
「どいてよ、邪魔」
奴は突然立ち上がると俺を押しのける。そして足元に落ちているルフィスの生首をそっと持ち上げた。
「それにほらぁ、こんなに綺麗ぃ」
生々しい血がまだ首から垂れている生首を両手で前に突き出す。
それを見ているアステルの顔は更にニヤけていく。
「気が狂ったか……もしかしてお前、セレナも助けられなかったんじゃないだろうな？」
「違うよ？全然ちがぁうよ？僕は正気で気が狂ってるんだよ？狂ってないよ？
姉さんは化け物じゃないからまだ生きてるよぉ、違うよぉお！」
もはや何を言っているのか意味もわからない、コイツがこんな状態なら既にセレナは……。
だとするとカイト・アステル、お前は一度に二つの大切な者を失ったか。

恋人と姉……最悪だが、俺もこんな場面に出くわした事がある。その時俺はコイツと同じ姿をしていただろう。
だが俺はコイツに同情などしない、むしろ怒りが込み上げて来る。
コイツの姿を見ていると、まるで昔の自分を見ているかのようだ。
「ねぇ、返せよ」
今度はいきなり下を向きながら、震える両手の拳をぐっと握り締めている。
「僕の平和な日々を返せよ……お前が来てから僕の人生はめちゃくちゃだッ！お前が来たから姉さんもルフィスも死んだ！！」
突然何を言い出すかと思えば、今度は俺に罪をなすりつけようとしている。
汚く愚かな姿、たしかに俺が来てこの世界は何らかの変化をしたかもしれない。
だがこの世界は元はといえば俺が住んでいた世界、そして何よりも二人を守れなかったのは奴自身だ。
「昔はもっと楽しくて、皆笑ってたんだ！それなのに、それなのにいいいいいいいいいい！！」
発狂と共に奴は俺目掛け走ってくる、その顔はもう人間の顔には見えなかった。
「悪いがてめえに同情している暇なんて無いっ！」
その時だった、俺としたことが床に広がっている大量の血で足を滑らせてしまった。
体勢を崩した俺は座り込んでしまう、その隙に奴は俺の上に乗り、両手で俺の首を握り締めてきた。
首を掴む両手を解こうとしたがまるで動かない、両腕を掴みいくら放そうとしても奴の腕は微動だにしなかった。
「うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！死ね！死ねぇえええええッ！」
俺は……こんな奴になりたくない。
大切な人を守れず、助けられず。ただ死を見つめるだけなんて俺は嫌だ。

例え強大な力がなくても、魔法が使えなくても、愛した者たちがもういなくても。
守りたい人がいる、助けたい人がいる。もう大切な人を死なせていくのは嫌だ。
でもそれは無理な事かもしれない、今の俺では。
復讐の為に生きる、奴は俺と同じかもしれない。今の奴には俺を殺す事しか頭に無い。
全てを奪った俺を殺し、姉とルフィスへとの罪滅ぼしをするつもりなのだろうか。
それは逆に俺にも言える事だ、皆を殺していった『神』や『ＥＲＲＯＲ』を殺して何になるというんだ。
殺す為に生きるのと、守る為に生きる。俺にはどっちがお似合いだろうか。

――「決めた」
甲斐斗の右手がアステルの顔面を掴む。
「ぎぃいいぅうあああ！？」
その力の強さに今度はアステルが甲斐斗の腕を掴みかかった。
アステルの両手が甲斐斗の首から離れた時、甲斐斗はアステルの顔面を掴んだまま一気に立ち上がる。
そしてそのままアステルの後頭部を壁に叩きつけた。
「あ…がっ……」
この一撃が効いたのか、アステルの体から力が無くなっていく。
甲斐斗は顔面を掴んでいる手を放し、アステルを血の海に投げ捨てた。
「両方だ。そんな俺は欲張りか？人は皆欲望に満ちているだろ。
そしてこれは俺の考え方、生き方だ、俺の好きにさせてくれ」
倒れたまま動かなくなったアステルを余所に甲斐斗はレンの側に行き、そっと抱き上げる。
そしてアステルに背を向け、歩き出した。最上階に行く為に。

「そしてお前の生き方も自由だ、殺す為に生きるか、守る為に生きるか。もっとも、お前には守る奴がもういないかもしれんがな」

――――『A、B、CのエリアにERROの反応無し、残るは基地内に入るHuman態だけです』

「了解、聞いたか皆。俺達が西通路を確保する。各部隊を5部隊ずつに分けては東、北、南に分かれて突入を開始せよ」

格納庫にはA、B、CエリアのERROを掃討し終えた兵士達が集まっていた。

そしてその兵士達の前で一人指揮をとる人物、それは騎佐久の姿だった。

全ての部隊の兵士達が東北南に別れ、突入を開始している中、西通路には二人の男の姿しかなかった。

「武蔵、あまり熱くなるなよ。赤城はきっと無事だからな」

「わかってる、それより騎佐久、君は指揮官だよね。どうして司令室にいなかったんだ?」

「俺は南部の者だ、直接東部に関わる事は余りしたくはなかったんだよ」

騎佐久は手に持っているガトリング砲をもう一度持ち直し、武蔵は腰に付いてある一本の刀に手を翳し、そっと鞘から刀を抜いた。

「自慢の愛刀を使うのか?武蔵、本当に熱くなるなよ」

「大丈夫、俺はいたって冷静だよそれにしても久しぶりだね、こうやって二人で行動するのは」

「あ、ああ。そうだな……」

その言葉に騎佐久が武蔵から視線を逸らした。

あの出来事を騎佐久は思い出してしまったからだった、だが武蔵の方は別に気にしてはいない様子だ。

「よし、そろそろ行こうか騎佐久」

「っふ……俺が上官だろ。俺に付いて来いよ」

――基地内で激しい銃声が鳴り響く、本格的な戦争がどうやら基地内で始まったようだ。
だがその音も小さく遠くの方で聞こえる、それは俺が5階にある司令室にまで来たからだ。
レンを抱えたまま階段を登ってきたので少し息苦しい。でもまぁ漸く着いた訳だ、入らしてもらう。
俺が司令室の扉の前に立つと扉は自動的に開く、そしてすぐさま指令室内に入った。
「誰も……いない？」
それが司令室に入って最初の言葉、周りを見渡しても人の姿は無い、ＥＲＲＯＲすらいない、異様な静けさが室内に広がっている。
せっかく苦労して来たというのに余りにも酷すぎる、俺がここに来た理由は何だったんだ？
……そうだ、情報収集だ。ん？室内には誰もいないよな。
ここでまた俺の悪知恵が働いた。誰もいないのなら好都合、勝手に情報を見るだけだ。
司令室にある機器は全て電源がついているから更に好都合、何で人がいないのかとか、そんなの気にしない……はずがない。
俺が機器に触れようとした瞬間に事は起きた。
『―ＥＲＲＯＲ―』
『―ＥＲＲＯＲ―』
『―ＥＲＲＯＲ―』
司令室に置いてある全てのモニターに、画面を埋め尽くされる程の『―ＥＲＲＯＲ―』が表示される。
言っておくが俺は機械に触れていもいない。
静かだった司令室にはけたたましい警報音が鳴り響き、赤い灯りが室内を照らしていった。
「今度は一体何が起こるんだ……」
『Ｄｅｌｅｔｅ　ａｌｌ　ｄａｔａ　ｌｅｆｔ　ｉｎ　ａ　ｂａｓ

e』

そうモニターに表示された後、司令室にある全ての機器の電源が切れた。

何だこりゃ、司令室に来ても誰もいなし何も出来なかった、何もならなかった。

だが俺はここに来る事で知る事もあった、ルフィス達の死だ。

アステルは守りたい人を守れなかった。

俺は違う、俺は絶対にあいつの様にならない、なりたくない。

もう帰ろう、ミシェルの下に、もう人が死ぬのを見るのはご免だ。

いつのまにか俺の心は萎えていた、疲れたんだろう心身ともに。今はもう、ゆっくり休み…たい……。

全身の力が抜けたかのように俺は倒れていた、目蓋が重い、強烈な睡魔が突然俺を襲ってきた。

こんな所で寝てる暇なんて、無いのに。

――「被害状況はどうだ?」

「各部に破損、システムエラー、それと基地内にあった全てのデータが何者かに消されています」

「データが全て消されている?バックアップデータはどうだ、使えるか?」

「それが、ウイルスに感染しているらしく修復には時間がかかると思われます」

「そうか……わかった、急いで修復に取り掛かってくれ。もちろん基地の修復もだ」

基地内のＥＲＲＯＲも全て排除し終えた兵士達にはまだ仕事があった。

休む間もなく基地内の警備、機体の修理、データ修復――。

「伊達中尉!アステル少尉達の姿が見当たらないんですけど知りませんか?」

由梨音のわざと明るくした声が武蔵の足を止めた。

「アステル少尉とレン曹長なら5階の司令室で無事発見されたらしい、今会いに行く所だよ」
「ほ、本当ですか！私も一緒に行ってもいいですよね！？」
「由梨音、大変だとは思うけど君には先にする事があるはずだ」
「ううぅ～そんなぁ、わかりました……」
軽く手を上げた後に武蔵はまた由梨音に背を向けて歩き出した。
まだ基地内の通路には生々しい血が残っているのも気にせずに進む武蔵、急いでいるのかその足取りは速い。
場所は司令室、エレベーターに乗り込むと5階のボタンを軽く押す。

――数分前、ルフィス曹長と見られる体の一部が見つかったとの報告を受けた。
そしてもう一つ、医務室の扉が何らかの力の変形し、扉が開かなくなったらしい。
基地内の扉は全て防弾扉、破壊することは難しく今は放置している。
ノイド、ルフィス……二人を失ったこの部隊、赤城が知ったらどう思うだろう。
そう思うと胸が痛くなる、苦しくなる。俺は赤城に何て言えばいいのだろうか。
そんな事を考えているとエレベーターの扉が勝手に開く、5階についたのだ。

――武蔵は足早にエレベーターから出るとすぐさま司令室に入っていった。
何人もの兵士達が司令室にはいた、その中には神楽の姿もあった。
神楽はぐったりと寝ているレンをそっと抱きかかえると、ゆっくりと武蔵に近づいて来る。
「レンちゃんは意識を失っているみたいなの、医務室につれて行ってもいいかしら？」
「うん、構わないよ。医務室なら3階の医務室に行くといい、2階

の医務室は使えないらしいから」
「そう、ありがとう。また後でゆっくりと話しをしましょうね」
レンを抱きかかえたまま神楽は医務室を後にした、そして残りの兵士はバックアップデータの修復に取り掛かる。
そして数人の兵士は胡坐を掻いている一人の男の周りを囲んでいた。
その男の前に歩いていく武蔵、そしてその胡坐を掻いている男はそっと顔を上げた。
「アステル少尉……じゃないね」
その言葉に驚きを見せて兵士達、胡坐を掻いている甲斐斗はニヤリと笑みを見せた。
「ほぉ、やっぱりアンタなら俺がアステルじゃないって事ぐらいわかると思ってたよ」
「君は誰だい、聞かせてもらおうか」
「ああ、いいぜ。俺は甲斐斗だ。久しぶりだなぁ伊達武蔵中尉」
「……俺の部屋に来てもらうよ」
甲斐斗は二人の兵士に立ち上がらされると、銃口を向けられたまま通路を歩かされ、エレベーターに乗せられる。
兵士達は手荒な真似はせず、丁重に甲斐斗の後ろを歩く。兵士達は甲斐斗の事をどう思っているのだろうか。

――俺は連れて行かれるがまま歩かされ、伊達の部屋に来ていた。
一人の兵士が俺の手首にはめられていた手錠の鍵を外してくれた、どうやらこの部屋の中に入るらしい。
部屋に入ってみると、物が整理整頓され、ベットに机といたってシンプルな部屋だった。
部屋の扉の前には二人の兵士が見張り、室内には俺と武蔵しかいない。
「いいのか？手錠なんか外しちゃってさ」
「君はＮＦの為に戦ってくれた仲間だ、手荒な真似はしないつもりだよ」

気安く『仲間』なんて言ってほしくない。俺はＮＦの為に戦った訳じゃないからな。
不機嫌そうな俺を見ていた伊達は何を思ったのか、突然コーヒーメーカーの前に立ち電源を入れる。
コップにコーヒーが滴り落ちる心地よい音が部屋中に響く、そして注ぎ終わったコーヒーカップをそっと手渡してきた。
「ブラックだけど飲めるかな？」
「い、いちお飲める」
……コーヒーはあまり好きじゃない、どちらかといえば甘党なのでココアとかが良かった。
だがここは黙ってもらったコーヒーを飲む、思ったよりも熱く少しずつしか飲めない。
カップを手渡した武蔵は椅子に座ると、静かにコーヒーを飲んでいる。
「俺に聞きたい事があるんじゃないのか？」
思わず言ってしまった、だってそうだろ。俺を目の前にして何故彼はここまで平然としていられるんだ。
「あるよ、甲斐斗君は何処から来たんだい？」
「呼び捨てで結構、それと俺は過去から来た」
俺の即答に伊達も少し驚いた顔をしていた。
しかし過去から来たのは事実だ、事実だがこの話を信じてくれる人等いないだろう。
「過去……面白い答えだね。目的は何かな、僕達を助けてくれる為にでも来てくれた救世主か何かかな？」
冗談だと思っているのか、それとも本当に信じているのか、あやふやな答えだ、多分信じていないだろうけど。
「残念だが救世主じゃない、それに俺は何故未来に来たのかもわからない。
そして俺の目的は『神』という名の兵器を破壊した後に過去に帰る方法を見つける事ぐらいだ」

俺の答えもあやふやかもしれない、果たして彼に伝わったのだろうか。
相変わらず熱々のコーヒーを平気で飲んでいく武蔵、口からカップをそっと放すと俺の目を突然見つめてきた。
「それじゃ……NFの敵って事になるね」
次に俺が瞬きをした時、銀色に輝く刃が俺の首に突きつけられていた。
その刀を持つ伊達の手にためらいは無かった、いつでも俺の首を切り落とせるだろう。
あと少しでも伊達が刀をずらしていれば俺の首は簡単に吹き飛んでいただろう。
俺がこんな簡単に殺される時が来るとはそう思っていなかったからだ、案外俺も簡単に死んでしまうかもしれない。
「ごめんね、手荒な真似はしないって言ったのに」
そう言うとそっと刀を鞘に戻し、椅子の横に立て掛ける。
「もう一つ質問していいかな」
「あ、ああ。いいけど……」
「ありがとう、君はアステル少尉に成済まして僕達と共に行動していた時があったよね？」
やはり怪しすぎたのか、俺の行動は。彼は俺とアステルが違う事を最初から知っていたというのか？
「あった、たしか6月1日からだったと思う」
「うん、そしてBNがこの基地に来た時、君はこの基地から脱出したんだよね」
何から何までお見通しのようだ、友人や姉さえわからなかったのにこの人はよくもわかったもんだ。
顔や声だって似ている、そして記憶喪失ともなれば多少変な言葉、動作をしても怪しく思われないと思っていたが……。
「全部当たっている、でも俺はBNの仲間じゃないってのは先に言っておくぞ」

もしＢＮの仲間だと勘違いされた今度こそ俺の頭が吹き飛ばされるかもしれない。
「ＢＮでもＮＦでもない……って言う事は」
「ＳＶでもない！俺は無所属だ無宗教だ！本当に過去から来たんだよ！！信じられないなら証拠を見せてやる」
俺は武蔵から少し離れると、いつものように黒剣を出現させた。
一瞬の出来事にこれは武蔵も驚いた様子だった、これで俺が過去から来たと・・・って、あれ。
過去とこの力って関係無いよな……。いや、今はそれより俺がこの世界の人間でない事を証明しなければならない。
俺は巨大な黒剣を武蔵に突き出し、その剣を見せ付けた。
「ちなみに俺は魔法が使えた、だが今は使えなくなっている。使えるといえばこの剣をいつでも出せる事ぐらいだ」
「すごいね、この世界の過去は魔法が在ったのかい？」
んな訳無いだろ、とツッコミを入れる前に説明をしなければならない。
「話せば長くなるから省略して話す、魔法を使える者はこの世界の人間はほとんどいないだろう、それに俺は元をたどればこの世界の人間でもない」
こんなに話しているが彼は信じてくれるのだろうか、まさか俺を頭がイカれた男だと思ってはいないだろうな。
「つまり、魔法のある世界からこの世界に来て。そしてある日未来に飛んでしまったって事？」
「その通り」
伊達が俺の言った事をまとめてくれた、どうやらわかってくれたらしい。
「甲斐斗、俺はその話を信じるよ。君が魔法使いだって事も、過去から来たって事もね」
「本当か？本当に信じてくれるのか？」
さすが伊達中尉、物事の理解速度は並外れじゃない。

この人に話せてよかったかもしれない、俺はこの世界に来てそんな話はミシェルぐらいしか話していないからな。
というか話しても誰も信じてはくれないだろう。
「うん、信じるよ。それにしても未来の光景を見てさぞ驚いたと思うけど、どう？」
「たしかに驚いた、気味悪い化け物はいるし、ＮＦとかＢＮとか訳の分からない勢力もあるし」
「君はこれからどうするんだい？」
コーヒーを飲み終えた武蔵はお代わりをする為にもう一度電源を入れて熱々のコーヒーを注いでいた。
今なら逃げれるかもしれないが、ここで逃げたとしても果たして俺は無事に帰る事が出来るのだろうか。
「そうだなぁ、とりあえずこの基地から出たい」
「残念だけどそれは無理だよ、君は今から牢屋に行ってもらわないといけないから」
「なっ、これからどうするとか聞いておいて。んで結局俺を捕まえる気か？！」
迷っている暇なんて無かった、やはりこの男は俺を捕らえるのが目的か。
まさか今まで時間を稼いでいただけなのか？
「でもね、俺は君に手荒な真似をするつもりはない。一人の部下の命を助けてくれたからね。
だからこうしない？俺とある約束をしてほしい、そしてその約束を守ってくれるのなら俺は君に情報や食料、何でも提供しよう」
そんな旨い話しには釣られない！と言いたい所だが、悪い話でも無い。
それに、俺がもし嫌だと言えば速攻で牢屋行きだろう。彼は俺が約束をすると知っているかのように笑みを見せていた。
「わかった、いいだろう。それで、俺は何を約束すればいいんだ？」
「簡単な事だよ、今度のＥＤＰに君も参加してほしい」

それから伊達に詳しい話を聞かされた。
ＥＤＰ、ＥＲＲＯＲとの決着を付ける為の戦い。全てはこの戦いに掛かっている。
ＥＲＲＯＲが現れたのは今年からだった、最初は数も少なく、Ｄシリーズを使うことで難なく倒す事が出来ていた。
だが日が増える事につれてその数は増し、小さな村や町は次々に崩壊、そして全世界にＥＲＲＯＲが出没するようになっていた。
増え続けるＥＲＲＯＲに対し抵抗する人類、そして見つけたＥＲＲＯＲの弱点。
地下都市にＥＲＲＯＲの巣のような物が作られており、そこから無限にＥＲＲＯＲが湧き出ているのだ。
巣は巨大で頑丈、しかも地下にある為に容易に攻める事は出来なかった。
この男、俺を利用する気か？利用されるのは嫌いだが、やってみてもいいかもしれない。
「って、ちょっとまってくれ。俺がＮＦと共に戦ってもいいのか？俺の存在がバレたらややこしくなるぞ」
「その点は心配無い、僕の隣の部屋は空き部屋なんだ。そこにいてくれて構わない。
もちろん機体も用意するつもりだ、それとも君の乗ってきたあの機体のような物を使う気かい？」
「その方が俺は助かる、あの機体の方が俺には扱いやすいからなぁ」
会話がどんどん進んでいく、俺は彼と約束をした。簡単だ、ＥＤＰに参加すればいいだけの事。
もちろん俺はＮＦの為に戦う訳では無かった、だが今はこうするしかない。
それにＥＲＲＯＲは俺も前から気になっていた、世界を滅ぼした化け物は他の世界にもいくつかいるのは俺も知っている。
だがこの世界は魔法等存在しない別世界。魔物もいなければ悪魔だっていない世界だ。

それなのに、どうしてあんな化け物がこの世界に……。
どっちにしろ邪魔な存在に変わりはない。
「よし、後は俺に任せて今はゆっくり休むと良い。これが隣の部屋の鍵だから」
そう言って伊達は俺に鍵を渡してくれた、だが俺にも彼に聞きたい事がいくつもある。
「所で、アステルは今何処にいるんだ？」
あいつとは絶対に会ってはいけない、会ってはならない。というか会いたくない。
「アステル少尉……それがまだ見つかっていないんだよ。見つけたと思ったら君だったしね」
アステル、あの後ＥＲＲＯＲに食われたのか？それもありえるが、あいつがそう簡単に死ぬような男には見えない、別の意味で。
「わかった、所で外出はしていいかな。もちろんバレないように外に出るから」
「いいけど、基地内を歩く時は制服を着るといい。部屋の中に軍服があるはずだからそれを着るといい」

――ミシェルを迎えに行かなければならない。
俺は静かな部屋の中、無言でＮＦの軍服に着替えていた。一般兵士の軍服の色は少しダサいような気もするが、今はそんなのどうでもいい。
……こんな所、本当はいたくない。
姉もルフィスもいないこの基地に、俺の居場所は無い。当然部外者の俺に居場所は無い。
だがもし二人が生きていたら、一目でも二人の笑顔を見ておきたかった。

第３２話　気、狂（後書き）

正式名Ｈｕｍａｎ態（第四種ＥＲＲＯＲ）
全長－２～３ｍ
他のＥＲＲＯＲとは違って小さいが、人間と比べるとかなり大きい。
体の皮膚が厚く硬い、その為に大抵の銃弾は効果が無い。
人間の形に似てはいるが、人間の姿には全く似ていない。
豪腕であり、その力は人間の体を簡単に引き千切る程、また頤の力もＰｅｒｓｏｎ態と同等の力がある。
彼等は走る事は無いが、一歩一歩確実に歩いて近づいてくるのが特徴。
どんなに銃弾を浴びせようが怯む事無く近づいてくるその姿に誰もが恐れている。

第３３話　一日、夢

――平和な場所は限りなく少ない。
腐敗し、荒れた世界へと変わってきていた中、ここには平和に暮らす人々が住んでいる、幼い赤城もその一人だった。
山の奥にある大きな屋敷で母と父の三人で暮らし、不自由ない暮らしをしている。
そしていつも二人の親友と楽しく過ごしていた。
屋敷の横にある剣道場、丁度お昼に差し掛かる時に竹刀と竹刀がぶつかり合う音が森に響く。
「面ッ！」
少年の一声と共にさっきまで聞こえていた竹刀の音がピタリと止む。
道場の中では茶髪の青年と赤髪の少女が面を外し、流れる汗をタオルでふき取っていた。
その二人の間には赤と白の旗を持った赤紫色の髪をした少女が立っている。
「また伊達君の勝ちね、これでもう何十回目だろ」
少女は両手に持つ旗を床に置くと道場から出て行こうとした時、赤髪の少女が止めに動いた。
「ま、待って神楽！次は絶対に倒すから！」
両手を広げ神楽の進行方向を塞ぐ少女、神楽は呆れた様子で腰に手を当てていた。
「そんなこと言っても全然倒せてないじゃん、赤ちゃんには無理よ」
「赤ちゃんって言うなぁ！私は赤城だ！」
「だから赤ちゃん何でしょ、それに伊達君だってもう何度も試合して疲れてると思うし」
すると今にも泣き出しそうな顔で神楽を見つめてくる赤城、それを見ていた神楽は急いで赤城を慰める。
「わ、わかったって。ほら、よしよし」

泣きそうな赤城の頭を撫でるが赤城は一向に顔色を変えない。
そこに面をつけた武蔵が突然入ってくる。
「俺は大丈夫だから、赤城さん、もう一度試合やろっか」
「は、はい！よろしくお願いします！」
さっきまで泣きそうだった顔は一変し、笑顔で自分の防具の前に走っていく。
「もぉー、伊達君いいの？赤ちゃん一本取るまで止めないよ？お昼ご飯の時間だよ？私お腹空いた」
「神楽は先に行っててもいいよ、俺は赤城さんの気が済むまで試合をしてあげたいから」
そう言って神楽に背を向ける武蔵、赤城と試合をする為に試合場に戻ろうとした。
「……いつも赤ちゃんには優しいね」
「えっ？」
聞こえないように言ったつもりだったがその声は武蔵の耳に届いていた。
「何でもないよ。それと、私も付き合ってあげる。審判いないと勝負が終わらないでしょ？」
「本当？神楽ならそう言ってくれると思ってたよ」
面から見える武蔵の笑みに、神楽は頬を赤らめながら床に置いていた旗を取りに行く。
そしてまた聞こえてくる竹刀のぶつかり合う音、まだまだ稽古は終わらなさそうだ。

――「母上ー！やったよー！」
元気の良い声と、ドタドタと走り寄ってくる音が茶の間に聞こえてきた。
その茶の間では朝食を作り終えた母が座っていた、４つのお茶碗に炊き立てのご飯をつめていき、それを卓袱台の上に並べている。
赤城は茶の間に行くとすぐさま母の胸に飛び込み、抱きつく。

「そんなに慌ててどうしたの、何か良い事でもあったのかな」
抱きついている赤城の頭をそっと撫でると、胸に顔を埋めていた赤城がそっと顔を上げる。
「私勝ったんだよ！武蔵に勝ったんだよ！！」
「武蔵君に勝ったんだ、赤城は強くなったね」
「えへへ～」
すると茶の間にもう二人入ってくる、武蔵と神楽だ。
二人は赤城の母に挨拶をすると、母はゆっくりと頭を下げ挨拶を返してくれた。
二人は軽く頭を下げるとご飯の並べられている卓袱台の前に座る。
「３人ともお腹空いてるでしょ、どんどん食べてね」
武蔵がふと時計を見ると既に１時を回っていた、いつもは１２時にご飯を食べる決まりなのに１時間も遅れていたのだ。
しかし母は赤城を叱ろうとはせず、まるで赤城がこの時間に戻ってくる事をわかっていたかのような感じだった。
いただきます、そう一言呟くと３人は一斉に食事をし始める。
開けている障子からは心地よい風が吹き込み、町の景色が見渡せる。
雑音も無く静かな所、平和とはまさにこの事だろう。

――だが、平和というものは長くは続かないもの。
突然玄関から扉を叩く音が聞こえてくる、その音に赤城達は驚いた様子を見せた。
「お母さん行ってくるから、良い子にしてなさいね」
母をそう言うと正座していた足をそっと立て、玄関へと向う。
赤城はまた美味しそうにご飯を食べていくが、武蔵は少し不安な表情で玄関の方を向いていた。

――数分すると母は茶の間に戻ってきた。何処と無く元気の母の顔に少し不安な気持ちになる。
「母上、誰が来たの？」

純粋な声、ただ誰が来たのかが気になって聞いてみた。
「ちょっとね、それより赤城、好き嫌いしてはいけません、ちゃんと食べないとだめよ」
見ると赤城のお皿には漬物だけが多々残っていた、既に武蔵も神楽も料理を食べ終え両手を合わせていた。
「母上ぇ、私早くお外に行きたい……」
「だめです、全部食べ終わるまで遊ぶのは禁止します」
「そんなぁ～」
母は二人の食べ終えた食器を重ねていくと台所に持っていき洗い始める。
お皿に盛られている漬物は二口程度しかなく、食べようと思えば食べれそうな量だった。
だがその少量でさえも赤城は食べようとしない、延々と漬物と睨めっこをしている。
見れば見るほど美味しく無さそうに見えてくる、というか美味しくない、大嫌いだ。
「そのぐらいすぐ食べれるでしょ？これだから赤ちゃんは……」
神楽が早く食べろと言わんばかりに急かすが、赤城は箸を持ったまま漬物を見つめている。
「赤ちゃんじゃないもん、赤城だもん……」
そう言うと赤城はまた目に涙を浮かべ今にも泣き出しそうになる。
「そ、そんな顔したって駄目なんだから、好き嫌いする赤ちゃんが悪いのよ」
神楽は顔を赤城から背けると外の景色に目を向ける。
すると、かすかに後ろから物音が聞こえてくる、お箸が食器に触れる音だ。
そっと後ろを振り向いてみると。その光景に神楽は目を丸くした。
武蔵が赤城の箸で漬物を摘み上げ、そっと口元に近づけていた。
「ほら、美味しいから食べてみて」
「で、でも……」

「とっても美味しいよ？それに好き嫌いは早いうちに直さないと、ね」

とても小学生とは思えないような子、何ともしっかりしている。

赤城はその武蔵の顔を見ると、決心したのかそっとその箸に顔を近づけていく。

「あ、それは……！」

神楽がとっさに前出て手を伸ばしそれを止めようとしたが遅かった。

ぱくっと箸で挟まれてあった漬物を食べた赤城は必死に漬物を噛んで飲み込もうとしている。

「うん、これで嫌いな物が一つ減ったね。

ちゃんと食べてくれたから、最後の一口は俺が食べてあげる」

そう言うと武蔵はお皿に残っている漬物を箸で摘まむと自分の口元に近づけていく。

そして口を開けて食べようとした時、何故か武蔵の箸が止まった。

「……神楽？」

止まったのではなく止められた、箸に摘まんであった漬物は一瞬で神楽に食べられたのだ。

「はい、これで終わり。早く外にでも行きましょ」

神楽は口の中にまだ入っている漬物を噛みながらさっさと外へと行ってしまう。

食事も食べおえ赤城は自分の食器を重ね台所に持っていく。

「あら、ちゃんと嫌いなもの食べたのね。えらいえらい」

赤城は小さく頷き笑みを見せると武蔵と一緒に玄関まで走っていった。

「赤城さん、今日は何処に行くの？」

靴を履きながら武蔵は聞いてみた、すると赤城は笑顔で手を上げて指を空に向ける。

「ああ、今日は天気が良いからね。うんわかった」

二人が玄関から出ると、その横の壁には暇そうに俯いてる神楽がいた。

「神楽、今日はあの場所に行くみたいだよ」
武蔵の声に神楽が我に返る、ぼーっとしていたのだろうか二人が玄関から出ている事に気づいていなかった様子だ。
「今日は天気が良いから行くんだ、うん、行こっか」

――3人は森へ入り、森の奥へとどんどん入っていく。
傍から見れば無我夢中に森の中を進んでいくようにも見えるが、3人はいつもと同じ道を走っていた。
生い茂った木々は3人から見れば標札代わりだろう、自分の居場所が何処なのか、どれくらい進んだ所なのかはすぐにわかる。
そしてすぐにその場所についた、森を抜けた所、眩い太陽の光が降り、辺りの花畑と草原を照らす。
心地よいそよ風が吹き、その風に優雅に揺られる木々花々、ここは3人にとって秘密の場所であり秘密の遊び場。
ここにくると大体3人の行動は分かれる。
武蔵は草原の上に横になると大きな青空を静かに眺め始める。
神楽は草花、そして昆虫観察、これがまた飽きずに熱中している。
赤城は木々の枝に止まっている鳥達、空を飛んでいる鳥達、花々に舞う蝶を見つけると近づいていきその姿を楽しそうに見ていた。
両手を鳥のように広げて腕を上下に動かして花畑を走っていく赤城、その先には小鳥達が羽ばたいている。
「赤ちゃん花畑荒らさないでよ?というか私の周りを走って邪魔しないでほしいんだけど」
「赤ちゃんじゃないもん、赤城だもーん」
嫌いな物を前にしては曇り顔だった赤城も今は笑顔で走り回りとても上機嫌。
だが逆に神楽の方はさっきから腹が立っている様子、明らかに顔が怒っている。
そんな中、ふと横になっていた武蔵が口を開く。
「ねえ、二人は将来の夢ってある?」

その問いかけに真っ先に答えたのは赤城だった。
「飛びたい！」
そう言ってまた笑顔で腕を上下に振り、武蔵の周りをグルグル回る。
「と、飛びたい？赤城さんは将来飛行機のパイロットになるの？」
赤城は首を横に振り、今まさに上空を羽ばたいている鳥を呼び指した。
「鳥みたいに大きな翼があって、自由に飛びたい！」
笑顔で武蔵に詰め寄る赤城、その純粋で明るい笑顔に武蔵は呆然としていた。
だがそこに割り込むように神楽が入り、赤城の前に立ちふさがる。
「やっぱ赤ちゃんね。それが将来の夢？あー馬鹿馬鹿しい。そんなの無理に決まってるじゃない」
「うっ……じゃあ神楽の夢は何なの！？」
「私の夢は将来学者になる事。新しい発明や発見とか色々興味あるからね」
同じ小学生だと言うのにここまで夢は食い違うものなのだろうかと、ふと思ってしまう。
「ねぇ伊達君の将来の夢は何なの？」
神楽が後ろに振り返る、今度は神楽が武蔵に詰め寄ってきた。
「俺の将来の夢？言ったら笑われそうだけど、俺の将来の夢は――」
「世界を平和にする事かな」
その答えに赤城と神楽の顔の表情が固り慌てだす武蔵。
「や、やっぱり。将来の夢が世界平和って変かな？」
照れ笑いしている武蔵、きっと二人とも呆れているんだろうと思っていた。
だが二人は呆れてなど無かった。
「伊達君の夢が世界を平和にするなんてすごい！是非私にも手伝わせて！！」
「えっ？」

「私も武蔵と一緒にこの世界を平和にしたい！」
今度は赤城と神楽両方が目を輝かしながら武蔵に詰め寄ってくる。

――――『世界を平和にしなさい』子供達は小さい頃からそう教えられていた。
この世界が平和にならない限り『神』は地に舞い降り制裁を下す。
ＮＦはそう教えられてきていた、神は正しい、世界を平和にするのはＮＦだと。
『将来の夢はＮＦの兵士になり世界を平和にしたい』と自ら軍に志願する子供は多い。
小さい頃から親や教師にそう教えられ、中学を出るとすぐに軍の養成所に行く事が出来る。
……いや、半ば強制で養成所に行かされるのだ。
この十数年で世界の人口は激減、子供達は中学を出ると働く場所を学校に決められる。
逆らう事は出来ない、クラスの半分は軍に行く事になる。
何も軍は戦うだけの軍ではない、荒れた大地に木を植え自然保護をしたり。
新しい町作りをするのも軍の仕事となっている、既にこの時代にはＤシリーズが完成されてある。
戦闘用の他に様々な種類の機体が作られており。それを操縦できるのは軍人のみと決められているのだ。
Ｄシリーズを使う事で都市は拡大、更に別地域に物資を運び町を作っていく事も可能になっていた。

――――夢について語り合う3人は時間を忘れていた。
気づけば既に日は暮れ、鳥や蝶の姿も見えなくなっていた。
今日はこれで解散、武蔵と神楽も自分の家に帰ることに、二人と分かれた赤城は家に戻一人居間で寝転がりながら本を読んでいた。
足をパタパタと動かしながら本を読んでいる赤城、機嫌がいいのだ

ろうか鼻歌までしている。
その赤城の姿、普通の小学生と何も変わらない少女の姿だった。
「こらこら、本を読む時は行儀良くしなさい」
障子を開けて居間に入ってくる母、赤城は急いで寝ていた体を起こし正座をして本を読み始める。
「何の本を読んでるの？」
湯呑みに入っているお茶を啜りながら赤城の読んでいる本に興味を示している。
すると赤城は立ち上がり座っている母の横に移動して読んでいた本の表紙を見せた。
『剣の心得』そう書かれている本は赤城の好きな本ベスト3に入るものであった。
内容はとても小学生が読むようなものではなく、難しい漢字や文章が沢山並んでいる。
それでも赤城はまるでマンガや絵本を読んでいるかのように楽しく読んでいた。
「明日も武蔵に勝てるように頑張って読んでるの！」
そう言って母の横でまた熱心に読み始める赤城、その姿を見た母も自然と顔が笑顔になっていた。
その時、玄関の扉が閉まる音が居間に聞こえてきた。
すると赤城はさっきまで熱心に読んでいた本を閉じると机に置き、急いで玄関へと向かった
赤城には誰が帰ってきたのかがわかっていた。母もまた湯呑みをゆっくりと置くと玄関へと向かう。
しかし、その顔は赤城とは逆で不安な様子を浮かべていた。
「父上！おかえりなさい！」
返ってきた父の胸に飛び込む赤城、その軽く小さな体をしっかりと父は受け止めた。
「ただいま、赤城は見ない内にまた大きくなったなぁ」
笑顔で赤城を抱きかかえる父だったが、妻の姿が見えた途端に表情

が暗くなっていく。
「貴方、お帰りなさい」

――家族3人が居間に集まる事なんて滅多に無い、父が家に帰って来るのは早い時は一週間だが遅い時は一ヶ月以上帰って来ない。
「ねえ父上！私今日武蔵と剣道で戦って勝ったんだよ！」
「ほー、あの武蔵君に勝ったのか！すごいぞ赤城～」
居間で胡坐をかいている父の横に赤城はしっかり正座して座っている。
「しかしだな、剣道は勝ち負けに拘り、勝敗に囚われては駄目だぞ。それはわかっているな？」
「うんうん！」
本当にわかっているのだろうか、でも今の赤城が日頃負け続けていた武蔵に勝てた事で嬉しいのだ。
毎日稽古して、毎日本を読んで、ようやく掴み取った勝利は赤城にとって何よりの幸せであった。
幸せは重なる、日頃会えない父が家に帰ってきてくれた。
しかも自分が武蔵に勝利した事も話す事ができた。
今日、この日は赤城にとって絶対に忘れられない一日となった。

――「赤城、ちょっといいかな」
さっきまで明るく話していた父の声がどこか寂しげに聞こえた。
それでも赤城は明るい顔をして父の顔を見つめている。
「お父さん、これから遠い所に行ってお仕事をしないといけないんだ」
明るかった赤城の顔も次第に笑みが消えていく、父の服の袖を掴み弱く引っ張る。
「いつ帰って来るの？」
「赤城が大きくなった頃に帰って来るよ、それまで良い子にしてるんだぞ？」

「うん、わかった……」
「赤城は良い子だね、それとちょっとお母さんとお話があるから自分の部屋に戻ってなさい」
居間から出て行く赤城だが、そのまま部屋には戻らず襖を少し開けて中の両親の様子を窺い始めた。

――「貴方、今日昼に軍の人が来ました、一体何があったのですか？」
父も母も赤城がいなくなった途端に急に弱々しくなり、元気が無くなる。
「俺は知ってはいけない事を知ってしまった、それを口外させない為に捕まえに来たんだろう」
「知ってはいけないって、一体何を知ったんですか？軍は貴方を捕らえるつもりですよ……」
「それで君と赤城が平和に暮らせるなら。俺は軍に投降しようと思う」
その時だった、母は急に立ち上がると父の背中に涙を零しながら縋り寄る。
「私は嫌です、貴方がいない生活なんて絶対に、本当ならこうして毎日貴方の側にいたい。
あの子だってそう、貴方とずっと側にいたいと思ってるのよ？それなのに、どうして……！」
泣き縋る母を父はそっと抱きしめ、髪を優しく撫でている。長い期間二人と会えなくなるのは父だって辛かった。
突然玄関の扉を勢い良く叩く音が聞こえてきた。
襖からこっそり覗いていた赤城は驚き、すぐさま隠れようとするが、その音に気づいた父が襖を開け見つかってしまう。
だが父は赤城に何も言う事無く玄関へと向かった、赤城はその父の後をそっとついていく。
父が玄関の扉を開けると、ＮＦの軍服に身を纏った男達が立ってい

た。
「私を捕まえに来たんですよね、わかっています。貴方達の所へ行きます」
そう言って玄関から出ようとしたが、二人の兵士が壁となり家から出られない。
「どうしたんですか、私を軍に連れて行くのでは？」
一人の軍人が父の前に出ると、手に持っている銃の銃口を胸元に押し付けた。
「上からの命令が変わった、お前を捕まえるのではなく。殺せ、と。安心しろ、家族諸共あの世に行かせてやる」
「そんなっ！？か、家族は関係無い！殺すなら私を殺せ！」
「お前があの情報を家族に話した可能性がある、可能性があるのならそれを無くさなければならない」
「私は家族にその話はしていない！だからどうか、お願いだ……家族にだけは手を出さないでくれ……」
余りにも弱く、惨めな父を見たのはこれが初めてだった。
赤城はそんな父の背中をただ見つめる事しか出来ない。
「我々は忙しい、それは君も知っているはずだ。事を早く済まさせてもらうよ」
躊躇い無く引き金を引く指、けたたましい発砲音は屋敷内に響き渡り何発もの銃弾が父の胸を撃ち抜いた。
夥しい血が辺りに飛び散り、幼い赤城の顔にもその血が着いた。
父の体は力無く倒れる、口からも血を流し目は剥き出したまま死んでいた。
何が起こったのが赤城には理解できない、さっきまで一緒に笑い喋っていたはずの父の無残な姿。
赤城の足元には既に大量の血が流れ広がっていた、その血が赤城の足に触れた時履いている白い靴下が赤く染まっていく。
「さてと、次は君の番だねお嬢ちゃん。大丈夫、すぐにお父さんの所に連れて行ってあげるから」

赤城は逃げる事も、亡き父に縋る事も出来なかった、両足は全く歩こうとせず、ただその場で震えるだけだった。
父を殺した軍人はその銃を幼い赤城に向け、照準を定めている。
「さっきは心臓だから……今度は頭かな」
今度は発砲音では無く、玄関の壁が崩れる音が聞こえてきた。
兵士には何が起こったのはまるでわからなかったが、赤城にはその光景が全て見えていた。
壁と共に吹き飛ぶ軍人の腕、そしてその崩れた壁からは刀を持った母が現れた。
腕を斬り落とされた軍人は悲鳴を挙げその場に崩れ落ち、腕から噴出す血飛沫を見ながら混乱している。
その隙に母は放心状態の赤城を抱きかかえ一目散に居間に飛び込む。
そして抱きかかえた赤城を台所に連れて行くとその場に下ろし、顔を近づける。
「赤城、今からここの裏口から家を出て森へ逃げなさい！そして武蔵君の家に行って匿ってもらうのよ、いいわね」
赤城の肩を掴み裏口の扉の前に立たせ、そっと背中を押す。
だが赤城は裏口から出て行こうとはせず、すぐさま振り返り母の元に駆け寄る。
「はっ…母上は……？」
「お母さんが時間を稼ぐからその内に行きなさい！早く！」
「い、嫌っ！母上も一緒に行こう！」
母の服を引っ張り一緒に裏口に行こうとするが微動だにしない。
どんなに一生懸命引っ張っても、涙が零れ落ちるほど引っ張っても、母は一歩も動こうとしなかった。
「赤城、良い子だからお母さんの言う事を聞いて。お願いだから……」
二人の会話は長くは続かなかった、すぐさま別の兵士が居間に入り台所にいる二人を発見した。
兵士達が二人に標準を定め引き金を引こうとした時、母は自分に縋

りよる赤城を勢い良く裏口へと押し飛ばした。
押し飛ばされた赤城は腕を伸ばし、母の手に触れようとした。
だが……互いの指先が触れる事は無かった、銃声と共に何十発もの銃弾が母の腕や足、体を貫通していく。
それでも母は、最後まで赤城に微笑みかけていた。
血塗れで台所に倒れる母、裏口を出た赤城の脳裏に母の言葉に聞こえてくる。
『森へ逃げなさい』……その言葉が赤城を走らせた。
だが裏口から銃を持った一人の兵士が姿を見せる、赤城は全速力で森へと走っていく。
兵士は銃を構えると、森へと逃げる赤城に照準を定めた。
この距離なら十分に当たる距離のはず、しかし兵士は狙いを定めるのを止め、銃の構えを解いた。
そして赤城を見送るかのように、森へと逃げ込む幼い背中を見つめ続けていた。

――靴なんて履いていない、ご飯だって食べていない、止まらない涙を必死に手で擦りながら森深くへと走っていく。
ただひたすら走り続ける、生きる為に。走っていると自分が今さっき見た事が全て夢のように思えてくる。
意識が朦朧としてきた、段々と視界が狭くなり、意識が遠のいていく。
それも良いかもしれない、もしかして、もしかすれば。
起きた時に悪い夢から覚めて、またいつもの様に平和な生活が送れるかもしれない……と。

――「赤城……！赤城っ！しっかりするんだ！」
聞こえてくる声は聞きなれた男性の声、赤城はすぐにその声が誰なのか分かった。

「むさ、し？」
ゆっくりと目蓋を開けると、そこには武蔵の姿があった。
青い軍服を身に纏い、あの幼い面影はすっかり消えている。
「良かった、気がついて……酷く魘されていたんだよ。大丈夫？」
赤城は黙ったまま武蔵の顔を見つめている、ここは医務室だろう、そんな雰囲気がする。
白いベットに白いシーツ、白い天井に白い壁壁が広がっているのだから。
「昔の頃の夢を、見ていた……」
「赤城？」
そう呟いた赤城の目からは、一筋の涙が流れていた。
赤城はそっと顔を武蔵から背け、泣き顔を見せないようにしている。
その時、武蔵が寝ている赤城の肩を掴みそっと体をベットから離す。
そして自分の胸元へ赤城の頭を寝かすと、ゆっくりと優しく抱きしめる。
「赤城、一人で泣こうとしないで」
武蔵の言った一言で、赤城は大粒の涙を流し始めた、止めたくても、もう自分では止める事が出来なかった。
静かに泣く赤城、武蔵の腕の中で零す切なくて暖かい涙は武蔵の胸の中へと消えていった。

第３３話　一日、夢（後書き）

神楽（かぐら）
白衣に眼鏡、赤紫色の長髪が印象的な女性。
プライドが高く気品が感じられ、武蔵や赤城の幼馴染。
実は武蔵より年下だが、喋り方や外見から判断すると年上に間違われる事も。
優秀な科学者であり、今までに数々の発明をしてきている。

第３４話　負傷、必要

――――「ミシェル、迎えに来たよ」
ここでの用事は済んだ。
軍服に身を包んだまま俺はミシェルを迎えに行き、交番に来ていた。
もちろん顔がばれないように、似合わない軍帽をミシェルのように深く被っている。
「き、君は軍の方だったんですか？」
交番にいる警察官が驚いた表情をして口を開く、まぁ無理もないだろう。
俺が交番の中を見渡すと、丁度ミシェルはパイプ椅子に座ってお茶を飲んでいた所だった。
「まーそうです、んじゃ俺は行くんで。ありがとうございました」
俺はそれだけ言うと警官に背を向け交番から出て行こうとすると、それを見ていたミシェルは持っていた湯呑みを机に上に置くと小さく頭を下げた。
「おちゃ、ありがとう」
礼儀正しくお礼の言葉を述べるミシェル、良い子育ってお兄ちゃん嬉しいです。
「よし、美味いもんでも食べに行くか！」
「うん！」
そう、周りから見れば俺達はまるで兄と妹だと思われるだろう。
仲良く手を繋ぎ街の中を歩きながらそんな事を考えていた。
……ミシェルを一人きりにさせてしまったんだし、美味いもんでも食べさせてあげないとな。
――――そんな訳でやってきたのがハンバーガーショップ、１００年後の世界にもあるなんてちょっと感動。
それにしても１００年後のハンバーガーはすごい、自分で様々なト

ッピングを行なえるのは勿論、子供向けに大人向け、老人向けのハンバーガーもある、進歩したもんだ。
小さなテーブルに高い椅子、ミシェルは足をバタバタと動かしながら美味しそうに自分の口より大きなハンバーガーにかぶりついている。
そんなミシェルを見ていると何とも微笑ましくなる、何か嫌な事が頭からすっと抜けていくような感じがする、だからこのまま笑顔を見続けていたい、この笑顔をずっと守って行きたい……なーんてな。
ハンバーガーを1個、果汁１００％のリンゴジュースを飲み終わるとミシェルはお腹いっぱいの様子。
それを見て俺は伊達中尉から貸してもらった携帯電話で時間を確認してみる、戻っておかなければならない時間まであと1時間程度あった、まずは買うものを買っておくか。。
基地内に入るのは簡単だが、ミシェルがいると困難になる。だからミシェルを隠す必要があった。
既にお金は支払い終えている為そのままハンバーガーショップの店から出て行くと、町中を歩き今度は鞄を売っている店へと入っていく。
俺が店を入るとたちまち店員が頭を下げて挨拶をしてくる、そして部屋の奥からヘコヘコと頭を下げながら近づいてくる男性。
「いらっしゃいませお客様、当店で何かお求めの物があれば何でも言って下さい」
やけに店員の態度が優しい気がする、店では普通の事なのか、これは俺が軍服を着ているからなのだろうか。
どっちにしろ都合が良い、俺はすぐさま自分の欲しいバックを買う事にした。
「この女の子が入る位の大きな物を下さい」
そう言って俺は横に佇んでいるミシェルを自分の前に持ってくる。
「こ、この女の子が入るバック……ですか？」
「そうです、言っておきますけど本当にこの子を入れる訳無いです

からね、ははは」
『冗談キツイぜお客さん』と言いたそうな顔だ。
俺は冗談を言ったつもりで笑って見せると、店員も笑ってくれた。

――――「せまいよぉ～」
人気の無い場所、買ったばかりの大きなバックの中には三角座りをしているミシェル、やはり不安な様子を浮かべている。
「が、我慢してくれミシェル。数分だけでいいからそこでじっとしているんだ」
「うん、わかった……」
早くも涙目になっているミシェルに俺は悪いと思いながらバックのファスナーを少しずつ閉めていく。
「せまいよぉ、くらいよぅ……」
何だろう、俺って今とっても犯罪者な気分。
もし警察に見つかり、これが明るみに知られたら……。
『少女を誘拐、容疑者は人気のいない場所に少女を連れ出しバックの中に詰めていた所を警察に見つかり逮捕――――』
とかなりたくないな。まぁ、よほどの事がない限りバックの中を見られる事なんてないと思う。
早く軍に戻ってゆっくり休もう、そういえば全然風呂に入っていない、ミシェルの服も洗濯しなければならない。

――――準備は整った、大きなバッグのヒモを肩に掛けたままあの裏門を平然な顔で通り自分の部屋に戻るだけだ。
俺は更に帽子を深く被ると意を決して軍の門に近づいていく。
銃を持っている兵士の視線が俺に刺さってくる、そんなに見つめないでほしい、息苦しくなってしまう。
だが俺よりもミシェルの方がさぞかし息苦しいだろう、急がなければ……。
「おい、ちょっと待て。その大きな荷物は何だ?」

速攻で捕まった俺を許してくれ、とか言っている場合ではない、内心焦りと緊張で心がやばい。
「え、あー、ちょっと……」
「念の為に中身を確認したい、中を見せてくれないか？」
ほう、単刀直入だな。良いですよ見せますよ、見せればいいんだろ？
ほーらバックを開けるとその中には愛くるしい少女の姿が。
「どうした、早く中を見せろ」
っは、いつの間にか現実逃避をしていた。このバックを開ける事等絶対に出来ない。
となるとここは俺の話術で上手く切り抜けるしかない。
「実はな……この中にはお腹を空かした猫達が沢山いるんだ！」
「ね、猫だと？」
驚いた様子を見せる兵士、そりゃ誰だって驚くだろう。俺の語りはまだまだ続く。
「寒く薄暗い路地にお腹空かした子猫達がいたんだ。俺は黙って立ち去ろうとした……。
でも後ろから聞こえてくるんだ、お腹空いたよぉ、助けてよぉ、ってな……まるで猫達が俺に助けを求めているかのように！！
だから俺は部屋に戻ってこの子猫達に暖かいミルクを与えたいんだ！だから道を開けてくれ！」
完璧だ……俺は今輝いている、心優しい青年の熱き訴えはきっとこの兵士に届いただろう。
そして兵士は俺の肩にそっと手を置くと、こう呟いてくれた。
「頭大丈夫か？」
どうやら届かなかったようだ。
見張りの兵士は2人、仕方が無い、気絶してもらうしかなさそうだ。
っま、力入れすぎて首の骨折れたらその時はその時だ。
俺が兵士に飛びかかり首にチョップでもしてやろうと思った時、見慣れた男が門から出てきた。
「待っていたよ、っさ。早く中に入って」

「伊達中尉!?この者と知り合いなんですか?」
「ああ、俺の友人だよ。届けて欲しい物を届けてきてもらったんだ」
「一体何を?」
「それは機密事項で言えないさ、言うと僕の首が飛ぶからね。だから彼を通してあげて」

――武蔵が現れた事により難なく裏門を通れてしまった甲斐斗。
建物の中に入るとエレベーターを使い自分の部屋がある階を目指す。
その間、何故か甲斐斗と武蔵は一切会話をせず沈黙を保っていた。
甲斐斗は自分の部屋の前に立つと渡されていたカードキーをドアの前に翳す。
ロックは解除され、無言のまま部屋の中に戻っていく、武蔵も自分の部屋に戻ろうとした時、突然甲斐斗が武蔵の腕を掴み部屋の中に強引に連れ込む。
「こんなマネをするとは思ってなかったけどな」
怒ったような口調で甲斐斗が被っていた帽子を脱ぎ取り、その帽子を武蔵に投げつける。
武蔵は投げつけられた帽子を片手でキャッチすると、小さく溜め息をつき、帽子を指先でクルクルと回し始める。
「いつ気づいたの?」
「裏門に現れた時だ、余りにもタイミングが良すぎて怪しすぎる。帽子を調べればこんな物がついてたぞ」
甲斐斗が握り締めている拳を開くと、手の平にはバラバラに砕かれた装置の残骸が乗っていた。
「俺の動きを監視していたな、それと盗聴器もしていたはずだ。そうだろ?」
装置の残骸を更に握りつぶすと、その破片を粉々にして足元に捨てていく。
「何もかもお見通しのようだね、悪いとは思ってたけど。そうさせてもらうしかなったんだよ」

「目的は何だ？俺をＥＤＰとかいう作戦に参加させる事だけじゃなかったのか！」
怒った様子で声を出す甲斐斗、今にも武蔵に殴りかかろうとしそうだ。
「まぁまぁ、落ち着いて。まずはそのバックの中に入ってる子猫を出してあげないと」
落ち着いた様子の武蔵はそう言って部屋に置いてあるコーヒーメーカーの電源を入れる。
その間に甲斐斗はミシェルの事を思い出しすぐさまバックのファスナーを全開にした。
「ミ、ミシェル！？大丈夫か？！」
「んぅ～……」
開けてみると狭いバックの中にいたせいかミシェルは少しぐったりした様子で汗をかいてた、バックの中は思っていたより暑かったのだ。
「その子をお風呂に入れてくるといい、俺はコーヒーでも作ってるよ」
言われるまでも無い、甲斐斗はすぐさまバスルームに向かう。
すると、バスタブには既にお湯が溜められており、いつでもお風呂に入れる状況だった。
ミシェルの上着とスカートとお気に入りの帽子を脱がせると洗濯機にぶち込む。
「脱いだ服は全部これに入れるんだぞ、風呂入ってさっぱりしてこい」
小さく頷くと自分から服を脱ぎ始める、それを見ていた甲斐斗は急いで部屋から退出し武蔵の元へ向かった。
机の上には甲斐斗の分のコーヒーが注がれてある、湯気は立ってない、多分アイスコーヒーだろう。
逆に武蔵の持っているカップに入っているコーヒーは湯気を出している為ホットコーヒーだ。

「さて、話を戻すぞ。俺が信用できないからこんな事をしたのか？」
「そう、信用できなかった」
こうもハッキリ言われてはどうしようもない。
「でも俺は今、やっと君を信用する事が出来たよ」
「ああそうかい、だが俺がお前を信用できると思うか？」
「そう言われると思って用意してきたよ。君に与える情報をね」
武蔵は更に奥の部屋に繋がる扉を開ける、そこには夥しい量の本と、何枚ものディスクが重ねられていた。
机の上にある一台のＰＣ、甲斐斗の為に用意していたかのような部屋だった。
「ここで君の知りたい事を全部調べればいい」
その圧倒的な情報量に呆然としている甲斐斗、余りの量に一体どれから探していけばわからないのだろう。
「い、いいのか？俺みたいな部外者にそんな情報を与えて」
「ああ、情報なんていくらでもあげるさ。それよりもう一つ聞きたい事があるんだけどいいかな」
武蔵が次の質問をしようとした時、甲斐斗は前に手を伸ばしてストップの合図を送る。
そして机の上においてあるコーヒーカップを手に取り、アイスコーヒーを飲み干すと自ら口を開いた。
「言いたい事はわかる、何故俺があの子と一緒に行動しているのかだよな。俺はあの子に助けられた時があった、そしてある約束を交わした。それだけだ」
余りの説明の短さに武蔵は少し戸惑った顔をすると、コーヒーを飲み終えた武蔵はカップを机に置いた。
「えらく短く切ったね、あの子と君の関係を聞きたいな」
「関係か……さぁ、俺もよくわからない。ミシェルが何者なのか、何処から来たのか、嘘じゃない、本当だぞ」
「わかるよ、君は嘘を言ってない。目を見ればすぐわかる、それじゃ俺はそろそろ自分の部屋に戻る事にするよ」

「あ、ああ……それじゃあな」
急に静かになる室内、武蔵は自分の部屋に戻り甲斐斗だけが部屋に立っていた。
その異様な感じにまるで武蔵は甲斐斗との会話を全て予測していたかのように思えた、情報の提供にミシェルについての会話、甲斐斗が盗聴器を発見する事まで全て……。

――その頃、赤城のいる医務室には二人の女性がお見舞いに来ていた。
「赤城少佐！」
一人は部屋に入ると、壁にもたれかかり呆然としている赤城の元へ走っていく。
「由梨音！」
飛び込んできた由梨音をしっかりと抱きしめる赤城、由梨音もまた同じように赤城の体を抱きしめていた。
「良かった、無事だったんだな」
「赤城少佐も無事で本当に良かった……」
二人が抱き合っている所に、もう一人の女性が腕に果物の入ったカゴを下げて現れた。
「お久しぶりね、体は大丈夫なの？」
「神楽！？久しぶりだな、まさかお前がここに来ていたとは」
「新型の輸送をしてきたの、伊達君が乗る機体とレンちゃんが乗る機体をね」
果物が入っているカゴを机の上に置くと、ベットの横に置いてある丸い椅子に腰を下ろした。
「えっと、神楽さん？このリンゴ切ってもいいですか？」
「ええどうぞ、赤ちゃんが喜ぶように兎の形にでも切ってくれないかしら」
「あ、赤ちゃん……？」
由梨音が戸惑った様子で林檎の皮を果物ナイフで切っている中、赤

城は声を出さずに目で神楽を威圧している。
「何でもないわよ、それより赤城少佐、気分はどう？」
問いかけに赤城は無言のまま俯く。その横顔を見ていた神楽は溜め息を着くと自分の腰に手を当てた。
「良くはなさそうねぇ、無理も無いわ。自分の部下を3人失ったんですもの」
その一言が赤城の耳に届いた瞬間、愕然とした表情で神楽の方に顔を向けた。
林檎の皮を剥いていた由梨音の手は一瞬で止まり、彼女もまた驚いた様子で神楽の方を向いた。
「3人……？」
赤城の口から一つの言葉が漏れる、神楽は赤城から目を背けると、そっと口を開く。
「貴方の部隊にはまだ伝わってなかったようね。
第五独立機動部隊所属ノイド・パルシュン、ルフィス・ハイリッチ、カイト・アステルの3人は死亡扱いになっている。
ちなみにこれは関係無いかもしれないけど、アステル少尉のお姉さんも死亡扱いになってるわね」
「そんなっ、ルフィスやアステルまでも死んだだと……」
赤城の目が段々と虚ろになり、目に力が無くなってくる。
体全身が脱力していくように力が抜けていき、また俯きだした。
「恐らく二人は基地内にいるＨｕｍａｎ態に殺された、
血痕が壁や床に付着しているのに死体が残っていないのは、全身をバラバラに千切られた後に喰われたんじゃないかしら」
場は静まり返っていた、物音一つ聞こえない部屋。
神楽は愕然としている赤城を見つめ、由梨音はまた少しずつ気を紛らわす為に林檎を切っていた。
「二人ともすまない、少し一人にさせてくれないか……」
静まり返っていた室内でふと赤城が呟く、その声は掠れており、全く力を感じられなかった。

神楽は黙って椅子から立ち上がると、そのまま部屋を出て行ってしまう。
由梨音は丁度林檎を切り終え、その林檎を小さなお皿の上に並べ机に上に置いた後に部屋から出て行く。
赤城が机に上に目を向けると、皿の上に可愛く兎の形に切られていた林檎だけが置いてあった。
だが赤城はその林檎に手を付けようとはせず、自分の体に掛かっているシーツを突然握り締めた。
両手が震える程の力を加えながらシーツを握り締めていき、真っ白で綺麗だったシーツには大きく深いシワが出来る。
そして止め処なく零れ落ちる涙、その後も白いシーツに何滴もの涙が落ち、シーツを点々と湿らしていく。
もう自分しかいない部屋で、赤城は押し殺していた感情を爆発させようとしていた。
その時だった、突然医務室の扉が開いた音が聞こえてくる。
扉が開くのに気づいた赤城は急いで涙を拭うと、誰が入ってきたのかを確かめる。
そこにいたのは一人の男。青い軍服を身に纏い赤城の事を誰よりも知っている人だった。
「武蔵……」
「赤城、目が赤いけど。また一人で泣いていたの？」
武蔵の一言に赤城の顔はたちまち赤くなり、急いで拭き取りそこねた涙を拭う。
「わ、私は泣いてなどいない。これは目にゴミが入って――――」
だが次の瞬間、赤城の体を優しく暖かいものが包み込んだ。
一瞬の出来事に赤城は言葉も出ず、その体から感に暖かさを実感していた。
「泣きたい時は俺が涙を拭ってあげる、だから無理に強がったりしないでいいよ」
泣きたい時は泣いてもいい、でも一人では泣かないでほしかった。

もうあの時のように、赤城は一人じゃないのだから。
赤城は小さく泣きじゃくり、武蔵の胸元に顔を埋め。
自分の泣き顔を見られないように顔を押さえつけて隠し、止めようの無い涙をその胸で流している。
そんな赤城を抱きしめながら、武蔵は優しく髪を撫で続けた。

――赤城と同じく気絶していたレン、彼女は赤城とは別の医務室で眠りについている。
だがその体には幾つもの装置が貼り付けられ、心電図や脳波計など、様々な器具が並べられていた。
薄暗く不気味な部屋、そんな部屋でレンが寝ているベットの隣に一人の女性が立っていた。
小さく笑みを見せると、女性は目蓋を閉じたままのレンの頭をそっと撫でていた。

――やれやれ、あれから延々とこの世界の情報に目を通しているが、『ＥＲＲＯＲ』とは何なのかが未だによくわからない。
それと『ＥＲＲＯＲ』と『神』についての関係もだ、どうして１０００年後になった今、神は出てこないのか。
こっちは疲れて今にも寝てしまいそうだからそんなに頭を使えない。
もらったコーヒーのおかげで少しは眠気は少し吹き飛んだけど、それも長くは続かなかった。
丁度ミシェルもベットで寝ている、乾燥機で乾かした服はとても暖かく肌触りが良かったらしい。
俺も少し仮眠を取っといてもいいだろう、丁度ソファもあることだしそこで寝る事にしよう。
ＰＣの電源は入れたまま俺はソファの上に横になると、静かに目を閉じた。
……えっと、この世界に来る前の俺はどんな奴だったっけ。
最強の魔力を持っていた為ほとんど敵無しだった俺は自分勝手で自

己中心的で、そんで平和な世界で……。
ってあれ、俺は元々どんな奴だったんだ、１００年前の俺は何をしていたんだ？
多分眠いから頭が良く働かないんだろう、適度な仮眠を取らないとこのまま頭がおかしくなってしまいそうだ。
俺には時間がたっぷりある、焦る必要なんか無いな……。

――日が暮れても基地にはまだ多くの兵士達がいた。
外壁の修復、機体の修理、機器メンテナンス、ＥＤＰに備えての補充。
血で汚れた基地内の壁を綺麗に洗い、血を落とす作業。
兵士は休まず働き続けている中、武蔵は一人自分の部屋に戻ってきていた。
部屋に入ると大きな溜め息をして重い軍服を脱ぎだし、そしてバスルームの方へと向かって歩こうとした。
だが一歩足を前に出した途端、武蔵の足が突然止まる。
後ろから感じる気配、そして香水のような良い香りが部屋に立ち込めていた。
「おかえり、伊達君」
武蔵が振り返ると、小さく笑みを見せる神楽が椅子に座っていた。
「神楽、またあのカードキーを使って部屋に入ってきたのかい？」
「ええ、この基地内全てのドアを開く事の出来る私特製のカードキーでね」
そう言って指に挟んでいるカードキーを武蔵に一目見させるが、武蔵は呆れたような顔で部屋にあるソファに座る。
「こうして二人っきりで話すのは数ヶ月ぶりだね、本部はどうだった？」
椅子に座っていた神楽は立ち上がると、部屋に飾られてあるコーヒーメーカーの電源を点けに行く。
「とても面白い所、私の調べたい事や研究したい事とか本部の方が

許可を出してくれてね、思うように進んでるわ」
二置かれているコーヒーカップを手に取ると、早速コーヒーを注ぎ始める。
そして注ぎ終わった熱い方のカップをそっと武蔵に手渡す。
「ありがとう、それを聞いて安心したよ。神楽は本部で元気にやってるみたいだね」
武蔵は笑顔のまま熱いコーヒーを平気で飲んでいくが、神楽の方は表情が少し暗くなっていた。
「元気にやってるし、退屈はしないわよ。でも、伊達君がいないから少し寂しい……かな」
「えっ？」
最後の方が聞き取れなかった、武蔵がもう一度言った事を聞こうとしたが先に神楽が口を開いた。
「伊達君はさっきどこに行ってたの？格納庫？司令室？」
「んーと、医務室に行って赤城と会ってきたかな。体の方は心配無さそうだけど、精神的に少し弱ってたね……」
武蔵の持っているカップの中にはもうコーヒーは無かった、目の前にある机にカップを置くと前かがみになり額に手を当てる。
「無理もないけどね、僕達は三人の仲間を、親友を失ってしまったんだ。誰だって深く傷つくさ」
「それで、その傷を手当てする為に赤ちゃんに会いに行ったのね」
「うん、赤城はまだ隊長になって日も浅いから。辛いかもしれないけど頑張ってほしいから」
「ふーん、ねぇ伊達君、さっき誰だって傷つくって言ってたけど、貴方も傷ついたのよね」
空のカップを机に上に置くと、神楽はソファに座っている武蔵に歩み寄る。
「仲間を失ったんだ、とても辛いよ。でもここで俺が不安な気持ちになれば残されている部隊の皆が……」
視界に神楽の足が見え、そっと顔を上げた武蔵。

覆いかぶさるように抱きつかれると、暖かいものが口の中にまた広がってきた。
声も出せずただ抱きしめられながら口の中に暖かいものを入れられ、舌を重ね合わせる。
気持ちよく、心地よい、このままそっと目を瞑ろうとした時、神楽がそっと顔を離す。
「それなら、私が傷ついている伊達君を手当てをしても……いいわよね」

――今日、NFとは別にBNもまた接戦をしていた。
一つの部隊に、一人を除いて、戦艦の医務室でベッドの上に座り、壁にもたれ掛かっている青年。
喉が渇いた、机の上には飲み物が置いてある。手を伸ばせば簡単に届く距離だ。
青年は飲み物を取ろうと手を伸ばそうとした、小さく、ゆっくりと、震える手で飲み物の入っているコップに指先が届く。
そのコップを掴もうとしたが、手から逃げるように離れる。いくら力を込めても掴めない、握れない。
目の前にある物さえ握る事が出来ない事の悔しさ、腕も手も指もあるのに。
静かな部屋に扉の開く音が聞こえてきた。
「おーっす羅威、元気にしてっかー？」
そんな雰囲気の中、穿真はいつもの用に周りの空気を気にせず入ってくる。
だがその方が羅威にとっては楽だった、悲しげな顔をするよりも明るく笑ってくれる方が気分が楽になる。
「穿真、作戦の方はどうだったんだ」
「心配ご無用！クロノの新型のおかげでかなり楽に作戦が遂行出来たからな、にしても新型が戦う所、お前にも見せてやりたかったぜ」
「そうか……」

「そんな暗い顔すんなっての、お前はまだラッキーな方だぜ？リハビリすればその両腕はまた使えるようになるんだからよ」
「……俺はこれからどうなる、部隊を外されるのか？」
気になっていた、腕も満足に動かせない男が軍に入る事などできない。ましてやDシリーズを扱うパイロットならなお更だ。
「さぁな、それはまだわかんね。お前が両腕を俺の手のように機械にすれば大丈夫だと思うがなぁ」
切り落とされた手は鋼鉄の手と化し、様々な装置まで内臓されている手。
そんな手を欲しいとは思わないが、手が無いよりはマシな物だ。
「止めとけよ。一生機械の手とか嫌だろ？だからお前は一日でも早くその腕が使えるようにリハビリする事だ」
「ああ、わかっている」
「そんじゃ俺はそろそろ自分の部屋に戻るからな、あーばよ」
へらへらと笑いながら後ろに手を振り部屋を出て行く。
羅威は自分の喉が渇いている事を穿真に言わなかった。
誰の力も借りず、自分の力で掴み取りたかったからだ、震える腕にもう一度力をいれ、目の前に置いてあるコップに手を伸ばした。
今度こそコップを掴む事が出来た、震えている、力も余り入らない、それでもコップは自分の手で握られている。
後はそれを自分の口にまで持っていけばいいだけ、ゆっくりと自分の口の方にコップを引き寄せようとした。
手から滑り落ちるコップ、自分の手から床に落ちるまで、羅威の目にはスローモーションのように遅く感じた。
床に落ちると中の飲み物とコップの破片が飛び散り、ガラスの割れる音が室内に響く。
音は羅威に己の無力さを伝える。
それでも羅威は諦める事は無かった、机に上においてあるもう一つのコップを見つけると、
また精一杯腕を伸ばしコップを掴もうとする、羅威の心はそう簡単

に折れはしなかった。

第３４話　負傷、必要（後書き）

正式名ＭＦＥ－アストロス　（Ｓａｖｉｏｒｓ製）
全長－１７、５ｍ　機体色－水色　動力源－光学電子磁鉱石
Ｓａｖｉｏｒｓの主力機とされている機体。
武装が充実しており一機でより多くのＥＲＲＯＲと戦えるようになっている。
ちなみに、Ｓａｖｉｏｒｓの新型は主にこの機体を改良して作られている。

第３５話　ＥＤＰ、始動

――あれから一日がたち、とうとうＥＤＰ決行の日が来た。
兵士達は朝から慌しくＥＤＰの向けて準備をしている中、東部軍事基地の門の前に一台の黒いリムジンが止まる。
当然門番の兵士達がその車に気づき、車の側に近寄ってくる。
「門番の方、ここの扉を開けてくれないだろうか」
運転手は一枚の紙を門番に渡すと、門番の兵士はその紙に書いてある内容はすぐさま読み始める。
すると、さっきまで強気だった態度が急変、顔色を変えてすぐさま門の扉を開けるよう他の兵士を指示をし始めた。
その様子に運転手は小さく笑みを見せると、止めていた車を発進させ基地の中へと入っていった。

――「伊達中尉！それは本当なんですか！？」
会議室に向かう廊下で急ぐように歩いている武蔵と由梨音。
そしてその後ろにはレンもついてきていた。
「ああ、騎佐久が言うには本当らしい」
まるで前からそうなる事を予想していたかの出来事だった。
前日の戦闘で兵士、機体や弾薬を消耗してしまい万全の体制でＥＤＰを迎える事は出来ないと思っていた。
だが今は違う、機体も弾薬も全て揃い万全の体制になっている。
会議室の扉を開けると、既にそのお客は集まっていた。
一人の少女の両隣に座っている一人の女性、そして一人の仮面を被った者。
「初めまして、貴方に会えて光栄です。伊達中尉」
その少女の顔に武蔵は見覚えがあった、忘れるはずがない。
Ｓａｖｉｏｒｓの創始者、リシュテルト家の人間。
三人は横一列に並ぶと敬礼を始める、そして所属部隊、階級を言う

とその場で待機していた。
「どうぞお座りください」
言われるままに三人は椅子に座る。
それにしても、どうしてＳａｖｉｏｒｓの人がこの基地に来ているのか。
そしてどうして第五機動独立部隊の兵士だけをこの部屋に呼び出したのかわからなかった。
「私一度お会いしたかったんです、最強の名を持つ貴方に。伊達中尉」
「はい、私も貴方のような方に会えて光栄に思っています」
椅子に座っている武蔵は冷静な顔をしていたが、両隣にいる由梨音とレンは緊張の余りじっと座っている事しか出来ない。
「何故Ｓａｖｉｏｒｓの方がここにいるのか……と、不思議そうな顔をしていますね。ラティス、彼等に説明してあげてください」
「わかりました」
フィリオの左隣に座っている女性が返事をすると、伊達の方に視線を向ける。
「何故ＳＶ（Ｓａｖｉｏｒｓ）の我等がここにいるのか、それは貴方達と共に『ＥＤＰ』に参加するからです」
「昨日本部の方達とは話しを済ませてきました。
ＳＶは元々世界平和の為に組織であり最終目標は平和な世界を作ろうとするＮＦと同じ」
「だから……この作戦を共に遂行しようと？」
今まで黙っていたレンが口を開く、たしかにＳＶとＮＦの目的は同じかもしれない。
しかしＳＶとＮＦが決して仲の良い関係とまでは言い切れないし、そもそもＳＶの目的がよくわからない。
「そうです、ＥＲＲＯＲは人類の敵、今は人間同士が争っている場合では無い、それは貴方達もおわかりのはず」
たしかにそうだ、今は人間同士が争っている場合ではない、それに

ＳＶが参戦してくれるのはＮＦにとっても有りがたい。
昨日消耗した戦力を補う事も出来る、それにＮＦの兵士を犠牲にしなくてすむのだから。
「そろそろ私達をここに呼び出した答え、教えてもらえないでしょうか」
ふと武蔵が口を開き、視線をフィリオに向ける。
何故この場所に武蔵の所属している部隊だけを呼び出したのか、武蔵はそれが気になっていた。
今度はラティスではなく、フィリオ自身が口を開いて答えを出した。
「先に言った通り、貴方にお会いしたかったのです。
貴方の戦歴を前にご覧になりました、そして戦闘も。貴方ほど機体を使いこなせる人はいないと思っています」
「それでもし良ければ、来てはいただけないでしょうか……Ｓａｖｉｏｒｓの下に」
ヘッドハンティングだ、伊達武蔵程の腕前ならおかしくない。
伊達の両隣にいる二人は驚いた表情を見せる、当然だ。この場、この瞬間で武蔵を誘っているのだから。
突然の衝撃発言に二人は同時に武蔵に顔を向け、返事を待つ。
「伊達中尉のような強く逞しき方がいればＳＶは更に開花します。
貴方も知っているはずです、本当のＮＦの姿を。貴方のような方がＮＦにいては……」
「お誘いは嬉しく思い光栄ですが、俺はＳＶには行きません」
大きく、強い口調で言ったその声を聞くと、両隣に座っている由梨音とレンが笑みを見せた。
「……そうですか、わかりました。突然この様な事を言って申し訳ありません」
フィリオは残念そうな顔をして頭を下げると、ラティスやその隣にいる仮面の男も頭を小さく下げた。
「俺達はこれから機体の整備をしておかないといけないので、失礼します」

武蔵は一人立ち上がると敬礼を済まし、部屋を出て行こうとする。
レンや由梨音も焦るように立ち上がると敬礼をして武蔵の元へと向かった。
「お嬢様、やはりあの方は……」
「ええ、行かれるみたいですね」

――目には見えない張り詰めた空気が既に基地を取り巻いている中、この男、甲斐斗は違った。
「っ…そろそろ仮眠終了するか……」
まだ眠く頭がボーっとしている、それでも俺は今日中に伊達中尉が提供してくれた情報に全て目を通しておかないとならない。
俺は眠気防止の為にコーヒーメーカーを機動、カップに注がれるコーヒーを一気に飲み干すとすぐさまＰＣのある奥の部屋に向かう。
「かいと、おはよー」
「ん、まだ起きてたのか？良い子は寝る時間だぞ」
俺は目を擦りながらボーっと立っているミシェルの背中を押してベットの方に連れて行く。
「まだねててもいいの？」
「寝てもいいに決まってるっての、ほら時計見てみろ。もう１０時だぞ」
時計の針１０を指している、誰がどう見ても１０時。
丁度俺が寝たのは９時だから１時間仮眠した事になる。
すると突然ミシェルは俺から離れると部屋のカーテンの方へ走っていく。
ん、カーテンの隙間から微かに光が……いや、まさかな。
「あっ」
足元に何も無いのに関わらず、ころんと転げてしまうミシェル。
何かに掴まろうと咄嗟にカーテンを掴んでしまいミシェルの体重で簡単にカーテンは剥がれた。
眼に突き刺さる光、明るく輝く日光は希望ではなく俺に絶望を与え

てくれた。
「朝の、１０時？」
朝の１０時？俺が寝たのは夜の９時だ。
え、それじゃ俺は１３時間の仮眠を取っていたのか？仮眠ってレベルじゃない。
どうするんだ？俺はまだ見ていないデータは山ほどある、それを今から全部見ろと。ああ、昨日の夜見ておけばこんな事には。
「あああぁぁぁっ！俺の時間を返してくれぇえええっ！！」
頭を抱え込みながら俺はベットに崩れ落ちた。
あーあ、もう本当こういうのって嫌だ、あの時寝るんじゃなかった。
今はもうスッキリすっかり目が覚めている、仕方が無いから今からまだ見終えていないデータを見る事にしよう。
それしかない、俺にはそれしかないんだ。
脱力した体を起こし、ＰＣの前にある椅子に座るとまだ見終えていない文章に目を通していく。
「ミシェル大丈夫かー？大丈夫なら顔洗って冷蔵庫の中にある物を適当に食べといてくれ」
そう言うとさっきまで倒れていたミシェルはむくっと起き上がり、またとことこ洗面所の方に走っていった。
俺の予想だと多分作戦の時間を伝えに伊達中尉が俺の所に来るはず、それまでにこの情報を全て見ておかなければならない。
その時だった、突然部屋の扉が開く音が聞こえてきやがった。
まさかとは思うが、そのまさかだった。青い軍服に身を包んだ伊達中尉登場。
「おはよう、気分はどうだい？」
「最悪です」
伊達中尉の爽やかな挨拶に負けないぐらいの顔で俺は挨拶を返してやった。
「どこか具合でも悪いのかい？」
「いや、別に具合は悪くないけど……」

「それならいいんだけど。あ、ちょっと俺と一緒に来て欲しい所があるんだけどいいかな」
「りょーかい、何処でも行きますよ」
俺は脱力した体を立ち上がらせると、妙に重い肩を自分の手で揉み解していた。
こんな晴れた日でも戦争は起こるのか……と、ふと思ってしまう。
窓から差し込む光を見て今日の天気は快晴。こんな天気の良い日は昼寝でもしたいものだ。
って、何を考えてんだ俺は。さっさと行く所行って物事済ましていこうじゃないか。

――そんな訳で来た所が格納庫、もちろん俺は軍帽を深く被り若干俯きながら歩いている。
周りを見てみると兵士達は慌しく機体の整備や調整を行なっている。
そんな格納庫内を歩いていくと、1機の機体の前に俺と伊達中尉は立ち止まった。
「見間違える程変わったようだね、君の機体」
「お、俺の機体？」
俺はその言葉を聞いてもう一度機体を見た、だが明らかに俺が乗ってきた機体とは明らかに違う。
そこに一人の女性が歩き煙草をしながら近づいてきた、どうやらこの機体を作り変えた人だと思う。
「神楽、こんな短時間によく仕上げれたね」
「当然、こんな機体見てたら弄りたくなるわよ。それにこの機体、思っていた以上に面白かったわよ」
女性は満足な顔をしながら煙草を吸い、伊達中尉と仲良く会話をし始めた。
この人と伊達中尉は顔見知りなのか、それとも奥さん？一人とり残された俺はとりあえず機体に近づいてみる。
「あら、勝手に機体に触らないでほしいんだけど」

しっかり俺の動きも見ていたのか、というかこの機体は俺の機体だから別に何したって構わんだろ……。
すると今度は伊達中尉が口を開き、神楽に説明をし始める。
「神楽には言ってなかったね、その人はこの機体のパイロットをしてくれる人なんだよ」
「へー、彼がこの機体を」
俺の顔を覗きこむようにしてくるが、ここで顔を見られる訳にもいかないので軽くそっぽ向いてごまかす。
「……まぁ伊達君の選んだ人なら間違い無さそうね。そうだ、それなら今からこの機体の事について話しましょうかしら」
「この機体のフレームは全てＮＦ製特注のフレームに換えさせてもらったわよ。それにしても旧フレームを外すのが一苦労だったわ。
まるで装甲と機体が全て一つから出来ているかのように、外す事が簡単にできなかったんだから。
それでやっと外し終えてフレームを付けてみたの。そしたらあら不思議、機体はあっという間にそのフレームを一体になり始めた。
機体の全身に詰まっている肉のような物を検査してみた所、これはＥＲＲＯＲが人工的に作り出した筋肉だって事が分かったの。
ＥＲＲＯＲと一体化した機体、こんなの見た事も聞いた事も無い。
どうしてこんな風になってしまったのかも未だにわからないのよ」
一人で長い説明、ありがとうございました。
俺の勝手な決めつけかもしれないが、学者はよく喋るのではないかと思う。
だからこの女性の話もまだ終わっていなかった。
一本の煙草を吸い終え、携帯灰皿を使って煙草を潰し終えるとまたポケットから煙草を取り出し火をつけて吸い始めた。
「謎はまだあるわよ、この機体は光学電子磁鉱石を使用していた、
そして骨組みを見てみるとこの機体がＢＮ製だという事がわかったの。
これが一番わからない事、ねぇ伊達君。

どうしてそんな機体がＮＦの基地防衛を手助けしてＥＲＲＯＲを倒し、この機体がこの場にあるのか。
この機体に乗っていた人は一体何処に行ってしまったのかしらね。
通信記録から見るとレンちゃんがそのパイロットとの会話を確認してるんだけど、
未だにそのパイロットが見つからないのよねぇ……」
その未だに見つからないパイロットは貴方の目の前にいますよ。
たしかにこの女性が思うように幾つもの謎、疑問があるだろう。
俺だってそうだ、俺はＢＮの基地で戦っていた時、どうしてあんな台詞を言ったのか。
魔法も使えない俺ならあっという間に取り込まれていたはず、しかし俺は生きている。これは偶然なのだろうか。
「謎がある方が俺は面白いと思うよ、だからそれは謎のままでいいんじゃないかな」
「たしかに謎があった方が面白いけど、その謎が何なのかを調べるのが学者なのよ？」
「あ、それもそうだね」
また二人で会話が盛り上がっている、あんなに笑い楽しく喋っている伊達中尉を見るのは初めてかもしれない。
二人とも本当に仲が良さそうだが、伊達中尉にはもう一人仲の良い女性がいたはずでは……名前はたしか赤毛。
「赤城！？」
あ、そう、その名前だ。
伊達中尉が驚いた様子で名前を言うと、赤城が俺達の前に歩み寄ってきた。
「あら、赤ちゃん。体の方は大丈夫なの？」
「平気だ、それと私は赤城だ」
いつもの台詞を言うと、赤城はふと俺の方に顔を向けてきた。
緊張で鼓動が早くなるのがわかる、もしここで正体を見破られては色々と面倒な事になってしまう。

「丁度良いわ、赤城。貴方にもプレゼントを持ってきてあげたのよ。こっちに来てくれるかしら」
神楽はそう言って俺の機体の前から離れていく、その後についていく伊達中尉。赤城も自然に歩き出し神楽の後を追う。
俺は少し距離は置きながら三人の後をついていくことにした。
今度は赤色のリバインの前に立ち止まる三人。そのリバインを良く見ると背中に見慣れない武装がされていた。
「貴方専用の武器を用意したわよ、その名もＬＲＢ（Ｌｏｎｇ　Ｒａｎｇｅ　Ｂｌａｄｅ）
ＬＲＳに比べて大きく、切断力を更に増して破壊力を上げたわ。
両手で装備するから剣を背中に戻さないと盾や銃を手に持つ事ができなくなってるけど。
どう？気に入ってもらえたかしら」
自慢げに煙草を吸ってみせる女性、その後ろに立っている赤城はじっとその機体を見つめ続けている。
「感謝するぞ神楽、これで私も武蔵に負けないぐらい戦える」
「貴方が伊達君を超えられるとは思わないけど、せいぜい頑張りなさい」
皮肉を言ったようにも聞こえるが、赤城にとっては励ましてくれる言葉に聞こえていた。
と、その時。見慣れた格好をした二人の女性と、仮面を被っている男が伊達中尉に近づいていく。
「は、初めまして伊達大佐！お、俺！違った！私は葵と言います！貴方の部隊と一緒に行動できて俺は本当に感激です！」
一人慌てふためきながら自己紹介をした女性。俺はよく知っている、ＳＶの人間、葵だ。
なんでＳＶの人間がＮＦと一緒にいるんだ、二つの組織は敵対していないのか？
「初めまして、エコと言います。本日だけ伊達大佐の指揮下に入ることになりました……よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げて自己紹介を済ました少女、エコ。
「先程お会いしましたね、俺の名前は愁と言います。大佐のような方の指揮下に入れて光栄に思っています」
か、仮面の男!?っつうことはコイツは以前俺と戦った『鬼』のパイロットか!?
「うん、こちらこそよろしくね。でも俺の階級は中尉。それにこの部隊の隊長は赤城だよ？」
「いえ、それがフィリオ様の特権で貴方の階級を大佐に戻し、この部隊の隊長に任命しました」
そんな事簡単に決めれるものなのだろうか、赤城や伊達中尉もそれを聞いて驚いた様子を見せていた。
「赤城を隊長から下ろすなんて、フィリオさんに会ってもう一度話しをさせてください」
伊達中尉は少し怒っているようにも見える、自分の事よりも他人優先の人だ。
自分が隊長に任命された事より赤城が隊長ではなくなった事の方が彼にとっては納得いかないんだろう。
すると、赤城が冷静な表情で口を開いた。
「ちょっとまて武蔵、私はお前が隊長の方が良いと思っている」
その赤城の言葉に便乗し神楽も口を開くと言葉を続けた。
「私も賛成ね、この戦。伊達君の力が少しでも欲しい時よ。貴方が隊長になり指揮をしてくれれば軍全体の指揮が上がるわよ。何たって伊達君は真の英雄だもんね」

――「……赤城、本当に俺でいいのかい？」
最後に一言、本当に自分が隊長になってもいいのか赤城に聞いてみた。
「ああ、私はお前を……いや、伊達大佐を信じているからな」
5ヶ月前のあの時、あの時までは伊達は大佐、部隊の隊長で活躍していた。

その下で戦う騎佐久、赤城、神楽。ＮＦ最強の歴史を刻んできた４人。
そしてまた伊達の下で働けると思うと嬉しさの方が大きかった。

――「わかった、俺が隊長を引き受けるよ」
その言葉に周りにいる葵達が笑みを見せた。
「君達も、共に頑張ろうね」
伊達大佐はそう言って三人に握手の手を伸ばす。
するとそれを待っていたかのように葵が伊達大佐の手を握り締めた。
「は、はい！頑張ります！よろしくお願いします！」
俺が前に見た葵は何処に行ったのだろうか、もっとガサツで男っぽい性格だったのに、伊達大佐の前になるととても女性らしく振舞っている。
「伊達君、貴方の機体について少し説明しておきたい所があるの、一緒についてきてくれるかしら」
神楽は伊達大佐の腕を掴むと、半ば強引に引っ張り、格納庫の隅の方に歩いていった。
あれ多分怒ってるんだろうなぁ。
「三人とも、他の部隊の隊員を紹介しようと思う。ついてきてくれ」
神楽とは別の方向に向かって歩いていく赤城、その後ろにＳＶの三人は付いていく。
どうやらＮＦとＳＶが手を組んだらしいな。俺にとってはそんなにうれしい情報ではない。
でも仕方が無い、伊達大佐と約束をしたんだ。ＥＤＰに参加すると、それは男として破るわけにはいかない。
ん…あれ、気づけば回りには誰もいない……。
俺はここで何をしてたんだっけ、たしか伊達大佐に呼ばれて来たはいいけど色々と人が増えて……。
帰ろう、自分の部屋。作戦までにはまだ時間があるみたいだ、帰って飯食ってまた見ていないデータを見るかな。

被っている帽子を更に深く被ると、俺は堂々と自分の部屋に帰っていった。

――格納庫の一番隅に置かれている機体『大和』

目には見えない圧倒的な存在感、威圧感を放っているその機体の前に武蔵と神楽は立っていた。

「伊達君、榴弾と鉄鋼弾と後もう一つ特別な弾を用意したわよ。ＬＲＣ（Ｌｏｎｇ　Ｒａｎｇｅ　Ｃａｎｏｎ）、射線上の敵を一掃したい時はこれを使うといいわね」

「ありがとう、何から何まで準備してもらって……何か悪いね」

「いいのよ、伊達君に満足してもらえるなら何だってしちゃうんだから」

神楽は笑顔で話しているが、武蔵の顔は何か考え事をしているのか、暗く俯いていた。

「……どうしたの？」

「いや、ちょっと考え事をしてただけさ……」

「ＥＤＰが心配なの？大丈夫よ、伊達君と私の開発した機体があれば作戦は絶対に成功する。それに私は伊達君を信じてる、だから伊達君も私が開発した大和を信じて」

「ありがとう神楽、俺は信じるよ。そしてこの戦い、勝たなければ人類に未来は無い……だから絶対に勝利を掴んでみせるよ」

――午後１時、各機体は戦艦に詰め込む準備が進められていた。兵士達も各艦に乗り込み、いつでも出発できる状態だ。一人の男を除いて。

「出発時間が１時１０分とか聞いてねーっつうの！」

さっき伊達大佐から電話が来た。

『あと１０分で出発するよ』

「はい？」

『ごめん、言うの忘れてた』

忘れた……じゃねえだろ！言うの遅いっつうの！
現在部屋からもうダッシュで格納庫へと走っている、間に合えばいいんだが。
俺がＥＤＰに行っている間、ミシェルは俺の部屋で待機する事に。
当然だな。
いちお部屋の鍵は閉めてきたが、また一人ぼっちにさせてしまうと思うと少し胸が痛む。
と言っても、この戦いが終わればまたここに帰ってこれる、さっさと終わらしに行こうじゃないか。
格納庫に向かうと、既に一つの戦艦が今まさに発進しようとしている、俺はそのまま全力で走り急いで入り口に向かって飛び込む。
それと同時に入り口の扉は閉まり、戦艦は動き出した。
「これで置いていかれたらシャレにならねえよ……ん？」
無い、さっきまで被っていた軍帽が何処にも無い。
この戦艦に飛び乗った拍子に帽子が抜けちまったらしい、これは非常にマズイ。
もし俺の顔が他の兵士に見られてしまったら……ああ、またややこしくてめんどくさい事が起きるに違いない。
そうだ、電話だ。伊達中尉に電話して来てもらえればいいんだ。
ポケットの中にある携帯電話を手に取ると、急いで伊達中尉に電話を試みた。
『お掛けになった電話番号は――』
繋がらない、となるとやはり自力でこの場を切り抜けるしかない。
この戦艦の格納庫へと向かい、機体に乗り込めば何とかなりそうだ、そうと決まれば格納庫に行くまでだ。
俺は意を決して足を出した、格納庫に向かう為に。
その時、まるで俺が出て行くのを見計らっていたかのようなタイミングで他の兵士が歩いてきやがった。
だがここで引き下がる訳にはいかない、俺は壁に顔を向けながら走り、何とかその場をやり過ごす。

突っ走る俺の姿を見て兵士達は首をかしげているだろうが今はそんなの気にはしない。
俺の場所からすると通路をずっと右に進んでいけば格納庫に着くだろう大体場所はわかる、戦艦に乗ったのは2度目だしな。
……とは言ってもこの戦艦に乗るのは始めてだ。本当にこっちで合ってんのかな。
「あれっ……？」
何で俺、倒れてるんだ？
頭の中に一瞬走った激痛、意識や記憶まですっ飛んでしまうかのような痛みだった。
余り力の入らない足で俺は壁にもたれ掛かりながら何とか立ち上がってみる、何で汗を掻いているんだ俺は……。
この感じ、何かが込み上げて来る感じ、吐き気ではない。
だがこの感覚、前にもあったようなっ、まぁ今はどこかで休む必要があるな……頭がくらくらする。
ふと前方を見るとＷＣのマークが見える、仕方が無いので今はここで休むしかない。
俺は壁にもたれ掛かりながら一歩ずつ大量の汗を掻きながら歩く。
別に漏らしそうなのを我慢しているのではないが
ようやくトイレに入る事が出来た。すぐさま顔を水で洗うと俺は個室に入り便器に座り込んだ。
また頭に痛みが走ってきやがる、それに段々と意識も薄くなっていく……こんな所で寝たくは無い。
が、今は寝た方が良さそうだ、寝れば少しは楽になるかもしれない。
決して心地よい眠りではないが俺はそっと目蓋を閉じた。
……臭い。

――それからどれくらい寝ただろう、ふと気がつくと一人のおっさんの声が聞こえてきていた。
『ついにＥＲＲＯＲとの決着を付ける時が来た、この戦いで人類の

存亡が決まるだろう！』
何トイレで熱弁してんだこのおっさん。と思ったが、どうやらその声は遠くから聞こえてくる。
声が遠くの方から聞こえてくる、演説でもしているのだろうのか。
頭の痛みもサッパリ無くなり、快調である。こんな所で寝たら更に体調を崩してしまうと思ったが、その心配は無かった。
とりあえず格納庫に行かなくては、だがまず俺はその声のする方に向かってみる事にした。
何台もの機体が並んでいる、何人もの兵士が整列して並んでいる。
そしてその何百人という兵士の前に、数人の兵士が立っていた。
「『ＥＤＰ』を遂行するのは難しい、困難な事かもしれない。多くの犠牲が出るだろう。だが、敗北は絶対に許されない。
奴等『ＥＲＲＯＲ』は我々から土地を！家族を！自由を！全てを奪ってきた！
この世界、この星、我等人類の為に。今こそＮＦの力を終結させＥＲＲＯＲとの忌わしき戦いに終焉をもたらす。
そして武器の無い平和な世界を、理想の世界を作り上げるぞ！我々の手で！」
数千人の兵士が一斉に敬礼をする、その足音、手の向き、全員が余りにも揃っていた。
さすが軍人と言ったもんだな、まぁいい。後はこの場で誰にも見つからずに機体に乗り込めればいいんだが。
「あーあー、マイクテスト」
さっき演説していたおっさんの声とは違う声、伊達大佐の声だ。
俺はまた身を潜め、今度は伊達大佐の演説でも聞いてみる事にした。
それにしても……空気が重い。
この張り詰めた空気、緊張というのだろうか。ここにいると息苦しさを感じる。
格納庫にいる全兵士が伊達大佐に視線を向けており、伊達大佐の顔からいつもの笑顔は消えていた。

「俺から言う事は少ししかないです、ここに居る全ての兵士に言います」
「生きろ。自分の命を無駄にするな、絶対に諦めるな。……俺が言えるのはこれぐらいです」
マイクの電源を切ろうとした時、格納庫内にアナウンスが響き渡った。
『戦艦に近づいてくる熱源反応確認！艦内の兵士達は直ちに戦闘準備を！！』
「全軍に命令する、パイロットは直ちにパイロットスーツを装着、機体に乗り込み出撃体勢に入れ！』
伊達大佐の声に、格納庫にいた兵士達は一斉に散らばり始めた。
次々に機体に乗り込む兵士達、俺はその場に紛れこみ自分の置いてある機体に近づいていく。
操縦席から伸びるワイヤーに掴まると、自動的に引き上げを開始、難なく機体に乗り込む事に成功。
機体の中身は余り変わっていない、変わったのは外見だけなのだろうか、まぁ今はそんなのどうでもいい。
何故だか俺はとてもウキウキしている、まるでこれからお祭りが始まるかのような感じだ。
それにしても光栄だな、歴史に残る大戦に参加する事が出来るのだからな、暴れさしてもらうよ、最強の力をもつこの俺がな。

――――「伊達大佐、こんな所に呼び出して私に話とは一体何でしょうか」
格納庫の隣にある小部屋に赤城を呼び出した武蔵、赤城は既にパイロットスーツに着替えており、自慢の赤髪を紐で縛っていた。
「赤城、大佐なんて言わなくていい。いつものように呼んでくれないか？」
武蔵もパイロットスーツに着替え終わり、いつでも機体に乗れる格好だ。

「いいのか？」
「俺だって自分が中尉の頃赤城って言ってたよね、だから赤城も普通にしていてくれないかな」
「わかった、それで武蔵。私に話とは何だ？」
さっきまで敬語で話していたが、突然タメ口となり軽々しくなる。
その切り替えの早さに武蔵も少し驚いていた。
「話って言っても、赤城に言っておきたかったんだ」
「言っておきたい事？」
「うん……赤城。もし俺が死ぬ時がきたら、その時は――」

――全ての準備は整った。
数十もの戦艦のハッチが開き、次々にギフツやリバインが発進していく。
そして徐々に見てきた赤波、数百以上ものＥＲＲＯＲが大群で、波のように押し寄せてきていた。
だがその時だった、上空から落ちる一発の砲弾。
戦艦が通る道を開けるかのようにＥＲＲＯＲの大群を吹き飛ばす。
一発だけではない、何十発、何百発もの砲弾が雨のように降り注ぎ、ＥＲＲＯＲをゴミのように吹き飛ばしていった。
上空に見える一つの母艦。
ＮＦ最強の航空母艦『アルカンティス』まるで一つの要塞が浮かんでいるかのような形をしているのが特徴的だ。
地上の戦艦は最大出力で、一気に穴の開いたＥＲＲＯＲの波を突破していく。
空からの攻撃では何も太刀打ちする事が出来ないＥＲＲＯＲは地上の艦に張り付こうとするが、その速さと弾幕で次々に吹き飛ばされていく。

――伊達武蔵率いる第五独立機動部隊のメンバーは『ＧＡＴＥ』到着後『ＧＡＴＥ』の中心にあるコード入力装置を機動させ、

ＰＷコードを１０分の間に入力しなければならない。コードを入力するのは伊達武蔵、彼にかかっている。
ちなみに何故１０分以内なのかは、敵の侵入を防ぐ為のセキュリティ機能が起動しているからである。
地下から『ＥＲＲＯＲ』が現れる為、戦艦や部隊メンバーは全員『ＧＡＴＥ』の上で戦い、
『ＧＡＴＥ』を開く事成功した場合、全火力をもって戦艦の通れる道を作り脱出を行なう。
全機体に武蔵の声が流れる、愁、葵、エコ。そして赤城、由梨音、レン、甲斐斗……それぞれの思いを胸に武蔵の命令を聞いていた。
『ノイド、アステル、ルフィス。俺たちは掛け替えの無い友を……仲間を失った』
『今まで無念にも命を落としてきた戦友の為にも、俺たちはここで決着を付けるしかない』
モニターに映る一つの光景、そこには銀色に輝く巨大な門が広がっていた。
その光景を見ると、通信回線を部隊から全体に切り替える。
『どうやらＧＡＴＥに到着したみたいだ、艦内で待機している全部隊に告ぐ、俺達の守るものの為に』
『ＥＤＰを……開始せよッ！』

――ついにこの時が来た。
戦艦のハッチが開くと、待機していた数十機もの機体が次々に発進する。
航空母艦『アルカンティス』から次々に投下される機体、そして出撃していく戦闘機。
武蔵達の部隊も次々に出撃していく中、甲斐斗が乗っている機体だけ何の動きも見せない。
軍人がこんなにも命を張り、戦っている。それは当然の事なのだろうが、俺にはその意味が初めてわかった気がする。

元々俺は軍が嫌いだった、だが伊達武蔵と会って何かが変わった、
やっぱりすごいよこの男。
だからと言って軍が好きになったわけではないが、この青空の下、
能天気に暮らしている人間がどれだけいるのだろうか。
本当ならここにいる軍人も、平和な暮らしが出来ていたはずなのに
ねぇ。
さて、考えるのは止めにしよう。俺は約束通りＥＤＰに参加するま
でだ。

第３５話　ＥＤＰ、始動（後書き）

正式名ＭＦＥ－アストロス・ライダー　（Ｓａｖｉｏｒｓ製）
全長－１８ｍ　機体色－青緑　動力源－光学電子磁鉱石
獣の姿をモチーフに作られており、両手の甲には長い鉤爪が付けられており
オーガと似て接近戦闘用タイプの機体に仕上がっている。
Ｐｅｒｓｏｎ態等の小さなＥＲＲＯＲとの戦闘用の為に両腰には小型のキャノン砲がついている。
コクピットは広く二人専用の機体に仕上がっている、元々一人用だったが改良を加え
二人で操縦するように作られた、その為敏捷力、反応速度はオーガを超えている。

第３６話　名も無き、覚悟

――――「始まりましたね、ＥＤＰ」
ＳＶの創始者、フィリオが椅子に座りながらＥＤＰの様子をモニターで見ており、その横ではラティスがカップに紅茶を注いでいた。
そして注ぎ終えたカップを受け皿の上に置き、それをそっと机の上に置く。
「ありがとうございます。ラティス、この戦いでＥＲＲＯＲとの戦争が終わればいいですね……」
「お言葉ですがお嬢様、戦争はそう簡単には終わりません。奴等は降伏をしない、人間よりしぶとく、厄介な生き物です、戦いが長期化すれば我等の敗北は免れません」
「そうですね、ラティスの言うとおりです。ですが、ここでＥＲＲＯＲと決着を付けなければ、人類に未来はありません」
フィリオは俯いたまま寂しげな表情でモニターを見つめている。
そんな彼女にラティスは一つ質問をしてみた。
「お嬢様、一つ質問してもよろしいでしょうか」
「はい、何ですか？」
「何故『神』を復活させる前に、我々人類だけで『ＥＤＰ』を遂行したんですか。
『神』がいればＥＲＲＯＲなど簡単に片付ける事ができるはずです」
「あの子がいなければ『神』を復活させる事は不可能に近い、それに彼女無しで儀式を行うにはリスクが大きすぎます、なので今回は、我々人類の力のみでＥＲＲＯＲと立ち向かわなければなりません」
「……わかりました、では私もＥＲＲＯＲと立ち向かう為に出撃して来ます」
そう言ってラティスは敬礼を済ませ、すぐさま部屋を出て行ってしまう。

静かな部屋でたった一人モニターを見続けるフィリオ、その顔は寂しい表情を浮かべていた。

――――さて、ＥＤＰの始まりだな。

早く出撃したいもんだ、伊達大佐は神楽という人に俺がパイロットと言っていたが。

実際この機体を投入してもいいのかまだ許可はもらっていない。という事は無人の機体扱いになっている。

そんな機体がここで出撃してしまうと部隊が混乱するかもしれないって訳だ。

俺が出撃するタイミング、それはＥＲＲＯＲとの戦闘が開始されて混戦になった時だ。

その場面に俺が登場、そして俺が味方だという事をアピールすればいい。実に簡単な事だ。

『高橋由梨音！部隊のオペレートをさせていただきます！』

元気ハツラツの声が聞こえてくる、一応通信回線と映像は繋いである為戦闘の状況や会話が聞ける。

つか、こいつがレンが前に言ってた高橋由梨音って奴か。

ふと彼女が乗っている機体を見てみると、それは元々ルフィスが乗っていた機体だった。

ルフィスが死んだからあの子の機体になったのか、まぁ頑張ってくれ。

『伊達中尉。頬を気にしてるようですけど、どうかしたんですか？』

そう言われてみれば伊達大佐がさっきから自分の右頬を摩っている。

『ちょっとね……』

伊達大佐は苦笑いでその場を過ごそうとしていたが、今度はモニターに赤城の姿が映し出された。

『私が殴った所がそんなに痛むのか？』

『えっ！赤城少佐が殴ったんですか！？』

『ああ、武蔵が弱気になっていたからな、私が気合を注入してやっ

た』

『それと武蔵、もう2度と私の前であのような話をするな。お前は……私が守る』

そう言うと伊達大佐との通信を切る赤城、大佐は小さな溜め息をついている。

『ありがとう赤城。さて、雑談はこれでおしまい。全員気を引き締めて行け』

『了解！』

その時、何かが吹っ切れたかのように伊達大佐の顔つきが変わった気がした。

――『ＧＡＴＥ』周辺にいるＰｅｒｓｏｎ態を次々に潰し、Ｂｅａｓｔ態やＷｏｒｍ態を殺していく赤鬼。

その速さに周りにいるＮＦの兵士が呆然とする程だ、そして赤鬼と同じく一機の機体が力を振るっていた。

赤鬼に負けない程素早く、軽々と軽快なジャンプをするその機体には。二人のパイロットが乗っている。

『やっぱり馴染みの機体だと力入るぜ！なあエコ！』

『そうね、アストロス・ライダーの力と…私達の力があれば……』

『敵無しッ！』

両手の甲に付けられている長い鉤爪は飛びかかるＢｅａｓｔ態を切り裂いていくと、腰の左右に着いてあるキャノン砲を巧みに使い近づくＰｅｒｓｏｎ態をなぎ払っていく。

『す、すごい。あれがＳＶの力、我等ＮＦも負けてはいられない！』

『ＧＡＴＥ』までの道のりにいる数百は軽く超える程のＢｅａｓｔ態、Ｐｅｒｓｏｎ態。

兵士達は『ＧＡＴＥ』までの道のりを作るために邪魔になるＥＲＲＯＲを次々に撃ち抜いて行く。

そこに一発の砲弾と、無数に飛びまわるフェアリーの姿が見えてきた。

『伊達隊長！ＧＡＴＥまでの道は私達で開きます！少しでも弾薬を温存していてください！』
レンの乗る機体『フェリアル』からは次々にフェアリーが放たれ『ＧＡＴＥ』までの道を作り出していた。
モニターに映る巨大な『ＧＡＴＥ』、戦艦と共に部隊は一斉に『ＧＡＴＥ』に向かっていく。
そして武蔵の乗る大和が『ＧＡＴＥ』中央に到着、それを囲むように一斉に部隊が展開していき、フォーメーションを取る。
『全機に告ぐ！全力で伊達大佐を護衛しろ！ＥＲＲＯＲを一匹たりとも近づけるなッ！』
『了解ッ！』
赤城の声が全部隊の兵士に届く、円を描くように武蔵の周りには何十機もの機体が並び陣形を組んでいく。
その円の周りにはまた円を描くように部隊が並んでおり、近づくＥＲＲＯＲの波を次々に撃ち抜いて行く。
武蔵はその間に『ＧＡＴＥ』中心部にあるパネルを順番通りに押していく。
『ＧＡＴＥ』を開ける為のコード入力装置は破壊を防ぐ為に『ＧＡＴＥ』内に埋め込まれ、隠れている。
その為まずは安全装置を解除し、入力装置を呼び出す必要があった。

――『こちら第１小隊、前線での戦闘で弾薬の消耗が激しい、補給の為一時後退する』
爆音や発砲音と共に第２小隊の部隊に無線が入ってきた、その無線を聞いた女性隊長が第３小隊に指令を伝える。
『了解しました、第２小隊は前進。第１小隊が戻ってくるまで防衛線を維持し続けて下さい』
次々に第１小隊が後退し、戦艦まで戻っていく。それと同時に後ろで待機していた第２小隊が一斉に前に出た。
『ＧＡＴＥ』の一番外周で戦う第１、第３、第５小隊。内周には第

2、第4、第6小隊が待機。
さらに内周には戦艦が待機、さらたに第一から第六の独立部隊が陣形を構えている。
『隊長！レーダーにＷｏｒｍ態の反応有り！前方に２０体います！』
第2小隊のオペレーターはＥＲＲＯＲの数、種類、場所等を正確に次々と伝えていく。
『Ｗｏｒｍ態の処理は艦に任せます、各部隊はＰｅｒｓｏｎ態、Ｂｅａｓｔ態の処理に専念してください』
『ＧＡＴＥ』に這い上がってくるＰｅｒｓｏｎ態、いくら殺してもまるで生き返っているかのように減らず、少しずつ近づいてきていた。
『その調子だ！Ｗｏｒｍ態は艦に任して俺達はこの汚い化け物を蹴散らすぞ！』
数機のギフツが横に並び、波のように押し寄せてくるＰｅｒｓｏｎ態を蹴散らす。
ニタニタと笑いながら近づいてくるその動きは誰もが気味悪く思いながら、兵士はＥＲＲＯＲ目掛けて引き金を引いていた。
『うじゃうじゃ沸いてきやがって！この化物がぁっ！』
一機のギフツが手首からナイフを出すと、周辺にいるＰｅｒｓｏｎ態を次々に斬り捨てていく。
『お前等のせいで俺達の世界はめちゃくちゃなんだよ！』
手足が吹き飛び、それでも『ＧＡＴＥ』に近づこうとするＰｅｒｓｏｎ態を見つけた兵士は、銃ではなくナイフで止めを刺す。
それでもＰｅｒｓｏｎ態は笑っている、全く『死』を恐れず、例え自分が死ぬと分かっていても。
『おい！前に出すぎだ。ＧＡＴＥにさっさと戻って来い』
『ったく、わかってるよ。今から戻る』
Ｐｅｒｓｏｎ態の頭部に突き刺さっているナイフを引き抜くと、ブーストで一気にＧＡＴＥの上に戻り、部隊と合流を済ませる。
『奴等は地中からも来るんだ、戦うならなるべくＧＡＴＥの上で戦

え』

『りょーかい、以後気をつけます』

そう言うと兵士が乗っているギフツはナイフを戻し、背中に着けらている銃を手に取った時、躊躇い無く突然引き金は引かれた。

『えっ』

あっという間に回りにいたギフツに穴が開いていき、爆破していく。

機体に乗っている兵士は何も触っていない、だが自分の乗っている機体は次々に仲間を殺していく。

『おい！何をしている！？今すぐ攻撃を止めろ！！』

『と、止めたくても勝手に機体が動くんだよ！』

兵士は無我夢中にレバーを押し、何度もスイッチを押すが、機体は全く操作を受け付けない。

操縦席の赤いランプが点等し始める……そして画面に、あの文字が映し出された。

『―ＥＲＲＯＲ―』

『―ＥＲＲＯＲ―』

『―ＥＲＲＯＲ―』

ギフツは両腰に着いている手榴弾を掴むと、一気にＧＡＴＥ内周部にいる戦艦に特攻していく。

そこにはまだ補給を行なっている第２小隊の姿があった。

『だ、誰か！俺を止めてくれっ！ああ！あああぁぁあぁぁあああッ！！』

ギフツは止まる事無く第１小隊が補給を行なっている艦へと入っていった。

閃光が煌いた後、格納庫から凄まじい爆発が起こる。

爆発は連鎖していき、補給をしていた機体、待機していた兵士、艦に乗る全ての兵士が一瞬にして命を落とした。

誰もが聞いてわかる艦の巨大な爆発音、黒く大きな爆煙はその場にいた兵士達に絶望を与える。

『そ、そんな。俺達の艦が……う、うわっ！うわぁあああああ

あッ！！』
次々に歩み寄ってくるＰｅｒｓｏｎ態、その後ろからＢｅａｓｔ態、Ｗｏｒｍ態と、次々に押し寄せてきていた。
外周は手薄になり、次々にＧＡＴＥ上にＥＲＲＯＲが這い上がってくる、応戦しようと生き残った兵士が立ち向かうが。
その圧倒的な数に何もする事が出来ず、ただただ殺されていくしかなかった。
第２小隊のオペレーターがすぐさま小隊長と通信を試みる。
『た、隊長！第１小隊が全滅！第２小隊は１２機しか残っていません！！』
『そんな、一瞬で艦と第２小隊を失うなんて……！各機、増援がくるまで何としてもここを守りぬいて！』
『む、無理ですよ隊長！私達だけでは……うぐっ！』
オペレーターの乗る機体に次々にＰｅｒｓｏｎ態が張り付いていき、機体の身動きが取れなくなる。
そして一匹のＰｅｒｓｏｎ態が背部の装甲を噛み砕き、動力源を強力な酸で溶かしていく。
『機体が動かない！？』
モニターにはニタニタと笑みを浮かべこちらを見つめてくるＰｅｒｓｏｎ態がいた。
たった一枚の装甲の前に奴等が腹を空かして待っている。
『い、嫌ッ！た、助けて！』
『その子から離れなさい！この化け物ッ！』
リバインがギフツに張り付いているＰｅｒｓｏｎ態を次々にライフルで撃ち抜いていく。
そしてギフツの前に移動すると、ぞわぞわと近寄ってくるＰｅｒｓｏｎ態を必死にライフルで撃ち殺していった。
『今のうちに脱出しなさい！私が時間を稼ぎます！』
『む、無理ですよ！周りには沢山のＥＲＲＯＲがいます！機体から出たら喰い殺される！私死にたくない……喰い殺されたくない！』

機体が動かず、完全に混乱しているオペレーター。
そんな彼女をＥＲＲＯＲから必死に守ろうとしている小隊長、だが長くは守る事が出来ない。ライフルの弾があとわずかしか残っていなかったのだ。
『それなら胸部のハッチを開けて！私の機体に来なさい！』
リバインはライフルを背中に戻すと後ろに振り向き、胸部のハッチを開ける。
『さあ早く！貴方もハッチを開けて！！』
怯える様子の少女はすぐさま胸部のハッチを開けるスイッチを押すと、小隊長の乗る機体に移ろうとする。
機体の手で橋を作り、その上を渡らせようとした。
小隊長は腕を伸ばし、少女と手と手が触れようとした時、少女の姿が一瞬にして目の前から消え去る。
『嫌ぁあああああッ！！』
聞こえてくる少女の叫び声、その悲鳴に隊長は急いで胸部のハッチを閉じると、モニターで少女を探し始める。
すると、一匹のＰｅｒｓｏｎ態が右手にあの少女を掴んでいるのが見えた。
が、Ｐｅｒｓｏｎ態は何故かすぐには少女を殺さず『ＧＡＴＥ』の上で手を放す。
まるでその光景を見せびらかすかのように、Ｐｅｒｓｏｎ態は小隊長の乗るリバインに近づこうとしなかった。
モニターには必死に助けを求める少女の姿が映し出されている。すると、一匹のＰｅｒｓｏｎ態が少女に近寄っていく。
涙をボロボロと零しながら少女は立ち上がり、リバインまで必死に走って逃げようとしたがＰｅｒｓｏｎ態の口から伸びる強力な酸の舌で一瞬にして両足が融かされる。
『ぎぃあああああああああッ！！』
その場で苦しみ、のたうち回る少女。
女性とは思えない程の断末魔に、それを見ていた小隊長は愕然とし

ている。
それでも少女の周りにいるＰｅｒｓｏｎ態はニタニタと笑っていた。
まるで人間の苦しむ表情や人間が死んでいく事を快楽にしているかのように。
融けた両足からは大量の血があふれ出し、やがて少女は動かなくなる。
ただ足の無い体がぴくぴくと痙攣するだけ、そうなるとＰｅｒｓｏｎ態はその体すぐさま喰い千切り食べてしまう。
『遊んでいるの？人を苦しめたり、殺す事が……そんなに楽しいって言うの！？貴方達はっ！？』
リバインは背部についてあるグレネードランチャーを手に取ると、少女を喰い千切り殺したＥＲＲＯＲに向けて引き金を引く。
Ｐｅｒｓｏｎ態の体はバラバラに砕け散る、それでも奴等は笑っていた。
全く気が晴れない、奴等は苦しむ事無く笑いながら死んでいくのだから。
周りにはＥＲＲＯＲの死骸と機体の残骸が散らばっている、第２小隊の隊長はただ一人この場を守ろうとしていた。
既に残りの第２小隊の兵士の反応も消えている、明らかに、確実に、ＥＲＲＯＲは『ＧＡＴＥ』中心部に進行していく。
先頭に立って進んできているＰｅｒｓｏｎ態、Ｂｅａｓｔ態をグレネードで次々に吹き飛ばしていくが、ついに弾切れになり銃を投げ捨てる。
そして盾とＬＲＳを構えると、リバインの目が強い煌いた。
『ここから先を行きたいのなら、私を倒してからにしなさい。そして教えてあげる、人間の強さを……ＮＦの誇りをッ！！』
隊長はそう言うとＥＲＲＯＲが集まっている場所に一人特攻していく。
Ｐｅｒｓｏｎ態を踏み潰し、襲い掛かるＢｅａｓｔ態を盾で弾きながら隙を狙いＬＲＳで斬り殺していった。

が、ＥＲＲＯＲの数が減る事は無かった。
まるで殺した分だけ増えているかのように、既にリバインの周りを何十匹ものＥＲＲＯＲが囲んでいた。
例えそれでも隊長に心の迷いは無い、ただ目の前にいる敵を次々に殺していくのみ。
『ＥＤＰが成功すれば私達人類の勝ちよ、貴方達には絶対に邪魔させない！』
近づいてくるＰｅｒｓｏｎ態を切り払おうとしたその時、背後からＢｅａｓｔ態に飛びかかられ、すぐさま機体を倒されてしまう。
何とか立ち上がろうとするが、周りを囲んでいたＰｅｒｓｏｎ態が次々に機体に張り付いていき、装甲を融かし、噛み砕いていく。
成すすべも無く機体を解体されていくが、隊長は怯える事無く、何かを決心するかのように目蓋を閉じていた。
モニターが赤く点滅し警報音が鳴り響く中、操縦桿の中心にあるガラスのケースにそっと拳を乗せた。
ケースの中には赤いスイッチが着けられてあり、そこには大きく『ＬＩＭＤ』と書かれている。
その時、胸部の装甲に巨大な穴が開く。穴を開け、そこからＰｅｒｓｏｎ態がニタニタと笑いながら顔を出していた。
だが……その操縦席にいる隊長も、微かに笑っていた。
目の無いＰｅｒｓｏｎ態と面と向かって顔を合わせている、まるでＥＲＲＯＲを、死を恐れていないかのように。
『私が泣いてるとでも思ってた？残念ね、笑ってました』
拳をゆっくりと振り上げる隊長、そして一言、ＥＲＲＯＲに向かってこう呟いた。
『貴方達を殺せると思うと、嬉しくて……ね』
笑みを浮かべながら、その振り上げていた拳を勢いよく振り下ろした。
――――『赤城少佐！ＧＡＴＥ外周部『Ａ：２』に強い爆発を確認！

こ、この反応、恐らく第2小隊の隊長が『ＬＩＭＤ』を使ったのだと思われます！』

「自爆……そうか……由梨音、被害状況を知らせろ」

『第1小隊と第2小隊が全滅、このままだとＥＲＲＯＲが内部へと一気に押し寄せてきます！』

『わかった、第3から第6小隊は外周のＥＲＲＯＲに専念させる、第1、第2小隊の分は第一から第六の部隊戦力で補うぞ』

『武蔵、そっちの準備はどうだ』

『こっちは順調、あと数分もあれば安全装置を解除できる』

武蔵は操縦桿を触らずにただただ画面に映っているコード入力画面に目を通している。

操作をしなくても既にＳＲＣ機能を使っている為に機体が直接高速でＰＷを打ち込んでいく。

――波のように押し寄せるＥＲＲＯＲ、だがそんなＥＲＲＯＲの前に数十機の機体。そして3機の機体が前に並んでいた。

『さってっと、そろそろ俺達の活躍の出番だな』

機体は良好、葵とエコの乗る機体が準備万全の中、アストロス・オーガに乗る愁はフェリアルに乗るレンと通信をしていた。

『俺達は前線に向かい奴等と交戦してきます、レンさん達は後ろで殺し損ねたＥＲＲＯＲを殺していてください』

『は、はい。わかりました。無理はしないで下さいね』

『この戦場では多少の無理は覚悟の上です。ですが心配はいりませんので、それでは』

言う事だけ言うと通信を切る愁、既にモニターには押し寄せるＥＲＲＯＲの波を映し出していた。

『二人とも、準備はいいですか？』

葵とエコの乗る機体のモニターに愁の姿が映る、心配をするまでもなく、二人はやる気満々だ。

『準備はバリバリＯＫ！奴等の腸引き裂きに行くぞッ！！』

『私も大丈夫、行きましょ……』
『了解、これよりＥＲＲＯＲとの交戦を行ないます！』
弾丸の如く2機の機体が一斉に戦場を駆け抜けて行き、ＥＲＲＯＲの波へと向かっていった中、一人の男の声が全機体に流れた。
『安全装置解除、同時に制限時間表示、これより……『ＧＡＴＥ』解除作業に取り掛かる』

第３６話　名も無き、覚悟（後書き）

レン・スクルス
東部軍事基地第五独立機動部隊の隊員。
部隊の中で一番年齢が低いもののとてもしっかりしており正義感が強い。
また、いつも活き活きしており弱音を吐くことなく物事をこなしていく様子は皆から信頼を寄せている。
ちなみに機体の扱いはこの部隊の中でも3番目に上手い。

第37話　生きる、意味

――空からは戦闘機が爆弾を降り注ぎ、地面から溢れ出てくるＥＲＲＯＲを吹き飛ばしている。
空中要塞アルカンティスも全砲門を開けて『ＧＡＴＥ』の外にいるＥＲＲＯＲを吹き飛ばしていた。
だが『ＧＡＴＥ』上にいるＥＲＲＯＲには手出しが出来ない、地上にいる仲間に弾が当たる可能性があるからだ。
更に第一、第二小隊が壊滅した為に外周のＥＲＲＯＲを相手にしなければならない。
それでも唯一救いなのはＥＲＲＯＲが空にいる敵に対して攻撃手段が無い事だ。
空で戦っている兵士は安全そのものだった、自分達はただ爆弾を投下し続ければいい。
だが地上は違う、この世の地獄のような場所で戦い続けている。
地上にいる兵士の顔には焦りと緊張が見える、無理もない、殺すか喰われるかの戦いだ。
そんな状況の中、地上の兵士に更に追い討ちをかけるかのようにＥＲＲＯＲが増えていく。
『だからどうした！こんな雑魚野郎何匹いたって一緒だ！』
飛びかかるＢｅａｓｔ態をひらりと交わし、すれ違いざまにＢｅａｓｔ態の腸を鉤爪で切り裂くアストロス・ライダー。
その横では迫り来るＷｏｒｍ態の触手を交わし、拳一撃でＷｏｒｍ態を吹き飛ばすアストロス・オーガ。
そして２機を避けながら『ＧＡＴＥ』中心部に向かおうとするＥＲＲＯＲ達を一から六の部隊、そしてフェリアルがフェアリーを操ると一斉射撃を行い一掃していく。
『残り９分、いけそう』
余裕綽々の葵とエコ、全くＥＲＲＯＲを恐れていないのだろうか、

恐怖や焦りが全く感じられない。
『二人とも、油断は禁物です。奴等にとってここは本拠地。絶対に何か動きを見せてきます、注意してください』
『わかってるって、どんな敵が来ようと俺達で蹴散らしてやる』
その時、二人の機体のレーダーに赤く大きな反応が示された。
反応と同時に由梨音の声が各機体に響き渡る。
『ぜ、全方向から数百匹のＷｏｒｍ態を確認！……って、え？』
『どうした由梨音、早く報告をしろ！』
『は、はい！出現したＷｏｒｍ態の大きさがどれも数倍の大きさをしています、今各機に映像を送ります！』
各機のモニターに映し出される映像、そこには大量のＥＲＲＯＲの姿が映っていた。
あれだけ殺してきたというのに、奴等はまだこれだけ残っている、迫って来ている。
それだけじゃない、さっきまで現れてきたＷｏｒｍ態の2倍程の大きさのＷｏｒｍ態が何百匹も進軍してきていた。
『このまま一直線に『ＧＡＴＥ』中心部に向かってきます！早く止めないと！』
だが事態は更に深刻化していく、『ＧＡＴＥ』外周で戦っていた第3、第5部隊が壊滅状態。
兵士達は圧倒的な数に太刀打ちできず、じりじりと押され始めていた、
既に抵抗を続ける兵士の体力、精神力、そして銃弾の数に限界がきている。
更に続く、由梨音の機体に送られてくるデータは全て目を覆いたくなるような内容ばかりだった。
『さ、三番艦と二番艦がＥＲＲＯＲに取り付かれた模様！今各機に映像を……』
『止めろッ！！』
その男の声に由梨音の指が止まる。

モニターには一人、伊達武蔵の姿が映っていた。
『兵士達の戦意喪失に繋がる、今俺達のする事はＥＤＰを成功させる事、どんな危機的状況だろうと戦い続けるんだ！』
既に艦は沈んでいた、艦内にいる兵士は次々にＰｅｓｏｎ態を喰われていき、戦艦が煙を上げ始めていた。
『ＧＡＴＥ』解除装置、安全装置を解除した為『ＧＡＴＥ』内部からＰＷ入力装置が現れていた。
入力装置に大和はただひたすらＰＷを打ち続ける、周りには赤城の乗るリバイン、そして由梨音の乗るギフツしかいない。
残りの地上戦力は全て『ＧＡＴＥ』内周でＥＲＲＯＲと戦っているが、奴等ＥＲＲＯＲの数が増えるにつれて味方の数が減っていく。
『残りの小隊も壊滅状態、巨大Ｗｏｒｍ態によって次々に破壊されています！』
今残っているＮＦの戦力といえば大和が1機、リバイン8機、ギフツが７０機程度しか残っていない。
ＥＲＲＯＲはその数百倍の数で『ＧＡＴＥ』に攻め込んでいる。
今はまだ戦闘機の爆撃、空母の援護砲撃でＥＲＲＯＲの数を減らして何とか足を止めているが、
全方向からやってくるＥＲＲＯＲに対し対処が遅れ始めていた。
『も、もう無理だ！俺達はこのまま殺されるんだ……喰い殺されるんだ！！』
怯えた声で一人の兵士が前線から一歩下がる、それに釣られて何体ものギフツが一歩ずつ下がり始めていた。
『お、俺は弾が無くなった！一度艦に戻る！』
逃げるように艦に戻っていく兵士達、しかしそんな暇など無い。
今ここで艦に戻れば確実にＥＲＲＯＲに突破される、だが……それよりも兵士達は目の前の現実から逃げたかった。
生きて帰るはずだった、もちろん戦う覚悟も出来ていたはずだった。
『俺はもう嫌だ！死にたくない！！こんな所で……っ！！』
周りをＥＲＲＯＲに囲まれ、次々に機体に張り付いていくＰｅｒｓ

ｏｎ態。
混乱して操縦桿を動かす兵士、もうモニターにはＰｅｒｓｏｎ態の笑みしか映っていなかった。
引き金を引こうとするが既に両腕はＰｅｒｓｏｎ態に喰い千切られ、何もする事が出来ない。
何匹ものＰｅｒｓｏｎ態が機体の装甲は噛み砕き、融かしていく。
『だ、誰か助けてくれぇっ！俺は嫌だぁっ！喰われたくない！！』
もやは何処にも逃げ場は無い、操縦席で絶望と恐怖で暴れまわる兵士。
その時、視界にふと何かが黒い物体が見える、それは弾が一発だけ込められている拳銃だった。
震える手でその銃を掴み取ると銃口を自分のこめかみに当てた。

――――『赤城隊長！全長５０ｍを超える程のＷｏｒｍ態を3体確認！こちらに真っ直ぐ進んできます！』
『でかいな……、私が現地に向かう』
赤城の乗るリバインは発進しようとした時、突然愁の機体から無線が入る。
『Ｗｏｒｍ態は俺に任せてください、隊長は中央に向かうＢｅａｓｔ態の排除をお願いします』
『あの巨大なＷｏｒｍ態を、一人で倒せるのか？』
『心配いりません。ですが、現在残っている戦艦は2艦。これ以上艦を失うと脱出が難しくなります。
なので現在葵さんとレンさん、部隊の人達に艦の護衛をさせています』
『わかった、私は引き続き中心部に向かってくるＥＲＲＯＲを排除する。お前もＷｏｒｍ態を排除した後中心部に戻れ』
『了解』

――――愁との通信が切れる、ちょうどその時、簡易レーダーに数十

匹ものＢｅａｓｔ態の反応が示されていた。
『武蔵、制限時間は後5分だ。解除は出来そうか？』
武蔵と通信を行なう赤城、武蔵は相変わらず冷静に物事をこなしている。
『ああ、後1分もあれば余裕で出来そうだよ。皆に撤退の準、び…を……』
突然武蔵の表情が暗くなり、苦しそうな顔に変わる。
『武蔵？おい、大丈夫か！しっかりしろ！』
明らかに大丈夫では無い、見ただけでそれがわかる意識が朦朧としており、頭が左右に揺らいでいた。
武蔵だけでなく大和の様子もおかしい、さっきまで動いていた指が止まると。機体も停止してしまう。
一切動かなくなった大和の中で武蔵が一人頭を抱えながら唸り、苦しんでいる。
その事に一番驚いていたのは武蔵でもなく、赤城でもなく、神楽だった。
『アルカンティス』に乗り、ＥＤＰの様子を見ていた神楽が驚いた表情でモニターの映像を見ている。
『どうしたの！？伊達君！しっかりして！！』
武蔵と通信を試みる神楽、すると武蔵が一言言葉を漏らす。
『頭の中に、何かが……っ！』
『えっ？そんな……』
急いでＰＣの前に座り神楽、一瞬にして大和にアクセスすると機体のデータをモニターに表示させる。
モニターには真っ赤に染まっている、機体のあらゆる所に『―ＥＲＲＯＲ―』が発生しており、『ＳＲＣ機能』にも障害が生じていた。
『嘘よ、私は大和の整備を完璧にしたはず。それなのに、どうして……』
そこに今度は赤城と通信が繋がる、その顔は焦りの表情を浮かべていた。

『神楽、これは一体どういう事だ、何とかならないのか！』
『私の整備ミス？私がしっかり、ちゃんと大和の整備をしておけば、こんなことには……』
『神楽！聞いているのかっ！？しっかりしろ！』
モニターを一心不乱に見つめていた神楽に一喝する赤城。
ようやく我に返ると、急に眼つきが鋭くなる。
『私に任せなさい、数分で直してやるわよ』
『わかった、出来るだけ急いでくれ。もう時間が無い』
赤城との通信が切れると、神楽はすぐさま作業に取り掛かった。
真っ先に復旧しなければならないもの、それは『ＳＲＣ機能』、これさえ直せば武蔵の頭痛は治まるはず。
相変わらず大和は停止しており、その中では必死に苦しみに耐える武蔵。
『伊達君……ごめん、もう少しの辛抱だから！』

――『Ｗｏｒｍ態確認、予想以上に大きい』
その頃『ＧＡＴＥ』外周に向かった愁、そして愁の前に見えるのは３体のＷｏｒｍ態が一列に並び『ＧＡＴＥ』中心部突進している姿だった。
『止めてみせる！』
愁の乗る機体が１機、巨大なＷｏｒｍ態に突撃していく、
それに気づいた一番前にいるＷｏｒｍ態が口から触手を伸ばし機体を捕らえようとする。
だが機体はそう簡単には捕らえられない、何十本も伸びてくる触手をスピードでかく乱し避けていく。
Ｗｏｒｍ態の目の前にまで移動した機体、拳を振り上げると一気に振り下ろしＷｏｒｍ態の硬い甲羅を殴る。
一瞬Ｗｏｒｍ態の動きが鈍くなるが、Ｗｏｒｍ態の勢いは止まらない。アストロス・オーガの拳を弾くと一気に突き進んでいく。
『甲羅の強度が上がっている！？それなら！』

機体の手首から放出されるＲＥ粒子を拳に散布していく。
そして一度Ｗｏｒｍ態から離れると、出力を全開にし一気に加速していく。
『この拳で砕けない物は無いッ！！』
その機体の速さに、Ｗｏｒｍ態の触手はついていくことができない。
気づけば既にＷｏｒｍ態の目の前に現れていた『鬼』。
拳が甲羅に触れた瞬間、甲羅全体に亀裂が走りわたる。
拳の勢いは衰えない、更に機体は加速していき、５０ｍもあるＷｏｒｍ態を拳一発で押し返した。
大きく転げ回るＷｏｒｍ態、何十本もの足が不気味に動いていたがやがて止まり、動かなくなる。
『残るは２匹！』
次に突進してくるＷｏｒｍ態、このＥＲＲＯＲもまた拳で吹き飛ばそうとした時。
口からではなく、体全体から大量の触手が突然伸びはじめる。
それに気づいた愁は急いで触手を避けようと機体を動かすが、何十本もの触手は次々に機体を狙って伸びていく。
『こんな事も出来るのか、触手数も多いし速い。今までのＷｏｒｍ態とは違う』
触手を避け続け、何とか隙を狙いＷｏｒｍ態を倒そうとするが中々近づく事が出来ない。
圧倒的な速さで触手を回避していきＷｏｒｍ態に向かおうとするが、やはり体から出る触手で近づけない。
『っく、このままだとＷｏｒｍ態が『ＧＡＴＥ』中心部に到達してしまう。どうすれば……』
その時だった、突然背後から何十本もの触手が迫り、一気に機体に巻きついていく。
振りほどこうとするが既に機体には何十本もの触手が巻きついており、何もする事が出来ない。
後ろに振り返ると、さっき殺したはずのＷｏｒｍ態からも体全体か

ら触手が伸び、その触手が機体に巻きついていた。
『まさか死んだフリをしていたとは、予想外だな』
触手が機体を締め付けていく、その力に機体の左腕が引き千切れ、地面に落ちる。
『このままだと俺は死ぬな、仕方無いか』
『って俺は何を言っている、何故死を恐れない？このままだと俺は死ぬんだぞ？』
機体の右腕が引き千切れる音が聞こえた、足元には両腕が無残にも千切れ落ちており、もはや成すすべは無い。
『何故だ、何故俺は恐怖を感じない、どうして死が怖いと思わないんだ？俺は、俺はどうなっているんだ？』

――「知らねえよ、俺にわかる事と言えばお前は死を恐れない自分を恐れているって事ぐらいだぜ」
一筋の閃光が機体を掠めた時、機体に巻きついていた全ての触手が切り落とされる。
そして『鬼』の前に現れる1機の機体、前に見た事のある機体の面影、そしてあの黒剣。
『魔神』だった、『鬼』の目の前に立っていたのはあの『魔神』が立っている。
『貴方は前に戦った……まさか！』
「ああ、甲斐斗だ。それにしても、こんな虫けらに随分負けているようだな」
『どうして貴方がここにいるんですか！？貴方の目的は……』
「今はそんなのどうだっていいんだよ、俺はＥＤＰを遂行するのみ、って事は今は俺とお前は味方だ。手を貸してやる」
そう言うと、『魔神』はＷｏｒｍ態に突進していく。体から触手を伸ばし『魔神』を捕まえようとするが無駄な事だった。
触手は瞬く間に切り落とされ、甲斐斗の乗る機体は易々Ｗｏｒｍ態の前に現れた。

黒剣を振り下ろすと、そのまま一気に頭部から背部まで切り通す。
Ｗｏｒｍ態の体が綺麗に真っ二つになり、動かなくなる。
周りに残っている2匹のＷｏｒｍ態が触手を伸ばすが同じように全て切り落とされ、真っ二つに切り裂かれてしまう。
それが終わると負傷した『鬼』を抱え、『ＧＡＴＥ』上に残っている艦まで戻っていった。
『赤城隊長！艦から突然あの機体が飛び出しました！っと思ったら戻ってきました！』
『あの機体……何故動いている。誰が乗っているんだ！？』
『魔神』は気にせず艦に入り、負傷した機体をその場に置く。
そしてまた艦から出ると、今度は『ＧＡＴＥ』中心部に向かって行った。

――さて、ようやく俺の出番だが、少し登場が遅れてしまったな。
機体に乗って俺は待機していたが、突然またあの頭痛が俺を襲ってきたからな、参ったよ。
何も考える事も出来ず、ただただ頭痛を堪える事しか出来なかった。
「伊達大佐、遅れてすまない。だが俺が来たからにはもう安心だ、俺に全て任せな」
『あ、ああ。君が来てくれればもう安心、だね』
まだ伊達大佐は苦しそうな表情を浮かべていた、額には汗が流れ、顔色も悪い。
一体どうなってるんだ、早く大和の機能を回復させないと機体以前に伊達大佐が死ぬ。
その時、通信から聞き覚えのある女性の声が聞こえてきた。
『伊達君！修理は終わったよ！これで機体は動くはずだから！』
『ありがとう神楽、やってみる』
大和の眼に光が灯る、機体は再起動すると、またさっきと同じようにＰＷコードを入力していく。
『武蔵！制限時間は残り2分を切ったぞ！急げっ！』

飛びかかるＢｅａｓｔ態を次々に斬り捨てていく赤いリバイン。
そしてＰｅｒｓｏｎ態は由梨音の乗るギフツがマシンガンで次々に撃ち抜いて行く。
更に艦付近にいるフェリアルがフェアリーを飛ばし、中心部向かってくるＥＲＲＯＲを一掃していた。
圧倒的に不利な状況、だが勝利は目前。兵士達にも希望が見えてきていた。
『えっ？何、これ……』
彼女の声が聞こえるまでは。
由梨音の凍ったような小さい声が兵士達に聞こえてきた。
『どうした由梨音、また敵の増援か？』
赤城が何事かと思い、すぐさま報告させるように指示する。
『は、はい。一体だけ反応があります、でも、この反応！？』
機体や艦に乗っている兵士全員が揺れを感じる。
地震ではない、巨大な何かが、大地を切り裂き現れようとしていた。
地面に走る亀裂によりその亀裂の中に次々にＥＲＲＯＲが飲み込まれていく。
数百を超えるＥＲＲＯＲでもさえも、それはゴミやチリに等しい程小さく見えた。
地面から突如現れた物、それは一本の大木の様に見えた。
だが緑溢れる木には程遠かった、桃色と赤色の混じった『ソレ』は、何本もの触手が垂れ下っていた。
まるで一匹の生き物かのように、その体は人間に肉の色に近い。
よく見れば血管のような物まで見えている、この世のものとは思えない姿、そして大きさに、その場にいた全兵士が圧倒される。
『何だ……これは……』
一人の兵士が言葉を漏らす、ここにいるほとんどの兵士がそう思っているだろう。
『でかい、でかすぎる……』
全長数百ｍはあるだろう、この巨大な植物……いや、生き物なのか？

その時、その巨大なＥＲＲＯＲから伸びている一本の触手が動き始めた。
触手は振り上げられると、戦艦に狙いを定め、一気に振り下ろす。
『各機触手を撃て！艦を守るんだッ！！』
艦の周りにいたギフツ、リバインが触手目掛け一斉に銃の引き金を引く。
だが巨大な触手にそんな物は通用しない、太く、長い触手は止まる事無く振り下ろされた。
気づいた時には既に遅かった、たった一本の触手が簡単に戦艦を押し潰す。
地面にめり込み、押しつぶされた衝撃で爆破する戦艦、触手がゆっくりと離れると、そこには無残な艦の姿しか残っていない。
『あ、赤城隊長！もう艦が一つしかありません！こ、このままでは！』
『わかっている！あの巨大なＥＲＲＯＲはアルカンティスに任せろ、我々は近づいてくるＥＲＲＯＲの排除に専念するんだッ！』
巨大なＥＲＲＯＲは体から何十、何百もの触手が一斉に伸びる。
戦艦を押しつぶす程の巨大な触手が４本、それより細い触手が数十本、それよりも更に細い触手が数百本見える。
その姿はまるで一本の木、肉の枝が分かれ、血の花が咲いているかのように。
アルカンティスが巨大なＥＲＲＯＲに集中砲火を浴びせるが、ＥＲＲＯＲは怯むことなく次々に戦艦に触手を伸ばしていく。
その触手は空軍の戦闘機が機関銃で撃ち抜き、本体にミサイルを放ちはじめていたが、巨大なＥＲＲＯＲはそんな物には動じない、周りを飛んでいる戦闘機を次々に触手で捕まえていく。
触手は戦闘機を捕まえると人が一人通れる程の管が現れ、戦闘機に乗っていたパイロットを一瞬にして吸い込む。
兵士はそのまま管を伝わり、巨大なＥＲＲＯＲの中心部に飲み込まれていった。

勿論空だけではない、地上にいる兵士達にさえ触手が次々に伸びはじめる。
マシンガン、ＬＲＳを使い何とか凌いでいくが時間の問題だ、こんな物で勝てるはずがない。

――『はあっ！？一体何々だよあれは！こんなの聞いてねえぞ！』
葵が半ギレになりながら近づいてくる無数の触手を次々に鉤爪で斬り捨てていく。
だが葵達の体力、そして機体にも限界が近づいてきていた、二人が見せなかった焦りが薄らと見え始める。
『次にあの触手が来れば、最後の艦が……』
『そんな事言うと本当に来んだよ馬鹿ッ！今の俺達じゃあんなの破壊できねえぞ！！
　おい甲斐斗！お前が何でここにいるのかは後で聞いてやる！そのでかい剣で何とかしろ！！』
どうやら俺の存在はあの鬼を助けた時に気づいていたか、まぁあの剣は俺の身分証明書のようなもんだからな。
だが一つ言っておこう、これ以上事態をややこしくしないでくれ。
今は俺とお前のプライベート通信だが。
もしこの会話が聞かれていれば俺の名前、そして顔について赤城や由梨音から色々と質問をされるに違いない。
これ以上めんどい説明はごめんだ、それより俺達は今すぐこの場から逃げる事を考えた方が良いんじゃないのか？
「そうしたいが、あんな巨大な物が高速で振り下ろされるんだ。
　そう容易に斬る事は出来ねえ……が、やるしかなさそうだし、何とかやってみる」
『よく言った！それでこそ男！期待してるぜッ！！』
そう言うと葵との通信が切れる。
……簡単だった、あんな物切り落とす事ぐらい。俺にとっては容易な事だったんだ。

でも今は違う、魔力も何も無い俺にそれが出来るのだろうか。
もし外せば俺は確実に死ぬ。潰されて死ぬ、そんな死に方絶対に嫌だ。
俺は戦艦の上に立ち上がり、ご自慢の愛剣を構える。
『各機！巨大なＥＲＲＯＲがあの巨大な触手を振り上げ始めています！全力で艦を護衛してください！』
由梨音の声が艦周辺にいる全機体に流れる、もちろん俺の機体にもだ。
「最後の艦はやらせはしねえ……来いッ！」
そう言うとＥＲＲＯＲの触手はタイミング良く戦艦目掛けて振り下ろされた。
迫り来る触手、機体と触手との距離が一瞬にして縮まった時、俺は構えていた剣を振り上げた。
どうやら俺の腕もまだ鈍ってはいないみたいだ。
戦艦の横に落ちる巨大な触手、間一髪で俺はこの触手を切り落とす事に成功した。
「俺に出来ない事は無いって事だな……ふぅ」
その時、俺の視界に映っている切り落とされた触手がわずかに動いていた。
相変わらず気持ちが悪い、だが俺は切り落とす事に成功した、だがまだ奴には3本の巨大な触手が残っている。
『―ＥＲＲＯＲ―』
モニターが急に赤くなったと思えば、突然一つの単語が現れた。
ＥＲＲＯＲ？何だこれは、どこか機体の調子でも悪いというのか？
『―ＥＲＲＯＲ―』
『―ＥＲＲＯＲ―』
『―ＥＲＲＯＲ―』
その言葉が重なりながら機体の画面を埋め尽くしていく。
おいおいおい、画面を埋め尽くすほどのこのＥＲＲＯＲ表示、機体に何が起こってやがる。

今度は何だ、突然俺の目の前のモニターに血飛沫がかかりやがった。
目の前が霞んで見えるし、腹が熱い……ああ、なるほど。
これ、俺の血だ。
ゆっくりと視線を下げると、俺の腹を裂き、中から赤く細い触手が何本も蠢いていた。
それで漸く気づく事が出来た、機体の背部を融かし、触手が俺の背中を貫通して腹から出ている事を。
でも何故、どうしてそんな事が……機体の背後にあると言えば、斬り捨てた巨大な触手しか……。
「嘘、だろ……？」
斬り捨てた巨大な触手、その触手からは無数の触手が伸び、甲斐斗の乗る機体に一斉に伸びていた。
何本もの触手が俺の中に入っている、触手は甲斐斗の内臓をかき混ぜ、千切り融かしていた。
甲斐斗は血と胃液をその場に吐き出し始めると、白目を向いて操縦桿に倒れこんだ。
機体の眼から光が消える。
背部の動力源も破壊され、機体はただの鉄クズと化す。
触手は機体から離れると、今度は艦の装甲を融かそうと一斉に伸び始める。
だがその触手をＬＲＳで切り刻んでいく赤いリバイン。
そしてＬＲＳを背部に戻すと、今度はマシンガンを取り出し巨大な触手に銃口を向けて引き金を引いた。
何十発の弾丸を受け次第に力が無くなっていく触手、一つのカートリッジを使い果たした時には既に動かなくなっていた。
『おい！その機体に乗っているパイロット！大丈夫か！？返事をしろ！！』
返事等出来るはずが無い、肺も心臓も無い体が喋るはずがない。
『赤城隊長！そのパイロットは既に死んでます！生体反応が既に消えているんです！

それに巨大な触手がもう1本来ています！このままでは艦が……ッ！』

由梨音の口が止まる、モニターには赤いリバインが巨大な刀を構え、戦艦の上に立っている映像が映っていた。

――――『私が斬り落とす』

この武器は、こんな時の為に使うはずだ。神楽特製のＬＲＢ、今こそ力を発揮する時。

『ＬＲＢ出力最大、ＲＥ粒子散布！』

生きて帰る為に艦は絶対必要不可欠、今ここで艦を落とされる事はこの場にいる兵士全員の死を意味する。

不安はある、正直自分に斬れるとはどうかもわからない、もしかすればこのまま押し潰されて死ぬかもしれない。

それでも……今ここで刀を振るわなければ確実に死ぬ。

ＥＲＲＯＲが振り上げられた触手は一気に振り下ろされた。

赤城はわずかに目を瞑り、目前に迫る触手をそっと見つめ続ける。

刀に力はいらない、タイミング、そして角度をつければ自然に刃先は入っていく。

リバインの握る刀もまた同じ事だった、触手の動きを見切り、ＬＲＢを振り下ろす。

その大きな刃は簡単に触手を断ち切った、斬り捨てられた触手は大きく吹き飛び『ＧＡＴＥ』上に転がっていく。

転がる触手をギフツ達は見つけるとすかさず銃口を向けて引き金を引き、触手を破壊する。

赤城の集中力が切れた、あの一振りにどれだけ息を呑み、皆が緊張していのか。

するとまた由梨音と通信が繋がる、そして由梨音の口が開き呟いた。

『次の触手が振り下ろされました』

赤城がその存在に気づいた時点で既に遅かった、目前にまで迫ってきている触手に、指一つ動かす動かす事が出来なかった。

誰もが終わりだと思った時、一人の男の声が機体に流れた。
『問題ない』
こんな状況で、そんな言葉が聞こえてくるのは聞き間違えたのかもしれないと思った。
だがその声はハッキリと聞こえていた、強く、そして熱い一言。
そして現状は、言葉の通りになる。艦を押しつぶそうとしていた触手は残光が走ると共に上空へと吹き飛んだ。
上空に吹き飛ぶ触手に、一発の砲弾が放たれる。砲身が触手に触れた瞬間巨大な爆発と共に触手は四散する。
茶色い装甲に、巨大な大砲、そして両手で握り締める長刀……。
赤城の前にいたのは紛れも無く東軍最強を誇る機体大和の姿がそこにはあった。
『武蔵！お前がここにいるという事は！？』
『ああ、ＧＡＴＥ解除に成功した。ＧＡＴＥが開く前に全機速やかに艦に乗り込むんだ、この場から脱出するッ！』
『ＧＡＴＥ』がゆっくりと動き始める、その振動は人類の勝利を祝福しているかのように皆には感じられた。
後はこの場から脱出し、空中要塞アルカンティスの主砲で巣を消すだけだ。
誰もが勝利を確信して最後の艦に戻ろうとしていた、アルカンティスは『ＧＡＴＥ』上空に移動すると、主砲のハッチを開いていく。
このまま思い通りに行けばＥＤＰ成功は間違い無し、そう思い通りに行けば。
それは新種の、一本の、一匹の、巨大なＥＲＲＯＲがいなければの話しだった。
巨大な触手は合計で４本、既に３本斬りおとされているが、まだ最後の１本が残っていた。
そしてその最後の１本は、戦艦ではなく、『ＧＡＴＥ』上に浮上しているアルカンティスを目掛け伸びていた。
既に戦闘機は細い触手に破壊され残りわずかしか残っておらず、巨

大な触手がアルカンティスに届く事など簡単な事だった。
『武蔵！このままではアルカンティスが！』
『最悪のパターンだ。ここまで来てあの母艦が落とされたら全て終わる、俺達のしてきた事も全て、無駄だった事になってしまう！』
既に生き残った部隊の兵士達は次々に艦に乗り込んでいく、艦の外では葵とエコ、レンと武蔵、そして赤城の５人の主力メンバーが現在艦を守っていた。
そして艦はまだ逃げ遅れている兵士達を待っている、当然仲間を見捨て、置いていく訳にはいかない。
『赤城、俺は逃げ遅れている人達を助けに行く。君達はここで艦を守っていてくれ』
『武蔵……まさかそんな事を言ってあの巨大なＥＲＲＯＲの所へ向かうつもりではないだろうな？』
『逃げ遅れた人達を助けに行くのは本当だ。赤城、あれを止めないとアルカンティスが主砲を撃てない。なら俺が行くしか』
『馬鹿者ッ！いくらお前でも無理だっ！ただ死にいくだけだぞ！？』
『死ぬ覚悟は出来ているつもりだよ、俺の死でこのＥＤＰが成功すればそれは本望だ』
大和が巨大ＥＲＲＯＲに向けて走り出そうとしたとき、一人の男から通信が繋がる。
「本当に死ぬ覚悟が出来てる奴は、そんな事口に出して言わねえよ……」
戦艦の上で機能停止していた一体の機体が立ち上がり始める。
背部についてある動力源を破壊され、中にいるパイロットも死んだはずの機体が。
『か、甲斐斗！生きていたのかい！？』
武蔵の前のモニターには腹に大きな穴が開いている甲斐斗の姿が映されていた。
それでも甲斐斗は生きている、こうやって喋っているのだから。
「つくづく思うね。こんな自分を見ると、もう人間じゃないっての

がよくわかるぜ……」

武蔵は何て声を掛けていいのかわからない、腹に穴が開いているのに生きている人間等見た事が無い。

いくら何でもこれには武蔵も驚きを隠せなかった。

「ここは俺に任せて、アンタはさっさと、っ…あ……」

またあの頭痛が甲斐斗を襲う、これでもう3度目になる頭痛は、更に甲斐斗を苦しめていく。

だが今回だけは少し違った、今頭痛が起きているのは甲斐斗だけでなかった。

『なんなんだよこれ！頭が割れそうに痛てぇっ！』

『わからない……けど、何か感じる』

艦を護衛していたライダーの動きが止まる、操縦している二人は頭を抱えながら苦痛に耐えている。

とても戦闘が出来る状態ではない、一度葵達の乗るライダーは艦へと戻る。

オーガの中にいる愁も頭を抱えながら体を小さくし、痛みに耐えている、だが痛みと共に昔の出来事が鮮明に脳裏に蘇っていく。

『母さん、ごめん、許して、許し、て……』

思い出してはならない過去が次々に思い出していくと、ふとそれを防ぐかのように意識を失い、操縦桿に倒れこむ。

そしてある一室でＥＤＰの様子を窺っていた少女、フィリオにも頭痛は起きていた。

だがフィリオは頭痛だけではなく、全身に鳥肌がたち、何かに怯えるように体を小さくしていた。

『この力、この憎悪……この世界にあってはならない。彼の存在は神を冒涜している』

――『甲斐斗？大丈夫かい？甲斐斗！』

「っくくく…ひひ……うひひひ」

薄気味悪いその笑い方は、もはやそこに理性の欠片も無かった。

武蔵が何かと思い声を掛けようとした時、甲斐斗はその言葉をかき消すような大きな声で笑い始めた。
その笑い声に武蔵は何も言えず、ただ笑い叫ぶ甲斐斗を見ているしかない。
そして一呼吸終えると、活き活きとした笑顔で喋り始めた。
「ついにこの時が来たぁ、ようやく俺の本気を出せる時がなぁあああああっ！！」
甲斐斗の乗る機体は戦艦から更に高い所へ飛び立ち、空中で停止する。
そして機体の足元には黒い光が発行しながら一瞬にして魔法陣のような物が形成された。
魔法陣は一つではない、足元、そして機体の周りにも次々に現れ始め、最後の魔方陣が甲斐斗の額に現れた。
機体にも変化が来ていた、装甲が黒く変化していき、形状を変えはじめる。
変形した機体、それは生き物にも見える、そしてより『魔神』に近い形になっていた。
「出て来い、グリュンヒル」
黒き雷が拳に落ちた時、『魔神』はあの黒剣を握っていた。
甲斐斗はニヤリと笑みを浮かべた後、『ＧＡＴＥ』外周にいるあの巨大なＥＲＲＯＲに向かって刃を振った。
放たれた残光は何倍にも広がり、あの巨大なＥＲＲＯＲの胴体を簡単に斬り落とされた。
全長数百ｍはある巨大なＥＲＲＯＲをたった剣一振りで断ち切ると、今度は右腕を天に伸ばしはじめる。
手の平に何やら黒い霧ようなものが現れ始め、近くには雷光が見え始めていた。
「こんなに大量の血を見たのは久しぶりだ、化け物と人間の血が門と地を赤く染めてやがる。最高じゃないか」
そう言うと機体は振り上げていた右腕を地上にいるＥＲＲＯＲに向

ける。
地上には戦艦目掛けて何百匹ものＥＲＲＯＲが迫ってきていた。
「ああ？消えろゴミ虫」
甲斐斗の眼は大きく開き、最高の笑みを浮かべながらそう呟いた。
右手から放たれた黒い光は雷光を纏いながら一直線に飛んで行き、光はそのまま大量のＥＲＲＯＲを飲み込んでいく。
強烈な爆発と共にその場にいた全てのＥＲＲＯＲが掻き消され、荒れた大地にわずかな肉片が残っているだけの光景となった。
魔神の力は誰もが驚き、恐怖を感じる。だがそれと同じように、兵士達には希望が込み上げてきた。
「これが最強の力、俺が持って、いた、元々の、ちか…ら……」
甲斐斗の額から陣が消えると、機体の周りに現れていた陣が全て消える。
空中に浮いていた『魔神』は突然力を失いそのまま地面に落ちていった。

《これよりアルカンティスの主砲発射準備を開始します、発射まで、残り３分》
既に『ＧＡＴＥ』は半分以上開き、ＥＲＲＯＲの巣へと通じる穴が見えていた。
『武蔵、今のは一体何だったんだ……あの機体に何が……』
『今はそれを説明できそうにない、赤城はあの機体を連れて先に艦に戻っていてくれ』
あの高さから落ちたというのに、機体の装甲には全くと言って傷は無かった。
赤城の乗るリバインがその機体を抱きかかえると、すぐさま最後の艦に移動する。
地面から次々にＥＲＲＯＲが湧き出ているが、今は艦の周りには何のＥＲＲＯＲもいない、『魔神』が全て排除したからだ。
今が逃げるのに絶好のチャンスであり、この機会を逃がすとＥＲＲ

ＯＲに取り囲まれる危険性がある。
だから戦艦は徐々にスピードを上げて行き『ＧＡＴＥ』上から降りようとしていた。
それに速やかに『ＧＡＴＥ』から離れなくては、アルカンティスの主砲に巻き込まれ破壊される可能性もある。
リバインは無事着艦、抱き抱えている『魔神』をその場に置こうとした瞬間、艦内に荒々しいブザーの警報音が響き始めた。
『今度は一体何事だ、何が起きた！？』
『艦の進行方向に地面から伸びる触手を確認。今艦が砲撃を行なっていますが、すぐにまた触手が伸びて排除できません！』
『このまま進み続け『ＧＡＴＥ』から出ると艦が触手に捕らえられてしまいます！』
戦艦は進み続ける、赤い触手は何百本も束になり、まるで赤い血の壁が聳え立つように見えた。
いくら砲撃しても吹き飛ばしても、また地面から伸び始める触手に、兵士達はどうする事も出来ない。
『隊長、私……死ぬのが怖いです』
『由梨音？』
由梨音が涙を流し、零れ落ちそうになる涙を必死に拭っている。
彼女はもう理解したようだ、自分の人生の結末を。
『もう無理だよぉ…私達はここで死ぬ……もう助からないんだ……』
その由梨音の言葉に赤城は何て言葉をかけていいのかわからなかった、既に自分の目にも薄らと涙を浮かべていたからだ。
《アルカンティス、主砲発射まで、残り２分》
もう時間も無い、ＥＤＰは無事に成功するだろうが、ここで残りの兵士は全て死ぬ。
そして語り継がれるであろう、地上部隊は自らの命を犠牲にしてまでも立ち向かい、勝利の為に戦ったのだと。
この状況の中、赤城はふと思った、どうせ死ぬなら、愛する人と共に死にたい……と。

無意識に武蔵を探す、だが武蔵の機体はまだ着艦していなかった。
『武蔵、今どこにいるんだ。早く艦に戻って来い……』
武蔵と通信を繋ぎ、赤城が力の無い声で喋る。
『どうした武蔵、応答しろ』
だが武蔵から一向に返事が帰ってこない、変に思った赤城は由梨音に武蔵の居場所を確認させた。
『伊達大佐の機体……艦とは逆の方向に向かって……っ！？赤城隊長！伊達大佐がＧＡＴＥに戻っています！』
艦内に鳴り響く警報音の中、まるで時が止まったかのように赤城の周りが静かになる。
いや、赤城の耳に雑音が届かなくなった、だから赤城には静かになったように思えた。
『は……？』
何故この状況で武蔵は『ＧＡＴＥ』に向かっているのか、赤城には理解できなかった。
当たり前だ『ＧＡＴＥ』に向かって何が出来る、この状況を打開する。
武蔵の行動に赤城は疑問を抱き、その馬鹿げた行動を今すぐ止めようと武蔵と通信を繋いだ。
『武蔵、貴様『ＧＡＴＥ』に行って何をする気だ。そんな所行ったってもう無理だ！』
『俺は言ったはずだよ、諦めるなと。赤城、必ず君を生かしてみせる』
『私はいいんだ！お前と共に戦い、共に死ねるなら。私はそれで満足だッ！』
死が間近な時、人は心の中に思っていることを簡単に口に出す。
普段なら絶対に言わないような台詞を赤城は吐き、武蔵を求めた。
『俺はこうも言った、生きろ、自分の命を無駄にするな、と』
だとすると、武蔵の台詞もまた、心の中に思っていることを口に出しているのだろう。

『武蔵？一体何をするつもりだ、は、早く……早く戻って来い！』
赤城の命令に武蔵は聞く耳を持たない、武蔵の乗る機体は止まる事無く開いた『ＧＡＴＥ』の中に入っていく。
だが『ＧＡＴＥ』に入った瞬間、最深部から赤い触手が次々に伸び始め、大和に襲い掛かる。
そんな触手は大和は２本の刀で次々に斬り捨てて行き、最深部まで降りていく。
『赤城、君は本当に強くなったね。俺よりも何倍も、何十倍も……』
『馬鹿者！こんな時に何を言っている、お前は私よりも強いだろ！』
赤城は武蔵の強さを目指していた、小さい頃は思い続けている事、武蔵より強くなり、勝つのだと。
『違う、俺は君の背中を押して、前に進むのを手伝っていたにすぎない。
赤城は既に俺を追い越していたんだよ。あの時、出会った時から』
意味がわからない……武蔵は一体何を伝えようとしているのか、赤城にはわからなかった。
『強さには……いろんな形がある。そして、俺に足りない強さを赤城は持っていた』
それは武蔵も同じだ、赤城に持っていないものを武蔵は持っている、赤城はそれを必要としている。
『君のその強さは今後世界の為に必要不可欠だと俺は思っている、だから君は……生きるんだ』
『武蔵……私にとってお前と生きるのが生き甲斐なんだ、お前がいないのなら……生きる意味なんて無い……』
『赤城の口からそんな事を聞けるなんて。うれしいな、俺は赤城と、この世界を愛している。
だから死なせたくない、助けられるのなら俺は命を捨てたって構わない。本当、今までありがとう』
一方的な会話、赤城が返事を返そうとすると、突然通信が途切れる。
必死になって何度も通信ボタンを押すが、もう武蔵の声が聞こえる

事は無かった。
《アルカンティス、主砲発射まで、残り1分》
長い『ＧＡＴＥ』の通路をようやく降りる事に成功した武蔵、目の前には異様な光景が広がっていた。
微かに赤い光を発している壁には、ゾロゾロとＥＲＲＯＲが蠢いていた。
しかし武蔵はそんなＥＲＲＯＲには目もくれない、武蔵が狙うのはただ一つ、あの巨大ＥＲＲＯＲの『根』であった。
『ＧＡＴＥ』外周に出てくるあの触手は、甲斐斗が斬り落としたあのＥＲＲＯＲの『根』だというが武蔵にはわかっていた。
『艦長、聞こえますか？現在ＧＡＴＥ最深部に到達しました、俺が触手を焼き払う間に脱出してください』
『了解しました……。伊達大佐、貴方はＮＦの誇りです』
モニターには艦の操縦室にいる兵士達が全員敬礼をしている姿が映っている、武蔵も敬礼をした後、ゆっくりと通信を切った。
大砲をＥＲＲＯＲの根に向けると、壁一面から次々に触手が現れ、大和を拘束していく。
そして酸を発しながら次々に機体の装甲に突き刺さる、だが大和は倒れない、触手がいくら絡みつこうが決して止まる事は無かった。
『神楽……ごめん、君が作ってくれた機体をこんな風にして。そして使わせてもらうよ、君が開発したＬＲＣを』
大砲に触手が巻きついていくが、狙いが変わる事は無かった。
その時武蔵の脳裏には昔の平和暮らしや楽しかった思い出、嬉しかった出来事、辛い過去が、走馬灯のよう映し出されていた。
『ＬＲＣ最大出力、この一撃で切り開く、生き残った戦友の未来をッ！！』
大砲の先端から光が発せられた瞬間、地上にある戦艦は全速力で『ＧＡＴＥ』から離れた。
地面から伸びるが艦を巻きつこうとした時、次々に触手が倒れていく。

艦は止まらず更に加速していく、弱々しく倒れている触手を次々に吹き飛ばしていく。
艦にいたものは物に掴まり、必死に艦の揺れに耐えている、そして全ての艦は突きぬけ、ついに触手の壁を突破する事が出来た。
それと同時に艦内に響くアナウンス、それはＥＤＰを終わらせる合図に聞こえた。
《アルカンティス、主砲発射準備完了、主砲、発射》
母艦から一閃の光が『ＧＡＴＥ』に落ちる。
その光は忽ち太く巨大な光へと変化していき、母艦からは何百発のミサイルが放たれた。
まるで地面が動いているかのように、地上はＥＲＲＯＲに埋め尽くされている。
そのＥＲＲＯＲ達に数百発のミサイルが落とされる、次々に降り注ぐミサイルは地面諸共爆砕しながら地上にいるＥＲＲＯＲを排除していく。
もう手加減はいらない、味方がいない今、全ての戦力を惜しまず使う。
母艦の圧倒的な火力でＥＲＲＯＲは成すすべも無く吹き飛ばされていく、戦っていた戦友の亡骸と共に。

ＮＦ歴１００年７月７日１５時１０分　ＥＤＰ終了

第３７話　生きる、意味（後書き）

正式名Ｐｌａｎｔ態（第五種ＥＲＲＯＲ）
全長－３００～？？？ｍ
最大級ＥＲＲＯＲ、大樹のような姿をしており植物と生命体のハーフのような生き物。
通常兵器では全く歯がたたず、４本の巨大な触手と、数千本の細い触手を使ってくる。
また体内には様々なＥＲＲＯＲが入っている為ＥＲＲＯＲの要塞とも言える。

第３８話　生きた、代償

――――「ＥＤＰは無事成功したようです、しかし全地上部隊が７０％、空軍５０％が壊滅した模様。これでＮＦは当分動けないと思われます」

ＢＮの司令部のとある一室に彼等はいた、紳が椅子に座り資料に目を通している中、その横ではセーシュが立っていた。

「戦死した兵士の数は数万を超えています、その中でもＧＡＴＥ戦に参加していた兵士は一番犠牲が多いです。

ＧＡＴＥ戦で生き残った兵士はわずか数十名、その中に伊達武蔵はいないとの事です」

紳が次の資料を捲ろうとした腕が止まる、そして小さく溜め息をつくと、資料を机の上に置いた。

「伊達が死んだか……」

「そのようです、最後の最後まで生きていたのですが、身を犠牲にし生き残った仲間を救ったとの事です」

「仲間の為に自分の命を犠牲にしたか、奴らしい死に方だな」

そう言うと紳は立ち上がり、一人部屋を退室しようとする。

「ついてこなくていい」

セーシュは紳についていこうと一歩足を前に出そうとしたが、紳の言葉で動きが止まる。

部屋の扉が開き、部屋から退室しようとすると、セーシュが一言紳に話しかけた。

「若様、どちらに行かれるのですか」

「病院だ」

紳は歩く足を止める事なくそう呟くと一人部屋を出て行った。

――――「えーっと、２０３号室、２０３号室、２０３号室は……っと、ここのようね」

病院では周りをキョロキョロと見回しながら頭の中に憶えている部屋番号を連呼しているエリルがそこにいた。
「あ、あったあった。ここが羅威のいる部屋ね」
ようやく羅威のいる病室にたどり着くと、扉の前で突然足が止まる。髪を触り、身だしなみを整え、一息ついた後にようやく病室の扉を開けて中へ入る。
「羅威おはよー！元気ー？」
「ん、エリルか。おはよう」
部屋に入るとそこには壁にもたれ掛かりながらベッドに座っている羅威の姿と、その横でカルテに何かを記入している女性が立っていた。
女性は振り向くと笑顔で軽く頭を下げる。
「エリルさんおはようございます！」
「あれ、アリスがどうしてここに？」
エリルにとっては予想外だった、てっきり病室で二人っきりになると思っていたがまさかアリスがこの場にいるとは。
「セーシュさんの命令で今日から羅威のお世話は私がする事になったんです」
「俺は世話係なんていらないと言ったんだけどな……」
「へ、へぇ～。そうなんだ」
エリルは内心驚いているもののそれを表に出さず、羅威の寝ている左側の椅子に座る。
……座ったのはいいが、何を話して良いのかわからない。
とりあえず世間話でもしようかとした時、羅威が先に口を開いた。
「ＮＦが行なった『ＥＤＰ』。成功したらしいな」
アリスから聞いたのだろうか、既に羅威はＮＦのＥＤＰが成功した事を知っていた。
「そうみたいね、でもＮＦの被害は大きいらしいわよ。だからＮＦは当分動けないと思う」
「ＳＶの方は……何か動きを見せているのか？」

「ＮＦのＥＤＰに参加したぐらいかな。それ以外何も動きを見せていないらしいけどね」
「……わかった、ありがとう」
室内に何処と無く気まずい雰囲気が立ち込めている。
エリルにはこういうしんみりとした空気がどうも好きになれない。
「ね、ねぇ。両手の調子はどうなのよ、動かせるの？」
そう言うとベッドの中に手を入れて羅威の左手を握り締める。
羅威は視線をそっと下ろすと、ゆっくりと目蓋を閉じた。
「今お前は俺の手を握っているんだろうが、俺には手を握られている感触が無い。
それでも少しぐらい腕を上げたり、物を握る事ぐらいなら出来る」
羅威は弱々しい力で左手を握り返す、そのわずかな力がエリルの左手に感じられた。
「あ、エリルさん。私このカルテを持っていかないといけないので、それまでここ頼みますね」
「はいはーい、いってらっしゃーい」
書き終えたカルテを両手で握り締め、アリスはさっさと病室から出て行ってしまう。
その間も羅威はエリルの左手を握ったまま。
羅威にはエリルの手を握っている感触は無い、だから羅威自身エリルの手を握っているのか握っていないのかわからない。
「顔が赤いぞ、熱でもあるのか？」
「あ、暑いのよ！もう7月だからね！あー暑い暑いーここ冷房完備してるのかしら」
その声に驚きエリルは握っていた手を咄嗟に放す、そしてその手で自分の顔を必死に仰ぎ始める。
「暑いのか？それなら何か飲み物でも買っこい、ついでに俺のも頼む」
「しょーがないわねぇ、今回は私の奢りで買ってあげるわよ、何が飲みたいの？」

エリルは立ち上がると、軍服のポケットから花柄をした可愛らしい財布を取り出し、財布の中にはいっている小銭を確認していた。
「そうだな、この前雪音が美味しそうに飲んでいた『超刺激炭酸ミックスオーレ』でいい」
「何その炭酸水に炭酸水でも混ぜた感じの飲み物……ま、いいや。買って来るね」
扉の閉まる音は部屋に静けさをもたらした、そんな部屋で一人、羅威は目を瞑ると小さく溜め息を吐く。
日が差し込む部屋は暖かく、心地よい。このままベットの中で昼寝をしたいとも思ってきた。
少しずつ睡魔が羅威を襲う、うとうとと首が上下に揺れながら、目蓋が少しずつ下がってきていた。
が、その時。微かに扉の開く音が聞こえてきた、それでも睡魔には勝てない、
目蓋が完全に下りようとした時、一人の男が視界に入る。
「し、紳！？」
羅威を襲っていた睡魔が全て吹き飛んだように目を見開き驚きを隠せなかった。
そんな態度の羅威に紳は特に動じず、静かに部屋の壁についてある窓を開ける。
「見舞いに来た、体調の方は良好らしいな」
あえて目を合わせずに紳は窓の外から街の景色を眺めている。
「あ、ああ。だが腕が……」
「心配ない、腕が無くとも生きていられる」
「そうじゃない、この腕じゃ俺はもう機体を動かす事が出来ない。俺は……軍を辞めなければならないのか？」
弱々しい声、羅威が恐れているのは死ぬ事じゃない、軍にいられなくなる事だ。
軍は自分を支え、自分も軍を支えている。軍では仲間や親友も出来た、そして共にＢＮの為に戦いたいと思っている。

だがもしこのまま軍を抜ける事になれば仲間達は命を賭けて戦っている時、自分は安全な所で平和に暮らす事になる。
「……二度も言わせるのか。心配ない、お前は軍にいてもらう」
「だが俺の腕では機体に乗る事が……」
「羅威、穿真から話を聞いていないのか？……全く、話しておけと言っておいたはずだが、まぁいい。明日1時、軍の第7格納庫に来い、いいな？」
「ああ、わかった、必ず行く。けどそこで何があるんだ？」
「来ればわかる」
紳が開けていた窓を閉め、部屋から出ようとした時、今度は荒々しく部屋の扉が開く。
「見て見て！自販機で私2回も当たりが出たのよ！！4個もゲットしちゃった！」
缶ジュースを胸に抱きかかえながらエリルは笑顔で部屋に入ってきたのはいいが、
そのエリルの目の前には紳が無表情で立っている。
「か、風霧総司令官！？」
笑顔だった顔が一瞬にして崩れ、慌てて敬礼をする。
足元に散らばる缶ジュース、当然だ、敬礼したらそりゃ落ちる。
だがその缶を拾うわけにいかない、目の前にはＢＮの最高司令官が立っているのだから。
「お前はたしか無花果のパイロットのエリル・ミスレイヤ……邪魔をしたな」
紳は足元に落ちている缶ジュースを拾うと、羅威の寝ているベッドの机に置いていくと、無言で部屋を出て行った。
「び、びっくりしたぁ。何で風霧総司令官がここにいるのよ」
「見舞いに来てくれたんだよ、所でお前同じジュース4つも買ってきたのか？」
机に上に4つ並べられている『超刺激炭酸ミックスオーレ』、缶には美味しそうな果物の絵が描かれている。

「いやーまぁ私も飲んでみようよ思って買ってみたのよ、ささ！飲もう飲もう！」
エリルは机の上においてある缶の一つを手に取ると、勢いよく缶を開ける。
「いやまて！開けるなっ！」
羅威が止めようとしたが時既に遅かった、缶は開けられた瞬間凄まじい勢いで炭酸が抜け、ジュースがエリルの顔面を直撃する。
炭酸が抜けるのはあっというまだった、エリルは全身びしょ濡れになってしまう。
「な、何で……」
「お前さっき落としただろ、あの時の衝撃でそうなる事ぐらいわからなかったのか？」
握られている缶の中身は半分しか残っていなくとても軽い。
裏面を見るとしっかりと大きな文字で『刺激を与えないで下さい』と書かれていた。

――その頃残りの部隊の面子は格納庫の横にある小さな部屋にいた。
穿真は真剣な顔つきでラースを睨み、微かながら何かの力を感じられる。
ラースも同じように、真剣な顔で穿真を睨んでいた、そして目を大きく開き口を開いた。
「合体なんて僕には理解できない！何のメリットも無い！ただ機体が重くなるだけだッ！」
その声に穿真も負けじと声を張り上げた。
「お前にはわかんねえのか男のロマンがッ！2体のロボットが1体に、3体のロボットが1体に！
合体する事でどれだけ強く！カッコ良くなるのか！お前は全然わかってねえッ！」
「いいかい、穿真は見た目だけで合体の良さを判断しているがあん

なの非効率的作業に他ならないのさ！」
そんな二人を余所に部隊メンバーの香澄、雪音、クロノの三人はお喋りをしていた。
「クロノ君、穿真君とラース君は何の話しをしてるのかな？」
「え、えーと……そうですね。わかりやすく言うと。
穿真さんはピザは６等分に切って食べたいって言ってラースさんはそのまま一枚で食べたいって言うような話をしている、のかな」
「そうなんですか……二人とも好きな食べ方で食べたらいいのに」
その通り、だが二人はピザの話をしているわけではない。
「ラース！俺達の部隊全機とは言わねえ！せめて１機と１機が合体して最強の機体！とか出来上がればいいんだよ！」
「それなら手っ取り早く１機強い機体作ればいいだけの話！合体など必要ない！」
「てめえ前に貸した『レジェンドクロス』って言うアニメ見たのか！？２体の機体が合体して究極になっただろ！」
「ふっ……何を言う。あのアニメは既に２０回以上見ている。
穿真、たしかに合体すればエネルギー保有量が増え力が高まる。それは認める、だがな！」
「うるさいよあんた達！」
二人の声で騒がしい室内が今まで黙っていた香澄の一喝により静かになった。
だが二人の闘志はまだ消えていない、無言だが互いに睨み合い一歩も引かない状態。
が続くと思ったが、ここでラースが口を開いた。
「……僕とした事が取り乱してしまった。僕はそろそろ機体開発に向けて仕事をしなければならない、忙しいからね、それじゃ」
そう言ってラースは肩に手を当てながらその場を退室する。
「同じアニメ２０回も見てる奴が忙しいだって？全く……」
そう言って穿真は何か考え事でもあるのか腕を組みながら眉間に皺を寄せていた。

――一方、ＮＦにはＢＮのような安らかな時は無かった。
東部軍事基地の前には何百人もの兵士が並んでいる。
東部だけではない、北部、南部、中部、西部、全ての基地で兵士達が並んでいた。
その兵士達の中には負傷し包帯を頭に巻いている者や、松葉杖で立っている者、両足が無く車椅子できている者もいる。
『諸君、我々はついに『ＥＤＰ』を成功させた。だが……我等の受けた傷は余りにも大きく、多くの兵士達の命が散っていった』
『しかし！我等ＮＦはついにＥＲＲＯＲに勝利した！
争いの無い世界を作るために、我等は命を削りこの星を、世界を！人類を守ったのだッ！』
『そして誇り高きＮＦの兵士達よ、我等にはまだ成し遂げなければならない事がある。戦いは終わっていない！』
『この世界を真の平和にする為に、争いの無い世界を作るために、我等は日々平和を守る為に戦い続けるのだ！』

――「平和は平和って、何回戦争を起こせば平和になるんだ？低脳の俺には意味わかんねえや」
その演説を一人病室のベットにおいてあるテレビで見ていた男がいた。
男はボリボリと腹を掻き大きなあくびをした後、突然テレビの電源が切れる。
「テレビの時間はおしまいだ、甲斐斗」
甲斐斗の寝ているベットの隣にはリモコンを握り締めた赤城の姿があった。
甲斐斗は小さな溜め息をすると上半身を起こして壁にもたれ掛かる。

――「んじゃ、お喋りの時間にするか」
俺はテレビのリモコンをそっと机の上に置くと赤城はベッドの横に

おいてある丸椅子に座る。
「俺から先に喋ってこんな事聞くのも変だが、伊達大佐は死んだのか？」
「ああ、死んだ。私達を助ける為に……」
こんな事赤城に直接聞く事ではなかっただろう、でも俺は知りたかった。
伊達大佐……いや伊達はＮＦに、この世界に必要な男だと俺は思っている。
それに一度戦ってみたかったものだ『東軍最強の男』と言われていた伊達武蔵と。
「次は私が聞かせてもらう、お前は」
「俺は甲斐斗、カイト・アステルとは全くの別人であり別の世界から来た男。これでいいか？」
「そんな事は既に知っている。私の聞きたい事は何故お前がＥＤＰに参加したのか、それにあの機体が出した力は何だったんだ？」
何で知ってんだ？武蔵が赤城に俺の事を話していたというのか……？
まぁそれにしてもしっかりしたもんだ、仕事に忠実なのは良い事。
その態度、俺には悲しみや怒りを見せないようにしているんだろうが、目が赤いのが見てすぐにわかった。
無理も無い、そりゃそうだろ……あんなに仲が良かったんだからな……他人の俺でもそんな事すぐにわかる。
「ＥＤＰに参加したのはこの世界の情報が知りたいからだ、そしてあの力は俺が魔法使いだからだ」
「魔法か、魔法が使えるなら今すぐここで使ってみろ」
「残念、マジックポイントが足りねえなぁ」
俺の言葉に赤城の眼つきがいっそう鋭くなる。
「言っておくが俺はこの世界に来てから魔法が使えなくなっていた、だがあの時何故か俺は魔法を使う事が出来た。
伊達は俺が他の世界から来た事、そして魔法使いだった事全てを信じた、お前はどうだ？信じれるか？」

「信じる」
即答だった、赤城は視線を変えず俺の眼を見つめてきていた。
「お前は、私達を助けてくれた命の恩人でもあるからな……」
全く同じ台詞を聞いた事があるな……全く、伊達も赤城も似たような奴だからな。
「命の恩人か、だが俺は伊達の命は救えなかった」
「武蔵は私が救いたかった、助けたかった。私が守ると言ったのに、私は最後まであいつに助けられてばかりで……」
赤城の声は弱々しくなり、視線が下がる。
こういう時、何て言葉をかけていいのかわからない。しんみりとした空気は苦手だ。
それにしても赤城はすごいな、愛していた人が死んだというのに。
俺は駄目だ、俺には耐え切れない。だから俺は二つの選択肢を用意していたはずだ。
「ほ、他に俺に聞きたい事は無いか？」
「そうだな……お前を機体をから運び出した時、腹に開いていた穴が小さくなっていた。お前は人間なのか？」
赤城の言葉に俺は即答出来なかった、自分でもわからない、俺は人間なのだろうか、人間の形をした化け物なのだろうか。
「人間じゃないのかもな、だが俺はＥＲＲＯＲのような気味悪い化け物でもないから安心しろ」
「そうか……それにしても、お前には謎が多い。しかしこれは言える、お前は悪い者じゃないと。
甲斐斗、お前はしばらく傷が治るまではここにいてもらう。いいな？勝手に動くなよ」
「ああ、わかったよ」
そう言い残すと赤城は病室から出て行ってしまった。
どうやら今回は牢屋にぶち込まれる事は無いみたいだ、それと俺は赤城に信用されているらしい。
正直赤城の言葉が嘘かどうかはわからない、だがあの状況で平然に

嘘なんて言えないだろう。
俺はまた生き残った、喜ぶべき事なのだと思うが素直に喜べない、伊達が死んだんだ。
あの時俺は力を出せたのは何故だ、あの力がもう少し長く続けば伊達を助けれていたというのに……。
疲れた、少し休もうじゃないか。後部屋を変えてもらわないとな、病室じゃなくてミシェルのいる部屋に。
その時、わずかに扉の開く音が聞こえてきた、一体誰だ……赤城か？不気味に足音が素早く近づいてくる、何か様子がおかしい。
寝ていた体を急いで起こし誰が入ってきたのかを確認しようとすると、目の前には拳銃を握り締めて銃口を俺に向けている女性が立っていた。
その瞬間に女は躊躇い無く俺に引き金を引いてきた。
瞬時に体を転がしベットを倒す、盾代わりにようとしたがベッドにはいとも簡単に穴が開いていく。
静かだった病室に何発もの銃声が鳴り響く、俺は突然の出来事に頭が回らなかった。
「待て待て待て！！何で俺を殺そうとしてんだ！？」
銃声に負けない程の大声で喋ったにも関わらず女は何も答えずに引き金を引くのを止めない。
「調子のってんじゃねえぞ！」
俺は穴の開いたベットを勢い良く蹴り上げる、ベットは宙を舞い女に向かって飛んでいく。
この隙を狙い女に飛びかかろうとするが、女は俺が蹴り上げたベッドを拳で弾き返す。
「嘘だろおいッ！？」
俺の蹴り上げたベットを腕一本で弾き返しやがったこの女、只者じゃねえ、だが。
一筋の残光がベットを真っ二つして吹き飛ばす。女は少し驚いた様子をしていた、どうやらこれは計算外だったらしい。

右手に握り締めている黒剣が朝日で煌き一瞬女が怯む。その隙を逃がす程俺も甘くは無い、俺は辛い。
一歩前に出て俺は剣を振るい女が手に持っている銃を斬り捨てる、そして剣先を顔に向けようとしたが、女は速かった。
銃を放すと、服の中に隠してあったのかナイフを2本取り出し俺目掛けて投げ飛ばす。
剣を盾代わりにしてナイフを弾いた、しかし女に余裕を与えた事には変わりない。
女は両手にナイフを持ち、俺目掛けて突っ込んでくるが、そんな小さなナイフでこの剣に勝てるとでも思っているのか?
女は相変わらず黙ったまま、それにしてもこの身のこなし、ただの兵士ではない、それにこの軍服はＮＦの兵士でもない。
となると……ＳＶの奴しかいねえ!
剣を女目掛けて振り下ろす、すると女はナイフ一本で俺の剣を受け止めようとするではないか。
「そんなちっぽけなナイフで俺の剣を止められると思うなよ!」
「止める気は無い」
剣は振り下ろした……だが、刃先は女に当たらず女のすぐ横に振り落とされていた。
ナイフの刃先を斜めにずらしただけで俺の剣の軌道を変えやがった。
完全な隙、女は止まらず俺の目の前にまで飛び込んで来る、間に合わない。避けきれない……。
が、何故かナイフが俺の頭上を掠めた、一体何が起きたのかわからなかったが、足元を見てわかった。
避けられた剣が病室の床に当たった時、大きな亀裂を走らせ穴を開けたのだ。
俺はそのまま下の階の部屋に落ちていく、そこは倉庫らしく沢山のダンボールが山積みにされていた。
壊れた床の瓦礫に何とか着地をすると、急いで顔を上げる。
「……いない?」

上から飛びかかってくると思いきや、俺を襲ってきた女は何処にもいない。
うるさかった部屋が急に静かになった……本当にいないのか？
実は息を殺して俺を狙っているのではないかと思い周りを見渡してみる。
すると、上の階の部屋の扉が開くと銃を持った数人の兵士が入ってくる。
「何事だ!?お、おい！大丈夫か!?」
下の階に落ちている俺を見つけると兵士達が銃口を俺に向けながら安否を確認してきてる、まずその銃下ろせよ。
「大丈夫だが、ＳＶの女が俺を襲ってきたぞ。まだ近くにいると思うから探せって」
ったく、一体何だったんだ?見たことも無い女、ＳＶの奴。何故俺がＳＶに命を狙われなきゃならねえんだよ……。
ＳＶといえば葵やエコ、あとは仮面の奴とかのいた軍か、ＳＶには奇妙な奴が多いな……。

――ＮＦの基地、その屋上で一人の少女、フィリオがＮＦの街を眺めていた。
「どうでしたか、彼は」
フィリオが徐に口を開くと、その後ろに立っていたラティスが口を開いた。
「申し訳ありませんお嬢様」
そう言って頭を下げるラティスだが、フィリオは怒ることなくむしろホッと胸を撫で下ろしている。
そして振り向くとラティスに近づき安心したような顔をしていた。
「いえ、ラティスが無事に帰ってきただけでも私は嬉しいです。彼は危険な存在、貴方に無理はしてほしくありません」
「はい、だからこうして言われた通り3分たったので戻ってきました。

しかし、あの男の身体能力には驚かされました、恐らく何か特殊な肉体強化を受けているはず」
「ラティスが驚くのも無理はありません、彼は人間ではないのですから……」
フィリオはまた振り向き、手すりに掴まりながら街の景色を見つめる。
「人間では、ない？」
「はい、彼は神を汚す悪魔……それ以外の何者でもありません」
フィリオは振り向く事なく口を開き、ただその目の前に広がる街を眺めているだけだった。
そしてラティスにはそのフィリオの後姿が妙に冷たく見えた。

――「神楽いるか？いなくても入らしてもらう」
赤城は一人神楽がいる部屋に来ていた。
部屋の中から神楽の声は聞こえない、だが赤城は構わず部屋の中に入っていく。
部屋に入ると、部屋中鼻をつくようなアルコールと煙草の臭いが立ち込めていた。
電気はついておらず、カーテンも締め切ったまま、赤城はすぐさま部屋のカーテンを開けようと窓に向かい
カーテンに手を掛けようとした時、突然その腕を何者かが掴む。
「人の部屋に勝手に入ってきて、何してるのかな？あ・か・ちゃ・ん」
眼鏡を外し、目が少しとろんと垂れている、どうやら今までずっと酒を飲んでいたのだろう。
「いたのか……なら話しが早い、お前はたしか武蔵の部屋のカードキーの複製を持っていたはずだ、それを貸してくれないか？」
「あらぁ、何に使うのぉ？」
赤城の腕を放し、机の上においてあるグラスを手に取ると、一気に酒を飲み干し、またグラスに酒を注いでいく。

そして胸ポケットから煙草を出し火をつけると、ソファに座り一服する。
「武蔵の部屋にあるＰＣに何か情報が残っていないか調べに行く、キーを渡せ」
「あら、人の部屋に勝手に入って色々とあさっちゃうのね。
そんなの私じゃなくて基地からスペアをもらってくればいいだけじゃない？」
「無いんだ、探してもらったが何処にも無い、しかしお前はたしか万能なカードキーを持っていたはず」
「さぁ、どこに置いたかしら……」
神楽がそう呟いた瞬間、口に銜えていた煙草が切り落とされる。
軍服で隠してある刀、それを取り出すと一瞬で鞘から刀を抜いたのだ。
刀の刃先が神楽の目の前で光るが、神楽は驚く様子も無く切り落とされた煙草を灰皿に入れる。
「出してもらおうか」
「変に強がるのはよしたら？可愛くないわねぇ」
「強がる？何を言っている、そんな事どうでもいい。早くカードキーを……」
「貴方、今誰に刀を向けてるかわかってるの？」
その神楽の冷たい口調に赤城の目が微かに揺らぐ。
すると神楽はソファから立ち上がると、自分の机に向かい一番上の引き出しを開ける。
手には一枚のカードキー、そのカードキーを赤城に指で投げ渡す。
飛んできたカードキーを受け取ると、神楽はまたソファに座りグラスを掴み酒を飲む。
「いいわよ、行ってきなさい。貴方が耐えられるのなら……ね」
神楽の後姿を見つめながら赤城は黙って振り返り、無言で神楽の部屋を出て行った。

――廊下に人影は無い、いるといえばカードキーを持っている赤城だけ。
そっとキーを通すと扉はすんなり開いてくれた。
赤城は足を一歩前に出そうとすると、その足がふと止まる。
だが意を決して赤城は足を踏み入れた、部屋には朝日が差し込んでいたが全体的に暗く感じる。
整理整頓されている為綺麗な部屋にも見えるが、これは物が少ないだけなのだろうか。
部屋を見渡すと奥の部屋にノートパソコンがあるのが見える、赤城はそこに向かうと早速電源をつける。
『パスワードを入力してください』
電源をつけた途端にモニターに映し出された文字、そしてその文字の下にパスワードを入力するらしい所がある。
「パスワード？そんなものをつけていたのか、あいつは……」
とりあえず武蔵について思い当たる事を入力してみる。
『PWが違います』
さっきからこの表示ばかり出てきてしまう、武蔵の誕生日や好きな色。
どれも違うと表示されていく内に赤城は少し疲れてしまい後ろにあるベットに寝そべってしまう。
「何をやっているんだ、私……」
一人誰もいない部屋で呟いてしまう、何を急いで、何を焦っているのか。自分でもよくわからなかった。
正直情報などどうでもよかった……でも何かを考え、何か行動していないと駄目だ、駄目なんだ。
もうパスワード何てわからなくていい、パソコンの電源を切ろうとベットから起き上がると、そこにはさっきまでの画面とは少し違っていた。
『君の誕生日は？』
パスワードを入力してくださいという文字が消えて誕生日はいつな

のかという質問に変わっていた。
すぐに武蔵の誕生日を入力したが、それでも違いますと出る。
ふと疑問に思う、自分の事を『君』なんて言うだろうか。
それにこれはパスワードのヒントのようなもの、どうしてこんなものが表示されているのだろうか。
「もしかして……」
頭の中によぎる数字、その数字を打ち込むとＰＷの入力画面は簡単に消えた。
その画面には大きく『赤城、誕生日おめでとう！』という文字が映し出されている。
呆然とした表情で画面を見つめ続ける赤城、何が何だかわからない……。
でもそれはすぐに気づく事ができた、今日、７月８日は……自分の誕生日だという事を。
よく見ると画面に映っている大きな文字の下には数行の文が書かれてあった。

――私は無意識に顔を画面に近づけているとは知らずに、その書かれている文字を凝視していた。
『７月８日は赤城の誕生日だったよね、おめでとう。って言っても、プレゼントとかは用意してないんだ・・・ごめん』
ＥＤＰもあって赤城は多分自分の誕生日を忘れてたと思うけど、憶えていたかい？
本当なら誕生日会を開いてあげたかった、プレゼントも用意したかった。
けど、この文を今君が読んでいる時には俺はここにいないはず、本当ごめん』
何故武蔵が謝る、謝らなければならないのは……私なのに……。
『俺が死んでも泣かないでほしい、赤城にはずっと笑ってもらいたい。小さい頃からそう思ってる。

だから俺は言ったよね、もし俺が死んだら、その時は泣かないで、笑顔で俺を見送ってくれって。

でも……多分赤城は笑ってくれないんだろうけど』

ああ、そうさ。その時私は笑っていなかった。

でも武蔵、お前の顔は笑っていた、微笑んでいた……今から自分が死にに行くというのに。

『赤城達と過ごした十数年、とっても楽しかった。今まで本当にありがとう』

私の体は震えていた、今まで押し殺していた感情が爆発寸前にまで来ていた。

すると、突然誕生日のメッセージが画面が真っ暗になり消えてしまう。

私はそっと視線を下ろしパソコンの電源に震える指をかけようとしたが、モニターにまた何かが映し出された。

今度は何だ……ふと顔を上げてパソコンの画面を見てみる。

そこに映っていたのは一枚の写真だった。

皆がいる、皆が笑っている、去年の誕生日会で撮った時の写真だ。

大きなケーキの周りに皆が集まっている、その真ん中で私は顔を赤らめながら照れくさそうに立っている。

あの時、部屋に入った瞬間、皆がクラッカーを鳴らし私を迎えてくれた。

セレナがコップにシャンパンを注ぎ、奥の部屋からカイトとルフィスがケーキを持ってきて。

そのケーキに由梨音がロウソクを立てて火をつけてくれた。

神楽は煙草ではなく息を吹きかけると袋が伸びていくヘンテコなオモチャを銜えて吹いていて。

その後ノイドが私の頭にパーティー帽を被せて、そして最後に武蔵が私に花束を渡してくれた。

『赤城、誕生日おめでとう！』

――「馬鹿者…ばか、もの……うっ、ああっ……」

赤城は一台のパソコンを抱きしめながら、床に座り、声を殺しながら泣く事しか出来なかった。

一人で耐え、我慢していた感情を取り除き。一人の女として、肩を小さく震わせながら泣いていた。

止め処なく零れ落ちる涙、赤城は一人では泣いていない、今、武蔵の腕の中で泣いてる。

平和だった時間、楽しかった時間、嬉しかった時間……今ではそんなもの見る影も無い。

あの頃に戻りたい、あの頃に戻りたい……あの頃に……皆と一緒に、一緒に楽しく過ごしていた日々に……。

――部屋の奥で赤城が泣いている、やはり愛した者の死を耐えれるはずがない。

俺は病室を後にして自分の部屋に戻ろうとしていた時、偶然にも赤城が武蔵の部屋に入っていくのが見えた。

気になってこっそり部屋に入ってみたが、俺は見つかる前に部屋を出た方がようさそうだ。

俺は部屋の扉を開けると、バレないよう慎重に部屋を出て行く。

「あら、どうして貴方が伊達君の部屋に？」

聞き覚えのある声、その声の主は扉のすぐ横に立っていた。

「え、いや。それは……」

格納庫で出会った神楽だった、今会っては一番ならない人と俺は出会ってしまった。

「でも好都合ね、私は丁度貴方を探していた所なの。話してくれるかしら、全部」

神楽が白衣の中から何かを取り出すと、それを俺目掛けて投げてきた。

突然の出来事に俺は何も出来ずその投げられたものが見事に首に当たる。

だが痛みはなく、むしろ息苦しく感じた。一体何なんだ？
「それ、爆弾ね。死にたくなければ私についてきなさい」
「は……？」
気づけば俺の首には銀色の首輪のようなものが取り付けられていた。
これは……あれか、外そうとすれば爆発するという恐ろしい爆弾、
てか大抵の爆弾は外そうとすれば爆発するが。
「どうしたの？早く来ないと殺すわよ？」
女の眼はマジだ。
本当に俺を殺しかねない眼をしている、俺の命など武蔵の命と比べ
ればミジンコ程度にしか思っていなさそうだ。
この女も武蔵の事を愛していただろう、初めてみた時そんな感じが
したからな。
ここは逆らわないように行動するしかない、俺は息苦しいままその
女についていくことにした。

第３８話　生きた、代償（後書き）

ラティス
フィリオの護衛役、親衛隊隊長でありいつもフィリオの側についている。
並外れた身体能力の持ち主であり、フィリオの為なら命を惜しまない。

第３９話　謎、影

――爆弾付きの首輪がはめられているからだろうか、息苦しさを感じながら俺は格納庫に連れてこられた。
辺りに人影は無く、この広い格納庫にいるのはどうやら俺と神楽の二人だけらしい。
「これ、貴方の機体よね」
そう言われて俺は前に立ってある機体に顔を向ける、ああ、たしかにこれは俺の機体だ。
ＥＤＰに参加する前とでは機体の色、形が大きく変わっているのが一目でわかる。
何処と無く近寄りがたい雰囲気が漂っているかもしれないが俺にとってはそうでもない。
「まぁ、いちお俺の機体だな」
元をたどればこれはＢＮの機体だったが、今では見る影も無い。
魔力が一時的に戻る事は何度かあった、でもそれが持続する事は無い。ピンチになれば力が戻るとでもいうのだろうか。なんて使い辛い力だ……魔法なんて前は好きなだけ使えたというのに。
「この機体もあの力も。貴方が魔法使いだから出来た事みたいね」
「そうだけど、それを信じるのか？見た所あんたは学者だから魔法とかそういう非現実的な事は信じなさそうなんだけど」
「あら、人を見かけで判断するなんてまだまだ子供ね。……ねえ、貴方はＤシリーズの動力源が何か知ってるの？」
俺は子供ではない、見た目は子供に見えるかもしれないがもう何十年も生きている。
見た目は子供、頭脳は大人とはまさにこの事……いや、頭脳が大人なのかわからないが……。
っと、Ｄシリーズの動力源か。たしかにそれは気になっていた、たしか電気だったはず。

「電気だったよな？」
「そう、電気に近いものね。じゃあ機体には電池のようなものをはめ込んでいると思う？」
電池で動くロボットか、かっこ悪いとは言わないが電気を必要とするなら電池のようなものが必要なはず。
「それに近いようなものをはめ込んでるんじゃないのか？」
「残念ね、Ｄシリーズは全て光学電子磁鉱石で動いているのよ」
神楽はさらっとその名前を言ったが、名前が長くて上手く聞き取れなかった、とりあえず石の力で動いている事がわかった。
「この鉱石は握りこぶし程の鉱石で、凄まじい量の電気を蓄積する事が可能な石。
　何故それ程の電気を蓄積できるのかはあらゆる学者が研究しても今でもまだわからない謎の石なのよ。Ｄシリーズに使う場合、その石を更に砕き小さくしないといけないんだけどね」
そんな謎めいた石を兵器として利用しているのか……つくづく人間って生き物は人を殺す道具が大好きだな。
しかしだ、そんな石が一体何処で発掘されたというんだ。１００年前の世界にはそんな石など無かったはずだが。
「その石をちょっと見せてくれないか？」
「見せて下さい、じゃないの？」
そう言って神楽は不敵な笑みを見せながら俺に爆弾の起爆ボタンを見せてきやがる。
あれさえ取ってしまえば自由の身になれる、だが今飛びかかると確実に起爆ボタン押されるであろう。
たかが人間如きにこの俺がこんな目に遭うとは、情けなさ過ぎる……。
「み、見せて下さい……」
「よく言えました、それじゃついてきなさい」
余裕綽々の勝ち誇ったあの表情。
『うぜえええええッ！』と心の中でつい叫んでしまう。

ま、まぁ機体の動力源は興味はある、とりあえずそれを見てみる事にしよう。
格納庫内にある個室、その部屋にはガラスケージが並べられ、その中には機体の動力であろうあの石が幾つも並べられている。
「それにしても小さ過ぎないか？こんな小さな石ころがあんなでかい機体を動かせんのかよ」
「現に動かしてるでしょ、ちなみにそれは原石を砕いて加工した物よ。原石はこっちの部屋にあるから来なさい」
神楽が更に奥の部屋に入っていく、俺はまた見せて下さいとか言わすのかと思っていたが今回は原石をすんなり見せてくれるらしい。
それならお言葉に甘えて見させていただこうじゃないか。
部屋の中に入るとこれがまた薄暗い部屋が広がっていた、電灯は弱々しく光りまさに研究所といった所だな。
さて、肝心の原石は一体何処に……。
「これが原石よ」
部屋の奥で神楽の声が聞こえてきたと同時に、薄暗かった部屋に一本の光の柱が現れる。
幾つものライトがある原石をライトアップしていたのだ、その石は光に反射し幻想的な色で輝いている。
無意識に俺は一歩前に進む、石に見惚れているかのように少しずつその石に近づき始めていた。
俺はあったんだ、この石を見た事が、何度も何度も、俺は覚えている、この石が何だったのか……。
色は別としてこの形、そして目には見えないが全身に伝わってくるこの力。
「思わず見惚れちゃったの？」
気づくと俺はその石の入っている大きく分厚いガラスケースに手をつけ、顔を近づけていた。
「見惚れる？お前はこれがどうやって出来るのか知ってるのか？」
「さぁ、わからないわね、この鉱石が何故今になって発見されるの

かも、そもそもこの石はどのように出来たのかも解明されてないのよ」

「へぇ……なら俺が教えてやる。これはレジスタルと言って、魔力を持つものが体内に持っているものだ」

神楽は驚く様子も無く俺を見つめている、突然こんな事を言われてもどうリアクションしていいかわからないからな。

「詳しく教えてくれないかしら」

率直な感想、意見だろう。手に持っている起爆ボタンを机の上に置き、胸ポケットから煙草を取り出す。

そして煙草をすい始めると俺に説明を要求してきた。

「レジスタルとは何か、アンタにもわかるように教えてやるよ。魔力を持つものは生まれた時からこのレジスタルが体内にある。体内と言っても体を解体した所で出てくる代物じゃないけどな。これが体内にある限り人は魔法を使うことが出来る、このレジスタルから魔力を呼び出し魔法を使っているんだ。魔力を使いすぎるとレジスタルの中に溜められている魔力も少なくなっていくが、時間がたつとまた少しずつ魔力は回復していくんだよ」

――果たして俺の話についてこれるだろうか、正直魔力を持たない人間には信じてもらえないような内容だし。

「それじゃあ、そのレジスタルを取り出すにはどうすればいいのかしら」

どうやら理解したらしい、やはり学者は勝手な判断はしないのか。

それについての実験、結果、立証、根拠……という情報を見て初めて判断でもするのだろうか。

「取り出す事は不可能に近い、ましてや何の力も無いこの世界の人間には不が三つつくぐらい不可能だ」

「へぇ、不可能……ね。そう言われると何としてでも取り出したくなるわね」

「おい待て、そんな事より俺の話しを聞いて何とも思わないのか？」

「思うわよ、とても興味深い話しだわ、このレジスタルを人工的に量産する事が出来れば……」
「違うだろッ！お前これ原石一個に魔力を持つものが一人死んでるんだぞ！？
しかもこの世界はそれを機体の動力源とかに使ってやがる、となると原石は百個や千個を軽く超えているはずだ。
となると昔魔力を持つ人間が何万人も死んだって事だろ！？」
訳がわからない、百年前に一体何があったんだ。
皆は戦ったんだ、神とかいう奴と。神は与えた、人類にチャンスを、百年後……。
頭が混乱してきた、何かある、何かがあるんだ。それでもそれを思い出せない。
そもそもこの世界は本当に俺のいた世界だったのだろうか、そもそも神という名の兵器なんて存在していたのか。
それにＥＲＲＯＲだってそう、この世界の生き物ではない。となると別の世界から来た生き物じゃないのか？
あの化け物はこの世界だけではなく他の世界にだっているはず。もしかして他の世界で何かあったのだろうか。
何か手がかりはないのか、情報はないのか。他の世界の事を知っている者はいないのか……。

――「これは研究する必要があるわね」
２本目の煙草に火を付け始める神楽、その火に何故か俺の視線は向かった。
「いたっ！！」
突然の俺の声に少しビクつく神楽、すぐさま起爆装置を握るとそれを俺に向けてくる。
「な、何？急に大きな声何か出しちゃって。何がいたの？」
「いたんだよ、他の世界からこの世界に来た一人の人間と、一匹の爬虫類がな」

思い出した、もう何週間前の出来事だろうか、俺は一度他の世界から来た者に会った事がある。
まぁ散々な目に遭わされたもんだが、すっかりあいつ等の事を忘れていた。
「魔法の次は他の世界？それが本当ならとても面白そうね」
そうと決まれば奴を探しに行くしかない、まず俺がしなければならない目的が一つ決まったな。
となると、こんな所に長居は無用、ミシェルをつれてあの森に行って探しに行くしかない。
神楽の様子だとＮＦにはまだ見つかってないみたいだし、となるとＢＮかＳＶ、どちらかの軍は何か情報を掴んでいるはず。
「ちょっと待ちなさい、勝手に行動すると押すわよ？」
気づけば俺は部屋のドアの前に立って部屋を出て行こうとしていた。
すぐさま神楽が俺を止めようとするが、無駄な事だ。
俺は神楽に数歩近づくと、神楽の銜えていた煙草と共に起爆ボタンが地面に落ちる。
一瞬で取り出した剣で起爆装置を真っ二つに切り落としてやった、最初からこうすればよかった。
「禁煙したほうがいいぜ？」
「ご忠告ありがとう、でも……それで勝ったつもり？」
ポケットから何を取り出すのかと思いきや、先ほど切り落とした起爆装置だった。
「貴方と色々話せて面白かったわよ、さようなら」
おいおい、普通二つも起爆装置を作るか？
煙草の煙を俺に吹きかける、そしてニッコリと笑顔を見せると起爆ボタンに指を乗せた。
「そこまでだ」
俺を横切る人影、赤髪を靡かせ刀を握り締めている女性。
一瞬の出来事だった、２個目の起爆装置が無残にも切り落とされる。
「神楽、ここで何をしている」

俺と神楽の前に立っていたのは赤城だった、少し前に見た赤城とは違う。いつもの赤城がそこに立っていた。
「赤ちゃんだって何してたのよ。盗み聞きはよくないわねぇ」
「気づいていたのか……」
俺は全く気づかなかったけどね。まさか赤城がここに来ていたとはな……。
神楽は小さな溜め息を着くと、赤城と俺の横を通り部屋を出て行こうとする。
「聞く事は聞いたし、もう彼に用は無いから。好きにしていいわよ、それじゃ」
俺は用済みって事か。まぁ何にしろこれで俺は自由の身になった。
と思った矢先に、赤城は振り向くと俺に刀を向けてきた。
「動くな」
そう言って刀を振り上げると、俺の首目掛けて一気に刀を振り下ろす。
さっきまでの息苦しさが消えたと同時に、俺の首についていた首輪が地面に落ちる。正直殺されると思った……。
赤城は刀を鞘に収めると、少し寂しい表情で俺の前に戻っている。
「甲斐斗、一つ問いたい、お前の力で、亡くなった人を蘇らす事は……」
弱々しい声、さっきまでの勇ましさがもう消えていた。
「残念だがそれは無理だな。例え俺が魔法を使えたとしても不可能だ」
「ふっ、そうか。馬鹿な事を聞いてすまないな、今のは忘れてくれ」
二人っきりの室内、俺は黙って部屋を出て行こうとした時、赤城が呟いた。
「これからお前はどうするんだ、人探しに行くのか？」
「ああ、そうするよ。俺を止めるか？」
「いや、お前は自分がしなければならない事を見つけたようだ、それを止めようとは思わない。私も見つけなければならない、今私が

出来る事を」
やっぱり強い。何たってあの武蔵が認めた強さだからな。
「そうか……まっ、お前ならすぐ見つけられると思うけど」
そんな事しか言えない俺は部屋を後にし、自分の部屋に戻っていった。

――自分の部屋に戻っている時、ふと気づいた。
俺は1日中寝ていた、って事はミシェルを1日部屋に放置していた事になる。
そう考えると足取りが急に早くなり、気づけば走って部屋に戻ってきていた。
部屋の扉を開けると急いで中に入ると、部屋の電気はついておらず、ミシェルの姿も見当たらない。
まさか俺がいない間に何処かに行ってしまったのか、もしや誰かに拉致られた？
そうだ、ＳＶの奴等はミシェルを狙っていたじゃないか、そのＳＶが今基地内にいるって事は……馬鹿か俺は、気づくのが遅すぎだ。
その時だった、部屋の奥で何か物音が聞こえる、もしかしてミシェルかもしれない。
物音がした部屋に入ってみると、ベットの上に座り全身を毛布で体を隠しているミシェルがいた。
「ふぅ、いたのか、ごめんな、帰って来れなくて」
そう言って毛布を取って見ると、たしかにそこに少女はいた。
「うおわっ！？」
「驚いた？」
そりゃ驚いて声も出る。
毛布の中にいたのはミシェルではなく前に一度会ったエコという少女だったからだ。
「残念だけど、あの子はここにいないわよ」
エコはベットから降りると椅子に座って届かない足を上下に動かし

ている。
こいつはＳＶの人間、病室で俺を襲ってきたのもＳＶの人間。って事はコイツも俺を殺しに来たのか？
「ここにいないって事は、お前等の所にいるって事だよな？」
「そう考えるのが、普通……」
「で、お前は何でここにいるんだ？」
「どうしてだと思う……？」
質問を質問で返してくるなよ、それにコイツは喋り方が独特なんだよなぁ。
遅いというより、のろいな、葵とは正反対の性格だな。
「そうだなぁ、俺を殺しに来たとか？」
「正解」
……まさか、本当に俺を殺しに来たというのか？
だがこの距離でどうやって俺を殺す、この間合いなら俺の方が有利、まさか別の仲間がどこかに隠れているのか！？
「嘘よ……」
さっきまでの緊張が一瞬に解けた、こいつ真顔で話すから嘘なのか本当なのかわからない。
「少し、お喋りがしたかったの……」
「そう言って時間を稼ごうとか思ってるんじゃないのか？もしかしたらまだ近くにミシェルがいるかもしれないからな」
「私とお喋り……嫌？」
エコはそう言って首を傾ける、こいつは何しに来たんだ。本当に喋りに来たのか？
相手の目的がわからない以上俺はミシェルを追うしかない。
「嫌じゃないけどなぁ、今はお前と話してる場合じゃねえ。俺は探しに行くからな」
付き合ってられん、さっさと部屋を出てミシェルを探しに行くか。
そうだな、いるといえばＳＶの戦艦にいるはず、そこに行ってみよう。

「あの子の話しなんだけど、知りたくないの？」
「……ミシェルの事か？」
「うん、あの子について……興味ないの？」
……ＳＶにはミシェルを狙う理由がある、となるとミシェルに何かがあるのはわかっていた。
初めて会った時、俺は彼女に助けられたようなもんだ、あの声で。
そんな不思議少女興味が無いといえば嘘になる、ただ俺は深く考えようとしていなかっただけだ。
「興味がある……って、普通なら言うんだろ」
だからこれからも、あまり深く考えないでおく事にするさ。
「話はまた今度してやる、じゃあな」
「後から後悔しても、知らないよ？」
そんな事を後ろから言われたのは、既に部屋を出た後だった。
さてと、ＳＶの艦でも探しに行くとするか、捕らえられているならそこしかない。
まだ艦はあるはず、出航する前に乗り込まないとな。
そう思いながらふと窓の外を見てみると、そこには勢いよくＳＶの艦が走っていた。走っていった？
「っておい！まじかよ！？」
思わず足を止めて窓の外で走っている戦艦を凝視してしまう、これから探しに行こうとしていたのにもう出航しているだと？
それじゃエコは置いてけぼりになってるんじゃないのか？まぁ後から艦と合流すればいいだけか。
って、今は考えている場合じゃない。あの戦艦を力ずくでも止めてミシェルを助け出してやらねえとな。
そうと決まれば早く格納庫に向かわなければならない、止めていた足をまた動かし始めると格納庫へと走っていく。
「すみません！ちょっと待ってください！」
が、急いでいる俺を止めるかのように後ろから少女の声が聞こえてきた。

エコの声でもない、ミシェルの声でもない、しかし聞いた事のある声、たしか……。
後ろに振り返るとその少女は息を切らしながら立っていた、どうやら俺の後を追いかけていたらしい。
そして俺は見たことがある、この顔。基地内にＥＲＲＯＲが侵入した時、一緒に行動をしたレンという子だ。
まずい……非常にまずい、俺の事について何か聞いてくるはずだ、いや、もしかして助けられたお礼でも言ってくれるのか？
「突然すみません！赤城少佐の部屋の場所を教えてほしいのですけど！」
赤城少佐の部屋？
「えーと、何処だろうねぇ、俺も知らないかな……」
「そ、そうなんですか。うぅ～わかりました、自分で探してみます、ありがとうございました」
そう言って彼女は小さく頭を下げた後、俺を追い抜いてどこかに行ってしまった。
めちゃくちゃ礼儀正しい、いや、それよりも何故あの子は俺に反応しなかったんだ？
いくら何でも驚くはず、でも彼女は驚く所か笑みを見せていた。もしかしてレンのそっくりさん？そんな訳ないよな……。

――格納庫についた俺は早速自分の機体に乗り込み電源を入れる。
外見は変わっても内側は余り変わっていない、そもそもこの機体が変化したのも俺の力だったのだろうか。
格納庫の扉は開いたままな為すぐさま機体を発進させると、前まで乗っていた機体と同じはずだが出力の違いに少し戸惑ってしまう。
だが決して嫌な訳ではない、むしろ心地良い、この機体があれば目的も達成できそうだ。
ＳＶの戦艦は意外にも速い、だが追いつけない程でも無かった。
当然俺が基地から離れると、数機のギフツが俺を追ってくる、当然

といえば当然。
しかし追いつくことは出来ないだろう、そんな量産機じゃ無理無理。
その時、圧倒的な速さでギフツを追い越し一機の機体が俺の機体を掠めた。
『そこの奴、止まってくれねえかな？』
無線から葵の声が聞こえる、どうやらエコを乗せる為に基地に残っていたらしいな。
「止まってほしけりゃ止めてみな」
『おいおい、別に俺達はお前に危害を加えようなんてもう思ってないぜ？』
こいつ今なんて言った。俺に危害を加えないだぁ？
「はぁ？さっき俺はてめえ等の仲間に殺されそうになったんだぞ！？何が危害を加えないだボケ！」
『ああ？そんなの知らねえよ。とにかく艦を追うなって言ってんだよ』
「知るか、とにかくミシェルは返してもらう」
『葵は喋らないで……状況が酷くなる……』
うんざりしたような顔をしたエコがモニターに映る。なるほど。この機体はやはり二人乗りか。
『私達はあの子に危害を加えない、だから引いて……』
「危害を加えない？そんなの当たりなんだよ。それよりお前達はミシェルに何をする気だ」
『前に言った……あの子は人類の希望……貴方はこの世界の、人類の希望を……壊そうとしている……』
俺がこの世界の、人類の希望を壊そうとしているだと？
人類の希望、それは平和な世界だと俺は思っている、だとすれば俺はその平和を乱す存在なのか？
『これ以上邪魔をするなら、貴方を……全力で消す』
冷静な顔をして恐ろしい事を喋りやがる、それに眼が完全に本気だ。
そうなるとミシェルはそれ程の力を秘めているという事になる。

そしてその力で人類を平和にするつもりらしいが、それでミシェルはどうなるんだ？わからない、どうなるかなんて俺にはわからない。もしかして俺は間違った事をしていたのか？この世界から見れば俺は一人の悪に過ぎないというのか？

俺のしている事は正義なのか、それとも悪なのか。どっちなんだ…別に俺は正義のヒーローでもなければ悪の大魔王でもない。

俺はミシェルの為を思ってやってきた、助けてきた、それはミシェルが望んでいたはずだ……。

「おい、俺がミシェルと一緒の艦に乗るのは駄目か？」

自分の目で確認するしかない、判断するしかない、それしか俺にはわからない。

『無理……』

「なっ、どうして無理だ！？ちゃんと機体からも降りる！抵抗もしない！だからミシェルに会わせろ！！」

『危険すぎる……貴方の、力……』

危険すぎる力、ＥＤＰの時俺はその力を発揮した事があった。

あの時の事は俺もよく憶えていない、しかしあの時、たしかに俺は元の魔力を取り戻していた。

その力が危険と言われても不思議ではない、おかしくもない、むしろ正常な判断だと言える。

『引いて、貴方がこの場から引けば……事なきを得るの』

「そう簡単に引けるわけないだろ、艦を止めてミシェルに直接聞かなくちゃならねえ」

『馬鹿……貴方を生かしてあげるって言ってるのに……！』

急に強い口調に変わった、そしてエコは一方的に通信を切ってしまった。

どうやら怒らせてしまったらしい、しかしあれだな、彼女は俺を生かすと言っていたが、それは俺が逃げればの話し。

戦えば俺は死ぬという事になる。面白い、彼女は俺に勝てると言っているようなもんだ、そんな事を言われて引き下がれるはずがない。

俺の強さを見せ付ける必要があるな……いや、エコは俺の力を知っているはず、だから俺の力を危険と言っていた。
危険だとわかっているのに、俺と戦うというのか？いや、彼女達は戦いを求めていない、むしろ俺が戦いを望んでいるのか。
……どうすればいい、こんな時どうすればいいんだ？やはりミシェルに直接話を聞く為に俺は戦わなければならないのか？
『二人とも待ってください！』
一人の青年の声が聞こえる、この声の主を俺はハッキリと鮮明に覚えている。あの赤鬼のパイロットだ。
俺の乗る機体、そしてエコ達が乗る機体の前にその赤鬼は現れた。
どうやら破壊された機体の両腕は既に修理されているようだ。
『ここで俺達が戦ってどうなるんですか！？戦うのは止めてください！』
戦うのは止めろって……別にまだ戦ってないわけだが。
「俺だって別に好きで戦いたいんじゃねえ、ミシェルに会うためには戦わなくちゃならないみたいなんだよ」
『甲斐斗さん、貴方の言い分もわかります、気持ちもわかります。
だから俺達はあの子に一切危害を加え無い事を約束します、ですからお願いします、信じてください！』
そう言って仮面の男が徐に仮面に手をかけると、そっと頭から外していく。
モニターに映っていたのはまだ若い男だった、そして俺はこの男に見覚えがある。
たしかＢＮの基地にいた時だ、周りをＥＲＲＯＲに囲まれ化け物に食べられそうになってた時、俺が助けた奴だ。
こいつはＢＮの兵士じゃなかったのか？何故今こんな所で、あんな機体に乗っている。ＢＮのスパイだった可能性もあるな。
男は俺の眼を見つめているかのようにモニターに映っている、俺に信じてくれと訴えかけるように。
「ほぉ、んじゃその約束を破ったらお前はどう責任をとる」

『この命で償います』
あっさり言ったなコイツ、命で償うだと？
「……お前、名前は？」
『俺の名前は愁と言います』
「愁……なら一つ言っておく。お前人との約束を死で解決できると思ってるのか？破棄できると思ってるのか？
お前が死のうが生きようが俺にはどーだっていいんだよ。……だが、俺はお前を信じてやってもいいと思っている。
ただし、もしお前が約束を破れば。お前に死より辛く残酷な苦痛を味あわしてやる、いいな？」
『はい、必ずミシェルを守って見せます、約束します』
瞬きもせずに俺をじっと見つめている、この男なら嘘はつかないだろう、そんな気が感じられた。
正直人を信じたり、信用したりする事は滅多に無い俺が、この男は信じてみようと思えたのは、共に戦場で戦ったからだろうか。
今は……奴の言葉を信じるしかない。
「なら今は引いてやるよ、また近い内にそっちに行ってミシェルを迎えに行くけどな。それまで約束を守れよ、愁」
俺は通信を切ると機体の進行方向を横に反らし艦の後を追うのをやめた。
……これで良かったのだろうか。なんて考えるときりが無い、考えるのは止めだ。
今はそう、あの俺を焼き払った龍と、飾りの剣を持った少年に会いに行くしかない。

――――ＮＦの司令室、そこには先ほど格納庫にいた神楽と、指揮官らしき人物が立っていた。
甲斐斗を追っていたギフツが次々に基地に戻っていく中、その指揮官が神楽に問いかけた。
「何故戻させた、あの機体があればＮＦは更に……」

「あの機体が危険な物だって事は、ＥＤＰの指揮をしていた貴方ならわかるはず。
　それにあの機体を失っても心配はいりません、あの機体のデータは全てコピーしましたから」
ポケットの中から一枚のディスクを取り出すと、それを顔の前に持っていく。
指揮官がそれを取ろうと手を伸ばしたが神楽はまたすぐにポケットの中にしまってしまう。
「このデータを元に機体を作ろうじゃありませんか、そしてその役目、是非私に任せてもらえませんか？このデータと私がいれば実現できます、更に上を行く機体の開発をする事が」
「……わかった、その件は君に任せよう。しっかり頼んだぞ」
「ありがとうございます、では……私はこれで」
全ては彼との約束の為に、一人の女が動き始めていた。

第３９話　謎、影（後書き）

正式名ＭＦＥ－アストロス・ガンナー　（Ｓａｖｉｏｒｓ製）
全長－２２ｍ　機体色－灰色　動力源－光学電子磁鉱石
アストロスに武装パーツを最大まで組み合わせた機体。
相手を簡単には近づけさせない程の大量の兵器を武装している為機動力はアストロス以下。

第４０話　常識、認識

――結局俺はミシェルを諦めてしまった、機体を走らせていく内に後悔が募る。
だから俺は早くあの少年と爬虫類を見つけなければならない、それにしても一体あいつ等何処にいるんだ。
今荒野を走って森に向かっているが、あれからかなり日がたっている為もういないかもしれない……。
その時、レーダーに無数の反応が映る。熱源反応5、それと生体反応？にしては移動速度が早過ぎないか？
たしかＥＲＲＯＲはまだこの世界から消えてはいない、とすればＥＲＲＯＲの生き残りを追っているのか。
気になるな、もしかして……もしかしたなら、いや、そんな事ないとは思ってるけどさ、いちお行ってみるか、いちお。
機体を走らせ熱源反応のする場所に向かってみるとＳＶの機体が低空で飛ぶ龍を狙っていた。
龍……これは偶然なのか？それとも運が良かっただけか？それならこの運を生かすに他は無い！

――龍の２枚の翼には幾つもの穴が開いており、血を流している、それでも龍は翼を止めず羽ばたき続けていた。
だがそれも長くは続かなかった、龍の飛んでいる下にいる機体がワイヤーを龍の体目掛け飛ばしている。
何本ものワイヤーが龍の体を巻きつき羽ばたく事が出来なくなった龍はその場に落ちるとぐったりと横たわる。
その龍を囲むようにＳＶの機体が並んでいた。
『隊長、レーダーに反応有り。アンノウン１機がこちらに向かってきています』
『アンノウン？まさか報告にあった例の……』

『どうします、アンノウン機は止まらずこちらに進んできています！』

ＳＶの機体が俺の機体目掛けマシンガンを手に取るが時既に遅し。

身を低くし弾丸を交わした後すかさず剣を振り上げる、敵機体の両腕が宙を舞う。

そして振り上げた剣を振り下ろし、横にいる敵機の両腕を切り落す。

後は両腕を失った機体の足に蹴を入れると簡単に倒れてしまい、相手は身動きが取れなくなる。

「おいお前等、生かしてやるから大人しく引きな。じゃなきゃ死ぬぜ」

こんな圧倒的な力量を見せ付けらたらどうする事も出来ないだろう、残りの３機は武器を下ろすと負傷した機体を起こしに取り掛かった。

『っく、一時撤退だ！基地に戻るぞ！』

敵機体は俺に背を向けると無様な姿で去っていく。弱者はそうやって強者にひれ伏していればいい。

さってっと、邪魔者はいなくなった。まさか今この龍……という名の巨大な爬虫類に会えるとはな。

しかし少年の姿が見当たらない。

龍の体にはまだワイヤーが巻き付いたままで身動きがとれない状態だ。

そのうえ出血が酷い、聞く事聞く前に死なれたら困るしなぁ、仕方ない、安全な場所に運んでやるか……。

――森に到着するととりあえず龍を寝かす、それにしてもさすが龍だな、傷口が少しずつだが元の状態に治っていく。

それでも大きな傷は体の至る所あるし、翼だってボロボロ。当分休まなければならないだろう。

……伝説上の生き物、正直いろんな世界を見てきたがこうも絵に描いたような龍は見たことがなかった。

あー腹減った、もし龍が死んだら肉でも食べてみるか。どんな味が

するんだろうなぁ、もしかしてヘビの味？あれ、ヘビの味ってどんな味だ？
そんな事を思いながら龍の体を触っていると、突然龍が起き上がり始めた。
「お、気がついたか。まだ怪我は治ってないから安静に……」
俺の声を掻き消す咆哮、龍は傷ついた翼を大きく広げるとその場で羽ばたき始めた。
「っておい！安静にしろって言ってんだろ！」
龍が翼を羽ばたかせる為強烈な風が俺を襲う、立っていられるのもやっとだ。
とりあえず暴れるのを止めないと大変な事になる、一度機体に戻った方が良さそうだな。
そう思いすぐ近くに止めてある自分の機体まで向かおうとした途端に龍は急に大人しくなる。
「何がしたいんだこの龍、とりあえず言葉通じてるのか？」
そう言うと龍は小さく頭を下げる、どうやら言葉は理解できるらしい。
「よしよし、それなら良い。まず俺はお前の敵じゃない命を助けた恩人さ。だからもう焼かないでくれよ？」
龍はまた小さく頭を下げる、どうやら俺が敵ではない事はわかってくれたみたいだ。
さてと、何から聞こうか……って。龍喋れないからイエスかノーみたいな感じで判断してもらうしかないな。
「おーい、少し質問いいか？お前と一緒にいた少年は生きてるのか？」
こくんと頭を下げてくる、どうやら無事のようだ。
「じゃあ今少年は安全な所にいるのか？」
そう言うと頭を大きく横に振る、となると捕まえられている可能性が高い。
となるとこの龍は何をしていたのかが理解できた、こいつはその少

年を助けに向かっていたんだな。
あんなにも体に傷がつきながらもあの少年の元に向かっていたその意気は良い。
でも力も無いのにただ行ったってそれはただの馬鹿だ。
「お前はあの少年を助けに行ってたんだよな？」
予想通り龍は頭を下げる、そういえばＳＶの兵士が基地があるとか言っていたな。
とすれば少年はその基地にいるって事だ、やっぱ俺って運が良い！
そうと決まれば早速その基地に行くとするか。
「よし、なら俺が代わりに助けに行ってやる。だからお前はそこで安静にしてろ」
そう言っても龍は傷ついた体を必死に起こそうとしている、健気な姿だ。
「安心してお前は寝とけ、俺一人で十分助けられるからな、だから今は体を休めとけ」
その言葉を聞いて安心したのか、龍は小さく頷くとゆっくりと目蓋を閉じた。
人殺しも嫌いじゃない、だが人助けも嫌いじゃあない。聞く事もあるしさっさと助けに行くか。
早速機体に乗り込みＳＶが逃げた方向に進路を取る、しかしどうやって助けようか、機体で行けば目立つしな……。

――荒野と森の間にそのＳＶの施設が建てられていた。
施設の中、一人の少年が狭い部屋で椅子に縛られていた。
その狭い部屋に一人の兵士が入ってくると、少年は部屋に入ってきた兵士を睨んでいた。
「お前はこれからＳＶの本土に送られる、そこでたっぷりと話しを聞かせてもらう事になる」
「僕から何を聞くっていうんだ！聞きたい事があれば全て話してやる！だからマルスを……！」

「マルス？あの生き物の事か、たしか捕獲に失敗したとの事だ、所属不明の機体が邪魔に入ってな」
兵士の言葉を聞いた途端に睨んでいた眼つきが緩む。
「そういえば少年、お前の名前を聞いていなかったな。名前は何と言うんだ？」
「僕の名前は……ロアといいます」

――少年ロアが乗る戦艦にはある人物が乗る特別な戦艦だった。
リシュテルト家の少女、だがフィリオではなくその妹のアリスが乗っていたのだ。
「え～っ！ドラゴン捕獲できなかったの？どうして？！」
アリスは戦艦にある休憩室で紅茶を飲んでいたが怒った様子でティーカップを受け皿に戻す。
彼女の横には一人の眼鏡を掛けた女性と一人の男性が立っていた。
その一人の女性は椅子に座っているアリスに向かって必死に何度も頭を下げている。
「申し訳ございません！本当に申し訳ございません！」
「謝ってるだけじゃ何もわからないでしょ！？ちゃんと報告して！」
椅子から降りると眼鏡を掛けた女性の前まで歩き腕組をして睨んでいる。
「あ、私はまた謝ってばかり……本当に申し訳ございません！申し訳ございません！」
すると女性はまた申し訳無さそうに頭を下げ始めた。
これではきりが無い、無限ループになりかねない。
「あああー！もううるさいわよ！シャイラはいつもこうなんだから。代わりにゼスト、貴方が報告して」
シャイラの横に立っている青年、ゼストはアリスを無言で見つめた後ゆっくりと目蓋を閉じた。
「知らん」
「何で知らないのよ！てか貴方誰に口聞いてるの！？」

「生意気な小娘」
「な、何ですってぇえええっ！！」
ゼストに殴りかかろうとするアリスを後ろから掴み必死に止めさせようとするシャイラ。
顔を真っ赤にして怒っているアリスに、シャイラは困ったような顔をして必死にアリスを宥めていた。
「放しなさいよシャイラぁあ！コイツの面ぶん殴らないと気がすまないのよぉっ！」
「お嬢様落ち着いてください！ゼストさんも駄目ですよ、お嬢様にそんな事を言っては！」
黙ったままゼストは振り向くと、そのままアリスに背を向けて部屋を出て行ってしまう。
「むきぃーっ！どうしてアイツは私の言う事聞かないのよ！私はリシュテルト家の者なのに！」
「私が後でよく言っておきますので、今は落ち着いてくださいお嬢様」
「シャイラに落ち着いてなんて言われたくないわよ……」
「すいません、それと龍の件ですが、所属不明の機体が助けたとの事。
　この機体はラティスさんから報告を受けた例の機体だと思われます」
例の機体、アリスは笑みを浮かべると、嬉しそうにシャイラに顔を近づけた。
「そ、それってＥＤＰの時にすごい力を発揮したって言うあの機体よね！」
「はい、そうでございます。如何なさいますか？」
「それはもちろん！……決まってるでしょ？」
アイコンタクトと言うのだろうか、シャイラはすぐに笑顔になると頷いた。
「かしこまりました、それでは後で準備をしておきます」

――――ＳＶの戦艦、その艦内には一人の男、つまりこの俺、高橋甲斐斗が現在乗っている。
実は前にもやった事があったのだが、機体は念じれば動かす事が出来る、つまり遠隔操作可能って事だ。
これ魔法じゃないのか？と思うかもしれないが、正直どうだろうか、遠隔操作と言っても機体を呼ぶ事しか出来ない。
少しだけでも魔力が戻ったのだと思っておこう、その方が気が楽だ。
さて、そんな訳でいつもどおり戦艦の格納庫についた訳だが……どうするかな。
さっきから戦艦が揺れだしたし、おそらく発進したのだろう。てか俺はいつもこうやって忍んでいないか？
考えたって仕方ない、さっさとあの少年を探して森に連れて帰らないとな。
兵士の姿があちらこちらに見える、格納庫見渡すと奥の方に一つの扉が見えた、回りには兵士の姿も無い。
とりあえず物陰に隠れながらその扉に近づいていく、扉の前に立つと自動で扉が開き道を開ける。
さて、どうやって探す。一つずつ部屋を探していくのは余りにも無謀な気がする。
普通はここに来る前に考えておく事だったな……と、俺が道の真ん中で考えていると二人の兵士が角を曲がって俺の前に現れた。
こういう時は人に聞くのが一番だな。二人の兵士が俺の存在に気づくと当然こう言った。
「き、貴様何者だ！そこを動くな！」
大抵の奴はそんな事しか言えない、懐の拳銃を手を伸ばしている間に俺は一人の兵士の腹に蹴りを入れる。
そしてその横にいる兵士の頤には鉄拳を食らわしてやった、引き金を引かれ銃声を出させる訳にはいかないからな。
頤を殴られた兵士がぐったりしている、どうやら気絶をしたようだ

……死んではいないだろう。
その後ろでは腹を抱えて俯いている兵士が必死に悶えている。
気を失っている兵士の懐から拳銃を取り出すと、俺はその苦しんでいる兵士の頭に銃口を突き付けた。
「おい、命が欲しけりゃ答えろ。ここに龍と一緒にいた少年が運ばれたはずだ、今どこにいる」
「し、知らない……」
「じゃあ死ね」
「わ、わかった！少年は今2階の監禁室にいる……」
「監禁室って何処だ？答えろ」
「この道を右に行けば階段がある！そこに上ればすぐだ……！」
ふむ、親切丁寧に教えてくれてどうも。お礼にその銃で後頭部を殴りつけると兵士は気を失ってしまった。
気絶している二人の兵士を見られるのはまずいが、その前に少年を助ければいいだけだ。
俺は握り締めている銃を手に監禁室まで走った。階段を上ると案の定数人の兵士が見張りをしていた。
「き、貴様何者ぐぁっ！？」
ここの兵士は同じ事しか言えないのか？見張りの兵士をぶっ飛ばすと剣を呼び寄せる。
頑丈そうな扉だが俺の剣を使えばいとも簡単に破壊出来た、だが今の音で周りの兵士に気がつかれたかもしれない。
部屋に入ると後ろ手に手錠をされている少年がそこにいた、突然の事に少年は驚いた表情をしていたが俺の顔を見て更に驚いていた。
「あ、貴方はたしかあの時の……！」
「話は後だ、俺について来い、助けてやる」
手に持っている銃を少年に渡し、部屋の隅においてある机の上にある剣をその少年に手渡した。
「もしかして君がマルスを助けてくれたの？」
「ん、まあな。お前を探している時にＳＶの兵士に襲われていたか

らな」
俺が何気なく助けた龍は少年にとっては大事な親友なのだろう。
「ありがとう、本当にありがとう！この恩は絶対に忘れない！
っと、自己紹介がまだだったね、僕の名前はロア、君の名前は？」
「俺の名前は甲斐斗、まぁ詳しい話しは帰った後にするか、いまはさっさとここから逃げないとな」
さてと、既に機体は呼んである、もう艦の近くまで来ているはずだ。
後は外に出ればいいだけだが……めんどくさい、ここから出るとするか。
「えーっと、ここら辺かな」
手に握る剣を大きく振り下ろすと壁には簡単に穴が開いた、外は青空が広がり良い景色だ。
「よし、こっから飛び降りるぞ」
「え、ちょっと待って。ここから飛び降りるって？」
「ああそうだ、行くぞ」
ここから飛び降りろと言われてもそりゃ誰だって拒む。
仕方が無いので少年の手首をしっかりと掴む。
「ちょっと待って！ここから飛び降りたら……」
大丈夫だって、多分。少年が飛ぶのを止めさせようと説得しようとしたがもう時間が無い、俺は少年と一緒に艦の外へ飛び出した。
「うわぁあああああっ！」
そりゃ驚いて声も出すわ、内心俺も少しビビった。
予想以上に風圧が強い、俺達はあっと言う間に落ちていく。
だが俺達が地面に落ちる事は無かった、計画通りにそこには俺の機体がちゃんと来てくれていた。
機体の手の平の上で俺達は尻餅をついて倒れていた、ごめん正直に言うと助からないかと思ったからだ。
「た、助かった……」
手は胸部にまで俺を運ぶと俺はすかさずコクピットに乗り込む、後はここから逃げるだけだ。

「か、甲斐斗！艦から何か出てくるよ！」
何？えらく対応が早くないか？たったあの数分でもう敵の機体が発進してくるとは。
それとも俺の機体がレーダーに映っていたのかもしれないのな、どっちにしろ早くここから逃げなければならない。
せめてこの少年だけでも安全な所まで運べればいいんだが……。
その時ハッキリと聞こえてきた獣の咆哮、後ろを見てみるとそこには傷ついていたあの龍が必死に翼を羽ばたかせここまで来ていた。
そんな怪我なのによく来たな、飼い主に忠実なのは褒めてやってもいい。
「俺が時間を稼ぐからお前は先に逃げてろ！」
龍が俺の横に並んだ時、手の上で座っている少年をそっと龍の背中に乗せる。
少年はまだ驚いた顔をして俺の機体を見つめていた、龍は少年が背中に乗ると俺の機体からどんどん離れていく。
後は時間を稼ぐだけだ、矢だろうが鉄砲だろうが何だってかかって来い。
戦艦は止まらず走り続けていると、艦のハッチが開き中から2機の機体が飛び出てくる。
今までに見た事のない機体だ、1機は桃色の悪趣味な機体。もう1機は……何だありゃ、でかくてゴツイな。
でかい機体は見る限り全身武装をしていやがる、重そうだな。
丁度この機体の力を試しておきたかった所、この2機の相手になってもいいだろう。
『その機体に乗ってるパイロット！私の話しをよく聞いてなさいよ！』
突然モニターに女性が映ると、いきなり呼びかけられた、誰だコイツは。
『私はリシュテルト家の王女！アリス・リシュテルト！貴方の名前を教えてもらおうかしら！』

王女？貴族が何で戦場に出てきてるんだ。
それに自己紹介を勝手に始めてやがる、しかしこれは上手くいけば戦闘を回避できるかもしれない。
「俺の名前は高橋甲斐斗だ」
『へぇー、そんな機体に子供が乗ってるなんて少し意外ね。
まぁいいわ、貴方には選択肢が二つあるから、どちらか好きな方を選びなさい』
てめえだって子供だろが！大体俺はガキじゃねえ。人を見かけで判断してんじゃねえ。
と、説教してやりたいが今は許してやる。さぁ早く選択肢とやらを言ってもらおうか。
『一つ目は今すぐ武装解除してその機体から降りてきなさい！そうすれば貴方に一生遊んで暮らせる程の富を与えてあげる！
二つ目はこの気高きリシュテルト家の忠実な部下になる事！
貴方無所属なんでしょ？部下になるのなら私が全て面倒見てあげるわよ』
その言葉を聞いて俺は肩を震わしながら俯いてしまった。
「っぷ、く……」
だ、だめだ……笑いが堪えきれない。
「ぶはははは！何その貴族丸出しの発言、ウケ狙いにも程があるっつーの！」
『な、何よあんた！こんなもったいない話を棒に振る気なの！？馬鹿丸出し発言ね！」
「俺はガキに面倒見てもらうほど落ちちゃいねえんだよ、来るなら来い、相手してやるよ」
出来れば戦闘を回避したかったが、ガキに舐められてるようじゃ気がすまねえ。
この戦場に出てきた事、そして俺を馬鹿にした事を後悔させてやる、あんなピンク色の悪趣味な機体に負ける気がしない。
『んもぉおおお！男って本当馬鹿ばかりね！シャイラ！あいつをこ

らしめて！』
ピンク色の機体が重武装した機体の後ろに移動すると、ピンクは俺の機体に指を指す。
『畏まりましたお嬢様、しかしあの機体を捕獲する場合少し機体が破損する恐れがあります。
それに中に乗っている方も無事ではすまないと思いますが、それでもいいのですか？』
あの重武装している機体に乗っているのはあの少女の護衛係りみたいなものか。
それにしても良いのかねえ、ＳＶのお嬢様がこんな所に出てきても。
『いいわよ！私が欲しいのはあの機体とデータなんだから！多少壊れてもいい！やっちゃって！』
本当強気だな、自分は戦いもしないで人に戦って来いとか言ってやがる。
「おいおい、人に頼ってないで自分でかかってこいよ。俺と戦うのが怖いのか？」
『何また馬鹿な事言ってるの？ここは私の出る幕じゃないの、貴方じゃ私の相手になりもしないんだから』
「へぇ、相手にならないねぇ……この俺が」
久しぶりだな、ここまで腹が立ったのは。この俺を雑魚だと？この俺を弱者だと？この俺が相手にならないだと？
最強のこの俺にそんな事を平気で抜かす糞ガキには……しっかり躾をしてやらねえとなぁ。
頭に血が上っていた俺は一気に機体を加速させていく、狙いはただ一人。
「生きて帰れると思うなよ糞ガキがぁあああああっ！！」
『お嬢様を愚弄する者は誰であろうと許しません』
そんな声など耳に入ること無く俺は突き進む。
俺の視界に映っているピンクの前に、あの武装をした機体が現れるまでは……。

『マルチロックオン、全兵装攻撃を開始します』
声とともに引かれる引き金、その機体の両肩のレーザー砲からは眩い光が放たれた。
それだけではない、両腰に付けられている長い砲身からは砲弾が放たれる。
そして後部からは何十発ものミサイルが……ってこれは避けないとシャレにならん！
加速させていた機体をそのまま浮上させていく、レーザー砲や砲弾を交わす事は出来たがまだ何十発ものミサイルが俺を追ってくる。
『逃がしはしません』
重武装の機体は両手に機関銃を握ると浮上している俺に容赦なく引き金を引いてくる。
剣で何とか防ごうとするが二丁の機関銃を受けるのはさすがに辛い。
しかも足元からはミサイルが追ってきやがる、それにこのまま浮上していく訳にもいかない。
機体を回転させると一気に急降下を始めるしかない、これでミサイルも振り切ったと思っていたが……甘かった。
右手に握られていた剣が宙を舞う、一瞬何が起こったのかわからなかったが、相手の機体の様子を見てそれがわかった。
重武装機一発の砲弾が機体の腕を目掛けピンポイント射撃をされた事に。あの距離から、この位置に当てやがるとは……。
もはや身を守る物は無い、２丁機関銃の餌食になりがら機体は急降下、そのまま地面へと叩きつけられるように落ちる。
そして上空に上っていた無数のミサイルが俺の機体目掛けて降り注いだ。
「ぐっ、うぐぁあああっ！」
機体が爆発するのではないかと思うぐらいの揺れが俺を襲う。
や、やばい。想像以上に機体にダメージが大きい、早くあの機体を止めねえと！
勝機は必ずある、ミサイルの攻撃も終わり辺りには砂塵と爆煙が立

ち込めている為俺の機体の位置もバレてはいない。
運よく手元から落ちた剣は近くの地面に突き刺さっていた為拾うのは簡単だ、この煙に紛れて剣まで走る。
この剣さえあれば俺は百人力、不覚にもさっきは手放してしまったがもう2度と手放すものか。
俺は地面に突き刺さった剣を右手で握り締めた、その時、青く細い閃光が煙を掻き消しながら機体の左腕を貫いた。
「は……？」
俺とした事が、こんな罠にはまるとは……自分の馬鹿さに呆れてしまう。
俺の剣が落ちていた場所は既に相手は知っていたんだ、そしてそれを俺が拾いに行く事も。
何をやっているんだ俺は、敵はたかが一機、俺の敵じゃない。落ち着いていけば……いや、ここは熱くなるべきか？
まぁいい、腕を一本失おうが知った事か、要するには勝てば良いんだよ勝てば、最後に勝てばそれでいいッ！
警報音と共にレーダーに反応有り、どうやらまたミサイルが来たらしい。
……いつもの俺になればいい、こんな所で死んでたまるかっつーの。
『信じられません、あれ程の攻撃を受けても機体に目立った外傷がないとは、しかもまだ立っていられるとは……』
重武装した機体に乗っている女がどうやら驚いているようだ、そりゃそうだ、あんな攻撃を受けても機体が大破していないのだから。
『でも相手の右腕は壊せたんだし、シャイラなら余裕よ！』
『ありがとうございます、お嬢様が応援してくれるお陰で私も頑張れま――ッ！？』
周りに立ち込めている煙を全て吹き飛ばし、一直線に重武装した機体へと俺は突き進む。
前方から飛んでくるミサイルを剣で防ぎ、更に加速させていく。

――『まだあれ程動けるとは……でもこれで終わりです』
両肩のレーザー砲、両腰のキャノン砲を迫ってくる機体に砲身を向けると、それを狙っていたかのように甲斐斗の乗る機体は急上昇をし始めた。
シャイラは砲身を上に向けると上昇していく機体目掛け引き金を引き、更に後部から無数のミサイルが放たれる。
甲斐斗の乗る機体はミサイルを避けながらも更に上昇していくが、機体にも限界があった。
浮上する機体に数発のミサイルが直撃、機体は出力停止、何をする事もなく地面へと落ちていくが、地面ではしっかりと両足をついて踏みとどまった。
だが機体は動こうとしない、両手には何も持っておらず、完全に無防備な状態だ。
『チャンスよ！あの機体に集中攻撃！』
『畏まりました、お嬢様』
両肩と両腰に砲身を甲斐斗の乗る機体に向けると、容赦なく引き金は引かれた。
レーザー砲が機体を霞め、砲弾が胸部に直撃する。爆発が起こり胸部は大きく窪みが出来てしまう。
だが機体は動こうとしない、その砲撃をも我が身で受け両足で踏みとどまった。
その光景にシャイラが驚きを隠せない、避けようと思えば十分避ける距離のはず、それなのになぜ避けない。
『シャイラ！相手はアレだけの攻撃を受けていたんだからきっと機体の故障よ！その隙にあの機体の両足を破壊しなさい！』
言われるがままに両肩のレーザー砲の照準を機体の両足に向ける、それでも相手の機体は直立不動を保っていた。
すると、その機体は残された右腕を前に突き出すと指を開き、ゆっくりと一本ずつ指を下ろしていく。
まるで何かをカウントするかのように、しかしそれが何のカウント

なのかはわからなかった。
そして最後の1本の指が降りた時、一本の黒き刃が重武装している機体の右肩へと落ちる。
『い、一体何が起きて……きゃっ！』
その隙を甲斐斗は逃がしはしない。
右肩と右足をそぎ落とされ、地面に倒れようとする機体に向かって機体を急発進させる。
肩と足を落としたまま刃先は地面に突き刺さっている、それを甲斐斗の機体が掴むと今度は左肩と左足を切り落とす。
シャイラの機体で小さな爆発と共にコクピットには警報音が鳴り響く。
さらに機体を破壊された衝撃で頭を装置に強くぶつけてしまい、大量の血が傷口から溢れ出していた。
『気づくのが…遅すぎました……』
この時シャイラは気づいていた、一体あの機体が何をしていたのかを。
甲斐斗の機体が上空に上がりミサイルを受けた時、手に持っていた剣を空高く放り投げていたのだ。
爆煙でそれを見せないのも計算の内、後は注意をそらす為無防備な体勢をとり注意をひきつける。
あの攻撃を避けなかったのも下手に避けて相手が動いてしまうのを防ぐ為。
空高く上がった剣は重力により急降下、その真下にいた機体に落ちる計算になっていたのだ。
そんな事を考えている内にシャイラの乗る両腕両足を切り落とされ、もはや何もする事の出来ない状態になっていた。
「俺の勝ちだ」
甲斐斗の機体は残された右腕でシャイラの機体を掴むと、ゆっくりと持ち上げていく。
『シャイラ！今すぐ機体を破棄して脱出しなさい！早く！』

その間にも必死に呼びかけるアリス、だが既に時遅し、シャイラがふとモニターを見るとそのおぞましい機体の顔がハッキリと映し出されていた。
「おいガキ、よく見ておけよ？お前を守ってくれていた人の苦しむ姿、死に様をな」
そう言って掴んでいる機体を勢いよく地面に叩きつけ始めた。
何度も何度も機体を叩き続けていくたびに、機体に電流が走り負傷した箇所から火花が散る。
「俺と戦ったのか運の尽きだったなぁ、最強のこの俺に勝てる訳ねえんだよ」
『きゃぁあっ！っ……！ああッ！』
機体が地面に叩きつけられていくたびに、コクピットに乗っているシャイラは何度も頭や体をぶつけていく。
『や、やめなさい！今すぐその手を放して！』
「誰に口聞いてやがる、俺に命令できる立場か？ちゃんとお願いしろよ、そしたら止めてやってもいいけど」
甲斐斗の言葉に怒りと悔しさが込み上げて来る、アリスのさっきまでの余裕の表情が一変していた。
『やめて下さい……その手を放してください！！』
「戦場でそんな言葉が通じるわけねえだろバーカ」
アリスの頼みは簡単に断られ、貶された。アリスの言葉に甲斐斗は耳を傾けようとはしない。
「戦争は勝つか負けるかだが、戦場は生きるか死ぬかなんだよ。よく憶えとけ」
甲斐斗が会話している間はシャイラの機体は地面に叩きつけられなかった。
その隙にシャイラはアリスにある事を告げる。
『お嬢、様…今から『ＬＩＭＤ』を使います……私の機体から、離れてください……！』
『な、何を言ってるのシャイラ！？駄目よそんなの！絶対に！！』

『私の機体は、既に限界が来ています……お嬢様を助けるには、もうこれしか……』
シャイラの小さな声を掻き消すかのように甲斐斗の声が聞こえてくる。
「そうだ、おいガキ、この死に損ないの兵士を助けてほしいなら、ここで死ね。そうすればこの兵士を助けてやる。
それが嫌なら逃げてもいい、ただしこの兵士は殺す、どうする？」
『えっ……』
戸惑いの表情を浮かべながらモニターを見つめるアリス、その瞳は揺らぎ今にも泣き出しそうな顔だった。
「どうするかって聞いてんだよ。死ぬか、逃げるか、どっちだ」
『それはっ……』
モニターに映っているのは二人の姿。
一人は頭から血を流し、苦痛に顔を歪めているシャイラ。
もう一人は勝ち誇った笑みを浮かべ悪魔のような赤い眼で睨み続けている甲斐斗。
『お嬢様はこの世の為にも生きなければなりません……ここは私に任せて早く逃げて下さい！』
「さあどうする！死ぬかぁっ！？逃げるかぁっ！？早く選べ！！」
――今の俺は奴から見えれば何に見える。鬼か？悪魔か？はたまた化物か？
俺を酷いと思うか、俺を醜いと思うのか、甘ったれるな、ここは戦場だ。
中途半端な覚悟をした人間が戦場に来ても死ぬだけだ、そんなの常識だろ。
さて、お前はどっちを選ぶ。仲間を捨てて逃げるか、自分の命を捨てて助けるか。
その時だった、ピンクは後ろに振り返ると、そっと俺達に背を向けた。

『ありがとうございます、お嬢様……』
俯いたままのアリスにシャイラは笑顔で感謝の言葉を伝える。
その俯いているアリスの目元からは微かに涙が零れ落ちていた。
『――――ないじゃない』
「ん？」
『逃げるわけ……ないじゃないッ！』
涙で濡れた顔、だがアリスの眼は諦めていなかった。
ピンクは振り返ると背部についているＬＲＳを引き抜くと俺目掛け特攻してくる。
どうやら俺が思っていた以上に器はしっかりしているみたいだ、だが……お前の行動は無意義だ。
斬りかかって来るピンクの腕を黒剣で一振りで簡単に吹き飛ばすと、相手機体は体勢が崩れ俺の横で倒れた。
『くっ……』
アリスは機体を起こそうとしたが、その背後に俺は容赦なく剣先を突き立てる。
同情の余地は無い、戦場で雑魚は死ぬだけだ。
「そうか、お前は死を選んだか。それじゃ、あばよ」
『あ、ああ、いや……っ！』
感じたことがあるか？これが死の恐怖だ、ガキはどんどん恐怖で顔が引きつっていく。
剣を高々と振り上げた俺は、狙いを外さないようにしっかりと剣を握り締め、振り下ろした。
『助けて……ゼスト！』
レーダーに反応あり？何かがこっちまで飛んできやがる。
赤いビーム砲のようなものが一直線上に俺の機体まで飛んできているのを見てすかさず剣を盾にするがその威力に機体が吹き飛ばされる。
半端無い力だ、この機体を吹き飛ばすとはな、そして俺の前には１機の機体が立ちはだかる。

全身黒でコーティングされたボディは悪くない、感じる、あの機体から強者の念が溢れ出てやがる。

『無事か』

『ゼスト！遅いじゃない！今まで何してたのよ！』

『……話は後にしてやる。今はこの場からシャイラを連れて離脱しろ』

ピンクが負傷した機体を両手で持ち上げると、艦が走っていった方向へ飛んでいく。

相手の黒い機体は立ったままで攻撃してくる様子は無い、ここは俺も逃げたほうがいいのではないか？

機体も全体的にダメージが大きい、それに左腕も無い、明らかにこちらが不利だ。

『高橋甲斐斗、アリスが世話になった』

なっ、通信だと？コイツ何を考えてやがる。

『これでアリスも知ったはずだ、戦場がどういう場なのかを』

そう言うと敵の黒い機体が俺に背を向けた。

どういう事だ……今なら俺を倒せるかもしれないというのに、何故奴は俺に止めを刺さなかった。

敵の機体は無言のまま走り出すと、荒野の砂を巻き上げながら俺の前から姿を消した。

助かったのは素直にうれしい、でもこれじゃあまるで俺が助けられたようなもんじゃないか。

……いや、やる事はしたんだ、何も考えるな、今はあの少年の所に戻ろう。

俺は撃ち落された機体の左腕を拾うと、自分が先ほどまでいた森へと急いだ。

――森にはあの少年、そして傷がほとんど治っている龍が樹木の下で寝そべっていた。

少年は笑顔で龍の頭を撫で、龍もどことなくうれしそうな表情を浮

かべているように見えた。
俺は機体から降りると早速少年の元に駆け寄っていく。
「よう、どうやら無事に森に来れたみたいだな」
「甲斐斗のおかげさ、君も無事に逃げてこれたみたいだね」
「俺は逃げてねえよ！相手が勝手に引いたんだ！」
少し強い口調になってしまった、少年も少し驚いた顔をしている。
「急に怒鳴ってすまん、とりあえず俺はお前と話がしたかった、お前は他の世界の人間だろ？」
「うん、僕の名前はロア。この龍はマルスって言って。アランディッシュって言う世界から来たんだ」
アランディッシュ？聞いた事がない世界だ。大抵の世界は知っているつもりだったが、やはり俺が知らない世界も多々あるようだ。
「そうか、それならお前達はどうしてこの世界に来たのか教えてくれないか？」
俺の言葉に少年の顔の表情が暗くなる、やはり何かあったみたいだな。
「生きる為に来たんだ、この世界に」
生きる為にこの世界に来た、とすれば元いた世界で戦争でも起こったのだろう。
その戦いに巻き込まれたくないから他の世界に逃げてきた、という事か。
「甲斐斗は知ってる？あの化け物の事」
「ああ、知っている。醜くて気持ち悪い奴だろ……まさかお前の世界にもＥＲＲＯＲが現れたのか？」
「ＥＲＲＯＲ？この世界ではそう呼んでるのか。そう、僕の世界にもあの化け物が来た、最凶最悪の化け物が……」
ロアは俯くと、龍は首を伸ばしてロアの側に頭を近づける。
それに気づいたロアは龍の額をそっと撫でていた。
「長くなってもいい、お前のいた世界の事を全部俺に教えてくれないか？」

「いいよ、甲斐斗は命の恩人だからね」
そう言ってロアは語りだした、自分が元いた世界の事、そしてＥＲＲＯＲによって滅ばされた一つの世界の話
を。

――アランディッシュ、それぞれ三つの城を中心とした３国が一つの世界を築いていた。
城下町は多くの店が並び、多くの人で賑わっていた。見た所平和な世界に見えるが、それは偽りの平和。
３国は昔から争いを繰り返しており、日々戦争が続いていた。
この世界には他の世界と違う所が一つだけあった、伝説上の生き物の『ドラゴン』もとい龍が生息していた事だ。
それも多くの龍が存在しており、人々は龍と共同してこの世界を生きていた。
龍は特殊な力を持っており、その力は人を殺す力だけでなく人を癒す力も存在する。
龍の力は科学では説明のつかない神秘で、かつ絶大な力、ある意味科学の発達した世界よりも強大な世界だったとも言える。
そんな世界に、一匹の龍の形をした生き物が現れた。
それは突然の出来事、体は龍のように大きく、翼もある。
だが鱗も無く、長い首の先端には人間の首のようなものがぶら下がっていた。
奇声を発しながら城下町の上空を飛んでいたが姿を見て人々は気味悪がり、その後その龍の形をした生き物は捕らえられ、処刑された。
すると、まるでそれが引き金だったかのようにその龍の形をした化け物が次々と世界各地に現れるようになった。
龍の形と人間の形をした生き物、何故このような生き物が現れたのかは不明、ただ一つわかったのは、この生き物が人類の敵だという事だけだった。
少しずつ増えていく化物、少しずつ減っていく村、町、人。

もはや人間同士が戦っている場合ではない事に気づいた頃には、時既に遅かった。
化物は姿形を変え、より凶悪で、凶暴なものになっていく。人間の形、獣の形、龍の形……。
そしてとうとう始まった、人類と龍は協力しあいその化物との全面戦争が行なわれたのだ。
結果、その世界にいた全ての人が死に、唯一生き残ったのはロアとマルスだけだった。
ロアはマルスの力を使い他の世界へと飛んだが、その世界にも既に奴等は存在していた。

――大体話はわかった。やはりＥＲＲＯＲがいるのはこの世界だけではなかったらしい。
「それならまた龍の力を使って他の世界に行かないのか？」
「それが、マルスがこの世界から離れようとしないんだ。訳も話そうとしないし、僕にはどうする事もできない」
まぁ別に離れる理由も無いか？もうこの世界にいるＥＲＲＯＲの数は激減してることだし。
「ＥＤＰっていう作戦でな、ＥＲＲＯＲの数は激減したんだ。もう絶滅寸前まで来ているらしい」
俺の言葉にロアは強く反応した、俺の眼を見てくると寂しそうな表情で口を開いた。
「甲斐斗、あの化物をそう簡単に消せると思わない方がいいよ……あの化物は常に成長し、進化し続ける」
「わかってる。ＥＲＲＯＲを消さないとこの世界もお前のいた世界のようになっちまうんだろ」
世界を滅ぼす化物か、たしかに世界は沢山あるからな、そんな生き物が現れてもおかしくない。
「甲斐斗も他の世界の人間なんだよね？」
そういえばそんな事も言ったな、ごめん違うんだよ。

「あー、残念だが俺はこの世界の人間だ、しかも１００年前のな」
「１００年前!?それって一体どういう事なの……？」
「気絶したら１００年後で目が覚めた、それだけだ」
随分と簡略してしまったが間違った事は言ってない、大筋そういう事だ。
「甲斐斗は龍と似た力を持っているね、何も無い所からあの黒くて大きな剣を取り出したりしてたし」
青年は魔力のような力を持っていないみたいだ、どうやらこの龍が魔力と似た力を持っているみたいだな。
「言っておくが俺は世界最強の魔法使いだったんだぞ?今は何か力が出せないけどな」
「へ、へぇ。そうなんだ……所で甲斐斗はこれからどうするの？」
「それはこっちはの台詞だ、お前はこれからどうするんだ？」
「僕はマルスと一緒にあの化物と人のいない所を探してみようと思う、安全で平和な場所を」
「それがいい、俺は機体が直ったらミシェルを迎えに行く事にする。お前も気をつけろよ」
「甲斐斗も気をつけてね、それじゃ」
話してみれば案外しっかりした青年じゃないか。
ロアは軽く手を振った後龍の首根元に跨る、龍は巨大な翼を羽ばたかせると俺の前から姿を消した。
大体わかった、他の世界にもＥＲＲＯＲがいる、そしてこの世界にも来たって事だ。
という事はＥＲＲＯＲとこの世界にいる『神』は何の関わりも無さそうだが……。
ＥＲＲＯＲの目的は何なのだろうか、何故人間を殺すのか……聞いてみないとわからない。
だが黙って殺される程人類も馬鹿ではない、１００年前とは違って面白い世界になったな。
平和な世界が面白くない、なんて言っている俺は本当の戦争を知ら

ないのだろうか。
危険な世界にいてこそ、初めて平和な世界の有り難さがわかる。
ふと後ろを振り向けば自然溢れたこの森に、１機の機体が座っている、もちろん俺の機体だ。
装甲の傷は既に直り、外れていた左腕も気づけば元に戻っている。
さてと、機体も直った事だし……そろそろ迎えに行くか。

第４０話　常識、認識（後書き）

ロア

元の世界がＥＲＲＯＲによって破滅した為に平和な世界を探し龍の力を借りてこの地に移転してきた青年。

魔法のような特殊な力を持っていないものの、代わりに龍が魔力と似た力を持っている。

第４１話　償い、儚い（前書き）

第１０話であった意味不明な誤字、誤爆について、誠に申し訳ありませんでした。
このような事が二度と起こらない様気をつけていきます。
また、今までＤｅｌｔａを読んでくれた方には本当に心から感謝しています。
誤字が多く見苦しい所が多々あると思われますが一生懸命修正して書いて行きますので、これからも応援よろしくお願いします。

第４１話　償い、儚い

――ここはＳＶの本土、自由と平和の国。
宮殿の周りに多くの建物が並び、その下では沢山の人々が町を歩いている。
緑に溢れたその町は皆活き活きとしており、充実した暮らしをしている。
町の中心に建てられている宮殿、その中にある一室にアリス・リシュテルトが椅子に座っていた。
その横には無言でゼストが立っている、誰かを待っているかのように二人は無言のまま待ち続けている。
すると、部屋の扉が突然開き、リシュテルト家の長女フィリオが部屋の中へ足を踏み入れた。
その横にはラティスと愁が並び、後ろには葵とエコが着いて来ていた。
「ラティス達はここで待っていてください、アリスと二人っきりで話しをしたいので・・・」
そう言うとゼストも部屋から出て行き、ラティス達もまた扉の前で待機する事になった。
フィリオは部屋に入った途端用意されていた椅子に座らず、すぐさまアリスの元へ歩いていく。
ふとアリスが顔を上げた時、室内には小さく、そしてハッキリと叩かれる音が聞こえた。
叩かれる音は部屋の前いた５人の耳にも届く。
「叩いたな」
「叩きましたね」
ゼストとラティスの一言だけが静かな廊下に聞こえた。
エコと愁は無言のまま壁にもたれ掛かり、葵はじっとしているのが苦手らしくその場をぐるぐると歩き回っている。

部屋の中でアリスは叩かれた自分の左頬に手を当てていると、フィリオはその無音の部屋で口を開いた。
「アリス、貴方は自分で何をしたのかわかっているの？」
怒りを堪えるような声、アリスは震えている唇をそっと動かすと微かに返事をした。
「私は送りましたよね、あの機体『M，D』には近づいてはいけない、決して戦闘を行なってはいけないと。
危険な存在なのは貴方もわかっていたはずです、それなのに貴方は……！」
「ごめんなさぁい！」
溢れ出る涙を必死に手で拭いながらアリスは謝った。
そのアリスの突然の変化にフィリオ驚きを隠せない。
「ア、アリス？ごめん、痛かった……？」
フィリオは叩いたアリスの左頬をそっと撫でると、その撫でる手にそって一筋の涙が流れる。

――――３０分前、甲斐斗との戦闘後艦に戻ったアリスはすぐさまシャイラの乗る機体のハッチを開ける。
だが開いた瞬間ゼストがアリスを追い越し開いたハッチの中に入っていく。
そして機体の中から血塗れのシャイラを抱えて飛び出してくると、既に準備していたベッドの上にそっと乗せる。
アリスがベッドの上で横たわるシャイラに近づこうとしたが、数人の兵士がベッドを押して行き格納庫から素早く出て行ってしまう。
一目でわかる血の跡、傷の跡。その光景が完全に脳裏に焼きついた時、手足が小さく震えその場から動く事が出来なくなった。
その時、一人の男がアリスの前を横切ろうとした。
「ゼス…ト……！」
震えてしまい上手く名前が呼べなかったが、ゼストはこちらに気づき顔を向けた。

でもそれは一瞬だった、ゼストは止まらずに歩き続け、格納庫から出て行ってしまう。
いつも一緒にいてくれたシャイラが死ぬかもしれないという恐怖。
そしてゼストから見放された恐怖。幾つもの恐怖がアリスの全身を駆け巡った。

――自分のしてしまった罪に震え、途轍もない罪悪感で押しつぶさそうになっていた。
「ごめんなさい…ごめんなさい……！」
泣きじゃくるアリスをそっと抱きしめるフィリオは、謝り続けるアリスの頭をそっと撫で続けた。

――「時間です、ここは私に任せて皆は休んできてください」
静寂に包まれた扉の前でラティスが口を開いた。
「いいの？」
エコがそっと呟くと、ラティスはポケットの中に入ってある装置を開き時間を確認する。
「ええ、貴方達3人はＥＤＰが終わった後まともに休んでいない、だからお嬢様から休暇が与えられています」
「それマジかよ！？なら早速部屋に戻ろうぜ！」
休暇と聞いて葵の顔が笑顔に変わる、今すぐにでも走って部屋に戻る気満々だ。
「ラティス、貴方は？」
「私はここでお嬢様の警護を。安心してください、私一人で大丈夫です」
エコが聞きたかったのはラティスにも休暇が出ているかどうかだったが、どうやらラティスに休む気は無さそうだ。
「わかった……私達は戻るね……」
葵が先頭に立って廊下を歩いていくと、その後ろに愁とエコがついていく。

扉の前にはラティスとゼストの二人が残され、また廊下は静けさを取り戻したかと思えた。
「ゼスト、何故シャイラとアリスお嬢様を助けなかった」
シャイラは前を見続けたままゼストに話しかける、同様にゼストも前を見続けたまま無言で立っていた。
「二人の機体が発進した事は貴方も知っていたはず、発進した意味も」
相変わらずゼストは黙ったままで口を開こうとしない。
「いい加減話したらどうですか？」
「……お前は、フィリオが死ねと言えば死ぬのか？」
突然を口を開いたゼストだったが、その口から出た言葉は質問の答えではなく問いだった。
「突然何を言うかと思えば……お嬢様の命令なら私のこの命、簡単に捨てられます」
「そうか、なら俺のした事に文句は無いな」
「どういう意味ですか……？」
それからゼストは語りだした、何故あの時アリス達を止めなかったのか。
「簡単な事だ、アリスは俺に黙って出撃をした。
俺に報告すると出撃を止められるかもしれないと思ったからだ。
そして危険だとわかっていながらもアリスは戦闘を開始した、アリス自身の意思で。
それを止める権利、俺には無い」
皇女の命令は絶対、ならばアリスが戦いに向かったのを止めるのは逆らう事になる。
ゼストはその掟に忠実に従っただけと言いたいらしい。
「貴方それでもアリスお嬢様の親衛隊ですか？主を危険にさらす事に、何の躊躇いも無いのですか？」
それ以上ゼストは口を開こうとはしなかった。
ラティスもそんなゼストを見て諦めたのか、それ以上聞く事は止め、

長い廊下はまた静寂へと包まれた。

――宮殿のとある一室、壁に掛けられている時計の針は丁度１２時を指していた。

机の上にはあの白い仮面が置かれてあり、分厚い軍服も椅子に掛けられている。

その時部屋の扉からノックをする音が聞こえてくる、俺は脱ぎかけのシャツを急いで着ると扉の前まで歩いていく。

そしてドアノブに手を伸ばした瞬間、突然扉は開き一人の女性が部屋に入ってきた。

「おい愁！迎えに来てやったぞ！」

「あ、葵さん？どうしたんですか、いきなり」

目の前には私服姿の葵さんが立っている、それも目のやり場に困るような大胆な服で。

「ほー、やっぱりな。仮面とったら中々のイケメンじゃん」

仮面を脱いだ俺の顔を見るのは初めてらしく、葵さんはじっくりと俺の顔を見つめてくる。

「いつもは冷たい仮面を被ってる男も、仮面を脱いだら爽やか青年ってわけだ！」

「な、何ですかそれは！それより葵さんはどうしてここに」

「だから言っただろ、迎えに来たって。せっかくの休暇何だし街にでも行って遊ばねーとな！……じゃなくて休まねーとな！

あ、言っておくけどデートじゃねーぞ？エコも来るからな！早く私服に着替えたら宮殿の前に来いよ！それじゃ！」

言うだけ言って葵さんは去ってしまった。あれ、迎えに来たのではないのか？

何はともあれ今日は休暇、気晴らしに街に出るのも悪くないと思ったので俺は私服に着替えると早速宮殿の前に向かった。

――宮殿の前には私服姿の葵さんとエコさんが立っている、俺も

その場に向かうと二人も俺に気づいてくれた。
「お、来たな！それじゃあ行くか！」
「どこに？」
またも先頭に立って歩き始める葵さんにエコさんはまず何処に行くのか聞いてみた。
俺も同じ事を聞こうとしたが先に聞かれてしまい黙って後をついていく。
「まずは服だ、新しい夏服とか水着が欲しいからな」
「わかった」
という事で俺達は洋服店に行く事になった。
正直俺は服を買いたいとは思っていないが断る訳にもいかない為ついていくしかない。
歩いていると段々と道を歩いている人や道路を走る車が多くなる、街はもう目の前だ。
「街についたようですね、葵さんは何処の店に……」
街についた瞬間葵さんはすぐさま近くの洋服店に入っていく。
それに続いてエコさんも店内に入っていくので俺も渋々店内に入ってみた。
店内は広く、階段もあるから2階にも売り場があるみたいだ、丁度その階段をエコさんが上っていたので俺もその後についていく。
エコさんは2階の洋服売り場につくと2着の服を掴みそれを鏡の前で自分に照らし合わせている。
「ねぇ、こっちとこっち……どっちが良い？」
丁度後ろに俺がいたからなのだろうか、2着の服を自分の服に重ねながらどちらが似合っているか尋ねてきた。
そんなエコさんを見ていると、いつもは笑わないエコさんが少し楽しそうな顔をしている気がした。
「俺は両方似合ってると思うけど、決めるのならその右手に持っている方はどうかな」
「こっちね、わかった……」

左手に持っている服を元の位置に戻すと、右手に持っている服を大事そうに抱えている。
「なあ愁！こっちとこっち、どっちが似合ってる？」
「っ！？」
耳元で突然葵さんの声が聞こえてつい驚いてしまい条件反射でその場から一気に離れる。
「おいおい、まさか驚いたのか？肝が小さいなぁお前は」
「突然真後ろから話しかけられれば誰だって驚きますよ！それよりどうかしたんですか」
すると葵さんもまた両手に2着の服を持っていた、どうやら葵さんも決めてもらいたいみたいだ。
「って！それ水着じゃないですか！」
「そうだけど？こっちは赤くて派手で良いと思うんだけど、こっちのは豹柄で結構良いだろ？どっちが似合うかな？」
そんな事俺に言われても……葵さんを直視できない。
大体どうして俺に水着が似合ってるのかを聞くのだろうか、すぐ近くにエコさんがいるというのに。
「俺は両方似合ってると思いますよ」
「当たり前だろー自分に似合ってるものを選んでるんだから。お前はどっちの水着が好みだ？」
「は、はい？俺は別に好みとか……」
「ほら、想像してみろって！どっちの水着が似合ってる？」
そんな事を言われたら嫌でも想像してしまう、綺麗な青空の下に広がる輝かしい砂浜と海。
そこには一人の水着姿の女性が立ってい……って、俺は何を考えているんだ！
2、3回頭を大きく横に振りながら何とか自分の頭に思い浮かばれた妄想を振り払った。
「変な事想像させないで下さい！」
「なっ！俺の水着姿が変だと！？」

「ち、違います！そういう意味じゃなくて！」
「二人とも、店内は静かにして……」
既に洋服を2～3着買い終えたエコさんの腕には洋服の入った紙袋が一つぶら提げていた。
「お腹も空いたし、何か食べに行こ」
気づけば12時半、まだ俺達は昼食を食べてないのでお腹が空いて来た所だった。
「そうだな、もう12時半だし腹も減る。とりあえず欲しい服全部レジに持って行ってくる」
最初からそうすれば良いじゃないですか、何て言えばまた怒られそうなので黙って葵さんを見送る。
「これ」
エコさんが腕に提げていた紙袋を俺に持てと言わんばかりに紙袋を持ち上げる。
まさか俺が呼ばれた理由はこれ？そんな訳は無い、紙袋の一つぐらいもちろん持ってあげる。
「ありがとう」
「どういたしまして、それにしても葵さん遅いですね。何かあったんでしょうか……って！？」
見てはいけないものを見てしまったかもしれない、両手に2袋、合計4袋の紙袋を持った葵さんがこちらに近づいてくる。
「いやー買った買った。はいこれ」
こうして俺は合計5袋を両手に持って街を歩かなければならなくなった。
洋服店を出ると、葵さんがポケットの中から小さなチラシを取り出す、そこには地図のようなものが書かれてある。
「この近くに美味い店あるらしいから行ってみようぜー」
二人は身軽そうに街を歩いていくが、その後ろを歩く俺は荷物の多さに足元がふらついてしまう。
それに天気が良くてとても熱い、早く日陰に入らなければ倒れてし

まいそうな程だ。
するとようやく店についたらしく二人が店内に入っていく、俺も重い荷物を軽く持ち直すと急いで店内に入った。
自動ドアが開いた瞬間、全身に冷気が駆け巡る。店内は冷房のおかげで程よい涼しさを保っていた。
店内は昼時なので人が多い、それにしても若い女性が多い気がする。
そしてカウンターの方にはガラスケースには様々なケーキが並べられていた。
「ここ、ケーキバイキングね」
エコさんはそう言うと近くのテーブルに向かい椅子に座る、葵さんは既に沢山のケーキをおぼんの上に乗せていた。
とりあえず手が痛いので荷物は机の下に置き、椅子に座って一息つくことにした。
っが、一息つこうと椅子に座った瞬間テーブルの上に溢れんばかりのケーキの山の形をして登場。
「よし、これ皆で食おうぜ！」
何を言っているんだ、コレだけの量を3人で食べれるはずがない。
「またこんなに食べるの？太るよ……？」
って言われているにも関わらず葵さんはひたすら食べ続けている。
「私は食べてもココしか太らないんだよ～だ」
そう言って葵さんはケーキをほおばりながら自分の胸元を指差す。
それを見てエコさんは何か不満そうな顔をしている。
「エコも食べたら少しは大きくなるかもよ～？！」
「うるさい」
不機嫌ながらもしっかりケーキを食べているエコさんが何処となく可愛く見える。
隣の葵さんはケーキの次に今度はシュークリームを今度は食べている。
しかし、こう言うのも悪い気がするが葵さんがケーキを食べている姿は何だか似合わない。

骨の刺さった肉とかをガツガツ食べているイメージしかわかない。
「愁！ボーっとしてないで次のケーキ持って来い！」
「葵さんまだ食べるんですか？もうこれで十分じゃ……」
「いいからさっさと持って来い！」
何故一喝されなければならないのか疑問に思いながらも俺の手にはおぼんが握られていた。
さてと、一体どんなケーキを取ろうか、見てみれば何十種類ものケーキが並べられている。
きっと葵さんは選ぶのがめんどくさいから全部を1個ずつ取ってきたのだろう。だからあんなに大量のケーキがおぼんの上にあったのだ。
並べられているケーキの中に一つだけ1個しか残っていないケーキがある、とりあえず一つ目はこれをもらおう。
そう思って俺は最後のケーキをトングで掴もうとした時、もう一本のトングがそのケーキを持っていってしまった。
自分が取ろうとしたものを横取りされたら誰だってその人を見てしまう。
俺もそんな感覚でつい横を向けば、そこにいるはずのない人が立っていた。
「守るとか言って……お前は暢気に遊んでるのか」
黒髪の男、それは今まで何度も見た事のある姿。あの時、あの時も、鋭い目つきで俺を見てきた男。
その男が今俺の目の前に立っている。
言葉が出ず、体も動かない、言いようの無い恐怖が俺の全身を震え上がらせた。
「お前は約束を破った、わかってるよな？わかってるよなぁ？」
今までの和やかな場は一変して闇に包まれ、周りは何も見えない、ただ声だけ聞こえてくる、あの男の声が。
どうしてこの人が、こんな場所に、これは夢？現実……？

――「現実に決まってるだろ、こんな所でお前と会ったのは偶然だがな」

さっきまで回りに立ち込めていた闇は消え、目の前にはニヤリと笑みを浮かべている甲斐斗さんが立っていた。

それでも信じられない、どうしてこんな所に甲斐斗さんが……。

「あ、貴方がどうしてここに」

「偶然って言ってんだろ。腹減ったから寄っただけだ、そしたらお前がこんな所で遊んでるとはな。

まぁ安心しろよ、真昼間のこんな所でお前を殺したりしねえ。お、そうだ。今夜0時お前を殺してミシェルを迎えに行く事にするよ」

「……わかりました、約束を破ったのは俺です。罪は償います」

「当たり前だ、それじゃ精々生きている内に楽しんでおくんだな」

そう言って最後のケーキを食べると、甲斐斗さんはポケットの中から紙幣を取りだし

それをレジカウンターに置いて店を出て行ってしまう。

甲斐斗さんの言う通りだ、守るとか言っておいて、こんな所で遊んで、あの子を放置してしまった……！

今からではもう遅いかもしれない……それでも俺は自分の言った事は最後まで遣り遂げたい。

俺は手に持っていたトングとおぼんの机に上に置くと迷わず俺は二人の元へ向かった。

「すみません葵さん、エコさん。俺は用事を思い出しました、先に失礼します」

「え、ちょ！いきなり何言って――」

もう一度頭を下げると葵さんの話を聞かずに店を出て行く。きっと店では葵さんが怒っているに違いない。

それから来た道を走って戻ると、思っていたより早く宮殿に到着した俺は額の汗を拭い、自分の部屋まで猛ダッシュする。

部屋に入れば椅子に上着が掛けられ、机の上に仮面が置いてある。

その上着を纏い、仮面を顔につけると、俺は部屋にあった大きな鏡

で自分の全身を写す。
そうだ、これが俺だ。これが俺なんだ。

――準備は整った。
俺は既に仮面を被り、いつのも服装に戻っている。さぁ行こう、ミシェルの元へ。
場所はフィリオさんから聞いている、たしか宮殿の４階にある王族の部屋にいるはずだ。
早速階段を上っていくと、一室の前に２人の兵士が銃を構えて並んでいる、どうやらあの部屋にいるみたいだ。
「すみません、ここを通してもらえませんか」
「残念ですがここはフィリオ様の命令によりフィリオ様とラティス様しかお通しする事が出来ません」
俺の名前が無い？どうして俺は会ってはいけないんだ？あの子を守るには、あの子の側にいなければならない。
こうなれば力ずくで突破するしかない、これは止む得ない事だ。そう自分に言い聞かせ俺は拳を振るおうとした時だった。
「魅剣？こんな所で何をしている、お前には休暇が出たはずだ」
そこにはラティスさんが立っていた、右手にはジュースの入ったグラスを持っている。
「ラティスさん、俺をミシェルに会わせて下さい」
「何故急にそんな事を？」
「約束を守る為です」
多分こんな事を言ってもラティスさんには何の事かわからない。
例え１から説明したとしても俺をこの部屋に入れてくれはしないだろう。
「……まぁいい、私が許可する。来い」
その予想外の返答に俺と、その扉の前にいた兵士までもが唖然となった。
「ほ、本当に良いんですか！？」

「別に構わない」
扉の前にいた二人の兵士は扉の前から離れると、ラティスさんはゆっくりと扉を開けて部屋の中に入っていく。
俺も一歩前に踏み出し部屋の中に入る。さすが王族の部屋とあって豪華な雰囲気が漂っている気がした。
部屋の中央にある大きなテーブルの上には数々の料理が並んでいたが、まだ誰も手をつけていない状態だ。
そこに持ってきたジュースのグラスを置いたラティスさんは、今度は大きなベットのある所へ向かう。
「既に食事の用意は出来ています、お食べにならないのですか？」
返事は無い、だがそこにはたしかに彼女はいた。毛布に包まって震えているミシェルが。
俺は彼女が視界に入った瞬間ベットに向かって歩き出す、彼女だ、彼女を守るのが俺の役目。
近づけば近づくほどわかってくる彼女が抱いている恐怖。
その彼女を俺がずっと放置していたかと思うと自分に激しい嫌悪感が胸を苦しくする。
初めて会った時もそうだった、彼女は震えながらある人の名前をずっと呟いていた。
「かいと、かいとぉ……」
「安心して、俺達は君に何も危害を加えない」
そう言うと彼女は俺の方をチラリと見てくれた、でも仮面をしているから誰なのかわからないはず。
俺はすぐに仮面を脱ぐと、その仮面を床に置いた。
「俺の名前は魅剣　愁。会うのは久しぶりだけど、憶えてるかな？」
彼女はゆっくりと、たしかに頷いてくれた。どうやら俺の事を覚えていてくれたみたいだ。
すると彼女は少し安心したのか、小さな口をそっと開いてある事を聞いてきた。
「かいとは……？」

「大丈夫、甲斐斗さんなら今夜必ず君を迎えに来てくれるよ。それまで俺が君を守るんだ」
「まもる？」
「そう、俺が君を守る。命を懸けても絶対に。だから安心して食事をしていいんだよ」
そう言うと彼女はわかってくれたのか、包まっていた毛布からゆっくりと出てくる。
そして彼女はベットから降りると小さな靴を履いてテーブルへと向かった。
俺と彼女のやり取りを見ていたラティスが不思議そうにこちらを見ていたが俺は気にせずラティスの元へ向かった。
「魅剣、一体何を？私が幾ら説得しても一向に喋ってはくれなかったのに……」
「実は前に会った事があって、それで……所でラティスさん、俺はこの部屋に残ってもいいですか？」
「理由は？」
「彼女を守る為です」
「……わかった、私からお嬢様に話しておきます」
当然反対されると思っていた俺にとって、その言葉は意外すぎた返事だった。
「あ、ありがとうございます！」
「魅剣ならこの子を任せられます、私はお嬢様の警護する役目があるので。それでは」
食事をしているミシェルを見ていたラティスさんの顔に少し笑みが見えた気がした。
そしてラティスさんは振り返ると部屋の扉を開けて部屋から出て行ってしまった。
部屋には俺と彼女の二人だけ、時計を見ると１時丁度、という事は今から１０時間、俺は彼女を守ってみせる。

――丁度昼の1時、日が一番照り、輝く時間帯。
そんな中、一人の少女と一人の男が街の花屋に来ていた。
「ねぇゼスト。どんな花がいいかな？」
何十種類もの花が飾られており、一体どの花を買えばいいのか迷うアリスだが、ゼストは何も答えない。
「いっつもそれよね、たまには答えてくれてもいいんじゃないの？」
「お前がシャイラのお見舞いに花を持って行きたいと言ったんだろ、それぐらい自分で選べ」
たしかにゼストの言う事も一理ある、というかそうである。
「だって私、花とか買いに行った事ないんだから……」
「あの、ちょっといいですか」
アリスが一生懸命どの花を選ぼうか迷っていると、丁度隣にいた女性が声をかけてきた。
白いワンピースに麦藁帽子をかぶっているその女性の姿はまさに夏を感じさせる。
「随分と迷ってますけど、私でよければお花を選びますよ」
「ほ、本当？それなら是非選んでもらいたいんだけど！」
まさかこんな親切な人に会えるとは、アリスは早速頼むと女性は喜んで花を選んでくれた。
「ええ、いいですよ、所で今選んでいる花は誰かに贈るものですか？」
「そうなの、入院しているシャイラにお花を届けたくて」
「それならカーネーションなんてどうですか？とっても綺麗で鮮やかな色をしていますし、匂いもキツくありません」
そう言って女性は赤く綺麗なカーネーションの花を一本掴むと、それをアリスに手渡した。
「これ良いわね、よし決めた。これにする！」
随分と悩んでいた花選びがあっという間に終わりを告げた。
アリスは店の人にお金を渡すと赤やピンクの色鮮やかなの花束を受け取るとそれを満足そうに見つめ、

それを見て花を選んだ女性もうれしそうに笑っていた。
「あ、そうだ！もしよかったら一緒にお食事しない？」
「は、はい。構いませんけど」
「じゃあ決まり！こっちに来て！」
そう言ってアリスは女性の手を引っ張りどこかに連れていこうとする。
それを見ていたゼストはアリスを止める事無く、ただ無言で後ろをついていく。
ついた所はあの宮殿、連れてこられた場所が場所であり女性は驚きの様子を隠せない。
「あの、ここって……」
「入っても大丈夫よ！ここは私の家みたいなものだから！」
門番の兵士はアリスに敬礼をしている様子から見て女性もこの子がどのような身分の子なのかがわかった。
そんな彼女を気にせずにアリスは宮殿の奥にある部屋へと走っていく。
走った勢いに任せながら扉を開けると、机の上に豪華な昼食が並べられている部屋へとついた。
アリスは花束を机の上に置くと、料理が並べられている机に向かい椅子を引いて手を繋いでいた女性を座らせた。
未だ戸惑い気味の女性はあたふたと周りを見渡し、目の前に並べられている料理を見つめる。
「ゼスト！私の分の料理を今すぐ持ってきて！」
「俺に言うな」
何はともあれ料理は無事に揃い、早速料理を食べようとしたアリスだったが、料理を口にしない女性を見て手が止まる。
「実は私リシュテルト家の人なんだけど……驚いた？」
「え、ええ。貴方がリシュテルト家の方だったなんて……このような食事まで用意してもらえるなんて、ありがとうございます」
「気にしなくていいわよ、これはお花を選んでくれたお礼みたいな

ものだから、どんどん食べて良いからね」
そう言うと女性はお絞りで手を拭き、両手を合わせた後机に置かれてあるスプーンを握り、スープをすくうとそっと口に運ぶ。
「美味しい！」
思わず言葉が漏れてしまう程の美味しさ、その反応にアリスも笑みを浮かべていた。
「あ、自己紹介がまだだったわね、私の名前はアリス。貴方の名前は？」
アリスの名前を聞いた途端少し驚いた表情を見せた彼女は手で口を隠しながらそっと答えた。
「あの、その……実は私の名前もアリスと言います」
「え！貴方もアリスって言うの！？」
「はい、だから私も今とても驚いてて」
「これはすごい！運命ね！同じ名前の人が会うなんて早々無いわよ！ねえシャイラ！」
後ろに振り向きその名前を呼んでも、返事する者は誰もいない。
いつも自分の側にいて話を聞いてくれた彼女はここにはいない。
アリスの笑っていた顔が徐々に戻っていく、そしてアリスは振り向くと、机の上においているカーネーションの花束を見つめた。
「その花束、シャイラさんに買ったものなんですね」
女性はそう言うとアリスは小さく頷き席に着いた。
「私の事は構いませんので、その花束をシャイラさんに届けに行ってあげてください」
「えっ、でもそれじゃあ貴方が……」
「気にしないで下さい、お料理とても美味しかったです。ありがとうございました」
料理も食べ終えた女性は席を立つと頭を下げてお礼の言葉を並べる。
「アリス王女がその花束を持っていけば、きっとシャイラさんの容体も良くなりますよ」
「わ、わかった！ありがとうアリス！私行ってくる！ゼスト、彼女

を門までおくってあげて」
机の上に置かれた花束を掴むとアリスは真っ直ぐに部屋を飛び出していく。
その姿を見ていたもう一人のアリスは安心したような笑みを見せ、部屋を出て行こうとする。
それを見ていたゼストが部屋の扉を開けると、自分が先頭になり宮殿の出口まで案内していく。
「シャイラさん、体調良くなるといいですね」
「そうだな……」

――宮殿の中にある病室、その一室には花束を持ったアリスが椅子に座っていた。
アリスの前には未だ意識が戻らず眠り続けているシャイラがベットの上で静かに眠っている。
頭には包帯が巻かれ、口に酸素マスクがついている彼女の姿を見るのはアリスにとって胸が張り裂けそうな思いだ。
「ねぇシャイラ、この花とても綺麗でしょ！私が選んだ……んじゃないけど、私が買って来たのよ！」
花束を顔に近づけるが当然返事は返ってこない。
「シャイラ、早くを目を覚ましてね。そしたらいっぱいお話聞いてね……」
手に持っていた花束をベットの横にある机に置くと、アリスは疲れていたのかベットもたれ掛かりそっと目蓋を閉じた。

――二人のアリスが出会ったあの花屋に、彼等は集まっていた。
「アリスさんからの連絡が途絶えたのはこの場所らしいですね」
黒髪の青年が辺りを見渡している中、一人の少女と二人の女性は店に売られている数々の花を色々と見ている。
「花って本当綺麗よね～買って帰ろうかな～」
「ああ、お前にはラフレシアが似合ってるな！」

その女性の隣ではへらへらと笑いながらその女性を指差す青年が。
「黙ってろ子供の敵！雪ちゃん、コイツには近づかない方がいいからねー」
女性はその少女を抱きしめると頭を撫でながら青年から距離を離していく。
「おいおい、俺酷い言われようだなぁ、羅威ー助けてくれよ～」
青年は後ろにいる彼に助けを求めたが、その彼は花屋に近づいてくる女性を確認すると青年を無視してすぐさま女性の方に行ってしまう。
「アリス、今まで何処に行ってたんだ？皆心配していたんだぞ」
「ごめんなさい、でもすごい情報を持って帰ったから許して、ね」
軽くウィンクした女性は彼の横を通り花屋の前にいる皆の元へ駆け寄ると、頭を下げて謝っていた。
黒髪の青年は無事で何よりといった表情で胸を撫で下ろしている様子だ、そして皆を集めるとこう口を開いた。
「何はともあれ皆無事に揃って良かったよ、それじゃミーティングもあるから艦に戻ろうか」
彼等は帰って行く、その中で一人、アリスは寂しげな表情で後ろ振り返った。
見えるのはもう一人のアリスと花を買ったあの花屋。遠くから見てもその花々の美しさがよくわかった。
「ごめんなさい……」
そう言って彼女は止めていた足を前に出して歩き始めた、彼等と共に。この世界の為に。

第４１話　償い、儚い（後書き）

シャイラ
ゼストとの正反対、明るく優しく、いつもアリス・リシュテルトの事を心配している女性。
謝り癖があり、些細な事をしてしまってもすぐに頭を下げて謝ってしまう。

第４２話　人形、哀れ

――――日は既に暮れ、真昼のような強烈な暑さもなくなり過ごしやすい気温となっていた。
宮殿の部屋から見た空には雲の陰は無く綺麗な星空だけが広がっており、その光景を少女は窓際でじっと見つめていた。
「ミシェル、ご飯の時間だよ」
その青年の声にミシェルが振り向くと、既にテーブルには豪華な料理が並べられていた。
窓際から離れて料理の置いてあるテーブルに向かうと、青年はゆっくりと椅子を引いてミシェルを座らせる。
「しゅうは、たべないの？」
「俺はお腹空いてないから、君が全部食べていいんだよ」
ミシェルの隣にはしっかりと愁が側に立っており、片時も警戒を怠らない。
食事を運んできたラティスはそんな愁を見て何だか複雑な気持ちになっていた。
「前から思っていたが、お前は何故お嬢様の下で戦おうと思ったんだ？」
突然の質問だったが、愁はその質問に簡単に答えてしまった。
「守りたいから……ですね」
「守る？誰を？」
「皆、皆守りたいです。もちろんそれは簡単な事ではないですし、出来るかどうかもまだわかりません。
それでも俺は自分の力を使ってこの世界を平和な世界にしたいんです」
愁のその言葉は、決して冗談や嘘とは感じさせないものが伝わってきた。
「そうか、それならお嬢様の力になってあげてくれないか。

世界を平和をする為にはお前のような強い意志を持つ者が必要だ」
ラティスはそう言うと部屋から出て行こうとしたが、愁には彼女に聞きたい事があった。
「待ってくださいラティスさん」
扉のノブに触れた手が止まると、ラティスはゆっくりとこちらに振り向いた。
「俺にも教えてください、貴方がここにいる訳を」
「……お嬢様を守りたい、それだけだ」
そう言葉を残しラティスは部屋から出て行く。
しかし何故だろう、ラティスの言葉に愁は違和感が感じた。
初めて聞くはずのなのに、前に一度同じ事を聞いた事があったような……そんな気がする。

――宮殿の最上階にあるテラスにはフィリオと、その後ろにラティスが立っていた。
空に広がる星をただじっと眺め続けているフィリオに対し、その後ろ姿をずっと見つめているラティス。
「今日は星空がとても綺麗ですね」
「ええ、このような星空を見るのは今年初めてですね」
ふと見上げれば幾つもの星の輝きが見える、例え小さくても綺麗に光る星に見惚れていると、フィリオがふと口を開く。
「ラティス、いつもありがとうございます」
その言葉にラティスは視線をフィリオに戻すと、フィリオはこちらを向いて小さく頭を下げていた。
「お、お嬢様。突然どうしたのですか？」
「いつも支えてくれている貴方に、感謝の言葉を伝えただけです。驚く事はありません」
そう言って笑顔を見せてくれるフィリオにラティスは戸惑いと同様に嬉しさが込み上げてきた。
「ラティスがいなければ今の私はいません、いつも貴方は私の側に

いて守ってくれていますよね」
フィリオの言葉を聞いてラティスは片足を跪かせると、片手を胸に当て忠誠を誓うようなポーズを取り頭を下げる。
「それが私の役目、お嬢様を守るのが私の生き甲斐であり、当然の事であります」
「それなら……これからも私の側にいてくれますか？」
「私でよければ喜んで、これからもお嬢様の側にいさせてもらいます」
ラティスは立ち上がると、フィリオに向けて敬礼を済ませる。
それを見ていたフィリオも敬礼をすると、二人の顔に笑みがこぼれる。
「さて、明日は朝から本部に行かなくてはなりません。そろそろお部屋に戻りましょうか」
敬礼を終えるとラティスを追い越して先に部屋の中に戻っていく。
「ラティスも早く、お部屋で紅茶でも一緒に飲みましょ」
「畏まりました、お嬢さ――――」
部屋の中に戻ろうとした時、突然視界が斜めに傾いていく。
目の前には口を開き、こちらに手を伸ばしているフィリオの姿が見えたが、その顔は笑顔とは程遠い顔だった。
「ま――？」
何を叫んでいるのかラティスには聞こえない、一歩前に足を出そうとしても前に出ない。
そして次の瞬間、ブツリと音を立てて目の前が真っ暗になった。
フィリオの目の前で彼女は何の抵抗も無く地面に倒れた、頭に開いた小さな穴からは黒く濁った赤い血が止め処なく溢れ、髪と顔を赤く染めていく。
彼女の寝ている側に血溜りは簡単にできた、ラティスは目を開けたまま動かず顔が血に浸っていく。
その場にいたフィリオの全身が震えだす、怒りで？恐怖で？手足はガクガクと震えて力を失い、フィリオはその場に座りこんでしまう。

「ラ、ラティ…ス……？そん…なっ……」
全身が動かない、目蓋を閉じたくても閉じられない。
目の前にはどんどん地で赤く染まっていくラティスが倒れている、
目を背きたくても首が動かない。
「嫌っ……嫌ぁッ！嫌ぁあああああ――――ッ！！」
宮殿中に響く悲鳴は一階にいるもの者にも聞こえた、兵士達が何事
かと上の階に向かおうとした時。
宮殿の中を灯していた灯りが全て消え、宮殿の中に暗視ゴーグルを
して武装をした兵士達が次々に入ってくる。
突然の出来事に成すすべも無く撃ち殺されていくＳＶの兵士達。そ
の銃声は４階にいた愁の耳にも届いた。
「くらいよぉ、うぅっ……」
部屋の灯りも消えて暗闇に包まれる室内、ミシェルは急いでベット
まで走ると毛布を手に取りいつものように包まりだす。
「今の悲鳴はフィリオさん！？一体何が……ッ！」
扉を開けると部屋の前を警備していた兵士の姿は無く、４階の通路
を銃を持ったＳＶの兵士が走っていた。
「何があったんですか！？」
「武装してきた組織が宮殿に侵入！恐らくＢＮだと思われます！」
「なっ、こんな時にＢＮが？」
「我々が足止めをしています！その間にフィリオ様を！」
そう言い残し兵士は銃を両手に階段の方へと向かう。
愁は部屋の中に戻り鍵を閉めると急いでミシェルの所に走っていこ
うとした瞬間、窓ガラスが破られ外から一人の男が入ってくる。
「痛ッてーなおい！窓は蹴ったら開くのが普通だろ！！」
男は自分の服についているガラスを振り払うと辺りを見渡す、男は
愁を見つけるとニヤリと笑みを見せて口を開いた。
「大変な事になってるようだな、俺には関係無いけど。とりあえず
ミシェルを返してもらおうか」
「甲斐斗さん！？丁度良い時に来てくれました！」

その名前にミシェルが反応する、毛布から顔だけ出して辺りをキョロキョロと見渡すと、そこに甲斐斗の姿が見えた瞬間笑顔になる。
「かいと！」
「ミシェル無事か？俺が迎えに来たからもう安心だ」
包まっていた毛布を脱ぐと急いで甲斐斗の元に向かうミシェル。
近づいてきたミシェルをそっと抱きしめると甲斐斗も安心したような顔をしていた。
そして甲斐斗はミシェルを体からそっと離すと愁に向かって歩き始める。
「さてと、後はお前を殺すだけだな。すまんなぁ本当は0時に来たかったけどこんな状況だし、また誰かに攫われたら嫌だからな」
「かいと？」
「ミシェルは向こう向いててくれ、すぐ終わるから」
いつの間にか甲斐斗の右手には剣が握られている。
その剣をゆっくりと持ち上げると、愁の前で立ち止まる。
「最後に何か言いたい事はあるか？」
剣を振り上げたまま愁の前に立っている甲斐斗、その姿を見て愁は怯えはいないが焦っていた。
「残り3時間、今日が終わるまで俺を生かしてくれませんか？
今日が終わるまでに必ず貴方の元に戻ってきます、だからどうか俺に時間を！」
「そうか、死ね」
そう言って甲斐斗が止めていた剣を振り下ろし、愁は目蓋を閉じて一生を終わろうとした時、ミシェルの声が室内に響いた。
「だめーーっ！」
多分二人は初めてだろう、彼女の大声を聞いたのは。
その声に二人は唖然としていた、特に甲斐斗は振り下ろした剣は愁の目の前まで振り下ろしていたがそれを止めてミシェルの方を向いていた。
「ミシェル？」

「ぜったいにだめ！ぜったいにだーめーっ！」
怒ったような口調でミシェルは甲斐斗の所に走っていくと甲斐斗の服を一生懸命引っ張り愁から離そうとする。
「わ、わかったわかった。こいつには何もしないから、な？」
「ほんとう？」
「本当だ、だから服を離してくれ」
その言葉を聞いて引っ張っていた甲斐斗の服を離すミシェル、愁は閉じていた目蓋を開き何が起こったのかを確かめた。
目の前で止められている剣は目の前から消え、甲斐斗の右手に握られていたはずの剣がなくなっている。
「あーあ、ミシェルに言われたらなぁ……殺す気失せた。
っま、こうしてミシェルも無事に戻ってきた訳だ、今日はこの辺で引き下がってやるよ」
甲斐斗はミシェルを抱かかえると窓に向かい身を乗り出す。
「戦場で会ったら容赦なく殺すけどな、そんじゃあばよ！」
次に瞬きをした時には甲斐斗の姿は消え、約束は無事守られた。
しかし、約束を守れた事に安心している暇など無い、今自分がしなければならない事は一つ。
「待っていてください、フィリオさん……今行きますッ！」

――その頃、1階の大きく華やかなバスルームにアリスがいた。
丁度髪の泡を流し、髪を洗い終えたアリスはふと目を開けるとバスルームの電気が消されている事に気づいた。
「ちょっと、なんで電気消してるの！ゼスト！早く電気つけなさいよー！」
自分の声とシャワーの音だけがバスルームに響く、ゼストからは返事も無い。
と思った時、突然バスルームの扉が開き一人の男が入ってくる。
アリスは咄嗟に叫ぼうとしたがその口を塞がれしまい声も出せない。
「落ち着け」

そう耳元で囁くとシャワーを止め、左手に持っていたバスタオルをアリスに渡す。
アリスは急いで自分の体をタオルで巻くとゼストの右手を強引にどけた。
「ちょっとゼスト！あなた――――っ！？」
「大きな声を出すな」
また右手で口を塞がれるとアリスは大きく頭を下げ、そしてまた右手を口元からどける。
「ど、どうしたのよ。何かあったの？」
「ああ、どこぞの連中がこの宮殿に侵入してきた、それも大勢な」
二人はゆっくりと立ち上がると、アリスは急いで更衣室に向かうと、ゼストも更衣室に向かい廊下に通じる扉の前に移動する。
「早く着替えろ、ここはもう奴等に占拠されつつある」
「えっ？でもここは基地もあるし、そんな奴等簡単に排除できるんじゃないの？」
下着を履き、用意していたパジャマ……では無く、一度来た服を再度着替え終わるとドライヤーで髪を乾かそうとするが当然電源がつかない。
「ジャミングが掛けられていて軍には通信不可だ、準備は出来たか」
「準備は出来たけど、お姉様やシャイラはどうするのよ」
「フィリオにはラティス達がいるから心配無い、シャイラは……もう間に合わない」
そう言った瞬間ゼストの顔面にバスタオルが投げつけられたが、ゼストは動じずバスタオルを顔からどける。
「はぁっ！？何言ってんのよ！」
「じゃあ行くか？死ぬかもしれないぞ」
「いいわよ！だから早くシャイラを助けに行きましょ！」
「……わかった」
ゼストが天井に手を伸ばした次の瞬間、天井に綺麗な丸い穴が開き、アリスを抱き上げるとその穴を使って一気に2階まで飛びあがる。

突然の出来事にアリスは何が起こったのかわからず辺りを見渡すと。
そこには綺麗なカーネーションの花束が置かれた机と、その横のベットで寝ているシャイラの姿があった。
「ついたぞ」
「な、何よ……死ぬとか言ってもう着いたじゃない！私を試したの！？」
「大声を出すな、気づかれる」
ゼストは扉に鍵をかけるとベットで寝ているシャイラの口に付けられている酸素マスクを外した。
「な、何してんのよゼスト！今すぐマスクを元に戻して！！」
それを見ていたアリスは急いでマスクを戻そうとゼストの手からマスクを取ろうとするが、どんなに力を入れても外れない。
「安心しろ、これを外した所で死にはしない」
そんな事を言われても納得のいかないアリスは必死にマスクを取ろうとしていた。
ゼストはそんなアリスを無視してシャイラを抱きかかえると、また穴を通り1階に飛び降りる。
早く降りて来いと言わんばかりにゼストはアリスを見つめるが、この高さから飛び降りるのは少し怖い。
「降りればいいんでしょ……もう！」
意を決してアリスが飛び降りた瞬間、ゼストが片足を上げると勢い良く床に足を下ろす。
その瞬間、着地しようとしていた床は崩れ落ち、アリスは体勢を崩しながらその真っ暗な地下へと落ちていく。
が、ゼストの右手でアリスの服を掴み、何とか地面への直撃を免れる。
「非常用の地下通路だ、来い」
掴んでいた服を放すと洞窟のような所に小さな灯りが点々と通路を伝って点いているのがわかる。
「ちょっと待って！お姉様はどうするのよ！」

「ラティス達がいるから心配無い、今は自分の身の安全を考えろ」
安全な出口へと繋がる地下通路を走るゼスト、その後ろには不安な表情を浮かべながら走るアリス。
地下通路に響き渡る銃声、爆発音は、アリスの頭に最悪な状況を考えさせてしまう。
それでも今は走るしかなかった、フィリオの無事を祈りながら……。

――宮殿の1階、2階、3階は既に占拠され、残るは最上階の4階だけとなり、残りのSVの兵士は4階を死守していた。
「このままでは4階ももう持たない！階段を破壊する、全員伏せろ！」
兵士が一度に2個の手榴弾のピンを抜くと勢い良く階段に投げ込む。
だがその瞬間、一人の男が前に出てくると目にも止まらない速さで手榴弾を真っ二つに切り落とすと、そのままSVの兵士達に近づいていく。
兵士達は手榴弾の爆発に備え身構えており、男に気づいた時には既に相手が持つ剣が自分の喉を貫いていた。
白い服に白いマントを羽織っている男、両手には二本の細い剣を持ち銃を持つSVの兵士に向かって走っていく。
兵士達は引き金を引くと同時に手に持っている銃を斬られ、喉を貫かれてもがき苦しみながら死んでいく。
もう抵抗する兵士は何処にもいない、階段から数名の兵士が4階に上がってくると、4階の部屋を一つずつ探っていく。
「態々若様が行かなくてもよかったと思われますが……」
「セーシュ、俺は見届けなくてはならない。神の子種が死ぬ姿と、SVの創始者が死ぬ姿を」
BNの最高幹部、紳は4階にある一番大きな扉をした部屋へと向かおうとした時だった。
下の階の方から兵士達の悲鳴と銃声が4階まで聞こえてくる。
「若様、下の階で何かあった様子です、下りますか？」

「いや、いい。下の階には奴がいるからな……」

――暗闇に包まれた1階のロビーには3人の兵士が銃を構え辺りを見渡している、その足元には仲間の死体が転がっていた。

「さ、さっきのは何だ！どこから来やがった?！」

「わからない！ここは一度引いた方が……」

また一人兵士の倒れる音が聞こえる、銃を持った兵士が後ろを振り向けば胸元が大きく切り裂かれた兵士の死体が転がっている。

「う、嘘だろ……しっかりしろ！」

その時、人影が横を通り過ぎた気配がした兵士はすぐさま銃口を向けて引き金を引く。

しかしそこには誰もいない、数発の銃弾が窓ガラスを破壊してしまうが、兵士の恐怖は収まらない。

「何処だ……何処にいやがる！出て来――」

「出てきたぜ?」

兵士の目の前に現れたのは一人の女性、だが次の瞬間兵士は腸を引き裂かれ血を噴出す。

「っけ、雑魚供がうじゃうじゃ出てきやがって。エコ、お前はフィリオの所に行って様子を見てきてくれ」

「わかった……葵、無理しないようにね」

「おう、わかった。数分したらそっち行くから先に行ってろ」

「うん……」

ふとエコの姿がその場から消えると、葵は鍵爪に着いた汚い血を振り払うと手足を伸ばしてストレッチを始める。

すると、そこに一人のサングラスを掛け、煙草を銜えた男が入ってくる、その男の両手には2丁ずつ拳銃が握られていた。

「こんな夜中にサングラスかよ。渋いねぇー。おいおっさん、死にたくなけりゃここから出て行ったほうがいいぜ?」

「出て行く訳にもいかんのさ、これも仕事でな」

「そーかいそーかい、んじゃあ……仕事で死ねるならてめえも本望

だろ！？」
男の前から葵が一瞬にして消えると、宮殿内の床や壁を走り回るわずかな音が聞こえてくる。
そして音が止まった瞬間、葵が男の後ろから鍵爪を突き立てる飛びかかってきていた。
「死にはしねえさぁ、まだ煙草買ったばかりなんだからよ」
男は後ろに振り向くと、拳銃の銃口を飛びかかる葵の目の前に突き出した。
銃口を突きつけられた葵の顔は蒼白としていた、今自分の目の前には銃口が見えているからだ。
躊躇い無く引き金は引かれ、銃口から出てきた小さな火が葵の顔に当たると、葵はすぐさま男から距離をとる。
「ん？これライターじゃねえか……こっちが本物か」
男はそう言うと右手に持っている銃をしまい、もう一つの銃に持ち変える。
そして一発の銃弾を天井に発砲すると両方の拳銃の銃口を葵に向けた。
葵の頬は少し火傷の後が見えるが、そんな事葵は気にしていない、ただ眼つきと瞳の色が前と変わっていた。
「おっさん、どうやら俺を本気にさせちまったようだな……」
ニヤリと笑みを見せる葵に対し、男は煙草を銜えていたが口元が小さく笑っている。
「お遊びで殺される程俺は安く無いさ」
「面白れえよおっさん！この世界で殺し甲斐のある人間と会ったのは初めてだぜ！？」
葵が叫んだと同時に一気に男の元へ走る、男は右手の銃を構え引き金を引くが葵は間一髪で交わし更に距離を縮める。
しかし男は慌てることなく左手に握っている拳銃を葵に向けて引き金を引く、しかしその銃弾も葵に当たる事は無かった。
葵の鍵爪が男の顔を引き裂こうと両手を顔に伸ばしてくる。

男はすかさず両手に持っていた拳銃で鍵爪を弾き、葵から距離をとりながら2丁の拳銃で狙いを定め引き金を引くが、葵はその場から跳び上がると男をかく乱するように宮殿内を肉眼では確認できない程の速さで跳び回る。

「オラオラオラッ！俺を撃てるもんなら撃ってみやがれよ！！」

葵の右手には瓦礫の破片が握られている、その破片を男に勢い良く投げると、その投げた方向とは反対方向から飛びかかった。

男は飛んでくる破片に気づき一歩後ろに下がり破片を回避するが、その時を葵は狙っていた。

そしてこの時を……その男も狙っていた。

擦れ違う二人、男の掛けていたサングラスが真っ二つとなり足元に落ちる。

頭からは微かに血が流れているが、それを気にせず男は振り返った。

そこには右肩から流れる血を左手で抑え、苦痛に顔を歪めている葵の姿があった。

「中々やるじゃねえかおっさん、今日の所はこれぐらいにしといてやるよ……！」

そう台詞を吐き捨てると、葵は暗闇に包まれた宮殿に内に姿を消す。

男は足元に落ちている真っ二つに斬られたサングラスに目をやると、胸ポケットの中からスペアを取り出しそれを掛ける。

両手の銃を腰のベルトに仕舞うと銜えていた煙草を右手で挟み口から細く大量の煙を吹き出した。

「こりゃ上乗せだな」

――4階にあるフィリオの部屋、エコがその部屋に一瞬で移動したのは彼女の持つ一つ目の力だ。

エコは辺りを見渡すと、小さく蹲っているフィリオを抱きしめている愁の姿を発見した。

「愁、フィリオ…大丈夫……？」

その声に気づいた愁は顔を上げると、自分の無事をエコに伝えた。

「でも、ラティスさんが！」
「えっ？」
エコがふと開いたままのテラスの扉に目をやると、そこには血溜りの中に倒れたラティスの姿が視界に映る。
それを見たエコの顔は驚きを隠せない程ショックを受けていた、まさかラティスが死ぬとは思ってもいなかったからだ。
「そんな……ラティスが……？」
「遠くから誰かに狙撃されたらしいです、それで……」
フィリオは愁の腕の中で泣き崩れているが、エコは焦りを隠せない。
愁の言う事が本当ならこの宮殿の周りはＢＮの狙撃部隊が待機しているという事。
それに別の部隊が宮殿内に潜入してきている、これはＢＮがここにいる者を殺す為に本格的に動いている可能性が高い。
狙いはリシュテルト家と、あの謎の少女。今宮殿を襲えば両者を殺せる事になる。
「愁、早くここから逃げないと」
「わかっています、しかし外に出れば狙撃部隊がいる可能性が……」
「それなら地下に避難通路がある、それに……私の力があれば、平気」
エコはそう言うといつもの冷静な表情に戻り、部屋から出て行こうとした時、部屋の扉が開くと数名の兵士が部屋の中に雪崩れ込む。
兵士達は銃口を愁達に向け、引き金を引くと無数の弾丸が３人に放たれる。
するとエコは素早く手を前に出して、呪文のような事を口走る、途端に三人を緑色の光が包み、全ての銃弾を弾いていく。
「ほらね、これで平気……」
幾ら銃を撃とうがエコ建ちには傷一つ付かない、その光景を愁は驚いた様子で見ていた。
「地下から行こ……」
愁はフィリオを抱き上げると、ゆっくりと歩いていくエコの後ろに

ついていく。
それを止めようと兵士達は銃を撃ち続けるが全く歯が立たない、触れようとした者は次々に光に吹き飛ばされてしまう。
「安心して、人の力で破壊する事は、不可能だから」
部屋の扉をも簡単に吹き飛ばすと、エコは部屋から出ようとするが、目の前には白服を着たあの男が立っていた。
立ちはだかる男の姿を見た愁は驚きの余り眼は見開いている、無理もない、そこに立っていたのはＢＮの総司令官、風霧紳なのだから。
「愁、大丈夫だから。私に……」
だがエコは落ち着いた様子で一歩足を前に出し、何事も無く部屋から出ようとする。
それに続いて愁も足を前に出した瞬間、床に亀裂が走ると共に前を歩いていたエコが後ろに向かって吹き飛んでいく。
「えっ――――？」
吹き飛んだまま壁にぶち当たるエコ、胸元は斬られ血が溢れ出しているのが誰が見てもわかる。
そのままぐったりと壁にもたれ掛かったまま動かないエコを見て愁は何が起こったのかすらわからなかった。
「この力、やはりな」
紳はそう呟いた後両手に持つ剣を一振りすると部屋の中に足を踏み入れる、それと同時にセーシュも部屋の中に入り、銃を持った兵士達も部屋の中に入ると愁の左右を囲む。
愁は前を向いたまま一歩ずつ下がり、部屋の中に戻って行ってしまう。
セーシュは銃を愁に向けると、周りにいる兵士達が全員銃口を愁達に向ける。
「抵抗しても無駄だ、大人しくその娘をこちらに渡してもらおうか」
その声は聞くにしては懐かしすぎる声だった、昔は紳やセーシュとも共に戦った事のあった愁にとっては耐えられない状況。
しかし今は敵として現れた、いや違う。愁が自らＢＮの敵となって

いたのだ。
もう羅威やエリル、穿真等の親友と一緒に過ごす事も出来ない、もう何もかもが遅い。
でも、それなら何故愁はＳＶに来たのか、何故ＢＮにいないのか、答えは簡単だった。
愁は両手を放し、抱かかえていたフィリオをその場に落とす。
「それで良い、そのまま両手を上に上げろ」
両手はゆっくりと上げられていくが、頭の位置まで上がると手が止まり自分の頭を両手で押さえ込む。
「貴方達はっ、また……また俺から、大切な人達を、をぉっ！」
愁は跪くと、急に体を捻りながら唸り声をあげて苦しみだす。
周りにいた兵士は銃を構えただその状況をじっと見つめている事しか出来ない。
するとセーシュは溜め息を着くと兵士達に命令を下した。
「我々には時間が無い、もういい、殺せ」
「殺すのですか」
そう呟きながら立ち上がった愁だったが、兵士達が引き金を引いた銃の発砲音で簡単に声は掻き消された。
だがその微かな声は紳だけが聞き取れた、それとも紳だけに伝えたかったかもしれない。
銃弾は次々に愁に目掛け飛んで行くが、愁が倒れる事は無かった。
愁の着ている服に銃弾が当たると、服を貫通せずに力を無くした銃弾は愁の足元に落ちていく。
数発の銃弾が仮面に当たるものの、簡単に銃弾を弾き愁の首は全く動かず前を向いている。
銃口は熱をおび、火薬の臭いが部屋中に立ち込めていた。
兵士達は全弾を撃ちつくしたが、相変わらず愁はその場に立っている。
「終わりですか」
その一言は回りにいた兵士達全員に聞こえたが、兵士達は銃のカー

トリッジを外すと、腰についている予備の弾を銃に装填しようとする。
しかし、愁が黙ってそれを見ている訳がない。
兵士達の目の前から愁が消えたと同時にグシャリという何かが潰れた音が部屋中に響き渡る。
一人の兵士がふと隣の兵士に目をやると、あるはずの頭がそこには無い。
愁の服や仮面には夥しい血と肉片が飛び散るが、その男は全く反応をしない。
頭を潰された兵士はその場に跪くと、力無く横たわる。
それを見ていた紳はセーシュの方に顔を向けるとこう言った。
「セーシュ、今すぐ兵士達を撤退させて作戦内容をプランDに変更しろ」
「は、はい？お言葉ですがもうここまで来ているのです、後はこの男さえ始末すれば……」
「早くしろ、死ぬぞ」
血みどろの男の手がセーシュに伸びて来たのを見た紳はすかさず剣で拳を受け止める。
セーシュはポケットの中から無線機を取り出すと電源を入れてこの作戦に参加している兵士全員に作戦内容の変更伝えた。
「プランDを行なう。宮殿にいる兵士達は速やかに撤退しろ」
その言葉を聞いて部屋の中にいた兵士が出て行こうとするが、頭を握りつぶされた男の隣にいた兵士はその場から一歩も動けていない。
「セーシュ、その兵士を連れてお前もここから離れろ」
「し、しかし。それでは若様が……」
「離れろ」
「っ……了解しました、若様。どうかご無事で」
その場から動けない兵士に肩を貸して部屋を出て行くセーシュ達、それを見て紳も少し安心したのか眼つきが変わっていた。
愁は紳の顔目掛けて左腕を伸ばすが、紳は首を曲げて簡単にかわす

と右手に持つ剣で愁の左腕を切り落とそうと振り上げる。
だが愁はその剣が来るのが分かっていたかのように左腕を素早く引き下げる、その動きに紳はある男が頭の中に浮かんだ。
でもそれはありえない、何故ならそれはＢＮの兵士だった男、こんな場所で、こんな姿で、今、目の前に立っているはずがない。
紳は左手に握る剣を愁の顔目掛け振るうが、愁はそれを避けようとはしなかった。
一閃の残光と共に顔に付けられていた仮面に亀裂が走り、真っ二つになって吹き飛ぶ。
ありえないはずの男はそこにいた、顔は無表情のまま、虚ろな目をしたその男が。
「裏切りましたね、紳さん」
「愁……？」
その瞬間、愁の右腕は紳の腹部を貫く勢いで突き出された。
紳の口から吹き出る血は愁の顔に飛び散るが、愁は目を開けたままその様子をじっと目に焼き付けるかのように見つめている。
睨む事も、笑う事もしない、ただ虚ろな目だけが見つめ続ける。
腹部を殴られた衝撃で部屋から吹き飛ばれる紳、そのまま廊下の壁へ叩きつけられると、愁は凄まじい速さで飛びかかると今度は頭を狙い左腕を突き出した。
間一髪でその拳を交わすが、拳はそのまま壁を砕き、吹き飛ばす。
それでも愁は平気な顔をしたまま紳に顔を向けると紳に向かって走り出す。
だが紳は両手の剣で足元の床を切り落とすと、その場から一瞬で姿を消した。
「……何か、来る」
愁はそう呟くとフィリオ達のいる部屋に戻ると、フィリオやエコを無視して部屋の外まで歩き始める。
テラスに倒れているラティスの死体等にも目をくれず、一人夜空の下へと出てくる。

夏だというのに異様な涼しさが立ち込めているその場所で、愁は頭から流れる血を拭き取る事無く夜空を見上げた。

――――『クロノ、エリル、プランDに変更だとさー気合入れて頑張れやー』

穿真の声が二人の機体に流れると、クロノは小さく頷く、エリルは言われなくてもわかってると言わんばかりな表情だ。

市街地の上空を一機の戦闘機が凄まじい速さで飛んで行くのをエリルが発見すると、それをクロノに伝える。

『クロノ、周りの市街地に被害を出さないようにね』

『ええ、わかっています。エリルさんも爆撃終了後直ちにその場から離れて下さい』

『了解、頼んだわよ』

一機の戦闘機は宮殿の上空まで行くと、空中で形を変えて一気にDシリーズへと変形する。

空中で銃を宮殿に向けると、銃口の下についてある特大のグレネードを一発放った。

『任務完了、コレより帰還します……なっ！？』

クロノの表情が一変していく。

宮殿の前にはさっきまでいなかったはずの赤い機体が、降臨されたかの如くそこに立っていたのだ。

それもグレネードの射線上に立っている、

宮殿を一発で吹き飛ばす程の威力を持つ特製のグレネードを前に一体この機体は何をするのかとクロノはその機体を見つめている。

赤い機体、それは前に見た事のある鬼神の姿。鬼神は迫るグレネードを鷲掴みにすると何を思ったのか突然グレネードを抱きかかえた。

『あの機体、一体何を……』

鬼神が抱きかかえた瞬間。グレネードは強烈な爆発を起こし、市街地が一瞬だけ明るい光に包まれた。

その様子をクロノはじっと見つめていると、エリルから突然通信が

入る。
『宮殿に被害無し！？あの機体が自らを犠牲に受け止めたみたいね』
『わかりました、では2発目の準備をします』
落ち着いた様子で機体の腰に着いてある特製グレネードを掴むと、それを銃に取り付けようとした時、レーダーが強い反応を示す。
『これはっ！？』
爆煙を吹き飛ばし、赤く煌く装甲をした鬼神が怒りを露にしたかのような勢いで迫ってきていた。
『あれ程の爆発で無傷！？何なんですかあの機体は！』
すぐさま手に持っている銃で応戦するがまるで歯が立たない、銃弾は鬼神に当たっているが装甲に一つも傷が付かないのだ。
『この機体の色、形状。前にＢＮの基地に現れた機体のようですね……』
クロノは銃が駄目だとわかると背中に銃を仕舞い、両肩からＬＲＳを取り出し、両手に握ると鬼神目がけ特攻していく。
機体が振り下ろしたＬＲＳを鬼神は素手で受け止める、だがその隙を狙いクロノの乗る機体が足を前に突き出し鬼神を蹴り飛ばす。
そして背部についてある長い銃口が特徴的なスナイパーライフルを取り出し、地面に落ちていく鬼神目がけ照準を合わす。
『このレーザーライフルならあの機体を！』
素早く照準を合わせ引き金を引くと、銃口からは細く強烈な光が放たれた。
光は簡単に鬼神の腹部を貫くが、まるでその衝撃で目が覚めたかのように目が光りだし体勢を立て直す。
『そんな馬鹿な！何故立っていられる！？』
倒れる事が無い鬼神に対し歯が立たないクロノ、次こそはと思いライフルを構えるが、それを止めさせるようにエリルから通信が入った。
『クロノ、もう引いた方がいいわよ。長引けば増援が来るし、そうなったら私達が危ない』

『しかし宮殿の破壊がまだです、それで下がれば作戦が……』
『それなら私に任せて』
ステルス機能を解除した無花果の握っているマルチプルランチャーから宮殿目掛け数多の小型ミサイルが飛んで行く。
ミサイルは全弾命中、宮殿は炎に包まれ崩れ落ちていくのを見て任務成功を確認した二人はその場から一気に離れていった。
虚ろな目をしていた愁はその光景をただじっと見つめ続けている、何も思わず、何も考えず。
だが、その炎を見ている内に虚ろな目に段々と光が戻っていった。
「あれ、俺は…何をしていたんだ……」
ふとレーダーを見ると2機の機体が離れていくのがわかる、そしてモニターに目をやると、火炎に包まれ崩れ落ちる宮殿が目の中に映った。
「えっ」
宮殿の周りには消防車が駆けつけ、近辺の人達は安全な場所へと避難している。
今まで溜め込んでいた感情が段々と現れてくるのが自分でもわかった、抑えようの無い感情、その鉾先を誰に向けるのか。
「俺はまたＢＮに奪われた……大切な人をッ！」
機体のハンドルに手を掛けると、市街地から出て行った2機を追って鬼神は走り出した。
そのまま一気に市街地の外の荒野に出ると、モニターに映る2機に向かって走り出す。
「お前等が！お前等がぁッ！！俺の、俺のぉおおおおおっ！！！」
言い様の無い怒りを爆発させながら、段々と2機に近づいていく鬼神だったが、ここでついに機体の限界が来た。
ブレーカーが落ちたかのように全ての機能が停止、走っていた足も急に止まりその場で機体は無様にこけた。
「うぐあっ！……う、動けよッ！何やってんだッ！？さっさと動け！！」

両手の拳を目の前に装置に何度も振り下ろす愁、しかし機体は何も答えない、ただ装置を殴って聞こえる醜い音しか聞こえない
「あと少しで追いつけただろうがッ！？それなのに、それなのに……ッ！」
目の前の装置に両手を下ろしたまま、愁は俯きながら肩を震わせる。頭の血と一緒に目から流れる涙が自分の足元に落ちるのを見て、愁はただただその場で肩を震わせながら泣く事しか出来なかった。

――「しゅう、かわいそう……」
その状況を遠くの方で見ていた俺とミシェルだったが、ミシェルは目に涙を浮かべてあの赤い機体を見ていた。
「ミシェル、戦争で可哀想なんて言っちゃ駄目だ」
「でも……」
涙を浮かべながらそんな目で見つめられては敵わない、それにミシェルにこんな事を言ったって駄目か。
「まぁ、ミシェルは誰にでも優しいからな」
「ねぇかいと、しゅうをたすけて」
「助ける事は出来ない」
殺す事は出来るけどな。なんて、そんな事をこんな状況で言えるはずがない。
「人は自分の弱さを知って、初めて自分の無力さを知る。まぁアイツは初めてじゃないと思うけどな。
だから気づかないと駄目だ、気づいて直していかないと、アイツは一生ああやって生きていく」
なんてカッコつけて言う台詞じゃねえな。
まぁ強く生きろよ、生きてればその内良い事だってあるもんだ。
それが後に辛い現実になるとしてもだ、それは全て自分が選んだ道だって事を自覚してな。
「さてと、そんじゃ行くかな」
「どこに……？」

「ＮＦ、ＢＮ、ＳＶ。この三つの組織の首都にでも行って情報収集だ、まずはＳＶの首都にでも向かうか」
三つの組織の中で一番謎の多い組織はここだろうな、一体何を隠しているんだこのＳＶの連中は。
『神』の復活、他の組織とは異なる機体。Ｄシリーズの動力源、レジスタルについても何かわかるかもしれない。
「まだまだ謎だらけだが、少しずつその謎を解明して行こうじゃねえか」
「うん！」
そう言って頷いてくれるのは良いんだが、ミシェル。一番の謎はお前だ、お前は一体何者何だ……。
ＳＶに行けばわかるかもしれない、どんな真実でも俺は受け止めてやる。
倒れた鬼神に背を向け、俺達の乗る機体は走り出した。全ての謎を明らかにする為に。

第４２話　人形、哀れ（後書き）

ゼスト
無口無表情男、笑った顔はアリスでさえ見た事が無い。
実力はＳａｖｉｏｒｓの中でも１位、２位を争う程高く、親衛隊副隊長だが地位には余り興味は無い。
本当はフィリオの護衛役であったが、フィリオ自身に頼まれアリス・リシュテルトの護衛役に変わった。

第４３話　感覚、感情

――豊かな緑と、近代的な高層ビルが立ち並ぶ都市。
その下では何千、何万という人間歩き回っている。
俺がこの都市に来るのはそんなに難しい事では無かった、ただ道を知らなかった為少し迷ったけど。
おっと、そろそろ新たな情報が出てくる時間帯だな。
ちなみに俺が今いる所は朝食限定メニューのある小さな喫茶店だ、目的は朝食とニュース。
丁度朝食が運ばれた頃にはテレビ画面に昨日起こったテロリストの襲撃について報道していた。
廃墟と化した宮殿の上空をヘリで実況中継とは、朝から良い取材してるじゃないか。
『現在ＢＮの犯行という可能性が高いと見て捜査が行なわれています――』
ＢＮの犯行で間違いないだろう、だが目的は何だ？宮殿にはＳＶの貴族がいるのは知っていたが、そいつを狙っていたのか。
それとも……ミシェルを狙って宮殿に潜入したのか。だとしても大胆な行動をしたものだ、これでＳＶとＢＮの関係は一番最悪なもんになる。
『神』とやらの復活と、ミシェルはどう関係しているのか、ミシェルを使って『神』という兵器を作動させるのかもしれない。
それを止めようとＢＮが必死な訳で、ＮＦもＳＶとほぼ似たようなもんか。
「フレンチトースト美味いか？」
俺の前に座っているミシェルは笑顔で頷くと美味しそうに齧り付いている。
ミシェルがパンを食べ終えたら店出て何処に行こうか、危険だがやはり軍に潜入した方が良いか。

『緊急速報です！たった今からフィリオ王女の全世界同時中継が行なわれるとの事と連絡が来ました！』
急すぎる報告だな、だがこれで店から離れる事は出来ない。
リシュテルト家といえばＳＶの創始者にあたる、昨日の事件を体験して一体ここで何を言うつもりだ。
宮殿の映像が消えると、そこには何本ものマイクが立てられた台の前に立ち、真剣な趣の女性がいる。
あれがリシュテルト家の、俺を殺せと命令した人間か。
顔を見るのは初めてだな、こいつ等が神を復活させようとしているのか……。
『おはようございます、私はリシュテルト家の長女、フィリオ・リシュテルト。
今回このような中継させて頂くのは、重大な発表と、それを国民の皆様に聞いてもらいたいと思い行ないました』
アリスとか言ってた女と似ているが、声と髪型、名前からして姉妹と見た。
この中継を見ているのはＳＶの人間だけではないだろう、恐らくＮＦやＢＮの連中も見ているはずだ。
ふと喫茶店から町の様子に目をやると、今まで歩いていた人達が全員足を止め、ビルなどについてある大型スクリーンに目を向けていた。
『先日私のいた宮殿が襲撃された事件、既にＢＮの仕業だという事が明らかになっています。
一方的な武力介入を行なわれ、町にいた多くの人達に被害を被りました。
ＥＤＰが行なわれ、今ではＥＲＲＯＲの活動も停止、順調に『平和』な世界に進みつつあります。
しかし、そんな平和な世界を脅かす存在のＢＮは、この世界で暮らす私達にとってどれだけ脅威なのかがお分かりいただけると思います』

たしかに、これだけを聞けばＢＮは酷い連中だと思える。
それに制限、制御されただけの情報を見ている国民にはこれだけで十分ＢＮを危険な武装組織とわかるはずだ。
真実もわからず、ただただ目の前の情報を見て勝手に判断して認識する、馬鹿な奴等だ。
レジの隣から持ってきた新聞でも見ようよ俺は机の上に置いていた新聞に手を掛けた瞬間、店外の人間が何かざわめき出すのがわかった。
それにテレビから聞こえていた女の声が聞こえてこない、俺は新聞を机の上に戻すとまた店内に置かれているテレビを見てみた。
するとそこには、またも見た事の無い女性の姿が映し出されていた。
『それは違います、ＢＮは世界平和の為に活動している組織。本当に危険な組織はＢＮではなくＳＶの方です。
１００年前、人類を滅亡まで追いやった『神』と言う名の忌わしき大量破壊兵器を、ＳＶは再び呼び起こそうとしています。
それを防ぎ、人類の力で平和な世界を築こうと存在しているのが我々ＢＮ。
もしあの兵器を復活させてしまえば、この世界は炎に包まれ、二度と平和は来ないでしょう』
ＳＶの人間ではない、ＢＮの人間。恐らくＳＶの中継をジャミングして乗っ取ったのだろう。
『自己紹介が遅れました、私はＢＮの皇女、風霧唯と申します。
我々は人類同士の戦いを望んでいません、昨日の事件に関しても我々ＢＮは何もやっておりません。
濡れ衣を着せられるような事はしないでもらいたいです、それでは』
風霧唯？ユイ、名前は同じだが……そんな訳無いか。てか、風霧って。
モニターに映っていた少女が消えると、画面は真っ暗のまま何も映らなくなる。

こんな大胆な事をしてくるとは、ＢＮも本気って事だ……こいつは面白くなってきたじゃねえか。
案外俺がＢＮに行けば歓迎されるんじゃねえのか？ああいう組織に限って俺みたいな奴を受け入れてくれたりするもんだ。
俺の目的その一、神とか言う馬鹿げた兵器の破壊。だが今は活動を停止しているみたい。
だから俺は目的その二を遂行している、前にも言ったが１００年前の世界に帰る事だ。
その条件は何か、俺の力が完全に復活する事。だがそれでも過去に戻るのは難しい。
Ｄシリーズの動力源、レジスタル。これをうまく使えば俺の力は戻るのではないのだろうか。
まぁ、そんな簡単に力が戻れば苦労しないな。
「さて、行くか」
テレビは相変わらず画面真っ暗だし、もうこの店にいる必要も無い。
「どこに？」
「どこって……この町で俺と話したいと言っていた奴のいる所にさ」

――ＳＶの首都とも言える都市、今この都市の最北にある軍事基幹に彼等はいた。
中継はＢＮの妨害により中断、待機室で椅子に座っているフィリオは遣る瀬無い表情を浮かべていた。
そこに一人の男、ゼストが歩み寄り、座っている彼女の肩にそっと手を置く。
「顔色が悪い、大丈夫か？」
「え、あ…はい、大丈夫です……」
前を向いたままそう返事をしたが、大丈夫ではない事は見てわかる。
「放送は無理そうだ、ＢＮの工作だろうな」
「そうですか……あの、三人の容体は」
「三人とも命に別状は無い、今は病室で安静に寝ている」

と、言った途端に待機室の扉が開き、右肩に包帯を巻いた葵が元気良く部屋の中に入ってくる。
「おーっす、二人ともおはよう！」
「あ、葵さん！？」
フィリオは驚いた様子で椅子から立ち上がると、すぐさま葵の元に駆け寄り、大きく頭を下げる。
それを見ていた葵はフィリオの肩に手を当てると下げている頭をゆっくりと起こした。
「来ていきなり頭下げられるとは思わなかったなぁ」
「申し訳ありません、私のせいで葵さんに怪我を……」
「フィリオのせいじゃないって、これは俺の弱さが招いた結果ってもんさ、ははは！」
「いえ、私の不甲斐なさでこのような結果になってしまったのです……」
葵は間を和ますつもりで言ったつもりだったが、逆にそれがまずい結果になってしまう。
「ってか俺の心配もしてくれてたんだ、ありがとなフィリオ。そうだ、これからエコと愁の所に行かないか？
二人もフィリオが見舞いに来てくれたら喜ぶぜ、ほら」
そう言ってフィリオの手を握り部屋から出て行こうとする葵、フィリオがふと後ろを向くとゼストは軽く頭を下げていた。
そのまま二人は部屋を出て行った後、ゼストもゆっくりと歩き出し部屋から出て行く、当然向かうのはあの人のいる場所。

――「ここがエコのいる病室だな、その隣が愁のいる部屋だ」
葵が病室の扉を開けると、ベットの上で壁に持たれたままボーっと前を向いているエコがいる。
「よーエコ！調子はどうだ！」
「普通……」
エコは軽く葵をあしらったが、その後ろにいるフィリオに気づいた

途端に眼つきが険しくなる。
「エコさん、すいません……」
「謝らないで」
キツイ口調で言われたその言葉に、フィリオは言葉が出ない。
だがエコの眼つきはココで解けた、悔しそうな表情を浮かべて俯いてしまう。
「謝るのは、私の方だから……私は、貴方を守る事も、助ける事も出来なかった……」
あの時、宮殿が崩壊する前に4階には葵とゼストが辿り着いていた。
葵はエコを抱え、ゼストはフィリオを抱きかかえると、あの地下通路を使い宮殿から脱出、二人とも無事に生還できた。
「私は何も出来なかった、何も……」
エコは両手を震わせながら真っ白なシーツに深いシワが出来る程強く握り締めると、そのシーツに何滴もの涙が零れ落ちた。
そんな彼女を見て、自然に体が動いていくフィリオ。気づけば泣きじゃくるエコを抱きしめ、優しく髪を撫でていた。
それに甘えるようにエコもフィリオを抱きしめ、顔を胸元に埋めた。

――エコの隣の部屋にいる愁は座っていたベットから立ち上がると、テレビの電源を消そうとテレビに近づいていく。
愁は仮面を被ってはいなかったが、いつもの軍服はしっかり着込んでいる。

――俺がテレビの前まで来た時、聞き覚えのある曲がテレビから流れ出した。
「レジェンドクロス、再放送してるのか、懐かしいなぁ……」
このアニメには俺にとって色々な思い出があった、そもそもこのアニメを見たきっかけはラースの部屋に行った時だ。
穿真と一緒にラースの部屋に遊びに行った時、『面白いから見てみるといい』と言われて早速部屋に戻って二人で見ていた。

その次の日、アニメを知っている俺達三人は機体整備そっちのけのテンション上がりっぱなしでアニメの話をしていた。
それを見てエリルが羅威に『あの三人、目が活き活きしすぎて怖いんだけど……』と言っていたのを後で羅威から聞いた時には少し恥かしかった記憶がある。
懐かしい思い出、楽しかった思い出も今では良い思い出になっている。
……エリル・ミスレイヤ、無花果のパイロット。昨日宮殿を崩壊した無花果に乗っていたのはエリル。
エリルが俺達を殺そうとした、エリルが俺からまた全てを奪おうとした、エリルを、殺す。
「えっ」
今俺は何を思った、殺す？エリルを……？
ふと我に返ると、俺の拳がテレビのモニターを貫いている。
さっきまで流れていた懐かしい曲は止まり、真っ暗な画面に俺の右手が伸びている。
そっと右腕を引くと、割れた画面の破片が足元に落ちる。右手には傷後は無く、服も破れていない、良かった……。
……良かった？何が良かったと言うんだ？俺は今さっき、エリルを殺そうと思ったんだぞ。
親友で、友達のエリルを、簡単に殺そうと思った俺って、一体……。
「愁、少しお話がしたいのですけど、よろしいですか」
扉の向こうからフィリオさんの声が聞こえてくる、すかさずその場にあった布をテレビの画面に被せ、小さな破片を大まかに手ですくいゴミ箱へと捨てる。
「はい、いいですよ」
後は急いで扉の前に立つと、自らゆっくりとドアノブに手を掛け扉を引く。
扉を開けるとフィリオさんが立っていた、当然だ。
フィリオさんは部屋に入ると部屋にある大きなベットの上に座る、

俺は扉を閉めるとベットの上に座っている彼女の元に向かった。
「愁、ここに座ってください」
言われるがままに指定された場所に座るが、そこは彼女のすぐ隣の位置。一体ここで何を話すのだろうか。
「上に来ている服、全部脱いでもらえますか？」
「はい？」
「お願いします」
突然何を言うのかと思えば、服を脱ぐ？その前にフィリオさんの言っていた『話』は何処に……。
「え、ええ。わかりました」
とりあえずコートを脱いだ後、上着のボタンを外した後に上着を脱ぐ。
上半身はYシャツと下着だけとなるが、相変わらず彼女は真剣な目つきで俺の体を見ている。
シャツのボタン外し終わると、ゆっくりとシャツを脱いでベットの上に置く。
その時ふと気づいた、シャツを脱いで見ると、自分の両腕が肌色じゃない。
赤や青の斑紋が腕から肩にかけてびっしり広がっていた。
俺の姿を見て彼女は両手で口を防ぎながら驚いた表情をしている、けど一番驚いたのは彼女ではなく、俺だった。
「何、これ」
すぐさま下着を脱いで見ると、やはり肌色とは程遠い斑紋が全身に広がっている。
身に覚えが無い、この腫れ具合は何か強い衝撃を与えられて出来たものだ。病気などで出来たものじゃない。
「やはりあの時の銃撃で……少し目を瞑っていてもらえますか」
フィリオさんは俺の体を見つめながらそっと後ろに移動していく、俺は言われるままに目を閉じた。
目を瞑りながら昨日の事を少しずつ思い出していく、たしかに昨日

の夜俺は何百発も撃たれたのは憶えている。
けど何も感じなかったんだ、痛みや恐怖とか全く無く、ただ体が勝手に動いて・・・。
頭の中の考えが急に消えると、何か暖かいもの、光のような柔らかい暖かさが背中から全身に伝わっていくのが目を瞑っていてもわかった。
「フィリオさん、一体何を？」
「大丈夫で、す。すぐに終わり…ますか、ら……」
掠れた声とともに背中の温かさは消え、俺の横でドサリと倒れる音が聞こえた。
「フィリオさん？」
ふと目を開けて横を向くと、目を瞑り意識朦朧としている彼女がベットに倒れている。
何が起こったのかと思い急いで手を伸ばそうとした時、自分の両腕にあった斑紋が消えている事に気づいた。
腕だけではない、体全体にあった斑紋が消え、綺麗な肌色に戻っている。
「私は、大丈夫です……少し休めば、楽になります……」
そんな事を言われても目の前で弱っている彼女を黙って放置する訳にもいかない。
俺は彼女を抱きかかえるときちんベットに寝かせ、脱いでいた服を急いで着替える。
「申し訳ありません・・・私の力では、これが限界だったのです・・・」
「フィリオさんの力？まさか俺の体の傷を消したのも、その力なんですか」
苦しそうに頭を下げる彼女は、また口を開き俺にある事を伝えてきた。
「貴方の感情を保つには、私の力では不十分でした……」
「俺の感情？」

「そうです、あの時家族を失った貴方は、まるで人形のように冷たく、表情も変えず、立ち上がる事もできませんでした……。
私の力で今まで何とか失った感情を支えていましたが、貴方の感情に限界が……っ」
家族を失った時。
思い出した、何もかも、俺が何故ここにいるのかも。
俺が今こうして生きていられるのは、紛れもなく彼女のお陰だ。
彼女がいなければ、俺は悲しみや怒り、喜びや楽しさを感じる事の出来ない、ただの人形になっていたはずだ。
そして今、撃たれた激痛も感じず、親友を殺す事にも何の違和感も無かった俺は、少しずつ人形に近づいている。
いや、戻っていると言う方が正しいのかもしれない。
彼女を守っていると俺は思っていたが、反対だった。俺は守られていたんだ、ずっと。
「それなら俺は、限界が来るまで守り続けます、貴方と、貴方の作ろうとする世界を」
その答えに彼女は小さな笑みで答えてくれたように見えた。
そんな苦痛でのたうち回る彼女の顔を見て俺も思わず笑みを浮かべてしまった、こんなに面白いものが見れるなんて、今日は最高の日だ。

――都市とは程遠い、草原と墓石がだけが広がる場所にアリスとゼストは立っている。
二人の立っている前にある墓石には既に花束が置かれており、そこにもう一束、花束を置くアリス。
「ラティス、今までお姉様を守ってくれてありがとう。後は私達に任せて、ここでゆっくりと眠りについてね……」
風で草原と同じように靡く髪を手で押さえると、静かに後ろに振り返り草原を後にしようとする。
ゼストは墓石の前に置かれた花束を少し見つめた後、無言でアリス

の後を着いて行こうとするが、ふとその足が止まる。
「アリス、あの計画が明日行なわれるが、お前はどうする」
ゼストの言葉にアリスが立ち止まり、振り返る。その顔は涙で濡れていたが、泣いてはいなかった。
「行くに決まってるでしょ、ＢＮとの争い、明日で全て終わらせるんだからっ！」
それだけ言ってまた振り返り、歩き始める。その後ろ姿を見てゼストは何も思うのか、ただ無言で彼女の後を着いていくだけだった。

――俺は飯を食べ終えた後、すぐさま宮殿へと向かった。都市の最北にある宮殿と軍事基地、実に分かりやすい為道に迷う事もなかった。
さすが本拠地とあって警備も伊達じゃない、物陰に隠れながら宮殿の周りを囲う壁には銃を持った兵士達がそこら辺にウロウロしている。
「ねぇかいと、どうしたの？」
「いやぁ、簡単に侵入できると思ってたんだが、簡単には行きそうにない事が今判明した」
俺一人だけでも難しそうなのに、ミシェルも一緒に連れて行かなければならないとなると更に難しくなる。
また交番に預けるか、いや、もう預けたりして一人ぼっちの所を攫われる、そしてまた俺が助けに以下略。
そんな在り来たりなパターン何なんてこっちから願い下げだ、だったら二人で行きゃいいだけの事。
「こういう時は誘導作戦だ、奴等の注意を反らした間にあの壁を登って侵入するぞ！」
「どうやって？」
「ふふ、心配するな。俺に良い考えがある！とう！」
物陰から出た俺は数人の兵士が歩いている場所へ走り、問答無用で殴り飛ばす。

注意を反らす事に成功、気絶した兵士達を人目のつかない所に投げればほら完成。後は壁を登るだけだ。
ミシェルを抱きかかえると壁を跳び越え領土に入り、すぐさま茂みに隠れる。
「さてと……」
何処行けばいいんだ。
宮殿でかいし広いし、アイツのいる部屋とかわからんな。
なら何故俺はここにいる、はは、俺ももう少し計画的に動く癖を身につけないとなぁ。
その時、ふと聞いた事のある女性の声が俺の耳に届いた。
女の声で男のように喋っている、そんな奴俺の知っている中で一人しかいない。
2階、丁度真正面の建物の2階から葵の声が聞こえてくる、窓も開いているし、行くっきゃない。
しかし2階の窓から侵入だなんて、一体どうすればいいんだー。っと思われるかもしれないが心配後無用。
「魔法は使えないが、人間離れした身体能力が俺にはある！いくぞミシェル！」
「えっ？あ……」
再びミシェルを左腕で抱えると、右手に剣を出現させる。
後はこの剣を壁に刺して段を作れば良い、あとはそこに乗ってジャンプ、俺だって計画ぐらいできるのさ。
一階の窓の上に剣を投げると、丁度良く刺さり段が出来上がる、俺はそれを踏み台にすると簡単に2階の部屋まで跳んでいく。
うまい事窓枠を掴み部屋の中に入ると、思ったとおり部屋の中には葵とエコがいた。
俺が入ってきた途端に葵の顔は一変して俺に指を指してきたが、エコの方は対して驚く様子も無く静かにベットで横になっていた。
「おま！お前何でこんな所に！？」
「話しがあったから来ただけだっつーの、てかあんま大きな声出す

なって。俺がここにいる事ばれたらまたややこしくなる」
とりあえず抱いていたミシェルを椅子に座らし、俺は壁にもたれ掛かる。
「それに俺はお前等の敵じゃないだろ？別にＳＶのやる事にちょっかい出してないし」
「お前がその子を攫ってんだろうが！大人しくその子を渡せ！さもないと……ッ！」
葵が両手を振った瞬間、両手の甲に鍵爪が着き、今にでも俺に飛びかかってきそうな勢いだ。
仕方が無い、まずはこの女を黙らしてからエコと話しを……。
「葵、止めて」
横になっていた体をゆっくりと起こすと、エコはそのまま壁にもたれ掛かる。
エコの声に葵の動きが止まる、勢いが一気に冷めたようだ。
「えっ？」
「彼とは……色々と話してみたかった、葵もそうだよね……」
「ま、まあな。……しゃーない、エコがそう言うなら止めとく」
葵はまた両手を振ると、鍵爪が瞬時に無くなる、まるで俺の剣と同じ原理だ。
いや、もしかして同じなのか？とすればこいつ等はこの世界の人間じゃ・・・。
「高橋甲斐斗、いや……カイト・スタルフ。
貴方も私達と話がしたいと思った、だから来たんだよね」
その名前を聞いた瞬間、俺は自分でもわかるぐらい目を開き、動揺してしまった。
カイト・スタルフ？こいつ、どうして俺の本当の名を知っているんだ？
「驚いてるみたいだけど、私の方が驚いた。１００年前に死んだはずの悪魔がここにいるんだから……」
こいつ、一体俺の何を知っている。何処でその情報を得た？何故俺

の名前を、１００年前にいた事も知っているんだ。
平然な顔をしているエコが不気味に感じてしまう、なんでだ、なんでなんだ。
「な、なんで。なんでお前、それを知ってるんだ？」
「忘れない、絶対に忘れない…私の全てを奪った……悪魔の名前……」
恐れている、俺。俺が何を恐れる？何を何が、何で俺は。
この場から逃げ出したい、そんな気持ちが俺の脳内を延々と巡る。
「私達が、この世界の人間じゃない事は……もう気づいてるよね？」
「あ、ああ。それは何となくわかってた……」
「どこの世界から来たと思う？」
……言えない、言いたくない。聞きたくもないッ！
「教えてあげる、私のいた世界、それは」
言うな、言うな言うな言うな言うな言うな言うな言うな言うな。
「アルトニアエデン」
その言葉を聞いた途端、俺の頭の中が急に真っ白になった。
純白と言うのだろうか、眩い光しか見えない、何もかもが白い。
「かいと！」
ミシェルの声を聞いて視界が開けた。
病室、俺の両手には剣が握られ、その剣先はエコの首の手前で止まっている。
俺が振り下ろしていた、無意識に剣を出して、黙らせようと。
けど腕が震え、剣先が震えて……これ以上腕が進まない……。
「１００年以上も前の事……思い出すのには、少し時間がかかった……。
　でも今、ハッキリと思い出した。あの時の事、全部」
殺意と憎悪が滲んだ瞳がじっと俺を見て放さない。
外見は少女、人間の形をしているが、今の俺にはそうは見えなかった。
もっと違う、別の何かに俺には見えていた。

両手の剣を消すと、俺はまた壁にもたれ掛かる、というか、持たれていないと立っていられないんだ。
その時、今まで黙っていた葵がベットの横にあるもう一つの椅子に座り、エコを見ながら口を開いた。
「エコ、教えてくれないか？お前の過去を」
「うん、いいよ……」
動揺している俺に構わず、エコは語りだした、あの時起こった、史上最悪の事件の事を……。

第４３話　感覚、感情（後書き）

ダン・バイルド
常にサングラスを掛け、煙草を吸っている男、ＢａｃｋＮｕｍｂｅｒｓの紳が雇った用心棒。
射撃の腕は部隊の中でもトップクラスであり、機体の扱いも手馴れている。

第４４話　爽快、理解

――アルトニアエデン。科学と魔法の両方が発展した偉大な世界。
そんな世界の平和な町で、中学生のエコは普通に暮らしていた。
「いってきます！」
玄関の扉を開け、家の中から制服姿の彼女が現れた。
履いている靴のつま先を2、3回地面に当てて靴をしっかり履くと、門を開けて中学校へ向かっていく。
道には他の中学生もちらほら見えるが、エコは一人で下を向いたまま歩いていく、すると後ろの方から大きな声でエコの名前を呼びながら近づいてくる女性がいた。
「エコー！おっはよー！」
名前を呼ばれてふと後ろに振り返ると、笑顔でこちらに手を振りながら走ってきていた。
「おはよー」
二人は軽く挨拶を終えると、女性はエコの横に並び、いつものように話しをながら学校へ向かっていく。
「来週から魔法のテストあるけど、エコは大丈夫なの？」
「うん、私は大丈夫だけど。貴方は大丈夫？」
「大丈夫だと思う、エコがノートを写させてくれたらね！」
「また？ノートぐらい自分で書いてよ……」
「書いてるよ？エコのノートを見ながら」
「……もういい」
エコは少しムッとした表情をすると、歩く速度が速めるが。隣にいた女性もそれに合わせて歩く速度を速める。
「もー、怒らないでよー。ほら、こんなに頬っぺたプニプニしてるのに」
そんな怒った表情をしているエコの頬っぺたを横から摘まむと、エコの顔は更に険しくなっていく。

「関係ない！」
たしかに関係ない、結局エコは登校中ずっと怒った顔をしたまま学校に着いてしまった。
靴箱に靴を入れた後、自分の教室に向かう、何も変わりない、いつも通りの事。
教室に入れば数人の生徒が椅子に座り仲の良い友達と話しているが、そんな事見なくてもわかる。
一番前の窓際の席に座り、今日の授業で使う教科書を机の中に入れていく最中、
その後ろの席では、登校中にエコの隣にいた女性が後ろから顔を覗かしてきていた。
「ねぇ、数学のノート見せて」
「えー……」
「謝るからノート見せて！お願い！」
両手を顔の前に合わせてお願いのポーズをしているけど、エコは後ろに振り返らない為に何も見えていなかったが、
エコは机から一冊のノートを取り出すと、無言で後ろの席に置いた。
「ありがとう！1時間目が始まるまでには返すから！」
彼女に毎朝、毎日ノートを渡す、エコにとってこれは日課のようなもの。
気づけば教室には生徒達が揃っており、扉から担任の先生が入ってくる。
起立、きをつけ、礼。それが終わると朝から先生の長い話しを聞く事になる。
大体話しの内容は来週のテストの事、エコはその話しを窓の外に広がる気色を見ながら聞いていたが、
その後ろの女性はノートを写すのに必死でそれ所ではなかった。
1時間目、2時間目、3時間目……そして等々4時間目の授業が終わり、お昼の時間が来る。
それさえ終われば5、6時間目の授業が終わり家に帰る、いつもの

流れだ。
違うと言えば、弁当を食べる場所がいつもと違う所ぐらいだった。
「ねぇエコ、今日は天気が良いから屋上で食べよ！」
「暑いの苦手だから嫌」
キッパリ断ったのにも関わらず、女性はエコの弁当箱を持って教室から出て行く。
渋々エコも屋上へ向かうのだったが、この時屋上に行っていなければ今のエコはこの世にいなかっただろう。
屋上に上っていく彼女の手から自分の弁当箱を取るろうとするが、彼女は階段を素早く上っていき手が届かない。
「ほらほらー、早く来て来て」
「返してよ、私のお弁当！」
屋上に繋がる扉を開けて彼女は屋上へ行ってしまう。
それに続いてエコも扉を開けて屋上に出た時、弁当を持っていた彼女の背中にぶつかってしまった。
すぐさま彼女の右手に持っている自分の弁当箱を取り上げるが、彼女は全く動かずただ前方を見つめているだけだ。
「どうしたの？」
視線の方向に目を向けると、エコの握り締めていた弁当箱はするりと手から抜け落ちた。
屋上が赤い、赤い液体が辺り一面に飛び散っている。
それだけではなかった、人間の体の一部だと思われる部分が辺りに飛散までしていた。
赤色の塊、ピンク色をした肉片、腕や足、眼球、首に、空っぽの弁当箱、そして一人の男。
その男はこの学校の制服を着ており、まだ意識のある人間の手足を簡単にもぎ取っていた。
この光景を見て何を思う、何も思えない。ただ目の前の光景が現実なのか夢なのか、そんな事すらも考える事が出来ない。
「飽きた」

男はそう言うと、手に持っていた人間の形をしていたものを屋上から投げ捨てる。
そして男は微笑む、人間の顔とは程遠い悪魔の顔で。
男は赤く染まった手をゆっくりと振り上げると、まるで腕の力を抜いたかのように腕を下げた。
その瞬間、エコの視界には映った。
強烈な波動と共に視界に映っている全てのものが吹き飛ばされていく光景が。
そこで目の前が暗闇に包まれた。

――――「ん……うっ……」
ふとおぼろげな視界が明るくなっていく、明るいと言っても、その明るさは日の光ではない。
気がつけばエコは瓦礫に埋もれていたが、かろうじに手足が動く、瓦礫の隙間に上手い事挟まれていたエコは何とか体を動かしその隙間から何とか這出た。
そして立ち上がると、目の前に広がる光景に絶句した。
無い、あるはずの町が、そこに。
全ての建物が倒壊し、見渡す限り瓦礫の山しか広がっていない。
空には暗雲が立ち込め、さっきまで広がっていた青い空は何処にも見当たらない。
後ろを振り向いても同じ、瓦礫の山しか広がっておらず、人間の姿は何処にも無い。
が、その時。ふと耳に届いてくる微かなうめき声、その数、そして声の大きさは、次第に数を増して大きくなっていく。
瓦礫の中から数百、数千、数万の人間が生き埋めとなり、助けを求めている。
言葉が出ない、さっきまで自分のいた所は何処だったのかを思い出してみる。
学校、昼食、来週のテスト……何故今、自分がこんな所で突っ立っ

ているのか意味がわからない。
「助けて、助けて……」
足元から女性の声が聞こえる、ふと足元を見てみると腕だけが地面から出ている。
指が微かに動いている所から見てまだ生きている、エコは急いで地面から出ている腕を掴むと、勢い良く引っ張る。
千切れる音……雑草の根を引き抜いたような音が聞こえた瞬間、腕だけが無残にも引き抜かれた。
が、エコは驚いた様子も無く、自分が引き抜いた腕を手から離す。
もう何に反応していいのかがわからない。
「はずれ、残念だったね」
「えっ……？」
後ろから男の声が聞こえてくる、手に持っていた腕を放すとそこには血塗れの制服を着た男が立っていた。
屋上で人を千切っていた男が今日の前に立っているのを数秒かかってやっとわかる事の出来たエコはその男をじっと見つめたまま動く事が出来ない。
「君の探してる子、僕が探してあげるよ」
そう言って瓦礫の中に手を入れると、勢い良く何かを引き抜き、その引き抜いたものをエコに投げ渡した。
ふと渡されたものを受け取ると、それは重くて赤い、さっきまで笑っていた友達の首だった。
「きゃあああああああッ！」
勢い良くその首を投げ捨てると、地面に落ちた衝撃で頭蓋骨が割れ、そのままゴロゴロと瓦礫の上を転がっていく。
その様子を見て彼は笑っていた、まるでエコの反応を楽しむかのように。
「君は運が良い」
笑みを浮かべながら近づいてくる男から逃げるはできない、全身が石のように重く、足を動かす事が出来ない。

「この町で、君だけが無傷で生き残った。でもそれは皆に悪いと思うよね？
だから君は特別に苦しんで、苦しんで苦しんで苦しんで……それから死ねばいい」
男はそう言って右腕でエコの首を掴み、軽々と持ち上げていく。
エコは必死に抵抗するが、この男の腕を外せるはずがなく、苦しそうに男の顔を見ている。
首を絞めて殺される、エコはそう思ったが。男は左手をエコの顔の前に出し、そっと何かを呟く。
男の左手に黒い稲妻のようなものが見えた瞬間、その稲妻が自分の全身に駆け巡った。
「ぁあああああああああああああああッ！！」
苦しみ叫ぶエコの悲鳴は、辺り一面から聞こえてくるうめき声を掻き消す程のものだった。
全身の血液が酸のように熱く、それが体全体に駆け巡り、激痛をを及ぼす。
見開いたその目からは涙を流し、全身が激しく痙攣して動きが止まらない。
「君は本当に幸せ者だ」
男の声で、エコの視界は再び暗闇と化し、意識を失った。

『全部…憶えてる……』

意識を取り戻してから、それからが本当の地獄だったのかもしれない。
起きても自分の知る人間は誰も生きていはいない、あらゆる都市は崩壊し、世界は混乱していた。
混乱していたのはエコもだ、体は何年経過しても歳をとらない体へと変わり、しかも全く声を出す事の出来ない体になっていた。
あの町でただ一人全くの無傷で生き残ったエコは皆から気味悪がら

れ、呪われていると罵れられる。
家族や友人、全て死んだエコは遠い町の孤児院に引き取られるが、そこでも気味悪がられ、様々な嫌がらせの日々を受ける生活が続いた。
何年も、何十年も続く。他に身寄りの無い彼女に何が出来る、声も出せる事が出来ない彼女はどうやって生きていく。
そんな奴隷生活が長きに渡り続いていた時、世界を揺るがす事件がまた起きた。
そう、ＥＲＲＯＲである。この世界にもＥＲＲＯＲが出現したのだ。
ＥＲＲＯＲが出現して数十年、等々この世界にも限界が訪れ、滅亡の危機が迫っていた。
そしてついにエコのいた町にもＥＲＲＯＲが訪れる、軍は必死に町を防衛しようとしたが３０分程でほぼ全滅。
町は無防備となり逃げ遅れた人々は次々にＥＲＲＯＲの餌食になっていく。
孤児院にいた子供達も次々にＥＲＲＯＲに喰い殺されていく、そしてついにエコにＥＲＲＯＲの手が伸びようとした時だった。
汚い腕を鍵爪で刎ね飛ばし、エコを簡単に抱えるとすぐさまその孤児院から脱出する一人の女性。
それが葵との出会い、この出会いが後に、エコの声と生きる活力を取り戻す事になる。

――アルトニアエデンがＥＲＲＯＲとの長き戦いに敗れ、生きていくには他の世界に移住する事しか出来ない状況まで追い詰められていた。
そして、決断される他世界への移住。移住と言うが他の世界に行けるのはたかが数千人程だ。
しかし問題はコレだけではない、まだＥＲＲＯＲのいない世界。
この条件の当てはまる世界等、もう何処にも存在していなかったのだ。

だが、それから1ヶ月、丁度1年が終わった頃にある出来事が起きた。
あるはずのない世界がそこに存在していたのだ、まだＥＲＲＯＲの出現していない世界が。
それがこの世界、何故この世界に長きに渡りＥＲＲＯＲが出現しなかったのか。
その理由はただ一つ、この世界の平和を望む『神』という名の兵器の力だった。
１００年間神は他の世界からの侵入を防ぎ続けていたのだ、ＥＲＲＯＲをも退ける強大な力で。
そして１００年が終わった時、その力は無くなり、他の世界からの侵入が可能となった。

――「それでこの世界に来た……目的は、『神』を復活させて、世界を守る事……」
話しを終えたエコは顔色一つ変えず、ただじっと甲斐斗を見つめている。
その甲斐斗は壁にもたれ掛かりながら床に座り、両手で頭を抱えながら震えていた。
「話してくれて、ありがとな」
ベットの隣にいる葵はエコに近づいていくと、そっと頭の上に手を載せて優しく撫でていた。
話しを聞き終わった甲斐斗は人が変わったかのように臆病になり、体を小さくしていた。
「あれは俺じゃない……僕だ、俺じゃない。俺じゃない僕何だ、僕なんだ、俺じゃない？あれは俺じゃない……」
自問自答を一人ブツブツと繰り返す甲斐斗の頭に、白く小さな手が触れた。
「ミシェル？」
隣の椅子に座っていたミシェルが、差し伸べた手は甲斐斗の頭を優

しく撫でている。
「俺が…怖くないのか……？」
「うん」
迷いの無い純粋な目は甲斐斗を恐れてはいなかった。
その様子に信じられない甲斐斗はミシェルから目を背ける。
「い、今の話し、聞いてただろ……？俺は無差別に人を殺してきた男何だぞ？」
「うん」
「ならどうして俺を恐れない！化物の俺をどうして恐れないんだ？！」
「かいとが、だいすきだから」
呆然とした様子の甲斐斗、だがミシェルの言葉は嘘でも冗談でもない、本音だ。
ミシェルにとって甲斐斗は悪魔でもなければ怪物でもない、たった一人の、掛替えの無い友達。
いや、それ以上なのかもしれない。彼女は誰よりも甲斐斗を頼もしく思い、信頼している。
「俺も好きだよ、ミシェル。だからお前だけは守りたい、見せてやりたい、生きる幸せを……」
そう言って甲斐斗もまた手を伸ばし、エコの頭を優しく撫でる、そこにはもう臆病だった甲斐斗の姿は何処にも無い。
「甲斐斗……次は貴方が、話す番……」
エコに言われて甲斐斗はまず立ち上がると、エコに問いかけた。
「なぁエコ、俺の事今でも恨んでるか……？」
「うん、恨んでる」
「……だよな、当然だよな。でもこれだけはわかってくれ、世界を崩壊させたのは『俺』じゃない」
「どういう事？」
「俺じゃない……それしか言えない。しかし、俺の力でアルトニアエデンを崩壊させたのは事実、それは悪いと思っている」

――ただの言い訳にも聞こえるかもしれないが、エコはその言葉を聞いて頷き、口を開く。
「もう一人の貴方……たしかに外見は一緒だけど、中身は何処と無く違うような感じはした……」
「だろ？時々俺も自分が変になる時があって……っと、俺の話しをするか……」
葵に睨まれながらも俺は口を開いた、自分が１００年前の世界からこの世界に来た事。
そして今自分は魔法使うことが出来ず、過去に戻る方法を探している、と。
実に呆気なく俺の話しは終わった、内容も信じてもらえるようなものではない。
「俺は過去に帰りたい、その為にも俺は全ての魔力を取り戻さなければならないんだ」
「おいおい待てよ、いくら魔力があったって過去に帰る事なんて不可能じゃねえか？」
葵がこう言うのも当たり前だ、過去と未来では明らかに後者のほうが簡単で楽だ。
未来に行く事、ようは自分が冷凍保存のようにされていれば、いつか目が覚めた時そこは未来になる。
だが過去は違う、時間を遡る事など今まで誰一人として遣り遂げた者はいない。
「不可能かどうかはやってみねえとわからないだろ？俺は絶対に過去に戻ってみせる」
「過去に戻る目的は？」
「俺の帰りを待ってる奴がいる、これだけで十分だろ」
その答えに場は静まり返る、俺は真面目に言ったつもりだったが冗談のように聞き取られていた。
「甲斐斗……私の話し、聞いてたよね……？」

エコの話し、勿論聞いていた。俺はエコがまた何か話しをするのかと思っていたが、そうではなかった。
「あ、ああ。聞いてたけど」
「じゃあその子、私達に返してもらえないかな……？」
指を指さなくてもわかる、返してもらいたい子、それはミシェルの事だ。
「その子がいれば、神は復活する……そうすれば、この世界に平和が訪れる」
その時俺は思い出した、エコと前に少しだけ話した事、ミシェルの秘密についての事を。
「そういえば聞いてなかったな、ミシェルが何者なのか。お前達は知ってるんだろ？」
「うん……知ってる。彼女は神を起動させる為に必要な子。第１ＭＧ」
マスターガーディアン。通称『ＭＧ』。
俺はＭＧを知っていたが、そのＭＧの一人がミシェルだと言う事は知らなかった、というかわかるはずがない。
それにしても、本当にミシェルはＭＧなのか、彼女自身自分がＭＧだと言う事に気づいているのかが気になる。
「ミシェルがＭＧ、それは本当なのか？」
「嘘じゃない……貴方は彼女といて、何も感じなかった？」
最初に出会った時に感じた、あの声、そして力。たしかにミシェルの何かを感じた。
「彼女がＳＶに来てくれれば、この世界は平和になる……だからその子を、返して」
「それはミシェルが決める事だな、ミシェル、お前はどっちにいたい」
答えは聞かなくてもわかっている。
「かいと！」
「決まりだな」

……さて、用は済んだ、長い話しで頭が痛い。今日はさっさと帰って寝る事にしよう。

「ちょっと待って、言ったよね？神を起動するには第１ＭＧが必要だって……！」

今まで聞いた事の無いほどの大声を荒げて俺を止めようとするが、止まる訳にはいかない。

「貴方はまた世界に破滅を齎すの！？ＥＲＲＯＲを止めるには今しかないのよ？！」

「そんなつもりは無い、俺はお前等とは違う方法でこの世界を平和にしようとしているだけだ」

そう、俺にだって考えがある。言われるがままに行動するだけの男じゃない。

「何それ……貴方は、貴方はまた多くの人達を殺そうとしてる、『神』が起動すれば助けられると言ってるのに！」

「『神』はこの世界を滅ぼそうとした、そんな物また呼び起こせば、どうなるかお前もわかるだろ」

「『神』は私達を守ってくれる！絶対に！……貴方はやはり悪魔だ！許さない、私は絶対にお前を許さないッ！！」

そこにはもう平常心を保っているエコの姿は無かった、長きに渡る怒りと憎しみが込み上げてきていたのだろう。

憎まれても文句は言えない、俺は一生悪魔と罵られて生きていかなければならないだろう、それでも別に良い。

まだ決断するには早すぎる、ＢＮ、そしてＮＦに行ってまだ俺の知らない情報を知る事が必要なんだ。

椅子に座っているミシェルを抱かかえ、俺はその部屋の窓から出るとすぐさま宮殿から離れていった。

二人に後ろを見せた時、葵に背中を引き裂かれると思っていたが、葵はただ俺の後ろ姿を見ているだけだった。

「かいと、これからどこいくの？」

「この町から出て、ぐっすり休める所に行こうと思ってる。たまに

は休息も必要だろ？」
「うん、きゅうそくしよ！」
一人で色々と考えたいこともある、それに俺は焦りすぎているような気もする。
今はゆっくり休んで考えて、それから行動すればいい……。

――その頃、昨日の襲撃を終えたＢＮの兵士達は次の戦闘に備え休息をとっていた。
病室で休んでいる羅威は小型テレビを延々と見ていると、部屋の中に穿真が入ってくる。
「いよーう」
軽く手を上げて挨拶すると、羅威の寝ているベットの横に置いてある椅子に座り、羅威の見ている小型テレビを覗く。
「どうした？」
「いや、アニメでも見てるのかと思っただけだ、気にすんな」
「お前と一緒にするな、それよりお前がここに来たのは何か用があっての事だろ」
羅威は見ていた小型テレビの電源を切ろうと腕を伸ばそうとしたが、先に穿真が電源を切ってしまう。
「まぁそう怒るなって、話しってのはお前が乗ったあの試作機についてだ」
「あの機体がどうかしたのか？」
「おう、明日から実戦で使えるようになるらしい、今我雲の武装をつけてるらしいからな」
「……という事は、俺も明日からあの機体に乗って戦えるのか？」
「っま、そういう事だ。またお前と一緒に戦えると思うと嬉しくてしょーがないぜ！」
「それは俺もだ、そうか……明日からか。わかった、ありがとう」
話しを終えると穿真は立ち上がり、そそくさと出口まで歩いていく。
「んじゃ俺は帰るわ、あ～ばよ」

穿真が出て行き、病室にまた一人になってしまった羅威。
小型テレビの電源を入れようと手を伸ばした時、ある男の顔が脳裏に浮かぶ。
「愁、今頃家族と幸せに暮らしてるだろうな……この戦争が終わったら皆で遊びに行くか」
エリルや穿真も愁に会いたいだろう、早くこの戦争が終わり、皆でまた笑える日々にしたい、羅威はそう思いながらテレビの電源をつけた。

――羅威達のいる基地、その一室の豪華な部屋に、風霧紳とその妹の唯、そしてセーシュとダンの４人が集まっていた。
「お兄様、あれで良かったのですか？」
「上出来だ、よくやった」
紳に軽く頭を撫でられると、唯の顔は忽ち笑みに変わりとても嬉しそうにしている。
「セーシュ、唯を部屋に案内してやれ」
「わかりました」
紳に頭を下げると後ろに振り返り、部屋の扉を開ける。
唯とセーシュが部屋から出て行き、部屋には紳とダンの二人だけとなった。
「ダン、調べはついたか」
「ああ、お前さんの思っていた通りの事が起きていたようだな」
あの夜、たしかに愁は紳の前に立ちふさがった、何故今平和な町にいる愁があのような場所でＳＶと共にいるのか。
そしてどうしてＢＮの敵となったのか。作戦後紳はダンに愁の事を調べさせたが、その事でようやく紳は知る事が出来た。
「それにしても、あの愁がテロリストだとさ。可笑しくて笑っちまうよ」
ダンは煙草を吸いながら笑みを見せたが、紳は真剣な表情のまま手に持っている資料に目を通している。

「愁は俺に言った、『裏切った』と。その言葉の意味がようやくわかった」
資料を机に上に置くと、高級な革で出来た椅子に座り両目を手で覆い隠す。
そんな紳の顔に煙草の煙が段々と近づいてきていた。
「愁はＢＮの機体を数十機破壊し、専用機にまで乗っている。今更説得してももう無理だろうなぁ。どうする、この事を皆に話すのか？」
「知れば余計な迷いが生まれる、それは俺だけで十分だ」
「なら殺すか、素直で良い奴だったが仕方無い。これも戦争だからな」
もはや二人の頭の中に『躊躇い』という言葉は無い、次にあった時は容赦なく愁を殺すだろう。
だが、それは愁も同じだ。今度会う時、今の彼なら誰であろうと殺すだろう。

――基地の格納庫にはいつものようにラースが機体の整備を行なっているが、その隣に香澄と雪音、クロノの三人が立っていた。
そんな三人にも気にせずラースは装置に色々とデータを入力している。
「やっぱりラースさんは制御プログラムを組み込むのが上手ですね、今のプログラムは例の機体に組み込むものですよね？」
クロノが装置のモニターを見ながら横にいるラースに話しかけるが、ラースは気にせず打ち込んでいる。
「……よくわかったね、さすが部隊長。でも「さん」はつけないでもらいたい、ラースでいい」
「クロノ隊長、一体何の話しをしているんですか？」
「私も気になる、例の機体って何？」
香澄と雪音の二人同時に聞かれると、クロノは二人の後ろに立っている一体の機体を指差す。

「あの機体にあった試作版のＳＲＣ機能を改変して、羅威に合わせた新しいＳＲＣ機能を登録している所だよ」
難しい事をサラッと言いとげたのはいいが、雪音は余りわかっていなさそうだ。
その横に立っている香澄は小さく頷くと理解したような素振りを見せる。
「僕は今仕事中だ、君達三人は暇なら自分の機体整備でもしていたらどうだい？」
眼鏡を外し、ポケットの中から眼鏡拭きを取り出すラース、息を吹きかけながら綺麗にレンズを拭いていく。
「そうですね、暇だから僕も整備してきます」
クロノはやる気満々だが香澄はそっぽを向いて格納庫から出て行こうとする。
「私はパス、自分の部屋に戻るね」
「わ、私は整備します！」
香澄は部屋に戻っていくが、その隣にいた雪音は整備をする気らしい。
「クロノ隊長、一緒に機体の整備しませんか……？」
「ん？僕で良ければ全然いいよ。一緒にしよっか」
「はい！」
二人は肩を並べて格納庫の奥へと向かっていく、そんな二人の後姿を見ているラースは少し羨ましそうな表情をしていた。
「いいねぇ、純粋って……」
そう呟くとまたプログラムを打ち込んでいく、今日も徹夜になりそうだ……。

――その頃、エリルと彩野は基地の屋上で荒野に沈んでいく真っ赤な太陽を眺めていた。
「ねぇ彩野、この戦争終わったらさ。皆で愁の所にでも行かない？」
「あ、それいいですね！きっと先輩達も喜びますよ！」

「うん、何か久しぶりに会って話したいなーって。きっと羅威もそう思ってるだろうし」
エリルが愁と初めて会った日も、こんな綺麗な夕日が印象的な日だった。
あの頃の愁は人が持っていない純粋な優しさと強さを持っていたようにエリルには見えていた。
「先輩、この戦争って。いつになったら終わるんでしょうか……」
突き刺さる言葉、始めるのは簡単な戦争だが、終わらすには何十年、何百年もかかる戦争。
この世に『神』という名の兵器がある限りＢＮは戦い続ける、平和の為に。
「わからない……でも、私達が終わらせようよ、こんな戦争」
その時、突然屋上に突風が吹き起こった、その風で彩野は目を瞑り風に耐えていたが、エリルは目を開けたままじっと夕日を見つめていた。

――――ＳＶの宮殿、その宮殿には長く赤い髪を纏めた一人の女性と、一人の男が歩いていた。
「騎佐久、何故今になってＳＶはＮＦと手を組もうとしているんだ？」
「ＢＮが消えてくれればＳＶはそれで満足らしい、もうＢＮに邪魔されたくないんだろ。
今は邪魔者のＥＲＲＯＲもいない、それなら次の邪魔者を消す……それだけだろうな」
二人が扉の前につくと、赤城はその扉を開ける。
部屋の中に入ると、そこにはアリスとゼスト、フィリオに愁の４人が集まっていた。
「ようこそ、私の名はフィリオ・リシュテルト、隣にいるのは私の妹、アリスです」
そういい終わると、騎佐久と赤城は同時に敬礼を済ませ自己紹介を

行なう。
「中部陸戦部隊隊長の騎佐久と申します」
「東部軍事基地第５特殊部隊隊長の赤城と申します」
「第５？伊達中尉のいた部隊の方……」
小声で呟いてしまうフィリオ、じっと赤城の方を見つめている。
「今日は態々来て頂いてありがとうございます
貴方達ＮＦの方々が明日の作戦に協力して下さる事で、世界はまた一歩平和に近づきます」
戦争は平和を壊すが、戦争で平和な世界を作ろうとしている。どう見たって矛盾している。
しかしそんな事を言っていては平和は来ない。
明日行なわれる作戦はまさにそれだ、平和を願うだけでは平和は来ない。
皆覚悟は出来ている、明日の作戦で、ＢＮを終わらせる。

第４４話　爽快、理解（後書き）

瓜草（うりくさ）　騎佐久（きさく）

南部に所属していたものの、現在は中部軍事基地第１機動部隊の隊長である。

伊達武蔵と同い年でありながら少将で地位が異常に高い。

５ヶ月前に起きた事件で昇格したらしいが、詳しい事は明らかにされていない。

一見大人びた態度をしているが、友の側では素の自分が現れてしまう。

文武両道であり、Ｄシリーズの操作は『南軍最強』と言われる程だ。

第４５話　使命、開始

――――「あっれ、これどうするんだ」
あの町から離れ、廃墟と化した町にいる俺は機体のシステムを色々といじっていたものの、機体の電源が突然落ちてしまった。
何のスイッチを押しても画面は真っ暗、もしかして壊れた？いや、大丈夫。
根拠の無い自信を胸に置き、とりあえず朝飯の時間にするか。
今日も天気が良いから機体から出るのは少し躊躇ってしまう、日差しが強すぎる、だがこの場で飯を食べる訳にもいかない。
仕方無く機体から降りる、ここは格納庫のはずだが天井には大きな穴が開いておりオープン状態だ。
だから回りから見られても機体があるなんて気づかれない、だからここに機体を止めた理由だが……。
「おーいミシェルー！どこだー！」
返事が無い、遠くには行くなと言っておいたからその辺にいるはずだ。
そう思い早速近くの部屋の扉を開けると、冷蔵庫に頭突っ込んで足をジタバタと動かしているミシェルの姿が目に映った。
ああ、まるで冷蔵庫に食べられているようだ、等と暢気な事も言ってられない。
どうやら抜け出せないらしく、焦っているようので急いで体を掴み冷蔵庫から引き抜く。
「大丈夫か？」
「かいと！これすっごくすずしいよ！」
だろうな、これは物を冷凍して保存する機械だし、涼しいに決まってる。
……いやまて、何で涼しいんだ？
溢れ出す冷気、冷蔵庫の後ろを見るとちゃんとコンセントが刺さっ

ている。
って事は、誰もいない町に電気が流れているという事になるが。
でもここに来たのは昨日の夜、その時この町には灯り一つ点いていなかった。
それなのに電気が流れている？だったら灯りぐらい点いていても別におかしくないだろ。
「涼しいけど頭突っ込んだら危ないだろ？それともう飯の時間だ。お腹空いてるだろ？」
ミシェルは頷くと部屋の入り口に置いていた大きなリュックサックからパンとジャムの入ったビンを持ってくる。
どうやらここで食べたいらしい、ここには冷蔵庫と言う冷房機具もある事だし。
俺とミシェルは冷蔵庫を全開にしながら昼食を食べる事にした。
こんな廃墟の並ぶ町で、パン食ってる俺達。それでもいいじゃないか、こんな静かな日はこの世界に来てそうそう無かったからなぁ。
今こうやってミシェルと二人で食事できるだけでも幸せだ。
「ミシェル、口の周りにジャムついてるじゃないか。そんな焦って食べなくてもパンは逃げないぞ」
俺の言う台詞じゃないかもしれないが、俺はそう言ってポケットからハンカチを出すと優しくミシェルの口元を拭いてあげた時、微かに地面が揺れ始めた。
地震……にしては長すぎる、それにこれは何かの振動？まさか地中からＥＲＲＯＲが！？
不安が脳裏を過ぎる、俺は手に持っていたパンを銜えるとミシェルを抱かかえ、一気に機体まで走った。
ワイヤーを作動させ機体のコクピットにまで引っ張ってもらうと、ミシェルを操縦席に座らせる。
「ど、どうしたの？」
「どうかしたのさ、とりあえずミシェルはここに座ってパンでも食べていてくれ」

そう言って俺は機体から降りると、すぐさまパンを食べて剣を出現させる。
こんな時に機体が使えんとは、不運にも程があるがまぁいい、大抵の生き物ならこれで十分だ。
揺れは収まらない……でも来るはずのＥＲＲＯＲが一向に来ない。
もしかして俺の勘違い？
とすればこの揺れは何処から、そう思った俺は格納庫にある階段をひたすら登っていく。
最上階まで行くと古びた扉が閉まっていたが、足で蹴り飛ばし無理やりドアを開けて外に出てみると、遠くの方に何十もの戦艦が走っていくのが見えた。
ＥＤＰでもしに行くのか？と言えるぐらいの数だ、ＳＶの艦に、ＮＦで見た艦まで走っている。思っていた通り、二つの国は同盟を結んだようだな。
だとすればあの艦隊はＢＮの所に向かっているはずだ、アレだけの数が動くんだ、そう考えてもおかしくない。
……面白そうだ、またドンパチ戦闘を行ないたいが、ミシェルがいるんだし、今回は止めておこう。
それより今は機体直してふかふかのベットで寝れる場所探しに行こう。

――荒野を走る3機の我雲、森林での調査が終わり基地に戻っていた。
兵士達は楽しく会話をしながら基地に向かっていたが、その3機は一瞬にして胸部をレーザーで貫かれ破壊される。
遥か遠くからの狙撃、艦隊の中の一隻の上には、重武装しているアストロスが立っていた。
『先程の破壊で恐らくＢＮは気付くと思います、今の内に戦闘準備をしておいたほうがいいでしょう』
通信から聞こえてくるシャイラの声、それに答えるのは艦内にいる

フィリオだった。
モニターに映し出されたシャイラの頭にはまだ包帯が巻かれていた。
「わかりました、ですがシャイラ。体の方は大丈夫なのですか？無理をしなくても良いのですよ」
『ありがとうございます、体の方はもう大丈夫ですので、心配いりません』
とその時、通信に割り込んでくるかのようにモニターにアリスが映し出される。
「シャイラ！少しでも無理したら駄目なんだからね？！わかってる！？」
『はい、お嬢様』
「よし、絶対よ？今から私も出撃するから待ってなさい」
言いたい事だけ言い終わるとアリスは通信を切ってしまった。
「……シャイラ、アリスをお願いします」
『任せてください、フィリオお嬢様。命を懸けて二人をお守りします』
「いえ、命は懸けないで下さい。それでは」
「は、はい…？畏まりました……」
パイロットスーツに着替え終わったアリスは更衣室から出ると、そこには一人ゼストが立っていた。
「あれ、ゼストは着替えないの？」
「暑苦しいからな」
「ふーん。ねえねえ、私のスーツ似合ってる？」
軽くポーズをとるアリスだったが、ゼストはすぐさま後ろに振り向いて機体の所に歩いて行ってしまう。
「ちょっと！何で見てくれないのよー！」
そう言いながらゼストの後を追うアリス、更衣室からアリスだけでなくエコと葵も出てきた。
「エコ、お前もまだ体調が良い訳じゃない。ここは俺に任せてくれてもいいんだぜ？」

「大丈夫…平気だから……」
自分の機体に向かおうとしたが、突然葵がエコの前に立ちはだかり、両方の頬っぺたを掴むと無理やり横に引き伸ばす。
「ならそんな暗い顔してんじゃねーよ、ほら、こーやって笑えって」
「うるはい……手をどけへ」
パッと手を放すとエコは葵を避けて機体まで歩いていく、その後を葵は笑みを見せながらついていった。
そんな彼等を見ながら愁は深い溜め息をついていたが、この溜め息は不安を表すものではない。
愁にとってＢＮとの戦いもう何も感じられなくなっていた、ただ目の前の敵を倒していく事だけを考える。
「俺は、戦う」
一言言葉を漏らした後、愁は自分の機体に向かっていった。自分の守りたい者の為に。

――その頃ＢＮでは3機の機体が破壊された事について騒ぎが起きていた。
当然その事は紳の耳に入り、直ちに戦闘態勢をとるよう命令が下る。
慌しくなる基地内、何せこんな真昼間から大規模な戦闘が起こる等全く予想していなかったからだ。
相手の戦力すらわからない今、基地内に残る戦力ではたして足りるのか。
クロノ達のいる第壱小隊のメンバーは既に準備完了、全員機体に乗り込みいつでも出撃できる状態だ。
その中には当然羅威も含まれている、多少緊張はしていたものの羅威は普段通り落ち着いていた。
と、そこに突然穿真からの通信が入ってくる。
「羅威、ＳＲＣ機能を使っての初戦闘がこんなに早く来るとは思ってなかっただろ？」
「まあな、内心俺も驚いている。ＳＲＣ機能搭載の我雲の力を発揮

出来る機会がこんなに早く来るとはな」
「ああ、だが無理はすんなよ、今回は初戦闘のテストみたいなもんにしといて、何かあったらすぐに戻れ」
「……わかった」
「それにしても、まさかＳＶから宣戦布告が来るとはなぁ。こりゃ戦争も更に本格的になりそうだな、んじゃ」
穿真が通信を切り終えた瞬間、今度は彩野からの通信が入り、モニターには顔が怒っている彩野が映る。
『先輩達！出撃前に私語が多過ぎます！慎んでください！』
「彩野、お前と話すのも久しぶりだな。オペレーターとしてしっかり頼んだぞ」
『え？えぁ、は、はい。わかりました……』
若干戸惑い気味の彩野だが羅威は気にせず通信の電源を切った。
機体が微かに揺れる、どうやら機体を積んでいる戦艦リシュードが発進したのだろう。
それと同時に艦のハッチが開かれると眩い日差しが機体を照らす、どうしてこうも天気の良い日に戦争が起こるのか。
第壱小隊出撃、次々に機体が出撃していき、走っている艦の前方を走る。
戦艦リシュードから機体に敵の数と位置が送信され、レーダーに映し出されたが、その余りの数に部隊全員が息を呑んだ。
「何だ、この数は……」
レーダーでも、そして肉眼でも確認できる。何十列にも並ぶ敵の艦隊から次々に機体が発進していくのが見えた。
今までとは違う戦争に既に皆巻き込まれていた。それを実感するのもそう遠くはない。

――――『敵の数が予想以上に大きい、僕とエリルさんで敵艦を狙ってみます、皆さんはリシュードの守りを固めてください』
クロノはそう言うと、機体を変形させ上空から一気に戦闘エリアに

まで向かい、地上からはステルス機能を使って無花果が向かって行く。

『クロノ、ちょっと前に出すぎ！相手の数を減らしてからの方が良いんじゃないの？』

『相手は本気でこちらを潰しに来ている、数を減らす前に僕達が全滅する恐れがあります』

『それなら私達だって本気で……ッ！？』

青い2本のレーザーが無花果を目掛け放たれたが、エリルは間一髪でそれを避けてみせる。

『どうやら私が見える奴がいるみたい、あの中央の艦の上に乗っている機体のようだけど……』

『中央は無理です、端の艦から確実に沈めていきます。ついて来て下さい』

『さすが隊長、的確な判断ありがとね』

2機が中央から離れ、艦隊の端の艦に向かって行くが、相手の配備は全て計算されたものだった。

端に向かえば中央よりも敵機が多く、友軍機も相手を止めるのに精一杯の様子だ。

『少しは敵を倒しとかないと無理っぽいわね……！』

『そのようです、やるしかありません！』

桁違いの敵機の多さに友軍機が次々に破壊されていくが、ＢＮも引き下がる訳にはいかない。

基地からの援護砲撃と補給支援で何とか現状維持が保たれているぐらいだ。

――戦艦リシュードの周りを守っている羅威達にもそれが痛い程伝わってきていた。

「穿真、どうやら多少の無理は、しなくちゃならないみたいだな……！」

戦艦目掛け飛んでくるミサイルをマシンガンで破壊していく羅威、

それを狙う敵機を穿真の乗る我雲がマシンガンで破壊する。
『じゃあ俺がお前の変わりに下がりたいぜ、ったく！』
次から次へと迫ってくる敵機と悪戦苦闘の中、彩野の声が聞こえてきた。
『前方から急接近する敵機有り！リシュード目掛けて一直線に来ています！』
『っち、あいにくこっちは手が放せねえ、香澄！雪音！任せたぞ！』
『了解、破壊してみせる』
『わかりました、やってみます！』
二人の乗る我雲が前方に銃口を向けると、そこには見覚えのある機体が向かってきていた。
その姿鬼神の如く、止めようとする我雲を次々に破壊していく。
そして二人の番、狙いを定め引き金を引くが、その銃弾が鬼神に当たる事は無い。
彼女達もまた、鬼神に破壊される我雲に過ぎなかった。
が、その鬼神を止める機体が存在していた。
横から鬼神を殴り飛ばすが、殴り飛ばされた鬼神はすぐさま体勢を立て直すとすぐさま艦から離れていが、羅威の乗る我雲は鬼神を逃さない。
「これは前のお返しだ、おい逃げるなよ、戦いはまだ終わっていない」
『おい羅威！サシで赤鬼と戦う気か！？幾ら何でもそりゃ無理しすぎだろ！』
「無理をしないとこいつには勝てない、穿真は近づいてくる敵機を頼んだぞ！」
両肩のＬＲＳを抜き取ると、前方の鬼神の前に立ちふさがる我雲。
『―ＳＲＣ発動―』
『我雲』とは違う『我雲』、動きも素早さも全てが違う。
鬼神の突き出す拳を交わし、腕を切り落とそうとＬＲＳを振り下ろすが、それより先に鬼神の足が前に出て我雲を蹴り飛ばす。

「っち、身軽な鬼だな」
左手に持っているＬＲＳを鬼神目掛けて投げ、すぐさま背部のマシンガンに手を掛ける。
鬼神が投げられたＬＲＳを避けると同時にマシンガンの引き金を引いて狙いを定める羅威。
だが鬼神は銃弾を避けようとはせず撃たれる弾丸を弾きながら接近し、一気に我雲との距離を縮めてくる。
「銃が効かないなら！」
全弾撃ち終わる前に銃を投げ捨てると、腰に付いてある手榴弾を取り外し迫り来る鬼神に放り投げる。
手榴弾が鬼神の目の前で爆発、強烈な爆風と破片が鬼人の装甲に傷を負わすが、鬼神の勢いが止まる事は無かった。
「身軽な上に頑丈か、だが！」
我雲は右手に残されたＬＲＳを鬼神の胸部目掛けて突き刺そうと伸ばすが、ＬＲＳが鬼神の胸部に触れた途端、ＬＲＳは簡単に折れてしまう。
そのまま鬼神の右腕が羅威の乗る我雲の胸部を貫こうとした時、目にも止まらぬスピードで鬼神の右腕を斬り落とす機体が現れた。
鬼神が腕の斬りおとされた方向を見ると、純白のマントを身に纏った青銀の眼と白銀の装甲を光らせる『白義』の姿がそこにあった。
気付いたのも束の間、白義の持つもう１本の剣は鬼神の頭部を刎ね、鬼神の両足を蹴り体勢を崩させる。
そのまま腕を斬りおとし、そのまま剣で胸部を貫こうとしたが。背部の出力を最大にして何とか攻撃をかわした鬼神。
だが頭部は無く、右腕も無い。傷だらけの鬼神はただの鬼となっていた。
止めを刺そうと剣を構えたが、鬼神はすぐさま後退して味方の艦に戻っていってしまう。
追撃しようにも敵機の弾幕によりそう簡単には出れない状況だ。
『羅威、怪我は無いか？』

「怪我は無い、ありがとう紳、助かったよ」
『動きは悪く無かった、やはり機体の性能差だな。お前は一度艦に戻り補給を受けろ』
そう言うと白義はこの場を離れ他の場所にいる友軍機の元へと向かって行った。

――「如何なさいますか若様、我軍の兵力ではこの戦場を乗り切るのは難しいかと思われますが」
『難しいかどうか、試してみるか。付いて来いセーシュ』
アストロスやギフツがマシンガンを手に白義目掛けて引き金を引くが、その銃弾が機体に触れる事は無い。
光りの如く次々に敵機の胸部を剣で貫いていく白義、それを狙っている敵機をセーシュの乗るハルバード守護式が薙刀で破壊していく。
その撃墜の速さで友軍の士気を高め、一気に敵機を追撃していくBN機だったが、突然黒い巨大なビーム砲が放たれる。
紳やセーシュはそれに気付き何とか避けたが、回避に間に合わなかった数十機のBN機が一瞬で破壊していった。
「我等BNの兵士達が！一体何奴……！」
セーシュがビーム砲の飛んで来た方を見ると、そこには1機の黒き機体が立っていた。
今まで見た事の無い機体、セーシュはすぐさまその機体に向かおうとしたが、突然期待の目の前に鍵爪をつけた機体が現れる。
鍵爪を伸ばし機体の胸部を引き裂こうとするが、守護式の薙刀で鍵爪を弾き返される。
『セーシュ、お前はそいつの相手をしていろ。俺は……こいつと相手をしてくる』
黒き機体が背部から引き抜く1本の剣と盾、白き機体が構える2本の剣。
互いに走り出すのは同時だった、剣を振る速度も同じ、巧みに盾で剣を弾く機体、巧みに2本の剣を使う機体。

胸部を貫こうと隙を見て剣を突き立てるが、その瞬間を見切られるかのように盾が割り込み剣の起動をずらす。
その隙を狙い黒き機体は剣で白義を仕留めようとするが白義の持つもう一本の剣で弾き返される。
両者全く無駄の無い動きをしており、他の者を寄せ付けない戦いをしていた。
戦いは終わらない、争いに終わりは無い。

第４５話　使命、開始（後書き）

正式名ＭＦＥ－黒葉花（こくようか）　（Ｂａｃｋ　Ｎｕｍｂｅｒｓ製）
全長－１７．７ｍ　機体色－黒紫　動力－光学電子磁鉱石
ＢＮが無花果を元に作り出した可変型機体、無花果と同様素早く動ける。
両肩に二本のＬＲＳ、背部には狙撃用のレーザーライフルが備え付けられており、
遠距離から近距離まで幅広く戦える用になっている。

第４６話　切なさ、起動

――荒々しい戦いはまだ続く、ＢＮの基地を囲もうとするかのようにＮＦ、ＳＶの艦隊は動きを揃え少しずつ進行してきている。
それを止めようとＢＮの兵士達は全力で立ち向かうが、圧倒的な相手の火力と兵力に段々と押され始めていた。
そんな中、オーガを無残にも破壊された愁は機体の中で声を荒げていた。
「クソッ！クソオッ！！あと少しで殺せてたのに！紳め！邪魔しやがってぇっ！！
……あ、でもいいか。機体が修理されるまで休憩しよう」
急に冷めると機体の電源を切り、銃声や爆音が響く機体内でそのまま目蓋を閉じて眠りについた。
艦の外ではシャイラの乗るアストロス・ガンナーが次々に我雲を破壊していき、その機体の近くには桃色の機体が立っていた。
『シャイラって本当に狙撃が上手いわね、私も負けてらんないんだから！』
ピンクの機体の手には長い砲身のライフルが手に握られており、援護射撃を行なっているが、その弾は中々敵の機体に当たらない。
『もーなんで当たらないのよ！』
『お嬢様、引き金を引くときは操縦桿しっかり握り、呼吸を落ち着かせた後狙ってみてください』
そう言った後、ガンナーの両肩にあるレーザー砲から青き光が放たれると、遠くで戦っている我雲を貫き撃墜する。
『ですがアリスお嬢様に人殺しをしてほしくはありません。
無理をなさらずその場にいてくれるだけで私達ＳＶの兵士は貴方から力をもらえます』
『ううん、私も戦う！シャイラだって戦ってるんだもん、私だって……！』

アリスがそう言った途端、シャイラが通信を切り替え、今戦っているＳＶの全兵士に語りかけた。
『勇敢なるＳＶの兵士達。お嬢様は命を張ってこの場を留まり、私達と共に戦おうとしています。
　お嬢様の意志に応えよ、この争いを早期終結させ、お嬢様達と共に築きましょう、真の平和な世界を』
『ああそうだ！俺達はこんな所で負けちゃいられねえ！あのＥＲＲＯＲをこの世界から取り除くまでは！』
『世界を救えるのは我等ＳＶと神ッ！『神』の力を借り、我等の力でこの地に平和を！』
シャイラの言葉でＳＶの兵士全体の士気が上がり、一気に感情が高ぶっていく。

――その通信を密かに聞いていた赤城はそのＳＶの異様な熱気に唖然とした。
「これがＳＶ、ＮＦとは違う何かを持っている様に見えるな……」
「赤城少佐！ＢＮの新型が２機も来てるよ！注意して！」
ルフィスが乗っていたギフツに乗っているのは由梨音だった、その由梨音が今赤城の乗るリバインに迫る機体をレーダーに捕らえたのだ。
「了解、こちらも確認した。由梨音は下がって負傷した機体を助けてやれ。私が前に出る」
「待ってください赤城隊長！私も前に出ます！」
リバインが前線に出て行くが、レンの乗るフェリアルもまたリバインの横に並び前線に向かう。
「レン、相手は強い。行けるか？」
その問いにレンは即答した、リバインのモニターには強気な目をしたレンが赤城を見つめている。
「任せてください、私は赤城隊長の力になりたいんです！」
レンの目に迷いは無い、一人の兵士としてレンは立派に戦ってい

るのだから。
「わかった、付いて来い！」
「了解！」
二人の前に現れたのは1機の黒い機体と、赤紫色をした機体の2機だった。
ＬＲＢを構えるリバインは赤紫色をした機体に向かっていき、エリルの乗るフェリアルは黒い機体の方に向かう。
「私はこの赤い機体と戦う、レンは黒い機体を頼んだぞ！」
赤い機体はエリルの乗る無花果、そして黒い機体はクロノの乗る新型だ。
「了解！やってみせます！」
フェリアルの後部から無数のフェアリーが飛び立つと、一斉に黒い機体を囲みレーザーを放つ。
だが黒い機体は変形して戦闘機になると、集中砲火してくるフェアリーのレーザーを次々に避けていく。
「速い！？それに変形するなんて……！」
今まで避けられる事が無く、初めて避けられるフェアリーの攻撃に少し戸惑ったが、構わず続けて集中砲火をしていく。
自分が見ていても、アレだけの攻撃を交わして行く機体が信じられなかった。
しかし、それは黒い機体に乗っているクロノも同じだった、このような集中砲火等今まで見た事もされたこともない。
『ですが、僕と黒葉花（こくようか）の力があればこれぐらいの攻撃など！』
黒葉花が次々にレーザーを避けると、一瞬で戦闘機から人型に変形し、手に持っているレーザーライフルでフェリアルを狙う。
当然その攻撃をフェリアルは避けるが、その隙にクロノは自分の周りを飛び交うフェアリーを確実に落ち落としていく。
「私の、私の大事なフェアリーを！」
残ったフェアリーを一度機体に戻すと、敵の周りではなく自分の周りに待機させ、

上空を飛んでいる黒葉花を落とそうと手に持っているレーザーライフルと機体の側で浮いているフェアリーで一斉に狙いを定める。
『パターンが変わった、次は何を……』
上空で黒葉花が待機していると、地上から一斉にレーザー砲を放つフェリアル。
『そんな無鉄砲な攻撃に当たる程、僕は弱くないッ！』
変形させて戦闘機に戻すと、地上からの攻撃を避けながら一気に急降下していく黒葉花。
「当たれ……当たれッ！」
引き金を引く事に敵の機体が近づいてくる、近ければ近いほど当てやすいはずなのに、狙いを定めた攻撃は悉く避けられていく。
その時、突然のレンの機体に由梨音からの通信が入った。
「レン！早く艦に戻って！もう機体のエネルギーが無くなるよ！！」
「えっ」
機体のエネルギー残量に眼をやると、既にゲージは５％を切り、目の前で０に達した。
その場でフェアリーは落ち、機体の動きが止まる。
「あっ……」
もう自分を守る物が無い、モニターにはＬＲＳを手に自分の機体を破壊しようと黒い機体が迫ってきていた。
目の前の機体に避ける事も出来ないフェリアル、敵の機体が突き出したＬＲＳは、真っ直ぐ機体の胸部に伸びた。
ＬＲＳの刃先が胸部に装甲を貫こうとした時、黒葉花の動きが止まる。
実はもう刃先は操縦席を貫き、自分が死んでいるのではないかと言うような顔のレン、無理もない、モニターにはＬＲＳを突き出し胸部を刺している状況だ、いつ死んでも、死んでいてもおかしくない。
『ぐっ、うぐ……がはっ……』
吐き出された血はモニターに掛かり、画面の半分を汚す。操縦桿を

握っている両手は小刻みに震えていた。
そこに彩野からの通信が入り、画面に映るが血が飛び散っている為に顔が見えない。
『クロノ隊長引いてください！いくらなんでも無茶しすぎです！アレだけの急降下と変形を繰り返せば体が持ちませんよ！？』
『あと少し、あと少しなんだ……！』
震える手で握る操縦桿を前に押していくと、それに合わせて機体が握っているＬＲＳの刃先がフェリアルの胸部の装甲を貫こうとしたが。
刃先は操縦席まで伸びる事無く、クロノの意識が途絶えた。
それと同時に操縦席に悲鳴が響き渡る、レンだ。両手て頭を掻き毟り、目の前のモニターに映っているＬＲＳの刃先を凝視していた。
「嫌ぁっ！来ないで、こっちに来ないでぇえええ！！」
エネルギーが尽きたはずのフェアリルの目が光り、その場から足元がふらつきながらも必死に走って後退していく。
「触らないで、お願い……近寄らないで、私、私ッ！助けてお兄ちゃ、お姉…ちゃ……」
ふとレンの意識が無くなると、機体も力無くその場で倒れ込む。
「レン、どうした？応答しろ、レン！」
気絶したレンに赤城が必死に呼びかけるが、レンの意識は戻らない。だが赤城もレンの心配ばかりしてはいられない、よそ見をしていれば無数の小型ミサイルがリバインを狙って来る。
すかさずミサイルを避けるがミサイルは地面に当たると激しい爆煙を作りリバインの視界を奪う。
ステルスフレームを発揮している無花果はその爆煙に紛れリバインを狙っていた。
『クロノったら結構無理しちゃって……助けに行きたいけど、今はこの機体を倒さないと！』
「砂塵と爆煙で視界を封じたか、しかも相手は姿を消せる・・・厄介な相手だな」

レーダーには敵機体が映らず、何処から攻めてくるかもわからないリバインはＬＲＢを構えたままじっと身構えている。
「この場合、大抵背後から来るものだが……」
そう言葉を漏らした瞬間、目の前から煙を吹き飛ばし赤紫色をした機体がＬＲＳを握り締め突撃してくる。
リバインは焦らず敵のＬＲＳをＬＲＢで弾くと、そのまま勢いに任せて回転しながら敵機を斬り付ける。
無花果はＬＲＳで受け止めようとしたが、破壊力を高められているＬＲＢの前では歯が立たず一瞬で破壊される。
破壊された様子を見たリバインはすぐさまＬＲＢを突き出し無花果の胸部を貫こうとするが、無花果の右腕に着いているランチャーがリバイン目掛けて一斉に飛び出していく。
すかさずＬＲＢを背部に仕舞うと、背部からライフルを取り出し迫ってくるミサイルを次々に撃ち抜いて行く。
その機敏な動きと正確な判断にエリルは困惑していた。
『何なのよあの機体！私の攻撃が全部効かないなんて！』
ＥＤＰを生き抜いた兵士達の力は伊達ではない、それはエリルもわかっていたが、これ程強い相手と戦うとは思いも寄らなかった。
だが、それは赤城も同じ事、Ｄシリーズ同士での戦いは赤城も経験豊富と言える程では無い。
「距離の取り方が正確で速い、それに敏捷性はずば抜けている……ＬＲＢでは不利か」
ライフルを背部に戻し、腰からＬＲＳを引き抜くと、突然由梨音からの通信が入る。
「赤城少尉！た、大変です！南東からＢＮの増援が急接近中！もうすぐそこまで来ています！このままだと挟まれる危険性が！」
「増援だと？由梨音、敵の増援部隊の数はどれくらいだ」
「敵艦隊の数は２０を超えているとの事！ＢＮの部隊が合流すればＮＦとＳＶの戦力では互角か、それ以上だと思われます！」
「速い、それに数も……もしかするとＢＮは我々が攻めてくる事を

知っていたのか。
　何にしろこのままではまずい、一旦引いて態勢を立て直した方が良いな」
リバインは無花果の方を向いたまま後ろへと下がっていき、戦闘地域から離脱するとレンの乗っている機体が倒れている方へと向かう。
『ようやく増援が来たようね、これでＮＦとＳＶは終わりよ！やられた分きっちりやり返してやるんだから』
ＮＦとＳＶの動きが困惑していくように見られる、無理も無い、こっちは圧倒的な戦力でＢＮの基地を落とすはずだった。
が、ＢＮの大部隊がこんなにも早く来る事等予想外であり、現在どのように対処するべきは検討している所。
エリルはすぐさまクロノの元へ向かい、機体に肩を貸し手その場から離脱していく。

――――「若様、我等の増援が到着するとの事です。若様の読みが当たりましたね」
「奴等も計算外の事で困惑しているはずだ、そこを叩くぞセーシュ」
「はっ、この厄介な機体を片付けた後。すぐに若様の元へ向かいます」
両手の甲に鍵爪を着け独特な動きと腰のレールガンで守護式の前に立ちはだかる『厄介な機体』
『っちぃ！何だよこの薙刀野郎！全然近づけねえぞ！』
『焦らないで…焦れば……負ける』
『んなのわかってんよ！けど敵の増援が山ほど来てんだろ！？だったらさっさと倒さねえとまずいだろ！』
喋りながらも守護式の振るう薙刀を必死に交わして行くアストロス・ライダーだが、薙刀から繰り出される攻撃は今までの攻撃とは違い、懐に近づけない状況だ。
そのライダーの動きを見ていたセーシュには余裕の表情を浮かべ、機会を窺っていた。

「動きが少しずつ鈍ってきている、もう一押しすれば行ける。そして若様の元へ向かわなければ！」

薙刀を振り下ろした後、すかさず敵機の胸部目掛け鉾先を突き出すが、素早く攻撃を回避したライダーは腰に付いてあるレールガンで守護式を狙うが、

守護式の両肩についてあるシールド型のレールガンで防がれ、逆に守護式の両肩に付いてあるレールガンで狙われてしまう。

鍵爪で弾を弾いていくが、その隙を狙い守護式が一気に距離を縮めると、ライダーの左腕を薙刀で簡単に斬りおとす。

『ほら、焦ったら負ける……』

『うっせえ！そんな事言ってるから腕斬りおとされちまったじゃねえかッ！ったく……こうなりゃ制限解除でもしてえがなぁ』

『私の心配してくれてるの？大丈夫、気にしないで……』

『気にするなと言われて気にしない程俺も馬鹿じゃねえ、制限付きでもこんな相手ぶっ倒してやるぞ！エコ！』

『うん、倒そう……』

ライダーの腕が一本斬りおとされようが二人にとって大した事ではない、むしろこの状況が二人を強くする。

右腕一本を前に突き出すと、勢い良く守護式に飛びかかるライダー、当然守護式に薙刀を振るわれ返り討ちに合いそうになるが、瞬時に機体の回転軸を変え強烈な蹴りを繰り出す。

両足には手の甲についてある鍵爪と同様の物が付けられており、繰り出された蹴りは守護式の持っていた薙刀を弾き飛ばす。

「っく、我薙刀が！」

『武器が無けりゃ何も出来ねえのかぁ！？』

すぐさま守護式が腰に掛けられているＬＲＳに手を伸ばそうとしたが、そうはさせまいとライダーは距離と縮めたまま右腕と両足を使い乱舞するように攻撃していく。

「武器無きまま狙ってくるとは……この卑怯者がッ！」

両肩のレールガンをライダーに向けて放つが、あっさりと交わされ

た挙句、左肩のレールガンをライダーの鍵爪で破壊されてしまう。
『遅い！いや、俺達が速すぎるだけだな！』
強烈な蹴りを胸部に受けた守護式は吹き飛ばされると体勢を崩したまま地面に倒れる。
「ぐぁっ！し、しまったっ！？」
その隙を逃しはしない、起き上がろうとする守護式の上空には既に獲物に飛びかかるライダーが鍵爪光らし狙っていた。
『あばよ薙刀』
鍵爪は守護式の胸部を貫いた……っが、鍵爪の刃先は操縦席の一歩手前で止まっていた。
ライダーに付いている最後の腕に一本の剣が投げられ斬りおとされたのだ、両腕を失ったライダーはすぐさまその場から離れていくが、セーシュはその投げられた剣を見ると一目でわかった、これは白義の剣だと。
「若様ッ！？」
それに気付いた時、急いで白義の方を見てみると無残にも右肩を斬りおとされ、
腕一本と剣一本で戦っている白義の姿が目に映った。
剣一本では相手の黒い機体に全く歯が立たない白義は敵機の持つシールドで弾き飛ばされると、左手に持っていた最後の剣を手放してしまう。
その隙を狙い敵の黒い機体は剣を前方に突き出そうとした時、
条件反射のように守護式が出力を上げ黒い機体の前に立ちふさがる。
「若様を守るのが私と、このハルバード守護式の役目ッ！」
死ぬ覚悟は前から出来ていた、紳の為に死ねるならそれは本望。
躊躇なき選択は自然に自分を死へと導き、戦場でその命を終える。
そのセーシュの一生が終えようとしたのを、ある男が邪魔をした。
二発の弾丸に気付いた黒い機体はシールドで銃弾を弾くと、もう１機の守護式が黒い機体の前に立ちふさがる。
「ここは俺に任せてさっさと下がれ、勿論報酬は上乗せさせてもら

うがな、そりゃもうたっぷりと」
サングラスを掛け、一人煙草を吹かしている男。その姿を見てセーシュは小さく頭を下げた。
「ダン様、恩にきります……。若様、一度戻りましょう」
セーシュの声を聞く前に白義は振り返り、戦艦リシュードへ戻っていく。
それを追うかのようにセーシュの乗る守護式も付いていく。
すると、紳から通信を受けたセーシュはすぐさまモニターを見つめる、そこにはいつも通り冷静な紳が映っていた。
「セーシュ、何故俺を守った？あのままだとお前は死んでいた」
「はっ、それは若様を守るのが私の使命だからです」
「使命でなければ、お前は助けないのか？」
「いえ、その様な事は決してしません。
若様を心からお守りしたと思っている為、私の身などどうでもいいと思えるのです」
「……何故俺がお前を助けたか、わかるか？」
「はっ、それは私を助ける事で、ＢＮの戦力を落とさないように――」
「お前と同じだ」
「……えっ？」
「増援の艦隊が既にたどり着いた、我々は一旦艦に戻り態勢を立て直すぞ」
紳はそう言い終わると通信を切り、リシュードに着艦する。それに続いて守護式も無事着艦した。

――ＢＮの増援された艦隊がフォーメーションを組み、艦内から次々に我雲が発進していく中、
一度艦に戻っていた赤城はリバインに乗ったまま戦場の様子を見ていた。
「まずいな、この状況下における敵増援は明らかに不利。

ＮＦとＳＶの機体を合計をした所であの十数もの艦隊を相手にするのは敗北を意味する……」
「赤城隊長どうするんですか！？上からは一切命令が来ていませんよ！
このままだと挟み撃ちを受けて私達の艦が撃墜されてしまいます！」
由梨音からの通信に、赤城も今は指示を出す事が出来なかった。
「上からの命令が無い以上勝手な動きはできない……だが何故だ、何故命令が来ない。どうして動きをみせないんだ」
来るはずの命令が来ない。
敵の増援が来ている事を知っているにもかかわらず、今もなおＮＦとＳＶはＢＮ基地周辺の敵機と戦っている。
まるでＢＮの増援を無視するかのように。
「あ、赤城隊長！強大なエネルギー反応を確認しました！」
「エネルギー反応？何処にだ」
「エネルギー反応は……ＢＮの増援艦隊の前！今そちらに映像を送ります！」
由梨音から送られてきた映像、数十にも並ぶ艦隊の行く先には、一機の巨大な機体が宙に浮いていた。
「あの機体は一体……見た事の無い形状だ」
赤城がこう思うのも当然だ、機体に足は無く、他のＤシリーズとは比べ物にならない程の大きさをしており、機体の形は羽衣を纏うかのような形状で、白黒色の機体を見る等初めての事。
その機体は沈黙を保ち、動こうとはしなかったが、敵のＢＮ艦隊が近づいてくると共に胸部のシェルターを自動的に開け始めた。
中からは銀色に光る剣先のような物が出てくると、機体の両手がその剣先を周りから覆うような形で止まる。
ＢＮの増援部隊は敵の新型に備え既に数十機の我雲を発進させ、艦隊の一斉砲撃が始まる。
だが艦隊の攻撃が当たる事は愚か、触れる事すらなかった。

全ての砲弾、ミサイルが巨大な機体から反れて全く別の所に飛んで行くのだ。
『これがDシリーズ本来の力で、本当の力。それを今見せてあげる』
女性の声と共に機体の力は起動した、剣先を中心に何百、何千もの黒き稲妻が飛び交い稲妻で巨大で複雑にしていく。
それが球体へと変化されると、膨大な力が溜まってゆくのが赤城にはわかった。
両手には収まらない程の膨大な力を極限まで圧縮させ、静かに誤差を修正し狙いを定めた。
解き放たれる『デルタ』の力、その力に、誰もが平伏し、消えるだろう。
『さようなら』
女性の切なさの篭った一言と共に力が解き放たれ、黒い球体の塊がBNの艦隊へと飛んで行く。
塊は腕から放たれると次第に大きさを増し、艦隊の先頭を走っていた艦に直撃する。
直撃した艦はまるで紙のようにグシャグシャに丸められると、周りにいる機体や戦艦を次々に吸い寄せていく。
掃除機に吸い込まれるゴミのようなものだ、機体や戦艦は一箇所に集まっていくと次々に押しつぶされていった。
その力から逃げようと出撃していた我雲が最大出力で離れようとするが、逃れる事は出来なかった。
「一体何が起きている!?機体が吸い寄せられていっ――――」
操縦席に座っている人間は一瞬にして機体に押し潰され原形を止める事無くただの肉と血だけの存在となり果てていく。
その光景をNFやSV、そして今戦っているBN、この戦場にいる全ての人間が見つめていただろう。
力は周りの艦と機体を全て吸い込むと、今まで吸い込んできた全ての物を強烈な波動と共に一瞬で吹き飛ばした。
波動は戦場で戦っている兵士達を襲い、幾つもの機体が吹き飛ばさ

れていく。

――リシュードの格納庫でその光景をモニターで見ていたラースは愕然としていた、
もちろんラースだけではない、ＢＮの兵士全員そうだっただろう。
だがこの力をラースは既に知っていた、そしてその力を作れる人物も。

「この力……君はその力で何がしたいんだ、その力は人間に使うものではない、そう言っていたのは君だったじゃないか……」
ラースの呟きを掻き消すかのように紳からの命令が通信で今戦っている全艦と全機体に伝えられた。

「全機艦に戻り撤退せよ、基地は放棄する、基地にいる兵士達は全員艦に乗り込み脱出の準備に取りかかれっ！」
紳の命令を受け、ＢＮの機体は次々に艦に戻り、
基地内にいる全ての兵士が基地に止まっている何隻もの戦艦に乗り基地から脱出していく。
どん底のどん底、そこに今ＢＮは立たされている。
圧倒的な戦力と火力の前に何も出来ないＢＮは今、逃げる事を選ぶしか生き残る方法は無い。

第４６話　切なさ、起動（後書き）

速水（はやみ）　彩野（あやの）

大きな声でハキハキ伝える、を目標にしているオペレーター。
機体の扱いは不慣れであまり使いこなせていない為、機体からではなく基地からのオペレートを担当している。

第47話　阿修羅、誇り

――ＢＮの艦隊を一瞬で壊滅させた機体は地上に落ちると、煙を上げていた。
恐らくまだ未完成の試作機なのだろう、そのまま動きを見せなくなり、機能が停止してしまう。
あの悍ましい力を見せ付けられたＢＮは基地を放棄、
基地に残っていた兵士達が全員艦に乗り込むと全速で戦場から離脱していく。
っが、全ての艦が逃げた訳ではない。時間稼ぎの為に我が身を犠牲にする部隊が多く存在していたのだ。
紳の命令に逆らい、逃がす為に数多の敵機と戦うＢＮの兵士達。
当然相手の圧倒的な火力に成すすべも無く壊滅させられたが、紳達が逃げる時間は少しだけ稼ぐ事が出来た。
「フィリオお嬢様、ＢＮの兵士達が撤退しています。どうなさいますか？」
シャイラの応答にフィリオは答えた、その答えは今戦っているＮＦ、ＳＶ全ての兵士に届く。
「全軍、撤退しているＢＮの追撃を行なってください、今日でＢＮとの争いを断ちます」
『了解ッ！』
フィリオの答えを聞いてＳＶの全兵士が敬礼すると、機体を発進させ、撤退する戦艦を機体達が追う。
「アリスお嬢様、先ほどの戦闘で怪我はしていませんか？体調の方は――」
「私は大丈夫だから心配しないで、それよりＢＮはこのまま行くと海に出るんじゃないの？」
「す、すいません、えっと……そのようですね、海を出て進むと島に辿り着き、そこにＢＮの軍事施設があります」

「って事はその施設に逃げてるって事ね。全くＢＮもしぶといわねぇ」
アリスが腕を組みながら不機嫌そうにしていると、ゼストからの通信が入る。
『シャイラ、アリス。今の内に休め』
「ゼストー私は大丈夫だから、心配いらないわよー」
『休め』
いつもの様に無表情な顔でそう言うと、アリスは不満そうな顔をしてシャイラと通信を繋ぐ。
「な、何よ。せっかく頑張ろうとしてるのに。もういいわよ！シャイラ！休憩するわよ！」
「畏まりましたアリスお嬢様、艦に戻りましょう」
ガンナーと桃色の機体がフィリオのいる一番大きな艦に戻ると、ゼストの乗る機体も一緒に艦へと戻る。
「あれ、ゼストも休むの？珍しいわね」
『本戦は海を出て島に辿り着いてからだ、そこでＢＮとの決着を付ける』
「だから今の内に機体の整備とかしようとしているのね」
『そういう事だ』
「あ、そうだ。ねぇゼスト。あのＢＮの艦隊を一掃した機体ってＮＦが作ったの？」
『だろうな、ＳＶにはあの機体についての情報は一切無い』
「へー、ＮＦってすごいわね。あんな機体を開発するなんて」
既に艦にはアストロス・ライダーも着艦しており、斬り落とされた腕を修理している所だ。
葵とエコは一度休憩室に戻り、自販機で飲み物を買っている最中だ。
「あ、所で愁はどうしたんだ？最初無茶な特攻してから一度艦に戻ったらしいけど、そのまま全然見てかったからなぁ」
「さぁ……寝てるんじゃないの……？」
「そんな訳無いだろ、こんな状況下で暢気に寝れる訳ねーし」

「冗談よ……」
「っま、案外本当に寝てたりしてな」
そう言って自販機から出てきた缶ジュースをエコに向かって放り投げると、エコは簡単にキャッチしてみせた。
そして済ました顔で缶ジュースを開けると、缶の中身が炭酸で噴出し、エコの顔をびしょ濡れにしていく。
「ちょ、あははは！面白れー！お前飲む時何なのか確認してから開けろよなぁ！っぷははは！」
「あはは……ほ、ほら。そんな睨んでないで早く顔拭けよな」
葵は苦笑いしながらポケットからハンカチを取り出すと、エコの濡れた顔を優しく拭いてあげた。

――その頃、ＮＦの艦に戻った赤城はすぐさまレンのいる休憩室へと足を運んでいた。
休憩室には入ると、レンは椅子に座り俯いていた、その顔に元気は無い。
「レン、大丈夫か？」
赤城が呼びかけるがレンは反応を示さず俯いたままずっと足元を眺め続けている。
「しっかりしろ！レン！」
そう言ってレンの両手を掴むと、レンはようやく赤城に気付き小さく返事をした。
「は、はい。すいません……」
「一体どうしたんだ？事情を私に話してくれ」
赤城はレンの掴んでいた肩から手を放すと、じっとレンを見つめる、レンは顔を上げて赤城を見ていたが、その目は赤城を見ていなかった。
「何でもないです、すいません、少し驚いてしまっただけで……」
目の焦点が定まらず、不安な表情を浮かべながら必死に喋っているレンを見ていた赤城は突然しゃがみ込むと、そのままレンを抱きし

める。
その行動にレンは驚いていたが、赤城は目を瞑ったままそっと口を開く。
「死ぬのが、怖いか」
「……はい、怖い……です……」
この言葉が言えたからか、今までレンが溜めてきた涙が止め処なく流れ出した。
死に直面して初めてわかる本当の怖さ、恐ろしさ。戦場で人は簡単に死ぬという事を。
「すいま、せん。私、怖くて、こわ、くって……ううっ……」
レンの涙が赤城の肩へと頬を伝わり落ちていく、赤城はレンの頭を優しく撫でると瞑っていた目をそっと開いた。
「恥じるな、怖くて当然さ。死ぬのが怖いのは当たり前だ」
「で、でも。わた、私、私はぁ」
レンは自分の不甲斐なさを言おうとしたが、過呼吸状態で上手く喋れない。
そんなレンを赤城は抱きしめながら背中に当てると、今度は背中を優しく撫で始めた。
「お前は兵士なのに、死を怖がる自分が不甲斐ないと思ったのだろ？」
「は、はぃ……」
「無理もない、私もお前の歳の頃はそうだった。
人より少し強いから、故に自分は死なないと錯覚し、自分の弱さを知る事になる」
抱きしめていたレンをそっと放すと、今度はレンの肩に手を持って当て向き合うような形になる。
涙で濡れた顔を一生懸命軍服の袖で拭きながら、赤城の真っ直ぐとした瞳を見つめていた。
「レン、お前は死なない、死なせはしない。勿論由梨音もだ、もう私の仲間を死なせはしない」

「赤城隊長……！」
感極まりまた涙が流れようとした時、二人の間に突然由梨音の手が出てくる。
その手には日本の缶が握られており、赤城とレンに渡そうとしていた。
「これ買ってきたよ！皆で一緒に飲も！」
由梨音の笑顔にレンの顔も次第に笑顔に変わっていき、気付けばレンは落ち着きを取り戻していた。
「はい……ありがとう、由梨音さん！」
「由梨音にしては気が効くな、私も貰おうか」
レンと赤城が由梨音から受け取った飲み物、勿論それは由梨音の大好きなあの炭酸飲料だった。
炭酸飲料の苦手な赤城も、今回だけは文句を言わず黙って飲んでいた。

――BNの戦艦リシュード、その艦の格納庫には先ほど戦っていた機体が並べられ、補給と修理を行なっている所だ。
その格納庫の隣にある休憩室に第壱機動隊のの隊長を除いたメンバーが揃っていた。
いつもは活気ある会話をしている部隊だが、元気が無く、皆どこか落ち着きが無い。
「クロノ、私に無理するなって言っておいて、何で自分が無理してるのよ……ばか」
黒葉花は無花果に艦まで運んでもらい何とか助けられたものの。
操縦席にいたクロノは意識が不明、そのまま治療室へと運ばれたままだった。
「っま、無理しなきゃ切り抜けねえだろうなぁこの戦争。そうだろ？」
そう言って穿真は羅威の方に目を向けると、羅威は落ち着いた様子で答えた。

「ああ、今回の戦いは今まで一番厳しい戦場になる。多少の覚悟は必要だ」
「多少って何よ、戦場では『覚悟』が必要なの。あんた今まで覚悟無しで戦ってたの？」
羅威の言った言葉に不満があったのか、羅威にそう問いかけるが、それに答えたのは羅威ではなくエリルだった。
「覚悟の無い人が今ここにいると思ってるの？」
「そうね、少なくともこいつは無いんじゃない？」
ふてくされている香澄の態度を見て我慢の限界が来たのか、固めた握りこぶしに力を込めながらエリルは声を荒げようとした時、休憩室の扉の方から少女の声が聞こえた。
「羅威先輩はそんな事ありません！」
その声の方に目を向けると、彩野が目に涙を溜めながら香澄の方を睨んでいた。
「貴方は羅威先輩の何を知っているんですか？！先輩は両腕を満足に使えなくても一生懸命戦場に出ているんですよ！？
戦えるんですか貴方は！両腕を使えなくても、戦場に立てれますか！？」
「彩野、もういい。止めろ」
椅子に座っていた羅威は立ち上がり、彩野の前に出ると小さく首を横に振った。
「で、でも先輩が……！」
「俺は大丈夫だ、ありがとう」
一言言って羅威は休憩室を後にする。
それを追うかのようにエリルが後を追って休憩室を出るが、羅威の姿は何処にも見当たらなかった。
そこに休憩室から出てきた香澄が現れるが、エリルを無視してそのまま格納庫から出て行ってしまう。
やり場の無い怒りを堪えながらエリルは休憩室に戻ろうとしたが、一人の青年が彼女を呼び止める。

「エリル、随分と機嫌が悪そうだけど大丈夫？」
「別に大丈夫だけど、ラースこそどうしたのよ。眼鏡掛けてないじゃない」
いつも眼鏡を掛けている眼鏡を外したラースは別人と見間違える程変わっているが、そんな事ラース本人は気にしない。
「少し疲れたから外してるだけさ、それより君に話しがあるんだ」
「話し？私に？」
「ああ、回りくどく話すのは苦手だから単刀直入に言わせてもらうよ」
エリルが髪を靡かせながら腕組をすると耳を傾け、ラースは眼鏡を掛けないままエリルを見つめ口を開いた。
「この戦争、ＢＮは負ける」
ラースの視線の先は変わらない、ただじっとエリルを見つめ続けている。
見つめられているエリルは動きが止まったまま同じようにラースを見つめていた。
「どういう意味よ、それって……」
「言葉の通りさ、ＢＮは負ける。負けるにも二つある、全滅か、降伏のどちらかさ。
ＢＮの戦力はもうほとんど無い、海に出て島にたどり着いても。そこはもう使われていない軍事基地があるだけ。
島にたどり着きその基地を利用してＮＦとＳＶに立ち向かおうとしてるけど、それじゃ到底勝てはしないのさ」
「戦ってみないとまだわからないでしょ。始まる前からそんな事言わないでほしいんだけど」
不機嫌なエリルに火に油を注ぐような事を平気で言っているラースだが、彼の顔は真剣そのものだ。
「エリルも見ただろ？あの兵器を。あれが起動すればＢＮは全滅する。
でもまだあの兵器は試作段階のはず、あの攻撃を放った後の起動

は長い時間がかかると思う。
　ＮＦとＳＶは島を囲みＢＮが逃げられないようにするはずだ。逃げれない上に基地に残っていてもあのＮＦの兵器の餌食になる、
　結果、ＢＮは終わる」
「それをさせない為に私達がいるんでしょ！？始まる前から諦めないでよ、それにどうしてそんな話しを私にしてくるの？」
「……無花果にはステルスフレームがある。
　エリルにはそれを駆使して次の戦闘を耐えるんだ。そうすれば恐らくＢＮは降伏、殺される事は無い」
「は……？何よそれ……私に無理をせずにＢＮが降参するまで逃げていろって言いたいの？」
「そういう事になる、幾ら君達が頑張ろうともＢＮは負ける。無理に戦って命を落とす必要は無いのさ――っ」
微かに叩かれた音が二人の耳元に届く、ラースの言葉にエリルは言葉ではなく先に手が出てしまった。
頬を叩かれたラースは黙ったまま俯き、叩かれた所に手を当てている、
そんなラースを見てエリルは目に涙を浮かべながら口を開いた。
「ラース……あんた最低ね、軍人失格よ！」
顔も見たくないのか、エリルは後ろに振り返ると休憩室ではなく自分の機体の元へ向かって歩いていく。
叩かれたまま動かないラースは胸ポケットから眼鏡を取り出すとゆっくり耳に掛けた。
「眼鏡を外しておいて正解だったようだ……」
眼鏡を掛けた後、エリルの去っていく後ろ姿を目をやると、ラースは一人呟いた。
「軍人失格……僕にとっては最高の褒め言葉だよ、エリル」
――リシュードの艦長室、そこには紳とセーシュとダンの三人が集まり、現在の状況確認が済んだ所だった。

重い空気が立ち込める中、紳は手に持っていた資料を手に置くと静かに目を閉じた。
「セーシュ、ダン。お前達の心境を聞かしてくれないか？」
「はい、私は若様の元に付いた時から覚悟は出来ています。最後まで、若様の為に戦い抜きます」
敬礼を済ませたセーシュはダンの方に目をやると、ダンは拳銃の形をしたライターで自分の加えている煙草に火を点けて一服していた。
「俺は金さえ出してもらえば文句は言わねえ、紳。お前の心境を聞かせろ」
「……俺は最後まで戦わなければならない、俺が逃げる事は、許されない」
「それは違います、若様は全世界のＢＮの為、平和の為にも生き延びなくてはなりません。
今向かっている基地には地下通路があります、そこから脱出を行なえばＮＦとＳＶの目を欺く事が出来ます」
「セーシュ、敵を前に仲間を見捨て、俺だけ逃げろと言いたいのか？」
「そうではありません、若様はＢＮの希望の光。若様無しではＢＮは活動できません。
このような所で命を落としてはならない、ＢＮの明日の為にもここは引くべきです」
セーシュの言っている事は間違っていない、むしろ正しい判断だ。だが紳にもプライドがある、仲間を見捨てて生き残るぐらいなら共に戦友と戦い死を選ぶだろう。
「それに……若様が亡くなれば姫様が悲しみます。若様がいなくなれば誰が姫様を守るのですか」
その時、戦艦に振動が加わり艦内が揺れる。どうやら島到着したらしい、艦は止まらずそのまま基地のある方に向かっていく。
すると黙っていたダンが口を開いた、勿論加えている煙草を携帯灰皿で消してから。

「地下通路での脱出の準備は俺がしておく、紳、後はお前が決めろ」
ダンはそう言うと艦長室を後にする、部屋にセーシュと紳の二人が残される。
セーシュに見つめられる中、紳はずっと悩み考えている、この状況下の中、どうすればいいのかを。
「降伏をすれば兵士達は助かる。戦えば負け、逃げれば兵士達が死ぬ。俺は、どうすればいいんだ……」

――再び争いは始まる、島に辿り着いたＮＦとＳＶの艦隊は次々に横に並び島を覆うような形で止まる。
完全に囲まれた今、もはや地上からの脱出は不可能となったＢＮは戦うしかない。
格納庫では補給と修理の終えた機体が並び、数々の部隊、兵士達は機体に乗り込んでいた。
その中には先ほどの戦闘で気を失ったクロノの姿も見える、応急処置を受けまた戦場に立つらしい。
「おいクロノ、体の方は大丈夫なのかー？」
穿真が通信をしてみると、クロノの顔色は大分良くなっており、笑えるぐらいの元気はあった。
「僕は大丈夫です、心配かけてすいません。次の戦闘ではこのような事を起こさないよう気をつけます」
無事部隊メンバーが全員揃った時、全機体に彩野からの通信が入る。
「今回は私も我雲で出撃します、この部隊のオペレーターを引き続きさせてもらいますので、皆さんよろしくお願いします！」
「こちらこそよろしくお願いします！彩野さん！」
彩野の通信に雪音も笑顔で答えると、戦艦リシュードのハッチが開く。
「暗い顔ばかりしてられねえな、羅威。気を引き締めて行くぞッ！」
穿真がそう言って艦から発進すると、羅威の乗る我雲も続いて出撃する。

「ああ、俺達の力を出し切るぞ、穿真！」
モニターには穿真の様子が映し出されているが、その横には顔に元気の無いエリルが映っている。
「エリル、大丈夫か？」
羅威は心配してエリルに通信をすると、エリルは暗い顔のまま首を横に振った。
「ううん、何でもない。行こう羅威、私達はこんな所で負けていられないからね」
戦艦リシュードに搭載されている機体が全て発進していく、そのわずかな戦力でＢＮは何処まで戦えるのか。
レーダーには友軍機の倍に近い数の敵機の反応が示されていたが、羅威の眼に迷いは無い。
その迷いの無い目はただ見つめる、敵の位置、そして数を。勝つ為に、生き残る為に、全力で挑む。
四方から飛んで来る敵のミサイルを基地が迎撃を行い、周りに待機していたアストロスやギフツ、リバインが小銃を構えながらＢＮの基地へと向かう。
豊な森が広がる静かな離島だったが、轟音や爆音が鳴り、止め処ない発砲音が島中に響き渡る。
羅威と穿真が前線の真っ只中でギフツと交戦している中、敵の背後から無花果が現れ次々にギフツの背部をＬＲＳで貫いていく。
それを狙い隠れていた香澄と雪音の乗る我雲が混乱している敵陣に特攻、合わせて羅威と穿真の乗る我雲も発進する。
完璧とも言える動きに敵の兵士達も焦り始める、本来ならＢＮ側が焦るはず、だが戦場では死に近いものが焦り始める。
戦争で勝っても戦場で勝てなければ意味が無い、ギフツ達が一斉に小銃を構え、引き金を引いたが空中から放たれたレーザー砲を胸部に受け次々に爆発していく。
「皆さん、この調子で少しずつ相手の戦力を落としていきますよ」
クロノがそう言って次に向かおうとした時、その場にいた全員に彩

野からの通信が入る。
「皆！ＳＶとＮＦの新型が来てるよ！注意して！」
全員がレーダーの反応する方向に機体を向けると、アストロス・オーガと、
周囲にフェアリーを漂わしているフェリアルが迫ってきていた。
『レン、絶対に無理はするな。何かあったらすぐに戻ってくるんだ、いいな？』
『はい、ありがとうございます赤城隊長。すいません、無理言って出撃させてもらって』
『だからだ、すぐに私も向かう。それまで隣にいる機体の援護を頼むぞ』
レンの隣を飛んでいる鬼神、レンはその機体に通信を試みると相手が通信を繋げた。
モニターには仮面を被った愁が映し出され、少し驚いてしまうレンだが構わず自己紹介を始める。
『あ、あの。私レンと言います。貴方の名前は……？』
『俺？俺の名前は魅剣愁。よろしくね、レンさん』
話してみれば何とも普通な青年、声からして年齢もさほど変わらない。
『今から貴方の援護をさせてもらいます、頑張りましょう』
『うん、頑張ろうね』
青年との通信が切れると、鬼神はフェリアルの前に移動すると、我雲が立ち並ぶ場所へと突撃していく。
「全機散開！あの機体を囲み集中砲火を仕掛けます！」
その場にいた機体が一斉に鬼神から離れると、手に持っている銃器を鬼神に向ける。
だが鬼神の周りにはフェアリーが幾つも飛んでおり、散開した機体達にレーザーを一斉に放つ。
全員フェアリーからのレーザーを避けれたものの、その隙を狙い鬼神が黒葉花を狙い距離を縮めてくる。

「残念ですが拳では僕に勝てませんよ」
機体を変形させると一気に上空へと急上昇していく黒葉花、機体を旋回させると地上にいる鬼神に向けてレーザーを放つ。
鬼神はそのレーザーを避ける事無く飛んで来る攻撃を拳で掻き消すと、今度は後方に立ってマシンガンを撃つ我雲に向かっていく。
それは羅威の乗る我雲の方だった、１機を狙う鬼神に周りの我雲がマシンガンの照準を向けるが、無数に飛び交うフェアリーが3機の我雲を狙い次々にレーザーを放つ。
フェアリーの攻撃を避けるのに精一杯の三人だが、穿真の乗る我雲が1機フェリアルへと突進していく。
『近づかせない！』
フェリアルは一度フェアリーを全て機体に戻すと、突進してくる我雲に向けて一斉にフェアリーを飛ばす。
そのまま我雲を仕留めようとした時、突然赤城から通信が入る。
『レン！背後に気をつけろ！』
その赤城の言葉を聞いた途端、すぐさま後ろに振り向くと、ステルス機能で隠れていた無花果がＬＲＳを振り上げていた。
フェリアルは一気に出力を上げて後退し、間一髪振り下ろされたＬＲＳを避ける。
「避けられた？あの距離で、どうして……！」
攻撃が避けられた事に信じられないエリル、あのままだと確実に仕留めれたはずだった。
しかし攻撃は当たる事無く回避される、
納得のいかないエリルは右腕に搭載されているマルチプルランチャーからミサイルを放ち追撃を行なうが、
横から飛び交う銃弾が次々にミサイルを撃ち落していく。
エリルは無花果を銃弾の放たれた方へ向けると、そこにはアサルトライフルを右手に、
シールドを左手に持っている1機の赤いリバインが立っていた。
リバインは銃を背部に仕舞うと、肩からＬＲＳを引き抜き一気に無

花果の元へと走り出す。
「私の邪魔をしないでよ！」
無花果の両肩からＬＲＳを引き抜くと、両手にＬＲＳを握り締めながらリバインの元へと走る。
互いのＬＲＳが弾きあい、胸部を狙い斬りつける。
だが盾を持っているリバインは攻撃、防御の両面も優れており、無花果を段々と追い詰め始める。
盾を使い攻撃を防ぎ、また盾を前に出し相手の懐に飛び込む。
突き飛ばされた無花果は体勢を立て直そうとするが、リバインはその隙を狙い手に持っていたＬＲＳを投げ飛ばした。
投げ飛ばされたＬＲＳは無花果の右肩を貫くと、一瞬にして無花果の右肩が爆発し、右腕が吹き飛んでいく。
「きゃあああああっ！」
画面は赤く光り警告画面へと変わる。
「っぐぅ、ステルス機能不可？ランチャーも使えない？嘘でしょ……？」
目障りな警告画面を消すと、ＬＲＳを肩から引き抜き無花果に突進してくるリバインの姿が映る。
それでもエリルは諦めなかった、まだ動く左腕を使いＬＲＳをの剣先を突進してくるリバインに向けた。
「まだ終わらない、私は、終わらない！」
向けられた剣先は貫いた、その赤紫色の小柄な腹部を。
無花果の左手に握られているＬＲＳは地面に落ちると、全ての機能が停止し、眩い閃光を放った後簡単に爆発した。
その轟音はその場で戦っていた者達全員に聞こえる、見れば残骸から煙が上がり、そこに赤いリバインが立っていた。
「エリル……？」
爆煙を見て羅威の乗る我雲の動きが止まる、自分が鬼と戦っている間にエリルが死んだ事が信じられないのだろう。
無花果の残骸に近づこうとしたが、穿真の荒げた声が羅威を止める。

「羅威！赤鬼が来てんぞ！ボサっとするな！」
「――――ッち！わかっている！」
背後から飛びかかる鬼神をかわすと、羅威の乗る我雲は背部のバズーカ砲を手に取り引き金を引く。
鬼神は両腕を盾に砲弾を防ぐと、構わず我雲の方に走っていく。
香澄と雪音が援護しようと前に出るが、赤いリバインと共に来たＮＦの増援の攻撃に遭っており、とても助けられる状況ではない。
また、黒葉花はフェリアルと戦っており、あのフェアリーからの一斉射撃を回避しながら必死に戦っている。
穿真の乗る我雲はあの赤いリバインの元へと走っていき、ＬＲＳと盾を両手に激闘を繰り広げていた。
そして羅威は、今まさに自分を殺しに来る『鬼』と戦っている。
鬼と戦いながらも脳裏に過ぎるエリルの姿、レーダーを見ればもう無花果の反応は無い。そんな事はもうわかっていた。
わかっていたが、信じたくなかった。信じればまた誰かが死ぬと思ったからだ。
バズーカ砲を撃っても鬼神は拳で破壊してくる、倒すなら胴体に直接撃ち込むしかない。
だが不用意に近づけば容赦なく繰り出される拳の餌食になる、
それでもやるしかない、この戦場を切り抜けるには、今いる敵を倒すしかない。
我雲はバズーカ砲を構えると向かってくる鬼神に照準を合わせる、
鬼神はみるみる近づいてくるが、羅威の握る操縦桿に迷いは無かった。
そして鬼神が突き出した拳は、バズーカ砲を持った我雲に簡単に避けられた、そして砲身の先がしっかりと鬼神の胸部に向けられる。
「赤鬼、お前さっきから胸部しか狙ってねえんだよッ！」
バズーカ砲から放たれた砲弾は鬼神の胸部に命中すると、大きな爆発と共に鬼神を吹き飛ばす。
鬼神の胸部が大きく潰れてへこんでおり、吹き飛ばされたまま立ち

上がらない。
だがＢＮには既に限界が来ていた、気付けばレーダーに残っている友軍機の数は半分以下、この状況での勝利は零に等しい。
それでも彼等は戦う、もはや目的は勝利の為か、それとも生きる為か、羅威の乗る我雲がその場で立ち尽くしていると彼野の乗る我雲が隣に現れる。
「羅威先輩やりましたね！これは換えの弾薬です、使ってください！」
そう言って彼野は砲弾を手渡すと、羅威は我雲ですぐさまそのバズーカ砲に新しい砲弾を詰め込んでいく。
そして止めの一撃で鬼神に放とうとした時、三発の大きな爆発音と、花火が上がったかのような眩い光りが上空で光っていた。
三発とも白い光りを輝かせながら延々と空中で光っている、その光りが島全体を照らすと、今まで戦っていた機体の動きが止まる。
それはＢＮ、ＮＦ、ＳＶ、全ての機体がだった、この光りの意味は誰もが知っている。だから誰も動こうとしなかった。
あの光りのように羅威の頭も真っ白になる、それがＳＲＣ機能に反応したのか、無意識に我雲はバズーカ砲を地面に落とした。
「ＢＮが……降伏した……？」
羅威の一言で部隊員全員の動きが完全に止まり、光りの方向へ機体を向ける。
そこにセーシュからの通信が入ってきた、羅威はモニターに視線を向けると、無言でセーシュを見つめていた。
「若様は降伏した、全機武装解除し投降しろ」
「そんな、紳は、最後まで戦わないのか……？」
「戦えばお前達が死ぬ、若様はこれ以上死者を出さない為に、降伏を選んだ」
「何だよ、それ……じゃあ今まで戦って死んだ兵士は、皆無駄死にって事じゃねえかッ！？」
怒りが収まらない羅威、無理もない、ここまで来て紳は戦うことを

選ばず降伏を選んだのだから。
今まで戦ってきたのは勝利の為、全員覚悟を決め、命を懸けて戦っていたというのに、それを紳が終わらした。
「……若様を責めるな、若様は一人で苦しみ、悩んだ挙句降伏を選んだ、我々はそれに従おうではないか」
『ＢＮの兵士に告ぐ、直ちに武装解除し、機体から降りよ。繰り返す、直ちに武装解除し、機体から降りよ』
赤いリバインとＮＦの新型機、フェリアルが銃を向けてくる。
誰もが機体から降りるのを躊躇っている中、１機の我雲のハッチが開き、中から一人の少女がワイヤーを使って降りてきた。
それは彩野だった、彩野は地面に立つと震えながら両手を上に揚げたが、目から零れ落ちる涙を必死に腕で拭き取っている。
その様子を見ていたレンは突然機体のハッチを開けると機体から降り、その泣いている彩野の前に現れた。
「安心してください、私達は貴方達に一切危害は加えません。だってもう戦いは終わりましたもんね」
笑顔で振舞ってくるレンに彩野の震えも次第に収まってくる、それに自分と同い年ぐらいの少女があの機体に乗っていた事に驚きを隠せなかった。
羅威がその様子を見ていると、穿真から通信が入る、その声にはいつもの活気は無かった。
「羅威、俺達の戦いは終わり、ゲームセットだ。機体から降りるぞ」
「ああ、わかったよ……」
渋々と機体のハッチを開けようとした時、今まで倒れていた鬼神がその場に起き上がる。
それに気付いたレンはすぐさま耳元についてある装置のスイッチを押すと、愁に今の状況を知らせた。
「ＢＮは降伏しました！戦いは終わりましたよ！」
鬼神はゆっくりと二人の元へ歩いて近づいてくる、その間にレンは彩野の前で自己紹介をし始めた。

「私はレンって言います、貴方の名前を教えてください」
「えっ……私の名前は彩野って言います。レンさんも兵士なんですね、私と同じぐらい歳の人がＮＦにもいるなんて驚きました……」
レンとの会話で彩野の緊張も少しずつ解けてきており、涙も気が付けば止まっていた。
逆にレンは緊張等まったくしていない、自分と近い歳の人がＢＮにもいた事に少しうれしさがあった。
ついさっき始めてあった者同士とは思えないような会話。
それぞれ軍は違い、敵対していたとしても。戦争が終わった今はただの女の子同士。
「それは私も驚きましたよ！あ、彩野さん今歳いくつですか？もしかして私と同じかも」
その質問に彩野は笑顔で答えた、恐怖が安心へと変わった瞬間だ。
「えっと、私は今１５歳です！」
彩野が答えてくれた瞬間、上から赤い足が降りてきた。同時に何かが潰れる音が聞こえる。
足で何も見えない、鬼神の赤い足で、さっきまで彩野が立っていた場所に足を下ろして、彩野が見えない。
すると鬼神は足をそっと上げて一歩後ろに下がった。
いない、彩野はいない。地面には脳も眼球も腕も足も骨も内臓も、何もかもが潰された血塗れの肉の塊しかない。
いや、塊すらなかった。夥しい程の血が地面に染み込み、辺りに広がっていく。
さっきまで喋っていた人間が、人間の形ではなくなっている、生きたまま潰され、生きていた人間が潰れている。
その醜く汚い姿を目の前で見せられたレンは、何が起こったのかすら理解できなかった。
それを見ていたのはレンだけではない、その場にいた羅威達、そして赤城もその一部始終を見ていた。
「何……やってんだ……あの鬼、何……踏んだ……？」

羅威の口から言葉が漏れる、機体のハッチを開くスイッチを押そうとしていた指は止まり、ただ鬼神を見つめていた。
鬼神は足元の潰れた人間を見るが、何事も無かったかのように走り出す。
走っていった方向には1機の我雲が立っている、操縦席にはハッチを開けようとしていた香澄がいた。
「えっ――――」
目の前からは鬼の形相でこちらに走ってくる鬼神、腕を振り上げると、香澄目のいる操縦席掛けて拳を振り下ろす。
我雲が拳を避けようよしたが我雲の腹部を拳が貫き、そのまま勢いの止まらない拳は我雲の背部まで貫通すると、簡単に我雲の腹部を爆発させる。
間一髪で作動した脱出装置によりその場から離脱する香澄。
鬼神の動きは止まらない、次の獲物が視界に入るとすぐさま走り殺しに向かう、次に狙われたのは雪音だった。
武器を捨て、何もする事の出来ない我雲。鬼神はまた拳を振り上げ機体を破壊しようとした時、横から赤いリバインが飛び出し鬼神を盾で弾き飛ばす。
『何をやっている！ＢＮは降伏したんだぞ！？攻撃を中止しろ！』
『彩野は友達です、友達はＢＮです、ＢＮは敵です、敵は彩野です』
愁は訳のわからない事を言いながら鬼神を走らせ赤いリバインに近づいてくる。
『なっ、何を言っている。今すぐ攻撃を中止して艦に戻れ、戦いはもう終わった！』
手足を斬り落とし動きを封じようとしたが、今まで見たことも無い動きで鬼神が振り下ろしたＬＲＳを避ける。
機体の動きじゃない、人間の動きに近いそのフットワークと身のこなしはリバインがついていけるスピードでは無かった。
鬼神の攻撃を盾で受け止めようとしたが、盾を貫きリバインの左肩を破壊、左肩の爆発と共にリバインが後方に吹き飛ぶ。

『ぐぅっ！ＳＶは何をしている！？さっさとあの機体を止めろッ！』

――事の深刻さは既に収まらない、降伏をしたＢＮの兵士を無差別に殺していく鬼神。

紳はその様子を基地の司令室で見ていたが、ＳＶの余りの非道さに怒りが込み上げていた。

「有り得ない……降伏してもＳＶは、ＢＮを皆殺しにするつもりかッ！？」

「ＢＮの全軍に伝える、どうやらＳＶとＮＦは我々を生かす気は無いらしい、ならば我々は戦うしかない。全員武器を取れ！」

紳の命令がその島にいる全ＢＮ兵士を奮い立たせた、例えこの場で負けようが、明日の勝利の為に兵士達は戦う。

「俺も白義で出るぞ、ダン。お前は唯を連れて地下通路から脱出しろ」

司令室から出て行こうとしたが、扉の前に突然ダンが立ちふさがる。

その手には銃を握り締め、銃口は真っ直ぐ紳の方に向いていた。

「残念だが、それはできなねえのさ」

「ダン、何の真似だ……？」

「こういう真似だ」

躊躇いも無く引き金は引かれ、弾丸は紳の体を貫く。

司令室に響く銃声の意味、司令室にいた兵士達は皆知っていた。

――紳の命令を待っていたかのように、２機の我雲は肩からＬＲＳを引き抜いた。

目の前には鬼神、だが二人は恐れては入ない、あるのは怒りと、憎しみだけだ。

「穿真！あの鬼だけは……あの鬼だけはぁッ！絶対に殺すぞッ！」

「ああッ！やってやろうじゃねえかぁあああああ！」

同時に２機の我雲が走り出し、鬼神の元に向かう。

２機が振り下ろしたＬＲＳを拳で弾いた鬼神は体勢を低くすると、

羅威の乗る我雲の足を蹴り上げる。
だが我雲は倒れない、その場に手を着くとすぐさま機体の体勢を立て直しＬＲＳを鬼神に振り下ろす。
何とかＬＲＳを避けた鬼神、だが後ろからは穿真の乗る我雲がＬＲＳを振り下ろしていた。
確実にＬＲＳの刃先が背部に当った、だが鬼神の胴体が切れる事は無く、背部には傷しか残らない。
「だったらどうした！頑丈ならぶっ壊れるまで斬ればいいだけの話しだろがっ！」
我雲がもう一度背部を斬りつけようとした時、鬼神の裏拳が穿真の乗る我雲の頭を吹き飛ばし、そのまま体を回転させ、もう１機の我雲のＬＲＳを掴むと簡単に圧し折る。
圧し折られようがもう１本ＬＲＳを肩から引き抜くと、羅威の乗る我雲は鬼神の胸部目掛けて剣先を突き出す。
鬼神はそのＬＲＳを避けると、我雲の腹部を勢い良く蹴り飛ばしたが、その蹴りの強さに我雲の胴体が音を立てながら千切れ飛ぶ。
我雲の上半身は倒れたまま動かない、すぐさま穿真が通信を試みるが羅威から返事が返ってこない。
「おい羅威！返事しろ！この鬼ぶっ殺すんじゃねえのかよ！？羅威！」
鬼神は残る１機を殺しに向かってくる、我雲はすぐさまＬＲＳを構え迫り来る鬼神に備えようとした時、２発の弾丸が鬼神に直撃する。
すると鬼神はすぐさまその場から離れていく、機体の限界が来たのか、それとも一度補給する為に戻ったのか。
穿真がレールガンの放たれた方を見てみると、薙刀を構え鬼神を待ち構えるハルバード守護式の姿がそこにあった。
「第壱小隊に告ぐ、全機基地の格納庫に戻れ。今すぐにだ」
「何でだ？補給ならしなくてもまだ動ける、それにまだあの鬼を殺してねえ！」
「あの機体は私が相手をする！お前も早く基地に戻れ！」

セーシュの気迫に押され傷ついた我雲を基地まで戻る穿真と雪音、だがクロノはその場に留まっていた。
「セーシュさん、僕は残ります。部隊の隊長として引くわけにはいきません」
クロノは薄々気付いていた、何故セーシュが彼等を基地に戻したのか。
「自惚れるな、お前のような新米が残れば邪魔になるだけだ」
「ですが僕はッ！」
「お前が部隊の隊長なら最後まで隊員の最後を見届けろ！こんな所でお前が先に死んでどうする！」
レーダーに目をやると既に友軍機の数は既に１０を切っていたが、セーシュの目に迷いは無い。
「いいか、残りの兵士達を頼んだぞ。これは命令だ、逆らう事は許さん」
「セーシュさん……わかりました。貴方の命令、必ず遂行してみせます！」
黒葉花は戦闘機に変形した後すぐさま基地に向かう、羅威が乗っていた我雲に目を向けると、既に爆発しており煙をあげていた。
気付けばアストロスとギフツが次々に基地を囲み進軍してきている、守護式もまた黒葉花と共に基地へと戻っていく。

――――『レン、応答しろ！』
赤城がフェリアルに通信を試みるものの、操縦席には誰も乗っていない為勿論返ってこない。
機体の足元にいたはずのレンも姿を消しており、必死にレンを探索をしていた。
『何処に行ったんだ、レン！っく、やはり私があの時止めていれば……』
その時、突然レーダーに反応が示される、それは久しぶりに見た色だった。

色は次第に数を増していく、それを見ていた赤城は誰もいないフェリアルを腕一本で抱えると、すぐさまその場から離れる。
『こんな時に奴等が現れるとはな……、レン、無事でいてくれ……』

――レーダーの反応は基地周辺で戦ってる兵士達も気付きだした、レーダーに点々と現れる赤い反応。
そして次の瞬間、地面から次々にＰｅｒｓｏｎ態が這い出てくる、Ｐｅｒｓｏｎ態は機体を見つめるとすぐさま近づいていく。
『ＥＲＲＯＲだ、ＥＲＲＯＲが出たぞ！全機近づいてくるＥＲＲＯＲを排除しろ！』
『こいつ等まだ絶滅してなかったのかよ！』
アストロスが地面から這い出てくるＰｅｒｓｏｎ態を殺している時、守護式はそのＰｅｒｓｏｎ態を無視して敵機の方へと向かい薙刀を振るう。
６機ものアストロスがＰｅｒｓｏｎ態と守護式の手により破壊される、もちろんＰｅｒｓｏｎ態は守護式を襲おうとするがレールガンと薙刀で近づく全に殺されていた。
「敵の敵は味方……ではないが、この状況は有り難く使わせて頂く。全ては若様の為に」

――基地の格納庫、その地下には３機の機体を載せた貨物車が発進の準備をしていた。
その車の中で紳は目を覚ますと、目の前には不安な様子を浮かべている唯が座っていた。
「お兄様、気が付いたんですね。良かった……」
腹部に痛みを感じながらも寝ている体を起こすと、辺りを見回してみる。
灯りが一つしか灯っていない薄暗い部屋、腹部に目をやると包帯が巻かれ、応急処置がされている。
すると突然部屋の扉が開き、ダンが部屋の中に入ってくる。

「すまねえな、休める部屋はここぐらいしかねえんだ。我慢してくれ」
「ダン、説明しろ……どういう事だ、何故俺を撃った!?」
「説明も何も、俺は言われた通りにしただけだ」
そう言うと今にも掴みかかってきそうな紳にダンは一枚の小切手を見せる。
小切手には今までダンに払ってきた金とは比べものにならない程の大金が書かれていた。
「セーシュが俺に頼んできた、今まで働いて溜めてきた一生分の給料を小切手で俺に渡してな。
　頼まれた内容はわかるだろ?紳、お前を逃がす事だ。その為には手段を選ばなくてもいいと言われた」
ダンは小切手をポケットに仕舞うと、胸ポケットから煙草を取り出しライターで火をつけるとその場で一服し始めた。
「馬鹿な……セーシュがそんな事するはずがない……」
「現に頼まれたんだよ俺は。頼まれた時は正直驚いたが、セーシュは真剣そのものだったぜ」
会話をしていながらも微かに感じる振動、地上では今まさに戦闘の真っ最中、その中にはセーシュもいる。
納得のいかない紳、今すぐセーシュと話しがしたいが、腹部の痛みで体が上手く動かない。
「何故だ……どうしてセーシュは、こうまでして俺を……」
その紳の疑問に答えたのはダンではなく、紳の隣に座っていた唯だった。
「愛してるからじゃ……ないでしょうか?」
「何?」
紳は唯の方を顔を向けると、ベットに座っている唯は俯いたまま自分の手を見つめて話していた。
「愛してる人に死んでほしくなかったんだと思います。お兄様には生きていてほしかったんです、だからセーシュさんは……」

唯の言葉を聞き、ベットから起き上がる紳は激痛に堪えながらも一歩ずつ歩き部屋から出ようとする。
「そんな体でどこいくつもりだ、紳」
「セーシュと……話しがしたい……」
「そうかい、んじゃそこ出たら右隣の部屋に入れ、そこで通信が出来る。
だがもうじき貨物車は走り出す、走り出したら通信は出来ないからな」
「……わかった」
部屋を出て薄暗い通路に出ると右隣の部屋に入る、
そこには古い通信機が机の上に置かれてあり、電源を入れると早速守護式との通信を試みた。
「セーシュ……応答しろ……」
スピーカーからは激しいノイズ音と、銃声や爆音が聞こえてくる、
繋がったのか紳がセーシュを呼んでみると、元気良いセーシュの声が聞こえてきた。
『若様?若様なのですか!?』
「ああ、俺だ。そっちの状況はどうなんだ……?」
『心配いりません、今残ったＢＮの兵士達と共に若様が脱出できる時間を稼いでいる所です』
「そうか……なあ、お前は何故こんな事までして俺を生かしたのか。聞かしてくれないか?」
紳は聞きたかった、セーシュの口から直接自分に言ってくれる事を、強く望んでいた。
『若様無しではＢＮは動きません、若様はＢＮにとって必要不可欠な存在。だから命令を無視してでも若様を助けたかったのです』
セーシュの答えに紳は顔色一つ変えずに納得した。
「……わかった。セーシュ、前の戦闘で俺はお前を助けたな、何故だかわかるか」
『それは……』

「お前を愛してるからだ」
地下にまで伝わる轟音、スピーカーからは絶えず聞こえてくる銃声。
それでも紳のいる部屋は静寂に包まれているよう感じられた。
『私も若様と同じです。貴方を……愛してます』
そこで通信が途切れ、通信機から二度とセーシュの声は聞こえてこなかった。
聞こえてくるのはノイズ音だけ、どうやら貨物車が走り出したらしい。
通信機の電源を切った紳は立ち上がらず、椅子に座ったまま目を瞑った。
自分の素直な気持ちを口に出す事は簡単な事ではない、それを言われるのもだ。
最後に聞けたセーシュの本音は、いつまでも紳の頭に響いていた。

――「戦場で涙を流すとは、私は兵士失格だな……」
気持ちを伝えるのは遅すぎたのかもしれない。
だが伝えないよりはマシだ、最後に伝える事の出来たセーシュは幸せな方なのかもしれない。
戦場に友軍機の反応は1、ハルバード守護式だけしかもう残っていない。
その守護式の周りにはＰｅｒｓｏｎ態の死体と、敵機体の残骸が辺りに転がっている。
「さぁ、次の相手は誰だ」
前方にはアストロスとギフツが共に6機立ち、守護式に向けて小銃を向けている。
そしてその後ろにはあの白義と戦っていた黒い機体が姿を見せた。
『その機体に乗る者に告ぐ、無駄な抵抗は止めて投降しろ』
黒い機体の周りの周りには小銃を構えたギフツとアストロスが並び、いつ撃たれてもおかしくない状況の中、セーシュは笑みを見せていた
「無駄ではない……この抵抗は私にとって最後の生き様だ」

セーシュに、守護式に、諦めの文字は無い。守護式は華麗に薙刀を振り回すと、見事に薙刀を構えてみせた。

第４７話　阿修羅、誇り（後書き）

デルタマシンナーズ
Ｄシリーズとも言わる今世紀最強の機動兵器。
戦車より硬く、戦闘機より素早い動きが実現された為全ての軍に導入されており、
光学電子磁鉱石（レジスタル）に含まれる電気と電子で稼動する。
操作方法は２本の操縦桿とペダル、サイドレバーなど多々扱う為に熟練した兵士でなければ使いこなす事は難しい。
脱出装置の他に『ＬＩＭＤ』という自爆装置が予め備え付けられている。

第４８話　尊い、ひとり

――――「皆さん始めまして、エリル・ミスレイアと言います。これからよろしくお願いします！」

彼女はそう言って頭を下げると教室にいた１０人程の生徒が拍手をして彼女を歓迎していた。

軍の学校に転校生がやってくるのはそう珍しい事ではなく、俺は気にせず窓の外に広がる景色を眺めている所だった。

「羅威先輩、転校生ですよ！軍の学校にも転校生って来るんですね！」

「うるさい、余りはしゃぐな」

後ろに席に座っている彩野は嬉しくて仕方ないのか、俺の背中を何度も指で突付いてくる。

たしかに嬉しいのはわかる、このクラスに女性は全員で３人しかいない。勿論彼女を含めてだ。

「もーっ！本当先輩ってテンション低いですね」

「お前が高すぎるんだよ」

テンションが高い奴、そういえば今日はあいつがいないな。

どうせまた遅刻だろう、あと１分もすれば教室の扉を強引に開けて教室に入ってくるに違いない。

自己紹介を終えた彼女は先生に自分の座る席を聞くと、彩野の隣の席に決まったらしく鞄を持ってこちらに近づいてきた。

「は、始めましてエリル先輩！私彩野って言います！これからよろしくお願いします！」

緊張しすぎだろ、後ろから聞こえてくる彩野の声はどこかぎこちない。

「よろしくね彩ちゃん……って呼んでもいいかな？」

「はい！全然構いませんよ！エリル先輩！」

と、１分たったのか。教室の扉を強引に開けると息を切らしながら

あいつが教室に入ってくる。
「ギリギリセーフだな！」
「穿真、アウトだ。廊下立っとけ」
先生にそう言われて廊下に立つ程、穿真は素直じゃない。
「待ってくれ先生、俺にはちゃんと遅れた訳があるんだ！」
「ほほぉ、どんな言い訳だ」
先生は腕を組むと穿真の話しを聞いてやるらしい、結末はもう見えているけどな。
「実はここに来る途中に道に迷った老婆がいてねぇ、んで……」
「もういい、立ってろ」
「うい……」
渋々と教室から出て行く穿真。こうして俺の隣の席は開いたまま1時間目を迎るのだ。
それにしても今の時代に生徒を廊下に立たす教師がいると知れば、きっと転校してきた彼女も少しは驚いてるだろう。
「よし、それじゃ授業を始める。愁、1時間目は何だ？」
「1時間目は数学だと思います」
俺の目の前の席に座っている愁は名前を呼ばれると、自分が今机の上にだしている本を見て答えた。
「うむ、そうだな。それじゃあ教科書の――」
こうして始まる学校生活、とは言っても普通の学校ではなく軍が管理している学校だ。
まぁＢＮの学校は大抵軍が管理している、管理しているからと言って普通の学校とは特に変わらない。
ただ違う事と言えば銃の扱い方や、機体の扱い方を教わる事とか、まぁ後色々あってそのぐらいだろう
1時間目が終わるとようやく解放された穿真は教室に入ってくるが足取りが重い。
大きな溜め息をしながら俺の隣の席に座る穿真、鞄から教科書と漫画を机の中に入れる。

「穿真、お前は遅刻しないよう努力した事があるのか？」
「んー遅刻しない努力はしてるけどな、寝坊しちまうんだよ」
なら寝坊しない努力をしろよ、と穿真と話していればいつも心の中でツッコミを入れてしまう。
「それはそうと、今日このクラスに転校生来たんだろ？何処だ？」
お前の後ろにいる奴がそうだよ、てかここに来る時絶対に視界に入っただろ。
「お前の後ろにいる奴だ、つうかここに来た時点で気づけ」
「後ろ？誰もいねーぞ」
そう言われて後ろを振り向けば、席が二つ開いておりたしかにいない。
「彩野もいないし二人でどこか行ったんだろ。次の授業まで待つんだな」
「なぁなぁ、転校生って女か？それとも女子か？どっちだ？」
……どういう意味だ、穿真と話していると俺まで混乱しかねない。
ただ言えるのは男を望んでいない事だ。
なんて言えばいいのかわからなかったが、前の席に座っていた愁が振り返り会話の中に入ってくる。
「女性でしたよ、名前はエリルさんっていいます。身長は彩野さんより高い方でしたけど」
「ふむ、女は良いとして背が彩野より高いんじゃあなー」
穿真、お前見てから決めずにまず身長で判断するんだな……。
「彩野さんより身長の低い女性なんてそういないと思うよ？」
「世界は広いんだ、必ずいる。いると俺は信じているぞ！」
そんな穿真のどうでもいい言葉を聞き終わると、次の授業が始めるチャイムが鳴り始めた。
廊下に出ていた生徒や、教室で喋っていた生徒達が自分の席へと戻っていく。
もちろん彩野と彼女もだ、教室に入ると慌てて席まで走り席についた。

……最初はそんなに気にしていなかった、同じクラスになった事は些細な出会いだと思っていた。
出会いとはそんなものなのだろう、簡単で、単純。彩野も、穿真も、愁も、皆そうだ。
でも、それでも。幾ら些細な出会いでも、日が立てばその出会いに感謝する時が来る。
お前と出会っていて良かった。そう言える時が俺には何どもあった。
俺は運が良い、人並み外れて良い方だ、命を助ける人に出会ったり。共に話し、信頼しあえる人達と数多く出会ってきた。

――だからって、出会いがあるからって、こんな別れ方が許されるのか。
彩野は……何故死んだ、彩野が何をしたんだ、どうして、あんな場所で、あんな所で、あんな風に殺されなくちゃならないんだ。
生きたまま人間を踏み潰す、それを何の躊躇いも無くした奴は人間なのか？いいや、違う、鬼だ。人間じゃない。
それを見ていた俺は何も出来なかった、助ける事も何も、ただ彩野が踏み潰されるのを見ていることしかできなかった。
体が動かなかった、腕が動かなかった、機体が動かなかった、全身が固まり、何も考える事が出来なくなったからだ。
戦場で人が死ぬ事ぐらいわかっている、そんなの俺は今までずっと見てきた。
でも、でもなぁ、頭でわかっていても、この感情は抑えられない、この涙は、止められない……。
エリル、彩野、どうして死んだ……どうして死んだんだよ……あの鬼、あの鬼がいなければこんな事にはならなかった。
何もかも、全てあの鬼が悪い。あの鬼がいなければ彩野は生きていた、エリルだってもしかすれば生きていたかもしれない。
あの鬼が俺から大切な人達を奪い、殺し。悲惨な別れを俺に味あわせてくる

それなら……殺すしかない。殺すしか、殺す。あの鬼だけは俺の手で、絶対に……。

だから俺は生き延びる、例えどんなに絶望的な状況でも。

――赤鬼に倒された俺はあの後すぐに機体から脱出し、何とか基地まで辿りつく事が出来た。

だが基地は既に蛻の殻、紳達は何処に行ったんだ。まだ戦場で戦っているのか、それとも……。

どっちにしろこのままだと俺は死を待つだけ、何としてでもこの場から逃げなければならない。

とりあえず司令室に行こう、そこにはまだ兵士達がいるはずだ。

そう言っても俺はこの基地に来るのは初めて。簡単に司令室を発見できると思えないが、今は探すしかない。

それにしても、この基地は何年前に作られたものだろうか、壁や廊下は汚れているし、電灯が点いているにも関わらず通路は薄暗い。

外から爆音や銃声が聞こえてくるたびに微かな振動が体に伝わってくる。

その振動を受けながら俺は薄暗い通路を歩いていくと、足音と共に部屋の扉の開く音が聞こえた。

どうやらまだ兵士がいるらしい、すぐさま音のした部屋の扉の前に立つと、扉が自動的に開き、部屋の中に入る。

部屋の電気は点いておらず、部屋は暗闇に包まれ部屋の状況が全く見えない。

とりあえず灯りを点けてみるか、力の入らない腕を俺はゆっくりと肩まで上げ扉付近の壁を触るとすぐに壁の凹凸を発見できた。

恐らくこれが電灯のスイッチだろう、押してみると小さく音が鳴り、灯りが2、3回弱く点滅した後ようやく灯りが点いた。

「来ないでッ！」

女性の声で気付いた、前を見ると棒のような物を振りかざした女性が俺に迫って来ていた。

反射的に手で受け止めようとしたが腕が動かない、だが腕が使えなくても足が使える。
振り下ろされた棒を足を振り上げ蹴飛ばすと、体勢を低くして相手の両足を横から蹴り上げると、女性は簡単にこけてその場に倒れる。
倒れてから一行に起き上がろうとしない、まさか気を失ったのか？
顔は倒れていて見えないがＮＦのパイロットスーツを着ている時点でコイツはＮＦの兵士だ。
ん……この子はたしかあの機体に乗っていた子じゃないのか？どうしてこんな所にいる。しかも一人で……。
まぁいい、とりあえず倒れている女性を起こそう。この女性は小柄だから力の弱い腕でも何とか体を起こす事が出来た。
その時、倒れていた女性の顔がふと俺の視界に映った。
「なっ……」
見覚えるある顔、忘れた事の無い、あの顔。
俺は女性を壁を背にして寝させると、いつも首に掛けているペンダントを取り出した。
ペンダントを開けるとそこには一枚の家族写真が入っている、小さい頃の俺、後ろには両親、そして俺の横に立っている少女。
写真の少女と、今倒れている女性の顔を見比べる、似ている、似すぎている。
あの時玲は死んでいなかったのか？あの爆発で俺は重傷だったが生きている。それなら、玲が生きていても納得できる。
だが、どうして玲がＮＦにいる、何故あの機体に乗っていた、何故兵士になっているんだ……？
色々な思想が俺の脳裏を飛ぶ、急に目眩が起こり、気分が悪くなっていくが、俺はじっと玲を見つめ続けた。
もしかすれば玲ではなく、玲に良く似た女性なのかもしれない。
それは直接この女性に聞けばわかる、意識を取り戻し次第聞いてみるか。
灯りの点いた部屋は案外広く、部屋の中心には大きな机があり、そ

の上には机の上いっぱいに資料が並べられていた。
一枚の資料を手に取るとプリントについていた埃が宙を舞い、咳が出てしまう。
その咳が更に埃を巻き上げる、手で口を覆い隠せない俺はその場から離れた。
「うっ……けほ、けほっ……！」
埃が彼女の方にも飛んでしまったのか、気を失っていた女性は咳をすると閉じていた目蓋をそっと開ける。
意識がハッキリしないのか、彼女はやけに落ちついた様子。しかし、それは俺が彼女の視界に入る途端に一変した。
「ひ……っ……！」
彼女は俺を見た途端に表情が強張り、壁を背にして俺から逃げようとする。
だが俺の方が部屋の扉に近く、彼女は如何する事も出来ない様子だ。
「落ち着け、俺はお前に何もしない。それより聞きたい事がある」
「わ、私……ＮＦの兵士ですよ。殺さないんですか……？」
「今俺達のいる部屋は戦場じゃない、質問に答えてさえくれればそれで良い」
「は、はい。わかりました……」
多少落ち着いてきたみたいだ、さっきより呼吸も安定しているし、震えも無い。
だが俺をまだ警戒している、無理もないか。
「君の名前を教えてくれ」
「名前、ですか。レン・スクルスと言います」
レン。玲とは名前が違うが、似ている。
だからと言って彼女を玲と決め付ける訳にはいかない。
「君に兄弟はいるのか？」
「えっと、姉が……あ、いや、いません……」
「姉がいるのか？」
「い、いません」

「……そうか、君に兄はいないんだな？」
「え？はい、兄はいませんけど……」
兄はいないが、姉はいるのは確実、となるとこの子は俺の妹の玲ではない。
「あの、どうしてそんな事を私に……」
不思議に思っても仕方が無いが、その訳を話せるはずがない。
「別に、こちらの事情だ。それより何故君はここにいる」
「その……気がついたらここに来てて……」
何を言うかと思えば、気がつけばここにいただと？無意識にこの基地に来たというのか、この子は。
「ほ、本当です！私何でここにいるのか全く憶えてないんです……！」
「君は自分から機体から降りたはずだ、それからここに来たんじゃないのか？」
「え、私自分で機体から降りたんですか？私はたしか機体の中で座ってたんですけど……」
どういうことだ、本当に記憶が無いのか？あの時たしかにこの子は自分で機体から降りたはずだ。
「君の乗っていた機体は、たしか青白い色をした機体だろ」
「は、はい。私の機体の色はその色でしたけど……どうして知ってるんですか？」
質問を質問で返されると困る、どうやらこの子は本当に記憶が無いらしい。
謎の多い子だ、戦場で機体から降りてきたのもそうだ、何かが抜けている気がする。
「どうやら君は本当に知らないらしいな、まぁいい。基地の外まで案内する、ついて来い」
本来なら捕まえなければならないが、腕の使えない俺にはそれが出来ない。
だからと言ってこの子をまた蹴るのも気が引ける、甘いと言われれ

ばそうかもしれないが、俺は基地の外まで彼女を案内する事にした。
「すみません、貴方の名前はなんて言うんですか？」
「俺の名前？守玖珠羅威だ」
「あの、こんな事言うのも何ですけど。羅威さん少し変わってますよね」
「俺がか？」
「だ、だって。変な事ばかり聞いてきますし、敵の私をこのまま逃がすなんて……」
「……そうだな、変だな」
たしかに今の俺は変だ、気が狂いそうになるぐらい。
俺が部屋から出ると、彼女もまた部屋を出て俺の跡をついてくる。
基地から出るには俺が来た道を戻ればいいだけの事、時間は掛かる事なくすぐに基地の出口に到着した。
「ここが出口だ、じゃあな」
そう言って俺は出口から離れていく、ここに来るまでに他の兵士と会うだろうと思っていたが、まさか会わないとは。
とりあえず階段を上って司令室を探してみるか。
「あ、あの！ありがとうございました！」
声のした方に振り返ると、彼女は俺にお礼を言って頭を下げていた。
……彼女はＮＦ、ＢＮの敵。彼女はＢＮの兵士を数々に殺してきたと思うが、それは俺も同じだ。
俺はまた振り返ると、階段の方へ足を進めた。っが、その時。
「きゃあああああ！」
後方であの女性の声が聞こえてきた。
声というより悲鳴だ、何事だと思い俺がまた後ろを振り向くと、女性は基地の出口で座り込んでおり、全く動こうとしない。
そして俺の視界に移ったのは彼女だけではなかった、黒い巨体の体をした化物が何匹も基地に入って来ている。
化物は基地に入ってくると、ゆっくりと歩き座ったままの彼女の元に向かう。

この化物、まさかＥＲＲＯＲなのか？こんなＥＲＲＯＲ見た事も無ければ聞いた事も無い、それにどうしてＥＲＲＯＲがここに……。

「い、いやぁっ！」

っち、今はそんな事を考えている場合ではない、あの子を助けなければ・・・このままではＥＲＲＯＲに殺される。

俺は彼女の元へ走ると彼女に前に立ち、膝を曲げてその場にしゃがみ込んだ。

「立って２階へ逃げろ、早く！」

彼女は俺に頭を下げると、何とか立ち上がる

「は、はい……」

返事をした彼女は後ろに走っていくと俺が上ろうとしていた階段を勢いよく登っていく。

さて、今度はＥＲＲＯＲだ。始めてみるＥＲＲＯＲ、人間の形をしているが、人間の姿はしていないな。

あの体、腕、足、首……全てが太い、それを見れば奴が人間離れした力を持っている事が一目でわかる。

俺が一人戦いに行った所で肉の塊にされるか、体を引き裂かれてバラバラになるかどちらかだ。

だとすれば今の俺は逃げる事しかできない、奴らは走ることが出来ないのか、人間を見つけても走って追う事は無いらしい。

だが奴等は俺を見た途端虚ろな目をした顔をこちらに向けたままゆっくりと近づいてくる、Ｐｅｒｓｏｎ態とは違いこいつ達は笑わないのか。

俺はその場から離れると階段を駆け上がり２階に向かう、ここにも兵士の姿は見当たらない、それにあの子もだ。

「羅威さん！こっちに来てください！」

女性の声のする方へ体を向けると、重そうな鉄の扉を横にスライドさせこっちに手招きしている彼女がいた。

俺は彼女の所に向かうと部屋に入る、そして女性は鉄の扉を力一杯動かし始める、完全に扉が閉まると鍵をつけようやく一安心といっ

た感じだ。
「この扉ならあのＨｕｍａｎ態も入って来れないと思います」
「Ｈｕｍａｎ態って言うのか？あのＥＲＲＯＲ」
「そうですけど、羅威さんは見るの初めてですか？」
「ああ、君は見た事があるみたいだね」
そう言いながら俺は来た部屋を見回してみる、この部屋だけ扉が違うという事は何か大事な物があるに違いない。
広い室内、見れば辺りは本棚が数多く並び何千を超える本が並んでいる。
今は本よりも武器が欲しい所だ、俺は銃を持てないが彼女に持たせる事が出来る。
「はい、あのＨｕｍａｎ態は凶暴な上に頑丈で、並大抵の武器では歯が立ちません……」
全身黒色の鱗のようなもの覆われていたが、あんな化物を倒すには対戦車用に使う無反動砲でも撃たない限り死にそうに無い。
「だとすればその重火器を探しに行くしかないな、この部屋を出て武器を探しに行こう」
「だ、駄目ですよ。今外に出ればＨｕｍａｎ態に見つかります！」
「ここにいても同じ事だ、いずれ見つかる。なら見つかる前に武器を取りに行かなければ……」
「駄目です、この基地には兵士がいるはず。助けが来るまでここで待機していた方が身の為ですよ！」
何だこの子は、さっきまであんなに震えていたというのに、今では強気で俺と相反する事を言ってくる。
俺の事を考えてか、それとも奴等の事を恐れているのか……彼女の言う意見はたしかにまともだが、俺はどうも納得が出来ない。
かと言って一人で出て行こうとしても、今の俺の腕ではこの重い扉を開ける事も出来ず、結局この部屋で待機する事になった。
「わかった、じゃあこの場で救援を待つ事にする。だが５分だけだ、５分たって誰も来ないなら……」

その時、鉄の扉から鈍器で殴るような鈍い音が聞こえた。
何回も、何回も。音はしだいに大きくなり、厚みのある鉄の扉が少しずつ変形していく。
5分もいらない、さっさとこの部屋から出ていればよかった。
「っち、化物に場所がバレたな。他の出口は無いか手分けして探すぞ」
彼女は頷くとすぐさまその場から離れ部屋の中を走り回り出口を探す。
俺も本棚と本棚の間と走り、窓や扉が無いか探してみるが全く見当たらない、この部屋には窓すらないのか？
もう一度来た道を戻ろうとした時、入り口の方から何か物の音が聞こえた。恐らく扉が破壊されたのだろう。
ピンチをチャンスにとはこの事、奴等が数匹程度ならこの広い室内を移動して部屋から出れば良い。
「ら、羅威さん！助けてください……！」
彼女の声が聞こえてくる方向に走ると、あの化物が彼女を壁まで追い詰め近づいていた。
人間が目の前にいても奴らは走ること無くゆっくりと歩んで行く。
その姿はＰｅｒｓｏｎ態とはまた違う恐ろしさがある。
「おい化物、その子を殺す前にまず俺を殺してみろ」
俺は本棚から一冊と本を引き抜くと、その本を化物の頭に投げつける。
すると化物の足は止まり、そっと俺の方を向くと歩く方向を変えて俺の方へと近づいてくる。
「レン、今の内に逃げろ！」
その声を聞いて彼女が走り出す、化物の後方に彼女の姿が見えた時、ふいに彼女は止まり俺の方を向いた。
顔は蒼白としており、絶望しているようにも見える。
「羅威さん後ろッ！逃げてください！！」
後ろ？言われた通り後ろを向くと、もう一匹あの化物が俺の後ろに

立っていた。
「なっ」
化物の足は遅かったが、俺が化物の間合いに入った途端に腕が動きだし、俺の頭を掴みかかった。
驚く程速い腕に俺は逃げる事も出来ず、黒い豪腕は俺の頭を掴んだ。とっさに目を瞑ると、何かが破裂する音が聞こえる、嫌な音だ、でも何の音だ。俺の頭が潰れる音か？
さっきから俺の頭を掴んでいる手は何を思ったのか潰そうとしていない、こうして意識がハッキリしているのは生きている証拠だ。
俺が目を開けると、俺の頭を掴んでいる手は地面に落ち、目の前には上半身の無い化物の足だけが立っている。
が、それも地面に倒れると、俺の前に一人の男が立っていた。
「ラース！？」
「羅威、伏せて」
俺が体勢を低くすると、両手で持っている巨大なレーザー銃のような物を化物に向け引き金を引く。
赤いレーザーが放たれると、俺を襲うとしていた化物は木っ端微塵となり肉片が辺りに飛び散る。
「ふぅ、まさかこんな野蛮な兵器を僕自身が使うなんて」
「ありがとうラース、助ったよ……だがどうしてお前がここにいるんだ？他の兵士はどうした」
「兵士？もうこの基地には僕達以外の人間はいないよ」
「は……？」
基地に誰もいない？何故、ＥＲＲＯＲが来たからか。それとも全員戦地に向かったのか？
「羅威は知らないと思うけど、この基地に地下には隠し通路がある。紳さんや他の兵士はそこから無事に脱出したよ」
「如何いう事だ……ＢＮに何が起きたんだ……？」
「羅威の機体が破壊された後、セーシュさんの命令で基地にいる兵士達、そして紳さんを地下通路が逃がすように指示したのさ。

だから基地は蛻の殻、あとは時間を稼ぐ為に数十人の兵士が機体に乗り戦っていたんだけど、ＥＲＲＯＲも出てきたこの状況だと多分もう誰も生き残っていないよ」

セーシュの指示？セーシュの命令を紳が素直に受け止めたのか？あの方なら共に戦ってくれると信じていたのに、一体何が起きたんだ……。

「それで、あの子はＮＦの兵士みたいだけど。どうしてあんな子がここにいるんだい」

「色々とあってな……この子を逃がそうと思ったがＥＲＲＯＲが入ってきて……」

「ふーん、まぁいいけど。この話しを聞かれた以上あの子をＮＦに渡す訳にはいかない。一緒に来てもらおうか」

そう言うとラースは女性の元へ向かい承諾を求める。

「わ、わかりました。ついていきます」

「うん、その方が安全だからね」

「ラース、どうしてお前はこの基地に残っているんだ？」

「ん？羅威を探してたんだよ。羅威の機体の損傷率だと多分脱出してると思ってね」

「俺を……探してた？」

「っそ、僕についてきて」

ラースは俺に背を向けると部屋から出て行く、俺と彼女はラースの言われた通り後をついていく事にした。

「羅威、エリルは脱出した……？」

「いや……脱出していない……」

「……そうか、うん。わかった」

ラース、エリルの事が気になるのか……。俺が見た所無花果はあの赤いリバインに破壊された。

まさか無花果があんなにも早く破壊されるなんて思っていもいなかった、エリルが死ぬ事も……。

「ついたよ」

周りを見渡すとそこは格納庫だった、だが機体の姿は無く、その床には大きな穴が開いている。
「コントロール室に行って地下に向かう為の貨物用エレベーターを起動させないとね」
コントロール室はそう遠くないすぐ近くの小部屋らしく、ラースがその部屋まで歩いていくと俺達も自然に後を追ってしまう。
部屋に入ると様々な機器が並んでおり、ラースはその機器の一つに手を伸ばす。
その様子を見ていた俺はふと横を見ると、そこにはレーダー機器が置いてあった。
画面を見てみると赤い反応と黄色い反応が基地を囲んでいる、赤い反応はＥＲＲＯＲだろう、そしてこの黄色い反応は敵機。
だが俺は目を疑った、友軍機の青い反応が１個だけ存在していたのだ。
それに機体はまだ動いている、青い機体を取り巻く赤い反応が次々に消え、黄色い反応を消していく。
まだ戦っている、一人戦場に残って、俺達の為に、ＢＮの為に……。
「ラース！どこかに機体は残ってないのか！？」
装置の起動スイッチを押そうとしていたラースの手が止まり、羅威の方へ体を向ける。
「突然何を言うかと思えば……どうしたんだい」
「まだ誰かが戦っている、見過ごす訳にはいかない。どうせ逃げるのならあそこで戦っている兵士も連れて行く！」
「それは無理だよ、今戦っているのは多分セーシュだからね」
「なっ……セーシュだと？それならなお更助けないと……」
「言ったよね、この脱出はセーシュの指示。それに彼女は命を懸けて戦っている、説得しても応じるはずがないさ」
「だから俺にセーシュを見捨てろと、そう言いたいのか？」
「セーシュの思いを無駄にするのかい？今彼女が戦っているのは僕達を逃がす為。

それに羅威、例え機体があっても君に何が出来る。満足に動かせないその両手で機体を操縦できるの？」
気付けば俺とラースは口論をしていた、助けるか、助けないか。
冷静さを保っていたラースだったが、次第にその冷静さは消えていく。
「全く動かせない訳では無い、それに説得が無理ならセーシュを力ずくでも助ける」
「ふざけるなよ……」
今まで聞いた事の無いラースの怒りの篭った言葉。
溜めてきていた怒りと悲しみが爆発したのか、俺の胸倉を勢いよく掴むとそのまま壁へと押し付けた。
「ふざけるなって言ってるんだよ！羅威ッ！」
初めてだった、これだけ怒りを剥き出したラースを見たのは。
「君は守るとか助けるとか簡単に言ってるけど、君は誰を守った？彩野か？エリルか？誰を守ったんだ？誰を助けたんだ！？言ってみろよッ！」
激しい剣幕を見せるラースに俺は何も言い返せない、彩野も、エリルも、俺は誰も守れなかった。
知らされる己の無力さ、結局俺は何がしたかったのか、何をしてきたのか、俺は何の為に戦争をしてきたのか。
「助けてくれました！」
彼女の声にラースは横を向くと、目に涙を浮かべているレンが俺達を見ていた。
「羅威さんがいなければ私殺されてました、でも羅威さんが身を張って私を助けてくれたんです！」
「羅威、君は味方を見殺しにして、敵は守るのかい？」
「違います、羅威さんは私を一人の人間として守ってくれたんです。敵や味方なんて関係ありません！」
ありがとう、レン。君がそう言ってくれると多少は気が楽になる。
だが、俺が仲間を守れなかったのは事実。そしてラースは俺の為を

思い俺を止めている。
もう誰にも死んでほしくない、皆そう思っている。でもこれは戦争、戦場で死ぬのは当たり前だ……。
だからと言って、俺は死を受け入れはしない。守れるものがあるのなら、俺に力があるのなら、俺は守りたい。
「……ごめん、羅威だって傷ついている事ぐらい僕はわかっていたのに。つい……」
俺の胸倉を掴んでいた手から力が抜ける、ラースは数歩俺から下がると下を向いていた。
ラースの気持ちは俺に痛い程伝わる、ラースも俺と同じ、何も出来なかったんだ。
皆命を懸けて戦う中、自分は何も出来ない、ただ仲間の死闘を見る事しか出来ない、そんな自分が嫌だったのだろう。
少し沈黙が続いた後、ラースがふと頭を上げた。その目に怒りは無い。
「……羅威、実は1機だけ残っているよ」
そう言ってラースはコントロール室のスイッチを押す。
貨物用のエレベーターが地下から上がってくる振動が俺の足元から伝わってくる。
「本当は君達を逃がした後、僕が乗ろうと思ってたんだ。でも無理なんだよ、僕はパイロットじゃないからね」
ラースの言葉が途切れた瞬間、格納庫の地下から貨物用エレベーターが地上に到着した、1機の機体を乗せて。
全身灰色のシーツで覆われ、機体の形や色がわからないが、シーツは胸部の辺りに穴が開いており、操縦席に続くハッチは既に開かれていた。
「この機体は……」
「BNが極秘で開発した機体さ、結構古いんだけど。この基地の地下で眠っていた……いや、封印されていたと言った方がいいかな」
「封印されていた?」

「そう、その力を発揮すれば敵味方問わず全ての機体を破壊してきた機体だったからね。
　それにこの機体は操縦者にも害を及ぼし、最悪の場合死に至らしめる。それでもこの機体に乗るのかい？」
「聞かなくてもわかるだろ、ラース」
俺がそう言うとラースも少し笑って見せた、そして掛けていた眼鏡の中指を当てて少し上に上げる。
「そうだったね、あとこの機体は君にも動かせると思うから」
「ＳＲＣ機能が搭載されているのか？」
「んー……、違うけど。乗ってみればわかるさ」
何故ラースはこの機体の事を俺に会った時すぐに話さなかったのか、そしてラースは俺達を逃がした後この機体に乗ろうとしていた。
ラース、お前は一体この危険な機体を使って何をしようとしていたんだ……。
「いいかい、セーシュを助けたら海を渡ってこの島を離れるんだ。その機体は海上を飛ぶ事は可能だからね。
　それと、絶対に生きて帰って来るんだよ、羅威」
「ああ、わかってる。行ってくるよ」
俺はコントロール室から出ると格納庫に止めてある機体へと走った。

――「僕もあの力を解き放つ事にしたよ、先輩……これでもう後戻りは出来ない」
コントロール室に残っているラースは床に置いていたレーザー銃を持ち上げると、女性に話しかけた。
「さて、君。僕と一緒にこの基地から脱出してもらおうか」
「た、助けてくれるんですか……？」
「うん、羅威が助けた命だから。僕が責任持って君を安全な所まで連れて行くよ」
「ありがとうございます！あ、あとすいません。携帯電話持ってますか……？」

「ん？持ってるけど……」
「すいません、ほんの少しだけ貸してもらえないでしょうか。お願いします！」
「……別にいいけど、変な真似は起こさないでね」
そう言ってラースはポケットから携帯電話を取り出すと、そっとレンに手渡した。

――基地の前で破壊されるギフツ、そのギフツの胸部には薙刀が突き刺さっていた。
ハルバード守護式は健在、基地に向かってくるＥＲＲＯＲと敵機体を次々に破壊していく。
基地の周りには既に１０機以上のギフツやアストロス、リバインの残骸が散らばっており、戦っていた兵士達が次第に怖気ずく。
『何だあの機体は！これだけ攻めて落ちないだと！？』
『それなら遠距離からの射撃を行なうまで、全員後退してあの機体に鉛玉の雨を浴びせてやるぞ！』
『了解！』
１機のリバインと４機のギフツが一斉に後ろに戻ると守護式に小銃を向ける。
っが、兵士の目の前には既に薙刀を振り下ろす守護式が見えていた。
『は、速っ――！？』
問答無用で胸部を薙刀で切り裂かれるリバイン、それを見ていた兵士達は守護式目掛け一斉に引き金を引く。
数発が守護式の装甲に当たり傷が入るが守護式は地面を蹴り上げ高々とギフツの頭上を跳び越えるとギフツの背部に薙刀を突き刺す。
その横にいたギフツが守護式に銃を向けるとすぐさま薙刀を抜き取り横にいるギフツの両腕を斬りおとす。
後退して逃げようとしたギフツだったが守護式の薙刀で胸部を貫かれて爆破されると、残っていた２機のギフツが背後からナイフを両手に守護式の元へ向かってくる。

「遅いッ！」
背後から迫る2機のギフツの腕を斬り飛ばすと、両肩のレールガンでギフツの胸部に弾丸を撃ち込む。
同時に倒れるとそのまま爆発するギフツ、それを見ている暇等守護式には無い。
セーシュがレーダーを見れば十数発のミサイルが一斉に守護式目掛けて飛んで来る。
「そのような攻撃、我には通じんッ！」
上空から降り注ぐミサイルを破壊しようとレールガンを向けた時、上空のミサイルが一斉に分解され、中から高熱の徹甲弾が降り注ぐ。
徹甲弾は守護式を狙い次々に降り注ぎ、操縦席にまでその振動が伝わってくる。
「こ、小ざかしい真似を……うぁっ！？」
左肩に付いていたレールガンが爆破、左肩のシールドと一緒に吹き飛ぶ。
「ぐううぅ……っ！」
守護式の左肩からは煙が上がり、動きが鈍くなっていくが決して地面に膝を付けはしない。
必死に踏み止まりその場で耐えた守護式だったが、エネルギー残量が既に１０％を切っていた。
頭から暖かい液体が顔に垂れる、モニターに反射して見える自分の顔には赤い血がべっとりと流れていた。
「っふ、血が出るのは生きている証拠。私はまだ……死なんッ！」
『たった1機でよく頑張った、だがＥＲＲＯＲが出ている以上ここに長居は無用、死んでもらう』
黒い機体が上空から巨大な銃を構えると、守護式に狙いを定め引き金を引くと、黒い電磁場を纏いながらビーム砲が放たれる。
「当たってたまるかぁあああああああ！！」
ギリギリでビーム砲をかわすと一気に上空へ舞い上がる守護式、黒い機体は背部に銃を戻すと大きな盾を取り出し攻撃を防ぐ。

「そのような盾！我薙刀の前では無力ッ！」
守護式は勢い良く薙刀を振り上げると、盾事機体を斬ろうと一気に振り下ろす。
薙刀の刃先が勢い良く盾にぶつかった瞬間、薙刀は宙を舞った。
黒い機体の持つ盾は普通の盾ではない、特殊の盾だった。
薙刀の刃先が触れた途端、高圧電線に触れたかのように激しい火花が出ると薙刀を一瞬で吹き飛ばす。
「な……薙刀が……！」
黒い機体の右手には剣が握られている、その剣は動きの鈍っている守護式の腹部へと突き刺した。
っが、その瞬間守護式の右肩に付いてあるレールガンが黒い機体の方に向けられると、胸部を狙い弾丸を撃ち出した。
『言ったはずだ、無駄な抵抗だと』
左手に持つ盾でその攻撃を軽々と防ぐ、空中で爆破した守護式は無残にも上半身だけが地面へと落ちていく。
そしてついに地面に落ちた衝撃で守護式の機能は完全に停止した。
「若……様、今頃無事に……脱出、し……て……」
モニターには赤い警告表示が出ているが、もうセーシュにはそんな事どうでも良かった。
迫り来る黒い機体、剣先を胸部目掛けて突き出し、上空から急降下してきている。
脳裏に浮かぶ紳との思い出、走馬灯のように次々に思い出が頭の中で再生されていく。
「私は……」
黒い機体の剣先が守護式の胸部を貫こうとしたその時、2発の青白いいプラズマ弾が黒い機体を吹き飛ばした。
『っぐ、何だこれは……？機体が……動かん……』
機体には凄まじい量の電流が流れ、機体の各部から放電しはじめる。
画面に映るレーダーは機能停止、動いているのはメインカメラだけ、外の映像だけがモニターに映っている。

そしてそのモニターに1機の機体が映る、全身灰色のシーツで身を隠すあの機体が。
『大丈夫ですか!?あの機体……よくもゼスト様を!』
シャイラがゼストの機体へと通信を試みるが雑音が酷くゼストの返事も返ってこない。
アストロス・ガンナーの両肩に付いてあるレーザー砲をあの灰色のシーツを纏う機体に向けると両肩のレーザー砲から青い閃光が煌くレーザーを放った。
青く太いレーザーが一直線に機体へと飛んで行く、だが機体は避ける事無く、右腕を前方に突き出すとその場で待機していた。
レーザーの勢いは止まる事無く機体目掛け進み、突き出された右腕へと直撃した。
しかし右腕が貫かれる事は無い、機体の右手からは雷光が生じプラズマを発生させていた。
レーザーの衝撃で身を包んでいた灰色のシーツが吹き飛び、ついにその機体の姿が露となる。
黄金の機体、眼が眩むほどの黄金に、装甲のラインに沿って黒い線が入っている機体。
その機体の手から出ているプラズマがレーザーを弾くと、軌道をそれて森にレーザーが落ちる。
「セーシュを助けるぞ……『神威』」
神威は後ろに振り向くと、負傷している守護式を抱かかえる。
出力を上げて一気にその場から離れると、島から離れていく神威。
それを落とそうと戦艦から数十発のミサイルが放たれ追尾していくが、神威は海の上で止まると向かってくる無数のミサイルに左手を向けた。
左手から放電が始まり、広範囲に電流が広がり始めると、空中を飛んでいた無数のミサイルはその稲妻に触れていくたびに爆破され、それが連鎖反応を起こし次々に爆発していく。
戦艦は機体を囲むと機関銃の一斉射撃を始めるが、銃弾は神威に触

れる事は無く、全ての銃弾が神威から逸れる。
『何だあの機体は、機関銃が効かないなら主砲を撃つ！全砲門をあの機体に向けろ！』
周りを囲んでいた戦艦の主砲が神威に向けられるが、その神威は海上に停止すると左手を海に向けた。
左腕を中心に渦巻くプラズマ、そのプラズマは次第に大きさを増していき、膨大な量の電気を蓄える。
雷鳴が轟き、雷光が神威を包む、そして左腕に溜まっていた電気が全て海へと放出された。
一瞬にして広範囲に広がっていく雷は戦艦に当たるとその脅威の力を見せる。
艦の司令室では機器が爆破、故障を起こし、艦に積まれていた弾薬が次々に爆発していく。
海上に浮いていた戦艦は次々に爆破炎上、海の藻屑となり消えていく。
「これが、神威の力……こんな機体が既に作られていたとはな……」
羅威はそう呟いた後、神威は稲妻の如く飛び去っていった。
その瞬間、軍事基地から閃光が見えると突然爆発を起こす。
巨大な爆発は周りにいたＥＲＲＯＲを吹き飛ばしていき、爆発した基地は次々に崩れ落ちていく。
『全機撤退せよ、全機撤退せよ。これより島から離脱する』
ＳＶ、ＮＦの機体達が次々に艦へと戻っていき、ピンク色の機体が倒れている黒い機体の所へ向かうと黒い機体に肩を貸した。
『ゼスト、大丈夫？』
『問題無い』
とは言うものの機体の出力が余り上がらず、アリスの乗る機体の力を借りなければ移動が出来ない程であった。
――――レーダーには何の反応も無い、見えるのは砂浜と海、そして森だけ。

神威は守護式の上半身をそっと砂浜に下ろすとすぐさま機体から降りる羅威、
神威の手を伝ってすぐさま守護式の胸部まで走っていく。
外部からハッチを開けると、そこには頭から血を流し、意識朦朧としているセーシュが操縦席に座っていた。
「セーシュ！しっかりしろ！」
返事は返ってこない、だがセーシュの力無い瞳はたしかに羅威を見ている。
羅威は操縦席に入るとすぐさまセーシュを抱かかえ機体から降りていく。
砂浜に下りるとセーシュを横に寝かし、上半身を少し抱かかえると必死にセーシュに呼びかけていた。
照りつける太陽が眩しくセーシュを目蓋を閉じようとしたが、羅威の頭で丁度太陽が隠れる。
「羅威……か……」
今にも波の音に掻き消されそうなセーシュのか弱い声が羅威の耳に入る。
傷付き、力の無いセーシュを見るのが初めてだった羅威はその姿を見ているだけで不安に駆られた。
「そうだ、俺だ。セーシュ、俺達は助かったんだ、もう大丈夫だぞ！」
「……若、は……無事……かっ……？」
「紳か、紳は無事脱出したよ、セーシュのお陰で紳は無事脱出できたんだ」
羅威がそう言うとセーシュは微かに笑ってみせた、セーシュの不安がそこで消えたからだ。
戦っている最中も気にしていた、不安で一杯だった、それが羅威の言葉で安心へと変わる。
「ありが、とう……羅威……」
「えっ……？」

「若様は……無事なの、だな……良かっ……た……」
笑顔、これ程安心して、素の自分を見せたセーシュなんて見た事が無い。
それが逆に怖かった、もう何も未練が無いかのような、そんな笑顔が。
「そうだ、紳は助かった。次はお前が助かる番だ！セーシュ！しっかりしろ！！」
段々と命の灯火が小さくなっていくのが見ていてハッキリと分かっていた。
戦場では誇りを見せ、強さを見せてきたセーシュが、今目の前で、腕の中で消えようとしている。
「ら、い……」
名前を呼ばれた羅威はセーシュの左手を握り締める。
普通の女性と何ら変わりない小さな手は、羅威の手を弱々しく握り締めた。
「私は……わたし、は……幸せだ……」

――「セーシュ……？」
目蓋を閉じたまま、動かなくなったセーシュ。
自分の手を握り締めていたあの弱々しい手は羅威の手からすり抜けた。
「おい……セーシュ、起きろよ……助かったんだぞ。俺達……」
何も答えない、羅威に聞こえてくるのは波の音だけ。
セーシュの顔には何粒もの涙が落ちるが、その涙はセーシュの頬を伝と羅威の足に落ちる。
「起きろよ！起きてくれよ……！セーシュ！」
セーシュの軽い体を抱き締める腕に自然に力が入る。今まで戦ってきた仲間がたった一日で、数多く死んでいった。
助けられた、あと少し早く動いていれば、あと少しだけ早く自分が行動していれば……。

「セーシュ……皆……皆ぁ……っく、うぅ……う、ああ……ぁあああああぁぁあああああああ――――――ッ！！」

仲間を誰も救えなかった羅威は怒りに震ながら天に向かって泣き叫んだ。

その怒りを向けたのは誰でもない、自分だった。

何故戦う、敵を殺す為に戦うのか。

違う、守る為に戦う。

ＢＮを、友を。

人から、化物から、神から。

守る為に

第４８話　尊い、ひとり（後書き）

正式名ＭＦＥ－神威（かむい）（Ｂａｃｋ　Ｎｕｍｂｅｒｓ製）
全長－１９ｍ　機体色－黒金　動力－光学電子磁鉱石
数年前ＢＮが極秘で開発した機体、その性能は従来のＤシリーズを軽く超える程の性能であるが、
制御が難しく味方を危険に晒す事が多い、出力も若干不安定な為故障が起こる事もあり、
また操縦者に微量、又は大量の電流が流れてしまう事もあるので基地の地下で封印されていた。
武器はもっていないが攻撃力は強力であり、近距離から遠距離、広範囲にまで攻撃が可能。
プラズマや電流を使う攻撃を得意とし、攻撃から防御まで兼ね備えた機体である。

第49話　疑惑、幻

――壁に掛けられた時計の針は7を指している、それを確認した後赤髪の女性は自分の部屋から出て行くとある部屋へと向かった。朝日に照らされた廊下の壁は所々光りを反射している、そのせいなのか朝方だというのにやけに暑く感じる。

夏だと言うのに黒い長袖の軍服に、黒い長ズボン、見ている方が暑くなりそうな格好で女性は歩いていた。

そして部屋の前に辿りつくと、女性は頭を左右に小さく振った後に足を一歩前に踏み出した。

「入るぞ」

扉は自動的に開き部屋の中に入っていく、廊下と同様部屋の中も朝日に照らされ、白い壁がより一層白く見える。

「あら、赤ちゃん。こんな朝早くどうしたの？」

その部屋の奥の椅子に座っている女性はカップに注がれている紅茶を飲みながら体ごと後ろに振り向く。

すると女性の掛けている眼鏡が朝日に反射し、赤髪の女性は少し目を細くする。

「いい加減その呼び方は止めろ、お前に色々と話しがあって来たんだ。それと、彼女の容態はどうなんだ」

この部屋とは別の奥の部屋、その部屋に赤城が視線を向けると、紅茶を飲んでいた女性が立ち上がった。

「あの子は心配いらないわよ、傷も浅いし内臓も脳も異常はないからね、直に目を覚ますはずよ」

赤城は部屋の中央に置かれているソファに座ると立ち上がった女性は別のカップに紅茶を注ぎ、そのカップを赤城に手渡す。

「紅茶は余り好きじゃない、コーヒーで頼む」

赤城にそう言われた女性は後ろに振り返ると、手に持っていたカップを机の上に置き、コーヒーを作りに隣の部屋に向かった。

「そう、コーヒーね。お砂糖幾ついるの？3個？4個？ミルクは……」
「ブラックでいい、それと私を子供扱いするな」
「別に子供扱いなんてしてないわよ、はいこれ」
カップにはコーヒーが注がれ僅かに湯気が見える。
そのカップを受け取った赤城だったが、それを見ていた女性はからかう様に口を開いた。
「赤ちゃん、ブラックって苦いのよ。飲める？」
「いい加減にしろ……それより何故お前はあの女性を匿うのか。まだ話しを聞いていなかったな」
赤城が右を向きまた奥の部屋に視線を向けると、神楽が赤城の右隣に座り奥の部屋が見えなくなる。
「私の納得のいくような説明をしてくれよ」
「んー、人質って事でいいんじゃない？」
「説明になっていない、それに人質なら……」
赤城の脳裏に昨日の出来事が過ぎる、それを踏まえた上で赤城は止めていた口を開いた。
「レンを取り戻す為にあの子を使う気か」
取り戻す為。昨日作戦の終えた赤城が一人自室に戻ってきた時、携帯電話のメールに一つだけメッセージが届いていた。
見ると、そこにはレンから身の安全と、現在の状況を伝えるメールだった。
そのメールは赤城だけでなく、神楽の携帯電話にもメールが送信されていたのだ。
「っそ、赤ちゃんなのに説明しなくてもわかってくれるなんて驚いちゃった」
赤城の為に注いでいた紅茶の入ったカップを手に取ると、受け皿を持ちながらそっとカップを口に付ける。
余裕綽々たる態度を取る神楽だが、赤城はレンの事で頭が一杯であり、目の前に置かれたコーヒーにも目をくれなかった。

「神楽、奴等の目的がわからないんだぞ。何故レンを生かしているのかすらも、何かこちらの情報を探る為かもしれない。
　そうなれば例えあの子を人質として出したとしても、レンが無事返って来るかどうか……」
ティーカップの受け皿が机の上に置かれる、その音は耳に届いても悪くない、気品に溢れた音。
しかし、そのカップを置いた神楽の口からは、そんな音とはかけ離れた言葉を口に出した。
「そしたら、人質と捕まえてる人達、皆殺せばいいだけの話しでしょ」
そう言うとまたカップを手に取り、紅茶を悠々たる面持ち啜っていた。
神楽の言葉を聞いた赤城は正面を向くと、目の前に置かれているコーヒーカップを手に取った。
「……場合によるだろ、彼等が何故レンを助けたのか。その理由で答えが変わってくる。
　だがもしレンの体に傷の一つでもあれば。私がＢＮの兵士供を刀の錆にしてやる」
神楽に負けず劣らず恐ろしい事を赤城は言うと、目の前に置かれているコーヒーカップを手に取る。
ブラック独特の香りを楽しんだ後、コーヒーを口に含みまた更に香りと味を楽しむ。
「しかし……苦いな、このコーヒー」
今まで飲んだコーヒーとは違い、口に入れてから飲み込むまで、コーヒー独特の苦さがじんわりと口に広がっていく。
「だから言ったでしょ？それは眠気を吹き飛ばす為に私が自分で作ったオリジナルなんだから、苦くて当然よ」
「そうか、でも味と風味は悪くない。神楽にして良いコーヒーを作ったな」
「あらびっくり、褒められるなんて思ってもいなかったわ」

驚いた顔をしている神楽を余所に赤城はソファから立ち上がると、奥の部屋へと足を進めた。
部屋に入ると、小さな窓が一つと、ベットと椅子が一つしか置かれていない素っ気無い部屋だった。
そのベットで寝ていたのは紫色の髪の女性だった、頭に包帯を巻かれた彼女は落ち着いた様子でベットの上で眠っている。
それを見て安心したのか、赤城が神楽のいる部屋に戻ろうとした時。
今まで眠っていた女性がふと口を開いた。
「待って……」
女性の声に赤城が振り向くと、無理やり体を起こし赤城に手を伸ばしている彼女の姿が目に入った。
「気が付いたようだな……神楽、彼女が目を覚ましたぞ」
赤城に呼ばれて神楽も彼女のいる部屋に向かうと、少し驚いた様子で彼女を見ていた。
「赤ちゃん、無理やり起こしたの？」
驚いたままの顔で横を向く神楽だったが、赤城は横目で神楽を睨んでいる。
「黙れ、それより彼女に色々と説明しなくていいのか？」
「そうね、まずは世間話に花を咲かせようかしら」
「それならお前に任せた、私は戻る」
そう神楽に言った後赤城は一人リビングに戻り、あの苦いコーヒーを味わう。
部屋に残された神楽はベットの横に置かれてある椅子に座ると、体を起こそうとする女性の両肩を掴みそっとベットに寝かせた。
ベットに寝ている女性は混乱もせず、目の前の現実と今の自分の立場を冷静に考えている。
「私は……」
「生きてるわよ、機体の腹部を刺されたとき上手い具合に爆発したの、だから操縦室がほぼ無傷の状態。
不思議よねぇ、まるで脱出装置でも付いてたみたい。

その後貴方はＮＦに回収されたの。でもそれを知っているのは数人程度、貴方の存在はまだ軍に報告してないのよ」

「どうして、ですか……」

女性が不思議がるのもおかしくない、ＢＮとＮＦは敵、もし彼女が他のＮＦ兵士に見つけられていれば殺されていただろう。

「色々と理由があるのよ、あ、そうだわ。名前聞かせてくれない？私は神楽、貴方はなんて名前なのかしら」

「私の名前……エリル、エリル・ミスレイアって言います……」

「そう、エリル。良い名前ね、そうだ、今紅茶持ってくるからちょっと待っててね」

神楽は座っていた椅子から腰を上げると長い髪を靡かせながら部屋を出て行く。

そして新品のカップに作りたての紅茶を注ぎ、エリルの寝ている部屋にまでカップを持っていく。

「はい、零さないように気をつけてね」

エリルは壁に持たれながら体を少しだけ起こすと渡されたカップを両手で持ち、そっと口に付けた。

美味しい、一口飲むだけで香りが口いっぱいに広がり暖かさが保たれる。

ふと横の椅子に座っている神楽を見ると、紅茶を飲むエリルを見ながらニコニコと笑みを見せている。

気品に溢れ優雅で優しい彼女に、エリルの中にある不安が少しずつ消えていくのが自分でもわかった。

「あの、どうしてこんなに親切にしてくれるんですか……？」

「ん？親切にされるのは嫌？」

からかうような神楽の言葉にエリルは少し戸惑いながら答えた。

「い、いや。そういう訳じゃないですけど……」

その時、ふと脳裏に過ぎる仲間達の姿。

ＢＮはどうなったのか、ＮＦやＳＶとの争いで、今のＢＮはどうなったのか。

「すいません、ＢＮは……どうなりましたか……」
「負けたわよ、それも全滅に近い状態でね」
「そんなっ――――」
「それでも全滅はしてないのよ？あの基地の地下には脱出用の通路があったの、そこから兵士達は逃げたと思われるけどね」
「風霧総司令官や、戦地で戦っていた兵士達も。生き残っている可能性がある……って事ですよね」
それを聞いてもエリルの心に余裕など生まれなかった。
自分が撃墜された後、ＮＦに拾われたのであれば恐らくＢＮは不利な状況だったに違いないとエリルは思っていた。
羅威や彩野、皆は無事脱出してくれたのか、それとも……。
「そういう事になるわね、ねぇ、貴方無花果のパイロットでしょ？」
神楽の突然の質問にエリルは咄嗟に頷いてしまう。
だが頷いた時、自分が乗っていた無花果は今どうなのかが無性に知りたくなった。
「あ、あの！無花果はどうなったんですか！？」
「残念だけど、あの機体はもう無いわよ」
その言葉を聞いた途端、エリルの顔から瞬く間に元気が消えていくのがわかった。
自分の愛機を失った、それだけでエリルにとっては辛い事だった。
「そんなっ……私の、無花果が……え、あ、あの。所で、どうして機体の名前を知ってるんですか？」
「それはあの子が初めて開発した機体だったから、名前ぐらい教えてもらってるわよ」
エリルの質問にあっさり答えた神楽だったが、エリルには引っかかる点があった。
あの子、彼女が言うあの子とは、自分のよく知っている人ではないか、と。
「あの子？あの子って、もしかして……」
「ラース・グレイシム、無花果開発での第一人者よ。知ってるでし

ょ？」
ラースの名前を聞いてエリルの表情が一変する。
どうしてＮＦの人がラースの名前を知っているのか、もしやラースはＮＦのスパイなのか、悪い予感が頭を過ぎるが、そうではなかった。
「ど、どうして貴方がラースを知ってるんですか？ラースはＢＮの……」
「彼、昔はＮＦにいたのよ。その時一緒にＤシリーズについて色々な研究、開発してたの」
「そうなんですか……ラースがＮＦの人だったなんて、知らなかった……」
「あの子にとってはＮＦもＢＮも関係ないけどね、ただ自分の研究が出来ればそれで良いのよ」
神楽はそう言ってゆっくり立ち上がると、頭を下げてエリルと顔を近づける。
突然の事にエリルもただただ神楽の顔を見つめるしかない。
「それにしても、あのラースがこんな綺麗な子をね……ふふっ」
「えっ？」
小さな笑みを見せる神楽、何故笑っているのかエリルにはわからなかった。
「さてと、今度は赤ちゃんとお喋りすると良いわよ。私呼んで来るから」
「赤ちゃん？」
「ええ、そうよ。それと赤ちゃんには感謝しといた方がいいわよ。貴方を生かしたのは彼女なんだから」
そう言って小さな笑みを見せながら部屋を出て行く神楽。
少し話し声が聞こえた後、今度は神楽ではなく、赤城が部屋の中へ入って来る。
赤い髪を束ね、黒い軍服に身を包んだ女性。エリルの元に近づいていくと、先ほど神楽が座っていた椅子に腰を下ろす。

「私の名は赤城だ、お前の名は神楽から聞いた。エリルというらしいな」
「は、はい」
赤城の名を聞いたエリルは先ほど神楽の言っていた事が理解できた。赤ちゃんと言われる理由、しかし神楽だからこそ言えるのであろう。見るからに強そうな彼女に、そんな事普通の人なら口が裂けても言えないはずだ。
「体は痛むか？」
「あ、いえ、大丈夫です……あの、助けていただきありがとうございます」
「助けた……か、お前の機体を破壊した私に、礼の言葉等いらん」
「えっ、それじゃあの赤いリバインに乗ってたのは……」
「ああ、私だ」
今エリルの目の前にいるのが自分の機体を破壊した兵士、だとすれば何故助けたのかがわからない。
「そんな……それじゃあ、どうして私を助けたんですか？」
「神楽に頼まれてお前をここまで運んだ」
「違います、何故あの時無花果の胸部ではなく、どうして腹部を刺したんですか。あの時の貴方なら確実に私を殺せたはずです……！」
声に力が入るのも無理は無い、敵に情けを掛けられた事にエリルは不満に感じていた。
「助けてもらった事には感謝しています、でも教えてください。赤城さんはどうしてあの時私を――」
「私は人殺しの為に戦場に出ているのではない、それだけだ」
その赤城の言葉更にエリルを戸惑わせる、それなら何故この人は戦場に出ているのか。
エリルだって人殺しの為に戦場に出ている訳ではない、しかし戦場で人を殺さない限り争いは終わらない。
赤城の言っている事はまるで綺麗事を言うかのようで引っかかり、矛盾しているようにしかエリルには聞こえなかった。

「エリル、お前は何故戦う」
「私？私は、この世界を平和にする為に……ＥＲＲＯＲみたいな化物から、『神』とかいう兵器からこの世界を守りたいの。
だから私は戦う、世界が平和になって。この長い戦争が終わるまで。その為なら私は敵を……人を殺します。
今までもそうやって思いながら、私は皆と一緒に戦ってきた……だから今更後悔なんてしてない」
こんな台詞、仲間の前でも言った事がない台詞だった。
それを何故、敵の一人である赤城に話してしまったのかエリルにはわからなかった。
もしかすれば言いたかったのかもしれない、誰かに自分の思いを聞いてほしかったのかもしれない。
エリルの言葉を聞いても赤城は座ったまま、じっとエリルを見ている。
「そうか、その迷いの無い目、嫌いじゃない。私も見習わなければならないな……」
「赤城さん、次は貴方の理由を聞かせてください、貴方の、戦う……うっ……」
起こしていたエリルの体が倒れる、両手で頭を押さえるが、頭を貫くような激痛は彼女を苦しめた。
「あぁあああっ！痛い！痛いぃ！」
「神楽！彼女の様子が変だ！すぐに来い！」
頭を抑えながら体を動かし、必死に痛みから逃れようとするエリル。だが痛みは止む所か更にが激しくなる。動かない体を必死に動かし苦しんでいた。
エリルの苦しむ声と、赤城の呼ぶ声に気付いた神楽はすぐさまエリルの元へ駆けつける。
「急にどうしたの？」
「わからない、彼女が突然頭を抱えだして……」
「頭？脳には何も異常は無いはずよ」

しかし目の前では実際頭を両手で押さえながら痛みに苦しむエリルがいる。
「仕方ないわね、赤城、彼女の腕を押さえてて」
「ああ、わかった」
頭を抑えている両手を赤城が掴むと、それをベットに押しつけて固定する。
神楽はさっき自分のいた部屋に戻ると一本の小さな注射を持ってこの部屋に戻ってきた。
そしてエリルの左腕を少し見た後、すぐさま注射の針を彼女の腕に突き刺す。
ゆっくりと透明な液体が注射針を伝ってエリルの血管に投与されると、
さっきまで体を大きく曲げ、声を上げて苦しんでいたエリルが次第に動かなくなっていった。
「何を打ったんだ？」
「精神安定剤、恐らくこの子の頭痛は何らかの精神的なもの」
気が付けばエリルは目蓋を閉じて寝息を立てていた、神楽は乱れたシーツを綺麗に直し、それをそっとエリルの体に掛ける。
「もう一度、この子を念入りに調べないといけないかもね。唐突に死なれても困るし」
「……レンはいつ迎えに行く、出来れば今日中に行きたいんだが」
「それは難しいわね、明日になるかもしれないわよ？」
「わかった、この子はお前に任せる。私はレンともう一度コンタクトを取ってみよう」
「そうね、そっちは任せたわよ」
赤城は神楽のいる部屋を出ると、飲みかけのコーヒーカップを手に取り一気に飲み干す。
そしてカップを机に置くと、足早に部屋から立ち去った。

――ある町の喫茶店、その喫茶店にはラースと羅威、そしてレン

がテーブルの椅子に座っていた。
レンは喫茶店にある顔が隠れる程大きいメニュー表を開いて見つめている、だが意識はメニューではなく二人の会話に集中していた。
「そう、セーシュは死んだのか……」
男の一人がそう呟くと、静かにカップに注がれている紅茶を飲む。
羅威は視線を下げ、誰とも目を合わせない。
「すまない……結局俺は、誰も守れなかった……」
「君が謝る事じゃないさ、それにセーシュは風霧総司令官の無事を最後に聞いたんだろ?それならまだ救われた方じゃないか」
「だが、俺は……」
「これは戦争、敵だろうが友達だろうが戦場では簡単に死ぬ、そうだよね。
羅威、もうこの話しは止めよう。幾ら話してもキリが無い」
羅威の顔色は悪く、全く元気が無い表情だ。それを見ていたラースが心配そうに見つめていた。
するとラースはテーブルに置かれている小さな機械のスイッチを押すと厨房の方でブザーの鳴る音が聞こえた。
その音を聞いたウエートレスはすぐにブザーの押したテーブルへ向かう。
「お客様、お決まりになりましたでしょうか」
「うん、コレとコレ、よろしく」
ラースは小さなメニューの方に書かれている料理を指差すと、ウエートレスは頷き手に持っている機械に入力する。
「レン、君はもう決めたかい?」
大きなメニュー表で顔を隠していたレンがメニュー表を机に置く。
「あの、このホットケーキでお願いします!」
「畏まりました、それでは注文の方を繰り返させていただきます――」
ウエートレスが注文を繰り返すと、ラースは小さく頷いた。それを見てウエートレスは厨房の方へと戻っていく。

「人は食べないと力も出ないし元気も出ない、食こそ人の力と言ってもいいくらいだ。
羅威、君は顔色が悪い。僕が注文した料理は絶対に食べるんだよ」
「ああ、すまない……」
「さてと、料理が届く前に少し話しをしておこうかな。これからの僕達の事について」
何故今、三人はこんな市街地にいるのか。
それは簡単な事だった、ラースがバイクで地下通路を渡り地上に出てきたのがこの町だったのだ。
しかもこの町はＢＮの町ではなくＮＦの町、ＢＮとの連絡を試みた所、明日には軍の仲間がこの町に来て救出してくれるらしい。
何せこの町は大きな町ではない、どちらかといえば大きな市街地と言った所だ。
その分この町は厳重な警戒とＥＲＲＯＲ対策用の軍も準備してある。
ちなみに羅威の乗る神威はこの市街地からそう遠くない廃墟に隠している。
ラースからの連絡を受けた羅威は機体を廃墟に隠し、一人ラースのいる市街地へと向かったのだ。
「まぁ、神威のエネルギーはもう殆ど無かったと思うし。ここに来て正解だったね、羅威。
それに今日には仲間がここに来て、僕達は無事ＢＮの元へ帰れる。
数時間にも及ぶ長い道乗りをこの猛暑の中、バイクで走らなくていいって事さ」
レンをここに残し、二人でバイクに乗りこの町から離れようと思えば離れられた。
っが、この町の付近に建物と言う建物は無く、あると言えば機体を隠している廃墟ぐらいだ。
後は殆ど荒野が広がっており、この猛暑の中外に出るのは危険だとラースはわかっていた。
「あの、私もＢＮに連れて行かれるんですか？」

お絞りで両手を丁寧に拭いているレンは、お絞りは綺麗に畳むと机に上に置いた。
「んー、君をBNに連れて行ってどうなる。どうもならない、それなら別に君を連れて行く必要は無い」
「って事は、私を無事解放してくれるんですね！」
「うん、僕達が無事この町から脱出できたらの話しだけどね」
「つまり私は人質って事ですね、それで、あの。お礼はどうすれば……」
「お礼？」
「服を買ってくれたじゃないですか、だから、その…お礼に何をすれば……」
ラースの服装はまだ良かったが、レンと羅威はパイロットスーツを着ており、そんな格好で町を歩くと余りにも怪しすぎる。
という事でラースが羅威とレンの私服を買うとすぐに二人に着替えさせた。
「お礼ねぇ、んー……あ、そうだ。君の乗っていた機体の資料を見せてよ」
「それは無理です」
「冗談だよ、それより僕は君に聞きたい事があるんだけど。質問に答えてほしい」
「お答えできる範囲であればお話しますよ」
「うん、あの巨大Dシリーズの設計者と操縦者、誰だか知らない？」
「……わかりません、あんな機体見た事も聞いた事もありませんでしたから……」
「そう、それじゃあ。神楽って女性、知ってるかな」
「え……っと、知りません」
その名前を聞いた彼女の表情が一瞬変わったのを、ラースは見逃さなかった、
明らかに不自然な答え方、彼女はそれでやり過ごそうと思ったがラースは更に質問を繰り返した。

「神楽って女性、本当に知らない？たしか金髪の女性だったんだけど」
「金髪……ですか？見た事無いですね、私は名前を聞いた事も会った事もありません」
「んー、金髪じゃないか。たしか赤紫色の綺麗な髪の女性だったね」
「えっ？し、知りませんよ、そんな人……」
「うん、君は実にわかりやすい。人に嘘を付けないタイプだね」
「え、ええっ？」

――「お待たせいたしました、ご注文になられたお料理を持ってきました」
ウエートレスはおぼんの上に置かれている料理をテーブルに並べると、頭を下げてその場から離れる。
レンの頼んだホットケーキは焼きたての熱々。
ホットケーキの上にはホイップクリームで綺麗にデコレーションしてあり、蜂蜜がタップリ掛かっている。
蜂蜜の甘い香りが漂ってくると思いきや、甘い香りではなく何やら香辛料のような辛い香りが漂う。
羅威の目の前に置かれたのは出来立てのカレーだ、しかも色が茶色ではなく少し赤い。
そのカレーの匂いに釣られ俯いていた羅威がふと顔を上げた。
「カレーか……」
「朝から晩までカレーを食べるのが君じゃないか、遠慮せずに食べていいよ」
羅威は銀色の光沢を見せるスプーンを手に取ると、一口カレーを食べてみる。
「美味いな、朝からカレーも悪くはない」
「気に入ってもらえてよかったよ」
ラースの前にはお皿の上に数枚のサンドイッチが並べられており、それを一つ手に取ると無言で口に運ぶ。

レンはフォークとナイフを常時に使い、一口サイズにホットケーキを切って行くと笑顔で食べている。
すると、甘い匂いに釣られてきたのか、一人の小さな少女がレンの隣に立っていた。
少女は羨ましそうな目でホットケーキをじっと見つめ、口から今にもよだれが垂れそうな程に口を開けている。
それに気付いたレンはホットケーキをまた一口サイズに切ると、それをフォークに刺してそっと少女の口元に持っていく。
「はい、あーんして」
「あーん！」
レンがそう言うと少女は嬉しいのか笑みを見せながら目を瞑り、その小さな口を開けた。
その口の中にホットケーキをそっと入れると、ぱくっと口を閉じて一口サイズのホットケーキを食べる。
「美味しい？」
「うん！おいしい！」
「もう一切れ食べる？」
「たべるたべる！」
そう言うと少女はまた目を瞑って口を開け、甘くて柔らかいホットケーキを待っていた。
レンもそれが嬉しいのか、またホットケーキを綺麗に一口サイズにすると、またそれを少女の口に運ぶ。
っが、その時。少女が突然後ろに下がる、少女が口を閉じてもあの美味しいケーキの食感は何処にも無い。
「こらこら、人の物勝手に貰ったら駄目だろ」
少女の後ろには服を掴んで後ろに引っ張る男性の姿があった。
目の前にあるケーキを食べようと前に進もうとする少女だが、男性は服を掴んだまま決して放そうとしない。
「あー！ケーキたべれないよ～！」
「ケーキなら買ってあげるから自分の席に戻るぞ、人に迷惑かけた

ら駄目だろ？」
「あの、私は別に迷惑ではありませんよ」
レンはそう言いながら男性の顔を見上げると、男性は驚いたような顔をしてレンの顔を見つめていた。
「なっ、おま、どうしてこんな所に！？」
驚いたような男性の声に食事をしていたラースや羅威も反応して男性の方に顔を向ける。
ラースは然程驚いた様子ではなかった。だが次の瞬間、羅威の手からスプーンが落ちた。
大きな帽子を被っている青髪の少女に、黒髪の男。その男の眼は決して忘れる事が無い、魔神の眼。
「か、甲斐斗！？何故お前がここに！」
「うおっ！ＢＮの奴までいやがる、てかなんでお前等こんな所で飯何か喰ってんだよ！」

――合計５人が椅子に座る、あの帽子の少女は頼んでいたパフェを食べていたが、残りの俺達は飯所では無かった。
「お前等ＢＮとＮＦは敵だろ、どうしてこんな所で仲良く一緒に飯食ってんだ？」
甲斐斗が不思議に思うのは当然、俺達ＢＮとＮＦのこの子が一緒にいれば誰でもそう思う。
俺が甲斐斗の第一声の質問に答えようとしたが、帽子の少女の隣に座っているレン本人が答えた。
「私は今人質って事になっているんですよ」
「人質？」
自分から人質と言う人質はいないと思うが、人質という事は間違いではない。
すると俺の隣に座っているラースが徐に口をあけて会話の中へ入った。

「その事なら僕が話すよ、初めまして甲斐斗。僕はラース、隣に座っているのが羅威だよ」
「ああ、初めまして」
「待てラース、こいつに俺達の事を話しても大丈夫なのか？」
「彼は仲間の命を助けてくれた人らしいじゃないか、少しぐらい話したって構わないじゃないか。
僕も色々と彼に聞きたい事があったし」
ラースは前からこの男について興味を示していた、あのＥＲＲＯＲと混ざった機体を見てからだ。
徹夜をしながら機体の分析を行い、この男の乗る機体についての情報をかき集めていたからな。
「実は昨日、ＢＮはＮＦやＳＶと戦ってたのさ。負けたんだけどね、それで脱出用の地下通路を通ってきてここに来たんだ。
ちなみに彼女は無意識にＢＮの基地に来ていたらしいよ、僕達が発見してここまで連れてきた訳だけど」
「やっぱりそうか、あの艦隊はＢＮを狙ってたんだな。んで結果はＢＮの負けか。
ってか、レンが無意識に基地に来てたっておかしくないか？」
甲斐斗は眉を潜めるながらテーブルに置かれたお冷を手に取り、一気に水を飲み干す。
これもまた不思議に思うの当然だ、現に俺も不思議に思っている。
「嘘と思うなら彼女本人に聞くといい」
ラースは前斜めにいるレンに視線を向けると、レンは小さく頷いて口を開いた。
「はい、私も余り憶えていないんですが。気付いていたらＢＮの基地にいたんです……」
「夢遊病かっての、全く……んじゃさ、俺の事は憶えてるよな？」
「はい、憶えてますよ。前に1度基地で会いましたよね、貴方ってＮＦの兵士じゃなかったんですか？」
レンの話しを聞いて納得がいかないのか、甲斐斗は不満そうな顔を

してレンに問いを繰り返した。
「いやいや、その前。俺と話した事も、会った事もあるよな？」
「えっ……私が貴方と話したのは1度しかないと思いますけど？」
「惚けるなよ？んじゃこれは憶えてるはずだ、ルフィスの死体を見た事あるだろ」
「ルフィスさんの？何ですかそれは、知りません……」
不満そうな顔が更に不満に変わる、腹が立っているのか甲斐斗は落ち着かない様子でレンを見つめている。
だが彼女は本当に憶えていないの様子だった、彼女は訳のわからない話しをされて戸惑っている。
しかし現に彼女は何かを隠している素振りを俺に見せていた、これは演技なのか、それとも……。
「俺は憶えてんだよ、お前が俺に銃を渡した事や、お前が死体を見て混乱したり、震えながらお兄ちゃんとか言ってた事も全部」
待て、今この男はなんて言った。レンには姉がいるが、兄はいないんじゃなかったのか？
「知りません、勝手にいい加減な話しを作らないで下さい。私は貴方と話した事は1度だけです！」
店内全体に聞こえる程の大きな声で否定したレンは、
自分の感情を必死に抑えながらテーブルに置かれているガラスコップを握り水を飲んでいく。
俺は知りたい、このレンが、俺の妹なのかどうか。根拠も無いのに何故俺はここまで心に引っかかるのかわからなかった。
顔が似ている、ただそれだけの理由。もしかして俺は玲が死んだ事を認めたくないだけじゃないのか？
「これ以上話しても無駄みたいだな、ミシェル。行くぞ」
不機嫌そうな甲斐斗は勢い良く立つと、少女の座っている椅子に向かう。
少女は多きなパフェの半分を食べ終えた所だったが、まだ食べたり無さそうな顔をしていた。

「うぅ～……」
「んじゃ食い終わったら奥のテーブルに来てくれ、俺はそこで飲み物でも飲んでるから」
甲斐斗は少女から離れると喫茶店の一番奥の部屋のテーブルの椅子に座り、ウエートレスを呼んで何かを注文している。
甲斐斗、危険な男なのはわかるが、奴には色々と聞きたい事がある。
今ここで動かなければ奴には二度と会えないかもしれない。
「ラース、俺はちょっと奴と話してくる。ここは頼んだぞ」
「ん、そうかい。君が行かなければ僕が行こうと思ってた所さ。いってらっしゃい」
サンドイッチを食べながら右手を振るラース、レンは少女と何か話しをしているが、今は奴と話しをしよう。
俺はラース達のいたテーブルから離れると、一番奥のテーブルの椅子に座った、奴のまん前の席だ。
「俺に何かようか？今メロンソーダ飲むのに忙しいんだけど」
不貞腐れた態度、よほどレンとの会話に不満を持ったのだろう、不機嫌そうにストローを銜えてガラスコップの中のメロンソーダを吸い上げて飲んでいた。
「ああ、レンという女性についての事だが。レンは兄がいると言っていたのか？」
「兄がいるとは言ってなかったが、お兄ちゃんって、小声で言った後意識が遠のいたな。それがどうかしたのか？」
「いや、そうか……わかった、所でお前が何者なのか、教えてくれないか？」
「普通それを1番最初に聞くだろ、どーせ言ったって信じてもらえないと思うけど、言っとくか」
「俺は別世界の人間であり、この世界の過去から来た男だ。教えたぞ、理解できたか？」
甲斐斗の口から出たのは意外な言葉だった、別世界という時点で俺の予想は全て砕かれたのだからな。

しかしコイツの言っている事が嘘に聞こえない、人間とは違う、別の気配、力を感じる。
あの時もそうだ、彩野とアリスを助けてくれた時。
コイツは得体の知れない機体に乗って現れた、この男にもまた謎が多過ぎる。
「理解に苦しむな。質問を変える、お前の目的は何だ、それにお前は俺たちの敵なのか？」
「俺の目的は沢山あるんだよ、まず『神』とかいう兵器をスクラップにして。
ＥＲＲＯＲとかを暇潰しにぶっ潰して、過去に戻る事だ。ちなみに俺はお前等の敵じゃないが、味方でもない。
俺は自分の思うがままに行動してるからな。時には敵、時には味方。みたいな、どーよ？」
「それじゃあ、今は敵なのか？味方なのか？」
「味方……にしといてやるよ、俺も敵はあんま作りたくないからな」
どうやらＢＮとの敵対心は今の所無いらしい、だがこの男の噂はＮＦ，ＢＮ，ＳＶでは知れ渡っている。
謎の機体を扱う男、その機体は『Ｍ，Ｄ』と言われ恐れられている事も。
「所でさ、お前は機体の整備。メンテナンスとか出来ないの？」
「機体の整備？それなら俺より腕の立つ奴がいる。
あのラースという男だ、アイツはＤシリーズの事なら何でも知っているし、メンテナンスも軽々とやってのける」
「まじかっ！？実は機体の調子悪くてここら辺に来るのにもすごい時間かかったんだよ。
だからさ、俺の機体をちょっと見てくれないか頼んでくれないか？」
「わかった、話してみるよ」
俺はそう言ってテーブルから離れると、サンドイッチを食べ終え携帯電話を見ているラースの元へと向かった。

「ラース、甲斐斗がお前に機体を見てもらいたいと言ってるんだが……」
「本当？やったね、僕からお願いしようと思ってた事を彼がしてくれるなんて。
　でも機体の整備だと軍事基地でやった方がいいと思うから、良ければ彼に来てもらえないかな、ＢＮの基地に」
「わかった、話しておこう」
「それと、メールが来てたよ。ＮＦの兵士から」
「メール？どんな内容だ」
「取引をしたいそうだよ、実はＮＦもＢＮの兵士を捕まえているらしい。その捕虜と交換って事らしいけど」
「捕虜？名前は？」
「それは書かれてない、どうする、羅威。奴等は僕達に脅しみたいな事をしてきているけど」
たしかにラースの言う通りだ。ＢＮの捕虜がいるとわかれば俺達も黙って見過ごす訳にはいかない。
その考えをするのも、恐らくＮＦの奴等は知っている。つまりレンの無事を強く願っているという事だ。
もしレンを殺せば、同様に捕虜を殺すつもりだろう。
だが奴等にはＢＮの捕虜など最初からいない可能性もある、単なる時間稼ぎという事も考えられるな。
しかし、俺達はレンに危害を加えようとは思っていない、今日中に助けが来れば彼女は解放しようと思っている。
という事は、上手くいけばＢＮの捕虜をこちらに連れ戻せるという事になる。
「ラース、他には何か詳しく書かれてないのか？」
「時間や場所は不明の用だけど、僕達がこの町にいる事は既に調べられているかもね」
「ん？メールの電波を追って来るって事か？手が込んでいるな、それ程彼女が大事という事か」

「そういう事、それでさ、どうする？取引に応じる？」
「……そうだな、危険かもしれないが取引に応じてみたい。元々彼女は解放するつもりだったしな」
「了解、それじゃあ僕が上手くメールを返しておくよ。返信が来たらまた知らせるね」
「ああ、頼む」
ラースは俺が言わなくてもテキパキと物事をこなしてくれるから助かる。
出会ってから余りラースと喋った事がなかったが、話してみると結構頼りになる男だ。
後は甲斐斗の性格を知らないとな、まぁ見ても話してもわかりやすい性格だったが……。
俺が甲斐斗の席に戻ると、メロンソーダを飲み終えた甲斐斗はコップを逆さまにして大きな氷を口に頬張っていた。
その氷を音をたてながら噛み砕いているが、何をやっているんだこいつは……。
「もほ、ほうはっは？」
何を言っているのかわからない。
とりあえずラースが機体の整備を承諾した事について話しておこう。
「ラースが機体の整備をしても良いと言っている。
しかしこの場では出来ない、ＢＮの基地に来てもらう事になるが、それでもいいか？」
また大きく氷の噛み砕く音が聞こえる。
「ああ、いいぜ。でも俺が行って大丈夫なのか？二つの意味で」
二つの意味、恐らく甲斐斗は自分が危険な存在だというのを自覚している。
そんな男を勝手に基地に連れて行っていいのか。
という意味と、甲斐斗がＢＮの基地に行って身の安全を保障してくれるのか。この二つだろう。
「大丈夫だ、安心してくれ」

「ほー、お前両方の意味で、って意味わかったのか。やるじゃん」
その時、後ろから帽子を被ったあの少女が俺を抜いて甲斐斗の前へと走っていく。
「かいと、ぜんぶたべたよー」
「美味しかっただろ?んじゃホテルにでも泊まってゆっくり昼寝でもするか」
「うん!」
そういうと甲斐斗は立ち上がり、レジの方へと歩いていく。
「待ってくれ、俺達の仲間は今日来るんだ。何かお前と連絡する手段が無いと……」
「俺ならあのホテルで休んでるから、準備出来たら来てくれ」
甲斐斗が指差す方向には、2階建ての小さなホテルが見える。
こじんまりしているようにも見えるが、見た目は綺麗なホテルだ。
って、あのホテルはたしか……。
俺が視線を戻すと、そこに甲斐斗の姿は無かった。
それに気付いたと同時に喫茶店の出口の扉が開き、小さな鈴の音が聞こえてきた。
奴の向かうホテルは、俺達が昨日から泊まっているホテルじゃないか。
「羅威、僕達もホテルに戻って休もう。君はまだ疲れが取れていないはずだ」
その声に反応して横を向くと、財布にカードを入れ終わり、その財布を上着の内ポケットにいれているラースが立っていた。
隣にはレンもいる、しかし喫茶店に入ってきた時より表情が暗く、不機嫌そうな顔をしている。
「あの人って一体何なんですか、変な話しばっかしてきて……本当にもう!」
独り言をブツブツと言いながら喫茶店を出て行くレン、それに続いてラースも店から出て行く。
俺も喫茶店から出ようと扉の前に立った時、ふと前を見ると、人ご

みに紛れてある男の顔が見えた。
俺がよく知っている人、命の助けてもらった人、姿に顔。懐かしいが、決して忘れた事の無い人物。
「愁？」
呟いた時、既に愁の姿は人ごみに紛れて消えていた。
ラースの言っていた通り、俺は疲れているのだろうか……愁がこんな所にいるはずがない。
信号が変わらない内に俺は横断歩道を渡り、足早に泊まっているホテルへと戻った。

第４９話　疑惑、幻（後書き）

正式名不明
全長－２０ｍ　機体色－黒　動力－不明
甲斐斗の愛用機、『ＭＤ』（Ｍａｌｅｖｏｌｅｎｔ　Ｄｅｉｔｙ）と呼ばれ皆から恐れられているが、甲斐斗自体まだ名前を決めていない。
元の機体とは程遠い外見をしており、全身分厚い黒色の装甲で覆われている。
また機体はＥＲＲＯＲの力で自動的に修復するようになっている、出力、突破力は並外れた機体。
しかし重火器や銃器の武装は一切しておらず、剣一本で戦闘を行なっている。

第５０話　異人、目覚め

――――ホテルの一室、カーテンを閉めて薄暗い部屋で俺とミシェルは二人横に並んでベットに寝ていた。
が、俺は長く眠れる事が出来ず目が覚めてしまった。
隣を見ると可愛らしく寝息をたてて寝ているミシェルがいる。
気持ち良さそうに寝ているミシェルの寝顔を見ていると心が安らぐ、癒しというのだろうか。
さてと、寝れないんじゃ仕方ない。外にでも行こうかな。
俺はベットから出ると、ホテルの鍵を持ってその部屋を出て行く。
もちろん部屋を出た後は扉に鍵を閉める、街でも歩くか。
ホテルの鍵をズボンのポケットに入れて歩き出した時、別の部屋の扉が開き、中からは眼鏡を掛けた青年が現れた。
見覚えがある、たしかラースと言う青年だ、機体に関しては腕が良いらしいじゃないか。というか何でここにいるんだ、もう時間なのか？
「よぉ、お前どうしてこのホテルにいるんだ？」
「僕達も昨日からこのホテルで泊まってるんだよ、それより君は何処に出かけるんだい？」
すごい偶然だな、同じホテルに泊まってるって。
「ちょっと外の空気を吸いに行こうかと」
「それなら僕も付き合うよ、いいかな」
「ああ、別に良いけど」
ホテルを出ると、街は相変わらず人が多い。
こんな猛暑中人々は街を歩いている、ある人は遊びに向かう途中、ある人は仕事に向かう途中。
余り人が多い所は好きじゃない、とりあえず緑の多い公園のような場所があったのでそこに向かってみた。
公園の砂場や遊具ではこんな暑い中元気良く遊んでいる、やっぱ子

供は元気が一番だ。
俺とラースは公園にあった屋根付きのベンチに座ると、そこから見える公園の景色、街の景色を眺めていた。
「平和ですね」
突然ラースが口を開く、だがラースは前を向いたままだった。
こいつ、俺についてきた理由は何か話しがあるからに違いない、俺と何を話したいのだろうか。
「そうだな、これだけ見れば平和だな」
子供が公園で無邪気に遊ぶ姿、恐怖も怒りも何も無い、純粋な笑顔。
だが、それは何も知らない、何もわからないからの笑顔だ。
この世の真実と現実を理解出来ない人間は平和だろう、気が楽で良い。
「ねぇ甲斐斗、この世界をどう思う？」
これまた突然口を開いたと思いきや、そんな事を聞いてくるとは思ってもいなかったよ。
「おいおい突然だな、この世界をどう思うって言われても、何を言っていいのかわかんねえ」
「簡単に言ってくれて良いんだよ、この世界を見て君はどう思った？」
どう思った、この世界に来て、この世界を体感して、思ったこと。
「……面白い世界になってると思ったな」
俺がそう言った時、微かにラースの口元が笑っているように見えた。
「へぇ、争いの続くこの世界が面白いのかい？」
「ああ、面白い。平和が嫌いって訳じゃないが、俺は戦いが大好きでな」
平和な世界はつまらない、ただ単に飽きただけだった。
俺だけじゃない、きっとこの世界にいる人間達も思っていたはずだ、争いが起こる前は。
毎朝同じ時間に起き、毎日学校や仕事場へと向かい、毎日勉強し、働く。

毎日毎日同じ事の繰り返し、生活する為に身を犠牲にして仕事をしていく日々、つまらない日々だ。
たしかに平和な日々なのだろうが、それが平和と言うなら俺はそんな日常いらない。
自由に人を殺す事も出来ない、偽りの法にしたがって生きなければならない世の中なんて俺は真っ平ごめんだ。
「この世界は争いに満ち溢れている、君にとっては楽しい世界って事かい？」
「まあな、って俺が他の世界の人間だって事はもう羅威から聞いてるのか。お前は信じるのか？俺の話し」
「信じるよ、君がそんな嘘つくとは思えないからね」
俺が嘘つくとは思えてないって、こんな正体不明の俺を言葉をよく信じれるな。
まぁ内心疑っているが、表はそうでないように装っていると思うが。
「科学者の癖にそういう事は信じるんだな、そういえば俺の話しを信じた学者がもう一人いたなぁ」
「学者？ＮＦの？」
「たしか神楽って言う奴、その女も俺の話しを信じたんだよ」
「へぇ……その女性と何を話したの？」
「んー、Ｄシリーズの動力源についての事とか。でもあの女俺を殺そうとしてきやがって……思い出しただけでも腹立つ」
「そうなんだ……君も大変だったんだね。僕達はそんな事しないから、安心して基地に来てくれるといいよ」
「安心はしねえが、基地にはお邪魔になるぜ。機体の修理をしてもらいたいからな」
その時、何か歌のような曲が流れ始めた。
曲を聴いたラースは胸ポケットから携帯電話を取り出す、携帯の着信音か……。
「お仲間からのメールか？」
「いや、その逆。ＮＦからメールが来たんだよ」

そう言ってラースは閉じていた携帯を開きメールの内容に目を通す。
「内容は？」
俺がそう聞くとラースは携帯の画面を見ながら答えると同時に何やら携帯に文字を打ち込んでいく。
「今から1時間後、この街の中央にある博物館で合流したいらしい」
「人質の取引か、にしては早くないか？後1時間ってすぐだぞ」
「それには僕も驚いている。
あとこのメールには続きがある、この取引は個人的なもの、軍は一切関与してないらしい。
という事は個人的に返して欲しいって事になる、これは一度ホテルに戻って羅威と話さないと……」
「そか、んじゃ俺も戻るか」
こんな暑い所にずっといるのも嫌だからな、俺もホテルに帰って冷房の効いた部屋にいたい。
ラースは座っていたベンチから腰を上げて立ち上がり、一人公園から出て行こうとする。
俺も立ち上がりラースの後ろについていく、このまま何事も無く事が進めばいいんだが。

――――「っという訳なんだよ」
ラースからの説明は終了、羅威とレンは理解したらしく同時に頷いていた。
部屋には合計４人、俺とＢＮとＮＦの連中だけだ、ミシェルは今俺の部屋でぐっすりとお昼寝中。
「1時間後、早いな。それに合流場所が中央の博物館とは……」
羅威が疑問に思うのも無理はない。博物館とか人目につきやすいし、建物自体複雑な構造をしている。
そんな場所で人と人を取引する事が出来るのだろうか、常識的に考えて普通に怪しいだろ。
「仲間と合流してからの方が安全だと僕は思う。

関与していないというのは嘘で、本当はこの町のＮＦの部隊に連絡しているかもしれないし。
　ここは取引時間を延ばしてもらうよう交渉してみようか？」
「大丈夫です、ＮＦの人達には私がちゃんと説得します！二人には傷ひとつ付けさせませんよ！」
あれ？二人って、俺が入ってないんだが。
「君がそう言っても、ＮＦとＢＮは敵同士。僕達を捕まえる可能性だってある」
「だがメールの内容は本当かもしれない、レンはたしか自分が無事だというメールを軍ではなく、部隊の人間に送ったんだよな。
　だとすればそのメールを送られた人間は軍にこの情報を伝えるとレンに危険が及ぶ可能性があるとみて話していないかもしれない」
「そうですよ、私に任せてください。赤城隊長に私が無事な事を知らせればきっとわかってくれます！」
赤城……ああ、赤城ね。あーそうだった、レンは赤城の部隊の兵士だった。
「赤城なら大丈夫だろ、姑息な真似とかしない奴だと思うし」
俺の言葉に三人が一斉に俺に目を向ける。
「あ、貴方赤城隊長を知ってるんですか！？」
「知ってるも何も、ＥＤＰとか一緒に参加したんですけど。色々と話した事もあるし」
レン、こいつ本当に忘れてやがる。何もかも、何故赤城を覚えていて俺を覚えていない。
知らないふりにも見えない、これはもう病気に近い何かの影響か？
「それで、その人はどのような人なんだい？」
次に口を開いたのはラースだった。
「姑息な真似はしないような奴さ、赤城ならレンの無事を一番に考えるから危険は侵さないだろう。
　純粋に取引をしたいと思ってるはずだぜ？」
壁に掛けてある時計を見てみる、後４０分か。今から博物館に行っ

て少し時間を潰せばすぐだな。
「俺も一緒に博物館に行ってやるから心配すんなって。俺がいれば百人力だ」
「わかった、俺はそれで良いと思う。ラースはどうする」
さすが羅威、物分りが早い。あの時もそうだったけど、こいつとは話しがしやすいな。
「羅威が言うなら僕もそうしよう、何かあったら頼んだよ、甲斐斗」
「おう、俺に任せろ」
まぁお前等よりミシェル優先で守るけどな。
赤城なら大丈夫だろ、普通に俺も入る事だし説得すれば最悪の事態は免れる。
「そうと決まれば早速行きましょう！博物館！」
レンの元気有る声と共に俺達は立ち上がり、俺達はこんな真昼間から人と人を取引する為に博物館へと向かった。

――博物館についた俺達、ミシェルは俺の手を握って歩いているが、とても眠そうにしている。
手を放したらその場に倒れて寝てしまいそうな勢いだ。しょうがない……。
「ミシェル、しっかり掴まっとけよ」
そう言って俺は体勢を低くすると、返事は返ってこなかったがミシェルが俺の背中に乗ってくる。
やっぱり軽い、簡単に背負う事が出来た。この方が移動も楽だな。
すると博物館の壁に貼られていた館内の地図を見つめていたラースは後ろに振り向くと俺達の方へ戻ってきた。
「どこに集合するのかわからない、多分人気の無い場所だとは思うんだけど……」
「んじゃ俺は2階探してくるから、お前達三人は1階探して来いよ」
「そうした方が良さそうだね、それじゃ僕達は1階で探してみる」
ラースはそう言って1階の広間に移動する、羅威とレンも1階の広

間に向かった。
俺もすぐそこにあった階段を上って2階に向かう、1階より人は少ない、とりあえず2階をウロウロするか。
厚いガラスケースの中に変な破片が、厚いガラス板の向こうに変な写真が、そういやこれ何の博物館だ？
「……歴史博物館」
しかも１００年前の歴史についてだ、壁にデカデカとポスターが貼られてある。
変な破片は１００年前の戦争で破壊された建物の破片、変な写真は逃げ惑う人々が写っているが、汚れていてよく見えない。
１００年前、突如現れた『神』という名の兵器に世界は破壊された。
無差別で殺されていく人間達、女や子供だって構わず殺されていた。
別の写真を見れば何千人という人間が血だらけで広場に集まっている。
また別の写真は少年達が銃を片手に戦場を走っている。
そういえば俺は見た事が無い、神と、それに仕える天使の姿を。
……マスターガーディアン。その第１ＭＧがミシェルだと聞かされた時、信じられなかった。
例えそれが本当だとしても、信じたくない、というか信じれない、こんな幼い少女がＭＧなんて、ありえない。
『ＭＧ』主の為なら何でもする彼等は人間の形をしているが人間とは比べ物にならない程の驚異的な魔力を秘めている。
その力は一人で一つの世界を滅ぼせる程の力だ。今まで会った事のあるＭＧは第６ＭＧだけだ。
女性だったな、明るく陽気で、しかし時には真面目で冷静な一面を持っている第６ＭＧ。
何で知っているのか、理由は簡単、１００年前共に戦っていた仲間であり、家族だったからだ。
ＭＧは誰が作ったのか、そんな事考えた事もあったが、俺にとってはどうでもよかった。

何故ＭＧは強大な力を持ち、主と契約した人間には自らの命を捨ててまで守り抜くのか、本当の目的は何なのか。
今になっては考えさせられる、ミシェルが第１ＭＧならあの不思議な力も納得がいく。
俺に力を少しだけ与えたのもミシェルの力なのかもしれない、ＭＧの力を俺に分けたのか？
だがミシェル自体は自分をＭＧだとわかっていない、それがおかしい、それぞれＭＧは自分がＭＧと自覚しているはずなんだが……。
『神』を復活させるにはＭＧが必要、ＭＧを何に使う気だ、何故ＭＧが必要なんだ。
まさかその『神』という兵器が、ＭＧを創りだしたのか？それならあのＭＧの力も納得してしまう。
でもどうしてそんな真似をした、神がＭＧを作り出したのであれば、何故ずっと自分の下においておかなかった。
何故人間を主にさせたんだ、目的は、目的は一体……。
「みーつけた」
そんな声が俺の後ろから聞こえてきた、ゆっくりと俺は後ろに振り向くと、そこには一人の女性が立っていた。
見た事の無い女性だ、桃色の髪に、シンプルな服装。その女性は俺の方を見て微笑んでいる。
「ねーそこの人ー、その子返してくれなーい？」
「俺に言ってるのか？」
「そうだよー、だってここ貴方しかいないじゃない」
気付けばさっきまでいた人達がどこにもいない、それに話し声や足音もさっきは聞こえていたのに、今は何も聞こえない。
「お前何者だ、どうしてミシェルの事を知っている」
俺は寝ているミシェルをそっと壁を背に寝かせると、女性の方に振り返った。
こいつ、危険だ。俺の本能がそう言っている、微笑んでいるが奴からは嫌な気配しか感じてこない。

「ミシェル……？貴方がつけた名前？センスなーい」
「センス無いのはいいとして、お前ミシェルの本当の名前を知っているのか？」
「知ってるよー、でもそれを教える必要は無いのー。だって貴方はここで死ぬんだから」
またニッコリと微笑んでくる女性、俺が死ぬだと？馬鹿を言うな、腸引き裂かれても死なない俺がどうやって死ねる。
それに俺も雑魚じゃねえ、何をするかわからんが、ここでミシェルを渡すわけにも、死ぬわけにもいかない。
「すごい自信だな、俺を簡単に殺せると思っ――――」
突如肩に突き刺さるナイフ、右肩に突き刺さったナイフは根元まで俺の肩に刺さっていた。
気付いた時には痛みと共に肩から血が流れる。女性は相変わらず俺を見て笑っていた。
「えへ、アビア、殺すの大好きだから任せて」
「奇遇だな、俺も殺すの大好きなんだよ」
俺は右腕を伸ばし巨大な黒剣を出現させた。さっさと殺すか、面倒な事が起きる前に。
女性は剣を振りかざそうとした時、一本のナイフが俺の右手に突き刺さった。
「痛っ――――！」
その痛みで剣を手放してしまう、女性はすぐさま距離を縮めてくると右手に持っているナイフを俺の左肩に突き刺す。
あっさりとナイフの根元まで突き刺すと、左手に持っているナイフで今度は俺のわき腹を横から突き刺す。
両肩と左脇から血が噴出すのを見て女性は笑っている、そして笑顔のまま俺と目を合わせてた。
「ばいばい」
だが俺の目はしっかりと女性を見つめたまま瞳は揺るいでいない。
平気な顔をした俺を見た女性は呆気にとられたままだった、無理も

ない。
「ああ、ばいばい」
俺は目の前にいる女性の胸元に左腕を突き出すとそのまま胸部を貫く。
女性は血を吐き出すと目を開いたまま動きが止まるのを見て俺は腕を振り払い女性を腕から放した。
「痛ててったく、こんなにナイフ刺しやがって……」
両肩に刺さっているナイフを抜き取ると勢い良く血が飛び散るが、俺は気にせず脇腹に刺さるナイフを抜き取った。
全部のナイフを抜き取ると、その場に捨てる、肩から流れていた血も既に止まっていた。
にしてもこいつ何者だ、いきなり殺しに来やがって……服汚れちまったじゃねえか。
この姿じゃ1階にも戻れない、とりあえず奥の部屋にでも隠れるしかないな。
壁に持たれたまま眠っているミシェルを抱かかえると、俺は博物館の奥へと姿を消した。

――博物館の2階で放置されている女性の死体、床に飛び散った血液は床に染み付いたままだったが、床についていた染みから血液が浮き上がり、女性の死体へと集まっていく。
服についていた血も液体に戻り、穴の開いた胸に次々に流れ込むと胸にあった穴が少しずつ小さくなっていく。
そして完全に穴が塞ぎきると、開いたまま動かなかった目が動き出し、瞬きをし始めた。
「女の子の胸に手を入れるなんて強引ね。もっと優しくしてくれないと……でもアビアは強い男は嫌いじゃないよー」
女性は立ち上がると床に捨てられたナイフを手に取り服の中に隠すと、一人の男性が女性に近づいてきた。

「何馬鹿やってるんだいアビア、逃げられてるじゃないか」
「えへへ、ごめんごめん。次はちゃんとするからさ。でもいたなら助けてくれたら良いのにー」
「僕がそんな事しない事ぐらいわかるよね、早く回収しにいくよ、あの子を」

――甲斐斗と女性が出会う前に遡る、1階ではラース達3人が博物館内を歩き回っていた。
博物館の奥の方に向かってみると、ラース達は立ち入り禁止のラベルが貼られてある看板を見つける。
ラースは周りを見て人がいないのを確認するとその看板を避けて通路の奥に向かって平然と歩いていく。
「ラースさん、そっちは立ち入り禁止って……」
「彼等との取引は間違いなくこの先だよ、二人も早く来て」
「ラース、甲斐斗には知らせなくてもいいのか？」
「後で知らせればいいさ」
三人が通路を抜けると、そこは大きな広間が広がっていた。
無の空間、床は赤いじゅうたんが広がり天井には高級なシャンデリアが幾つも飾られている。
天井が高い、どうやら2階からもここの展示室が見れるような構造になっているらしい。
だが展示物は一切見当たらない為、どうやらこの部屋は使われていないようだ。
「誰もいないみたいだが……」
羅威が先頭に立って部屋の中央へと歩いていく。
人が隠れる場所も見当たらない、それに出入り口は自分達が入ってきた通路しかないみたいだ。
「ここで待とう、彼等は必ずここに来る」
ラースはそう言って内ポケットから携帯電話を取り出すが、溜め息をついた後携帯電話を内ポケットに仕舞う。

「どうした？」
「電池切れ、これじゃ仲間にもＮＦにも連絡しようがない」
「連絡なんていらないわよ、ちゃんとここにいるんだから」
通路から聞こえてくる一人の女性の声、広間にいた三人は一斉にその声の方へと体を向けた。
赤紫色の髪を靡かせ、一本の煙草を銜えながら広間に入ってきた女性は、銜えていた煙草を指で挟むとゆっくりと口から離す。
「迎えに来たわよ、レンちゃん」
神楽の姿を見たレンの表情は忽ち笑顔に変わり神楽の方に行こうとするが、ラースの握り締める銃がレンの頭に突きつけられる。
「動くな、動くとこの子を殺す」
「あら、怖い事言うようになったわね。見ないうちに変わっちゃった？」
「僕は変わりました、貴方は昔から何も変わっていませんね、神楽さん」
今度は羅威の視線がラースに向けられる、だがラースはじっと神楽の方を向いたまま視線をそらさない。
「ラース、あの女性を知っているのか？」
「うん、僕は昔ＮＦで働いていてね、そこで知り合ったんだ」
「そうなのか……おいお前、ＢＮの捕虜は何処にいる」
「捕虜ね、今日は連れてきてないの」
その言葉に神楽を除く3人が唖然としていた、取引を行ないたいと言ってきたＮＦが取引に使う捕虜を連れてきていない。
「だからさ、先にレンちゃんを返してもらおうと思ってここに来たのよ」
「ふざけてけてるのか？捕虜がいないのにこの子を返すはずがないだろ！」
羅威が怒鳴るものの、神楽は煙草を銜えて澄ました顔をしている。
「羅威、仕方ないよ。取引は無し。この子は殺させてもらう」
ラースは銃についていた安全装置を解除すると、銃口をレンの頭に

突きつけた。
さっきまで笑っていたレンも今では不安を抱え、どうしていいのかわからない顔をしている。
「待てラース、その子を殺すつもりは無いはずだ」
「うん、この子には何の罪も無い。だから……」
レンに向けていた銃口は神楽へと向けられる、銃を向けられたというのに神楽は相変わらず煙草を吸っていた。
「いつから私に銃を向けられる程、強くなったのかしら」
「神楽さん、僕は貴方に失望しました。あの力を何故人間に使ったのですか」
「……いいじゃない、別に」
「そんな簡単に使っていい力ではない事ぐらい貴方も知っているはず！答えてください！」
ラースの真剣な態度にも神楽は余裕の表情を浮かべている、それが気に食わないのかラースの拳銃を握る手は微かに震えていた。
銃を向けられているというのに、余裕の表情を浮かべている神楽、ラースはその姿を見て何故か自分が追い詰められているような感じがしていた。
「わからない事があれば自分で調べて考えなさい、私はもう貴方の先輩じゃないんだから……でも特別に少しだけ教えてあげる。
私はこの世界に何の興味も無くなったのよ」
「興味が、無い……？」
「ええ、ねぇラース。実は私も貴方に失望しているのよ？」
「僕に？」
「私の元にいる捕虜をね、調べてみたのよ」
返事をせずに神楽は自分の話しを進めていく、銜えていた煙草も携帯灰皿に仕舞うとゆっくりとラースの方に歩き始めた。
「その捕虜はね、肉体を無理やり強化されてたり、血液の成分が普通の人間とは違ってたり、おかしな所が沢山あるの」
「何だそれは、強化人間という事か？」

羅威の問いに神楽は答えたが、神楽はラースと目を合わせたっきり視線をそらす事はしない。
反対にラースの方は呼吸が乱れ、落ち着かない様子で銃を握り締めていた。
「違う……僕は違う！それ以上何も喋るなッ！」
「記憶を弄ったり、肉体を弄ったり。そういう事が嫌いよねぇ、ラースは」
「うるさい！僕は何もしてない！」
ラースの額からは何滴もの汗が頬を伝う、尋常じゃない焦り。
何かに追い詰められるかのような顔をしているラースに、羅威が声を掛けたが、返事は返ってこない。
「大丈夫、別に貴方を責めたりしないわよ。私だって同じ様な事してるから」
不敵な笑みを見せた途端、ラースの隣に立っていたレンがラースの銃の握る腕を足で蹴り上げる。
宙に浮いた銃をレンが軽々とジャンプしてキャッチすると、それを握り締め銃口をラースに向けた。
突然の出来事にラースも羅威も動けず、声も出ない。
レンは銃を握り締めたままゆっくりと後ろに下がり神楽の元へと向かう。
そして神楽の元に辿りついた瞬間、満面の笑みで神楽に抱きついた。
「お姉ちゃん！助けに来てくれたんだね！」
「ええ、そうよ。遅くなってごめんね、怖くなかった？」
「ううん、私は大丈夫。お姉ちゃんが助けに来てくれるって信じてたから！」
「レンちゃんは強いね、いいこいいこ」
優しくレンの頭を撫でる神楽に対し、ようやく口を開けたのは羅威だった。
「お前はその子の記憶を弄っているのか……？」
「そうよ、その方が幸せだからね」

「幸せ？偽りの記憶を与えて何が幸せだ」
「知らない方が幸せなのよ、子供のように……ね」
相変わらずレンは神楽に抱きついたまま離さず、この会話をレンは聞いていない様子だった。
「……なぁ、レンって名前。本当の名前じゃないんだろ？」
「そうね、この名前は私が付けてあげたけど」
「だったら教えてくれ、その子の本当の名前を……」
「別に良いわよ、この子の名前は玲、でも玲は1年前にこの世から消えた。そして新しくレンが生まれたの」
玲という名に反応を示した羅威は、咄嗟に首に掛けていたペンダントをぎこちなく外すと、それを神楽に投げつけた。
神楽は軽々とそのペンダントをキャッチすると、不思議そうにペンダントを眺める。
「その中にある写真を見てくれないか？」
言われるままにペンダントと開けると、そこには1枚の小さな写真が入っていた。
そこに映っている羅威と、その隣に立っている少女を見て、神楽の表情が変わる。
「驚いたわね……貴方が玲ちゃんのお兄さんだったなんて」
ペンダントと神楽は優しく羅威に向かって投げると、羅威はそれを何とかキャッチし自分の首に掛ける。
「運命って言葉を信じたくなったよ、こんな形で玲と再会するとは思わなかった。
そして、まさか玲が記憶を弄られているなんて思ってもいなかったッ！」
服の内ポケットから銃を取り出す羅威、だがそれと同時にレンが銃を拾い銃口を羅威に向けた。
「残念だけど、玲ちゃんはもうこの世にはいない。いるのはレンちゃん、貴方の妹じゃないの」
「黙れ、お前が玲の記憶を消したんだろ。玲を……返せッ！」

「だから言ってるじゃない、玲ちゃんはもうこの世にはいないって
替わりと言っては何だけど、良い事教えてあげる。私の言ってい
た捕虜はね、エリルって子の事よ」
神楽はそう言って後ろに振り返ると広間から出て行く、それを見て
いたレンも神楽の後を追う。
「おい待て！話しはまだ終わってないぞ！」
銃口を神楽の背に向けるが、神楽はそんな事お構いなしで広間から
出て行く。
結局羅威は神楽を撃つ事は出来なかった、ふと横を向けばラースが
その場で膝をついて座っていた。
ラースは無言のまま何も喋らない、それを見ていた羅威も言葉が出
ない、言葉よりさっきまでの出来事について考える事で精一杯だっ
た。
レンが自分の妹だという事、だが記憶を弄られている、それは捕虜
も同じ、だが捕虜はエリル、エリルは生きていた。
神楽の話しによると捕虜、つまりエリルは肉体強化や脳を弄られて
いる事になる、それを行なったのは……。
「ラース、これは一体どういう事だ。答えろッ！」
ラースは相変わらず黙ったままじっと床を見つめている、その態度
を見て羅威は足早にラースに近づくと胸倉を掴んだ。
だが羅威には掴む事で精一杯だった、腕に力が入らず持ち上げよう
としても上がらない。
「神楽という女は何なんだ！お前はエリルに何をしたんだ！？」
「違う、僕は……」
「ラースッ！」
その時、２階の方で何かの崩れる音が聞こえてくる。
すると２階から一人の男が１階に飛び降りてきた、その男の背中に
は少女が眠っている。
「甲斐斗！その血は……」
「俺は大丈夫だ、それより取引はどうだった？」

「取引自体相手はする気が無かったらしい。レンは俺達を裏切り銃を奪って帰っていったよ」
「まじかよ、赤城がそんな事するとは思わなかったが……」
「いや、ここに来たのは神楽という女一人だった」
「か、神楽？あんな厄介な女がここに来てたのか」
「それで、お前のその傷は……」
「ああ、ミシェルを狙う輩が現れてな。この町も安全じゃない、さっさと逃げる準備でも……」
甲斐斗が通路から出て行こうとした時、突然博物館が揺らぎ出す。
博物館だけではない、町全体が揺れている、この揺れの正体が地震でない事ぐらい、戦場に出た経験のある二人はすぐにわかった。
「おいおいこの長い揺れって……」
甲斐斗達のいる広間の床に亀裂が走り、大地が裂け始める。
天井に吊るされていたシャンデリアは大きな揺れと共に左右に動き、次々に広間に落ちていく……。

――これだけ地面が揺れ、上からは大きなシャンデリアが落ちてくるというのに、
ラースは状況についていけてないのか、やけに冷静な態度で立ち上がった。
俺はミシェルをおんぶしたまま片手を前に突き出し剣を出現させると、広間の壁をぶった切る。
壁にはぽっかりと穴が開き、甲斐斗はそこから外に出て行く。
羅威達もその穴から博物館の外へと出たが、外に広がっていた光景は変わり果てていた。
立ち並んでいた高層ビルは崩れ落ち、人々はわれ先にと危険だと思う場所から走って逃げていた。
その逃げる人間を追っては次々に食い殺していくＥＲＲＯＲ、Ｐｅｒｓｏｎ態。
残っている建物には至る所にＰｅｒｓｏｎ態が張り付き、道路には

あの黒いＨｕｍａｎ態の姿も見える。
こんな真昼間からＥＲＲＯＲが現れるとは誰も思っていなかっただろう、それも町のど真ん中に。
「っち、機体を呼んだがここに来るには時間がかかる。それまで何とか持ちこたえねえとな」
この町には勿論部隊が存在するＮＦの部隊だ、民間人を助ける為銃を持った兵士達が町に駆けつける。
何台ものギフツが広場のような所に集まり、人々を襲うＰｅｒｓｏｎ態を殺していく。
Ｐｅｒｓｏｎ態に捕まえられた子供、当然体を千切られて喰われる、子供の握っていた風船が空高く上がっていく。
足の遅い老人がＨｕｍａｎ態に捕まえられた、一瞬で頭をもぎ取られ、あっという間に食べられて消える。
町には悲鳴と奇声が響き、銃声と爆音がそれを消していく、既に町の面影は消えていた。
ここにいる人達は、まさか自分がこんな目にあうとは思わなかっただろう、今日もまたつまらない平凡な１日を送ると思ってただろう。
……良かったな、退屈な日常はもう戻れない。これからは生きるか死ぬかの戦いが始まる、もうお前達が思っていた平和は消えたんだ。
俺に気付いたＰｅｒｓｏｎ態が近づいてくるが、腕を伸ばしてきた途端に腕を切り飛ばし頭を吹き飛ばす。
本当気持ち悪い生き物、ＥＲＲＯＲは何処で生まれ、何故世界を滅ぼすのか、俺は考えた事が無かったな。
まぁ化物なら他の世界にも沢山いた、体の細胞を変化させて色々な人間に成済ます化物。
体から触手を伸ばし人間を殺していく化物、ようは人間じゃない生き物は大抵化物になる。
怪物とか化物とか、人間から見ればそう見えるかもしれないが、逆に怪物や化物から人間を見れば、一番醜い生き物なのかもしれない。
「甲斐斗、ここは危険だ。安全な場所に行った方が……」

羅威が言葉を止めて俺の後ろを見ている。
後ろに振り向けば一匹の獣が俺の元へ走ってくる、Ｂｅａｓｔ態か。
犬に負ける気はしないがでか過ぎる。
「お手！」
とか言ってお手をする程利口な犬でない事ぐらい見てわかる。
ミシェルをおんぶしているから多少動きにくいが、やるしかなさそうだ。
俺は剣を構えＢｅａｓｔ態を待ち構えようとした時、１機のリバインがそのＢｅａｓｔ態をＬＲＢで斬り捨てる。
見覚えのある武器に、赤いリバイン。間違いなく赤城だ。
「赤城！お前もここに来ていたのか！」
赤いリバインは俺の方に近づいてくると、機体から赤城の声が聞こえてきた。
『甲斐斗、何故お前がこんな所にいるのか知らんが、早く安全な場所に向かえ』
「ありがとう、助かるよ。お前も神楽と一緒でレンを助けに来たのか？」
『そうだ、だが博物館に入ろうとした時神楽に言われて博物館の入り口で見張りをしていてな』
波のように迫り来るＰｅｒｓｏｎ態に気付いた赤城はＬＲＢを背部に戻すとアサルトライフルを取り出し引き金を引いて一掃していく。
だが数が多い、赤城以外のＮＦの部隊もＥＲＲＯＲと戦っているが次々にＥＲＲＯＲの餌食になっていく。
その時、赤城の乗るリバインの足元が突然崩れ落ち、地中へと姿を消した。
「赤城！？」
地中からすぐさまリバインが飛び出して来るが、地面からは何十本もの触手が伸びていく。
触手はリバインの両足に絡みつくと、地中に引きずり込もうと引っ張り始める。

リバインはアサルトライフルで触手を切ろうとしたが、強引に両足を引かれ体勢を崩してしまい、そのまま地中へと引きずり込まれそうになるが、
１機の赤い機体が突如現れるとリバインの足に絡み付いている触手を握り締めると強引に引っ張った。
その機体の力で地中から巨大なＷｏｒｍ態が引きずり出されると、赤い機体は拳を輝かせながらＷｏｒｍ態の頭部を拳で貫いた。
赤鬼だ、なんでこんな所にＳＶの奴がいやがる。見た所ＳＶの機体はあの赤鬼しかいないが……。
『お前はＳＶの、どうしてここにいる！』
『俺は……俺は何故ここにいる、ＥＲＲＯＲを、倒す』
そう言うと赤鬼は逃げ惑う民間人を踏み散らしながら次々にＥＲＲＯＲを殺していく、もはや人は眼中に無い。
一体どうしたんだ愁は、無闇に人殺しをする人間ではなかったはずだが……。
俺の眼の前に黒い機体が現れると跪いた、ようやく俺の機体が来た訳だ。
機体の手の平に乗ると機体は勝手にコクピットまで俺を運ぶ、さて、ミシェルには起きてもらうか。
「ミシェル起きろ、戦闘だ。しっかり掴まっとけ」
「う、うん……」
まだ眠たそうなミシェルは操縦席の横に座ると操縦席にしっかりと掴まる。
ミシェルがいる以上無理な戦闘は出来ないが、そこら辺にいるＥＲＲＯＲをぶち殺す事ぐらいは容易い。
にしてもＥＲＲＯＲの数が半端じゃない、地面の穴や亀裂からは次々にＥＲＲＯＲが溢れ出してくる。
「赤城！ＥＲＲＯＲは俺と愁に任せてお前は逃げ遅れた民間人を助けに行ってこい！」
「わかった、この場は頼んだぞ」

赤いリバインが博物館から離れ、まだ人が逃げ遅れている場所へと飛び立つ。
愁は相変わらずＥＲＲＯＲを殺しまくっていた、前より動きにキレがある、次から次へと片っ端からＥＲＲＯＲを殺しに向かう赤鬼。
ん、レーダーに反応有り。これは……ＢＮの機体？
羅威とラースの前に２機の機体が現れた、１機は黒い機体、もう１機は金色の機体だった。
『二人とも無事で良かった、ラースさん、頼まれていた機体を運んできましたよ』
「ああ、ありがとう。羅威、あの機体に乗って戦えるかい？」
「俺は大丈夫だ、戦える」
『ラースさんは一度僕と共に艦に戻ります、この場は羅威さんに任せますね』
黒い機体はハッチを開けるとラースに手を指し伸ばし、ラースが手の平に乗ると操縦席まで引き寄せる。
そしてラースが機体の中に入るとハッチが閉まり、その場から飛んでいなくなる。
残された黄金の機体に乗り込む羅威、あれがアイツの機体らしいな。
「カッコイイ機体じゃねえか、名前はなんて言うんだ？」
機体名が知りたくて通信してみると簡単に返事が返ってきた。
「神威だ、それよりあの赤鬼は何処に行った」
「あのビルを跳び越えて向こうに行ったと思うけど」
「あのビルの向こうかッ！」
羅威はそう言って機体を走らせると、俺の機体が指差した方向へと姿を消した。

――――「微量の電流で、まさか俺の腕がここまで動かせるようになるとはな」
神威の乗った羅威は次々に瓦礫を跳び越え、鬼神を探しに向かう。
途中ＥＲＲＯＲの姿が見えると手の平からプラズマ弾を放ちＥＲＲ

ＯＲを吹き飛ばしていく。
「既にエネルギーの補給をされた後か、ラースは軍になんて連絡していたんだ……。
　まぁいい、後でゆっくりと話せばいいだけだ」
その時、Ｂｅａｓｔ態の首を持った鬼神が視界を横切る、紛れも無い赤鬼だ。
「見つけたぞ……赤鬼ッ！」
移動する鬼神に向かって右手からプラズマ弾を放つが鬼神は難なく攻撃をかわす。
今までＥＲＲＯＲを殺すのに手を止めなかった鬼神はその場で泊まると、自分に攻撃した機体を睨みつけた。
「今度こそお前を殺す、皆の為に、お前だけはッ！」
鬼神は手に持っていたＢｅａｓｔ態の首を投げ捨てると、神威の元へと走り寄る。
神威は両手を重ねると、周囲に雷光を煌かせながら両手を少しずつ広げて行き、巨大なプラズマを発生させる。
鬼神をギリギリまで引き付けた後、その両手を勢い良く前に突き出す巨大なプラズマ砲を放つ。
プラズマは鬼神の足元の地面に当たると爆発し、辺りに爆煙が立ち込める。
「まだ死んでないはずだぞ！姿を見せろッ！」
その言葉の通り鬼神は煙の中から拳を構えながら神威の目の前に現れた。
神威はすぐさま後退するが鬼神は距離を離さず神威に迫ると、鬼神は右腕を神威の胸部へと伸ばしてきた。
「させるかぁッ！」
神威の右腕に膨大な電気が流れ、瞬時にプラズマを手の平に作るとそれで鬼神の右腕を弾く。
だが鬼神は右腕が弾かれたのを利用して機体の回転させ、その遠心力を使い右足を伸ばす。

回し蹴りを受けた神威は何とか持ちこたえたが、鬼神は綺麗に着地した後地面を強く蹴り上げ神威の背後に回る。
「クソッ！速すぎる……！」
羅威も負けず劣らず機体を回転させ回し蹴りをしたが、鬼神は簡単に受け止めると神威の足を持ったまま回転し始める。
そのまま鬼神は手を放すと神威はまだ崩れていない高ビルへと投げ飛ばされ激突した瞬間一気に崩れて落ちた。
瓦礫に埋まり動く気配が無い神威、鬼神は止めを刺そうと神威目掛けて跳んで行く。
そして神威の胸部を貫こうと腕を振り上げた時、無数のレーザー砲が鬼神目掛け放たれた。
その攻撃も難なくかわす鬼神、よく見れば1機の青白い機体が鬼神の前に立ちはだかった。
「何をやっているんですか！今はＥＲＲＯＲを倒すのに専念してください！」
フェリアルからの通信でレンの声が鬼神に乗る愁に聞こえてくる、すると愁は分かったのか、小さく頭を下げるとその場から姿を消した。
恐らくＥＲＲＯＲを倒しに行ったのだろう、フェリアルは神威の上に乗っている大きな瓦礫をのけると、
神威の手を握り締めて勢いよく引っ張り、何とか機体を立たす事が出来た。
「羅威さん、大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫だ。それよりお前は何故ここに……」
「私の機体を赤城隊長が持ってきてくれてたんですよ、だからそれに乗って……」
「そうか、それであの赤鬼は何処に行った？」
「ＥＲＲＯＲを倒しに別の場所へ向かいました、私達もＥＲＲＯＲを倒しに向かいましょう！」
目の前にいるのは玲ではなくレン、今は余計な考えは無しで戦う事

に真っ当した方が良いと考えた羅威は頭を2、3回横に振ると操縦桿を握り締めた。
「……わかった、今はその方が良さそうだな」
今この状況ではＮＦ・ＢＮ・ＳＶ、共に争っている場合ではない。
町に溢れていたＥＲＲＯＲは甲斐斗の乗る『魔神』と、愁の乗る『鬼神』が一掃していく中。
羅威の乗る神威と、レンの乗るフェリアルも次々にＥＲＲＯＲを殺していく。
赤いリバインと、軍のギフツやリバインは逃げ遅れた民間人を助け出し、被害を最小限に抑えようとしていた。
「ＥＲＲＯＲの数が少なくなってきている、このまま行けばもうじき戦闘も終わるな」
赤城がそう言いながら甲斐斗の乗る魔神の元にたどり着く頃には、町中ＥＲＲＯＲの死体で溢れ返っていた。
「んでも、何で今になってこんなにＥＲＲＯＲが出てきたんだ？」
甲斐斗はまだ息のある死に損ないのＷｏｒｍ態に剣を刺し込んで止めをさすと、剣を地面に突き刺しレーダーに目を向けた。
「さあな、だがＥＲＲＯＲには知能がある。この場所にこれだけのＥＲＲＯＲが来た理由が必ずあるはずだ」
「赤城少佐、こっちは終わりました」
レーダーにＥＲＲＯＲの反応が消えたのか、レンと羅威が甲斐斗達の元に帰って来る。
赤城はすぐさまレンと通信を行なう、赤城は安心したような顔でレンを見つめていた。
「レン、無事で良かった」
「赤城少佐……心配かけてすみませんでした。懲罰の覚悟は出来ています」
「そうだな、帰ったらたっぷり説教してやる。覚悟しておけ」
どうやら戦いは終わったらしく、銃声が聞こえたり爆発の起こる音などは聞こえてこない。

「さーってと、戦いは終わった。羅威、ＢＮの基地まで案内してもらうぞ」
「ああ、わかっている、だがもう一度レンと話しが……」
その時、町にいた機体のレーダーに一つの反応が示された。
高エネルギー反応、恐らく機体であろう、しかし何処の機体だ、ＮＦか、ＢＮか、ＳＶか。
反応は甲斐斗達にいる場所のすぐ前からだった、しかし地上には何もないし、誰もいない。
咄嗟に甲斐斗は回りにいた赤城や羅威、レンに一斉に呼びかける。
「お前等！地下から高エネルギー反応を確認！戦闘準備しとけよ！」
甲斐斗の声に全員が反応のある場所に機体を向かせて戦闘態勢に入る。
魔神は黒剣を構え、リバインはＬＲＢを構える、フェリアルはフェアリーを自分の周りに飛ばし、神威は両手にプラズマを溜めていた。
「っへ、この面子なら負ける気がしねえな」
これだけ優秀なパイロットが揃っていれば甲斐斗の気持ちもわかる。
「油断をするなよ、甲斐斗」
だが赤城は冷静に敵を待ち構えていた、エネルギー反応が段々と近づいてくるにつれて操縦桿を握る力が強くなる。
地中から突如巨大なレーザーが飛び出し、地面に巨大な穴を開ける。
その強烈な閃光で視界を遮られ、上手く前が見えない。
光りが消えて少しずつ目蓋を開いていくと、４人の前には１機の機体が現れていた。
茶色い装甲をしており、肩には巨大な大砲が装備され、両手にはそれぞれ１本ずつ刀が握られている。
「何だあの機体は、ＥＲＲＯＲではないみたいだが……」
羅威が機体を確認してみる、茶色い機体は動かずにこちらの様子を窺っているようだ。
「甲斐斗、どうする、奴を攻撃するのか？……おい甲斐斗、どうした、返事をしろ」

羅威が幾ら呼びかけても甲斐斗は返事をしなかった、いや……しないと言うより、出来なかった。
羅威を除く三人には見覚えがあった、茶色いコーティングされ、肩には大砲付いてて、２本の刀を握り締めているその機体を。
「大和……だと……」
赤城の口から言葉が漏れる、あの時、ＥＤＰで消えたはずの大和が今目の前に立っている。
機体は無傷の状態であり、おかしな所など何処にも見当たらない、正真正銘の大和が今ここにいるのだ。
「武蔵なのか……？」
続けて赤城は口を開く、それも大和との通信を繋げてだ。
映像は映らない、音声のみ、大和が無傷でいるのであれば、大和に乗っているパイロットは、もしや……。
しかし、通信を試みるもののパイロットは何も答えない。
「武蔵！返事をしろッ！お前なんだろ？その機体に乗っているのは武蔵、お前何だろ！？」
その時だった、大和の右肩に備え付けられている大砲の先が光り輝き始める。
リバインは武器をその場に捨てると、大和の方に歩いていく。
「武蔵、お前は帰ってきたんだよな……私達の元に……」
「あの機体何かぶっ放す気だぞ！全機あの機体から離れろ！赤城！お前も早く！！」
甲斐斗の怒鳴り声がレンと羅威に聞こえた、二人の機体はすぐさま大和から離れるが、赤いリバイン離れる事無く歩き近づいていく。
「武蔵、武蔵……」
赤城が手を伸ばす、そこには大和が、武蔵がいると信じて。
「おい！離れろって言ってんだろがッ！」
すぐさま機体を動かし甲斐斗の機体が赤いリバインを強引に捕まえると一気に大和から離れていく。
その瞬間、大和の右肩の大砲に溜められていた力が放たれた。

今まで見た事の無い巨大なレーザー砲は一瞬にして町の半分を飲み込み、巻き込んだもの全てを破壊した。
ビルの残骸や瓦礫、川や公園、全てが吹き飛ばされ、跡形も無く消えている。撃ち終えた射線上に広がるのは焦げた土だけだった。
「何なんだあの機体は……たった1撃で町を……」
羅威にとっては初めて見る機体だが、その威力と火力には度肝を抜かれた。
「あれは伊達中尉が乗っていた機体、どうしてこんな所に!?」
大和の一撃が町を壊滅させた事にレンも戸惑っていた、もし大和に乗っているのが武蔵であれば、こんな事は絶対にしない。
「ただ一つハッキリとわかる事があるな」
赤いリバインを安全な場所に下ろすと、甲斐斗は大和の方に機体を向けた。
「あいつは……敵だ」

――博物館は瓦礫の塊となっていた、その瓦礫の上には一人の女性と、一人の青年が立っている。
「少しは面白くなってきたね、この世界も」
男性の口は微笑んでいるが、目は笑っていない、その真っ直ぐとした目は崩壊した町を眺めている。
その隣にいる女性は崩壊した町ではなく、甲斐斗達の様子をじっと見つめていた。
「アビア、この世界好きー」
「僕も好きだよ、だからもっと好きになる為に変えていこう。世界を」

第５０話　異人、目覚め（後書き）

お陰様でＤｅｌｔａプロファイルは無事５０話を迎える事が出来ました。
これも読者様がいてくれたから頑張って書く事が出来ました。
５０話まで作品を読んで貰えて私もとても嬉しいです、ありがとうございます。
感想・評価等も募集していますので、気軽に書いていってくれると嬉しいです。

第５１話　数、阿吽（前書き）

初めに。
８１日もの長期間も小説を放置してしまい読者の方に大変ご迷惑をおかけしました。すみません。
しかし、改めてまた小説を再会させてもらおうと思います。
更新速度は遅いかもしれませんが、無事完結させるよう続けていきたいと思います。

第５１話　数、阿吽

――俺達の前に現れた1機の機体、それは紛れも無く伊達武蔵が乗っていたはずの『大和』だった。
大和は俺達に攻撃を仕掛けたって事は奴は敵、だとしたら倒すしかないが……。
「甲斐斗、あの機体を知っているのか？」
羅威からの通信が入る、知っているも何も、共にＥＤＰを戦った機体、英雄と言ってもいいぐらいだ。
「ああ、あれはＮＦの機体。だがＥＤＰの時に破壊されたはず……」
壊れたはずの機体が存在し、俺達の前に『敵』として現れた、この状況に一番動揺しているのは間違いなく赤城だろう。
俺は赤城と通信を繋ぐと、案の定赤城は驚いた様子でじっと大和の様子を見つめていた。
「赤城、ハッチを開けてくれ」
「何故だ？」
そう言いながらもハッチを開けると、俺も機体のハッチを開けて後ろに立っているミシェルを抱かかえる。
そしてリバインの操縦席に飛び移ると、抱えているミシェルを赤城に渡した。
「お、おい！どういう事だ、説明しろ」
「お前あの機体と戦えるのか？戦えないだろ、だったらミシェルを連れてこの町から出てくれ」
ハッキリと言ってやったが、俺の言っている事は何も間違ってない。
赤城も何か反発してくると思ったが、今の自分の心境をわかっていたのだろう、何も言わずに小さく頷いた。
それを見ていた俺も自分の機体に戻ろうとした時、後ろから赤城に呼び止められた。
「甲斐斗、あの機体に乗っているのは……武蔵なのだろうか……」

「わからない、だから今。それを確かめに行く」
俺だってわからない、むしろ聞きたいぐらいさ。
自分の機体に戻り再度機体を確認する、どう見たって大和、しかも無傷の状態だ。
「羅威、レン、あの機体は俺達に攻撃を仕掛けた、つまり敵だ。戦えるか」
「俺は大丈夫だ、あの機体を野放しにする訳にはいかないからな」
「私も大丈夫です、大和に乗っているのは伊達大佐ではありません、きっとアレは大和に似せた機体……！」
それも有り得る、ＢＮかＳＶ、以外にＮＦが量産機として開発……いや、あれ程の機体を量産できるはずないか。
ふと画面左上のレーダーを見てみると、１機の機体が大和の後ろから急接近してきていた。
鬼神だ、大和の背後を狙うように接近していき、一気に飛びかかる。
それに気付いたのか、大和が後ろに振り返ると、既に鬼神は大和の目の前に立って拳を振り下ろそうとしていた。
今から避けるには遅すぎる、鬼神は大和の胸部を狙い拳を突き出す。
すると大和は右腕を少し動かすと、鬼神が突き出した腕を横から簡単に弾き、その拳を交わす。
だが鬼神は拳を弾かれた後、踏み込んだ足を軸に機体を回転させて回し蹴りを繰り出した。
しかし大和はその蹴りをも予測していたかのように腕を小さく振り上げると軽々と回し蹴りを受け止める。
それから鬼神の攻撃は更に続いていくが、大和はその場から動く事無く鬼神の拳と蹴りを交わし、弾いていく。
無意識に俺達三人はその光景をじっと見つめて、戦いの行く先を見守っていた。
大和の動き、鬼神の動き、本当に人間が操縦しているのかわからないような鮮やかで、機敏な動きをしている。
あれ程の操縦が出来るとなると、やはりあの機体に乗っているのは

……。

レーダーに反応、モニターを見てみればさっきまで大和と戦っていた鬼神が姿を消していた。

レーダーを見ると鬼神が町からどんどん離れていくのがわかる、どうやら負けたようだな。

にしてもあの鬼神ですら大和に攻撃を与える事が出来なかったとは、やはりあの機体に乗っている人間は伊達なのか？

「さて、今度は俺達三人の番だ。行くぞお前等」

俺の声と共に隣にいた2機が動き始める、いくら相手が強かろうがこの3機からの集中攻撃には耐えられないはずだ。

「私が援護を行ないます！あの機体の隙を作るのでそこを狙ってみてください！」

フェリアルから六つのフェアリーが一斉に放たれると、レンの操作で次々に大和の周りを囲みだす。

そして順番に六つのフェアリーが次々に大和に向けてレーザーを放ち、敵に揺さぶりをかけようとしたが、

大和は腰に付いてある2本の刀を鞘から抜き取ると自機に飛んで来る攻撃を全て切り払っていく。

その場から1歩も動かず、ただただ刀を振り回し、いとも簡単に攻撃を弾いていくが、それが唯一の隙とも言える。

「羅威、左右から同時攻撃を行なうぞ！」

「ああ、任せろ！」

俺と羅威は同時に機体を発進させると、挟み撃ちを仕掛ける、俺は再び剣を自機の手に呼び戻すと、一気に大和に向かって加速を始める。

羅威も同じく機体の両手にプラズマのようなものを溜めている、それを大和にぶつける気だろう。その頃大和はレンからの攻撃をただひたすら刀で弾いていた。

「やるなら今しか無えッ！」

俺は大きく剣を振り上げると、その場に留まり続ける大和に向けて

振り下ろした。
羅威も同様にプラズマを溜めた右腕を大和に向けて突き出す。

……ああ、そうさ、物事考えたように上手く進むわけ無い、そんな事は誰だって知っている、わかっている。
だからってな、ここまで想像以上の事が起きると、もう驚くことしか出来ないんだよ。
振り下ろした剣、突き出された拳、二つの同時攻撃は2本の刀によって受け止められていた。
そして援護攻撃を行なっていたレンの機体は、煙を上げてその場に跪いている。
大和の右肩についている大砲の先から煙が漂う、恐らく俺達が飛びかかった瞬間レンに向けて砲弾を放ったのだろう。
俺達の機体はピクリとも動かない、大和も同じだ、俺の巨大な剣をあんな細い刀で受け止められるはずがないのに……！
一旦距離をとろうと俺は大和から離れようとした時、大和に手に握られている刀が微かに動いた瞬間に
剣を持ったまま斬りおとされる右腕、同様に羅威の乗る機体の腕も斬りおとされていた。
こいつ……いつ刀を振りやがった、俺には何も見えなかったぞ。
俺と羅威は一度大和から離れるが、大和は俺達を追って来る事は無かった、自分の立っている場所から一歩も動かず、3機の機体を支障を与えやがるとはな。
だがまだ負けちゃいねえ、機体に支障はあるがまだ動ける、それに動いてこないのなら近づかなければいい。
「お前等まだ動けるよな?今からあの機体に集中砲火を……っ！?」
レーダーにＥＲＲＯＲの反応有り、しかも超巨大だ、この町を覆い隠す程の大きさ、まさか……。
町を分断するかの如く地面には一直線に亀裂が入っていく、赤い触手が次々に亀裂から飛び出る中、町の中心には一本の赤い木が聳え

立った。
見た事があるぞ、俺は。ＥＤＰの時に現れた植物だ。なんでこんな奴が今ここに現れたんだ？
「あ、あれはＰｌａｎｔ態……どうしてこんな所に！？」
レンの呟いた台詞は俺の耳にも届いた、『Ｐｌａｎｔ態』か、聞いた事の無いＥＲＲＯＲだ。
多分ＥＲＲＯＲの中では最大級で間違いないだろうな、このデカさ半端じゃねえ。
って、冷静にあれこれ考えてる場合じゃねえだろ！？
「羅威！レン！全力でこの町から離脱しろ！こんな化物相手にしてられるかッ！」
「言われなくても離脱する！甲斐斗、お前の機体にＢＮの基地の場所を送っておく、町から離れた後ここに来てくれ」
羅威から送られてくる基地のデータ、町から離れた後ここに行けばいいって事か。
レンと羅威が町から離れていく、回りを見渡せば人影はもう何処にも無い。
赤城に町から離れておけと言っておいて正解だったな、それに民間人の避難も既に済んでいる。
後は俺達がこの町から逃げればそれで……。
俺がｐｌａｎｔ態に背を向けその場から離れようとした時、ふと大和の方に機体を向け直すと、大和はその場に立ったまま俺を見つめていた。
逃げる様子も無く、戦う様子も無い。そもそもこの機体は何をしに来たんだ、俺達に一撃放ったっきり全然攻めてこようとしてない。
俺はふと大和に通信を試みた、スピーカーから聞こえてくる音、静かな音、無音だ。
通信モニターには真っ暗、相手に俺の姿は映っていると思うが……。
「その機体に乗っているのは伊達か？」
……沈黙が続く、返事は返ってこない。大和の後ろにはＰｌａｎｔ

態が大きく触手を広げ、今にも俺達に襲い掛かろうとしていた。
ＥＲＲＯＲと共に現れた大和、まさか大和を動かしているのは伊達ではなく、ＥＲＲＯＲなのか？
そんな考えが頭に浮かんだが、あの大和の動きをＥＲＲＯＲが真似出来るか？あんな化物が、こんな動きを。
大和を動かしているのがＥＲＲＯＲだと俺は信じたくないだけかもしれない、だが信じるも信じないも俺の勝手だ。
静かに通信の電源を切った俺は機体を走らせこの町から離れていく。
また謎が増えた……謎を消そうと動けば動くほど謎が増えていく。
俺はどうすりゃいいんだよ。
とりあえず羅威に教えられた所に向かおう、そこで一つぐらい謎が消えるかもしれない。

――どれぐらい機体を走らせただろうか、俺はようやくＢＮの基地らしき場所へと到着した。
どうやら俺が来る事は既に知っていたのだろう、基地の周りにいた兵士達は俺を格納庫まで案内してくれた。
格納庫に入ると横には何台もの我雲が立ち並んでいる、そして前には白い服を身に纏った男、風霧紳と、その周りには何人ものＢＮの兵士が立ち並んでいる。
あの男がこの中で一番偉い奴か？とりあえず機体から降りるとするか。
機体のハッチを開けた俺はワイヤーに掴まりゆっくりと地面に降りる、どうやら歓迎はされて……なさそうだな。
俺が地面に降りた途端に横に立っていた我雲が一斉に俺の機体に向けて銃を構え、紳の周りにいる兵士達も一斉に俺に銃口を向ける。
兵士達の中に羅威とラースの姿が無い、
「久しぶりの再会にそりゃねーだろ。まぁあんたから見れば俺は疫病神かもしれねえがな」
軽くジョークを言ってみたつもりだったが、冷たい視線しか飛んで

来ない。
紳は無言のまま前に出ると、その鋭い目で俺と目をあわし、口を開いた。
「甲斐斗、あの子をこちらに渡してもらおうか」
ん？あの子……？
「貴様と共に行動している青髪の少女だ、今操縦席にいるんだろ？」
……最低だな、俺。色々あったせいでミシェルの事を忘れてた。よし、今から迎えに行こう。
「残念だがミシェルはここにはいない、多分ＮＦの所にいるから今から迎えに行ってくるわ」
そう言って機体に戻ろうとした時、銃を構えた兵士達が一斉に俺に狙いを定めてくる。
「……駄目か？」
「駄目だ」
ああそうかい、にしてもミシェルを置いてきたのは不幸中の幸いだったのかもな。
ＢＮの奴等はミシェルを捕らえるつもりだ。
生憎ミシェルは赤城の元にいる、赤城ならミシェルを危険な目には遭わせないだろうし、しっかり守ってくれるはずだ。
それにしても、少しは歓迎してくれると思いきや……ＢＮは思っていた程友好的な組織じゃないみたいだな。
「それで、俺をどうする気だ？捕らえる気か？」
捕らえられるのは慣れっこさ、さぁ手錠でもして牢屋に入れてくれたまえ。
「いや、消えてもらう」
銃を持った兵士達が紳の前に出てくると横一列に並び俺に銃口を向ける、どうやらマジで俺を殺すみたいだ。
「おいおい、俺に興味無いのか？何か聞きたい事とかあるだろ？」
「無い」
「俺は有る、お前に聞きたい事が沢山あるんだよ。話してくれねえ

か？」
俺は剣を瞬時に出現させ、その刃先を紳に向ける、敵兵士は俺を囲んでいるが俺は機体に背を向けている状態。
上手く機体に乗り込むか、それとも機体の足を盾にして少しずつ兵士供を殺すか。
「おかしな力だ、貴様はＥＲＲＯＲの類か？」
「あんな下等生物と一緒にするなよ、俺は最強の男だぜ？」
「そうか……撃て」
兵士達が引き金に指を掛ける、撃たれる前に先制攻撃を仕掛けてやるよ！
俺が剣を振りかざし銃を向けている兵士に飛びかかろうとした時、格納庫内に一人の少女の声が響いた。
「お止めください！」
突然格納庫に現れる女性、見た事のある顔、たしかＳＶの町にいた時にモニターに映っていた女性、風霧唯。風霧紳の妹だな。
「お兄様、何故この方を殺すのですか。彼はＥＤＰでこの世界の為に戦った英雄！それなのに……」
「奴がいると確認された場所では全て戦闘が起こる、災いを齎す化物。早めに始末するのが妥当だろう」
「この世界では争いは多々あります、それに彼はＢＮに直接危害を加えた事はありません」
たしかに俺が戦った事のあるのはＮＦとＳＶ、ＢＮの奴等とは戦闘をした事は無い。
女性は俺の方を見ると足早に俺の元に歩み寄る。
そして俺の前に立つと後ろに振り向き紳の方に見つめなおした。
「彼を殺すのであれば、彼の命は私が貰います、行きましょう」
女性は俺の手を握るとまた足早に歩いて行ってしまう、兵士達はただ呆然とその様子を窺っていた。
何事も無く俺は格納庫から出ることが出来た、すると俺の手を握っていた女性は俺の手を放すと大きく溜め息をついてホッとした様子

をしていた。
「良かった、お兄様に止められると思いましたけど、見逃してくれましたね」
「いいのか？こんな事して、紳の言う事も強ち間違ってないぞ」
「良いのです、貴方の力はこの世界の平和の為に必要不可欠、それに私、一度貴方と話してみたいと思っていました」
「自己紹介がまだでしたね、私の名前は風霧唯と申します。貴方の名前は……」
「甲斐斗だ、よろしくな」
どうやら話しのわかる奴がいてくれたみたいだ、助かったな……。
俺が手を伸ばすと、唯は笑顔で俺の手を握って握手をかわしてくれた。
何処と無くユイと似ているな、名前は同じだけど。
「立ち話も悪いですし、私の部屋でお話しましょう」
そう言われて俺は唯の後についていくと大きな扉の前にたどり着く。
唯が扉を開けて部屋の中に入っていく、俺も半開きの扉を開けて部屋に入っていく。
まさに皇族の部屋だ、こんな基地にこんな部屋があるとは誰も思うまい。
部屋には女神の石像が立っており、壁には大きな絵が飾られている。
人に翼が生えた天使が一人の女性の周りを飛んでいる絵、神秘的で何とも空想めいた絵だろうか。
それにしても驚いたな、ＢＮは神を好んでないと思っていたが、まさか皇族である彼女がこんなものを……。
部屋の壁際にあるテーブル、その白く綺麗なテーブルには二つの椅子があり、その一つの椅子に唯が座る。
すると隣の部屋からお盆にティーカップ等を乗せて唯の元に向かうメイド、辺りを見渡してみるが警護の人間等がまるで見当たらない。
俺は椅子に座ると早速その事から話してみた。
「護衛係が少なすぎないか？皇族の人がこんな薄っぺらな警護でい

いのかねぇ」
「それは私が頼んでいるからです、自分の部屋では一人でゆっくりとしたいので」
「でもそれを狙って誰かが殺しに来たりするぞ、例えば……俺とか」
俺がそう言うと唯は口元に手を当てクスクスと小さく笑いだす。
「面白い冗談ですね、甲斐斗様はどうしてここに来たのですか？」
「俺は羅威っていう奴に呼ばれてここに来たんだよ」
「羅威さん……知っています。お兄様のお友達ですよね、彼に呼ばれてここに？」
「そうだよ、なのに来てみるとあの有様だぜ？」
「そうだったのですか……大変無礼な事をしてしまい申し訳ございません……」
唯は俺に頭を下げてくるが、別にこの人が悪い事した訳じゃないんだし、そんな頭を深々と下げなくてもいいんだが。
「いやいや、別に君が謝らなくてもいいって。頭上げてくれ」
「いえ、お兄様の行なった無礼を許してもらうまでは頭を上げません」
「わかった許す！だから本当謝るとか止めてくれないか？」
やれやれ、それ程兄が大事なのだろうか、俺も人の事言える立場じゃないけど。
唯は下げていた頭をゆっくりと上げると本当に申し訳無さそうな顔をして俺を見つめてくる。
「そ、それよりさ。話しがあるんだろ？俺で良ければなんでも話すけど」
「本当ですか！？ではまず質問ですけど、好きな食べ物はなんですか？」
カップを持っていた俺の手の動きが止まる、何かもっと他に聞く事があるんじゃないのか？
唖然としている俺を見て唯はまた小さく笑っている。
「冗談です、甲斐斗様って面白い人ですね」

俺何も喋ってないんですけど、てかさっきから様って言われてるんだが。まぁいい、とりあえず話しを進めるか。
「てか、どうして俺が危険だと思わないんだ?俺の噂は知っているはずだぞ?」
「はい、甲斐斗様の事は前々から世界で噂されています。正体不明の機体『M，D』は神出鬼没で戦場に現れ、災いを呼ぶ、と」
いつの間にか俺の機体はM，Dになってたようだ、何かの頭文字でもとったのだろうか。
「災いを呼ぶって……本当俺酷い言われようだな」
正直へこむぞ、俺だって生きる為に精一杯戦ってるだけなのに……。
「悪い噂だけではありません、良い噂もあります。甲斐斗様はＥＤＰにも参加して、その時神秘的な力で我々人類を勝利に導いたんですよね」
「別に俺はＥＤＰで何もしてない、それに勝利に導いたのは俺じゃなくて伊達っていう男だ」
「はい、たしかにＮＦの方々も頑張ってくれました、ですが私は甲斐斗様が居なければＥＤＰは達成できなかったと思っています」
隣の部屋からメイドが何かの画面のついた装置を持ってくると、それを俺達のいるテーブルの上にそっと置く。
メイドは深々と頭を下げた後、また隣の部屋に戻っていく。何だこの機械は、俺に何か見せる気だ。
唯はその機械の電源をつけるとボタンを押して何かをいじっている、そしてその機械の画面を俺に向けてきた。
「これを見てください、甲斐斗様のご活躍は全て知っています」
画面を見てみると俺の機体が黒剣を振り回し迫り来るＥＲＲＯＲを蹴散らしている映像が映っている。
これは俺が火傷をしていた頃の映像だ、俺がその映像を見ていると、今度はまた別の映像が映りだす。
今度は俺がＳＶの奴等と一緒に逃げた頃の映像が映る、あの赤鬼と俺が戦っている映像だ、まさかこれまで撮られていたとは……。

「そして、これが私のお気に入りです」
俺の見ていた映像がまた別の映像に変わる、画面には1機の黒い機体が急上昇した後黒く輝く陣のようなものが機体の足元に幾つも形成されていく。
その機体が剣を一振りすれば回りにいるＥＲＲＯＲがまるで塵のように吹き飛ばされていき、
右腕を突き出せば黒い光が雷光を纏いながら放たれ一瞬にして射線上のＥＲＲＯＲが掻き消されていく。
……これは俺か、たしかにあの時力を取り戻したのは憶えているが、これ程までに力を振るっていたのは知らなかった。
俺は力を取り戻したはず、なのに気が付けば力は消えていた……わけわからん。
本来ならこの力を常に使えるはずの俺が、何故力を制限されなければならない。
っと、一人で悩んでいると俺と画面の間に唯が顔を覗かせてきた。
「どうです？すごいですよね！私はこの力を見てとても感激しました」
俺を怖がったりするかと思いきや、あの力を見て感激しただと？
「俺が怖くないのか？あんな人間離れしたおかしな力を使うこの俺が」
「怖くありません、甲斐斗様の力は神様のお力なのですから」
満面の笑みで俺を見つめてくる唯、だが俺の顔は笑っていなかった。
だが面白い冗談だと気付いた俺はつられて笑おうとした時、彼女は更に話し続けた。
「甲斐斗様は神様の化身、甲斐斗様はこの世界を平和にする為にこの地に下りた神様ですから」
目を見てやっとわかった、唯は冗談で言ってない、本気で俺の事を神だと思っている。
散々化物は悪魔と言われてきた俺だったが、まさか神と言われるとは思いもしなかった。

「一応聞いておく。本気で言ってるのか？」
「勿論です、私の祈りが天に通じ、甲斐斗様がこの世に舞い降りたのですから」
……しっかし、まさか、ここまで真面目に言われるとさすがの俺も少し戸惑う。
ＢＮの皇女が宗教の人間とは知らなかった、妹はこうなら兄も神とか信じてるのだろうか……。
何て言っていいかわからない俺はとりあえずゆっくりと立ち上がり、窓際の方に向かって歩いていく。
後ろから唯の足音がついてくる、部屋にいるんだから別についてこなくてもいいのに。
丁度が日が差し込む窓の前俺は立った時、部屋の扉が突然開くと数人の兵士と白いマントを靡かせる紳が部屋に入ってきた。
「お兄様！？」
「唯、気は済んだか」
紳の冷静な声がさっきまで笑っていた唯の笑顔を一瞬で消してしまう。
「今すぐその男から離れて俺の元に来い、その男は危険だ」
やはり紳は俺をこのまま見逃すつもりは無いらしい、当然と言えば当然か。
だが俺も黙って殺される程簡単な男じゃない、まずは交渉だ。
「俺が危険か危険じゃないかの話はさておき、俺がこの基地に来た理由を知っているか？」
紳は黙ったまま何も答えないが、知らないはずがない、俺がこの基地に来てもＢＮはそれをすんなり受け入れたのだから。
「俺はＢＮの兵士の羅威っていう奴にここに来い、って言われたんだぞ。あとラースっていう奴も、まずその二人を呼んでくれ」
「呼んでどうなる」
「へ？」
呼ばないつもりか？羅威とラースを、となると俺と話す気は本当に

無いのか？
「これは俺が決める事だ」
その言い終えた途端に紳は腰に付けられている2本のサーベルを鞘から引き抜き両手に持つと、すぐさま俺との間合いを縮めてくる。
俺は咄嗟に剣を出すと紳の振り下ろすサーベルを受け止める。
「俺が何者なのか知りたくねえのか？」
「知った所で何か変わるのか？」
「変わるんだよなぁ、これがぁっ！」
力は俺の方が圧倒的に上、巨大な黒剣を振り回すと紳は一旦俺との距離をおく為に離れる。
奴の手に握っているのはサーベル、隙を見せれば確実に餌食となる。
どうにかしてこの場を気り抜けなければ……。
「お待ちください！甲斐斗様はこの世を平和にする為に……」
唯が口を開いた途端に部屋の中にいた兵士達が唯を囲み部屋から出そうとするが唯は動いてはくれない。
「私に触らないで下さい、私はまだお兄様との話しが終わっていません」
唯の言葉に回りにいた兵士達の動きが止まる、皇族の命令には逆らえないのか。
「お願いしますお兄様！争いをお止めください！」
「黙っていろ、すぐに終わる」
「お兄様！」
どうやら兄貴の方は神とかそんなもん信じてないみたいだ、その方が俺にはまともに見える。
なんて今考えている場合ではない、そのまともな人間が俺を殺そうとしてるんだからな。
この状況、どうすればいい。戦うか、逃げるか、それとも……。
「……わかりました、甲斐斗様を殺すのでしたら。私も死にます」
隣に立っていた兵士の腰に掛けてある銃を唯は一瞬で抜き取ると、その銃口を自分のこめかみに当てた。

その正気を疑うような唯の行動に部屋にいた兵士達と、俺と紳の二人も困惑した。
俺が死ねば自分も死ぬとか、何を言っているんだこの女は。
だが唯の目は真剣そのものだった、じっと紳を見つめて微動だにしない。
すると紳は右手に持っていたサーベルを鞘に戻すと、銃口を自分に向けている唯の元に歩いていき、唯の目の前で止まる。
「……1日だけ待つ。それ以上は待たない」
紳はそう呟くと唯の握っていた銃を簡単に取り上げ、それを兵士に渡す。
左手で握っているサーベルを鞘に戻した紳は唯に背を向け部屋から出て行く。
その様子を見ていた兵士達も紳の後について行き、部屋から出て行った。
まるで嵐が過ぎ去ったかのような静けさ、俺はその静けさのせいか紳が出て行った扉をただただ見つめていた。
紳は何故待ったんだ、銃を取り上げれたのなら、唯の意見を無視して俺を殺せたはず。
いや、それもそれだが、何故唯はあそこまでして俺を助けた、俺を本当に神だと思っているからか?そんな馬鹿な……。
またも扉の閉まる音が聞こえる、だが俺の見ていた扉ではない、音のした方を向いてみるとそこにさっきまで立っていたはずの唯が消えていた。
隣の部屋に行ったのだろう、俺も何となく唯の入っていった隣の部屋へ向かうと扉を開ける。
扉を開けると小さな通路とその横に二つの扉が向かい合うように並んでいる、右側の扉から音が聞こえる、水の音だ。
水の音が聞こえてくる方の扉を開けると、そこには洗面台の前に手を洗っている唯がいた。
勢い良く流れ出る水で黙々と手を洗い続ける唯、手が汚れてたから

洗ってるだけ……のようには見えない。
「汚れはもう取れてるぞ」
蛇口を捻り水を止めた俺は洗面台に置かれていたタオルを手に取るとそれを唯の両手に掛けた。
これでようやく俺の存在に気付いたのか、唯は驚いた顔をして俺を見つめるとそっと頭を下げる。
「あ、ありがとうございます」
渡されたタオルで手を丁寧に拭いていく唯、さっきまでの唯は何か様子が変だったが……。
「あのさ、どうしてお前は命を張ってまで俺を助けたんだ、神だからか？」
「それもあります、ですがお兄様に怪我をしてほしくないのであのような行動をとりました」
なるほど、俺と紳が戦えば紳が怪我をすると思ったのか。
俺は仮に神となっているから、俺が負ける事は考えてもないのだろう。
「そうか、所で俺はこの基地を歩き回ってもいいのか？ちょっと会いたい奴がいるんだが」
「構いませんけど、羅威さんですか？それなら私が警備の人に言って連れてこさせることもできますが……」
「いや、俺からあいつ等の所に行く。あいつのいる場所を教えてくれ」
――――「……だからって、態々ついてこなくてもいいんだぞ」
場所を教えてもらった俺は羅威の元に向かっているが、何故か唯までついてきている。
「安心してください、甲斐斗様の邪魔にならないように心がけております」
いやいや、そうじゃなくて。これからややこしい話しをしていくというのに、人が多いと更にややこしくなる。

「話しはすぐに終わるから、それにもう少しで昼の時間だし。部屋に戻って昼食の準備でもしててくれないか？」
「お食事ですね、分かりました。今すぐ昼食の準備をするようメイドさんに……」
「いや、君にしてほしい。頼む」
「私がですか？任せてください、甲斐斗様の頼みなら私が朝食の準備を行ないます」
そう言うと唯は俺に頭を下げた後小走りで自分の部屋に戻っていった。
……さてと、渡された地図によると羅威のいる部屋はここみたいだ、早速中に入ってみるか。
んで部屋に入った後羅威を殴り飛ばして俺を助けなかった事を後悔させてやろう。
俺が一歩前に踏み出すと扉は自動的に開いた、そして部屋の中に入るとすぐさま羅威を見つめる。
だがそこで俺の足は止まった、殴り飛ばそうとしていた羅威が、殴り飛ばしていたのだから。
「俺の腕が使えなくて良かったなラース、もし腕が治っていたら俺はお前を殴り殺していたかもしれない」
羅威は倒れているラースに近づいていくとラースを見下ろしながら口を開いた。
「全部話せ、お前のしてきた事も。玲とエリルの事も、全部な」
「お取り込み中にすまねえが、俺もその話を聞かしてくれないか？」
羅威の後ろから声をかけると、羅威はようやく俺の存在に気付いたみたいだ。
「甲斐斗、どうしてここに……」
「文句言いに来た。紳に殺されかけたんだぞ？どうして俺を助けなかった」
「紳にお前が来る事を伝えたんだが、来たら殺すの一点張りで俺にはどうする事も出来なかった。すまない」

「まぁ、俺は無事だから別に良いけど。それで、俺にも聞かせてくれよ、その話って奴を」
本当ならまだ怒っている俺だが、今はこの二人が話そうとしていた内容に興味がある。
俺と羅威が壁にもたれ掛かりながら床に座っているラースを見つめると、ラースはずれた眼鏡を掛けなおして口を開いた。
「そんなに言われてもね……羅威が一番聞きたい事を教えてよ……」
「玲について教えろ！あの女が言っていた事は本当なのか！？」
羅威の怒号に、何故かラースは平然とした態度で微かに笑みを見せた。
「へぇ、羅威はエリルの事より、玲って子の事の方が大事なんだ」
その瞬間、羅威が足を勢い良く上げると、ラースの頭があるすぐ横の壁を踏みにじった。
「ふざけるな、答えろ」
「……答えるよ、あの女性、神楽さんの言っていた事は本当だよ。君の妹は脳を弄られて、今あの場にいる」
神楽？脳を弄る？妹？……玲って誰だ、まさかレンの事を言っているのか？
そうだとしたらその兄が羅威で、弄ったやつが神楽って訳か、あの女、そんな事までしていたとは。
「元の記憶を取り戻す方法はあるのか？」
「無い事も無い、でも思い出させてどうなるの？」
ラースの口から出ること言葉は意外な台詞ばかりだ、どうしてそう羅威の感情を逆なでするように言うんだ？
「神楽さんは言ってたよね、知らない方が幸せな事もあるって」
「お前ッ！」
息巻いた羅威は壁にもたれ掛かっているラースに近づき顔面目掛け蹴りだそうとした。
「事実だよ、仮に記憶が戻ったとしても。記憶が無くなる前に合った事を全て思い出して混乱、パニック状態に陥る可能性だってある。

そうなれば自ら精神崩壊を起こし、死に至る場合だってあるんだよ」

羅威の足が止まる、知らない方が幸せ、これは本当。

だが人が人の記憶を書き換える事など許される事じゃない、魔法でも人の記憶を消す魔法が存在するがそれは禁忌に等しい事だ。

「それでも俺は玲を助けだし、玲の記憶を取り戻す。その為にはお前にも協力してもらうぞ、ラース」

「僕は別に構わないけど……それで、聞きたい事はもう無いの？」

「あるに決まってるだろ、エリルの事について――――」

俺の後ろから扉の開く音が聞こえてくる、ふと振り向けばそこには見た事のある女性が立っていた。

「羅威ー、腕の調子は……」

思い出した、アリスだ。俺の包帯を換えたりしてくれたあの女性だ。

俺達の今の状況を見て彼女は少し戸惑い気味だったが、俺を確認した途端あからさまに驚いてくれた。

「か、甲斐斗さん！ここに来ていたんですか！？」

「ついさっき来たばかりだけどな、所で何か羅威に用事でも？」

「ええ、リハビリの時間なので呼びに来たんですけど……お邪魔だったかな？」

羅威とラースは黙ったまま、俺も何て言っていいのかわからず立ち尽くしていた。

「そうだラース。風霧総司令官が呼んでたよ？急いで行った方が良いと思うけど」

「わかった、今から行くよ」

ラースは徐に立ち上がり部屋から出て行こうとしたが、羅威と肩がぶつかった瞬間足が止まる。

「逃げるなよ」

羅威の一言でまたラースは歩き出し、無言で部屋を出て行く。

気まずい雰囲気、この場に俺がいるのは得策じゃないな。

「んじゃ俺は部屋に戻るわ」

俺は入り口の前に立っているアリスを避けると羅威の部屋を後にした。
それにしても、まさかレンが記憶を弄られているとはな。だから俺の事も忘れていたのか。
神楽……あの野郎、何を企んでやがる。
ＮＦに行けば何かわかるかもしれないな、ＢＮに来れば何かわかると思ったら何の有力な情報が掴めない。
機体の修理をしてくれた後はそれに乗ってミシェルを迎えに行くか。
ＮＦに行けば赤城から何か情報が掴めるかも知れない。
ここにいるといつ紳に殺されるかわからない、命を狙われるのはもう……ん、そういえば博物館で俺の命を狙ってきたあの女は何者なんだ？
まぁどーせＳＶかＢＮの奴等だろう、雑魚が何人来ようが俺の剣で真っ二つにしてやる。
「甲斐斗様ー！お食事の用意が出来ましたー！」
走ってくる足音が聞こえてくる、下げていた顔を上げると前方からエプロンをした唯が手を振りながらこっちに走ってきていた。
そういえば昼飯の準備しておいてくれって言ってたな俺。
歩いている俺の腕を掴むと、半ば強引に引っ張っていく、そんなに急がなくても飯は逃げないぞ。
元いた部屋に連れ戻されると既にテーブルには数々の料理が並べられ……って、何だこれは……。
「私が丹精込めて作りました、お召し上がりください」
丹精込めて何を作ったんだお前は、まさか料理か？机の上に並べられているこれらは全部料理なのか！？
み、認めない。俺は認めない、こ、こんな、こんな姿形をしたものが料理など！俺は認めない！
口で伝える事の出来ない惨劇、今この机の上では事件が起きている。
「どうしたのですか？あ、これなんて如何です。とっても美味しいですよ」

紫色の液体にスプーンを入れると、スプーンの上には何か酸で固体が溶けたような危ないものが出てきたんですけど。
これを喰えと言いたいのか。ほほぉ、俺に死ねと。
唯の笑みが逆に恐ろしく見える、何か裏が有るのではないかと思えるような、そんな笑顔に……。
俺は震える手でスプーンを握ると紫色の液体から食べ物と思われると具を掬い上げた。
とりあえず一口、せっかく作ってくれたのだ、食べない訳にはいかない。
恐る恐る俺はスプーンを口の中に入れ、具をゆっくりと噛み締めた。
「す……すげえ！」
「本当ですか！？」
別の意味でな、よく害の無い食材を料理してこれ程までに有害な物を作れるのは逆にすごい事だ。
と、心はこんな感じだが顔は笑顔だ。心身共に滅ぼす料理を食べた感想がうまいの一言な訳が無い。
「いやー本当すごいよ、料理の練習をもっとすればもーっとすごい料理作れると思うから、頑張って」
「ありがとうございます！そう言って頂けると大変嬉しいです、さささ、これもどうぞお召し上がりください」
いや、次食べると多分胃の内容物が出てきちゃいますよ、いいのか？いいんだな、わかった、では遠慮なく――ッ！？
「伏せろ唯！」
俺は横に座っている唯の肩を掴み机を蹴り上げた、料理は全てひっくり返り机は俺達の前に倒れる。
その瞬間何本ものナイフが机に突き刺さり薄い机を貫通して刃先が飛び出してくる。
まさに危機一髪、どうやら日頃命を狙われているお陰で俺の反応速度も高まってきたんだな。
「甲斐斗様、これは一体……」

ナイフとなると、ＳＶの女か、それとも桃色の髪の女か。
いや、この状況と場所でＳＶの女はありえない、となるとピンク色の髪した野郎か、って、あいつは俺が殺したんだっけ。
「甲斐斗様！」
「ん？安心しろ、俺がいるから大丈夫だ」
しかし何処から攻撃してきやがった、窓も扉を閉まったままのはず。
それにコレだけのナイフを同時に投げる事など出来るのだろうか、人間のなせる技じゃないぞ。
「甲斐斗様、さすがです！」
それに奴はいま何処に入る、ナイフの方向からして隣の部屋に続く扉の辺りか、それなら俺にも考えが有る。
俺は横に倒れたまま盾にしている机を勢い良く蹴り飛ばした俺はその吹き飛ぶ机を盾に扉にまで走り寄る。
そして剣を出現させると剣を振り下ろし、机諸共扉をぶち壊す。
……いない、机と扉の瓦礫の中に誰もいない。
やっぱ人の気配はしなかったし、やっぱ誰もいないか、なら何処から攻撃してきたんだよ。
「何事ですか姫様！」
さっきの物音で近くにいた兵士が異変に気づいたのだろう、扉を開けると小銃を構えた兵士が何人も部屋の中に入ってくる。
そして唯の周りをあっという間に囲むと兵士達は躊躇い無く銃口を俺に向けた。
「お待ちなさい、甲斐斗様は私を守ってくれました。今すぐその銃を下ろしなさい！」
「申し訳ありません、姫様。これは風霧総司令官のご命令です。銃を下ろす事は出来ません」
「ついて来てもらおうか、甲斐斗。風霧総司令官がお呼びだ」
どうやら1日も待ってくれないらしい、せっかちな奴だ。
俺は両手を上げて無抵抗の意志表示を示す、数人の兵士が俺の後ろへと周り銃口を背中に当ててきた。

「紳が呼んでるんだろ？さっさと案内しろよ」
一人の兵士が先頭に立つとゆっくりと歩き出した、どうやら紳のいる部屋にまで案内するようだ。
と、思っていたが。俺が連れてこられたのは格納庫だった、銃を構えた兵士が何十人も並んで2階にまでいやがる。
数メートル離れた場所に紳と、その横に唯が立っている。おいおい、まさか今ここで俺を殺す気かよ……。
「甲斐斗、お前に会いたいと言っている女性がいる。会わせてやろう」
はぁ、女ですか。それにしてはやけに警戒してないか、警備の数もおかしいだろ。
後ろを向くと俺の方に女性が歩いてくるのが見えた、あの髪の毛、まさか、あいつ死んだはずじゃ……。
「こーんにーちはー、アビアだよ」
いや、だから、死んだんじゃないのかぁ？普通に血吐いて死んだだろ、お前。
俺が殺したはずの女が立っている、しかも元気そうに笑って。つまりこいつ、人間じゃないな。
「この女、お前に会わせないと俺達を皆殺しにするそうだ。だからお前をこの女性に渡そうと思ってな」
紳の言葉を聞いても俺は後ろに振り返ろうとはしなかった、このアビアって奴に背を向ける訳にはいかないからな。
「どういう事ですかお兄様！1日待つと言ってくれたではありませんか！？」
「これもここにいる兵士達の為だ、仕方が無い」
「そんな……あの女性に何が出来ると言うのですか、私達を皆殺しにするなどと嘘をついている事はお兄様もおわかりのはず！」
「俺を疑うなら唯、お前が兵士達に命令を下せ」
「わかりました、私が命令を下します」
「止めろ唯、紳の言っている事は本当だ。この女只者じゃねえ」

だって人間じゃねえからなぁ、こいつは。
「俺に会いに来たらしいが、お前何者だ、目的は何だ？」
「アビア、力が見たいの」
「力を？それだけか？」
「うん」
……ミシェルを捕らえるのが目的じゃなかったのか？
女は歩き始めると少しずつ近づいてくると、周りにいる兵士達が一斉に俺達に銃を向け始めた。
「力を見たいのはわかった、だが俺が持つ力と言えばこれぐらいしかないぜ？」
俺は手を突き出すと一瞬で剣を出現させた、それを見ていた女は顔色変えず近づいてくる。
「アビアに見せて、本当の力を」
本当の力？本当も何も俺は剣を出す事ぐらいしか出来ないんだが。
「それ以上近づくな、また胸に穴を開けられたいか？」
「うんいいよ、あなたが強いなら」
「俺は強いに決まってんだろうがッ！」
何考えてるのか全然わかんねえ、一度俺を殺そうとした女が今度は俺の力が見たいだと？
気付けば握り締めていた剣を振り上げおり、近づいてくる女目掛け俺は剣を振り下ろしていた。
「アビアも力を見せるよ」
剣を振っている俺の耳にそう言葉が届いた、剣は振り下ろされたがその場に女の姿は無かった。
女は剣が振り下ろされたすぐ目の前に立ち止まり、俺を見つめていた。
力を見せる、そう言った女は両手を広げると無数のナイフが一瞬にして空中に現れ始めた。
「おい、何する気だ……！？」
「見てて」

広げていた両手を天高く振り上げると、それに合わせる様にナイフが天井まで舞い上がる。
そして女は振り上げていた手を下ろした、すると思っていた通りナイフが刃先を下に向けて急降下してきた。
次々と兵士が倒れ、銃が地面に落ちる音が聞こえてくる、周りからも、2階からも。
兵士達の首にはナイフが刺さっている、声を出したくても出せないのだろう、苦しみもがいているがその声は聞こえてこない。
「アビア、うるさいの嫌いだから」
まさかと思い後ろに振り返れば、兵士達が倒れている中、紳と唯は倒れていなかった。
ただ紳の右手は唯の首目掛け飛んできたであろうナイフの柄を掴んでいた。
「お兄様……これ……は……」
唯が足元を見れば首から血を流し苦痛の表情で倒れている兵士達がゴロゴロと転がっている。
下を向いてはいけないと思ったのだろう、唯は震えながら紳だけを見つめていた。
「だから言っただろ、あの男は災いを呼ぶと。あの時殺していればこうならずに済んだ」
余りにも冷たすぎる、唯のせいでここにいる兵士達が死んだと言っているのか、こいつは。
震えている唯に手を貸すこともなく紳はその場で立ったまま俺達を見ている。
「アビアの力見せたよ、次は貴方」
「って言われてもなぁ、俺の力はコレぐらいしかないんだよ」
「本当に?」
「本当だ、期待はずれですまんな」
「ふーん、じゃあ殺してあげる」
やっぱ殺すのかよ、まぁ俺も簡単に殺される程雑魚じゃねえがなぁ

っ！
アビアが再び両手を広げると、瞬く間にナイフが空中に現れ始める。
「まぁ待て、お前魔法使いだろ？何故この世界に来た」
そう言ったが空中のナイフが俺目掛け次々に飛んでくる、剣を盾にしてナイフを防いだが、今度は頭上からナイフが降り注ぐ。
「俺の話を聞けっつうのッ！」
所詮はナイフ、降り注いできたナイフを剣一振りで吹き飛ばすとバラバラになって俺の足元に落ちた。
「みせてよ、強い力、貴方も魔法使えるんでしょ？」
「使えたんだがな、何か使えなくなっちまったんだよ。でもお前は使えるみたいだな」
「このぐらい誰でも出来るよ、それで、力は使えないの？」
「使いたくても使えねえ、残念だったな」
「なーんだ、せっかく暑い中ここまで来たのに……死ね」
また女の頭上に無数のナイフが出現していく、厄介な力だな、数で攻められるとさすがの俺もまずい。
「死ぬ前に聞かせろ、お前は何故この世界に来たんだ」
「……もうこの世界にしか人間がいない、だから来たの」
ＥＲＲＯＲが数々の世界を滅ぼしてきたというのは本当の事みたいだな。
そして唯一残っている世界がこの世界、他世界の奴がこの世界に来ている可能性は高いって事か。
現にＳＶの奴等もそうだしな、となるとこいつもＳＶの奴か？
「じゃあ目的、次は目的を聞かせろ、何故ミシェルを奪おうとした」
「アビアはあの子に興味は無いの、ただ連れて来いって言われたから奪おうとしただけ」
連れて来い？って事はコイツ仲間がいやがるのかよ。
厄介な連中が現れたもんだ、どうやら俺とミシェルの平和な暮らしも一筋縄ではいかないみたいだな。
「でもアビア知ってるよ、あの子が何者なのか、なんて名前なのか」

「それを俺に教える気は？」
「ないよ」
「じゃあ死ね」
さて、もう言葉はいらない、話す気が無いなら殺すだけだ。
一度は殺した女、躊躇う事も無い、さっさと殺してさっさと逃げる。
女が両手を広げ始める、もう魔法は使わせない、使われたとしても俺は負けない。
剣を振りかざし女を一刀両断しようとしたが、その攻撃はひらりとかわされる、その時には既に女の頭上には無数のナイフが現れていた。
「アビア、弱い人に興味ないの」
再び俺目掛けてナイフが降り注ぐ、だがそれは既に見切った攻撃、俺は剣を振るいいとも簡単にナイフを吹き飛ばそうとする。
だが次の瞬間、俺目掛けて落ちてくるはずのナイフは花開くように軌道を変えると、前後左右から同時に向かってきた。
でもな……そんな攻撃、俺が予想してないとでも思ったか？
体を回転させながら剣を振り回すと、同時に飛んできたナイフは簡単に壊れていく。
壊れたナイフの破片は辺りに勢い良く飛び散っていく、その影響で女が一瞬目を瞑った、隙は逃がさない。
そう、言葉はいらない。俺は剣を手に無言で走り出していた。女が閉じていた目蓋を開いたけど、もう遅い。
「俺も、弱い奴には興味無いんだよ」
女は目を開けたまま力無く倒れた、細い体で俺の剣を身に受けたんだ、確実に即死だな。
「甲斐斗様！」
後ろを振り返ると、さっきまで涙目だった唯が俺の元に元気良く走ってくる、このままだと俺に飛びついてきそうだ。
とか思っていたら本当に飛びついてきた、俺は剣を手放すと急いで唯の体を支える。

「やはり甲斐斗様は神様です！私は、私は本当に感動しました！」
「ああ、ありがとさん。でも俺は神なんかじゃねえよ」
俺は自分に抱きついてきた唯を体から離すと俺の方を見たままじっと立っている紳と目を合わせた。
「紳、今から俺はここを出て行く。って言いたいんだけどな、出来ないんだよ。
機体の修理をしてくれ、修理が終わればここからさっさと離れてやる、それでいいか？」
「いいだろう、機体の修理だけはしてやる」
ようやく俺の言った事に承諾しやがった。
ふと周りを見渡すとまだ生きている兵士達が死んだ兵士達の死体を運んでいた。
俺のせいでここにいる兵士達を死なせてしまったが、その事に関して俺は罪悪感など一欠けらも無い。
雑魚は死ぬ、それだけだ。
「甲斐斗様、本当にここから出て行かれるのですか？まだ私は甲斐斗様と……」
「俺も暇じゃないのさ、やる事が山積みだからな。まぁ、機体の修理が終わるまでここに居させてもらう事になるが……」
そう言うと唯は嬉しそうに笑った、また話が出来るからだろう。
だったら面白い話をしてやるか、１００年前、俺が世界を救ったときの戦いの話でも。

第５１話　数、阿吽（後書き）

アビア
ピンク色の長髪の女性、白色でシンプルな服装をしており、帽子を被っている。
魔法を使用できる為この世界の人間では無く、人間離れした生命力と治癒能力を持っている。
ある男からの命令で動いているが、たまにサボる時があり、ルールに縛られるのが嫌い。

第52話　鍵、箱

私達はレンの救出を成功させて無事に東部軍事基地に戻ってきた。
これでまた一つ心配事が消えたと思っていたが、また一つ問題が生まれてしまった。
突如町に現れたＥＲＲＯＲ、そして武蔵の機体、『大和』の出現・・・。
それにしても、今日のコーヒーはやけに苦く感じる、豆の分量を間違えたのだろうか。
「由梨音、まさかまた壊してないだろうな？」
私が由梨音に目を向けると、ソファに座っている由梨音は不機嫌そうな顔をして雑誌を読んでいた。
「むーっ、私は壊してませんよ！ちゃーんといつも通りにコーヒーを注ぎました！」
「・・・どうした？今日は機嫌が悪いみたいだな」
「当たり前です！私に黙ってお買い物に行くなんて酷いです！私も赤城少佐と買い物したかったのにぃ・・・」
レンを助けに行っていたと由梨音に本当の事を話す訳にもいかず。
つい買い物に行っていたと嘘をついてしまった。
それにしても余程買い物が行きたかったのだろう、今日の由梨音はやけに不貞腐れている。
「やっとの休日、赤城少佐と一緒に水着や夏服買いに行ったり、映画見に行ったり、色々行きたかったのにぃ・・・」
「わかった、また今度一緒に行こう」
「今度っていつですか、そもそも赤城少佐が外出する事なんて滅多に無いじゃないですか！」
それでは私が一日中部屋に閉じ困っていると言っているようなものではないか・・・。
「私を引きこもりみたいに言うな・・・、仕事が一段落したらちゃ

んと行ってやる」
「ぜ、絶対ですよ！そうだ、その時はレンちゃんと三人で一緒に行きましょ！」
「ああ、そうだな。３人で行こう」
その前に、私にはやらねばならない事が多々ある。
聞かねばな、あの大和が本物か、偽者か。神楽なら何か知っているかもしれない。
私は飲みかけのコーヒーカップを机に置いたまま立ち上がると部屋の出口に向かった。
「赤城少佐～どこに行かれるんですか～？」
「野暮用だ、すぐに戻る」
とは言ったものの、恐らく今日はこの部屋に戻る事はないだろう。

「入るぞ」
私はそう言って神楽のいる研究室に入ると、丁度目の前に神楽が立っていた。
突然部屋の中に入ってきた私に驚くことも無く、私に目を向けるとすぐまた視線を戻す。
「来ると思ってたわ・・・立ち話もなんだから座って」
どうやら今回は私をからかう余裕は無いらしい、少し焦りを感じる喋り方で私をソファに座らせると２枚の書類を机の上に置いた。
書類は置かれると丁度良く私の目の前に滑り止った、一枚の書類には大和についての機体説明が書かれている。
そしてもう一枚の書類にも大和についての説明が書かれていた。
「１枚目と２枚目、一見同じ様に見えるけど。実は２枚目のは内部構造が少しだけ変化してるのよ」
そう言われて熱心に目を通してみるものの、内部構造の違いがよくわからない。
変わっていると言えば胸部のエネルギー反応の数値が微妙にずれている事ぐらいだ。

「1枚目はＥＤＰの時の大和、そして2枚目は今日町に現れた大和のデータよ」
「・・・ほぼ違いが無いな、となると今日現れたのは本物の大和か？」
「その可能性は高いけど少し違うのよ、機体自体は本物、でも中身が多少弄られてるの」
つまり今日現れた大和は本物だが、中身が多少変わっているという事か。
「許せない、伊達君の為に作った私の最高傑作を勝手に改造するなんて・・・」
あの時、ＥＤＰの最後で武蔵は一人大和でＧＡＴＥの中に入り地下に向かった。
大和の攻撃により私達は何とか脱出できたものの、大和はアルカンティスの主砲でＥＲＲＯＲごと破壊されたはずだった。
「神楽・・・あの大和に乗っているのは、誰なのだろうか・・・」
でも今日、こうして私達の眼の前に現れた。しかもほぼ無傷の状態で。
だとしたら、だとすれば・・・あの機体に乗っているのは・・・。
では何故ＥＲＲＯＲと共に現れ、町を攻撃したのか。
・・・それでも私は信じたい、あの機体に乗っているのが・・・武蔵であると。
「伊達君かもしれないわね、だって大和を自分の手足のように操作していたのだから」
悪ふざけなのかわからないが、今の台詞で神楽は薄らと笑みを見せていた。
「・・・次に現れた時、大和を捕獲すれば誰が乗っているかわかるな」
「そうね、でも捕獲されたらそれは伊達君じゃない。伊達君の腕と大和があれば捕獲なんて不可能よ」
「それなら私が捕獲してみせる」

「無理よ、例え貴方とリバインが１０機いたとしても。大和には勝てないわよ？」
豪い自信だな、それ程自分の機体が強いと言いたいのだろうか。
相手が強いからと言って引き下がる訳にもいかない、誰かがやらねば始まらない。
ならば私が始める、そしてあの機体に乗っているのが誰なのかつきとめる。
「勝てないのなら、勝てるようになるだけだ」
「赤ちゃんらしい台詞ね、それで勝てると思ってるの？」
馬鹿にしたような笑み、もう見慣れた笑みだが。
神楽は胸ポケットから一枚のディスクを取り出すとそれを机の上に置いた。
「これを使えば勝率が５％ぐらいは上がるわよ、精々頑張りなさい」
そう言うと神楽はたち上がり、部屋の出口まで歩いていく。
「まて、何処に行く・・・」
「野暮用よ、それじゃ」
となると、神楽は当分この部屋に返ってこない。
私は神楽に渡された一枚のディスクをポケットの中に入れて部屋から出て行った。
由梨音の待つ部屋に戻ろうとしたが、あの子の事も気になり私は自分の部屋に戻った。
カードキーを使い部屋の鍵を開けて部屋に入ったが、体全身を包み込むように熱風が部屋から感じる。
冷房の電源が点いていない、私が部屋を出る時には点いていたはずだが・・・。
ふと自分のベットに目を向けるとシーツが丸まりもぞもぞと微妙に動いている、
ベットに近づきシーツを取ると、そこにはあの少女が苦しそうな顔をして寝ていた。
服は汗でびっしょりと濡れ、髪の毛も汗で濡れている、室内だとい

うのに帽子も被ったままだ。
私はまず少女を抱かかえるとソファの上に寝かせ、机の上においてある冷房のリモコンを手に取りすぐさま電源をつけた。
これで室内は涼しくなる、後は汗で湿った洋服を取り替えるだけだが、この子に合うサイズの服を私はもっていない。
仕方が無い、サイズは合わないが私の服で我慢してもらうしか・・・。

私が少女の服を脱がそうとした時、部屋の出口に付いているインターホンから声が聞こえてきた。
『ごめんください、赤城隊長おられますか・・・？』
部屋の扉を開けるとそこにはレンが立っていた、レンは何か言いたげな表情をしていたが先に口を開いたのは私だった。
「レン、すまないが今からある物を持ってきてほしい」

レンのお陰でこの子に近いサイズの服を準備する事が出来た。
服を着替えた少女は相変わらず寝ている、先ほど寝ていたベットの上に寝かせると、優しくシーツを掛けてあげた。
可愛らしい寝顔をしているこの子は一体どんな夢を見ているのだろうか。
「すまないな、突然着るものを持ってきてもらって」
「いえ、赤城隊長の為なら私何でもします。でもどうしてその子が赤城隊長の部屋に？」
「あの男に頼まれてな。全く、あいつは今何処で道草しているのだろうか・・・」
この子を置いて逃げるような男ではない、すぐに迎えに来るだろう。
それまでこの少女の面倒は私が見なければならない。
「それはそうと、レン。私に用事があってここに来たのだろう？」
「あ、はい・・・実は赤城隊長に調べていただきたい事があって・・・」
レンの表情が暗くなっていくことから見て何か重大な話、私は無言

でレンの言葉を待った。
それにしても、私に調べてほしい事とは一体・・・。
「私の過去を・・・調べてください」
戸惑う私にレンは口を開いた、私に納得してもえるように。
「驚くのも無理はありません、私も自分で変な事を言っているのはわかっています・・・。
でも最近私本当に変なんです、頭も、体も・・・ハッキリとしないんです・・・」
「体調が悪いのかもしれないぞ、最近レンは連戦続きだからな。休暇をとってみればどうだ?」
「・・・夢を見ます、最近毎日見てるんです」
返事もせずにレンは喋り始めた、余程思い詰めているのだろう、今の心境に私に聞いてほしいのだろう。
「どんな夢だ、教えてくれないか?」
「沢山の私がいます・・・でも沢山の私は動きません・・・それで、今度は私がその沢山いる私の一人になるんです。
それがとても怖くて、怖くて・・・。そして沢山の私の中に、小さい頃の私が沢山いるんです」
「子供の頃の・・・レンか」
「はい・・・でも私は憶えてないんです。
幼い頃の記憶も、子供の頃の記憶も、そもそも思い出そうとした事もありませんでした・・・」
「自分の過去を探りたいのなら、自分で調べないのか?」
「それが・・・一番怖いんです・・・」
忘れられた記憶、頭の中には残っているが、その記憶の箱の開けようとはしない。
それは自分を守る為か、それとも・・・その箱には鍵が掛かっているのか。それは私にはわからない。
「お願いします、赤城隊長!」
「わかった、可愛い部下の為だ、一肌脱ごう。だがレン、過去の自

分を知る覚悟はあるか？」
「あり・・・ます！知らないといけない気がするんです！」
「よし、そうと決まればこの件は私に任せて、お前は部屋に戻ってゆっくり休め、これは命令だ」
「わかりました、ありがとうございます赤城隊長」
私に思いを伝えて少し気が楽になったのか、レンの顔は少しだけ表情に余裕が見えた。
レンは一礼した後部屋を後にする、それにしてもレンの過去について調べる事になるとは思っていもいなかった。
しかし、ああ言われては私も知りたくもなる、レンの過去を・・・。
その時、後ろから携帯電話の鳴る音が聞こえて私は振り返った。
机の上で携帯電話が鳴り響いていたが、ベットで寝ている少女は顔色一つ変えず寝ていた。
携帯を取り電話に出ると、意外な自分からの電話だった。
『もしもし赤ちゃん？』
本当、いつになったらこの呼び方を止めてくれるのだろうか・・・。
「神楽か、私に電話をしてくるなんて珍しいな。何の用だ？」」
『レンちゃん何処にいるか知ってる？部屋を探したんだけど姿が見当たらないの』
当たり前だ、私の部屋にいたのだから。
「レンなら先ほどまで私の部屋にいたぞ、今はもう自分の部屋に帰ったと思うが」
『っそ、ありがと。所でレンちゃんと何話してたの？』
「そうだ神楽、実はお前に調べて欲しい事がある」
神楽に協力してもらえばレンについて何か詳しい事がわかるかもしれない。
それに私一人より、神楽と二人で探せばきっと何か情報を掴めるはずだ。
「レンの過去について調べてくれないか、実はレン本人が調べてほしいと言ってきてな」

『・・・そう、レンちゃんがそんな事を・・・。わかったわ、私も出来るだけ調べてみるわね』
「すまんな、お前も忙しいというのに・・・」
『構わないわよ、それじゃ』
電話を切り終えた私は奥にある自分の机に向かうと、神楽から渡されたディスクをパソコンの中に入れた。
画面に映し出されたのは大和に関してのデータだ、それに武蔵のデータまで入っている。
敵を見てからの反射速度、敵射撃パターンを予測し瞬時に間合いに近づくまでの時間・・・全てここに書かれている。
これを使えばあの大和にも対抗できるかもしれない、戦場では案外こういうデータが役に立ってくれるからな。
・・・となると、今日も徹夜になりそうだ。

第５２話　鍵、箱（後書き）

風霧（かざきり）　唯（ゆい）

ＢＮ組織の幹部であり、紳の妹。

平和主義であり、争いごとが大嫌い、武器や兵器に触ると過剰に反応するが、戦争や兵士を軽蔑している訳ではない。

ＢＮの皇族でありながら神を信じ、神は『絶対』だと称えている。

ちなみに甲斐斗の事を神だと信じきっている為、甲斐斗の為なら身を危険に晒せる覚悟もある。

第５３話　恐怖、残酷

――――「素晴らしいです！やはり甲斐斗様は神様です！」
想像通りの言葉が耳に飛び込んできたが、やはり驚いてしまう。こんな話を信じるのはミシェルぐらいだからな。
俺はＳＶの基地で機体の修理が終わるまで唯の部屋にいる事になった訳で、暇だから１００年前の戦いの話しをしていた所だった。
「これは昔の話だ、今の俺にそんな力はもう無い」
無いというか、使えない……の方が正しいな。
だが俺も段々と魔法を使わない生活に慣れてきてるんじゃないのか？と思ってしまう。
魔法は便利だ、困った時はすぐ魔法に頼れば何だって出来た。
そう、魔法だ。俺が力を取り戻した時、恐らく誰も俺には敵わないだろう。
何たって俺は最強だったんだからな。って、なんで過去形。俺は今だって最強だ！……と思う。
「所で、長話をしていたから時間も結構たったはず。機体の修理はもう終わったんじゃないか？」
「大丈夫ですよ、まだ終わっていません。ささ、話しの続きをしてください」
おい待て、独断で判断するな。それに話しはもう終わったぞ。
こんな物騒な所にいるとあの男、風霧紳が俺を殺そうと変な企みを考えるかもしれない。
「いや、せめて確認しようぜ？修理が終わったら俺はここから出て行く約束だし」
「大丈夫ですよ、終われば報告しに来るはずですから」
唯はそう言って扉の方を向くと、丁度良く扉が開き部屋の中に紳が入ってくる。
「修理が済んだ、帰ってもらおうか」

「ああ、わかった」
扉の方を向いて固まっている唯を余所に、俺は出口まで歩き部屋から出て行く。
唯も部屋から出ようと立ち上がったが、紳は構わず扉を閉めようとした。
「唯、お前はここにいろ」
そう言って扉を閉めると、部屋の前で待機していた兵士達が唯の部屋の前に並ぶ。
部屋から出た俺は紳の後を歩き、俺の機体が置いてある格納庫に向かった。
格納庫につくとそこには無傷の状態の俺の機体が立っていた、斬りおとされた腕もしっかり直っている。
「よく俺の機体と同じ腕を作れたな、どうやったんだ?」
「我雲の腕をはめ込んだらああなった、詳しい事は俺もわからない」
「へぇ……変な機体だな、自分で言うのも変だけど。んじゃ俺は出て行くぜ」
俺が機体に乗り込もうと機体の足元まで歩いていった時、一人の男が紳の後ろから走ってきた。
「紳!ラースを何処にやった!?」
羅威だ、しかも怒っているご様子。一体どうしたんだ?
「ラースならもうここにはいない」
「どういう事だ?説明しろ!」
「奴は一度本部に戻ると言ってここから出て行った」
「そんな……あいつ、逃げやがって!」
言い様の無い怒りが込み上げているのかわからないが、羅威は握りこぶしを作りその手が微かに震えていた。
「ラースと何かあったのか?」
紳が聞いてみるものの、羅威は小さく首を横に振った。
「っ……いや、なんでもない……」
なんでもない訳がない、羅威を見ていればそんな事簡単にわかる。

それでも紳はそれ以上聞くことは無く、後ろに振り返り格納庫から出て行く羅威の背中を見送った。
「ＢＮも大変だな、俺には関係無いけど」
胸部のハッチから垂れ下がっているワイヤーを掴み、自動的に引き上げられた俺は操縦席に座り機体の電源を点けた。
起動もスムーズ、悪い所は特に見当たらない、エネルギーも満タン、文句無しだな。
格納庫の大きな扉が開く、俺は勢い良く操縦桿を前に倒すと一気に基地から離れていった。
結局休める事も出来なかった、俺の行く所必ずと言って良い程何かが起こる、悪い意味で。
早くＮＦに行って赤城の所に向かおう、あそこなら俺も休めるはずだ。
ここからだとＮＦの東部軍事基地に向かうのに数時間かかるが、それは仕方が無い事だ、とにかく今は機体を走らせることに専念しよう。

――――『赤城少佐ー！いるなら返事してくださーい！』
赤城がパソコンで大和の情報を見ていると、扉のインターホンから由梨音の大声が聞こえてくる。
扉を開けた赤城は不機嫌そうに口を開く。
「由梨音、声が大きい。減給処分にする」
「そ、そんなぁ。減給だけはしないでくださぃ」
「冗談だ、それより私に用事があってここに来たのだろう？」
「はい！遊びに来ました！」
「そうか」
何事も無かったように赤城は扉を閉めると、先ほど座っていた椅子に座ってまたパソコンの画面を見つめだす。
『あー！赤城少佐ぁー！冗談ですよー！開けてくださいー！』
「鍵は開けている、入りたいなら入れ」

そう言うと由梨音はすぐさま赤城の部屋に入り、赤城に向かって敬礼をした。
「お邪魔します！」
「邪魔するな」
「もー、赤城少佐自分の部屋でもお仕事してるんですか？もう9時ですよ、少し休んだらどーですかー？」
由梨音に言われて初めて気付いたのだろうか、驚いた様子で時計を見た赤城はパソコンの電源を落とすと急にベットの方へ向かい始めた。
「１０分休憩する、１０分経ったら起こしてくれ」
「えーっ！？私目覚まし時計じゃないですよー」
「これは命令だ、命令に従わない場合由梨音軍曹を……」
赤城がベットに寝ようとシーツを捲ると、そこには目を覚まし目蓋が半開きの少女がいた。
「おは、よ……」
少女はそう呟くと目元を手で擦りながらゆっくりとベットの上で起き上がる。
「起こしてしまったようだな。というか、今までずっと寝ていたのか」
「あ、赤城少佐！誰ですかその子は！ま、まさか赤城少佐の子供！？」
「断じて違う！この子はある男に頼まれてここで預かっているだけだ」
由梨音はベットの上で座っている少女に興味があるらしく、親しげな笑みで少女の横に座った。
「私由梨音、貴方の名前は？」
「なまえ……みしぇる」
まだ完全に起きていない少女はそう答えるとまたパタリと倒れて寝息を立てた。
「ね、寝ちゃいましたよ！名前言って寝ちゃいましたよ！」

「うるさい、起きてしまうだろ。それに寝ていてくれた方が私にとっては都合が良い」
赤城は身に羽織っている黒い軍服を脱ぐと、壁に掛けられているハンガーに軍服を掛ける。
そして縛っていた髪を解くと、由梨音に背を向けるようにベットに寝転んだ。
「えー、本当に寝るんですか赤城少佐……。
私自動販売機でジュース買ってきます、帰って来る頃には１０分経ってると思いますから、それじゃ！」
由梨音はそう言って部屋から出て行くが、扉の鍵が自動的に閉まる様になっているのは知らないようだ。
恐らく由梨音がジュースを買い終えここに戻ってきた時、インターホンから由梨音の声が流れてくるだろう。
赤城は少女に背を向けたまま自分の腕を枕代わりにして横になっていた、静かな部屋に微かな寝息だけが聞こえてくる。
ふと赤城は背中に暖かさを感じる、さっきまで赤城に背を向けていた少女は赤城の背中にくっつくように寝ていた。
「かいと……」
寂しげに呟く少女の一言に赤城は後ろに寝返ると、小さな涙の粒を流した少女が寝ていた。
赤城は無言のまま少女の柔らかい頬を伝う涙を指先で優しく拭き取ると、腕を伸ばしゆっくりと少女の体を抱きしめた。
まるで小さい頃の自分を抱きしめているかのような感覚で、小さい頃母に抱きしめられた事が脳裏に浮かぶ。
「私の子供……か」
今では自分が大人、今度は自分がわが子を抱きしめる番。
しかし、愛した人はもうこの世にはいない。いや、まだわからない。
大和の謎、それを解き明かす事で何かが変わるかもしれない。
望みを捨てた訳ではない、希望をしない訳でもない、僅かな確率でもそれを信じれるのが愛なのか、それはわからない。

「武蔵……」
赤子のように小さな声で呟いた名前、その彼女の頬を伝う涙を何を意味するのか。
その時、部屋の扉の開く音が聞こえてきた。鍵が閉まっているはずなのに、何故。
赤城は疑問に思いながら起き上がり、扉の方に顔を向けると、そこには由梨音ではなく一人の青年が立っていた。
白い髪の毛に赤い瞳の青年、二十歳ぐらいの顔立ちで、赤城を見つめていた。
「甲斐斗……ではないな」
青年が一歩前に出て部屋に入ると、扉は自動的に閉まり鍵かかる。
只ならぬ気配、赤城はベットの脇に置いてある刀を手に取ると、それを腰に構えた。
「美しい、とても綺麗だ。こんな人と会えるなんて僕は運が良い」
「貴様何者だ、答えろ」
「でも今日の僕の用事は君じゃない、また今度お茶でも飲みながら話そう」
一方的な会話、赤城の話しを全く聞かない青年は徐々に少女の元に近づいてくる。
赤城は鞘から刀を抜くと刀を構え、刃先を男に向けた。
「それ以上寄るな、寄ると貴様の首、を……」
青年はすぐ目の前まで近づいてきている、だが赤城は刀を振る事が出来なかった。
体が全く動かない、腕も、足も。唯一目元と口元が動かせる程度だ。
「何……だ、これ、は……」
刀を握る腕を上げる事も下げる事も出来ず、青年は等々寝ている少女の眼の前にまで来てしまった。
少女は相変わらず寝たまま動かない、それを見ていた青年は少女の腕を掴むベットから引きずり出すと、勢い良く少女の体を床に叩きつけた。

「生きてる？死んでないよね、死ぬ訳無いんだから」
叩きつけられた少女は何が起こったのかわからず周りを見渡そうとするが、青年は少女の頭を掴むと顔面を床に押し付けた。
少女の顔は苦痛で歪むが、青年はお構いなしに少女の顔を床に押し付けている。
「ほら生きてた、君だよね、第１ＭＧって。僕と一緒に来てもらうよ」
「うぅ、あっ……」
顔を床に押し付けられ喋る事の出来ない少女、それでも青年は頷くと少女の顔を掴みゆっくりと持ち上げた。
「ん？そう、来てくれるんだね、じゃあ行こうか」
「いたい！やめ、て……！」
少女の口から零れた一言、表情は恐怖と激痛で困惑しており、怯えた瞳で青年を見ていた。
「何を止めてほしいんだい？自分の口で言ってごらん」
青年は薄らと笑みを見せると少女の口元を掴み手で塞ぐ。
少女はその手を放そうとか細い手で青年の腕を掴むが、放す事など出来るはずがなかった。
「何だいそれは？少しは楽しませてくれると思ってたけど……どうやら僕の見当違いだったみたいだね」
口元を放された少女はその場に倒れ込む、青年はそれを見て不敵に笑うとまた少女の顔を掴み持ち上げようとした。
「止めろ！その子に手を出すな……ッ！」
赤城の言葉に青年の手が止まるが、青年の笑みはまだ続いていた。
「何？僕と遊びたいの？」
青年の右手が赤城の握る刀に届く、赤城の握っていた刀を簡単に取り上げると、その刃先を赤城に向けた。
が、青年は刀を足元に落とすと身動きの取れない赤城に近づいていく。
「安心して、たっぷり遊んであげるよ、満足するまで……ね」

その青年の純粋な笑みは、赤城にとって恐怖しか生まれなかった。
青年の顔は人の顔には見えない、笑顔はまるで天使の皮を被ったような、悪魔。
血塗られた瞳に見つめられた時、赤城はただの赤子に過ぎなくなる。

――俺がＢＮの基地から機体を全力で走らせてもう2時間ぐらい経った、そろそろ東部軍事基地に着くはず。
それにしても、ここまで来るのに町という町が殆ど無かった、見える光景は荒野と森と廃墟、この三つぐらいだった。
休憩できる場所も見当たらず、飲まず喰わずでここまで来た、早く基地に着いて休ませてもらいたい。
美味しい物が食えるのと、ミシェルに会えるのとで期待に胸が膨らむってもんだ。
モニターに目を向けると、ようやく東部軍事基地の姿が見えてきた。
だが俺の思っていた光景がそこに広がってはいなかった、所々煙が上がり、燃え盛る炎まで見える。
おいおい、一体何が起こってやがる！まさかＥＲＲＯＲが現れたんじゃねえだろな？
だが俺はあのアビアの言っていた言葉も気になる、ミシェルを奪って来いと命令した人間の事だ。
まさかそいつが今、あの場所にいるんじゃないのか？
なら会いに行くしかねえ、実際行けば何が起こっているのかもわかるしな。
俺が東部軍事基地に近づいていくと、当然基地から俺の機体を迎撃しようとＮＦの機体が発進してくると思っていた。
思ってはいたが、ＮＦの機体が全く見当たらない。見えると言えば基地の周りに数多に散らばる機体の残骸ぐらいだった。
数機程度じゃない、何十機もの機体の残骸、どうなってやがる、一体ここで何が……。
易々と基地に到着した俺は機体から降りるとすぐさま基地の中に入

っていく。
入り口には兵士達の死体が転がっている……いや、死体じゃない。
まだ生きている？
虫の息の兵士達、見れば一人の兵士に足が無く、またもう一人の兵士には腕が無い。
「たす、けて……助け……て……」
今にも死にそうな女性兵士の助けを求める声、顔は真っ青で震える手を伸ばす彼女は俺の目の前で息を引き取った。
基地から聞こえてくる数々のうめき声と悲鳴、ＥＲＲＯＲの仕業でなければ人間の仕業と普通は考えるが、これは人間のする事か？
残虐で残酷な殺し方、すぐに息の根を止めず、相手に苦痛と恐怖を与えながらじわりじわりと殺していくとは……よほど悪趣味な奴がここに来たみたいだな。
俺は道端で横たわる兵士達を余所に、赤城のいる部屋に向かってみたが、その部屋には赤城の姿が何処にも無かった。
まさか赤城の私室か、でも俺は赤城の私室がどこかわからない。
俺が部屋から出ると、廊下の天井には黒い煙が漂い始めていた。まさかこの煙……。
何か気になる、俺は煙が上がっている所、煙の漂って来る方向とは逆の方向に走り始めた。
駆けつけてみると、扉の開いている部屋から煙と、炎が上がっている。
悪い予感ってのは的中するものだ、もしかすればこの部屋の中にミシェルがいるかもしれない。
燃え盛る炎等ものともせずに俺は部屋の中に入るが、部屋の中は炎と煙でよく見えない。
だが俺は、チラリと見えた赤髪の女の姿を見落とさなかった。
「赤城何してんだ！？さっさと逃げろ！」
床に座り込んでいる赤城は俺の声が聞こえないのかわからないが、ぼーっと空中を眺めているようにも見える。

煙で意識がハッキリしないのか？無理も無い、この煙の量なら普通の人間が吸えば意識朦朧としてもおかしくない。
俺と赤城との間で燃え盛る炎を跳び越えた俺はすぐさま赤城を担ぎ出そうと近づいたが、そこには全身の服が裂け、体中血塗られている赤城が座っていた。
「赤城……？」
何も答えない、微かに瞬きをするだけで、この炎の中から逃げ出そうともしない。
まるで自分から死を望んでいるかのように、死を受け入れるかのように座り続けたままだ。
赤城の姿は半裸に近く、裂けた服から見える赤城の素肌には所々血が滲んでおり、腹部は血で真っ赤に染まっていた。
「しっかりしろ！ったく、一体ここで何が起きたんだよ！」
部屋にはミシェルの姿が無い、だがまずは赤城だ、俺は軽々と赤城を抱かかえると一目散に部屋から出て行く。
抱かかえてみるとわかるが、赤城の体には全く力が入っていない、まるで人形みたいだ。
それに血が止まらない、これだけ体が傷だらけだというのに赤城の表情は変わらず、ずっと目を開けたまま黙っている。
抱かかえたまま医務室へと走ったが、医務室の前には負傷した兵士達が何人も運ばれている状況だった。
それでも預けないよりはマシだと思い医務室へと入ろうとした時、後ろから女性の声が聞こえ、俺を呼び止めた。
「ちょっと待ちなさい、高橋甲斐斗。今すぐ私の部屋まで赤ちゃんを運んでちょうだい、着いて来て」
後ろに振り返ると、そこにはあの忌々しい科学者、神楽が立っていた。
しかし赤城の事も考えて今はこの女に反抗している場合ではない、俺は言われるままに神楽の後を着いて行く。
研究所のような部屋に連れてこられると、部屋の奥の扉を開けて中

に入っていく神楽、俺もその部屋に入ると、手術台のようなものが真っ先に目に飛び込んできた。
「赤ちゃんをそこに寝かせて、早く」
赤城を手術台の上に寝かせて気付いた、俺の両腕には赤城の血がベットリと付いている。
それに赤城の顔も段々と肌色から青白くなっていた、このままでは出血多量で……。
赤城は服を着替える事無く、点滴を準備して赤城の腕に管を刺したり、輸血用の血まで一人で準備をしている。
「忙しい所すまねえが、一体ここで何が起こったんだ？教えろ」
神楽は無言で着々と手術の準備を進めていく、俺もここにいれば邪魔になると思い部屋から出て行くか……。
そう思って俺は部屋から出ようとした時、神楽が突然俺を呼び止めた。
「待ちなさい、所属不明の機体が1機、ここに来たわよ。軍は機体を発進させて迎撃しようとしたけど、すぐに壊滅させられたわ。
そして、その機体に乗っていた男がこの基地内部に入ってきたらしいの、それで基地はこの有様」
この女にしては良く喋ってくれた方だ、それにしてもたった1機で基地がこの有様なのは納得いかない。
だが赤城をこれ程までに痛めつけた奴を野放しにする訳にはいかない、ミシェルもその男に連れ去られている可能性もあるからな。
「わかった、それで。その男はもうここにはいないのか？」
「もうこの基地にはいない、一人の少女の髪を掴んで床に引き摺りながら機体に乗り込んで出ていったわよ。
誰なのかわからないけど、青髪の少女だったらしいわね」
青髪の少女……ミシェルか。これで決まったな、俺の今からしなければならねえ事が。
俺は無言で部屋から出て行こうとすると、後ろから神楽の声が再び聞こえてきた。

「北東に向かったらしいわよ、その機体」
部屋の扉が閉まり、神楽の声が遮断される。それでも必要な情報は聞けた、問題無い。
……それにしても、俺がこれ程怒りに震えるのも久しぶりだ、久々に血が見たくなってきたよ。
赤城を、そしてミシェルを甚振った愚かな人間を苦痛を与えながら血祭りにして殺してやる。
覚悟しておけ、最強の俺を怒らせたんだ、もう誰も俺を止められない。それが神だろうが、化物だろうが、俺自身でもな。
部屋から出た俺は真っ先に機体を止めていた場所に戻る、回りには負傷した兵士達が運ばれていたが気にはしない。
颯爽と操縦席に乗り込んだ俺は機体の電源を点けると、北東へと機体を走らせた、何の為に？そりゃ殺す為に。

第５３話　恐怖、残酷（後書き）

ＭＧ（マスターガーディアン）
主を守る為に存在する最強の守護神（ガーディアン）。
数多の世界を旅して主人を探し、契約を交わした者とはその者が死ぬまで守り続ける。
しかし謎が多く何処の世界から現れたのか、又何故主人となる人を探しに他の世界に向かうかは不明。
守護神（ガーディアン）と言うだけあって、その戦闘能力は桁違いであり、本気を出せば簡単に一つの文明を滅ぼす事が出来る程である。
ちなみにＭＧは第１から第６まで存在している。

第５４話　使者、罪悪

――「今日はとても楽しかった、それもこれも君と赤髪の子のお陰さ」

そう言って青年は操縦席の片隅に倒れている少女の頭を優しく撫でる。

青年の走らせる機体は荒野から廃墟が立ち並ぶ市街地へと入っていた。

道路には亀裂の跡が見え、荒れた高層ビルが幾つも並んでいる。

人気の無い町をまるで観光しているかのように青年は見渡していた。

「一つ、また一つ。人間は居場所を消されていく。

もう残りわずかじゃないか。どうするんだろうね、この世界の人間は」

少女の方に顔を向けるが、少女が俯いたまま動く様子が無い、青年は小さく溜め息をつくとまた廃墟を見渡している。

「君は本来の目的も果さずに限られた時間を贅沢に過ごしている、諦めたのかい？」

少女は何も答えない、それが気に入らないのか青年は少女の髪を掴むと自分の顔の近くまで引っ張り上げた。

「僕にとってはどうでもいい事だけどね」

青年の口元は笑っていたが、その目は少女を威圧するかのように開いていた。

「でもたっぷり楽しませてもらうよ、僕が満足するまでね……」

不敵な笑みで笑う青年は少女の髪から手を放すと操縦桿を握り機体を勢い良く走らせる。

だがその瞬間、機体の真横にあったビルを粉砕しながら１機の機体が突然中から飛び出してきた。

赤い目を光らせ黒い装甲が僅かに煌く、青年は突然の出来事に暫し呆気に取られていたが急いでその機体から自機との距離をとる。

「驚かせないでくれ、せっかく一人で街並みを観光していたというのに」
青年は余裕の表情を浮かべていたが、相手の機体は問答無用で手に握っている巨大な黒剣を振りかざした。
「君は……ああ、君か」
振り下ろされた剣を木の葉のように交わすと、腰に付けてある剣を鞘から抜き取りその剣先を黒い機体の胸部に向けた
青年は目の前にいる機体との通信を繋ぎ口を開く。
「アビアがしくじったみたいだね、まぁいいけど。そうだ、自己紹介をしようか。僕の名は……」
青年が名を言いかけた時、黒い機体が大剣を振り回し青年の機体の持つ剣を弾くとその勢いに任せて剣を振り下ろす。
それを青年は交わすと、一旦黒い機体から距離をとる。
「僕の話も聞かずに勝手に攻めてくるなんて。少しは落ち着きなよ……甲斐斗」
余裕の表情を浮かべながら甲斐斗の機体を見つめる青年、その右手は狭い操縦室でぐったりとしているミシェルの頭を掴んでいた。
「今日はもう疲れてるんだよ、戦闘ならまた今度にしてくれないかい？」
「黙れ」
スピーカーから聞こえてきた男の声は小さかった、しかしその声はたしかに青年の耳に届いていた。
次に青年が口を開こうとした時、モニターの映像が目の前の機体から一人の男の映像に切り替わる。
赤い目を光らせ、殺気を感じさせる気配、男は直接青年の眼を見つめているかのように睨んでいた。
「今日がお前の命日だ。今、ここで、俺がっ！……お前を殺す」
「その顔、僕は好きだな」
それを見た青年は口元が微かに笑っている、まるで余興を楽しんでいるかのように。

その青年の表情を見ていた甲斐斗は、既に我慢の限界が来ていた。
「だぁあああああまあああああれぇえええええええッ！」
咆哮する獣の如く、甲斐斗は声を荒げると機体を走らせ青年の乗る機体の元に向かう。
「やれやれ、本気で僕と、このトラディスカントに勝てると思ってるのかい？」
『トラディスカント』、青年の乗る赤黒くグロテスクな色をしている機体の名前。
トラディスカントの手に持っていた剣が一瞬にして巨大な鎌へと変化すると、その大鎌を向かってくる機体に向けて振り下ろす。
それを魔神は剣で弾くこうとするが、大鎌が予想以上に重く激しく火花を散らしながら剣と大鎌の刃が擦れあう。
だが大鎌は瞬時に姿を変え、今度は鋭く尖る槍へと変化すると、それを魔神の胸部へ突き刺した。
魔神の動きは一瞬に鈍るが、剣を振り上げると目の前に立っている機体へ向けて剣を振り下ろす。
すると胸部に突き刺さっていた槍は瞬時に形を変え、今度は巨大な盾へと変化すると振り下ろされた剣を防いだ。
「弱い……ああ、僕が強いだけか」
盾で振り下ろされた剣を弾くと、瞬く間に盾が剣へと変わり、剣先を魔神の胸部へ突き刺そうとする。
っが、魔神はその寸前で刃先を左手で受け止めると、空いている右手で手に持っていた剣を上空に放り投げた。
甲斐斗にとって唯一の武器、青年はその魔神の放り投げた剣を見ていたが、それが甲斐斗の狙いだった。
魔神は空いた右手を急いで背部に回すと、
普段リバインが装備しているアサルトライフルを取り出し、その銃口をトラディスカントに向ける。
青年がそれに気付いた時、既に機体には数発の銃弾を近距離から浴びせられていた。

だが銃弾は機体を貫通する事無く、腹部や胸部の装甲に傷を付ける程度しか効果が無かった。
「傷がついたね……」
トラディスカントは剣から盾へと武装を変え、一旦距離を置こうとしたが、魔神は獲物を逃がそうとはしない。
魔神は銃を投げ捨てると、空中に投げた剣を華麗にキャッチした瞬時に構えて逃げる獲物を追う。
「言っただろ、今日がお前の命日だってな」
盾を向けながら下がっていく機体に止めを刺そうと、魔神は剣を構えながら徐々に相手との距離を縮めていく。
あと少しで届こうとしていたその時、魔神に向けられていた盾は瞬時に形を変えると、忽ち機体の半分程の大きさのレーザー砲へと変貌する。
「甲斐斗、君は苦痛の中、悲鳴を上げながら消えるといい。さよなら」
引き金は引かれた、目の前まで接近していた魔神に向けて赤色の巨大な光線が放たれた。
魔神は大剣で瞬時に身を守ろうとしたが、その余りの威力に簡単に吹き飛ばされていき、
そのまま廃墟となった高層ビルへと激突する。
その衝撃で高層ビルは崩れ落ちていき、レーザー砲の反動で近くの建物に亀裂が入り始めていた。
トラディスカントの両手に持っているレーザー砲から光線を撃ち終えると、
最初の形であった剣に戻り、それをそっと鞘に収める。
キャノン砲の射線上にあった物は全て消えており、地形が大きく抉れている、
それを見て満足したのか青年の機体はその跡に背を向けた。
「ははは!その程度の力で僕に歯向かった君が悪いんだよ?じゃあね」

何事も無かったかのように青年の乗る機体は町から立ち去ろうとするが、
レーダーが反応を示しすぐに後ろに振り向いた。
そこに魔神は立っていた、機体全体に負傷した跡や傷が見えるものの、しっかりと二本の足で立っている。
魔神は無言のまま大剣を構えると、そのまま一気に加速し敵の機体を目指し走っていく。
それを見ていた青年は何故か武器を取らず、ただただ迫り来る魔神を見つめている。
「しぶといね、そんな性格は好きだけど。君にはもう飽きた」
トラディスカントが鞘から剣を抜き取ると、その刃先を魔神に向けた後、小さく構えなおす。
魔神は既に目の前にまで来ていた、魔神は敵機目掛け大剣を振り下ろす。
振り下ろされた剣を剣で受け流すトラディスカント、甲斐斗、そして青年ははその隙を逃さない。
二人の剣先が素早く動く、狙いは一つ、胸部だ。
「――――っ！？」
ミシェルが驚いた様子で目を覚ました、魔神の胸に剣が差し込まれたのと同時に。
モニターを目を向けると、赤い刃が魔神の胸を貫いている映像が映っている。
それを見て青年は微笑み、少女は絶句した。
細く小さな手を伸ばすが、その手が届く事は無い、名前を呼ぼうにも声が出ない。
魔神の眼に灯っていた光りが消え、手に握っていた大剣は姿を消し、その場に跪いた。
「完全に機能停止だ。あ、君は見たかい？命の消える瞬間を」
目が覚めた事に気付いた青年はミシェルの頭を掴むと、無理やりモニターの前まで引きずり出す。

「君の為に死んだんだよ？もっと悲しまないと」
「かい、と……」
青年の言葉にミシェルはモニターに映る魔神を見て表情が徐々に歪んでいく。
その青年はモニターの映像ではなく、悲しんでいるミシェルの表情を見て笑っていた。
苦痛や悲痛で歪む顔、恐怖や憎しみでの震える体、彼にとってそれを見るのは娯楽に過ぎない。
「良いねぇ、僕は好きだな、そういう表――――！？」
間一髪で交わした青年だったが、その剣先は微かに首を掠めていた。
「へぇ……驚いたなぁ……」
一本の剣は装甲を貫通、そしてモニターを突き破り青年の首元まで到達している。
その剣を手にできるのはただ一人、トラディスカントの胸部には甲斐斗が立っていた。
「ミシェルがいなけりゃお前なんて楽に殺せたんだよ。ゴミが」
剣を引く抜いた甲斐斗は剣を振るうと胸部のハッチを簡単に切り崩す。
青年の、そしてミシェルの目の前には、一本の剣を手にした男が姿を見せた。
「迎えに来たぜ、ミシェル」
「かいと！」
月夜を背にして見える甲斐斗の姿、ミシェル、そして青年には、一体どのように映っているのだろうか。
甲斐斗の姿を見たミシェルはすぐさま甲斐斗に腕を伸ばすと、甲斐斗はその小さな手を力強く握り締め、自分の元へ引き寄せた。
それを見ていた青年は余裕の表情を浮かべながら首に出来た傷を指で摩り、その指先は血で滲んでいた。
「すごいよ甲斐斗、まさか機体から降りていたなんてね。でも……それで僕に勝ったつもりかい？」

目の前に甲斐斗がいようと青年の表情は変わらない、それを見ている甲斐斗は薄らと笑みを見せた。
「似合ってるぜ、その傷」
剣の刃先が掠めて出来た首の傷からは僅かに血が滲み出ていたが、青年は構わず摩り続けている。
「それで、僕に興味は無いのかい？質問なら聞いてあげるよ？」
「無えな、お前は俺の、一人の犠牲者に過ぎなくなるんだからよ」
眼を光らせながらニヤニヤと不敵なを笑みを浮かべる甲斐斗に、青年の視線は真っ直ぐと甲斐斗の眼を見つめている。
「へぇ……それで、戯言はもう終わりかい？」
青年が左手を甲斐斗の方に向けようとした時、甲斐斗に抱きついていたミシェルが突然甲斐斗の体を押した。
甲斐斗は体勢を崩すとそのまま胸部から外に跪いている自分の機体の胸部へと着地する。
「降りた？　馬鹿だね、君の機体はもう動かないんだよ」
青年は操縦桿を握り締めると、胸部に突き刺していた剣を抜き取り、剣先を甲斐斗に向ける。
だがその瞬間、六つの青いレーザーが青年の乗る機体目掛けて放たれた。
逸早く気付いた青年はすぐさま回避運動をとるが、四方八方から飛んでくる攻撃に戸惑っている。
「ＮＦの新型……まさかここまで来るとはね」
『そこのアンノウン、直ちに武装解除し投降しなさい！』
レンの声と共に、フェリアルと無数の我雲、そしてリバインが廃墟と化した町に現れる。
「……いいさ、今日はもう疲れた。また今度にするよ」
機体は剣を鞘に収めると、向かってくるＮＦの部隊に背を向ける。
「甲斐斗、次会う時、君は僕に歯向かった事を後悔するよ。それじゃ」
そう言い残すと青年の乗る機体は町から一気に遠ざかっていく、そ

のスピードであっと言う間にレーダーの範囲から姿を消した。
機体の胸部で立ち尽くす甲斐斗、その横には甲斐斗の服に顔を埋めながら抱きついているミシェルが立っている。
そんなミシェルの姿を見て、甲斐斗は何も言葉を掛けてあげる事が出来なかった。

第５４話　使者、罪悪（後書き）

正式名　トラディスカント
全長－１８ｍ　機体色－黒赤　動力源不明
謎の青年が搭乗する機体、他の世界で作られており、その性能は計り知れない。
機体の色は黒薔薇をイメージしたかのように黒く、血の様な濁った赤色が特徴的。
武器は自在に形を変え、その場に応じた武器に変化させる事が出来る。

第55話　清、濁

――「ちょっと沁みるかもしれないけど、我慢してね」
微かに匂うアルコールの香り、医務室ならではの香りと言えるが、ここは医務室ではない。
ここはレンの部屋、医務室には重傷の患者が何人も運び込まれており、俺達の入る所など何処にも無い。
レンはアルコールの滲みこんだガーゼをピンセットで摘まむと、それをミシェルの傷ついた顔や腕に当てていく、
ミシェルは痛みを堪えているのだろう、目を瞑って必死に事が過ぎるのを待っていた。
……こうなったのも全て俺のせいだ。俺が側にいてやらなかったからミシェルをこんな危険な目に遭わせてしまった。
ミシェルは……俺を恨んではないのだろうか、肝心な時に助けてくれない俺を、生きる喜びや楽しさを教えると言った俺を。
結局俺は何もしてやる事が出来てないんじゃないのか?所詮俺はそれだけの男でしかないのか?
「はい終わり」
レンはそう言って救急箱に薬品を仕舞うと、救急箱の蓋を閉めて自分の部屋の棚に戻しに向かう。
ミシェルのおでこにはテープでガーゼが貼られていたが、ミシェルはいつもの様に帽子を深く被るとおでこの怪我が見えなくなった。
「ミシェル、大丈夫か?他に怪我は……」
軽く頷いてくれたミシェル、見た所目立った外傷は無いが。ミシェルはどこか痛みに耐えているような気がしてならない。
俺はそんなミシェルの姿を見て更に知らされた、いや、教えられたのだろうか。自分の無力さを。
ミシェルの目の前で片足だけ膝ずいた俺を見て、二人は何を思うのだろうか。

「ミシェル、全て俺のせいだ。本当にすまなかった……」
少なくとも、俺がミシェルの側に入ればこうなる事も無かったはずだ。
あの時俺はミシェルの安全より戦いを選んだ。それは紛れも無く俺の過ち……。
憎まれる事をしたんだ。殴られても構わない、怒られても構わない。
ミシェルには俺を殴る権利も、怒る権利もある。
跪きいた俺の目線はミシェルより少し下だが、俺とミシェルは互いに見つめあい視線をそらさない。
するとミシェルは右手をゆっくりと上に上げる、俺は直感で頬を叩かれると思い目蓋を閉じてしまう。
さあ殴れ、殴ってくれ、そして俺の眼を覚ましてくれ、ミシェル。
その時、頬ではなく頭を叩かれた……叩かれたのか？軽く手を当てられたような感覚だ、それに……俺の頭を撫でている？
目を開くと思った通り、ミシェルは俺をその小さな手で左右にゆっくりと撫でていた。
「ミシェル……どうして……？」
俺には理解出来ない、何故今俺の頭を撫でる。
「どうして？」
俺の言葉に首を傾げるミシェル、すると頭を撫でるのを止めて今度は跪く俺に抱き付いてきた。
抱きついているミシェルの顔は見えないが、俺には笑顔に思えた。
「ありがとう！」
「えっ？」
笑っている。
ミシェルの顔できていた傷を見てわかる、絶対に酷い事をされたに違いない。
それなのに、何故笑っていられる？何故守ってやれなかった俺を憎まないんだ？
「かいと、たすけてくれて、ありがとう！」

おいおい、今度はお礼の言葉を俺に言ってくれるのかよ。何か、調子狂うな……。
ミシェルは俺が助けてくれた事に感謝していた。
俺が思っていた以上にミシェルは純粋で、無垢な心なんだと改めて知らされる。
俺にとっては眩しすぎる存在、ミシェルにとって俺は、俺は……。
「ありがとう、ミシェル」
抱きついていたミシェルをそっと体から離すと、俺はゆっくりと立ち上がった。
「俺にはまだ謝らなければならない人がいる、今からその人の所へ行ってくるから、ここで待っていてくれ。
大丈夫、すぐに戻ってくる。それまで……レン、すまない。ミシェルを任せられるか？」
「え、あ……はい、私なら構いませんけど」
「ありがとう、すぐに戻る」
部屋から出た俺の足は止まることなく目的地へと向かう。次に行く場所は既に決まっている。
赤城のいる医務室、神楽の研究所らしき所だ。あの部屋に行って俺は赤城にも謝らなければならない。
俺が部屋に向かっていると通路では兵士達が慌しく走りすぎていく。
あの男、この基地で散々暴れまわったらしいが、人間の体をあれ程まで綺麗に切るのは正直不可能だ。
なのにそれをやってみせた、となると。あつはこの世界の人間じゃない、他世界の人間、それも魔法が使える人間か？
それならこの状況にも説明がつく、力の無い人間が幾ら戦おうと勝てるはずがない。
しかし、魔力があるのなら何故俺にミシェルを渡したんだ。魔法が使えるのであれば簡単に防ぐ事が出来たはず。
アビア、それにあの男。厄介な連中が増えたな……って、アビアはもう死んだか。

奴の機体が使っていた武器も気になる、時には剣、時には盾、時には銃と、様々な武器に変化していた。
あんな反則地味た事しやがって……それと、ミシェルを奪うのなら何か目的があってのはず。
っと、考え事をしていたら俺は既に目的地へとついていた。それにしても、普段使わない頭を使うと疲れるな。
俺は無言で部屋に入ると、部屋の中央のソファで横になっている神楽が真っ先に視界に映った。
寝ているのだろうか、部屋の扉が開いたのに全く反応しない。
「おい、寝てるのか？赤城の手術はどうなったんだ」
「……出て行ってくれる？」
何だ、起きてるのか。まぁ起きてると思ったから俺も声を掛けたんだけど。
「来て早々それは無いだろ、赤城はどうなったんだ？」
「手術は成功、命に別状は無いわよ」
相変わらず神楽は横たわったまま、手術で疲れているのかもしれないな。
「そうか、良かった……赤城が無事で。それで今赤城は何処にいるんだ？」
「奥の部屋で寝てるわよ」
奥の部屋……と言われても、どこの部屋かわからない。
俺の予想だと多分手術室だった所の横の部屋だと思う、大抵そうだろう。
赤城に会って話しをしなければならないが、今は寝ているのなら仕方がない、赤城が起きた時にゆっくり話しを聞かせてもらおう。
「ちょっと様子見に行ってもいいか？」
「ダメよ」
何気なく言った言葉に神楽は即答で答えた、拒否という形で。
「別に良いだろ、起こさないから。な？」
「絶対にダメ。今すぐここから出て行ってちょうだい」

おいおい、別に良いだろそれぐらい。コイツは相当俺を嫌ってやがるな。
「どうして駄目何だよ、理由を言え。納得したら帰る」
「邪魔だからよ、はいおしまい、言ったんだから出て行ってくれるかしら」
「納得はしてない、てか赤城を助けたのに俺は邪魔扱いかよ」
「助けた？何馬鹿な事言ってるの？全て貴方のせいってことがわからない？」
……たしかに俺がミシェルを赤城に渡さなければ、こうなる事は未然に防げたかもしれない。
だから何なんだ、過去を悔いるより俺には未来の為にやる事が山ほどある。
ここの兵士が死んだのは何故か、俺のせいか？違うだろ、俺が殺したんじゃあるまいし。
雑魚に興味は無い、力の無い人間が死ぬのは戦場でも何処でも辺り前だろ。
「赤城を危ない目に遭わしたのは俺のせいだ、それは悪いと思っている。だから俺は赤城に謝りたいんだ」
「……馬鹿の相手は疲れるだけどね。もう出てって、出て行かないと警備の人呼ぶわよ？」
ソファに横たわっていた神楽が徐に起き上がると、ポケットの中から小型の機械を取り出した。
やれやれ、もういい。この女がいない時にまた赤城に会いに行けばいい、今は一旦戻るか。
「ったく、戻ればいいんだろ」
後ろに振り返ればすぐ出口、数歩足を前に出せば簡単に部屋から出て行ける。
俺は渋々この部屋から出て行こうとした時、後ろから何かが倒れたような落ちたような・・・そんな物音が聞こえた。
赤城が起きたんじゃないか？って、言う前に、神楽は物音のした部

屋へと入っていく。
よし、俺も行こう。と、そんな風に軽い気持ちで俺は奥の部屋へと続く扉を開けた。
だが視界に入ってきたのは、そんな軽い気持ちで見れるものでは無い光景が飛び込んできた。
「赤城？」
大丈夫か？等と声を掛ける状況では無い、ベットで体を起こしている赤城を神楽が半ば強引に抱きしめていた。
その抱きしめられている赤城の体が見るからに震えているが、恐怖で震えているのか？俺には恐怖より怒りで震えているようにも見える。
体を動かそうとしていた赤城だったが、徐々に体の動きが止まってくる、すると神楽は右手をポケットの中に入れると、小さな拳銃に似た形の装置を取り出した。
「良い子だから、ね。今は休みましょ……私が何とかするから……」
その装置の先端をそっと赤城の首元に当てると、引き金を引く神楽、それと同時に赤城の体の力が突然抜けていくのがわかる。
眠らせたのか……？神楽は抱きしめていた赤城をそっと体から離すと、優しくベットに寝かせる。
その時見えた赤城の頬には、涙の流れた後が一瞬だけ見えた。
……何故赤城が怒りに震えて泣いている、あの男に怪我を負わされたからか？ミシェルを守る事が出来なかったからか？
違う、その二つを踏まえたとしても、後一つ何かがある。
思い出してみろ、俺が赤城を助け出した時の赤城の状況、状態を……。
「っ……」
唇を噛み締め、自然と自分の表情が固まっていくのがわかった。俺は……気づくのが遅すぎた。
それと同時に憎しみと怒りの感情が何処からとも無く湧き上がってくる、自分への無念さと、赤城に対しての罪悪感。

神楽は寝静まっている赤城の頬にそっと手を当てながら呟いた。
「だから言ったでしょ……貴方は邪魔だって、出てって。そして二度とあの子の前に姿を見せないで」
今の俺に拒否権は無い、否定する権利も無い、俺は黙って後ろに振り返ると赤城の寝ている部屋から出て行く。
そして足を止める事無く俺は神楽のいた部屋から出て行った、これ程まで自分の愚かさを味わされる体験は久しぶりだ……。
なら俺は、復讐という形で罪を償う……これは俺の償い方、俺が唯一まともにできる償い方かもしれない。

――「その傷どーしたのー？」
「何でもない。それと今は一人でいたいんだ、出て行ってくれないか？アビア」
鏡に向き合い、自分の首を見つめている青年、その青年の後ろには桃色の髪を伸ばす女性が立っている。
「機嫌悪そーだねー、私シャワー浴びてくる」
血塗れの服を着た女性はそう言い残すと部屋から出て行く、
それを確認した青年は突然拳を振り上げ目の前の鏡に目掛け振り下ろす。
鏡は割れ、破片が飛び散るが、破片が青年に触れる前に全ての破片が空中で停止すると、再び一枚の鏡に戻り元の状態に戻る。
「屈辱だよ、こんな傷を体に刻まれるなんて……」
振り下ろした青年の手からは血が流れるが、もう一方の手で傷口に触れると、その傷は瞬く間に完治した。
今度は自分の首元についている傷口に手を当てるが、その傷が治る事はない。
青年の顔に突然笑みが浮かぶ、何かを思いついたその表情は余裕に満ち溢れていた。

第５５話　清、濁（後書き）

アルトニアエデン
ＳＶの暮らしていた世界、アルトニアエデンの文明レベルは遥にこの世界を超えているものの。
材料はＳＶが下りた世界の物の使用している為に完全な機体を開発する事が出来ない。
アルトニアエデンはＥＲＲＯＲによって滅亡させられたが、その期間はわずか１年だったという。
ちなみに甲斐斗も元はこの世界の住人だった。

第56話　熱意、決行

――――「奴が動き出した」
朝の日差しが窓硝子を突き抜け部屋中を照らす、その日差しは洋間の天井から吊り下げられているシャンデリアに反射していた。
その煌くシャンデリア下で椅子に座っているゼストは小さく呟いた。
ゼストの隣の椅子に座っているアリスはその言葉を聞いて首を傾げるが、今がチャンスと思い握っているコントローラーを操作する。
「突然何言ってるの？はい、私の勝ちー」
二人の前にある巨大なテレビには2体のロボットが映っている、その1台がちょうど今破壊された所だ。
「やったーゼストに勝ったー！私が本気出せばこんなものよ！」
嬉しさの余りゲームのコントローラーを両手一杯に高々と上げていると、ゼストは徐に立ち上がり無言で部屋から出て行こうとする。
「ちょ、ちょっとゼスト！どこ行くのよ！」
アリスが止めようと声を掛けるものの、ゼストが止まる事は無い。
さっさと部屋から出て行ってしまう。
ちょうどその時、奥の部屋から茶菓子を持ってシャイラが部屋へ入ってくる。
「アリスお嬢様？あら、ゼスト様はどちらへ……」
「知らない、きっと私にゲームに負けたから拗ねてるのね」
ゼストの悔しがる姿が見たかったというのに、それが全く見れなかったアリスが不機嫌になってしまう。
「っね、今度はシャイラが一緒にゲームしよ！」
アリスの隣に座っていたゼストの椅子の上には寂しくコントローラーが置かれているが、それをアリスが取り上げると
茶菓子を持ってきてくれたシャイラに手渡した。
「わ、私ですか？『げーむ』と言うのは余りした事がありません……」

渡されたコントローラーをシャイラはまじまじと見つめるが、コントローラーの正しい握り方すらわからない。
「説明書見る？簡単だからすぐ出来ると思うけど」
コントローラーの次に説明書を手渡されるシャイラ、軽くページを捲っていくと、それを素早くアリスに返した。
「ありがとうございます、操作方法はわかりました。やってみましょうか」
「早いわね、てか早すぎよ！まぁいいわ、少しは手加減して戦ってあげるから」
アリスはやる気満々だが、シャイラがアリスに勝つ事はまず無い。別に操作が不慣れという理由ではない、勝ってしまうとアリスが機嫌を損ねてしまうのをわかっているからだ。

――「入るぞ」
返事を聞かない内に扉を開けて部屋の中に入るゼスト、それを待っていたかのようにフィリオは椅子に座っていた。
「待っていました、そちらに掛けてください」
フィリオと向き合うような形で置かれている椅子に座ると、ゼストは真っ直ぐ視線を向けフィリオと目を合わせる。
「奴がこの地で動き出した、手を打たなければ厄介な事になる」
「あの方がこの世界に来てしまった以上、ゆっくりはしていられませんね」
「『神』はどうする、第１ＭＧ無しで儀式を行なう気か？」
「いえ、それは危険すぎます。私達にはもう後がありません、慎重かつ冷静に動いていきましょう」
「第１ＭＧを捕らえるのが第一条件。動くか？」
「今の所ＢＮもＮＦもＥＲＲＯＲも動きは見せていません。動くなら今が良いですね」
フィリオはゼストを見たまま話していたが、ゼストが急に視線をフィリオから反らし立ち上がった。

「どうなされました？」
「あの男、魅剣愁の事が気になるか」
「えっ、そ、それは……」
愁の名前を聞いた途端に動揺しだすフィリオを見て、ゼストは小さな溜め息を吐く。
「あの男の事は忘れろ、奴はもうここには戻ってこない」
そのゼストの言葉にフィリオは顔を上げるとゼストと目をあわした。
「私は諦めません、忘れもしません。あの方は必ず帰ってきます」
真っ直ぐ向いているその目を見たゼストは揺るぐ事無く言葉を返します。
「信じれば信じる程、裏切られた時のショックが大きくなる。
ＭＧに関してはそちらに任せる、我々は奴の動きを辿る、またアリスと別々になるが、構わないな」
「はい、わかりました」
フィリオの返事を聞いたゼストは無言で部屋から出て行く、その後ろ姿を見つめていたフィリオは小さく溜め息をついた。
そのフィリオの様子を部屋の隅の物陰に隠れて見ていた葵とエコはフィリオに気付かれないように小声で喋っている。
「ゼストの野郎忘れろとか訳わからねえ事ぬかしやがってぇ……愁は俺達の仲間だろ！」
「私達の仲間……だったわね。今はもう違う……」
「エコ！お前もそんな冷たい事言うのかよ！」
小声ではあるが身振り手振りで怒る葵の姿は既にフィリオの視界に入っていた。
「あの……二人とも？そんな所で何をしているのですか？」
「やべっ、何で見つかったんだ？」
葵の素のボケにエコは構わずスルーしてフィリオの元へ歩いていく。
「ごめんなさい」
そう言ってエコはペコリと頭を下げる、葵もすぐさまエコの横に立つと頭を掻きながら視線をフィリオから反らしながら口を開いた。

「その……わりぃ。俺とエコも気になっててさ、最近フィリオ元気無いじゃん」
最近フィリオが笑顔を見せなくなり、葵とエコは心配していた。
多少笑ってくれる時もあったが、その後すぐに表情が沈み、暗くなってしまう。
「心配してくれていたのですね、ありがとうございます。そしてすみません、心配をかけてしまいまして……」
「フィリオの謝る事じゃねえさ。さってっと、エコ。準備に取り掛かるか」
エコは小さく頷くが、フィリオには何の準備かわからず頭をかしげている。
「準備、ですか？」
「ああ、ゼストが言ってただろ。『俺達はＭＧを捜索、奪還しに動く』って。だから俺達は……な？」
「善は急げ……フィリオ様。ご命令を」
葵とエコの顔を見てフィリオは改めて知らされる。
今この場に愁がいなくとも。フィリオの側には共に歩んできた忠実な部下、仲間がいる。
少しばかりか、フィリオの表情は明るさを取り戻した気がした。

――「妹が……生きてたのか？」
「ああ、だが俺の事も忘れていた。それに今はＮＦにいる」
甲斐斗が出て行った後の基地で、羅威は久しぶりに穿真と会って話していた。
恐らく穿真の部屋だと思われる場所で、羅威は今までの出来事をエリルの話を除き全て穿真に話していた。
「良かったな、まず生きていた事に喜ぼうぜ？」
「喜んでいる場合じゃない、俺は今すぐにでも玲を取り戻したいんだ」

真剣な面持ちの羅威に穿真はソファに寝そべりながら携帯電話に文字を打ち込んでいる。
「具体的にどーするんだよ、お前は」
「玲を助けに行く」
「一人でＮＦの東部軍事基地に殴りこみでもする気かぁ？」
「いや、その必要は無い。自分で言うのも変だが俺に名案がある」
携帯電話を折りたたむと、それを胸ポケットに仕舞う穿真、その顔は何か面白い事が起こるのを期待しているかのように笑っていた。
「協力するぜ。それで、一体何をする気だ」
「東部軍事基地の領域ギリギリの所で俺が暴れ、敵をおびき寄せる。前に紳が使ったあの作戦だ」
「誘導作戦か、なるほどな。んでも今思ったんだが。俺達は勝手に動いていいのか？
ＳＶがまた仕掛けてくるかもしれないんだぞ、貴重な戦力を紳は分断させてくれるのかねぇ」
「早急に終わらせるのを条件として動けば良い。
それに作戦が成功すれば敵の新型機を奪え、相手の戦力を削ぐ事が出来る。これを紳に言えば納得してくれるはずだ」
「んじゃその辺は羅威に任せる、んで作戦はいつ決行するんだ？」
「今日出発だ、作戦決行は明日になるだろう」
早急に終わらせればいいと聞いて今週からだと思っていたが、まさか明日だとは思っていない穿真は一瞬呆気にとられていた。
「何ともまぁ、羅威。お前いつからそんな大胆になっちまったんだ」
「早ければ早い程この作戦は良い、事が始まる前に事を済ませた方が良いだろ」
羅威は冷静な面持ちで話しを済ませる、既に頭の中では計画図が完璧に描かれているのだと思えるぐらいだ。
「へいへい、でも俺今日用事あって行く所あるんだよ。俺は途中からの合流で構わないか？」
「構わない、今から俺は紳の所へ行って話してくる。それじゃ」

「おう、またな」
穿真はへらへらと笑いながら手を振って部屋から出て行く羅威を見送った後、
胸ポケットに閉まった携帯を再び取り出すと、折りたたみ式の携帯電話を開き画面の文章に目を通していた。

――羅威が紳のいる部屋に向かっている途中、突然後ろから肩を叩かれる。振り返るとそこにはクロノが立っていた。
「羅威、久しぶりだね。ここに戻ってきたのに全く顔を見せないから皆心配していたんだよ？」
「すまない、心配を掛けるつもりは無かったんだが。俺にはやらなければならない事があってな……」
羅威は後ろに振り返っているが、体はやや横に向けてクロノの話しを聞いていた。
出来れば早く紳の所へ向かい、話しを済ませたい。そんな気持ちの表れだろう。
「それなら僕達部隊の皆も協力するよ」
「ありがとう、だがこれは俺個人の問題だ。皆を巻き込む訳にはいかない」
「羅威、これ以上僕達に心配を掛けないでよ。僕も雪音さんも香澄さんも。同じ仲間じゃないか。
もう少し僕達を頼りにしてほしい……頼む、僕達にも手伝わせてくれ」
クロノの顔をじっと見つめる羅威、ふと視線が腰のポケットの方に向く。
ポケットの口からは携帯のアクセサリーが一本垂れ下がっている。
「まさか、穿真から何か聞いたのか？」
「えっ？……う、うん。実は穿真からメールが来てて」
どうやらクロノは穿真から話しを聞いたらしく、それで羅威を探していたのだ。

羅威は視線を反らし何処にもいない穿真を睨みつめるように廊下を見つめた。
「あいつ……クロノ、穿真からどこまで聞いているんだ」
「君が大切な人を助けに行く事しか聞いてないよ」
「……それだけか？」
「それだけさ」
真剣な面持ちだったはずのクロノの表情に何か余裕が現れている、それは羅威も同じだった。
羅威は右手をそっとクロノの前に出すと、クロノはその手を右手でがっちりと掴み、握手を交わした。
「クロノ、やると言ったからには最後まで付き合ってもらう」
「うん、覚悟は出来てるよ」

――午後1時、話しは羅威とクロノの二人が終わらしてきた。
兵士達は基地の格納庫に止まっている中型の戦艦に5機の機体を詰め込み作業をしている。
「はぁっ？穿真は来ないの？」
そんな作業中、香澄が装置を背にして後ろに振り返り、怒った表情をして立っていた。
香澄の前には書類を片手に持っている雪音が驚いた様子で香澄を見つめている。
「そ、そうみたいです。何か用事があるらしくて。後から合流するって言ってましたけど」
「へぇ、そう、わかった。ありがとう」
そう言って香澄はまた振り返ると装置を動かし詰め込まれていく機体の状態を確認する。
話が終わったはずだが、雪音はまだ何か言いたげな表情でその場に立っていた。
「あの！……一ついいですか？」
「何？忙しいから手短に頼むわね」

今度は振り返らずに雪音の話しを聞く香澄だが、雪音は構わず話を続ける。
「香澄さんって、羅威さんと喧嘩してましたけど、仲直りはしたんですよね？だからこの作戦にも参加してるんじゃ……」
「喧嘩？別に喧嘩なんてしてない。私は隊長の命令に従ってるだけ。それで、話はそれだけ？」
「は、はい。すみません、作業中なのに……それでは」
雪音は小さく頭を下げた後、機体が詰め込まれた戦艦の入り口に向かって歩いていく。
丁度その頃、既に戦艦に乗って部屋で待機している羅威が隣に座っているアリスに何かを指示していた。
アリスは机の上に置いてある携帯電話を取ると、それを羅威に手渡した。
「大丈夫？私がやるよ？」
「これぐらいなら俺でも出来る」
羅威は携帯電話を右手でゆっくり掴むと、微かに震える親指で一つずつ数字を入力していく。
「愁と連絡取るのは初めてなの？」
「忙しかったからな、本当はあいつのいる町に行って直接話しがしたかったが。今は電話で精一杯だ」
電話に数字を入力するだけの精一杯の羅威、最後の数字を打ち終えた後、そっと耳元に電話を近づける。
コール音が数回鳴った後、電話が繋がり、あの懐かしい声が聞こえてきた。
『もしもし、羅威？』
「ああ、俺だ。久しぶりだな、愁。元気にしてるか？」
電話が繋がり、久しぶりの愁との会話に嬉しいのだろう、羅威の表情が明るくなる。
『俺は元気だよ、それより羅威、調子はどう？怪我とかしてない？』
「おいおい、それは俺の台詞だろ？お前こそ最近の暮らしはどうな

んだ？」
『俺は元気だよ、それより羅威、調子はどう？怪我とかしてない？』
「おいおい、それは俺の……って、愁？」
『冗談だよ、久しぶりに羅威と話せて俺も嬉しいからね。エリルや彩野さん、穿真は無事かい？』
「穿真は無事だ、エリルは……今はＮＦの捕虜になっている。彩野は――」
それ以上は自分の口から言えなかった、彩野の事を思い出すと、あの彩野の死に様が再び脳裏に映る。
「殺された。意味も無く、まるで虫けらのように……っ！」
『羅威……』
「俺は殺した相手を絶対に許さない、必ずこの手で殺す、彩野の仇、いや、散っていったＢＮの兵士達の為にもな」
『羅威は……強いね、俺も見習わないと。あっ、ごめん。ちょっと用事があるからそろそろ……』
「ああ、また電話する。それと、近々直接会いにいくよ。その時はカレーを頼むな」
『了解、とびっきり美味しいのを用意しておくよ、じゃあね』
短い会話だったが、これが最後ではない、またいつでも話そうと思えば話せる。
羅威は電話を切るとそれを机の上に置く、二人の会話を聞いていたアリスは複雑な表情をしていた。
「アリス、エリルと玲を救った後。皆で愁の所へ行こう」
「うん、行こうね。皆で、必ず……！」

――基地から出発する戦艦、その戦艦を司令室から見届ける紳。
その後ろにはダンが立っており、基地から遠ざかっていく戦艦を目で追っていた。
「いいのか？貴重な戦力を分断させて、いつＳＶやＮＦの奴等が来るかわからないんだぞ？」

「奴にも奴でやるべき事がある、それと戦力の方も心配無い。本国から例の物が届いた」
ダンは胸ポケットから銀色の光沢をしたシップルなライターを取り出し、銜えている煙草に火をつけると、後ろに振り向き小さく煙を吐き出す。
「それじゃあ取りに行って来るか、その例の物とやらを」
「そうしてくれ、俺は新種のＥＲＲＯＲが出た場所へ向かう、受け取り次第合流しろ」
「りょーかい」
返事をした後煙草を吹かしながらそのまま司令室から出て行くが、紳は未だに離れていく戦艦を見つめ続けていた。

――目的もわからない。
意味もわからない。
理由もわからない。
サイレンの音が艦内に鳴り響く、基地を出て１時間、レーダーの範囲内に１機の敵機の反応を確認。
相手は赤い機体に、鋭い角を生やした一人の鬼神。
鬼神に合わせＢＮの艦隊から出てきた機体は黄金の鎧を身に纏い、また隣に立っている機体は黒い装甲を露にしている。
「まさかお前からこっちに来てくれるとはな、探す手間が省けた」
「相手は１機だけど強豪、地と空から同時で攻めるよ。羅威」
黒葉花が空高く飛びたち、神威が大地を駆け巡る。その時香澄からクロノへと通信が繋がる。
『私達も機体の準備が出来次第発進します、それまで持ちこたえてください』
「香澄さん、その必要は無いよ。あの機体は僕達二人が落とすから、君達二人はその場で待機してて」
クロノがそう命令すると、それに便乗して羅威が口を挟む。

「艦を停止させるな、俺達は後で合流する」
『クロノ隊長、私達は戦力外という事ですか？同じ部隊のメンバーとして出撃するべきでは……』
「僕達がいない今、艦は誰が守るんだい？二人を必要としているからこそ待機していてほしいんだ」
『……わかりました』
香澄との通信が終わると、クロノの表情が険しくなり、機体を急降下させる。
それと同時に神威が出力を上げ加速すると、一気に鬼神との距離を縮める。
急降下をしながら機体の先端からレーザーライフルで鬼神を狙い攻撃を仕掛ける黒葉花。
神威は両手にプラズマを纏わせるとそれを鬼神の胸部へと放つ。
その二人の攻撃を機体に触れる直前に次々に交わしていく鬼神、既に神威の目の前に来ており、両機同時に拳を突き出す。
ぶつかり合う拳からは火花と稲妻が飛び散り、空間に衝撃が走る。
黒葉花は相手の隙を狙い空中から攻撃を仕掛けるが、それに気付いた鬼神は神威と距離をとるのかと思いきや、更に神威との距離を縮めた。
「っく、今撃てば神威に当たる可能性がある。それなら！」
両手に持っていたライフルを背部に仕舞うと、腰に備えられている２本のＬＲＳを抜き取りそれを両手に黒葉花が上空から急降下する。
そして二人の間に割り込む形で地面に降り立つと、両手のＬＲＳを目の前の鬼神に振り下ろす。
だが鬼神はＬＲＳを左右の腕で受け止めると、それを捻り二本のＬＲＳを折って見せた。
「今だ！羅威！」
黒葉花は瞬時に可変すると空高く舞い上がる、そして鬼神の目の前には両腕に稲妻を走らせ金色をしたプラズマを纏う両手を鬼神の胸に当てた。

「終わりだ、灰になれ」
両手から放たれるプラズマ、鬼神は抵抗する事も出来ず機体全体に電流が流れる。
痙攣するかのように鬼神の手足が動くと、機体の装甲や間接から白い煙がたちはじめる。
その圧倒的な威力に神威に乗り込んでいる羅威でさえ苦痛で顔を歪めている、だが羅威は決して出力を下げようとはしない。
「お前にも味わってもらうぞ、俺達と……彩野の受けた苦痛を、全部ッ！」
操縦桿を前に倒し更に出力を上げる羅威、2機の周りには渦巻くように雷が走り、晴天の中雷鳴が轟く。
鬼神の眼から光りが消えかけようとした時、鬼神の振りかざした右腕が神威の胸部を殴り飛ばす。
その光景を見ていたクロノと羅威は驚愕をしていた、無理もない。
「うぐぁあああっ！馬鹿な、アレだけの超高圧電流を受けてもまだ動けるというのかッ？！」
信じがたい事実に驚きを隠せない羅威、既に機体のエネルギーは先ほどの攻撃で大半を消費しており、エネルギーが切れるのは時間の問題。
それを見ていた黒葉花はすぐさま神威の元に降りると、倒れた神威を起こしにかかる。
「ありえない……機体ですら普通は耐える事の出来ないはずのあの電撃を。操縦者は耐え抜いたのか？」
未だに疑問をもつ羅威に、クロノも無線で答えていた。
「僕も信じられないよ、見て羅威。赤鬼が動き出そうとしている」
ぎこちない動きをしながらも鬼神は体を動かし調整を整えている、クロノは背部のレーザーライフルを掴むと、それを構え銃口を鬼神に向けた。
「倒すなら、今しかない！」
引き金が引かれ、青光りしたレーザーは一直線に鬼神の元へ向かう。

次の瞬間、両手の甲に鍵爪を着けた機体が鬼神の前を横切る、鬼神は腕を引かれその場から離れると、黒葉花の攻撃を交わした。
『間一髪ってのはこの事だな、全く無茶しやがって。おい愁、聞こえてんのか?』
返事が無い、しかし通信は繋がっており、機体も微かに動いていた。
『お前今まで何処に行ってやがった。勝手に行方を晦ましやがって。戻ったら説教だからな』
然程怒る事も無い葵、すると今まで黙っていたエコが口を開く。
『愁、艦に戻って……フィリオが待ってる……』
『俺は……お、れ……は』
『愁?』
『俺はぁあああああああああああッ!』
操縦席で雄叫びを上げる愁、それに合わして鬼神の眼光が強まり、供に雄叫びを上げた。
「羅威、赤鬼が来てるよ。そこから下がって」
クロノが通信で呼びかけるが、羅威は終始無言で立ち尽くしている。
その様子に気付き黒葉花がすかさず神威の元へ駆け寄る。
「どうしたの?何か機体に異常が――ッ!?」
神威の胸部には亀裂が走り、大きく凹みが出来ている。
その部分から音を立てながら電流が放電している状態が続いていた。
「羅威!機体は動くのかい!?」
「……動かない、出力も……上がらないな」
今の状況を羅威は冷静に伝えると、機体の腕だけを動かし迫り来る鬼神と戦おうとするが、その目の前に黒葉花が立ちはだかった。
「クロノ!?そこをどけっ!」
「でも羅威を守るにはこうするしかない、僕が奴の拳を受け止める」
「止めろ!幾らお前でもそれは危険すぎる!」
モニターに目を向ければもう鬼神はそう遠くない場所にまで走ってきている。
その鬼神の攻撃をクロノは黒葉花で受け止めようとしている、危険

な事だがこうしなければ羅威が危ない。
羅威はどうにかして神威を動かそうと操縦桿を動かすが、羅威の思いとは裏腹に機体は動こうとしなかった。
「黒葉花では赤鬼の拳を受け止めるのは無理だ、それはお前もわかっているはず！」
元々黒葉花は無花果をベースとして開発された機体、機動力重視であり、機体の硬度は我雲と大差変わらない。
「今君を助ける方法はこれしかない、僕はもう仲間を失いたくはないからね」
既に覚悟が出来ているのだろうか、クロノは落ち着いた様子でそう言い残すと黙って通信を切った。
「お、おい？クロノ……？」
両手で持っているレーザーライフルで鬼神を狙う黒葉花だが、攻撃は悉く避けられ、徐々に距離を縮められていく。
すると黒葉花はライフルをその場に捨てて両手を開き、鬼神を迎え撃つ体勢をとる。
「クロノ！クロノッ！！そこをどけ！このままではお前が死ぬぞ！？」
羅威の声が届くはずもなく、機体を動かそうと操縦桿を握るが、その腕の力が抜けていくのを微かに感じた。
「動け神威！俺は守る為に戦場に出ているんだぞ！？頼む、動いてくれ……ッ！」
同様に、全身から力が抜けていくのを感じる。焦りが募り、目の前の出来事を予測してしまう。
まるで連鎖のように次々に死んでいく仲間、その仲間がまた一人目の前で消えようとしている。
もはや自分が何を叫んでいるのかすらわからない。
ただ見えたのは、鬼神が拳を振りかざし、黒葉花の元に飛びかかろうとしている光景だった。

――突如大地に亀裂が走り足場が不安定となる黒葉花と神威、まるで巨大な落とし穴に落ちるかのように地面の中へと落ちる。
そして機体が落ちると反対に、1機の機体が大地を切り裂き現れた。
「遅れてすまねぇな、羅威」
聞き覚えのある声に羅威はすぐさま名前を言ってみせた。
「穿真!?お前なのか!」
「ああ、野入穿真、そして俺の愛機エンドミル。只今見参!後は俺に任せろッ!」
両手は鋭い円錐の形をした二本のドリルが付いており、その右手のドリルの先端が鬼神の右手とぶつかり合う。
激しく火花が辺りに飛び散る中、鬼神は一歩も引かずにドリルの先端に右手を突き出している。
だが次の瞬間、ドリルは鬼神の右手を砕くと右腕から右肩まで一気に貫き通す。
鬼神は残りの左腕を動かそうとするが、左肩をもう一方のドリルに貫かれ爆破、
両腕を失った鬼神はすぐさまその場から下がろうとしたが、穿真は逃さなかった。
「これで終わりだ、あばよ」
回転するドリルは糸も簡単に鬼神の腹部を貫く。
崩れ落ちる機体、強烈な閃光を腹部から放った後、鬼神の眼から光りが消え、その場で爆発した。
穿真の乗る機体はその爆風をものともせず、その場で立ち尽くしている。
「あんな強敵があっさり死にやがった。死なんて呆気ないもんだな……羅威、クロノ。無事か?」
その場から振り返る機体、神威と黒葉花は体勢を立て直すと落ちていた穴から地面へと浮上する。
「俺は平気だ」
「僕も何とか無事だよ、それにしても、その機体は?」

両手に二本の巨大なドリルを装備している灰色の機体に二人の注目が集まる。
「この機体は本国から送られてきた物さ、どうだ？俺にぴったりの機体だろ？」
「それで遅れると言っていたのか、なるほどな……」
「正義のヒーローは遅れてくるもんだぜ」
「二人とも、話しはそれぐらいにして。敵はまだ残っているんだよ」
荒野に立ち尽くす青き獣は健在している、だが動き出す気配は感じられなかった。

――「撤退？何言ってやがる、俺はここで奴等をぶっ殺すッ！」
「葵、落ち着いて……」
「落ち着いていられるかよ！愁が、愁が殺されたんだぞ！？」
鬼神の残骸から煙が上がる光景を見て、葵はすぐさま動き出そうとしたが、それを止めたのがエコだった。
「いいから落ち着いて……」
ふとエコがモニターを覗くと、３機のＢＮ機は背中を向けずその場からゆっくりと離れていく。
恐らく警戒されているのだろう、エコは操縦桿を握ったまま動こうとはしないが、葵は震える手で操縦桿を握り、必死に感情を抑えようとしている。
その感情を抑えるかのように、エコはそっと口を開いた。
「愁は……生きてる」

第５６話　熱意、決行（後書き）

正式名ＭＦＥ－エンドミル　（Ｂａｃｋ　Ｎｕｍｂｅｒｓ製）
全長－２５ｍｍ　機体色－黒緑　動力源－光学電子磁鉱石
本国から届けられた穿真専用の機体、何と言っても特徴的なのは両手に付いてある巨大なドリル。
ドリルの大きさは機体程あり、その破壊力はあのアストロス・オーガの拳を砕く程である。
両手両足にはチェーンソーの歯が出るようになっており、両足の歯はＥＲＲＯＲが上るのを防ぐ為に付けられてある。
ドリルは切り離し可能であり、進行方向に向けて勢い良く飛ばす事が可能。
動力源である光学電子磁鉱石（レジスタル）の力を使い磁力を最大限にまで高めている為放ったドリルは元の位置に戻す事が可能。
又自在にコントロールする事が出来る。

第57話　解放、選択

――「エコ！それは本当か？！」

『愁は生きている』このエコの一言に葵がすぐさま食いつく。

エコは冷静な面持ちで装置を触ると、モニターの画面がサーモグラフィーで見る画面へと変わる。

鬼神の残骸から微かに動いている熱源反応、恐らく機体の下敷きか、それとも閉じ込められているのだろう、外からは全く見えない。

「ほらね……後はＢＮが離れた後。回収すればいい……」

そう言ってライダーが少しずつ鬼神の残骸へと近づいていき、ゆっくりと機体の破片を持ち上げていく。

そこには仮面に亀裂が走り、服は焼き焦げ布はボロボロに破られている愁の姿があった。

微かに腕を伸ばしているが、自分から立ち上がることも出来ず、ただただ手を伸ばしている。

葵はすぐさま愁をライダーで回収すると、こちらに向かってきている艦にまで急いで戻っていった。

フィリオの入る艦へと戻ったアストロス・ライダーはすぐさま愁を下ろすと、胸部のハッチを開け中から葵とエコが降りてくる。

格納庫で倒れている愁は震える足で何とかその場から立ち上がろうとしている、それを見て葵が肩を貸そうとしたが、葵より素早くエコが愁の前に立った。

「魅剣愁。フィリオの所に、来て……」

「おい待てよエコ、愁は今危険な状態なんだぞ？治療の方が先だろ！」

葵の言葉を無視してエコは小言で何かを唱えると、愁の肩にそっと手を置こうとする。

それを見た葵が愁の肩に手を伸ばした時、三人は一瞬にしてフィリオのいる部屋へと移動した。

「お待ちしておりました、愁」
フィリオは落ち着いた様子で愁の前に立っており、その愁の後ろには葵とエコが二人横に並ぶような形で立っていた。
愁は傷ついたボロボロの体で跪き口を開いた。
「殺してください……」
力の感じられない愁の一言は葵とエコの表情を曇らせたが、フィリオは表情を変えずじっと愁を見つめている。
「俺は……もう俺じゃない……あの日から、俺はもう、俺じゃなくなった……」
今まで自分がしてきた事は正しかったのか、と聞かれると。恐らく愁は首を横に振るだろう。
仲間を、友を殺し。裏切り、人々を躊躇い無く殺していく自分の姿を、愁は知っていた。
「俺は殺したくなかった、殺したくなんか……なかったのに……」
なら何故殺す？家族がＢＮに殺されたからか、自分の全てを捧げてきたＢＮに、自分の家族を殺されたからか。
なら……無理も無い……？
……もう自分が昔の自分でない事は、一番自分がわかっていた。
「貴方は戦場に立つ時、貴方は何を想いになられてるのですか」
「俺は……復讐の為に戦ってた……ただ憎くて、憎くて……それから俺は、ずっと復讐の為に戦って……」
「そんな自分が、嫌いなんですね」
フィリオの言葉に小さく頷く愁、もう後戻りは出来ない、自己嫌悪に襲われ、ただひたすら戦う事しか出来ない。
そんな自分を止める事も出来ず、仲間を救えず、大切な人も救えず、戦う意味すらわからなくなってきていた。
「でも私は、愁が好きですよ」
「えっ……？」
下げていた頭を上げると、目の前にフィリオが跪き、自分と同じ目線で座っていた。

「愁は取り戻しました、自分の真心を、感情を。貴方はもう、人形ではありません」
愁の右手をそっと掴むと、フィリオは少しずつ立ち上がろうとしていた。
「立って、そして仮面をお取りになってみて下さい。そうすれば、貴方には見えるはずです」
フィリオの声と、優しく引き上げられる右手に、愁は少しずつその場で立ち上がっていく。
立ち上がった愁の目の前には優しく微笑んでいるフィリオが愁を見つめている、
そしてゆっくりと両手を自分の仮面へ持っていくと目を閉じ、今まで被り続けていた仮面をそっと取り外した。
仮面を外し、閉じていた目蓋を開いた瞬間、視界が眩い光に遮られ、一面真っ白な空間が映る。
だが次に瞬きをした時、そこにはさっきと変わらぬフィリオが立っていた。
後ろを振り向けば、エコと葵が軽く微笑んだ表情で見つめている。
その笑顔の映る光景が微かに滲んでいく、無意識に目からは涙が零れ落ちていた。
「見えたのに、嬉しいのに……涙が、止まりません……」
涙を零す愁を、フィリオはただただ抱きしめ続け、愁の持っていた仮面が手から滑り落ちるように床へ落ちると、仮面は綺麗に割れ散った。

――その頃、無事戦艦に帰還した羅威達3人は香澄達のいるブリーフィングルームにいた。
「この俺、穿真様があの赤鬼を倒したんだぜ?これは昇格間違いなしだな」
一人天狗状態の穿真に、雪音は尊敬の眼差しを送っており、三人も穿真の活躍に驚いている所だった。

「たしかに穿真の活躍はすごいね、何たってあの赤鬼を倒したんだから、きっと表彰が貰えるよ」
クロノが笑顔でそう言うと、穿真は更に天狗になる、香澄は穿真の活躍もそうだが、穿真の乗ってきた機体に興味を示していた。
「ねぇ、あんたの機体って本国から送られてきたでしょ？何であんたに送られたの？」
「んなの決まってるだろ？日頃の活躍が認められたって事だ、いやっほぅ！」
納得がいかないのか、香澄は複雑な表情のまま穿真を見つめている。
相変わらずの穿真に羅威も呆れた……というのか、安心したというのか、ほっと小さな溜め息を吐いた後、そっとゆっくりと手を上げ、クロノの肩を小さく叩く。
「クロノ、少し話がある。来てくれないか？」
「……ここでは話せない事かい？」
まるで羅威の言おうとしている事を知っているかのような態度に、羅威はクロノの耳元に顔を近づけると、小声で話した。
「もうあんな真似は絶対にするな、いいな？」
その問いかけにクロノは小さく頷く、羅威はクロノから離れると、今度は穿真の方に向かう。
「穿真、昇格したら勿論奢ってくれるよな？」
「ん？そうだな、だがその前に俺の昇格パーティーをお前等が開けよ！」
パーティーという単語に雪音が逸早く反応を見せ、突然手を上げた。
「あ！それいいですね！この作戦が終わった後。皆で開きませんか？」
「僕も賛成です、こんな時だからこそ。してみた方がいいと思うからね」
雪音の案にクロノが賛成の意を示すと、香澄も小さく頷き、穿真も乗り気になっている。
「っしゃあ！そうと決まれば羅威、明日の作戦、絶対に成功させよ

うな」
勢い良く羅威に手を差し伸べる穿真、羅威は力の入らない手でゆっくりと穿真と握手交わす。
「ああ、必ず成功させる」

――東部軍事基地、前に武蔵から借りていた部屋のベットで甲斐斗は寝そべっていた。
何かを考えているかのように、目を開いたまま、ずっと天井を見つめている。
すると、寝室に枕を持ったミシェルが入ってくると、甲斐斗の頭の横に枕を置き、甲斐斗の横で寝ようとした時、動かなかった甲斐斗が突然ミシェルの腕を掴むと引きずり込むようにベットに押し倒し、その上に甲斐斗が両手をベットに付いてミシェルと目を合わせる。
「ミシェル……そろそろ、いいよな？」
突然の出来事にミシェルは終始驚きつつも甲斐斗と目を合わせていた。
「かいと？」
「お前の正体、俺に教えてくれ」
「しょう、たい？」
「俺、段々わからなくなってきたんだ。神を殺すとか、世界の平和とか、過去とか、未来とか。
考えれば、考えるほど。答えが見たくなる、知りたくなる……。
おかしいよな、こんな事、普段は考えないんだよ、でも考え出すと止まらなくなるんだ」
「ミシェル、お前は第１ＭＧなんだろ？何故この世界にいるんだ？お前と神はどういう関係なんだ？
お前を狙ってきたあの男は一体誰なんだ？知ってることを全部話してくれ」
戸惑いを隠せないミシェル、その場から起き上がろうとするが、甲斐斗の両手がミシェルの細い腕を押さえつけ、起き上がれない。

「かいと、いたいっ……よ……」
痛そうに顔を歪めるミシェルだが、甲斐斗の手が離れる事はない。
甲斐斗は押さえつけたままミシェルの眼を睨むかのようにじっと見つめ続けている。
「どうして逃げる、どうして隠す？俺を信用してくれるなら、俺に話してくれてもいいんじゃないのか？
それともアレは全部演技なのか？俺を安心させる為の、俺を信用させる為の、俺を利用する為の、演技なのかッ！？答えろッ！」
そう言い放った瞬間、甲斐斗の表情が驚きに変わる。
ミシェルが大粒の涙を流し、甲斐斗を見つめながら嗚咽していたのだ。
「ごめん、なさい。ごめ、ん、なさい……」
ミシェルの表情に甲斐斗は咄嗟に抑えていた腕を放すと、ミシェルは流れ出る涙を必死に洋服の裾で拭き取りながら咽び泣き、謝り続ける。
それを見ていた甲斐斗は両手でミシェルの体を起こすと、ベットの上で座らせる。
しかしミシェルが泣き止む事は無い、体を小刻みに震わせ過呼吸状態でただひたすら謝り続けていた。
「ご、ごめん、ごめんなさ、いっ」
「ち、違うんだミシェル。その、俺は……」
甲斐斗はミシェルを泣き止まそうとしたが、突然唇を噛み締めると、勢い良く部屋から飛び出る。
そして右腕を振り上げると、意味も無く目の前の壁に拳をぶつけた。
「何やってんだよ俺は！クソ！クソッ！」
何度も何度も壁を殴り、拳に激痛を感じるものの、それを堪えて殴り続けていた。
そして殴るのを突然止めると、今度は俯いたまま歩き出す。
そのまま脇道にある、非常階段の扉を開けると、延々と伸びている螺旋階段を上り始めた。

階段を上るたびに聞こえてくる足音が壁に跳ね返り、より大きく聞こえてくる。
……何を苛立っている、助けられなかったから、その怒りをミシェルにぶつけているのか。
自分を許し、笑みを見せたミシェルに、何をした？何故あんな事をした……。
「馬鹿だよ、俺は……」
甲斐斗はそう言いながらも階段を上っていく、冷静になっている今だからこそわかる事があった。
そこら辺の人間が死ぬ事に甲斐斗は何も思わない、だが身近な人間になるとそれは違ってくる。
矛盾と言うのだろうか、弱者は死ねばいいと言っていた甲斐斗。
だがそれがもし自分の知っている人間ならどうする？見捨てるか？
赤城はどうする、自分のせいで心と体に深い傷が出来た事に、甲斐斗は責任と罪悪感を感じているのか。
ミシェルはどうする、自分が生きる喜びを伝えると言っておいたにも関わらず、あのような事をしてしまった。
「わかってる……わかってんだよ、そんな事。だからこそ腹立たしいんだろ、自分が」
ひたすら階段を上っていくと、甲斐斗はとうとう最上階にまで上ってしまう。
屋上に続く扉を開けると、空は心を映し出すように灰色の雲が一面に広がっていた。
風が強く吹き起こる屋上、灰色の雲は所々雷鳴を響かせ、嵐を予感させる。
頭を冷やすのに丁度良いと思った甲斐斗はその屋上で外の景色でも眺めようとした時、屋上の手すりの付近に一人の少女がいるのが見えた。
「あいつ、たしかレンだな。こんな所で何してんだ……」
不思議に思いつつ後ろからレンに近づこうとした時、レンは突然手

すりを乗り越えようとし始める。
「おまっ！？何してんだ！止めろ！」
手すりを乗り越えたレンの足は止まる事無く屋上から飛び降りようとしている。
甲斐斗は咄嗟に走り出すと、今にも落ちようとするレンに飛びかかった。
……間一髪、屋上から身を投げたレンの腕を掴む事に成功した甲斐斗は全く動かないレンをゆっくりと引き上げる。
「しっかりしろ、大丈夫か？怪我は……無いよな」
その場に座り込み相変わらず動こうとせず、微かに目蓋を開けているだけのレン。
そんな彼女を放っておく事も出来ず、甲斐斗は人形みたいに軽いレンの体を抱かかえると、ゆっくりと階段を下りていった。

――部屋のカーテンを締め切り、薄暗い部屋で神楽はモニターを見つめ続けていた。
そして右手には二つのカプセルの錠剤が握られていた、
赤色と青色何とも言えない不気味色をした錠剤。それを強く握り締めると、ある一室へと向かう。
部屋の扉を開ける、部屋の電気は点灯してなく、
薄暗い部屋で一人ベットの上に座りじっと窓から見える外の景色を眺める赤城の姿がそこにあった。
「赤ちゃん、ちょっといいかしら？」
神楽はベットの横に置かれてある椅子に座ると、赤城はゆっくりと顔を神楽に向ける。
だがその目に光は無い、虚ろな瞳だけが神楽を見つめていた。
「私が助けてあげる。でもそれには、貴方の選択が必要なの」
握り締めていた手を広げ、二つの錠剤を赤城に見せる。
「選んで――――」
神楽が二つの道を赤城に話し、赤城は小さく頷くと青色の錠剤に手

を伸ばす。
だが躊躇しているのか、錠剤を掴もうとした手が止まる。
しかし決断は既にしていた、青い錠剤を指で摘み、それを口に含むと、そのままゆっくりと飲み込んだ。
「おやすみ」

第57話　解放、選択（後書き）

水綺　雪音

小柄な女性だが操縦の腕は一般兵士より格段に上手い、だが周りも上手いが為に余り目立たない。

意外と冷静な所もあるが、冗談を真に受け止めてしまい慌てふためく事が多々ある。

第５８話　想い、呆れ

――――「ただいま」
そう言って俺は渋々自分の部屋へと帰って来た。
正直ミシェルに合わせる顔が無い、だからと言ってずっとミシェルと会わない訳にもいかない。
俺は抱かかえているレンを別の寝室へ運ぶと、灯りを点けずに薄暗い部屋のベットにそっと寝かせる。
神楽の所へ運ぶのが得策だと思ったが、少しレンには気になる事がある。
「かいと、おかえり……」
後ろに振り向くと、体の半分を扉で隠しながら顔をひょっこり覗かせるミシェルがそこにいた。
やはりまだ俺の事を怖がっているのだろう、ん？頬と目がやや赤い。
俺のいない間ずっと泣いていたのか？
「さっきは、ごめんなさ――――」
ミシェルの口を封じるように俺は素早くミシェルを抱きしめる。謝らせてたまるか、謝るのは俺の方だろ。
「お前は悪くない、悪いのは俺だ。さっきはすまない、あんな酷い事をして」
そうだ、ミシェルは記憶が無いのかもしれない。だから不安なんだ、記憶の無い自分が。
それならゆっくり探していけばいい、生きていれば、何か手がかりを掴めるかもしれないしな。
俺は抱きしめるミシェルをそっと体から離すと、
俺は片足の膝を床に着け、騎士とかが忠誠を誓うようなよくあるカッコイイポーズをする。
「かいと？」
「俺に命令してくれ、ミシェルの喜ぶ事をしたい。何をしたらいい

？」

最近俺はミシェルの喜ぶ顔を見ていない、笑顔を見せてくれ、ミシェル。

何を頼むかきっと悩むと思っていたが、ミシェルは悩む事無くすぐに口を開いた。

「さっきみたいに、だきしめて」

意外な答えだ、正直全く予想していなかった。

だがそれがミシェルの頼みなら、俺は仰せのままに実行しよう。

「ああ、わかった」

ミシェルを抱きしめると、柔らかくて暖かい感触が伝わってくる。

一人の女の子だ、俺が守らず、誰が守る。それにしてに本当に暖かい、温もりとはこういうのを言うんだな。

「よし、今日はもう晩いし。寝るか」

「うん！」

レンの寝ている寝室から出ると、俺とミシェルは別の寝室へと向かう。

そこでミシェルを寝かした俺は部屋にある椅子を持つと、レンの寝ている寝室へ戻った。

また起きて自殺でもされたら助けた意味が無いからな、起きるまでこーやって部屋の中で見張るしかないのさ。

――「ん……あ、れ。ここは……」

カーテンの隙間から朝日が射し込み、丁度その光がレンの顔を照らしていた。

「お、目が覚めたようだな」

起きた事に気が付いた俺は椅子から立ち上がると、起きたばかりのレンの元へ向かう。

するとレンは驚く様子も無く、冷静な顔をして俺の顔を見つめた。

「甲斐斗さん……お久しぶりです」

「ほお、俺の事覚えてるのか、久しぶりだな」

レンは小さく頷き、体を起こすと。視線を自分の足元に向ける。
「悩みがあるんだな、だから屋上から飛び降りようとしたんだろ？」
「……私、そんな事しようとしたんですね」
……やはり、と言える。
まるで操り人形のように手すりを乗り越え、光の無い虚ろな瞳で歩いていたレンは正気じゃない事ぐらいすぐにわかった。
だが、感情が全く無いと言えばそうじゃなかった。それはレンに聞いた方が早そうだ。
「憶えてないのか……お前は記憶の欠落が多過ぎる。そんな自分に疑問を抱き始めたんじゃないのか？」
俺の質問にレンは全く動かず、ただただ自分の足元を眺めているだけだ。
そんな態度に俺はもう一度質問を聞きなおそうとした時、突如レンが口を開く。
「記憶って、思い出なんです」
「ああ……そうだな」
「楽しかった思い出、辛かった思い出、沢山ありますし、生きていれば、沢山増えていくはずなんです。
でも最近は……時が経てば経つ程、楽しかった思い出が、次から次へと消えていくんです……」
記憶の欠落、しかしこれも神楽が関係しているのだろうか。
たしか羅威達は神楽がレンの為に記憶を消したと聞いていたが、記憶の欠落も神楽が行なっているのか？
それなら何故レンを苦しめる、レンを助けに来ておいて、何故苦しみを与える。
「一生懸命思い出しても、辛い思い出や、悲しい思い出しか残ってない。
目を閉じるたびに私の脳裏に映ってくる……そんなの、甲斐斗さんも嫌ですよね？
思い出すたびに、過去の出来事を鮮明に思い出すんですよ……」

「まぁ、好きな奴はいねえな。それで、その苦しみから逃げる為に、気付いたら屋上に来てたって事か」
やれやれ、こんな時に気の利いた事を言えたらいいんだけどな、生憎俺はそういう達じゃない。
「神楽に頼んでみたらどうだ？もしかしたらお前の悩みを解決してくれるかもしれないぞ」
「あ……そうですよね、私には神楽さんがいたんでした。良かった、神楽さんが、いたんだ」
神楽の事も忘れかけているのか？これは重症だな、
俺も神楽や、赤城ともう一度話しがしたい。レンと一緒に神楽の元に行くとするか。
「よし、なら神楽の所に行くか」
レンは頷き、寝ていたベットから降りると。そそくさと部屋から出て行く。
俺は別の寝室にいるミシェルの元に向かうと、ミシェルと一緒に部屋から出る。
流石にもう置いてけぼりはまずいからな。

――一人自分の部屋で紅茶を飲んでいる神楽、すると部屋の入り口の扉からインターホンの音と、聞き覚えのある声が聞こえてくる。
「神楽さん、ちょっといいですか……？」
おどおどと弱々しい態度のレンに神楽はすぐさま部屋の扉を開けると、部屋の中にレンを招き入れる。
そしてさっきまで自分の座っていたソファにレンを座らせると、キッチンに向かい新しいティーカップに紅茶を注いでいた。
「どうしたのレンちゃん。何か悩みでもあるのかしら」
紅茶の仄かな香りを楽しみながら紅茶を注ぎ終わると、それをレンの前の机の上にそっと置く。
「は、はい。その事何ですけど、最近私の頭の中が変で……」
その言葉にさっきまで紅茶を楽しんでいた神楽の表情は消え、眼つ

きが一瞬で変わる。
「変って、どういう風に？」
「記憶が曖昧で、所々記憶が抜け落ちてて、その……」
次の言葉が出る前に、レンは隣に座っていた神楽に抱きしめられ言葉が出せない。
「そう、それは怖い思いをしたわね。でも大丈夫、私が治してあげるから」
神楽の率直な暖かさと、愛されている事を身を持って知る事にレンの頬が染まる。
「お姉、ちゃん」
涙が出そうになるのを堪えながらもレンはその暖かさを実感している。
神楽は抱きしめていたレンをそっと離すと、ソファから立ち上がり、レンの右手を掴んで別室へと歩いていく。
ベットと椅子が置いてあるだけの質素な部屋、だが神楽はその部屋の壁を2回叩くと、
人一人分の大きさの扉が現れ、地下へと続く階段が姿を見せる。
その階段を神楽は降りていく、レンも戸惑う様子もなく、慣れた感じで階段を下りている。
そして階段を下りた二人は部屋の奥にまで歩いていた時、後ろの方から何かが破壊される音が聞こえてきた。
驚いた様子で神楽が後ろに振り向くと、そこには黒剣を片手に階段を下りてきた甲斐斗の姿があった。
だがその甲斐斗もまた驚いた様子で部屋を見つめていた、広い研究所内、その奥にある三つのカプセル。
人一人は余裕で入れる程の巨大なカプセルには怪しげない色をした赤い液体が溜まっており、
そしてその中に赤城の姿、そして別のカプセルにはエリルの姿があった。
「赤城！？……てめぇ、ここで何の研究してるのか。洗いざらい喋

ってもらおうじゃねえか」
剣を構え、今にでも飛びかかれる勢いを持つ甲斐斗。
「甲斐斗？どうしてここに、まさか……」
驚きの隠せない表情、神楽はレンに視線を向けると。レンの着ている軍服の襟元に手を当てる。
すると、そこから小さな発信機のような物が付けられており、それを手に取った神楽は足元に落とすとゆっくりと靴で潰す。
「姑息な真似をしてくれるわね」
「んな事知るか、それよりレン、お前は神楽に聞きたい事があったんじゃねえのか？」
甲斐斗の問いにレンは答えず、怯えた様子で神楽の後ろに隠れ、顔を覗かせながら甲斐斗を見つめていた。
「だ、誰ですか貴方……どうして私とお姉ちゃんの部屋にいるの……？」
「誰って、また忘れたのか？……もういい。
とりあえず神楽、俺とゆっくりお話タイムといこうじゃねえか。まずは……赤城をどうするつもりだ」
「邪魔な記憶を消す、それだけよ」
神楽のその言葉に甲斐斗が反応する。邪魔な記憶、それを思い出させるのはあの時の記憶しか無い。
「言っておくけど、私は赤ちゃんの選択通り行動をしているだけ、これは彼女が決めた事なのよ」
「邪魔な記憶って、もしかしてあの時の記憶か」
「ええそうよ、貴方のせいで苦しめられた時の記憶を消さなければならなくなったのよ。
全ては貴方の責任、貴方のせいで赤ちゃんは傷つき記憶を消さなければならなくなってしまった。
傷ついた赤ちゃんに貴方は何が出来る？体も心も傷付きボロボロの彼女を、貴方は助けられるの？」
その問いに甲斐斗が答える前に神楽は回答を出した。

「答えは決まってる、そんな事絶対に無理。
でも私なら、傷ついた赤ちゃんを助ける事が出来る。それでも貴方は私を止めようとするの？」
神楽からの止め処ない言葉を浴びせられるが、甲斐斗の表情は変わらず、じっと神楽を見ている。
「レンについても同じ事を言うのか？傷ついたレンを助けられるのは自分だけ、って」
「レンちゃんは心身共に深い傷を負ってるの、だから私がその傷を少しずつ治しているのよ」
赤城の事や、自分の記憶の事を話しているというのにレンは怯えた様子で神楽の後ろに寄り添っている。何も疑問に思わないその様子は、神楽を信じきっている為だろうか。
「最近レンの様子がおかしいのはお前も知ってるはず。何故だかわかるか？
お前が無理やり記憶を消していく程、レンの脳には相当な負担がかかる、それぐらいの事学者ならわかるだろ？」
「今は負担がかかるかもしれない、でも私の研究が進めばそれも治せる用になるわ」
「俺は記憶を消す事が間違ってるとは思わない、だが正しいとも思わない。だからお前のしている事を否定はしない。
たしかに記憶を消せば幸せな日々を送れる事もあるからな……」
まるで自分も記憶を消した事があるかのような台詞。
だが甲斐斗は握り締める剣の剣先を神楽に向けると、ゆっくりと口を開いた。
「だが消させねえ、負の連鎖を止める為にもな。話は終わりだ、死ね」
剣を振り上げ、一気に神楽の元へ飛びかかる甲斐斗。後は剣を振り下ろせば済むはずだった。
「やめて！お姉ちゃんを殺さないで！」
咄嗟に神楽の前に出てくると、両手を広げ神楽を守ろうとする。

その姿を見て甲斐斗は急いで足を止めると、また剣を構えなおす。
「レン！そこをどけ！お前はこの女にずっと記憶を弄られ続けて生きていくんだぞ！それで良いのか！？」
「私はお姉ちゃんと一緒なら何でもいいの！私からお姉ちゃんを奪わないで！！」
「そいつはお前の姉じゃねえ、お前には兄がいるだろ！羅威って名の！実の兄すら忘れたのかお前は！」
甲斐斗の怒号にたじろぐレン、やや首をかしげながら甲斐斗を見つめている。
どうやら兄の事の前に、羅威の事すら憶えてないらしい。
「お前は忘れて幸せかもしれねえ、だがな……忘れられた羅威はどうなるんだよ！」
「私は……そんな人知りません！！」
ハッキリと言い切ったレンの言葉に、甲斐斗の表情が変わる。
両手で握っていた剣は消え、力無く両手を下げると、自分の足元を見つめるように俯いた。
「ああ、そうかぁ……知らない、か。知らないなら、仕方無いな」
「馬鹿馬鹿しい、何気取ってんだよ俺は……もうお前等がどうなろうと俺の知ったこっちゃねーよ」
そう言って甲斐斗は後ろに振り向き、一歩ずつ階段の方へ向かう。
それを神楽とレンはじっと後ろ姿を見つめたまま動かない。
「あ、赤城……もういいか。好きにしとけ、じゃあな……」
甲斐斗はそう言い残すと階段を上っていき、姿を消す。
地下研究所から戻ってきた甲斐斗は入り口の横で壁にもたれ掛かりながら座っているミシェルの手をそっと引くと、
何も言わず神楽の部屋から出て行った。
研究所に残されたレンは神楽にしがみついて離そうとしない、そんなレンを神楽は優しく頭を撫でていく。
その時、研究所にある一台のモニターが警告表示へと切り替わり、警告内容が映し出されていく。

神楽はそれを横目で見て確認すると、そっとレンを体から離した。
「嫌な事も、怖い事も、すぐに消えるからね、レンちゃん」
そう言って神楽はポケットの中から小型の麻酔銃を取り出すと、その銃口をレンの首元に当てた。
「おやすみ」

――岩山が並ぶ荒野から見えるのはＮＦ東部軍事基地、そこには５機の機体が立ち並んでいた。
『おい羅威、神威が負傷中だからってその状態で我雲を操作出来るのか？』
『任せろ、リハビリをしてきた成果を見せてやる。それより各自指示された場所で待機していてくれ』
穿真の通信に逸早く答える羅威だが、その操縦席は神威とは異なっている。
鬼神との戦闘で負傷した神威は予想以上に重傷の為に修理が間に合わなかったのだ。
『了解、幸運を祈るぜ』
羅威の指示に４機がそれぞれ指定された場所へ移動する、羅威の乗る我雲はその場で立ち止まり、誰かを待つかのようにその場で待機していた。
システムは全て調整済み、異常箇所０、万全の体制に万全の準備をしてきた。
羅威は二本の操縦桿を両手でそっと握ると、目を軽く閉じ、ゆっくりと深呼吸を済ませる。
そして目を開き、目の前に映る光景を見つめる。天候は曇り、空は黒い雲に覆われ嵐を予兆させた。
それでも羅威の心に曇りは無かった。
妹を、守る為、救う為に。
『迎えに来たぞ……玲』

第５８話　想い、呆れ（後書き）

葉野　香澄

実はクロノと学校の同期であり、その操縦技術はクロノとほぼ互角。
課せられた命令は絶対にこなそうとする程の完璧主義。

第５９話　愛情、友情

部屋に付いてある警報が鳴っている、だからと言って焦る事も無い。
戦争ばっかのこの世界に慣れちまったせいなのもしれない。
そんな事を考えながら俺は今部屋に付いてある警報装置の電源を切った。
後ろを振り向けばすやすやと寝息を立てて寝ているミシェルがいる、さっきの警報で起きなくて良かった。あんなに安心して寝ているんだ、起こすのは気の毒すぎる。
……警報、恐らくＢＮか、ＥＲＲＯＲのどちらかが出現したのだろう。
今のこの基地で敵の対処出来ないな、あれだけ兵士を殺されたんだ、今攻められたらこの基地は終わるだろう。
だったらここから逃げた方が良いかもな・・・良いかもしれないけど、今は眠ろう。
俺は最近寝てないし、それにせっかくベットが有るんだ、これを使わないでどうする。
俺が眠りから目覚める時は、この基地が敵の手に落ちた時かもな・・・。

「ん、あれ・・・ここは・・・？」
人気の無い医務室で目を覚ますレン、ゆっくりと起き上がるとベットの側に赤城が立っていた。
「目を覚ましたか、レン」
「赤城隊長？えっ？え、と・・・私はどうしてここに・・・」
「憶えてないのか？私と歩いている最中突然気を失ったんだ、きっと疲れが溜まっていたんだろう。体調の方はどうだ？」
「体調の方は大丈夫です、それで、あの」
レンが次の言葉を発しようとした時、病室を囲っていた白いカーテ

ンが捲られ、外から神楽が入ってきた。
「レンちゃん大丈夫?頭とか痛くない?」
不安な様子のレンにそっと笑顔を見せる神楽、レンは小さく頷くとベットから下りて見せた。
「は、はい。大丈夫です、痛くありません」
「そう、良かったわね・・・それじゃ二人とも。急で悪いんだけど出撃よ」
神楽はベットの隣に置いてあった軍服を手に取ると、それをレンに手渡す。
手渡されたレンは直ちに軍服に着替えようとすると、その間赤城が現在の状況をレンに伝えた。
「先程からＢＮが東部軍事基地の西方にある指定区域を出入りしている、私達はそのＢＮを叩きに向かうぞ」
「はい、わかりました」
軍服に着替え終えたレンは赤城と共に素早く医務室から出て行く、その後ろ姿を神楽がじっと見つめているとも知らずに。
「さてと、後はあの子だけね・・・何処にいるのかしら」

医務室を出た二人はすぐ近くのエレベーターに乗り、１階の機体が収納されている倉庫に向かおうとしていた。
エレベーターには誰も乗っておらず、赤城とレンは二人並ぶようにしてエレベーターに乗る。
そこでレンはふと口を開いた、さっき言いかけた事を言う為に。
「赤城隊長、甲斐斗さん知りませんか?私たしか甲斐斗さんと一緒にいた気がしたんですが・・・」
レンは横を向いて赤城の顔を見ると、一時の沈黙の後、赤城はふと顔をレンに向けた。
「誰だ、その男は」
１階に到着したエレベーターの扉がゆっくりと開いたが、赤城とレンの足は止まったまま、動かなかった。

レンが驚いた様子で赤城を見つめている、それに対し赤城もレンを睨むように見下ろしている。
だが、赤城はふと溜め息を吐くと、足を一歩踏み出しエレベーターから降りた。
「全く、さっき見ていた夢の話でもしているのか？今から機体に乗るんだ、しっかり頼むぞ」
「す、すいません・・・」
レンもエレベーターから降りると、すぐさま自分の機体まで走っていった。

機体に乗り込んだレンは未だに疑問を抱いていた、自分が憶えている記憶。
気を失う前のおぼろげな記憶、ある一室に甲斐斗がいて、レンがいる。
レンは自分について色々と甲斐斗に話していた、記憶、思い出の事を。
その後甲斐斗が発した一人の名前、その名前を聞いた途端にレンの意識が消えた。
だがその記憶とは裏腹に、気を失う前は赤城と二人で色々と世間話をしながら歩いていた記憶が映りこんでくる。
二つの記憶が脳で交差し、どちらが本物の記憶なのかわからなく、瞬時に不安と恐怖で心一杯になろうとした時。
赤城から通信が入ってきた、エレベーターを降りた途端に顔色の悪いレンを心配していたのだ。
「本当に大丈夫か？無理なら遠慮せず休んでいて良いのだぞ」
「心配を掛けてすみません・・・でも大丈夫です、行けます！」
レンの機体は発進準備完了になり、勢い良く倉庫から発進していく。
それに合わせて赤城の乗るリバインも発進し、別の機動隊の機体も次々に発進して行った。

レン達が戦場に到着した時、既にギフツやリバインの残骸が辺りに散らばっていた。
レーダーには敵機の反応が1、その周りを味方の機体が囲んでいたが、次々に撃墜されていく。
「赤城隊長！味方機が何者かに狙撃されています！少なくとも3方向から攻撃が！」
「地形を利用した攻撃か、1機は上空、残りは山陰に隠れながらの狙撃か・・・見え透いた戦術だな」
赤城はすぐさま通信を切り替えると、別の部隊に指示を送る。
『第三独立部隊、及び第四独立部隊は山陰の敵を叩け、私達はレーダー内の敵を叩く』
『了解』
後方で待機していた部隊が狙撃してくる機体の方へと向かい、赤城とレンはレーダーに映る1機を目指し機体を走らせる。
そして現場に到着した二人が見た光景は予想を外れていた、恐らく敵の新型と思っていた二人だったが、そこに立っていたのは1機の我雲だけだった。
「所詮は誘導か、レン、さっさとこの機体を片付けるぞ」
リバインは背部に搭載されているアサルトライフルを手に取ると、我雲に照準を向けて引き金を引こうとした時、上空を含む三方からリバインに向けてレーザー及び銃弾が放たれる。
「なっ！？別働隊は何をしている！早く奴等を・・・」
ふとレーダーに目を向ける赤城、しかしそこに友軍機の反応が一つしか無かった。
信じられないように目を大きくしている、レンも同様に目を丸くしていた。
数分前は十機以上いた友軍機が今では赤城とレンを含んで2機しかいないのだ。
「我等以外・・・全滅だと・・・っ！？」
レーダーに映る敵機の反応、それは地上からでも上空からでもない、

地下からの反応だった。
赤城はその場から咄嗟に離れると、その場から勢い良く1機の機体が地下から飛び出してきた。
両手の巨大なドリルを回転させるその機体は、フェリアルとリバインの間に割り込むように立っている。
すると一斉に赤城の乗るリバインに集中砲火が始まる、3方からの狙撃、そして目の前の敵機に対しリバインが一旦距離をおく。その隙に囮の我雲はその場から後退していく。
「なるほどな、この機体に残りの部隊がやられたのか。レン、この機体は私に任せてお前は我雲を追え！」
「で、でも。それでは赤城隊長が・・・」
「私は大丈夫だ、こんな所で死にはしない。お前は我雲撃墜後に付近の敵機も破壊してくるんだ、いいな？」
「わかりました、赤城隊長、ご無事で・・・！」
フェリアルはリバインと敵の機体に背を向けると、逃げていく我雲の後を急いで追っていく。
その途端リバインを狙っていた集中砲火が消え、何処からも狙撃されなくなる。
リバインと敵機が互いに距離を置き、睨み合いが続いていると、突然リバインに通信が入ってくる。
しかしこれは友軍機からではなく、目の前に立っている敵機からだった。
『よう、久しぶりだな。俺の事憶えてるか？』
互いの姿がモニターに映る、穿真も赤城も、両者の姿を見ても特に驚く素振りは見せない。
「どこぞのＢＮの兵士か、通信を入れるとなると、私に何か用か？」
『用があるんだよ、・・・にしても、お前を見てると右手が疼いて仕方無いな』
そう言うと穿真は誇らしげに自らの右手を見せ付ける。
「・・・お前達の目的は何だ、何故今になってこの基地を攻める」

『先に言っておくぞ！ＢＮには羅威っていう男がいるんだよ！その妹がレンって訳だ、わかるか？
しかもレンは神楽って奴に脳を弄られて、強制的に戦争に駆り出されてんだよ！
だから俺達は助けに来た、それだけだ』
穿真の迫力ある説明にも赤城は表情を変えず黙って聞いている。
だが呆れたように溜め息を吐いた赤城は、操縦桿を操作し背部に銃を仕舞うとＬＲＢに持ち替え構えて見せた。
「何を言いだすかと思えば、下らん。ここで斬り捨てるのみ」
『今のが嘘だと思うのか？こっちは真剣に話してんだぞ！？』
「敵の言葉を素直に受け入れる程私は馬鹿ではない、それに私は自分の目で見たものしか信じない達でな」
赤城は知っている、戦場で同情や迷いをすれば死に繋がる事を。
考えるのは目の前にいる敵を倒してからだ、リバインはＬＲＢを振りかざすと、勢い良く敵の機体へと飛びかかる。
『馬鹿な真似はよした方がいいぜ？こっちは新型のＤシリーズ、お前に勝ち目は無い』
リバインが振り下ろしたＬＲＢは敵機のドリルと激しくぶつかる、もう一方のドリルを避けながらＬＲＢを振るいドリルと何度もぶつかり合うが、その度にＬＲＢの歯が欠けていくのがわかった。
敵機のドリルは大きく長い為間合いに入るのが難しく、中々ＬＲＢを敵機に当てられない。
一旦距離を置きアサルトライフルに装備を持ち帰るリバイン、敵機に向かって引き金を引くが、敵機は両手のドリルを構え盾にすると悉く銃弾を弾き飛ばす。
『言っただろ、勝ち目は無いってな』
「・・・大体の動きは把握出来た、次で仕留める」
『ん？』
赤城が通信を切ると、リバインは再びＬＲＢを構え、今度は勢い良く正面から特攻して行く。

それを見た穿真はすかさずドリルの先端をリバインに向けると、同じく特攻して行く。
『この機体の力は、まだまだこんなもんじゃねえ！』
リバインがＬＲＢを振り上げた瞬間、敵機は両手のドリルを突き出し、ドリルが勢い良くリバインの元へ放たれる。
飛んで来るドリルにリバインはＬＲＢを構え、迫り来るドリルを弾こうと試みるが、ドリルは一直線に飛び、一本のドリルを弾く事は出来たが、もう一方のドリルが左肩に直撃する。
だが赤城は諦めない、ＬＲＢを手放し腰に付いてあるＬＲＳを右手で抜き取ると、止まる事無くそれを振りかざし敵機へと向かう。
敵機は両手のドリルは無いが、両手の甲からチェンソーの歯を出してくると、迫り来るリバインに立ち向かった。
互いの機体がすれ違い、両者動きが止まる。
リバインが右手に握るＬＲＳを腰に戻すと、穿真の乗る機体はゆっくりと前のめりに倒れこむ。
『嘘だろ・・・起動回路を、破壊しやがっただとぉおおおおおお！？』
穿真の乗る機体、その背部からは火花と放電が起き、切り傷が起動回路にまで達していた。
すると穿真の機体に通信が入る、友軍からではなく、赤城からだった。
「勝ち目が無い事等無い、よく憶えておけ」
『まかさ・・・最初からコレが狙いだったのか・・・っく』
穿真の落胆振りを見て勝負が尽いたと思った赤城は軽く溜め息を吐いた時、モニターに映る穿真の様子がおかしい事に気付く。
『くっくっく、はーっはっはっは！俺の勝ちだぁあああああっ！！』
「っ！？」
レーダーに反応、だが時既に遅し、宙を舞う二本のドリルはリバインの右肩、そして腹部を貫いた。
「ぐぅぁあああああっ！！」

両腕両足を持っていかれたリバインは両肩両足から爆炎を上げ、その場に転がる。
ただの鉄の塊と化すリバイン、動く事も出来ず、警告ランプが操縦席で点滅し続けている。
その途端、ゆっくりと穿真の乗る機体が立ち上がり、宙に浮くドリルは元の通り機体の両手に戻っていく。
『にひひ、どうだ？これが穿真様の戦術、そしてこの『エンドミル』の力だ』
穿真は『ＡＭＯＳ』を起動させキーボードに情報を打ち込み少しずつ機体を前進させていく。
そして鉄くずと化したリバインの胸部にドリルの先端を向けると、ドリルを急速回転させた。
『死ぬのが怖いかぁ？死ぬのが怖いかぁ？』
ジリジリとドリルの先端を胸部に近づけていく穿真、だがモニターに映る赤城はやけに落ち着いていた。
「ああ、死ぬのは怖い」
『そうか、なら最後に言いたい事はあるか？』
穿真の言葉に赤城は目を瞑ると、ゆっくりと座席の背もたれにもたれる。
「一瞬で殺してくれ」
『へいへい、んじゃ・・・あばよッ！』
ドリルを振り上げると、それは簡単に振り下ろされた。
だがドリルの先端は胸部ではなく、胸部の真横の地面を突き刺している。
「・・・どうした、殺さないのか？」
『気に食わねえな。初めて会った時は良い女だと思ってたんだが、今はこんなヘタレかよ』
赤城の余りの潔さに調子が狂う穿真、それに彼には一つの疑問が未だに解けていなかった。
「右手を斬り落とされた男がよくそんな事を言えるな・・・」

『なら聞くが、どうしてあの時俺を殺さなかった。殺そうと思えば出来ただろ?』
あの時、ＢＮが東部軍事基地に攻め入ってた時の事だ。
赤城に扉諸共右手を斬りおとされた穿真、あの後赤城は穿真を殺そうとはせず、すぐさまルフィスの共に駆け寄っていた。
何故自分を殺さなかったのか、穿真は未だにそれがわからなかったのだ。
「っふ、お前は面白い事を聞いてくるな・・・」
『質問に答えろ、どうして俺を生かした!?』
「では問おう、お前、人殺しが好きか?」
『好きな訳無えけど、戦場では殺すに決まってるだろ、俺達は兵士だ』
穿真は兵士だ、兵士は何の為に戦場に出る。守るものの為に敵を殺していく、それが兵士だ。
「そうか、私は嫌いだ」
だが赤城は違った、自分が兵士で有ることを否定しているのかもしれない。
『あんた程の腕を持つ兵士が、敵に情けを掛けるのか?甘いな・・・だが』
ドリルの先端を地面から抜き取ると、そのまま機体を振り向かせ、赤城の乗るリバインに背を向ける。
『俺はそういうの、嫌いじゃないぜ。だからココは一旦引かせてもらう。
だがぁっ!次会う時ぃ!容赦しねえから覚悟しとけよ、わかったな?』
「ああ、わかった・・・それと、お前がさっき話していた事、あれは・・・」
『本当だ、だから俺達はレンを殺したりはしない。助けに来たんだからな・・・あばよ』
そう言葉を言い残すと、穿真の乗る機体は発進しその場から姿を消

す。
「・・・レンが脳を、神楽が？だがレンを渡す訳にはっ・・・ぐ・・・」
赤城の体がよろめく、突然視界が歪み始め、意識が朦朧となり始めたのだ。
全身の力が無くなっていくのがわかった赤城は咄嗟に救援信号を送るスイッチを押すと、そのまま眠るように意識を失った。

荒れ果てた山中へと逃げていく我雲、その後をレンの乗るフェリアルが追撃を行なっていた。
「何時までも逃げれると思わないで下さい！」
『―ＳＲＣ発動―』
操縦席が一瞬輝くと、背部に付いてあるフェアリーが一斉に飛び立ち四方八方からレーザーを放つ。
同時攻撃に我雲は困惑しながらも何とか攻撃をかわそうとするが、数発のレーザーが我雲の足や腕を擦れる。
すると我雲は動きを止め、すぐさまフェリアルの方へ振り返った。
レンに突如入る通信、相手は前方に立っている敵機からだ。
疑問に思いながらも通信を繋ぐと、モニターに互いの姿が映り、そこからは聞き覚えのある声が聞こえてきた。
『俺を・・・憶えているか？』
「あ、貴方は・・・前に助けてくれた方ですね、どうして私に通信を・・・」
『俺達は話しがあってここに来たんだ・・・玲、やはり俺の事は憶えてないのか？』
「れい？違います、私の名前はレンです。貴方の方こそ私を憶えてるんですか？」
『ああ、全て憶えている。
幼い時お前と一緒に母さんと遊んだ事や、叱られた事、楽しかった事、そしてお前が、俺の妹だという事も、全部』

羅威の堂々とした態度に玲はただ戸惑いと疑問しか思い浮かばない。さっきからこの兵士は何を言っているんだ?自分にはではなく姉がおり、幼い頃はずっと姉と遊んでいた、姉との楽しかった思い出はしっかりとレンの脳裏に焼きついている。

「と、突然何を言いだすかと思えば・・・頭大丈夫ですか・・・?」

『信じられないかもしれない、だがお前の記憶は作り物で、全てあの神楽という女がお前を騙しているんだ・・・!』

作り物の記憶?当然レンにはそんな事信じられない、だが何故だろう、羅威の言葉に嘘を感じられない。

真に迫る羅威の声に、レンはいつしか操縦桿から手を放していた。

『憶えているか?このペンダント』

羅威は首に掛けている金色の小さなペンダントを取り出すと、ペンダントを開け、その中に挟まっている写真をモニターに近づけた。

「小さい頃の・・・私・・・?」

色は多少落ちているものの、そこにはしっかりと4人の姿が映っていた。

両親の前には笑顔一杯の玲と羅威が横に並んでおり、見るからに幸せそうに感じられる。

『ある日事件が起きた、俺達の住んでいた町がNFに襲われ、母さんと玲と俺の三人で町から逃げようとしていた時、母さんはNFの兵士に殺され、俺とお前は爆発により別々に分かれてしまった』

『そして拾われた、俺はBNに、お前はNFに・・・今は脳を弄られているからわからないかもしれない。

だが信じてくれ!俺がお前の兄だという事を!だから!』

「私の、今までの記憶が・・・作り物?・・・嘘よ・・・そんなの、私は信じな・・・あ、う、あああ、あぁぁぁぁぁぁぁ!!」

突如頭を抱え奇声を上げるレン、何度も何度も頭を左右に振ると、勢い良く手を目の前の装置に振り下ろした。肩で息をする程呼吸は乱れており、俯いたまま顔を上げない。

『玲・・・?』

心配そうに様子を窺う羅威、だが次の瞬間突如レンが顔を上げると、その顔は無表情のまま羅威を睨んでいた。
「うん、排除するね・・・お姉ちゃん」
『玲っ！？』
レンは素早く操縦桿を握り、アサルトライフルを構え敵我雲に照準を合わせる。
それに気付いた羅威は素早く機体を後退させるが、我雲の後方からは既に六つのフェアリーが待ち構えていた。
後方からのレーザーを何とか交わす羅威だが、フェリアルからの攻撃を防ごうと両腕で銃弾を耐え抜いたが、両腕は中破し火花を散らしている。
『目を覚ませ玲！神楽はお前の姉じゃない！！』
「違う、私のお姉ちゃんだもん、私を守ってくれる、お姉ちゃんだもん」
フェアリーの動きが段々と早くなり、我雲では回避が困難になり始める。
すると上空から、又山陰から一斉に射撃が行なわれ、２体のフェアリーを撃ち落とす。
「三人とも、機体だけは絶対に撃つな！俺が何とかしてみせる！」
フェリアルの機動力を削ごうと我雲はサブマシンガンで機体の足元を狙うが、ＳＲＣを発揮したレンの機体には一発も当らない。
だが銃弾は足ではなく足元の荒野を撃っており、一瞬にして砂煙がフェリアルを包み視界を奪う。
『そんな子供騙し、私には通用しない』
レーダーを見ると、そこにはハッキリと敵機の反応が映っており、それを目掛けてフェアリーを放ち四方からレーザーを放つ。
砂煙で前が見えないが攻撃は確実に敵機の方を向いて放たれていた。
が、レーダーではたしかに攻撃が敵機を貫通しているはずが、敵機はレーダーから消えずその場に留まったままだ。
敵機の破壊を確認しようと砂煙が出たフェリアルだったが、真っ先

に視界に映ったのは我雲の姿だった。
「捕らえた」
我雲の振り下ろしたＬＲＳは見事にフェリアルの左肩を斬り落とす。
そしてもう一方の腕で持っているＬＲＳの刃先をフェリアルの胸部に向ける。
動こうにも動けない様子、もしここでレンが動けばすぐさま胸部に向けられたＬＲＳが動くだろう。
そう確信したレンは操縦桿を握ったまま焦る気持ちで目の前の我雲を見つめていた。
だがレンの考えとは全く別の動きを羅威は見せた。
我雲の操縦席にあるハッチを開き、堂々と胸部の上に現れたのだ。
その姿を見て援護射撃を行なっていたクロノ達は息を呑んだ、羅威が計画とは違う動きを見せたからだ、それに危険な状況だと言うのに自ら機体から下りてきた羅威に三人は戸惑いを隠せない。
「玲、信じてくれ。これからは・・・俺がお前を守る」
羅威は首から提げたペンダントを右手で握り締めながら目の前に立っているフェリアルを見つめている。
それはまるでそこに壁が無いかのように、互いに目を合わせていた。
『信じる・・・守る・・・？』
「ああ、お前は俺にとって、たった一人の妹だからな・・・当然だろ？」
『嘘だ・・・私の、私のおにぃ・・・ねぇ・・・ちゃん・・・は・・・！』
フェリアルの握るアサルトライフルの銃口が羅威に向けられる、それを見た香澄と雪音は羅威を助けようと動こうとしたが、クロノの声が二人の動きが止める。
「二人とも動かないで！今動けば羅威が死ぬ・・・！」
上空からその光景を見ているクロノにはわかる、銃口のすぐ目の前に羅威が立っているのだ。
妙な真似をすれば間違いなく羅威は殺される、三人はただ羅威を見

守る事しか出来ない。
「俺の言葉が嘘と思うなら引き金を引けばいい、ただ最後にこれだけは言わせてくれ」
そう言うと羅威はこれから死ぬかもしれないというのに、レンに向かって笑みを見せた。
「玲、愛してる」
愛してる、その言葉を聞いた途端レンの脳裏に思い出が映りだす。
鮮明ではないものの、そこには幼き頃の自分と、母と父、そして手を握ってくれている兄がいた。
愛してる、母をそう言って暖かく抱きしめてくれた。
愛してる、父はそう言って優しく頭を撫でてくれた。
愛してる、兄はそう言ってそっと手を握ってくれた。
『う、ん・・・』
モニターがハッキリとよく見えない、おかしいと思い下を向けばボロボロと涙が足元に零れ落ちる。
目に浮かぶ涙を必死に拭うと、羅威に向かって大きく口を開いた。
『お兄ちゃん!』
たしかに聞こえた、レンの麗らかな声で、その言葉が。
目を瞑ろうとしていた羅威だったが、ゆっくりと目を開けていく。
『私、お兄ちゃんを信じるよ』
「玲?思い出して・・・くれたのか・・・?」
『うん、私のお兄ちゃんは。羅威お兄ちゃんだよ』
「そうか・・・良かった、本当に・・・良かった・・・」
我雲の胸部で跪く羅威、安心して全身の力が抜けてしまったのだろう。
だがその目には涙を浮かべ、嬉しさの余り言葉が出なかった。
これで終わった、玲が自分の元に帰って来る。
言い様の無い気持ちが羅威の心の底から湧き上がっていた。
「よく思い出したな、玲・・・ありがとう」
『うん、だって私もお兄ちゃんの事・・・』

レンが次の言葉を言おうとした瞬間、轟音と共に羅威の視界からフェリアルの姿が消える。
途轍もない風圧が羅威襲い、羅威はその場では立ち上がれなかった。
「・・・・・・玲？」
操縦席から何やら声が聞こえてくるが、今の羅威にはそんな声聞こえるはずがなかった。
ふと右に振り向くと、フェリアルが爆発を起こしていたのだから。
機体の残骸があちこちに吹き飛び、大きな煙を上げている。
その残骸の手前には、１機の白い装甲をした機体が立っていた。
右腕が異常に太く大きい、それに対し左腕は普通の大きさをしている。
頭には三本の角のような物が伸びており、機体はゆっくりと羅威のいる方へと振り返った。
そして、その機体から聞こえてきた声は聞き覚えのある、あの声だった。
「羅威、久しぶりだね。俺だよ、ＳＶ親衛隊副隊長、魅剣愁だよ」

第５９話　愛情、友情（後書き）

―ＳＲＣ―

念隔操作可能システム、操縦者のデータを機体に登録して初めて使うことが出来る。

手足で動かすだけではなく、念じる事によって機体が反応を示す為従来の機体とは比べ物にならない程反応速度と対応力が高い。

現段階では試作段階であり、機体に乗りながら戦っているが。本来は遠距離からの操作となる。

第６０話　刹那、無謀

「レンちゃん・・・？」
研究所のモニターを見つめ続ける神楽、そこにはフェリアルが破壊されたという報告が映し出されている。
指で挟んでいた煙草が床に落ちた時、神楽の意識が元に戻る、すぐさま地下研究所から階段を上り自分の部屋に戻ると部屋を出て、一人足早にある場所へ向かった。

荒野に佇む2機の機体、羅威は跪いた状態でその機体を見つめていた。
目を大きく開き、口を開けたまま信じられない様子の羅威に、更に言葉が降りかかる。
「実はあの赤い機体、アストロス・オーガに乗っていたのも俺何だ。今まで隠していてごめん」
言葉が出ない、全てが嘘に聞こえ、全てが幻に見える、頭の中での整理が全く間に合わない。
理解が出来ない、何故愁がここに？ＳＶ？赤鬼？玲を？
「今日はそれを告げようと君の所に来たんだ、そしたらあの機体が君を狙っているのが見えてね」
あの機体、今では残骸としか残っていないその機体に、羅威の視線が揺らぐ。
「でも怪我は無いみたいだね、良かった。それじゃ、俺はもう行くから」
「おい・・・待てよ・・・」
跪いていた羅威はゆっくりと立ち上がる、両手の握りこぶしは小刻みに震え、俯いたまま口を開いた。
「お前が今殺した人間はな・・・俺の妹何だよ・・・」
「え？」

「助けれたと思った、これでやっと、玲の側にいられると思った・・・それなのに・・・」
「そうだったのか・・・」
「お前彩野も殺したよな・・・機体から下りてきた彩野を、虫けらのように踏み潰したよな」
「・・・罪を背負う覚悟は出来ている」
愁は悪びれた様子も無く淡々と言葉を続けていく、その様子に羅威の心境は更に複雑と化す。
「お前だったのか・・・俺の仲間や妹、俺から大切なものを殺していったのは、全部、全部お前だったのか、愁ッ！！」
俯いていた羅威が顔を上げた、その目には涙を浮かべ、止め処なく流れる涙を拭き取る事無く機体を睨み、怒号を上げる。
「戦争に死はつき物、そしてその戦場に出ている以上僕らはただの兵士に過ぎない。
　自分だけ特別だと思ってるのかい？誰だって失い、死ぬんだよ、簡単に、人は、ね」
「貴様ぁあああああッ！」
羅威はすぐさま操縦席に戻ると、すぐさま我雲を操作し愁の機体の元へと走っていく。
両手にはＬＲＳが握り締められ、涙で滲むモニターを凝視しながら突き進んでいる。
「羅威、ごめん。君には酷い事をしたと思っている」
我雲が愁の乗る機体の前にまで来ると、両手に持っている２本のＬＲＳを一気に振り下ろした。
ＬＲＳの刃が機体にぶつかるが、激しい火花を散らした後、２本のＬＲＳは他愛も無く折れる。
その間愁は何も機体の操作をせず、ただじっと我雲を見つめていた。
直立不動の機体、羅威は目の前でサブマシンガンに切り替えると、すぐさま敵の機体に向けて引き金を引く。
それでも敵機は避けようとしない、銃弾が次々に機体に当たるが、

機体には傷一つつかず、むしろ銃弾が砕けその場に散乱していく。
弾丸を全て撃ち尽くした我雲は、その場に銃を投げ捨てると、素手で敵機の顔面を殴りかかった。
我雲の拳は敵機の顔面に直撃したものの、敵機の頭部は全く動かない。
何事にも動じない敵機に、次第に我雲の動きが鈍ってくる。
「あの機体は一体・・・二人とも、羅威の援護に回ります！狙撃の準備を！」
クロノの指示に香澄と雪音が銃を構える、それを見たクロノは羅威との通信を繋げる。
「羅威！一旦離れるんだ！」
羅威からの返事は無いが我雲は敵機から離れ、それを見たクロノ達三人は一斉に射撃を行なう。
2発のライフルの弾が敵機体の胸部に当たるが、敵機の装甲には傷一つつかない。
又、上空からのレーザーライフルを肩に受けるものの、レーザーは弾かれるように消えて無くなる。
一発所ではない、上空から、また山陰から何発もの銃弾とレーザーを放つが、敵機の装甲に傷を付ける事さえ出来ない。
「な、何なんですかあの機体は！？私達の攻撃がまるで通用していません！」
「とんだ怪物が現れたわね・・・！クロノ隊長、どうしますか？」
「もうすぐ穿真もココに来る、合流した後一度艦に戻ります。撤退の準備を」
香澄と雪音の乗る我雲はスナイパーライフルを仕舞い、撤退の準備に取り掛かる。
だが羅威乗る我雲は未だに敵機の前に立っており、撤退する素振りを見せない。
「・・・時間だ、さよなら、羅威。また戦場で会おう」
愁はそういい残すと、機体は羅威の我雲の横を擦れ違うようにして

抜き去っていった。
機体のスピードは尋常ではなく、加速しだしたかと思うと一瞬で我雲を抜いていた。
愁が去ると同時に穿真の乗るエンドミルが羅威達の戦場へ到着する。
「こちら穿真、あの機体は何だ!?作戦はどうなったんだ・・・!?」
黙ったまま応答しない羅威に、穿真は辺りを見渡す。
そこには無残にも破壊されたフェリアルと思わしき機体の残骸が散らばっていた。
「っ・・・マジ・・・かよ・・・」
機体の残骸を見つめる穿真に、クロノからの通信が入る。
「穿真、羅威を連れて撤退して下さい。その後僕達も撤退を開始します」
「ああ、わかった・・・これより撤退する・・・」
その時だった、レーダーに映る巨大なエネルギー反応。
エネルギーのする方向に全員が機体を向ける、そこには一機の巨大な機体が近づいてきていた。
あの巨大な影は見た事がある、穿真やクロノ達の脳裏にあの光景が蘇った、たった一撃でＢＮの主力艦隊を全滅させたあの機体だ。
「じょ、冗談じゃねえぞッ!?あんなの勝てっこねえ!今すぐ全速力で撤退しねえと・・・!?」
穿真が機体を動かそうとするが、一向に機体が動こうとしない。
同様に彩野と香澄、そして羅威の乗る我雲さえその場から動く事が出来なかった。
「な、なんだこりゃ・・・機体が、機体が動かねえだと!?」
ただクロノの乗る黒葉花だけは動ける状態に有る、所があの巨大な機体が黒葉花に向けて手を伸ばした瞬間、まるで地面に吸い寄せられるかのように黒葉花が地面へと落下していく。
「ぐぅぅうっ!機体が勝手に・・・!」
地面へと落とされる黒葉花、そのままＢＮの機体は一箇所に集めら

れるかのように吸い寄せられていく。
ＢＮの機体は一箇所に固められ、身動きの取れない状況の中。
巨大な機体はＢＮの方では無くフェリアルの残骸の元へと向かっていた。
そして到着すると、巨大な両手で地面ごと機体の残骸を拾い上げる。
機体はＢＮに背を向け東部軍事基地へと戻っていく、その機体と東部軍事基地からやってきたＮＦの部隊が擦れ違う、ＮＦの部隊は一斉にＢＮの機体を取り囲んだ。

結果、羅威達はＮＦの捕虜にされ、玲を助け出す事が出来なかった。
つまり、何も出来なかった。
その現実を受け入れようにも、体が、頭がそれを拒否する。獄中の中で羅威は俯きまるで人形かのように動かない。
牢屋では皆そうだった、他の人と喋りもせず、警備がいなくても十分な程静かにしている。
静寂の中、一人の男が口を開いた。
「羅威・・・あの機体と通信していたみたいだけど、一体どうしたんだい？」
クロノの問いにも羅威は動かない、それを見ていた穿真がクロノに向かって口を開く。
「クロノ、今は止めとけ。今のあいつは現実を受け入れるだけで精一杯だ・・・」
「ごめん、こんな時に僕は・・・」
「いいや、お前は隊長として立派にこなしてるよ。・・・さて、これからどうする。このままだと俺達は死刑確定だぜ？」
「し、死刑！？」
穿真の死刑という言葉に強く反応を示したのは雪音だった。
「待ってください、僕達はＢＮの兵士です。条約上僕達の身は保護されるはずです」
雪音の不安を取り除くようにクロノが説明をするが、穿真も言葉を

続ける。
「そんなものがＮＦに通じるかねぇ、所詮奴等は巨大な宗教団体のようなもんだしよ」
「ほぅ、お前達ＢＮは。ＮＦをそう見ているのか」
獄中の出口から聞こえてくる女性の声、獄中にいたＢＮの兵士達は一斉に声のする方へ振り向いた。
「お、お前・・・！」
その女性に真っ先に反応を示したの穿真だった。
「次会う時が、まさかお前が獄中の中に入る時とはな」
赤城はそう言うと牢獄に近づき、ＢＮの兵士達の顔を見ていく、そしてクロノの入る牢屋の前を過ぎようとした時、ふとクロノが口を開いた。
「一ついいですか？僕達はこれからどうなるのか、教えてもらえませんか」
クロノの問いに赤城は足を止め、獄中にいるクロノと目を合わせる。まるで鷹に睨まれているかのような鋭い目に、クロノはたじろぐ事無く見つめていた。
「明日全員揃って銃殺刑・・・が普通何だが、まさか子供だけの部隊とはな・・・詳しい事はわからないが、恐らく死刑は免れるだろう」
死刑は免れる事を聞き雪音は緊張の糸が少し緩み、安心したように蹲る。
「お前達に問いたい事が私もある、何故基地を襲った、新型の機体が在ったが、本気で基地を落とそうと思ったのか？」
「おいおい、それは俺が言っただろ？レンを助けに来たんだって」
赤城の問いに呆れた様子で穿真は答えたが、赤城は振り向くや否や腕を組み首をかしげた。
「助けに来た？殺しに来たの間違いではないのか？」
「っち、違えよ！レンを殺したのは俺達じゃない！変な機体が一機突然戦場に入ってきてレンを殺したんだ！」

「殺した・・・か、そうだな、もうすぐレンは息を引き取る。そうすれば殺した事になるな」
赤城の言葉に、羅威が勢い良く立ち上がると、真っ先に牢屋の出口まで詰め寄った。
「どういうことだ！玲は、玲はまだ死んでないのか！？」
さっきまで死んでいた羅威の眼に微かな力が見える、だが赤城の眼はそれと裏腹に冷たいものだった。
「玲・・・レンの事か、ああ、まだ死んでいない」
「頼む！俺を玲に会わせてくれ！！」
「それは無理だ、私の権限でお前を連れ出す事は出来ない。
それにレンはもうじき息を引き取るだろう、何故だかわかるか？
両足と内臓が潰れ、両腕も切断された状態でレンは発見されたんだ、生きている事自体が奇跡に他ならない」
僅かな希望に懸けた羅威だったが、その小さな希望も握りつぶされるように消えてなくなる。
両足は自然と曲がり、その場に座り込んでしまい、もはや立つ力さえ羅威には残っていない。
「今神楽がレンの治療に当っているが、あの状態ではもう、な・・・さて、私はこれで失礼させてもらう」
「ちょっと待て、俺の言った事は憶えてるんだろ？神楽って女がレンの記憶を弄ったって事について、お前は何も思わないのか？」
「・・・わからない。だからその疑問を今、直接本人に聞きに行く所だ」
何も思わない訳ではないが、ここでそれを話した所で何になる。
赤城は振り向く事無く穿真の問いに答え、その場を後にした。

地下研究所の一室、そこには赤い液体に満ちた大きなカプセルの中に、両手両足の無いレンが眠っており、そのカプセルの前には、両手を装置に着き、俯いたまま動かない神楽がいた。
「ごめんね、レンちゃん。ごめんね・・・」

ふと神楽が顔を上げると、その眼に微かな涙を浮かべていた。
「痛いよね、苦しいよね・・・待ってて、今レンちゃんを治してあげるから・・・」
そう言ってふと横にある心電図に目を向けると、線が一直線に横に伸び、０という数字が出ている。
それを見た神楽は少し躊躇った後、隣の部屋へと移動し、巨大な装置を作動させた。
そして装置のハッチを開けると、一本の小さなカプセルを取り出し、それをレンのいる部屋へと持っていく。
カプセルを装置に入れ、作動させると、そのカプセルの中に入っていた細胞のような物がレンの入っているカプセルへと入っていく。
「大丈夫、大丈夫よ。きっと治るから、私が制御できるよう改良したんだもの、だから・・・」
カプセルの液体が段々と濁り始め、透き通った赤はまるで血のような流体となり始める。
そして沸騰するかのように液体が泡をたてはじめると、カプセルに一本の亀裂が走った。
神楽が慌てて止めようとしたが、もはやそれは無理な事だった。
『―ＥＲＲＯＲ―』
血の気が一気に引いていく、赤い警告ランプ、ＥＲＲＯＲという名の文字に。
「そんな・・・」
亀裂は段々と広がり始め、カプセルから液体が漏れ始める。
そしてカプセルが破裂すると、そこには死んだはずのレンが虚ろな目をして立っていた。

第６０話　刹那、無謀（後書き）

光学電子磁鉱石（レジスタル）

主に機体の動力源に使われている鉱石、その鉱石は微量でも想像を絶する程の電気を蓄えている。

『神』との戦争後に世界各地で発見されるようになったが、その原因は不明。

第６１話　血、惨劇

「入るぞ」
神楽の部屋の扉が自動的に開くと、外から赤城が入ってくる。
辺りを見渡し神楽を探すが、そこに神楽の姿は無い。
「神楽、いないのか？」
一通り見渡した後、順々に部屋を見ていくと、ある一室の部屋には見覚えのない扉があった。
不思議に思った赤城はその扉の前に立つと、扉は自動的に開き地下に通じる階段が姿を見せた。
「まさか、これは・・・」
赤城は足早に階段を下りると、そこには思っていた通りもう一つの研究室が存在していた。
しかし研究室は赤い警告ランプが点滅しており、至る所にあるモニターはＥＲＲＯＲという文字が映し出されている。
そしてその研究室の片隅には、神楽がうつ伏せになって倒れていた。
「神楽！？」
急いで倒れている神楽に駆け寄る赤城、すぐさま体を仰向けにすると、手袋を脱ぎ脈を確認する。
脈に異常はなく呼吸も正常だが、神楽は意識を失っており声を掛けても一向に起きない。
神楽を抱かかえた赤城は急いでその地下室から出ると、すぐそこのベットに神楽を寝かせる。
「神楽、お前は地下で一体何を・・・」
その時だった、突如基地内にけたたましい程の警報音が鳴り響いた。
「レン、まさか・・・」
悪い予感がする、赤城はベットで寝ている神楽にシーツを掛けると、足早に神楽の部屋を後にした。

基地内に警報が鳴り響き、武装した兵士達が基地内を駆け回る。
すると兵士達の前を横切る一人の少女がいた、少女は服を着ておらず、兵士達の足が止まる。
小銃を少女に向けると、一人の兵士がその少女に声をかけた。
「おい、そこの女。そんな姿で何をしている」
兵士の声に少女の足が止まる、そしてゆっくりと振り向くと、少女は無表情のまま兵士達の手を伸ばす。
「助けて」
少女が一言呟いた瞬間、伸ばした腕から何本もの細い触手が皮膚を破り突き出てくると、目の前にいた兵士達に襲い掛かった、触手はまず兵士達の手と腕を突き抜けると、目を突き刺しそのまま脳を貫通する。後ろにいた兵士達も同様体中を触手で突き刺され、体から血飛沫を上げながらその場に倒れた。
「え・・・？」
腕から突如出てきた触手に驚きを隠せないレン、触手は兵士達を刺し殺すと、自動的に体内に戻っていく。
その感触は余りにも気持ち悪く、まるで体内にミミズが入り混じり中で蠢いているような感覚にレンは襲われた。
レンが足を止めていると、異変に気付いた別の兵士達が次々にレンの元に集まり始める。
皆レンに銃口を向け、今にも引き金を引こうとしていた。
「抵抗するな、大人しくしていれば危害は加えない」
自分の両手を見つめながらレンはそっと駆けつけた兵士達に手を伸ばし、大きく頷く。
「助けて・・・」
するとレンの意識に関わらず腕から触手が突き出て来る、それを見た兵士達は一斉に引き金を引いたが触手はあっという間に兵士達の体を突き抜けると、体の内部から簡単に肉を引き裂いていく。
兵士達の肉片が辺りに散らばり、返り血を浴びるレン。
そのレンの胸部には数発の銃弾が当っていたものの、血はすぐに止

まり、傷口は瞬く間に完治する。
「こ、こんなの・・・い、ぁ・・・」
死んだ兵士達に背を向け、レンはただ歩いて行く、それもまたレンの意識とは逆らう形で・・・。

「おいおい、何か変じゃねえか？この基地」
牢獄の檻を掴みながら外の様子を窺っている穿真、さっきまでいた門番の兵士は姿を消し、絶え間なく警報音が基地内に鳴り響いているからだ。
「たびたび銃声が聞こえてきますね、もしかして味方の誰かが助けに来てくれたのかもしれませんが・・・」
クロノは耳を澄まし僅かに聞こえてくる銃声を聞き取っている。
「にしてはやけに大胆だな、こりゃ自分の眼で見て確かめるしかねえな」
穿真はそう言うと右手で簡単に檻を捻じ曲げ、余裕の表情で牢屋から出て行く。
「まさかサイボーグの手がここで役に立つとはなぁ、皮肉なもんだ。よし、この混乱に乗じて俺達も逃げようぜ、どーせここにいたって何されるかわかんねえからな」
穿真は皆が閉じ込められている牢屋の檻を捻じ曲げていくと、クロノや雪音、香澄が牢屋から出るが、羅威だけは座り込んだまま立ち上がらない。
「羅威、何ボサっとしてんだ。ここにいたって死ぬだけだぞ」
穿真の言葉に羅威は力無く立ち上がると、ゆっくりと牢屋から出て行く。
「よし、まずは一斉にこの部屋から出るぞ、恐らく出たら見張りの兵士がいると思うからな、気を引き締めていけよ」
「その台詞は隊長の僕が言う台詞の様な気もするけど・・・ここは穿真に任せるよ」
「おう、んじゃ行くぞ・・・！」

扉が開いた瞬間、勢い良く穿真は駆け抜け部屋を出る、その後に続いてクロノ達が部屋を出るが、そこに見張りの兵士の姿は無かったが、その廊下には血痕が残っていた。
だが普通の後ではない、まるで何者かに引き摺られて出来たかのような後に身震いを感じる。
「血の跡・・・もしやＥＲＲＯＲがここに現れているのかもしれません。
　格納庫に急ぎましょう、恐らく僕達の機体はそこにあるはずです」
クロノはそう言うものの、格納庫の場所もわからない為に下手に動く事が出来ない。
「ちょっとまって、この基地にＥＲＲＯＲがいるとしたらまず武器を探さないと、それに格納庫の場所もわからないし・・・」
香澄の言う事は最もである、まずは何処かの部屋に入り武器、あるいはこの基地の地図を探さなければならない。
その時だった、通路の奥から銃を持ったままこちらに走ってくる二人の兵士の姿が見えた。
だが明らかに様子がおかしい、脱走したＢＮの兵士が視界に映っているのにも関わらず、兵士達は足元をフラつかせながら全力で走っていたのだ、まるで何かから逃げるかのように。
「た、助けてくれ！誰かぁっ！？」
声を荒げながらこちらへ走ってくるＮＦの兵士に、クロノ達は何もしてあげる事が出来なかった。
兵士達が助けを求めた瞬間、二人の腹部から突然無数の細い触手が突き抜けてきたからだ。
血を滴らせながら触手から体の至るところを貫通していくと、兵士達をズルズルと引き摺っていく。
「たす、け・・・」
一瞬で血塗れになった兵士にはまだ意識があった、そして最後の最後まで助けを求め、手を伸ばしたが、伸ばした手は誰にも届く事はない。

二人の兵士は通路を引き摺られていき、通路の角を曲がるとクロノ達の視界から姿を消した。
通路には新しい血痕、その生々しい光景に誰もが息を呑み、額に汗がにじみ出る。
「おいおい・・・今のは何なんだよ・・・」
「お前達!?無事だったか!」
後ろから聞こえてきた女性の声に穿真達は振り向くと、そこには右手に刀を握った赤城が立っていた。
赤城はすぐさま穿真達の方に駆け寄ると、赤城より先に穿真が口を開いた。
「どうなってんだよこの基地!至る所に血の跡があるし兵士達が変な触手に殺されてるしよう!一体何が起きてんだよ!?」
「私にもまだわからない、知っているのは基地内に突如一体のＥＲＲＯＲが現れた事だけだ」
「たった一体のＥＲＲＯＲにどれだけ手焼いてんだよこの基地は!?早く兵士を集めて殺しに掛かればいいだろ!」
穿真の言葉に赤城の表情が揺らぐ、赤城は顔を背けると、口を開いた。
「・・・集まった兵士達は・・・全員殺された」
今度は逆に赤城の言葉に穿真達の表情が揺らいだ、信じられないような出来事に言葉が出ない。
「お前達もここから逃げろ、機体は格納庫にある、今から私が案内するからついて来い」
「おお、敵の俺達を逃がしてくれるとは、ありがたいねぇ」
「無駄口叩く暇があるなら行くぞ」
赤城は刀を握り締めたまま背を向けると、小走りで通路を走っていく。
その後を穿真達がついていくが、羅威だけは辺りを見渡し落ち着かない様子を見せていた。

「っ！？・・・何だ、今の・・・」
ベットで寝ていた甲斐斗が突然体を起こし目を覚ます。
シーツをのけてベットから下りると、瞬時に剣を呼び出す甲斐斗。
そろ黒剣をじっと見つめると、甲斐斗は小さく目を輝かせた。
「感じる、惨劇の予兆を。血の海が広がるのも時間の問題だな」
「かいと」
甲斐斗が剣から目を離し声のする方に目をやると、目をぱっちり開いて甲斐斗を見つめるミシェルがいた。
ベットの上に座り、いつもと違う雰囲気が漂っている。
「・・・どうした？」
「いってきて」
その言葉に甲斐斗が疑問の表情を見せる、だがミシェルは見つめたにっこりと笑顔を見せた。
「まもるために、ね」
「ミシェル、お前何故それを・・・。でもいいのか？俺が行けばお前はまた一時一人になるんだぞ？」
甲斐斗の問いにミシェルは笑顔で頷くと、またもぞもぞとベットの中に戻っていく。
そして顔だけ覗かすと、じっと甲斐斗を見ている。
「俺を信じてくれるのか・・・ああ、必ず帰って来る、心配無い」
甲斐斗は小さく手を振ると、ミシェルもシーツから手を出して振ってくれた。
部屋を出るや否や通路に広がる血の後を見るものの、甲斐斗は驚きを見せない。
「ミシェル、何故お前にはわかった・・・それにお前は・・・いや、今はそんな心配をしなくてもいいな」
言わずともわかる事が一つだけある、ミシェルは感じたのだろう、甲斐斗の力が必要だと。
ミシェルは一人ベットの中で甲斐斗の無事を祈り。
甲斐斗は楽しむ為ではなく、ミシェルの想いの為に動く。

その頃、機体の置かれている格納庫に着いたクロノ達は自分達の機体に乗り込んでいた。
「驚いたね、ここに来るまでにＮＦの兵士と誰とも会わないなんて・・・」
「そうだな、まぁＥＲＲＯＲの事はＮＦに全て任せて。俺達は待機している艦に戻るとしようぜ」
機体の電源を入れ、すぐにでもここから離れれる状態になった時、雪音から全員に通信が繋がる。
「た、大変です！羅威さんが基地内に・・・！」
ＮＦのギフツに乗り込むはずの羅威は突然機体から下りると、誰にも告げず基地に戻っていき、その姿を見た雪音が急いで皆に伝えたのだ。
「ったく、お前等は先に脱出していてくれ。俺が羅威を引きずり出して来る」
そう言うと穿真は一人操縦席のハッチを開けて機体から下りると、羅威の後を急いで追って行く。
「どうしますか、クロノ隊長。私達だけでも先に脱出をしておきますか？」
「いや、穿真と羅威の帰りを待つよ・・それにしても、おかしいと思わない？格納庫にすらＮＦの兵士がいないなんて・・・」
格納庫にはギフツやリバイン等の機体が並んでおり、出撃をしていないのがわかる。
兵士だけではない、基地なら整備士や医者、数々の人間がいるはず。
その人間が誰も姿を見せない、明らかにおかしいとしか思えない状況にクロノは只ならぬ危機を感じていた。
羅威は一人無人の通路を走っていた、玲がいると思われる医務室を目指し。
例え死んでいても、玲を一目みたい、その思いが羅威を突き動かし

ていた。
全力で基地内を走り、肩で呼吸をしながら辺りを見渡す羅威。
その時、羅威の目の前を一人の少女が横切る。
少女は自分の体に血塗れのシーツを纏い、シーツから血を滴らせながら歩いている。
だがその少女の顔には見覚えがあった、忘れた事の無い、あの顔。
「玲!?」
羅威の一言に玲の足が止まり、そしてゆっくりと体を振り向かせる。
そこに玲はいた、虚ろな目をしたまま微動だにせず、ただじっと羅威を見つめている。
「玲、生きていたのか・・・」
一歩ずつ玲に近づいていく羅威、死んだはずの玲、殺されたはずの玲、消えたはずの玲が、今自分の目の前に、手の届く距離にいる。
羅威はそっと手を伸ばし、玲の顔に手を当てる。
暖かかった、死んでいない、玲は生きている。
そのまま玲を自分の体に引き寄せると、羅威は力一杯玲を抱きしめた。
力の入らない腕を全力で動かし、もう離さないといわんばかりに抱きしめる。
シーツの血が自分の服や腕に付こうが羅威は構いはしなかった。
「良かった・・・本当に・・・、さぁ、帰ろう。俺にはお前がついている」
「お兄ちゃん・・・」
レンが身に羽織っている赤いシーツがもぞもぞと動き始める、それに気付かない羅威は抱きしめると、玲と正面を向いて笑みを見せた。
「何だい?」
その笑みに玲も笑顔を作る、そして目から一粒の涙が零れ落ちた。
「私を・・・殺して」
玲の一言が終えた瞬間、赤色のシーツを突き破り中から何本もの触

手が突き出てくる。
触手を見た羅威は一瞬怯み玲から距離を離す、すると後ろから穿真の声が聞こえてきた。
「羅威ィッ！その子から離れろ！！」
玲の体は見えないが、シーツからは何本もの触手が出ており、今にも羅威に襲いかかろうとしている。
「お願い・・・お兄ちゃん・・・殺し、て・・・私を、コロ・・・」
どうして、何故玲がこんなおぞましい姿になっているんだ？
羅威にはわからない、考えられない、無理もない。自分の妹が今、化物になっているのだから。
すると、羅威は突然後ろに腕を引かれ体勢を崩した。
「何やってんだ！早く逃げるぞ！！」
後ろに振り向く事なく羅威は玲を見つめ続ける、が穿真に引かれ羅威の体は少しずつ下がっていく。
「どうして、何で・・・玲が・・・？」
「っち、許せよ羅威！」
羅威の体を起こした途端、穿真の強烈な拳が羅威の溝を狙う。
一瞬で意識を失い、体の力が抜けた羅威を穿真は軽々と抱えると、玲に背を向けて一目散に逃げた。
格納庫に入ると待機させておいた自分の機体に乗り込み、手早く機体の電源を入れる。
「羅威は連れ戻したぞクロノ！」
「了解、全機発進！艦に戻ります！」
全員が機体を起動させ、格納庫から次々に発進し、待機していたＢＮの艦に帰還した。

「目を覚ましたか」
ゆっくりと目蓋を開けていくと、そこには心配そうに見つめている赤城がいた。
神楽は意識を取り戻すと、ゆっくりと体を起こしベットから下りる。

「いきなり起きて体は大丈夫なのか？」
「ええ、大丈夫よ。それより・・・今の状況を教えてちょうだい」
「一体のＥＲＲＯＲが東部基地を破滅へと齎した、今もまだ基地内に潜伏しているらしい。
　現在本部、及び南部から増援を要請をしている、時期に援軍が来るだろう」
「そう、ありがと・・・それで、私に聞きたい事があるんじゃないのかしら？」
神楽はポケットから煙草を取り出すと、口に銜えライターで火をつける。
一服し始めた神楽に赤城は目を逸らさず一直線に赤城を見つめていた。
「レンの記憶を消したのは、お前か？」
煙草の煙を漂わせる神楽は赤城に背を向け、煙をそっと吐き出した。
「・・・ええ、いらない記憶は消したわよ」
「ＢＮの兵士が言っていた事は本当だったようだな・・・聞く事はまだある。この地下室で・・・レンに何をした！？」
赤城は既に気付いていたのだろう、突如現れたＥＲＲＯＲの正体を。だが信じたくなかった、信じきれなかった、だから今ここで聞いている。
「・・・ＥＲＲＯＲの細胞に近いものを投与したのよ、レンちゃんを助ける為に」
赤城に強い力で胸倉を掴まれた神楽、鷹ように鋭い目で睨む赤城は更に力を強めた。
「神楽ッ！何故だ！？何故レンの記憶を弄り、しかもあんな化物の細胞まで使ったんだ！？」
「助ける為よ・・・レンちゃんを」
「助けるだと？ふざけるなッ！」
赤城は神楽の胸倉を掴んだまま勢い良く壁に叩きつけると、更に言葉を続けた。

「お前のせいでここの兵士達も死んだんだぞ!?それもレンに殺させて・・・!」
「ふふっ、研究に失敗は付き物・・・いい勉強になったわ」
神楽はそう言うと指で挟んでいた煙草の先を赤城の手に軽く当てた。
「っ!?」
煙草の高熱によって咄嗟に手を緩める赤城、すると神楽はその隙に手を振り解き、足早に地下室の階段を下りていく。
赤城も神楽の後を追い急いで階段を下りていくと、そこにはある装置を手にしている神楽が立っていた。
「神楽・・・私はお前を信じていた、それなのにお前は・・・」
「ありがとう赤ちゃん、私もよ・・・」
手にしている装置のボタンを押した途端、赤城の視界が歪み始める。
「ぐっ、あ・・・」
そして激しい頭痛が赤城を襲い、一瞬にして意識が薄れ始めた。
「まさか、私・・・にも・・・かぐ、ら・・・」
「おやすみ、赤ちゃん」

意識が途切れ、目の前が真っ暗になったかと思うと、今度は何処からともなく声が聞こえてきた。
「おい赤城、大丈夫か?しっかりしろ!」
うるさい程の大声に表情を歪めながらも目蓋を開けると、そこには甲斐斗が赤城を抱えてこちらを見ていた。
「誰だ・・・、お前・・・っ」
知っている、この顔、この声、赤城はまた少し目蓋を瞑ると、はっきりと思い出した。
「甲斐斗、甲斐斗か・・・」
「ああ、俺だ。にしてもどうしてこんな所で気を失ってたんだ?」
周りを見渡すと赤城は自分が通路の脇道で気を失っていたのがわかった。

赤城はゆっくりと立ち上がると、壁に手を当て体勢を立て直す。
「わからない、神楽が奇妙な装置を使って私を・・・」
「あいつ、一体何を企んでやがる・・・まぁいい、まずはこの基地に出たＥＲＲＯＲってのを消しに行くか」
甲斐斗は床に刺してあった剣を抜き取ると、その黒い大剣を簡単に振り回してみせた。
だがそれを見た赤城はすぐさま甲斐斗を止める。
「待て！止めろ・・・！」
「ん？どうしてだ？」
「あのＥＲＲＯＲはレンだ、神楽の投与した細胞でレンは今突然変異を起こしている、だから・・・！」
「あの化物の細胞をレンに？何を血迷ったんだあいつは・・・じゃあどうする、捕らえるのか？」
「違う、保護するのだ。だからまずはレンに１度会わなければならない」
「そんな事言ってる場合かね・・・っと、噂をしてたら向こうから来てくれたみたいだぜ？」
ぺたぺたと足音が通路の曲がり角から聞こえてくる、甲斐斗は剣を構え、赤城は鞘に手を置いた。
音は段々と近づいてくる、そして曲がり角からは赤いシーツを身に纏ったレンが姿を現した。
レンはこちらに気付くと、ゆっくりとこっちを向いて歩きながら近づいてくる。
「赤城隊長・・・」
「レン！？意識はあるのか・・・！」
鞘から手を放した赤城はレンに近づこうとしたが、甲斐斗の剣が赤城の進路を塞ぐ。
赤城はふと足を止め、甲斐斗の方を見ると、甲斐斗は鋭い目つきでレンの瞳を見つめていた。
「てめえ・・・誰だ？」

「な、何を言っている。お前も知っているレンだぞ？」
「記憶はそうかもな、でも・・・人格は違う。目を見りゃわかるよ」
甲斐斗の言葉にレンの足が止まる、虚ろな瞳でじっと甲斐斗と赤城の両方を見ている。
「・・・もう誰にも止められない」
さっきまでの弱々しい口調ではない、ハッキリとした言葉がレンの口から出てきた。
その時、突如通路の壁が崩れ落ち、外の景色が見えるようになると、そこから1機の機体が姿を見せた。
それは破壊されたフェリアルの面影が多少あったが、外見と原形は全く変わっていた機体がいた。
負傷したはずの機体は肉のような物で形を整えられ、筋肉の血管は脈を打っている。
そして機体は息を吐きながら胸部のハッチを開けると、そこにレンが飛び乗り、機体のハッチを閉めた。
「今のはフェリアル？だがあの機体は破壊されたはずだ・・・」
赤城は大きな穴の開いた壁から飛び立つフェリアルに似た機体を見つめていたが、甲斐斗は何かを悟ると、穴の開いた壁付近に身を乗り出す。
「赤城、残った兵士がいるならそれを全員かき集めて町に向かわせろ、後町にいる民間人を今すぐ全員町から避難させろ、いいな？」
「ま、待て。まさかレンは町に向かったと言いたいのか？」
「当たり前だろ、お前も機体に乗って今すぐ町に来い。間に合わなくなる前にな」
そう言って甲斐斗は壁に開いた穴から外へ飛び下りると、あの甲斐斗の愛用機である黒い機体の胸部の上に立っていた。
「いいか、民間人を全員避難させるんだぞ。じゃあな」
そのまま操縦席に乗り込んだ甲斐斗は、ハッチを閉めると、一人レンの後を追っていった。
赤城はその機体の後ろ姿を見たまま上着の内ポケットから携帯電話

を出すと、ある人に電話をかけた。

今日の天気は曇り、夏だというのに今日は何故か風が肌寒く感じてしまう。
雲の下に広がる巨大な都市、ここでは数多の人間が働き、生活している。
それも全て、今日で終わるだろう。
基地から飛び発ったフェリアルは大都市に到着すると、空高く上昇して停止していた。
下を見れば何千何万という人間が住む町が広がっている、それを見たフェリアルは両手を空高く突き上げた。
大地が揺れ始める、最初は小さく、大人しく、だが揺れは収まらない、地震とも思われるその揺れは次第に力を強めていくと、町の大地を裂き、巨大な一つの町は引き裂れたかのように二つに分けられる。
町に住んでいた人々は混乱し、安全な場所を求めて走り出す。
他人を思いやらず、人を押しのけながら我先にと逃げ出す人々、するとその人々の目の前に突如大きな穴が開いた。人々は不思議にそうにその穴を覗いていると、何かが動くのが見えた。
赤い顔、ニタニタと嬉しそうに笑うその顔に目は無い。
辺りには次々に穴が開き、地底から奴等が現れる、虫のように、絶え間なく。
公園に、学校に、道路に、川に、山に、大地に、目の前に。
惨劇は始まった・・・いや、既に始まっていたのかもしれない、人類滅亡への惨劇が。

第６１話　血、惨劇（後書き）

―ＥｒｒｏｒＤｅｌｅｔｅＰｒｏｇｒａｍ（ＥＤＰ）―
世界各地にあるＥＲＲＯＲの巣を一斉に攻撃を仕掛ける作戦、赤城達が攻撃した『ＧＡＴＥ』は無数にあるＥＲＲＯＲの巣の一つ。
ＮＦの全勢力を注ぐかいあってＥＲＲＯＲの巣を激減できたものの、殆どの部隊の人間はＥＲＲＯＲの犠牲になってしまった。
その為に現在ＮＦの戦力は乏しく、ＢＮを軽く超えていたはずの戦力が今では対等するまでになっている。

第62話　肉、蠢き

「お、起きたか。羅威、体の調子はどうだ？」
目を覚ました羅威は声の方に首を傾けると、すぐそこに穿真が立っていた。
羅威はとある一室のベットで寝ているのに気付き、無事戦艦に戻ってきた事を確認する。
「すまねえな、お前を連れて戻る時つい殴っちまって・・・」
「いや、ありがとう穿真。助かったよ」
軽く礼を述べた後、穿真はすぐさまベットから下りる。
そして壁に掛けられていた上着を羽織ると、すぐさま部屋から出て行こうとしたが、その羅威の目の前には穿真が立ちはだかった。
「通してくれないか？」
「残念ながらそりゃ無理だ、命令違反を犯したお前を監禁しておかなくちゃならないからな」
非常時とはいえ、あの行動は明らかに命令違反、皆を危険にさらしてしまった事には変わりない。
その為羅威には罰則が科せられ、今は監禁処分をくらっている。
「なら教えてくれ、この後俺達は何処に行く」
「作戦は失敗した、だから一度紳達の元に戻る事になってる」
穿真の失敗という言葉に反応した羅威はやや目を細くし、睨むように穿真の顔を見つめる。
「失敗？玲まだ死んでないぞ」
「・・・羅威、わかってくれ。あれはもうお前の妹じゃ・・・」
「黙れッ！誰が何と言おうと玲は俺の妹だ！意識だってまだあったんだ、救う事は出来るはずだ！」
恐らく、今の羅威に何を言っても無駄なのかもしれない。
穿真は思っていた、羅威も本当は現実を理解している、だがその現実を認めたくないのだと。

必死に強気で睨んでいる羅威の目を見たらわかる、その奥で隠そうとしている悲痛を。
その時、突如艦内に警報が鳴り響き警報ランプが点滅し始めた。
「っと、どうやら何かあったみたいだな。それじゃ俺は行ってくるぜ」
振り返った穿真はそのまま扉を開け、部屋の外で出て行こうとした時、羅威達のいる部屋の扉が開くと、そこにはクロノが立っていた。
「緊急事態です、穿真、羅威。来てください」
「ほぉ・・・俺も部屋から出てもいいのか？」
「それは、来てもらえればわかります」
穿真と羅威はクロノの異様な雰囲気に疑問を持ちつつ、三人で艦の司令室に向かった。
司令室に入ると、何やら兵士達が慌しく作業をしており、皆落ち着きが無い。
そしてその中央には香澄と雪音、そして艦長が三人を待っていた。
「随分と慌しいが、何かあったのか？」
穿真は回りを見渡すと、ふとあるレーダーが目に止まり足を止めた。
「おい、あれ壊れてないか？画面が真っ赤だぜ？」
一部の区域の映し出しているレーダーには赤いＥＲＲＯＲの反応で埋め尽くされている。
しかしそこは東部軍事基地の近くにある大都市からだった。
さっきまでＥＲＲＯＲの反応等全く無かったＮＦの大都市が赤一色で埋め尽くされている事に穿真は、いや、誰もが故障と思っただろう。
「・・・壊れてない、至って正常だよ」
クロノはそう言うと機械の装置を押し、一つの巨大なモニターにある光景を映した。
大都市を囲ってある大きな壁で地上までは見えなかったものの、大都市の所々から煙があがっている。
そして更にその光景を拡大すると、壁や立ち並ぶ高層ビルには無数

のＰｅｒｓｏｎ態が張り付いていた。
一匹のＰｅｒｓｏｎ態が手を伸ばし、窓ガラスを突き破ると、そこにいた民間人を捕まえすぐさま喰い千切る。
そして窓ガラスを突き破り、ビルの中に次々にＰｅｒｓｏｎ態が入っていく。
「信じられないと思うけど、これは今現実で起こっています」
クロノはそう言うと、違う画面に切り替わる。
羅威も穿真も、その場にいた兵士達もそのモニターを見て硬直していた。
ＮＦの取材陣だろう、ヘリコプターに乗って町の状況を映していた。
『大変な事が起きています！現在東部地区の大都市でＥＲＲＯＲが出現し、次々に一般市民を襲っています！』
女性レポーターがマイクを片手にヘリから町の状況を伝えていた、カメラはズームをし、ＥＲＲＯＲから逃げ惑う人々を映している。
誰が想像しただろうか、いつものように平凡な毎日を過ごそうとしていたというのに、突然死ぬか生きるかの極限状態に追い込まれる事を。
スーツを着たサラリーマン、乳母車を押している母親、タクシーに乗っている運転手。
彼らは必死に逃げようと町を走り回るが、Ｐｅｒｓｏｎ態は次々に市民を捕まえると、強力な顎で人体を噛み砕いていく。
辺りに肉片と血液が飛び散り、道路や建物を赤く染めていく。
逃げている最中にも嫌でも目に飛び込んでくる光景、体を千切られにゅるりと出てくる内臓を見た人は嘔吐し走れなくなり、また怪我人を助けに行けば簡単にＥＲＲＯＲに捕まえられ食い千切られる。
そこに警察はいた、だが警察がいた所でどうなる。
警官が現在の状況を報告していると、入り口からＨｕｍａｎ態が中へと入り、豪腕で警官を千切り殺していく。
拳銃を発砲した所でＥＲＲＯＲが死ぬ訳が無い、警官もただただその場から逃げるしかなかった。

車で逃げようと必死になると、目の前の人間なんて見えやしない、後ろからは今にも自分を殺しにくる化物がいる。
そう思うとアクセルを踏み込み、邪魔な物や人を簡単に跳ね飛ばして走っていく。
発狂と奇声、そしてＥＲＲＯＲの呻き声、肉が千切られる音や肉片が地面に落ちる音、血の匂い。
そこは地獄と言っても過言ではない所になっていた。
「僕達のするべき事は一つ、わかりますね」
クロノがそう言うと、皆もわかったかのようにクロノを見つめた。
「ＮＦの人達を助けに行きましょう！」
雪音の言葉にその場にいた兵士達が頷く、ＢＮは人類を守る為の組織、ＥＲＲＯＲは人類の敵。
だとすればなすべき事は一つ、今ＥＲＲＯＲに襲われている人達を助ける事だった。
「皆さん、今すぐ町に向かい。一人でも多くの民間人を救いに行きます」
クロノはそう言うと司令室から出て行こうとする、その後ろには香澄と雪音、そして穿真と羅威も続いていく。
すると穿真は横で走っている羅威に声をかけた。
「おい羅威、今のお前にＮＦを許す事は、救う事は・・・出来るのか？」
「・・・わからない。だが今、罪も無い一般市民を見殺しにする事は出来ない」
その羅威の言葉を聞いた穿真は小さく笑みを見せると、安心したように表情が和らぐ。
「そうか、んじゃ行こうぜ」

ＢＮが出撃準備に入り、艦から機体が飛びたつ時、既に東部軍事基地のＮＦの兵士達は大都市に到着していた。
赤城は既にパーツ交換済みの塗装された赤いリバインに乗り込み、

市街地に到着すると民間人を襲っているＥＲＲＯＲを次々に排除していく。
「この町がＥＲＲＯＲに・・・くそっ！こんな時に！」
穴の開いた地面から湧き出るＰｅｒｓｏｎ態を射撃していくリバイン、するとその赤城の乗るリバインの横に一機のギフツが並んだ。
「赤城少佐！無事だったんですね！」
懐かしさを感じる声から通信が届いたと思うと、モニターに由梨音の姿が映る。
「由梨音！？お前も無事だったのか！」
「はい、私は気を失ってたらしくて医務室にずっといたんです」
「そうか、そうだったのか・・・体調は大丈夫なのか？」
「大丈夫です！私も戦えます！」
由梨音の乗るギフツが腰に付いている手榴弾を手に取ると、それをＰｅｒｓｏｎ態の湧き出る穴に放り込む。
爆発と共に穴の中に土や瓦礫が埋もれていき、穴を塞いでいく。
赤城がそれを確認していると、通信機から他の部隊との通信が入ってきた。
『こちら第六機動独立部隊、現在Ｄ地区の民間人を学校に避難させていますがＥＲＲＯＲの数が多く思うようにすすまない！援軍を頼む・・・！』
「由梨音、聞いたな？今すぐＤ地区へと向かうぞ！」
「了解！」
Ｄ地区へと向かう赤城と由梨音、学校付近に到着すると、兵士が民間人を誘導し学校へと案内していた。
幸いにもここの学校にはＥＲＲＯＲの出現する穴は開いておらず、付近にもＥＲＲＯＲが湧き出る穴が存在していない。
だがＰｅｒｓｏｎ態は周りから次々と人々のいる学校へと向かっていた。
その学校の周りでは１機のリバインと、４機のギフツがＥＲＲＯＲと応戦していた。

赤城と由梨音もすぐさま加わると、周りから押し寄せてくるＥＲＲＯＲを次々に銃で撃ち抜いていく。
そして第６機動独立部隊と通信を繋ぎ、現在の状況を互いに確認しあう。
「赤城少佐、現在この学校には数千人もの民間人が避難している。他にも他の学校や避難所にはそれ以上の民間人が避難を済ましている。だが余りにも兵士の数が少ない、このままでは持たなくなる、その前に増援、あるいは町から民間人を非難させなければならない」
「把握した、増援は間もなく到着する。今は我々だけでこの場を持ちこたえなくてはならない、全機学校を囲みＥＲＲＯＲの侵入を防ぐぞ」
学校の敷地に入ろうとＰｅｒｓｏｎ態が同じＰｅｒｓｏｎ態の死体の山を越えながら次々に進んでくる。
機体で応戦し、学校のグラウンドには戦車が待機し、銃を持った兵士達も応戦していた。
ある日突然町が地獄と化すなど、空想じみており、現実起こる事は無いと思っていた、だが今現実でそれは起きている。
平和は退屈だ、何か事件でも起きないか、等と抜かす馬鹿供は、自分が地獄に立たされた時、初めて身を持って平和の大切さ、そして尊さを知る。
そして民間人はまだ多く逃げ遅れている、残っている、この町に安全な場所等どこにもないというのに。
赤城達が守る避難所の学校とはまた別の避難所では別の部隊の兵士達がＥＲＲＯＲから民間人を守っていた。
「先生、お母さんと、お父さんが・・・」
その避難所の学校の体育館には子供から大人まで沢山集まっている。
授業を受けていたおかげで学校に避難する事が出来たが、その子供たちの両親がまだ学校に来ていない。

不安な気持ちを紛らわせようと学校の先生達は必死に子供達を慰めていた。
「大丈夫、私達には神様のご加護があります。それに軍の方々も来ています」
「祈りましょう、私達に出来る事はそれだけです」
複数の大人達はそう言うと、両手を合わせ天に祈り始める。
それを見ていた子供達も震える手で両手を合わせると、大人達と同じように祈り始めた。
この状況下でこれ程冷静にしていられるのも異様に見えて仕方が無いが、たしかに民間人はただ祈る事しか出来ない。
だがその時、学校が突然揺れ始めると轟音と共に体育館の中央に巨大な穴が開いた。
驚きと衝撃で声が出ず、その場にいた人達は固まったままその穴を見ている。
一人の男が恐る恐るその穴の中を覗こうと近づいた時、一本の赤い手が穴から伸び、その男の頭を掴むと一瞬で握りつぶした。
そして、体育館に開いた穴から一匹のＰｅｒｓｏｎ態が這い上がってきた。
目が無いというのに周りを見渡し、人間がいるのを確認している。
そして大きな口で笑みを見せると、次々に穴からＰｅｒｓｏｎ態、Ｈｕｍａｎ態が這い上がり始めた。
人々は奇声と悲鳴を上げながら逃げ始める、だが諦めたのか、ＥＲＲＯＲが来ているにも関わらず祈りを止めない者もいた。
既に避難所の壁や床はＥＲＲＯＲに殺されていく人間の血で汚れている、小さな子供達でさえＥＲＲＯＲは容赦無く千切り殺し、喰っていく。
手を繋いでいた親がＥＲＲＯＲに殺される子供。一瞬にしてＥＲＲＯＲに囲まれ体を引き千切られていく家族、運よく避難所の外に出られたとしても、何処に逃げる？
周りを見れば次々にＥＲＲＯＲが押し寄せており、頼みの軍人も校

内のＥＲＲＯＲに殺されている。
そして避難所の周りで戦っていたＮＦの機体にはＰｅｒｓｏｎ態が張り付き目の前に倒れていた。
もう誰も自分を助ける人はいない、ただ死を待つだけ。それ以外何もする事は出来ない。
絶望の中後ろを振り向く、最後に見た光景は、笑いながら手を伸ばしてくるＥＲＲＯＲの姿だった。

「赤城隊長！大変です！Ｂ地区の避難所にＥＲＲＯＲが、あっでも、もう・・・！」
由梨音の声に赤城がＢ地区の避難所にレーダーを合わせた時、既にレーダーの範囲内には赤い点滅しか残っていなかった。
人間の反応も機体の反応も何処にもない、だがそれは一箇所の避難所だけではなかった。
人々が集まっている避難所に次々に現れ始めるＥＲＲＯＲ、もはや安全な場所等この町にはない。
そして赤城達が守る避難所の周りにはよりいっそうＥＲＲＯＲの数が増し、もはや突破されるのも時間の問題となっていた。
「援軍はまだか・・・っく、このままではこの避難所までが・・・」
『は、離れろッ！この化物がぁあああ！！』
その声に赤城が横を向くと、無数のＰｅｒｓｏｎ態がギフツに張り付き、装甲を溶かし、噛み砕いている。
すぐさま助けようとしたが前方から押し寄せるＥＲＲＯＲを対処する為に助けに行く事が出来ない。
仲間が死ぬのを横目で見ながら避難所に迫り来るＥＲＲＯＲを撃ち抜いて行く事しか今の赤城にはできなかった。
「赤城少佐！このままではこの場所もＥＲＲＯＲに・・・どうしたらいいんですか！？」
残りの弾も僅かになり、援軍が来る様子も無い、だが限りなく湧き

続けるＥＲＲＯＲを殺していく事しか出来ない今、避難所にいる民間人を助ける方法はそれしかない。
「由梨音！諦めずにＥＲＲＯＲへの攻撃を続けるんだ！今の我々にはそうする他無い！」
「でもこのままじゃＥＲＲＯＲに突破されるのも時間の問題です！私達だって既にＥＲＲＯＲに囲まれているんですよ！」
赤城達が逃げる道も既に残されていない、避難所を中心に四方をＥＲＲＯＲに囲まれている為その場から離れる事が出来ない状況だった。
その時、一匹のＰｅｒｓｏｎ態が激しい弾幕の中をすり抜け避難所へと突き進んでいた。
「いかん！あのＥＲＲＯＲを誰か止めろ！避難所に向かわせるなッ！」
赤城が他の部隊の兵士にそう命令するものの、兵士達は向かい来るＥＲＲＯＲの対処に追われ避難所に向かっているＥＲＲＯＲを殺す事が出来ない。
そして避難所の入り口に指しかかった時、一発の青い閃光がＰｅｒｓｏｎ態を貫く。
『こちらＢＮの独立部隊、第壱部隊隊長のクロノ・ウェイカーです、緊急事態の為これよりＮＦ加勢させてもらいます』
その場にいたＮＦ機に聞こえてくるクロノの声、すると地面から一機の機体が現れると、その二本の巨大なドリルで周りのＥＲＲＯＲを一気に蹴散らしていく、更に上空からは雷鳴と共に黄金の機体が波の様に押し寄せるＥＲＲＯＲの前に降り立つと、機体の両手を前方に向ける。
青白い強力なプラズマを手に纏わせ、押し寄せるＥＲＲＯＲに向けて放出すると次々にＥＲＲＯＲの肉体が破裂していく。
「赤城少佐！ＢＮの部隊が私達を助けてくれてます！」
「ああ、まさかＢＮがここで援軍として現れるとは・・・」
赤城達の会話の中、ＢＮの戦艦がＥＲＲＯＲに吹き飛ばしながら突

き進んでくると、避難所の前で停止する。
『民間人を全員戦艦に避難させて下さい、ここはもう危険です！』
そのクロノの通信に応答する赤城、互いの姿がモニターに映し出された。
「こちら第五独立機動部隊隊長の赤城だ、救援感謝する。
ＮＦの各機に告ぐ、民間人の避難を最優先とし、避難が終わるまでこの場を持ちこたえるんだ」
艦にいたＢＮの兵士がＮＦの民間人を誘導し、次々に艦へと避難させていく中、その周りではＮＦ、ＢＮの機体が一匹たりともＥＲＲＯＲを近づけさせない。
艦の上には雪音、香澄の乗る我雲も付いており、更にはＢＮの最新型の機体が3機もいる為に十分な戦力となっていた。
だがその中の1機、神威だけは何か様子がおかしい、周りを見渡し何かを探しているように見える。
それを見ていた穿真はすかさず羅威と通信を繋げた。
『羅威、今は戦闘に集中しろよ?妹の事もわかるが今は・・・』
その時、1機の機体が上空から落ちてくると、地面に叩きつけられその場に轟音が響く。
落ちてきた機体を見て羅威の目の色が変わる。見た目に若干変化は合ったが、あの時玲が乗っていた機体と似ていたからだった。
その機体は急いでその場から立ち上がると、一気に加速して後退する、その次の瞬間にはあの甲斐斗の乗る黒い機体『ＭＤ』が下りてくると、剣を地面へと突き刺した。
間一髪甲斐斗の攻撃を避けた機体、無数のフェアリーを飛ばし甲斐斗を攻撃するが、その攻撃を次々に交わしていく甲斐斗は剣を振り上げ機体へと飛びかかる。
『あの機体は・・・止めろ甲斐斗！玲に手を出すなッ！』
神威が両手にプラズマを纏わせると、機体を加速させ甲斐斗の機体に飛びかかる。
その動きに気付いたＭＤは剣を盾にすると神威の拳を防ぎ、態勢を

立て直す。
「その声は羅威か、何俺の邪魔してくれてんだよ。後少しで破壊できたのに・・・」
『甲斐斗、あの機体に乗っているのは玲なんだろ？』
「・・・いいや、あの機体に乗ってんのはＥＲＲＯＲだ、お前の妹じゃ――――」
甲斐斗が次の言葉を出そうとした時、突然フェリアルとの通信が繋がる、だがそれは甲斐斗の機体だけではなく、羅威の機体にも繋がっていた。
モニターに映し出される一人の少女、体は血塗れのシーツで覆われ、顔はじっとこちらを向いたまま動かない。
『玲ッ！？俺だ、羅威だ！わかるか？！』
羅威の言葉に虚ろな目のまま玲は小さく頷いてみせると、ゆっくりと小声で呟いた。
「うん、お兄ちゃん・・・」
その言葉に羅威の強張っていた顔が少し緩んだ、まだ助け出せる可能性があると感じたからだ。
『よし、玲。今すぐ俺が助け出してやるからな。大丈夫、必ず助けて・・・』
『残念だけど、それは無理よ』
割ってはいるかのように強制的に繋がれた通信、一人の女性の声と共に、その姿が映し出された。
「お姉ちゃん・・・」
そこに神楽はいた、背景は薄暗い研究所の室内が見え、白衣に身を包んだ神楽の姿が。
『レンちゃんの肉体は既に細胞までＥＲＲＯＲに侵食されてるの、もう人間には戻れないわよ』
『何故それを・・・まさか、お前が玲を・・・』
『ええ、私がレンちゃんにＥＲＲＯＲの細胞を投与したのよ』
神楽の素っ気無い返事に表情が強張る羅威、操縦桿を握る手が怒り

で小さく震えだしていた。
『嘘だろ・・・？お前、玲に何したのかわかってんのか・・・！』
例え偽りの姉妹とは言え、玲は神楽を頼り、信頼していた。
それだというのに神楽は玲にＥＲＲＯＲの細胞を投与した、それがどれ程危険な物なわかっているのに。
「待って、お兄ちゃん。お姉ちゃんは・・・わるく・・・な・・・い」
玲は羅威を止めようと声を掛けたが、突然痛みに耐えるかのように顔を歪ませ、俯いてしまう。
「痛い・・・痛い、痛い痛い痛い痛い痛ぃいいいいいいッ！！」
狂ったように痛いと連呼する玲に動揺が隠せない羅威、だが神楽の顔色一つ変えずじっと玲の様子を見つめていた。
『玲！？しっかりしろ！玲！』
「嫌ぁあああああああああッ！」
羅威の必死の呼びかけは玲には聞こえない、聞こえてくるのは自分の体の肉が千切れ、骨が砕けていく音だけだった。
叫び声が聞こえたと思うと通信が途切れモニターから玲の姿が消える。
通信を繋ぎなおそうとするが繋がらない、レーダーを見るとフェリアルの反応が有るをの確認した羅威はすぐさま神威をフェリアルの元へと走らせる。
神威が到着したものの、そこにフェリアルの姿はどこにも無い、いるのは一匹のＥＲＲＯＲだった。
そのＥＲＲＯは体内から触手を出すと、機体の残骸やＥＲＲＯＲの死骸を突き刺し自分の肉体に次々に寄せ集めていく、そしてその集められた残骸と死骸は次々にフェリアルに取り込まれていく。
取り込んでいくたびに触手の数は更に増し、目まぐるしい程の早さで機体の大きさが元の数倍に達そうとしていた。
フェリアルから伸びる触手が神威に巻きつこうとした時、穿真の乗

るエンドミルが両手のドリルを使い無数に伸びてくる触手を蹴散らしていく。
『何ボサっとしてんだ羅威！死にてえのかッ！？』
『っ！？・・・すまない、だが玲があの中に・・・』
『今は民間人の救出が先だッ！ＥＲＲＯＲの湧きが止まった今、一刻も早く避難させねえとならねえだろ！その後玲を助ければいい！俺も後でお前に力を貸す、だから今は俺に力を貸せッ！』
『・・・ああ、わかった』
穿真の気迫に促された羅威は操縦桿を素早く動かし近づいてくる触手をプラズマを帯びた両手で振り払い、未だ大きさを増していくフェリアルから離れていった。

その頃、数箇所の避難所で民間人を乗せたＢＮの戦艦は最後の避難所に向かっていた。
クロノは避難所に向かう間に赤城と通信を行い、民間人救出後の事を話し合っている。
『町の避難を済ませた後、僕達は一時町から距離を取り安全な場所へと向かいます』
「ああ、わかった。それともうじきＮＦの増援がここに到着するが、既に連絡は取り合いＢＮの事も伝えておいた。警戒する必要は無い」
赤城がクロノと会話をしていると、前方から数機のギフツが此方に近づいてきているのが見える。
ＢＮと一緒に行動している訳を赤城が話そうと通信を繋ごうとした時、突如前方から向かってくる数機のギフツが銃を構えると、こちらに銃口を向け始めて発砲し始めた。
ギフツの攻撃を素早く交わすリバインと黒葉花、だがその銃弾は民間人を乗せた戦艦へ向かっていた。
そこにすかさず穿真のエンドミルが現れると、全ての銃弾をドリルで弾き戦艦を守る。
『おい！さっさとＮＦの連中に伝えろ！俺達は今争ってる場合じゃ

ねえって事を！』
「わかっている、だがこちらが呼びかけても応答が無いんだ！」
赤城がいくら呼びかけても応答が無く、ギフツは攻撃を止めようはしない。
するとエンドミルが両腕のドリルをギフツに向け発射し、攻撃してきた2機のギフツを破壊すると残る1機の元へ向かうと両腕のチェーンソーでギフツの胸部を貫く。
『穿真！？何をしているんだ、彼等はＮＦの兵士達だよ！』
『仕方無えだろ、言ってもわかんねえならこうするしか・・・っ！？』
胸部から抜き取ったチェンソーの歯には生々しい血が付いている、だが明らかに人間一人の血液の量ではなかった、穴の開いた胸部からは血と共に何本もの触手が伸びると、一瞬にしてエンドミルを巻きつこうとする。
すかさず両腕のチェーンソーで触手を切って行くが、ギフツはエンドミルの両肩を掴むと赤く目を光らせた。
「危ないッ！」
赤城がそう叫ぶとリバインはＬＲＢを振り上げながら走り飛び、エンドミルの両肩を掴むギフツの両腕を斬り落とし、素早く腹部に蹴りを当ててギフツをその場から遠ざける。
蹴り飛ばされたギフツはそのまま空中で爆発すると、その破片が周囲の建物を破壊していった。
『な、何だ今のは！？突然触手が出てきて、しかも自爆しやがっただと！』
態勢を立て直しながら地面に着地すると同時に両手にドリルが戻る、そのドリルで破壊された機体も血を噴出しながら爆発していた。
「レーダーの反応を良く見ろ、あれは・・・ＥＲＲＯＲだ」
赤城の声に各機体に乗っている人達がレーダーを見ると、自分の機体を中心とした赤い反応が囲むように次々に増えていく。
既に完全に囲まれていた、３０を軽く超える赤い反応が戦艦とその

周りの機体を中心にして集まって来ていたのだ。
その中にいる機体はギフツだけではない、ＢＮの機体我雲や、ＳＶの機体アストロス、そしてＮＦの機体リバインまでもが現れている。
機体は微かに原形を止めているものの、装甲の間や間接からは赤い肉と血管が見え、体の至る場所から触手が垂れ下がっていた。
『完全に囲まれていますね・・・羅威と穿真は戦艦の前方に、香澄と雪音は両サイドをお願いします』
「ＮＦの各機に告ぐ、対ＥＲＲＯＲ戦ではない、各機シールドを装備しろ、無い者は艦からの後方支援に回れ」
クロノの指示に艦の近くに集まりだすＢＮ機、赤城の命令に陣形を作り、追撃態勢をとり始めるＮＦ機。
終わらない激戦、永遠と思われる程長い戦い、休む暇など無い。
その時まだ彼等は知らなかった、この戦いがまだ戦争の、惨劇の序盤に過ぎない事を。

――東部軍事基地第2地下研究所、そこでは白衣を来た神楽がモニターを通し戦場の様子を眺めていた。
一つのモニターには戦艦を中心に迫り来るＥＲＲＯＲを倒していく光景。
もう一つのモニターには甲斐斗の乗るＭＤが何処かへ向かおうとしている光景。
そしてもう一つのモニターは・・・。
「あら、目覚めたようね・・・所で、そんな物で私をどうする気かしら」
神楽は振り向かずともわかった、自分の首元に刃物を突きつけられている事を。
紫色の長髪をした女性は小さな白いシーツを体に巻き、右手には銀色の光沢がするメスが握られている。
「私に、何をしたの？」
「あらあら・・・質問する人を間違えてるわよ、エリルちゃん」

その言葉にエリルは神楽の横に置かれてある機材をなぎ払うと、機械は次々に地面に落ち、機械は音を立てて壊れ、破片がエリルの足元に散らばっていく。

「ふざけないで！私に何をしたの、教えなさいよ。教えないと・・・！」

メスの刃先を首元から神楽に見える位置へと持っていく、そしてまた首元に突きつけると、エリルは神楽の返答を待った。

「大丈夫、私は貴方に何もしてないわよ。ただ精密検査をしただけ・・・そしたら興味深い結果が出てね・・・うふふ」

刃物を突きつけられているのに余裕の笑みを見せる神楽、その笑みの内容が気になるエリルは再び質問をした。

「検査結果って、私の体がどうかしたの・・・？」

エリルのその質問には素早く返答する神楽、笑みのまま後ろに振り向くと、怯えた様な目のエリルを見つめて口を開いた。

「貴方、一度死んでるわよ」

「えっ・・・？」

完全に動揺したエリル、それを狙ったかのように神楽はエリルの右手を掴むとねじ上げ、一瞬にしてメスを奪い取り、その刃先をエリルの顔に向けた。

「っ！騙したのね！」

動揺した顔から一変し、神楽を睨むエリル、それでも神楽は笑みを浮かべたままだった。

「騙して何かないわよ、貴方は一度死んでる。それは紛れも無い事実・・・」

「証拠も無いのにデタラメな事言って、それで私が信じるとでも思ってるの！？」

「信じたじゃない、だから動揺したのよね」

神楽の言葉が胸に突き刺さる、たしかにあの言葉をエリルは信じてしまい、動揺してしまった。

「真実を知りたいなら、自分で聞きに行きなさい。彼の元にね・・・

」
握っていたメスを机の上に置くと、神楽は部屋の隅にあるロッカーからパイロットスーツと私服を取り出す。
「彼は今本国にいるわよ。この奥の扉を開ければ車を用意してあるから、それに乗って地下通路を通れば空港へ行けるわよ」
「・・・神楽さん、貴方はどうして私を・・・？」
「知りたいんでしょ？大丈夫、今の貴方は軍人じゃない。軍に戻る前に、探しに行くといいわ」
必要な荷物を手渡され、しょうしょ困惑した様子のエリルだったが、渡された私服に着替え終わると、その扉の前に向かった。
「あの、ありがとうございます・・・でも一つだけ教えてください、敵の私にどうしてこのような事をしてくれたんですか？」
「人助けに理由なんているの？」
「え？えと・・・そういう事じゃなくて、その・・・」
困っている様子のエリルを見て神楽はまた小さく笑うと、そっと振り向きエリルに背を向けた。
「行きなさい、こんな所で時間を潰している暇は無いわよ」
そう言って煙草を取り出し、火を付ける神楽。その後ろ姿にもう一度頭を下げたエリルは扉を開けて通路を走っていった。
「その先にある真実は、救いか、苦しみか・・・それは・・・自分次第」
神楽は灰皿に吸いかけの煙草を置くと、白衣を脱ぎ始める。その白衣脱ぎ終えると、既に彼女はパイロットスーツに身を包んで立っていた。
「私も、行かないとね」

第６２話　肉、蠢き（後書き）

正式名所Ｄｏｌｌ態　第六種（ＥＲＲＯＲ）
全長１６～２５ｍ
新しく確認された新種のＥＲＲＯＲ、その姿はＤシリーズ（ギフツや我雲）の形に似ている。
機体の半分は血肉で覆われ、その血肉は人間の肉が使われており、破棄された機体、あるいは破壊された機体を復元、再生して作られた生物と考えられている。
武装も従来のＥＲＲＯＲとは異なり触手だけでなく、銃器や盾等を扱い、更には再生能力と自爆装置も備わっている。

第６３話　戯れる、妖精

廃墟と化した町では現在ＮＦとＢＮが手を組み、周りのＥＲＲＯＲと戦いながら最後の避難所へと向かっている途中、新種のＥＲＲＯＲの出現により、その戦いは更に過酷な戦いへと化していた。

『避難所が見えてきました、全機、避難所及び民間人を守りますよ！』

避難所の周りに友軍機の機体の姿は無い、だがこの避難所だけは普通の避難所とは違っていた、対ＥＲＲＯＲ専用の厚い防壁が周りを囲むドーム型の建物。

クロノの声に羅威達が避難所と戦艦の四方を囲み、周りから向かってくるＥＲＲＯＲの対処を行なう。

避難所の入り口を艦を止める、だが避難所の入り口は一向に開かない。

不審に思った赤城はすぐさまその避難所に通信を試みると、すんなりと通信は繋がり、モニターに兵士の姿が映しだされた。

「こちら第五独立機動部隊隊長赤城、現在入り口に艦を止めてある。すぐに避難を・・・」

『その必要は無いのだよ、赤城少佐』

兵士の横から一人の士官が現れる、それは東部軍事基地に勤めていた士官の姿だった。

そしてモニターの光景が変わると、ある一室に何人もの東部軍事基地の士官が集まっていた。

「な、何故東部軍事基地の士官の方々が・・・？」

『ＥＲＲＯＲのいる基地から脱出した後このシェルターに避難していたのだ。

　するとどうかね、町中にＥＲＲＯＲが現れおった。運が良かったよ、このシェルターは核にも耐えられる強度を持つ、ＥＲＲＯＲの攻撃等ではビクともしないからな』

「そんな・・・兵士達がＥＲＲＯＲと戦っている最中、あなた方は安全な場所に隠れていたのですか?!ＮＦの士官だというのに!」

ここで赤城は悟った、この避難所は民間の避難所ではなく、上層部人間専用の避難所だという事を。

部屋を見ればそれらしき人物が多く窺える。兵士達は戦い死に、民間人が殺されていく中、ここにいる人達は安全な場所で過ごしていたという事を知った赤城は操縦桿を握る手に無意識に力が入っていた。

『失礼だね、君は。我々上層部の人間の身に何かあったらどうするつもりだ、危なくなれば安全な場所へ向かうのは当然の事ではないのか?』

「兵士達は命を懸けて戦っていた!」

『当たり前だ、それが兵士だ。全く、上官に口答えした挙句、ＢＮと手を組む等とＮＦに泥を塗るとは・・・貴様等の処分はこの戦闘が終わった後すぐにしてやろう』

唇を噛み締める赤城、これ以上何を言おうと、彼等の考え方は変わらないだろう。

説明した所でそれは無意味だという事も、赤城はわかっていた。

『何だその目は・・・もう既に本部から救援が来ている、そこで我々は助けてもらう事にする、お前達はＢＮと共にこの町を脱出した後、隙をついてあの新型機を破壊して来るのだ、いいな?これは命令だ』

今度は耳を疑うような発言を聞いた赤城は信じられないような顔をしたままモニターを見つめていた、この後の及んでそんな発言が出来る上層部の人間に神経が赤城には理解できなかった。

無言で通信の電源を切る赤城、背もたれにゆっくりともたれ掛かると、赤城は誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。

「武蔵・・・私には・・・無理だ・・・」

「赤城少佐！ＥＲＲＯＲの数が増しています！私達も早く脱出しないと・・・！」
由梨音の声に赤城は素早く操縦桿を握る、ここは戦場、気を許せば一瞬で『死』がやってくる。
「ＮＦ、及びＢＮの兵士に告ぐ。全機艦を護衛しながら戦線離脱し、町から脱出するぞ」
『待ってください、ここの避難所はまだ・・・』
「心配無い、このシェルターは簡単には突破されない代物、それに既に町には援軍が到着している。我々が今しなければならない事は艦にいる民間人を一刻も早く安全な場所に避難させる事だ」
赤城がクロノにそう言っていると、上空をＮＦの戦闘機が通過していく、既に援軍はこの町に行き着いていた。
戦闘機から落とされる爆弾で町周辺にいるＥＲＲＯＲは次々に破壊されていくが、それはあくまでも旧型のＥＲＲＯＲだけだった、機体の身を包むＥＲＲＯＲは戦闘機が上空にいるをのを確認すると、一斉に空に向けて射撃を開始し始める。
町の至る所からの弾幕に、次々に落とされていく戦闘機。その隙にＢＮは艦を後退させ町から脱出しようとしていたが、神威だけはその場から動こうとしなかった。
『皆は先に脱出していてくれ、俺はここ残る』
羅威からの通信は部隊の人間全員に繋がされている、当然クロノがそれを止めようとしたが、穿真の乗るエンドミルもその場から動こうとしなかった。
『俺も残るぜ、羅威に力を貸すって言ったし。艦はＮＦの援軍と擦れ違うように脱出すれば大丈夫だろうしな』
『二人とも指示に従ってください！僕達のやるべき事は既に終わりました、後は安全な場所に艦を移動させるだけです！』
クロノは二人に呼びかけるが、相変わらず二体の機体は動こうとしない。
その間に戦艦は脱出を開始しており、話している内に町の中心部か

ら離れていく。
『すまないクロノ、俺のやるべき事はまだ終わっていない・・・』
羅威はそう言って通信を切ろうとすると、クロノの乗る黒葉花が神威の横に降り立つ。
『・・・言っても動かないのなら。僕もここに残ります、二人を残していく訳にはいきませんからね』
『おいおい、それじゃあお前自身命令違反してるじゃねえか』
穿真の鋭い指摘に小さく笑ってしまうクロノと羅威、だがその三人に香澄から激が飛んだ。
『何を言ってるのですかクロノ隊長！ＮＦの部隊と私と雪音だけで艦を護衛しろと言うのですか！？』
『うん、そうだよ。・・・自信が無いのかい？』
クロノの冷静な言葉に唇を噛み締める思いの香澄、睨むように見つめあったまま香澄はゆっくりと頷いた。
『いえ、あります。それでは三人とも、ご無事で』
無線が切られると、戦艦は更に加速して町の中心部から離れていく。
『香澄・・・ごめんね』
クロノがそう呟くと、今度は赤城と通信が繋がる。
「私だ、ＮＦの援軍と私達の部隊が艦の護衛に回っている。恐らく無事この町から出られるはずだ」
赤城の言う通り、先程まで艦を護衛していたＮＦの兵士達は全て艦の護衛に回っていた。
だが赤城だけはこの場に残っている、当然由梨音も残ろうとしたが赤城の命令により艦の護衛に向かっている。
『ありがとうございます、しかし何故あなたはここに残っているのですか？』
「大切な仲間を・・・救う為だ」
赤城が一言告げた瞬間、高層ビルを破壊しながら１機の機体がど派手に吹き飛ばされて来る。
「痛ってて、やっぱキツイな・・・」

機体の特徴から見て吹き飛ばされた機体は甲斐斗の乗るＭＤ、赤城の乗る赤いリバインはすぐさまＭＤの元へ駆け寄ると、倒れた機体を起こし始める。
「甲斐斗、大丈夫か？」
「おお、赤城か、すまねえな・・・。あ、無事に民間人は避難させたか？」
「全ての民間人を助ける事は出来なかったが、助けられる範囲の人達だけは何とかな・・・」
「そうか、それなら早くお前もここから離れろ」
起き上がったＭＤは地面に突き刺さる黒剣を引き抜くと、それを両手で構え始める。
「それは出来ない、私はレンを助けるまでは・・・っ！？」
轟音と共に町全体に巨大な亀裂が走っていく、その大きな亀裂は根のように辺りに広がり始めると、瞬く間に触手が伸び始める。
そして町の中心部建てられていた高層ビルが次々に倒壊していくと、煙の中から一体の巨大なＥＲＲＯＲが影が見えた。
「そんな、馬鹿な・・・」
信じられないような光景に赤城が目を丸くする、赤城だけではない、増援に来たＮＦの兵士、そして羅威達もそのように見ていた。
煙が薄れていくと、段々と見え始めるＥＲＲＯＲの姿。全高は軽く２００ｍを超えているだろう、下半身は植物のように地面から生えておりそれは町全体に広がっている、胴体は機体の装甲と血肉で固められ、異常に大きな両肩には目玉のような巨大なレンズが付いている。
そしてそのＥＲＲＯＲの頭部と胸部は、あの玲が乗っていたフェリアルに似ていた。
『な、何だあの化物は・・・でかすぎだろ・・・』
穿真が呆気にとられていると、ＮＦの増援部隊が一斉にその巨大なＥＲＲＯＲに向けて攻撃を開始し始める。
だがＥＲＲＯＲの地面から無数の触手が伸び始めると、次々に銃弾

や砲撃の盾となり防いでいく。
盾代わりにされた触手は崩れ落ちるが、次々に地面からた新たな触手が伸び始め、近づく機体は次々に触手に貫かれると巨大なＥＲＲＯＲの肉体に取り込まれていく。
ＥＲＲＯＲの攻撃はこれだけではない、背部から数多のフェアリーが放たれると、一斉にＮＦの増援部隊に攻撃を開始した。
四方八方からの全発射攻撃の前にギフツやリバインは成すすべも無く破壊され、上空を飛ぶ戦闘機も撃ち落されていく。
フェアリーの数、そして触手の数は尋常な数ではなかった、更に巨大なＥＲＲＯＲの肉体からは砲身
や銃口が現れると、次々に弾丸を発射していき、弾幕を張り続け始める。
更にＥＲＲＯＲの両肩に付いてあるレンズが光を帯びた粒子を放ちだすと、一発の高出力レーザーが遥か遠くにいるＮＦの艦隊の列を貫く。
戦艦の列は一瞬で溶かされると、周りの機体を巻き込む程巨大な爆発を起こし一気に壊滅していく。
その光景を見ていた赤城が声を上げた、レンズの照準が町から離れていくＢＮの艦に向いたからだ。
クロノ達がそれに気付き、艦に連絡を入れようとした時、誰もが息を呑んだ。
照準は固定され、眩しい光と共に一発のレーザーがレンズから放たれた。
『香澄！雪音！今すぐ艦から離れるんだッ！』
クロノの声は届かなかった、二人は突然迫ってくる眩しい光が何を意味するのかわかっていない。
その光の意味に気付いた時には、既に目の前にまで迫っていた。
『―ＳＲＣ発動―』
その機体の前に現れる１機の白い機体、巨大な右腕を盾にレーザー

を弾き防ぐと、力強くその場に着地した。
『あの機体、まさか・・・愁?』
羅威が言葉を漏らすと、その名前に穿真とクロノが反応を見せた。
『はぁっ!?羅威!てめぇ今なんて言った?!』
たしかに聞こえたその名前をもう一度聞こうとした時、目の前のモニターに愁の姿が映し出される。
「こちらはＳＶ親衛隊隊長、魅剣愁。これよりＮＦ、及びＢＮと共同戦線を組み、戦闘を開始します」
堂々としたその態度に穿真達は言葉が出せない、赤城は通信を繋ぐと愁の姿を見て確認した。
「艦を守ってくれた事に感謝する、しかし何故ＳＶがここに・・・?」
すると今度は愁ではなく、葵とエコの姿がモニターに映し出される。
「偶々近くを通りかかったんだ、そしたらＮＦから救援信号が出てな」
葵とエコが赤城と話している間に、愁は羅威と通信を繋いでいた。
悲しげな目をしている愁とは対象に、睨みつける羅威。
「羅威、今は協力しなければ、あのＥＲＲＯＲを止める事は出来ないよ」
『黙れ、玲や彩野を苦しめたお前を、俺は絶対に許さない』
「彩野は兵士、君の妹も兵士、そして戦場に出ていた、だから殺された、それだけの事だよ」
『お前ッ・・・だが玲はまだ死んでいない、玲はまだあの中で生きている。そして俺が必ず助け出す』
「・・・それでＥＲＲＯＲが止まるのなら、俺も協力するよ」
二人が会話をしている途中、突如モニターに穿真とクロノの姿が映し出される。
『お、おい!愁!どうしてお前がそんなもんに乗ってやがる!?どうしてお前が・・・!』
「久しぶりだね、穿真。俺がＳＶにいる理由は紳にでも聞いて、そ

れじゃ」
そう告げると勝手に通信を切る愁、穿真は切れているにも関わらず愁に話しかけていた。
『ちょ、俺の聞きたい事はまだ終わってないぞ！おいッ！・・・っくそ、勝手に切りやがって・・・』
『穿真、奴はもう俺達の知っている愁じゃない。気をつけろ』
羅威はそう言うと神威を走らせようとした時、その神威の前にＭＤが上から現れた。
そしてＭＤから今戦場にいる赤城とＢＮ、ＳＶ全機に通信を繋げられる。
「逃げるなら今の内だぜ、マジでお前等あんな化物と戦う気か？」
甲斐斗の言葉に全員が巨大なＥＲＲＯＲを見つめる、周りには無数のフェアリーが飛び交い、地面からは触手が溢れている、そしてあの両肩のレンズがレーザーを放ち、次々に増援部隊を掻き消していく。そんな化物と、たった数機の機体で本当に戦うのかと、甲斐斗は皆に聞いていた。

「今更怖気づいたのか甲斐斗。貴様らしくないな」
赤城はそう言うとリバインを走らせＭＤの横へと移動する、すると後方にいたＳＶの機体も横に並び始めた。
「ったく、肝っ玉小さい野郎だな。エコ、こんな奴の力借りなくてもやってやろうぜ」
「うん、わかってる」
するとエンドミルもその列に並び、日本の巨大なドリルを回転させ始めた。
「だから燃えるんだろ、なぁ羅威、クロノ。力を合わせてあのＥＲＲＯＲを止めて、その後・・・」
「玲を助ける」
穿真の続くように羅威が口を開く、その眼に迷いは無い。
今すべき最優先事項は玲を助ける事、その為なら手段も選ばない。

「威勢は良いみたいだが、お前等あんなでか物を殺せるのか？」
甲斐斗の『殺す』という言葉に赤城と羅威が強く反応を見せると、二人が同時に全員に通信を繋げた。
「待て、奴を殺す前にレンの救出が先だ、まだ胸部にある操縦席にいるかもしれない」
赤城の言葉に続けて羅威が言葉を付け足す。
「ああ、玲を助けるまでは胸部に攻撃するな。攻撃した奴は俺が殺す」
羅威は本気だ、声と表情で全員が見てわかる。
だがあのＥＲＲＯＲを倒すだけでも難しいというのに、その中にいる玲を助け出さなければならない。
無理難題の要求に等しい、現在の戦力から見てもそうだ、そもそもたった数機の機体だけでＥＲＲＯＲの大群と戦う事だけでも厳しい。
二人の要求に甲斐斗が反対しようとした時、ミシェルの言葉が脳裏を過ぎった。
「やれやれ、お前達はお前達で好きにしろ。俺も好きに戦う、安心しな。胸部は狙わねえ、俺は奴の首を貰うだけだ」
「っふ、それでこそお前だな」
そう言うと甲斐斗の乗るＭＤが発進し、赤城の乗る赤いリバインも続いて発進する。
「穿真、クロノ、俺達も行くぞッ！」
ＭＤの後を追うように神威が発進すると、両サイドにエンドミルと黒葉花が並びＥＲＲＯＲの元へ向かう。
「葵、エコ、俺達はＢＮとＮＦの援護に回り、機会を窺うよ」
「ああ、わかった。それじゃ、いっちょ行きますかぁッ！」
ライダーは鍵爪を光らせながら俊敏な脚力で建物の屋根を跳び越えていくが、愁の乗った機体は動かずその場に留まっていた。
「俺は力を授かった・・・強大な力、フィリオの為、世界の為に・・・突き進むしかない。
行こう、アストロス・アギト。君の力を、正義の為に」

愁は一人呟くと、操縦桿を握り締め、勢い良く機体を発進させた。

町中が激戦を迎える中、東部軍事基地の地下では機体の最終調整が行なわれていた。

「『羽衣』異常無し、最終調整完了・・・」

コクピットの電源が付き、全てのモニターの電源が入っていく。

町で行なわれている戦闘が薄らとモニターに映る、無数の触手とフェアリーが次々にＮＦの増援部隊は破壊していく中、数機の機体が絶体絶命の中奮闘している。

その戦いの映像に煙草の煙が漂う、吸い終わった煙草は真横の灰皿に入れるときちとん蓋を閉める。

全ての準備は整った、機体はゆっくりと動き出すと、地下から地上へ続く出口が開かれる。

「待ってて、レンちゃん」

神楽の一言でゆっくりと浮上していく『羽衣』。

その巨大で美しい天使のような姿とは裏腹に、恐るべき力を秘める悪魔。

全ては誰の為に、羽衣は計画の為に、彼の為に、全て。

「今、楽にしてあげるから」

第６３話　戯れる、妖精（後書き）

正式名ＭＦＥ－アストロス・アギト　（Ｓａｖｉｏｒｓ製）
全長－２１ｍ　機体色－白　動力源－光学電子魔石
搭載されているＳａｖｉｏｒｓの最先端技術を兼ね備えた最強の次世代機。
『３大神機』ではないものの、Ｓａｖｉｏｒｓで一番の性能を誇る。
右腕に『砕く拳』、左腕に『貫く拳』を付けており、相手や状況によってその能力を使い分ける事が可能。
機体の性能も大幅向上し、装甲の耐久度も格段に上がっている為、単機決戦が可能。
ＳＲＣ機能で近接戦には非常に優れている反面、遠距離兵器をもっていない為に遠距離戦は不向きのはずだが、圧倒的な出力を持っている為遠く離れていた敵にもすぐさま近づく事が出来る。

第６４話　救済、困惑

「なぁ赤城、お前は信じてるのか？レンが生きているって」
地面から湧き出る触手を大剣で片っ端からぶった切って行くＭＤ、だが攻撃は地面からだけではない、空中で待機していた無数のフェアリーが一斉に甲斐斗に向けてレーザーを発射していく。
「それを今、自分の眼で確かめに行くのだろ？」
ＭＤの後ろから飛び出てくる赤いリバイン、ＬＲＢを使いＭＤに向けられたレーザーを弾くと近くにいるフェアリーを次々に斬り落としていく。
「余裕だな、たしかに確認しなきゃわからねえが。そう簡単に胸部に辿りつけるかねぇ」
そのまま二人は止まる事無く巨大なＥＲＲＯＲの元へと走っていたが、瞬く間に地面から触手が生え直り、先程の倍の数のフェアリーが空中から狙撃を開始し始め、近づいていく事に触手の数は増していき、巨大ＥＲＲＯＲから出ている砲身と銃口は近づく敵を容赦なく撃ち続ける。
さすがの甲斐斗と赤城も、この激しい弾幕の前では近づく所か、攻撃を回避するだけでもやっとだ。
フェアリーの攻撃を回避していたリバイン、だが足元の地面から突然に触手が湧き出るとリバインの両手に巻き付き始めた。
「っ！？しまった・・・！」
触手により身動きを封じられたまま地面に叩きつけられるリバイン。
それを狙うように機体の周りの地面から次々に触手が湧き出ると、胸部に向けて一斉に襲い掛かった。
赤城が目を開けるとそれは見えた、無数の触手が一本の巨大な触手に変わり胸部を向かってくるのが。
すぐさまその場から逃げようとしたが、機体は触手によってしっかり固定されている為身動きがとれない。

その時、両腕に巻きつく触手目掛け二発の青いレーザーが触手を焼き切ると、リバインはすぐさまその場から離れる。
胸部を突き刺そうとした触手は地面すれすれで止まると、目の前にいるリバイン目掛け突き進む。
「穿真！彼女の援護を！」
突如リバインの前に現れたエンドミルは、両手のドリルで向かってくる触手を簡単に貫き、破壊していく、ドリルに夥しい血がつくものの、回転するドリルの遠心力を使い血を吹き飛ばす。
「おいおい、足だけは引っ張らないでくれよ？」
その血が自らの機体に付着していくが、穿真は気にせず巨大なＥＲＲＯＲへと突き進んでいった。
「すまない、感謝する・・・」
リバインが体勢を立て直していると、空中に漂うフェアリーが放電し、次々に爆発していく。
前方にいたエンドミルまで起こしていく神威は青白いプラズマを放電し続けながら誰よりも早くＥＲＲＯＲの元へ向かっていた。
「僕は上昇してＥＲＲＯＲの攻撃を誘導する。その隙に穿真と羅威がＥＲＲＯＲの懐まで入るんだ。
後方にはＳＶとＭＤ、リバインがいる、前面突破は二人に任せるよ」
クロノはそう言うと機体を変形させて垂直に上昇していく、それを見たＥＲＲＯＲは空中に漂うフェアリーを向かわせる。
「さあ行くぞ羅威！アクセルしか踏むんじゃねえぞ！」
「当たり前だ、今の俺にブレーキは存在しないッ！」
触手の壁をドリルで次々に穴を開け、着実にＥＲＲＯＲに近づいていく。
その後を神威が放電しながら周りの触手を破壊し、フェアリーのレーザーを弾きながら進んでいた。
巨大ＥＲＲＯＲからの射撃もエンドミルの巨大なドリルが次々に弾いていき、徐々にＥＲＲＯＲとの距離が縮まろうとしている。

「胸部に行くにはあの弾幕の中を上昇していかなくちゃならねえが、行けるか？」
「任せろ、あの高さなら簡単に上昇できる」
懐に入り、上昇して胸部まで到達するだけだが、思っているほど簡単には飛び込めない。
神威とエンドミルも敵の攻撃を完全には防ぐ事は出来ず、徐々に機体の傷が目立ち始めてきた。
「二人とも！敵ＥＲＲＯＲの両肩から高エネルギー反応！来るよッ！」
クロノの声に二人が左右に分かれると、巨大ＥＲＲＯＲの両肩からレーザーが放たれ、左右に散らばる２機を狙い撃つ。
二人の動きに合わせてついてくるレーザーは道路にいるＥＲＲＯＲ諸共吹き飛ばし、近づく機体に照準を合わせていく。
「っく、これでは近づく事が出来ない！クロノ！両肩のレンズを破壊できるか？！」
「ごめん羅威、それは出来そうに無い・・・っ！」
空中を飛び交う無数のフェアリーは四方から黒葉花を狙い撃ち、クロノはその攻撃を避けるだけで精一杯だった、地上とは違い足元から狙われる為、可変を繰り返しながら攻撃を避け、確実に１機ずつフェアリーを破壊していく。
だがフェアリーの数は増える所か、徐々にその数を増していった。
「クロノ、無理をせずに一度下がるんだッ！」
「僕は大丈夫だ、こんな所で落ちやしない！」
その時、神威とエンドミルを尋常ではない速さで追い抜いていく二体の機体がいた。
レーザーの照準が二人に向いている為邪魔が無く、その速さを生かしＥＲＲＯＲの足元にまで近づこうとしていた。
「恐らく俺達に照準が向けられる。その間に羅威と穿真は胸部まで行くんだ、早く！」
愁の狙い通り、最も近い敵に向けて両肩のレーザーがライダーとア

ギトに照準を合わせる。
だがライダーの素早さ、アギトの速さに全く追いつくことが出来ない。
レーザーを避ける中、ライダーは空中に漂うフェアリーの弾幕を避け、擦れ違いざまに切りおとしていく。
「着地は控えて、素早く高く跳び続けて・・・」
「わかってる！エコは念に集中しろ！」
ライダーが地面に着地したかと思えば、瞬く間に跳び上がり巨大ＥＲＲＯＲに近づいてく。
「うん、言われなくても・・・してる」
気付けばライダーとアギトはＥＲＲＯＲの懐に入り込んでいた、ＥＲＲＯＲの肉体から生え出ている銃口と砲身からは一斉に射撃が開始される。
ライダーはそれを避けると鍵爪と腰に付いてあるレールガンで次々に銃口を破壊し、アギトも神威の活路を切り開く為に邪魔な武装は全て破壊していった。
ＥＲＲＯＲの両肩に付いてあるレンズが次の照準を狙う為に動いた時、そのレンズの前方からは甲斐斗の乗るＭＤ、そして赤城の乗るリバインが互いに大剣を構えて突き進んできていた。
「馬鹿が、釣られすぎなんだよ。行くぞ赤城！あの目玉をぶった斬るッ！」
既に右肩の目の前に来ていたＭＤは、大剣を振り上げると、出力を上げて特攻して行く。
「承知！」
それに合わせてＬＲＢを振り上げるリバイン、既に左肩の目の前まで来ている。
そして同時に剣を、刀を振り下ろした。
突き刺したまま一気に降下していく両機、レンズの傷が出来た場所から瞬く間に亀裂が広がると、溶液を溢れ出しながらバラバラ砕け散っていく。

二体の機体は出力の限界にゆっくりとその場を離れながら地上に降りていくと、それに合わせて2体の機体がＥＲＲＯＲの足元から浮上していた。
ＥＲＲＯＲは先程の攻撃に苦しむがるように体全体を震わせ、肉体の至る所から触手を伸ばし始める。
周りの地面はＥＲＲＯＲの触手で溢れ返り、血生臭い赤い海が広がっているように見える。
地上へと下りようとしていたＭＤだったが、その様子を見て浮上を試みるが浮上する気配が無い。
「やべ、出力が上がらん・・・ちと無理しすぎたな・・・」
すると、1機の機体がＭＤの腕を掴むと、そのまま空中を平行移動していく。
「さすがに2機だと浮上は出来ませんが、これぐらいなら」
上空で戦っていたクロノが甲斐斗達に気付きリバインとＭＤを回収しに回っていたのだ。
黒葉花を狙い撃っていたフェアリーも、今は全て胸部へと向かっている為動ける事が出来た。
「すまない、レンは任せたぞ・・・」
冷却状態に入っているリバインも当然動く事が出来ず、黒葉花に連れられたまま移動していく。
赤城は機体の中ではレンの様子を心配し、段々と遠ざかっていく神威を見つめていた。

激しい弾幕の間を潜り抜けていく2体の機体、あと少しで胸部にたどり着ける距離まで近づいていたが、ＥＲＲＯＲの肉体の隙間から無数に出てくる触手は一斉に襲い掛かっていた。
「羅威！胸部に行ったら何するか、わかってんだろうな？」
「心配無い、このＥＲＲＯＲがＤシリーズを元にして出来た物体なら！」
ついに2機がＥＲＲＯＲの胸部へと辿りついた、神威とエンドミル

は互いに背を向け合い、エンドミルは空中から打ち続けるフェアリーのレーザーを巨大なドリルで延々と弾き続け、神威は両手に溜めていたプラズマを最大にまで増幅させると、その両拳を胸部にある操縦室がある部屋の左右に勢い良く突っ込む。

「出力最大、これで・・・決めるッ！」

操縦桿のトリガーを引いた後、勢い良く前方に押し倒す。

神威の周りに青白いプラズマが纏いだし、黄金に光る装甲が輝き始める。

膨大な電気が両腕を伝いＥＲＲＯＲの肉体の中に流れ込み、その衝撃に腕を入れているＥＲＲＯＲの肉片が一瞬で焼き焦げていくが、胸部にある操縦席には電流を流しておらず、その周辺の肉だけが次々に破裂していく。

電流は巨大な肉体を持つＥＲＲＯＲ全体に行き渡り、肉体から出ている触手が痙攣を起こしながら破裂していき、神威本体からも電流が放電して周りのフェアリーを破壊していく。

エンドミルはその様子を確認すると急いで神威の元から離れると、ゆっくりと地面に降りていく。

「羅威！まだ奴の動力回路には届いてねえぞ！」

神威は膨大なエネルギーの出力に機体は大きく振動し、操縦室内は赤いランプが点灯していた。

だが操縦席で聞こえた穿真の声に、羅威は神威の最後のリミッターを外すと、正面を向いて声を荒げた。

「とどけぇえええぇえええええ――――ッ！！」

操縦室の計器の数値が上限を超え、亀裂が走った時、神威の周りのプラズマが消え、電流が止まる。

操縦室の装置の電源が次々に消えていき、かろうじで点いているのはモニターの電源だけだった。

両腕は刺さったまま抜く事ができず、ＥＲＲＯＲの胸部のハッチがある目の前で停止した。

だが、それはＥＲＲＯＲも同様だった。触手の動きは全て止まり、

空中に漂うフェアリーも次々に地面に落ちる。
攻撃も止まり、完全に機能が停止したＥＲＲＯＲ、その場は一瞬にして静寂に包まれた。

「成功・・・したのか・・・？」
羅威は操縦桿を握り締めたままじっとＥＲＲＯＲを見つめ様子を窺っていたが、動き出す気配は感じられなかった。
「よし、よしっ！後は玲を、玲を助け出すだけ・・・！」
焦る気持ちを抑えきれず、すぐさま機体を動かそうと補助電源のスイッチに手を伸ばそうとした時、目の前のモニターが突然切り替わり、その場にいた全部の機体は強制的に通信が繋がれた。
モニターに映る一人の少女、両腕と下半身は触手に埋もれ、背中には幾つもの触手を伸びている、かろうじで見えるのは胸部と頭だけだ。
もはや機体の中には見えない、操縦席一面に血管が脈打っており、内臓のような物まで見える。
「お兄ちゃん・・・」
その中に玲はいた、力無く頭を上げ、微かに笑っているようにも見える。
「玲！作戦は成功した、助かるんだ！だからもう少しだけ頑張れ、今すぐ俺が助け出すから・・・！」
早く助け出したい、その一心で羅威は神威の補助電源を入れると、神威の眼に光が戻り、機能が復活し始める。
そして神威の手をフェリアルの胸部に近づけようとした時、あの女性の声が聞こえてきた。
『残念だけど、それは無理よ』
先程と同様、その場にいる機体全てに聞こえてくる声。
そして映像が切り替わると、そこには操縦席に座り、パイロットスーツに身を包んだ神楽の姿が映し出された。
『羽衣は後１５分後にバリオン砲の発射をするの、貴方達は今すぐ

この町から離れた方がいいわよ？』
突然現れた神楽に驚く一同だが、すかさず赤城が反応を示した。
「待て神楽、何故お前がそのような物に乗っている！何をする気だッ！？」
『簡単な事よ、町ごとＥＲＲＯＲを消すだけ』
二人の話している間に黒葉花は上空に上がり、遠く離れた場所で待機している羽衣の姿を捉えた。
その羽衣の映像を各機体に流すクロノ、その映像を見た穿真達の顔色は一変した。
「おいおい・・・あれはＢＮの艦隊を一撃で全滅させた機体じゃねえかよ！」
穿真の言った事は当たっている、間違い無く羽衣はあの時に現れた機体だ。
「愁・・・あの機体を止める事は・・・？」
「無理だよエコ、距離から見てあの機体に近づくには最低でも２０分はかかる」
ＳＶすら如何する事も出来ない。しかし、戦闘は終わったはず。なのに何故神楽は攻撃を行なう。
「神楽、この町にはＮＦの指揮官がまだ残っている。それにＥＲＲＯＲは止まった。後はレンを助け出すだけだ・・・！」
レンを、玲を助けだす。その名前で今まで黙っていた羅威も声を上げる。
「そうだ！玲は目の前にいる、助け出せるんだ！」
『無理よ、レンちゃんは既にＥＲＲＯＲの一部。人間じゃないの』
その素っ気無い神楽の態度に、羅威は腸が煮えくり返る気持ちだった。
「お前がＥＲＲＯＲにしたんだろうがぁッ！お前が玲を、玲を・・・ッ！」
怒りと憎しみに満ちた羅威の目は、神楽にはどの様に見えたのだろうか。神楽は表情を変えないままじっと羅威を見つめている。

「やめて・・・おねえちゃんを、わるく・・・言わない、で・・・」
羅威の表情を見て玲は悲しそうに口を開いた、だが口を開いた事より、何故神楽を庇うような事を言うのか羅威にはわからなかった。
「玲！どうして奴を庇う！？奴はお前の記憶を弄り、肉体まで・・・ッ！」
「だって・・・おねえちゃん、だもん・・・ふたりとも、けんか・・・しないで・・・」
『レンちゃん・・・』
一瞬見せた神楽の悲しげな表情を見て、玲は小さく微笑んだ。
「わたし、思いだしたよ・・・ぜんぶ・・・」
「思い出した・・・？」
羅威はそう聞くと、玲は小さく頷き、口を開いた。
消されていた全ての記憶を語り始める玲、それは果たして、思い出と呼べるものなのだろうか。

第65話　玲、レン

――――目の前でお母さんが殺された時、私は必死に血塗れの体を揺すっていた。
まだ暖かくて、柔らかくて、でも、頭から血が出てて、動かなくて……。
その時だった……突然上空から戦闘機が落ちてきて、私達は簡単に吹き飛ばされた……。

――――「いた、い……」
意識が戻った途端に全身を走る激痛、その痛みに耐えながらゆっくりと目蓋を開けると、戦闘機の残骸が辺りに散らばっていた。
「ママ……おにい、ちゃん……？」
玲は倒れている体を起こすと、土と爆風で薄汚れた服を着たまま少しずつ歩き出し、辺りを見渡す。
上空にはまだ戦闘機が飛び交っており、次々に爆弾が町に投下されていた。
「ひぃっ！」
けたたましい爆音に思わずしゃがみ込んでしまう玲、常に地面は揺れ、辺りに爆音が鳴り響く。
その恐怖にぽろぽろと涙を零しながらも玲はゆっくりと顔を上げると、必死に辺りを見渡し母と兄の姿を探した。
「ママ！……おにいちゃん！」
爆音の中声を荒げるが、そのか弱き声が人に届く事は無い。
もっと辺りを探そう……そう思い玲が歩き出そうとしたその時、物陰から一人の兵士が現れる。
その兵士は母を殺した兵士の隣にいた若い兵士だった、そして兵士は玲を見つけるとすぐさま玲の所に駆けつける。
「良かった、君は無事だったんだね。急いでここから逃げよう」

兵士も爆風に巻き込まれたのだろう、額からは血を流し片目が塞がっている。
しかし、その手には銃を持っていた。
恐怖以外の何者でもない、玲は怯えた表情で兵士から逃げようと一歩下がり兵士に背を向けて走り出そうとした。
だが兵士は素早く玲の腕を掴むと、その場に留まった。
「いやっ！いやぁッ！」
「待ってくれ、ここはもう危険なんだ。早く逃げないと……」
「たすけてママ！おにいちゃん！たすけて！たすけてッ！」
必死に抵抗するものの、兵士の手は玲の腕を決して放さない。
「今は君だけでも安全な場所に移さないといけない、ごめん……」
そう言って兵士はその場に銃を投げ捨てると、玲を引っ張り上げ両腕で抱かかえる。
そして兵士は走り出した、安全な場所を求め、荒れ果てた街中をただひたすら……。

――玲を抱かかえて走っていた兵士は自分の乗ってきた艦が見えると、すぐにその艦に向かって走り出そうとする。
だが兵士の足は急に止まると急いで物陰に隠れた。そして壁に隠れながら顔を出し、目の前に広がる光景を見てしまった。
助けを求めているＢＮの民間人達に手榴弾が投げ込まれ、集まっている民間人を一瞬で木っ端微塵に吹き飛ばす。
それだけではない、後ろ手に手錠された民間人が並列射撃で次々に殺されていた。
「そんな……こんなの、虐殺じゃないか……」
兵士はすぐさまその場から離れると、別の場所へと走り出す、人目につかぬよう細い道を延々と……。
そして、一人の兵士が無事艦に戻った時には、既に戦闘は終了していた。
町一面が焼け果て、次々に戦闘機や機体が艦に戻ってくる。

兵士に抱かかえられたままの玲はただ体を小さくして震える事しかできない、抱かかえていた兵士は誰にも見られないように艦の中に入ると、ある一室へと向かう。
幸い誰にも見つかる事なく部屋に入ると、兵士は力無くその場に腰を下ろし、抱かかえていた玲を放した。
玲はすぐさま兵士から離れると、逃げるように隣の部屋に向かう。
兵士はそれを見ていると、残った力を振り絞りながら立ち上がった。
「いいかい、絶対にこの部屋から出ちゃ駄目だよ。すぐ戻ってくるから……」
そう言い残して兵士は部屋から出て行く、部屋に一人取り残された玲は部屋の片隅で震えながら涙を必死に拭っていた。
いつも一緒だった母を目の前で殺され、いつも自分を守ってくれていた兄を失った。
もう誰も自分を守ってくれる人はいない、残ったのは、自分だけ……。

――泣き疲れた玲は一人部屋の隅で眠っていたが、ふと肩を揺すられ目を覚ます。
「どこか痛くない？大丈夫？」
さっき助けてくれた兵士が頭に包帯を巻き、片目に眼帯をした姿で部屋に戻ってきていた。
玲は小さく頷くと、兵士は安心したようにその場から離れる。
「良かった……でもいちお医者が来るから。その時に何か体に異変があったら言うんだよ」
兵士はそう言って壁に掛けられた時計を見て時間を確認した時、部屋の扉が開き手に救急箱を提げた軍服を着た女性が現れた。
軍服を着た女性はすぐさま玲の元に近づくと、体を触り始める。
「どこか痛くない？」
先ほどの青年と全く同じ事を言う女性。
丁度その女性の手が肩の部分に触れた時、玲は一瞬だけ表情を歪め

る。
「ここが痛いのね、それじゃあ治そうか」
笑顔を見せる女性は玲の服を優しく脱がしてあげると、傷ついた肩の傷に消毒液を浸したガーゼを当てようとしたが、ふと玲の全身を見つめる。
その間兵士は隣の部屋に行ったまま戻ってこない。
「先にお風呂入って綺麗にしよっか、私が洗ってあげるね」
「バスタオルの準備は僕がしておくから、後は頼んだよー」
隣から聞こえてくる兵士の声に女性が返事をすると、玲と一緒にバスタブへと向かった。
そこで玲は体を綺麗に洗ってもらい、バスタオルでお湯を拭き取ると、もう一度消毒液をしみこませたガーゼをとり出し傷に当て始める。
「これで良くなるからね」
兵士はまた笑顔を見せ、玲の頭を優しく撫でる。
そこに隣の部屋にいた兵士が戻ってくると、女性はその場に立ち上がり兵士の方を向いた。
「これからこの子をどうする？まさか基地に連れて帰るんじゃ……」
「それしかないよ、この子にはもう親も兄弟いないんだ。僕達がどうにしかしないと……」
「もしＢＮの子だと知られたらどうするの？貴方まで殺されるかもしれないのよ」
兵士と女性はその後も話し合っていたが、女性は床に置いていた救急箱を手に取ると足早に部屋から出て行ってしまう

――それから次の日、玲は艦から降りる事になった、勿論他の兵士にバレないように助けてくれた青年と一緒にこっそりと。
艦から降りた場所は基地と言うより、民宿のような、そんな感じの小さな基地だった。
周りには荒野が広がっているだけで何もなく、この建物しか建って

いない。
「ここが僕のいる基地だよ、とは言っても。数十人しかいない小さな所だけどね」
そう言って青年はすぐさま人目につかないように自分の部屋に向かう、幸い小さな基地で人が少ない為に通路で他の兵士と出くわす事は無かった。
安心して溜め息を吐いた後、部屋の鍵を開けて中に入ろうとした時、それを待っていたかのように向かい側の部屋の扉が開いた。
「中佐！？どうして貴方がこのような所に――――」

――――玲と青年はその中佐という男性にある一室へと連れて行かれる、そして男性は部屋の奥においてある椅子に座ると、横に並んでいる二人を凝視していた。
男性は黙ったままじっと青年を見つめており、沈黙が続く。すると青年は勇気を振り絞り口を開いた。
「僕が連れてきました……、目の前で家族を失った彼女を見捨てる事が出来なくて、それで……」
そう言って青年は悲しげな目で横にいる玲を見つめると、今度は鋭い眼つきで前を向いた。
「中佐、なぜＮＦは罪のない民間人を殺したのか。説明してください、民間人の安全が保障されていれば彼女を返していました、ですがあのような虐殺が行なわれていた場所に、この子を預ける事は出来ません！」
青年が自分の思いをぶつけると、今まで沈黙を保っていた男性がふと口を開く。
「軍において、上からの命令は絶対。その命令を逆らう者は……兵士失格だ」
青年は死も覚悟した、当然だ、軍に背きＢＮの民間人を助けてしまったのだから。
「僕はどんな罰でも受けます。軍を辞めても構いません……ですが、

この子の安全だけは保障してくれませんか！？」
青年が深く頭を下げ、そして言い終えた後に頭を上げた時、男性が目の前に立っていた。
そして男性は拳を振り上げると、青年の顔面目掛け勢い良く振り下ろした。
青年の顔面を殴られた衝撃でその場に膝を着いて座り込んでしまい、殴られた顔を手で覆っている。
「甘ったれるなッ！」
青年は痛みに堪え我ならも必死に顔を上げると、今度は胸倉を掴まれ無理やり立たされる。
「助けておいて自分は軍を辞めるだと？お前が辞めるのは勝手だ、だが残されたこの子はどうなる。家族を失い一人残されたこの子はどうなる？」
「それは……」
「お前がこの子の命を助けたんだ、それならお前が責任を持て。
この子に『生きる辛さ』を教えたお前が、責任を持ってこの子に『生きる喜び』を教えろッ！……いいな？」
生きる辛さ……家族を殺された玲には生きる辛さがひしひしと伝わってきていた。
幼い心に突き刺さる針、いっそ、あの時死んでいれば楽だったのかもしれない。
そんな玲に生きる喜びを教えろと言われた青年は、最初は言葉の意味がわからなかったが、殴られて頬が腫れている顔が段々と笑顔に変わっていく。
「はい！ありがとうございます！！」
青年の言葉を聞くと男性は掴んでいた胸倉を放し、またゆっくりと自分の席に戻っていく。
「お嬢ちゃん、名前は？」
さっきとは打って変わって柔らかい表情で玲の名前を聞く男性、玲は青年にしがみ付きながら名前を呟いた。

「すくす……れい……」
「ふむ、良い名前だ。では玲、君は今日からＮＦの人間として生きていかなければならない。それでも構わないかね？」
家族を殺したＮＦ、そのＮＦの人間にならなければならない。
幼い玲にはどうしていいかわからなかった、だがここで否定してしまえば、殺されるかもしれない……今の玲はただ言われた事に頷く事しか出来なかった。

――――私はその基地にお世話になる事になった……。
その後部屋に戻って、私は大泣きしてた、悲しいのか、辛いのか、よくわからないけど……ただ無性に泣きたかったんだと思う……。
それから私はＮＦの人間として生きていく事になったけど、不安で不安でとても苦しかった。
次の日、助けてくれた兵士と中佐の人が、基地にいた他の兵士の人達に私の事を説明をしてくれて。
そしたら兵士の人達は皆わかってくれたの、皆怯えている私に優しく微笑んでくれて……。
その次の日から、私はその軍の食堂で働く事になった。料理を運んだり、食器を洗ったり……。

――――「玲ちゃーん、お冷持ってきてくれなーい？」
「は、はい。いまもっていき――――あっ！」
水が大量に入っているお冷を持った途端に手から滑り落としてしまい、容器が地面に落ちてしまう。
落とした衝撃で容器の蓋が開き、大量の水が床に広がってしまった。
急いで玲は雑巾を取りに行くと、床に広がる氷水を一生懸命雑巾で拭っていく。
「ご、ごめんなさい。ごめんなさい！」
怒られると思い頭を下げて謝りながら震える手を動かし水を拭き取

っていくと、食事をしていた兵士達も一緒になって布巾を取り、水を拭き取り始めた。
「ったく、お前が玲ちゃんにあんな重いもの取らせるからだろが」
「わ、わりぃ。玲ちゃんごめんね、俺が拭き取るからさ」
いそいそと二人の兵士が雑巾を使い氷水を拭き取っていくと、今度は女性の兵士が玲に近づき、玲の冷え切った両手をゆっくりと掴んだ。
「冷たい……玲ちゃん、ここは二人に任せてこっちに来て」
女性の兵士はそう言って冷たくなった玲の手を掴むと、足早にトイレに向かう。
その洗面所でまずは手を洗い、その横についてある乾燥機に手を入れた。
暖かい風が吹き込まれ、冷えていた手をやんわりと温め始める。
「え、えと。私がこぼしたのに。こんなところにいてもいいんですか……？」
「ん？気にしないでいいよー、玲ちゃんはまだ小さいから、それに玲ちゃん昼食とってないよね？一緒に食べよっか」
その後、手を洗い終え二人は仲良く食堂で昼食を食べていた。
食べている最中にも玲は皆に声を掛けられ、話し合い、笑い合い、長閑な雰囲気に包まれる。
玲の事情を、皆理解してくれていた。皆わかっていたのだ、あの作戦でＢＮの虐殺を見ていた彼等には。
家族を失った玲を見るたびに思い出す、自分達はこんな事がしたくて軍人になった訳ではない……。
玲は人気者だ、毎日毎日玲は働きながらも、皆が応援して、支えてくれて。
次第に玲の心も開いていくほどだった。たしかに家族を失った悲しみは残っている、だが皆が自分に構ってくれて、皆が笑ってくれているこの生活が、段々とその悲しみを薄め始めていた。

――それから月日の流れたある日、すっかり基地に馴染めてきた玲は毎日を幸せに暮らしていた。
自分の部屋も用意してもらい、玲は一人で寝る事も出来るようになっている。
今日も朝から朝食の準備をする為に用意してもらった服を着ようと着ている服を脱いだ時、あの玲を助けてくれた青年が突然部屋に入ってきた。
「玲ちゃん起きてる？今日の仕事は……って！ごめん！」
顔を赤らめながら青年は急いで後ろに振り返ると部屋から出て行こうとする。
だが見られた玲はきょとんとした表情で首をかしげながらも、用意していた服に着替え終わる。
「どうしたんですか？」
「え、ああ……えっと。今日の玲ちゃんの仕事は休みになったんだよ、だから今日は部屋でゆっくりしてていいから、それじゃ！」
何処となく焦るような、いつもとは何か違う。そんな感じの青年はそう言い残すと足早に部屋から立ち去ってしまう。
部屋でゆっくりしていい、と言われた玲はとりあえずその制服のまま机に向かうと、引き出しを開けて勉強道具を取り出す。
「さんすうしよーっと」
取り出したノートや筆箱には、可愛らしいお花の模様が描かれており、シャーペンを手に取ると算数の練習問題を少しずつ解いていく。
……それから何時間たっただろうか、長時間の勉強で少し疲れた玲がシャーペンを机に置いて椅子に座ったまま背伸びをすると、その体勢で壁に掛けられている時計を見る。
時計は１２時を回っていた、朝食にパンを少し食べてからもう昼食の時間になっている、そう考えると次第にお腹も空腹になっていくのを感じた。
机の上に並んだ勉強道具を引き出しに仕舞い、部屋を出ようとした時、今度は女性が部屋の中に入ってきた。

「玲ちゃん、一緒に昼食食べに行こっか」
笑顔で手をさし伸ばしてくれる女性に、玲も笑顔を見せるとその手を掴み、仲良く食堂へと向かう。
そしてもうすぐ食堂に着くという頃に突然女性が足を止めると、ポケットから何やら帯のような物を取り出し始めた。
「ふふ、玲ちゃん。ちょーっといいかなー？」
「え、ええ？あの、これって……？」
玲はその帯で目隠しをされ歩き始めようとしたが、足元が覚束ない。
そんな玲の手を優しく握る女性は、玲をゆっくりと食堂まで向かわせる。
不安と緊張が胸中で渦巻く中、女性の足が止まると、玲の耳元でそっと囁いた。
「目隠しとっていいよ」
そう言われ恐る恐る帯に手を触れる玲、そして目隠しを取り外した時一斉にクラッカーの鳴り響く音が聞こえてきた。
「「玲ちゃん！誕生日おめでとう！！」」
目の前に広がる光景、いつも身近でお世話をしてくれる人達が頭にカラフルなコーンを乗せ、クラッカーを引いてくれていた。
壁や天井にはこの日の為に沢山の模様が飾られており、食堂の真ん中には巨大なケーキまで用意されている。
皆におめでとうと声を掛けられ、拍手をされる中、女性に手を引かれながらゆっくりとケーキの置いてある机まで歩いていく玲。
「玲ちゃんは今日で１１歳だから、１１本用意したよ、ささ、消して消してー」
白くて美味しそうなバースデーケーキ、その上には沢山の苺が並び、１１本のロウソクが綺羅やかな火を灯していた。
玲が息を吹く掛けると、火は簡単に消え、周りから拍手が聞こえてくる。
食堂の机の上には豪華な料理が並び、兵士達がその料理を食べ始める。

女性が玲の為にケーキを切っていると、食事をしている兵士達の間からあの青年が現れた。
「どう？驚いた？玲ちゃんをビックリさせようと思って今まで隠してたんだけど……って、あっあれ？玲ちゃん？」
青年の登場に玲は俯くと、ぽろぽろと小さな涙を流し、床へと滴り落ちていく。
慌てた様子で青年が宥めようとした時、倒れるように玲が青年の胸元へ抱きついた。
そして玲は顔を上げると、目の前にいる青年と女性を見て口を開いた。
「ありがとう、おにいちゃん……おねえちゃん……」
それが今、玲に言える精一杯の感謝の言葉だった。
嬉しさの余り泣いてしまった玲に、皆が優しく笑いかける。
その日は皆とケーキを食べ、皆と遊び、皆と笑い、沢山の思い出が生まれた。
そしてこの日、玲の誕生日は幸せに包まれながら幕を閉じた。

――それから一週間後の事だった、玲はいつものように朝起きて食堂に向かおうとしていた時、いつもは寝ているはずの兵士達が起き、慌しく廊下を走っている。
いつもとは違う雰囲気に不安を感じかながらも玲が食堂に向かおうとした時、後ろからあの青年に呼び止められた。
「おはよう玲ちゃん、えっと……僕達は今から全員本部から出航した艦に乗ってある場所に行かなくちゃならないんだ。
本当急な話だよ、でも本部の命令だから……」
「え……あの、それじゃあわたしも……」
「ううん、玲ちゃんは連れて行けない。僕達が今から行く所はとても危険な場所なんだ。
でも大丈夫、一ヶ月もすれば僕達は帰って来るから。それまでお

留守番出来るね……？」
その言葉に玲は大きく首を横に振った、それでも青年はじっと玲を見つめている。
「いや！わたしもいく、いきたい！ひとりに……ひとりにしないで……」
「ごめん……でも信じて、僕達は必ず帰って来る。約束だ」
青年は手を出すと、小指を立てて玲に近づける。でも玲は約束しようとしなかった。
「やだやだやだぁ！はなれたくない！ずっといっしょにいたい！」
「玲ちゃん、これでお別れじゃないんだよ？ほんの少し離れ離れになるだけ、勿論僕達だって辛いんだ、玲ちゃんとは離れたくないからね。……でも、皆を守る為に僕達は行かなくちゃならないんだ」
気付けば玲は涙を流し、ゆっくりと頷くと、青年は左手で玲の頭を優しく撫でた。
「さよならは言わないよ、またね、玲ちゃん」
玲の小指が青年の小指を優しく握り、約束を交わした。
突然で、本当に急な話だった。またいつもの毎日が続くと思っていた玲には、衝撃的で、辛くて、不安で……。

――玲は一人、基地の窓から兵士達を見送った。
基地にいた従業員と兵士は大きな荷物を持ち、全員本部から来た大きな戦艦に乗り込んでいく。
そして艦は発進し、この基地から遠ざかっていった。
ふと後ろに振り返っても、誰もいない。食堂の冷蔵庫の扉を開ければ食料はある。
今の時間帯、いつもは従業員の人と一緒に朝食を作っているはずなのに、その人すらいない。
やけに食堂が広く感じる、いつもは多くの人が来て賑わっている場所なのに。
それから玲の一人生活が始まった、まだ１１歳という幼い子の、た

った一人の生活。
そして一日が終わるたびにカレンダーに印を付け、皆の帰りを待った。
1週間、2週間、3週間……そして、とうとう明日が青年の言っていた一ヵ月後が来たのだ。
待ちに待った日、玲は朝早くから基地の入り口にある椅子に座り、皆の帰りを待った。
朝食を食べずにじっと待ち続ける玲、だが皆はまだ帰って来ない。
昼食を食べずにじっと待ち続ける玲、それでも皆は帰って来ない。
辺りが暗くなり、夜になっても、それでも玲は待ち続ける。
玲は諦めていない、皆やっと帰って来る、あの青年も、あの女性も、皆、皆。そしてまた始まる、いつもの楽しい生活が。
一ヶ月一人で生活した話しをすれば、皆が驚いてくれると思っていた、一人で食事を作り、一人でお風呂に入り、一人で寝れる。
どんな話をしようかと考えていたその時、突如入り口の扉が開き、外から何人もの兵士が入ってきた。
「おかえりなさ……ぃ――――？」
笑顔で皆の元に駆け寄ろうとした玲、だが玲の笑顔は一瞬で消えた。
「だれ……？」
誰の顔もわからない、見覚えの無い兵士達が基地に入ってきていたのだ。
玲はすかさず物陰に隠れると、堂々と基地内に入っていく兵士達を見つめる。
一人一人大きな荷物を持つ兵士達は手に持っているカードを見ながら次々に部屋に入っていく。
そして荷物を置き終えた兵士達が部屋から出てくると、渋々どこかへ向かっていた。
恐る恐る玲がその後を追っていくと、全員が食堂に座り食事をとろうとしていたのだ。
数人の兵士が厨房に立ち、冷蔵庫の食料を使って料理をし始める。

玲はその様子を見ながら物陰から出ると、一歩ずつ食堂の椅子に座っている兵士達に近づいていった。
「あ、あの……」
玲がよそよそしく一人の兵士に声を掛けると、テーブルで雑談していた兵士達が一斉に玲の方に振り向く。
驚いたような様子で兵士達は玲を見ていたが、一人の兵士が口を開いた。
「は……？なんで、ガキがこの基地にいるんだ……？」
「わ、わたし。ここで働かせてもらってて……」
そう言うと兵士達が玲を横目で見ながらな何やら話し合う。
玲はこの基地でこっそりと働いていた為、玲に関してのデータは何処にも無い。
データの無い人間が何故基地にいるのか、兵士達はその事の関して話していると、その一人の兵士が玲に話しかけてきた。
「お前、親や兄弟はいるのか？」
「えっ、あ……もう……いません……」
そう言って俯いた玲を見て周りの兵士達は思わず笑みを浮かべた、口元だけ笑った奇妙な笑みを。
「へぇ、なんでこの基地にいるのか、説明できるか？」
「たすけてもらって、それで……」
「おいおいマジかよ、ここにいた連中やるじゃねーか」
兵士達は皆笑いながら嬉しそうに喋り始めるが、その意味は玲にはわからない。
未だ状況が掴めず不安な表情で見せる玲、一人の兵士が玲の腕を掴むと、無理やり自分の隣に座らし始めた。
玲の肩に手を回し、自分の体に密着させる兵士に、周りの兵士から野次が飛ぶ。
「うるせーよお前等！早いもん勝ちなんだよ、今日は絶対俺だからな」
兵士がそう言うと、肩に回された手は次第に玲の体を触り始め、徐

々にその手が胸元へ近づいていく。
兵士達に怯え恐怖の余り声も出せない玲、ふと周りを見てみれば、皆目を光らせて玲を見ていた。

――食事を食べ終えた兵士、食器を片付ける事無く固まっている玲の腕を掴むと、足早に歩き出した。
「あの、どこにいくんですか……？」
「俺の部屋に決まってんじゃん」
「えっ……？」
そう言われて玲は足を止めようとした、何よりも怖かったのだ、この兵士が。
本当は皆が帰って来てくれるはずだった、だが来たのは別の兵士達。
今の玲には深く考える事が出来ず、混乱したように何も考える事が出来ない。
だが兵士の歩くスピードは早く、そして足が止まった時には、その兵士の部屋の前に来ていた。
「わたし、用事があるので！」
掴んでいる手を振り解こうとしても、幼い彼女に何が出来ようか。
連れて行かれるがままに部屋に入れられると、強引にベットの上に押し飛ばされる。
「まさか人里は慣れたこんな基地で、こんな女の子を抱けるなんてなぁ……」
兵士は上着を脱ぐとその場に投げ捨て、ベットの上で倒れている玲の腹の上に乗り、身動きを封じる。
「や、やめてください。じぶんの部屋に、帰らしてください……」
自分が今から何をされるのかわからない、それでも今この場が危険な事だけはわかる玲は目に涙を浮かべながらも必死にこの部屋から出ようと抵抗を試みる。
「勿論帰してやるよ、そん時は朝になってるけどな」
兵士は薄気味悪い笑みを浮かべながら玲の頬に手を伸ばすと、玲は

その指に勢い良く噛み付いた。
「痛ッ！」
兵士が怯み腰を上げた時、すかさず玲はベットから下りると、全力で部屋の入り口に向かって走り出す。
部屋の扉が開く、玲がそのまま自分の部屋に向かおうとした時、部屋の扉は目の前で閉まった。
服を引っ張られた玲は大きく後ろに転ぶと、容赦なく腹部に蹴りが入る。
「あっ！う、ぐ……」
「てめえ！ガキだからって調子乗ってんじゃねえぞ！」
床に倒れている玲の顔目掛け兵士は何度も殴りつける、玲は両手で必死に顔を守ろうとするが、顔や額には大きなアザが出来ていた。
「ごめんなさい！ごめんなさいぃ！」
泣き叫びながら謝り続ける玲を更に殴り続ける兵士は、嗚咽をしながら謝り続ける玲を再びベットの上に連れて行く。
「じっとしてろよ、気持ちよくしてやるんだから。な？」
息遣いが荒くなった兵士は興奮を抑えきれず玲の服に手を出そうとした時、玲は涙目でその兵士を睨み、口を開いた。
「もうすぐ……もうすぐみんな、かえってくるんだもん……どうなっても、しらない、から……」
もうすぐ皆が帰って来る、助けてくれた青年が、治療してくれた女性が、いつも優しくしてくれた皆が、帰って来る。
その玲の言葉を聞いた兵士は唖然とした表情で固まっている。
だが兵士の表情は段々と笑いを堪えるようになり、そして我慢の限界が来た。
「っぷ……くく……っはは！あははは！！」
その兵士の笑いを虚ろな目で見つめ続ける玲。
何故笑っているのか不思議でたまらない、それを見て玲はどんな苦痛や辛さにも耐えてみせると思った。
皆が帰ってきたら、また優しくしてもらえるから、今苦しくても皆

が助けに来てくれるから。
そんな希望に満ち溢れた玲の思いに、ある一言が聞こえてきた。
「お前知らないの？この基地にいた人間、全員死んだんだぜ？」
「……えっ――――？」
玲の着ていた制服が力ずくで破られていく、皆に買ってもらった軍服が、ビリビリと音を立てて。
もう玲には抵抗する気力は残っていなかった、なすがままに遊ばれる肉体、玲、玲。

全てが、壊れた。

第６６話　偽る、真意

――それから私の奴隷生活が始まった。
毎日毎日休み無しで働かされて、薬を飲まされて、殴られて、蹴られて。
そして毎日夜になると、兵士達が私を取り合い、強引に部屋に連れ込んで、服を脱がし、体を弄んで、喜んで、楽しんで・・・。
朝起きれば体は激痛で悲鳴を上げてた・・・それでも私は朝の仕事に行く為に制服に着替えてた。
・・・死にたかった、死んで楽になりたかった・・・その時私に生きる意味は存在してなかった。
でも、そんなある日・・・ある女性が私をその地獄の生活から救い出してくれたの・・・。
それが、神楽お姉ちゃんだった・・・。

基地の食堂で兵士達が美味しそうな昼食を食べている途中、一人の兵士が後ろに振り向くと口を開いた。
「おい玲、水持って来い」
「はい・・・いま、おもちします・・・」
玲がお冷を持った瞬間、簡単に手から滑り落ちてしまうお冷。
勢い良く床に落ちた衝撃でお冷の水が漏れ、周りに広がりながら水が流れていく。
それを見た兵士が食事中に立ち上がった瞬間、玲の鼓動が早くなり、手足が小刻みに震えだす。そしてその場にしゃがみ込むと両手で頭を守る体勢に入った。
「何落としてんだよクソガキッ！」
また始まった、しゃがみ込んでいる玲の頭を平気で殴りつける兵士。
玲は怯えたようにか細い声で謝る事しか出来ない、もう泣き叫ぶ力

も残ってはいなかった。
一通り殴り終えると、兵士はまた食事に戻り、その間に玲は雑巾で床に広がっている冷たい水を拭き取っていく。
広がる水に涙が零れ落ちた、昔の出来事が脳裏を過ぎる。玲が何度拭いても涙が落ち、拭き取った場所が濡れていく。
すると、一人の兵士が食堂に駆けつけると、息を切らしながら叫んだ。
「おい！本部の連中が来てるぞ！早くそいつを隠せ！」
その知らせに食堂にいた兵士達が全員困惑する、そして床に雑巾で拭いていた玲はすぐさま兵士に引っ張れると、そのまま玲の部屋まで連れて行かれる。
部屋の扉が開くと同時に玲を突き飛ばす兵士、玲は力無くその場に倒れると、起き上がろうともしない。
「いいか、絶対に部屋から出るな。出たら・・・わかってんだろうな？」
「はい・・・」
何が起きているのか玲にはわからない。ただ部屋から出るなと言われたら、それに従うしかない。
玲は自分の部屋の扉にもたれ掛かると、呆然と自分の部屋を眺めていた。
昔はこの部屋で皆と遊んでいた、皆で喋りながらトランプをして・・・。
また思い出してしまった、気付けば涙が再び流れ、頬を伝って胸元へ落ちていく。
約束したのに、約束したのに・・・こんな苦しい思いをするなら、皆と一緒に死にたかった・・・。
そう思うとまた涙が溢れ出す、もうその涙を拭う気力も、玲には残っていない。
その時だった、突然部屋の扉が開きだしたのだ。
扉にもたれていた玲はそのまま後ろに倒れると、目の前に一人の女

性が玲を見下ろしていた。
大きく白い白衣に身を纏い、眼鏡を掛けているその女性は玲の顔を見ながら膝を地面につくと、玲との顔の距離を近づける。
「あら、どうしてこんな所に女の子がいるのかしら。不思議ね」
女性は小さな笑みを見せながらそう言うと立ち上がり、倒れている玲の体を優しく起こす。
「す、すいま、せん・・・。ありがと、ございます・・・」
玲は泣き顔を見せまいと俯き、急いで涙で濡れた顔を袖で拭っていく。
すると通路から走りながらこの基地の兵士が玲の部屋まで来ると、その女性の前で敬礼を始めた。
「神楽博士、ここにいましたか。皆がロビーに集まっておりますよ」
そう言いながら二人の兵士が横目で玲を睨む、玲はその兵士達を見て一歩下がってしまう。
「私は軍に干渉しないわよ。それより、どうしてこの基地に女の子がいるの？」
「はい、前の戦いで散った兵士達が恐らく連れ込んだのかと。今は我々が面倒を見ています」
「そう、つまり孤児なのね。それなら私が本国の児童相談所に預けようかしら」
「その必要は無いかと思われます。以前そのような話しをこの子しましたが、この子はここに居たいと言っていました。そうだよな？玲ちゃん」
そんな話聞いた事が無かった、でもここで兵士の言う通りにしなければ、後で酷い仕打ちに受ける事になる。
でも、もしこの女性が本当にこの基地から出してくれるのなら、ここで本当の事を言って助けてもらえるかもしれない・・・。
いいや、もしここで本当の事を言っても、本当にここから抜け出せれるかどうかわからない。
もしも本当の事を言って、この基地に残る事になったら・・・そう

思っただけで全身の身の毛がよだち、息苦しくなる。
しかし、ここでこの基地から抜け出せなくなったら、一生この基地で、ここの兵士達と暮らさなくてはならないのか。
もしかすると、これが最後のチャンスなのかもしれない。どうせここに残っていても、またいつものように殴られ、遊ばれる、それならいっそ、この女性に全ての望みを・・・。
でも・・・それを言える勇気が・・・今の玲には・・・。
「怖いのね、でも安心して。私はあなたの味方よ」
「えっ？」
「あなたがほんの一握りの勇気を私にぶつければ、その手を私が救い上げてあげる」
玲を見て察したのか、神楽はそう言って腕を組みながら玲の顔をじっと見つめる。
その後ろでは二人の兵士が目で玲を威圧していた、だが神楽は、その兵士の前にいる。
一握りの勇気、気付けば拭ったはずの涙がまた零れ始めていた、そしてゆっくりと右手が上がっていくと、目の前にいる神楽に手を伸ばした。
「たす、けて・・・」

「おめでとう、あなたは不幸のどん底を味わった。後は幸せになるだけよ」

周りの兵士が止めようと試みるが、神楽はそんな兵士を無視して玲の手を放さない。
そこに本国から来た女性の兵士が現れる、神楽が事情を話すと本国の兵士達は敬礼を済ませると玲の部屋に入っていく。
神楽と玲が一緒に基地に廊下を歩いていき、通路にいる兵士達は驚いた様子で二人を見ている。
その視線に玲は恐怖を感じるものの、何故か心は段々と落ち着き始

めていた。そのまま何事も無く基地から出て行く二人は外に止めてあった中型の戦艦に乗り込んでいく。

――それからお姉ちゃんとの生活が始まった。
でも・・・既に私の肉体、心、精神、全てが壊れていた・・・地獄から抜け出せても、苦しみは続いていた・・・。
そんな苦しんでいた私を見てお姉ちゃんは、私から全ての苦しみを消し取ってくれた。
家族が死んだ事も、基地でお世話になった人達の死も、長い間虐待を受けてきた日々も、全部。
気付けば優しいお姉ちゃんがいつも私を抱いてくれている、暖かくて、柔らかくて、ずっとこのままでいたい、って思って・・・。
それから私は軍で働く事になって、赤城少佐の部隊に配属された。
幸せだった、皆優しくて、楽しくて、面白くて・・・でも、一人ずつ消えていって・・・。
それで傷つく私の為に、お姉ちゃんは私の記憶を書き換えてくれ、私を守ってくれてた。
だから・・・今でも私は言える。

「幸せだよ・・・お姉、ちゃん・・・」
玲の話しを聞いた皆は硬直していた、それでも神楽だけは、優しい表情で玲を見つめてくれていた。
「お兄ちゃんとも・・・会えたんだもん・・・だから・・・もう、私は・・・」
思い残す事は無い、そう言うかのように玲の表情が和らいでいた。
その意志を感じた神楽は、バリオン砲の発射準備に取り掛かる。
「玲・・・俺は兄としてお前に何もしてあげられなかった。だから・・・」

羅威はそう言うとフェリアルの胸部を少し破壊し、操縦席が見えようにするよ、神威のコクピットを開けた。
「最後くらいは、兄らしくさせてくれ・・・」
だがその瞬間、フェリアルの胸部付近から突然触手が出てくると、神威のコクピットを開けさせないように巻きつき始める。
「だめだよ、お兄ちゃんは・・・生きないと。生きて、幸せに、ならない・・・と・・・」
「幸せなんていらない、玲の側に居てやれるだけで俺はいいんだよ」
「こんな私でも・・・お兄ちゃんは、私のこと・・・すき・・・？」
涙を流しながらも必死に口を開いて聞いてくれた問いに、羅威は優しく表情で答えた。
「好きだ、たった一人の妹を嫌いなはず無いだろ?今でも俺は、お前を愛している」
「ありがとう、お兄ちゃん・・・ありがとう・・・私も、お兄ちゃんの事、愛して・・・る。だか、ら・・・」
「おねがい、生きて・・・」
それが、玲の最後の言葉だった。映像が消え、通信が途切れたのだ。

「時間よ、さよなら玲ちゃん・・・。バリオン砲・・・発射」
警告音と共に皆がレーダーに映る巨大なエネルギー反応を確認した。
「あいつ、マジで撃ちやがった・・・！赤城！この町から離れるぞ！」
「待て、レンはまだ・・・！」
赤いリバインが巨大ＥＲＲＯＲの元へ行こうとした時、甲斐斗の乗るＭＤが強引にリバインを掴むと、一気に出力を上げＥＲＲＯＲから離れていく。
「何をする!?放せ!まだ玲は・・・！」

「お前の気持ちもわかる！だが、これ以上レンを苦しめさすな、もう楽にしてやれ・・・」
その甲斐斗の声に赤城は口を閉じると、無念さに唇を噛み締めながら俯いていた。
「愁・・・私達も・・・」
「はい、この町から離脱します」
アギトとライダーもすぐさま町から離脱するが、穿真の乗るエンドミルと、クロノの乗る黒葉花だけはまだその場に留まったままだった。
「おい羅威！まさかお前も一緒に死ぬとか言うんじゃねえだろうな！？」
穿真の怒号とは裏腹に、羅威は静かに答えた。
「兄として、俺が最後に出来る事といえばこれくらいだ。穿真とクロノは早く町から離脱しろ」
既に手遅れの所までバリオン砲は町まで近づいてきていた、今から羅威を助けに向かったとしても、町から無事離れられるかどうかすらわからない。
そして、このままこの場に留まる事は死を意味している、早く動かなければ、両方助からない。
その時、一機の戦闘機が巨大ＥＲＲＯＲの胸部まで飛んで行く。
「穿真！ここは僕に任せて君は早くこの町から離脱するんだ！」
「っち・・・後は任せたぞ、クロノ・・・！」
心残りがあるものの、穿真は飛んで行く黒葉花に背を向けると、仲間を信じＥＲＲＯＲから離れていく。
その頃羅威は操縦桿も握らず、背もたれにもたれ掛かりながらずっとモニターを眺めていた。
左手で首に掛けてあるペンダントに振れると、そっとペンダントを開けて中に入っている写真を見つめる。
「父さん、母さん、玲・・・やっと、家族一緒になれるな・・・」
そう言い残した後、羅威がゆっくりと目を瞑ろうとした時、青いレ

ーザーが触手を焼き落とし、神威を触手から解放する。
「残念でしょうが！貴方にはまだ生きてもらいます！」
飛行機からＤシリーズの形態に戻る黒葉花、すかさず神威をキャッチすると、全速力でＥＲＲＯＲから離れていく。
「クロノ！？何をしている！俺は玲と一緒に・・・」
「玲さんは最後に言いましたよね、『生きて』と。彼女の想い無駄にするつもりですか！？」
「玲を一人で死なせることなど俺には出来ない！玲の側にいてやりたいんだ！」
「それは彼女も同じです！貴方と離れたくない、そう思っている！だけど、彼女まだ子供だというのに・・・その思いより、今生きている貴方を想ったんですよ！」
その時、バリオン砲が巨大ＥＲＲＯＲに直撃し、周囲の物全てを吸い寄せ始める。
あの巨大な肉体が次々に引き裂かれていき、周りにいるＥＲＲＯＲも吸い込まれていく。
苦しみながら悲鳴を上げる巨大ＥＲＲＯＲ、その姿を見た羅威は涙を流しながら手を伸ばした。
「玲が、玲がぁっ！」
黒葉花から離れようと残った一本の腕を動かし始める神威、だが黒葉花は決して放そうとせずＥＲＲＯＲから離れていく。
「僕のした事は、貴方にとっては酷かもしれません。でも彼女にとっては、これが一番の望み・・・」
徐々にビルや家、地面までも吸い寄せられていく、その力から逃げようとクロノは出力全開で機体を走らせていく。
だがバリオン砲の威力は更に増して行き、少しずつ黒葉花の機体も吸い寄せられようとしていた。
「もうよせ！このままだとお前も死ぬ事になるぞ！？早く俺を放せ！」
機体が限界に近づいている事ぐらい羅威にもわかっていた、だがク

ロノは、そんな羅威に落ち着いた表情で口を開いた。
「羅威、神威の補助ＥＮはまだ残ってるよね」
「ああ、神威のＥＮはまだ残って・・・って・・・クロノ？お前、まさか・・・」
羅威が言葉の意味を理解した時、クロノはゆっくりと頷いた。
「どうやら、僕の機体のＥＮは尽きたみたいだ・・・。羅威、町の出口はすぐそこだ、神威のＥＮなら簡単に行ける。
君は生きろ・・・妹の為にも、世界の為にも・・・責任を押し付けるようで悪いけど・・・後は皆の事、頼んだよ」
クロノはそう言うと、抱えていた神威をゆっくりと地面に置いた。
目の光が消え、動かなくなる黒葉花。完全に機能が停止している。
「ま、待て、おい・・・おいッ！クロノ！」
黒葉花の後ろからは嵐のように次々の物が吸い寄せられていく、その力がすぐそこまで来ていた。
「そ、そんな・・・クロノ、どうしてお前がぁッ！うっ・・・ぁあああああッ！！」
すぐさま操縦桿を握り神威の出力最大にする羅威、バランスが取れず地面にぶつかり、擦れながらもその場から離れていく。
そして、モニターに映っていた黒葉花は簡単に宙に浮くと、ガラクタのように瓦礫と共に町の中心部へと吸い込まれていった。

町の建物は全て吸い込まれ、力が極限まで凝縮された時。溜められた力が解放される。
解放された力は巨大な爆発を生み、町全体を覆い、その爆風は離脱していた機体をも簡単に吹き飛した。

結局、何が出来たのだろうか。
民間人を助ける事はたしかに出来た、しかし、それで満足できる状態なのだろうか、これは。
甲斐斗の機体が煙の中から起き上がり、かつて町が広がっていた場

所を見つめる。
一切建物が建っておらず、町のすぐ隣にある東部軍事基地だけは何とか形を保っていた。
黙ったまま口を開かず、ただじっと灰と塵が広がる『後』を見つめ続ける甲斐斗、すると煙の中からまた一機、アストロス・アギトが姿を現した、巨大な右腕を大きく振り上げ、ＭＤに飛びかかるように・・・。
すぐさまＭＤは大剣を盾にしアギトの拳を受け止めようとするが、その威力は凄まじく機体事後ろに吹き飛ばす。
「おいおい、こんな状況だってのに・・・お前は何も感じないのか？」
その瞬間、自分の言った言葉に驚いてまう甲斐斗は軽く笑みを見せると首を傾けた。
「っへ、俺も随分と人間に馴染んじまったな・・・この俺がこんな台詞吐くとは・・・」
吹き飛ばされつつもしっかりと地面に踏み込み機体の体勢を立て直すＭＤ、だがアギトは容赦なくＭＤに近づき拳を振るっていく。
「すみません、あなたはこの世界で貴重な戦力になると思っていましたが、これもフィリオの頼み、死んでもらいます」
「殺しを頼むとは、随分と血の気のあるお姫様だなぁッ！」
アギトの右腕が突き出されると同時に剣を振り下ろすＭＤだったが、その拳の威力に剣を掴んでいたＭＤの右手の指が砕け、右肩が吹き飛ぶ。
「無駄です、アギトには勝てません」
今度はＭＤの胸部目掛け左腕を突き出すアギト、それを防ごうとＭＤも左腕を突き出すが、アギトの拳の前に肩ごと貫かれていく。
両腕を失い太刀打ちする事が出来ないＭＤ、ふとレーダーを見ればアストロス・ライダーが東部軍事基地へ向かっていた。
「機体にいないとすれば、恐らくミシェルは基地にいるはず、二人に行かせました。

・・・安心してください、貴方がいなくなっても、ミシェルは俺が守ります」
「あ？てめえ・・・ちょっと調子乗りすぎじゃねえか？」
愁の台詞が気に食わない甲斐斗、少し怒りを露にしているが、愁は落ち着いたままでいる。
「もう機体のＥＮも少ないはず、周りに助けもいませんし、両腕も無い。ムキになって抵抗しても無駄ですよ」
そう言って愁が止めを刺そうと、アギトが瞬時にＭＤの懐に入る。
だが突如赤い機体が煙の中から現れると、両手に握る巨大な剣をアギト目掛けて振り下ろした。。
その剣をアギトが右腕で受け止めると、その機体を確認した。
「・・・赤いリバイン、赤城隊長ですよね。ＮＦとＳＶは同盟を結んだはずです、何故攻撃を・・・」
「では問おう、何故貴様はＢＮを助け、ＮＦ機であるフェリアルを破壊した」
赤城の鋭い問いに言葉が出ない愁、一旦二体の機体から距離を置いていくアギト
そして赤城の鋭い問いは更に続いた。
「友を助ける為、違うか？」
「っ・・・それは・・・」
仲間を助ける為、たしかにその通りだった、何も言い返せない、何も反論が出来ない。
だから赤城は続けて口を開いた、
「私も同じ、友を助ける為だ」
「赤城・・・」
その赤城の心揺ぎ無い言葉に甲斐斗がふと赤城の名前を呟く。
「行け、甲斐斗。この場は私に任せて、お前はミシェルの元に」
「だ、だが。奴の機体は・・・」
「お前には守る者がいるだろ、なら迷わず行け、お前らしくな」
甲斐斗は感じ取った、赤城の意志を、まだ終わらない、燃え続けて

いる赤城の意志を。
「ああ！この場は任せたぞ、赤城！この借りは必ず返す、だから絶対に死ぬなよッ！」
「わかっているさ、私にはまだ遣らねばならない事が山ほど残っているからな・・・」
赤城はそう言いながらレーダーを確認する、そこには既に羽衣の反応は消えていた。
甲斐斗は赤城に背を向けると、一機基地へと向かっていく。
「赤城隊長、言っておきます、リバインではアギトに勝てません。そこを通してくれませんか？」
赤城はその言葉を聞いているのかどうかわからないが、両手に持っているＬＲＢを地面に突き刺すと。背部から一本のＬＲＳを取り出し、身構えた。
「私を倒してから行けばいい、簡単なのだろ？お前にとって私を倒す事など」
愁の挑発的な態度をそのまま返す赤城、愁は小さく溜め息を吐いた後、アギトを走らせた。
「わかりました、そうさせていただきます」

その頃、既に基地には葵とエコが到着し、エコを頼りに基地内を走り周りミシェルを探していた。
そしてミシェルのいると思われる部屋の前に二人が来た時、既に扉の前には一人の青年が立っている。
葵がその青年を見た瞬間、走っていた足が止まり、驚いた様子で見つめていた。
「お、お前・・・」
今まで見せた事の無い、恐怖で怯えるような葵の姿に、エコも不安が隠せない。
「知ってるの？この人・・・」
「エコ、前に話した事があったよな・・・俺達のいた世界から追放

された男の事を・・・」
それだけでエコには理解できた、それと同時に身の毛のよだつような寒気が広がり、鼓動が早くなるのを感じる。
首にできた小さな切り傷を撫でながら男は二人の方を向くと、初めて見たエコの姿を見て、小さく笑みを見せた。

第67話　泥、涙

部屋の扉の前で佇む青年、その青年の前にいる葵とエコもその場に佇んでいた。
青年は笑みを見せているものの、周囲の空気は異様な雰囲気に包まれている。
「君達は・・・アルトニアエデンから来た人達だね？」
その問いに葵は答えない、額に汗を滲ませながらじっと青年のを見つめている。
だが痺れを切らしたのか、葵はすぐさま両手に鍵爪を着けると身構えた。
「てめえの目的は何だ、どうしてこの世界にいる！」
「僕の質問にも答えてほしいなぁ・・・まぁいいさ、目的なんて無いよ、単なる暇潰しさ。
だから・・・僕の邪魔はしないでくれるかな？」
青年はそう言って部屋の中に入ろうとした時、葵は床を強く蹴り上ると一直線に青年の元へ向かう。
鍵爪を避けようと数歩後ろに下がる青年、葵はミシェルのいるとされる部屋の前に立ちふさがると、またも身構えた。
「っけ、今のお前はただの人間に過ぎねえ。怖くも何ともないぜ、エコ、お前は早く第１ＭＧの所に・・・」
その時、何かにぶつかるように葵の体が宙に浮き吹き飛ばされると、勢い良く地面に叩きつけられる。
「葵！」
すぐさまエコが駆けつけるが、葵の体は地面に倒されたまま起き上がれない。
目には見えない力がそこには働いていた。
「たしかに、この世界では何らかの力で魔力を持つ者の力が封じ込まれている。

けど・・・それは完全じゃない」
青年は左手をゆっくりと上げると、それに合わせて葵の体も宙に浮く。
手を振り下ろせば、葵の体は冷たく硬い床に叩きつけられ、全身に走る激痛に声が上がる。
「葵に・・・手を出さないで・・・！」
エコが両手を青年の方に向けるが、その瞬間エコの体が硬直する。
全身に力が入らず足や腕を動かそうとしても微動だにしない。
「何、これっ・・・」
そのエコの表情を見た青年は笑みを見せると、ゆっくりとエコの元に近づいてくる。
逃げようとしても体は動かない、止まることなく近づいてくる青年を見てエコの恐怖は倍増していた。
そして青年はエコの目の前まで来ると、右手でゆっくりとエコの頬を摩り口を開いた。
「自己紹介が遅れたね。初めまして、僕の名はテト、テト・アルトニア。よろしくね」
「テト・・・」
その名を聞いてエコは完全に思い出した、この男が何者なのかを。
思い出したと同時に身の毛がよだち、恐怖で足元が震えだす。
そんなエコを見てテトは心地よいのだろうか、怯えたエコの髪をゆっくりと撫でていく。
「アビア、第１ＭＧは君に任せる。僕は・・・この子達と遊ぶ事にするよ」
「はーい」
返事と共に通路の曲がり角から桃色の髪を靡かせながらアビアが現れる、アビアは硬直している葵とエコの姿を見て小さく微笑むと、そっとミシェルのいる部屋に入っていく。
アビアは部屋の中に入ると、ミシェルの居場所を知っているかのように寝室に向かう。

思ったとおり、そこにミシェルはいた。顔だけを出し、身を布団で包んだままじっとしている。
「みーつけた」
そう言ってミシェルの元に向かおうとした時、ふとベットの前で足が止まる。
部屋全体が微かに振動している、アビアは後ろに振り向いてみると、轟音と共に何かが迫ってくる気配を感じた時、ベットにいるミシェル目掛けて飛びついた。

「さてと、こんな所じゃムードが出ない。どこか部屋に行こうか」
テトが優しくエコの髪を掴むと、動かない体を引き摺りながら倒れている葵の元に向かう。
その時だった、轟音と共に通路の壁が崩れ落ち。崩れた壁の外に両腕のあるＭＤが現れる。
「驚いたな、さすが化物機体。両腕を簡単に再生しやがるとは」
甲斐斗はミシェルのいた部屋を知っていた、基地内に入るより壁をぶっ壊した方が手っ取り早いと考えると、再生した両腕で壁を破壊しミシェルを助けに来たのだ。
「あの女も一緒に確保しちまったが、今はミシェルを連れて逃げるのが先決だな」
ＭＤは両手で何かを包むようにしている、そこにはミシェルとアビアが抱きついた状態で確保されていた。
後はその場から離脱するだけ、だが部屋の壁を壊しすぎた衝撃で通路の壁も崩れ、その通路には葵とエコ、そしてテトがいるのを確認すると、一瞬機体の動きが止まった。
「葵にエコ、それにあの男・・どうやら二人ともあの男に負けてるようだな。良い気味だ」
甲斐斗は二人を助ける事無くその場から離れると、一気に基地から離れていく。
「甲斐斗、君は実に愚かだ・・・真実を知らない者程痛々しいもの

はない」
去っていくMDの後ろ姿を見ながらテトはそう呟いた、するとその隙にエコが自分の頭からテトの手をどけると、倒れたまま動けない葵の肩に触れる。
テトがエコのいた方に目を向けた時、既にその場から葵とエコの姿は消えていた。
一人廃墟と化した基地に残されたテト、左手で首元の傷口の後を摩りながら右手を振り上げると、地上で停止していたトラディスカントが浮上し、一瞬でテトの目の前に現れる。
「退屈な時間は作りたくない、時間は・・・貴重だからね」

その頃、既に愁と赤城の決着はついていた。リバインの頭が地面に転がり、両手両足はもぎ取られ、胸部はアギトの巨大な右腕で鷲掴みにされている。
「リバインでよくここまで頑張りましたね、さすが赤城隊長です」
「褒められる程の事はしてないつもりだが？」
落ち着いた様子で言葉を切り返す赤城、もはや抵抗もできないこの状態では諦める他無かった。
だがアギトはリバインの胸部を静かに地面に置くと、基地のある方へ振り向いた。
「・・・やはり殺さないか」
戦闘中既に赤城は悟っていた、愁が本気で自分を殺しに来て無い事に。
「はい、貴方はこの世界にとって貴重な戦力になります、俺達は今、人間同士で殺しあっている場合ではありませんからね。それではまた」
愁はそう言い残しその場から離れようとした時、突如エコからの通信が繋がる。
モニターに映るエコと葵、だが葵は俯いたまま動かず、エコは肩で息をしながらモニターを見つめていた。

「愁・・・撤退して・・・事情は、後で話すから・・・」
尋常じゃない気配を悟った愁は小さく頷くと待機させておいたＳＶの艦をライダーの元へ向かうように指示を出し、自らもまたライダーの元へと向かっていく。
だがその時、ライダーのいる上空から1機の赤黒い機体、トラディスカントが姿を見せると、ライダー目掛け一気に急降下し始めた。
「エコ！上空から狙われている！回避するんだ！」
愁が声を荒げて注意するが、ライダーは走り続けるままで一向に回避しようとしない。
上空から急降下するトラディスカントの手には一本の槍が握られ、その先端はライダーの背部に向けられている。
そして槍がライダーの背部に突き刺さろうとした時、何処からともなく二発のレーザーがトラディスカントめがけ放たれた。
その思いがけない攻撃にすぐさまライダーとの距離を置くと、レーダーを見て笑みを見せた。
ＳＶの戦艦が二つ、フィリオの艦と、もう一つフィリオの妹が乗るアリスの艦が到着していたのだ。
その甲板からはシャイラの乗るアストロス・ガンナーの姿が見えていた。
そしてもう1機、トラディスカントめがけ飛び込んでくる機体に向けてテトは口を開く。
「アストロス・ナイト・・・ふふっ、久しぶりだねぇ・・・ゼスト！」
手に持っていた槍は瞬時に大鎌に変形すると、迫り来るナイト目掛け振り下ろす。だがナイトは左手に持つ盾で大鎌を防ぐと、そのまま勢いに任せ機体を突進させた。
「やはりこの世界に来ていたか、テト」
そう言うと盾の表面に高圧電流が流れ、大鎌を大きく弾き飛ばすナイト。
右手に持つ剣の先を相手の胸部に向けて勢い良く突き出すが、テト

は機体を花びらのように捻りその剣先を交わすと、今度は大鎌からレイピアに変化させ武器をナイトの胸部に向けて突き出す。
だがその攻撃はナイトの盾に簡単になぎ払われるが、なぎ払われたレイピアが瞬時に姿を変えまた大鎌になると、その刃先がナイトの首元に向かって伸び始める。
すると、その二機の間を割るかのように地上から上昇してきたアギトがその大鎌を拳で弾き飛ばす。
それを見たテトはふと回りを見渡せば、そこにはアストロス・ナイト、アギト、ガンナーが立ちふさがり、後方には二つの戦艦が止まっている。
明らかにテトが不利な状況に追い込まれていたが、それでもテトは不敵な笑みを浮かべながら口を開いた。
「んー、さすがだよ。ゼスト達は強いね、よく頑張っている、でも・・・所詮は魔力を失った哀れな人間に過ぎない」
そう呟いた時、テトの眼の色が変わった。左腕に赤い模様が浮かびあがり、機体も同じように全身に濃い赤色の模様が浮かび始める。
そして機体の足元に赤黒く輝く魔方陣が現れると、その場にいたアギトとナイトを吹き飛ばし地面に墜落させた。
地面に落とされたナイトが起き上がろうとうしたが、機体は思うとおりに動かず、機能が停止している。
「いくら君達が束になってかかってきても僕には勝てない、さて、後は・・・」
そう言って待機している二つの艦の所に向かおうとした時、レーダーに一機の機体が地上から急浮上してくる反応が示される。
「フィリオには手出しさせない！」
「へぇ、面白い機体だね。僕の魔力を弾くなんて・・・でも」
トラディスカントが迫り来るアギトに左腕を向けると、機体の足元に広がっていた魔方陣と同じものがアギトの足元に出現し始める。
「人間の方は脆い」
その言葉と共に愁の視界が暗闇と化し、身動きが取れなくなる。

操縦席に座っていたはずだというのに、今の自分は暗闇に立ち、暗闇を見ている。
そして、前を見れば暗闇から何か近づいてくるのがわかった。
「これは・・・？」
暗闇の中から近づいてくる無数の写真、その写真の中には楽しそうに食事をする家族や、ＢＮの中間達の映像が映っていた。
その皆が楽しそうに笑っている映像が、彼等が。愁の元へ近づいて来る。
そして一枚の映像が愁の眼の前現れると、愁は無意識にその写真に手を伸ばした。
だが指先が写真に触れようとした時、無数の写真が裂け、中から血飛沫があがると、その血は愁の体を真っ赤に染めた。
血生臭い臭いが広がり、顔についた血を拭き取ろうと腕で拭おうとした時、自分の足元に何かがあるのを感じ、徐々に目線を下に向ける。
「あ、彩野・・・さん・・・」
全身が潰れ内臓が体からはみ出している彩野の姿に動揺が隠せない愁、手を口に当てながら一歩後ろに下がってしまう。
するとその下げた足にまた何かが当たり、後ろに振り向くと、そこには死んだ家族が変わり果てた姿で倒れている。
「お前が殺した・・・」
後ろから聞き覚えのある男の声がする、愁はまた後ろに振り向くと、そこには玲を抱きかかえた羅威の姿があった。
それだけではない、愁の周りには今まで愁が殺してきた人間の屍が広がり始めた。
気付けば足元は血の海が広がっており、暗闇だった空間が徐々に赤く濁り始めていく。
「全てお前のせいだ、お前のせいで、ここにいる人達が、玲が死んだ」
「違う・・・俺のせいじゃない、俺は・・・」

「お前が皆を殺した、誰一人守る事も出来ず、無責任な感情を振り回した結果だ」
羅威の言葉が愁に突き刺さる、たしかに前の自分はどうかしていた。
「・・・たしかにあの時の俺はそうだったかもしれない、だが今の俺は違う！」
愁の言葉に羅威は動じなかった、玲の死体を抱きかかえたままじっと愁の目を見つめている。
「同じだ、お前が殺した事には変わり無い。お前がいなければ、皆生きていた」
「だが皆は死んだ！・・・俺はもう過去の過ちは繰り返さない、これからはフィリオの為に戦うと決めたんだ！」
「それがお前の答えか、随分と変わったな。誰にでも優しかったお前が、平気で人殺しをするなんて」
「何とでも言え・・・今の俺はこの世界の為にも、成し遂げなければならない事があるんだ！」
「それなら敵である俺を殺せ、その握り締めている拳銃で俺を撃つがいい」
愁が右手を見ると、たしかにその手には銃が握り締められていた。
そしてその手をゆっくりと上げると、銃口を羅威の方へと向ける。
「昔の俺じゃない、変わったんだよ！俺の前に立ちふさがるというのなら君でも俺は撃つ！・・・さよなら、羅威」
「ああ、さよなら」
渇いた銃声が聞こえた、引き金は引かれたのだ。撃たれた銃弾はまっすぐ羅威の額に向かっていくのが愁には見えた。
だが羅威は笑っていた、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた時、全ての景色が消え、新たな景色が愁の目の前に飛び込んできた。
「フィリオ・・・？」
目の前にフィリオが見える、悲しげな表情を見せて愁を見つめていた。
そして愁は、そのフィリオ目掛け右腕の拳を振り下ろしている。

その時全てを悟った、今自分の機体は戦艦の甲板に立ち、司令室で座っているフィリオ目掛け拳を突き出している事を。
「や、やめろぉぉおおおおッ！！」
言葉とは裏腹に拳が突き進んでいく、もう止める事も出来ない拳、拳でフィリオの姿が隠れた時、頭の中が真っ白になった。
愁が拳を止めた時、既に司令室は拳で押しつぶされていた。
兵士達も巻き添えになり、司令室の機器が破壊され艦の動きが止まる。そして司令室は煙を上げると大きく爆発を起こした。
甲板に立ったまま微動だにしないアギト、愁の瞳孔は開き、信じられない様子で目の前の光景を見つめている。
「俺が・・・殺し・・・た・・・？」
「ああ、そうさ。君がフィリオを殺したんだよ」
操縦席からテトの声が聞こえてくる、その声が更に愁を恐怖のどん底へと叩き落とす。
「そん・・・な、どうして・・・？俺が？な、ぜ・・・？」
さっきまでの光景は全て幻覚に過ぎなかった、そしてその幻覚に惑わされ、自らの手でフィリオの拳を向けた。
感情が渦巻き始める、様々な思考と思い、全てが混ざり合い泥のように汚くなり始める。
「ふふっ、面白いものが見れて良かったよ。それじゃあ僕は用があるから、ばいばい」
満足気なテトは終始笑みを浮かべると、甲斐斗が逃げた方へと飛び去っていった。
二つの艦はその場に止まると、すぐさま一つの艦は消火活動にあたる。
艦の周りにはアストロスの残骸が散らばっており、その中にはアストロス・ガンナーの姿もあった。
光が消えていく。自ら手にした光が、ばらばらに砕け散り、失っていく。
感情の波が押し寄せ、爆発寸前にまで追い詰められたその時、無線

から一人の女性の声が聞こえてきた。
『愁、安心してください。私は無事です』
それは紛れもないフィリオの声だった、愁が声を聞くと、操縦席のモニターにフィリオの映像が映しだされた。
『エコが私を助け出してくださいました、ですから心配はありません』
「で、でも・・・俺は・・・」
『落ち着いてください、愁。落ち着いて・・・」
静かに、そしてはっきりとしたフィリオの声に、愁も次第に冷静さを取り戻し始める。
「あの人は俺に何を・・・なんで俺は、あんな事を・・・」
『それは・・・後で説明します、今はアリスの艦に戻り格納庫でお待ちください』
そこで通信は切れた、愁はゆっくりとアギトを動かすと、アリスのいる艦へと機体を走らせた。

アギトとの戦闘で敗れた赤城、操縦席の扉を開けて外に出ると、何も残っていない町を眺めていた。
風と一緒に灰が吹き込む、空も灰色に覆われそこはもう町の面影を残していなかった。
「神楽、お前は本当に忘れてしまったのか・・・？あの約束を」
前方を眺めていると、後方から何かが迫ってくる音が聞こえて振り向くと、そこには1機のギフツが迫ってきていた。
『赤城少佐！良かった、無事だったんですね・・・今お助けします！』
その声を聞き赤城も小さく笑みを見せると、リバインに乗り込み扉を閉めた。
ギフツはそのリバインを優しく持ち上げると、かつての町に背を向け止めてあるＢＮの艦に向かい始めた。
そして艦に戻ってきた時、同時にＢＮの機体である神威もまた、エ

ンドミルに運ばれて艦に戻ってきていた。
リバインは格納庫の床に下ろされると、赤城は扉を開き外に出る。
しかし、そこにはＢＮの兵士達が慌しく走っているだけで、特に警戒されている様子は無い。
「ＢＮの事だから私達を拘束すると思っていたが・・・何か違うな、ここのＢＮは」
「赤城少佐～！」
由梨音の声に赤城が右を向くと、こちらに勢い良く駆けてくる由梨音の姿があった。
そのまま由梨音は勢いに任せて赤城に抱きつくが、赤城はしっかりと由梨音を受け止める。
「赤城少佐ぁ～良かったぁ、本当に、無事でぇ・・・」
先ほどまで笑顔だったというのに、今度は赤城の胸元で涙を流し始める由梨音に赤城は優しい笑みを見せながら頭を撫でてあげる。
「すまない、心配させてしまったな」
心配するのも無理無い、ＮＦの兵士であの町から無事脱出できたのは赤城と他数名しかいなかった。
増援部隊は全滅、町に留まってい兵士達も皆死に、東部は脆くも壊滅したのだ。
赤城はゆっくりと体から由梨音を放すと、頬についている涙を指で優しく拭った。
「由梨音、今から私はここの艦長と話しをつけてくる。ＮＦの民間人を保護してくれたのだしな、これからの事について話しをしなければ・・・」
その時だった、後方からどよめきと男の怒鳴り声が聞こえてくる、赤城はその声の方に振り向くと、そこには床に倒れたまま動かない羅威と、その羅威に歩み寄る穿真の姿があった。
穿真は羅威の襟を掴むと簡単に体を持ち上げると、何度も前後に揺らす。
「てめぇ、自分が何したのかわかってんのか！？」

何も答えないまま俯いている羅威を見て穿真は拳を振り上げると、渾身の力で羅威の顔を殴り飛ばす。
「なんか言えよ、おい！」
倒れた羅威をまた持ち上げては殴り、格納庫の壁に叩きつける。
羅威の口から血が流れようが、今の穿真が止まる事は無い。
壁にもたれ掛かる羅威、俯いていた顔を上げると、その顔を見た穿真の足が羅威の足元で止まった。
「何・・・泣いてんだよ・・・」
泣いていた、大粒の涙を流しながら、その涙を拭おうともせず、羅威はただ泣いていた。
そして、穿真もまた、羅威同様に泣いていた。決して涙を拭わず、羅威の足元にその涙が落ちる。
「情けねえ面してんじゃねえよッ！」
再び羅威の襟を両手で掴み倒れた体を起こした時。今まで黙っていた羅威の口が開いた。
「どうして・・・どうして二人とも、死んだんだ・・・？どうして・・・玲も、クロノも・・・死んだ・・・？」
今まで見せたことの無い羅威の姿、情けなくて、弱くて、どうしようもない。
その姿を見て穿真の怒りは更に高まる、二人が涙を流すのは悲しいからではない。悔しくて、情けないからだ。
何も出来ず、助けられなかった。そして・・・大切な友を殺した。
「答えてやるよ、お前のせいだッ！全部・・・全部のお前のせい何だよッ！！」
穿真は羅威の体を壁に押し付ける、何度も、何度も。
殺した、あの時迅速な行動をしていれば少なくとも、クロノが死ぬ事は無かった。
「どうして、クロノは・・・俺を、助けた・・・。わかっていた、はずだ・・・クロノは、俺を助けに行けば、自分が死ぬ事、わかっていて・・・」

全身の力が抜けていく、羅威は壁にもたれ掛かりながら、穿真は服の襟を掴んだまま、ゆっくりとその場に腰を下ろした。
「玲はどうして、あんな事に・・・どうして、ただ、普通の、平凡な・・・生活が・・・出来なかった・・・」
もう穿真には答える気力も残っていない、羅威の襟を掴んだまま俯き、何も言わない。
ふと足音が聞こえてくる、香澄の足音だ。足音は・・・ゆっくりと、羅威に近づいてくる。
羅威の目には映っていた、涙を流し、拳銃を握り締めながら向かってくる香澄の姿が。
「あんたのせいで・・・クロノ隊長は死んだ・・・」
そう言うと香澄は握り締めていた拳銃を羅威に向ける、周りの兵士達は止めに行く事も出来ず、ただその様子を緊張した面持ちで見つめていた。
「あんたがいなければ、クロノは・・・生きていた・・・それなのに・・・！」
簡単に引き金は引かれた、何度も何度も、渇いた銃声が格納庫内に響き渡る。
全弾撃ち尽くしても、引き金を引き続けるが、やがて指は止まり、天井に向けていた拳銃を羅威に投げつけた。
「どうしてあんたが帰って来て・・・クロノが帰って来ないのよ！どうしてぇ！ねえどうしてなのよッ！どうして・・・」
その場に崩れ落ちる香澄、両手で顔を覆いながら泣き叫ぶ。
雪音もそう、一人操縦席の中で咽びながら泣いている、誰にも気付かれず、ただ一人で。
結局、この戦いで何を得たのだろうか。
玲は助けられず、クロノは犠牲となり、町は滅んだ。
「赤城少佐・・・？」
何の為に戦ってきたのか、誰の為に戦ってきたのか。もう、わからない。

濁っていく、泥のように。今まで綺麗な色が広がっていた景色が。
「これでは前が見えんな・・・」
赤城の言葉を聞いて由梨音はポケットからハンカチを取り出すと、そっと赤城に手渡そうとしたが、赤城は自分でその泥を拭う、拭った後には自分の色が広がっているから。
「行くぞ、由梨音」
「あ・・・はい！」
最初は咄嗟の事にその後ろ姿を眺めていた由梨音だが、いつもの赤城の声に返事をすると、赤城の横に並んだ。
まだ終わらない、終われない、例え遅くても、進み続けるしかない。
全てを確かめるまでは。

第６７話　泥、涙（後書き）

正式名ＭＦＥ－アストロス・ナイト　（Ｓａｖｉｏｒｓ製）
全長－２０ｍ　機体色－黒灰色　動力源－光学電子磁鉱石
Ｓａｖｉｏｒｓが開発した『３大神機』の１機。
装着している甲冑と兜により騎士の姿をしており、右手には剣、左手には盾を装備している。
剣は片手剣ながらＬＲＢ以上の威力を誇り、盾は驚異的な硬さと電磁波を放つ事が出来、背部には超距離兵器をも兼ね備えている。
その性能は著しく、近距離から遠距離まで幅広く戦える為に弱点が無い。

第６８話　望み、騙し

荒野を走り終えたＭＤは森に来ていた、そこで甲斐斗は機体から下りると、ＭＤがゆっくりと閉じていた手を広げていく。
そこには後ろからミシェルを抱きしめるアビアの姿があった。
「甲斐斗、久しぶりだねー」
「お前・・・なんで生きてやがる」
「えへ、なんでだろ」
可愛らしい笑みを見せて首を傾けるが、ミシェルを放そうとはしない。
――数回ほど、たしかにこの手で殺したはずの女が目の前にいる。
俺と同じ化物か、はたまた何かの魔力か？それともクローン？わからん。
とりあえず今はミシェルの安全を確保する方が先か・・・。
「ねー甲斐斗」
「何だ？」
「アビアをこーんな所に連れてきて、何するつもり～？」
こいつ・・・そもそも俺はお前なんてどうでもいい、ミシェルを迎えに来ただけなんだよ。
それなのにお前がミシェルに抱きついていたから今こうなっているが・・・。
「あのな・・・連れてきたくて連れてきた訳じゃないってのわかるだろ？」
「うそー、アビアにいやらしい事するつもりでしょー？」
「んな訳無いだろ！大体俺は女に興味無いんだよ！」
「えっ、あー・・・そうなんだ。甲斐斗って、そういう趣味何だー」
だめだこいつ、何か勘違いしてやがる。というか、何でこんな会話をしているんだ俺は。
あいつのペースに巻き込まれるな、幸いにも今奴は武器を持ってい

ない、隙を見てあの女を殺せば良いだけだろ。
「お前がミシェルを放せば命だけは助けてやる、抵抗するなら殺す、どうする？」
「じゃーさ、アビアの言うとおりにしてくれたら、返してあげてもいいかなー」
取引をするつもりか、だがそれで返してくれるのか？こいつにとってミシェルは必要な存在ではないのだろうか、少なくともあの男はそうだろう。
「いいだろう、望みを聞いてやる。だが必ずミシェルを返せよ？」
俺の言葉に女は頷いた、さて、どんな要求が来るのやら。
簡単な事ならそれでいいが、無理難題の事を言ってきたら殺そう。
「アビアにキスして」
「・・・は？」
満面の笑みで何言ってんだこいつは、前から思ってたが頭おかしいだろ。
「大人のキッス、アビアにしてくれたら返してあげるー」
俺を油断させる罠か？だがあの女の表情から見て本当にそうだろうか。いや、化けの皮を被っている可能性もある。
「本当にそれでいいのか？お前にとってミシェルは大事な存在じゃないのか？」
「別にー、ただテトが言ってたから探してただけ。興味なんて無いよー」
テト・・・あの男の名前か、たしかにあいつはミシェルで何かを企んでいそうだな。
「だがお前はテトに頼まれてるんだろ？返したらその男に殺されるんじゃないのか？」
「だいじょーぶ、アビアは不死身だよ？」
「何故だ？」
その問いに答えようとしない、もしかすると、こいつは俺に勝てないとわかっているのか？

ここでこいつがミシェルを渡さなければ俺は必ずミシェルを取り返す、そうなればこの女にメリットが無い。
・・・上手く乗せられたというべきか？・・・まぁいい、キスの一つや二つ、簡単な事だが・・・。
「てか、なんでキス？」
「えへへ、アビアは強い男が大好きなの」
何照れている、変わった女だな、そんな理由だけでかよ。
「わかったよ、先にミシェルを返せばしてやる」
そう言うと女は簡単にミシェルから手を放し、軽く背中を押してあげた。
ミシェルはすぐさま俺の所に来ると、抱きついたままアビアの方に顔を向ける。
「ミシェル、帽子を深く被っとけ。俺がいいって言うまで被っとくんだぞ？」
言われた通りにミシェルは被っている帽子を目元まで深く被る、これで俺と女の姿は見られないだろう。
「よし、これでっ・・・」
ミシェルから目をそらし前を向いた瞬間、両肩に手を置かれ体勢を少し低くされると、唇と唇が触れ合った。
女は背伸びをしながら俺の両肩に手を置いてキスをしている、柔らかくて暖かさを感じるという事は、どうやら死人ではないみたいだ・・・が・・・何だ？体が、動かない？
両手両足が固まり、いくら神経を研ぎ澄ましてもピクリとも動かない。
これが奴の狙いだったのか？だが何の力だ、毒か？それとも何らかの力なのか？
女がゆっくりと口を離す、愛らしい笑みを見せ口を開く。
「アビアに見せて、本当の・・・甲斐斗を・・・」
女の唇がまた触れると、半開きの俺の口に滑るように熱くて柔らかいものが入ってくる。

それでまた意識が揺らぐ、視界に段々、白い靄が広がって・・・。
「やめて！」
ミシェルの声だ、俺は薄い意識のまま横目でミシェルを見ると、帽子を深く被ったまま地べたに座り両手で頭を押さえていた。
「おねがい、やめ、て・・・！」
何故苦しがっているんだ？どうして、ミシェルが・・・ッ！
「きゃっ！」
理由はわからないが、もしかすれば関係しているかもしれない。
俺は力を振り絞り、アビアを体から突き放すと、頭を押さえているミシェルの元に向かう。
くそっ、意識がまだはっきりしない、それに何なんだこの全身に広がる感覚は・・・。
その時だった、俺とミシェルの間に一枚の巨大な剣が突き刺さる。
「くっ、これは・・・」
上空を見上げれば、奴はそこにいた。
俺の目の前に降り立つ１機の機体、間違いなくあの男の機体だ。
そして胸部のハッチが開くと、案の定男が機体から下りてきた。
「やぁ、直接会うのは久しぶりだね。甲斐斗」
見つけられるのが早すぎる、道を複雑に走り森深くまで来たはずなのに・・・。
やはりアビアの作戦は時間稼ぎだったのか、恐らくアビアに発信機か何かを持たせていたな。
「僕の名を教えておくよ、僕の名はテト・アルトニア。かつて君が破滅まで追いやったアルトニアエデンの王子さ。まぁ、今はもう追放された身だけどね」
アルトニア家の人間？という事はＳＶの人間・・・ではないはずだ、葵とエコと戦っていたからな・・・。
機体から下りたテトは笑みを見せながら俺の前まで歩いてくると、俺の付けた首元の傷に触れながら口を開いた。
「初めは信じられなかったよ、君があのカイト・スタルフだったな

んて。
　そんな子供の姿になって、おまけに魔力も使えない身。本当に無様だ」
「黙れガキ・・・お前だってろくに魔力は使えない癖に・・・」
「子供に子供呼ばわりされたくない、こう見えても僕は１００年以上生きている。それに力もあるよ、ほら」
そう言って奴が左手を俺に向け、軽く振り下ろすと、その動きに合わせて俺の頭が地面に叩きつけられた。
頭を上げようとしても上がらない、何故こいつが魔法を使えて、俺が使えないんだ・・・！
「期待外れにも程があるよ、どうしたんだい、何もできないのかい？」
男は俺に近づくと、地べたに這い蹲る俺の頭に足を乗せ、踏みにじる。
痛みより遥かに上回る屈辱、今すぐ起きて奴の頭を吹き飛ばしぶち殺したいが、いくら力を入れても体が動かない・・・。
「そうだよね、できないよね。だって君の力は・・・」
俺とミシェルの間に突き刺さっていた巨大な剣が機体に引き抜かれる、ミシェルは未だに苦しみ震えていた。
だが奴は俺から足を上げると、そんなミシェルなど気にも留めず帽子の上から頭を掴み俺の眼の前に突き出した。
「この第１ＭＧが封じているんだから」
な、何を言ってるんだこいつは・・・意味がわからない。
そんな俺の愕然とした表情を見て面白いのか、奴は不敵な笑みで俺を見ていた。
「驚いたかい？無理もないよね、今まで君の守ってきた者が、君の最大の敵だったんだから」
ミシェルが俺の敵？俺の力を封じていた？・・・信じられないし、信じるつもりもない！
「冗談は大概にしとけよガキが、ミシェルは俺の敵じゃねえ・・・

そうだろ、ミシェル・・・？」
恐怖で震え、苦しみ、目に涙を浮かべるミシェル。見ろよ、こんなか弱い子が、俺の力を封じる？敵？んな訳が無いだろ・・・。
「実に哀れ、そして愚かだ。そもそも何故この世界では魔法が使えないのか、それはこの世界にいる『神』という名の兵器の力さ。この兵器が起動している１００年前からこの世界では魔法が使えないんだよ。でも僕は使える、神ですら僕の強力な魔力を完全に封じる事は出来なかったんだよ」
「それが・・・俺とミシェルにどう関係あるっていうんだ・・・？」
「それはね、君はこの世界にとってイレギュラーな存在なのさ。だからこの世界の秩序を守る『神』が君を放置する訳が無いだろ？
だから生き残っている最後のＭＧ、第１ＭＧを君の元に向かわせたのさ。結果、君は第１ＭＧと接触。
そこで君は完全に魔力を封じられたのさ、でも君は一度、ＥＤＰの時に力を解放できたそうだね、その理由は僕にもわからないけど」
こいつの言っている話し、まさか本当なのか？たしかに話の筋は通っているようにも聞こえる。
だが知りすぎだ、何故こいつはこれ程の情報を知っている。こいつは一体・・・。
「甲斐斗、君が力を取り戻す方法は一つ。簡単さ、第１ＭＧを殺す事だよ」
第１ＭＧを・・・ミシェルを殺す？そうすれば力が戻るだと？俺の、力が・・・？
「どうだい、やってみないかい？力が戻るんだよ、君の全ての力が。この子の命一つで・・・」
そうだ、今までの俺は俺じゃない、本当の俺、それは・・・。

「やるよ。だから・・・この拘束解け」
「ふふ、それでこそ君だ。さぁ、ご自慢の剣で殺せ」
テトが指を鳴らすと、動かなかった甲斐斗の手足が動き、ゆっくり

とその場に立ち上がる。
そして剣を瞬時に手元に出すと、それを右手で握りしめた。
「くれぐれも僕に切りかかろうなんて馬鹿な真似はしないでね」
そのテトの言葉を聞いて、甲斐斗は不敵な笑みを見せ、剣を振り上げた。
「知らないのか？俺は馬鹿なんだよ」
怯えるミシェルに背を向け、剣先をテトに向けて飛びかかる。
だがテトもわかっていた、拘束を解けば襲いかかりに来る事も。
「知っていたよ、君が馬鹿な事ぐらい」
予想の範囲内の出来事に過ぎない。
左手を甲斐斗に向けて突き出し動きを止めようとしたテト、だが・・・甲斐斗の動きは止まらなかった。
「なっ！？」
剣を盾にし飛びかかった甲斐斗に、テトの魔法は通じなかった。
たしかに今の甲斐斗は魔法が使えない、しかし唯一あの剣を出す事は出来る。
その剣だけで、甲斐斗にとっては十分と力になる。
「・・・んてね」
驚いた表情から一瞬にして邪悪に満ちた笑みをテトは見せ、辺りに血が飛び散る。
右腕は剣を掴んだまま宙に浮き、剣先が地面に突き刺さる。
右肩から血が噴出し、その光景を甲斐斗は信じられないかのように見つめていた。
血飛沫の隙間から見えるテトの笑み、テトの握る剣は線を描くように機敏に動くと、腹部と両足を切り裂く。
肉は大きく切り開かれ、切れ跡からは骨が見える状態だ。
剣から逃れようと体を動かそうとするが、まるで空間が止められているかのように体が動かない。だがテトは違う、たった数秒で甲斐斗の肉体を滅多切りにし。剣を高らかに振り上げると、一本の線が甲斐斗の左目を裂いた。

斬られた後からは血が噴出し、目玉から水晶体がはみ出ると地面に落ち、それをテトが踏みにじり甲斐斗の目の前にまで詰め寄る。
懐に入られたに気付いた時には、細長い剣が肺を破り心臓を簡単に貫く。全身に鮮血がほとばしると、口からは喀血が溢れ出した。
血で染まる視界にはテトの笑みしかみえない、そして次に見えた来た光景は、血に染まった曇り空だった。
「あ、ぐ・・・ぁ・・・」
もはや言葉にもならない、虫の息の甲斐斗はただ殺されるのを待つしかない。
「とてもつまらなかったよ、甲斐斗。君は僕の求めてきた君じゃない」
剣に付いた血を甲斐斗の左目に滴り落とすと、ゆっくりと剣先を甲斐斗の頭部の位置にずらす。
まだ温かい血が額に落ちる、とても綺麗な赤色だ。
「さよなら」
振り上げられた剣は、甲斐斗の額目掛け一直線に下ろされた。
甲斐斗の顔面に滴り落ちる温かい血液、だがそれは甲斐斗の血ではない。
「・・・何の真似だい、アビア」
はっきりしない視界でかすかに見えるアビア、剣の刃先を左手で握り締め、甲斐斗の額の直前まで来ていた刃先を止めていた。
剣を止めたアビアは右手に持つ鋭いナイフをテトに見せると同時に笑みも見せた。
「アビアにも遊ばせて、テトばかりずるいよ」
その表情を見てテトは小さく鼻で笑った、それと同時にトラディスカントが動きテトの後方に移動し、跪く。
そして握り締めていた剣をその場で消すと、恐怖に凍りつくミシェルの頭を掴み機体まで連れて行く。
「そうだね、後は君の好きにするといいさ。ただし・・・遊び終えたらその男の首を僕の所に持って来い、いいね？」

「はーい」
「帰るときはあの機体に乗ればいい、それじゃ」
テトは甲斐斗の乗っていたＭＤに指を指すと足を止めず歩いていく。
アビアが可愛らしい返事をすると、テトはミシェルを担いで機体に乗り込み、ハッチを閉めると、すぐさまその場から飛び発った。
その場に残された甲斐斗とアビア、機体を見ていたアビアがゆっくりと甲斐斗の視線を戻すと、腕を失い、目も裂けた血塗れの甲斐斗がアビアを見つめていた。
口から血が零れながら甲斐斗は口を動かす、微かな笑みを見せるように。
「見た・・・か・・・？これが・・・本当の・・・俺だ・・・」
血は止まらない、全身から溢れ出る血は周りの草を赤く染め、地面に染み渡る。
「そーだねー。もしかしたら、それが本当の甲斐斗なのかもしれないね」
そうアビアが言うと、甲斐斗はまた小さく笑った。そして血と共に大きく息を吐いた。
「ああ・・・もう、限界だ。っへへ、俺、よくここまで、頑張ったよ」
段々と甲斐斗の右目が虚ろになっていく、声も小さくなり、落ちついた様子でアビアを見つめている。
アビアはその姿を黙って見つめていた、表情を変えず、ただじっと。
「でも・・・結局、俺は・・・」
甲斐斗は震える左腕を少し上げ、その手を曇り空に向かって力無く伸ばす。
「何も・・・できな・・・かっ・・・・――――」
最後の言葉を言い終える前に、甲斐斗の腕は下りた。
目蓋も閉じ、首が傾く。もう呼吸すらしていない。
アビアは無言のまま甲斐斗の足元まで歩くと、その顔をまじまじと見つめる。

そして膝を地面に付き、両手を甲斐斗の顔に添えると、自分の体を重なるように前に倒し、目を瞑りながら甲斐斗に口付けをした。
誰もいない、二人しかいない森で、曇り空の下、ずっと、延々と・・・口付けを交わし続けた。

第69話　個々、思考

――「エリル、君にプレゼントがある、これさ」
そう言ってラースは機体に掛けられたシーツを取ると、そこに1機の機体が姿を現した。
赤紫に塗装されている可憐な機体に心を奪われるエリル、最初は開いた口が塞がらなかった。
「ＭＦＥ無花果、僕の設計したオリジナル機体さ。その性能は我雲とは比べ物に――」
「ほ、本当に私のなの!?本当に!」
興奮状態エリルはラースの説明を無視してすぐ横に立っているラースに近寄る、その気迫に押されラースはたじろいながらも説明を続けた。
「あ、ああ。機体のＯＳから何まで全て君専用にしてある。調整はまだ必要だけど、乗り心地は最高だと思――」
またもラースの説明が途中で終わる、横にいたエリルが突然ラースに抱きついたからだった。
「ありがとうラース!」
満面の笑みのエリルは顔を上げると、ラースは驚いた表情でエリルの顔を見つめていた。
驚くと同時に、悲しい様子が見てわかる、その表情が頭から離れない、あの悲しげなラースの表情を……。

「――さま――お客様――」
「ん……?」
寝ていたエリルは目を覚まし目蓋を開けると、そこには身なりの整ったスチュワーデスが立っていた。
「到着されましたよ、お客様」
「……え!?す、すみません!」

恥かしそうに手元の荷物を取ると、エリルは駆け足で飛行機から降りる、空港にある自分の荷物を手に取り足早に空港を後にする。
息を切らしながらも帰ってきた、この美しいＢＮの本土に。
この町はＢＮの本部の中でも上位に属し、巨大な民間施設の他に軍備強化等が行なわれている。
その為ＥＲＲＯＲからの被害は未だに無く、ＮＦも容易には攻めてこられない場所だ。

――久しぶりの景色、私がこの町から出た時もこれと同じ景色が広がっていた。
あの後止められていた車に乗って、私は空港に向かった。
その車の中にあった小さなバッグの中には十分な資金と、私の為に作られたパスポートが入ってたけど、どうしてこんな物を神楽さんは用意したのか私にはわからない。
悪い人じゃなさそうだけど……なんだろう、あの人の目、とても悲しげな目をしていた気がする。
ＢＮの本部についた私は空港から出た後、一人昼間の町を歩き回り、見覚えのある景色を見ていく。
……私は一度死んでいる、神楽さんはそう言ったけど。私にはわからない。
でも、何故かあの言葉で私の頭は真っ白になった……それもこれも、ラースに聞けば、全てわかるんだと思う、だからここに来たのだから……。
「こんにちは、お花を買いに来たのですか？」
女性の声で私の意識が呼び戻され、気付けば町の中心とは少し離れた花屋に来ていた。
「あ、すみません。ちょっと見ていただけです」
「あら、欲しいお花があったら呼んで下さいね」
女性はそう言うと店の奥に消えていく、私もこんな所にいないでラースに会いにいかないと――。

そう思い足早にその場から離れようとした時、一輪の花が私の左手に触れた。
その時、目の前の景色が一瞬にして変化した。
おぼろげな記憶のように、その景色には明るい色が無くて、降り頻る雨の中、一人の青年が傘を片手に花屋の前に立っている。
『こんにちは、お花を買いに来たのですか？』
『いや、少し見ていただけさ……』
『そうですか、もし何か欲しいお花があればいつでも呼んで下さいね』
何、これっ……！私が、花を、売っている……？
この光景は、何っ……私の記憶に、こんな記憶は――。
『ん……ああ、それじゃあ、その花を一つ』
『はい、この花ですね』
「止めてッ！」
私は夢から覚めるために声をあげ、両手で耳を塞ぎ、その場に座り込んだ。
ゆっくりと目蓋を開ければ、そこには色鮮やかな花たちが広がっている。
見覚えのある花々に、見覚えのあるお店……何だろう、初めて来たはずなのに、とても懐かしくて、切ない気持ちになって……。

――「どうしたの？大丈夫？」
エリルの声を聞いて店の奥から先ほどの女性が駆けつけてきてくれると、座り込んでいるエリルの肩に手を当てて心配そうな表情で覗き込んでいる。
「す、すみません。ちょっとビックリしちゃって……」
「体調が悪いの？それなら少し部屋の奥で休んでいきなさい」
「え、でも大丈夫ですから――」
「いいからいいから、若いのに無理したら駄目よ？」
女性はエリルの肩を掴むと、ゆっくり部屋の奥に連れて行き始める。

感じる。部屋の奥に進むたびに、頭の中から何か熱いものが込み上げて来る。
白くて、おぼろげで、でもハッキリと映し出されてくる光景。
そして女性はエリルを部屋に案内すると、椅子に座らせてくれた。
「今冷たい飲み物でも持ってくるから、待っててね」
明るい笑みを見せた後、部屋から出て行く女性。
部屋の中は物が綺麗に整頓されてあり、色とりどりの綺麗な花が飾られている。
椅子に座りながら部屋全体を見渡し、飾られた花に魅了されていると、片手に一杯の水の入った硝子のコップを持った女性が部屋の扉を開け、部屋の中に入ろうとした。
エリルは女性を見てお水を受け取ろうと近づこうとした時、部屋全体が震える程の振動と爆発する鋭い轟音と共に、目の前に広がる全てが吹き飛んだ。
エリルも爆風に包まれ吹き飛ばされたが、幸いにも部屋の原形は止めている。
「っ、何よ…一体、何が――――」
倒れた体を起こし、女性のいた方に目を向けると、そこには瓦礫に埋もれた女性の手が出ていた。
店で飾られている花には次々に火が燃え移っていく、華麗で鮮やかな花々が、黒い煤を被り焼き焦げ、燃え尽きていく。
もはや女性も生きてはいなかった、瓦礫から出ている腕はピクリともせず、その瓦礫の隙間からは薄らと血が広がっていく。
一瞬にして起こった出来事に信じられない様子でその光景を見つめ続けるエリル。
「なんで、どうしてこんな……」
景色が重なる、脳裏の景色と、目の前の景色が、重なり合う。
あの時の光景が再び蘇り、鮮明に映し出された時、エリルの記憶に掛けられていた鎖が解けた。
「ぁあ!?そん……なっ――――――!!」

一秒に何コマもの映像が映し出されていく、今まで自分から消されていた記憶、隠されてきた真実が、全て。

――たしかに憶えている、そしてエリルは今でも憶えている。瓦礫に埋もれて死んだあの日の自分を。

全身を包む疲労、苦しそうに肩で息をしながらエリルは、そっと顔を上げた。

ここで立ち止まる訳にはいかなかった、エリルには向かう場所がある。

自分の謎を解く最後の鍵を持つ、ラース・グレイシムの元に。

――「なっ!?ＮＦがＢＮの本部を攻めているだと!?馬鹿な……ありえない!」

ＢＮの戦艦の司令室で声を荒げる赤城、だが艦長は冷静な面持ちで口を開く。

「本当だ、その本部から連絡があったのだからな。現在ＮＦと交戦中。奴等め、新種のＥＲＲＯＲの為にＢＮの兵士が出払っているのを知っていての行動か……」

「ＮＦの本部が何故今になってＢＮを……今はそれ所ではないというのに!」

「我々も本部から援軍の要請が来ている、今すぐ艦を本部に向けて出発させる」

「待て、この艦にはＮＦの民間人がいる。先に近くの町に寄り民間人の解放を……」

「それは出来ない、もし今町に寄ればＮＦに攻撃される」

「ＮＦは民間人を積んでいる艦に攻撃はしない、私が何とかしよう、だから民間人の無事を最優先してほしい、勿論町に辿り付けば物資の援助をさせてもらう、どうだ?」

「……わかった、では先に町に連絡しておいてほしい。その後話しの結果を私に聞かせてくれ」

赤城は一礼した後その部屋から出ると、部屋の前には由梨音が壁に凭れかかりながら赤城を待っていた。
「赤城少佐、一体何を話していたんですか？」
「ＮＦがＢＮの本部に攻め込んでいる、という事は恐らく指揮官は騎佐久。何故奴は今になってＢＮに。だからＢＮの艦は今本部に向かっている、その前に近くの町で民間人を下ろすがな」
足早に走りながら説明を済ませると、廊下を逸早く駆け抜けていく赤城。
由梨音もその後を必死に追いかけていくが、赤城の速さについていけない。
赤城はそのまま格納庫に出ると、負傷して放置されているリバインに乗り込み、機体の電源を入れる。
この周辺で一番近いＮＦの町、その軍事基地と無線を繋げ、事の状況を伝える。
伝え終わった後、今度は操縦席に付けてある携帯電話に手を掛けると、あの男に電話をかけた。
数回程コールがなった後、電話が繋がり、男の声が聞こえてくる。
「赤城か！？良かった、生きていたんだな」
「はい、その様子だと東部で何が起こったのかはご存知なのですね。騎佐久少将」
電話の相手は騎佐久だった、赤城は騎佐久の声を聞いても無表情で電話を握ったまま微動だにしない。
「ああ、新種のＥＲＲＯＲ、そして『羽衣』により町が消滅したらしいな……」
「はい、東部は完全に消滅し。民間人もわずかしか生存していません。そんな状況で何故ＢＮの本部に攻めて込んでいるのですか？」
「私は小さなチャンスを生かし、最大限に発揮しているだけだ」
「答えになっていない！答えろ騎佐久！お前が指示をしたのではないのか！？」
我慢の限界が来ていた、今の赤城には理解できない事が今起きてい

るのだから。
その赤城の怒号を聞いて、電話から騎佐久の小さな笑い声が聞こえてきた。
「ふふ、やはり君はそうでないとな。いいかい赤城、ＮＦとＢＮは今戦争をしている。現在手薄のＢＮの本部を今落とせば、ＢＮの戦力がＮＦの物になる。そうなれば一つの強大な敵が消えると共に戦力が倍増し、ＥＲＲＯＲとの戦いに全力を注げるだろ？」
「それなら――――！」
「それなら、ＢＮと共に協力をすれば良かった……君はそう言うだろう。だがそれは無理だ」
「何故だ！あの日４人で誓った約束はどうした！？ＮＦを……ＮＦを変えるのではなかったのかッ！」
「変えるさ。俺は俺のやり方で約束を守る、それだけだ。ではそろそろ電話を切るぞ、また後で」
騎佐久はそう告げると電話を切り、携帯を懐に入れる。
「赤城、君は優しすぎる。今の君ではＮＦを、この世界を……変える事は出来ない」
そう言って騎佐久は乗り込んでいる機体の電源が入れると、格納庫にいる機体全てに電源が入っていく
そして機体の調整を済ましていると、無線が繋がり、モニターに三人の姿が映し出された。
『騎佐久少将、指揮官自ら戦場に出て行かれなくてもよろしいのですよ』
モニターの左に映る一人の女性が騎佐久に話しかけるが、騎佐久は機体の調整をしながら口を開く。
「何を言う、指揮官だからこそ戦場の最前線にいなくてはならないのさ」
すると今度はモニターの右に映る若い男が口を開いた。
『さすが中部最強の男、言う事が違うねぇ。へっぴり腰のカス指揮官供とは大違いだ』

「さすが南部最強の男、言う事が違うな」
そう言った後、今度はモニターの上に映っている女が口を開く。
『おいおいお前達、これからＢＮの本部に攻め込むんだぞ。少しは気を引き締めたまえ』
『へへ、わかってますよ姉御。だけどよ、俺達が戦場で集う事ってこれが初めてだろ?だから少し興奮してんのさ』
『その呼び方止めないか?まぁ気持ちはわかる。東西南北と中部最強の兵士が５人集っているのだからなぁ』
「話しはそこまでだ、全機発進、町に下りるぞ」
『了解』
騎佐久の言葉に３人は答えると、モニターに映し出されていた三人の映像が消える。
だがそれと同時に一人の青年の姿がモニターに映し出された。
「……調子はどうだい」
『大丈夫です、心配いりません』
「そう。君が武蔵の代わりに東部最強の男になったんだ。それなりの活躍を期待させてもらうよ。カイト・アステル」

第７０話　過去、孤独（前書き）

更新が遅くなり誠に申し訳ございません。
この時期特に忙しくなりペースが遅くなりましたが、遅れた分を取り戻していくよう頑張ります。

第７０話　過去、孤独

――ＢＮの本部に雨の様に振り落ちるミサイル、そのミサイルを地上の迎撃部隊が必死に撃ち落していた。
町にいる民間人は軍の人間に誘導されながら逃げようとするが、ミサイルの直撃したビルが崩れ落ち、周りいた民間人を飲み込んでいく。
「くそッ！ＮＦの野郎！一般市民にまで攻撃をしやがって！」
上空から降り注ぐミサイルを撃ち落す我雲、だがミサイルにまぎれ何かが上空から降りてきた。
降りてきた１機の機体、我雲の集う目の前に着地すると、ＢＮ達が一斉に降りてきた機体に向けて銃口を向ける。
「ＮＦの機体だ！全機迎撃態勢に――」
命令を出す前に降りてきた機体は体勢を立て直すと、両手の平から先端に尖った突起の付く２本のワイヤーが出現すると、立ち並ぶ我雲の胸部を次々に貫通していく。
『光栄に思うことだなＢＮの諸君！南部最強のこの俺様と戦える最初で最後の戦だ！存分に楽しもうぜ！』
陽気で軽快な男は機体を自在に操り、ＢＮ本部の南部位置するＢＮの機体を次々に破壊していく。
南部だけではない、北部、東部、西部、全ての場所でＢＮの部隊が悪戦苦闘を強いられていた。
その様子を一人本部にある地下室でモニターを通じて見つめる青年がいた。
「紳さん、機体の最終調整はまだ済んでいません。恐らく現段階では本来の力を出す事は無理です、後数時間すれば僕の作成したデータが白義へ転送が完了されますが……」
『わかった、ここは俺達に任せてお前も早く本部から脱出しろ。ＢＮの戦力が分担されている今、ここを守りきる事は厳しい』

既に紳も分かっていた、ＮＦが全力でこの本部を潰しに来ている事を。
ＮＦ東西南北の最強がこの場に集っている、いくら紳でも限界がある。
「いえ、僕にはまだここでやるべき事が残っていますから」
ラースの言葉を無言で聞き終えると、通信が途切れ紳は格納庫に向かう。
通信の終えたラースはＰＣの前の椅子に座り、必要なプログラムとデータを打ち込み始めた。
一人、暗く広い研究所内で、延々と……。

――――『西部の鎮圧はほぼ完了しました、ギフツとリバインの降下をお願いします』
隊長機に乗っている一人の女性がそう言うと、ＢＮ本部から近い上空に待機している空中戦艦アルカンシェルから次々にギフツとリバインが降下されていく。
「ここは貴方達に任せて、私は本部に向かいます。陣形を崩さないようにお願いしますね」
『了解！』
女性はそう命令を下すと、１機ビルの間を飛行しながら本部の中心へと近づいていく。
「やっぱり数が少ない、ＢＮの兵士達はＥＲＲＯＲとの戦いに行ってるのね。つまりこれは・・・好機！」
そう思い急いで機体を走らせていると、レーダーに一つ敵機の反応が映る。
その箇所を見ようとレーダーに視線を向けた時、目の前に１機の機体が姿を現した。
「え……？」
気付いたのも束の間、白騎士の如くその機体は二本のＬＲＳを腰から抜き取ると、腕を振るい一瞬で胴体を斬り落とした。

――南部最強の男が異変に気付く、瞬く間に西部に降下したギフツ、リバインの反応が消えていくのがレーダーを見てわかった。
「なっ、西部が壊滅した？嘘だろ！西部にはあの女がいるし、増援部隊が降下したんじゃ……っ！？」
条件反射のように男が機体を上昇させた瞬間、自分の立っていた機体の場所に、もう1機の機体が現れる。
白銀色をした機体、風で靡く白いマント、ＮＦの兵士なら誰でもが知っているあの機体だ。
「白義！？となると相手は風霧かッ！面白れぇ！南部最強のこの俺が相手してやるよ！」
男はそう言うと機体の両手、両肩、そして背中から無数のワイヤーが放たれ、白義目掛けて一斉に飛びかかる。
白義は無数に飛びかかるワイヤーの間を糸も簡単に潜り抜けると、一気に敵機の懐に入りかかる。
だがその動きを読んでいたかのように男は笑みを見せると、あるスイッチを押した。
『―ＳＲＣ発動―』
白義の振るう二本のＬＲＳを見事に交わしきる機体、それと同時に機体を回転させワイヤーを白義に直撃させる。
そのワイヤーは自在に動き白義の腕や足に巻きつくと、身動きを取れなくしていく。
そして完全に動きを封じた白義を満足そうに見つめる男は、嬉しさを隠しきれず笑みを見せ、通信を白義と繋ぐ。
「決まったぁ！これでわかったか風霧！ＢＮは敗亡、ＮＦは勝利、そして神と共に新時代へ行くのさ！」
その男の台詞に紳は表情を変えず、小さく力の無い声で答えた。
「神？新時代？下らんな」
「何とでも言え。まぁ、この世界とＥＲＲＯＲは俺達ＮＦと神に任せてお前は――」

銃声と共に機体の背部を貫通する一発の弾丸、機体は力なくその場に崩れ落ちた。
「死っ――――ん？」
男の機体が爆発すると、白義の体に巻かれていたワイヤーが簡単に解けていく。
白義が体勢を立て直しているとその真横に１機の機体が現れる、赤いボロボロのスカーフを首に巻き、黒こげ茶色の機体が。
白義がその機体と通信を繋げると、モニターには煙草を吹かすダンの姿が映し出された。
「なぁ紳、お前は背後から敵を撃った俺を卑怯と呼ぶか？」
「……いや。英雄と呼ぶだろう」
「そりゃどうも」
二人の会話が終えた後、互いの機体が別々の場所に向けて走り出す。
既に本部にはＮＦの降下部隊が下り、徐々に町を占領しつつあった。
ＮＦの空中要塞も徐々に本部の上空へ移動していたからだ。
「本部は破壊するなよ、周りの兵器と機体を破壊し、歩兵部隊を基地内に突入させろ」
騎佐久の指示で的確に動くＮＦの兵士達、騎佐久は南部と西部の隊長が死んだ事など気にも留めていない。
それ所か評価していた、ＢＮの隊長機白義と、その機体を操る人間に……。
白義は街中を走行中に突然飛翔すると、ビルの屋上に立っている１機の向かって飛びかかる。
飛びかかられたその機体は勢い良く後方に下がると、背部に付けられていた４つのガトリング砲が一斉に飛ぶと、周りの建物に張り付き建物に固定される。
その様子を驚いた様子で見ていた紳だが、やがて４つの固定されたガトリング砲は一斉に白義に向けて青白いレーザー弾を放ちだす。
すぐさま身を避けようと建物に身を隠すが、弾丸は白義を捕らえたまま動き身を隠した建物を破壊していく。

「厄介だが――――」
迫り来る弾丸を避けながら一つのガトリング砲に近づいていく白義、二本のＬＲＳを巧みに扱いわずかに当りそうになる弾丸を弾いていく。
だが白義は近づいた途端にガトリング砲は建物から離れると、意思を持つかのように白義から離れていく。
それを追おうと白義を機体を走らせるが、残りのガトリング砲がそれを邪魔し、更にはビルの上から8銃身ガトリング砲を両腕両肩に付けた機体が銃口を白義に向けていた。
そして聞こえてくる男の声に、紳の眼つきが変わる。
「久しぶりだな紳、調子はどうだい？」
「やはり貴様か、瓜野騎佐久」
ガトリング砲が止まると、それに合わせて白義も動きを止め、ビルの屋上にいる機体に目を向ける。
青白い機体に４つのガトリング砲を光らせるその機体は白義に銃口を向けたまま、停止していた。
「時期にこの基地はＮＦのものになる、そうなれば君の望んでいたように世界が平和になるさ」
「簡単に平和等と言うな、お前達には無理だ」
「そうでもないんだよ、実はもう直に神は起動する、そしてこの世界からＥＲＲＯＲを取り除く。
そもそも人類だけの力でＥＲＲＯＲに太刀打ちするこそ不可能であり無意味なのさ」
「話しにならない、邪魔をするなら消えてもらう」
「おいおい、俺の台詞を言うなよ」
停止していた四つの固定砲台が一斉に起動し、白義に向けて弾丸を放ちだす。
屋上にいた機体も白義に向けると、一斉に弾丸を発射する。
一秒間に百発以上の弾丸が白義に飛ぶ、目まぐるしい速さでその攻撃を避けていくが、周辺の建物は次々に破壊され倒壊していく。

白義に加勢しようとＢＮ機が姿を現すが、騎佐久に気付かれると一瞬にして蜂の巣にされ次々に撃墜されていく。
「よくコレだけの攻撃を回避する事が出来るね、さすがだ……でも、いつまで避け続けられるかな？」
「直に終わる」
紳がそう呟くと、地上を走っていた白義が一瞬にして上空目掛けて飛び立つ。
「空に逃げるとは、お前も落ちたもんだな」
地上に固定されている４つのガトリング砲に合わせ、騎佐久の乗り込んでいる機体も白義に向けて銃口を向ける。
地上から雨のように白義に向けて弾丸が飛んでくるが、白義は自在に空を飛び上昇していく。
「それでも無理だ、上空にはアルカンシェルが待機している。どちらにも逃げ場等無い」
「そこまでわかっていてお前は気付かないのか……」
白義は上空で機体の向きを変えると、地面と正面を向くように動きを止める。
すると白義の両肩のハッチが開き、その中で夥しい量の電流と光が流れ、外に溢れ出す。
「なっ、まさか――――っ！？」
異変に気付いた騎佐久が機体を動かそうとしたが、既に遅かった。
両肩から放出された電磁波動砲は町ごと騎佐久の機体を飲み込み、その場にある全ての建物を消滅させる。
白義の眼の前広がるのは巨大なクレーターの後、その範囲と威力を見ても、紳の表情は変わらない。
「殺される前に殺す、それが戦場だ」
そう呟いた後、その地に下りた白義。まだ敵は残っている、空を見上げればそこにはＥＤＰで使用されていたあのアルカンシェルが上空にいるのだから。
既に本部にいた民間人は全員地下シェルターに避難が完了している、

だがアルカンシェルの主砲を使えば民間人もろとも本部を消滅させるのは簡単だった。
だがＮＦの目的はこの基地、用意に主砲は使っては来ないはず……。
色々な問題に紳が思考を巡らしていた時、目の前の地面が突然盛り上がると、一体の機体が現れ、両腕両肩のガトリング砲を白義に向け引き金を引く。
咄嗟の出来事に紳はすぐさま機体を回避行動に移すが、数発の弾丸が白義に当たり体勢が崩れる。
「ＬＲＣ……まさかＢＮも持っているとは驚いたよ。でも、既にそれは対策済みでね」
騎佐久がそう言うと、地面から四つのガトリング砲が現れ、その場に固定されていく。
だがその一つは火花を上げると、固定されたまま爆発を起こし機能停止となった。
「やはり同時に2発分のダメージは痛いか……だが、それではアルカンシェルを落とす事も、俺を倒す事も出来ない」
白義から攻撃を確認した瞬間、機体と四つのガトリング砲の周りにシールドが展開されＬＲＣを耐え切った。
騎佐久の機体は多少負傷している箇所はあるものの、まだ十分に戦える。
「試してみるか？俺が死ぬか、貴様が死ぬか」
一方白義の方は先ほどのＬＲＣの反動で機体の数箇所が異常をきたし、負傷箇所が幾つかある。
それでも紳に迷いは無い、二本のＬＲＳを構えると、弾丸の雨を降らす敵機の元へと向かった。

――本部は戦場と化す中、必死に中央にある基地へと向かうエリルがそこにいた。
手に持っていた鞄を捨て、髪を振り乱しながら走るエリル、息を切らせながらようやく基地へと辿り着く事が出来た。

だが既に基地も戦場と化していた、降下してきたＮＦの兵士達が基地内に侵入していたのだ。
それを見てエリルはすぐさま別の入り口に向かうと、その入り口はまだＮＦの兵士とＢＮの兵士が銃撃戦を繰り広げている最中だった。
急いでエリルはＢＮの兵士の元に向かうと、当然一人の兵士がエリルを止めにかかる。
「民間人がこんな所で何をしている！？早く中に避難するんだ！」
するとエリルは洋服のポケットの中に入っていた身分証明書を見せ付けると、兵士に詰め寄った。
「私も軍人よ！それで聞きたい事があるんだけど、ラース・グレイシムは今どこにいるか知ってる？！」
見せ付けられた身分証明書に兵士は驚いた表情を見せると、弾に当らないように体勢を低くしながら答える。
「し、失礼しました。ラース博士なら今地下格納庫に――」
「ありがとう！」
礼を言い終えると、屈みながら基地の中へ入っていくエリル。
ロビーには負傷した兵士や、銃を持って外へ走っていく兵士等、まだ多くの兵士が残っている。
エリルが急いで地下格納庫に向かおうとしたその時、後方で巨大な爆音と共に頑丈な扉が吹き飛ばされる。
それを見ていたエリルが急いで横の通路に身を隠すと、武装したＮＦの兵士達が一斉に基地内へ流れ込む。
応戦しようとしたＢＮの兵士達や、負傷した人々全員を次々に撃ち殺していくＮＦの兵士達、そしてグレネードを通路やロビーに投げ込んでいく。
投げられたグレネードは白いガスを噴出すると、そのガスを吸った人々が次々に体が痙攣すると、泡を吹きながら倒れていく。
ガスマスクを付けたＮＦの兵士達は互いに合図を取ると、素早く内部へと侵入していく。
それを見ていたエリルは急いでロビーから離れた。

後ろからは人の呻き声や銃の発砲音が聞こえてくる、それでも今はラースの元に急がなければならない理由がエリルにはあった。
近くにあるエレベーターですぐさま地下へ下りようとしたが、ふとボタンを押そうとした指が止まると、何を思ったのか突然その横にある階段を下りは始めた。

――薄暗い地下格納庫で一人、一台のパソコンに向かって紅茶を飲むラースがいた。
明かりはパソコンのモニターからしか無く、部屋全体は暗くて良く見えない。
パソコンのモニターには監視カメラが撮影した基地内部が映し出されている、そこには次々にＮＦの兵士が内部に侵入してきている映像が大半だった。
そしてエレベータには地下へと向かう為に数人のＮＦの兵士が乗り込んでいた。
「何故ＮＦは今のＢＮの本部は手薄だと知っていたのか……答えは一つ」
格納庫の扉が開き、ＮＦの兵士達が次々に入り込んでくる。
そして立っていたラースを見つけると、構えていた銃を下ろしていく。
「ご苦労様、準備は済んでるよ。さぁ、行こうか」
ラースはそう言うと格納庫の出口まで歩いていく、ＮＦの兵士達はラースの周りに近づくと、ラースを囲むようにして出口まで向かうが、その出口には一人の女性が立っていた。
兵士達はその場に止まり、女性に向けて一斉に銃を向けると、その女性を見たラースが声を上げた。
「撃つな！……銃を下ろせ」
ラースの指示に従い兵士達は銃口を下ろし、出口に立っていた女性はゆっくりとラースの元に近づいてくる。
「エリル、何故君がここに……」

「ラース……どうして、ＮＦといるの……？」
信じられない光景に驚きの表情が隠せないエリルに、ラースは無表情で口を開いた。
「ＢＮでやるべき事は済んだ、だから次はＮＦで僕のしたい研究を続ける事にしたんだよ」
「じゃあ、最初からＢＮを裏切るつもりで私達といたの……？」
「裏切る？それは違う、そもそも僕はＢＮの人間ではないし、ＮＦの人間でもない。
僕が何処に行こうと僕の勝手だよね。まぁ、お礼は言っておくよ、ありがとう。皆にも伝えておいてくれ」
そう言い終えてラースはまた歩き始めようとした時、俯いていたエリルは一言呟いた。
「嘘よ……」
エリルの言葉にまたラースの足が止まる、エリルは続けて口を開いた。
「ラースは、そんな人じゃない。私が一番知ってる、だって」
顔を上げたエリルの表情を見てラースの顔色が変わった。
「思いだしたんだよ、ラース」
目に涙を浮かべながらエリルは笑っていた、その表情を見てラースが一歩後ずさりしてしまう。
「そんなっ、まさか……」
その時、格納庫内で銃声が鳴り響き、ラースの周りに立っていた兵士達は応戦する間も無く頭を撃ち抜かれていく。
兵士達が全員死んだ後、暗闇の中からサングラスを掛けて煙草を吹かしながら歩いてくる一人の男が現れた。
「お前さん、覚悟は出来てるんだろうな」
その男は一丁のリボルバーを右手に、銜えていた煙草を左手で摘まみ放すと、大きく息を吐く。
「ダン・バイルド！どうしてここに――っ！？」
「内部にＮＦの兵士が侵入してきたんだ、黙って見過ごす訳にはい

かないだろ」
そう言うと右手に持つ銃をラースに向け、また煙草を吸い始める。
「無論、裏切り者もな」
「待ってッ！」
エリルは咄嗟に声を上げると、銃口を向けられたラースの前に出て両手を広げた。
「お願い、ラースを撃たないで！」
「何故だ？」
ダンの鋭い質問にエリルは一瞬たじろぐものの、ラースを庇う様に真っ直ぐ体を向けたまま動かない。
「ラースは――仲間だから！」
エリルの言葉を聞いてラースの表情が揺らぎ、ダンはエリルの答えを聞いても質問が続いた。
「じゃあ聞くが、この基地で死んだ兵士達は仲間じゃないのか？」
「仲間です！」
「だろ、その男が内部情報をＮＦに漏らしたせいで大勢の仲間が死んだ。責任は誰にある」
「そ、それは……」
「エリル、もういいよ」
両手を広げるエリルの肩に、ラースはそっと手を置こうとした時、エリルは後ろに振り向くと肩に置こうとした手を振り払った。
「私は良くないよ！まだラースに聞きたい事を聞けてないのに！」
そしてエリルはまた後ろに振り向くと、ダンに向かって涙ながらに叫んだ。
「お願い殺さないで！ラースのした事は許される事じゃないのはわかってる、でも……でも！」
その次の言葉を言おうエリルが口を開こうとした時、格納庫にあるもう一つの扉が開き、外から数人のＮＦの兵士が銃を持って現れる。
エリルがその兵士に気付いた時、既に兵士達に銃口を向けられ、引き金が引かれていた。

渇いた銃声が格納庫内に鳴り響き、その音はすぐに止まった。
銃を構えていたダンがすかさずＮＦの兵士に銃を向け引き金を引き撃ち殺したまでは良かった。
「ラース……？」
涙を流し震えながら男の名を呼ぶエリル、そのか弱い彼女の体を抱きしめたまま男は止まっていた。
抱きしめていた腕の力も弱まり、エリルはそっとラースから離れると、悲しげな目をしたままラースはエリルを見つめていた。
そしてそのままエリルの目の前で倒れる、エリルを庇い背中に銃弾を受け、その傷口から血が滲み出始めた。
「ねえ起きてよ！目を開けてよ……！」
エリルはその場に座り込むと、俯いたまま倒れるラースの肩を揺らし始める。
名前を呼んでも返事が無い、その様子を見ていたダンは悟ったのだろうか、ラースとエリルの元には向かわずＮＦの兵士が出てきた通路へと向かい、格納庫にはエリルとラースの二人だけとなった。
全く動かないラースにエリルが諦めかけたその時、ふとラースがその場に手を着き体を起こすと、簡単にその場に立ち上がった。
「っ……やれやれ。行ったか」
「ラース！？えっ、傷は……」
「全部急所から外れてるから、まだ死なないぃ――」
足元がふらつき倒れそうになるラースを咄嗟に支えるエリル、ラースはエリルに助けてもらいながら先ほどまで自分が座っていたパソコンが置かれている机の元へ向かう。
だが足も撃たれていたラースは足に力が入らずその場に止まると、力無く倒れようとした。
するとエリルは倒れそうになったラースを後ろから支えると、ゆっくりと地面に寝かせる。
ラースはエリルのもたれ掛かりながら横になり、エリルは壁にもたれ掛かりながらラースを優しく後ろから抱きしめる。

ラースの背中からは血が止まる事無く流れ、エリルの服をも赤く染めていく
目を開ければそこにいる、涙を流しながら自分を見つめてくれるエリルが。
「エリル、僕は君に謝らなくちゃならない……」
掠れた声でそう言うと、ラースは言葉を続けた。
「僕は……君を……」
それからラースは語り始めた、残り短い命を使い、今まで一人溜め込んでいた全ての真実と、現実を。

第７１話　真実、開花（前書き）

明けましておめでとうございます、皆さんが今年も健康で良い１年を過ごせるよう願っています。
今年もＤｅｌｔａをよろしくお願いします。

第71話　真実、開花

――数年前、BN本部のとある町で青年は暮らしていた。
と言っても、本部に派遣されてきてまだ1週間もたっておらず、基地内で知っている場所と言えば研究所の位置だけだった。
その研究所ではいつも機械の前で複雑なプログラムを組み、またある時は鉱石や化学品の研究、そして機体のデータ解析など、幅広い分野で青年は活躍していた。

――研究所の扉の前に一人の女性が立っていると、扉が開き中から一人の青年が現れる。
女性は驚いた様子で青年を見ていたが、手に持っている書類を青年の前に出した。
「これ、ラース博士に渡しておいてほしいの。頼めるかしら」
青年は出された書類を手に取ると、そそくさと研究所内に戻り、一言呟いた。
「僕がラースです」
それと同時に研究所の扉が自動的に閉まり、鍵が掛かる。
「はぁ、今日で3人目。つくづく嫌になる」
そう言葉を漏らしながら椅子に座り、青年は手渡された書類に目を通していく。
機体の設計図と、その動力源となる鉱石についてだった。
その書類に一通り目を通した後、手に持っていた書類を机の上に投げると、掛けている眼鏡を机に置き、椅子から立ち上がるとすぐ横に置いてあるベットの上に倒れこんだ。
「疲れた……」
一言呟いた後、目を瞑るとそのままベットの上で眠りにつく青年、それから何時間たっただろうか、ベットのすぐ横の台に置かれているデジタル式の時計がアラームを鳴らし始めた。

すると青年は目を擦りながら時計に触りアラームを止めると、すぐさま立ち上がりポケットから目薬を取り出し上を向いて自分の眼に数滴垂らしていく。
それで何か活力でも戻ったのだろうか、また机の前に座ると眼鏡を掛け、目を通したはずの書類をもう一度読み直す。
そしてまた机の上に投げると、椅子から立ち上がり部屋を出て行ってしまう。
見るかに不機嫌そうに基地の通路を歩いていく青年、そしてある部屋の前に辿り着くと、カードキーを差込み部屋の扉を開け、中に入っていく。
１０分後、そこには私服に着替え終わった青年がいた。そして一目散に基地の出口まで行くと、外に出ようとする。
しかし、そこで青年の足が止まった。外を見れば雨雲が広がり、雨を降らしていたのだ。
それを見た青年は面倒そうな顔をしたものの、
既に私服に着替えていた為にもう一度部屋に戻ると黒い傘を取り出し、基地を後にする。
軽い仮眠をとったにも関わらず、青年の疲れはとれず、たまには外に出て息抜きをしようとしたらこの有様。仕方が無いので一人雨の街中を歩くしかなかった。
だがそれも青年にとってただの疲れとしかならなかった、興味を引かれる物も無ければ、どこかの店に入ろうともせず、ひたすら時間を無駄にするように歩き続ける。
そして気付いてみれば、町から少し離れた場所に青年は来ていた。
自分は何をしているのだろう、時間を無駄にした。
そう残念そうに思いながら自分のいた基地に戻ろうとした時、ふと一見の店が見える。
屋根で雨に当る事無く綺麗な色をした花々が飾られている店、
青年はその花々に引かれるようにその店に行くと、店の前でぴたりと足を止めた。

「こんにちは、お花を買いに来たのですか？」
突然の女性の声に驚いたものの、手に持っている傘を上げていくと、そこには紫色の長髪を靡かせる可愛らしい少女が立っていた。
「いや、少し見ていただけさ……」
青年は少女の顔を見た途端そう言ってまた並べられている花に視線を落とす。
「そうですか、もし何か欲しいお花があればいつでも呼んで下さいね」
女性の声にまたも青年が上を向くと、少女は笑顔を見せた後、後ろに振り向き店の奥に向かおうとする。
紫色の長髪が華麗に靡くのを見て、何故か青年の口が開いた。
「ん……ああ、それじゃあ……その花を一つ」
青年は指差した花を見てはいなかった、目の前の少女の後ろ姿をただじっと眺めていた。
だが少女が青年の声を聞き後ろに振り向こうとした時、青年はすぐさま視線を下ろす。
「はい、この花ですね」
青年はお金を払い、花を受け取ると、何事も無かったかのように基地へと戻り服を着替えた後研究所に戻る。
そして自分の部屋から持ってきた花瓶を机の上に置くと、さっき買ってきたばかりの花をすぐに飾りだした。とは言っても、たった花一本を花瓶に挿しただけだが。それでも青年は満足したように頷くと、また椅子に座り研究と仕事を続けだした。

――それから数日後、青年はまた息抜きにと基地の外に出るが、またも雨だった。
だが今日の青年は違う、しっかり傘も用意し出かける気があった。
そして傘を差し町に出ると、真っ直ぐにあの花屋へと向かう。
店についた青年は傘でやや顔を隠し、また花屋の前で花を見ていると、店の奥からあの少女の声が聞こえてきた。

「こんにちは、あっ。この前お花を買いに来てくださった方ですね。今日はどんなお花をお求めですか？」
「っあ、え……な、なんでわかったんだい？」
傘で顔を隠しているはずの青年、驚いた様子で傘を上げると少女は笑顔で青年の顔を確かめた。
「やっぱり。私一度お店に来てくれた人は必ず憶えてるんです」
そう言って少女は店に飾られている一つの花を手に取ると、それを青年に見せた。
「これですよね、前に買ってくださったお花。今日もこのお花にしますか？」
「は、はい。それで、お願いします」
少女の笑顔に何故か敬語になる青年、恥かしいのか傘で顔を隠しながら洋服の内ポケットに入っている財布を取ろうとする。
だが、そこにあるはずの財布が無い。もう片方のポケットに手を入れてみるが、そこにもやはり無い。
見る見る顔が青ざめていく青年、この状況で財布が無い等と言えるはずが無かった。
既に女性は花を切り、たった一本の花を綺麗に仕上げ包装し始めていた。
まだ花を受け取っていない、逃げるなら今の内……そう思い一歩後ずさりしたが、少女は作業が終わると満面の笑みで青年に花を渡しに来る。
受け取れない……受け取ればお金を払わなければならない、だがそのお金が無い、というか財布が無い。
「あ、あの。実は、その、すいません。財布を忘れて……」
言ってしまった、少女はきょとんとした表情で青年を見ている。
今すぐこの場から逃げ出したい、言う事は言ったし、青年は急いで店から出ようとした時、少女は手持っていた花を青年に手渡そうとした。
「それじゃあ、これ、私からのプレゼントです」

「えっ？」
青年が驚いた様子で固まっていると、少女はその固まったラースの手を握り、包装した花を握らせる。
「いや、でも――」
困った様子の青年だったが、少女は笑顔のままでいた。
「ですからお金はいりません、またお花を見に来てくれれば十分です」
その少女の笑顔に圧倒され……るのは変だが、結局青年はお金を払わずに花を貰ってきてしまった。
「プレゼント、か」
自分の研究室に戻り、机の上には一つの花瓶に同じ花が二つ、だが青年はそれを見ても頷けなかった。

――後日、青年はまたあの花屋へと向かった、勿論財布を所持して。
今日は昨日と違って晴天が広がり、眩しい太陽の光が町全体を照らしている。
雨の日と違って風が心地よく、息抜きに最適な環境だ。
そして町から少し離れた花屋に到着すると、青年は店前に並べられている花々を見て回ろうとした。
だがその時、ふと何かが目に映る。よく見てみると、あの少女が店の奥で倒れていたのだ。
青年はその光景を見た途端、少女に近づき体を起こしにかかる。意識が有るか確認する為呼びかけて見るものの、息が荒く、目を瞑ったまま返事を返さない。
青年は少女の体を抱き上げると、店の奥に向かい扉を開けた。
そこにはリビングが広がっており、ソファが置いてあったのですぐさまそのソファに少女を寝かせる。
その後自分の内ポケットから携帯電話を取り出し救急車を呼ぼうとした時、ソファの上で寝ていた少女の手が青年の服を掴んだ。

青年が少女の方を見ると、微かに目を開き苦しい表情をしている。
「今君は極めて危険な状態だ、今すぐ救急車を呼ぶから君は安静に――」
「止めて、下さい……」
少女の口から出た言葉に、青年は最初何を言っているのかわからなかった。
「薬が、そこに……それをっ……」
苦しそうな声で少女がそう言うと、服を掴んでいた手を放し、机の方に向けて指を指した。
青年は急いで机に向かい引き出しを開けるが、そこに広がっていた光景に驚いた。
引き出しには幾つもの薬の錠剤が散らばっており、その量は引き出しの底が見えない程だ。
「白と赤……の……」
少女の言葉に白色と赤色のカプセルがセットになっているものを手に取り、台所へ向かうとコップに水を入れそれを少女の所に持っていく。
青年が持ってきた薬を少女に見せると、少女は小さく頷いた。
そして二つの錠剤を少女の口に入れると、水の入ったコップをゆっくりと少女の唇に当てた。
少しだが喉が動いている、そして薬を飲み終えた女性はまた目を瞑るとゆっくりと眠りについた。
荒れていた呼吸も大人しくなり、小さな寝息を立てながら眠りに付く少女。
青年は少女の動かさずその場に寝かせる事にした、そして後ろに振り返ると、あの薬が散らばっていた机へと向かい、引き出しを開けた。

――それから何時間たっただろう、ソファで寝ている少女がゆっくりと目を開けた。

目だけを動かし部屋の周りを見渡してみるが、そこに人影は見当たらない。
「良かった、気が付いたみたいだね」
聞き覚えのある声が後ろから聞こえてくる、声の方に頭を傾けると、そこには安心した表情を浮かべた青年が立っていた。
それを見た少女も安心した表情を浮かべると、ゆっくり体を起こしソファから立ち上がると、青年に頭を下げた。
「ありがとうございます、危ない所を助けてもらって……」
「いや、当然の事をしただけさ。それにしても驚いたよ、何故君はあのような場所で倒れていたんだい？」
青年のさりげない質問に少女の表情が暗くなると、小さく口を開いた。
「その、私……体が弱くて」
「弱いだけじゃないよね？」
「えっ――？」
「僕で良ければ話してほしい、君の力になりたい」
嘘ではない、本心で青年はそう言った。その真剣な眼つきに少女は視線を落とし小さな声で呟いた。
「無理……なんです、太陽が」
「そう、光線過敏症なんだね」
青年がそう言うと少女は首を横に振る。
「いえ、それとは違うんです……」
「ん？日光が無理なんじゃないのかい？」
「私、太陽が怖いんです……」
思いもよらぬ答えに困惑する青年、その青年の表情を見て少女は両手で顔を覆った。
「変ですよね、おかしいですよね……私みたいな人」
涙を隠そうと手で覆っていた少女、だがその手を優しく握られると、その腕をゆっくりと下ろしていく。
そこには先ほどの青年が優しく微笑みかけてくれていた。

「大丈夫、僕が必ず君を助けてあげる。こう見えても僕は医者だからね」
そう言って青年は胸ポケットから自分の身分証明書を出すと、それを少女に手渡した。
「軍の方だったんですね、ありがとございます。ラースさん。自己紹介が遅れましたね、私はエリル・ミスレイアと言います」
「僕の名は呼び捨てでいいよ、エリルさん。それじゃ診察を始めるね」
それから青年は少女から詳しい症状と原因を聞いていく。
最初少女は辛そうな表情をしていたが、真剣に耳を傾けて話しを聞いてくれる青年を見て徐々に心を開いてた。
「なるほど、つまり太陽のような強烈な光を見たり、浴びたりすると気分が悪くなったり、発作を起こしたり、体が麻痺したり……色々な症状が起きるんだね」
「はい、何処の病院に行っても原因がわからなくて。薬も発作止めの薬や精神安定剤しかもらえなくて……」
「なるほど、両親はその事を知ってるの？」
「両親は……もういません、私一人で、この店を守ってるので……」
「そう、か……ごめん。あ、後は君の血を調べてみる必要があるんだけど、いいかな？」
少女は小さく頷き、それを見た青年は内ポケットから手の平サイズの四角い物体を取り出す。
その物体を少女の腕に当てると、またそれを内ポケットにしまった。
「終わったよ、今日帰って調べてみるね。後もし何かあったら僕に電話して、すぐ駆けつけるから」
今度は内ポケットからメモ帳とボールペンを取り出し、そこに自分の電話番号を書き始め、それを少女に手渡す。
「あの、ラース君はどうして私みたいな見ず知らずの人に、こんなに親切にしてくれるの？」
「前にお花をプレゼントしてくれたお礼だよ、それじゃ」

青年はそう言い残し部屋を出ると、店から出て行く。
血液のサンプルも手に入り、基地に戻った後早速血液検査をしてみる事にした。
恐らく体の方は軽い栄養失調だと思っていた青年は、その出てきた検査結果を見て愕然とした。
「彼女の抱く太陽と光の恐怖心は、もしかして……」
ラースはすぐさま椅子に座ると、ＰＣに向かいキーボードを叩き高速で文字を打ち込み何かの情報を調べにかかる。
何十にも掛けられたプロテクトを外し、暗証番号をも解読していく青年、それを繰り返していく内に、ようやく自分の探し求めていたページに辿り着いた。
「やはり、ＮＦで小型核兵器の実験を今から１０年前極秘で行なわれていたか。極秘の理由は――――っ！？」
新しく開発された核兵器の実験、それはＮＦやＢＮに属さない孤立している町への核兵器投下。
それは実際に人間のいる町に核兵器を落とす事でその威力と効果を調べる為の実験だった。
「何だこれは……冗談じゃない。本気でこんな実験をしていたというのか……！？」
だがこれで全てのつじつまが合う、彼女が白血病の理由も。
これは青年の推測だが、恐らく小さい頃彼女のいた町がこの実験の対象地区となり、核兵器が投下された。
奇跡的に一命を取り留めた少女だったが、その核兵器が爆発する瞬間見た彼女は高熱と眩しい光に恐怖心を植えつけられ、今でも苦しんでいる。
そして放射能により今彼女の体は……。
「落ち着け！今の医学では白血病なんて簡単に治せる……問題は彼女の心だ、例え体が治ったとしても、心が治らなければ意味が無い……」
少女の太陽への怖がり方は尋常では無い、晴れの日は部屋のカーテ

ンを締め切り、いつも真っ暗な部屋に閉じ篭っていた。そして雨の日になると店を開け花屋を営んでいる。

「あんな生活を続けさす訳にはいかない、彼女が日の下で花を売れるようにしないと――――」

しかしどうすればいい、説得して解決できる問題ではないし、かと言って薬を使えば明らかに彼女の体に負担を与えてしまう。

既に少女の体には限界が来ていた、長年に渡る過度な薬の服用、そして太陽の下にいられない精神。

それでも、少女は笑顔を振る舞い花を育てている。

そんな彼女の姿を見ていたラースに、迷いは無い。

――――「注射一本で直るって、本当ですか？」

「ああ、大丈夫さ。軍が極秘で作っていた特効薬でね、効果は絶大だよ」

「でも、本当に良いんですか？私、お金とかそんなにもってないので……」

花屋のリビングにあるソファに座る少女はそう言って心配そうな表情を浮かべるが、青年は澄ました表情で紅茶を飲んでいた。

「大丈夫、その点は心配いらないよ。元々僕が調合と研究を繰り返して開発した薬だからね。

１週間後には届くと思うから、それまで町の病院に入院するのはどうだい？」

「いえ、お花の世話をしないといけないので……すみません、色々とお世話してくれてるのに私何もして上げられなくて……」

「うーん……あ、それなら、この前と同じ花を一本頂いても――――」

青年が最後まで言葉を言い終わる前に少女が元気良くリビングから出ていくと、その花が飾られている場所に向かい同じ花を沢山抜き取ると素早く丁寧に包装紙で綺麗に包み、笑顔で青年の所へ戻ってきた。

「どうぞ！」

その明るい少女の笑顔を見て、青年の顔も次第に笑顔へと変わる。
花を受け取った青年はその後自分の研究所に戻ると、あの少女の笑顔を脳裏に浮かべ、自信に満ち溢れた表情で机に花を飾っていた。

――少女を治療する画期的な方法が一つ存在する、病気を治すだけでなく患者にある邪魔な記憶を取り除く方法が。
前に青年がＮＦで働いていた頃、ある女性と人体と精神に関する研究を続けていた。
その時開発された装置は世間には公表されず、今も試作段階とされひっそりと地下研究所に保管されてある。
だが彼女を連れてＮＦに行く訳にもいかなかった、そもそもその研究は極秘で行なわれており、現在ＢＮにいる青年達が行ける場所ですらない。
「それなら作ればいい」
そう、既に青年のいる研究所で開発が進められていた。
ＮＦを去る前にこっそりとっておいたデータを、まさかこのような形で使うとは青年も思ってもいなかったが。
「よし、装置の準備は出来たし、必要な薬品も揃った。後はデータ入力だけか」
青年の手際は驚く程早く、たった数日でカプセルと似た形状をした２メートル程の大きい装置を完成させたのだ。
少女の方は未だ体調の方は良く無いが、青年の指示のもと安静にして暮らしている。
「注射一本で直る……これも彼女の為の嘘。これが完成すれば全て済む事じゃないか」
自分に言い聞かせるように青年は呟くと、残る作業を済ませようとデータ入力を行なおうとした時、全ての灯りが消え、一瞬にして部屋が暗闇と化す。
そして数秒経った後、非常用の電灯に灯りがついていく。
不審に思った青年は外に出ようと扉の前に立つが、開くはずの扉が

開かない。
内ポケットからカードキーを取り出し、それを扉の横にある装置に入れるが、扉は鍵が掛かったまま一向に開こうとしない。
「全く、ここは本部だよね。整備不良や故障でこんな事態になってるんじゃあ……」
『非常事態発生！ＮＦの艦隊が本部に接近中！全員戦闘準備に掛かれ！繰り返す――――』
天井に付けられてあるスピーカーから聞こえてくる男の声、だが扉は未だ開かない。
「停電、それにこのタイミングでＮＦの襲撃。完全に本部が手薄だという事を知っている。全く、何をやっているんだＢＮは……！」
青年はぶつくさと文句を言いながら椅子に座ると、机の上に置かれてあるパソコンの電源ボタンを押した。
するとパソコンは何事も無かったかのように電源がつくと、いつもの画面が表示される。
「内部情報をハッキングされた？いや、それはないか。この本部のセキュリティシステムは僕が担当している、入られるはずが無い。例え侵入出来たとしても勝手にアクセスすれば僕のパソコンに……え？」
青年が画面に顔を近づけていく。青年の言う通り、たしかに一人の人間が無許可でアクセスしていた。
「僕……？」
信じられない様子で画面を見つめる青年、アクセスした日付を見ると、１週間前、ＮＦの本部にハッキングした時の時間が表示されていた。
それを見て青年の顔色が悪くなっていく、信じられない光景を見つめているような顔だ。
「そんなっ、まさか。僕があの時ＮＦと繋いだ時、ＮＦからもＢＮの本部に繋いでいたというのか？しかも僕のパソコンを経由して……」

それで全てを理解してしまった、今までの現状を。
あの日、ＮＦの本部にあるデータを盗む為に繋いだ時、それを利用してＮＦは逆にＢＮ本部の情報を密かに盗み出していた。
そしてＮＦは知った、一週間後ＢＮ本部の戦力は分断され、一番力が弱まる事を。
言葉が出ない。その時既に部屋が大きく振動し始めていた、ＮＦがＢＮ本部に向けて集中砲火を仕掛けていたのだ。
人々は安全な場所に避難しよと逃げ惑うが、ＮＦ艦隊からの容赦無い集中砲火は、基地の近くにいる民間人や、民間施設までもを破壊していく。
ＮＦにとってＢＮの人間の命など眼中に無い、基地からＢＮの部隊が出撃するが、ＮＦ艦隊から出撃するギフツ、そしてリバインの数はＢＮ機の倍近く出撃している。
信じられず、放心状態の青年に、一本の電話が掛かってくる。
携帯電話に驚いた青年だったが、急いで内ポケットから電話を取り出すと、恐怖に震える少女の声が聞こえてきた。
「ラース君、助けて……すぐ近くで爆発が起きたの、周りから悲鳴も聞こえてきて、私、怖くて……」
そんな女性のか細い声とは裏腹に、青年は大声を出して少女に指示出した。
「エリルさん！急いで安全な場所に避難するんだッ！早く！！」
「無理だよ……外は晴れてて、出られ、ない……」
電話越しから聞こえてくる少女のむせび泣く声に、青年の頭の中は真っ白になる。
電話から聞こえてくる少女の助けを求める声に、青年は何もしてあげれない。
「怖いの……助けて……ラース君、私一人じゃ――――」
少女が次の言葉を言おうとした時、建物が崩れ落ちるような轟音と共に少女の悲鳴が青年の耳に突き刺さった。
電話は切れた、だが少女の悲鳴が青年の脳裏に響き渡る。

恐怖に震え、自分を求めたのに対して青年は……何もしてあげる事が出来なかった。

「エリルさん？」

名を呼んだ所で何も変わらない、震えて力の入らない手からは携帯電話が滑り落ちる。

それと同時に基地内で閉まっていた扉が一斉に開き始めた。

閉じ込められていた兵士達は皆部屋から出ていき、自分の持ち場へと走っていく。

開いた扉、それが視界に入った青年は、望みを胸に部屋を出た。

通路を掛ける兵士を避けながら必死に走り基地を出ると、既に目の前には戦場が広がっていた。

だがここで足を止める訳にはいかない、青年は少女のいたあの花屋へと向かう為その場から走り去った。

見えてくるのは崩れた建物に人々の死体、子供が頭から血を流して死に、その横には目を開けたままの大人の死体が転がっている。

家からは火が上がるとたちまち周りの建物に燃え移り、そこにある物全てを燃やしていく。

この原因を作ったのは他でもない自分という事に青年の足がすくみ、道路の上を勢い良くこけた。

眼鏡が壊れ、膝を瓦礫で強打したにも関わらず、青年は痛みを堪えながら立ち上がり、また走り出す。

そして少女のいる花屋へと近づいてきた時、その光景が目に飛び込むと、青年は自分の眼を疑った。

全身の震えが止まらない……もはやそこに花屋など無かった、あるのは瓦礫の塊と灰へと変わっていく花だけだった。

少女が丹精込めて育てた花々が簡単に燃えていく、青年は急いで瓦礫の元に駆けつけると、急いで小さな瓦礫をどけていく。

煙を吸って咽ながらも、青年はその場から逃げず、ひたすら瓦礫をどけていた。

そして一つの瓦礫をとった所に、電話を握り締めた少女の手が見え

た。
それを見て更に瓦礫を外していくと、ついに少女の肩まで見えるようになる。
次の瓦礫を取ると、そこには目を瞑った少女の顔が見えた。
顔には傷一つ無く、少し煤で汚れているものの、あの綺麗な顔がしっかり残っている。青年の頭に少しばかり希望が出てきた。
もしかすれば死んでいないかもしれない、気を失っているだけかもしれない、青年はそう思い更に少女の体に覆いかぶさるように乗っている瓦礫を押しのけると、その抱いた希望は一瞬にして闇に消え、真っ白になった。
綺麗な女性の寝顔、左手は携帯を握り締め、鮮やかな髪が広がっている。
そして右手には一本の花が握られている、青年と少女のお気に入りの花を。
だが、そんな彼女には、下半身が無かった。
女性の腹部から下が巨大な瓦礫で潰れていた、瓦礫の隙間からは押しつぶされた内臓や血、肉がはみ出ている。
「あ…ぁ……ああ――――」
涙が溢れ出る、口を開けたまま彼女の全身を見ていく。
こんなにも綺麗な顔をしているのに、下半身は見るも無残に潰されている。
助ける事が出来なかった、電話で青年に助けを求め、一人花を握り締めながら死んでいった少女。
「うぁあああああぁあぁあああああああッ――――――!!」
悔しさと虚しさ。悲鳴を上げる青年、頭の中が狂っていく、侵食が進む、少女の笑顔を消したのは、誰でもない、自分。
全ては、自分。

――――青年は身に纏っている上着を脱ぐと、それで少女を包む。
そしてゆっくりと少女の死体を持ち上げると、ゆっくりと自分のい

た基地へと戻っていった。
少女の体を包む上着からは血が滴り落ちていく、基地内に入ると、誰もがそれを疑問に思った。
しかし、誰も青年の声を掛けようとはしない、誰が見ても今の彼の眼が正気ではなかったからだ。
自分の研究所に戻ると、すぐさま扉に鍵を掛け、手術用のベットに少女を乗せた。
だがベットはすぐに血で赤く染まり、血が滴り落ちていく。
そんな事気にも留めない青年は隣の部屋に移動するとあの装置の元へ向かった。
血塗れの手であの装置に触り、無言でデータを入力していく。
するとそのカプセル状の巨大な装置の中に薄い赤色をした液体が充満していく。
それを確かめた後、青年は少女の服を脱がせ、裸になった少女の上半身を抱え、装置の上へと移動する。
無言のまま青年は少女を液体の中に入れていく、少女の体はゆっくりと沈んでいくが、一定の位置に止まると、その位置を維持するように止まった。
それから始まった、長い年月を掛けた手術・治療が。
最初押されていたＢＮだったが、援軍の加勢により何とかＮＦを押し戻す事に成功した。
だがＢＮはわからなかった、何故ＮＦがＢＮの内部情報を知っていたのか。
その疑いの眼は青年にも向けられたが、青年はあっさり白となる。
なぜなら、既に証拠は全て消した後だったから……。

――それから半年が経った頃、上半身だけの少女には無いはずのお腹が存在していた。
だがまだ足は無く、その状態のまま溶液の中で浮かび続ける少女。
その２ヵ月後、溶液の満たされた装置の中には全身が揃っている少

女の姿があった。
口元にはマスクが付けられ、体の至る所に管を繋げている少女。青年は他人に怪しまれないよう任された仕事を全てこなしながら少女の治療に全力を注いでいた。
血は全て入れ替わり、内臓も復元されている、もう白血病の心配も無い。
心配蘇生が開始される、それと同時にある手術へと取り掛かる。
少女から邪魔な記憶を消し去る事、幼い頃の核兵器の恐怖と、死に至った時の記憶を。
そして――全ての実験、手術、治療は成功した。
1年以上を掛けて、青年は死んだはずの少女を蘇らせたのだ。
長くない、青年にとってあっという間の時間。少女から管が離れ、溶液が装置から抜けていく。
装置の扉が開くと、青年はゆっくりと少女に口に付いてあるマスクを外した。
少女は目を瞑っているが小さく息をし、ゆっくりと目蓋を開けていく。
久しぶりの光に目の前の光景が霞んで見えるが、徐々に目が慣れていき、青年の顔がはっきりと見てきた。
「エリルさん、僕だよ。ラースだよ……憶えてる？」
青年の言葉に少女は小さく首を傾けたまま、じっと青年を見つめ続ける。
そして見つめられる青年は緊張の色を隠せないままじっと少女を見つめ続けた。
「あなた、だれ……？」
少女の呟いた言葉に、青年は僅かな笑みを浮かべながら、小さく頷くと、優しくエリルを抱きしめた。
「これで良い、これで――」
――エリル・ミスレイア、本部にある軍養成学校へ転校生として

入学し、その後セーシュ・ハリルドが隊長を務める部隊へ所属。
たぐいない操縦の腕で好戦績を上げ、専用機無花果の操縦者に任命された。
最初ラースは記憶を弄りエリルを平和な生活に戻そうと思った、だが、結局は弄らなかった。
彼女の選んだ道を、もう消したくなかったから――。

――ラースから聞かされた真実、エリルはその話をただじっと聞いていた。
「僕は、君を…殺したんだ……結果的に、全て…僕の……ごめん、ごめん……ごめん……」
怖くて真実が伝えられなかった、エリルを見るたびに胸の奥が痛んでいた。
でも、ようやく打ち明ける事が出来た思い、ラースの目からは涙が溢れ、ひたすらエリルに向かって謝り続ける。
それを見てエリルも涙を流すと、そっとラースを抱きしめる。
「エリル……？怒って、ないの？僕のこと、恨んでないの……？」
戸惑うラースにエリルは首を大きく横に振り、涙がラースの顔に零れ落ちた。
「怒ってない、恨んでない……感謝してる。ありがとうラース、ありがとう――」
安心したようにラースの顔は少しずつ笑顔へと変わっていく、そして震える指でエリルの顔に触れた。
その手をエリルが握り締めると、ラースと同じように涙で濡れた明るい笑顔を見せた。
「エリル、君はこれからも。戦うの……？」
「うん、この世界の為に。ラースが与えてくれたこの命で、私はこれからも平和の為に戦う」
「へいわ……そう、か。なら、エリル……ぼくからの、プレゼント。受け取って……」

ラースは最後の力を振り絞りかろうじてその場に立ち上がると、机の上にあるキーボードにある言葉を打ち込んだ。
轟音と振動が同時に伝わってくると、格納庫内の床が開き1機の機体が姿を現した。
「ラース、これって――――」
現れた機体に見惚れていたエリルの肩をラースはそっと叩くと、機体の横にある部屋に指を指した。
「服も、用意してある……エリル行くんだ、そして見せてほしい……君が、咲く所を」
「でも、それじゃラースが！」
相変わらずラースは笑みを浮かべていた。最後の、最後まで。
その笑みを見てエリルは俯き涙を零すと、ラースに背を向けた。
崩れ落ちるラース、力無くその場にあった椅子に座り込むと、じっとモニターを見つめていた。

――――新しいパイロットスーツに着替え終わったエリルは用意されていた機体へと乗り込む。
そして機体の電源を入れると、真っ暗だった操縦席が灯りで照らされ明るくなり始めた。
それと同時に格納庫の天井にあった大きな扉が次々に開き、地上への滑走路が現れると、その機体は一直線に地上へと飛び発った。
そしてラースの見つめているモニターには、戦場が映し出されている、人が人を殺していく光景。ＮＦとＢＮの兵士達が命を掛けて戦っている。それを見てラースは笑った。
「戦争なんて……死ねばいいのに……」
そう呟いた瞬間、モニターには地下から1機の機体が出てきたのが見えた。
眩しい太陽の光に照らされ、紫色の鮮やかな装甲がその目に焼きつく。
それは思わず見とれてしまう程の美しさだった、背中からは紫色に

光る輝く羽を広げ、機体の周りにはその羽から光り輝く花弁が舞っていた。
「エリ、ル。綺麗、な…紫陽花、だ…よ……」
最後に見れた、少女がプレゼントを受け取ってくれた所を、そしてその花を咲かせる所を。
ラースはゆっくりと目蓋を閉じると満足そうに頷き、安心して眠るように息を引き取った。

第７２話　思惑、縺れ

――突然現れた謎の機体、基地周辺にいるＮＦとＢＮの兵士がそれに気づくと一時両方の攻撃が止まった。
ＢＮの兵士すら見た事の無い機体に、困惑した表情を隠せないが、ＮＦにとってはどっちにしろ敵に変わり無い。
地上にいたギフツが銃口をその機体に向け、一斉に引き金を引くが、撃たれた機体には一発の弾も命中しない。全ての弾丸が機体から逸れていく。
不思議に思いギフツがもう一度攻撃を仕掛けようとした時、ふと異変に気付いた。
紫色に光る花びらが機体の周りに浮遊している、するとレーダーが乱れ、次々にその場にいた機体が通信不能となる。
攻撃をしようとしても、照準がターゲットをロックオンする事すら出来なくなっていた。
その場を離れようと兵士が操縦桿を動かすが機体は動こうとしない、それ所が操縦席の灯りが全て消えると、機体はゆっくりと機能停止になる。
１機だけではない、紫色の機体の周りにいる機体は次々に機能停止を起こし、動かなくなっていた。
ＮＦもＢＮも関係無い、基地の中心からその範囲は広まり機体の動きを止めていた。
するとエリルの機体に通信が繋がれ、モニターに紳の姿が映し出される。
「お前はたしか無花果のパイロット、何故そんなものに……」
「すみません、事情は後で説明させてください、今は上空にあるあの戦艦を止めに行きます！」
「出来るのか？お前のその機体で、奴を止める事が」
「ラースがプレゼントしてくれたこの『紫陽花』なら……出来ます

ッ！」
「……わかった、やってみせろ」
「はい！」
元気良く返事をした後、白義との通信が切れる。
『―ＳＲＣ発動―』
エリルは小さく深呼吸をした後に空を見上げると、そこには太陽の光を遮るように巨大な空中戦艦が浮かんでいた。

――紫色に光る翼を自在に羽ばたかせ接近してくる１機の機体、その機体を目視した艦の司令室にいるＮＦの兵士達は困惑していた。地上に降りた機体は全て機能停止を起こし、艦の出力が安定しない。更にはレーダーまでもが機能停止に陥り、通信まで遮断されている。
「何をしている！早く撃ち落とせ！」
中央の席から指揮を執る艦長の声に、兵士達は焦りながら機械を動かしていく。
「艦長！ミサイルが全て軌道から反れていきます！どのミサイルも追尾しません！」
一人の兵士に続き、もう一人の兵士が口を開く。
「あの機体からは強力な電磁波が放出されており、ミサイルの電波が掻き消されています！」
「何だと？それなら手動に切り替え迎撃を行え！弾幕も張って近づかせるな。それと空軍の戦闘機も出撃だ、何としてもあの機体を落とせ！」
艦長の命令により数十機もの戦闘が一斉に飛び立つ、だが艦から出てすぐに機能停止を起こすと、呆気なく全ての機体が墜落していく。
戦場に花びらが舞う、既に戦艦の周りにも輝かしい花びらが空を舞っていた。
戦艦から銃口が次々に出てくると、近づいてくる紫陽花に向けて数百発の弾丸が一斉に飛んで行く。
すると紫陽花は花びらを散らしながらその雨の用に降り注ぐ弾丸を

華麗に避けていく、まるで自分も一枚の花びらのように。
その紫陽花の美しさを見て兵士達は魅了されていた、もはや兵器には見えなかったのだ。
紫陽花は銃弾を避けながら上昇していくと、ついに空に浮かぶ戦艦と同じ位置にまで浮上した。
背中に付いてある二つの装置、二枚の巨大な光の翼を出しているが、その翼が向きを変え前方の艦に向けられた。
「目標を確認。エネルギー圧縮開始……」
二枚の翼は音を立てながら更に光輝くと、周囲に花びらを集らせていく。
「圧縮完了……発射！」
エリルは引き金を引き、両翼に圧縮された力が解放される。
両翼から放たれた巨大な光の翼は、花びらを纏いながら巨大な戦艦を飲み込んでいく。
艦に積まれている機器が次々に爆発していき、機能停止を起こしいくと、動力源までもが爆破炎上を起こした。
各部から煙を上げ、出力が低下していく戦艦、それでも何とか浮き続けていた。
「駄目です艦長！出力が上がりません！このままでは墜落してしまいます！」
「馬鹿な……ＥＤＰで活躍したこのアルカンシェルが……っく、全機後退！一時戦闘地域から離脱する！」
艦長の命令により戦艦はゆっくりと後退し、本部から離れていく。
だが町に残されたギフツ、リバインは機能停止になっており、離脱する事すら出来ない。
隊長機などは何とか動けるものの、出力が安定せず、戦える状況では無かった。
「これは……とんだ化物が現れたな。まぁ紳、命拾いしてよかったな。だが次会う時はその命、無いと思え」
そう言い残すと騎佐久は機体を動かし紳の元から離れていく、同様

に隊長機は次々に本部を後にした。
一輪の花により戦場は収まった。本部にいたＮＦの兵士達も諦めたのか大人しく武装解除をしていく。

――本部には要請で駆けつけた他のＢＮの部隊が集合し始めていく。
だがその時には既に戦闘も終了しており、援軍を知ったＮＦは自軍の基地へと戻っていた。
ＢＮの本部では慌しく兵士達が走り、怪我人の手当てから火災の消火などを行なっている。
町に転がる死体を集め、町に生存者がいないか探していく兵士達、その有様は酷いものだった。
その頃、基地へ辿り着いた穿真達は紳達の指示の元ある一室へと向かっていた。
扉を開けて部屋に入ると、そこには背を向けて一人の女性が椅子に座っている。
見覚えのある背中に、綺麗な紫色の髪の毛。扉を開けた音に気付いた女性は後ろを向くと、穿真の姿を見て驚いた表情をしている。
「エリル！？」
そう言うと穿真はすぐさまエリルの元に駆けつける、それを見たエリルも椅子から立ち上がるが、近づいてきた穿真は勢い良くエリルを抱きしめる。
思わぬ行動にエリルは驚きを隠せない。そして穿真がエリルの両肩に手を置くと、安心した表情でエリルを見つめていた。
「良かった、本当に良かった……無事だったんだな、エリル」
「わ、わかったから。その、放してくれない？痛いんだけど……」
エリルがそう言うと穿真はようやく放してくれた。
「悪りぃ悪りぃ、つい嬉しくてな」
すると今度は穿真の後ろにいた雪音が前に出てくると、目に涙を浮かべた顔をしてエリルに抱きついてきた。

「雪ちゃん」
自分の胸で泣き続ける雪音に、エリルはそっと頭を撫でていく。それを見ていた穿真は一人椅子に座ると、小さな溜め息を吐いた。
その後、雪音も落ち着き座席につくと、エリルも同様に椅子に座った。
「穿真、羅威達はどうしたの？まだ来てないみたいだけど、まさか――」
「羅威と香澄はまだ来てないだけだ」
穿真の言った言葉の意味に、エリルは不安の色が隠せない。
「……クロノは？」
「死んだ」
即答だった、余りにも淡々とした言い方に、エリルの疑問は募る。
「そんなっ！？どうして……？」
「羅威を助ける為に死んだ、それだけだ」
先程とはうってかわって暗い表情を見せる穿真に、エリルはそれ以上聞く事が出来なかった。
自分の知らない間に、一体何が起こったのか。穿真の雪音の表情を見ただけではわからない。
「二人とも、遅いですね」
雪音の言葉の通り、まだ羅威と香澄は本部に来てはいない。
すると、扉が開く音の聞こえ、部屋にいた三人が一斉に扉の方に顔を向ける。
だがそこにいたのは羅威と香澄では無く、紳とダンの二人だった。
その姿を見た瞬間三人は椅子から立ち上がり敬礼をすると、紳は無言で部屋の中に入っていく。
そして一番奥の席に座ると、ダンはその後ろで壁にもたれ掛かりながら煙草を吸い始めた。
「まだ来てない奴がいるみたいだな、どうする」
そう言ってダンは煙草を銜えながら扉を見つめるが、一向に二人が来る気配が無い。

「どうもしない、話ならここにいる三人から聞けばいい」
紳がエリル達に目を向ける、鋭い眼差しで見つめられた三人は緊張して体が強張っていた。
「エリル、あの機体について、お前は何か知っているのか？」
「いえ、ラースが死ぬ間際に私に渡してくれただけで。何も……」
搭乗者のエリルですら知らない謎の機体、動力源が何か、何の機能、装置が付いているのかも未だに不明。
エリル以外の人間がその機体に触ろうとすれば、機体が自動的に動き攻撃態勢に入るのだ。
今は格納庫で隔離されており、兵士達が機体の周りに近づけないようにされている。
「ちょっと待て！死ぬ間際って、ラースが死んだって言うのかよ！？」
いきなり大声を出して椅子から立ち上がる穿真、無理も無い、突然仲間が死んだ事を告げられたのだから。
「うん、ラースは私を庇って死んだの……」
「おいおい、嘘、だろ……？」
急に全身から力が抜けたのか、穿真は落ちるように椅子に座った。
「ダン、その場にお前はいたと言っていたな。どういう状況だった」
紳の言葉にエリルは動揺した、ダンは知っている、ラースが裏切り者であると。
「ＮＦの兵士が格納庫にいてな、全て殺したが。突然別の扉が開いてな、出来てたＮＦの兵士が格納庫にいたそこのお嬢さんに発砲した訳だ、そしたら一人の学者が女を庇った……後はわかるな」
吸い終えた煙草を携帯灰皿に入れると、また新しい煙草を取り出すダン。
その話を聞いたエリルは動揺しながらも心の中で礼を述べると、話を聞き終えた紳がまたエリルの方に目を向けた。
「エリル、お前は行方不明になっていたはず。何故あの場所にいた」
「そ、それは――――」

それからエリルは語りだした、自分がＮＦに助けてもらっていた事を。
「信じられないかもしれませんが、本当の事です。それで私はここに戻ってきました、それから町が攻撃されて……」
「わかった、もういい」
「私の話し、信じていただけたのですか？」
エリルの問いに紳は返事をせず、無視するかのように別の話しへと移る。
「穿真、お前の向かった東部で一体何が起こった」
「俺より羅威に聞いた方が良いと思いますぜ？」
「俺はお前に聞いている」
その紳の威圧的な眼差しに穿真も真剣な面持ちになると、東部で起きた事件を少しずつ話しだした。

――その頃、呼ばれたにも関わらず本部に向かわなかった羅威は一人艦の自室で寝ていた。
すると部屋の扉が開き、一人の女性が部屋の中へと入ってくる。
灯りの点いていない部屋、女性は扉のすぐ横にあるスイッチを押すと部屋の明かりを点けた。
「リハビリの時間だよ、どうしたの？具合でも悪いの？」
部屋に入ってきたのはアリスだった、部屋のベットの上では制服で横たわりアリスに背を向けて寝ている羅威がいる。
体調が心配になり羅威に近づこうとした時、寝ていた羅威が起き上がると、ゆっくりとアリスの方を向いた。
「何しに来た……」
羅威の突き刺さるような重い口調に、アリスは心配そうに羅威に近づいていく。
「今日のリハビリ、してないよね。だから――」
「もう、その必要は無い」
そう言って羅威は俯いた、アリスは足を止めるとゆっくりとその訳

を聞く。
「どうして？」
「軍、辞めるから」
あっさり出てきた言葉、アリスは信じられなかった。
あれ程軍の為に尽くしてきた羅威がいきなり軍を辞めると言い出すなんて。
「羅威、本気なの？う、嘘よね。軍を辞めるなんて」
「出て行ってくれ……」
「あれだけ頑張ってきたじゃない！なんで軍を辞めるの、仲間を救えなかったから？守りたい人を、守れなかったから！？」
アリスも知っていた、分かっていた。羅威達が仲間を死なせてしまい、助けようとした人も助けられなかった事を。
辛いし、悲しい。そんな事アリスだってわかっている、それでも羅威には立ち直って欲しかった。
アリスの言葉に羅威は立ち上がると、まっすぐアリスの元に向かう。
そして右手を振り上げると、それをアリスの顔目掛けて振り下ろした。
羅威の目、そして振り上げられた手に恐怖で目を瞑ってしまうアリス、だが顔を叩かれる事は無かった。
ゆっくりと目を開けると、羅威は自分の眼の前で跪き嘆いていた。
「ああ、そうだよ。結局俺は何も出来ず、誰も助けられなかった。彩野も、セーシュも、クロノも。そして、たった一人の妹でさえ俺は……俺はッ！」
「羅威……」
羅威の気持ちもわかる、幾度と無く頑張ってきた羅威に最後に待ち受けるものはいつも仲間の死。
更には仲間を殺した敵が自分の親友だという事も知り、今の羅威の心の中はズタズタに引き裂かれていた。
「助ける為に戦ってきたのに、俺の力じゃ誰も助けられない。俺にはもう無理だ」

「無理じゃないよ！たしかに辛い事も沢山あった、悲しい事だって……それでも死んでいった人達の為に、羅威にはやる事がまだ残ってるよ！」

「そう思い続けてきた結果がこれだ。……さよなら、アリス」

羅威は立ち上がると、アリスの両肩に手を置きそっと押していく。

小さな力にアリスは後ろに下がっていくと、そのまま部屋の扉が開きアリスを部屋から出そうとする。

しかし、アリスは部屋から出る前に後ろから背中を押され、その場に踏みとどまる。

ゆっくりと後ろにアリスが振り向くと、そこには羅威を睨みつける香澄がアリスの背中を支えていた。

「あんた、本当に軍を辞めるの？」

「人の部屋の前で盗み聞きか、良い趣味とは言えないな」

香澄の問いに羅威は鼻で笑いそう告げ部屋からアリスを出そうとした時、香澄がアリスの背中を勢い良く押し、羅威ごと部屋の中に突き飛ばす。

そして香澄は堂々と部屋の中に入ると、扉を閉め、倒れている羅威の襟を掴み無理やり立たせる。

「軍を辞めるな、クロノの死を、無駄にするなッ！」

一方的に怒りをぶつける香澄、そんな彼女を見て今まで溜めていた羅威の怒りが、少しずつ込み上げて来る。

「じゃあ俺に何しろって言うんだ、このまま軍に残ってクロノの分まで敵を殺し続ければいいのか！？」

どうしようもない怒りを香澄にぶつける羅威、すると香澄はその言葉を聞いた途端、目に涙を浮かべ右腕を大きく振り上げた。

「ふざけんじゃ……ないわよッ！」

その勢い良く振り落とされた拳は羅威の顔面を殴り飛ばす、殴られた羅威はよろめきながら後ろに数歩下がるが、しっかりと前を見つめ続けていた。

香澄の怒りは収まらない、涙を流しながら羅威に飛びかかると、そ

のまま体を倒し馬乗りになる。
羅威は何も抵抗せず、香澄は無防備な羅威の顔を何度も何度も殴り始める。
突然の出来事に最初アリスは何も出来なかったが、殴られ続ける羅威を見てようやく香澄を止めに掛かる。
後ろから香澄の腕を掴むと強引に羅威から遠ざけていくアリス、完全に羅威から離されるとようやく香澄も殴るのを止めた。
息が荒く、怒りの余り未だに羅威を睨み続ける香澄。今腕を放せばまた殴りにかかるような勢いだ。
「香澄さん落ち着いて！羅威の言った事は私も謝るから！許してあげて！」
「許さなくて、いい……」
倒れた体をゆっくりと起こし、口元の血を拭き取りながら羅威はそう答えた。
「俺が罪を犯したのは事実、全て俺の責任だ……すまなかった」
羅威はそう告げると、一人部屋の出口にまで歩いていく。
そして出口まであと数歩の所で、横に立っていた香澄が羅威の肩を掴んだ。
「待って、羅威……最後に――」
その時、既に香澄から怒りは消えていた。
涙を流しながら訴えかけるような瞳で羅威を見つめ続ける、その目を見て羅威も足を止める。
香澄はポケットから一枚の紙を取り出すと、それを羅威に手渡した。
渡された紙を見てみると、そこには一軒の住所が書かれている。
「そこに行って……それでもう、いいから……」
そう言うと泣き崩れる香澄をアリスは咄嗟に抱きしめる、今まで見せた事無い弱々しい香澄の姿を見た羅威は視線を扉に戻すと、その用紙を握り締めたまま自分の部屋を後にした。

第７３話　揺れ、核心

――ＢＮ本部での戦闘後、ＮＦの空中要塞アルカンティスはＮＦの本部に戻り、その戦艦の中から護衛を引き連れた騎佐久が艦から降りて来た。
「お前達は下がっていい」
騎佐久がそう護衛の兵士達に告げると、騎佐久の周りにいた兵士は敬礼を済ませ持ち場から離れていく。
「やれやれ、暑苦しくて他ならない」
艦から降りた騎佐久は一人本部に戻ると、エレベーターに乗り最上階にある会議室へと向かう。
その間騎佐久は疲れたような暗い表情をずっと浮かべていた、恐らく今から向かう会議も先程の戦闘について口うるさく言われるに違いない、そう思うと自然に溜め息も出てくる。
そしてエレベーターの扉が開き外に出ようとした時、顔を上げると一人の女性が目の前に立っていた。
だが騎佐久を足を止める事無くエレベーターから降りると、女性を横切ろうとしたが、横にいた女性に腕を掴まれる。
「待て」
その声に騎佐久が横に振り向く、そこで初めてわかった、目の前にいる女性が赤城だという事に。
「ああ、赤城か。まさか本部に来ているとは」
「私もこの会議に呼ばれてな。騎佐久、ＢＮ本部での戦闘はどうなった？」
「それを今から話しに行くんだろ」
そう言い残し赤城を置いて会議室へと向かう騎佐久、赤城はその後ろをついていくともう一度騎佐久の腕を掴んだ。
「お前とは少し話したいことがある、会議が終わった後、いいな？」
「わかったよ」

騎佐久は答えた後、赤城に見えないようは小さく笑った。
赤城の言い草を聞いて懐かしさを感じたからだ、まだ自分が新米だった頃の、あの時の頃を。
しかし、今回の戦闘は笑える程甘くなかった。
ＢＮ本部に下りた降下部隊はほぼ全滅し、ＮＦは多くの戦力を失った。
更にＮＦの最強と謳われた空中要塞アルカンシェルが、たった１機の機体の力でその能力を抑えられた事にも問題が残る。
互いの戦力が消耗されただけで、結果的に得をしたものはだれもいない。
東部は消滅し、完成間近の羽衣も奪われ、徐々にＮＦは、人類は、追い詰められていく。

――その頃、ＢＮの本部に集められているエリルは衝撃的な事実を告げられていた。
「愁がっ……ＳＶに？なんで、どうして！？」
エリルにとっては初耳だが、その場にいた穿真や紳達は皆知っていた。
「俺もわからねえよ！だがあいつはたしかにＳＶにいた。しかも奴は……あの赤鬼のパイロットだったんだよ」
「そんなっ！？　嘘よ……それじゃあ、愁が彩野を殺したって言うの？私には信じられない……」
愁がＳＶにいるなんて、エリルにとっては信じがたい話だった。
無理も無い、前まで同じ部隊に所属し、共に数々の戦場を戦ってきた親友だ。
その親友が親友を殺し、今では自分の敵になっている。
「なぁ紳さん。あんたは知っていたのか？愁がＳＶに行った事を。
愁は言ってたぜ、ＳＶに行った訳は紳に聞けってな」
「愁が行方不明になったのは知っていた、それだけだ」
そう言うと紳は立ち上がり、会議室から出て行こうとする。

ダンもそれに気付くと、煙草を銜えたまま紳の後を歩いていく。
穿真達はまた敬礼をして二人を見送った後、力無く自分達の椅子に座り込んだ。
「式まで後1時間……その間どうする、俺は羅威の所行くけど」
「私は香澄さんの所に行きます、エリルさんは？」
「私は、最後までラースの側にいたいから」
そして三人は会議室から出ると、別々の方向に分かれ目的の場所へと向かった。

――その頃羅威もある場所へ向かっていた、香澄に手渡された住所を頼りに、本部の住宅地を歩いていく。
ここの住宅地の被害は少なく、倒壊している家は少ないが。道路には未だ軍の車両が走っていた。
「ここか……」
軍服のまま着替えずに目的地に着いた。目の前の家の玄関付近には植木鉢が沢山置かれ綺麗にガーデニングされている。
大体察しは尽いている、恐らくこの家はクロノの家で、家族にクロノの死を伝えて来いとでも香澄は言っているのだろう、と。
「最後に罪悪感を与え自己嫌悪にでも落とさせる気か？……もうとっくに落ちてるよ」
だから軍を辞めるんだ、羅威はインターホンを押すと、家の中から心地よい音色が流れてくる。
それでふと気付いた、今までは腕を高く上げる事も出来なかったのに、今では出来るようになった、これもアリスのお陰だ。
インターホーンを押した後少し待ってみるが、玄関の扉は開かない。
まだ避難所から帰って来てないのだろうか。どっちにしろ人がいないのであればここにいる理由も無い。
羅威は扉に背を向けその場から離れようとした時、後ろから玄関の開く音が聞こえてくる。
何だ、いたのか。このまま帰りたかった羅威だがそうもいかない、

後ろに振り返り出てきた人を見ようとする。
しかし、そこにいたのは人ではなく一匹の犬が立っていた。
毛は長く、大きさは普通の犬が羅威を見たまま止まっている。
その様子に戸惑う羅威、すると犬は羅威に背を向け、半開きの扉を自分の頭を使い開けていくと、尻尾を振りながら家の中に入っていき、玄関で止まると羅威の様子を窺うように振り向いた。
「入っていいって事か？」
犬に聞いたって返事する訳も無く。恐る恐る家に入る、玄関の扉を閉めた後靴を脱ぎ、歩いていく犬の後ろについていく。
犬はリビングへと通じる扉をまた自分の体で開けようとするが、羅威が先に手を伸ばし扉を開ける。
それと同時に何やら美味しそうな香りが漂ってくる、甘いパンのような香り、羅威がそっとリビングへ入ると、そこには一人の少女が大きなお皿を持って立っていた。
羅威を見る途端動きが止まり、誰だろうと疑問に思いながら首を傾げる少女。
その表情を見て羅威は不審者でない事を少女に伝える為に握り締めていた紙を見せた。
「俺は羅威、香澄にここに行けと言われて来たんだが……」
軍の制服を着ている時点で不審者ではないと思うが、念には念を入れる。
「香澄さんが！？という事は本部に帰ってきたんですね！やったぁ！」
突然笑顔になり、手に持っていたお皿を机の上に置く少女。お皿の上には焼きたてのアップルパイが置かれている。
「あっ、すみません羅威さん。私はユニカって言います、どうぞ座ってください。出来立てのアップルパイです！シロも食べよ！」
シロという名に羅威の後ろに立っていた犬が少女の元に走り寄る、少女は椅子に座るとアップルパイを切り分け、その一切れを小さな皿に移し、床にいるシロの前に置いた。

豪快に食べると思いきや、意外と少しずつ齧って食べていくシロ。
だが羅威はここに来ておやつを食べにきた訳ではない、羅威は周りを見渡すものの、彼女以外に人影は無い。
羅威はもう一度少女の方を向くと、ゆっくりと口を開く。
「君の両親に話しがあるんだが、今何処に……？」
その羅威の言葉に少女は齧ったアップルパイを更に置くと口を拭きながら答えた。
「私が小さい頃に亡くなりました、今はお兄ちゃんとシロの三人で暮らしています！」
その言葉に羅威の鼓動が早くなる、両親がいないとすれば、クロノの死を誰に伝える。
まさか、この子に、クロノの妹に、直接クロノの死を伝えなければならないのか？そう思うだけでとてもじゃないがお菓子など食べれる状態ではなかった。
「お兄ちゃんは軍のお仕事が忙しくて中々帰ってこなくて……でも！今日帰って来るんですよね！羅威さん！」
返事が出来ない、羅威には少女の笑顔が眩しすぎた。
丁度玲と同じ位いの少女を見て、玲の姿が薄らと重なっていく。
「羅威さんはお兄ちゃんのお友達なんですよね。いつお兄ちゃんは帰って来るんですか？あ、香澄さんは元気にしてますか？」
まるで土産話でも聞かしてほしいかのように少女は羅威に笑顔で質問していく。
こんな状況で伝えられるはずがない、こんなにも嬉しそうな少女の前で……。
脳裏に走るクロノの姿、何故クロノは自分を助けたのかふと疑問に思った。
クロノの帰りをこんなにも楽しみに待っている妹がいるというのに、何故自らを犠牲にして死んだ。
どうして、なぜ……？
そんな羅威の只ならぬ表情を見てか、次第に少女の表情から笑みが

消えていく。
「あの、羅威さん？」
胸が張り裂けそうなる、今にでもその場から逃げ出したい。でも、言うしかない、伝えるしかない、自分がクロノを死なせたのだから。
「クロノは……死んだ……っ……」
押し殺したような声で羅威が呟いたその言葉。少女にとって余りにも酷過ぎる言葉だった。
少女が手に持っていたアップルパイが床へと落ちる、そして時が止まったかのように、互いに声も出さず止まっていた。
羅威は少女の顔を見る事が出来なかった、視線を下に向け、じっと言葉を待つ。
「ほんと、ですか……？」
ゆっくりと頷く羅威を見て、少女は肩の力を落とし俯いた。
絶望が押し寄せる、突然兄の死を告げられた妹の心は、暗くて大きな穴が幾つも空いていく。
「すまない……クロノは、俺を助ける為に……自らを犠牲にして……。すまない、本当に、すまない！」
少女より先に羅威の目から涙が零れ落ちる、羅威はその場に跪き、頭を下げ続けた。
こんな事で許してもらえるはずがない、そんな事わかっている。
それでも今の羅威は床に膝を着き、少女に謝り続ける事しか出来なかった。
「頭を上げてください、羅威さん」
少女は椅子から立ち上がると、跪く羅威の側に向かいそっと肩に手を置く。
「お兄ちゃんは幸せ者です、こんなにも真剣に想ってくれる人が側にいるんだもん」
少女は泣いていなかった、少女は優しく羅威の手を握ると、ゆっくりと引き上げる。
それに合わせて羅威も立ち上がると、少女は座席の引いて羅威を座

らせた。
そして少女も自分の椅子に座ると、美味しそうにアップルパイを食べるシロの頭を優しく撫でた。
「君は、俺を憎んでないのか……？」
「どうして憎むんですか？」
シロの頭を撫でながら少女はそう答える、憎まれて当然の事をしてしまった羅威には少女の言葉の意味がわからない。
「俺のせいでクロノが死んだ、憎まれて、恨まれて……当然だ」
羅威は思っていた、穿真も香澄も雪音も、皆自分を憎んでいる、恨んでいると。
当然だ、自分の過ちで死なせてしまったのだから。
「羅威さん、お兄ちゃんにそっくりですね」
「えっ？」
「人一倍責任感が強くて、一人で抱え込んで。いつも悩んでる」
自分の事を指摘されているかのような言葉に羅威は驚いていた、だが少女は兄のクロノについて話しており。それ程二人の性格が似ているというのを物語っていた。
「お兄ちゃんは幸せ者です、大事な人を助ける事が出来たんだから。羅威さん、羅威さんはどうして軍人になられたんですか？」
「守りたかった、罪の無い人々を、仲間を……だから俺は軍に入った」
「やっぱり！お兄ちゃんも全く同じ事を言ってましたよ！」
いつの間にか少女の顔は笑顔に変わっていた、だが羅威には作り笑顔にしか見えない、無理しているようにしか、見えなかった。
「羅威さん、これからも頑張ってください。お兄ちゃんの分まで沢山の人達を助けてくださいね！お兄ちゃんもきっとそれを望んでいます！」
クロノの分まで敵を殺す。そんな馬鹿げた事を言ってしまった事を思い出した羅威は、少女の言葉を聞いて自分に腹立たしくなる。
アリスの言葉を脳裏を過ぎる、自分にはまだ遣るべき事が残ってい

る。
香澄の言葉も脳裏を過ぎる、クロノの死を無駄にするなと。
そして目の前にいる少女は、兄を死なせてしまった男を応援してくれている。
「そうだ……俺には責任がある。その責任を果たすまで、俺は軍を辞めない。いや、辞めてはいけない！」
段々と手に力が入り拳を握り締めていく羅威、すると胸ポケットに入っている携帯電話から突然音が鳴り始め、急いで電話を取る。
「メール？そうか、式の時間か――」
画面を見た後羅威は携帯電話を仕舞い、椅子から立ち上がる。
それを見ていた少女も立ち上がると、時計の方に顔を向けた。
「すまない、そろそろ俺は行かなくてはな……」
「はい、わかりました。玄関までお送りしますね」
元気良く少女は羅威より先に玄関へと向かうと、それを見ていた犬も少女の後についていく。
羅威も玄関に向かうと靴を履いて玄関から出て行こうとした時、ふと後ろに振り向いた。
「いつでも入らしてくださいね、その時は美味しいパイをご馳走しますから」
そう言って少女は笑顔で手を振っている、羅威も左手で小さく手を振りながら右手で扉を押して玄関を出た。
そして扉は完全に閉まった、だが羅威は歩き出そうとはせず、玄関を出た後すぐに扉にもたれかかっていた。
まるで何かを待つかのように、悲しげな表情を浮かべながら、じっと。
「う、うぅ……おにい、ちゃん……」
扉越しから聞こえてくる少女の泣き声、咄嗟に羅威は胸に手を当てる。
少女はずっと我慢していた、兄の死を伝えられた時から、羅威が玄関を出るまで。

兄の死を伝えに来た羅威を見て、少女は辛さ悲しさを見せる訳にはいかなかった。
もし人前で泣いてしまえば、そこにいる羅威に更に悲しさと辛さを味合わせる事になるからだ。
我慢の限界が来ていた、自然に、止め処なく溢れる涙。
少女の隣に座っていた犬もか細い声で鳴き始めると、優しく少女の側に寄り添う。
「お兄ちゃんが、お兄ちゃんがぁ！うっ、ぅぅあぁあ――――ッ！」
大声で咽び泣く少女は寄り添う犬を抱きしめると、先ほどまで見せていた笑顔とはかけ離れた暗く悲しい表情を浮かべていた。
声を聞いただけでそれがわかる、羅威の胸に突き刺さる少女の泣き声。
その声を聞いて羅威は自分の胸に爪を立て、胸元を鷲づかんでいく。
まるで少女の思いを胸に刻み込むかのように。

――――時間が来た、ＢＮ本部前に整列するＢＮの兵士達、身なりを整えている者もいれば、血で汚れたまま並んでいる兵士もいた。
本部にいる全ての兵士を集められているこの場で、兵士達が並ぶ前方にはＢＮの指揮官達と、最高司令官風霧紳が立っている。
紳は徐に数歩前に出ると、大勢の兵士達の前で口を開いた。
「これまでで、我々は多くの人々を失った。家族、兄弟、恋人、友人、仲間……それでもＢＮは人類の為に戦い続けてきていた。
しかし、我々は余りにも失いすぎた。それは余りにも身勝手なＮＦの行為によってだ。
今は人類同士が戦う余裕等無い、だが奴等は兵器を持ちＥＲＲＯＲではなく罪も無い人々を殺している！
……ＥＲＲＯＲとの決着の前に、我々は終わらさなければならない事がある」
その場にいた全ての兵士が紳を見つめていた、皆同じ思いを胸に刻

み、決意している。
ＢＮ兵士達は誰一人俯いていない、力ある目でじっと紳の言葉を待っていた。
「今ここで、ＢＮの全戦力を持って……ＮＦに宣戦布告する」
遂に動かなくてはならない時が来てしまった、紳の言い放った言葉に、整列しているＢＮの兵士達が一斉に敬礼し始めた。
紳の意思、そして兵士達は意思は伝わった。
後ろに振り返りその場から立ち去る紳、一人本部の入り口へと入っていく。
するとその後ろからは唯がついてくると、紳と横に並ぶ。
「お兄様、本当にＮＦとの全面戦争を行なうつもりですか？ＥＲＲＯＲの数は日々増え続け、力を強大しているのですよ。今ここでＢＮが戦力を使えば――」
「唯、その言葉を今あの場にいる兵士達に言えるか？」
「それは……」
「俺はＥＲＲＯＲとの戦いをまだ諦めた訳ではない。ＮＦと短期決戦を行い、人類との戦争に終止符を打つ。目標はただ一つ、ＮＦ本部だけだ」
これ以上人類同士の戦争を伸ばす訳にはいかなかった、人類と敵対する生物ＥＲＲＯＲとの戦いがまだ残っている。
本来人類が力を合わせ立ち向かわなければならないはずだというのに、それがまるで出来ていない。
紳はそう告げると足早に自室へと戻る、その部屋の前で唯は心配そうな表情を浮かべていた。
するとそんな唯の肩に手を置く一人の男がいた。
「ダンさん？」
珍しく煙草を銜えていないダンは唯の肩に手を置きながら紳のいる部屋の扉に目を向けた。
「心配なんだろ、紳の事が。大丈夫、あいつは俺が守る。それが俺の仕事だしな」

「ありがとうございます……ダンさんがそう言ってくれると安心します。でも、これだけは約束してくださ――」
フィリオの言葉を遮るように口の前に手を出すダン、そして人差し指を立てると小さく横に振った。
「さて、俺は煙草を切らしてたから買いに行く途中だったんだ。それじゃ」
そう言ってダンは唯を横切り通路を歩いていく。
その後ろ姿を見送った後、唯は紳の入っていった部屋の扉を開け、中に入っていった。

――一方、ＮＦで行なわれていた会議は終わりを迎え指揮官や部隊の隊長達が次々に会議室から出ていた。
その中にいた騎佐久も会議室から出るてくると、それを待っていたかのように赤城が横に並ぶと周りに聞こえないよう小さく囁いた。
「お前の失態、減給所では済まなかったな」
「そうだな、ＢＮ本部での件を全て俺の責任にされるとはね……っま、それが軍か」
赤城の答えに小声で答える騎佐久。二人は指揮官達が乗るエレベーターには乗らず、二人で階段を下りていく。
無言のまま階段を下りる二人、そして騎佐久の部屋のある階に辿り着くと、二人は一緒に部屋へと入っていく。
「まさか本当に部屋に来るなんてね、今コーヒーでも出すよ」
部屋に入った途端に騎佐久は厚い軍服を脱ぐと、それをソファの上に放り投げる。
すると赤城は投げられた軍服を拾い上げると、それを壁に掛けられていたハンガーに掛けなおす。
ソファに座り騎佐久が来るのを待っていた赤城、ふと部屋を見渡すと一枚の写真ケースが机の上に飾られていた。
寄り添いながら仲良く四人で笑っている写真、その写真を取ろうと手を伸ばそうとしたがその手を止めるようにコーヒーが置かれた。

騎佐久は赤城と正面に座ると、机に上に置かれていた写真を手に取り赤城に手渡した。
「懐かしいだろ？あの頃の写真はそれ一枚しか俺はもってなくてね、いつもここに置いてるんだよ」
そう言いながら騎佐久はカップを手に取りコーヒーを口にするが、赤城は出されたコーヒーには目もくれず、ただ渡された写真を懐かしそうに眺めていた。
「騎佐久、これから世界は、どうなるのだろうか……？」
「ＢＮの宣戦布告と新種のＥＲＲＯＲ。どちらも神が起動すれば終わるさ」
「本当に、本当に終わるのか？神は嘗て人類の敵だったはず……」
「それでも俺達は神に縋るしかない。ＥＲＲＯＲの侵食を防ぐ為にもな。まぁ、その侵食を防ぐ大事な機体を神楽は持ち去ったわけだが」
二人の脳裏に神楽の姿が過ぎる、会議でもこの話は出てきていた。
ＮＦの最先端技術を搭載した最高傑作機『羽衣』、その羽衣の技術設計担当者であった神楽は東部軍事基地の地下に隠されていた羽衣を独断で起動。その後東部市街地にバリオン砲を発射し、現在消息不明とされている。
「赤城、神楽の行方は知らないのか？」
「それは私の台詞だ、お前こそ何か神楽から聞いているのではないのか？」
「神楽が俺に何か話すと思うかい？」
赤城は思わないと思ったのだろう、手に持っていた写真を机の上に置くとソファから立ち上がる。
「その写真を持っているという事は、あの時の約束も憶えているみたいだしな……これ以上無茶な事はするなよ」
「わかった、肝に銘じておくよ」
軽く笑いながらコーヒーを飲む騎佐久、そんな暢気な表情を見て赤城も少し笑みを見せた。

「……邪魔をしたな、それでは」
「ああ、またね。赤城」
互いに軽く手を振った後、赤城は騎佐久の部屋を後にする。
赤城が部屋をでた後でも一人自分の部屋でコーヒーを味わう騎佐久、気付けばカップに注がれているコーヒーを飲み終えていた。
すると赤城が一口も口にしなかったカップに気付いた騎佐久は、それを手に取るとゆっくりと机の上に垂らしだした。
黒い液体、コーヒーが机の上に広がっていく、それでも騎佐久はカップに入っているコーヒーを垂らし続ける。
やがて黒い液体は机に上に置いていた写真ケースにまで及ぶと、中に入っている写真にゆっくりと染み込んでいく。
「人も世界も汚れていく、俺も武蔵も、神楽も……だけど赤城、君だけは……」
素朴な表情で写真を見つめる騎佐久、写真はコーヒーで滲み黒く染まっていくが、赤城の映っている部分だけは決して黒く染まる事はなかった。

第７４話　一途、障害

――――ここは……どこだ……？

重い体をゆっくりと起こし男は周りを見渡していく、とりあえず質素な部屋で一人ベットで寝ていたのがわかる。

特に家具が置かれている訳でもない、今自分の寝ているベットでさえ一枚のシーツが掛けられているだけだった。

男はベットから起き上がろうと右手をベットに着こうとしたが、ゆっくりと体が右に倒れる。

右腕が無い、血は既に止まっているものの右肩の部分だけシーツが赤く滲んでいる。

そして目にも違和感を感じると、左手でそっと自分の目元を触る。

その時、突然目の前に出された鏡を見て今の状態がわかった。

左目のある目元に大きな切り傷があり、動いていない。しかも顔は少し窶れ、右目にも力が無い自分の表情。

その後鏡を持っている手を辿り誰が持っているのかを見てみると、そこには嬉しそうな顔をしたアビアが立っていた。

「おはよー甲斐斗」

「お前……つうか、なんだその格好」

桃色の可愛らしいパジャマを来ているアビアに疑問を抱く甲斐斗、その場の状況を必死に掴もうとしていた。

「パジャマだよ、甲斐斗知らないの？」

「そういう意味じゃない、ここはどこだ？」

「知らなーい」

会話にならない。

甲斐斗は一度深く深呼吸をした後、その窶れた顔でアビアの方に視線を向けた。

「何故俺を助けた」

率直な質問、そして正直疑問を抱いていた。

敵であるはずの女が自分の怪我を手当てしてる、疑うのも無理はない。
「言ったでしょー？アビアは強い男が好きって」
「おいおい、お前は何を見ていたんだ？あの状況を見てたらわかるだろ、今の俺は……弱い」
そう言って視線を下げ、俯く甲斐斗にアビアはそっと寄り添うとベットの中に入ろうとする。
「アビアは本当の甲斐斗が見たいの、アビアにはわかるよ？甲斐斗の力」
優しい言葉で甲斐斗に近づいていくが、甲斐斗はベットから出ると壁に掛けられていた上着を手に取り部屋から出て行こうとした。
「助けてくれた事には感謝する、だが今お前と戯れている時間は無い。早くミシェルの所に行かねえと……」
よろめきつつも、部屋の扉のドアノブに手が触れた時、アビアもベットから出るとその甲斐斗の左手を掴んだ。
「どうして？あの子は神の下部、甲斐斗の敵だよ？」
「俺には信じられない、ミシェルが敵だなんてな」
「甲斐斗、アビアの話しを聞いて」
「話なら後で聞く、それより俺の機体はどこだ！」
その時、アビアは甲斐斗の左腕を強引に引っ張ると甲斐斗ごと部屋の隅にあるベットに放り投げる。
驚いた様子のまま甲斐斗はベットまで放り投げられると、勢い良くベットに倒れてしまう。
「もー、アビアの話しを最後まで聞いてよー」
女性だと言うのに人一人簡単に投げ飛ばせる力、どうやら今の自分の力ではこの場を抜け出せないとわかった甲斐斗は渋々ベットに留まることとしにした。
アビアはそれを見て満足そうに甲斐斗に近づいていくと、ベットに座り甲斐斗を見つめる。
「テトが言ってたよね、神は第１ＭＧを送り込んで、第１ＭＧが死

ねば甲斐斗の力が戻るって」
「ああ、言っていたな」
「でも少し違うんだよねー甲斐斗には教えてあげるからよーく聞いててね」
そう言うとアビアは甲斐斗に顔を近づけていくが、それに合わせて甲斐斗はアビアとの顔の距離を離していく。
「神が第１ＭＧを送り込んだのは嘘。本当は第１ＭＧが神の元から逃げ出してきたの、その時偶然にも出会ったのが、甲斐斗だったんだよ？」
「何？その話が本当ならやはりミシェルは俺の敵じゃない」
「でも第１ＭＧが甲斐斗の力を抑えてるのは本当ー、ねぇ、どうしてＳＶが第１ＭＧを探してると思う？」
「逃げ出したＭＧを捕まえて神に捧げるのか？」
「そんな感じ、第１ＭＧがいないと神は起動しないからね」
つまり、本来神は起動するはずだったが、第１ＭＧが逃げ出した事で未だ起動が出来ず。
神を起動させる為に今ＳＶは第１ＭＧを探している、という事になる。
「お前……なぜそんなに詳しい情報を知っているんだ」
頭の悪い奴と思っていた甲斐斗だったが、アビアと話していく内にそれが演技だったようにも思えてくる。
アビアが見せる無邪気な笑み、それとは対象に甲斐斗が驚いた様子のままだ。
「あと一つ、テトが言ってたよね。第１ＭＧが死ねば甲斐斗の力が戻るって」
「それも……嘘なんだろ？」
「嘘じゃないよ。でも、もう一つ力が戻る方法があるんだよ？」
力が戻る？その方法はアビアは知っていた、甲斐斗はその方法を待つかのようにじっとアビアを見つめている。
「力が戻る方法を知っているのか？なら俺に教えろ、どうすればい

い！？」
その方法を知りたい甲斐斗、アビアは人差し指を自分の唇に当て話そうかどうか迷っているというより、焦る甲斐斗を見て楽しんでいた。
そしてようやくを口を開くと、思いがけない言葉を口にした。
「それはねーアビアとここで暮らしてたらいいんだよー」
「どういう意味だっ」
アビアのふざけた様子に甲斐斗は何とか怒りに堪え、歯痒い感情を抑えるのに必死だ。
それを見兼ねてようやくアビアも分かりやすく説明していく。
「んーと、もうじき神は起動するの。そうなれば甲斐斗の力は元に戻るよ？」
「……何故だ？ミシェルが神の下に行けば俺の力が戻る理由がわからない」
「神に捧げられたＭＧは、単なる装置になっちゃうの。心の無いただの動力源みたいな」
「結局ミシェルが酷い目に遭う事には変わり無い、俺はミシェルを助けに……」
「今行ってもテトに殺されるだけだよ？それに神が起動すれば甲斐斗に力が戻る。勿論完全じゃないけどー、それでも魔法が使えるようになるんだよ？」
「力は取り戻したい、だがミシェルをそんな目に遭わしてまで俺は……」
「甲斐斗、素直に諦めよ？今の甲斐斗じゃ何も出来ないんだよ？力が戻るまでここにいるといいよ。そしたらアビアが一番早く甲斐斗の力を見る事が出来るもんね～」
深刻な状況が近づいてきているというのに相変わらず能天気なアビア、その間にも甲斐斗は頭の中で試行錯誤を繰り返していた。
時機に神が復活する、ミシェルは神の下に行ってしまう。
分かっているのに何も出来ない、右腕と片目を失い何ら力の無い今

の甲斐斗では如何する事も出来ない。
「……お前は何者なんだ。何故そこまでにして俺の力に拘る」
「アビアは可愛い女の子ー、一途な恋をしているだけだよぉ～」
ふざけている様子のアビアだが甲斐斗は探ろうとしていた。アビアの正体、そして真の目的を。
テトと共にいた女だ、今はまだ何を企んでいるのかわからないが油断はしない方がいい。
しかし、甲斐斗の命を助けてくれたのは紛れも無い事実……悩みながら真剣にアビアの方に目を向けると、アビアは照れ笑いをしながら体をもじもじと動かしている。
「甲斐斗、アビアは命の恩人なんだよ?アビアのお願い聞いてくれるよね?」
「あ、ああ。それもそうだな……キスか?別に良いけど」
困惑した表情をしている甲斐斗にアビアは笑みを見せると、寝ている甲斐斗の体の腹部に跨り始める。
「キスは終わってぇ、次は～……」
アビアはそう言いながら自分の着ているパジャマのボタンを上から1個ずつゆっくりと解いていく。
徐々に見えるアビアの素肌、パジャマの隙間からは綺麗な肌色の素肌が見え隠れしている。
その様子を見てアビアを止めようと甲斐斗が口を開こうとした時、部屋の扉が勢い良く開くと同時に一人の青年が入ってきた。
「な、何者だ!?この部屋で何をしている!」
青年はすかさず腰に付けていた拳銃を取り出しアビアに向けた、一方アビアは驚いた素振りも見せずに後ろに振り返り誰が入ってきたのかを確認している。
甲斐斗はアビアが邪魔で声の主が誰なのか見えない、だがどこか聞き覚えのある声に必死に記憶を巡らせている所だった。
「もー、邪魔しないでよ」
アビアはそう言って少年の方に手を向けると、少年の後ろに無数の

ナイフが出現し始める。
だが少年がそれに気付く事は無く、未だ銃を向けたまま動かない。
それを見てアビアは少年に向けていた手を軽く捻ると、宙に浮いているナイフが一斉に少年向かって飛ばされる。
「止めろ！そいつは俺の知り合いだ！」
ようやく思い出した甲斐斗が声を出すと、宙に浮くナイフは一斉にその場に止まり地面へと落ちていく。
その音に気付いた少年は後ろに振り向くと、驚いた様子で足元のナイフを見つめていた。
「その声、龍使いのガキ。ロアだろ」
甲斐斗は左手で自分の上に座っていたアビアをどけると、声の主を確認する。
目の前には腰に剣を着けローブを身に纏う前に見たのと全く同じ格好の少年ロアがそこに立っていた。
「か、甲斐斗！？どうしてここに」
「色々と訳あってな、お前もどうしてこんな所にいる、安全な場所を探しに行くんじゃなかったのか？」
「そ、それはっ……」
「お前も訳ありみたいだな、まぁせっかく久しぶりに会えたんだ。色々と話しでもするか」
青年は頷くと部屋に置いてある木の椅子に座り、倒れていたアビアも体を起こしベットに座り込んだ。
「甲斐斗、その女性は？」
「んー、命の恩人っといった所か」
そう言うとアビアは満足そうな笑みを浮かべ甲斐斗を見つめてくる。
「酷い怪我だ……大丈夫なの？」
前に見た甲斐斗と別人のように外見が変わってしまった甲斐斗に不安の色が隠せない少年。
右腕は無く、左目の眼元には大きな切り傷も残っている。
「怪我なんて日常茶飯事だよ、お前は無事そうで何よりだ。それで、

お前の探していた安全な場所とやらは探せたのか？」
重傷を負っているにも関わらず割と平気な様子の甲斐斗に少し戸惑うロア、目の前に腕が一本無く顔に大きな傷があり血塗れの状態の甲斐斗を目の当たりにしているから無理もない。
「そ、それが軍の警備やＥＲＲＯＲの出現も多くてね……思うようにマルスと移動出来ないんだ」
「それでうろうろとさ迷った結果、今ここにいるって事か」
「うん、この小屋は前に見つけていてね。久しぶりに戻ってきてみたら甲斐斗達がいたんだよ」
甲斐斗とロアが話しをする中、退屈なのかアビアは一人手遊びをしているが二人の話しは続く。
「安全な場所なんてもう何処にも無いのかもしれない、甲斐斗はＥＤＰっていう作戦でＥＲＲＯＲが絶滅しかかってるって言ってたけど、
今またＥＲＲＯＲが増えだしてきてるんだよ？僕はよく見かけるんだ、ＥＲＲＯＲと人間が戦っている所を」
「ＥＲＲＯＲか、最近色々と問題が多過ぎてそっちに頭が回ってなかったが、本当に不思議な化物だな。殺しても殺しても地面から出て来やがる、間違いなくあいつ等の巣は地下にあるってのはわかるんだけど。今は人間同士の戦いが白熱してるからなぁ、ＥＲＲＯＲの事に頭が回ってないのかもしれない」
その言葉を聞いてロアは俯いてしまう、深刻な表情を浮かべ何か焦るかのように。
「この世界の人間は馬鹿だ……僕達の世界でも全人類が協力してＥＲＲＯＲと戦ったというのに、でも結局……僕の世界は滅びたけどね」
「物量の力……たしかに厄介だがＥＲＲＯＲの巣を全て破壊すれば収まる。っま、それが出来れば苦労しないんだがな、しかも問題はまだある。巣を破壊した後、奴等はまた別世界から来るかもしれないって事だ」

「ねえ甲斐斗、ＥＲＲＯＲの目的って何なのかな。どうしてＥＲＲＯＲは人々を襲い世界を滅ぼしていくと思う？」
「そんな事知るかよ、数多くの世界を見てきたがそういう化物は案外いるもんだ。人類とは桁違いに多い化物もいれば、人類より遥かに超越した化物もな。……まぁ、その残りの世界も全てＥＲＲＯＲが滅ぼしたらしいが」
「ど、どうしてそんな事知ってるの？ＥＲＲＯＲが全ての世界を滅ぼしたって、本当なの……？」
「らしい、他の世界から来た奴がそう言っていた。俄かに信じ難い話しだけどな」
「じゃあこの世界は最後の世界？そんなっ……」
絶望して当然だ、残されたたった一つの世界にもＥＲＲＯＲが現れ、人々を襲っている。
もう何処にも逃げ場は無い、人類が行き残された最後の世界……。
「全世界のＥＲＲＯＲがこの世界に来ればこんな世界簡単に消せるだろうに、それをしないのは何故だろな」
ふと甲斐斗の脳裏に疑問が過ぎる、それだけの数と力を持ちあわしているならこの世界を消す事も容易なはず。
それなのにＥＲＲＯＲはそうせず、この世界で新たに勢力を拡大していく。
余裕の表れなのか、それともＥＲＲＯＲにも何か訳があるのか……。
「このままだと人類は滅亡、ＥＲＲＯＲに皆殺されて終わるだろうな」
「甲斐斗はＥＲＲＯＲが怖くないの？あんな気持ち悪くて恐ろしい化物に殺されるなんて僕は嫌だ……」
「俺に怖いものなんてねーよ、何たって最強の男だったんだからな。俺の力が戻ればＥＲＲＯＲとかミジンコみたいなもんだぜ？」
「凄い自信だね……僕には無理だ、ただ死を待つ事しか出来ない……」
強気の甲斐斗も今の自分の姿を見てわかっていた、今の自分には何

の力も無い事ぐらい。
だからと言って弱気になる事も自分らしくない、残りの世界が全て滅びていても、まだこの世界が残っている。
「俺は……過去に戻らなきゃならねえ。それまで死んでたまるかよっ……！」
誰にも聞こえないように甲斐斗は呟くと、左手でシーツを強く握り締めていく。
死ぬわけにはいかない。だから今ここで力が戻るのをこの場で待つしかない。
「ちょっと疲れたから、僕は隣の部屋で寝てくるね」
「ああ、すまないな。勝手にこの家に邪魔しちまって」
「いいよ、元々この家は僕のでもないし。それじゃ」
そう言ってロアは部屋から出て行ってしまう、それを見ていたアビアはようやく手遊びを止めた。
「アビア、お前はＥＲＲＯＲについてどう思う？」
もしかすればアビアなら何か有力な情報を持っているかもしれない。僅かな希望と期待を胸に聞いてみた甲斐斗、そしてその期待に答えるかのようにアビアはそっと口を開いた。
「気持ちわるーい」
「……そうだな」
アビアの素直な感想に甲斐斗は口を噤む。ＥＲＲＯＲの存在によりこの世界は長くは持たないかもしれない、だからそれまでには何としてでも過去に帰らなければならなかった。
つまり残された最後の世界を見捨てて過去に帰る事になる。
他の世界の滅亡、未だに信じられない真実と現実。過去に世界を巡ってきた甲斐斗には各世界に多くの知り合いがいた。今その知り合い達は皆死んでいるという事に納得がいかない。
「ＥＲＲＯＲはいつから各世界に現れだしたんだ……？」
甲斐斗が記憶を巡らせ過去回ってきた世界について思い出してみるが、１００年前にＥＲＲＯＲという生物は確認した事も見た事も無

かった。という事は甲斐斗が消えていた１００年間の間にＥＲＲＯＲが現れ全てを滅ぼしてきた事になる、つまり……。

「……止めた、疲れた。寝る」

「えっ、甲斐斗。アビアとの約束は？」

「まぁ待て、一眠りした後でも遅く無い、だろ……」

甲斐斗そう言うと目蓋を閉じ、静かな寝息を立てながら寝てしまう。

残念そうな表情になるアビアだったが、無防備な甲斐斗の寝顔に軽く口づけをすると同じベットの中に入り甲斐斗に寄り添うように体を密着させて眠り始めた。

――時は一刻を争う、そんな中未だに手元に第１ＭＧのいないＳＶは段々と焦り始めていた。

決断する日も近い、第１ＭＧ無しで神を起動させるか、しないか。

その事についてフィリオは一人自分の部屋で窓から映る街の夜景の景色を見ながら考えていた。

「フィリオ？」

突然の愁の声にフィリオは急いで後ろに振り返る、そこには心配そうな表情をして愁が立っていた。

「ノックしたんだけど返事が無くて、勝手に部屋に入ってごめん」

「いえ、良いのですよ。愁はあの方についてお聞きになりに来たのですよね」

「はい、俺の見た幻影はあの男。テトという男の仕業らしいですね」

未だ疑問に残るあの幻影、あと少しでフィリオを殺しかけた愁には知っておきたかった。

「愁、貴方は信じられないかもしれませんが正直に言います、あの方は……魔法が使えるのです」

「……そうか、彼も特殊な力を持っているんですね」

淡々と頷く愁にフィリオが首を傾げる、それ程にも簡単に『魔法』という存在に納得が出来るのか疑問だった。

「驚かれないのですか？魔法ですよ、この世界には存在しないもの

です」
「俺は色々と見てきましたから、それにエコがフィリオを助けたのもその力なんですよね」
逆に愁に驚かされたフィリオ、魔法という言葉を聞けば必ずしも驚くものである。
「はい、しかしあの魔法はリスクが大きく、一定の条件を満たさなければ発動できません」
「条件……フィリオ、あの幻影を見ないようにするには何か方法はあるんですか？あの男にも魔法を発動するのに条件は……」
「いえ、あの方は特殊の魔力を持ち本来使えないはずの魔法も数多く使用できます。しかしあの幻影を防ぐ事は可能です」
「その方法、教えてください」
「それはっ――――」
フィリオが口を開こうとした時、部屋の扉がゆっくりと開き一人の男が部屋へと入ってきた。
「簡単な事さ、心に迷いや疚しい事が無ければいいだけ……でも、そんな人いないよね」
部屋の入り口から聞こえてくる男の声、そしてその声を聞いてフィリオの表情が強張っていく。
それを見た愁はすぐさま後ろに振り向くと、扉の前にいるその声の主を目の辺りした。
「やぁ愁、初めまして。僕はテト、テト・アルトニア。よろしくね」

第７５話　交渉、決断

――――愁とフィリオの目の前に現れた青年は紛れもない本物のテトだった。
信じられない光景を目の当たりにするかのように、二人は驚いた表情を見せ突如現れたテトを見つめている。
そんな二人を見てテトは笑みを見せると、部屋の中央に置いてある椅子へと向かいそっとその椅子に座った。
「君達も座れば？立ち話は余り好きじゃないんだ」
すると二人の体は無意識にその場にあった椅子に座らされる、愁は席から立ち上がろうとしたが幾ら力を入れても体が動かない。
「テト……どうして貴方がここに……」
「交渉しに来たんだ、とっても美味しい話さ」
余裕の笑みを見せるテト、だが愁とフィリオは未だに強張り緊張している。
「交渉？私は貴方と交渉などしません！」
強がるフィリオだがそんなことがテトに通用するわけもなく、むしろの強がるフィリオの表情を見て楽しんでいた。
「へぇ、じゃあ第１ＭＧはいらないんだね。せっかく僕が用意してきたのになー」
「っ！……それは本当ですか！？」
第１ＭＧという言葉を耳にした途端その話にフィリオが食いつく。
そんなフィリオの予想通りの反応を見て、テトは楽しみながら話しを進めた。
「そう、今僕の手元には第１ＭＧがいる。すぐにでも君達に渡せるよ？」
「本当ですか…本当に、第１ＭＧを……」
「うん、僕の条件を一つだけ飲めば。渡してあげてもいいんだよ？」
そう言うとテトは立ち上がり、椅子に座ったテトの元へ向かう。

それを止めようと立ち上がろうとする愁、だが体は見えない力で動かす事が出来ない。
「無駄だよ、人間如きが僕の力に逆らえるとでも思ってるの？君はそこでじっと見てるといい」
テトはそっと手を出しフィリオの長く美しい髪に触る、フィリオは抵抗したくても体を動かす事が出来ずただただじっと耐える事しか出来ない。
そしてテトは体勢を低くしてフィリオと目の位置を合わせると、口を開いた。
「君が、僕に忠誠を誓うだけでいい。一生の僕の人形になります……ってね」
「そ、それはっ……」
「実に簡単な事じゃないか、君は自らの肉体を僕に差し出す。それで世界が救われるならむしろ光栄と思わないかい？」
震えるフィリオの頬をテトは優しく触れていく、だがそんな言葉を聞いた愁は黙ってはいなかった。
「ふざけているのかッ！？フィリオは絶対にお前になど渡さない！」
「それを決めるのは彼女自身、よく考える事だね……このままだと最後の世界もＥＲＲＯＲの手によって落ちるよ？」
すると今度は黙っていたフィリオが口を開く。
「それでは逆にお聞きします、貴方はどうするおつもりなのですか。ＥＲＲＯＲがこの世界を支配すればもう人のいる世界は何処にも無いのですよ？いずれ貴方もＥＲＲＯＲに殺されるのです……！」
「別にそれでも良いよ、僕はこの百数十年存分に楽しんで来た。それに目的も果たしたしね」
「目的……？」
「そう、殺したんだよ。君が一番憎んでいる男、カイト・スタルフをね」
カイト……その名を耳にした時、フィリオが大きく反応を示した。
だがそれは愁も同じだった、多少名前は違うがカイトと聞けば『甲

斐斗』が真っ先に思い浮かぶ。
「甲斐斗さんを殺した!?どうして、どうやって……!」
「簡単さ、生身の彼をこの手でズタズタに切り裂いたんだよ。実に無様な最後だった」
そう言うとテトは自信に満ちた笑みを浮かべ、そっと手の甲でそっとフィリオの髪を靡かせる。
「これで僕を止められる者は誰もいない、君も、ゼストも、誰一人!……僕には勝てない」
「甲斐斗さんが…死んだ?あの甲斐斗さんが……?あの人は幾度と無く修羅場を潜り抜けてきた人だ!そう簡単に死ぬはずがない!」
今まで愁は甲斐斗と話し戦う事で気付いていた、甲斐斗がそう簡単に死ぬような人ではない事を。
元々愁は甲斐斗を恨んでもいない。命の恩人でもあり共に戦った者。だからフィリオが甲斐斗を殺すよう頼まれた時も、殺す覚悟は出来ていたが。心の奥底では甲斐斗の死を望んではいなかった。
愁の威勢と眼つきが気に食わないテトは手を伸ばすと、愁の髪を掴み勢い良く床へ押し付ける。
だが愁の眼はじっとテトを睨みつけたまま視線を逸らそうとはしない。
「ふふっ、力の無い者は実に無様だ……それなら次に会う時、カイトの首を持ってきてあげるよ。楽しみに待っているんだね」
愁を放すとテトは満足気に立ち上がりフィリオと愁に背を向ける。
「フィリオ、僕はこの男と違って力がある、それでも僕は君に選択させてあげてるんだよ?僕が本気を出せば君なんて簡単に連れて行ける。君の口から聞きたいね、僕の人形に、奴隷に……なるってね。また明日君の元に行くよ、それじゃ」
そう言ってテトは部屋の扉まで行くとそのまま部屋から出て行く。
テトは最後まで笑みを浮かべていた、逆にフィリオの表情は絶望と恐怖で青ざめ、微かに震えている。
まるで嵐が去ったかのように二人は無言のまま止まっている。

だが体に掛かっていた力が抜けると愁はすぐさま立ち上がり椅子に座っているフィリオの元に向かう。
「フィリオ、どこか怪我はっ……！？」
愁が驚くのも無理は無い、フィリオは泣いていた。声を出さずただぽろぽろと涙を零すだけで。
ずっと、じっと我慢していた。恐怖に慄く姿を見せまいと、必死に強がろうと。
だがそれも無理だった、全てを見透かすようなあのテトの瞳にフィリオは何も出来なかった。
「俺は……どうすれば……」
その涙を見て愁の目にも涙が込み上げて来る、自分の無力さを見せ付けられたからだ。
目には見えない力、力を持つものと持たないものではこれ程の差があるという事を。
フィリオを守る為にいるというのに、守る事が出来ないのであれば今ここにいる意味が無い。
もしフィリオがテトの条件を飲めば、フィリオはあの男、テトの元へ行ってしまう。
それだけは絶対に阻止しなければならない、その為にはテトに勝つだけの力がなければならない。
そうしなければ……フィリオが行ってしまうのだから。
如何する事も出来ない愁、すると突然扉が開き部屋の中にゼストと数名の銃を持った兵士が入り込んでくる。
「フィリオ！」
ゼストがフィリオの名を叫ぶがフィリオは俯いたまま顔を上げない。
兵士達はすぐさま部屋の内部を調べにかかり、ゼストは真っ先にフィリオの元へ向かう。
だが零れる涙を必死に我慢しようとするフィリオを見てゼストが驚きを見せると、すぐさまフィリオを抱きかかえ颯爽と部屋から出て行こうとする。

側にいる愁には目もくれず、愁はゼストに話しかける事ができなかった。
だが今ここで途方に暮れていても何も出来ない、愁はゼストを追うように部屋から出ると駆け足でゼストの後を追っていった。
その頃、フィリオの妹アリスの部屋ではシャイラにエコ、それに葵の三人が側についていた。
すると４人のいる部屋の扉が開いた途端、一斉にシャイラ達が開いた扉の方に向き身構える。
しかし部屋に入ってきたのはフィリオを抱きかかえたゼストと愁、そしてゼストは抱きかかえていたフィリオをすぐ近くにあったソファに座らせた。
「シャイラ、頼む」
ゼストの言葉にシャイラはフィリオの側に駆け寄りフィリオの手を握り目を瞑る。
「大丈夫です、何もされていません」
その一言にその場にいたフィリオと愁以外は胸を撫で下ろすが、まだ油断は出来ない状況だった。
「ゼスト様、現在兵士が付近を捜索していますが。まだあの男は見つかっていない模様です」
「恐らく見つからんだろな、奴の気配が消えている。しかし何故奴はこの建物に……」
「彼は……私と交渉しに来ました」
涙を拭き取り顔を上げるフィリオ、その言葉と表情にその場にいる皆の視線が集まる。
「第１ＭＧと、私を…交換したいと……」
フィリオの言葉にその場にいた者誰もが凍りついた。
神を起動させる為の第１ＭＧが、一番渡ってはいけない男の元にいるという事、そしてその第１ＭＧと引き換えにフィリオを差し出すという事に。
「明日、彼はもう一度ここに返事を聞きに来ます。だから、私は明

日……その交換に応じます」
信じられないような言葉が次々にフィリオの口から出てくる、理解が出来ても納得できるはずがなかった。
「フィリオ様！？何を仰っているのですかッ！そのような事はしてはいけません！」
すかさずシャイラがフィリオを止める、それに続いて葵も口を開いた。
「その通りだ！あんな野郎の所に行く必要なんて無い！」
「ですが、その方法でしか第１ＭＧを取り戻す方法もありません。それに交渉を断れば……恐らく第１ＭＧの命はありません」
フィリオは落ち着いた様子で淡々と喋り続ける、そして椅子から立ち上がりベットに座るアリスの元へ行くと、そっと肩に手を置いた。
「神の復活は……アリス、貴方に――」
だがその手は簡単にアリスに叩かれた。
「嫌よッ！お姉様をあんな奴に渡すなんて、絶対に嫌！」
「分かってください、これしか方法はないのです。第１ＭＧ無しでの神の復活はリスクが大きすぎます、私一人の命で第１ＭＧを取り戻せるなら、私は喜んで彼の元に――」
「嘘よそんなの……！お姉様だって本当は嫌なんでしょ！？なんで正直に言わないのよ！」
その場にいたラティス達の言葉を代弁するかのように涙を流しながら本音をぶつけるアリス。
それでもフィリオは本音を言おうとはしない、本来なら周りに助けを求めてもおかしくないのに、フィリオはそれをしなかった。
「アリス、明日にでも第１ＭＧを使い神を呼び起こす準備に取り掛かってください。ゼスト、シャイラ、葵、エコ、愁。後はよろしく頼みましたよ」
そう言い残しフィリオはアリスに背を向けると部屋の出口へと向かう、アリスがそれを止めようと立ち上がるが、ゼストがそのアリスの腕を掴む。

「放してよ！お姉様が、お姉様が……！」
必死に腕を掴む手を解こうとするが、ゼストは決して腕を放さず、部屋から出て行くフィリオを見つめていた。
そしてフィリオが部屋から出るとゼストはアリスの腕を放す。
「どうしてなの！？どうして皆お姉様を止めないのよ！皆はお姉様が死んでもいいと思ってるの！？」
「そんなの……絶対に思って無い……」
エコの呟きにアリスが振り向くと、更に声をあげた。
「じゃあどうして！……嫌、嫌よ…そんな、なんで突然、お姉様が……」
頭を抱え込みその場に蹲るアリス、シャイラは側に駆け寄り声を掛けるが、今のアリスには全て言い訳にしか聞こえない。
「アリスお嬢様……フィリオ様は我々ＳＶや……人類の為に自ら決断をしたのです」
「何が決断よ！ねえシャイラ、ゼスト！葵、エコ、愁！……お願い、お姉様を守ってよ、お姉様を助けてよ！それが皆の使命じゃないの！？ねえ、なんとか言ってよ…助けてよ……」
泣き崩れるアリス、そんな彼女を見て誰もが苦しんでいた。
フィリオを助けたい、だがそうすれば第１ＭＧを失い神を起動させる事が困難になる。
そうなればＥＲＲＯＲが人類を滅ぼし、結果的にこの残された最後の世界は終わる。
この場にいる全員が力を合わしたとしても、魔法が使えるテトの前では無力に等しい。
フィリオにはそれがわかっていた、だからこそ決断した、例えそれが本心でなくとも。
泣き崩れるアリスを見て愁はいてもたってもいられず、その部屋から出て行く。
廊下には兵士達の姿が見えるが、既にフィリオの姿は消えていた。
「フィリオ、俺は……っ！」

愁は走り出した、フィリオと話がしたいただその一心で。
アリスの部屋に残されたゼストも泣き崩れるアリスに背を向け部屋を後にすると、扉が開き部屋から葵が出てくる。
「ゼスト！お前はどうなんだ、本当にこれで良いと思ってるのか……？」
葵の問いにゼストは足を止めると、振り向きもせずに口を開く。
「……出発の準備をしろと皆に伝えておけ、１時間後ＮＦの本部へと向かう。神を起動させる為にな」
それだけを言い残しゼストはまた歩き始めた。その後ろ姿を睨みつける葵だったが、ゼストの後ろ姿はいつもよりとても弱く、そして儚く見えた。

――愁は、一人フィリオの部屋に来ていた。
その部屋の窓際の椅子にフィリオはいた。灯りを点いてなく、薄暗い部屋の中に少しばかりの光が差し込みんでいる。
フィリオは夜空をじっと眺め、愁が部屋に入ってきても後ろ振り向きもしなかった。
「フィリオ、やっぱり俺には賛成できない、君を失いたくない！……もう俺には、君しかいないんだ」
偽りの無い本心をフィリオに伝えた。それに対してフィリオも本心を伝えてくれるのか、わからない。
「俺はフィリオを守る為に生きています、君が何て言おう俺は絶対に納得できないし、あんな男に君を渡したくない！お願いします、俺が必ず第１ＭＧを取り戻します！だから……！」
愁の言葉にフィリオはゆっくりとその場に立ち上がると、後ろに振り返り小さく口を開いた。
「……思いは、時に虚しく、儚いものになります」
愁の思いはたしかに嘘じゃない。だがあの男、テトは……愁の力では敵わぬ敵だった。
体の動きを封じられ、何もする事が出来なかった。戦場では幻覚を

見せられ、まともに戦闘すら出来ない。
「愁、最後にお願いがあります。聞いてもらえますか？」
「最後だなんて言わないで下さい！フィリオの頼みなら何でも聞きます、言ってください」
愁はそう言うと片足を跪き顔を下ろす、フィリオの足元が聞こえてくると共に愁は願い、期待していた。
フィリオの口から助けを求める言葉を。覚悟は出来ている、フィリオを助ける為なら第１ＭＧなど愁にとってはどうでもいい。今からフィリオを連れ出しこの場から逃げる事だって考えていた。
そして自分の目の前にフィリオの足元が見えてくると、何かを外す音と共にフィリオの着ていた洋服が足元に落ちていく。
「愁、顔を……上げてください」
無言のまま愁は顔を上げていく、白く透き通るように綺麗な足、徐々に顔を上げていくとフィリオの体全体が視界に映った。
下着姿でフィリオは愁の目の前に立っていた、それを信じられないかのように戸惑う愁に、フィリオはまた口を開く。
「明日、あの方の元へ行けば…私は肉体を弄ばされるでしょう……ですからその前に、愁…私の初めての相手に――」
フィリオはそう言ってベットまで歩いていき、愁は跪いたままフィリオを見つめていた。
様々な思考が脳内を巡る、こんな時どうすればいいのか、何をすればいいのか、フィリオの為に今、自分が出来る事とは……。
愁に残された答えは一つ、それを選ぶしかなかった。
フィリオの思いを、分かってあげる事しか……。

――ＢＮの行動は早かった、夜から既に行動を開始し今までにない大勢の軍隊を率いてＮＦの本部を目指す。
途中ＮＦとの戦闘が起こるものの、ＢＮの圧倒的な力に成すすべも無くＮＦの基地は次々に落ちていく。
ＢＮは真っ直ぐＮＦの本部へと向かい、それは既にＮＦ本部にも情

報が来ていた。
進行速度から見て予測出来た、決戦の日が明日である事を。
ＢＮの余りにも早すぎる行動に深夜にも関わらず数多くのＮＦの兵士達が基地内を慌しく走り回っている。
機体の整備に弾薬の補給、兵士達は寝ることなく明日への決戦に向けて準備を整えていた。

追い詰められる人類に、選択の余地は無い。

第７６話　夫々、意思

――夜が開け、朝日に照らされるＢＮの艦隊。
本部に向かうまで幾度とＮＦと戦闘を行なっていたが、結果はＢＮの大勝利であり、ＢＮ側の被害は最小限に抑えられた。
エリルの乗る紫陽花、そして紳の乗る白義が猛威を揮いＮＦの基地や部隊は呆気無く落とされていた。
まさに無敵の存在、ＢＮの艦隊は何の問題も無く着実にＮＦの本部へと向かっていく。
それまでの間、クロノ無き部隊メンバーはロビーで待機していた。
羅威と穿真は無言のまま椅子に座りテレビに映る映像を見つめている、その後ろの椅子に香澄と雪音の二人が座っていた。
テレビはほぼ全てＮＦとＢＮの決戦についてのニュース映像がながれ、ＮＦ本部に各基地の軍隊と部隊が集結してきていた。
その映像を見ていた羅威が微かに反応する、ＮＦの艦隊の横にＳＶの艦隊も並んでいたのだ。
「羅威、お前は止められるのか？」
同じ映像を見ていた穿真が口を開くと、それに続けて後ろに座っていた香澄が口を開く。
「この艦に残ってるって事は、覚悟は決めたんでしょうね？」
香澄の言葉に羅威は後ろに振り返らず、テレビに映る映像を見つめながら答えていく。
「俺は愁を殺すつもりは無い。だが、必ず俺の手で止めてみせる」
その羅威の言葉が生半可に聞こえた香澄は、更に言葉を尖らせた。
「止めるんじゃだめ、殺すつもりでいかないと。あんた死ぬわよ？」
「死ぬつもりも無い、絶対にな」
羅威の言葉を聞いて香澄は黙り込む、腕を組みじっと羅威の後姿を見つめていた。
するとロビーにパイロットスーツを着たままのエリルが片手に缶ジ

ュースを持って入ってくる。
「ふぅ、おっ、皆ここにいたんだ」
羅威達を見つけると、羅威の隣に座り買ってきたばかりのジュースを開けて飲んでいく。
「よーエリル、お前大活躍してるじゃねえか。あの紳と肩を並べて戦場に出てるんだからな」
「私と紫陽花があれば当然の事よ、っま、穿真もせいぜい頑張ってねー」
「なっ！てめぇ…絶対俺の方が先に昇格してやる……」
余裕の表情で缶ジュースを飲むエリルに怒りの闘志を燃やす穿真、するとまたロビーの一人の女性が入ってきた。
「あー、ここにいたんだ。羅威ったらリハビリの時間忘れてるでしょ？」
白衣に身を包んだアリスは両手を腰につけ怒ったように羅威を睨む。
「ああ、もうそんな時間か……」
「もー！時間も無いんだから早く来てよー！」
椅子に座っていた羅威の手を掴むと、羅威を立ち上がらせそそくさとロビーを出て行く二人。
「すまないなアリス、いつも世話かけてばかりで」
手を引っ張られながら口に出した言葉に、アリスは笑顔で振り向いた。
「いいのよ、羅威の世話は全部私が見てあげるんだから。一緒に頑張ろ！」
いつも自分を励ましてくれるアリスの言葉と笑みを見て、羅威も小さな笑みを見せた後二人は医務室へと向かっていった。

――NFは一夜にしてNF本部の軍備を増強し、既に戦闘準備は出来上がっていた。
横一列に並ぶ戦車の後ろでは綺麗にギフツが並び、その後ろにはリバイン等が立ち並ぶ。

そして数十もの艦隊も並び、後はＢＮが来るのを待つだけであった。
勿論ＮＦの最高主力艦アルカンシェルは上空で待機、本部に押し寄せるＢＮを待ち構えている。
ＮＦにいる赤城と由梨音も既に機体に乗り込み、二人で話し合っていた。
「赤城少佐！ついに私にもリバインが支給されましたよ！これでバリバリ活躍できます！」
赤いリバインの横でノーマルカラーのリバインがテスト操作を行なうように両腕を動かし始める。
「浮かれるな、機体の性能に頼りすぎると痛い目に遭うぞ」
赤城の鋭い指摘に調子に乗っていた由梨音も興奮を抑えしっかりと操縦桿を握る。
東部軍事基地において戦場出て帰ってきた生き残りの兵士はわずか赤城と由梨音だけだった。
だが二人は英雄として扱われる訳ではない、本部の人間は何故この二人だけが生き残ったのかが不思議だった。そして思われる、裏切り者ではないのか、戦場から逃げ出したのではないのか、命を懸けて戦っていなかった、と……。
東部軍事基地に帰ろうとしていた赤城だったが、既に基地としての機能を果たしていないため帰る事すら出来ず、本部に留まり続けるしかない。
「了解しましたっ！これで私も赤城少佐をしっかりと援護するよう頑張ります！」
「全く、由梨音はいつも元気だな……助かるよ」
「はい！私はこの元気で一生赤城少佐についていきます！だから、一緒に頑張りましょう！」
もうすぐ戦闘が始まるというのに満面の笑みを見せる由梨音、そんな由梨音の笑顔についも励まされてきていたと実感する赤城もふと笑みを見せた。
「ああ、共にな。だから由梨音……絶対に生きて帰るぞ、でなけれ

ば滅給だ」
「了解！一緒に帰りましょうね！赤城少佐！」
――既にＮＦの本部に到着していたＳＶ、その創始者であるフィリオとアリス達はＮＦ本部の地下室に来ていた。
照明に照らされた明るい部屋に辿り着くと、その部屋にある巨大な機械の扉の前まで歩いていく。
フィリオ達の目の前にある何重にも重ねられた分厚い扉、その扉が轟音と共にゆっくりと開いていく、扉の隙間からは暗闇で何も見えないが、扉が完全に開ききった後、全ての照明が灯り暗闇が消える。目の前に広がる巨大な空間、見渡す限りの壁には何かの文字が延々と刻み込まれており、その中央には一枚の白い石版が立てられている。
床には巨大な陣のようなものが描かれており、複雑な模様が入り組んでいた。
「本当に神が復活するのか？」
横に立っていた騎佐久がそう問うとフィリオは無言で頷いた後、一歩ずつ歩き始め。その後ろをアリス、そしてゼストの二人がついていく。
「全てのＮＦが期待してる、神の復活を。私も一人のＮＦとして楽しみにしている、後は任せたよ」
騎佐久は黙ったままの三人にそう告げると、小さく笑みを見せたながら後ろに振り返り部屋を後にする。
だがフィリオは騎佐久の言葉を聞く程の余裕が無かった。巨大な白い石版の前に佇み、ただじっとその石版を見つめ続ける。
そして足元を見れば、それが巨大な陣の中心であることがわかった。
「全ての準備は整いました、後は第１ＭＧだけですね」
「でもお姉様、やっぱりこんなの……」
「アリス、何も言ってはなりません。時が来るまで待ちなさい、いずれ彼はここに訪れます」

フィリオは陣の中央に跪き、両手を顔の前で合わせるとただひたすら祈り続けた。
祈りなど、力には勝てない事を知りながら……。

――朝日に照らされ、甲斐斗が寝ていたベットの上でふと目を覚ますアビア。
まだ眠そうな顔をしながら目元を擦りゆっくりと起き上がる。
そして顔を横に向けると、そこに寝ていたはずの甲斐斗の姿が消えていた。
「……いない」
いかにも不満気な顔をした後、自分の来ているパジャマに手を当てる。
するとパジャマがいつもの自分の私服に変わっていき、元のアビアの姿となる。
そして部屋を出ると、もう一つ隣の部屋を開けて部屋の中へと入っていく、そこには熟睡したまま起きる気配の無い青年ロアが寝ていた。
そしてアビアはロアに歩み寄ると、躊躇いなく頬を強く引っ張り始めた。
「いっ、痛！ちょ、何してるんですか！」
予想通りの反応に無反応のままアビアは顔を近づけると口を開いた。
「ねえ、甲斐斗知らない？」
「えっ、甲斐斗？何も知らないけど……いないの？」
予想していた返事を聞かされ腕を組みながら考え込むアビア、青年はベットの横に置いていた剣と拳銃を腰に着けると、部屋にある一つの窓を開ける。
「マルス、君は甲斐斗を見たかい？」
ロアの声を聞いた龍は、朝日を遮るように顔を出し何やら伝えようとしていた。
そしてロアは振り返ると、腕を組んでいたアビアに声を掛けた。

「甲斐斗なら機体に乗って何処かに行ったらしいよ」
突然現れた龍にアビアが驚くと思ったが、アビアは何食わぬ表情でいる。
「あれ、龍を見ても驚かないんだね」
「ねー、甲斐斗がどこに行くかはわかるの。連れてってくれない？」
「僕の話し聞いてる……？まぁいいや、甲斐斗の所に連れていってあげるよ」
そう言うとロアは窓から小屋の外に出ると、アビアも続いて窓を上り外に出る。
龍は体勢を低くして二人が乗りやすいように座ると、ロアが龍の背中に座り、その後ろにアビアが座る。
「へー、すごーい。暖かいんだね」
初めて乗る龍の感触に少し興味を抱くアビア、二人が座った事を確認した龍はゆっくりと立ち上がると、二枚の巨大な翼を羽ばたかせ始めた。

――俺は小屋の近くに止めてあった自分の機体に乗り込みＮＦ本部に向けて機体を走らせていた。
それにしても、何なんだこの胸騒ぎは……息がし辛い程胸が苦しい。
何かを暗示させているのか？俺に、何かを伝えようと。
落ち着けない、焦りが俺を取り巻く、俺は何に怯えているというんだ……。
……何かが起ころうとしている、それも途轍もない事が。
「ミシェル、待っててくれ。今すぐ、お前を助けに行くから……だからっ！」
『―ＥＲＲＯＲ―』
「は……？」
目の前のモニターに突如ＥＲＲＯＲという警告表示が現れた。
何度も何度も、覆い重なりながら全てのモニターがＥＲＲＯＲの表示で埋め尽くされていく。

気付いた時には背部から無数の触手が現れ、俺の体に巻きついていく。
そして右肩に触手が突き刺さっていくと、左目の中にも無数の触手が入り込んでくる。
俺は何の抵抗も出来ず、体全体を触手に覆われていき視界が暗闇と化した後、段々と意識が消えていく……。
甲斐斗の乗るＭＤの足元から突如地面を裂いて現れる巨大な触手。
地中から出てきた無数の触手はＭＤに絡みつき機体を捕りこんでいくと地面の中へ引きずり込み、機体は姿を消した。

――時は来た、本部で待ち構えるＳＶとＮＦの前に次々と現れるＢＮの機体と艦隊。
アギトに乗っている愁もその様子をじっと見つめていた。
艦隊のハッチが開き、次々にＢＮの機体が姿を見せる、その中に神威と良く似た機体が姿を現した。
「俺は今更、迷う事は出来ない……」
愁はそう言うものの、心の中では未だにさ迷っている。
フィリオの為に戦うと決め、誓った愁。だがそのフィリオが自分の元から離れる、自分に力が無いからだ。
悔しい思いを何度もしてきた愁だったが、慣れる訳でもなく、耐えられるものでもない。
だから――。

第７７話　伴う、損失

――「君がここにいるって事は、どうやら決心がついたみたいだね」

その青年の言葉に後ろに振り返るフィリオ達、そこには平然とした表情のテトと、体を震わせ怯えた表情をした第１ＭＧが立っていた。

真っ先にゼストがアリスとフィリオの前に立つと、テトは小さく手を振り出す。

「やぁゼスト、こうやって会うのは久しぶりだね。今日は君が大切にしていたフィリオを貰いに来たよ」

ゼストの怒りに震える眼差しを受けながらもテトは余裕の笑みを浮かべていた。

そしてテトは震える第１ＭＧの頭を掴むと勢い良く突き飛ばしその場に転ばせた。

「い、たっ……」

すぐに起き上がろうとする第１ＭＧ、だがテトはその小さな背中を踏みにじる。

それを見ていたフィリオは我慢しきれずゼストの前に移動すると、テトに手を向け振り払った。

「今すぐその足をどけなさい！」

声を荒げるフィリオを楽しそうに見つけるテト、第１ＭＧの背中を踏みつける足をそっとどけると右手をフィリオの方に向けた。

「うん、いいね。今君はＳＶの創始者フィリオ・リシュテルトだ。でもこの子を渡せば、君は僕のものになり全ての地位が消え、ただの人形になる。遊ばれるだけの、一人の人形に」

「私はどうなっても構いません、神が起動すれば全て済むでしょう。だから――」

フィリオは右手を伸ばしテトの右手に触れると、テトは勢い良くフィリオの腕を掴み自分の方へ引き寄せると、ゼストとアリスのいる

前で無理やり口付けを交わした。
「ふふっ……これで君は僕の物。ほら、第１ＭＧは君達に上げるよ、それで精々頑張るんだね」
そう言うとテトはフィリオの腕を掴んだまま後ろに下がっていく、すぐさまゼストが第１ＭＧを抱きかかえると、巨大な陣が描かれている中心へと運ぶ。
アリスはゼストや第１ＭＧは眼中に無く、悲しげな表情であの男の下に行く姉をじっと見つめていた。
「アリス、すぐに儀式だ……アリスッ！」
ゼストが呼びかけるとアリスは後ろに振り返りゼストの所へ向かう。
「さて、それでは僕と共に来てもらうよ。文句は無いよね？」
「はい……ありません」
フィリオの返事を聞いて満足なのか、テトは機嫌良くその場から離れ部屋から出て行きその後ろをフィリオは無言でついていく。
今のフィリオはそれしか出来ず、今のアリスは神を起動させる儀式を行なう事しか出来ない。
それしか、人類と、姉を助ける方法は無かった。
テトはフィリオを連れてＮＦの格納庫に止めてあった黒薔薇（トラディスカント）に向かうと、一人胸部にある操縦席に座りハッチを閉めると、機体を動かし足元で立ち尽くすフィリオを掴み、腹部にあるハッチを開きその中にフィリオを誘導した。
真っ暗な、操縦席とはまた違う席にフィリオは戸惑っていると、前方にモニターが現れ操縦席に座るテトが映し出された。
「ＮＦとＢＮ、そしてＳＶの戦闘が始まる、それを今から僕と一緒に見に行こうじゃないか」
「戦場に向かうおつもりですね……」
「そうだよ、しっかり目に焼き付けるといい。君の仲間たちが死ぬ姿、そして……神が起動する瞬間を」
「てっきり逃げると思っていました、幾ら貴方でも神には敵いませんからね」

「神……ねぇ。本当、君は今まで何を見てきたんだい？
ああ、怖い怖い……温かい希望なんて幻影に過ぎないのに、それを必死で信じる君達人間は、本当に馬鹿で、愚かだ」
「貶したいのなら好きに言ってください、私は神を、未来を信じます」
「うん、そう言ってくれる方が僕も君に教えがいがある。さぁ、行こうか。ＳＶ最後の戦場へ……」
テトの言い放った言葉に疑問を持ちながらも、フィリオはただ黙って祈り続ける。
そんなフィリオを見てテトは笑みを浮かべながらもじっと見つめ目にその姿を焼き付けていた。
無理もない、天国のような温かく豊かな場所で暮らしをしてきた可憐で清楚なお嬢様が、後に永遠の地獄を味わうと思うと、自然と笑みが零れてしまうのだから。

――戦闘が開始された、ＮＦ軍の艦隊のハッチが全て開くと、ＢＮの艦隊に向けて一斉に夥しい量のミサイルが放たれる。
その様子を見ていた紫陽花は艦隊の最前列に向かうと、紫色に光る花びらを散らしながら巨大な2枚の翼を作り出す。
「そんな物、私と紫陽花には通用しないわよッ！」
エリルはそう言うと操縦桿の引き金を引き、紫陽花の両翼に溜めていたエネルギーを解き放つ。
巨大な光の翼はＮＦが放った全てのミサイルを飲み込み次々に爆発させていく。
空は巨大な爆風に包まれるが、その爆風の中から今度はＢＮの放ったミサイルがＮＦの艦隊に降り注ぐ。
急いでＮＦの部隊がミサイルの迎撃を行なっていくが、その隙に戦場にいる全ＢＮ機がＮＦ本部に向けて加速し始める。
「相手の前線は崩れた、各機……俺に続け」
紳はそう言うと待機させていた白義を発進させ、凄まじい速さでＮ

Ｆの部隊に向かって行く。
地上から僅かに浮き、低空飛行をしながら白義は敵の前線へ切り込み、前方に並んでいたギフツを次々に斬り捨てていく。
それを見て、聞いたＢＮの兵士達は白義に続き一斉にＮＦの前線に流れ込んだ。
「エリル、ＮＦの空を制圧しに向かうぞ。羅威、地上は任せた」
紫陽花と白義は急浮上を初めると空に浮かぶ巨大空中空母へと向かい、前線には黄金の機体と、両手にドリルを装備した機体の２機が姿を表した。
「羅威、俺達はこんな所で立ち止まる訳にはいかねえ。俺達が誰よりも先に向かうぞッ！」
エンドミルは両手のドリルを回転させながらギフツやリバインに突っ込んで行き、次々に敵機の胸部に穴を開けていく。
数発のミサイルがエンドミル目掛け放たれるが、巨大な両腕のドリルを盾にするとものともせずに敵を破壊しに向かう。
それを見ていた羅威も操縦桿を握る手に力が入る、ラースがくれた新しい力を手に入れた今、自分の信念を貫くが為に機体を走らせた。

――羅威が基地から出る前、格納庫で新型の機体を渡されていた。
見るも無残だった神威が姿形を多少変え、全く別の次世代機となって蘇っていた。
「エリル、これは……？」
「羅威の新しい機体よ、ラースが考えててくれたの。設計図と資料書が机の上に残ってた……」
「ラースが、俺の為に……」
「わかんないわよー、ラースの事だからもしかして趣味の一環で作ったのかもしれないわね」
笑いながら冗談交じりでエリルはそう言うと、羅威も小さく息を吐き目を閉じて頷いた。
「そうかもしれないな。でも、あいつは口下手だから……こんな形

でしか俺達にメッセージを届けることができなかったのかも、な」
そう言うと羅威は用意された自分の機体の元へ歩いて行く、エリルは羅威の後ろ姿を見つめた後、また小さな笑みを浮かべてエリルはその場を後にした。

――「生まれ変わった神威の力、試させてもらうッ！」
『―ＳＲＣ発動―』
ＳＲＣが発動した瞬間、その場から一瞬にして姿を消す神威。
周りにいたギフツは困惑しすぐに辺りを確認しようとするが、いつの間にか神威はギフツの目の前に立っていた。
「なッ！？」
兵士はただ驚く事しか出来ず、神威の振り下ろした拳がギフツの胸部を貫く。
近くにいたギフツが神威に照準を定め小銃を撃つが神威は特化された両足を使い驚くべき速さで弾丸を交わし間合いを近づける。
そして両腕に帯電させていた電気をギフツの胸部に放つと、機体は瞬く間に電流が流れ動力源が爆破を起こし機体諸共吹き飛ばす。
その隙を狙い神威の背後を狙おうと3機のギフツが小銃を向けるが、神威は背後を見せたまま跳び上がると、華麗に機体を回転させると同時に両腕の電撃を一斉に放ち2機のギフツを破壊する。
残されたギフツが困惑しているのを見て神威は急降下をしながら回し蹴りをギフツの胸部に当て吹き飛ばす。
「これがＳＲＣか、予想以上の動きだな……これならあいつを止める事も……」
その時、一機の機体が神威の横を擦れ違い駆け抜けていった。
見覚えるのある機体に羅威は後ろに振り返る、それは愁が乗っていたあの機体だった。

――「戦闘を早期終結させる……それが可能なのは、俺のアギトしかいないッ！」

ＢＮの艦隊の中心部に走るＢＮの主力巨大戦艦、狙いはその艦だけだった。
その周りの機体と艦隊は眼中に無い、狙いはただ一つ。
ただ1機敵陣に突っ込んでいくアギト、レーダーを見ればそれが一目瞭然だった。
アギトの進行を止めようと艦隊の周りにいる我雲が小銃を構えアギトに向けて発砲していくがその程度の攻撃で怯むアギトではない。
次々に弾丸はアギトに命中するが、アギトの装甲に傷一つ付ける事も出来ず進行を止める事が出来ない。
それならとＬＲＳを片手にアギトに近づく我雲だったが、アギトは我雲の攻撃を避けると同時に左腕を使い我雲の胸部を貫きながら速度を変えず走り行く。
そう、眼中に無かった。ただ目の前を遮るものを払うかのように、簡単に我雲を、嘗ての仲間を破壊していく。
アギトは止まらない、ＢＮも止められない。一直線に真正面から向かうアギト、その進行上にあるＢＮ艦が対戦艦兵器の三連装砲塔をアギトに向けていた。
「撃てぇッ！」
艦長の声と共に４５口径の砲弾が一直線にアギトに向けて放たれた。
砲弾はアギトに直撃、強烈な爆発と爆風が一瞬にしてアギトを包み込む。
「所詮は機体、幾ら頑丈であろうともこの威力の前では木端微塵だな」
モニターを見ていた艦長はそう呟くが、オペレーターは異変を感じていた。
「レーダーに反応有り！？まだ敵機は存在しています！」
「……驚いたな、では……反応が消えるまで撃ち続けろ！」
ＢＮ艦のハッチが開き次々に放たれるミサイルは全てアギトに向けて放たされる。
爆煙の中に次々に入っていくミサイル、たった1機に艦にある武装

のほぼ全てを使い攻撃をしかけていく。

……だが、それでも。アギトが足を止めることはなかった。
艦の攻撃をものともせずにアギトは巨大な右腕を振り上げ、目の前まで迫ってきた艦に向けて振り下ろした。
戦艦の装甲に亀裂が走り巨大な穴を開けると、強引に突き破りながら艦内へと侵入していく。
しかしそれは一瞬の出来事だった、気付けばアギトは艦から出ており、後ろを振り向けば煙を上げて強烈な爆発を起こす艦の残骸がそこにあった。
「俺はこの力でフィリオを助けるはずだった、でも助けられなかった……力の差だ。
　力の差を見せつけられ、俺はフィリオを助ける事が出来なかった」
幾ら足掻いても敵わないなら、どうすればいい。
無駄死にすればそれで終わる、それで終われて本望ならそうすればいい。
だがそんな事誰が望む？自分も周りも死など望んではいない。
だから歯を食い縛り耐え続ける、涙を流し、拳を握り締め、ただひたすら。
それが結果的に、光ある未来になるのならそれも出来るかもしれない。
かもしれない、未来の為に犠牲になった人は尊い犠牲になるのか、それとも名誉ある犠牲になるのか。
人を犠牲にして、本当に幸せな未来を築く事が出来るのだろうか。
戦争で、世界は平和になるのだろうか。
……そんな事わからない、だからこそ不安だった。今自分のしている事は、本当に正しいのか。

――――「愁、今君はどんな気分なのか。僕が当ててみようか」
アギトの動きが止まる、あれだけ猪突猛進していたアギトがピタリ

と動きを止めたのだ。
その男の声、そして顔を見れば愁の心に怒りが込み上げくる、自分から守るはずの人を奪った男。
黒薔薇はアギトのすぐ前に浮かんでいた、武器も持たずにただアギトの方を向いて止まっている。
「テト……ッ！」
「うーん、その態度から見てまず。君は僕を殺したい程に憎んでるねぇ、正解？」
「ああ正解だ！どうしてお前がここにいる、まさかフィリオもそこに！？」
「ああ、フィリオも一緒だよ。見せてあげようと思ってね、この戦場を」
「だったら俺に何のようだッ！」
怒りを露にする愁にテトはいつも通り不敵な笑みを見せながら口を開く。
「ねえ、君は悔しくないのかい？悔しいんだろ？愛する人を他の男に奪われて」
「な、何が言いたい」
「君はあの場にいなかったよね、情け無い男だ。その事から考えて君はフィリオを愛していない……僕よりね」
その言葉が愁の怒りに触れた。素の感情を曝け出し、止まっていたアギトがまた動き始める。
「ふざけるな……ふざけるなぁあああああッ！」
声を荒げながら愁は停止している黒薔薇の元へと走りアギトの拳を突き出そうとした。
だが、アギトの拳は黒薔薇の胸部に届くすぐ目の前で止まった。
「おやおや、あと少しで君はフィリオを殺していたよ」
黒薔薇にはフィリオが乗っている、その事を最初に聞いておきながら今愁はフィリオの乗る機体に向けて拳を突き出そうとしていた。
「愛する人を君は殺そうとした、君は愛より、目の前の憎しみを見

ている、実に愚かだ」
黒薔薇に鮮やかな紅色の模様が浮かびあがると、赤い光を放ちアギトを吹き飛ばす。
アギトは吹き飛ばされながらも何とか踏み止まり衝撃に耐えると、黒薔薇はゆっくりと浮上していく。
「それに僕は神よりフィリオを取った、君はフィリオより神を取った。僕が君よりもフィリオを愛していると思わないかい？」
「そ、それはっ……！」
「それは……何だい？」
愁は何も言い返せない、テトの言っている事は全て事実なのだから。
テトの言葉に罪悪感が押し寄せてくる、自分のしていた事は間違いだったのか、本当はフィリオを助けるべきではなかったのか、と……しかし、それは既に遅かった。
「可哀想な男だねぇ、君は。これ程まで無様な人を見るのも久しぶりだよ」
「何とでも言え！俺は馬鹿で無様かもしれない、だが俺はフィリオを――――」
「うるさいよ」
テトの力が篭った声で呟いた一言は、簡単に愁を黙らせた。
笑みを浮かべていないテト、真剣な顔でただ愁を睨み続けている。
「……言い訳は聞き飽きた。君はここで精々世界の為に戦うんだね、それじゃ」
そう言い残しテトの乗る黒薔薇は浮上していき愁の元から離れていく、愁にはそれを追う事すら出来なかった。
「俺は……何の為に、戦っているんだ……」
強烈な爆発と共に吹き飛ぶアギト。
レーダーを見ればＢＮの機体が辺りを囲み、アギトに向けて集中砲火が行なわれていた。
……涙が止まらない、ボロボロと自分の足元に零れ落ちる涙を見つめる愁。

今まで何を学び、何を教えられ、何の為に戦い、何故自分は戦場に立っているのか……。
仲間と共に戦い、裏切られ、失い。仲間を裏切り、仲間を殺し、失い。
思い返せばいつも失ってきた、何を……全てを……。
家族を失い、親友を失い、仲間を失い、愛する人も失った。
自分の元から皆離れていった……いや、離れていたのは愁自身なのかもしれない。

第７８話　終焉、世界

――「ＳＶの機体を捕獲しただと？」
「はい、お兄様が前に話していたあの白い機体です。見た事も無い機体と交戦した後、突如動きを止めたみたいです。現在厳重に拘束して艦に輸送しています」
「……わかった、だが油断するな。艦内で暴れられたら敵わんからな」
紳が唯との通信を終えると、入れ替わるように今度はエリルとの通信が繋がる。
「風霧総司令官、捕獲された機体とはまさか……」
「愁が乗っている機体だ。突然停止したらしい」
「愁の機体！？どうして――」
驚きの隠せないエリル、更に詳しい事を聞こうとしたが、エリルより先に紳が口を開いた。
「エリル、今は目の前の敵に集中しろ」
「は、はい！わかりました！」
紳の命令にエリルが前方を見れば、そこには翼の付けた機体数十機が空を飛び銃を構えていた。
「ＮＦの空戦用Ｄシリーズ、しかも量産機……でも、私の紫陽花の敵じゃない！」
紫陽花が両翼を羽ばたかせ、周囲に花びらを散らすと。それを見たＮＦの機体は花びらから遠ざかって行く。
だがその機体の横をすり抜けながら見た事の無い機体が突如姿を現した。
空中で高速に動く機体は赤い光に包まれながら空に漂う花びらを弾き紫陽花へと向かっていく。
「な、何。新手？」
「気をつけろ、あれは北部最強の機体だ。一筋縄ではいかない」

「北部最強……だとしても、私は負けません！」
「その心意気は良い。だが無理はするな、奴は強い」
紳の忠告を受け身構えるエリル、花びらを弾くその機体は４本の腕に４本のＬＲＳを握り締め紫陽花の前に現れた。
「近接特化型！？なら距離をとれば……！」
紫陽花は花びらのように空を華麗に舞い距離をとろうとする、だが敵機は惑わされずただ一直線に飛びこむ。
「速い！？」
咄嗟の判断で紫陽花の腰にある忍刀（しのびがたな）に手を掛けるが、それよりも速く敵機が目の前に現れる。
同時に振り下ろされる４本のＬＲＳ、何とか距離を離し回避に成功するが、敵の猛攻は更に続いた。
敵機は紫陽花に隙を見せないまま次々にＬＲＳを振るう、紫陽花も何とか応戦しようとするがその素早い攻めにただ避けながら逃げることしかできない。
「何なのよこの機体！さっきからずっと纏わりついてきて……！」
レバーを引き上げ出力最大で一瞬後方に移動する紫陽花、その僅かにできた敵機との距離を見て両翼を目の前に敵機に向けた。
「もらった！」
両翼を敵機に向けて引き金を引き花びらを纏う光を放つが、敵機はそれを予測していたのか難なく回避すると距離を縮めてくる。
だがそれを防ぐかのように白義が敵機の前に現れた。
「この相手は俺に任せろ、お前はあの艦を止めにかかれ」
「す、すいません。了解しました！」
紫陽花はすぐさまその場から飛び去ると、上空に浮かぶＮＦの空中戦艦へと向かう。
それを止めようと敵機が紫陽花を追おうとした時、その敵機の背後に白義が立つと瞬時に２本のＬＲＳを振りかざした。
だが敵機は後ろを向けているにも関わらず、２本の腕が背を向くと、瞬時に振り下ろされた白義の攻撃を受け流した。

「背後を狙うとは!?この卑怯者めがッ!」
「こっちの台詞だ」
機体を横に一回転させ白義を振り払うと、４本のＬＲＳを一斉に白義に向けて突き出し胸部を貫こうとする、だが白義は瞬時に交わしてみせると両肩のハッチを開きＬＲＣを放った。
突然の強烈な光に敵機はなんとか回避しＬＲＣを避けるのに成功はしたが、その後ろにいた複数のＮＦ機は回避が遅れ忽ち一掃されていく。
「各機白義から離れろ!この相手は私に任せてお主等はあの紫色の機体を止めに行け!」
命令によりその場にいたＮＦ機が次々に後退すると空中戦艦へと向かった紫陽花を追っていく。
「……早々に勝負をつけるか」
邪魔者は消えた。二人が同時に呟くと、両機体は身構え互いに睨みあいながら間合いをとっていく。
そして両者の間合いが揃った時、同時に機体を走らせた。

――――上空で白義と敵の特機との激しい攻防が繰り広げられる中、地上では羅威と穿真を先頭に次々にＮＦの前線を崩していた。
「おい聞いたか羅威、愁の奴捕まったみたいだな」
「ああ、俄かに信じ難いな……あいつはそう簡単に負けるような奴じゃない。何かの作戦かもしれないな」
「かもな、でも愁は姑息な真似はしないだろ?」
「……俺達の知っている愁ならな」
そう羅威が答えた瞬間、前方から見覚えのある1機の赤い機体と、青い機体が姿を見せる。
「赤いリバイン、それにあの鍵爪を着けた機体は……厄介な相手が現れたな」
羅威がそう呟くと、神威の後で走っていた我雲に乗っている香澄が口を開く。

「私と羅威であの青い機体を破壊するわよ、雪音と穿真はあの赤いリバインを破壊しなさい」
「へいへい、んじゃあ気い引き締めて行くかぁッ！」
羅威と穿真が二手に別れると、その後ろにいた香澄と雪音の乗る我雲も二手に別れる。
そして二手に分かれた我雲は前方から向かってくる機体に向けて銃を構え射撃を開始した。
銃弾を難なく交わす赤いリバインはＬＲＢを構え穿真の乗るエンドミルへと向かい、その後ろのリバインに乗っている由梨音はエンドミルの後方にいる我雲を狙い銃を構える。
「赤城少佐！あの我雲は私が相手をします！」
「わかった、この機体は私に任せろ」
その時、由梨音との通信中。突如赤城のリバインに穿真からの通信が入ってくる。
「よう、また会ったな」
「これから互いの刃を交えようとする時に、何の用だ？」
落ち着いた様子の赤城だが内心は闘志に溢れ感情を抑えている。
穿真はその逆で見るからにやる気を見せ、戦闘意欲を掻き立てていた。
「用なんて無えけど、一つ言っておこうと思ってな」
無言のまま耳を傾ける赤城に、穿真は言葉を続けた。
「前に言ったよな、次会う時容赦はしねえって……だから今日、俺は全力でてめえを倒すッ！」
それを聞き終えた赤城は小さく笑ってみせると、何時にも増した真剣な顔で睨み返した。
「それを態々言いたかったのか？……安心しろ、私も同じだ」
そこで通信は切れ、互いの機体は目の前にまで接近していた。
胸部を狙おうとエンドミルが両腕のドリルをリバインに向けて突き出すが、その攻撃を予測していた赤城は難なく回避すると、高らかに振り上げたＬＲＢを敵機目掛けて振り下ろす。

だが機敏に後方に飛び、振り下ろされた刃を避けるエンドミル。そして両腕のドリルを目の前のリバイン目掛けて同時に放った。
リバインはドリルを避けるため跳び上がり回避に成功するが、ドリルは軌道を変えると背部目掛け突き進んでくる。
「同じ手など通用せん！」
赤城はそう言ってリバインの背部から迫り来るドリルを避けようとするが、前方からは両腕にチェーンソーを伸ばしたエンドミルが突進してきていた。
「前後からの同時攻撃！てめぇに避けられるかぁッ！？」
同時に向かってくる機体とドリル、一瞬躊躇う赤城だったが機転を利かせ腰に付いてある手榴弾に手を掛けると、それを前方から向かって来るエンドミル目掛け投げ込んだ。
それを見ていた穿真だったが、その攻撃を回避せずただ一直線にリバインの元へと向かう。
「装甲の一枚や二枚くれてやる、だが！そんな物で俺を止められると思うなよ！」
投げられた手榴弾の強烈な爆発、一瞬煙で視界を遮られ機体の装甲に少し被害が出るものの、機能は劣る事無く健在だ。
「もらったぁあああああッ！」
声と共にエンドミルの両腕を振り上げると、後ろから来ていたドリルが幅を狭め始め確実に機体の位置へと狙いを定め突進する。
振り下ろされたチェーンソーの刃をＬＲＢを受け止めた赤城、その激しい摩擦に夥しい量の火花が飛散していく。
「受け止めたようだが、それじゃあ後方はがら空きだな」
穿真の言う通り、前方から何とか持ちこたえていても後方のドリルは既にリバインのすぐそこまで来ていた。
「浅はかだな」
ただ一言呟いた赤城、焦る様子も無く機体を動かした。
ＬＲＢを出力を上げほんの少し敵機を弾き飛ばすと、勢い良く後ろに飛びあがり後転する。

背部から来ていたドリルを何とか交わしてみせるリバイン、ドリルは軌道を変えずリバインの目の前に立っていたエンドミル目掛け突き進む。
「俺が自分のドリルで自滅するとでも思ったか？馬鹿にしすぎるのにも程があるぞッ！」
ドリルは前後に回転すると丁度良くエンドミルの両腕に戻ってくる、そして後転したリバインの着地を狙うよう出力を最大にして突進していく。
そして右腕のドリルを着地したリバインに向けると、一直線に胸部に向けて突き出そうとした。
だがそれよりも早くリバインは背部に付いているアサルトライフルに手を掛けると、ある一箇所を狙って引き金を引いた。
「……あ？」
その時、衝撃と共に振り上げたエンドミルの右肩の動きが止まる。
振り上げたまま腕を振り下ろす事も、突き出す事も出来ない。
ＬＲＳが見事にエンドミルの右肩を貫いていたのだから。
「なっ、なんでこんな物が！？いつの間に……ッ！？」
動揺したままエンドミルはリバインへと向かっている、そしてリバインはＬＲＢを振り上げるとエンドミルの右側をすり抜けるように移動すると同時にＬＲＢを振り下ろした。
「私の勝ちだ」
手榴弾を投げた時、同時に腰に付いていたＬＲＳをエンドミルの右肩へ投げつけていた。
それも急所を外し、大した被害が出ないような箇所に。
右肩にＬＲＳが突き刺さった事を気付かぬまま戦闘を続けていた穿真、たしかに破損は小さく機能に不備は無かった。
だが銃弾を受けた事により刃先は大きく動き、また開いた穴に銃弾が入り右肩を完全に破壊したのだ。
大きく崩れ落ちるエンドミル。腹部を斬り落とされ、もはや戦闘を続行する事は出来なくなっていた。

「て、てめえ。俺を倒すんじゃねえのか！何故胸部を外した！？」
「何を言っている、お前は倒れているだろ」
「はぁ？……そういう意味じゃねえだろ！」
「結果的に勝負はついた。さて、私にはまだやる事が残されている、またな」
そう言い残し赤城は別の戦場へと向かう、すると倒れたエンドミルの側にすぐさま雪音の乗る我雲が到着すると、上半身だけが残されたエンドミルを抱え前線から離脱していく。
「穿真君！どこか怪我はありますか！？」
「いや、怪我は無いが。機体が……」
見るも無残に斬り捨てられたエンドミル、上半身だけを残したその姿は無様としか言いようがない。
「こんな格好で戻る事になるなんて、格好悪ぃなあ俺は……」
「そんな事ありません！穿真君はとても勇敢で格好よかったです！それに比べて私は、相手のリバインと1機を止めるだけで精一杯で……」
「そんな事ねーよ、止めてくてたお陰であの赤いリバインとの戦闘に集中できたしな、ありがとよ」
思いがけない穿真の言葉に戸惑いながらも照れ臭そうに頭を下げる雪音。
だが穿真の心境は複雑だった。
あの時確実に殺せていたはずの場面で赤城は殺さなかった、もし自分が同じ場面なら確実に殺していた場面を。
「くそっ……俺だって人殺しは好きじゃねえ。でもな、ここは戦場だろが……戦場で敵を殺さなくて、どうやって戦争を止めんだよ……」
――穿真と赤城が戦っているのと同時に、別の戦場では羅威の乗る神威と葵とエコの乗るライダーが死闘を繰り広げていた。
「葵、集中しないと……負ける」

エコの呟きと同時に神威の強烈な蹴りがライダーの懐に入る。
大きく蹴り飛ばされるライダーだが、何とかその場に踏みとどまり身構える。
「ほら、ね……今は愁と、フィリオの事は忘れて。戦いに集中しないと――――」
「集中できる訳無えだろ！フィリオをあんな野郎に渡して、愁はＢＮに捕まっちまって……一体どうすりゃいいんだよ！」
葵が周りを見れば、次々にＮＦとＳＶの機体が破壊されていき前線が崩れていく。
ＢＮは一斉に攻め入り、次々に破壊されていくＳＶの機体。世界を、人間を救うための戦いに出た彼等は、その守るはずの人間を殺し、殺されていく。
「戦って……それしか今の私達にはできない」
エコの言葉に葵は大きく首を横に振ると、目に溜めていた涙が零れ落ちた。
表面で悲しみと怒りを見せる葵、それに対してエコは心の奥底にそんな感情を押し殺していた。
「今戦ってどうなる！？エコもわかってんだろ、俺達が戦う相手はこいつ等じゃないって事を！」
「じゃあ戦わないの？……戦わないと、死ぬよ」
その言葉は現実だった、容赦無く攻め込む神威に対し何の反撃もできないままただ攻撃をされ続けている。
序盤は神威の攻撃を回避していたが、次第に動きを読まれ今では容易に懐に入られてしまう程だ。
「私は諦めない……生きていれば、必ず希望は出てくる、だから――――ッ！」
死ぬわけにはいかなかった、エコは知っている。生きていれば必ず希望にめぐり合えると。
現にエコには合った。絶望の日々、どん底の世界から……希望に溢れた世界への扉を。

辛い人生を送ってきた自分でも。明るく、楽しく、温もりを感じられる時間と場所が存在した。
幸せだった……が、その幸せはやがて消え。今のような戦地に身を投げる事になっている。
だが、それでもエコは信じている。嘗ての自分を思い出し、絶望から希望へと変わった日々を目指して。
神威の放つ電撃を回避しようと後方に跳ぶライダー、だが後部からはそれを待っていたかのようにＬＲＳを振り上げた我雲が待ち構えていた。
「あぁっ――――」
エコだけでは限界だった、どうする事も出来ない状況に躊躇うことしかできない。
だがその時、ライダーは回転と同時に後方に回し蹴りをお見舞いすると我雲の握っていてたＬＲＳを軽やかに蹴り飛ばす。
そしてもう一方の足で我雲の顔面を蹴り飛ばすと、軽快な動きで神威との距離を取る。
「機体の扱いも儘(まま)ならねえ癖に、言う事だけはいっちょまえなんだな……ったく、まさかエコにそんな事言われるなんて……」
もはやそこにいるライダーは以前のライダーではない。
しっかりと二本の足で地面に立ち、先程とは打って変わって戦意に満ち溢れていた。
「お陰で目ぇ覚めたぜ」
ニヤリと笑みを見せる葵、それを見てエコは安心したのか小さな溜め息を吐くと、互いに操縦桿を強く握り締める。
「お前の言う通り、今ここで迷った所で何にもなりゃしねえ。だから今は、生きる為に戦う！」
生きていればこそ出来る可能性、それに気付かされた葵は先程の自分が馬鹿馬鹿しく思えた。
「行くぞエコ！俺達はこんな所で立ち止まる訳にはいかねえからな！」

「うん……！」

――各戦場で激戦が続く。地上も空中も互いの銃弾と爆弾飛び交い、いつその攻撃が自分の機体に直撃してもおかしくない状況だ。

そして今、空では数百発の対空砲火と、数十発のレーザー攻撃をかわし続ける紫陽花がそこにいた。

ミサイルは紫陽花を追尾できない為、目標に目掛け飛んだ後、広範囲に散らばる拡散型を使用。

更にはビーム兵器、レーザー兵器を主力に圧倒的な火力で空中戦艦に近づけさせないようにしている。

「やっぱり1機だけじゃ私に攻撃が集中するのも無理ないわよね……。

でも、これを止めないと圧倒的なＢＮが不利になる、だから私の紫陽花で止めないと！」

急いで戦艦に近づこうとする紫陽花、だがその紫陽花の前に突如黒い装甲に光る赤い模様を施した1機の機体が現れる。

「また新手！？」

突然の敵に引き金を引き両翼に溜めていたエネルギーを放とうとしたが、それよりも早く紫陽花の間合いに入る黒薔薇。

紫陽花が振りまく花びらの影響を受ける事無く黒薔薇は手に持っていた剣を紫陽花の腹部に向け突き出すが、寸前の所で横に回避行動をとり剣を避ける紫陽花。

それと同時に引き金を引き、輝く両翼を黒薔薇に向けて放つ。

広範囲に広がる翼に黒薔薇の回避は間に合わない、巨大な両翼に飲み込まれていく黒薔薇を見てエリルは小さく溜め息を吐いた。

そして衝撃と共に崩れ落ちる紫陽花、綺麗に右肩と右翼が斬りおとされ残骸が地上に落ちていく。

「えっ――？」

今起こった出来事を理解出来ないまま落ちていく紫陽花。

そして落ちながらもエリルには見えた、半透明の球体の形をした物

に囲まれた無傷の黒薔薇を。
直撃を受けたにも関わらず無傷のまま何の変哲も無い様子で立っている黒薔薇を見ながら落下していく紫陽花、すると黒薔薇は紫陽花に向けて投げた鎌が返って来るのを見て簡単に戻ってきた鎌を掴むと、今度はそれを振り上げながら落下していく紫陽花目掛け急降下しはじめた。
「そんなっ、私の紫陽花が……！」
圧倒的な戦力の前に傷一つ付く事のなかった紫陽花。だが今、目の前の機体に簡単に右腕と右翼を持っていかれた。
機体は制御が効かず地面に落ちる前に何とか出力を取り戻し地上への直撃は免れるが、凄まじい振動と衝撃が操縦席にいるエリルに伝わる。
「う、ぐっ――――！」
大きく体を叩きつけられ、息苦しさと痛みで意識が朦朧とする中、上空からは鎌を振りかざした機体がすぐそこまで来ていた。
「あ……」
戦場ではほんの一瞬の出来事で命が消える、それを今になって目の前で知らされる事になった。
鎌の刃先は機体の手前で止まり、その鎌の刃先を止めるかのように横から一本の剣が延びていた。
「赤いリバイン！？赤城さん！」
赤いリバインはＬＲＢを振り上げると鎌を弾き、その振り上げたＬＲＢを黒薔薇に向かって振り下ろす。
すると黒薔薇は一旦離れて距離を取ると、様子を窺うように見つめはじめた。
「あの色、見覚えがあるなぁ……」
リバインに突如通信が繋がると、両者互いの姿がモニターに映し出された。
「ほら、やっぱり」
テトは納得するように頷くが、赤城は警戒した眼つきでテトを睨ん

でいる。
「強制的に通信を繋げた？貴様、何者だ」
その赤城の表情に首を傾げるテト、想像していた反応が帰ってこない事に疑問を抱いた。
「ん？僕の事を……忘れてる？」
「忘れる？知らんな、お前の事など記憶に無い」
「へぇ、それは好都合だ。これでまた君の苦痛に歪む表情が見れる……思い出させてあげるよ、事実と現実をね」
操縦桿を握り締めていた左手を放すと、その手を正面に立っている赤城のリバインへと向ける。
その途端、赤い紋章が発光しながらリバインの足元から浮かび上がると。赤城の視界が暗闇と化し、脳裏にある記憶が浮かび上がる。
「なんだ、これはっ……」
暗闇の中、鮮明に浮かび上がる記憶。生々しい感情と感触、そして目の前で不敵な笑みを浮かべ自分の肉体に手を伸ばす男の姿。
「ひっ、や、やめ――」
目の前に広がる光景が止まる事は無い、目を瞑っても、手で覆い隠そうとしても、必ず映し出される。
「あの日、あの時、君は僕に何をされたのかな……？」
テトの言葉に体が小刻みに震え、操縦桿から手を放す赤城。そして自分の体を抱きしめると俯きながら目を見開き何もする事が出来なくなる。
「や、いや…や、め……あ……」
目の焦点はぶれ、抱きしめる力が強まっていく。服の皺が深まり、指先が腕に食い込む程に。
「美しい……最高の表情だよ、僕は今とても満足だ」
楽しそうに笑みを浮かべるテト、すると黒薔薇の手に持っている大鎌は形を変えると、鋭い剣へと変わりその剣先をゆっくりとリバインに向けた。
「だから後は……君の死に様を見るだけさ」

近くにいたＮＦとＳＶの機体が黒薔薇を阻止しようと動こうとするが、周りにいた全ての機体の足元の赤い模様が浮かびあがると、一斉に機体は動きを止め機能が停止していく。
誰も止める事は出来ない、その場に倒れていた紫陽花も阻止しようとしたが、機体が思うように動かす事も出来ず、リバインとの通信もできない。
「幾ら否定しても無駄さ、現実だからね」
現実、その言葉が更に赤城を闇に引きずり込む。
激しい嫌悪感が自分の中に入り込み、次々に精神が崩壊していく。
そして黒薔薇は走り出した、近くにいる機体はただ何も出来ず立ち尽くし、呆然とその光景を見ている事しか出来ない。
鋭く尖る剣先を赤いリバインの胸部に向けて狙いを定める、近づいてくる黒薔薇に対しリバインは動こうとしない。
リバインの手から滑り落ちる剣、震えて怯える事しか出来ない赤城……もはや立ち上がることは出来なかった。

――突如地面に亀裂が走る、その亀裂は忽ちリバインの前まで走ると、凄まじい閃光と共に１機の機体が姿を現した。
右肩に聳える巨大な大砲、茶色の装甲に、二本の刀を手にした機体。
その長刀を背負う背中は赤城にも見えた、嘗て背を向け一人戦地へと向かった機体の姿を。
「突然何かと思えば……僕の楽しみを邪魔するなら死――」
一瞬の出来事にテトの言葉が詰まる、剣を手にしていた黒薔薇の右腕が斬り飛ばされ宙を舞うと、無残に地面へと落ちる。
「んっ――？」
突然の出来事に頭はついていかず、目にも止まらぬ速さで振られた刀に何も出来なかった。
そしてまた機体に衝撃が走ると、今度は機体の左腕が吹き飛んでいく。
その機体の振るう剣捌きもまた、肉眼では確認出来ない程の速さだ

った。
「こ、こいつッ！？」
一瞬にして両腕を斬り飛ばされたのが未だに信じられないテト、急いで機体を動かすと、目の前に現れた機体から離れるように浮上していく。
すると地上にいた機体から赤い模様が消えていく、だがその場にいた機体は動こうとしない。
紫陽花も何とかその場から立ち上がるが、停止したまま動き始めなかった。
「そんなっ……どうして、あの機体が……」
困惑したまま動かない機体に不審を抱き、すぐに紳がエリルへと通信を繋げる。
「どうしたエリル、何があった」
「そ、それが。破壊されたはずの機体、大和が、突然地中から――――！？」
その時、戦場にいる全ての機体のレーダーに強い反応が現れた。
巨大な揺れに皆が踏みとどまり体勢を立て直す中、誰もが息を呑んだ。
「ＥＲＲＯＲ！」
ＢＮの戦艦からＮＦの本部、そして戦場を囲むようにして次々に聳えていくＰｌａｎｔ態。
全てを囲む壁のようにそそり立ち、もはや逃げ道など存在しなくなった。
「Ｐｌａｎｔ態！？それに何よこの数……完全に、囲まれてる……！」
その場にいた全ての兵士に戦慄が走った、まるでこの状況を待っていたかのように現れたＥＲＲＯＲ、そして百本を越えるＰｌａｎｔ態。
Ｐｌａｎｔ態からは次々に各種のＥＲＲＯＲが溢れ出てくると、一斉に兵士達に襲い掛かる。

困惑する兵士達、前方から敵軍が、後方から無数のＥＲＲＯＲが近づいてくる。
逃げ道も無くなった今、彼等は戦うことしか出来ない、それが例え無謀な事だわかっていても。

――「武蔵……？」
操縦席で呟いた赤城の言葉、通信を繋げていないにも関わらず、まるでその声が聞こえたかのように大和は後ろに振り返った。
「本当に、武蔵…なのか……？」
リバインを動かし大和に触れようとしたが、大和は一歩後ろに下がると、リバインの横をすり抜けるように去っていく。
「ま、待て！武蔵――」
大和を止めようと機体に手を伸ばそうとした時、先程と同じような揺れが起こり始める。
その揺れにＥＲＲＯＲ達が一瞬動きを止めると、全てのＥＲＲＯＲがある一箇所へと首を向けた。
ＮＦ本部の前に、輝く巨大な線が走ると共に陣が形成されていく。
光に触れたＥＲＲＯＲは忽ち塵となり跡形も無く消え、その光を止める事が出来ない。
陣は完成した。その美しく光り輝く陣に回りにいたＮＦの兵士達は心奪われ、希望と期待を胸に降臨するのを待った。
その希望と期待と答えるかの如く、陣の中からは白き巨人が聳えていく。
そして全身が陣から出終わると、その全貌が明らかになった。
白き巨人を象ったか『神』、全体的に丸みを帯びた体に、巨大な手足。
全身には陣で描かれたような文字や絵が薄らと刻み込まれており。
その神々しく巨大な姿は、正しく神だった。
「神が……神が降臨したぞ！これで世界が救われる！」
ＮＦとＳＶの兵士達で次々と歓声が巻き起こる、だがそれとは対称

的にＢＮの兵士達は絶望的な表情をしていた。
「これが神……これが俺達の、敵」
紳は何とか感情を抑え今この場に踏みとどまっていたが、他のＢＮの兵士達は慄き、少しずつ後ずさりしていく。
その神々しさと、天にとどく程の大きさで聳えたつ巨人の前に、どうやって戦い、勝てというのだ。
地上に降り立った神は、顔にある６色の小さな宝石のような物が動くと、辺りを確認するかのように首を動かす。
それをＮＦの本部内で涙を流しながら見つめるアリスがいた。
「ゼスト、これで、これでこの世界は、ＥＲＲＯＲから守られます！」
「ああ、よくやった。アリス」
「私は神に伝えたの、ＥＲＲＯＲの事も、この世界が最後の世界だって事も……だから！」
アリスが外を見れば、神に向かって行くＥＲＲＯＲは次々に神の体から放たれる白い光により神に触れる事無く一瞬にして塵へと変わり、消えていく。
その絶対的な力を見て確信した、ＳＶは間違っていなかった、神は、ＥＲＲＯＲに勝てると。
……だが皆は忘れている、ＥＲＲＯＲはそう簡単に負ける程弱くない、ＥＲＲＯＲは、ＥＲＲＯＲは……。
誤りが有り続ける世界で、消えることはない。

――次々に地面から溢れ出るＥＲＲＯＲ、もはやＰｌａｎｔ態はその場所一面に咲き始め、大地は赤く染まっていく。
その間からは万を超えるＥＲＲＯＲが溢れ、次々に神へとなだれ込んでいく。
地上のいる兵士達はＥＲＲＯＲの脅威から逃れる為、必死に応戦を行ないながら神の元へ近づいていく。
「神がいれば俺達は助かる！皆神の元に行け！一番安全な場所に避

難するんだ！」
一人の兵士が声を荒げ、先陣をきって兵士達を神の元へと誘導していく。
すると、一本の光が神に近づいてくその機体に触れると、機体は一瞬にして簡単に塵へと化した。

――神の目線から見れば、ちっぽけな人間よりも、遥かに数の多いＥＲＲＯＲを見ていた。
攻めてくるＥＲＲＯＲを見て神は裁きを下す、巨大な両腕を前方に突き出し手を合わせるように動かし、間隔をあけて手を止める。
そして左右の手の平に光を放つ束が溢れ出てくると、その束は球体へと姿を変えた。
その球体が神の手から落ちた時、球体から溢れ出る強烈な光は太陽よりも白く輝き、その場にある全てを光で包み込んだ。

――「やれやれ、馬鹿の俺でも少しずつわかってきたぜ」
神の前に現れる一体の黒い機体、神はその機体に目を向けると、不思議そうに見つめている。
「馬鹿なＥＲＲＯＲがてめえを止めようと俺を利用しようとした、まぁ失敗に終わったがな」
男は血のついた左手で右腕の感触を確かめると、今度はその右腕で目元を触る。
「ＥＲＲＯＲもお前も必死だな、余裕が無い」
からかう様に小さく笑ってみせた男はそう言って目の前の神を睨んだ。
巨大な黒剣を握る魔神『ＭＤ』、目の前には魔神の百倍以上の大きさの『神』が立ちはだかっていたが、その巨体に恐れる程、この魔神は弱くない。
「お前は力が欲しいが為に、ミシェルを使った。だが、それは逆に俺が力を取り戻す原因にもなった……それが、てめえの敗因だ」

そう言葉を吐き捨てた後、魔神はたった1機で神の元へと飛んでいく。

戦う理由は人の為でも世界の為でもない……ただ、神を破壊したい。

それだけだった。

第７９話　屈辱、屈服

――既に廃墟と化した軍事基地、廊下には微かに灯っているだけで全く物音もせず人気も無い。
その廊下には無数の扉があり、その中の一つの扉が開くと、一人の青年が部屋の中へと入っていく。
青年が入った部屋もまた薄暗い、部屋の奥に向かうとそこにある椅子に座りベットの上で座っている女性の方へ体を向けた。
「フィリオ、君の念願だった神が起動したよ、感想を聞かせてほしいな」
愕然とした表情で俯いたまま動かないフィリオ、そんな彼女を見てテトは嬉しそうに微笑むと、更に言葉を続けた。
「君は見たよね、神が起動したせいであの場にいた全ての人間が――」
「止めてッ！」
テトの言葉を止めるように咄嗟に叫ぶフィリオ、その目には涙を浮かべ、戸惑いの表情を浮かべている。
「全て君のせいさ、神なんてものがこの世にあると信じた君のね」
「大体君は元の世界で何を学んだんだい？神がいれば助けてくれるはずじゃないのかい？
……神なんて存在しない。神は、弱者が縋る為だけに創りだした架空の物さ」
テトの言葉がフィリオの頭の中に響いていく、今まで信じてきた神が人間の牙を向けたあの時、フィリオの心の中で何かが崩れ落ちた。
それでもフィリオは必死に抵抗した、たしかに人間も被害を被ったのは事実。
だがその絶大な力は、あのＥＲＲＯＲをいとも簡単に消していく程。
「そ、それでも……神の力があれば、この世界は、ＥＲＲＯＲの猛威から守ってくれます……！」

涙ながらのその言葉に一瞬呆気に取られるテトだったが、やがて笑い出すと額に指を当てて口を開いた。
「たしかに神の力は絶大さ、最強に等しい。でも、全ての世界を滅ぼしてきたＥＲＲＯＲも、また最強に等しい。
　故に互いは無限の力を持っている、これが何を意味するかわかるかい？」
椅子から立ち上がり、ベットの上に座っているフィリオの横に座るとテト。
そしてフィリオとの顔の距離を近づけると、優しく教えてあげた。
「永遠の争いさ、決して終わりのない戦争。そんな世界で人々は恐怖に震え、苦しみ、死ぬ。やがて人間に限らずほぼ全ての生き物がこの世界から消える、つまり絶滅するのさ。それでもこの世界ではＥＲＲＯＲと神との争いが続くのだろうけどね」
永遠の争い、世界を救う為の神と、侵略者ＥＲＲＯＲとの戦争は何千年たっても終わりはこない。
その間に大地は荒れ果て、水と空気は汚染し、人が死に、世界が死ぬ。
「そんな……私のせいで、この世界の……人が……」
恐怖で体の震えが止まらないフィリオ、自分の顔に手を当て、どうしていいのかわからずただ震え続ける。
胸が苦しく息も荒れる、脳裏には皆の姿が浮かび上がるが、全て闇に消えていく。
「今更気付いたのかい？君はとんでもない過ちを犯した事を……もう遅いよ」
そう言うとテトはベットの上に座っていたフィリオの体を突き飛ばす。
起き上がろうとフィリオが両手を動かそうしたが、見えない力に縛られ全身が身動き一つ出来ない。
「い、いや……嫌ッ！放して！放してください……！」
首を大きく横に振りながら抵抗を試みるが、体を動かす事の出来な

いフィリオには今のテトを止める事などできるわけがなかった。
「存分に抵抗していいよフィリオ、その方が後々君を見ていて楽しくなるからね」
容赦など無ければ同情も無い、悲しみ傷つくフィリオをもて遊びにかかるテト。
彼は知っている、女性の身と心、精神に一番深い傷を付ける方法を……そして、その傷を治す方法も。
「どうして……どうして貴方はこのような卑劣な事をするのですか!?」
「卑劣？違うよフィリオ、僕は皆より素直なだけさ。人の持つ欲望にね。
それに目の前に身動きのできない可愛くて綺麗な女性がいれば……その場にいる大抵の男は何をするか、わかるよね」
余裕の笑みを見せるテトにフィリオは悔しくも反論する。
「助けてくれます！困っている人がいれば、きっとその人は助けてくれます！」
フィリオは信じている、人の力、人の可能性、人の心を。
だが、それは余りにも非常識的なものだという事をまだ彼女は知らない。
「そう、なら信じていればいいさ。時期に君にもわかるよ、人間……がね」
そう言って動けないフィリオの唇に自分の唇を重ねるテト、フィリオは目を瞑り必死に耐え続けた。
……テトは知っている、人の醜さ、人の汚さ、人の愚かさを。
そしてそれは、人間誰もが持っているという事を。
世界は神の起動によりまた変化する、人類にとって最悪の方向へと。
秩序が乱れ、法は力を無くし、支配が失われていく。
力を持つ人々はそれを己の為に利用し、力の無い人々は……恐れ苦しみ服従するしかない。

――「フィリオ！？」
目の前に悲しそうな表情を浮かべるフィリオが闇の中へと姿を消し、愁はその闇に手を伸ばしていた。
だが気付けばそこは操縦席の中だった、力無く背もたれに体重を乗せ、ゆっくりと深呼吸を行なう。
「俺は、たしかあの時……」
テトとの会話の後の記憶が無い、自分が何をしていたのかも、何をされたのかも。
機体の電源は落ちており、すぐさま再起動に取り掛かろうとした時。操作をしていないにも関わらず勝手に操縦席の扉が開く。
「そこの男、両手を上げて今すぐ機体から下りろ」
ＢＮの兵士が銃を構えその入り口に立っていたのを見てようやくわかった、自分がＢＮに捕らえられた事を。
愁は言われる通り抵抗する素振りを見せず両手を上げて機体から下りると、胸部には橋が掛けられており、その橋に下りる。
そして前方を見ると、その橋の出口には銃を構えた兵士達が横一列に並び、その後ろに見覚えのある人達が立っていた。
紳に羅威、穿真そしてエリルと……昔共に戦ってきた仲間達の姿がそこにあった。
だがそれを見た途端、愁は後ろで銃を突きつけていた一人の兵士の銃を素早く奪うと、その銃口を紳に向けた。
その瞬間その場にいた兵士達は一斉に愁に銃を構え引き金に指を置くが、紳は片手を上げてそれを止める。
「愁、無駄な抵抗は止めろ。今そこで引き金を引いた所でお前が死ぬだけだ」
紳の言葉を無視しながら愁は横目で自分の機体を確認すると、機体の腕や肩など厳重に固定されている事がわかった。
愁は銃を紳に向けたまま動かない、紳の横にいる穿真や羅威は何か言いたげな表情で立っていた。
「俺にはやるべき事があるので行きますね」

愁はそう言って銃を下ろすと、後ろに振り返り自分の機体へと向かっていく。
その時、後ろから一人の男が愁の名を叫んだ。
「ちょぉおおおおっと待てや愁ぅううううッ！てめぇ俺達を無視して帰る気かぁッ！？」
銃を構えた兵士達の前に立ち、怒り心頭の穿真が現れると。愁はその声を聞いて足を止めた。
「穿真の言う通りだ。愁、俺も……いや、俺達はお前に話しがある」
穿真に続いて羅威が前に出ると、側にいたエリルも前に出てくる。
「愁！今は深刻な状況を迎えてるの、だから私達の話しを聞いて！」
3人の呼びかけに愁はまた後ろに振り返ると、三人の顔を見つめ口を開く。
「俺は話しなんてない、邪魔をするならお前達を殺す」
愁の放った冷たい言葉に、その場にいたエリル達の表情が凍りつく。
そしてその時、兵士達の中から腕に包帯を巻いた一人の女性が現れた。
「葵……？」
疑問を抱いたものの、仮面を被り終えた愁は葵の様子を窺っていた。
「止めろ愁、今は人間同士で争ってる場合じゃねえ……神が、暴走を起こしたんだ」
「神が暴走？という事は、神が起動したんですか？」
「ああ、起動したさ。神はＥＲＲＯＲに攻撃を開始し、同時に人も巻き込んだ。
神は人類よりＥＲＲＯＲへの攻撃を優先したんだ、俺達の信じていた神は……もういないんだッ！」
その葵の言葉に愁の頭の中で真っ先に浮かんだのがフィリオの事だった。
自らを犠牲にして神の起動を優先したフィリオ、それなのに、フィリオの想いが無駄になる……。
それなら今自分がしなければならない事は何か、答えは一つしか無

い。
今の愁にはその答えにただ突き進むしか自分を保てる方法が無かった。
「俺は元々神なんて信じていません、重要な話しをありがとうございました。それで、もう用はありませんね？」
「だ、だから！馬鹿な真似はよせって――」
止めにかかる葵の言葉を掻き消すかように、一発の銃声が格納庫内に響く。
愁がアギトの胸部付近にいた兵士を撃ち殺したのだ、それと同時に前方に横一列に並んでいた兵士達が一斉に引き金を引き、けたたましい銃声が辺りに響き渡る。
すると愁は銃を投げ捨て左右高速に動きながら相手をかく乱し、銃弾を避けながら兵士の元へ駆け抜けていく。
多少の銃弾が体に当ろうとも服を貫通する事は無く、気付けば愁は兵士達のすぐ目の前にまで来ていた。
余りの速さに兵士達が困惑していると、愁は銃口を掴み先端を圧し折ると、兵士の腹部目掛け拳を突き出す。
腹部を殴られた兵士は口から血を吐き出すと、その隣にいた兵士は顔に回し蹴りをされ首の骨を圧し折られる。
そして愁が次の兵士を標的にし走り出そうとした時、目の前に二本のサーベルを手にした紳が現れた。
「お前達は下がっていろ」
紳の言葉に銃を持った兵士達はその場から下がるが、穿真達はその場に佇んでいた。
「それと手を出すな、愁は俺が――」
すると紳がその言葉を言い終える前に、佇んでいた羅威と穿真の二人が紳の両脇をすり抜け愁の元へ走っていく。
「愁は俺達が止める！そうだろ羅威！」
「ああッ！あいつは、あいつだけは俺達の手で止めてみせる！」
二人同時で愁に飛びかかる穿真と羅威、だがお互いが繰り出した拳

と蹴りは簡単に愁に受け止められると、いとも簡単に弾き返されてしまう。
「お、俺の拳を受け止めた……？」
自分の拳を受け止めた愁に穿真が驚愕していると、次は愁から二人の元へと走って来る。
「来るぞ穿真！ボサっとするな！」
「わかってる！だが気をつけろよ羅威、今の愁は只者じゃねえ」
迫ってくる愁に穿真は体勢を整えると、何とかして愁の動きを見極めようとするが、その攻撃の速さにただ受け止める事しか出来ない。だがその隙を狙い羅威は愁に向け蹴りを放つ、だが愁はその蹴りをまた左手の甲で簡単に受け止めてみせた。
その僅かな隙をついて、穿真は左手で愁の右腕を掴むと、既に懐に入っていた。
「こっちががら空きだぜ、いい加減目ぇ覚ませこの馬鹿野郎ッ！」
穿真の放つ渾身の一撃が愁の額に当る。
鋼の拳、その衝撃は凄まじいものだった。愁は額に拳を受けてその場から吹き飛ばされる。
だが愁はその衝撃に耐えながら体勢を崩す事無く踏みとどまってみせた。
額から赤黒い血液が流れる始める愁、それでも血を拭かず、ただ前方にいる穿真と羅威を睨んでいた。
「嘘だろ……？」
それを見て二人の表情は固まっていた、あの穿真の拳を額に受けたにも関わらず、まだ立っていられる愁が二人には信じられなかったのだ。
そんな二人を見て愁は、静かに口を開く。
「俺は正気さ……だからこそ今、戦っている」
全てはフィリオの為に、助けに行く為に……その為には邪魔をする存在は全て消していかなければならない。
愁にとってそれは仕方の無い事だった。人は自分の守りたい者の為

に戦う。
殺さなければ守れない命もあり、守らなければ消される命もある。
覚悟は出来ていた、同じ仲間だった彩野を殺してしまった時点で、
愁は自分がもう引き返す事が出来ないがわかった。
だから今は、自分が信じる道を行く。例え目の前に嘗ての仲間が立
ちふさがったとしてもだ。
愁は血の流れる顔で紳の方に顔を向けると、また口を開いた。
「俺の機体を自由にしてください、邪魔をしなければ攻撃はしませ
ん。俺はただ……フィリオを助けに行くだけです」
愁の視界が微かにぼやけ、体が小さく揺らぐ。既に数十発の弾丸を
受けた愁の体は、既に限界も来ていた。
それでも愁の目は死んでいない、まだ諦めてはいなかった。
紳はその目を見て手に持っていた一本のサーベルを愁に向けて放り
投げる。
それを愁は見事に掴んでみせると、紳はもう一本のサーベルを構え
口を開いた。
「行きたければ俺を殺せ、俺は殺してでもお前を止める」
その言葉に愁もサーベルを構えると、体勢を少しずつ変えていく。
「わかりました」
愁はそう言うとサーベルを強く握り締め、待ち構える紳の元へ走っ
て行く。
「見ろ、そして機会を窺え……生き残る為に」
風を感じた、サーベルを交え擦れ違った両者の衣服が微かに靡く。
両者一歩も動かない、まるで時が止まったかのように微動だにしな
い。
「それが、兵士の心得だ」
紳がサーベルを鞘に仕舞った瞬間、愁の口から大量の血を吹き出る。
愁は目を見開いたままその場に膝から崩れ落ちると、血が滲み出て
くる自分の胸部見つめた。
「俺はもう……兵士じゃ……」

意識を失いその場に倒れる愁、それを見ていた葵とエリルがすぐさま側に近寄っていく。
「愁、お前……本当馬鹿だよ……」
目に涙を浮かべる葵、だがエリルはすぐに愁の体を起こすと近くにいた兵士に向かって叫んだ。
「ストレッチャー持ってきて！早く運ばないと死んじゃうわよッ！」
その命令に兵士達が慌てて動き出す、だが葵には理解できなかった。
愁はここで歯向かい、敵の兵士も殺した。それなのに何故目の前にいる女性は愁を助けようとしているのか、葵にはわからなかった。
「お、おい。愁はお前達の仲間を殺したんだぞ、それなのに助けてくれるのか……？」
「それは貴方も同じでしょ、それに愁は私達の友達なの。助けるのは当然よ！」
ストレッチャーが運ばれてくると、急いで愁をそれに乗せ手術室へと向かうエリル。その後を葵もついていくが、その場にいた紳や羅威達は止めることも向かう事もしなかった。
「いいのか紳、愁を助けても」
「敵兵を生かすも殺すもこちら次第だ……好きにしろ」
紳はそう言って地面に落ちているサーベルを拾い自分の腰に付けてある鞘の中に仕舞うと、その場を後にした。

――ＢＮ戦艦のある一室で、一人の女性が目を覚ます。
それに気付いた少女は安心した表情を浮かべると、目を覚ました女性に声をかけた。
「赤城少佐！良かった、気がついたんだね……！」
その声に赤城がゆっくりと声のする方に顔を向けると、そこには涙ぐみながらも笑顔をした由梨音が椅子に座っていた。
「由梨音……ここは……」
「安心してください、私達はＢＮに保護されたんです。だから今はゆっくり休んでください」

「保護……？あの時、あの場所で一体何が……」
体を起こし思い出そうとするものの、あの時一面が光に包まれた事しか思い出せない。
だがその光の中に一人の男の影が映る、不敵な笑みを見せる男の影、忘れていた記憶が蘇ってきた。
全身に寒気が走り、鼓動が早くなる。額からは汗が滲み出し、あの時の屈辱と恐怖が赤城を包み込んだ。
「赤城少佐？どこか体調でも悪いんですか……？」
見る見る顔が青ざめていき、怯えた表情の赤城を見た由梨音は心配そうに肩に手を伸ばすと、赤城は触られた肩に過剰に反応を示し由梨音の方に顔を向ける。
そしてまた俯くと、赤城は自分の体を抱きしめながら小さく呟いた。
「すまない……少し、一人にさせてくれないか……」
「で、でも……」
赤城の只ならぬ様子に由梨音は肩においていた手を放すと、椅子から立ち上がり赤城に背を向ける。
そして言われた通り渋々部屋から出て行こうとした時、部屋の扉の前で由梨音の足が止まった。
ふと後ろに振り向く由梨音は見た、俯きながら涙を零す赤城の姿を。
止めていた足が動き出す、だがそれは出口に向けてではない。
ベットの上で泣いている赤城の元に駆けつける由梨音は咄嗟に赤城に抱きついた。
その突然の出来事に、抱きつかれた赤城も驚いたまま動けない。
「怒られてもいいです！減給されてもいいです！嫌なら、突き飛ばしてもいいです！……だから、赤城少佐の側にいさせてください……」
抱きついてきた由梨音はとても温かく、ぎゅっと赤城の体を抱きしめたまま離れようとしない。
「由梨音……？」
「私は、泣いてる赤城少佐を一人にさせたくないんです。だって、

私が泣いてる時も、赤城少佐はこうやって私を抱きしめてくれました」

気付かされる人の温かさ、蘇る記憶は辛いものばかりではない、温かい記憶、思い出も存在する。

「だから赤城少佐、一人で泣こうとしないでください……」

由梨音の言った聞き覚えのある台詞、それは前に武蔵にも言われたのも同じ台詞だった。

脳裏に過ぎる大和の後姿、あの時自分を助けてくれた大和には、もしかすれば……。

悲しさと嬉しさが入り混じり、頭も心もわけがわからなくなる。

そんな時、赤城は由梨音と共に抱きしめあいながら泣く事しかできなかった……でも、それでいい。

仲間と共に涙を流す事で今ある複雑な感情を紛らせ、分かち合い、今を確かめあえるのなら。

第８０話　希望、集結

――「ん……？」

ＢＮの艦に保護されたのはＮＦだけではない、ＳＶの兵士達も保護されていた。

葵やエコもそうだったが、ＮＦの本部にいたアリス達もこのＢＮの戦艦に乗り込んでいた。

目を覚ましたアリスがベットから起き上がろうとしたが、すかさず横にいたシャイラがアリスの肩に手を掛け、優しく寝かせていく。

「大丈夫ですよアリスお嬢様、今は安全な場所におります。だから安心してくださ い」

「安心……できない！シャイラ、神は、神はどうなったの！？」

胸騒ぎが収まらない。あの時神は光を放ち、見えるもの全てが吹き飛んでいく光景を気を失う前に見てしまったアリスには、どうしても確認する必要があった。

「神は起動なされました、ですがその力は……」

シャイラが次の言葉を躊躇っていると、部屋の扉が開き頭に包帯を巻いたゼストが部屋の中へ入ってくる。

「ゼスト！？その怪我は――」

「かすり傷だ、それより話しがある。神についてだ」

頭の怪我には気にも留めてないゼストは椅子に座っているシャイラの横に立ち、話しを進める。

「神は起動し、周辺のＥＲＲＯＲは一掃できた。だが、その力は人類にも牙を向いた」

「そんなっ……私は神に伝えたのよ！それなのに、どうして……！」

ＥＲＲＯＲの脅威、そして人類絶滅の危機を神に伝えたはずのアリス。

だが神の力は人類にまで及んだ、それはこの混乱した状況でも唯一事実と言える事。

「私が何か儀式で間違ったんじゃ……ああ、お姉様が、お姉様がぁ……！」

自分の身を犠牲にしてまで神の起動を優先したフィリオ、そして神を信じた故に起きた現実。

神を使い人類に希望を与えるはずの神、その為にフィリオは身を捧げたというのに、この有様はアリスにとっては厳しい現実だった。

「落ち着いてくださいアリスお嬢様、今は――」

「悲しみに浸る時間など無い、対策を練らなければ取り返しのつかない事が起こる」

同情も無くその余りにも厳しい言葉にシャイラは椅子から立ち上がると、険悪な表情でゼストの前に立つ。

「お待ちくださいゼスト様、今のアリスお嬢様にそのような事は……」

「今のＳＶの当主はアリスだ。それにこれからＢＮの指揮官との話し合いもある。辛いのはわかるがこんな所で泣く暇があれば対策を――」

室内に響く叩かれた音で、俯いていたアリスが咄嗟に顔を上げた。

ゼストは頬を叩かれ横を向き、シャイラは叩いた手を下ろした。

「何故ゼスト様はアリスお嬢様に冷たく接するのですか！？お嬢様はゼスト様のように悲しみや辛さを溜め込める方ではありません！アリスお嬢様は一人の女の子です、私達のような大人でもなければ兵士でもない。しかし、だからこそお嬢様は私達の分まで悲しみ、涙を流してくれているのではないのですか！？」

今まで見たことのないシャイラに態度に圧倒されるアリスだが、ゼストは顔色一つ変えずただ話しを聞いている。

「今がとても深刻な状況だという事ぐらいお嬢様だってわかっています。それはゼスト様にもわかっているはずです、なのに、どうして……」

肩を震わせながら必死に涙を堪えるシャイラ、そんな彼女の顔を見てゼストは後ろに振り返り背を向けて部屋の出口まで歩いていく。

「待って！」
そのアリスの声に扉の前にまで来ていたゼストの足が止まる、そして背を向けたままのゼストにアリスは言葉を続けた。
「私も行く。こんな所で、泣いてられないから……！」
ベットから出ようとシーツを退けるアリスだが、シャイラはそれを止めにかかろうとした。
「しかしお嬢様、今は……」
「私は大丈夫。ありがとねシャイラ、私シャイラの言葉で気付いたよ」
シャイラは何もする事が出来ぬままアリスはベットから降りると壁に掛けてある清楚な洋服に手を掛けた。
「この世界、そしてお姉様の為にも。私が頑張らないといけないって、だから今、私の出来る事は精一杯しないと、ね！」
そう言ってアリスは勢い良く服を抜き出すと、急いで着替えを済ませようとする。
それを見たシャイラはすぐさま部屋の敷居になるカーテンを引っ張ると、アリスの着替えを手助けしていく。
ゼストが後ろに振り返ると、既にカーテンが引かれ何も見えない状況になっていた。
それを見てまた後ろに振り返り部屋の扉を開けると、そっと一言呟いた。
「急がなくてもいい、会議までにはまだ1時間ある」
「は……はぁっ！？何よそれ！まさかゼスト、また私を――」
そこで扉は閉まり、怒り口調のアリスの言葉の最後がゼストに届くことはなかった。
扉の前に銃を持ち見張りを務める香澄はその声に首を傾げていたが、ゼストは気にすることなくその場を後にした。

――その頃、機体が収容されている格納庫に葵は来ていた。
自分の機体を見つけると、ワイヤーに足を掛けそのまま胸部まで上

がっていき、操縦席の中に入る。
そこには目を瞑り深呼吸するエコが後ろの座席に座っていた。
「どうだエコ、何かわかったか？」
「黙ってて……うるさい……」
「な、黙れって何だよ！？人がせっかく様子見に来てやったっていうのに！」
そこでエコは表情を曇らせると、目を見開き目の前にいた葵を睨んだ。
そんなエコの表情に驚く葵、するとエコは溜め息を吐き操縦席から離れる。
「集中が切れた、葵のせいだからね……」
不機嫌な様子のままエコは機体から下りようとワイヤーに足を掛けると、一緒に葵もワイヤーに足を掛け機体から下りようとする。
「まーそう怒るなってー。謝るから、な？」
エコは機体から下りた後格納庫からそそくさと出て行こうとするが、その後ろからは両手で手を合わせ必死に謝りながら葵がついてくる。
だがエコは気にせず通路を歩いていくと、後ろにいた葵がエコの前に立ちはだかる。
「エコ、お前今何処に向かおうとしてるんだ」
「愁の所、心配だから……葵も来る？」
「いや、俺はいかねえよ。勿論心配してるけど、今のあいつとは会いたくないからな」
「何で……？」
エコは恐らく葵もついてくると思っていたが、行かないと言う返事にエコは疑問を抱き聞いてみると、葵は表情を曇らせながら視線をエコからそらした。
「似てんだよ、昔の俺に……。っま、エコだけで行ってこいって、まだ会議まで時間があるし俺は腹ごしらえでもしてくるぜ！」
一瞬暗い表情になった葵だったが、また一瞬にして明るい表情を取り戻すとそのままエコの横を通り抜けどこかに行ってしまう。

「昔の、葵……」
僅かに見せた葵の暗い表情が脳裏から離れない、エコは葵の通り過ぎていった通路を振り向くが、既にそこに葵の姿は無かった。
昔の葵と言っても、エコが知る葵は一人しかいない。まだエコが葵と出会う前は一体どんな人だったのか、エコには予想もつかなかった。
今までずっと二人でいるが、まだ自分の知らない葵がいると知り何故か不安な気持ちになってしまう。
「いいから二人は戻って！愁とは私とアリスで話しをしてくるから！」
「アリス……？」
エコが通路を曲がると、部屋の前で４人の兵士が何やら言い争いをしていた。
アリスという名を聞いたが、その部屋の前にエコの知っているアリスはどこにもいない。
「なんで俺達は駄目なんだよ！？話しがあるのはお前だけじゃないんだぞ！」
「どーせ今愁と会っても喧嘩するだけでしょ二人は！ここは私達二人に任せて今は大人しくしててよ！」
そのエリルの言葉に羅威は小さく頷いたが、穿真はまだ納得が出来なさそうにその場に留まっていた。
「もういいだろ穿真、エリルの言う通りだ。まずは二人に任せればいい、その後俺達が行けばいいだろ」
「へいへいわかったよ！全く……んじゃ、お前等に任したからな」
羅威の言葉に渋々引き下がる穿真、だが羅威も穿真と同じく位に愁と会いたかった。
それと同様に不安もあった、今の愁と会う事で、もう自分達の知る愁が消えているかもしれないという不安に。
二人が部屋の前から離れていくのを見てエコは愁の部屋へと向かうと、部屋に入ろうとしていたエリルはエコを見つけて足を止めた。

「あれ、貴方はたしかＳＶの――」
「私はエコ……愁の様子、見に来たの……」
そう言った後、エコはエリルの横にいる女性の顔をじっ見つめはじめる。
その視線に答えるかのようにアリスは手を指しのばすと、エコと握手を交わす。
「初めましてエコちゃん、私はアリス。よろしくね」
余り馴染みの無い呼ばれ方にエコは戸惑いを見せつつ、エコは差し出された手に握手をせずに愁のいる部屋の扉の前に立ちふさがる。
「私はＳＶの兵士、貴方達の仲間を殺してきた……それでも、貴方は私と握手をするの？」
エコの問いにアリスの横にいたエリルが戸惑いを見せる、だがアリスは笑み見せて先程と同じように手をのばした。
「うん、するよ」
意外な反応にエコは驚きながらも気付けば手を出し握手を交わしていた、エコはその理由も気になったが、アリスの笑顔に何故か何も言い出せない。
すると扉が開き部屋の中にアリスとエリルが入っていく、エコも遅れないように部屋に入ったが、その部屋には一つしか明かりが灯っていなかった。
愁の寝るベットだけ、その周りは薄暗く家具もほとんど置かれていなかった。
「愁、起きてる？」
アリスはそう言って愁のベットに近づいていくと、そこには目元にアイマスクをされ何も見えない状態の愁が寝ていた。
白いシーツが体にはかけられ、頭だけがシーツから出ている。
「アイマスク？どうしてこんなもの愁に……」
すぐに取り外そうとするアリスだが、頑丈に固定されており容易に取り外す事が出来ない。
「その声、アリスか……久しぶりだね」

突然の愁の声に驚き、アリスは咄嗟に手を放してしまう。
「う、うん。久しぶりだね、愁」
ベットの横にある椅子に座るアリス、その後ろにも椅子があった為エリルもエコもその椅子に座ると、視線は愁に集まった。
二人は黙ったまま様子を見ており、それを承知した上でアリスは愁に問いかけた。
「愁、教えて。皆が知りたがってる、どうして……どうして愁はSVに行ったの？」
エリルが一番聞きたかった質問をアリスが変わりに聞くと、愁は黙ったまま喋ろうとしなかったが、ゆっくりと語り始めた。
「家族を、BNに殺された……。だから俺は、SVに行った……」
弱々しい声から聞かされた衝撃の事実にエリルもアリスも驚きが隠せなかった。
「BNが愁の家族を？そんな、ありえないよ！」
「嘘じゃない……本当、さ。紳に聞けば、わかる……」
今まで共に戦ってきた仲間、その仲間が愁の家族を殺す事等到底考えられる事じゃない。
だが、信じたくなくても。今目の前の愁を見れば嘘かどうかは明白だった。
「裏切られた……今まで信じてきたBNに、守ってきた人、母さんや、幼い弟と妹まで。殺されたんだ……」
「だ、だから愁は、BNに復讐をしようとしたの？」
「復讐……そうかもしれない、俺は許せなかった、BNを。だから……」
「彩野を殺したの？」
感情を押し殺し今まで黙っていたエリルがついに口を開いた。
「エリル……」
「答えて愁、たしかにBNに家族を殺されたら私だって許せない。でも、どうしてその矛先を友達の私達に向けたの？どうして仲間だった彩野を殺したのよ！」

エリルの感情が段々と高まっていく、恐らくこの場に羅威と穿真がいればこれだけではすまなかったであろう。だからこそエリルは二人のこの場に連れようとはしなかった。

「……俺はＳＶの兵士、彩野はＢＮの兵士。……敵の兵士を殺すのは、当然の事だ……」

愁の言い放った冷たい言葉はその場にいたエリルとアリスは目を見開き寝ている愁を見つめていた。

「愁、それ、本気で言ってるの？彩野は仲間だよ？友達なんだよ……？」

「それがどうした……友達なんて、どうでもいい」

前までの愁とは別人のような口調に凍りつく二人、もう目の前には自分達の知っている愁はいなかった。

「俺にはフィリオがいればそれで良かった……けど、今はいない」

愁の寝ているベットが小さく揺れ始める、愁は必死に体を動かし起き上がろうとした。

だが起き上がる事も動く事も愁にはできなかった。両手両足、膝や腹部にまでベルトが巻かれ完全に固定されているのだから。

「もう、間に合わない。今頃フィリオは、あの男に。っふ、くく……っはは！あははははははは！あははははははははははははは！！」

部屋中に響き渡る愁の不敵な笑い、今まで聞いたことの無い愁の声と表情に恐怖が沸き起こるエリルとアリス。

「俺を殺せ」

笑いは突然消え、呟やかれた一言。

「殺せ」

何も言い出すことが出来ない。手や唇が小刻みに震え、愁に声を掛ける事が出来ない。

「殺せ！」

愁の耳に部屋の扉の開く音が聞こえる、そして扉が閉まると。部屋はまた静寂に包まれた。

一人取り残された部屋の中で愁は耳を済ませる。
「頼む……誰でもいい、俺を……殺してくれ……」
――愁の部屋から出たエリル達三人、エリルは涙を流しアリスに抱きついていた。
「信じられない、どうして愁が、あんな……」
仲間だと思っていた愁はもういない、もうあの頃には戻れない。
人一倍正義感が強く心優しい愁が、今では見るも無残な人間と化している。
アリスも動揺が隠せない、泣き続けるエリルを見ながら自分の涙も零れ落ちようとした時、今までずっと黙っていたエコが口を開いた。
「愁、泣いてた」
「えっ？」
エリルは涙を拭いながらエコの方を見ると、エコは愁のいた部屋の方を向いて更に言葉を続けた。
「愁は酷く後悔してる、自分の仲間を殺してしまった事に……だからもうＢＮには戻れないと感じてる」
エコにはアイマスクの下にある愁の目が見えていた、涙を流しながら苦渋の決断をした愁を。
「二人とも、よく聞いて……どうして愁が変わったのか、教えてあげる……」
それからエコは二人に語り始めた、愁がＳＶに来てからどのような人間になっていったのかを。
「壊れた心、不安定な精神。それを癒していたのが、フィリオなの。そのフィリオがいない今、愁の心は……壊れかけている」
「それじゃあ、愁が彩野を殺したのは本心じゃなくて……」
「貴方達ＢＮが一番知ってるはず、愁がどのような人間なのか……それじゃ」
エコは伝えることだけ伝えると二人に背を向けどこかへ歩いていってしまう。

もう戻れないかもしれない、だからといって諦めてしまえばそこで全てが終わる。
エコの話しを聞いて困惑する二人、これからどうすればいいのか、何をすればいいのか。
仲間を救いたい。その気持ちはエリル達だけとは限らない、エコ達だってそうだ。
愁の部屋の後にエコの向かった場所、それは葵のいる食堂だった。
壁の影から顔を少しだけだし葵を探していると、そこには葵と羅威と穿真の三人がテーブルに座っていた。
真剣な顔で机の上には水の入った硝子コップしか置いていない、エコはそのまま様子を窺おうとした時、ＢＮの二人は席から立ち上がると食堂から出て行ってしまう。
隠れながらその様子を確認したエコは食堂の中に入ると葵の元へ歩いていく。
「お、エコじゃねえか。話しは済んだのか？」
エコに気付いた葵はそう言うとコップに入った水を飲み始める。
「うん……葵は何を話してたの？」
「見てたのかよ、まぁあれだ。愁についての話しだよ。
やっぱり何だかんだ言ってＢＮの連中は愁が心配なんだな。全く、あいつは幸せもんだぜ」
葵が水がまだ入ったコップを机の上に置くと、今度はエコがそのコップを掴み口元に近づける。
「そう、私と同じね」
そう言ってエコが水を口に含んだ瞬間、目を見開いた葵がいきなり椅子から立ち上がるとエコの手を掴んだ。
「ばか！お前それ酒だぞ！？」
葵の言葉にエコは慌てふためきすぐさま元のコップに吐き出そうとした時、段々とエコの表情が戻っていく。
「あはは！騙されてやーんの！それただの水だっての！」
一人腹を抱えて笑い出す葵をエコは口に水を含んだまま睨みつける。

「しかもその顔――――」
次の瞬間エコの口から勢い良く出た霧状の水は葵の顔面に直撃すると、エコはハンカチで口元を綺麗に拭いていく。
「そろそろ会議の時間、行こ」
エコは自分の口元を拭いたハンカチを葵に手渡し食堂から出て行くと、葵も少し湿ったハンカチで顔を拭きながら食堂を後にした。

――――続々と指定された会議室へと集まる人々、その中にはＮＦの赤城と由梨音、ＳＶのアリス達の姿もある。
丸く巨大な机が部屋の中心に置かれ、兵士に指示された席へと座っていく。
だが何れも銃を構えた兵士が背後に立ち、常に警戒と監視を行なっていた。
「赤城少佐～、一体これから何の話しをするんでしょうか～……」
小声でそう言いながら挙動不審に周りを見渡す由梨音、無理も無い。
周りに重い空気が漂い、同じ部屋にＳＶとＢＮを纏める司令官達が集っているのだから。
「ＢＮは私達ＮＦやＳＶの兵士を生かしている、となると目的は……」
会議室には三つの組織の兵士達が集まった、そして部屋の扉が開かれ最後に紳達が姿を見せた。
白いマントに身を包み堂々と自分の席へと向かう紳、そしてその隣には妹の唯が付き添い、後ろにはダンがついてくる。
三人が席に座ると、場はより一層静寂に包まれた状況の中で、紳は呟いた。
「神が起動した……。ＮＦとＳＶに聞きたい、世界は救われたか？」
紳の問いに答えるものはいない、ＳＶのアリスも俯きながらじっと紳の言葉聞き続ける。
「これを見ろ」
会議室の照明が暗くなると、奥に取り付けられた巨大なモニタ

ーに電源が入りある映像が映し出された。
一面に白い砂のような塵が広がる大地、空は薄暗く曇り、物という物が何一つ無い。
「ここがどこかわかるか？ＮＦの本部があった場所だ」
次の映像が切り替わる、だがそこにも先ほどの映像と同じような風景が映し出されていた。
「ここはその本部の近くにある都市だった場所だ……見ろッ！」
声に力が入り、拳を机の振り下ろす紳。静かな会議室に机の叩く音が響く。
アリスはその声と音に反応してじっとその映像を見つめる。
「貴様等ＳＶとＮＦのせいで、数十万人もの罪の無い人間達が死んだ。これからも更に増え続ける、百万、千万……そして、人類は滅びるだろう」
そこで映像は切られ、部屋に明かりが戻る。
「我々が、何もしなければの話だがな」
「我々……？」
アリスの呟きに答えるかのように紳の隣に座っていた唯が立ち上がると、口を開いた。
「今この艦にいる全てのＮＦ、ＳＶの兵士は。全員ＢＮと共に活動してもらいます」
指揮下に入るのはでなく、共に行動という言葉にその場にいたＢＮ以外の兵士達がざわめく。
「活動目的はＥＲＲＯＲの完全排除、神の破壊です。今こそ我々の力を集結させる時、そして世界を、人類を救う聖戦を行ないます！」
唯の言葉に紳も続いて口を開き言葉を続ける。
「まだ遅くない、今からでも我々が手を組めば世界を変えられる……いや、変えなければならない。近い日に俺達は世界中に中継を繋ぎ人々呼びかける……もう、人間同士の戦争は終わりだ」
紳はわかっている、今人類が何をしなければならないのか。
最終的にどうすれば、どうなれば人類が救われるのかを。

ＢａｃｋＮｕｍｂｅｒｓを率いる男の目的は最初から一つだけ。世界を、人類を救うことだ。
紳の言葉を聞いてアリスは立ち上がると、紳の方を向いて口を開いた。
「Ｓａｖｉｏｒｓの代表として貴方の意見に賛同します！ゼスト、文句は無いわよね？」
アリスは横を向きゼストに問いかける、その目は力強く、先程まで見せていた弱々しい面影はどこにもなかった。
「今ＳＶを率いているのはお前だ、お前がそうすると言うのならＳＶに属す俺達はお前の遣り方に従うだけだ」
ゼストの言葉にアリスが微かに笑顔を浮かべ、紳達の方を向いて頷いた。
それを見て紳はＮＦの兵士達のいる方に顔を向ける、由梨音はどうしていいかわからず赤城に目を向けると、赤城は何の躊躇も無くその場に立ち上がった。
「ＮＦ代表ではないが、私は協力させてもらうつもりだ。由梨音、お前はどうなんだ？」
「わ、私は赤城少佐についていきます！」
「そうか、ありがとう。……それと艦にいるＮＦの兵士達には私から伝えておこう、それで良いか？」
赤城の言葉に唯は安心した表情を浮かべるが、相変わらず紳は鋭い目つきで顔色を一切変えない。
「構わない、数時間後ＢＮの基地に到着する。その時に詳しい作戦内容を――」
紳の言葉を遮るかのように鳴り響く警報機、その数秒後に艦内に衝撃が走る。
すぐさま艦の司令室に連絡を取る紳、現状報告を済ませる兵士の声は、驚きと戸惑い入り混じっていた。
「か、風霧総司令官！未確認機体が突然姿を現した後、艦に張り付き甲板に穴を――」

そこで通信が切れてしまい現状を確認できなくなる、衝撃は収まり皆壁や手から手を放すが、今度はけたたましい銃声が扉の向こうから聞こえてくる。
だが銃声はすぐに止むと、閉められている扉が勢い良く開いた。
その場にいた羅威や穿真達は懐に入れていた銃を取り出し扉の方に向け、小銃を持っている兵士達も同様に銃を構え銃口を扉に向けた。
開かれた扉から一人の男がゆっくりと部屋の中に入ってくると、数歩歩いた所で足を止めその場にいる人間の顔を見渡していく。
「おやまぁ、人類代表の人間達が大集合してるじゃねえか。雑魚どもが集まった所で、何もできやしねえのになぁ」
そう言ってからかうように笑ってみせる男の顔は、その場にいた兵士達は誰もが知っていた。
だが知っていた人達でも驚きが隠せなかった、今まで見てきた男とか明らかに雰囲気が違う。
その場にいた多くの兵士達は男の顔を見て声を出さずに動揺した表情で銃を構えており、その様子を見て男は首を傾げる。
「おいおい、お前等俺を忘れたのかぁ？全く……」
男は瞬時に巨大な黒剣をその場に出すと、その剣先を床に突き立て赤く濁る目を見開き口を開いた。
「俺は甲斐斗、最強の男だ」

第８１話　人々、神々（前書き）

長期間の更新停止、本当に申し訳有りませんでした。
県外へ引越したのですがインターネットを繋ぐのに多少時間がかかってしまい更新が遅れてしまいました。
小説を書く環境も変わりましたが、これからもしっかり更新していけるよう頑張ります。

第81話　人々、神々

――「甲斐斗、どうして貴様がここにいる」
紳はそう言うと腰に付けられている鞘からサーベルを抜き取り身構える。
周りにいたＢＮの兵士達も戦闘の準備は既に出来ていた、通路からも銃を持った兵士達が現れ前後を囲まれていた。
「お前に用は無え、用があるのはそこにいる女だ」
アリスに向けて指を指す甲斐斗、するとその場にいたシャイラとゼストは立ち上がりアリスの前に立ち甲斐斗からアリスの姿を見えないようにする。
そして更にその前には葵とエコが盾になるかのように立ちふさがった。
だがそれが気に食わない甲斐斗は右手をゼスト達に向けると、閉じていた手を大きく開いた。
「邪魔だ」
それと同時にアリスの側にいた兵士達は全員吹き飛ばされ勢い良く壁に叩きつけられる。
そして次の瞬間には甲斐斗がアリスのすぐ目の前にまで来ていた。
すぐさま兵士達は照準を甲斐斗に合わせるが、壁に叩きつけられ床に跪くゼストが声を荒げた。
「撃つなッ！今撃てばアリスに当る！」
兵士達はその言葉に引き金に置いていた指を放す、だが銃は構えたままで甲斐斗を見つめていた。
「なあ、神を起動させるにはミシェルが必要だって聞いてたんだが……利用したのか？」
「え、あの。それは……」
甲斐斗の問いに動揺して答えられないアリス、すると甲斐斗は右手でアリスの顔を掴むと、アリスと顔の距離を近づけていく。

「答えられないなら見せてもらうまでだ、お前の頭の中にある全てを」
甲斐斗の額に黒く輝く小さな陣が現れると、その額をアリスの額に当てる。
目を見開いたまま動くことの出来ないアリスだが、ふと意識が飛び全身の力が抜ける。
その場に倒れるアリスを瞬時に受け止めるシャイラ、必死に呼びかけるものの全く反応が無い。
「気絶してるだけだ、殺してねーよ」
そう言うと甲斐斗は元いた場所に悠々と歩いて帰り紳の方に向き直る。
「さて、大体の状況は把握できたが……傑作だな、お前等人類が今更組んだ所で、一体何が出来るんだ？」
紳を挑発するかのように首を傾げながら尋ねる甲斐斗、だが紳は冷静な表情を保ったまま口を開く。
「化物の貴様には関係無い。用が済んだなら今すぐ消えろ」
紳にとっても出来れば戦いたくない相手だった、貴重な戦力をこの男につぎ込む訳にはいかない、だから戦わずに済むのならそれでいい。
すると唯は徐に紳の前に立つと、甲斐斗に向けて手を伸ばした。
「お待ちくださいお兄様！甲斐斗様の言う通りたしかに人類だけでは力不足かもしれません、しかし私達には甲斐斗様がいます！甲斐斗様の持つ力は我々人類にとってとても偉大で貴重なものです！聖戦を甲斐斗様に手伝ってもらえればきっと人類は救われます！」
甲斐斗の登場に不安や恐怖など微塵も感じない唯はそう言うと目を輝かせながら甲斐斗を見つめる。
周りにいた兵士達はその言葉と唯に驚きを見せたが、一部の兵士達は唯の言葉に納得できた。
この男の力はＥＤＰの時に立証されている、人知を超えた強烈な力を持つ男が人類の味方に加わればこの上ない戦力増加になると共に

頼もしい存在になる。
「ああ、もう世界救う為に戦うーとか、そういうのは嫌だから。お前等人間だけで精々足掻け」
唯の期待をあっさり裏切る甲斐斗、元々甲斐斗は人類を救う気など無い。
「そ、そんな……甲斐斗様お願いします！私達には貴方の力が必要なのです……！」
「んな事言われてもねぇ、俺はさっさと破壊し損ねた神破壊してミシェル連れ戻して過去に帰りたいんだよ。
まぁそのミシェルが神の中にいるかもしれないって事が今わかったから、これで戦闘に集中できるんだけどな」
破壊し損ねたという言葉を聞き唯が反応すると、驚いた口調で甲斐斗に質問する。
「甲斐斗様は神と戦ったのですか！？」
「ああ、戦ったよ。速攻で破壊できると思ったが俺の力もまだ小指の爪程度しか解放できないからな、まだ完全に破壊は出来てねえんだよ」
その言い様から見て甲斐斗の実力がどれ程のものなのかがわかる、その自信に溢れた甲斐斗を見て唯は笑顔になると大きく甲斐斗に向けて頭を下げた。
「ありがとうございます！……お兄様、甲斐斗様は神との戦いに協力してくれます。これで私達はＥＲＲＯＲとの戦いに専念できますね！」
「おいおい、別に俺は協力するとは……まぁ、結果的にはそうなるけど」
甲斐斗は床に突き立てていた剣を引き抜くと、それを片手に紳達に背を向ける。
「もうお前等に用は無いし、会う事もないだろう。精々ＥＲＲＯＲとの戦い頑張るんだな、あーばよ」
甲斐斗はそう言ってその場から立ち去ろうと振り向いた時、視界を

横切る赤城の姿を見て足を止めた。
そしてもう一度赤城の方を向くと、甲斐斗は何かを思い出したかのような様子で口を開いた。
「あー……赤城、お前には少し話がある。来てくれ」
そう言って会議室から出て行く甲斐斗、兵士達は銃を甲斐斗に向けたまま道を明けると、赤城はその甲斐斗の後についていく。
兵士達も甲斐斗の後を追おうとしたが、それを止めるように唯が命令を下した。
「お止めなさい！甲斐斗様は我々に危害を加えるような事はしません！」
紳も黙って頷くと、自分の座っていた席に腰を下ろす。
そしてシャイラが抱きかかえていたアリスも目を覚ますと、辺りを見渡し何が起こったのかを必死に確かめようとする。
「シャイラ？あれ、私は……」
「アリスお嬢様、どこか体に痛みなどありますか？」
体調を心配しながらアリスを地面に下ろすシャイラ、アリスの足はしっかり床に立ち、意識もはっきりしていた。
「特に無いわね、それにしてもあの男。私に何をしたのかしら……」
腕を組みながら会議室から出て行く甲斐斗の後姿を見つめるアリス、その場にいた由梨音も赤城がいなくなりどうしていいのかわからずただ呆然と椅子に座っていた。

――――「通路で話も嫌だし、この空き部屋で話するか」
部屋の扉に手を当てた甲斐斗はそう言って扉を開けると、部屋の中に入っていく。
そして赤城も部屋に入ると、扉は自動的に閉まり鍵がかかる。
「こんな所に連れ出して何の用だ、私にも何か聞きたい事があるのか？」
赤城は腕を組んで壁にもたれ掛かると、甲斐斗は手に持っていた剣を消して赤城と真正面に向き合う。

「赤城、俺がミシェルを預けていた時の事。憶えてるか？」
その時甲斐斗の瞳は赤く濁ってはいなかった、心配するような目つきで赤城をじっと見つめている。
赤城は小さな溜め息を吐くと、壁から離れ甲斐斗に背を向ける。
「その事か……ああ、全て思い出した」
「やっぱりな、お前を見た時ふとその事が脳裏を過ぎってな……」
すると甲斐斗は赤城に近づいていくと、肩に手を置き赤城を振り返らせる。
「でも安心しろ、その時の記憶は全部消してやる。もう思い出すことはない」
甲斐斗の額に消えていた陣が現れる、そしてその陣をそっと赤城の額に重ねようとした。
だが赤城は甲斐斗の腕を掴むと自分の体から甲斐斗との距離を離した。
「赤城？」
甲斐斗は抵抗されるまま体を離し額の陣を消すが、納得はしていない。
「甲斐斗、もういいんだ。私は決めた……自分にあった全ての出来事を心に刻み、背負っていくと。だから、消さなくていい……」
「おいおい、それとこれとは話が違う。お前は耐えられない程の屈辱を受けたはずだ、それは俺の責任でもあるんだよ。せめてもの罪滅ぼしの為に、お前の辛い記憶を取り除かしてくれ」
赤城に詰め寄りながら甲斐斗はまた記憶を消そうとしたが、赤城は俯いていた顔を上げ口を開いた。
「わかった……だが今じゃない」
その言葉に甲斐斗は足を止め黙ったまま赤城を見つめると、赤城は小さな笑みをみせながら答えた。
「この戦争が終わった時……その時に私の記憶を消してくれ。それまで死ぬんじゃないぞ」
それを聞き終えた甲斐斗も笑みを見せると、軽く笑ってみせる。

「俺が死ぬ訳ねーだろ？……にしても、お前って奴は本当に――――」
突然甲斐斗の言葉が止まる、何かが見えたかのような表情で固まっていた。
「甲斐斗？」
「ああ、なんでもない。っま、この世界は俺様が変えてしまう事になるが。それまでお前こそ死ぬんじゃねーぞ」
甲斐斗は軽く手を振りながら赤城の横をすり抜け扉を開けて部屋から出て行く。
すると赤城も部屋から出ると、甲斐斗の振っていた腕を突然掴む。
「いいか、約束だからな……絶対に死ぬなよ」
何時にも増して真剣な目つきの赤城に、甲斐斗は赤城の顔を見つめたまま自信満々に笑みをみせた。
「任せろ、これでも約束を破った事は一度もないんだぜ？」
そんな甲斐斗の言葉を聞いても、赤城は安心する事が出来ずただ甲斐斗を見つめる。
腕を掴んでいた手の力が抜けていく、甲斐斗は腕を放されると赤城に背を向け歩いて行った。

――――神の出現により人類が混乱する中、別れていた人類の力は段々と集結しつつあった。
神とＥＲＲＯＲを前にした人類は戦いを選択せざるを得えない、もし甲斐斗が神を殺せば人類の敵はＥＲＲＯＲのみとなる。
ＥＲＲＯＲを排除しない限り人類に未来は無い、何としてでも人類はＥＲＲＯＲを絶滅させるしかなかった。

会議は甲斐斗の登場により一部荒れたが、再び続行され何とか無事に終わった。
赤城達は艦にいたＮＦの兵士達を集め現状と事の成り行きを伝えていき、ＳＶは既にＢＮと共闘する事を約束したためＳＶは自由の身となり兵士達に監視される事もなくなっていた。

ＢＮの羅威達は会議の終わった後、部隊の皆でこれからの事を話し合っていた。
「まっさか甲斐斗が現れるとはな、しかも神を殺すだってよ。すげぇ事言いやがるな」
缶ジュース片手にソファに座りながらくつろぐ穿真、それ以外の部隊のメンバーは皆不安と緊張で表情を曇らせていた。
「あの男が甲斐斗……奴に神を倒す程の力があるとは思えないね、私は……」
始めて見た甲斐斗の印象を香澄が話しだす、たしかに強そうな気配を感じたが。だからと言って人類を滅亡させかけた神と一人で戦いに行くのは余りにも無謀すぎる、それは誰もが感じていた。
だが不安はそれだけではない、同時にＥＲＲＯＲについての問題も出てくる。
雪音も不安そうに俯くと、体を小さくしてソファに座っている。
「ＥＲＲＯＲって、どうすれば倒せるんでしょうね……やっつけてもやっつけても、いつもいっぱい押し寄せてきますし……」
雪音が言葉にした事は恐らくＥＲＲＯＲと戦った事のある兵士達は誰もが思ったに違いない。
殺しても殺しても現れるＥＲＲＯＲ、謎の多い生命体だが、これも一つの謎だった。
その謎を解明しない限りＥＲＲＯＲの数は瞬く間に増えていくだろう、それを人類は何としても阻止しなければならない。
そんな雪音の心配に、羅威もまた俯きながら答える。
「直接ＥＲＲＯＲの巣を破壊するしかないだろうな、まぁ俺からすればＥＲＲＯＲに巣があるのかもわからんが。ＥＤＰの時は地下都市がＥＲＲＯＲの巣だったみたいだが、ＥＲＲＯＲはまた増え始めたからな」
「って事は、ＥＲＲＯＲの巣が一つだけじゃなく無数にあって、それが世界中にあったら……私達はそれを全部消せるのでしょうか……」

「消していくしかないわよ、だってそうしないと人類は滅亡しちゃう……だから私達が戦うのよ、この世界の為に！」
そう言って力強く立ち上がってみせたエリル、それに続いても穿真も缶を握り締めながら立ち上がった。
「よく言ったエリル！お前等もしけた面してんじゃねーぞ！この展開はむしろ燃えるべき所だろッ！人類の力を結集させ、地球を狙う化物との対決！これ程燃えるシチュエーションはねーぞ！」
ガッチリとポーズを決め、穿真は闘志を燃やしながら高らかに飲み終えた缶を天へと伸ばす。
「カ、カッコイイです穿真君！私も頑張ります！頑張ってこの世界を平和にします！」
雪音は目を輝かせながら穿真を見つめるが、それ以外のメンバーはどこか遠い目で穿真を見つめていた。
すると羅威もふと立ち上がると、熱く決めた穿真を見ながら口を開いた。
「そう、穿真の言う通りだ。人類が力を合わし、死んでいった仲間達の為にも俺達はこの戦争、絶対に勝つ」
それを聞いて香澄も立ち上がるが、相変わらず穿真には冷たい視線を送っていた。
「そうね、でも簡単に勝てる相手じゃない……そんな事は百も承知でしょうね」
香澄の言葉に皆が頷く、絶望的な状況だとしても、人類は戦う事しか選ぶ道は無い。
そして戦い選択をすれば、必ず勝利を掴み取るしかない。

――皆が夫々話し合っている内に、紳達を乗せたＢＮの戦艦は無事に軍事基地へと到着した。
紳はすぐさま艦から降りると基地の最上階に向かい本部との連絡を取り掛かった。
『風霧総司令官、現在本部での異常は無し。各基地からもＥＲＲＯ

Rが出現したとの報告はありません。そして神についての事なのですが、現在ゆっくりと歩きながら北へと向かっています、このままではＮＦの北部の基地が……』

「わかった。北部にいるＢＮ及びＮＦの兵士達全員に伝えろ、ＢＮはＮＦと協力し民間人を避難させると。ＮＦも事の状況を掴めているはず、此方が攻撃しない限りＮＦも攻撃はしてこないはずだ……もし攻撃された場合は戦闘を行なわず直ちに離脱しろ、いいな」

『了解しました、我々はこれより直ちに北部にある基地に連絡をとります』

兵士はそう言って敬礼を済ませると通信を切り、命令通りに動き始める。

命令を告げ終えた紳にはまだ山ほどしなければならない事が残っていた、その一つを片付けに行こうとした時、紳のいる部屋に書類を持ったダンが現れた。

「紳、どうやら俺達が思っていたより状況は悪いみたいだ」

煙草を吹かしながら片手で書類を手渡したダン、紳はその書類に目を通していくが、ある一枚の写真を見て目を見開いた。

「これはっ……」

「一人の兵士が最後に撮った写真だ、最後にその写真のデータを送った後に連絡が途絶えたらしい」

「そうか……だが、これでわかったな。ＥＲＲＯＲの本拠地のある場所が」

「場所は特定済みだ。さて、ここからが知恵の見せ所だ、後はどうやってＥＲＲＯＲを消す」

「それについては後で皆と話し合うつもりだ、ＢＮが開発した新型兵器についてもな……」

書類を机の引き出しに入れると紳は部屋から出て行こうとした時、擦れ違い様にダンが口を開いた。

「紳、お前はあの男、甲斐斗に神を止められると思うか？」

その言葉を聞いて紳は足を止めると、振り返ることなく答えた。

「止める？無理だな。奴は力の加減が出来そうにない」

――NF本部の次に大都市の北部にはまだ何十万人もの人間が町にいるが、既に町としての機能は果たしていなかった。

NFの人間達は落胆していた、今まで信じてきた神が人類に猛威を振るい本部を一瞬で掻き消した事に。

その神の起動の日からNFの各町は荒れ始めていた、人々は軍と国に反感、暴動、デモ……。

今更気付いても遅い、神を信じた人間が馬鹿なだけだ。

NFは良く知っている、神の力は絶大であり誰も神を止める事は出来ないと。

だから神が人類側につけばこの世界は救われると信じていた。しかし、もしその神が人類の敵と化したとわかったら……。

もうじき人類は滅びる。町では犯罪が多発していた、強盗に放火、暴行、殺人、強姦……。

犯罪を取り締まる警察や軍人でさえもその犯罪者の一員となっていた。自暴自棄になる人間は少なくない、むしろ殆どのNFの人間はそうだ。

小さい頃から神を信じてきたからこそ、その思いを裏切られた時の反動では相当のもの。

人が死んだ所で警察は動かない、人が怪我をした所で救急車もこなければ病院にも行けない。

力の無い人々は家に篭ることしかできない、外に出ればそこは無法地帯、いつ殺されてもおかしくない状態だった。

店は銃を持った市民が占拠し、町の至る所で銃撃戦が行なわれている。

開いている病院や店があれば薬や食料、金欲しさに銃を持った男達が押し入り邪魔な人間を殺していく。

警察に通報しようとしても繋がらず、その場にいる若い女性は体を弄ばれ、連れて行かれる。

犯罪を止めようと僅かな市民が武器を持ち立ち上がるが、皆次々に殺されていった。

……誰が予想できただろうか、神の起動によりＮＦがこれ程までに杜撰になっていくことを。

一般の人間ならこうはならなかったかもしれない。神を信じてきたＮＦだからこそ、このような有様になったのだろう。

「各部隊に告ぐ、現在神は北部へと移動中、神が到着する前に北部にいる民間人を全員避難させろ！」

ＢＮ指揮官の命令にＢＮ、ＮＦの部隊の兵士が一斉に動き始める。

その荒れ始めた北部の町に到着したＢＮの艦隊とＮＦの艦隊、すぐさま兵士達が町へと下りるが、そこは既に戦場と化していた。

『こちらはＢＮ、現在神がこの町に近づいてきています。民間人の方々は艦に乗り込み避難してください！』

ＢＮの戦艦は拡声器と広範囲に伝えていき、各兵士達は家に訪問し生存者を見つけていく。

艦の周りには数機の我雲が立ち並び周囲を警戒し、逃げ惑う人達を誘導していた。

人々が我先にと走る道路には無数の死体が転がっている、その中には子供の死体も多々あった。

泣き叫ぶ子供を押しのけ、倒れている人間を踏み台にし、人間達は自分の為に走る。

だがその時、ＢＮの艦が止まっている頭上に1体の機体が現れた。

『か、艦長！突如艦の上空に機体が現れました！今モニターに機体を映します！』

映し出されたその姿に誰もが息を呑んだ。白い2枚の翼を広げる白い機体、右手にはランスを持ち、左手には美しく長い盾を握り締めており、その姿はまるで天使を思わせる程だ。

艦内にいる兵士達はその姿に魅了されていると、天使はＢＮの艦に盾を向けた。

盾の表が上下にスライドし更に長くなると、その中心に付いている

宝石のような物が光り輝き始める。
艦の装置は強い反応を示し警報音が鳴り響くが、それに気付いた時にはもう遅かった。
『あっ――――』
盾から放たれた一閃の光は一瞬で艦を包み込むと、その場にいた人間達を全て掻き消した。
巨大な跡が地面に残り、そこにはもうＢＮの艦や機体、人間のいた面影は一切無くなっていた。
別の場所でも同様の事が起きていた、ＢＮ、ＮＦの戦艦は次々に上空から降りてきた天使に破壊されていく。
透き通るように綺麗なレジスタルの眼で人間を確認し、容赦無く攻撃を仕掛けてくる。
３機の我雲が小銃を向け天使に向けて発砲するものの、天使はランスを突き立て瞬く間に全ての我雲の胸部を貫いていく。
破壊し終えその場から去ろうとした天使だったが、近くから少女の泣き叫ぶ声が聞こえてくると一瞬にしてその声のする方へ向かう。
そこには一人の少女が地べたに座り倒れたまま動かない人間の体を必死に揺すっていた。
天使は少女の前に降り立つと、それに気付いた少女は涙で濡れた顔を上げ天使に向かって口を開いた。
「お願いします神様……助けて……皆を、助けて……！」
声を震わせながら少女を手を組むと祈りを捧げる、それを見た天使は右手に持つランスの先を少女に向けると、躊躇い無く突き出した。

――「神って何だ？」
率直な質問だった、少女は閉じていた目蓋をゆっくりと開けていくと、そこには左手で簡単にランスの先端を掴む甲斐斗が立っていた。
少女は驚きで声が出せない、天使はランスを押し出そうとするが甲斐斗に掴まれたまま微動だにしない。
「困った時に助けてくれる便利屋さんか？っま、そうだとしても。

この世界に神はいない」
そう言って甲斐斗が右手を天使に向けた瞬間、右手に集わせた黒い光を放ち一瞬で天使を掻き消した。
「いるのは弱者と、強者だけだ」
甲斐斗は後ろに振り返ると涙で顔をぬらした少女に手を差し伸べ、少女はゆっくりとその手を掴んだ。
そして少女の手が甲斐斗の手に触れた時、少女はＢＮの戦艦の中に来ていた。
「ここはっ……」
少女が辺りを見渡すと、町から逃げてきた人達が大きな部屋に集まり震えていた。
「唯一脱出に成功した艦だ、ここにいればあの町よりは安全だろ」
少女の手から男の手が離れる、急いで声のしていた方に振り向くが、そこにはもう彼の姿は無かった。
甲斐斗は先程まで町にいた場所に立っていた、周りを見渡せば空からは次々に天使が舞い降り町を破壊している。
「天使？神の手先か？どっちにしても邪魔だ……消えてもらうか」
赤く握る瞳で空を睨み、不敵な笑みを浮かべる甲斐斗は右手は高らかに天へと突き出すと、右手の平に一瞬にして巨大な闇が凝縮されていく、そして瞬く間に甲斐斗の体よりも巨大な闇の球体を作り出すと、それを天に向けて勢い良く放った。
広範囲に広がっていく闇は上空にいる全ての天使を飲み込み次々に破壊していく、闇は留まる事を知らず町の上空に浮かんでいた雲をも全て掻き消した。
「弱すぎる……いやまて、俺が強すぎるだけか」
そう言いながら余裕の笑みを浮かべる甲斐斗。
穴の開いた雲からは太陽の日が照らされ町は神々しく照らされている。
「神は世界を守る者なら、何故人間を攻撃するんだ？明らかにＥＲＲＯＲの方が……ん？」

町を照らし出す光が段々と強くなっていく、異変に気付いた甲斐斗は軽く首をかしげながら空を見上げた。
その瞬間、一本の巨大な光が町全体を飲み込むと、その場にあった全ての物を破壊していく。
凄まじい轟音と地響きに、既に北部から離れたＢＮの戦艦にもその振動と衝撃が伝わってきていた。
北部の町があった場所には巨大な穴が開き、周辺には白い塵が積もっている。
巨大な穴、その穴の中から一人の男が浮き上がってくると、平然とした様子で空を見上げたままだった。
「こんな短時間でこれだけの魔力を蓄えたか……まぁ、それは俺も同じだけど」
その言葉の後、突如天空から神が舞い降りた。着地した地面は巨大な亀裂が走り大地を揺らしていく。
全長五百メートルは軽く超える神の巨体、それを見て甲斐斗は指を鳴らすと何処からともなくＭＤが姿を現した。
そして颯爽と機体に乗り込むと、甲斐斗は機体を浮上させていき神の胸元辺りで機体を止めた。
「ミシェルは何処だ。胸部か頭部、いや腹部か？……まぁいい、両手両足切断した後にゆっくり探すとするか」
ＭＤは瞬時に黒剣を出すとそれを両手で握り神の元に飛び立とうとした時、突如モニターが砂嵐に変わると一人の少女が映し出された。
「ミシェル！？」
光り輝く部屋の中に様々な文字は模様が光を放ちながら円になり少女を囲っている、少女はその中心に浮いており、閉じていた目蓋をゆっくりと開けた。
「待ってろ！今すぐ助けてやるからなッ！」
その甲斐斗の言葉にミシェルを首を横に振ると、虚ろな瞳で甲斐斗を見つめる。
『助けはいりません、私は居るべき場所に戻られたのだから』

頭の中に直接聞こえてくる声、その声はミシェルと似ていたが口調が余りにも違うが、どこかで聞いた事のある声だった。
「この声、俺とミシェルが始めて会った時に聞こえてきた声……てめぇ一体何者だ、答えろ」
『……私は、この子の観察を任されていた者』
「観察？何の為にそんな事しやがる」
『その質問には答えられません。ですが甲斐斗、この子に笑顔をくれた貴方にはとても感謝しています。
楽しい日々も過ごせてこの子も満足したはずです、ありがとうございました』
第１ＭＧは礼を言い終えた後、顔を俯かせるが、次に顔を上げた時虚ろだった瞳には光が戻っていた。
「かいと……！」
泣き顔で甲斐斗の名を呼ぶミシェル、それを見て甲斐斗はＭＤの出力を最大にすると両手に握る剣を高らかに振り上げた。
「大丈夫だ、すぐに終わらせる」
悲しむミシェルの姿を見て甲斐斗は神を睨みつけ、神の胸部目掛け剣を突き立て突進しようとした時、ミシェルは涙を零しながら大きく首を横に振った。
「きちゃだめッ！」
今まで聞いた事の無いミシェルの叫び、甲斐斗は瞬時に機体を止めると驚いた様子でミシェルを見つめ続ける。
「ごめんねかいと、こんなことといって、でも……えっ！？」
「うぉらぁあああああッ！」
ＭＤの右腕に瞬時に黒い光を放ちながら魔力が集うと、それを神の右肩に向けてぶっ放す。
放たれた力は停止している神の右肩に直撃すると、巨大な神の肩が簡単に崩れ落ちた。
「聞けミシェル！俺はまだお前に生きる楽しさと喜びを見せちゃいねえ！だから俺はこんな所で死ぬつもりも無い、お前を失うつもり

も無い！……だが、お前が俺を拒否するなら俺は手を引く、だがもし俺を信じてくれるなら、必ず俺が幸せにしてやる。約束したからな」

恥じらいも無く言い放つ言葉、力を漲らせているその甲斐斗の眼は真っ直ぐミシェルを見つめていた。

「その為には聞いておかなくちゃならねえ……ミシェル、お前にとって、幸せって何だ？」

「しあ、わせ……」

ミシェルの脳裏に今までの思い出が蘇る、それと同時に自分の立場、力、存在、神、様々な思いと記憶が駆け巡る。

……今、自分にとって一番の幸せ。今、今……幸せ……でも……。

視線を反らし躊躇う表情を見せた瞬間、力強い甲斐斗の声がミシェルに耳に届いた。

「ちなみに俺の幸せは……ミシェル。お前の側にずっと一緒にいることだ」

その言葉に恥じらいも無ければ迷いなんてものも無い。

今の甲斐斗の本心は揺るぐ事は無い。後悔なんてしたくないから、本音を伝えたまで。

状況や立場もわきまえている、だがそれで甲斐斗の思いが変わることは無い、何故か。

力があるからだ。

ミシェルは顔についた涙を振り払うと、涙で濡れた手を一生懸命甲斐斗に向けて伸ばした。

「わたしも……かいとと、ずっと！ずーっといっしょにいたい！」

ミシェルの本音が聞けた、その言葉は紛れもない事実。

だからもう迷わない。今どうなろうと、何が起ころうとも、甲斐斗は少女の言葉を信じ約束を守りきる。

お互いが優しい笑みを見せ一瞬緊張が解れたその時、突如ミシェルの両腕が広げ苦しい表情を浮かべる。

「はぁっ！あ…ぅ……か、い……と……ぁあ――――ッ！」

ミシェルの眼からは光が消えていた、そして周りを取り巻く文字や紋章が光輝きはじめると、右肩を失った神の全体に巨大な陣が光を帯びて浮かび上がってくる。
桁違いの魔力が神から込み上げて来ると、神は形状を変えていき丸みを帯びた体では消えていき、より鋭く硬く大きく、破壊に長けた神の形に近づいていく。
その光景を眼に焼き付ける甲斐斗、自分の想像していた以上の出来事がそこでは起こっていた。
『悪しき魔神よ、神聖なるこの世の神に平伏しなさい。世界は、私達の力で救います』
「観察者か。にしても人殺して世界救うのかよ……だったら俺は、神を殺してお前を救う」
ＭＤの眼光が赤く鋭くなると、ＭＤの足元に何重もの魔方陣が集いはじめる。
その陣はＭＤの背部にも現れると、より一層黒く光輝き始めた。
『私はもう観察者ではありません、私は第１ＭＧ。役目を果たす者』
すると神の足元にもＭＤとは比べ物にならない程巨大かつ精密な神が描かれると、白き光を放ち黒き光を掻き消していく。
ミシェルは小さく微笑むと、壮大に広がる綺麗な青空を見上げた。
そして視線を下ろし前を向くと、ゆっくりと口を開いた。
『それではこれより、Ｄｅｌｔａプロファイルを開始します』

第８２話　終始、最強

――――「世界は選択された、もう誰も止められない」
薄暗い部屋の中、テトはそう呟くと手に持っていたお皿を机の上に置いた。
机の上には綺麗に彩られた料理が並べられており、シャンパンまで用意してある。
「それなら残り僅かな時間を有意義に、幸せに……過ごそうじゃないか」
食事の準備が出来たテトは隣の部屋に向かうと、ベットの上でシーツに包まり小さく震えるフィリオの肩にそっと手を置いた。
するとフィリオは条件反射のように肩に置かれた手を叩き自分の肩から退けた。
「触らないでッ！」
目に涙を浮かべるフィリオ、その表情を楽しむかのようにテトは見つめると、そっと口を開いた。
「どうしてだい？昨日の夜はあんなにも僕を――――」
次の瞬間、テトの言葉を遮るようにフィリオがテトの頬を叩いた。
「フィリオ……」
冷たく呟かれた名前、自分のしてしまった事と、その声を聞いて小さく身構えるフィリオだが、テトはその場で立ち上がると隣の部屋に体を向けた。
「人間って、どうしようもない程愚かで、哀れな生き物と思わないかい？」
楽しそうに笑みを見せるテトに、フィリオはゆっくりと、そして小さく頷いた。
「そうですね……特に、貴方は私が見てきた人の中で一番可哀想な方です」
震えているのを悟られないように必死に体に力を入れ、力強い目で

テトを睨みつけるフィリオ。
だがテトは動じる事なく小さく笑って見せると、食事を用意した部屋へと歩いていく。
「へぇ、僕が可哀想か……食事でもしながらゆっくり聞かせてほしいなぁ、その訳を」
綺麗な料理が並べてある机の前にテトは座ると、じっと自分が来た部屋を見つめる。
思ったとおり、フィリオは部屋から出てくるとテトと向き合うような形で椅子に座った。
「貴方については以前から知っていました。テト・アルトニア、百年程前から数多くの世界を巡り、その凶悪な力を使っては世界を、人々を弄んできた男……」
「ふーん、君はそうやって僕の事を教えられたのか」
「違うのですか？」
「いや、その通りだよ」
平然と言ってのけたテトの顔をじっと見つめ続けるフィリオに、テトはシャンパンの入ったグラスを手に取ると言葉を続けた。
「仕方ないよ……人は力があると、己の欲に忠実になるんだから」
テトの手からグラスが滑り落ちる。硝子で出来たグラスは床に落ちると簡単に砕けたが、テトの目線はずっとフィリオに向けられたまま離れない。
「本当、力の無い人達は可哀想だよね。この世界の人間もそうさ、人生の半分以上を仕事に費やし、生きるだけで精一杯の人間が山ほどいる。世界に、社会に、人に、虐げられるだけの人生。君にはわからないと思うけど、僕は見てきたよ、この目で」
そう言ってテトは目を見開いたが、すぐに目を閉じるとテーブルの下から割れたはずのグラスを手に取りそのグラスにシャンパンを注いでいく。
「力に限らず哀れな人間は沢山いる。正義が馬鹿を見て、善人が苦しむ世界の中でね」

グラスに注ぎ終えたシャンパンをテーブルの上に置くと、テーブルに肘を着きフィリオの様子を窺い始める。
するとフィリオはその言葉に答えるかのように口を開くと、哀れむような表情でテトを見つめた。
「貴方は見ようとしていない……正しく、優しい世界の姿を」
「無いものをどうやって見るんだい？正しい世界、優しい世界、平和な世界？そんな世界、一つも無いよ」
そういい終えた後ようやくグラスに告いだシャンパンを一口飲むテト、フィリオは未だ目の前の料理には手をつけずそっと口を開いた。
「そうかもしれません……でも、だから私達は作ろうとしているのです、人々が平和で安心に暮らせる世界を……貴方はそんな世界が嫌いですか？」
フィリオの質問にテトは首を小さく首を横に振ると、まだシャンパンが残っているグラスをじっと見つめた後、それを壁に投げつけた。
鮮やかな模様をしていた綺麗なグラスは無残に砕け散り、それを見てテトは笑みを見せた。
「大好きだよ、こうやって平和な世界が崩れ散っていくのを見れるんだからね」

「善に悪、人間の心と集団、組織や世界……力は己の欲を果たすために存在している。その力をどのように、何の為に、どうやって、なぜ使うのか……それはその人次第」

「人は弱いからすぐ集団になりたがるし、力の強いものに縋ったりする。それで自己防衛を果たすのさ、でも……僕みたいに強い力を持つ人間は。そんな必要が一切無い」

「そう……きっとあの男もそうだったはずさ。力の無い人間が突然神と同等の力を手に入れたんだ、誰だって気が狂う。だから僕はあの日に気付かされたんだ、人は力がなければ何も出来ない、けど力

さえあれば何だって出来るってね」

テトは全てを言い終え、ようやくナイフとフォークを持ち食事をしようとした時、突如部屋の扉が開くと一人の女性が現れた。

「ただいまー、あ、これ美味しそー」

平然とした表情で部屋に入ってくるアビアはテーブルの上に飾られている料理を見て一口サイズに斬られているステーキを指で摘みそのまま口の中に放り込む。

「丁度良い所に帰って来てくれたねアビア。早速甲斐斗の首を出してフィリオに見せ付けてあげようじゃないか」

その言葉にフィリオの表情が強張りアビアから顔を背け目を瞑る、だがアビアは甲斐斗の首を一向に出さない、というか両手には何一つ持っていない。

「それがねーテト、甲斐斗が力を取り戻したんだよ」

短調なアビアの言葉にテトの手が止まる、そしてゆっくりとナイフとフォークを机の上に置くと俯きながら口を開いた。

「甲斐斗が……力を取り戻した……？」

「うん、それで逃げられちゃった。それでー今は神と戦ってるらしいよー」

「神と？……そう」

落ち着いた様子でまたナイフとフォークを手に持つと、手馴れた手つきで料理を食べ始める。

「あれれ？てっきり怒られると思ってた」

「いや、むしろ好都合さ。奴が神に勝っても負けても……結局最後に笑うのは僕になる」

「ふーん、じゃあアビアは隣の部屋にいるね」

最後にもう一口ステーキを食べようとアビアは手を伸ばしステーキを摘まむと、それを口の中に放り込んで部屋から出て行ってしまう。

その時ふとフィリオは思った、何故彼女は彼と共に行動し、彼もまた彼女と行動するのか。

「貴方と彼女は、もしかして……」
「アビアの事かい？別に特別な感情なんて無いよ。ただ彼女が勝手についてきているだけさ」
そう言うとまたテトは食事に戻るが、フィリオは一向に手をつける気配が無い。
……何かが矛盾している、テトの言葉と行動、そして今。何かがフィリオの中で引っかかっていた。
「どうして……どうして貴方はそれだけの力を持っているのに……平和の為に使わなかったのですか……？」
フィリオの言葉にテトは表情を曇らせると、呆れたように溜め息を吐いた。
「フィリオ、君は何もわかっていない」
残念そうな表情を浮かべるテトに、フィリオはただ見つめ続け質問の答えを待つ。
するとそれを見たテトはからかうような笑みを見せた後、その黒く濁った目でフィリオと目を合わした。
「正義の英雄（ヒーロー）に憧れるのは、子供だけさ」

――「か～いとかいと～、は～やくはやく～」
「あ、あの。アビアさん？一体何を……」
隣の部屋では埃の被った装置を必死に弄くるアビア、後ろにいたロアは近くにあったソファに座り込むと小さく溜め息を吐いた。
「甲斐斗の戦いを見るーの！ここからなら安全で寛ぎながら見れるもんねー」
「見るって、甲斐斗さんは戦場ですよ。どうやってここから……」
「アビアだってちゃーんと考えてるんだからぁ……ほら！モニターに映った！」
先程からやけにテンションの高いアビアは大きなモニターに映る神の姿を見るや否やすぐさま近くにあったソファに座り興味津々でモニターを見つめる。

「すごい甲斐斗、すごい、すごい！すごい！！アビアに見せて、見せて！甲斐斗の力を！真の姿を！」

もはやアビアの眼中には甲斐斗の乗るＭＤ姿しか映っていない、それはまるで子供が自分の好きなテレビを見ているかのように心ときめかせ、可愛らしい笑みを浮かべながら見つめていた。

アビアとロアが今見ている映像、それと全く同じ映像見ている人達がいた。

――会議場の一番奥にある巨大なスクリーンに映し出されるＭＤと変形した神の姿に、その場にいた人間が全員息を飲んだ。

「これが……神……」

その場にいた赤城がそう言葉を漏らすと、隣に座っていたエリルも口を開いた。

「甲斐斗もいる。まさか、本当にたった一人で戦いに行くなんて……！」

無人偵察機からの映像、今流されている映像はＢＮ、ＳＶに限らずＮＦも見ていた。

甲斐斗と神が接触した今、人類は見届けなくてはならない、この戦いの結末、結果を。

全世界の兵士が見守る中、神と甲斐斗の戦いが始まる。

……が、別に甲斐斗は人類の為に戦っている訳ではない。

ほんの小さな理由、たったそれだけで全人類を滅ぼそうとした偉大かつ強大な神の前に立ちはだかる。

戦う理由は人それぞれ、愛の為、金の為、力の為、人の為、自分の為、世界の為……色々あるが、どれも間違いでなければ正解でもない。

甲斐斗……現実を正当化する事ができず、理想は不当化に辿りつくそんな今と過去と未来に、何を望み、何と戦うのか。

――「あースッキリした。これで胸にあったもどかしいものも取

れた事だし……行くぜ？」
眩い青空の下で甲斐斗の乗るＭＤが神に腕を向けると、手の平に黒く光りを放つ塊が一瞬で現れるとそれを神の右肩に向けて放った。
その衝撃で空間は歪ませながら神に触れようとした時、神に触れる手前で見えない壁に全て防がれていく。
「シールドか、しかも何十層にも圧縮して固めてやがるとは、余程俺に嬲られてえみたいだなぁッ！」
次にＭＤが剣を構え神の元に行こうとした時、神の両肩、両腕、両足から一斉に砲門が出てくると、一斉に甲斐斗に向けて放ち始める。
何百発もの光が甲斐斗に向けて放たれるが、ＭＤは回避をしながら瞬時に剣で光を盾にし突き進んでいく。
だがその時、巨大な神の巨体は軽々と動くと、その巨大な両腕を高速で動かし接近してくるＭＤを飛んで来る害虫を叩き落すように吹き飛ばす。
一瞬で吹き飛ばされ神との距離が離れていくＭＤ。
それを見た神は両腕をＭＤに向けると、真っ白い閃光を、神の巨体を包み込むほどの光の塊を放ちだした。
射線上にある物という物は全て掻き消されていくが、光は止まる事を知らず一直線に進んでいく。
機体の体勢を立て直したＭＤは瞬時に上空へと飛び上がり何とか光をかわす事に成功したが、光は数十キロ先も離れている森や町までも飲み込み一瞬にして塵と化していく。
しかしその状況と光景に神と甲斐斗は動揺などしない。今度は神の全身から放たれる無数の光の線が一斉にＭＤに向かっていく、回避しようと高速で動くが、光もまた高速で動き逃げるＭＤを追っていく。
何百本という光の線が甲斐斗を追い、甲斐斗は近づいてくる光を剣で弾き、防ぎ、何とか光の直撃を免れている。
神の攻撃はまだ続く、神の周りにある空間に次々に光輝く陣が浮かびあがると、その一つ一つの陣の中から次々に天使が舞い降りる。

驚異的な神の力、そして神の周りを取り巻く百機を超える天使の数に、神との戦いを見ていたＮＦ、ＢＮ、ＳＶ達の兵士は息を呑んだ。
『無駄です甲斐斗、貴方の力では私に勝つ事は出来ません』
「俺が勝てない相手なんていねえ。それにな、今目の前で涙を流して俺の助けを待ってる女がいるんだよ」
ニヤリと笑みを浮かべる甲斐斗に、第１ＭＧもそっと微笑む。
そして天使達は一斉に甲斐斗にランスを向けて飛んで行く、それをＭＤは片っ端から斬りおとしながら神の元に近づいていく。
「洒落た事言うだろ？俺の最強の力は俺の為に動く時が大半だが今は違う。一人の女の未来の為にも動いてんだぜ？」
複数の天使がＭＤに盾を向け光を放つが、ＭＤは全ての光を回避すると、左手に空高く突き上げる。
上空に黒き巨大な陣が浮かび上がると、一斉に天使と神に向けて赤黒い雷（いかずち）が降り注ぐ。
一撃で天使は破壊されていき、神の周りに浮いていた天使は次々に四散し、崩れ落ちていく。
その攻撃を会議室で見ていた唯は開いた口が塞がらなかった、同様にアビアもそうだった、神の圧倒的な力にも負けず戦うＭＤ、甲斐斗の姿を見て感動している。
雷は神にも落ちるが、天使とは違い幾ら神に落ちようとも傷一つ付ける事が出来ない。
ＭＤは剣を構えると爆発していく天使の影に隠れながら神の元へ近づいていくと、神はその巨大な右腕を甲斐斗に向けて振り下ろした。
巨大な拳はＭＤに当たる事なく地面に当るが、その拳が地面に触れると同時に空間が歪む程の衝撃が全範囲に広がっていく。
地面には亀裂が無数に走り、その場にある塵を舞い上がらせる。
ＭＤは衝撃に耐えながらも間一髪拳をかわすと、振り下ろされた神の右腕にそって飛び上がろうとしていた。
だがその時、神の右腕に無数の砲身が現れると、目の前にいるＭＤ向けて無数の光が放たれる。

「んな攻撃が俺に効くかぁあああああッ！」
右腕に向けて剣を振り下ろすＭＤ、周りに張られていたシールドを簡単に破壊すると、その衝撃が腕一面に伝わり次々に砲身を破壊していく。
その隙に神の右肩へと上がっていくＭＤ、だが次は神の右腕からは先程よりも遥かに巨大な砲身が現れると、時間をかけることなく一瞬で巨大な光をＭＤに向けて放つ。
「しまっ――――！？」
一瞬にして光に飲み込まれるＭＤ、砲撃が終わり光が消えた後に、ＭＤの姿は何処に無い。
それを見て第１ＭＧは小さく微笑んだ。だが次の瞬間、第１ＭＧの目の前の映像にＭＤの姿が現れた。
『そんな……直撃のはず……ッ！？』
第１ＭＧの驚きを余所に甲斐斗の余裕の笑みを浮かべると、何かに気付いたように口を開いた。
「そういえばまだお前には言ってなかったな……」
神の頭上まで来ていたＭＤは神の脳天に右手を付けると、甲斐斗の額に黒く光る陣が浮かび上がった。
「俺は甲斐斗、最強の男だ」
ＭＤの右腕に光り輝く模様が現れると、神の頭を掴んでいた手から渾身の一撃が放たれた。
神の全身を一瞬で包み込む黒き光、神はその力に身動きを取ることが出来ず、ＭＤは更に力を強めていく。
黒き光は神の全身を守っていたシールドを全て剥がしていき、その強固な装甲に亀裂を走らせていく。
するとＭＤは手を放し更に上空へと飛ぶと、剣を背中に背負い今度は両手を神に向けた。
先程と同じ力を両手から放つＭＤ、その衝撃は神の内部にいる第１ＭＧにも伝わっていた。
天空、大地、そして神を揺るがす甲斐斗の力に、第１ＭＧは驚きの

表情を浮かべたまま固まっていた。
『これが魔神の力……ですが――――』
崩れかかる神の体、その内部にいる第１ＭＧが両手を空高く上げると、神の頭に付いてある白き宝石が光り輝き始める。
強烈な光りはＭＤを照らすと、機体の内部にいる甲斐斗をも照らし出していく。
「俺と力で張り合おうってか？面白れえ、やってやろうじゃねえか――――ッ！？」
甲斐斗は眼を見開き更に力を強めていくが、神の頭部に埋め込まれた宝石から放たれた一閃の光によりＭＤから放たれる力を全て掻き消していった。
「この……力は……――――」
小さく呟いた瞬間、一瞬で光に飲み込まれていくＭＤ。光の中で甲斐斗の機体、力を掻き消していく状況の中、脳裏に一人の女性が映し出された。

――――光が消えた後、その場にＭＤの姿はあった。
だが機体全体に亀裂が走り、装甲がボロボロと崩れ落ちていく。
「てめえ、まさか……」
苦しそうな表情を浮かべる甲斐斗に、第１ＭＧは目を瞑ると小声で語りだした。
『１００年前、神はこの世界で復活を遂げ、そして絶望しました。緑に囲まれたあの美しかった世界が、人間の手によって侵食されていたからです』
第１ＭＧの語りと共に亀裂が走り傷付いていた神の体が徐々に修復されていき、第１ＭＧは更に言葉を続けていく。
『この世界にとって人間は害と判断された神は、人間をこの世から排除していこうとしました。ですがその時、一番最初に抗ったのは、たった一人の少女でした』
神の全身に付いていた傷は全て消えていた、完全に復活を遂げた神、

周りからは次々に天使が舞い降り、太陽の眩い光が神々を照らす。
『今の貴方と同じですね。たった一人で神に抗って散っていく……それが貴方達神に抗った者の結果』
神は両手を高らかに上げると、上空にいるＭＤ目掛け手を開いた。
周りに浮かんでいる天使達も全て盾をＭＤに向けると、構えた盾が発光し始める。
『安心してください。貴方が散った後、立派なレジスタルにしてあげますよ。それは私達神の手で大切に使わせていただきます、この世界の為に』
太陽の様に力強く、神秘的に輝く白い光。その光は神の両手にも集いはじめる。
四方から照らされるＭＤ、装甲には亀裂が入り今にでも崩れていきそうな姿で空に浮かび続けている。
「やっぱりてめえの仕業だったか、なるほどな……んじゃ、最後に教えてくれないか？お前は人類を滅ぼそうとしたが百年前に百年の猶予を人間に与えたんだろ。何故だ？」
今目の前にいる神が人間の為に猶予を与えたとは到底思えない甲斐斗、第１ＭＧは黙ったまま甲斐斗を見つめ神の両手には極限まで光を溜めている。
その様子を甲斐斗は面白そうに見つめている、この圧倒的な立場に立たされている今も、久しぶりの激戦を楽しんでいるかのように。
そして甲斐斗は口を開いた、力強くハッキリと、神に向かって。
「お前さ……負けたんだろ、そのたった一人の女に」
甲斐斗が目を見開いたと同時に神の両手から光が放たれる、光は一瞬でＭＤを包み込むと、周りに飛んでいた天使達もそれに続いて光をＭＤに向けて放ちはじめる。
神と甲斐斗の戦いを見ていた会議室は映される眩い光に何が起こっているのか把握できない。
部屋で見ていたアビアはモニターに映る真っ白な光を小さく口を開けたまま見つめている。

ＭＤが光に包まれたのを見て第１ＭＧは安堵の笑みを浮かべると小さく深呼吸した、もうこれで邪魔は消えた、後は世界の為にＥＲＲＯＲと人間の両方を排除するだけ。

そう、世界の為に。人間が汚してきた世界をまた一から綺麗にしなければならない。

ＥＲＲＯＲについてもそうだ、今から作る世界にとっては有害な存在、だから神に抗う者が皆消す。

現に百年前神に抗った女も消えて今では神の一部となっている、全ては神の、世界の為。今度こそ平和な世界を作る、誰も傷つけ合わない、平和な日々が永遠に続き、皆が平等に笑って暮らせる優しい世界を。

「……それで、たった一人の女と相打ちになったお前は、肉体が完全に完治するまで眠る事にしたんだろ。そして全ての力を取り戻した時、それが丁度１００年後、今だった訳だな、だが俺の力を止める為に放したミシェルが帰ってこなくて再起動する事が出来なかった、全くもって無様、自分だけじゃ何も出来ないただの人形だな」

甲斐斗の声に第１ＭＧの顔から安堵の表情が消える、平和な世界を作ろうとするのに、それを邪魔する悪魔の化身、邪悪で恐ろしい力を振るいこの世界を終焉に導いている者。

『どうして、どうして貴方は消えないのですか！？人々は光を求めているのです！貴方のような闇は必要無い！世界はまた一から光と神の元で創造されるのです！』

身を乗り出して第１ＭＧが声を荒げると、神達から放たれた光を掻っ切り、勢い良く中からＭＤ飛び出してくると、そのまま勢いに任せ神の頭部に着地する。

「何故消えないのか？さっきも言っただろ、俺が最強だからだ。何も驚く事は無い、俺が最強なのは前もって伝えてあるだろ」

ＭＤは高らかに剣を振り上げると、その黒剣が黒く光り輝き力が溢れだしていく。

「そろそろ終わりにするぞ、俺も暇じゃない。約束を果たさなきゃ

ならないからな」
目を赤く光らせ、勝ち誇った顔をしている甲斐斗に第１ＭＧは恐怖に震え驚愕していた。
神の攻撃をものともせず、たった一人で神と天使達と互角以上に戦っている。
嘗て世界を滅ぼしかけた神、何千何万という人間達が立ち向かっても神に触れる事すら敵わなかった。
だが今、ここに神を、全てを超越した存在がいる。
『ありえない……ありえない、ありえない！神が、そんな、簡単に、負けるなんて、そんな事、絶対ありえない！』
「ありえなくねーよ、俺がこの世界に来て名も無き美少女と出会った時点でこうなる事は決まってた。そう、まるで世界を守る為に死ぬみたいな在り来たりな展開と同じだ、俺が戦いに勝利する事もまた、在り来たりな事なんだよ」
力は溜まった、もういつ黒剣を振り下ろしてもいい状態となったＭＤに、第１ＭＧはただ呆然と口を開き動揺を露にしていた。
『神、私は、誰もが望む平和な世界の為に、私、神は……皆は、光をっ――――』
突如第１ＭＧが俯くと、全身を脱力させていく。そして徐に顔を上げると、先程までとは違う冷静な面持ちになっていた。
『聞いて甲斐斗……』
第１ＭＧの呟きに甲斐斗も何かを感じた、同じ第１ＭＧではあるが、先程までとは別人のように雰囲気が変わっていたからだ。
「観察者……じゃなさそうだな、誰だお前は」
『私は……ミシェル。聞いて甲斐斗、貴方は私を救おうとしている。でもね、私が貴方の元に帰ると、私はまた貴方の力を封じ込めてしまうの。貴方が取り戻した力が全て消えてしまう。それでも貴方は私を救いますか？』
悲しい表情を浮かべながら甲斐斗に告げたミシェル、その言葉に甲斐斗の表情が曇ると、大きく溜め息を吐いた。

「……わかった、じゃあ救わない。なんて、今ここで俺が言うと思うか？」

やる気に満ちた赤い眼で小さくと笑う甲斐斗を見て、ミシェルは大きく首を横に振った。

「大丈夫、安心しろ。力が無くても俺は……最強だぁあああああッ！」

その言葉と同時に剣を振り下ろすＭＤ、神の額を切り開いていくと、そのまま神の内部を一直線に降りていく。

切り裂かれた場所からは眩い光が放出されていく、ミシェルのいる部屋にも亀裂が走っていくと、轟音と共に天井が崩れ頭上からＭＤが迫ってくる。

するとＭＤの胸部に着いてある扉が開き、その中からは両手を精一杯伸ばしミシェルを抱きかかえようとする甲斐斗の姿があった。

ミシェルの目から涙が零れ落ちる、そして悲しい表情から笑顔に変わると、ミシェルもまた甲斐斗に向かって手を伸ばした。

――ＭＤは地面に着地すると、手に持っていた剣を地面に突き刺した。

真っ二つにされた神は左右に体が分かれ崩れ落ちていく、切り開かれた場所からも光は消え、神の体が塵へと変わり風に流されていく。

甲斐斗の胸元に顔を埋めたままのミシェル、そっと顔を放して見上げてみると、そこには優しい表情をした甲斐斗がしっかりと体を抱きしめていた。

「おかえり、ミシェル」

そう言いながら頬についている涙を指で優しく拭き取る甲斐斗に、ミシェルはにっこりと可愛らしい笑みを見せた。

「ただいま！かいと！」

もう一度甲斐斗に抱きつくミシェル、甲斐斗も一安心したのか安堵の表情を見せると優しくミシェルの頭を撫でていく。

――その頃甲斐斗の戦いを見ていた唯達のいる会議室では、歓喜に満ち溢れていた。
「うぉおおおおお!?甲斐斗が神に勝ったぞぉおおおおおッ!」
穿真の言葉に続き会議室にいた人達が席から立ち上がり思わずガッツポーズをとる。
会議室……いや、軍の基地でその戦いを見ていた兵士達は皆は歓声を挙げていた。
エリルと雪音は嬉しさに抱きしめあい、穿真も羅威に抱きつこうとしているが必死に突き離している。
葵は嬉しさの余りエコを抱きしめ持ち上げると、体をグルグルと回転させて踊りながら笑っていた。
「やめて葵、やめて……」
「なーんでだよ!喜べ笑え祝え~!神が負けて甲斐斗が勝ったんだぞ~!」
「やめて、気分悪い……吐いちゃう、葵……やめ……」
喜びに分かり合う人もいれば、その現実離れした光景に固まったまま動けない者もいる。
「紳、どうやらお前の言った通りになったな」
煙草を吹かしながらＭＤの映るモニターを見つめ続けるダンの言葉に、紳は固まっていた肩の力を抜いた。
「……正直今でも信じられない、人類が１００年前束になっても敵わなかった神を、たった一人で倒すとは……恐ろしい奴だ」
認めざるを得ないその力に、紳も納得する他無かった。
隣では唯が涙を流しながら喜び、甲斐斗を神と崇め称えはじめる。
今の唯にとっては姿形の無い神等には興味の欠片も無かった、神なら目の前にいる、神ならすぐ近くにいる。そして行動して結果を出している、今もそうだ、人類を滅ぼそうとしていた者を倒し、世界を救ったのだから、今の唯にとって甲斐斗は神の他ならない。
そして椅子に座ったままの赤城はモニターに映る映像を見つめていたが、小さく笑うと俯き呟いた。

「本当に一人で神に勝つとは……さすがだな、甲斐斗。ありがとう……」

「ばんざい！ばんざーい！赤城少佐！もっと喜びましょうよ！」

赤城の後ろでは喜びに一人ぴょんぴょん飛び跳ねる由梨音の姿があった。

「喜んでばかりもいられんさ、甲斐斗は世界を守ったんだ。今度は私達が守る番だ」

――操縦席に座っていた甲斐斗はミシェルを抱きかかえたまま外に出ていた。

太陽からの光が燦々と降り注ぐ中、地上にはその光を反射させ煌く無数のレジスタルが散らばっていた。

「レジスタル……これだけあれば過去に帰れるかもしれない！早速拾い集めていくか」

戦闘後だというのに甲斐斗は終始笑みを見せ機体に戻ると、再びＭＤを動かし始め辺り一面に散らばっているレジスタルを回収しようとした時、一発の砲弾がＭＤに向けて放たれた。

攻撃に気付いた甲斐斗はすぐに黒剣を出そうＭＤの両手を前に出したが、剣は出る気配が無く砲弾がＭＤの両腕に直撃する。

爆発と共にＭＤの両腕は吹き飛び、甲斐斗はミシェルを抱きしめたまま必死に衝撃に耐えていた

「大丈夫かミシェル、どこか怪我はないか？」

「うん、わたしはだいじょうぶ、でもかいとが……」

「大丈夫、俺も無事だ。が……まさか剣も出なくなるとはな」

爆発の衝撃でハッチも吹き飛ばされ、仰向けの状態で倒れているＭＤの中からはその様子がハッキリと見えた。

「ＮＦの空中戦艦！？レジスタルを独り占めする気かよ……！」

急いで機体を立ち上がらせようとした甲斐斗、だがＭＤは既に限界を迎えていた。

両腕を失い、装甲も朽ち果て、動力源も底を尽いているこの状態で、

力の無い甲斐斗には何も出来ない。
必死に操縦桿を動かし体勢を立て直そうとしていたが、その時既にもう一発の砲弾がＭＤに向けて放たれていた。
「何も出来ないッ！？」
操縦席に近づいてくる砲弾に何もする事が出来ない、甲斐斗はただミシェルを抱きしめると、迫り来る砲弾に背を向けた。
「か、かいと！？」
「大丈夫だ、耳塞いでじっとしてろ。絶対に俺が守る……！」
今は我が身を犠牲にするしかミシェルを守れる方法が無い、甲斐斗は目を瞑ると静かに直撃を待った。
……しかし、一向に爆発する気配が無い。甲斐斗はミシェルを抱きしめたままゆっくりと後ろに振り向くと、目を疑うような光景が広がっていた。
「と、止まってる……」
砲弾は回転をしながらもＭＤの目の前で止まっていた、そして回転も徐々に遅くなり動きが止まると、砲弾は向きを変え空に浮かぶ戦艦に向けて飛んで行く。
「なっ、一体何が起きてんだ……って！？」
突如ＭＤを覆い隠すように上空から現れた１機の機体、両手を広げると辺りに散らばっていたレジスタルが宙に浮き機体の背部に開いていた所へと次々に入っていく。
そして甲斐斗の目の前にある一つのモニター、一人の女性が映し出された。
『ふふっ、驚いた？これがＮＦの最高傑作機、羽衣の力よ』
赤髪に眼鏡を掛けた女性の笑みを見て、甲斐斗はすぐに操縦者が神楽だとわかった。
「か、神楽！？お前どうしてここに、って今度は何だ！？」
動けるはずのないＭＤが軽々宙に浮き始める、甲斐斗は足で踏みとどまり自分の体を固定すると、レジスタルと一緒に羽衣の背部へ入れられてしまう。

『話しは後でたっぷりしてあげる、だから今は静かにしてなさい』
上空の戦艦から無数に放たれるミサイルを、羽衣は片手を翳すだけで全てのミサイルは軌道を変え戦艦に向かって戻っていく。
戦艦は弾幕を張り自分達が放ったミサイルを必死に撃ち落していくと、その隙に羽衣は戦艦から離れていく。
『神が消えたからって何も変わらない。貴方が変わっても、世界は変わらない……』
状況は何も進展していない、むしろ悪化したのかもしれない。
甲斐斗は力を失い、神も消えた。ＥＲＲＯＲに対抗できるの戦力が二つ消えた事になる。
今、残された力は人類のみとなった。
弱く、愚かな、人類だけに。

第８３話　革命、故

――神と甲斐斗の戦いを見ていたアビアは、モニターの電源を消した後満足そうな笑みでベットの上で横になるが、すぐさま起き上がると突然服を脱ぎ始める。
その唐突な行動にソファに座っていたロアは顔を赤らめ慌てて後ろに振り返る。
「あ、アビアさん！？突然何なんですか！」
「甲斐斗に会いに行く前にシャワー浴びなくちゃねー」
慌てふためくロアを尻目にアビアは椅子に掛けていたタオルを手に取ると、アビアは一人浴室へと向かっていく。
部屋の扉が閉まる音を聞いてようやく振り返る事の出来たロアだが、目の前には先程までアビアの着ていた服が散乱しているのを見てまた慌てて後ろに振り向くと、そっと溜め息を吐いた。
「あの力はたしかにすごかった。けどあの力があればＥＲＲＯＲに勝てるとは思えないし、まだ安心できない……」
そう思ったロアは今自分がこの場にいていいのか疑問に思った。
こんな場所でのんびりしている場合じゃない、何かＥＲＲＯＲに繋がる情報が欲しい、誰かの力になりたい。
その為には行動しなければならない、この世界にＥＲＲＯＲがいる時点で平和な世界ではない、逃げる事が出来ないなら立ち向かうしかない。
ソファから立ち上がるロア、そのまま部屋から出ようと扉に向かおうとした時、部屋の扉が自動で開くとそこには一人の青年が立っていた。
「おや、アビアが男を部屋に連れてくるなんて珍しいね」
青年はそう言うと部屋の中に入りアビアを探すかのように見渡すが、部屋に落ちていた服を見て理解できた。
「またシャワーか。じゃあ君、お楽しみの前に今から僕が言う事を

アビアに伝えておいてくれないかい？」
平然としたテトの態度とは裏腹にロアは身動き一つ取れないでいた。
言い様のない気配と雰囲気、明らかに普通の人間とは思えない程の何かが漂っていた。
「ああ、わかった……それで、何を伝えたらいいんだ？」
「うん、それは――」
……ロアに伝える事を伝えた後、テトはアビアの部屋を後にする。
そして自分の部屋に戻ったテトは、まるで何かを楽しんでいるかのように微笑んだままでいた。

――BN軍の基地で会議をしていた紳達、甲斐斗の勝利により一時騒然となっていたが更にNFの戦艦の登場と羽衣の出現に困惑していた。
だが紳はモニターに映っていた映像を消すと、一人立ち上がり話を始めた。
「NFが何を企んでいるのかわからないが、神も消えた事でERROとの戦いに専念するはずだ。これで少なくとも人類同士での争いは消える」
「後はもう一つの脅威、ERROだ。奴等を絶滅させない限り人類に光は無い」
甲斐斗と神との戦いを映し出していたモニターには今まで調べてきたERROに関する資料が映し出されていく。
「奴等の数は未だ不明、軍の保護していない町は次々に侵略をされ、それが終わるとまた地下に戻っていく。奴等の巣は地下にある、それは皆も分かっている思うが。NFとSVが前にEDPを開始しERROの本拠地とされている場所を完全に破壊したはずだった。しかし未だERROの数は減る事無くむしろ増え続けている、これにより奴等の巣は一つではない事がわかったが、問題はその巣の位置、そして数だ。これを把握しておかなければERROとの戦闘は厳しくなる……が」

モニターに映し出されていた映像が切り替わると、世界地図が映し出され、その図に無数の赤い丸印が付いていく。
「逆に言えば、その二つを把握していれば我々はＥＲＲＯＲに勝利する事が出来る」
勝利……そう、人類はＥＲＲＯＲに勝利しなければならない。敗北は人類の絶滅を意味する。
考えた事があるだろうか、人類が滅亡する瞬間を。それも生物の手によって、人間がこの地上から一人残らず消える光景を。ＥＲＲＯＲに敗北するという事は全ての人間がＥＲＲＯＲに殺されるという事だ、この地上にいる何十億という人間が、全員惨殺されていく、そしてそんな想像もつかないような事が、すぐそこまで近づいてきている。
「この赤い印は今地中にあるＥＲＲＯＲの巣だと思われる箇所だ、人工衛星と地中探査艇の協力で漸くここまで絞り込む事が出来た。小さな赤い印のついている箇所は軽く五百箇所を超えている。恐らくこの箇所はＥＲＲＯＲの基地といったもんだろう、各地に素早く向かう為の寝床のような所だ。だが我々が攻める場所はここではない、ＥＲＲＯＲが生産されている箇所を重点的に叩く。ＥＲＲＯＲの繁殖を阻止する事が我々人類が勝利に近づく一番早く効果的な対策だ」
そして世界地図に映し出される巨大な赤い印、合計で四つの印が均等な位置に付けられている。
「そして今印のついた箇所、この箇所こそがＥＲＲＯＲの生産されている場所だ、この四箇所だけは他の箇所は比べ物にならない程地底深く、巨大な空洞が広がっている」
紳の説明に会場内がざわつき始める、無理もない、これだけの情報をいつどこで、どうやって得たのか。そしてその情報の信頼性と確実性に誤りはないのか、そして一番の驚きは、ＥＲＲＯＲが生産されていると思われる箇所がたった四つ程しかないということ、皆が抱く疑問に逸早く紳に問いかけたのは羅威だった。

「紳、その情報はたしかなのか？俺には信じられない、あれだけの数で増え続けるＥＲＲＯＲがたった四箇所から生まれてきているのか？」

会議場にいる全員から紳に注目が集まるが、紳は堂々とした態度のまま説明を続ける。

「四箇所しかないのには理由があるはずだ、でなければ今頃人類は滅亡している。恐らくＥＲＲＯＲを生み出せる何かが四つにしかないのだろう。生命体か、又は装置か……何かがな」

モニターの映像が切り替わると、今度はこの星の断面図がＣＧで映し出される。

「ＥＲＲＯＲのいる地下内部構造は樹木と似ている、四本の巨大な洞窟を作り世界各地へと枝分かれをするかのように小さな空洞が広がっている。枝を折った所で樹木は枯れない……根こそぎ灰にしなければな。よって、今から我々ＮＦ、ＳＶ、ＢＮは格箇所に別れＥＤＰを行なう」

ＥＤＰを行なう、そう言い切った紳だが。その言葉を聞いたＳＶのアリスは徐に立ち上がると声をあげた。

「待って、簡単にＥＤＰと仰いますけど。ＥＤＰを行なうには相当な戦力を整えなくてはならないのよ？それを今からだなんて無理よ！」

アリスの言う通り、現在ＥＤＰを行なえる程の十分な戦力を揃っていない。

前回のＥＤＰでの傷跡はまだ癒えず、ＥＲＲＯＲ・人類同士の戦い、そして神の攻撃により戦力は削られ続けてきていた

赤城も静かに話しを聞いていたが、アリスの言葉を聞き口を開く。

「口を挟んですまないが、今ＥＤＰを始動するのなら何か考えがあっての事だろう？まだ私達は具体的な作戦内容も聞かされていない、一体どうやって地下深くにあるＥＲＲＯＲの巣を破壊しに行くつもりだ？」

赤城の疑問、恐らくそれはこの会議場にいるほとんどの人間が抱い

ていただろう。
「ああ、その事についてだが――」
紳は手元にある装置を捜査しモニターの映像を切り替えようとした時、突如会議室内に警報が鳴り響いた。
すぐさまモニターに司令室の映像が映し出されるとオペレーターが現在の状況を説明しようとするが、音声からは同時にノイズや銃声も聞こえ通信状況が不安定だった。
『風霧総司令官、現在基地内部にＥＲＲＯＲが侵入しています！今部隊の人達が迎撃していますが、今までに見た事の無いＥＲＲＯＲが……！』
銃声の次は爆音が鳴り響き映像が大きく揺らぎ一瞬オペレーターの姿が消えるが、数秒した後映像が再び映し出される。
が……その映像を会議室で見ていた人は皆愕然とした。
オペレーターはまた状況の説明をしようと口を開こうとした時、愕然とした表情で紳が呟いた。
「誰だ、お前……」
先程のオペレータと同じ服を来た生き物はそこにいたが、それは人の形をしてはいなかった。
頭皮を破り脳味噌がはみ出ている頭、顔は赤黒い血管が何本も浮き出ており、眼球が明らかに飛び出していた。
「きゃぁあああああ――――――!!」
会議室内で女性の悲鳴が響き渡る、映し出されていたはずの人間は化物に変わり果てぐちゃぐちゃに崩れた口元から液体が漏れ始める。
『ＥＲＲＯＲが……出て……ＥＲＲＯＲ、が……ＥＲＲＯＲ……』
そこで映像は消えた、と同時に会議場の椅子に座っていた穿真達は懐から拳銃を取り出し安全装置を解除する。
「おいおい何だよ今のは!?人間が化物に変わって――――!?」
その時だった、唯の後ろに立っていた兵士の頭に亀裂が走り赤黒い塊が蠢きながら出てくると、顔から一斉に触手が飛び出てくる。
触手は目の前にいた唯目掛け伸びていくが、唯の側に立っていた紳

が一瞬でサーベルを抜き取ると、触手を斬りおとし首を吹き飛ばす。
そしてダンが取り出した拳銃を化物に向けると胸部と斬りおとされた首目掛け引き金を引いた。
何が起こったのかわからない唯は後ろに振り向こうとしたが、紳はサーベルを鞘に戻すと振り向いた唯の目の前に立った。
「お、お兄様……？」
戸惑うまま唯は紳を見上げるが、紳はいつもと変わらない冷徹な表情のまま立っていた。
「振り向くな、前だけ見ていろ」
紳の囁きに唯はすぐに振り向くのを止めたが、回りにいる人達は皆紳に視線を向けている。
「一部始終見ていたならもうわかると思うが。ＥＲＲＯＲが人間に擬態、又は寄生している事がわかった。この基地はもう長くない、全員先程乗っていた艦に戻ってもらう。羅威、艦までの護衛はお前に任せた」
「あ、ああ……わかった。聞いての通りだ、皆ついてきてくれ」
紳の的確で冷静な判断と行動力に羅威達は動揺を隠せないまま席を離れ動き始める。
ＢＮの兵士を率いる羅威達が会議室の扉を開けて辺り安全を確認すると、合図を出しＮＦとＳＶの兵士達を誘導していく。
「ダン、お前も唯と共に艦に戻れ。艦に戻ったら発進し基地から出ていろ、街もＥＲＲＯＲで溢れかえっているはずだ」
紳の命令にダンは煙草を吹かしながら聞いていると、ご自慢の拳銃に弾を詰めながら口を開いた。
「それで、お前さんはどこに行くんだ？」
「司令室に向かう、その後隙を見て基地から脱出する。問題は無い」
「周りが今どのような状況になっているのかもわからず行くのか、無謀だな。それに脱出すると言ってもお前の機体は艦の中だぞ」
「それなら司令室に機体を持ってこい、出来るな？」
紳の要求にダンは白い煙の混じった溜め息を吐くと、吸い終えた煙

草を携帯灰皿に仕舞う。
「やれやれ……無茶振りが多過ぎるだろ、上乗せが条件だからな」
そう言ってダンは渋々歩き出すと、唯はどうしていいかわからずただ突っ立っていたが、紳が唯の手を握ると会議室の外まで連れて行く。
「お前はダンから絶対に離れるな」
「はい……でもお兄様、やっぱり一緒に逃げて――きゃっ！」
今度はダンに手を引っ張られ半ば強引に連れて行く唯、それを見ていた紳は表情を変えないまま一人別の通路を歩いていった。

――羅威と穿真を先頭に格納庫へと向かう兵士達、通路には血の跡が所々ついているが死体が全く見当たらない。その時、エリルは何かを思い出したかのように後ろに振り向くと、それに気付いた穿真が咄嗟に声を掛けた。
「おいエリル！何ボサッとしてんだよ！」
「愁はまだ部屋に監禁されたままなの、助けに行かないと！」
エリルは今来た道を戻ろうとしたが、それを止めようと穿真はエリルの腕を握り締めた。
「放してよ！愁を見殺しにするの！？」
掴んでいる手を振り払い拳銃を片手に愁のいる部屋へ行こうとすると、穿真も拳銃を握り締めながらエリルの横に並ぶ。
「する訳無えだろ！俺も行くんだからな、羅威！後は頼んだぞ！」
羅威の返事を聞く前に走っていく穿真、エリルも穿真についていこうとした時、ふと横を見ると一緒にエコもついてきていた。
「貴方も愁を？」
「うん、仲間……だから……」
それだけ呟くいた後、無言で穿真についていくエコ。それを見ていた葵も一緒に行こうとしたがゼストがそれを止めに入った。
「な、なんだよ！俺は愁を助けに行っちゃいけないのか！？」
「三人で十分だ、今はアリスの安全確保しろ」

「あんたがいれば十分な気もするけどな……まぁ、わかったよ」
渋々行くのを諦める葵、丁度その頃先頭に立って皆を誘導している羅威達は仲間の部隊を見つけていた。
兵士達も羅威に気づくと、少し安心した表情を見せて近づいてくると、一人の兵士が羅威に話しかける。
「羅威！一体この基地はどうなってやがるんだ！？人が突然化物に変わりやがった、それもこの基地に前からいる連中ばかりだ！」
「やはり基地全体で起きていたか……ＥＲＲＯＲについては俺にもまだわからないが、今は安全な場所に避難している所だ。お前達も俺達と合流し格納庫に止めてある艦へと急ぐぞ」
命令された兵士達は羅威達と共に先頭に立ち通路から歩いてくる人間の体から異物が溢れ出ている化物が次々に歩いてくる。
咄嗟に羅威達は銃を構え引き金を引こうとした時、一匹のＥＲＲＯＲの目から止め処なく涙が溢れ始めた。
「助ケ……テ……」
人間の声ではない、だが人間の言葉だった。羅威達は引き金を引こうとした指を止め驚いた表情でＥＲＲＯＲを見つめる。
「喋っただと……？まだ人間の意識があるのか……！それなら今すぐ止まれ！」
「苦シィ……痛イ……助ケ、テ……ッ……」
羅威の言葉にＥＲＲＯＲ達は止まろうとしない、呻き声を出しながら必死に羅威達の元へ進んでくる。
引き金を引くのを躊躇う羅威だが、後ろに立っていた香澄は次々にＥＲＲＯＲの頭部を撃ち抜いて行く。
「何躊躇ってんのよ馬鹿！殺さないと死ぬわよ！？」
「す、すまない。だが奴等にはまだ人の意志があったんだ……」
息を引き取ったＥＲＲＯＲの死骸を見つめる羅威、そのＥＲＲＯＲの眼からは涙が零れていた。
「なんで人間がＥＲＲＯＲに……。まさか、あの女が……？」
ふと羅威の脳裏に玲と神楽の顔が過ぎったが、我に返るとすぐさま

銃を構え通路を走っていく。そしてついに格納庫への扉を開け到着すると、そこでは生き残った兵士達が迫り来るＥＲＲＯＲを必死に応戦していた。
と、そこに後ろから唯を抱きかかえたダンが格納庫へ到着する。
「どうやらまだ落とされなかったみたいだな、全員艦に乗らせろ。今すぐ基地から脱出する」
「ちょっと待て！穿真達はまだ戻ってきてないんだぞ！？」
ダンの言葉に羅威は声を荒げるが、ダンは面倒臭そうに事の事情を説明する。
「安心しろ、俺が奴等に愁を助けた後司令室に来いと伝えておいた、艦は基地から離すが俺達が機体に乗って助けに行けばいいだろ？わかったなら走れ、急がねえと皆死ぬぞ」
ダンはそう告げた後一人唯を抱きかかえたまま艦へと向かっていく、羅威達も続いて艦に乗り込んでいくと、羅威達が真っ先に向かった場所が自分達の機体が乗せてある場所だった。
羅威が機体に乗り込もうとすると、ＳＶの葵やゼストも自分の機体に乗り込み始める。
「お、おい！何勝手に機体に乗り込んでるんだ！？」
羅威が止めようと口を開くが、葵は颯爽と機体に乗り込み電源を入れた。
『許可は煙草のおっさんからもらってる！加勢するぜ！』
アストロス・ライダーは艦のハッチが開いた瞬間に発進すると、基地の格納庫内にいるＥＲＲＯＲを踏み潰していく。
羅威達も自分の機体に乗り込み発進すると、ＥＲＲＯＲと化した人間が次々に通路からこちらに歩いてきているのがわかった。
「基地内でこの有様だ、香澄、雪音。二人は今すぐ市街地に向かい民間人の救出にあたってくれ」
「ちょっと待ちなさいよ、あんたは何処行く気なの？」
当然香澄は何も話されていないので納得出来ない、通路から現れるＥＲＲＯＲを狙撃しながら質問をしてくる。

「俺は基地の司令室に向かい穿真達を助けに行く。ＳＶとＮＦの兵士も出撃しているんだ、後は任せたぞ」
そう告げた後羅威は一人神威で基地の格納庫から出て行き司令室がある基地の最上階部分まで浮上しようとした時、基地周辺の光景に言葉を失った。
基地周辺には残骸と化した無数の機体や戦闘機が散乱していた、戦艦は炎上して停止し、我雲は原形を止めておらず、戦車や戦闘機までもが無残にも破壊されている。
その余りの多さに目の前の出来事が信じられなかった、たった数分の間でこの基地周辺で何が起こったのか何も予想がつかない。
異様な光景が広がる中……神威はただ格納庫の前で立ち尽くしたまま動けなかった。
だがその時、神威のレーダーが反応を示す。一体の機体が上空から神威目掛けて急降下してきていた。
すかさず神威は両腕に電流を溜めるとそれを急接近してくる機体目掛けて放つが、機体はその電撃を全て交わし長刀を振り下ろしながら降下してくる。
「速いッ！？」
神威は地面を強く蹴り一瞬で後方に下がったと同時に、その機体は長刀を振り下ろしながら地面へ着地したが、右肩についている大砲が神威目掛けて照準を合わせると神威に反撃させる隙も与えず徹甲弾を放つ。
その砲弾も何とか横に飛び跳ね交わしたが、砲弾は神威の後ろにあった格納庫の扉を貫き止めてあった戦艦を掠めると基地の内部まで貫き通り爆発を起こした。
基地での爆発、戦艦に傷、そして目の前に現れた機体に動揺する羅威に、敵機は隙を与えず攻めてくる。
その機体に羅威は見覚えがあった、恐らく兵士なら誰もが知っているであろう英雄的存在……。
「大和！？どうしてこんな所に……ッ！」

砲弾を避け横に移動した神威の胸部を狙おうと手に持っている長刀を大きく横から振り下ろす大和。
神威はその長刀を蹴り上げると大和の両手は大きく上がり懐に隙が生まれる、それを狙った神威は右手に電流を溜めると同時に大和の懐に入り右腕を突き出した。
すると大和は手に持っていた長刀の刃の向きを変えると、神威の右腕を回避すると共に長刀で神威の右腕を斬りおとす。その攻撃の速さに羅威は状況を理解することだけでしか頭が回らない。
考える隙を与えない、反撃の隙を与えないだけではない。相手の動きと思考を読み、全てを神速でこなしている。
右腕を斬りおとされた神威は右足を軸に左足で大和目掛け蹴りを当てようとするが長刀で簡単に薙ぎ払われると体勢を崩した神威の左足を斬りおとし。続いて胸部を貫こうとしたが、神威は残っている左腕に電流を溜めると、目の前にいる大和の胸部目掛けて電撃を放った。
青白い強烈なプラズマが左腕から拡散し、夥しい程の電流が大和を包み込む。
放電された大和の動きは段々鈍っていくと、動く事も出来ずただ感電し機体内部が破壊されていく。
「近づきすぎたな……Dシリーズならこの攻撃には耐えられない。勝負有りだ」
更に出力を上げていく神威。感電した大和の手から長刀が零れ落ち、羅威は勝利を確信した時。その手から落ちた長刀を空中で掴み取ると大和、気付いた時には既に大和は長刀を一振りしていた後だった。
「えっ……？」
強烈な閃光と共に爆発を起こす神威、だが大和はまだ仕留めきれていなかった。
電流の影響で刃の向きが傾いてしまい神威の腹部を斬りおとす事しか出来ていない、爆発で吹き飛ばされた神威の上半身を見つけた大和は身動きの出来ない神威に向けて右肩の大砲から徹甲弾を放った。

だが一体の機体が神威の前に出ると盾を構え徹甲弾を弾き飛ばす。
『運が良かったな、本当なら先程の太刀で死んでいたぞ』
アストロス・ナイト、ゼストの乗る機体が神威の前に立っていた。
倒れたままの神威をアストロス・ライダーが持ち上げると、既に格納庫から発進した艦へと走っていく。
すると葵からゼストに乗る機体に通信が繋がると、葵は声を荒げて忠告する。
『ゼスト！相手はあの大和だ、気をつけろよ！俺もすぐに向かうからな、それまで持ちこたえていてくれ！』
『来なくていい、お前達は艦の護衛に専念しろ。これは命令だ』
そんな葵達の気持ちを裏切るような発言を無表情で伝えるゼスト、
『ったく……わかったよ！艦の護衛も専念する、けど基地内にはエコ達がまだ残っているんだ、艦周辺の安全を確保したらすぐ行くからな』
それだけ伝えると葵は通信を終える、ゼストは横目でライダーを見送った後、ナイトは剣と盾を握り締め身構える。
先程まで動きのぎこちなかった大和も既に動きを取り戻し、傷ついた機体の装甲が修復されていく。
『大和……嘗ての英雄が乗っていた機体。ＥＤＰの時ＥＲＲＯＲ諸共破壊されたはずの機体だが、今はこうしてＥＲＲＯＲと共に行動しているとは……邪魔だ』
盾を前に突き出しながら颯爽と大和との距離を縮めていくナイト、大和も長刀を構えると迫り来るナイトを待ち構えていた。
そしてナイトが大和の目の前にまで近づこうとした時、大和の右肩にある大砲の砲身が突如地面に向くと砲弾を放ち目の前の地面を爆発させた。
轟音と爆風に巻き込まれた煙が一瞬で大和とナイトを包み込む。
だがナイトは煙など気にもせず剣を振り上げると大和目掛けて振り下ろした、大和は煙に隠れる前に長刀で剣先を弾くと、ナイトの胸部目掛けて長刀を振り下ろす。

それをナイトは待っていたかのように盾を構え長刀に当てると、大和の握り締めていた長刀は盾に流れる高圧電流により一瞬で手元から弾き飛ばされる。
大和に完全に生まれた隙、ナイトは剣先を大和に向けると胸部目掛けて剣を突き刺した。
確実に胸部に突き刺さり操縦席をも貫いた剣先、大和の眼からは光が消え肩の力が抜けていく。全身脱力状態となり、ナイトは胸部から剣を引き抜くと大和は力なくその場に倒れこんだ。
身動き一つしない大和、だが突き刺された胸部から突如赤い血が噴出し始めると、大和だったはずの機体が色を変え腐食していく。
『これが亡霊の正体、ＥＲＲＯＲか。……ん？』
ふとゼストが前方を見ると、瓦礫の上に一体の機体が立っていた。
背中に長刀を背負い両手には刀を握り締め機体の肩に大きく『大和』と書かれている機体。
『ＥＲＲＯＲは大和を量産する気か？……哀れだな、機体は性能だけでは勝てない。根本的な事が奴等には理解できないようだな』
ナイトは前方にいる大和目掛け剣を構えると、先程と同じように颯爽と突き進んでいく。
『亡霊に興味は無い。邪魔をするな、我々は明日に進まねばならん。世界の明日の為にな』
ゼストはそう呟くと、大和目掛け剣を振り下ろす。
すると大和は両手に持っていた刀を瞬く間に2回振り終えると、二本の刀を鞘に収めた。
剣を大和に振り下ろす寸前で硬直したまま動かないナイト、それを見た大和は後ろに振り返るとその場から立ち去っていく。
その去っていく後ろ姿を見ていたゼストの額からは汗が滲み出ていた。そして徐に自分の体を見つめると、ふと口から言葉が漏れた。
『まさか……な――』
そうゼストが呟いた後、アストロス・ナイトの原形が綺麗にズレ始める。

そして斬られた跡から激しく放電しはじめると、眩い閃光と共に巨大な爆発を起こした。

……四散した機体の破片が辺りに散らばり、周辺に散乱している機体の残骸数々。

そこにはアストロス・ナイトの姿もあった、もう二度と動く事は無い無残な残骸の一つとして。

第８４話　同士、同情

――皆と別れ、一人司令室を目指し基地内を歩いていく紳。
もうすぐ司令室に到着するが、司令室に近づいていくにつれて歩いていく通路には血の跡や肉片、そして銃などが散らばっている。
恐ろしい程に静かな通路、もはや銃声すら聞こえない基地内で、突然紳が横切ろうとした部屋の扉が開く。
真っ先に紳の握るサーベルが扉の方に向けられると、部屋の中から現れた女性は突然サーベルを向けられた為に腰を抜かし床に座り込んでしまう。
「生存者か……どうしてここにいる」
紳が刃先を女性から反らすと、女性は座り込んだまま紳に向かって敬礼をし喋り始めた。
「は、はい！私はこの基地の第二機動隊所属の……」
「所属など聞いていない、質問に答えろ」
そう言うと紳は右手に持つサーベルを鞘に収め女性に手をさし伸ばす、女性は敬礼をした手で紳の手を握るとそっと立ち上がり質問に答えた。
「その、傷の手当てでここに……」
女性の兵士の言う通り左足と両手首には血の付いた包帯が巻かれてある。
その状態を見て紳は地面に落ちていた銃を女性に手渡そうとしたが、女性は受け取ろうと銃を握ろうとするが手首に力が入らず落としてしまう。
「す、すみません……！」
急いで銃を拾おうとする女性だが、紳は女性より早く銃を拾うと女性から遠ざけるように放り投げた。
「今のお前にあんな物邪魔になるだけだ。脱出する、来い」
鞘に収めていたサーベルを抜き取り一人通路を歩いていく紳、女性

も怪我はしていたが何とか紳の後ろについていける程には歩けていた。

「風霧総司令官……申し訳有りません、足手纏いになってしまって……」

銃すら握れない事を不甲斐なく思い紳の後ろで歩きながら頭を下げる女性、それに答えるかのように紳は振り向かないまま口を開いた。

「俺は傷ついた部下を足手纏い等と思った事は無い。世界の為にBNの元で命を懸けて戦うお前達には日々感謝している」

その紳の何気ない言葉に女性は心から嬉しくなると、紳が見ていないにも関わらずもう一度頭を下げて礼をした。

だがその時、突如通路の天井に穴が空くと一体の化物が紳達の前に姿を現した。

簡単に化物と言えどその姿は余りにも生き物からかけ離れている。

巨大な人間の胴体には人一人飲み込める程の巨大な口が付いており、肌の色は赤黒く変色している。更に人間の頭が複数付いており背中からは何本もの人間の手が生え、二本の足は異常に太い。

その醜い化物の姿を見て女性は愕然とした。

「嘘……隊長……？それに……皆も……」

化物の胴体にある巨大な口の上にあちこち生えている人間の頭、そこには女性と同じ部隊の人達の頭が生えていたのだ。

化物は人間を見つけると、同時に生えている頭は人間の方に向き眼はこちらを向くと、頭達は一斉に声を上げだした。

「ぁあああぁあぁぁあぁぁあああ――――ッ！！」

奇声、嗚咽、泣き叫び、救いを求め、涙を流し、発狂。

そこに人間はいた、生きている人間がいた、意識のある人間がいた。

自らが化物になった事に狂う兵士たち、女も男も皆目を見開き声を上げていた。

その声に紳の後ろに立っていた女性の目からは涙が零れる、目の前で悲鳴を上げて苦しんでいる仲間達の姿が耐えられなかった。

すると化物はその太い足を動かすと、体形と似合わぬ速い動きで紳

達の元に走り寄ってくる。
女性は一歩も動けずその場に立ち尽くしていた、だが紳は違う。
両手のサーベルを握り締め構えると体勢を低くし一人化物の元に駆け寄っていく。
「か、風霧総司令官――――!?」
紳の眼に迷いは無い、接近すると化物の背中から生えていた腕が一斉に紳に向かって伸びていく、それを紳は避ける事無く全て斬り飛ばすと擦れ違い様に化物の胴体にサーベルを突き刺す。
そして勢い良くサーベルを振るうと、化物の体を切り裂き、化物が怯んだと同時に一瞬で滅多切りにしていく、腕も足も切り落とし、そこには虫の息の肉の塊となった化物しかいなかった。
もはや何もする事の出来ない化物を見て紳はサーベルを振るうのを止めると、一歩も動けずにいた女性の元に歩み寄る。
「司令室はすぐそこだ、行くぞ」
そう告げた後紳は司令室に向かって歩き始める、女性も何とか一歩足を踏み出し進んでいくが、通路の端で蠢く化物を見て涙が止まらなかった。
「どうして……どうして皆、こんなっ……」
余りにも酷すぎる光景、しかし二人がその光景から目をそらすことはない。
例え化物に変わろうとも、同じＢＮで共に戦ってきた仲間には変わりないのだから……。
そして紳は司令室の前に辿り着くと、扉を開けて部屋の中に入っていく。
室内は紳の思っていた通り血の海が広がっていたが、人間の姿はどこにも見当たらない。
そう、いるのは化物しかいなかったた。
まるで紳が来るのを待っていたかのように司令室内にいた化物達は紳の方に向く。
「少し待っていろ、すぐ終わる」

紳が呟いた後、部屋の中に入っていくと女性が入ってくる前に扉を閉めた。
女性は部屋の扉を開けようと装置を弄るが、既に紳に装置で鍵を掛けられた為に入る事が出来ない。
司令室内を見渡していく紳、軽く十体以上の化物がそこにはいた。
どれも人間の体の一部が生え、様々な種類の化物達。
それを見た紳は身に纏っていたマントを外すと、迫り来る化物達の元へたった二本のサーベルを握り締め立ち向かっていった。
襲い掛かる化物の腕や触手を次々に斬りおとし、その醜い体を次々にサーベルで斬り捨てていく。
周りを囲まれてもなお紳は化物の攻撃を避け続け切り刻んでいく、返り血を浴びる事無く常に動き、常に避け、常に攻める。
その完璧と言える動きで化物達の息の根を止めていく――。

――「片付いたな……」
紳はそう呟くと、サーベルから滴り落ちる血を振り飛ばした後腰に付いている鞘にサーベルを収めた。
足元には化物の死体と肉片が散乱しており、壁にも夥しい量の血が付いている。そんな状況で紳は顔色一つ変えず司令室にある装置を操作していた。
司令室内の扉も開き待機していた女性も恐る恐る部屋の中に入って来る。
「ここにいた人達も、皆ＥＲＲＯＲに……」
破れた血塗れの軍服が散乱し、司令室内に転がる死体を見て女性は更に歯を食い縛ると、装置を弄る紳の後ろに立つ。
「風霧総司令官、一体ここで何を……？」
「基地周辺の情報を全て見た後削除する。安心しろ、もうじき仲間がここに来る」
女性の聞いた言葉の意味は違っていた、部屋内には人間の大きさを

軽く上回る程の化物の死体が転がっており、目の前には返り血を浴びていない紳が立っている。
一体ここで何が起きたのか、女性には想像もできない。ただ、そこに無傷の紳が立っている事だけは紛れも無い事実だった。
脱出できる、そう思うと女性は自分の肩の力が抜けていくのを感じた。
一秒でも早くこの恐ろしい場所から帰りたい、そう思いながら女性は側にある椅子に座ろうとした時、ふと自分の全身に激痛が走り宙に浮いていくのがわかった。
女性も、そして紳もそれに気付いた時は、既に遅かった。
女性の背中から腹部にかけて貫通している触手は蠢きだすとに女性の体をいとも簡単に引き裂き、上半身と下半身を投げ捨てる。
そして司令室の天井には無数の触手を垂らす一匹のＥＲＲＯＲが張り付いていた。
植物のような形をしており、緑色の体で何本もの触手を垂らすＥＲＲＯＲに紳は身構えたが、ＥＲＲＯＲは女性を殺し終えると天井に空いた穴に入り姿を消した。
「何故俺を殺さない……」
ＥＲＲＯＲが人間を見逃す事など今までに事例など一つも無い。だが今ＥＲＲＯＲは確かに紳を見逃した。
それなら何故女性の兵士を殺したのかわからない……だが、何れにせよ早く天井にいるＥＲＲＯＲに気付いていれば女性を助けられたはずだ。
生きたまま体を引き裂かれた女性の姿が脳裏に過ぎる。ここまで来て最後の最後で油断してしまった自分に怒りが込み上げて来る。
だがその時、物陰から小さな物音が聞こると、紳はサーベルを抜き取り刃先を気配の感じる方に向けた。
そこにはうつ伏せに倒れ血塗れの小さな体を腕だけで前進してくるあの女性がいた。紳の元に向かおうと必死に腕を動かし、辺りに肉片が落ちる床を這い蹲りながら近づいて来る。

「……て……っ……くださ……い……」
女性は顔を上げると掠れた声で紳に求めている。
それを見ていた紳はサーベルを手に持ったまま女性の元へ歩いていき、女性の目の前まで近づき足を止めた。
女性は更に顔を上げる、そこには自分達ＢＮを率い世界の為に戦う事を決めた一人の男が立っていた。
誰よりも冷静で、誰よりも熱い……誰よりも尊敬し信頼できるＢＮの誇り高き騎士。
だからこそ女性は紳の姿を見て安心し、口を開いた。
「殺し……て……くださ、い……ッ！」
叫んだにしても余りにも弱々しく儚い声。無理もない、女性の腹部から下は何も無いのだから。
上半身だけで腕を動かし今こうして紳の目の前にいる、もはや痛みなど一切感じない。
だが痛みとは別に言い様のない恐怖が全身を包みこもうとしているのがわかる、自分が自分でなくなる感覚、体内から何かが蠢いてくる感触が。
女性の最後の有様をじっと見つめていた紳は、ゆっくりとサーベルを振り上げていく。
「すまない……共に戦い散っていった仲間達と先に待っていてくれ、何れ俺も向かう……」
その瞬間、目にも止まらぬ速さでサーベルは振られると、サーベルをゆっくりと鞘に収めた。
そして紳は後ろに振り返ると先程の装置の前にまで歩いていく、その後ろ姿を見つめ続ける女性は安心した表情を浮かべながらゆっくりと目蓋が閉じていった。
「この世界を救った後にな……」
その紳の言葉を最後に聞き、女性は息を引き取った。
そして紳はまた装置を弄り基地周辺で起きた出来事の情報を読んでいこうとしたが、突如装置の画面が赤く光ると、『―ＥＲＲＯＲ―』

という警告表示で画面が埋め尽くされていく。
それを見た紳は拳を振り上げ画面を叩き割ると、警報が鳴り響いていた司令室は一瞬静まり返った。しかし、突然照明の灯りが全て消えると、もう一つ隣の装置の画面にまたＥＲＲＯＲの表示が映し出され、連鎖的に次々と全ての画面にＥＲＲＯＲの表示が表れ始めると、最後に司令室の一番奥にある巨大なモニターにＥＲＲＯＲの表示が映し出された。
司令室内が画面から出る赤い光に染まり、警報と共に画面はＥＲＲＯＲの表示で埋め尽くされていく。
「答えろＥＲＲＯＲ。望みは何だ、何故人を殺す、お前達の目的は何だ……？」
赤い灯りだけで指令室内を照らす中、紳はそう問いかけると返事を待つかのようにモニターを見つめ続ける。
その時ふと背後に気配を感じた紳は、徐に振り返ると、そこには一人の女性が立っていた。
紳が止めを刺したはずの女性、無いはずの二本の足でしっかりとその場に立ち、体についていた傷跡は全て消えていた。
暗い部屋の中で赤い灯りに照らされる女性の姿、薄らと笑みを浮かべた表情で紳を見つめ続けている。そんな互いが見詰め合い黙ったままの状況に紳はサーベルを鞘から抜き取ろうとした時、女性は小さく呟いた。
『ＥｒＲｏｒ――ｄＥｌｅＴＥ――』
たしかに聞こえたその言葉に紳は口を開こうとした時、赤く照らされた女性の顔は一瞬で裂け散りはじめる。
眼球が零れ落ち、全身を保っていた体も全て弾け飛び血飛沫を上げながら肉片が辺りに散らばっていくと、そこには人間の姿とは程遠い醜く汚い化物が立っていた。
紳が鞘からサーベルを抜き取とり斬り込もうとした瞬間、それよりも速く全身から無数の触手を出現させると触手は一斉に紳に襲い掛かりはじめた。

その触手の数、そして速さに紳が目を見開いた時。突如司令室の壁と天井が崩れ落ちると、外から現れた機体は目の前の化物を踏み潰し紳の目の前に颯爽と姿を表した。

『機体を届けに来たぞ、印鑑はあるか？』

その機体からはダンの声が聞こえてくる、紳は手に持っていたサーベルを鞘に仕舞うと何時ものように冷静な表情で口を開いた。

「……朱肉なら腐るほどある、拇印でいいな？」

先程にあった出来事を悟られないかのように軽い冗談を済ませた後、崩壊した壁の瓦礫を踏み台にし紳は司令室の外に出て行く。

そしてふと広がる外の景色を見て紳は唖然とした。そこには思っていたような戦場は広がっていない、基地周辺にはＢＮの機体が無残に散乱している光景が広がっていた。

そこにはＥＲＲＯＲの姿の人の姿も無い、ただ破壊された機体がそこら中に散らばっている。

「これは……ダン、ここで何があった？」

『さあな、俺が来た時には既にこの有様だ。町には基地と同じＥＲＲＯＲが出ているらしいが、それ以外のＥＲＲＯＲはまだ未確認らしい』

「そうか……」

紳は一階下の建物の上に止められている機体を見て早速機体の元へと向かうと、颯爽と機体に乗り込み起動させる。

「お前はここで待機し穿真達が戻ってくるのを待っていろ。俺はこの有様を作った化物を探しに行く」

「了解。待ってる間、お前がその化物に会わない事を精々祈っててやるよ」

ダンはそう言って煙草を銜え火を点けると、白義は白いマントを靡かせながら基地から降りまずは脱出した艦の所へ向かって走って行った。

――――「やれやれ、最初は躊躇っちまったのに。もう馴れちまった

ぜ」
化物と化した仲間達の頭部を次々に撃ち抜き嘗ての仲間を殺していく穿真、その後ろではエリルも銃を構え援護射撃を行なっている。
「穿真、その次の部屋が愁のいる部屋よ！無事ならいいんだけど……！」
エリルの言われたとおりの部屋に入り銃を構える穿真、しかしそこには一台のベットが置かれているだけで愁所か誰もいない状況だった。
遅れてエリルとエコが部屋の中に入り辺りを見渡すが、愁の姿が無い事はすぐにわかった。
「愁がいない？そんな、だって体は拘束された状態じゃ……」
ベットに近づき掛けてあるシーツを手に取るエリル、するとそこには切れた鎖の一部が置いてあった。
「嘘……鎖を千切ったの？そんな……」
鎖の一部を手に取るエリル、とてもじゃないが人間の力で断つ事は不可能な事がわかる。
「はぁ？鎖を千切るだあ？って事はあいつはもう化物になっちまったって事か？助けに来てそりゃ無いぜ……」
二人が落胆する中、エコだけは一人平気な様子で立っていると、穿真の服を後ろから引っ張る。
「教えて……愁の軍服、置いてある部屋……どこ……？」
エコの問いかけに首を傾げる穿真、そして首を傾げながらエリルの方を見ると口を開いた。
「……愁の軍服の場所？俺は知らねえけど、おいエリル。お前は知ってるか？」
するとエリルは知っているような素振りを見せて頷いたが、首を傾げてしまう。
「この階と同じ部屋に置いてあるけど、それがどうかしたの……？」
「今すぐ案内しろ！そして何でその場所を聞いたのか察しろ！」
慌てて部屋から出て行く三人は愁の軍服が置かれている部屋に向か

う。エコには自信があった、愁がどれだけＳＶに忠誠しているのかを。そしてフィリオから貰った親衛隊の軍服を大切にしている事も。そしてエコの予想は当った、エリルが案内した部屋、そこには軍服を着替え終えた愁が立っていた。

「愁！良かった、無事だったんだね。早くこの基地から脱出しよ！ここにいたら危険だから……！」

そう言ってエリルは愁に歩み寄ろうとしたが、エリルの前に穿真が立つと口を開いた。

「聞いての通りだ、今は俺達が争っている場合じゃねえ。わかるな？一緒に脱出するぞ」

二人の言葉を聞いていた愁はゆっくりと前を向くと、真正面から穿真と向き合う。

「わかるよ、でも俺は共に行かない。俺はもうＢＮには戻らない」

「共に来いよ！あのな、お前が望むならＳＶの兵士のままでも別にいいんだよ！でもな、ＳＶとＢＮは手を組んで仲間になった、つまりお前と俺達はもう敵同士じゃねえ、前みたいに一緒に行動する仲間になったんだよ！わかるか！？」

苛立ち声を荒げて説明する穿真に、愁は表情を変えないまま見詰め続ける。

それがまた穿真を苛立たせ、更に声を出そうとした時。エリルの後ろに立っていたエコが穿真の横に立つと、力強い目で愁を見つめ口を開いた。

「愁……愁の戦う意味、目的。教えて……」

エコの言葉を聞いても何も言い返そうとしない愁、それを見ていたエコは更に言葉を続ける。

「フィリオの為だよね……全部、フィリオの為に……だから貴方は、フィリオを助けられなかった自分を……憎んでる」

微かに反応を示した愁だが、じっと耐えるようにその場に立ちエコの言葉を聞き入れていく。

「愁、フィリオは……何を望んでると思う？貴方になら、わかるは

ず……身を挺してまで救おうとした、フィリオの望み……」
「この世界の平和……ですよね」
愁はそう呟くと、エコは頷き更に言葉を続けていく。
穿真とエリルはただ黙って二人の会話を聞くことしか出来ない。
「うん、そう……それで、私達は今、力を合わして世界を救おうとしてる、フィリオの望んだ平和な世界、作ろうとしてる。愁は……協力しないの？フィリオの願いと想い、踏みにじるの？」
「それは……」
エコの言葉に愁は何も言い返せない、たしかに自分が今までしてきた事がにフィリオの為なのかと聞かれると何も答える事が出来なかった。
「今の愁は拗ねてる。ね、愁が反抗して……それでフィリオは喜ぶの？皆と仲良くしている方が、絶対にフィリオは喜ぶ……それに、フィリオは待ってる、愁が助けに来る事を」
「フィリオが……俺を待っている……？」
何かに気付かされるように愁が問いかけると、エコは大きく頷き口を開いた。
「うん……愁にとって、フィリオは掛替えの無い存在……そして、それはフィリオも同じ……フィリオも今、愁を求めてる……だから――」
エコはゆっくりと小さな手を愁に差し伸べると、愁はその迷い無い眼差しで見詰めてくるエコから視線がそらせない。
「一緒に救いに行こ。フィリオと、この世界を……！」
ゆっくりと一歩ずつエコに近づいてく愁は、下ろしていた手をそっと上げていく。
それを見たエコの表情は明るく優しい笑みを浮かべていた。
……これで長かった仲間同士・友達同士の戦いが終わる、気付けばエリルは目に涙を浮かべていた。穿真も自分の腰に手を掛け笑みを見せると、二人が握手を交わすのを待ち望んでいる。
そしてエコが差し伸ばした手に愁の手が触れようとした時、愁は指

を伸ばすと勢い良くエコの胸を貫いた。
貫かれた胸から噴出す血の飛沫はその場にいた皆の顔に飛び散っていく、その時には既に三人の顔から笑みは消えていた。
二人には今この時がスローモーション再生しているかのように感じた……ゆっくりと血飛沫が上がり、愁の赤黒い血に染まる手がエコの背中から突き抜けている光景を。
そして愁はエコの胸部を貫いたまま腕を上げると、勢い良く振り下ろしエコを腕から振り飛ばす。
エコはまるで人形のように飛ばされ壁に叩きつけられると、すぐさまエコの倒れた場所に血溜りが出来た。
指一つ、瞬き一つしないエコ。口から血が垂れ、胸元と背中に開いた穴からは血が流れ出している。
……今ここで何が起こったのか、それを確かめる前に穿真は手に持っていた銃の引き金を引いていた。
室内に響き渡る銃声、何発もの弾丸が愁目掛け放たれた。だが愁は尋常じゃない速さで弾丸を避けていくと、一瞬にして穿真の眼の前立っていた。
「愁、てめっ――――!?」
引き金を引こうとする穿真の拳銃を軽く払い飛ばした愁は、その血に汚れた右腕を振り上げ穿真の胸部目掛けて振り下ろす。
それを穿真は上手く受け止めると、愁の右腕を掴んだまま放そうとしない。
「エリルッ！逃げろ……！」
穿真の声にエリルは我に返る、壁には血塗れのエコの体が転がっており、目の前には愁の腕を掴んだままの穿真がエリルを睨んでいた。
「もう駄目だッ……遅すぎたんだよ、俺達は……！」
そのまま穿真は愁の懐に入ると、愁の腕を引っ張り凄まじい勢いで部屋の奥へと投げ飛ばした。
「そ、そんな。愁が、どうして……？まさか、ＥＲＲＯＲに……？」
エリルは動揺したままその場で立ちつくしている、投げられた愁は

空中で体勢を立て直すと着地と同時に地面をひと蹴りしただけでエリルの眼の前にまで来ていた。
赤く濁る愁の瞳は人間の瞳じゃない、何か別の物……体は動けず頭も働かない、目の前には腕を振り上げ自分目掛けて飛び込んでくる鬼しか見えていなかった。
だがその鬼を空中で殴り飛ばす男がいた、愁は穿真が繰り出した拳を耐えようとするがその力にまたも壁にまで吹き飛ばされる。
「穿真！」
エリルはどうしていいかわからず穿真に近づこうとした時、穿真は後ろに振り返ると今までに見せた事の無い真剣な表情で叫んだ。
「黙って逃げろッ！そして絶対に振り向くな！……わかったら……行けッ！」
次の瞬間、エリルの視界から穿真の姿が消える。愁に飛びかかられた穿真は壁に大きく叩きつけられると、愁は穿真の顔面を狙い拳を振り下ろす。
その拳を間一髪で避けた穿真だが、後ろの壁は音を立てながら崩壊し塵が舞い上がる。
エリルは咄嗟に部屋から出ようとしたが、血塗れのエコを見て踏みとどまるとエコの元に駆け寄り体を抱き上げる。
そして大粒の涙を零しながら司令室を目指しその場から走り去った。

――「おい煙草のおっさん、ここにおっさんいなかったか？」
司令室の中で機体ごと待機していたダンの横に、葵の乗るライダーが突如姿を現した。
「誰だそいつ、今ここにいるおっさんは俺とお前さんだけだよ」
そう言ってモニターに映る青空を眺めながら一人煙草を吹かすダンに、葵は首を傾げて辺りを見渡す。
「誰がおっさんだ！俺は女だばかやろう！……ったく、にしてもおかしいな、たしかにここで戦ってたんだよ。あの大和と……」
『大和』という言葉に強く反応を示したダンは操縦席で寝転がって

いたがすぐさま飛び起き煙草を灰皿に仕舞う。
「何ぃ？それじゃあ、この有様は全て大和の仕業って事か？」
「それは俺にもまだわかんねえけど……あの動き、只者じゃなかったし。それにどうして大和があんな場所にいるのかわからないしなぁ……ん？」
丁度葵が目を向けた所にあった司令室の扉が開くと、見覚えのある女性が中へと入ってくる。
「おお、どうやら無事に戻って、これ……て……」
見る見る葵の顔色が青くなっていく、エリルに抱かれているエコは眼を開いたまま口から血が垂れ、胸元には大きな穴が空いているのが見えたからだ。
機体に乗っていたダンと葵は異変に気付きすぐさま機体のハッチを開けてその場に下りてくると、すぐにエリルの元に駆け寄り事情を聞こうとする。
「おいどうした！？一体何があったんだ！」
「愁が、愁が……ＥＲＲＯＲで、それで……それで……」
放心状態のエリルは混乱して言葉が上手くでない、そして息をしていないエコを見た葵もまた放心状態になっていた。
「嘘だろ……？エコ、なぁ、おい……どうしてお前、こんな……ッ！」
自然に涙がこぼれ始める葵、だが零れ落ちる涙を振り落とすと、先程までの悲しげな表情は消えていた。
「場所、教えろ」
闘争本能をむき出し殺気だった眼でエリルを睨みつける葵、咄嗟にエリルは愁達のいた部屋の場所を答えると、葵は自らその場所へと歩き始める。
誰も葵を止める事が出来なかった、今止めれば自分たちでさえ容赦なく牙を剥くだろう。
「とりあえずお前だけでも先に艦に連れて行く、いいな？」
二度エリルは小さく頷くと、ダンは機体に乗り込みエリルの前まで

移動すると、膝をつき機体の手の上にエリルを乗らせる。
そしてダンはいつものように煙草を銜えて火を点けると、機体の手の上で震えるエリルをしっかりと守るように機体を発進させた。

――部屋の壁を崩壊させ隣の部屋には頭から血を流す穿真と、そんな穿真を平然とした表情で見詰める愁が立っていた。
「とうとう化物になっちまったみたいだなぁ愁……いや、ＥＲＲＯＲか？ん？化物がＥＲＲＯＲ？自分で言っててわけわかんなくなってきたぜ……」
穿真の言葉に何の反応を示さない愁、痙攣するかのように頭を小さく揺らし眼を瞑ると、そっと眼を開くと、震える声で名前を呼んだ。
「せん、ま……」
「なっ……意識があるのか！？愁！」
穿真は声を荒げて問いかけるが、愁は頭を抱えると俯いたまま動かなくなった。
「ご、めん……俺、は……もう――」
愁は苦しみながらそう呟いた後、両手を頭から放し顔を上げた。
今まで知っている愁とは違う、また別の愁がそこに立っていた、瞳の色は変わり、雰囲気が殺伐している。
それを見ていた穿真は大きく溜め息を着くと、頭から滴り落ちる血を気にせず口を開いた。
「いつから狂っちまったんだろうな……世界も、俺達も。本来なら俺達ただの平凡な学生だったんだぜ、平和の意味も知らずに、平和な世界を生きていく一人だったんだ」
語り始める穿真に、愁は話しを聞くかのように立ったまま微動だにしない。
「なのに、神とかＥＲＲＯＲとか訳わからねえもんが現れて、世界も人も変わっちまった。びっくりだろ、まさか自分が世界の存亡に関わる戦いに身を投じるなんて思うわけないよな？」
問いかけても愁は何も答えず、その濁った瞳はじっと穿真を見続け

瞬き一つしない。
「お前は運が悪すぎた、同情するね。平和な世界ならもっと上手くいってたはずなのにな……」
そう言い終えた後、ニヤリと笑みを見せた穿真は拳を構えた。
「さて、もう長ったらしい言葉なんていらねえよなぁ愁。こっからは男同士、拳で語り合おうか。俺とお前、どちらか死ぬまでな」
迷いなどしない、後悔もしない……こうなってしまった以上、やらなければならない事ができた。
敵を殺す覚悟、そして……友を殺す覚悟は、既に出来ている。

第８５話　因縁、躊躇い

――基地から脱出したＢＮの戦艦は市街地に到着し艦を停止させていた。
町には化物に成り果てた人間がさ迷い、次々に逃げようとする人間達を殺していく。
会社でもそうだ、スーツ姿の人間の頭からムカデのような胴体に人間の手足が生えていれば、学校にいる子供の頭が四つに増え顔中口で埋め尽くされている。
突然の出来事に人々は混乱し、人間が化物を殺し、疑心暗鬼にとらわれ人間が人間を殺していた。
助けてくれるはずの軍や警察までもが化物に成り果て、人々は市街地に来た艦へと必死に走り寄って行く。そしてそれを見つけた化物達を艦を多い囲むように集まり始める。
我雲に乗り艦の外で市民達を誘導していた香澄達もその状況と人数に困惑していた。
「早く大勢の人を艦に入れたい、けどもしあの中にＥＲＲＯＲが紛れ込んでいたら……」
司令室にいる兵士たちも艦の入口は開こうとせず、市民達が助けを求めて声を上げて必死に艦に寄り添っているのを辛そうに見つめていた。
「歩兵で掃討するにしても数が多過ぎる、だからと言って機体で蹴散らすとしてもこの状況じゃ動けない……」
我雲の足元には逃げ惑う人達で溢れ、不用意に動けば市民に危害を加える恐れもある。また射撃を試みようとしても人間と化物の数が多く撃てば市民に被害が出る可能性もあった。
すると、先程まで閉められていた艦の扉が開いていくのが見える。
「そうね、市民を艦内に入れるのが妥当な案。でもそれじゃ艦自体が危険に晒されるリスクもある……何も起きなければいいんだけど

……」

次々に我先にと人を押しのけ艦に乗り込んでいく市民達。皆同じ。

死にたくない、それだけだ。

既にそこまで醜い化物が押し寄せてきている、誰もが恐怖を抱き生きる為に必死になるのは当然の事。

香澄の乗っている我雲の足元にいた人達も既に艦へと向かっていたが、一人だけ機体の足元に蹲ったまま動こうとしない少年がいた。

「何をしてるの!?早く逃げなさいよ!」

香澄が機体から少年に呼びかけるものの、少年は恐怖で震え、苦しそうな表情を浮かべながら跪き動こうしない。少年の近くには既に化物が歩み寄り近づいてきていた。

すると香澄は機体を屈ませると少年の眼の前に機体の手を広げ指示を送る。

「そこに乗りなさい!早く!」

言われるままに少年は機体の手の平に乗ると、我雲は少年を落とさないように機体を安定に保ちながらその場を離れていく。

「こちら香澄、民間人を一人保護しました。一度艦内に戻ります、あとこの子もＥＲＲＯＲの可能性があるから十分に注意して!」

艦の格納庫に入っていく我雲は真っ先に手の平に乗っている少年を下ろしにかかる、周りにいた兵士達も皆銃を構えながら恐る恐る少年に近づいていく。

だが少年は何の抵抗も見せず、少年は兵士達に腕を掴まれると避難所にまで連れて行かれる。

その様子を見た後我雲が艦から出ようとした時、レーダーに一体の機体が反応した。

「ＮＦの機体?それも基地方面から……?」

香澄の乗る我雲が艦から出ると、艦の周りいる機体達は皆停止しその現れた機体の方に体を向けた。

長刀を背負い、腰には二本の鞘が付けられており、右肩には巨大な大砲が付いてある機体……。

「大和！？どうしてここに……！」
他の兵士達も皆同様していた、我雲、ギフツ、そしてアストロスも大和に武器を構えたまま様子を見ていた。
すると大和の右肩に付いてある大砲の先端が光り輝き始めるのが見えた瞬間、その場にいた兵士達が一斉に動き出した。
「ＬＲＣ！？全機散開しつつ大和の動きを止めてッ！艦に撃たれたら終わりよ！」
香澄の声に周りに立っていた我雲達が銃を構え大和に向けて一斉に射撃を開始する。
すると大和は高層ビルの間に隠れ銃弾を避けると、溜めていたＬＲＣを発射した。
眩く巨大な閃光はビルを貫通し攻撃してきた我雲達を飲み込んでいくが、ＬＲＣの射線上には艦の姿は無かった。
間一髪ＬＲＣから逃れた戦艦、だが周りにはまだ助けを求め近づいてくる民間人達で犇めき合っていた。一刻も早くこの場から退避したいが、今艦が動けば回りにいる民間人に被害が出る。
だが動かなければ艦自体が危い、そしてそれはもう既に起きていた。
ＬＲＣで吹き飛ばされた高層ビル、下の階を吹き飛ばされビルはＢＮの艦に向けて大きく倒れ始める。
「そんなっ！？」
轟音と共に艦の方に傾き始めるビルに、周りにいた機体達は何もする事が出来ない。
あと数秒もすれば高層ビルは完全に艦の方に倒れ、簡単に艦を押し潰して破壊するだろう。
絶望的な状況の中で刻々と迫る時間、逃げる事も助ける事も出来ず、覆いかぶさるようにビルがこちら目掛けて倒れこんでくる。
『全兵装攻撃を開始します』
スピーカーから聞こえた女性の声と共に、艦の甲板に立っている一体の機体が倒れてくるビル目掛け一斉に攻撃を始める。
両肩のレーザー砲に両腰に付いてある砲身、更に背部からは無数の

ミサイルが飛び出し両手に持っていた機関銃を発射していく。
ビルは爆煙を上げながら崩れ落ち、一瞬にして辺りを灰と塵で飲み込んでいく。
だがＢＮの艦に覆いかぶさる箇所だけは的確にアストロス・ガンナーが全て掻き消していた。
『艦の被害は抑える事が出来ました、しかし周りにいた人達が……』
艦に大きな被害はでなかった、だが艦の周りに集まっていた人達は皆瓦礫に埋もれ今は見る影も無い。
その光景を見て悔しがるシャイラに、ＳＶのアリスは無線で声を掛けた。
『シャイラ！貴方がいなければ私達は死んでいたのよ……助けてくれて、ありがとう……！』
『はい、お嬢様。ありがとうございます……しかしここはまだ危険です、早く安全な場所に避難して――ッ！？』
辺りは煙に包まれ視界は０のはず、だがレーダーには我雲やギフツの反応が次々に消えていく。
兵士達は悲鳴も何も上げる事なく次々に機体を破壊されて死んでいく、状況がわからぬままどうしていいのかわからず佇む機体達に、大和は容赦などしない。
急いで艦が後退していくと、残っていた機体達も煙の中から出ようと一緒に艦の元に後退していく。
「た、助かった……雪音、そっちは大丈夫？」
香澄も何とか煙から逃れ艦と共に後退していくと、雪音の乗った我雲もまた艦と共に後退していた。
「は、はい。何とか無事です、でも民間の人達が……」
今にも泣きそうな表情の雪音に、焦りと緊張、そして危機感に香澄の顔は強張っていた。
「私達は出来るだけの事はした……だから雪音、私達は今から全力で艦の護衛するのよ、それが私達の役目であって、私達にしか出来無い事だから……！」

心強い香澄の励ましに、雪音は何かに気付かされたように目を見開くと、急いで目元の涙を拭うとしっかりと操縦桿を握り頷いてみせた。

「はい！頑張ります……！」

艦の周りにいた機体達が皆銃を構え引き金に指を掛ける。レーダーに反応有り、煙の中から颯爽と現れたのは二本の刀を握り締める大和の姿だった。

『全機攻撃を開始、大和を艦に近づけさせてはなりません！』

シャイラの命令にアストロス達は一斉に大和に向けて射撃を開始する、それに合わせて我雲、そしてリバインもまた大和に向けて引き金を引いた。

十機以上もの機体に一斉射撃をされる大和、だがそんな攻撃を建物の影に隠れながら避けていき着実に艦へと近づいていく。

それに焦ったＳＶの兵士達は銃をアストロスの背部に仕舞いＬＲＳを抜き取ると、迫ってくる大和目掛けて突撃していく。

「射撃で奴の動きは止められないのなら近接戦闘に持ち込むまでだ、全機大和の四方を囲み突撃せよ！」

四機のアストロスが横一列に並び大和へ近づいていく、そして三体の機体が大和を囲むように移動していく。

「奴は例えＥＲＲＯＲでも大和……単機決戦が不利なら数で押すまでだ、各機俺に続け！」

「了解ッ！」

大和の四方を囲むアストロス達、全機がＬＲＳを構えると同時に出力を上げて大和に飛びかかった。

……ふとその時、一瞬大和の刀が動いたような気がした。微かにブレるように動きだが、瞬きをすれば何も動いていないように見える。

誰もが不思議に思い自分の眼を疑っただろう、大和の四方を囲み突撃したはずのアストロスが大和に掠る事無く擦れ違い、地面に崩れ落ちる。

大和は何事も無かったかのように艦へと近づいてくる、崩れ落ちた

四体の機体は火花を上げると同時に爆発を起こした。
……今、何が起きたのか。わからない、だがアストロス４機が一瞬で破壊されたのは事実。
「これが……大和の力だって言うの……？」
『いや、あれは大和の力じゃない』
目の前で４体の機体が破壊された事に驚きを隠せない香澄、そんな香澄の口から零れた言葉に一人の女性が答えていた。
艦から出撃する一体の赤いリバイン、盾を持ち、ＬＲＳを構え、甲板の上に着地する。
『伊達武蔵……奴の力だ』
一部始終を見ていた赤城にとっては十分な情報だった、後は互いに刃を交えれば自ずとわかる事。
『全機撤退しろ、ここは私が食い止める』
その赤城の無茶な発言にその場で機体に乗っている兵士達も困惑した表情をみせた。
「な、何言ってるの！？相手はあの大和なのよ、一人で勝てる訳が無い……！」
香澄の言う事は恐らく誰もが思っていただろう、先程の光景を見ていたら尚更だ。
『かもしれん、だが……お前達が束になってかかっても大和に勝てないのは確かだ、恐らく傷一つ付ける事も出来まい』
その挑発的とも言える赤城の発言に香澄が眉を顰めると、此方も同様に挑発的な態度で言葉を返した。
「豪く自信があるわね……いいわよ、それなら勝手にすればいい。私達は艦の護衛をしつつ大和から離れるわよ！」
由梨音の乗るリバインが甲板から路上に降りると、赤いリバインとリバイン以外の機体は全機艦と共に後退していく。
『感謝する……由梨音、お前も艦の護衛に回れ。ここから離れるんだ』
赤城の呼びかけに由梨音の乗るリバインは動こうとしない、それ所

か背部から銃を取り出し赤いリバインの横に並ぶと大和目掛けて照準を合わそうとする。
『い、嫌です！私も赤城少佐と一緒に戦います！』
赤城の命令を拒否する由梨音、その震える手で操縦桿を握る姿に赤城は声を上げた。
『馬鹿な事を言うなッ！お前は知っているはずだ、奴の強さを』
ＮＦ、そして武蔵と同じ部隊に所属していた二人は知っていた、武蔵の尋常じゃない強さ、恐ろしさを。
東部最強の男、恐らく本部にいればＮＦ最強と謳われていただろう。
真の英雄……。
『だからこそ赤城少佐を一人で戦わせたくないんです！赤城少佐はいつもそう、危険な時があるといつも私達を守ろうとする。でもその気持ちは……私だって同じなんです！』
幾度と無く助けられてきた由梨音にはこれ以上耐えられなかった、非力な余りいつも赤城に助けられ、守られていく事に。
『私も役に立ちたい！私だって赤城少佐守りたいんです！だから――っ！』
大和の実力を知っているはずなのに、それでも由梨音は逃げようせず立ち向かおうとしている。
それは赤城の後姿を見たからかもしれない、たった一人で大和に立ち向かう無謀とも思える姿を。
『由梨音……すまない』
小さく呟いた後、赤城の乗るリバインはＬＲＳを振り上げ横に立っているリバインの銃を斬り落とすと、ＬＲＳを背部に仕舞い由梨音の乗るリバインの背部からＬＲＳを抜き取る。
『あ！？赤城少佐ぁ……そんなぁッ！』
両方の武装を失うリバインに、赤いリバインは一歩前に踏み出した。
そして赤城は無言で通信を切ると、迫り来る大和目掛けて発進する。
『ああ……私だって、赤城少佐を守りたい……それなのにぃっ……！』

悔しがりながら震える手で操縦桿を握り締める由梨音。いつも守られてばかりで、いつも助けられてばかりの赤城に、新たに支給されたリバインでやっと役に立てると思えば、結局いつもと変わらず。赤城はそんな気持ちを抱く由梨音を知らない、嘗て自分も同じ立場だったにも関わらず……。

――赤城の乗るリバインは既に大和の前にまで来ていた、大和は二本の刀を握り締め身構えると、リバインも同様にＬＲＳと盾を構え大和を迎えうつ。

そして次の瞬間リバインと大和が擦れ違い様に互いは刃を振るい駆け抜けた。

『……やはりな』

振り返るリバインは無傷でその場に立っていたが、同様に振り返る大和もまた無傷のままだった。

『ＳＲＣ、癖までも似るとは流石だ。更に私の癖も把握済み、つまり――』

再びＬＲＳと盾を構え体勢を立て直すリバイン、大和も同様に二本の刀を握り締め身構えると、リバインは勢い良く大和向けて発進する。

『その機体に乗っているのは貴様なんだろ、武蔵ッ！』

大和目掛けて振り下ろすＬＲＳ、すると大和はほんの少し刀を動かしただけでその攻撃を難なく弾く。

弾かれたＬＲＳだがリバインは刃先の向きを変え今度は大和目掛けてＬＲＳを突き出すが、大和は片方の足を一歩下げると、機体擦れ擦れの距離で攻撃をかわしてみせる。

『答えろ！』

その言葉と共に左手に持っていた盾を大和にぶつけるが、大和は微動だにしない。

だが完璧に間合いに詰め寄っている赤城は盾を放した後すぐさま左手で背部にあるＬＲＳを抜き取ると、それを大和の右肩目掛け振り

下ろす。
すると大和はそれを右手に持つ刀のほんの刃先で払うと、一瞬にしてリバインの左肩を斬り落とした、だがそれだけではない、赤城の注意が左肩に向けられた時を見計らい大和は左手に持つ刀を振るいリバインの右肩を斬り落としにかかる。
更に右手に持つ刀はリバインの左肩を斬りおとしたと共に刃の向きを変え振り上げるようにリバインの胸部を斬りかかろうとすると、赤城はリバインの右足を上げ、勢い良く大和の腹部目掛けて蹴りを入れた。
蹴り飛ばされた大和は後方に少し飛ばされ体勢を崩すと、その隙を狙いリバインが残った腕でＬＲＳを振り上げる。
だが倒れた大和は咄嗟に大砲がリバインに向け榴弾を放つ、だが赤城は攻撃を読んでいたかのように華麗に榴弾を避けると、倒れる大和の懐に入り剣先を胸部に突きつけた。
……互いの機体は先ほどの荒々しい戦いを感じさせない程静止していた。
倒れた大和は胸部にＬＲＳを突きつけられ、またリバインも突きつけたまま止めを刺そうとしなかった。
『武蔵……なのだろ？』
赤城の呟きに大和は動かぬまま何も答えない、それを見るに見かねて赤城は更に言葉を続けた。
『どうして答えないんだ……違うなら違うと言えばいい。だが、武蔵本人なら何故名乗らないッ！』
声を出せば出す程感情が高まり涙が込み上げて来る、今まで溜め込んでいた気持ちが爆発寸前にまで膨れ上がっていたのだから無理もない。
『答えられぬか？ならば力ずくでも確かめさせてもらうまで……！』
そう言うとリバインはＬＲＳをの刃先を大和の胸部に近づけていくと、ゆっくりと胸部に穴を開け始めた。
だがその瞬間大和の目が強く光ると、素早く胸部に突きつけられた

ＬＲＳを振り払い、一瞬で立ち上がると共にリバインから離れた。
大和の突然の動きにリバインはすぐさまＬＲＳを構えて見せたが、その大和の異様な様子に赤城は目を見開いた。
両手から刀を落とし、頭の痛みに耐えるかの様に手を当て苦しむ大和。
リバインはＬＲＳを構えたまますぐに近づこうとしたが、その瞬間大和は頭から手を放すと、地面に落ちた刀を両手に吸い寄せ体勢を立て直した。
……既に先程とは何かが変わった大和がそこに立っていた、先程の明らかに違う雰囲気に赤城もすぐに理解できた。
そう、人としての感情は何も伝わってくる事が無く、そこにはもう目の前の敵をただ斬るだけの敵が立っているだけだという事に。
『赤城少佐ぁッ！逃げてぇえええええ――――！！』
由梨音の叫び声、そして距離を置いていたはずの大和は既にリバインの眼の前にまで接近していた。
『なっ――――』
大和相手に腕一本では如何する事も出来ない、だからと言って今背中を見せれば確実に殺される。例え抵抗しても結果は同じ、今の大和には倒すことも、逃げることも出来ないと悟った。
『だが……しかしッ！』
ここまで何もしてこなかった訳ではない、武蔵の動きを計算、予想、研究し続けた赤城にとって、今この時を逃すわけにはいかなかった。この期をだれだけ待ち望んでいた事か、そして武蔵と出会える事をどれだけ願っていた事か……。
『私は――――』
片腕だけでＬＲＳを構えるリバイン、その余りにも無謀な行動を読んでいたかのように由梨音の乗るリバインが2機の間に入ると両手に持っている手榴弾を大和目掛けて投げ込む。
『生きていれば必ずまた大和と会えます！でも、今ここで死んじゃったら絶対に会う事は出来ません！』

手榴弾が爆発すると同時に由梨音の乗るリバインが赤いリバインの腕を掴むと、強引に大和から引き離していく。

『だから赤城少佐、今は未来の為に……逃げてください！』

目先の事だけには囚われてはいけない。

生きる目的は今の為じゃない、明日の自分の為だ、由梨音の言葉に赤城は少し俯くと操縦桿を素早く動かし由梨音の乗るリバインの手から離れると、自らの意思で大和から離れていく。

『お前に気付かされる時が来るとはな……礼を言うぞ、由梨音』

爆風の中から現れリバインに接近する大和、すると2機のリバインは息の合った動きで跳び上がると、左右にかく乱しながら共に後退していく。

『艦からは大分引き離す事に成功した、後は我々が大和から逃れるだけか』

『でも、大和との出力の差は大きいです。どうやってあの大和から……』

町中に立ち並ぶ建物の間をすり抜けていく二機のリバインに、大和は思うように近づけずにいる。

『二機逃げ切るのは難しい、だが一機だけなら……』

『それなら私が囮になります！だから赤城少佐は――！』

後方から放たれる砲弾を間一髪で交わすリバイン、そのまま注意を引きつけようと赤城の乗る赤いリバインから離れようとした時、赤城は何かを思いついたかのように小さな笑みを見せた。

『囮か……わかった、その手を使わせてもらう』

――大和をかく乱する二機のリバインだが、二人の動きは長くは通用しなかった。

徐々に大和に動きを見切られていき、僅かな隙を逃さず接近してくる。すると二機のリバインは町の中心に聳え立つ一本のビルに向かっていくと、由梨音の乗るリバインが両手に二つずつ握り締めている手榴弾をビルの中に投げ込んだ。

ビル内部で爆発する手榴弾、投げ込まれた階の柱は爆発により吹き飛ばされ瞬く間にビルが崩れ落ちていく。
煙に埃、塵などが一斉に舞い上がり、周辺の建物を次々に飲み込んでいくのを見た大和は、大砲を崩れ落ちるビルの方に向けると眩い閃光と共にＬＲＣを発射した。
目の前に広がる塵や煙を掻き消していくＬＲＣ、視界が開けていくとそのビルの残骸の上にはＬＲＳを握り締めた赤いリバインが立ちはだかっていた。ふと周りを見渡すが由梨音の乗るリバインは見当たらず、大和は赤いリバインの方を向くと刀を構え体勢を低くする。すると赤いリバインも同様にＬＲＳを構えると、まるで大和を頃合を見計らうかのように動こうとしない。
互いの機体が睨み合い、刀を構える様子……何の前触れも無く大和は発進すると見る見る赤いリバインとの距離を縮めていく。
そして大和はリバインと擦れ違い様に刀を振るい機体を止めた。
大和の攻撃に何も出来ず赤いリバインは斬られ、閃光を放ちながらその場で爆発を起こすが、大和は刀を鞘に納めようとはしなかった。

――その頃、既に大和とは遠く離れた場所に由梨音の乗るリバインがＢＮの艦にまで向かっていた。
「どうやら作戦は成功したみたいですね、赤城少佐」
そう言って由梨音は顔を横に向けると、その狭い操縦席の隣に赤城が立っていた。
「ああ、奴の事だ。恐らく私が囮になり部下を逃がす事は読めていたはず、それを逆手にとらせてもらった」
「でも危なかったですよ。ＡＭＯＳを入力する時間、それに一歩間違えていれば赤城少佐がこのリバインに乗る姿を見られていたかもしれませんし……」
手榴弾でビルを崩壊し大和の視界を奪ったのには理由があった、一つは由梨音の乗るリバインを逃がす事、そしてもう一つはタイミングを見計らい由梨音のリバインに乗り込む事。

後は赤城が機体設定をＡＭＯＳに入力したプログラム通りに機体を動かすだけだった。
「まあな、だがこれを成功させなけれ私達が逃げる事は難しかった。幸いにもＬＲＳを構えるプログラムが何とか作れたから良かったがな。今頃大和は私の狙いに気付き私達を探していると思うが、既に手遅れさ」
二人が安心して小さく息を吐いた矢先、突如レーダーに機体の反応が示される。
一瞬警戒し身構える二人だったが、二人の前に現れたのは紳の乗る白義だった。
「大和はどうした、お前たちが囮になっていると聞いたが……？」
「なっていたさ。今は大和を振り切り艦へ向かっていた所だ、早くこの町から離れなければまた大和に見つかってしまう、その前に早く町から離れなければ……！」
「わかっている、今は戦う時ではない。……ついてこい」
純白のマントを靡かせながら艦にまで向かう白義、その後ろを二人の乗るリバインがついていく。
赤城の脳裏にふと映る大和の姿と、おぼろげに映る武蔵の笑顔。何故武蔵は自分達の前に立ちはだかるのか、何故ＥＲＲＯＲと共に行動しているのか、考えれば考えるほど悪い方向へと流れていく。
「赤城少佐」
その不安を晴らすように由梨音が優しく赤城の名を呼ぶと、笑みを見せながら口を開いた。
「焦らず一緒に頑張りましょ、私はずっと赤城少佐の側にいますから」
戦場で見せる由梨音の温かい笑みに、赤城は微かに笑みを見せると由梨音の肩にそっと手を置いた。
「言ったな？約束だぞ、ずっと私の側にいてくれ、ずっとだ」
「はい、約束です！」
赤城の言葉に由梨音は嬉しそうに頷き答えるが、赤城の方は少し深

刻な表情で由梨音の横顔を見つめていた。
考えたくなくても考えてしまう、戦争が長引いていけば何が起こり、何を失うのか。既に肌身で感じている赤城にとって、決して他人事では無い――。

第８６話　迷い、確認

――ＢＮの基地内部の一室で、二人の男の戦いは続いていた。
穿真の拳を瞬く間に避ける愁、更には尋常じゃない速さで接近してくると的確に拳を振るっていく。
もはやその拳も人間のものではない、穿真が交わした拳は壁にぶち当たると容易く穴を開け、拳が体を掠るだけで血飛沫をあげた。
それでも穿真は必死に愁の拳を避けると、僅かな隙をついて自らの拳を突き出そうとする。
だが愁は体を瞬時に後退させ拳の範囲から離れる、するとそれを見た穿真はニヤリと笑みを見せると、躊躇いなく拳を愁へ突き出す。
たしかに穿真と愁のとの距離では拳は届かないはずだった、だが突き出された拳は手首から放たれると愁の胸部を直撃しそのまま部屋の壁にまで吹き飛ばす。
更に拳は勢いを増し部屋の壁を粉砕すると愁ごと隣の部屋にまで吹き飛ばした。
塵が舞い上がる中、穿真の放たれた右腕だけはまるで何かに吸い寄せられるかのように穿真の手首へ戻ってくる。
「卑怯とか言うなよ、これも立派な戦術だ」
あれだけの傷と出血をしていても、穿真は堂々と立ち愁の方へ体を向けていた。
しかし、それは穿真だけではなかった。吹き飛ばされたまま愁もまた口から血を流してはいたが、彼もまたしっかりと立ち上がっている。
「おいおい……今の拳を食らって何で立ってられるんだよ、ったく」
まだ戦いは終わらない、穿真は再び拳を構え愁が近づいてくるのを待っていると、それを見た愁もまた穿真に近づいていこうと一歩足を前にした。
だが愁は一歩踏み出した後足を止めると、思考が停止したかのよう

に体が一切動かなくなる。
その様子に異変を感じる穿真だったが、またいつ攻めてくるかもわからない為身構えたままの体勢で口を開いた。
「ん？何固まってんだ……？」
穿真の呼びかけに答えない愁、穿真は恐る恐る動かない愁に近づいていこうとしたが突如愁の止まっていた足が動き始めると瞬く間に穿真の眼の前にまで接近してくる。
「てめっ――――！？」
穿真の顔面向けて突き出される拳、だがその拳よりも早く一人の女性が愁の腕を蹴り上げると、体を回転させながら振りかぶり左手に付いてある鍵爪で愁の顔面を掻き切った。
顔を切り裂かれ顔から大量の血を噴出す愁、返り血が掻き切った女性に付着するものの女性は目を見開いたまま呟いた。
「お前、死ねよ」
容赦や情けなど無い、顔面を切られた事で愁は両手で顔を押さえると、その隙をついて葵は愁の足を横から蹴り上げると、体勢を崩した愁の懐に強力な膝蹴りを食らわせる。
口から血を吐き出す愁を見て葵は背後に回ると、愁の髪の毛を鷲掴み顔面を床へと叩きつける。
何度も、何度も……気付けば愁は何の抵抗もせずただ顔面を延々と床に叩きつけられていた。
「お、おい！もう止めろ！」
咄嗟の出来事に何が何なのか理解できず呆然と立ちつくしていた穿真だが、床に叩きつけられ続ける愁を見てようやく葵を止めにかかる。
だがその時、死んだと思っていた愁が葵の腕を掴むと一瞬でその場に立ち上がった。
そして掴んでいた葵を軽々と穿真目掛けて放り投げる。穿真は投げられた葵を受け止めるが、既に愁は部屋の壁に空いた穴に入り姿を消していた。

急いで愁を追おうと葵が走り出そうするが、穿真が右手で葵の腕を掴み放そうとしない。
「待てって！基地の中にはＥＲＲＯＲがいるんだ、これ以上愁を追えば死ぬぞ！」
素直に言う事を聞いてくれるとは思っていない、仲間に仲間を殺されたんだ、取り乱して当然の事。
恐らく腕を振り解かれると思っていた穿真だが、葵は意外にも冷静な表情で立っていた。
「わかってる……」
葵の呟きと共に部屋の壁が崩れ落ちる、そして建物の外からはアストロス・ライダーがこちらに手を伸ばしていた。
「お前を艦に連れて行くまではな……」

――――「うっ…あ……」
ダンの乗る機体手に包まれ運ばれるエリルとエコ、エリルは冷たくなっていくエコの体を必死に抱きしめていると、ふとエコの声が聞こえてきたような気がした。
「うあっ、う……ぐ、っぅ！！」
……気のせいじゃない、たしかに胸を貫かれたエコは声を発していた。
目を瞑り、額からは尋常じゃない汗が流れ出す、先程までは呼吸すらしていなかったというのに僅かな呼吸も今はしていた。
「ぎ、あが…い……ぃあぁぁあああぁああ！！」
そして額に光を放つ丸い陣が浮き出てきた時、エコは目を見開き絶叫した。
全身が痙攣し激痛が走る、その痛みと苦しみに喉が張裂けるほどの声を出すエコにエリルは動けずにいた。
脳裏に聞こえてくる一人の青年の声、そう、逃げる事は出来ない、これは与えられた運命。
あの日あの時からエコを歳とる事なくなった、誰もが望む永遠の美、

永遠の命が与えられた。
『君は本当に幸せ者だ――――』
ふとエリルがエコの胸部を見てその光景に愕然とした。
出血が止まり大きく空いていた穴が見る見る塞がっていくと、先程まで空いていた穴は綺麗に消えていた。
エコは目を見開きながら涙を流し、その苦しさに肩を大きく動かし荒々と呼吸をしていた。
「私、は」
自分の胸元に目をやると、服に穴が空いているだけで体は何の異常も無い。
「生きてる……」
たしかに殺されたはず、だが今ここには無傷の自分がいる。
そしてその一部始終を見ていたエリルは震えるエコを優しく抱きしめた。
「うん、生きてる。だから安心して」
エリルの言葉に緊張の糸が切れたのか、途端に気を失うエコ。
だが先程とは違い、安心した表情を浮かべ静かに呼吸をしながら眠りについた。

――――次々にＢＮの艦に各機体が戻っていく、赤城達にダン達、そして一番遅れて戻ってきた葵達。
皆が去った町は既に人型のＥＲＲＯＲに埋め尽くされており、僅かに生き残っていた生存者も既にＥＲＲＯＲの餌食となっていた。
町も基地も
「現在各町に同種のＥＲＲＯＲを確認されている。民間人だけではない、軍人までもがＥＲＲＯＲになっている。艦に避難させた民間人全員の検査をする必要があるな……」
無事町から脱出に成功したＢＮの戦艦の艦長室で紳は頭を抱えていた。
その紳のいる部屋の隅には壁にもたれ掛かり煙草を吹かすダンが立

っていた、そして悩む紳の姿を見て面倒そうに口を開く。
「神が死んだ途端に各地にＥＲＲＯＲか、こりゃ早めに開始しないとまずそうだな」
「時間が無い事などわかっている、ＮＦの戦力に取り込めば後は作戦を開始するだけだ」
席を立ち上がり部屋から出て行こうとする紳、するとダンは紳が部屋の扉の前に立った瞬間口を開いた。
「紳、神とやらが死んでから俺は悪い予感しかしない」
足を止めた紳、部屋の扉が開かれてもなおダンの言葉を聞いている。
「お前さんも全てが上手くいくとは思ってないだろう？だがこの戦い……全て上手くいかなければ人類は消える」
その何時にもなくダンの重い言葉に紳は振り向くと、いつものような冷静な目でダンを見つめた。
「それは相手も同じだ」
そう言い残した後部屋から立ち去る紳、その後ろ姿を見てダンは加えていた煙草をポケットに入れている携帯灰皿に仕舞うと、また新しい煙草を銜え火を点けた。
「だからこそ、な……」

――ＢＮの艦内、その休憩室では無事帰還した羅威と穿真、そしてエリルの三人が深刻な表情で話し合っていた。
「でけえ怪我なくて良かったなぁ羅威、まぁ機体はボロボロなっちまってたが」
そう言いながら穿真は包帯の巻かれた腕で頭を掻いていたが、その至る所に包帯が巻かれている穿真の姿の方が羅威にとってボロボロに見えた。
「俺よりお前こそ大丈夫か？包帯だらけじゃないか……それに、まさか愁がな……」
穿真の話を聞いて羅威はもう決めるしかなかった、愁を止めるには、愁を殺すしかないと。

愁に迷いが無いのなら、自分もまた迷いを消すしかないし、そうでなければ穿真にも悪い気がした。
今目の前にいる傷ついた穿真の姿は、恐らく本気で愁と殺しあった後なのだと。
「俺は丈夫な方だからな、安静にしてりゃその内よくなる。にしても俺が驚いたのはその愁が殺したはずの女の子が生き返ったって事だ、今でも信じられねえ、本当に生き返ったのか？」
そう言ってエリルの方に視線を向ける穿真に、エリルは顔を近づけて大きく頷いた。
「本当よ！何なら自分の目で確かめに行く？今医務室のベットで寝てると思うけど」
「ああ、それは止めとく。今行くとあいつの邪魔になるからな……」
エコが無事だった事を聞いて一番驚き、そして喜んだのは間違いなく葵だった。
あの生気が無く虚ろな目をしていた葵が基地内でエコの無事を聞いた途端に顔色を変え医務室へと駆け出していったのだから。
「羅威、次に俺達の前に愁が現れた時、その時は……わかるな？」
「ああ、俺達が……この手で愁を――」
その時だった、突如休憩室の外から聞こえてくる女性の声が聞こえてきたのは。
「いけませんお嬢様、お戻りになってください」
外の様子が気になった三人は何事かと思い休憩室を出てみると、そこにはシャイラの制止を振り払おうとするＳＶのアリスの姿があった。
「そこをどきなさいシャイラ！誰も行かないなら私がゼストを探してくる！」
「行かないのではありません、行けないのです。今あの町はＥＲＲＯＲで埋め尽くされています、今町に戻ればどれ程危険なのか、お嬢様もわかるはずです」
「その危険な場所にゼストがいるかもしれないのよ！シャイラはゼ

ストを見殺しにするつもりなの！？」
怒りを見せながらも必死に涙を流すのを我慢するアリスの表情に、三人は何が起きたのか理解できた。
「お嬢様、辛いのはわかります。ですがゼスト様はもう……」
「何？死んだって言いたいの？機体が破壊されたからってゼストが死んでるとは限らないじゃない！」
アリスは知っている、分かっている、だが認めたくなかったのだろう。それはシャイラにもわかっていた、だからこそアリス自身に理解して認めて欲しかった。
「……わかりました、ですがお嬢様、貴方は今現在ＳＶを纏めるお方です。あのような危険な場所に戻ってはなりません。ですので……私が一人で戻ります」
「えっ……？」
その意外な言葉にアリスだけでなくその場にいた羅威達も驚きを見せていた、シャイラは落ち着いた様子でまた言葉を続けるが、先程までのアリスの威勢は既に消えていた。
「それでよろしいですね、私があの町に一人で戻りゼスト様をお探ししてきます。それでは」
深深とアリスにお辞儀をした後、シャイラは一人機体の格納庫へと向かおうとする。
その去っていくシャイラを見てアリスは小さく口を開き手を伸ばすが、背を向けたシャイラには無意味だった。
「ちょっと待ったぁ！」
すると、話を聞いていた穿真が格納庫へ向かおうとするシャイラを止めようと穿真が立ちはだかると、その両横に羅威とエリルも立ち並んだ。
「どいてください、私は今すぐあの町に戻らなければなりません」
冷たくあしらうようにシャイラはそう言うと三人を避けて歩いていこうとするが、その前に羅威は立ちはだかった。
「駄目だ、あの町は危険すぎる。今行けば命は無い、そうだろ？」

そう言って羅威は鋭い視線をアリスに向けると、アリスは何かに気付かされるようにシャイラの元へ駆け寄り力強く腕を掴んだ。

「行かないで……」

無意識に口から出ていた言葉、その言葉に気付かされたのは紛れもない自分。

俯いていた顔を徐に上げ、涙を堪える目で必死にシャイラを見つめるアリスに、シャイラは言葉より先に体が動いた。

「……わかりました、部屋に戻りましょう。アリスお嬢様」

抱き締められたアリスは涙の零れ落ちる顔をシャイラの胸元に押し付け小さく頷く、それを見た羅威達はお互いアイコンタクトをとると、二人に背を向けその場を後にした。

――たしかにあの時エコは死んだ、でも今葵の目の前には安らかな表情浮かべ小さな寝息をたてるエコがそこにいた。

全身の力が抜け膝が床につくのがわかった。夢ではない、紛れもない現実、そしてこれ程まで嬉しい現実があっただろうか。

「エコ」

名前を呟きながら寝ているエコの頬に触れる葵、その温かく柔らかい感触は見る見る葵の顔を笑顔にしていく。

「生きてる！」

途端に寝ているエコを抱き上げる葵は、その嬉しさに笑い声をあげながらベットの横でグルグルと回転しながらエコを抱き締める。

勿論そんな事をされて寝ていられる訳がないエコは目を覚ますと、同時にその回転の勢いに驚き放れようとするが葵の力に勝てるはずもなく回転され続けていた。

「エコ！お前生きてる、生きてるぞ！良かったな！良かったな！！」

満面の笑みで回転し続ける葵、だがその勢いは次第に治まっていくと、エコを抱き締めたままその場に座り込んでしまう。

「本当、良かった……無事で……本当に〝……」

声と肩を震わし、そのエコの小さな体を強く、そして優しく抱き締

める葵の眼からは止め処なく涙が零れ落ちている。
優しく抱き締められる心地に、肩に落ちる温かい涙の粒、それがエコにとって何よりも生きている証拠に感じられた。

――俺が思うに、人は『死』を知るからこそ『生』の価値を知っている、それは『戦争』と『平和』に置き換えても同じだろう。
死を知らなければ生の価値などわからない、故に戦争が無ければ平和の価値などわからない。
人間同士の争いなら歯止めが聞く、子供だろうが大人だろうが、んでも化物だったらどうする？もう遅い、今更遅い、後悔した所で何も変わらない、逃げ場などない、今更平和を望んだ所でもう遅い。
死は身近にある、足元まで来ている、自分だけは生き残る？自分だけは特別？いいや違う、虫けらのように死ぬ、誰にも悟られず、誰にも気付かれず、誰にも守られず死の恐怖を堪能に味わった後に……。
だが俺は違う、全てを理解した上で俺は戦っている、数々の世界に存在する社会で踊らされる人間達とは、違う……。
「俺は……何を今更考えているんだ……？」
もう既に先程考えていた記憶が無い、暗闇から視界が開けた所は木で出来た天井が広がっていた。
布団の中で寝ている自分に気付きゆっくりと起き上がる、そこは俺の予想していた場所とは遥かにかけ離れた光景が広がっていた。
障子に畳み、外を見れば木々が生い茂り花壇には花が植えられている。
空は快晴、心地よい風が俺の体をすり抜けていくような、そんな清々しい雰囲気だ。
……にしてもこの絵に描いたような和室で俺はどうして寝ているんだ、俺はたしか神と戦った後――。
「あら、目が覚めたのね」
この声……俺は徐に声のした方に顔を向けると、奴はそこにいた。

「かぐ、ら……」
何だ……こいつの勝ち誇ったような笑みは、こいつ、また何か面倒な事を絶対に企んでやがる……。
俺は逸早く自分に掛けられていた布団を取ると、自らの体を見て触って調べていく。
「ふぅ、どうやら爆弾は仕掛けられてないみたいだな。てめえ、何のつもりだ？」
「何？その態度、せっかく助けてあげたのにぃ、お礼の一つも言えないのかしら」
「助けた？絶対お前俺を利用する為に生かしてるだけだろ」
こいつの事だ、もう何してもおかしくない。それにこいつと一緒にいて面倒な事に巻き込まれなかった事など一度もない。
「酷い言われようねぇ、私は貴方を手伝ってあげようとしてるのに」
「なっ、手伝うだと？」
一瞬耳を疑ったがたしかに神楽はそう言って言葉を続けた。
「ええ、貴方が過去に戻れる手伝いを、ね」
過去に戻る……そうだ、俺は神を殺しミシェルを助けた。
それならもう、この世界に用は無いし、俺がこの世界にいつづける意味は無い。
神楽が何を企んでいるかまだわからないが、俺はこれで元の時間の世界へと帰る方法を見つける事に専念できる。
そして俺は過去に帰る。勿論その時はこの世界で約束した出来事を全て果たしてからだがな。

第87話　本音、戯言

――――「俺の手助けをするなんて尚更信用できねえ、お前の望みは何だ？」

こんな部屋に連れてこられ、散々問題を起こしてきたこの女が突然俺に手助けだと？信用できる訳がない、こいつは人の為より自分の為に動く奴だからな……。

「望み？そうね、貴方が無事過去に戻れる事かしら」

「だからそうじゃねえ！お前の本当の目的を――――」

次に俺が大声を出そうとした時、神楽の後ろの影からミシェルを顔を出すと、俺を見た瞬間に笑顔になり駆け寄ってきた。

「ミシェル！？無事だったか！」

ミシェルは笑顔で頷いている、この様子だと神楽に何かされた訳ではないと思うが……。

とりあえずミシェルの体にも爆弾が付けられていないか触って探してみると、ミシェルは擽ったそうに体を反らして俺の手から逃げる。

「あはは、くすぐったーい！」

そんな暢気な事言ってる場合じゃない、まぁ爆弾が付けられてる場合知らない方が気持ちは楽だが。

「神楽、お前ミシェルに何かしたか？」

「いいえ、この子には何もしてないわね」

……この子には？ほぉ、なるほど、つまり俺には何かしたって事か。

「貴方の体は色々と調べさせてもらったわよ」

「はぁっ！？やっぱり何かしたのかよ！」

「あのね、貴方は謎が多いし危険なの、それぐらい当然の事でしょ？」

たしかにそうかもしれないが、しかし。俺に黙って勝手にする事では無いだろ……。

こいつの事だから俺の体内に爆弾とか入れていてもおかしくない、

だがそれが無いというのなら本当に俺を助けるつもりなのか？
「もう一度言うけど、私は貴方の敵じゃない。協力者よ、少しは信用してくれてもいいんじゃない？」
怪しさ満点の言葉だが、ここで何時までも言いあってる場合じゃない、それにこいつが本当に協力してくれるのなら色々と役立ちそうだ。
「ああ、まぁ敵意が無いのはわかったよ。それで、これからどうするんだ？」
これから忙しくなるな、過去に戻る為の方法や準備。
それにレジスタルについても色々と話しておかないと……。
「昼食を食べるわよ」
そうそう、まずは飯だよねー。
俺の前に立っていた神楽はそう言い残した後部屋から出て行ってしまうが、本当に飯か？
俺は寝ていた布団から起き上がるとミシェルを連れて神楽の向かった方へ歩いていく。
そこには居間で料理を卓上に並べる神楽がいた、それを見た瞬間ミシェルは笑みを見せると俺の元から離れ神楽の隣に座りはじめる。
そんな嬉しそうに並べられた料理見渡して、よっぽど腹減ってたんだな……。
にしても、先ほどの部屋といいこの部屋といい、長閑な所だな。静かだし、外を見れば綺麗な緑色をした草木が並んでいる。
「お前の事だからてっきり要塞みたいな所に住んでると思ってたけど、意外と綺麗な場所に住んでるんだな」
「そんな事言ってると貴方の分の食事出さないわよ？」
「すいませんでした」
目の前に美味しそうな飯が並んでいるんだ、ここまで来て飯抜きは嫌だ。
まぁ毒とかも入ってないと思うし、入ってても死なないと思うし、大丈夫だろう。

にしてもこいつが料理を作れるとは驚いた、一人パソコンの前でカップメンでも食べてそうなイメージあるし。
さて、また変な事口に出す前に飯を食べるか、実際飯を食べてる程暇じゃないがこういう時だからこそ逆に落ち着いて冷静になるのも重要だ。
俺は料理の置かれている机の側に向かうと、畳の上であぐらを掻いて座り並べられている料理を一通り見てみる。そこには米に味噌汁、漬物に煮魚といった『和』を強調した料理ばかり並んでいた
「いただきまーす！」
思えば最後にこんなまともな飯を食べるのはいつだっただろうか、俺が黙って箸を取る前にミシェルは素早く箸を掴むと上手に料理を挟んで食べている。
……ん、箸なんていつ使わせた？元々箸が使えたのか？
そんな俺を察してか、俺が神楽に聞く前に神楽の方から口を開いてきた。
「貴方この子にどんな教育してたの？箸の使い方も教えてなかったわよね、今日の朝食食べる時私が教えたのよ」
「そ、そうだったのか。ありがとな、俺は何も教えてねえから……」
やれやれ、ミシェルには柔らかい表情を見せる一方で俺にはまだ硬い。
協力するんならもう少しまともに言えないのか？まぁ飯を頂いている以上今は何も言えないな……。
あんな楽しそうに美味しそうに食事をしているミシェルがいるんだ、この場の雰囲気を壊したくもない。
俺は黙ったままずは米を食べる、美味い。魚を食べる、美味い。
漬物は……野菜だがここで好き嫌いしている場合じゃない、食べてみる。
「うま！……はっ」
その口から零れた言葉に二人の視線が俺に集まった。
いかん！？何だこの味は！この俺が野菜を食べて『うまい』と言い

そうになっただと?馬鹿な、ありえん……。
「……赤ちゃんもそんなこと言ってたわよ、私が初めてその料理を出した時」
「へ?」
「好き嫌いしてるようじゃ貴方も子供ね、この子を見てみなさいよ」
言われる通りミシェルを見てみると、俺の大嫌いな野菜を美味しそうに食べている。
だがなんで食べ物の好き嫌いがあるだけで子供扱いされなきゃならないんだ?誰だって嫌いな食べ物ぐらいある。
「俺だってちゃんと食べてるだろ、全く……」
そう言って俺は内心恐る恐るしながら野菜料理を食べていく、これが本当にどれも美味しい。
ミシェルが笑みを見せながら料理を食べている意味がよくわかる。
それから俺と神楽との会話が無いまま食事が終わった。ミシェルは沢山食べ過ぎたせいか畳みの上で寝そべっている。
さて、飯は食べ終えたんだ。そろそろ本題に入るとするか。丁度神楽も食器を全て洗い終えたみたいだ、まくり上げていた袖口を戻しハンドタオルで手を拭きながら戻ってくる。
そして手を拭き終えたタオルを机の上に畳んでおくと、服のポケットから耳掻きを取り出した。
「ミシェルちゃん、耳掻きしよっか」
ミシェルにだけ向けられる微笑み、神楽はミシェルの側で正座をするとミシェルは首を傾げつつも神楽の膝枕に頭を乗せて横になる。
「みみかき?」
「そう、耳の中をお掃除するの。そのままの体勢で動いちゃだめよ?」
「う、うん!」
おいおい、俺との話よりミシェルの耳掻きか?全く、まぁ飯の後ぐらいゆっくりしたいのはわかるが時は一刻を争うんだぞ……多分。
俺の事など眼中に無いように神楽は耳掻きを始めようとする、膝枕

をされて横になっているミシェルはその初めての事に緊張して体を硬くしていた。
耳にそっと耳掻きの棒が入っていくと更にミシェルは緊張して体を硬くしていたが、耳の穴の中で耳掻きが動き始めるとその緊張が嘘のように解けていく。
強張っていた顔も段々と緩みはじめ、目をとろんとさせると小さく口を開けて気持ち良さそうな表情を浮かべている。
「痛くない？」
「うん……きもちぃ……ぁ……」
ミシェル、そんな表情で俺を見つめないでほしいんだが……見られてるこっちが何か恥かしくなってくる。
にしても、耳掻きが終わったら今度はこいつ何する気だ？俺に協力するんならさっさと本題の話をすればいいのに……。
「何？そんなに見つめて、貴方も耳掻きしてほしいの？」
俺の視線がどうも気になったのか、神楽が耳掻きをしながら俺の方に話しかけてくる。
「全ッ然、耳の中に爆弾入れられそうだし絶対嫌だ。それに俺はお前がミシェルに何かしないか監視してんだよ」
「あらそう、なら監視を続けてなさい」
な、なんでてめえから命令されなくちゃならねえんだぁ？……こいつ、協力するなら早く俺に協力しろよぉおおお……！！
「ったく、俺暇だから外行って来る。すぐに戻ると思うからミシェルよろしくな」
「あら、監視はどうしたの？」
「お前がしてろ、んで話があるなら俺を探せ、んじゃあばよ」
こんな胸糞悪い時に話なんて出来るか、外の空気でも吸って落ち着くのが一番だ、そう、冷静になるんだ俺、この女は使えるんだ、散々利用したら後はもう用済みだ。
……玄関にちゃんと靴置いて有るんだな、俺は自分の靴を履くといつもよりゆっくりとした足並みで森の中を歩いていく。

考えてみれば神楽も同じかもしれない、奴も俺が使える存在と知っている、なんたって俺程不思議で謎の存在なんてＥＲＲＯＲや神ぐらいだからな、そんな存在が身近にいるんだ、俺に近づいてきてもおかしくない。

……ミシェルも同等の存在だが、恐らく奴はミシェルに手は出さないだろう。手を出すなら俺が寝ている内に何とでも出来るはずだ。

そもそも俺の身を自由にしているということは、奴が何も疚しい事はしていないという証拠だ。もし何か少しでもそんな事をしていれば俺が黙っちゃいない事ぐらい奴も知っているから――。

だー、せっかくこんな良い天気で良い空気が吸えてるってのに俺は何をごちゃごちゃと考えてるんだ、とりあえず俺もミシェルも無事！んで神は殺した！後は過去に帰るだけ！いたって簡単じゃないか。

俺は家から出た後一直線に森をある程度歩いていると急に道が開け、そこには長い石段を延々と伸びていた。どうやら神楽のいた家は丁度山の上にあるみたいだな、石段を降りていくとその山の麓に町があるのが見える、とりあえず俺はこの長い石段を下りてその町に行ってみることにした。

――「誰も……いない……？」

町に来る途中から段々とおかしいとは思っていた、人の姿も無ければ車も走っていない、それに音という音が一切聞こえない町。

聞こえるものと言えば僅かな小鳥の鳴き声と自分の足音程度だ。

人一人いない町なんてどう考えても不気味すぎる、俺は夢でも見せられているのか？

「現実よ、この町の人達は全員避難したからいないのよ」

俺の考えている事をずばり当てた神楽の声に俺は振り返ると、奴はいつのまにか俺の後ろに立っていた。

「お前いつのまに！？って、それよりミシェルはどうした」

「お昼寝中よ、邪魔しちゃ悪いでしょ？」

「監視しとけよ……まぁいい、これでやっと二人きりで話せるんだ

からな」
「あら、プロポーズでもしてくれるのかしら」
……いいや駄目だ、こいつのペースに巻き込まれるな。
俺は真剣な顔つきで神楽に見つめ続けると、神楽は目をきょとんとさせ首を傾げる。
「そんな怖い顔しないで、冗談よ？」
「もういい、お前から話さないなら俺がちゃっちゃと話しを進める。
俺が過去に戻るには二つのものが必要だ、一つは強大な魔力、一つは過去へ帰る方法。この二つだ」
「貴方はその内の一つも持ってないの？」
「……神との戦いで魔力を失った、帰る方法は正直よくわからん」
ここでミシェルが側にいるから魔法が使えない、とでも言えば神楽がミシェルを殺しかねない。例え俺が魔法を使えなくても大量のレジスタルがあれば問題無いし、帰る方法を探す手段なら俺に考えがある。
「それで、失った魔力と帰る方法はどうするの？」
「魔力は俺が神を殺した時に出てきたレジスタルがあるだろ、アレを上手く利用する。そしてもう一つの方法についてだが、ＳＶに行けば何かわかるかもしれないな」
「どうして？」
「ＳＶは他世界から来た魔力を持つ連中だ、過去に行ける魔法に関しての情報を持っているかもしれないからな」
「へぇ、初耳ね……まさかそんな身近に他世界の人間がいるなんて思いもしなかったわ」
さてと、これで神楽には俺がこれから何をするのかが理解できたはず。
俺は教えた、後はお前にも教えてもらうぞ、お前の目的を……。
「神楽、お前は俺を嫌っていたはずだ。だが何故今になって俺に協力すると言いだしたんだ、答えろ」
素直に答えてくれる奴じゃない、だがこういう奴には単刀直入に聞

いた方が早い。
というより俺は回りくどく聞くのは苦手な方だからな。まぁ神楽は俺の思ったとおり、少し空を見上げたまま何も話そうとしない。
「言えないのなら俺はお前に協力されたくない、レジスタルを返せ。拒否するなら力ずくで返してもらう事になるけどな」
俺の挑発的な言葉を聞けばこいつも本音を話すんじゃないのだろうか、どうせ表面だけ俺に協力するだけだったと思うし。
「……甲斐斗、貴方には過去に帰ってもらわないと困るのよ」
心地よい風と共に神楽の小さな声が俺の耳に入ってきた、先程までの威勢と態度は何処にいった……？
それから神楽は話し始めた、悲しげな表情を浮かべながら淡々と……。
「神の力によりＮＦの主力基地は全て壊滅したの、知ってるわよね。これでもうＮＦの人達が避難する場所は何処にも無いのよ、でもこの町の人達は避難した、何処にだと思う？」
その質問に俺は答えなかった、答えられる雰囲気ではないというか、こんな晴天の下で話しあっているにも関わらず、俺の周に漂う空気の重みは尋常じゃない。
「答えは海底よ。ＮＦが地下都市を作っていた事は貴方も知ってるでしょ？ＮＦは神との戦いに負けた百年前から建設していたのよ、遥か海底の奥底に作る人類最後の逃げ場をね」
そこにＮＦの民間人は今避難させられているというのか？って事は、つまりＮＦは……。
「諦めたのよ。ＮＦは……この世界を」
ＮＦが、諦める？この世界を、人類を、全てを？……傑作だな、笑える。
だが俺の顔に笑みなんてものはない、真剣な眼で俺と神楽は互いに見詰め合っていた。
「戦力の激減したＮＦは恐らく神の力を利用しようと考えてるでしょうね、だから貴方が神を倒した後にすぐ現れ神のレジスタルを奪

おうとした」
なるほどな、むしろ神が倒された方がＮＦにとっては好都合だったのかもしれない。
利用できない神なんてただ邪魔でしかないからな。
「そしてそれは私に阻止されたの、だからＮＦは最後の手段に出るわね」
最後の手段？海底に逃げる事が最後の手段じゃないのか？
「核兵器を使用しＥＲＲＯＲと最後の決着をつける気よ……笑えるわよね。兵器を排除し平和な世界を目指すはずのＮＦが、この世界を跡形も無く消す程の核を保有してるなんて」
俺は元々ＮＦがそんな平和集団だと感じた事は一秒も無いが、核兵器を使う状況に立たされているという事は本格的にこの世界は終わりを迎えそうだ――。
その時、俺は漸く神楽の目的に気付かされた、神楽が神から出たレジスタルをＮＦに渡さなかった理由は、つまり――。
「神楽、お前まさか……」
俺に促されるように神楽は溜め息を吐くように煙草の煙を吹くと、俺から目をそらし空を見上げて口を開いた。
「私は諦めたのよ……この世界を……」
……綺麗な青空だ、神楽につられて俺も空を見上げてみたが、こんなにも綺麗な空や景色が広がっている。
そんな景色を目に焼き付けるように神楽はじっと見上げたまま視線を反らさない、最後の見納めとでもいうのか？
こいつが、神楽が、世界を諦める。という事はつまり、こいつは自分がこの先生きていく事も諦めているということだが……信じられない。
「世界を、あの頃の日常に戻すには貴方が過去に帰ってもらわないと困るの、そしてこの世界を――」
「救えって言うのか、この俺に」
たしかに、俺が百年前に帰る事が出来ればこの世界だけじゃなく『

ＥＲＲＯＲ』という化物を何とかできるかもしれない。そうすればこの世界も他の世界も皆救われる、だが……。

「嫌でも救わなくちゃならなくなるわよ、貴方だって過去に戻ったらＥＲＲＯＲをどうにかするでしょ？しないとこの世界みたいに取り返しのつかない事になるんだから」

それで人頼みか？ＥＲＲＯＲをどうにかするって、俺に全世界を救えって言うのか？

いや、こいつは全ての世界にＥＲＲＯＲがいるのは知らないと思うが、ＥＲＲＯＲを消すのは絶対に簡単な事じゃない。

「貴方が無事過去に帰れば未来を変えられる、だから私は貴方が無事帰れるように手助けするの。これが私の目的よ」

「じゃあ、お前はもうこの世界に未練は無いって事か？赤城達は今もＥＲＲＯＲと戦っているんだぞ……！お前はこの世界の為に何もしないのか！？」

「してるじゃない、貴方を過去に帰せば未来であるこの世界は救われる。最も、貴方が過去に戻りＥＲＲＯＲに勝てばの話だけどね」

やれやれ、未来にいても過去にいても、結局俺には戦いしかないのか。

過去に戻れば神との戦いにまた巻きこまれ、更には未知の化物とも戦わなくちゃならねえのか？

いや、百年前に戻ればＥＲＲＯＲを根を潰す事が出来るかもしれない。……ＥＲＲＯＲ、俺は今まで数多くの世界を見てきた、そしてＥＲＲＯＲと似た化物は飽きる程見てきた。

だがこの化物だけは唯一次元の違う世界にも現れている、しかもそれが世界全体に。

更には全ての世界が全てＥＲＲＯＲに占領され、人間の生き残っている世界はこの世界だけだぁ？

そんな話俺は今でも信じられないし、信じていない。だがＥＲＲＯＲがそれ程まで厄介な化物だという事は嫌でもわかる。

「甲斐斗」

久しぶりに神楽の口から聞いたな、俺の名前。
「もうじき人類の命運を懸けた最終戦争が始まる。貴方にもその戦いに参加してほしいの」
「ん？俺がその戦いに参加しなくても過去に帰ればいいんじゃないのか？」
それにその戦いで俺が死ぬ危険があるかもしれないんだぞ、まあ死ぬ気は微塵も無いが。
「貴方の言うレジスタルが必要なの、神から取れた分もあるから大分足りてきたんだけど、もっと必要なのよね。それを破壊された機体の残骸や機体に擬態したＥＲＲＯＲから取ってきてもらいたいのよ」
おいおい、あれだけ大量のレジスタルを取っておいてまだ必要だと……？
「その大量のレジスタル、俺が過去に帰る為だけに使うもんじゃなさそうだが……まぁいい。俺もＳＶに行って情報収集がしたかったし、それついでに戦いに行ってやるよ」
ふう、神楽の本音も少しは聞けたことだし俺も何か安心できた。
にしてもついに始まるか、人類とＥＲＲＯＲの最後の戦争が。
ＮＦ、ＢＮ、ＳＶ……ＥＲＲＯＲとの戦いに、勝てるのだろうか？
まぁ俺には関係の無い話だな、俺は過去に帰る、それだけを考えればいい、それだけを――。

――「やっほ～」
この能天気な声を聞くまで俺は忘れていた、そして今思い出した。
この世界はそんな単純なものだけじゃない、醜く濁り、捻れ蠢いている、何が起こるかわかったもんじゃない。
敵はＥＲＲＯＲだけか？違う、人間同士の争いはそう簡単に終わらない、終われない……！
「あれれ～？甲斐斗私に内緒で他の女とデートしてたのー？」
「そんな訳無えだろ……アビアッ！」

桃色の髪を靡かせ俺と神楽との間に舞い降りる一人の女、それだけじゃない。アビアの登場と共に上空から龍に跨ったロアまで降りてきた。
「お久しぶりです！甲斐斗さん！」
「ロア！？久しぶりだが、どうしてお前がここにいる、それにどうやって俺の場所を……」
ふと俺の視界に入った神楽、きょとんとした表情で目の前に立っている龍を見つめている。
「驚くのも無理は無いな、ちなみにこいつ等は俺達の敵じゃないから変な事はするなよ」
「何もしないわよ、それよりこの龍の血を採りたいんだけどいいかしら？」
さすが神楽、目の前にこんなおっかない化物がいるっていうのに平然としていられる。
というかなんで血を採るんだよ、十分変な事じゃないか。
「甲斐斗ー！神との戦いに勝ったよね～！すごーい！！」
「お、おい！抱きつくな！離れろ！」
既に俺が神に勝った事を知っているのか、全く、こんな所に来たって事はそんなに俺と会いたかったのか？
とりあえず抱きつくアビアを俺から離すと、アビアはニコニコと笑みを見せながら俺の方を見てくる。
すると突然何かを思い出したかのように手を叩き口を開いた。
「あ、そうだった。テトから伝言預かってきたよ～」
なっ、あの男から伝言だと？聞いてやろうじゃねえか、俺が神に勝った事で奴も悔しがってるんじゃないのか？奴の顔が見てみたいものだ。
「Ｄｅｌｔａプロファイル」
「……Ｄｅｌｔａプロファイル？」
その言葉、たしか神も言っていたな。だが今になってはどうでもいい言葉だ、神が消えた今、何の意味も無い。

「それは第三の選択。君は近いうち知る事になる……そしてそれを知り絶望する君の表情を見に行くから待っててね。だーってさ！伝言おーわり！」

そう言ってまた俺に抱き付こうとするアビアを必死に突き放す俺。

第三の選択？俺が絶望？あの野郎、何を企んでいやがるか知らねえが、過去に帰る前に一番殺しておきたい奴だな。

とりあえず聞く事も聞いたし、ミシェルの元に帰るか、一人で寝かせていたら不安でしょうがない。

「神楽、とりあえずミシェルの所に戻ろう。そこで俺達はこれからの事についてもっと話し合わないとな」

「こ、これからの事って。甲斐斗、やっぱりあの女と……」

「だから違うっての！お前もロアもとりあえず来い！詳しい事情はそこで全て話す！」

先程までの重い空気はそこには無い、俺も少しは気が晴れたが、やはりあの男、テトの言葉がどうも気に掛かる。っま、何れ分かる事らしいし、自分から無理に頭突っ込んで知る必要も無いだろ。

……人類の存亡を懸けた最終戦争、それに俺は生き残り、過去に帰る。

過去に帰れば神楽の言っていた通り、何とでも未来を変える事が出来る……まぁそれは俺が変えたらの話しだがな。

赤城達は未来を変える為に行動し、俺達は過去を変える為に行動する、面白いな。

例え目的が違おうとも望みは一緒だ、それに俺は赤城との約束を忘れたわけじゃない。

それまで何としてでも生き残れよ、赤城。

第８８話　経緯、理屈（前書き）

リュウさんすいません今日メッセージを読ませていただきました、本当に申し訳ありません。
「最強」を決める、という言葉にとても興味がありましたがメッセージが一ヶ月前と気づき残念です、申し訳ありません。
何やら他の作者が考えた最強の人物同士が戦う作品みたいですね、とても面白そうで興味がわきました、まるで昔の自分を見ているようです。
メッセージの方ありがとうございました、また何かありましたらこれからもよろしくお願いします。

第８８話　経緯、理屈

――ＢＮの基地から無事脱出をした赤城達を乗せた戦艦は今、ＢＮの本部に到着していた。
ＥＤＰ、ＥＲＲＯＲとの決着をつける為に本部の基地には数多くの兵士達が集結している。
各ＢＮとＳＶの基地から集められた兵士達の数、それにこの本部全体の雰囲気に部屋の窓から外の様子を眺めていた由梨音は驚きを隠せずにいた。
「す、すごいですね。各基地からＢＮの本部に艦隊が集結してますよ！」
そんな由梨音を尻目に赤城は椅子に座りながらコーヒーを飲んで寛いでいた。
「そうだろうな、これからＥＤＰを行なうんだ。それなりの戦力は整えておかなければならない」
戦力を整える、だがＥＤＰを行なう場所は一箇所だけではない、四箇所もある。それがどれだけ絶望的な存在なのか、一番ＮＦが知っていた。
本部が消えたＮＦ、僅かに残っていた基地の兵士達はＢＮの呼びかけに応じこのＥＤＰに参加する事になっているが、そこに騎佐久達の姿は無い。
「赤城少佐！私達はいつ現地に出発するんですか！？」
「明日だが。それよりお前は作戦内容をちゃんと読んだのか？時間がある内に何度も読み返しておけ」
「はーい、でも私ちゃんと読みましたよ！ＥＲＲＯＲが地下から地上に出てくる穴を逆に利用してＥＲＲＯＲの巣の中に入るんですよね」
「半分正解だ、我々は地上からＢＮの開発したレーザー兵器によりＥＲＲＯＲのいる地下にまで穴を開けた後その穴に入り内部に侵入、

後はＥＬＢ（電子光化爆弾）を設置した後脱出。幸いにも今回はＧＡＴＥのような厄介な物は無いからな、場所さえわかればこちらのものだ」

赤城はそう言ってまた静かにコーヒーを飲もうとしたが、由梨音の顔から先程までの明るさが消え、静かにソファに座ると口を開いた。

「赤城少佐……直接地下に行くって。とっても危険な任務になりますよね、もしかしたら、地上に帰ってこれないかもしれませんよね……」

ＥＲＲＯＲの巣は地上から約数千メートルも離れた地下にある、ＢＮのレーザー兵器を使えば巣の近くまでは穴を開ける事が出来るが、その後はＥＲＲＯＲが掘った穴を使用し最深部にまで向かう必要があった。

ＥＬＢを設置した後は地上に帰還するのだが、脱出に関しての詳しい内容は知らされていない。

「……安心しろ、地下に向かうのは精鋭部隊だけだ。私達は地下には行かず地上にある入口を防衛するのが役目になる」

少しでも由梨音を安心させようとする赤城、しかし由梨音はそれを聞いてもなお暗い表情を浮かべていた。

「胸騒ぎがするんです……緊張が解けなくて、全然眠れなくて……」

「これから最後の決戦を行なわれるんだ、皆不安はある。私も不安だ、だがこの決戦に勝たなければ、今度こそ人類は……」

消える、この世界の地上から、何十億といる人間が殺され、消える。

「赤城少佐！」

ソファに座っていた由梨音が突然元気の良い声を上げ立ち上がると、椅子に座っていた赤城の眼の前にまで歩み寄る。

「な、何だ？」

「この決戦が終わって人類がＥＲＲＯＲに勝利した後、赤城少佐は何をしますか！？」

戦争が終わった後、そんな事を考えていたのはずっと前の事。

未来は変わり、多くの仲間を親友を失った今、戦争が終わった後の

ことなど想像もしていなかった。
「何を……？そうだな、この決戦が終わった後、『これから何をするか』を考えるさ。勿論由梨音にコーヒーを入れてもらいながらゆっくりとな」
平和な未来を想像した。だから今、その平和な未来を作る為に動き出さなければならない。
例え外に曇天が広がり、血の雨が降り注ぐとしても。

――赤城達のいるＢＮの本部にはＳＶの兵士達も待機していたが、エコと葵はその基地にある病室で一緒に昼食を食べていた。
「やっぱ栄養バランスしっかり管理されてて美味いな～」
自分の分の昼食を準備してもらい美味しそうに食べていく葵の側で、エコは食事に手をつけず部屋の窓から見える外の景色を見つめている。
それに気付いた葵は手に持っていたスプーンを食べかけの料理が置いてある食器の上に置くと、外を見つめたまま動かないエコの肩に手をかけ口を開いた。
「エコ、これめちゃ美味いぞ？早く食べてみろって」
「……うん」
笑顔の葵に対してエコは無表情のまま振り向き、小さく頷いた後すぐに料理を食べようとスプーンに手を伸ばすが、その手を葵が掴むと動揺するエコに対し呟いた。
「ごめん、やっぱその前に話してほしいんだ。今の気持ちを……」
死んだはずのエコは生き返り、共に喜びを分かち合った。しかしその後のエコは全く笑みを見せず、何かを考えるようにじっと一点を見つめたまま動こうとしない。
そして、そんな自分を見ている葵は必ず声をかけてくれるとエコは思っていた。
「何でも言ってくれ、俺達はパートナーだろ？」
そう言ってエコの小さな右手を握り締める葵、温かく力強いその手

に、エコは葵の方を向くと小さな笑みを見せた。
「うん、ありがとう……」
もう二度とこの温かさを失いたくない、言葉は無くとも互いに握られる手と手で二人は確かめあう。
「葵……私達の信じてた神は、消えたよね……」
強大な力を持つＥＲＲＯＲ、そのＥＲＲＯＲと唯一対等で戦えるはずの神が消えた。
その信じていた神も人類に牙を剥き、この世界の人類の数は確実に減りつつある。
「この世界が、本当に、本当に最後の世界なのかな？……私は信じたい、まだＥＲＲＯＲのいない平和な世界が、まだ何処かにあるんじゃないのかな……って」
アルトニア・エデンでの調査によれば、この世界以外は全てＥＲＲＯＲの手に落ちていた。
ＥＲＲＯＲが唯一いなかった最後の平和な世界、希望を胸にＳＶが降り立った世界だが、既にこの世界もＥＲＲＯＲの侵食が始まっていた。
希望が消え、仲間が消え、そして人類最後の世界が今、消えようとしている。
「私行きたいよ、平和な世界。こんな世界、もう嫌……」
今にも泣き出しそうな表情をするエコ、そんなエコを見て葵は握られている手を力強く握り返した。
その反応にエコは葵の方に顔を向けると、葵はじっとエコを見つめたまま口を開いた。
「俺も嫌さ……でもな、今ここで逃げたら今まで戦ってきた仲間たちの思いや、命が……全て無駄になる、それはもっと嫌だ」
凛々しく、真っ直ぐな葵の瞳、言葉……それを聞いていたエコは葵と見詰め合ったまま視線を逸らすことは無い。
「だから俺はエコと一緒にこの世界を守りたい。神なんかに頼らず、俺達の力で変えていこう。平和な世界が無いならここに作ればいい

！そしてこの世界を、人類唯一の平和な世界にしてやろうじゃないか」

葵は真剣な表情を浮かべていたが、その表情がいつもの明るく元気な笑みに変わるとエコが持とうとしていたスプーンを手に取りスープを掬うとそれをエコの口元に近づける。

「その為にはしっかり飯食わないと駄目なんだぞ？ほら、あーん」

いつもなら強引にスプーンを奪い取り一人淡々と食事をするだろう。でも今、葵の眼の前にいるエコは違う。堪えていた涙を零れ落としながら口を開け、照れながらも葵にスープを飲ませてもらっていた。それはまるで子供にご飯を食べさせてあげる母親のように。

――BNがEDPに向け刻々と準備を進めている中、EDPに参加してない騎佐久達の乗る空中戦艦アルカンシェルは今、ERROの巨大な巣があるとされる場所の上空に来ていた。

司令室の最上部に位置する場所、その席にはNFの騎佐久が腰を掛け地上の様子を見ていた。

「神が死んだのは惜しいが、遺産は残っている。後でゆっくりと探せばいい」

騎佐久の見渡す地上には無数の穴が空いており、その穴からは次々にERROが這い出ている。

まるで蟻が巣から出てくるかの如く、先程まで広がっていた地上には既にもう赤く蠢くERROで溢れかえっていた。

「だから今は……この世界の『ERRO』を削除する」

それは初めから決められていた選択肢、迷いも無ければ躊躇いも無い、全ては人類の為、人類だけの……。

「収縮型光学電子パルス砲、発射」

騎佐久の指示の後、空母アルカンティスからは地上に向けて主砲が放たれた。

地上に群がるERRO達は一瞬で掻き消されていき、直撃した地面には巨大な穴を開けていく。

「ＥＲＲＯＲ本拠地の場所がわかった今。人類に敗北は無い」
主砲が撃ち終わり、地面には巨大な穴を開けたが、まだＥＲＲＯＲの巣には届いていなかった。
開けられた巨大な穴から次々に出てくる無数のＥＲＲＯＲ、それを見て騎佐久は納得したように微笑むと、机の上に付けられているスイッチの安全装置を外し、静かに指を乗せた。
「武蔵、お前が成し遂げられなかった使命。俺がこの手で……成し遂げる！」
スイッチの上に乗せていた指に力を込めると、それは簡単に始動した。
アルカンシェルにある一つの砲門が開くと、一発のミサイルが音速を突き破る程の速さで地上へ発射された。
ミサイルは開けられた穴の中に入っていき、穴から溢れ出てくるＥＲＲＯＲを貫きながら最深部へと突き進んでいく、そして上空で待機していたアルカンシェルはミサイルを発射後出力を最大まで高め全速力でその場から離れていた。
地下深くにまで侵入したミサイル、大きな空洞の広がる空間にまで落ちた所で力を失い、その場に停止していた。それを見ていたＰｅｒｓｏｎ態はニタニタを笑いながら首を傾げると、落ちてきたミサイルの元へ一斉に集まり始めた。
Ｐｅｒｓｏｎ態の他にもＨｕｍａｎ態、Ｂｅａｓｔ態、Ｗｏｒｍ態……それぞれのＥＲＲＯＲが落ちてきたミサイルを見て囲むように並び、じっと落ちてきたミサイルの方を向いている。
刻々と時が迫る、ＥＲＲＯＲ達は声も上げず動きもしない、ただ静かに動くことなく固まっていた。
その時、ミサイルの周りを囲んでいた一匹のＰｅｒｓｏｎ態の顔に異変が起きた。
口だけの顔、いや。頭全体に一本の亀裂の様なものが次々に現れ始めると、全ての亀裂が開き、顔全体に無数の巨大な目玉が出始める。
一匹だけではない、その場にいたＰｅｒｓｏｎ態の顔には無数の目

玉が次々に現れ始め、最初はキョロキョロと動くと、顔中にある全ての眼がミサイルの方へと向けられる。
Ｐｅｒｓｏｎ態にいつもの笑みは無い、歯茎を露出させ歯を食い縛り、血走った目玉が大きく見開き一点だけをじっと見つめている。
まるでその光景を目に焼き付けるかの如く。
そしてその瞬間、ミサイルから眩い閃光が放たれると強烈な熱線と共にその場にいたＥＲＲＯＲ達を巨大な光が飲み込み、その場にある全てのものを掻き消していった。

――地下深くに向けて放たれたミサイルは爆発した。太陽の様な強烈な閃光を放ち、熱線と爆風はその場にものを掻き消し、吹き飛ばしていく。
その爆発の衝撃波は遥か遠くまで避難していたアルカンシェルにまで襲い掛かる、あの巨大な艦が上空で大きく揺れ、更に熱線が艦の装甲を溶かしていく。
想像を遥かに上回る絶大な破壊力、その力に騎佐久は終始笑みを見せていた。
「出来る。この『核』の力があれば、ＥＲＲＯＲが消えるのも時間の問題だ」
「しかし、これであの一帯は数百年草木の生えない死の地帯と化した、そうじゃろ？」
騎佐久の後ろから歩み寄る黒髪の若い女性、それは北部最強の肩書きを持つ者だった。
「菊、俺達は本来の使い道、人類の為に核兵器を使用したんだ、何も躊躇う事は無い」
「わかっておる……しかし、後三つ残る箇所にも核兵器を？」
「当然だ、何千何万という人間を失い、数多の弾薬を使用しなくても。たった一発のミサイルで事無きを得る。核兵器こそ人類のみ与えられた最強の力なのだから」
たしかに、ここに来るまでに多少の戦力を消耗したがそれはＥＤＰ

の時に揃えた戦力の半分以下だけだった。
多くの兵や弾を失わずに勝利する、その勝利を手にする為アルカンシェルは既に別の箇所にあるＥＲＲＯＲの本拠地へと向かっていた。
「……心得た。ここにいる兵士達はお主を信じ共に歩むと、そう決めとるからな」
方法や手段は違っても別としても間違っていようとも、全ては同じ目的の為に人類の勝利の為に、全世界が動き始めている。
ＥＲＲＯＲの本拠地とされる箇所は残り三つ、それはＥＤＰの準備を進めていたＢＮの本拠地にも既に情報が行き渡っていた……。
ＢＮの本部にいる紳達、神楽と共にいる甲斐斗達、そしてＮＦの東部軍事基地を拠点としている者に。
「所で、先程からカイトの姿が見えんのじゃが」
「アステルのことかい？彼なら俺の指示で単独行動してもらってるよ」
「何ぃ？こんな大事な時に何故じゃ」
「大事な時だからこそ行動してもらってるのさ、どうやらこの世界の敵はＥＲＲＯＲだけじゃないみたいだからね、そっちの処理を任せてる」
「まさかお主、あの機体を使わせるつもりか。あれはまだ未完成のはず、危険すぎる……」
「危険は彼も承知の上さ。それにあの機体の戦闘データをとりたいからね、神楽が発明したあの力を……」
――「どうやら……ＮＦが核兵器に手を出したみたいだね」
薄暗い一室で椅子に座りモニターを見つめるテトがそこにはいた。
全ての世界の情報をたった一人で観察し、楽しむ。それがこの世界での楽しみ方。
テトは後ろに振り返りベットの上に座っているフィリオに目を向けるが、フィリオは俯いたまま一人で自分の体を抱き締めテトと目を合わせない。

「ん、どこか体調でも悪いのかい？」
そう言ってテトは手を向けると、フィリオの意思とは無関係に体が勝手に動き始める。
「うっ、ぁ……」
強制的に両手を広げさせられ、顔を上げるフィリオ、その目には微かに涙で潤んでいた。
「お願いします……やめて、くださぃ……」
掠れたような声で助けを求めるフィリオに、テトは笑みを見せると席を立ち彼女の元へ歩み寄る。
テトの力により体の動かせないフィリオは視線さえ動かす事が出来ず、ただじっとテトを見つめさせられていた。
「どうしてこんな、こんな事を――っ！？」
喋ろうとするフィリオの口を塞ぐようにテトは自分の唇をフィリオの唇と重ねてくる、フィリオは目を瞑り口付けが終わるのを待ち続ける。
そしてようやくフィリオから口を離すと、テトは笑みを浮かべながらフィリオの耳元でゆっくりと囁いた。
「君が求めているからさ」
「なっ、何をそんな……！」
慌ててテトを突き放し距離を取るフィリオ、その時自分が自由に動けるようになっていた事に初めて気付いた。
「キスをした時僕は君の拘束を解いていた。本当に嫌なら僕から逃げてたと思うけど？」
「そ、それは気付かなかっただけです！」
「そうかい、でも……それを誰が信じてくれるのかな？」
必死に反論するフィリオをテトは面白そうに見つめる、するとテトの後ろにある装置から突如警報が鳴り響いた。
すぐに振り向き装置を弄り始めるテト、その装置のモニターには砂塵を上げながら一直線にこの東部軍事基地に向かってくるアストロス・アギトの姿があった。

「僕の居場所がよく分かったね……。おめでとうフィリオ、君の騎士（ナイト）が助けに来てくれたみたいだよ」
「愁が……ここに……！？」
愁の名がフィリオに一筋の希望の光を齎す、今までじっと耐えてこられたのは、きっと愁達が助けに来てくれると信じていたからだ。
やっと終わる……この長く続いた苦しみも、今日で……。笑みが零れるフィリオだが、それはテトも同じだった。
「ここまで自分の思い通りに事が進むなんて本当に面白いね。さてと……後はフィリオ、君の結末を見るだけさ」
今までもそうしてきた様に、今回も実行する、そうして自分の考えが正しいという事を立証してきた。
「結末を、見る……？」
怯えるフィリオを余所にテトは机の引き出しを開けて中から二つの手錠を取り出す。
画面には既に基地の手前まで来ているアギトが映し出されている、それでも焦る様子は一切無いテトは、フィリオの目を見つめて口を開いた。
「そう、愚かな希望に縋る者の……最期をね」
その瞬間、今までに見せたことの無い笑みにテトの表情は変わっていた。
見納めになると思っている、もうこの世界はＥＲＲＯＲの手に落ちるとテトは確信しているから。
そして小さな期待もしていた、『奇跡』というものが、本当に起こるものなのかと――――。

第89話　普通、約束

――とりあえず町で会話をしていた俺達4人と龍一匹はミシェルが昼寝をしている家へと戻り寛いでいた。
そこで神楽から知らされるNFの核兵器使用の話、神楽の元に来た情報によるとNFの使用した核兵器でERROの巣とされる箇所が完全に破壊されたみたいだ。
だったらもうそれで全部終わらしてほしいんだが、そういう訳にもいかないらしい、なんでだ?
「貴方が想像してる以上にあの核兵器は特殊で強力なの、広範囲に渡る放射能により辺りは放射性降下物で埋め尽くされて二度と人間が立ちいれられなくなるんだから、ERROより先に人類が滅ぶわよ?」
「んでもよ、ERROの巣の位置がわかったんだろ?そこだけにピンポイントで核兵器使用すれば大丈夫じゃないのか?」
俺の質問に答えてくれると思いきや、神楽は目を瞑りため息を吐くと一人部屋から出て行く。
「実際に見せてあげた方が早そうね、ついてきなさい」
見た方が早い、って事で俺は言われるままに神楽の後をついていく、ふと後ろを振り返れば満面の笑みでアビアがついてきていた。
「……お前も来るか?」
「行く~」
まぁ聞かずともこいつなら勝手についてきただろう、神楽もアビアを気にせず家の中を歩いていくし。
しかし俺達を一体どこに連れて行く気だ?もしかして床下に秘密基地があるとか?
まさかな、幾らなんでもそれは無いか。
……そして、俺達は先ほどいた部屋の二つ隣の部屋に連れてこられると、神楽は何かのスイッチのような物を押すと壁が開き、薄暗い階

段が現れた、んで俺達は長い階段を下りて……秘密基地についたわけだ。
「やっぱりお前はこういう所に住んでいたのか！」
俺の言葉を普通に無視して神楽は部屋の灯りを付けると、部屋の片隅に置いてある装置の電源を入れにかかった。
まぁ秘密基地と言っても俺達が来たのは先ほどいた居間とほぼ同じ大きさの部屋がそこに広がっているだけだが。
「無視かよ……まぁいい、それじゃ早速見せてもらおうか。その核兵器の力とやらを」
俺の言葉と共に準備が整ったらしく、部屋の壁に掛けられている巨大なモニターにある映像が流された。
そこには一つの大きなクレーターが現れた、地面を大きく抉り、灰が周囲を漂っている。
「この映像は衛星から撮ったものよ。よく見なさい、灰が急速な勢いで回りに広がってるでしょ」
神楽の言う通り、まるで増殖していくかのように灰が舞い上がり、拡散していく様子がわかる。
「神楽、これはいつまで広がり続けるんだ？何か勢いが増してるようにも俺には見えるんだが」
「そうね、後６時間もすれば収まるんじゃない。その時は私達のいるここも死の灰で消えるでしょうけど」
……６時間？俺はもう一度クレーターの映し出されている映像に目をやると、真っ先に知らなくてはならない事を聞いた。
「神楽……今、俺達はどこにいるんだ……」
「ここよ」
映像が切り替わり、クレーターを中心とした巨大な地図が映し出される。
その図の中で点滅する赤い点を指差す神楽、今いる場所と核兵器が落とされた場所との距離を見て俺は愕然とした。
言葉が出ない俺を見て神楽は歩み寄ってくる、こいつは、この事実

を知りながら動揺しなかったのか……？
「これでわかってくれたかしら、残りのＥＲＲＯＲの巣に全てあの核兵器を落とされたら、この世界がどうなるのかが」
「ああ、わかった……。だがどうする、この図によりゃあ残り６時間で俺達のいる場所も灰に飲み込まれて使えなくなるんだろ？過去に帰る為の準備はどこでするんだ……？」
「それなら心配いらないわよ、ここじゃなくてもっと良い所を知ってるわ」
さすが神楽、準備は万端らしいな。やはりこの女と協力するのは正解だった。
「既に知ってるとはさすがだな、それで場所はどこなんだ？」
「東部軍事基地」
なっ、東部軍事基地？あそこは既に廃墟同然の場所になってたはずだ、そこで計画を進める気か……？
「心配ないわよ、あの基地にはＥＲＲＯＲの反応も確認されていないし今は無人の基地なの」
「そりゃ良い、さっさとそこに行こうぜ」
「ええ、でもその前に聞いておきたい事があるの、彼女に――」
神楽はその言葉とともに睨むような視線で俺の後ろに立っているアビアに向けた、俺も少し振り返り横目でアビアの方を見たが、いつも通り能天気な態度をしている。
「貴方、どうしてこの男と行動してるの？」
神楽の疑問は俺も抱いている、たしかにアビアの目的が何なのかがよくわからない。
あのテトとか言う男と共に行動し、今度は俺と行動をしている。最初会った時は殺しに来たにも関わらず、俺が強いと知れば急に馴れ馴れしく付きまとってくる。
だが、こいつは俺が死に掛けた時に助けてくれた命の恩人でもある、悪い奴じゃないとは思っているが……。
「えー？アビアの勝手でしょ？」

「貴方みたいにいつもへらへら笑っている人って、必ず何か隠してるものなのよ」
まるでそんな奴を前に見てきたかのような神楽の台詞に俺は言葉が出なかった。そして黙ったままアビアの方に目を向けると、アビアは小さなため息を吐いた後ゆっくりと神楽の方に近づいていく。
「さあ話しなさい、貴方の真の目的を……」
そう言われて神楽の前で立ち止まったアビアは、いつもと変わらぬ笑みを見せながら口を開いた。
「貴方にはいないの？好きな人」
「なっ……」
アビアの意外な言葉に神楽は口を開け微かに反応すると、今度は逆にアビアから神楽に問いかけた。
「だってさー、隠すなって言うけど。好きな人の側にいたいって思うのはふつーでしょ？違う？」
首を傾げるアビアに、神楽は何も答えない。いや、答えられないのか？
恥ずかしい事を平然と言うこの女は、ただ単に天然か純粋か馬鹿のどれかなのだろう。
大体俺の事が好きって何だよ、何気に告白してるぞ。
「そうかもしれない、でも貴方はこの男の力に惚れてるだけよね。寂しい子……」
そう言った後神楽は地下室から地上に戻る階段を上がろうとする、もうこれ以上この場で会話はしなくていい、嫌な雰囲気が漂っている。
穏便に済ませる為にも俺も黙って地上へ戻ろうと一歩足を前に出した時、アビアが俺に寄り添ってくると、神楽に聞こえるような声で口を開いた。
「ふつーに好きな人と一緒にいたり、添い遂げる事ができないなんて。貴方の方が寂しい人だとアビアは思うけどねー」
……アビアの口から出た言葉に俺は一瞬戸惑った。どうしてそこま

で反論する、そしてなぜ今この場でそんな台詞を吐くんだ。
いや、前から空気読めないと思ってたよ、思ってたけどさ、どうして俺を巻き込む？
俺の思った通り階段を上ろうとしていた神楽の足はぴたりと止まった。あーまずい、絶対また何か言ってくるに違いない、頼むから俺を女同士の口喧嘩に巻き込むな。
「アビアの甲斐斗はとーっても強いの、だからずーっと一緒にいられるもんねー」
いつから俺はお前の物になったんだ。っと、言いたい所だが今はもうどうでもいい、お前は喋るな、これ以上この場の空気を重くしないでくれ。
こんな空気では今の神楽に俺は何も言えないし、黙って階段を上りたくても神楽がいて上れない。俺はどうすればいいんだ。
「甲斐斗、その子の監視……頼んだわよ」
「え？あ、ああ。わかった、アビアは俺が責任もって見とくよ」
神楽は止めていた足を踏み出し階段を上がっていく、どうやらこれ以上言い合っても無駄だと思ったのだろう。
しかし、あいつが不機嫌だと何するかわからないからな、それはアビアも同じかもしれんが……。
「アビア、あんまり神楽を怒らせるなよ」
「怒らせる？アビア怒らせるような事言ってた？」
「少なくとも神楽を怒らせるような事は言っていた。面倒ごとは好きじゃないんだ、もう言うな、わかったな？」
「は～い」
そんな笑顔で返事をするな、本当にわかっているのか心配だ。
ああ、心配事がまた一つ増えた。これから東部軍事基地に行かなくちゃいけないし、ＥＲＲＯＲとの決戦に行かなくちゃならない。
ＮＦは本当に全てのＥＲＲＯＲの巣に核兵器を落とす気なのか？奴らだって知っているはずだ、核兵器を使っていけばどうなるのかが。
こりゃ核兵器を使わせる前に事を急いだ方がよさそうだ、早くＢＮ

やＳＶ、赤城達と合流しないとな……。
俺達は先程ミシェルといた部屋へと戻ると、そこには既に目を覚ましたミシェルがロアと遊んでいた。
「甲斐斗さん、どこに行ってたんですか？」
「秘密基地だ。それと俺達はここから東部軍事基地に移動する事になったからな」
「えっ、出発はいつに……？」
「今すぐにでも行きたい所だが神楽がいないな……」
やれやれ、あいつはどこにいるんだ？もしかして既にここから離れる準備をしているんじゃないのだろうか。
「ああ、神楽さんなら先程花を見に行くと言って外に行かれましたよ」
花を見に外に？あいつ、こんな非常事態に……。
「わかった、もう少しミシェルを頼んだぞ」
すぐに玄関に向かった俺は靴を履き家の外に出た、だが花を見に行くと言っただけで場所なんてわからない。
わからないはずだった……でも、俺は気づけば来ていた、山奥で花畑の広がる場所に。
そんな都合良く見つけられるなんて俺は思ってなかったし、場所など知るはずもない。
体が勝手に動いたというか、森の中を歩いているとこの花畑に来ていた。
そしてそこに奴はいた、辺り一面に広がる花畑の中に、花で作られた首飾りを手に持つ神楽が。
「あら、どうして貴方がここに？」
俺がここに来た事についてはさほど驚いている様子は無いみたいだ、少し横目で俺を見た後すぐにまた視線を花の方に戻した。
「それは俺の台詞だ、東部に向かうんだろ？こんな所で何してる」
それにしても意外だな、こいつがこんな所に来るなんて。しかも花で何か作ってやがる。

「花、見てたのよ」
そう言うと神楽は俺から目を逸らし自分を中心に広がる花畑をじっと見つめなおす。
風が吹き、木々や花々が囁く様に揺れると同時に神楽の髪も靡いていく。
綺麗な場所だ、この世界にもまだこんな綺麗な景色を見れる所があるなんてな。
……でも、その景色を見ている神楽は、何であんな寂しそうな表情をしているんだ。この景色が見納めになるからか？
「後数時間で消えてしまう……この地も、この花も、この空も、すべて……」
神楽にしては意外な事を言ってると思ったがこいつも人間だ、思い入れのある場所だってある。楽しんで笑ったり、悲しくて泣いたり、人を愛する事だってできる。
だから今、こうして神楽はここにいる。あんな寂しそうな表情、俺の前に見せたこと無いくせに何故今になって――。
「甲斐斗、貴方は……人を愛したこと、ある……？」
「はっ――？」
人を、愛したこと？なぜそれを今俺に聞く、何故この場で。
ここは神楽にとって思い出の場所、それには理由があるはず、となると思い当る理由は一つしかない。
――伊達武蔵。奴だ、奴しかいない。
武蔵が死んだ後に確信していた、赤城、そして神楽は武蔵の事を愛していたと。
いや、今でも愛している。それに僅かな可能性も生まれた、武蔵の乗る大和の存在。
ＥＲＲＯＲと共に行動する大和は未だに謎だ、謎だが、あの機体に乗っているのがＥＲＲＯＲとは思えないし、赤城と神楽は思いたくないだろう。
「わかんねーよ。俺は愛とか無縁だし……」

人の愛し方なんて色々な形や種類がある、愛する事もそうだが愛された事すら俺はわからない。
何をされれば愛された事になり、何をすれば人を愛しているという事になるんだ？
キスをすればいいのか？プレゼントを上げればいいのか？救えばいいのか？助ければいいのか？側にいればいいのか？それらをされればいいのか？……わからん。
「神楽、そんな事俺に聞いてどうなる。お前こそいるんだろ、まだ愛してる人が」
それから神楽は一言も喋る事は無かった、まるでこれ以上の話は耐えられないかのように、唇をかみ締めじっと黙り続ける。
……あの男の代わりをするなんて俺には無理だろう、それにそれを望んでもいないはずだ。
「さて、俺はあいつみたいに気の利いた事は言えないし、そろそろ皆の所帰る。お前も気が済んだらさっさと戻って来いよ、それじゃあな」
神楽の寂しげな横顔を横目に俺は静かに一人花畑を後にした。
それにしてもさっきから何なんだよ、この胸のもどかしさは。
俺は別にあいつが好きでもなんともない、でもあんな表情浮かべて花見つめてるあいつに、俺は何かしてやれないのか？
ああ、俺だってわかっている。あいつの日ごろの強気は全部作り物だって事ぐらい。
武蔵が死んでからも人に弱みを見せず、今一人でここまで来た。神楽も、何か約束をしたのだろうか。あの花畑の上で、あの男と、約束を……。

――甲斐斗達が東部軍事基地に行く準備をする中、ＮＦの核兵器使用の情報が入ってきていたＢＮの本部には激震が走っていた。
従来とは異なる異質の核兵器は、ＥＲＲＯＲの巣とされている箇所四つの内の一つが消したが、その威力と効果の力がとどまる事を知

らなかった。
随時送られてくる核兵器の被害状況、それを基地内に止めてある戦艦の一室で見ていた赤城は頭を抱えていた。
「あの、赤城少佐……コーヒー買って来ましたよ」
そう言うと由梨音は手に持っていた缶コーヒーを差し出すと、赤城は由梨音の方を向くと差し出された缶を受け取った。
「すまないな、私の分まで頼んでしまって」
「いえいえ！こういう事は全部私に任せてください」
赤城は受け取った缶コーヒーを飲もうとせずに机の上に置くと、また一人ＰＣの方を向き考え始めた。
それを見ていた由梨音も缶を開ける寸前に手を止めると、赤城の見ているＰＣを覗き込み口を開いた。
「核兵器……ですよね、私も最初はびっくりしましたよ！でも、その兵器のお陰でＥＲＲＯＲの本拠地とされてる場所を一つ消す事に成功したんですよね、すごいじゃないですか！」
そう言って笑顔で振舞う由梨音だったが、次の瞬間赤城が両手を振り上げ机に向けて振り下ろした。
その咄嗟の出来事に驚き由梨音は手に持っていた缶を床に落としてしまうと、由梨音の顔からは先程までの笑顔が消えた。
「驚かせて……すまない……」
由梨音の落とした缶を赤城は素早く拾うと、驚いたまま固まっている由梨音の手に握らせる。
そこでようやく由梨音が我に返ると両手で缶を握り締めたまま赤城の前で大きく頭を下げ始めた。
「す、すいません！私もあんな事言ってしまって……」
「いや、いいんだ。お前の言う通り核兵器の力でＥＲＲＯＲの巣を消す事ができた。だが、これ以上核兵器を使わせてはこの世界が持たない。何としてでも私達は騎佐久達より早く現地に向かい核兵器の使用を止めさせなければ……」
「その為に今私達はＥＲＲＯＲの巣があるとされる場所に移動して

るんですよね！」
「ああ、だがその前に少し寄り道をするらしい」
「えっ？どこにですか？」
「東部軍事基地だそうだ、何しろあの場所はあの件以来誰も近づいていないからな、まだ機体や弾薬が格納庫に残っているからそれを回収しに行くみたいだ」
そこでようやく由梨音の買ってきた缶コーヒーを手に取る赤城、すぐに開封すると静かに飲んでいく。
それを見て由梨音もジュースを飲もうと手に持っている缶を開けた瞬間、床に落下させた時の衝撃により缶の口からは大量のジュースが噴き出した。
「ひゃっ！？あーっ……すいません、赤城少佐……えへっ」
そう言って可愛らしい笑みで首を傾げる由梨音だが……。
「そうか、じゃあ減給だな」
そんなものジュース塗れになっている赤城には無意味、というよりも更に怒りを倍増、加速させるにすぎなかった。

――ＢＮの本部から二手に分かれた三つの勢力、その中でもＮＦとＳＶは戦力が低下している為に二つの勢力で現在ＥＲＲＯＲの巣に向かい、ＢＮは本部に集ったほぼ全ての戦力でＥＲＲＯＲの巣へと向かっていた。
この作戦はどちらとも必ず成功しなければならない、まだＥＲＲＯＲの巣が一つ残されているからだ。
それとも四つの内一番巨大な巣、この巨大な巣は今人類が向かっている二つの巣を消し終えた後、ＮＦ、ＳＶ、ＢＮの全戦力をもって挑む事になっている。
計画と準備は整った、後は実行に移すのみ、そして結果を出すしかない、成功という名の結果を――。

第９０話　愛、委ね

――東部軍事基地、周りには荒野が広がり、近くにあった町は無残にも灰と化している。
辺り一面何も無い場所、故に基地の頂上から見る景色はまた格別だった。
そして今、東部軍事基地の頂上に機体を止めてある機体の中からテトは退屈そうにその景色を眺めている。
「美しい……あの東部軍事基地が、今ではこんな風になるなんて――ん？」
レーダーに反応あり、遠くの方からは砂塵を上げながら接近してくる１機の機体の姿があった。
「来たね、魅剣愁。君のそのフィリオに対する忠誠心だけは褒めてあげるよ」
躊躇いや迷いなど無い、一直線に基地の方へと向うアギト、それを見た黒薔薇（トラディスカント）は自分の手元に握られる剣の形を変えさせ瞬時に巨大なレーザー砲に変わると、出力を高めアギトに向けて銃口を向け引き金を引く。
青白い光線は真っ直ぐアギトに向けて放たれる、だがアギトが軌道を変える事はなかった。
抵抗も防御も何もしない、レーザーがアギトを直撃した所でその装甲には傷一つつかないのだから。
地面は大きく抉られ爆発を起こすが、進行するアギトを止める事はできない。
「驚いた、本当に頑丈な機体だ……でも、人間の方はどうかな？」
自分の左腕をアギトに向けるテト、その瞬間アギトの足元からは赤く光る紋章のような陣が広がりはじめる。
「君に見せてあげるよ、現実を――っ！？」
その時、テトの向けていた左腕は突然弾かれたように仰け反ると、

アギトの足元に出てきていた赤い陣は一瞬で掻き消された。
困惑した表情で自分の左腕を見つめるテト、だがその表情はまたいつものように落ち着きを取り戻すと小さな笑みを見せ操縦桿を握った。
「ふーん……そうか、君は……昔の僕か」
黒薔薇の手に握られたレーザー砲は形を変えて剣になると、その剣先を突き立てながら黒薔薇がアギトの元にまで一気に基地の屋上から降下していく。
それを見ていたアギトは巨大な右腕を構えると、迫る黒薔薇に備えタイミングを見計らっていた。
そして黒薔薇が目の前にまで来た時、その豪腕は一瞬で黒薔薇に向けて振り下ろされた。
だがその攻撃が当たる事は無かった、それ所か空振りに終わったアギトの真後ろに黒薔薇は立ち、振り上げた剣をアギトの背部に振り下ろしていた。
「楽しくない、さよなら」
容赦なく振り下ろされた剣先はアギトの背部に直撃した。
激しく飛び散る火花、刃と装甲の擦れ合う音が鮮明に聞こえてくる。
それで終わった。剣の刃先は欠けるが、アギトの装甲には傷一つつかない。
「は？」
その隙を狙いアギトは振り返ると同時に腕を振り上げ左手の甲で黒薔薇を簡単に弾き飛ばすと、地面に擦れ無様に這い蹲る黒薔薇を見たまま静止していた。
「違う……僕じゃない」
瞬時に黒薔薇を起き上がらせるテトだが、機体を吹き飛ばされた衝撃で口元からは僅かに血が垂れている。
「卑怯だね、僕はその時力なんて無かった。それなのにどうして君は今、そんな力をもってるんだい？」
握られていた剣は銃へと変わりアギトに向けてレーザーを放つ黒薔

薇、だがアギトはその攻撃をものともせずに高速で接近してくる。
すると黒薔薇の握る銃はまた形を変え剣へと変わると、向ってくる
アギトに先端を向け突進していく。
互いの機体が高速で真正面から迫っていくと、黒薔薇の向ける剣先
はアギトの胸部に狙いを定め、対するアギトは拳を構えその瞬間を
見定めていた。
「復讐できる力って、簡単には手に入らないものだよ?」
微かに色滲む黒薔薇、剣を振るう姿は残像が残り、一瞬の内にアギ
トを滅多切りにしていく。
アギトが黒薔薇に向けて腕を突き出そうとするも、黒薔薇の高速に
振り下ろしていく剣により腕は弾かれ何もする事ができない。
それでもアギトの装甲に傷が付くことは無かった、いくら胸部や東
部、腕に足を剣で斬られたとしても、火花が飛び散るだけで傷一つ
付かない。
「良いね、それだけ頑丈だと壊しがいがある!」
黒薔薇の圧倒的な速さの前にアギトは動きが封じられていると、黒
薔薇が突き出した剣先はアギトの胸部を突き上げ簡単にその巨体を
吹き飛ばした。
「どうしたんだい、その力でフィリオを助けに来たんだろ?」
口元の血を拭き取り余裕の笑みを浮かべるテト、吹き飛ばされたア
ギトはすぐに体勢を立て直し着地すると、拳を構え黒薔薇の動きを
待っていた。
「……ああ、そうだった……ねぇ愁、君は今でもフィリオの事を愛
してると思うけど。フィリオは本当に君を愛してると思うかい?」
愁の返答は無い、だがテトは微かな笑みを見せながら言葉を続けて
いく。
「残念だけど、フィリオは既に僕のものと化したよ。僕に一生従う
人形にね、だからフィリオにとって君なんて今ではどうでもいい存
在なのさ、今彼女は僕だけを求めている。そして僕は彼女が求める
愛の形を彼女に身体に刻み込んでいる……本当に幸せそうな顔をし

てたよ、フィリオは」
満面の笑みを見せながら喋りかけてくるテトに、アギトは微動だにしていなかったが、ふと黒薔薇の後方に聳え立つ東部軍事基地の方に目線が向いた。
するとアギトの前に立ちふさがっていた黒薔薇はその場からゆっくりと離れると、まるで基地にへの道を譲るように基地の方に手を伸ばした。
「確かめたいかい？それなら行くといい、彼女は最上階の司令室にいる。君が帰ってくるまで僕はここで大人しく待機しておくよ」
するとテトは機体の電源を落とし黒薔薇をその場に跪かせた、それを見ていたアギトは跪いた黒薔薇を見て拳を構えたままでいたが、拳を下ろし構えを解くと、黒薔薇ではなく基地の方へ突き進んでいった。
「君も知るといい、この世の現実を」

――荒廃した東部軍事基地の格納庫の中、そこに愁はアギトを止めると機体のハッチを開け機体の中から出てきた。
ＳＶ親衛隊の軍服を身に纏い、顔にはあの時外したはずの仮面が付けられている。
そしてゆっくりと歩きながら基地の中に入っていく様子をテトは基地内に設置されている監視カメラを使い機体の中から一部始終観察していた。
言われた通り愁はフィリオがいる最上階を目指し歩いていく、通路の電気は全て消えており、窓から差し込む光は割れたガラスや血痕が散乱する床を僅かに照らしていた。
エレベーターも扉に穴が開き既に使い物にならない状態で放置されていた、それを見た愁はエレベーターの横にある階段が通っている通路へと入っていく。
その数秒後、最上階にある階段通路の入口に付いてある監視カメラの映像からは、通路から出て淡々と歩いていく愁の姿が映し出され

た。
「ん？今さっき1階の階段通路に入っていったのに……それにあの通路の階段は途中から崩れ落ちていたはず……」
機内で観察していたテトが驚いた表情を見せたが、小さく鼻で笑った後何かを理解したかのように笑みを浮かべると、いつものように他者を見下し優越感に浸っていた。
その時、突如モニターに警告表示が映し出されると一発の青白い光線が黒薔薇に向けて放たれていた。
遠距離からの砲撃にテトは瞬時に黒薔薇を発進させ回避させると、テトは未だに余裕の笑みを浮かべ攻撃してきた方に機体を向ける。
そこで見たのは荒野を走り東部軍事基地へと向ってくる艦隊の列、そしてその一つの戦艦の甲板にはアストロス・ガンナーが立っていた。
「完璧とも言える精密長距離射撃、見事だよシャイラ。でも、どうして僕がここにいる事を知っているんだい？」
テトは強制的に通信を繋げ操縦席に座るシャイラを見つめると、シャイラの方も同じようにテトを見つめ返した。
「ＥＤＰへ向う為に途中東部軍事基地に寄る事になりましたが、まさかここで貴方と出会えるとは。どうやら貴方の命運もここで尽きるみたいですね」
シャイラの言葉の後、戦艦からは勢いよくアストロス・ライダーが発進し、その戦艦の横を走っていたＮＦの艦からは赤色のリバインが発進していく。
『シャイラ！各機発進は止めさせたわよ！今出撃してるのはＮＦからリバインが2機、そしてライダーとガンナーが出てるから計４機今いるわ！』
突如アリスとの通信が繋がり報告を聞くシャイラ、それを一緒に聞いていたテトは感心した表情でモニターに映るアリスを見つめていた。
「やぁアリス、少しは学習はしてるみたいだね。でも……たった４

機で僕の黒薔薇を止められるかな？」
テトの言葉の通り、既に黒薔薇は戦闘態勢に入り赤黒く光る翼を広げていた。
『止める？何言ってんのよ、貴方は今日ここで死ぬの！そしてお姉様を返してもらうんだからッ！』
「僕は好きだな、その表情。フィリオには飽きてきた所なんだ、次は君が僕の物に――っと」
瞬時に黒薔薇の懐に飛び込むアストロス・ライダーは鉤爪を突き立て胸部を狙うが、黒薔薇は難なく回避すると握り締めていたレーザー砲をライダーに向け引き金を引いた。
だがライダーは機体の跳躍力を生かし放たれた青白い光線を飛び越えると、そのまま勢いに任せ宙に浮いている黒薔薇の元へ飛び掛る。
「うん、良い動き。でもそれだけだ」
飛び掛るライダーに黒薔薇は手に持つ銃を剣に変化させると、飛び掛るライダーの動きを的確に捉え向けられる鉤爪を機体ごと弾き飛ばす。
「今日の君達は随分と威勢が良いね、この際皆僕の物にしてあげようか」
終始笑みを見せるテトだが、モニターに映る葵の顔は怒りと憎しみを露にしている。
「黙れ変態野郎が。てめえ、フィリオに手ぇ出して簡単に死ねると思うなよ？」
「良いね、その復讐に燃える目の輝き……ああ、今日はとても楽しくなりそうだ」
葵の怒りの眼差しに全く動じることはない、むしろテトを喜ばせ快楽を与えている。
「ああ――それは私も同じだ」
「ん？」
突如岩陰から姿を現す赤いリバイン、既にＬＲＳを抜き取り間合いを詰めていた。

その動きに黒薔薇はＬＲＳを弾こうと剣を構え狙いを定めようとした時、赤いリバインの後方から突如青いリバインが浮上してくると、巨大なバズーカ砲を黒薔薇に向け引き金を引いた。
咄嗟に構えていた剣で砲弾を弾く黒薔薇、だが砲弾は黒薔薇の至近距離で爆発を起こし黒い爆煙が一瞬にして機体の視界を覆っていく。
「この声、あの赤髪の子だね？」
その瞬間、突如煙の中からＬＲＳを片手に現れる赤いリバイン。テトが気づき黒薔薇を回避させようとしたが、リバインの踏み込みの速さに間に合わず一瞬にして右肩を斬り飛ばされる。
「そうだ、お前を殺しに来た」
すぐにリバインはＬＲＳを構え黒薔薇の胸部を狙い振り下ろすが、黒薔薇は右足で接近してくるリバインの胸部を蹴り飛ばすと、左手に握られた剣を高らかに天へと突き上げた。
「また僕に遊ばれたいのかい？いいよ、僕も君を気に入ってるし」
黒薔薇の左腕に赤く光る紋章が浮かび上がる、そして剣先にその光が集い一点の光の玉になりはじめる。
異変に気づいた赤城は由梨音に指示を出しすぐにその場から後退していくと、剣先に集う光の玉が弾け赤い輪を描きながら全範囲に広がっていった。
空間を震わす程の衝撃波、その場にただよう煙を全て吹き飛ばし、黒薔薇を中心にして大地に亀裂が広がっていく。
「衝撃波！？由梨音、私の後ろに来い！」
バズーカ砲を装備していた由梨音のリバインは盾を装備していない、赤いリバインは盾で自分の身を防ぐ体勢に入ると、リバインはすぐさま赤いリバインの後方に隠れ衝撃波から身を守る。
大地を揺るがす振動は機体をも震わしていき、その揺れは東部軍事基地にも伝わっていた。
「んー、僕を除いて今戦場には女性しかいないなんて最高だね。いつもアリスの側にいるゼストも今回はいないみたいだし」
ゼストがいない。その言葉に誰よりも反応したのは戦艦で指揮を執

るアリスだった。
「ゼストがいなくたってあんたなんか私達で十分ってことよ！全機あの機体に向けて攻撃を開始して！」
「了解」
アリスの命令にシャイラは手に持っている銃を黒薔薇へと向けると、赤いリバインの後方に隠れていた由梨音の乗るリバインも姿を現しバズーカ砲を構えた。
「由梨音、援護は任せたぞッ！」
ＬＲＳを構え単機で黒薔薇へ接近していくリバイン、それに合わせて葵とエコの乗るライダーも発進し距離を縮めていく。
右腕を失ったままの黒薔薇は左右から接近してくる二機の位置を確認すると、赤く輝く手を右肩に翳すと、先程まで負傷していた右肩が一瞬の内に修復される。
「女性から僕の元に飛び込んでくるなんて。僕は人気者だなぁ」
完全に修復された右肩、すぐさま武器を大鎌に変え右手に持ち直すと、接近してくる二機の内一機に狙いを定め飛び立った。
「っち、あの野郎ＮＦの方に行きやがったか。エコ！さっさと背後に回ってズタズタに引き裂いてやるぞ！」
「うん、滅多切り……だね」
テトの狙いは赤城だった、大鎌を構え場所互いに高速で接近していく中、赤城はＬＲＳを構えその瞬間を見定めていた。
「来るなら来い、私が一振りで貴様の息の根を止めてやる……ッ！」
間近にまで接近してきた黒薔薇に対してＬＲＳを振り上げるリバイン、それを見た黒薔薇は大鎌を水平に振りかぶるとリバインの胸部目掛けて振り下ろした。
「くっ、速い――――ッ！？」
完全に振り下ろされた大鎌、完全な隙が生まれる。赤城の乗るリバインは瞬時に身を屈め大鎌を回避した、その隙目掛けＬＲＳを黒薔薇の胸部に突き出した。
「だが……武蔵に比べれば遥かに劣る動きだッ！」

完全に勝負はついた、ＬＲＳの刃先は確実に黒薔薇の胸部に向けられ、一瞬の隙も与える事無くリバインは勝利する――。
「おやおや、機体の動きを見切るなんて……流石だ。お礼に与えてあげるよ、最高の快楽を、君に――」
機体の動きは見切る事ができた、だがテトの動きを見極める事はできない。
赤く輝く紋章の浮かび上がる左腕を赤いリバインの胸部に向けるテト、その瞬間リバインの足元に赤く輝く陣が浮かび上がり、完全にリバインの動きを止めると。その眩い光は操縦席に座る赤城の視界を奪っていく。
「また私にあの時の記憶を思い出させる気か！？だが！今の私にそんなものは通用しな――っ！？」
ぽっかりと開いた大きな穴。穴の中に広がる闇が埋まることは無い。あの日、あの時、より鮮明に、かつ自分がその場にいるかのように思い出していく。
感覚や感触までも再現される、現実を、思い出させ、より与え、描き、刻み付ける。
「無理さ――だって君は、既に僕の物なんだから」
その瞬間、黒薔薇に向けて放たれた砲弾が黒薔薇に直撃し爆煙を上げる。遠くではバズーカを両手で構えたまま静止しているリバインが立ち、その中では由梨音が笑顔でガッツポーズをとっていた。
「やった！やりましたよ！赤城少――」
由梨音の言葉を掻き消すかのように、一本の大鎌が回転しながら宙を舞いリバインの右上半身を斬り飛ばす。
そして鎌は大きく円を描きながら主の手元へと戻ってくる、傷一つ無い赤黒い装甲に赤く輝く紋章を光らせる黒薔薇の元へ。
「ゆり、ね……？」
由梨音の声が赤城の視界を遮る闇に小さな穴を開ける、微かに見える操縦席からの光景。目の前のモニターには通信を繋げた状態の由梨音の姿がおぼろげに映っている。

「ぶじ……か……？」

段々と視界が開けていくと、モニターに映る由梨音の姿もはっきり見えてくる。

「いたた……ちょっとびっくりしましたけど、何とか大丈夫です！」

闇を開けた穴の中、闇に穴を開けても、その中にあるのは闇でしかない。

鮮明に映る由梨音の姿、由梨音は先程の笑顔を少し歪めていたが平気そうにまた笑顔を作るが、赤城の顔は蒼白としていた。

霞んだ瞳で口を開けたまま由梨音を見つめるその眼差しに、由梨音は首を傾けた。

「赤城少佐……？」

ふと、モニターから目を離し右を向いた由梨音の目の前には、機内では見えないはずの荒野が見えていた。

微かな風が顔に当たり、僅かに髪が靡くが、由梨音は今自分がどのような状況に立たされているか把握できていない。

見上げれば曇り空が見え、足元を見ると右足が無く、綺麗に切断された右足のふとももからは血が噴出している。

「あ、血……止めないと……」

止血しないと危ない、咄嗟にそう思った由梨音は右手を足元に伸ばそうとしたが、幾ら触ろうとしても右足に触れられない。

「あれ？」

ふと自分の右肩を見れば、そこにあるはずの肩が無く、切断された肩からは心臓の鼓動に合わせて血が噴出し、操縦席を血で染めていた。

鮮やかな赤色をした血、止めどなく溢れ出る血、顔色は既に青ざめ、目からは涙が零れ落ちた。

震えが止まらない、全身が恐怖に支配されていく、今の自分の姿を見て、そしてこれからの自分を想像して。

「あ、あが……赤城、しょう、ざ……ぅあ――――」

目の前には赤城がいる、優しくて強くて自分の誇りである赤城少佐

がそこに。
怖い……もう死にいく自分が怖い、もっと側にいたかったのに、それが叶わなくなる、叶えられなくなる。
「ぅ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁあああああああああ――――――ッ！！！」
激痛と絶望に発狂する由梨音を見て、赤城は動けずにいた。
嗚咽し、過呼吸状態の由梨音は必死に左手で出血する右肩を抑えもがき苦しむ。
「嫌ぁ〝、いや〝ぁッ！う〝ぅ、い、だい〝、死にだく、ない〝！死にたく、死……死に、たく……ない〝……」
逃れられない恐怖に死が迫る、目に涙を浮かべ赤城少佐の姿が暈されていき、首を大きく振って涙を振りとばすと、由梨音は必死に赤城を見つめ続けた。
だがその時、由梨音の目の前に突如現れる少女がいた。
「葵、後は……頼むよ……」
そう言うとエコは血塗れの由梨音を抱きしめ、一瞬の内に操縦席から姿を消す。
「由梨音……？由梨音は、どこに……？」
目の前で起こった出来事に頭がついていかない赤城に、葵から通信を繋げ状況を説明していく。
「落ち着け！エコがあの子を艦の医務室まで転移させたんだ。艦の中では今頃手術の準備が始まってるだろうな」
「本当か！？それなら、由梨音は助かるんだな！？」
「それはわからねえ。だが助かる確率が１％でもあったらあんたはそれを選ぶはずだ。エコも選んだしな、にしてもエコの奴、あんな距離から艦に移転なんかしやがって……！」
葵の言うとおり、血塗れの由梨音を治療する為にすぐさま手術の準備が進められていた。
その部屋の外では壁にもたれかかり、汗だくのエコがその場に座り込んでいた。

呼吸が荒く、目の焦点も定まっていない。全身の力が抜けていき、もはや体を起こしておくことすらままならない。

「エコが命懸けて助けに行ったんだ、だったら俺達は命を懸けてこいつをぶっ殺すしかねえだろッ！」

黒薔薇の背後に飛び掛るアストロス・ライダー、鋭利な鉤爪を突き立て突進していく。

「それは無理だよ、君達は僕に勝てない。葵、君にもそれを徹底的に教えないといけないらしいね」

背後から飛び掛るライダーに気づき機体の左腕を向ける黒薔薇、するとライダーは腰についてあるレールガンを向けると、黒薔薇の左腕目掛けて二発同時に発射させた。

「無駄さ」

黒薔薇を覆うように半透明の球体が現れると、放たれた攻撃を簡単に防ぎきる。

だが葵の目に揺るぎはない、それにテトが気づいた時は、既に赤いリバインが黒薔薇目掛けＬＲＳを振り下ろしていた。

「なっ、君は動けないはず！なのに何故……！？」

「動けるさ……貴様の与える闇など、今まで見てきた戦場に比べれば――ッ！」

視界が黒く濁り、瞬く間に光は小さくなる。後一歩の所にまで来て、赤城の肉体と精神は完全に取込まれた。

「あっ、え……ここは……？」

先程まで操縦席に乗って戦っていたはず、だが今は見覚えのある部屋で立ち尽くしていた。

「私の部屋？なぜだ、先程まで私は戦場にいたはず……」

自分の服装を見ると、パイロットスーツからいつもの黒い軍服へと変わっている。この不可解な状況に赤城がその場から動こうとした時、突如部屋の扉が開くと一人の青年が入ってきた。

「比べれば……どうしたんだい？顔色が悪いよ？」

笑みを浮かべ、ゆっくりと赤城に近づいていくテト。その姿を見て

赤城は腰に掛けてある鞘から刀を抜き取ろうとしたが、柄に指が触れた瞬間身動き一つとれなくなる。
足も腕も身体も、指一本すら動かない。そんな赤城の姿を見てテトは笑いながら赤城に近づいていく。
「どうだい、体の自由を奪われた気分は。焦るよね、怖いよね、憎いよねぇ……？」
「き、さまっ……！」
答えようにも声すらまともに出ない状況下の中、赤城の頬には汗が伝い呼吸しかできず、焦りと緊張で段々と表情が強張っていく。
「ああ、その表情最高だね。それじゃあ、これから僕に何をされるか、わかるよね？」
そう言ってテトは躊躇なく赤城の胸元に手を伸ばすと、黒い軍服の上着を脱がしていく。
「やめっ……やめ、ろ……！」
上着を脱がし終えテトは不敵な笑みを見せながら、次は赤城の着ている真っ白なシャツのボタンを一つずつゆっくりと開けていく。
「泣いてるの？いいよ、もっと泣いて。僕の為に涙を流せばいい――」
――『止めろ……私に触れるなっ、あ、ぐっ……やめろ……止めろッ！』
リバインの操縦席で必死に体を動かし何かから逃げようと抵抗する赤城、その光景を黒薔薇の中で見ていたテトは葵の方に目を向けた。
「葵、よく見ておくといい。何れ君も彼女のようになる」
「てめぇ、一体何をしやがった……」
「何って、言ったはずだよ？最高の快楽を与えてあげるって」
そう言ってテトはまた赤城に目を向ける。必死に暴れ悪夢から逃れようとする赤城、その目からは止め処なく涙が零れ落ちていた。
自分の身体を自分で抱きしめ、光の無い濁った目にもはや何も見えない。

『うぁっ……ぐっ、ぅ……見るな、私を、見る、な……っ！ふぁっ、ぁ……嫌だ……嫌だ……！」

「お、おい目を覚ませ！それは幻覚だ！お前は何もされちゃいねえ！」

必死に呼びかける葵の声は赤城の耳に届く事はない、助けに行こうとリバインに近づこうとしたが、その間に黒薔薇が入り込む。

「人の心配してる場合かな？」

「くっそ……！」

黒薔薇の振り下ろす大鎌を瞬時に避けるライダー、すかさず鉤爪で斬りかかるが大鎌を機敏に振り回す黒薔薇に近づけずにいた。

その間にも赤城への侵食は続いていた。

立たされたまま衣服を脱がされ、縛って纏めていた髪も下ろされた状態で赤城は今、泣き叫んでいた。

頬を伝う涙に唇を当てるテト、そのまま赤城の唇までずらしていくと、抵抗する赤城の口を塞いだ。

もう、何も出来ない。されるがまま、抵抗も出来ず、希望の無い、運命。

終わりたい、でも現実がそれを許さない。意識ははっきりと残したまま、続いていく。

その時、ふと……部屋の扉の開く音が聞こえてきた。

目の前にいるテトで赤城には誰が入ってきたのか見えない、だが確かに聞こえる。そして足音はしっかりとこちらに近づいてきている。

異変に気づいたのはテトも同じだった、口付けした後にゆっくりと赤城から唇を離し後ろに振り向く。

「男……？誰だい、き――」

一閃の残光がテトの首を跳ね飛ばす、頭部を失った肉体はその場に崩れ落ちると跡形も無く消えていく。

ＮＦの軍服を身に纏った男、その男は振り下ろした刀を腰に掛けてある鞘に仕舞うと、身動きの取れないはずの赤城がその場に座り込んだ。腕を動かせる、指も動かせる……肉体の拘束は解け、自由に

動けるようになっていた赤城。
その彼女の元へ歩いていく男は、自分の着ている軍服の上着を脱ぐと、赤城の前にしゃがみ込み上着を赤城の肩に掛けた。
赤城の震える唇が小さく開く、そして涙を流しながら呟いた。
「すまない……私は、私は――――」
赤城の言葉を遮るようにそっと、優しく唇を重ねる二人、そして男は赤城の髪を撫でると口を開いた。
『大丈夫、赤城は綺麗だよ。……ごめんね、ずっと側にいれなくて……』
互いに抱き締めあい、その暖かさを肌で実感する。
安らかで心地よく、ずっと抱きしめられていたい感覚、安心して全てを委ねられる思い。
「いいんだ……今、こうしてお前は私の側にいてくれている……そうだろ、武蔵――――」

――「どういう事だ……あの空間は僕以外の男は入れないはず、なのにどうして……ッ！」
黒薔薇の中で動揺も隠せずテトは困惑していた、いつもの浮かべる笑みは消え、焦りで一筋の汗が垂れる。
モニターに映る茶色の装甲をした二本の刀を握り締める機体、赤城の乗る赤いリバインの目の前に立ち、真っ直ぐ黒薔薇の方を向くその姿に、只ならぬ恐怖がテトを覆っていく。
「き、君、何者かな？答えてくれてもいいんじゃない？」
通信を強制的に繋げてもテトの質問に男は答えることなく呟いた、何せ教えた所で無駄なのだから。
「……お前は大切な仲間を傷つけ。赤城を汚し、泣かせた」
この気迫に満ちた機体を、誰が止められるだろうか。誰も止められない、誰にも止める事は出来ない。
「容赦はしない」
そこにはＮＦ最強の男が降臨していた。

凄まじい覇気を身に纏い、その場の空気を今までの流れとは全く別のものに化していく。
気が付いた赤城は目を開ければ、そこには眩い光が広がっていた、見覚えのある後ろ姿に赤城は目を見開く。
機体の肩に装備されていた大砲に、背部に装着された長刀。
そして大きく機体に書かれた『大和』の二文字、紛れも無く神楽がその男の為に開発し、約束の為に委ねたもの。
その委ねられた機体を操る最強の男。伊達武蔵は今、愛する者の為に、再び動き始める。

第９１話　正義、英雄

――東部軍事基地の最上階に到着した愁、建物の外からは爆音と轟音が聞こえ建物は微かに揺れるが愁の足は揺るぐ事はない。最上階にある司令室、ただその場所だけを目指し歩き続ける。

そして司令室に続く扉の前にまで来ても歩む足は止まらず、司令室の中に入り一人の少女が見えた時、初めて足を止めた。

司令室の一番奥、巨大なモニターの前で両手両足は手錠で固定され、首には首輪が巻きつけられているフィリオの姿がそこにあった。

「愁……」

一人震えながら愁を待っていたフィリオだが、司令室に入ってきた愁の姿を見た瞬間、今まで我慢していた感情が一気に溢れ始める。

「私は信じてました。貴方が助けに来てくれる時を、ずっと――」

会えた事の嬉しさに涙を零しながら笑みを見せるフィリオ、だが一つ不自然に思える所があった。

あの日、あの時、愁は仮面を捨てたはず。自らの意思で戦う事を決め、フィリオに忠誠を誓ったのだから。

だが今、愁はあの時と同じ仮面を付けていた。誰にも意思や感情を見せず、冷徹なままに動くだけの修羅の仮面を。

「ど、どうしてその仮面を……」

フィリオの戸惑う問いに、愁は答えることなく足を一歩前に出した。

――『はい、私のご主人様はテト様です』

耳を疑うような言葉が聞こえてくる。愁の歩く足も止まり、ふと声のした方を向いてみると、司令室にある一つのモニターに何かの映像が映し出されていた。

椅子に座るテトの前で跪き、笑顔でテトを見つめるフィリオに、テトは座ったままフィリオの頭を優しく撫でていく映像。

『そう、僕が君の主人であり、君を一番幸せに出来る――』

また一つ、隣のモニターに映像が映し出される。
――――『テト様、お食事が出来ましたよ』
満面の笑みでテトの座るテーブルの前に作りたての料理を並べていくフィリオ、その料理を二人で楽しく食事をする映像。
――――『私は……テト様の事が好きです！』
『僕もだよ、フィリオ』
互いに目を閉じ抱き締め合う二人の映像。
今までテトとフィリオがここで過ごしてきた全ての映像が次々に司令室にあるモニターに映し出されていく。
それは全てテトとフィリオが楽しく、仲良くしているものばかり、そしてテトの言いなりとなっていたフィリオは自らの身体でさえ躊躇うことなくテトに委ねていた。
その異様な光景に一番驚いていたのはフィリオだった、周りを見れば全てのモニターに有りもしない現実が映し出されている。
全く記憶に無い出来事が、さも当たり前かのように、現実となって……。
――――『愁を……あの男を殺せばいいんですね』
「えっ……――――」
フィリオの後ろにある一番巨大なモニターから聞こえてきた自分の声にフィリオは振り向くと、そこにはテトと抱き合う自分の姿が映し出されていた。
『うん、君と僕の仲を邪魔する存在だからね。もし愁を殺す事に成功したら僕は君を一生愛するよ、そして君が求める最高の快楽を与えてあげる――――』
フィリオを抱き寄せ優しく撫で回していくテトに、フィリオは頬を赤らめ嬉しそうにテトを抱きしめる。
『本当ですかテト様！あ、あぁっ……嬉しいです……っ――――』
愛を誓った長い口付けが始まる、巨大なモニターで、愁がこの光景を見るとも知らず。
全て嘘、全て出鱈目、全て偽りに違いない……フィリオの思考は全

ての光景を全否定していくことだけで精一杯だった。
記憶に無い事をどう信じればいい、自分の目で見た光景が全て真実なのか――。
「うそっ……ちがう……！」
モニターを見ていたフィリオは後ろに振り返り事情を説明しようとしたが、余りの突然の事に顔は青ざめ言葉がうまくでない。
ただ知ってほしい、信じてほしい。たったそれだけの事を愁に伝えようと必死だった。
全てのモニターを眺めるように顔の向きを変えていく愁は、全てを見終えた後、止めていた足を再び動き始める。
「愁……私は、私は……誰よりも、愁のことを……」
仮面を付けた愁が瞬く間に接近してくる、その姿にフィリオは先程までの暖かさなど感じなかった。
まるでフィリオの言葉に聞くを耳を持たないように足を速める愁に、フィリオは恐怖しか感じられない。
嬉し涙も今は消え、焦りと恐怖で冷たい涙が頬を伝う。
「待って、信じて！……私は本当に愁の事が――」
愁が目の前にまで来た時、フィリオは思わず目を瞑ってしまった。
体に走る僅かな衝撃にフィリオの体は硬直し身を震わせたが、その包むような暖かさに次第に体の力が抜けていく。
緊張して高まっていた鼓動も徐々に落ち着きを取り戻し、ゆっくりと目を開けると、愁はその両手でフィリオを抱きしめていた。
「愁……」
その状況を次第に理解していく。そう、恐れる事はない、愁は今、助けに来てくれたのだ、それは何故か？簡単だ、フィリオを愛しているから……そう思えばフィリオは納得できた、この状況を見られても――。
「く、苦し……ぃ……」
いつだってそうだ、愁が本気で仲間や友達を恨んだことなど無い。
わかっていた、家族が殺されたのは紳のせいでも、ＢＮのせいでも

ない。
でも感情に流される自分を止めることは出来なかった、その結果愁は何人もの仲間や友を殺してしまう。
自らの意思で動けない、自らの感情が勝手に愁の肉体を支配し、動き始める。
それを止めたのはフィリオだった、だからそのフィリオが死ねば、愁は完全に支配される。
「愁！苦しい、やっ、ぁ……ぁ〝あ〝あ〝！」
邪魔な存在、もっとこの肉体を自由に扱えるようにするにはフィリオが邪魔だった。
早く死ねば良いのに、テトがフィリオを奪い生かし続ける、それは今の愁の肉体にとっては最悪。
「助けに来て、くれたんじゃ……ぁ……」
掠れた声でフィリオは最後に問う、が、その問いはこの肉体には聞こえない。
最初から助けになど来ていない、何を勘違いしているのか。
愁は今日、フィリオを殺しに来たのだ。

――いや、違う。愁は、愁自身は今、絞め殺そうとしている自分の力を必死に抑えていた。
抗え、抗え！自分に言い聞かせる、自分の運命はこれでいいのか、彩野を殺しエコを殺し、仲間や友達を裏切り殺し続けた自分は最後に、本当にこれでいいのか？これで全てが終わるのか？
嫌だ、絶対に嫌だ、見れば目の前に今にも死にそうなフィリオを自分が抱きしめている。
フィリオを救うにはこの手を解けばいい、なのに何故それが出来ない、何故自らの意思が通じず、抱きしめる力を強めていく。
このままの自分ではフィリオは死ぬ、だから動け、抗え、このまま終わらせる前に――ッ！
ふと抱きしめていた腕がフィリオから外れる、フィリオは咳き込み

ながらその場に倒れると、愁は立ち上がりフィリオから離れていった。

「うぁあああああああああッ！」

今しかない、負の連鎖を断ち切るのは今しか。

被っていた仮面を投げ捨て、自らの拳を全力を込めて壁にぶつける。

この腕が砕ければそれでいい、だが拳は壁に穴を開け、拳には痛み一つ感じられない。

何度も何度も、自分の腕を机や壁にぶつけようとも、腕が折れる事は無い。

「くっそぉおおおおおおおおッ！」

叫びながら自分の頭を壁に叩きつける、だがこれも痛みは無い……が、ぶつけた壁には血の跡がついていた。

それを見た瞬間自分の頭を何度も何度も壁に叩きつける、血が垂れ、意識が朦朧としようとも、頭部が砕け自分が死ぬ至るまで、決して止めようとはしない。

もし拳銃があれば迷わず自分の頭部に銃口を向けて引き金を引き、刃物があれば躊躇い無く自分の首を斬りつけられる。

何故死なない、壁に亀裂が走り崩れかかっているというのに、何故自分の意識はまだある。

早く死にたい、フィリオを助ける為には、死ぬしかない。愛する人を殺してしまうぐらいなら、その人を守るためにも死ななければならないというのに――。

必死になって自分を傷つけ命を絶とうとする愁の姿を見て、その異変はフィリオにもすぐに理解できた。

自分の為に、愁は今死のうとしている、助けようとしている、今血塗れになっている愁こそが、フィリオの知っている本物の姿だった。

「愁ッ！」

必死になって愁の名を呼ぶが、今の愁は自分が死ぬ事以外何も考えられずフィリオの声は届かない。

既に頭部を叩き付ける壁は真っ赤に染まり、愁の衣服や顔も真っ赤

な血で染まってきている。
痛みは感じない、だけど意識は朦朧としていく、足元はふらつき、いつ倒れてもおかしくない状態になっていた。
すると愁は壁に背を向け壁にもたれかかると、ゆっくりと腰を下ろしていく。
自分の血溜まりの中で足を伸ばして座る愁にもう力は残っておらず、全身に走る痺れに手足を動かす事すら出来ない。
安らかな気持ちだ、やっと終われる、もう誰も傷つけなくていい。
微かに目蓋を開いて見えた光景、そこには無傷のフィリオが自分を見つめてくれていた。
自然と笑みが零れる、やっと会えた、やっと救えた、やっと守れた、自分という名の魔物から――。
それでもフィリオを傷つけてしまった、最後まで守ることが出来なかった、結局自分は何も出来なかった。
だから言いたい、フィリオの気持ちを裏切り、踏みにじってしまった事に対して。
「ごめん、ね……フィリ……ォ……」
血塗れの姿で最後に一言呟いた後、ゆっくりと目蓋を閉じ、息を引き取る。
その光景と姿を見て、フィリオは納得など出来るはずがなかった、大粒の涙を零し、手足に手錠をされたまま床を這い蹲りながら必死に愁の所へ近づいていく。
そして血溜まりの中に入り衣服が血で汚れても、フィリオは構うことなく愁の側へと近づくと、息絶えた愁の血で汚れた顔をその小さな手でそっと触れた。
暖かく、柔らかい感触が手に伝わる、するとフィリオは自分の衣服や手で愁の顔についた血を静かに拭き取っていく。
「謝らなければならないのは私の方です、貴方は最後まで私を信じ、命を懸けて私を救ってくれました。それなのに私は、貴方を最後に信じることができなかった……ごめんなさい……」

愁の胸元に涙が零れ落ちていく、その自分の非力さと悔しさに両手を震わせるフィリオは、安からに眠る愁を見つめ続けた。

「愁……貴方は命を懸けて私を救ってくれました……だから今度は、私が命を懸けて貴方を救います――」

そう言うと目を瞑り血塗れの手を自分の胸元に持っていくフィリオ、するとフィリオの額に光輝く丸い模様の陣が薄らと浮かび上がっていく。

「大丈夫、この命が消えても、私はずっと貴方の側にいます――」

小さく呟いた後、フィリオは合わせていた手をそっと離し愁の肩に手を置くと、愁の唇に口付けをした。

「愛してますよ、愁――」

涙が零れようともフィリオは笑みを浮かべ、その瞳はしっかりと愁を見つめ続けている。

そして両手で愁の頬に触れると、目蓋を閉じて自分の額と愁の額を重ねた――。

――「ははっ、本当に面白いね。正義の英雄の登場かい？」

東部軍事基地の外では、今まさに大和と黒薔薇が激突しようとしていた。

少し興奮していたが段々と平常心を戻していくテト、だがその大和から見える気迫には未だに驚いていた。

そして、それはその場にいた赤城達も同じだった。突如出てきた大和に誰もが言葉を失い、見入る。

「君、前にも現れたよね。その子を助けるために……でも、今日は前のように上手くはいかないよ？」

言葉の通り、今回のテトも異様な力を発揮していたが、まだテトは本気を出していない。

黒薔薇には赤く輝く左腕があるが、その左手を右手に翳すと、右手にもまた赤く輝く紋章が浮かび上がってくる。

「僕の黒薔薇に見惚れるといい――」

それは一瞬の出来事であり、その場にいた全員が黒薔薇を見失った……ただ一人、武蔵を除いては。
赤城の視界から大和が消える、そして辺りからは刃を交える激しい音が聞こえはじめた。
高速で大鎌を振り回し大和を攻撃していく黒薔薇に、大和は二本の刀を扱い次々に弾き返していく。
だが攻撃を弾いた矢先、その反動を逆手にとりまた大鎌を振り下ろす、その速度は艦から見ている兵士達の目には追いつかない程だ。
明らかに異常な動き、だが大和はその攻撃を全て凌いでいる。それ所か相手の僅かな隙を見逃す事なく刀を振り下ろし、黒薔薇と対等する程の動きを見せ始めた。
「すごいねぇ、逆に僕が見惚れてしまいそうな動きだよ……まぁ、それはないけど」
黒薔薇の目が光ると同時に黒薔薇の背部から突如無数の茨(いばら)が溢れ出てくると、一斉に大和に襲い掛かる。
その動きを見た途端、一気に後退していく大和だが、伸び続ける無数の茨はどこまでも大和を追いかけていく。だがその茨は大和の刀によって次々に切り落とされていった。
「それ、無駄さ」
切り落とされようとも茨は更に伸び大和を追っていく、それを見た大和は大砲を黒薔薇に向けると同時にＬＲＣを放った。
茨ごと掻き消していくＬＲＣに、黒薔薇はすぐに跳躍し攻撃を交わす。
だが、たった数秒間だけ大和への注意が劣ったその隙を、大和は逃しはしない。
横から一気に距離を詰め寄る大和は、既に刀を振り上げている状態。しかし黒薔薇が大和に左手を向けた途端、赤く輝く波動が斬りかかる大和を簡単に吹き飛ばす。
「君の本気はその程度かい？もっと楽しませてほしかったね……」
吹き飛ばされた大和を追うように無数の茨が襲い掛かる、吹き飛ば

された大和は素早く体勢を立て直し迫り来る茨を次々に斬りおとしていく。
すると今度は大和の周りを囲むように茨が移動していくと、全方位から一斉に茨が襲い掛かり、更には上空から大鎌を構え急降下してくる黒薔薇が大和の首を狙っていた。
「安心して死ぬといい、あの赤髪の子は君が死んだ後、僕がたっぷり可愛がってあげるよ」
全方位からの茨の攻撃、更には上空から迫り来る黒薔薇に、大和は避ける所か、その場に踏みとどまり両手に握る二本の刀を構えてみせた。
そして振るわれる二本の刀、大和を囲むように迫り来る無数の茨は忽ち斬りおとされると、二本の刀を鞘にしまい背中に掛けてある長刀に手をかけた。
その時既に黒薔薇は目前にまで迫ってきていた、あの数の茨は一瞬に断ち切った大和を見て少し戸惑いを見せたテトだが、既に敵は目の前、薄らと笑みを浮かべ振り上げていた鎌を大和目掛け振り下ろす。

――武蔵の目付きが変わり、その瞳は全てを捉える。
『―SRC起動―』
テト同様に、武蔵は最初から本気など出していない。
相手に手の内を晒すのは控えていた、恐らく先程の動きなら黒薔薇に遅れをとっていたかもしれない。
だが今、SRCを起動したことにより遅れは一切とらない。
一瞬で勝負は決した、長刀を振り終えた大和は静かに背部に戻すと、地上へ着地した黒薔薇に背を向けた。
「言ったはずだ、容赦はしない……と」
映し出される武蔵の姿そしてその言葉を聞いたテトは、目を見開き呆気にとられていた。
操縦桿を握る手が微かに震え、目の前に映る武蔵の勇ましき姿は、

まさに英雄……。
「まさか……僕、がぁッ――――!?」
黒薔薇の腹部は切断され、上半身と下半身が綺麗に分かれていく。
完全に動きを見切られた、その思いもよらぬ結果に、テトは最後まで呆然と驚くことしかできなかった。
崩れ落ちる機体、その跡形を見ることなく大和は赤城の乗るリバインへと近づいていく。
そしてリバインを立ち上がらせようと右手を伸ばそうとしたが、大和は素早くリバインを抱きかかえるとその場から跳びあがった。
突如向ってきた巨大な赤い光は空間を歪めながら地面を抉り、一瞬にして二機の立っていた地面を消滅させる。
それを見た大和は素早く艦の元へ向うと、赤城のリバインを甲板の上に置いて待機させる。
場にいた兵士は皆目を疑ったであろう、身体が二つに分かれ機能が停止したはずの黒薔薇は、切断されたまま宙に浮いていた。
「ふふっ、くくく……っは、ははははははは!!」
高らかに笑うテトは、いつにもまして不気味な笑みでいた。
ふと頭から垂れる血に気づくが、テトが左手を翳すだけで傷は癒え、血も消えていく。
「まさか、僕がここまで押されるなんて思ってもいなかったよ」
切断された機体の一部がまた元の状態へと直り始める、今まで機体に付いてきた傷や、全ての負傷までもが。
そして赤色の光とは別の、もっと黒く、鮮やかで濁りのある巨大な光が黒薔薇を覆っていく。
「この世界で、僕が本気を出す時が来るなんてね……後悔しても遅い、君達皆――――死ぬよ」
黒薔薇の手に瞬時に現れるレーザー砲、それに大和が気づいた時……いや、気づこうと気づくまいと、同じことだった。
アリス達のいる艦に照準を合わせ引き金を引くテト、その途端、銃口からは艦を飲み込める程の巨大な光線が一瞬にして放たれた。

「か、回避を！」
咄嗟に艦にいたアリスが叫ぶ、だが間に合うはずが無い。
回避は間に合わず、防ぎようのない攻撃、その場にいた誰もが呆気にとられ、迫り来る死に気づかず見つめ続けた――――。

――その時、艦の前に立ち、迫り来る死を止める一人の男がいた。
抗え、自分の運命や未来など一つも決められていない、その教えは二度と忘れず、心に刻んだ。
進め、例え相手が化物だろうと神だろうと、足踏むな、下がるな、踏み止まれ、決して臆するな。
勝て、ここでの敗北は全人類の死に繋がる、もうこれ以上、無駄な血は流させない。
「砕け、皆の想いを込めた拳で……信じる未来の為に――――アギトォオオオオッ！」
強靭な右腕を振り上げるアギト、その拳から溢れ出る光は真の力。
迫り来る光に、輝く拳を突き出した時、拳の光の間から強烈な波動が空間を伝っていく。
その閃光の眩しさに皆目を瞑るが、アギトに乗る愁だけは目を見開き叫んでいる。
打ち砕かれる赤い光、気づけば迫り来る死はその拳により粉砕され、目の前から消えていた。
「――――シャイラさん、コクピットを開けてください」
「……えっ？」
戦艦の甲板の上に立っていたアストロス・ガンナーの前にまでアギトは上がってくると、自らハッチを開けて姿を現した、仮面の無いその身に、フィリオを抱いて……。
「フィリオお嬢様！？」
フィリオの姿を見てすぐさまハッチを開けるシャイラ、身を乗り出しすぐに機体の外に出て来る。
それを見て愁はシャイラの元に向うと、抱きかかえたフィリオをそ

っとシャイラに渡した。
「っ！？……そんな……息、してない……」
シャイラの言葉はその場にいた者全員に聞こえてきた、アリスは愕然と立ち尽くし、葵もまた青ざめる。
「嘘よ……お姉様、だって、助けに行くって……私……」
その場に跪くアリス。失った、失ってしまった、掛け替えの無い、未来を。
操縦席で一人両手を大きく振り下ろし怒りを露にする葵は、真っ先に愁に聞く。
「なんでフィリオが死んでんだよ……なぁ、おい！愁！何故死んだ、どうしてフィリオは死んだ！？誰が殺したんだッ！？答えろ！愁！！」
笑い声が聞こえくる、黒薔薇に乗るテトもフィリオの死を聞いたからだ。
自分が思っていた通りの結果がそこに現れたんだ、嬉しくて、楽しくて、しょうがない。
「あはははは！傑作だねぇフィリオ、そして魅剣愁！僕の思い通り君はフィリオを殺した、そうだろ！？はははははッ！」
テトの笑いが辺りに聞こえてくる、希望にすがる結果、フィリオは死んだ。
愛や友情や希望や未来など、この世にはどこにもない、何も無い。
いくら信じても、人の心は所詮、所詮、所詮――。
唐突な死、愕然とした表情でフィリオを抱くシャイラだが、ふとある事に気づき視線を下ろした。
「笑ってる……」
涙が零れ落ちる、今まで見たことがあるだろうか、死んでいるというのに、これ程まで安らかに眠る人を。
シャイラの一言にテトの笑いが止まる、アリスは下ろしていた顔を上げ、葵の肩の力が抜けていく。
「フィリオお嬢様……とても嬉しそうな笑みをして、安らかに眠っ

ています……」
「フィリオは俺を救う為、最後の力を振り絞り助けてくれました……どん底にいた俺に、最後の希望を委ねて……」
そう言い残しシャイラに背を向ける愁は、更に言葉を続けた。
「シャイラさん、皆を連れて今すぐこの場から離れてください。奴は……俺がやります」
本来なら止めるはず、だがシャイラはその愁の背中を見て何も言い出せなかった。
感じる、まるで側にフィリオがいるようにも見えた。今の愁は、世界の為に戦うＳＶの戦士、英雄。
「わかりました、貴方の言う通りに従います」
フィリオの亡骸を抱いたまま機体に乗り込むシャイラは、すぐにアリス達に報告を開始した。
「アリスお嬢様、今すぐ二人を艦に戻し、この場から撤退してください」
そんなシャイラの命令に一番反抗したのは葵だった、理由は何にしろフィリオを死に至らしめようとしたのはテト。
フィリオの仇を取る、その為にはこの場に留まり、黒薔薇を破壊しテトを殺す。
「撤退はしない！俺は残る、そしてあの野郎をぶち殺すッ！そうでもしねえと俺の気が治まらないんだよッ！」
フィリオの死を楽しそうに笑った男に、背を向けて逃げるなど、今の葵には出来ないことだ。
シャイラもアリスも、今の葵を説得できるわけがない。だが愁は葵との通信を繋ぐと、口を開いた。
「葵、君も艦に戻るんだ。ここは俺に任せて――」
「任せられるわけ無えだろッ！エコを殺そうとしておいて、何言ってんだよッ！」
引っかかる葵の発言に、愁はふと言葉が漏れる。
「殺そうと？……エコは、生きてる……？」

「ああ、生きてるさ！一度はお前に殺されたが、今は生きてる！」
その葵の言葉を聞いて愁は小さく息を吐いた、自分が殺したと思っていたエコは生きていた、死んでいない。
安心、緊張が解れる、過ちを犯してしまったのに、エコは生きている。
素直に嬉しかった――だからこそ、今ここで葵を艦に返しておく必要があった。
「葵、今更俺を信じてくれなんて言わない。けど、この場だけは、俺に任せてほしいんだ」
その時、初めて今までとは別人のような愁に葵は気づく。既に愁は、ＥＲＲＯＲなどという化物ではないと。
あの頃の、暖かく、優しく、強い愁がそこにいた、ＳＶ親衛隊隊長、魅剣愁が。
「皆の気持ち、想いは……俺が纏めてぶつける、この拳で――ッ！」
伝わってくる愁の心、葵は感じる、今愁がどれほどの想いでこの場にいるのかが。
今いる愁になら、任せられる、委ねられる？……この想いを――。
「愁……」
俯いた葵の頬に伝う涙、それはこの場から撤退する悔しさの涙と、もう一つの涙が交じっていた。
止め処なく溢れる涙を拭いはしない、顔を上げ、その顔で愁と目を合わし口を開いた。
「頼んだぞ、絶対に、絶対に奴を倒して……必ず帰って来いッ！」
「ああ、約束する――絶対だ」
力強く答えた愁に、葵は涙を流しながら艦へと戻っていく。
シャイラも艦の中へ入ろうとした時、甲板の上に立っていた大和が赤いリバインを抱かかえ一緒に艦の中へと入れる。
撤退の準備にとりかかるアリス達、だがそれを見す見す逃がすほどテトは甘くない。

「先程の出力より数倍威力を上げた方が良さそうだねぇ、纏めて消えるといい……！」

レーザー砲に赤い光が次々と集まり凝縮させていくと、黒薔薇はその銃口を離れていく艦に向けた。

だがその時、雲を裂き一本の剣が回転しながら天空から落ちてくると、瞬く間に黒薔薇の握るレーザー砲を切断し破壊する。

「なっ……」

爆発を起こし破壊されたレーザー砲を手放す黒薔薇、回転する剣は斬り終えた後、主の下に帰ってくる。

「主人公っつーのは、遅れて登場するもんだ。しかも、最高のタイミングでな」

天空から急降下して降りてきた一機の機体、その下へ舞い戻る黒剣、それは何時にもまして鮮やかで綺麗な光沢を見せていた。

「大丈夫、話の大筋は理解できた。つまり……ぶっ殺せばいいんだろ？あの野郎を」

魔神が降臨した、アギト、そして大和の間に、巨大な黒剣を構える一人の黒き魔神が。

「「ああ、そうだ」」

愁と武蔵が同時に口を開いた言葉に、男は笑みを浮かべる。

魔神の姿は艦にいる兵士達にも確認出来た、あの姿を忘れる事はない。何故なら、たった一機で神に勝利した機体だから――。

ＳＶ最強の男――愁、ＮＦ最強の男――武蔵、そして……世界最強の男――甲斐斗。

役者は揃った、集う三人の狙いはただ一つ、黒薔薇に乗るテトの命。

この世の為に邪悪を消す、これまでの邪念を断ち切り、決着を付ける。

勝つか、負けるか……最強に立ちはだかる敵もまた、最強の男。

そして始まる、世界の命運を懸けた、もう一つの最終戦争が。

第92話　末に、果て

――曇天の隙間から入る僅かな日差し、東部軍事基地周辺はその微かな光に照らされていた。
辺りは静寂に包まれ、三人の英雄が黒薔薇の前に立ちはだかり互いに睨み合っている状態が続く。
だが、その静寂はテトの失笑により雰囲気を変えた。立ちはだかる三人を前に、テトは肩を震わせながら必死に笑いをこらえる。
「殺す？誰をだい？まさか僕の事を言ってるのかな？……君達は何もわかってない、でも……それで良い、その方が絶望が大きくなる」
ゆっくりと赤く輝く両手を広げていく黒薔薇、その互いの手から溢れ出る力は共鳴し、更に力を生んでいく。
「僕は今まで無数の世界を渡ってきた、君達みたいに僕に抗う人間だって山ほど見てきたよ」
赤く輝く紋章は腕から肩、そして胸部へと広がり、黒薔薇の全身にその赤い模様が浮かび上がっていく。
その異様な殺気と力に、機体の中にいた三人にも感じ取れた、今までに見せた事の無い、本当のテトの力を。
「それでも僕は生きている、何故だと思う？わかるよね？……抗う君達に無くて、僕にあるもの――」
黒薔薇の背部から表れる赤黒く輝く巨大な翼、まるで薔薇の花びらを重ね合わせたかのような形をし、目を疑わせる程鮮明で美しい。
「力さ――絶対かつ強大な力。その力の前に誰もが平伏し、消えた」
戦場に咲く一輪の薔薇、まるで戦場の血を吸って育ってきたかのような姿、これこそが開花した黒薔薇の本当の姿。
「さぁ、始めようか……もう手加減はしない、全力で消してあげるよ」
冷徹な表情でテトは口を開く、既に戦場には静けさと緊迫した空気

が広がり、殺伐としていた。
だが……そんな雰囲気をものともせず、殺伐とした空気を簡単にぶち壊したのは甲斐斗だった。
「長ったらしい話しておいて、勝手に始めようとしてんじゃねえカスがッ！」
吼える甲斐斗を笑みを浮かべながら静かに見つめる。それはテトにとって、今まで無数の世界を飛び、何度も見てきた表情の一つに過ぎない。
「テト、お前には一生わからないだろうな。俺達にあって、お前に無いもの……」
魔神が剣を構える、それに合わせアギトは拳を構え、大和も腰の鞘から刀を二本抜き取りアギト同様に構える。
「んじゃ……行くぜ？」
その瞬間、魔神の左右にいたアギトと大和は魔神から離れると、黒薔薇を囲むような陣形を取り一斉に三機の機体が走り始めた。
「いつでも来るといい。そして教えてほしいなぁ、僕に無くて、君達にあるものが、どうやって僕を倒せるかをッ！」
３機の動きを見た黒薔薇が背中に生えた翼を大きく羽ばたかせると、花びらのような形をした羽の先端を外に向け次々に赤い光を放ち始めた。
黒薔薇から全方位に放たれる赤い花びら、その拡散する無数の弾幕は障害物の無いこの場所では回避不可能。魔神は咄嗟に大剣で身を守り、大和は剣を振るい花びらを斬りおとし被弾しながらも攻撃に耐え近づいていく。
そしてただ１機だけ、そんな攻撃をものともせずに接近していく機体がいた。
アストロス・アギト、全身に浴びる程の攻撃を受けているのにも関わらず単機で黒薔薇の間近にまで来ていた。
「テト、お前だけは絶対に許さない……ッ！」
右腕を振り上げ黒薔薇目掛け振り下ろすアギト、だがテトは余裕の

笑みで愁を見つめた。
「許してほしいなんて言わないさ、好きなだけ僕を憎み、恨めばいい」
黒薔薇の背部から出てくる無数の茨、アギトの拳が黒薔薇に当たる寸前に茨が機体を絡みとると、アギトを地面に叩きつけ地面を抉りながら一気に遠ざけていく。
更に茨を伝い高圧電流を流す黒薔薇、アギト自体は何ともないが、その中にいる愁は苦しめていた。
すると、大和の大砲から放たれたＬＲＣが閃光を放ち一瞬の内に茨を飲み込みかき消すと、その光に乗じて魔神が剣を振り上げ黒薔薇に襲い掛かる。
「後悔するんだな、この俺を敵に回した事をッ！」
「無理さ、僕は後悔なんてしないから」
黒薔薇の両手に表れる赤い二本の剣、振り下ろされた黒剣を受け止めると、互いに一歩も引かず剣を振り続け始める。
黒薔薇の振るう連続攻撃、その剣捌きの中、魔神は黒き大剣を必死に振るっていくものの中々一撃を決める事が出来ない。
「どうしたんだい甲斐斗、君は最強じゃなかったのかな？」
「まぁそう焦るなよ、一瞬で殺したら面白くないだろ？」
「ふふっ、いつまで続くかなぁ。その強気な態度――――」
魔神の剣が大きく弾かれる、其の僅かな隙に狙いを定め黒薔薇の剣は魔神の胸部に向けられた。
「――――甲斐斗、悪いけど……俺は終わりにするよ」
武蔵がそう囁いた瞬間、魔神の視界から黒薔薇が姿を消す。
「む、武蔵！？お前――――！？」
魔神は向きを変えすぐさま黒薔薇を探すと、そこでは黒薔薇と大和が目にも留まらぬ速さで攻防を交わしていた。
先程まで自分が繰り広げた攻防とは遥か別の次元、甲斐斗ですら呆気に取られるほど戦い――――。
「流石だなおい……」

思わず言葉を漏らす甲斐斗、それ程まで二機の戦いは加速し、激化していた。
黒薔薇の二本の剣、大和の二本の刀、互いに高速に動き、距離を見極め剣を振るい、刀を振るう。
余裕の笑みを見せていたテトも、大和との戦いだけは少し表情が強張り、程よい緊張の中で戦いあっていた。
「たしかに君は強い……だけど、君に無い強さを僕はもっている」
黒薔薇の翼から放たれる赤い波動、瞬く間に大和を飲み込み機体を吹き飛ばす。
大きく仰け反る大和、黒薔薇の握る剣は真っ先に大和の胸部に向けられ突き出されるが、背部から飛び掛るアギトに気づいた瞬間剣を止めて後ろに振り返った。
アギトが振り下ろした右腕の拳を咄嗟に剣で受け止める黒薔薇だったが、その威力と衝撃に直撃は免れたものの剣は弾き飛ばされ機体も勢い良く吹き飛ばされる。
だが黒薔薇は一瞬の内に機体を停止させその場に着地すると、手元から離れた二本の剣をまた手元に出現させ重ね合わせた。
二本の剣は瞬時に交わり形を変えていく、そして黒薔薇の手には機体程の大きさをした巨大なキャノン砲が握られていた。
「数が多いと目障りだし、纏めて消してあげるよ」
大和は体勢を立て直し、アギトもまた地に足を着けその場から離れようとした時、黒薔薇が引き金を引くと二機をあっさり飲み込む程の巨大な赤黒い光が電磁を帯びながら放たれる。
光は更に広範囲に広がっていく、その場にあるもの全てを飲み込み、大地や空気、空間を捻じ曲げ次々に掻き消していく。
「あははははッ！死って言うのはこれ程まで呆気ないものなんだねぇ、がっかりだよ」
黒薔薇は引き金から指を離し、キャノン砲を元の二本の剣に変化させ握らせる。
残るは魔神のみ、テトはそう思い辺りを探そうとしたが、その必要

は無かった。
巨大な黒剣を握り構えるその姿は、先程光に飲み込まれたはずの射線上にいた。それもアギトと大和の前に、たった一機で。
微かに動揺するテト、たしかに光は飲み込んだものを掻き消していった。だが、魔神は光が見えた瞬間二機の前に立つと、巨大な黒剣を振り翳し見事光を斬り裂いたのだ。
魔神の立つ場所から後ろは無傷の状態で大地も二機も無事、それに気づいたテトは速攻で魔神を斬りに行こうとした時、既に武蔵は引き金を引いていた。
大和の前から瞬時に消える魔神、後方で待機していた大和は最大出力のＬＲＣを準備しており、既に黒薔薇に狙いを定め引き金を引いた後だった。
先程と同様に、眩い閃光と共に巨大な光が放たれる、真っ直ぐ黒薔薇の元へと加速しながら――。
「っ――!?」
その咄嗟の攻撃に気づき回避を試みようとしたのも束の間、黒薔薇は呆気なく光に飲み込まれる。
凄まじい衝撃が機体を伝う。光に飲み込まれた黒薔薇の装甲は次々に破壊され、溶解していく。
だが、黒薔薇の翼から放たれるその力は破損していく機体を同時に修復させ、何とかＬＲＣの攻撃を耐え抜こうとしていた。
この光から抜けられればまた機体は再生し完全に元の黒薔薇に戻る事が出来る。
そう、黒薔薇が破壊される事はまずない。幾ら傷つけようがその異常な自己再生能力には適わない。
例え腹部を斬りおとされ、翼を断たれようともまた復元できる、となると相手の狙いはパイロットのいる胸部一つに限定されていく。
そんな事誰にでもわかることだが、だからこそこれが弱点ではなくなる。
相手は胸部しか狙う事が出来ない、狙ってくると分かれば対応は十

分に可能。

――しかし、それは逆に自分の行動が把握されるのと同じ。ましてやあの三人ならその相手の行動を理解し追撃を緩めるはずがなかった。

光に飲み込まれた黒薔薇、その背後に一機の機体が立っているのに気づき振り返ると、そこにアギトは立っていた。

「ば、馬鹿なっ！この中に自ら入ってきたのか――！？」

戸惑いを見せその場から逃げ出そうとするも、既にアギトは右腕を伸ばし黒薔薇の肩を力強く掴んだ後だった。

微動だにしない右腕に、振り解こうにも完璧に固定されているため逃げる事が出来ない、テトの額に汗が滲む、光の中でアギトは、残された左腕をゆっくりと構えた。

「終わりだ、テト……俺達の信念に、貫かれろッ！」

光り輝くアギトの拳、その拳は如何なるもの貫く最強の拳――。

「っふ、ふは！君達の信念如きで、僕が負けるはずないだろッ！？」

黒薔薇の両手に二本の剣を瞬時に現れると、その剣先をアギトに向けて振り下ろす。

だが、アギトの装甲に傷を付けることなく剣が弾かれた。見る見る顔色が青ざめていくテト、その微かに怯えた瞳は、振り下ろされるアギトの渾身の一撃を見つめていた。

焦る様子を見せながらも目を見開き微かに笑みを見せたテト、そしてアギトの振り下ろされた拳は黒薔薇を貫く。

しかし、それは狙っていた胸部ではなく黒薔薇の腹部だった。

愁がそれに気づいた瞬間、黒薔薇は自らの左肩を剣で斬りおとし、胸部に右腕を残しただけの状態だけでその場から瞬時に飛び上がった。

ＬＲＣの光から脱出する事に成功した黒薔薇、機体の破損した箇所は火花を上げ大きな傷跡を残していたが、それも全て黒薔薇の能力で復元可能。

次からは油断しない、今度こそあの三人を殺す……テトはそう思いながら機体の修復を待とうとした時、一人の男の姿が脳裏を過ぎる。ＬＲＣを放った大和、機体を掴みかかったアギト、残る魔神は――――。

「後悔したか？」

気づくのが遅い、遅すぎた……既に生きた心地がしないテト、余裕の笑みも今となっては見る影も無い。

無理もない、黒剣を握りしめた魔神が、機体の目の前に立っているのだから。

「こ、後悔するのは君の方だよ甲斐斗！君がこの世にいなければ、僕も、世界も……全てはこうならずに済――――ぐっ！？」

復元されていく機体の箇所を次々に切り落としてく魔神、羽、腕、足、頭部。胸部を除き全ての部位を破壊していく。

「最後に何を言うかと思えば……聞き飽きてんだよ、そんな台詞」

魔神に斬りおとされた箇所は再生されず、無残な形で地面へと落ちていく黒薔薇。

いや、それは既に薔薇の姿でも何でもない、ただの枯れ果てた塊でしかなかった。

「く、ふ……はは、甲斐斗……君は、何も知らない……！」

魔神は地面に着地すると、胸部しか残っていない黒薔薇の元へ歩いていく。

既に武蔵、愁も察していた、この勝負が決した事を。

「神も、ＥＲＲＯＲも……既にＤｅｌｔａプロファイルは始まっている……」

頭から血が垂れるテト、それでも微かに笑い、甲斐斗を哀れむような目で見つめる。

だが甲斐斗は平然としていた、甲斐斗にとって死に間際の敵の戯れ言など聞き飽きている。

「そうか、死ね」

躊躇いも同情も何も無い、蟻一匹踏み潰す程度の簡単なこと。

魔神は剣を振り上げると、その枯れ果てた塊に剣を振り下ろした――。

――宙を舞う3機の機体、アギトは遠くに離れ待機していた艦の所まで吹き飛ばされ、魔神は東部軍事基地まで飛ばされ基地に直撃し、大和は体勢を立て直し何とか地面に着地したものの、その手に先程まで握られていた刀は消えていた。

静まり返る戦場、三人の戦いを遠くで見ていた赤城やシャイラにさえ何が起こったのか理解できない。

テトも同じだった、自分の周りに立っていた3機が一瞬にして吹き飛ばされたのだ。

そして気づく、先程まで何も立っていなかった場所に立つ、1機の機体を。

機体の色は黒く、形はあのＮＦのリバインに良く似た機体。

何の武装もしておらず、両手にさえ何の武器も握ってない機体が黒薔薇の前に立っていた。

「リバイン……？どうして、こんな所に……？」

テトが不思議がっていると、突如強制的に通信が繋がれ自分の姿を相手に見られてしまう。

「僕の機体に通信を、何故――ッ！？」

相手がテトの姿を見たと同様に、テトもまた相手の姿が確認できた。

忘れるはずがない、この見た目、雰囲気、感じ……全てがあの時の男に似ている。

突如手にした最強の力で、自分から全てを奪い、人生を、世界を、捻じ曲げてきた男……。

アギトは倒れた機体を立ち上がらせていると、基地の中にまで吹き飛ばされた魔神が姿をあらわす。

「痛ってーなおい、一体何が起こったんだ……？」

甲斐斗が黒薔薇のいた方に目をやると、そこにはリバインと良く似た機体が立っているのが見えた。

するとその黒色をした機体は黒薔薇に片手を向けると、黒薔薇は瞬時に宙に浮き、また瞬時に地面に叩きつけられる。
まるでそれが始まりの合図かのように、黒薔薇は何度も何度も地面に叩きつけられていく。
その速さは目で追うことすらできず、地面に叩きつける轟音と共に黒薔薇の原型が変わり果てる。
黒薔薇の中にいるテトを一部始終見る男、そこには既に真っ赤に染まった操縦席しか映っていない。
男は黒薔薇の操縦席を見渡し微かに腕と足、頭部の肉片が確認できると、静かに通信を終えた。
辺りに散らばる黒薔薇の残骸、その中心で機体は向けていた腕を静かに下ろした時、男の乗っていた機体から突如強制的に魔神に通信が繋げられた。
甲斐斗の姿は恐らく相手に見えている、だが甲斐斗からはモニターが真っ暗で相手の姿が確認できない。
「お前、誰だ……」
殺気を漂わせ、モニターを睨み付ける甲斐斗、その声はその場にいた者にも聞こえた、武蔵、愁、赤城……誰もがその答えを静かに待つ。
そして映像が映し出された、操縦席に座る、ＮＦのパイロットスーツを身に纏った一人の青年の姿。
その姿に甲斐斗は目を見開き言葉を失うが、対照に青年はそんな相手の表情を見て小さな笑みを見せると、甲斐斗の問いに静かに答えた。
「僕はカイト、最強の男さ」

第９３話　醜い、報い

――終わらせたはずだった。それぞれの想いを胸に三人が力を合わせテトを倒した。
人類にとって強大な敵が一人消えた……それなのに、脅威は消えたはずなのに、未だ操縦桿から手が離せない。
東部軍事基地周辺は異様な静けさに包まれていた、誰一人動こうとしない……いや、動けなかった。
異様な雰囲気を漂わせる１機の黒い機体に、甲斐斗は操縦者の姿を見て唖然としたまま。
その表情を見て微かに笑みを見せるもう一人のカイト。
カイト・アステルは既に死んだと思っていた甲斐斗にとって、死人が目の前に現れたのだから驚くのも無理はない。
「驚きすぎだよ……死んでると思ってました？……僕はこうして元気にしてるのに」
そう言って手を振って見せるアステル、そして目線を甲斐斗から赤城に向けて言葉を続けた。
「赤城少佐、お久しぶりです……今日は、訳あってここに来ました」
黒いリバインが黒薔薇だった鉄の塊を見つめ、その塊に手を翳す。
「この人を殺しにきたんです、既に死んでますけどね……」
軽く笑みを見せるアステルだが、赤城もまた甲斐斗同様に唖然としたまま何も言えない。
目が笑っていないから、アステルの瞳から感じられる邪悪と狂気は戦場にいた三人にも感じとれた。
それは甲斐斗が一番良く理解できた、アステルの壊れた姿を見た事がある甲斐斗にとって、最悪の展開が予想される。
「あれ？……どうして、伊達中尉は生きてるんですか……？」
アステルから大和に乗る武蔵に向けて放たれた言葉に、武蔵が口を開こうとしたが、アステルは返事を聞く事無く話を進める。

「死んだはずですよね？死人は生き返りませんよ……ね？」
強まる狂気、殺気……感じる、覇気とはまた別の憎悪に満ちた邪気を。
大和は咄嗟に腰に掛けられている二本の刀に手を翳した時、黒いリバインは両手を開き重ね合わせるようにして構えた。
「消えてください」
リバインの手の中に一瞬で作られる黒い球体、強力な電磁を漂わせ周りの空間を歪めていく。
そしてリバインが両手を大和の方に突き出すと、その球体は簡単に発射され、地面を抉りながら真っ直ぐ大和の方へ飛んでいく。
当然大和は回避を試みるが、黒い球体は大きく軌道を変えるとまた大和の方へ近づいていく。
もはや直撃は免れない距離にまで近づいてきていた球体、大和は咄嗟に左手に持った刀を球体目掛けて投げ飛ばす、刀が球体に直撃した瞬間一瞬にして刀は分解され掻き消されていく。
何とか迫ってくる球体を掻き消す事が出来たが、大和がそれを確認した時、背後から只ならぬ気配を感じた。
「消えてくださいよ、ねえ」
武蔵の額に汗が滲む、先程まで遠くにいたはずの黒いリバインは大和の背後に立っている、それも武蔵に気づかれることなく……。
すぐさまリバインから距離を取り振り返る大和、だがそこにいるはずのリバインがいない。
「どうしたんですか？伊達中尉、僕はここですよ？」
目の前にいるはずリバインは背後にいた、それも先程同様気づかれることも悟られることもなく……。
大和は後ろに振り向くと同時に右手に握る刀を振り下ろすが、そこにリバインの姿は無く、数百メートル先で腕を組み地上から微かに浮いた状態でリバインは停止していた。
「伊達中尉って強いですよね、僕は模擬戦で勝った事なんて一度もありませんでしたから……」

一方的な会話、まるで回りは眼中に無いように、一対一で武蔵に話し掛け続ける。
「アステル、君は……」
武蔵は眉間にシワをよせアステルを見つめた、何かを見定めるかのように、じっと――。
「行きますよ？」
アステルの声が聞こえた時、先程まで遠く離れていたはずのリバインは大和の目に前に立っていた。
目で追えぬ速さ、瞬きをした瞬間に既にそれは起きているのだから、誰も確認することが出来ない。
素早くに刀を構え応戦しようとする大和、崩れ落ちる右腕、吹き飛ばされる左肩、大砲は？がれ、吹き飛ばされる。
「ぐっ、くうぅぅ――――！？」
あの大和が呆気無く敗れた、足しか残っていない大和は地面に倒れたまま起き上がることさえ出来ない。
「止めろ！武蔵は味方だぞ！？」
咄嗟に赤城が声を上げアステルを止めようとしたが、既にアステルの顔からは笑みが消えていた。
「赤城少佐、ずるいですよ……貴方だけ大切な人が戻ってくるなんて、ずるい……」
黒く濁った瞳、光は感じられず、その暗い視線は赤城の心を深く突き刺した。
「アステル……？」
その時、アギトは加速していた。事の状況によって選択された。このままだと大和が破壊される、それを阻止する為にアギトは黒いリバインに飛び掛り拳を振り上げていた。
「僕と……戦いたいの？……いいよ」
アギトの目の前から一瞬で消えるリバインは、当然のようにアギトの背後に立っていた。
そして右手をアギトの方に向けると、今度は手の平に一枚の円形を

した刃が黒い光で作り出されていく。
「すごいよね？」
黒い刃は空間を切り裂きながらアギトに向けて放たれた。
それを見たアギトは咄嗟に右腕を突き出し黒い刃を砕こうとするが、刃は拳に直撃すると強烈な火花を放ち始める。
「砕けない！？」
それ所かアギトの拳を少しずつ切り裂き侵入してくる、咄嗟に右腕を振り払い刃を払い落とすが、既にアギトの拳には大きな傷が付いていた。
「硬いね……でものろい、亀みたいな機体だ」
微かに笑うアステル、先程まで目の前にいたのにも関わらず、既にリバインはアギトの背後に立っている。
そしてふとアギトの背中に手を当てるリバイン、それはアギトの敗北を意味した。
「さよなら」
空気、空間が震えそれは衝撃波と化した。
アギトはまるで石ころのように地上を転がり砂塵を巻き上げながら吹き飛ばされ、東部軍事基地へと直撃して動きを止めた。
またも静まり返る戦場、大和も倒され、アギトも倒され、残るは魔神1機のみ。
そして甲斐斗が息を呑み黒剣を構えるのを見て、アステルは面白そうに喋り始める。
「甲斐斗、僕は最強になったんだよ……」
「っけ、何が最強だ。お前自身はただの雑魚――ッ！？」
一瞬にして魔神の目の前に現れるリバイン、魔神は剣を振る暇も無く素手でリバインに剣を振り払われると、頭を鷲掴みされ勢いよく地上に投げつけられる。
下にあった基地の格納庫の屋根を突き破り地面へ叩きつけられる魔神、体勢を立て直そうとするが既に目の前に来ているリバインに右足を掴まれると、まるで遊ばれるかのように振り回され、投げ飛ば

される。
「くそっ！調子のりやがって……ぐぁっ！？」
投げ飛ばされた魔神は地面に着地する間もなく空中で待機していたリバインに腕を掴まれると、また振り回され基地へと投げ飛ばされた。
もはや玩具扱いの魔神、一瞬で殺さず、次々に痛みと傷を与えられ外側と内側両方から崩し壊していく。
「待てアステル！何故お前が私達を攻撃するんだ！？お前は私達の仲間だろ！？」
すぐさま赤城が止めようとアステルとの通信を試みるが、アステルは手を休めず魔神を嬲りながら赤城と目を合わす。
「仲間？僕と貴方が……仲間？何、言ってるんですか……赤城少佐……？」
「お前こそ何を言っている！同じこの世界の為に戦ってきた仲間だろ！？今すぐ攻撃を止めろッ！」
赤城の言葉にリバインの手が止まる、既に装甲は剥がれ落ち無残な状態の魔神は動くことすらできない。
「世界の為に……戦ってきた……？」
「ああそうだ！これからも私達は力を合わせて世界の為に――」
赤城の乗るリバインに衝撃が走る、機体が乗っている戦艦の装甲が次々に吹き飛ばされると、赤いリバインは引き寄せられるように宙に浮き黒いリバインの元まで連れてこられた。
赤城は必死に衝撃に耐え抜こうとするが、突如ハッチが吹き飛ばされると、操縦席の中に強引にリバインの手が入ってくる。
それを見た甲斐斗と武蔵は愕然とし目の色が変わると、二人は即効で機体を起こし黒いリバインの元へ向かった。
だがもう遅い、操縦席から引きずりだされた赤城は黒いリバインの手に握られもがき苦しんでいる。
「う、あぁっ！？……アステル、どうして……？」
「世界なんてどうでもいいんです……。僕は姉さんや、ルフィスの

為に戦ってきた、けど……もう二人はいません……」
リバインの手に微かに力が入る、赤城は声を上げ必死に逃げようと体を動かすものの、握られる力は更に強まる。
「う〝、ぐぁ〝あああぁあぁあああ！？」
叫び声を上げる赤城を見ても、アステルは表情を変えずに見つめ続けていた。
その間にも魔神と大和は全速力で赤城の元へ向かっていた、もはや説得など通用しない、だとしたら力ずくで止めるしかない。
「痛いですよね、苦しいですよね……姉さんもそう、ルフィスだってそうやって死にました、だから赤城少佐……貴方も死んでください」
「あっ……あ、ぁ――――」
先程までもがき苦しんでいた赤城の体は静かに動くのを止めた、目を閉じ、首が傾く。
「さよなら、赤城さん」
嘗て共に戦ってきた仲間だったはず、赤城はアステルを信じたが、アステルは誰も信じていない。
もうどうでもよくなった、全てを失い、それで得た力があれば、それでもういい。
身動き一つしない赤城を見て、黒いリバインは簡単にその身を投げ捨てる。
「「赤城ぃいいいいいいッ！！！」」
大和のハッチを開き操縦席から飛び出す武蔵、宙を舞う赤城の体を見事に受け止めると、魔神は武蔵に向けて手を伸ばす。
広げる魔神の手を見て武蔵は赤城を抱かかえながら着地すると、武蔵は大声を上げて赤城の名前を呼び、必死に叫び続ける。
「赤城ッ！しっかりするんだ！赤城……赤城！……っ……！」
動かない赤城を抱きしめ叫び続ける武蔵、それを見てもなおアステルの表情は揺らがない。
……震えが止まらない、赤城を抱き締める武蔵の腕が、操縦桿を握

り締める甲斐斗の腕が――――。
「ねえ……赤城さん、死んだ？」
そのアステルの言葉で、二人の怒りは頂点に達した。
「てめえ……ッ！」
鬼のような目付きでアステルを睨みつける甲斐斗……だが、どんなに怒りが募っても今この状況を打開する方法が見つからない。
アステルの乗る正体不明の機体はここにいる全ての機体の性能を遥かに凌駕している。
勝てない……これ程まで怒り苦しみ、戦いたいと願うのに、それすら叶わない。
この目か流れる涙は何だ、悲しみ？いや、悔しさ？何も出来ない己の弱さか……？
「でも、綺麗に死ぬなんて僕は許さない……もっとぐちゃぐちゃにしないと――――？」
そう言ってアステルは自分の機体を動かそうとした瞬間、黒いリバインは一瞬にして無数のフェアリーに囲まれた。
それを見てアステルはリバインを咄嗟に浮上させるが、無数のフェアリーはリバインを追跡し一斉に攻撃を仕掛ける。
襲い掛かるフェアリーの数は尋常ではなく、軽く２０機を超えていた。更に何種類も存在していた、レーザーを放ち、サーベルで襲い、様々な波状攻撃がリバインに向けて行われる。
神速で立ち回り全ての攻撃を回避していくリバインだが、その数の多さに攻撃をする隙すら与えられない。
「あらあら、機体が最強でも。乗ってる人が最弱じゃあ最悪ね」
聞き覚えのある声が聞こえてくる、武蔵と甲斐斗が前方を見るとそこにはいた、大切な仲間が。
「心配しないで。赤ちゃんは生きてる、気を失ってるだけよ」
羽衣から人間を見ればその人間が生命反応など簡単に確認できる。
そして、この美しき最高の機体、それに乗る女性もまた気品に満ち溢れ強い力を持つ。

「神楽――――」
名前を呟き、赤城を抱き締めながら武蔵は涙を流すその目でじっと羽衣を見つめた。
だが状況は一変する、リバインを狙っていたフェアリーが次々に破壊され崩れ落ちていく。
「神楽さん、貴方にはわかりますよね？……今の僕が、最強だってこと……」
「愚かで哀れな貴方には、最強の意味が理解できてないみたいね」
その言葉で、互いが次の動きを見せようとした時、全機体に向けて強制的にある男からの通信が繋がれた。

――――『無意味な争いはそこまでだ、アステル』
騎佐久の声がアステルの動きを止めた。既に羽衣の目の前にまで来ていたリバインも、その声を聞いてそっと離れていく。
「騎佐久さん、無意味なんて言わないでください。僕は……」
『アステル、私が下した命令は無事実行できたはずだ、戻って来い』
「……わかりました、けど……あの男だけは殺していいですよね……？」
そう言って魔神を指差すリバインに、騎佐久は眉一つ動かさずに口を開く。
『人類がＥＲＲＯＲに勝利した後なら煮るなり焼くなり好きにしていい、今は戻れ』
そこで通信は終えた、アステルは小さなため息を吐くと、憎悪と怒りの目で甲斐斗に睨まれているにも関わらず小さな笑みを見せ口を開いた。
「甲斐斗、君は今から死ぬまで僕を恐れ、怯えるんだ……君の周りにいる人達は……僕が一人残らず消す。そしてこの世からＥＲＲＯＲが消えた後、必ず殺しに行くから……ね」
アステルがそう甲斐斗に言い終えた後、モニターからアステルの映像が消えると、その場にいたはずの黒い黒いリバインも既に姿を消

していた。

――残されたものは無い。

この虚無は何なのか……荒れ果てた大地の上で、全ての機体は停止していた。

羽衣も大和も、アギトも魔神も。……冷たい風が砂塵を舞い上げ、無音の状態が辺りに続く。

動かない赤城の頬に一滴の水が落ちると、それが始まりかのように突如辺りに雨が降りはじめる。

冷たい水は容赦なく降り注ぐ、武蔵は赤城が濡れないように抱かかえると、甲斐斗もまた魔神の両手を動かし二人を優しく包み込む。

「やっと終わったと思えばこの様か……酷いもんだ……つくづく嫌になる……」

甲斐斗がふと言葉を漏らした後、東部軍事基地の方へと機体を進ませた。

それに合わせてアギトや羽衣、遠くで待機していた戦艦もまた東部軍事基地へと向かっていく。

……結局、何が起きたのだろうか。

由梨音は重傷を負い、赤城とエコは意識不明、フィリオは死んだ、テトも死んだ、だが終えない、混沌の憎しみ、争い。

突如現れたアステル、そしてその強大かつ最高の機体の力、まさに最強だった。

武蔵、愁、甲斐斗……三人がいとも簡単に倒され、殺されかけたのだから。

争いは終わらない、終われない……血で染まり、肉を断たれ、骨砕かれても、戦場は消えない、憎しみは消えない、争いは止まない。

連鎖は続く、それは負の連鎖なのだろうか。

心、人の思想は簡単に変わり、感情などある時から、既に抱いている。

――一つの争いは終わった、たった一つの争いが。
甲斐斗達が基地に戻った後、赤城は東部軍事基地にある医務室へと運ばれ、未だに気を失っているものの今は暖かな部屋で安静にしていた。その部屋にはエコもいた、赤城同様に気を失っており、赤城の隣にあるベットの上で静かに眠っている。
そして、医務室と同じ階にある会議室には、真剣な面持ち椅子に座る甲斐斗と武蔵がいた。
「こんな所にいていいのか？赤城の側にいてやってもいいんだぞ」
腕を組み椅子の背にもたれかかりながら喋る甲斐斗の言葉に、武蔵は小さな笑みを見せたがすぐにまた寂しそうな表情に戻る。
「ありがとう甲斐斗。でも俺は先に話さなければいけないんだ、そうしないと、きっと彼女は僕を――」
会議室の扉が開かれる、そこには白衣に身を包んだ神楽が立っており、ゆっくりと会議室に入ってくる、
右手に拳銃を握り締めたまま……。
そして銃口は真っ先に武蔵に向けられた、もはや動揺など誰も見せない、甲斐斗も武蔵も、この張り詰めた空気の中で覚悟していた。
「貴方は誰か、答えなさい」
「伊達武蔵……だった男さ」
視線を下げ、寂しげな表情を浮かべる武蔵に、神楽は唇をかみ締めると銃を向けたまま武蔵に近づいていく。
「……今は違うのね、じゃあ今の貴方は誰なのか、教えてもらおうかしら」
引き金に指を掛けたままの神楽、いつ撃たれてもおかしくない。
だが甲斐斗と武蔵はその状況を見ても冷静な面持ちで椅子に座っている。
……神楽にとって泣くほど嬉しいはずなのに、誰よりも愛している人が生きていたというのに、何故こんな結果が現実なのか、甲斐斗は目を逸らしたくなるほどの状況を我慢し、二人を見つめた。
「ＥＲＲＯＲさ」

武蔵の呟いた一言に、神楽の表情が一気に険しくなると、早歩きで武蔵の背後に移動し武蔵の後頭部に銃口を突きつけた。
「どういう事なのか、今ここで全て話しなさいッ！ＥＤＰの時から今まで、貴方は何をしていたのッ！？」
何故こうなってしまった……本来なら、二人は喜び合うはずなのに、今神楽は、愛する人に銃をつきつけている。
引き金に掛けてある神楽の指は微かに震えていた、目に涙が溜まり、その表情を見られまいと武蔵の背後に立っている。
そんな神楽の態度を、まるで理解したかのように武蔵は目を瞑ると、決して後ろに振り向こうとしない。
「そのつもりだよ、神楽。俺が二人に姿を見せてしまった以上、全て話すしかないからね……」
ゆっくりと目を開けると、武蔵は俯きながら語りだした、ＥＤＰから今まで自分に起きた出来事の、全てを――。

第９４話　全ての、為

――――『ＥｒｒｏｒＤｅｌｅｔｅＰｒｏｇｒａｍ』

あの時、赤城達を助ける為にたった１機でＥＲＲＯＲの巣の内部へと侵入した大和はＧＡＴＥ奥深くにまで来ていた。

もはや脱出は不可能、辺りからは無数の触手が機体に向って伸びてくる。

最初から死は覚悟していたが、いざ死が迫ると悔いは残る、今まで出会ってきた人達の笑みがもう見れなくなる……でも、その笑みを守れるのなら、それでいいのかもしれない。

上空から迫る閃光、武蔵は自分の死と共にＥＤＰ成功を悟った。

目を瞑り死を待つ、機体は激しく揺れ、いつ自分が死ぬのか額に汗を滲ませながら待っていた。

……そしてゆっくりと目蓋が開いた、もう死んだのか、それとも死の直前なのか、武蔵にはわからない。よりぼやけていた視界が鮮明に映り、見えていく、自分の機体が凄まじい勢いで触手に引っ張られていく光景を。

「何だ、これは……！？」

急いで機体を動かそうと操縦桿を握る武蔵、だが機体は既に無数の触手に絡まれ身動きが取れない状態でいた。

真っ暗な洞窟の中をひたすら引きずられ続ける大和、武蔵は操縦席に隠してある拳銃を手に取ると、それを自分のこめかみに当てた。

どうせ死ぬ、助かる道は無い。

一度死を覚悟したのだから、引き金だって引ける……武蔵はそう思っていたが、結局大和が止まるまで拳銃を握り締めたまま引き金を引く事が出来なかった。

そして武蔵は見てしまう、洞窟の奥に隠された、ある空間を。

真っ暗だった洞窟を抜けると、そこは血肉の壁と床で出来た巨大な空間が広がっていた。

壁や床にある血肉の塊が赤い光で辺りを照らし、壁や地面には何千本もの血管のような物が伸びている。
まるで生き物の体内かのような場所に、武蔵は口を半開きにし愕然とした表情で固まっていた。
ＥＲＲＯＲの巣は一つではない、更に巨大な巣があった事、そしてこの血肉の空間、夢か幻かと思える程の光景……。
（ここは……地獄、か……？）
導かれるかのようにその空間を漂う大和、そして触手が動きを止めた時、大和はある物体の前に連れてこられていた。
機体より数倍大きなその血肉の塊は、目蓋を開けるかのように肉が縦に裂けていくと、そこから巨大な瞳が姿を見せる。
目玉は辺りを見渡すかのように無造作に動き、やがて目の前にいる大和へと視線を向けた。
機体を遥かに上回る巨大な瞳に見つめられ、身動き一つ取れない武蔵……するとその時、機体を固定していた触手が一斉に大和の装甲に穴を開け内部に侵入し始める。
それは触手が操縦席にいる武蔵に辿り着くまであっという間の事だった。
背部、そして目の前から赤く細い触手が無数に現れ、操縦席に座る武蔵の手足や首に次々に巻き付き固定し始める。
握り締めていた銃は足元に落ち、武蔵は両手足や体、頭を固定され、ついに自殺という選択も消えてしまう。
全身を包む恐怖、今から自分が何をされるのか、想像以上の事が待っているに違いない、武蔵と言えどこの状況に立たされ平静を保っていられなかった。
そして首元に何かが触れる感触がした瞬間、針のような物が皮膚に穴を開け体内に侵入してくるのが伝わってきた。
言いようの無い恐怖、逃げ場など無い。
刺された痛みより、首から背中を通り、全身に伸び蠢いていく触手の感触が伝わってくる事に武蔵の恐怖は絶頂まで来ていた。

動けない……気づけば手足の指は完全に動かず、体の神経が一本も反応しない。
何も感じない、熱くも、冷たくも、痛くも、何も。もう体内のどこにまで触手が侵入してきたのかも武蔵にはわからない。
瞬き一つした瞬間、視界が微かにぼやけ、無意識に目蓋が閉じていく。
死が来たのか……今となっては死の恐怖など無く、まるで眠るように武蔵は自らの意思で目蓋を閉じた。

――夢？世界が平和でありますように？
人間の平和は誰の為の平和？人の為の、人の、生き物の命の平和？
存在が、間違っている、そもそも、存在自体が。
何の為の、誰の為の、世界？宇宙、地球、生命体、意味は？存在する、意味は？
動物、生物、生命体、命……知恵が生まれ、感情が生まれ、知能が発達し、繁殖する……が、それはほんの一握り。
そのほんの一握りの生命体が醜く、世界は汚染され、数少ない世界が身勝手な生物によって、消えていく。
過ち、生まれてきてしまったものの、誤り。
―ＥＲＲＯＲ―
―ＥＲＲＯＲ―
―ＥＲＲＯＲ―
―ＥＲＲ……

だから削除していく。誤りは全て消し、正常に戻す為、また新たな結果を出す。
それが、私達の役目、なのだから。仕方の無い、こと。これも、平和の、為……。

――「違う……間違っているッ！」

咄嗟に声が出たと思うと、武蔵の目は覚めていた。
そしてその声を聞いた途端、驚いたかのように武蔵の体を取り巻く触手が一斉に操縦席から離れていく。
「全てが間違いだ……お前達のしている事は、この世の道理に反している……！」
巨大な瞳はじっと武蔵を見つめるが、武蔵は臆せず言葉を続けた。
「俺達人間がそんなに醜いか？そんなに汚いか！？人間の存在をこの世の誤りだと勝手に決め付け、罪の無い人々の命を弄び、冷酷に殺していくお前達の方が遥かに醜い生物だッ！」
武蔵が怒りを爆発させた瞬間、血肉の塊は鈍く重い咆哮をすると、全身から触手を伸ばし、その巨大な目を見開き血走った目で武蔵を睨みつける。
だが、そんな威嚇に武蔵は顔色を変えず、真っ直ぐな瞳はじっとその化物を睨みつけていた。
「……たしかに人間は過ちを繰り返し続けてきた。戦争を起こし、空気や水を汚染させ、動物を殺し、草木を枯らす……だが、それは全ての人間か？違う、人は学んだ。そして世界の為に、平和の為に、数多くの命の為に行動する人達もいる！人の過ちを正すのは人、そうやって人類は今まで繁栄し、何千年もの文明を築いてきたんだ。……お前達身勝手な生物に、人類を消されなければならない理由など一切無いッ！」
武蔵は言い切った、その言葉に迷いは無い。
躊躇いもなくこんな事が言えるのは武蔵がこの世界の事をどれだけ思ってきたかがわかる。
武蔵の言葉が化物に伝わっているかすらかわからないが、言いたい事は言えた、それに先程とは違い既に死は覚悟している。
『ふむ……たしかに、あんたの言う通りかもしれん』
「は？」
一瞬呆気にとられた武蔵、機体の目の前には小汚い格好をした白く長い髭をの老人が杖を持ち立っている。

『でも、そうするように私は言われた』
瞬きをすると、機体の目の前に立っていた老人は姿を消し、そこにはＢＮの軍服を身に纏った一人の女性が立っている。
『だってにんげんはけさないと、きたないいきものだから』
虫取り網を片手に麦藁帽子を被った一人の少年、先程までいた女性はどこにもいない。
『貴方達人間は害を与える生物を殺しますよね。例えばゴキブリ、ハエ、蚊などといった害虫を人は躊躇わずに殺す。それと同じ、我々も害を与える生物を駆除してるだけです』
一冊の本を片手に眼鏡を掛けた青年が笑顔を振るまうと、手に持っている本のページを捲り始める。
『君達人間は動物を食べるよね、牛や豚、鳥に魚、それと同じ扱いを人間にしただけだよ。それを酷いって言うの？仕方ないんだよね、生きる為に食べるんだから、だから俺達が人間を食べたって、たって、たって、たって――いいよね？』
ＮＦの軍服を身に纏う一人の男、伊達武蔵が立っていた、自分と全く同じ姿をしたその男に、操縦席にいる武蔵は唖然としていた。
今目の前で何が起きたのか、理解するまでにそう長くはかからない。
「良いわけ、ないだろ……」
『どうして？人も同じ事をしてるだろ？』
「同じ事？本気で言ってるのか？お前達のしている事と、俺達人間がしている事は、本当に同じ事か？」
その問いに武蔵の姿をした化物の口が止まると、顔を俯かせ寂しそうな表情を見せると、また武蔵の方を見つめて口を開いた。
『平和の為にさ、全ての生物の平和の為に……』
そこで言葉は終わった、まるで何かを理解したかのように、また俯き暗い表情を見せ、武蔵の姿から一変して一人の女性の姿へと変わる。
「なっ！？……あか、ぎ……」
『私はこの世に下りて世界を見てきた、そしてこの世界の中で最も

醜い生物は人間だと感じた。それは私だけではない、他の仲間もそう……だけど、私はこの世界の、本当の人間の姿を見てきた』

「本当の、姿……？」

『私は仲間が殺してきた人間の死骸を貰い、その人間の脳、記憶を全て見てきた、何人もの人間、子供に大人、他の生物の記憶も見てきた……私は学んだ、そして考えた、人間という生物は、本当に消さなくてはならない生物なのか、と』

赤城の姿をした化物は血肉の上を歩き、ゆっくりと大和の元へ近づいていく。

『それから学び続けた、人間の記憶を辿り、人間という生物を知った。私は、感情や、心というものがどういったものなのか、私だけが理解できるようになってきた』

「私だけ……？」

『他の仲間は違う、人間の心を知り、学んでも。それはいかに人間を利用できるか、使えるか、殺せるか……それぐらいしか考えない、私は違う。私は人間という生物が、この世の誤りなのかどうかわからなくなってきた』

『わからない、先程のお前の戦いを見ていたが、お前は何故自らの命を捨ててまで人間を助けた。私には理解できない、仲間の為に自分を犠牲にする生物の心が、理解できない』

段々とこの化物に対しての恐怖心が薄れていく、このＥＲＲＯＲは、他のＥＲＲＯＲと違って人語を使い会話が出来る。

今までＥＲＲＯＲと対話した事がある人間はいない、そもそも言葉が通じないはずの生物。

だがこのＥＲＲＯＲは人間を分析、解析することにより学習した、唯一人間を理解しようと試みたＥＲＲＯＲ。

『教えてほしい、魂とは何だ、思いとは何だ、情とは何だ、愛とは何だ？私にはあるのか？それがわからない私は、生物なのか？』

まるで自問するかのように赤城の姿をした化物は次々に武蔵に向か

って聞いてくる。
「それを教える前に一つ教えろ……お前は、人類の敵か、味方か、どっちだ」
『私は人間を殺したいとは……今は思わない。私は人間が知りたい、人間を理解したい、だからお前をここに連れてきた。生きた人間、私に相応しい人間を――』
触手が次々に大和に絡みつき、先程のように機体の内部に侵入し武蔵の体を固定していく。
『今からお前は私の物、これから私に人間を教えろ、人間の事ならなんでもいい、全てだ』
触手は数を増し続け機体諸共武蔵を包み込んでいく。抗う事は出来ない、受け入れるしかない。
いや、武蔵は既に抗う事を止めて受け入れていた、今ある現実、今いる自分の立場を――。

――「それから俺はＥＲＲＯＲの奴隷として生かされ続けてるよ。皮肉だね、命を捨てて消したはずのＥＲＲＯＲに、命を助けられるなんて……」
武蔵が長い話を終えた後、甲斐斗と神楽はじっと固まったまま動けずにいた。
明らかにされた新たな真実、人間を理解しようと試みるＥＲＲＯＲ、ＥＲＲＯＲの言う仲間達の目的。
だが深まる謎も大きくなる、ＥＲＲＯＲとは何か、どこから生まれたのか、そしてＥＲＲＯＲは誰に、何に……人間を消すように言われたのか。
「俺の肉体を勝手に利用し、死のうと思い自殺を試みても体が言う事も聞かず、俺はこの救われた命で何とかＥＲＲＯＲを説得しようとこの世界や生物について色々と話し理解してもらおうとした。だが……それはたった一発のミサイルで全て無駄になってしまったんだ……」

たった一発のミサイル、瞬時に脳裏に過ぎる『核』の文字に、神楽の手から拳銃が落ちる。

「ＥＲＲＯＲが見た核の脅威、全ての生命を根絶やすその力を見てＥＲＲＯＲは恐れ、怒り、人間をこの世界にとって有害と決めた」

ＥＲＲＯＲに人間の素晴らしさを理解してもらおうとしていた努力、その武蔵の努力が全てが水の泡に消えた。

いや、消されたのだ。これでまた一つ人類滅亡への加速が進む、唯一のＥＲＲＯＲはもう、人類の敵と化しているのだから。

「俺がここに来たのは、一本の刀を取りにきただけなんだ。そこに皆がいるなんて、本当思ってもいなかったよ……」

ゆっくりと席を立ち上がる武蔵、そのまま部屋の出口へと一歩ずつ歩いていく。

「最後に赤城を守れて、神楽が無事でいてくれて、本当に良かった……」

ふと足を止める武蔵、少し横に振り向き机に足を上げて座る甲斐斗を見つめて武蔵は口を開いた。

「赤城の所に行ってくるよ、その後刀を取りにいこうかな――それじゃ」

武蔵はそう言い終えた後、一歩前に踏み出そうと足を上げたが、すぐにまたその場に下ろしてしまう。

動けなかった、後ろから強く抱き締められ、一歩も動かしてくれない。

眼鏡を掛けず、涙で濡れた顔を武蔵の背に押し付け必死に武蔵を止める神楽がそこにいた。

決して放そうとせず、じっと武蔵の背中に抱きついたまま離れない。

「……神楽、俺は行くよ」

「嫌……」

即答された返事、強引に神楽を引き離すわけにもいかず武蔵はもう一度口を開こうとする。

「神楽――」

「嫌ッ！絶対に嫌ぁ！もう放さない、絶対に、絶対にぃ……」
震える腕で必死に武蔵を抱き締める神楽の目からは涙が溢れ出ていた、今まで強気だった神楽が今、一人のか弱き少女に見える。
「せっかく会えたのにっ、伊達君と別れるのはもう嫌……お願い、ずっと側にいて……ずっと隣にいてよぉ……お願いだから……」
今まで武蔵にさえ見せた事の無い神楽の姿、本音に、武蔵は両手を強く握り締め必死に我慢しようとしていた。
武蔵だってそうだ、離れたくない、側にいたい、神楽と同じ気持ちだ。
だがそれは叶わない現実、既に武蔵は人間じゃない、ＥＲＲＯＲと化し、ＥＲＲＯＲに利用される者、人類の敵。
ずっと側にいたくても、それをＥＲＲＯＲが許さない。それにもう時間が無いから、自由に動ける、時間が……。
「だから会いたくなかったんだ……。会ってしまったら、二人にまた悲しい思いをさせてしまうから……」
武蔵は神楽の手を掴みそっと自分の体から放すと、すぐさま振り返り涙を流す神楽を優しく抱き締める。
その途端、神楽は武蔵の胸元で咽び、泣き始めた。今まで耐えてきたものが崩壊したかのように、ただ声を上げて泣き武蔵を抱き締め返す。
これで最後、これが最後――神楽はこんなにも自分の事を思ってくれている、神楽を抱き締めていた武蔵の目からも自然に涙が零れ落ち、目を瞑った――。
一部始終を見ていた甲斐斗が席を立つ、両ポケットに手を入れ、無言で出口まで歩いていく。
その甲斐斗の顔は何かを決心したかのような表情だった、目はしっかりと前を見つめ、出口の前で武蔵の横をすれ違う時も、視線が揺らぐ事はない。
部屋から出た甲斐斗には行かなければならない場所があった、そして実行しなければならない。

確かに甲斐斗は受け取った、武蔵の、人間の頃の武蔵の最後の頼み。
部屋を出る前に甲斐斗に向けた視線、その武蔵の視線は甲斐斗に訴えかけていた。
赤城を最後に守れた……武蔵のこの一言が意味する事、今の甲斐斗には簡単に理解できる。
「最後に別れを言いに来たか……わかってるさ、武蔵。お前が刀を取った時、俺がこの手で終わらしてやるよ――」

――その頃、東部軍事基地の格納庫内に止めてあるＳＶの艦内では、ＳＶ親衛隊の隊長の軍服を脱ぎ終えた愁がある部屋で跪いていた。
「全ては俺の責任です、如何なる処分も受けます」
愁の目の前にはアリスが立っており、その横にはシャイラもいる。
そして部屋の奥にはもう二度と動くことないフィリオが花束の中で眠っていた。
既に涙を流し目を赤らめていたアリスは跪く愁を見ても、何も言えずに眠りについているフィリオに視線を向けてしまう。
「俺はフィリオを助けられなかった。そして、あの男が死んだ今、俺にはもう――」
「待ちなさいよ……」
ふと言葉を漏らすアリス、そして次の瞬間力強く愁に歩み寄り胸倉を掴むと、愁に顔を上げさせた。
「このまま逃げようなんてそうはいかないのよッ！？貴方が犯した罪はＳＶの罪、お姉様を守れなかったのは私達の責任でもあるの！……一人だけ罰を受けて逃げようだなんてそうはいかないんだから……ッ！」
「それなら、俺はどうすれば……」
その時、愁の後ろから扉の開く音が聞こえてくると、一人の女性が歩み寄って来る。
アリスが手を放し、愁が後ろに振り向くと、突如布のようなものを

投げつけられた。
自分が脱いだはずのＳＶ親衛隊隊長の軍服、それを見て愁は顔を上げると、そこには葵が立っていた。
「決まってるだろ、世界の為に俺達と戦うんだよ。死んだフィリオだって、それを一番望んでるはずだ」
「葵……」
「それに、俺との約束忘れたか？あの時、絶対に帰ってくるって言ったよな」
「そ、それは……」
「何だ？今更違いますなんて言うなよ、俺はしっかりと聞いたんだからな、ＳＶに……帰ってくるって」
跪く愁に手を伸ばす葵、その目には薄らと涙が見えていたが、顔は微かに笑っている。
「おかえり、愁」
そんな葵を見つめた後、自分に出された手を力強く握り締めると愁は立ち上がった。
「ただいま、葵……ありがとう、本当に……」
「おいおい、お礼を言われる事なんて何もしてねえよ。それにアリスはお前にまだ何か言いたそうにしてるぜ」
ＳＶ親衛隊隊長の軍服を手に持ったまま愁は後ろに振り向くと、涙を拭き終えた目でアリスがじっと睨みつけるように見つめていた。
「アリスさん、俺はこの軍服をもう一度着ても――」
「さっさと着なさい！」
突然大声を上げるアリス、その命令に愁はすぐさま軍服を身に纏うとアリスは更に言葉を続けた。
「ＳＶ親衛隊隊長魅剣愁！貴方はたった今からこの私アリス・リシュテルトの直属の部下になってもらったわよ！だから今から言う私の命令をよく聞きなさい！」
愁はその気迫に押されながらも、しっかりアリスを見つめて頷くとアリスは命令を下した。

「貴方はこれから一生一緒にＳＶで戦ってもらうから！どんな事が起きても、絶対に生き残って世界を平和にするのよ！わかったわね！？」

我慢していたはずのアリスの目から涙が零れ落ちる、だが決して瞳は揺らがない。

愁の瞳もそうだ、真っ直ぐアリスを見つめたままその場に跪き答えた。

「……わかりました、その命令。必ず達成してみせます」

「絶対何だから、絶対に、絶対に……！それにまだ私の命令は沢山あって――――」

アリスの口を塞ぐかのように横に立っていたシャイラが自分の胸元にアリスを引き寄せ抱き締める。

「アリスお嬢様、一人で焦らなくてもいいのですよ。ゆっくり、皆と考えていきましょう、貴方には私達がついております。だから今は――――」

自分の胸元で泣きじゃくるアリスの髪を優しく撫でていくシャイラ、そして視線を愁に向けると、愁は小さく頷き立ち上がると、葵と共にその場から立ち去った。

「葵、エコは今どこに……？」

「寝てるよ、言っておくけど今は危険な状態で会いには行けないからな。それと、お前に聞きたい事がある」

葵は足を止め愁の前に立ちはだかると、真正面から顔を覗き込むように愁を見つめる。

「お前、もうＥＲＲＯＲじゃねえよな？」

その問いに愁は呆気にとられたものの、小さく息を吐くと止めていた足を動かし始めた。

「……大丈夫、フィリオが力を使い命を懸けて俺を救ってくれた時。全身に感じていた異様な感覚はもう無いよ」

質問に答えたはずの愁だが、その答えが更に葵の疑問を招く。

歩く愁の横に並んだ葵はもう一つ愁に聞いてみた。

「って事は、お前やっぱりＥＲＲＯＲになってたのか？」
「わからない、でも俺の肉体がＥＲＲＯＲに強化され支配されようとしていたのは確かさ……まさか、そんなＥＲＲＯＲまで存在するとは思ってもいなかったけどね」
驚くはずの所だが、愁はやけに冷静な面持ちで話を続けようとするが、愁の代わりに葵が驚きを見せながら話し始めた。
「それは俺も思ったよ、人間に寄生し化物になったＥＲＲＯＲは見た事あるが。人間の原型を保ったままＥＲＲＯＲになるなんて……これじゃ軍にＥＲＲＯＲのスパイがいるかもしれねえって事だよな」
「たしかに、一人一人肉体を精密検査をする必要があるね。でも、その前に……」
ＳＶの艦内にある部屋へと辿り着いた愁は足を止めると、扉の横についてある小さな装置を操作し扉を開ける。
「俺は一人知っているんだ……人の姿をしたＥＲＲＯＲを」
愁が開けた部屋の中には一面銃や弾薬が綺麗に整頓され仕舞われていた。
「えっ？」
そんな武器庫の中に愁は入っていくと近くにあった拳銃や小型ナイフを軍服の内側に仕舞い、更には数多くあるマシンガンを手に取って見定めていく。
「それって、まさか……」
葵がはっとした表情で愁を見つめるが、愁は一人黙々と戦闘の準備を整えていく。
手榴弾を腰に着け、マシンガンのマガジンを装備していく愁、机の上に置いてある拳銃を拾うとそれを取り横にいた葵に差し出した。
「伊達武蔵、あの人は……ＥＲＲＯＲだ」
愁は戦場にいた時から感じていた、武蔵から感じる人間とは違う別の気配を。
まるでＥＲＲＯＲだった時の自分のような似た雰囲気、言葉では上手く言い表せないものの愁は確信していた。

「そんなっ……助けられないのか！？」
「わからない、でも実際俺は助かったんだ。あの人にも助かってほしい……」
愁は準備を整え部屋から出て行くと、葵もまた手渡された銃を構え部屋から出て行く。
「それでこの武装かよ、まぁ無理もないか……わかった、俺も行く。とりあえず身柄を拘束すればいいんだよな？」
「うん、その後軍で検査してもらおう。そうすれば助けられるかもしれない……最も、素直についてきてくれるとは思えないけどね……」
愁と葵、既に互いの決心は出来ていた。
二人は銃を構えＳＶの艦から降りると、事前に甲斐斗から聞かされていた部屋へ向かいはじめた。

――東部軍事基地にある会議室で、武蔵と神楽は涙を流し抱き締めあっていた。
部屋には二人を除いて誰もいない、辺りは無音の状態……。
ふと、神楽は武蔵を抱き締めながらも武蔵に気づかれないように片手を自分の着ている白衣のポケットに入れると、前にも使用した事のある小型の麻酔銃を取り出した。
もう二度と離れたくない……その思いは決して揺るぐ事は無く、力ずくでも武蔵を止めるしかない……。
気づかれないよう、ゆっくりと麻酔銃を武蔵の首元に近づけていく神楽、そして銃口が武蔵の首元に触れようとした時、武蔵は抱き締めていた腕を放し神楽から距離を取ると、神楽の手にしていた麻酔銃を取り上げ瞬時に背後に回った。
神楽の首に触れる冷たい銃口、今引き金を引けば極小の麻酔針が出て簡単に神楽を眠らせる事が出来る。
「お願い待ってッ！」
涙を零しながら神楽が叫ぶ。

離れたくない、終わりたくない……側にいてくれるはずの武蔵ともう二度と会えなくなる……絶対に嫌だった。

「ごめん、神楽……これも君の為なんだ……」

神楽の震えは止まらない、大切な人を失う恐怖を前に味わっているから、余計に恐怖が増して怖くなる。

武蔵との思い出が神楽の脳裏に浮かび上がる、幼き頃から一緒だった武蔵、いつも一緒、いつも側にいてくれた武蔵が、今まさに消える、消えてしまう。

「約束を果たせなくてごめん、ずっと側にいてあげられなくて……ごめん……」

こんなにも愛しいのに、こんなにも必要としているのに、それが叶わない、叶えられない。

なんで……どうして……どうし、て……っ……。

「……さよなら、神楽」

夢なら覚めてほしい、覚めてまたあの頃に戻りたい、皆と一緒にいた日々に、側にいて、共にいて、笑っていた、あの日々に……。

「愛してるよ――――」

――引き金を引き終えた麻酔銃が手から零れ落ちる。眠りについた神楽をそっと抱き上げる武蔵は、近くの椅子に神楽を座らせると、涙で濡れた自分の顔を軍服の袖で強く拭った。

そして安からに眠る神楽の頬が涙で濡れているのを見て武蔵はその涙を優しく拭ってあげると、ゆっくりと後ろに振り返り歩みはじめる。

その行く先は勿論赤城の元、神楽の思いを身に受けた武蔵は必死に涙を堪えただ歩き続けた。

最後の別れを、最後の思いを……赤城に告げる為に。

第９５話　慕う、魂魄

――東部軍事基地の外は相変わらず豪雨が続いている、ある一室の窓から顔を覗かせるアビアは、そんな光景を退屈そうに眺めていた。

「つまんなーい」

不満を漏らすアビア、それを見ていたロアは手に持っていた本を机の上に置くと小さく溜め息を吐いた。

「サボらないでくださいアビアさん。甲斐斗さんに言われましたよね、情報収集しとけって、甲斐斗さんが過去に戻る為の方法を早く見つけないと、いつＥＲＲＯＲに襲われるかわかりませんよ？」

東部軍事基地にある図書館に二人はいた、埃の被った分厚い本を机に積み重ねるロアに対して、アビアは本を一冊も読まず、隣に座っているミシェルは何か薄い本に目を通していた。

「そうだ、アビアさんって魔法が使えるみたいですけど、過去に戻る為の手がかりとかは……？」

「知ってるよー」

「なっ！？それは本当に！？」

「うっそー、知らないよー。知ってたら今頃甲斐斗と二人で帰ってるもん」

「えっ、ああ……そうですよね……」

威勢良く椅子から立ち上がったロアだったが、嘘とわかると小さな溜め息を吐きまた机の上に積み重ねられている本に目を通していく。

「アビアさん、よくこんな状況で落ち着いてられますよね。早く過去に戻る手がかりを見つけないと僕達いつかあの化物に殺されるんですよ？」

前の世界では散々見てきた、人々が震え、恐怖を抱き、必死になって生き抜こうとする様を。

ＥＲＲＯＲを消す方法、人類を守る方法、打ち勝つための強大な力、

技、術……だが、結局は滅んでしまった世界。
そして今、この世界もまた滅びようとしている。それだというのにアビアの顔には一点の曇りも無く、ただただ時を待つかのようにのんびりしていた。
「だいじょーぶ、甲斐斗は強いんだから何とかしてくれるって。アビアは甲斐斗を信じてるから」
「……信じた所でどうなるって言うんですか、あの化物の恐ろしさを貴方はわかっていない！魔法が使える世界でも負けたというのに魔法の使えない世界じゃ過去に戻る所か、あの化物に勝てるかどうかすらわからないのに」
無性に苛立ってしまう、ロアには常に焦りが付きまとっていた。
滅びてきた世界を見てきたのだから無理もないが、滅びてきた世界を見てきたのはロアだけではない。
平然とした表情で椅子に座るアビアもまた数多くの滅びた世界を見てきた。
ＥＲＲＯＲに侵食され終わりを迎える世界、テトと世界を巡り散々見てきてはいるものの、アビアにとって世界が滅ぶ事や化物の事などどうでもよかった。
「アビアさんが何を考えているかわかりませんが、生きたい気持ちは同じのはず。だからお互い協力していこうじゃないですか」
「そだねー、それじゃー調べるの頑張ってねー」
まるで他人事かのようにロアに見向きもしないアビア、外の景色を見つめていたが椅子から立ち上がると一人図書室から出て行ってしまう。
「はぁ……どうしてあんなに能天気でいられるんだろ、死ぬのが怖くないのかな……？」
不快溜め息を吐いた後、ロアは手に取っていた本を机の上に置くと、大きく伸びをして体の疲れを取ろうとする。
「……っと、所で君はさっきから何の本を読んでるの？」
先程から同じ本のページをじっと見つめ続けるミシェルを見てロア

が顔を覗かせる。
ミシェルが手に持つ随分と古く汚れた本、その二ページにはある光景が描かれていた。
左右のページを使って描かれてある巨大な宮殿のような絵、ロアはその絵を何気なく見ていたが、横に座っていたミシェルの目からはぽろぽろと涙が零れ落ちていく。
「ど、どうしたの！？」
泣いているミシェルに気づき驚きながらも心配するロアだが、ミシェルは自分が涙を流している事を自覚していなかった、手で触れて初めて自分が泣いている事に気づく。
「わからない……」
そう言ってミシェルは首を横に振りながら溢れ出る涙を必死に拭っていくと、自然に涙も止まり落ち着きを取り戻していく。
「大丈夫？具合でも悪い？」
「ううん……なんでも、ない……」
ミシェルの小さな背中を摩りながら心配そうに声をかけるロアに、ミシェルは首を大きく横に振り手に持っていた本を強く抱き締めた。

――東部軍事基地の中歩くのは随分と久しく、懐かしい……武蔵にはこの通路に見覚えがあった。
壁、床、天井、通路から休憩室、至る場所が思い出となり浮かび上がる。
だが目の前に広がる光景は全く別、壁や床には至る所に血が広がり人間の手形がついている。
ああ、共に語り、共に笑い、共に泣き、共に戦った仲間達……今はもう見る影もない。
悲しく過ぎ行く現実に目を背けたくなる、だが……それでは前に進めない。
だから武蔵は今、しっかりと前を見つめ歩いていく、全ては約束の為に。

医務室についた武蔵は迷う事無く部屋に入り辺りを見渡すと、部屋の片隅に白いカーテンが引かれてあるのをみて確信した。
すぐに近づいていきゆっくりとカーテンの中に入ると、そこには白いベットの上で赤城が静かに眠っていた。
幸いにも怪我一つしておらず気絶しただけの赤城は、甲斐斗に連れて来られた後神楽が検査してくれたのだ。
……久しぶりに見る赤城の姿、戦場でしか会えなかったが今は違う。
武蔵はベットの横に置いてある椅子に腰を下ろすと、小刻みに震える右手でそっと赤城の頭に触れた。
恐らく神楽が外したのだろう、赤城の髪はいつもの様に縛られておらず髪を縛っていない赤城を久しぶりに見た。
「赤城……」
小さく名前を呼んでみる、だが赤城は寝ている為に返事はこない。
「俺がいなくても大丈夫さ……君には力があり、掛け替えの無い仲間もいる。だからは君に俺はもう必要無い」
そう言って武蔵は赤城に触れていた手を戻しその場から立ち上がろうとした時、ふと赤城の手が武蔵の腕を掴んだ。
「それだけか……？」
ゆっくりと目を開ける赤城は、体を起こした後じっと武蔵を見つめる。
腕を決して放そうとせず、武蔵は立ち上がろうとした腰をまた元の椅子に戻し座ると、ようやく赤城も武蔵の腕を放した。
「私に言う事はそれだけなのか？もっと他に、あるんじゃないのか……？」
「……よく聞いて赤城、俺はもう君の元には――」
耐えられない、これ以上赤城を見つめていれば、側にいれば……決心した気持ちが簡単に揺るぎそうになる。
神楽の時もそうだ、だから武蔵は早く二人から離れたかった、離れたくない、ずっと側にいたのに、離れなくては……。
「武蔵ッ！」

赤城の声で武蔵の言葉は止まる、じっと赤城の言葉を待つかのように武蔵は固まったまま動けずにいた。
「最後……なんだろ？もう会えるのは……それなら、最後くらい、本音を言ったらどうだ……この馬鹿者が……」
最後という言葉を赤城が知っていた、恐らく甲斐斗が先回りして赤城の場所へ行き自分の代わりに全てを話してきたのだとことに武蔵は簡単に理解できた。
「後悔したくない、未練も残したくない……お前の前で強がるのは、もう止めた……だからお前も――――」
目に涙を浮かべ小さく微笑んだ赤城を見て、感情を抑えられるはずがなかった。
武蔵の腕はすぐさま動いた。既に目からは涙が零れ落ちており、震える両手でしっかりと赤城の体を抱き締める。
「本当に無事で良かった……もう一度赤城とこうやって出会えるなんて、本当に、本当に……っ」
「私も同じだ……今、お前が目の前にいて、あの時のように抱き締めてくれて……ぅ、くっ、ぁああ！――――」
赤城も武蔵と同じ、我慢などできない、感情を抑える事が出来ない。武蔵の胸に抱かれながら赤城は泣き叫んだ、またこうして出会えた嬉しさ、喜びに涙が止まらない。
だが涙は悲しさと苦しさも見せていた、もう二度と会えない、今度こそ、本当に消えてしまう。
泣き叫ぶか弱い赤城の姿を見て、武蔵はふと昔の頃を思い出す。
それは二つの赤城の姿。子供の頃、悲しい事や辛い事があった時、いつも武蔵や神楽、そして母親に抱かれ慰められながら泣いていた。だが赤城の両親が亡くなってから、赤城は決して人前で涙を見せようとしなくなった。
何があろうと必死に堪え、強がり、涙を見せない。そして……泣く時はいつも一人で、誰にも見られない場所で泣いていた。
……泣かない事が強さじゃない、泣きたくなった時、気持ちを分か

ち合い、共に涙を流してくれる人や、支えになってくれる人がいて、初めて人は強くなれる――。

だから今、自分の腕の中で泣きじゃくる赤城の姿は、無垢で純粋な頃の幼き赤城と何ら変わっていない。

これで良い……人は、一人だけでは生きていけない、互いに分ち合い、支えあわなければ。生きていく事はおろか、この世界を守る事など絶対に出来ない。

「ごめんね、本当に……辛い思いをさせて、ごめん……ずっと側にいられなくて、ごめん……」

今しかない……もうこの時しか、武蔵と会う事は出来ない。

今まで武蔵が生きている事を望み、信じ続けた赤城にとって、それは余りにも残酷な現実だった。

「武蔵、武蔵！私は……！」

武蔵が赤城を胸元から離すと、躊躇いなく赤城との顔の距離を近づけ唇を重ねた。

互いに口付けをしながら抱き締めあい、手と手を重ね、指を絡め合う。

長い口付けが終わった頃には、赤城は顔を赤らめ目に涙を溜めたまま武蔵と見詰め合う。

「ずっと、ずっと前。お前と初めて出会った時から、私はお前の事が……好きだ……っ」

その気持ちが揺らいだ事は一度も無い、それは武蔵も同じで、赤城の事が大好きだ。

真っ直ぐな心を持ち、人の痛みがわかる女性、その赤く綺麗な髪を揺らし、微笑みかける姿。

幼い頃から何ら変わっていない、そう、何も変わっていない、赤城も、神楽も……ただ一人、武蔵を除いては……。

「ああ、俺も同じだよ赤城……俺も赤城が好きだ、誰よりも……ね」

照れながらも武蔵は赤城を見つめ本音を言った、それを聞いた赤城はよりいっそう赤くなり嬉しそうに笑みを浮かべる。

何とも可愛らしく、愛しい表情……それでやっと決心がついた、これでやっと、決行できる。
武蔵はゆっくりと自分の体から赤城を放し、またベットに寝かせてあげると、赤城に向って話し始めた。
「だから俺は行くよ。君のいる、この世界の為に」
今更止めることなどできない、それに武蔵は止まらないだろう。
これ以上ここに留めておけばお互い辛く、苦しくなる、だから赤城は笑顔で武蔵を見送った。
それに答えるかのように武蔵も笑みを見せ、そっと立ち上がる。
「今までありがとう、赤城」
「私こそ、ありがとう。武蔵――」
……。
……。
終わった、もう、この部屋に武蔵はいない。
いるのは赤城ただ一人、武蔵は行ってしまった、もう二度と帰ってこない。
それでも、これで思いは伝えられた……それだけでも良かったのかもしれない。
あのまま何も言えず、伝えられることなく、時間が過ぎるのなら。
この方が絶対に良い、そうに決まってる。
だから……涙が止まらないのは仕方ない、大丈夫、共に泣き、共に支える人はいてくれている。
でも今だけは一人で泣かせてほしい。過去の人生を振り返り思い浮かべて、辛い日々、楽しい日々の頃を思い出していく、ベットの中で小さく体を丸め、目を瞑りながら――。
――医務室を出た後、武蔵の顔からは笑顔が消えた。
そして淡々と歩き始め、自分の刀が置いてある部屋へと向った。
自分の部屋に辿りつくまでに何度も過去の思い出を思い出しそうになるが、武蔵は必死にその思い出を浮かべないように意識していく。

そして部屋に辿り着くと、自分の持っていた部屋のカードキーを使い扉を開けた。
あの時から何も変わらない室内の風景、だが武蔵は部屋に入るや否や己の刀を置いてある場所へと向かい、そして見つけた、捜し求めていた刀を。
ふと刀に手を伸ばす武蔵だが、指が刀に触れようとすると自然に手を刀から離してしまう。
この刀を取った時、人間でいる自分が消えてしまう、だが覚悟を決めた武蔵は、またゆっくりと手を伸ばし刀を手に取ると、一呼吸終えた後自室を後にした。

――後は基地を後にするだけだった武蔵、長く続く通路を一人淡々と歩いていたが、ふと気が付けば通路の中央にポケットに手を入れこちらを見つめる甲斐斗が立っていた。
無言のまま互いに見詰め合う二人、すると武蔵は足を止めると、甲斐斗との距離を保ったまま話し始めた。
「……ありがとう、君のお陰でやっと俺も覚悟を決める事が出来たよ……甲斐斗」
微かな笑みを見せる武蔵とは対象に、甲斐斗の顔に笑みは無く平然とした態度でその場を動かない。
「本当、君には世話になってばかりだね。何かお礼でもしてあげたいけど、俺じゃ君の力になれそうにない」
生々しい血の跡が残る通路、窓の外から聞こえてくる雨音しか二人には聞こえず、武蔵は手に持っていた刀をそっと前に突き出した。
「甲斐斗、俺はもう人間じゃない。俺は基地から出た後本格的にERRORと活動を行わされる。つまり、君達人類の敵になり君達を襲う事になる」
すると今まで黙っていた甲斐斗が口を開くと、ポケットに入れていた手を出し武蔵同様手を前に出した。
「ああ、わかってる。お前を生かしてここから出す気は無い」

一瞬にして甲斐斗の手元に現れる巨大な黒剣、それを片手で軽々と一振りすると、その剣先を武蔵に向けた。
「いつかお前と戦う時が来るとは思っていたが。まさか、こんな状況とはな」
「それは俺も同じさ、自称最強の君と今から戦えるなんてね、とても楽しみだよ……」
甲斐斗は武蔵に向けていた剣先を下げると、鞘に納っている刀を武蔵はそっと腰に掛けた。
「甲斐斗、わかっているとは思うけどこの勝負、君が勝たないと人類はＥＲＲＯＲによって滅亡を迎える」
「ほぉ、それはまるで俺が勝てば人類を救えるとでも言ってるみたいだな」
「そうさ、君は必ずこの世界を救う。だからＥＲＲＯＲである俺は今ここで……君を殺す」
小さな笑みを見せた後、武蔵はそう言って手に腰に掛けていた鞘からゆっくりと刀を引き抜いてみせる。
しかし二人はこれから戦おうというのに、互いに寂しげな表情のまま見つめあったまま動こうとしない。
「その台詞、この世界に来てすっかり聞き慣れちまったよ」
そう言いながら甲斐斗も軽く笑って見せると、更に言葉を続けた。
「でも俺は赤城と約束したんだ、生きてこの戦争を終わらせるって」
両手で力強く黒剣を握り締める甲斐斗、それを見ていた武蔵もまた刀を構え体勢をやや下げた。
戦いは既に始まっている、ここから先、どちらかが死に決着がつくまで戦いが終わる事はない。
「だから……な、その約束を果たす為に……」

「死ね、伊達武蔵」
鋭い視線で武蔵を睨みつける甲斐斗、その黒く巨大な剣を軽々と振

り上げ武蔵に跳びかかった。
それに対して武蔵は一歩も動かず迫り来る甲斐斗を見つめていた。
神経を研ぎ澄まし、見定める……ここで武蔵が何もせずに斬られればこの戦いを終える事はできる。だがそれは肉体が許さない、それに武蔵自身、無抵抗のまま殺されるつもりも無い。
互いに目を見開き、己の命を懸けて相手を殺しにかかる、一瞬の隙も逃がしはしない……。

――武蔵の元へ急ぐ愁と葵、知らされていた場所、会議室へ向かっていた時、突如通路の天井全体に亀裂が走り崩れ落ちる。
すかさず二人は後退し瓦礫から逃れる事ができたが、埃が巻き上がるその光景の中に、黒剣を振り回す甲斐斗と一本の刀を手に激闘をしている武蔵の姿が映った。
「甲斐斗さん!?それに伊達さんまで!」
驚いているのも束の間、甲斐斗の隙を狙い刀を振る武蔵の攻撃に甲斐斗は間一髪後方に跳んで回避すると、自分の後ろに立っている愁と葵に目を向けた。
「おお、愁じゃねえか。すまねえな通路破壊して」
「い、いえ。それより、この状況は一体――」
困惑したままの二人は状況が掴めず手に持っている銃すら構えていない。
するとその愁の問いに答えるように武蔵が事の状況を話しだした。
「ＳＶの愁と葵さんだね、残念だけど俺はＥＲＲＯＲからのスパイ、それで今甲斐斗を殺そうとしている所、だから邪魔はしないでほしい」
余りにも簡潔に、そして呆気なく秘密を言ってしまう武蔵に、二人は戸惑いを隠せずにいた。
「なっ、やはりＥＲＲＯＲ側に移っていたんですね、伊達さん」
「ああ、そうさ。君ならよくわかるはずだよ。今の俺がどれだけ危険な存在か」

愁がＥＲＲＯＲだった時の雰囲気とはまた違う、別のＥＲＲＯＲ。外見、性格、理性もあり、相手と意思の疎通ができる。今の武蔵はどこからどう見ても人間。

「わかっています、それでも俺達は貴方を助けに来ました……と言っても、既に戦いは始まってみたいですが……」

手に持っていたライフルを構え銃口を武蔵に向ける愁、それに合わせて葵もまた武蔵に銃を向けた。

「伊達さん、武器を捨てて大人しくこちらに来てください。拒否すればこの場で貴方を殺します」

躊躇い無く言い放ったその言葉に、隣に立っていた葵は銃を下ろすと愁の方を向きすぐさま口を開く。

「って、おい愁！まさか本当に殺す気なのか！？助けるんじゃなったのかよ！」

元々脅しにしては大層な武装だと思っていた、それに葵は武蔵を殺す気は無かった、たしかにＥＲＲＯＲなのかもしれないが、実際に武蔵は先程の戦闘にも協力してくれており、ＥＤＰでの活躍もある。

「助けたいさ！でも、葵も見てきたはずだ、ＥＲＲＯＲになった人間、前の俺の姿を。だから覚悟して戦わないと、俺達は確実に殺される」

罪を犯してきた自分の姿を今まで何度も見てきた愁は覚悟していた。もし武蔵がＥＲＲＯＲだとすれば、自分がＥＲＲＯＲだった時よりも更に強く、恐ろしい存在になることがすぐにわかる。

「愁、ありがたいけど無理だ。それに助ける必要なんて無いよ、俺はＥＲＲＯＲ、君達の敵なんだからね」

「俺も前までそうでした、だが今はこうして人間として生きています！伊達さんを助ける事も十分に可能なはずです！」

「いや、もう俺は無理なのさ……」

その愁の言葉に、武蔵は小さく俯くと、悲しげな表情を浮かべ窓の外から見える景色に目を向けた。

銃を構える愁、その前に甲斐斗が出てくると、剣を構えはじめた。

「おいおい、お前等二人は引っ込んでろよ。今は俺と武蔵の一騎討ちの最中だ、邪魔するな」
「そうも言ってられませんよ。相手はあのＮＦ最強とも言われている方、幾ら甲斐斗さんでも相手が悪すぎます」
「だからこそ戦って勝つ事に意味があるんだろ。……まぁそこで見てろ、俺が勝つ瞬間を」
何故甲斐斗が一人で戦いたがるのか愁にはわからない、先程のように力を合わして戦えばいいものを、これ程まで強がり一人立ち向かう甲斐斗の後姿は、何かを訴えているようにも見えた。
「甲斐斗さん、落ち着いて考えてみてください、人間の状態である伊達さんがどれほど強いか甲斐斗さんにならわかりますよね。それが今、ＥＲＲＯＲになっているとすれば俺のように肉体強化が行われて更に強く――」
「ごたごたうっせーんだよ……ッ」
怒りの表情とはまた違う別の顔、今まで見せたことのないような鋭い視線に愁は息を呑む。
これほどまで一対一にこだわる甲斐斗には必ず理由がある、例えそれがわかっていても、愁は甲斐斗一人で戦わせたくなかった。
「男と男の勝負に、人間も化物も関係無えだろが」
だが甲斐斗の気迫に押されもうこれ以上何も言葉が出せない愁、それを見て甲斐斗は小さな笑みを見せると、前を向き武蔵を見つめる。
「すまねえな、決闘の最中に邪魔が入ったが……今から再開だ」
瓦礫を踏み越え武蔵に接近していく甲斐斗、黒剣を高速で振り回し武蔵を狙うが、武蔵は後方に下がりながら全ての攻撃を直前でかわし続けていく。
そして隙をつき刃を甲斐斗に向け斬りかかるが、甲斐斗は黒剣を縦にし攻撃を受け止める。だが武蔵の刀は止まらない、黒剣の刃先に添いながら刀を下げていくと、瞬時に踏み込み体の向きを変え横方向から懐に入り込もうとする。
完全に甲斐斗の腹部を斬れる範囲、だが甲斐斗は剣先を地面に突き

刺すと剣を握ったまま跳躍し武蔵の刀を交わした。
逆立ちするかのように足を浮かせ体勢を変えた甲斐斗、その空中に浮く短い時間の間に、甲斐斗は突き刺した剣を引き抜き剣の間近にいる武蔵目掛けて斬り上げる。
その黒剣の威力は凄まじいものだった、床に一本の亀裂を走らせそのまま壁を伝い吹き飛ばす。
崩れ落ちた壁、開いた穴からは雨風が入ってくるが、そこに武蔵の姿は無い。
甲斐斗はすぐさま体勢を立て直しその場から大きく跳躍し後退するが、刀を振り上げた武蔵はすぐ横にまで来ていた。
呼吸する暇すら与えられない、あと一秒でも甲斐斗が1歩後退していなければ確実に首を切り落とされていた。
首元を掠める刃先、甲斐斗は剣を振り上げ武蔵を斬りにかかろうとするが、武蔵の猛攻は止まらない。
1本の刀からとは思えない程の連続攻撃、体を掠めたかと思えばまた別の場所を刃が掠める、黒剣で防ぎ甲斐斗自身必死に回避していくが武蔵は更に距離を詰め斬りかかる。
それを見て黒剣の剣先を武蔵の胸部に向けて突き出す甲斐斗の素早い攻撃さえ体勢を下げ容易く避けた。
が、甲斐斗は剣を突き出すと同時に右足を軽く横に振り上げると、剣の下に潜りこんだ武蔵の顔を蹴り飛ばす。
軽々と吹き飛ばされた武蔵の体は壁をも突き破り基地の外へと吹き飛ばされる、それを見た甲斐斗は躊躇無く崩れた壁から外に出ると、もう一階したの建物の屋根の上に着地した、恐らく格納庫の天井だろう。
外に広がる曇天からは冷たい雨が降り注ぎ忽ち全身を濡らす、だが甲斐斗の目はしっかりと前を見つめ揺るぐ事は無い。
蹴り飛ばされた武蔵は頬を押さえながらゆっくりと起き上がると、その場に血反吐を吐き捨てすぐに刀を構えた。
「くっ……」

甲斐斗に蹴られた瞬間、一人の女性の姿が脳裏を掠めた。
「かぐ、ら……？」
決戦にあるまじき行為、余所見をして視線を下げてしまった武蔵を、甲斐斗は逃がしはしない。
足元から振り上げられる黒剣が左の腹部を掠める、瞬間的に回避したものの、血が噴出し服を赤く染める。
その時、また一人の女性の姿が過ぎる。
「あかぎ……っ！」
刀を振り上げ甲斐斗目掛けて振り下ろす武蔵、だが甲斐斗はその刃先を黒剣で弾くと、大きく横から振り下ろす。
その攻撃を避けることなど容易い、武蔵は瞬時に後方に下がろうと左足を一歩下げたが、武蔵は大きく後ろに体勢を崩す。
左足首から下が無い……あの時、甲斐斗が剣を振り上げると同時に武蔵の左足首を斬り落としていた。
それにすら気づけずにいた自分に驚きが隠せない、そしてその隙すら甲斐斗は見逃さず、黒剣を振り上げ接近してくる。
「甲斐斗ッ！」
名を叫び、右足一本でその場に踏みとどまる武蔵。
だが片足だけではまともに動く事もできず剣を満足に構える事すらできない。
目の前にまで迫り来る甲斐斗、黒剣を構え武蔵目がけ止めの一撃を振り下ろす。
すると武蔵はその瞬間、右足を僅かに曲げ大きく横に跳躍すると、血が滴り落ちる左足を甲斐斗の顔目掛けて振り上げた。
予想通り赤黒い血は甲斐斗の目に当たる、視界を血で妨げられ、すぐさま血を拭おうと甲斐斗が片手を剣から離した瞬間、武蔵は着地と同時に甲斐斗目掛けて刀を構え懐に飛び込んだ。
一瞬の間に数回刀を振るい甲斐斗の体を斬り刻む、体から血が噴き出した甲斐斗はよろめきながらもすぐに数歩後ろに下がるが、武蔵は距離を詰め刀を構えると、甲斐斗の心臓目掛けて刀を突き出した。

「甲斐斗さん！」

基地の中で二人の戦いをじっと見つめていた愁が突如声を上げ甲斐斗の名を叫ぶ、だが無常にも刀は甲斐斗の胸を貫いた。

貫いた刃先は血で汚れるものの、降り注ぐ雨に洗い流されていく、背中、そして胸部から血を噴き出す甲斐斗を見て愁はその場に跪いてしまう。

「そんなっ……甲斐斗さんが……負け、た……？」

たしかに武蔵は強い、最強とも言える程に。

だが甲斐斗もそれ以上の力を秘めている、それは世界を変えるほどの力……。

時が止まったかのように二人は動かないが、雨が止む事は無く足元に垂れる血を流していく。

刃の根元深くまで刀は甲斐斗の心臓を貫いていた、死は確実、そう思い武蔵が刀を引き抜こうとした時、ある動きを感じた。

鼓動……貫かれ、切り裂かれたはずの甲斐斗の胸部から微かな鼓動を感じる、武蔵がそれに気づいた時、突如髪を掴まれた武蔵は軽々と持ち上げられる。

刀は引き抜かれ、胸元から血を噴き出していたが、甲斐斗は歯を食い縛りその場に立ち続けていた。

そして髪を掴み振り上げた武蔵を足元に投げつけると、持っていた黒剣の剣先を武蔵の胸部に向けた。

足場の屋根に亀裂を走らせる程の力で叩きつけられた武蔵は全身を強打し血を吐き出したが、自分に向けられた剣を避けようと起き上がろうとする。

だが右腕が上がらない、すぐに自分の右手に視線を向けると、武蔵の握り締めている刀を甲斐斗は踏みつけしっかりと固定していた。

手から刀を放せばいいだけの事、そうしなければ死ぬ。

実に簡単な事、身を守るために武蔵の肉体はすぐ刀を手放そうとしたが……刀を握る武蔵の手が緩む事は決してなかった。

振り下ろされた剣は武蔵の体を突き刺した、武蔵の体は簡単に貫か

れ、自分達の足場の屋根まで破壊してしまう。
格納庫内にいた兵士達は突然の屋根の一部崩壊に気づき避難していく、幸いにも瓦礫の下には一人の兵士もいなかった。
が、一人の男が瓦礫が積もる中から現れ姿を見せると、床に突き刺さる黒剣を引き抜き自分の背後に突き刺し、もたれかかるように座り込んだ。
「ああ、そうさ……俺が人間、お前が化物なら俺は負けていた」
口から血を垂らしながらも、険しい表情をしたまま甲斐斗は言葉を続ける。
「だが……化物は俺で、お前が人間だった、そうだろ？武蔵」
自分の足元で倒れたまま動かない武蔵、目を瞑ってはいるが、その口元は微かな笑みを見せる。
「何故ＥＲＲＯＲの力を使わなかった、お前も言っていただろ、肉体を強化されたって。それに、お前肉体の再生すらしてない」
体を斬られた甲斐斗の肉体は、既に出血が止まりかかっている状態だった。
それに比べて武蔵は未だに血が流れ、斬りおとされた足首からも血が噴き出していく。
「俺は……俺自身の力で、戦ったまでさ……甲斐斗もそうだろ……？その力は、君自身が持つ力だ……」
同情や情け、ハンデなどではない、正々堂々と己の力だけで二人は戦った、だから武蔵に悔いは無い。
「……ありがとう」
「おいおい、いきなり礼を言われてもなぁ」
「君になら、この世界……そして皆を、託せる……よ……ありが、とう……か……ぃ……」
最後に甲斐斗の名を小さく言ったあと、武蔵の口は止まり刀を握っている手の力が緩んだ。
それでも血は流れ続けたまま、血は甲斐斗の足にまで広がってきていたが、甲斐斗は気にせずその場に座っていた。

「お前に託されるなら俺は守り抜いてやるよ、この世界を……」
……終わったのだろう、この戦い。武蔵は死んだのだから。
武蔵を何を思い、何を願い、そして何の為にここまで今まで生きてきたか。
甲斐斗は知っている、武蔵が戦闘の最中、赤城と神楽の名を呼んだ事に。
今となってはもう聞く事もできない、自分で考え、自分で見つけ、答えを探していかなければならない。
格納庫で起きた騒ぎ、愁や葵だけではなく格納庫にいたＳＶの兵士達やシャイラとアリスまでその場に現れた。
「愁！葵！これは一体どういうことなの！？」
銃を手に持った二人にアリスが近づいていくと、シャイラもまたアリスに寄り添いながら近づいていく。
「……甲斐斗さんがＥＲＲＯＲを倒した、それだけです」
険しい表情で甲斐斗を見つめる愁の態度、アリスはそれだけ聞くと小さく頷き黙ってしまう。
訳がわからないものの、何となく雰囲気で感じる事ができた、とても辛く、悲しい戦いがあった事に。
ふとアリスが横たわる武蔵、そして床に座る甲斐斗に目をやると、そこには先程見ていた光景は別の光景が映っていた。
「あの女性は……誰？」

――甲斐斗の足元に倒れていた武蔵の死体はどこにも無く、武蔵が着ていたはずのＮＦの軍服を身に纏った赤髪の女性が甲斐斗の足元に立っていた。
その一部始終を見ていた甲斐斗は、やけに落ち着いた様子でその女性を見つめている。
甲斐斗同様に女性も甲斐斗を見つめていたが、ただ一つ違う所があった。
表情の無いその顔の頬に止め処なく涙が流れていた、目から流れ落

ちる涙は頬を伝いぽろぽろと甲斐斗の足元に落ちていく。
「これが人間……これが魂、これが思い、これが情、これが……愛」
聞き覚えのある言葉に甲斐斗は顔を上げ、そして思い出した。
武蔵の言っていた自分を助けたＥＲＲＯＲ、そのＥＲＲＯＲが武蔵に言った時の言葉だ。
「涙？これが涙……止まらない、どうして、止まらない……？」
目元に手を当て流れる涙を止めようとするが、女性から流れ出る涙が止まる事は無い。
すると顔を上げていた甲斐斗が女性を見つめると、女性の足元に落ちてある刀に視線を逸らした。
「涙が出るのは、大切な人を失ったからじゃねえか？」
「大切な、人……？自らの生命を犠牲にして、私に伝えた人間がか……？」
その言葉に甲斐斗が反応を示した、一つ脳裏に浮かぶ疑問、その答えを今目の前にいる女性は知っているはず。
「お前……人類が核兵器を使った事に怒り、俺達を殺そうとしてるんだよな？」
「……いいや、もっと前に私が人類を消すと武蔵に言ったら、武蔵は私に言った。肉体を自由に使わせてほしい、そして、自らの命をもって、私に『人間』を教えると約束した」
その女性の言葉に、甲斐斗は目を見開き言葉を失った。
肉体、最後、そして自らの命、約束……あらゆる感情を抱き、最後に教えた、この、女性の姿をしたＥＲＲＯＲに。
「あの野郎……全部一人で背負ってたのかよ……」
ＥＲＲＯＲを止める為に、武蔵は甲斐斗達に嘘をついていた。
全てはこの時の為か？全ては武蔵が予想した通りの結果になったということか？
「人間の力、可能性、これ程の生物を消すなんて、私には無理だ」
思考錯誤を重ねていた甲斐斗、武蔵が自分達の前に現れた本当の理由、本当の意味を知って、全身から力が抜けていくが、目の前に立

っている女性に目を向けると口を開いた。
「おい、人間を理解したお前は、これからどうするんだ？」
「……わからない、わからなくなってしまった。人間を知った今、私は何をすればいい？」
その言葉を聞いた途端、甲斐斗はゆっくりと起き上がると、女性に手をさし伸ばした。
「この戦争を通して人間の立場から世界を見てみるつもりは無いか？お前は人間をまだ完全に知った訳じゃねえ、その気があるなら俺達と共に来い、そして……お前達が起こしたこの戦争を最後まで見届けろ」
その真っ直ぐな目に女性は見覚えがある、あの日あの時、武蔵も同じような目をしていた。
武蔵は教えてくれた、それなら、この男もまた何かを教えてくれるのかもしれない。
差し伸べられた手を見て女性もまた手を出すと、甲斐斗は女性の手を掴みしっかりと握手をした後、その場に倒れこんでしまう。
「ああ……血、流しすぎたか……っ……」
武蔵との激戦で体の各部を負傷し出血したため、甲斐斗の顔色は悪くぐったりとその場で横になる。
起き上がる力も出ない、自然と下がる目蓋に抵抗することなく、甲斐斗は静かに眠りについた。

第９６話　切望、異端

――この光景を見るのは何度目だろうか、目を開ければ真っ白な天井が見える。
という事は勿論、俺は医務室のベットで寝ていた。武蔵と戦いの後俺はたしか気を失ってしまった、恐らくその後この部屋に連れてこられたのだろう。
周りはカーテンで閉ざされ、俺の体にはシーツが掛けられ、腕には点滴の管が刺さっている。
体に走る激痛は毎度の事、俺は回りを軽く見渡した後、小さく溜め息を吐いた。
……これで良かったのだろうか。いや、そんな事を考え出したらきりがないのはわかる。
だが俺は奪ってしまった、あいつ等の大切な人を、この手で。
会いにくい、赤城には話しておいたものの、実際顔を合わせるとなると何を言っていいのやら。
……ん？たしかに、赤城には伝えていた。武蔵の正体、そして武蔵との決着をつけると、赤城には……。
「やばいッ！」
ああそうだ！たしかに赤城には伝えたが、神楽には伝えていない！？まずい、非常にまずい。もし神楽が武蔵が死んだ事を、そしてその武蔵を俺が殺したと知れば……。
「殺される……」
俺が一人呟いた瞬間、ふと目の前のカーテンが開けられると、そこには今一番会いたくない女が立っていた。
「あら、誰に殺されるのかしら」
「お前にだよ！……って、なにぃっ！？」
な、何故神楽がここに、まさか既に知られてしまったのか！？
俺は神楽を見るやいなやすぐさま体中を触り何か怪しげな装置や器

具が取り付けられていないか確かめていく。
だが意外にも体には爆弾らしきものも付けられていない、とすれば神楽はまだ知らないのか？
「あのね、何一人で勝手に焦ってるの？伊達君と貴方が戦った事ぐらいもう知ってるわよ」
何？知っているだと？ならどうしてそんなに冷静にしていられるんだ？
神楽の事だ、武蔵が死んだと分かればあのでかい機体でも使って俺を殺しに来る事も予想していたというのに。
「あのねぇ……赤ちゃんだって耐えたのよ。私が耐えられない訳ないでしょ……」
小声でそう言いながら神楽は隣のカーテンを開けると、そこにはベットの上で俺と神楽の会話に耳を傾けた赤城が寝ていた。
「気がついたみたいだな」
「赤城！……がいるって事は、俺は気を失ってから同じ部屋に連れてこられたのか」
「ああ、そうだ。にしても、運ばれた時は今にも死にそうだったというのに。たった数時間でここまで回復するとは」
「化物ね」
赤城の言葉に神楽が付け足す、ちなみに化物と言われるのにも既に慣れた。
「数時間か、まぁいい。それよりあのＥＲＲＯＲの女はどうした？」
「あの赤ちゃんに似た女性ね、今は別室であのアビアって子達と一緒にいるわよ」
達と……どうやら別室には色々と厄介な面子が集められている訳か。
「私に似た？どちらかと言えばお前に似ていたぞ」
既に二人はあのＥＲＲＯＲの女の姿を見たわけか、どうやらあのＥＲＲＯＲは俺達に危害を加えるつもりはないみたいだな。
「そうかしら？あ、そうそう、ＳＶの人達が貴方に話があるそうよ？動けるようになったら艦に行くと良いわね」

ＳＶの人間から話？これは好都合だ、俺もＳＶの人間と話がしたい。過去に帰る為の魔法、それを今一番知っている可能性が高い連中だからな。

「分かった、すぐに皆を連れてＳＶの場所に行ってやるよ。……それで、お前達は俺に何か話は無いのか？」

「今ここで話し出してもきりが無いことばかりなの、ＳＶの所に行く時私と赤ちゃんもついていくから、その時話そうかしら」

何だそりゃ、まぁＳＶの所で話すと言ってるみたいだから、それでいいのかもしれないが。

「よし、じゃあ今からＳＶの所に行くぞ」

暢気に寝てる場合じゃねえ、時は一刻を争う状況なんだ。

体に掛けられたシーツを取り払うと、俺は靴を履き身なりを整えていく。

「ちょっと、無理しすぎじゃない？貴方の体はまだ完治して――」

動けるんだから大丈夫だろう、俺は頭部や腕、腹部に巻かれた包帯を一つずつ解いていくと、神楽が驚いた様子で俺の体を見つめていた。

ふと俺も自分の体を見ていると、包帯が巻かれていた箇所の傷口は全て綺麗に塞がされている。

手足を軽く伸ばしてストレッチ終了、唖然とした表情で見つめてくる二人の視線は無視するか。

「んー、多少痛むが傷は無いな。よし、それじゃ俺は別室にいるミシェル達を迎えに行くから、お前等は先に行っててくれ」

「え、ええ。わかったわ……」

――その後、俺は神楽から皆が集められている場所を知り部屋に行ったわけだが……。

竜を操る少年。

不死身の魔女。

ＥＲＲＯＲ。

第１ＭＧ。
「カオスだな」
どうして俺の周りにはこうもややこしい連中が集まるんだ？勿論ミシェルを除いてだが。
部屋に入った途端、４人の視線が一斉にこちらに向かれると、真っ先にミシェルが俺の方に駆けつけてくれた。
「かいとー！」
だが、そのミシェルを妨害するかのようにアビアもまた俺の元へ飛び込んでくる。
飛び込んできたアビアを受け止められる程俺の体はまだ治っていない、という訳で寸前の距離でアビアを交わすと、俺は飛び込んできたミシェルの小さな体を受け止めた。
「心配かけてごめんな」
「ううん、だいじょうぶ！」
ああ、こんな純粋無垢な笑顔を見せられるなんて、心も体も癒される。
俺の後ろからは何かが壁にぶち当たる音が聞こえてきたが全く気にならない。
「あ、あの。アビアさん？大丈夫ですか……？」
代わりにロアがアビアを心配して声を掛けている、余程変なぶつかり方をしたのだろう。
「ミシェル、過去に戻る為の手がかりが掴めるかもしれない。一緒にＳＶの所にまで来てほしい」
そう言うとミシェルは笑顔で頷き、小さな手を伸ばして俺の左手をそっと握った。
暖かくて小さな手、ミシェルの手を握るなんて最近してなかったからな……。
「アビア、ロア。お前達にも来てほしいんだ、ついてきてくれるか？」
「うん、僕はついていくよ。過去に帰れるなら、僕もＥＲＲＯＲの

いない世界へ行きたいからね」
ＥＲＲＯＲのいない世界……か。って、こいつ俺と一緒に過去に帰るつもりか？
そうか、過去に帰る事ができればＥＲＲＯＲの脅威からは逃げられる。
この人類最後の世界を捨て、過去に戻れれば……。
「アビアも行くよー！一人はつまらないからー！」
ぶつけて赤くなる顔を上げるアビア、元気そうで何より。
理由はどうあれこいつにも来てもらわないとな、まだ俺達に隠している事もありそうだし。
「後は……っと、おーい、お前も来いよー」
先程から俺達を無表情で見つめ続けるＥＲＲＯＲの女、名前がわからないから呼べない、というかこいつに名前など存在するのか？普通にＥＲＲＯＲって呼んでいいのか？
「わかった、私もお前についていくことにする」
丁寧に返してくれるのはいいんだが逆に不気味に見えてしまう。
こいつはＥＲＲＯＲ、人間の女の姿をしていようとあの化物と同じ生物だ。
いつ何をするかわからないが、人間を知る為に俺達を殺したりはしない……よな？
「私は今、お前達の敵という存在ではない。安心というのをしていい」
お、おいおい……こいつ……今、俺の心を読んだのか？いや、そんな能力をＥＲＲＯＲがもってるわけないよな……？
もし俺の目を見ただけで微かに心読んだとすれば、こいつ……。
「ったく、安心しろと言われて安心出来る訳無えだろ。とりあえずお前は俺が監視する、妙な真似したらわかってるだろうな？」
「妙な真似……私が、お前の妙な動きを真似をしたら、何がわかるんだ？」
は？……ダメだ。頭が痛い。こいつ言葉がまだ上手く使えないのか

？一応世界を滅ぼしてきた化物なんだから人間の言葉ぐらいすぐに理解できるだろ……ったく！

「妙な真似って言うのはだな、怪しい行動っていう意味みたいなもんなんだよ、つまりお前が俺達に危害を加えるような事をしたらお前を殺すって言ってるんだよ！理解できたか！？」

なんで俺が一々説明しなくちゃならねえんだ、俺はこいつの教師になったつもりはない。

「なるほど、すまないな。私はまだ人間の言語を全て学んでいない、いつもは脳内で直接意識を共有しているのでな。人間同士と上手く言葉のキャッチボールというのが出来ない」

なんで会話できないとか言ってる奴が言葉のキャッチボールとか言ってんだよ、お前絶対したことないだろが。

って、注目する所はそこじゃねえ。脳内で意識の共有だと？こいつ、一体今まで人間で何してやがったんだ……。

「……まぁいい、今はＳＶの所に行くのが先だ」

そうそう、ここでこいつと睨めっこしていたって話は進まない。ＳＶの所に行き色々と話し合わねえとな。

少し不安も残るが、俺がミシェルと部屋を出ると、アビアとロアが後ろについてくる。

そしてふと後ろを見れば、あのＥＲＲＯＲの女もちゃんとついてきていた。

――こうして俺達はＮＦの軍事基地を出て外に止めてある戦艦に来たんだが、基地や艦の回り、入口に銃を持った兵士達が並んでいた。

っま、兵士達の注目が俺達に集まるのも無理は無い。今一番警戒されている連中が揃っている訳だし。

艦の中は兵士だらけで居心地は悪いが、ＳＶの連中が待っている。

俺は足を止める事なく淡々と艦内に入っていく。

すると、俺達が来る事を事前に知らされていたのだろう、すぐ目の

前にはＳＶ親衛隊の軍服を身に纏った葵が立っていた。
「久しぶりだな、話があるから来たんだが。案内してくれるのか？」
「ああ、こっちだ」
何だ、他に何か言ってくるかと思ったらそれで終わりかよ。
まぁ話なら今から行く場所に行けば嫌というほどすることになるし、そう焦る事でもないか。
「ついたぞ」
っと、一人考えながら歩いているともう着いたみたいだ。
葵が扉を開け部屋の中に入っていくと、そこには既にＳＶ、ＮＦの人間達が席に座り集まっていた。
一斉に俺達に集まる視線は毎度の事、すっかり人気者になったもんだ。
ＳＶ、そしてＮＦの連中と向かい合うような席の並びになっており、開いている場所へ俺が座ると、後ろから来たアビア達も席に座っていく。
ＳＶ親衛隊の服を身に纏う愁に葵。たしかあの真ん中に座ってるのがアリスだったか。
ＮＦの方を見れば、軍服を身に纏った赤城に数人の兵士、それに白衣姿の神楽が座っている。
っておい神楽、お前いつからＮＦ勢に加わった。お前は俺達側だろ……！
「はぁ……おい、こういう重っ苦しい空気は好きじゃねえ、互いに話があるんだ。さっさと始めようぜ？」
俺がそう言うとアリスの表情が少し険しくなる、そして一人立ち上がると話し始めた。
「そうね、じゃあ私達から聞かせてもらうけど……甲斐斗、貴方魔力を失ったの？」
げっ……やはりＳＶの奴らにはわかるか、前回神を殺した時の俺を見ていたのだから不思議に思われても仕方無い。
「ああ、神を殺した後失った。だから今俺は魔法が使えない、お前

達は使えるんだろ？」
「いいえ、この世界に来てからは魔力が制限されて使用できなくなってるの。少し例外もあるけど……まぁいいわ。それよりまず貴方達が何者なのか、そして目的は何か教えてもらおうかしら」
ん？たしか神の力で魔法が制限されていたはず、それなのにまだ使えないのか……？
おっと、考えにふける前にこいつの質問に答えないとな。
俺はこういう単刀直入な質問は好きなんだ。その方が話の進みも速いし、変に思考錯誤しなくてすむ。
という訳で俺から答えようとしたが、俺の後ろの席に座っていたロアが立ち上がると、少し落ち着かない様子で説明しはじめた。
「僕はロアと言います！ＥＲＲＯＲから逃げる為に元いた世界から逃げてこの世界に来ました！今は甲斐斗さんと行動して一緒に過去に帰る方法を見つけようとしてます！」
ロアを見た途端、アリスは小さく口を開けると隣に座っている女に話しかけ始めた。
「あ、貴方見覚えがある。たしかドラゴンに乗ってた少年よね、シャイラも見た事あるでしょ？」
「はい、間違いなくあの時の少年です。まさかこの人と共に行動していたとは……」
「はいはーい！次はアビアのばーん！他世界からこの世界に来ましたー！今は甲斐斗と一緒に暮らしてまーす！」
お前は急に大声を出して席を立つな！俺もそうだがミシェルまで少し驚いてたぞ。
それに暮らしてるって何だ、勝手についてきてるだけだろ。
「ＢＮから要注意人物という報告があるんだけど、これは本当なの？」
アリスがそう言って俺を睨んでくる、間違いなくそれは事実だろう。
何せＢＮの兵士達を一瞬で皆殺しにしたのだから。
だがあれはＢＮも悪いだろ、殺されても仕方ない。

「たしかに危険だが今は大丈夫だ、俺と行動してるからには変な行動はさせない」
「へえ……余り信用はできないけど頼むわね。後は……その女性について、聞かせてくれないかしら」
やっぱり聞きにきたか、そりゃそうだ、誰だって気になる。
俺がふと後方を見ると、相変わらず無表情のままのＥＲＲＯＲ女は座っていた、何か言うつもりはないのか？
「皆知ってるのよ、貴方が死んだはずの伊達大佐を倒した後、死体が瞬時にその女性になったってことを、貴方は何でここに来たの、そして本当にＥＲＲＯＲで、私達人間と共に行動しているのは何故！？」
俺だって知ってる、目の前のでそれを見たからな。
「おい、お前から直接に言ってくれないか？俺もまだお前の事がよくわからない」
そう俺が言うと女は徐に立ち上がり、部屋全体を軽く見渡した後話し始めた。
「武蔵は私から肉体を貸してもらうのを条件に、自らの命をもって私に『人間』を教えると約束した。結果的に、武蔵は命を持って私に人間の姿、力、可能性を見せてくれた。今私が人間と共に行動をしているのは、もっと多くの人間を知りたいからだ」
「という事は……やはり貴方、ＥＲＲＯＲなのね」
「ＥＲＲＯＲ？……そうか、人類は私達の事をそう呼んでいたんだったな……人類に伝えておく、私達はＥＲＲＯＲと呼ばれる存在ではない、私達から見れば、お前達人間がこの世界のＥＲＲＯＲだ。そして、私達はそのＥＲＲＯＲを処理する存在にあたる」
ん？こ、こいつ……さり気なく重要な事を言いやがったぞ。
世界から見れば人間がＥＲＲＯＲだと？それに、処理する存在って何だよッ！
「だが、私は人類が本当にＥＲＲＯＲなのかわからない。それを確かめる為に人間と行動している、説明はこれでいいか？」

「そ、そう言う訳だ。つまり今こいつはＥＲＲＯＲだが敵じゃねえ、勿論怪しむのは当然だ、だから俺がしっかり見張っとく。おい、お前はもう説明いいから座ってろ」
ＥＲＲＯＲ女は席に座り先程と同じように無表情のまま、だがＳＶやＮＦの連中は少しざわついている。
無理も無い、この女はＥＲＲＯＲについての重要な手がかり、情報を知っているのは間違いないんだから。
「そろそろこっちも質問していいか？俺は過去に帰る為の方法が知りたいんだ、お前達ＳＶの連中は過去に帰る術を知ってるんじゃないのか？」
「過去に帰る魔法って……シャ、シャイラは何か知ってる？」
どうやらこの女は魔法について余り詳しくないみたいだな、それより隣に座っているあのシャイラっていう女の方が何か知っていそうだ。
「過去に帰る魔法かどうかはわかりませんが、時を越える魔法なら存在します」
時を越える魔法！？そうそうそれだよ！そういう魔法を捜し求めていたんだ！
何だよあるじゃねえか！後はさっさとその魔法を教えてもらえば過去に帰れるかもしれない！
「しかし、この魔法はアルトニアエデンＳＳＳ級の時空系列禁断魔法として封印されていたもの。容易に扱えるものではありません」
流石に時を越える魔法となるとリスクが高いか、それにしても封印されていただと？って事は、つまり……。
「封印されていた……か、つまり。お前達の世界でその魔法、使ったんだろ？」
「っ……それは……」
シャイラが眉間にシワを寄せると、横に座っているアリスがシャイラの顔を覗きこむ。
思ったとおりだ、幾ら禁断や封印されていたとしても、人類が滅亡

寸前まで追いやられたんだ、使わないはずがない。
「えっ？私何も聞かされてなかったわよ……シャイラ……？」
どうやらアリスも初耳だったらしい、訳ありって様子でシャイラは顔を上げると、
「……申し訳ありませんアリスお嬢様。実はアルトニアエデンの世界にまだいた時、一度だけその魔法を試みた方がいたのです」
「そんなっ！？一体誰なの！？その魔法を使った人って！」
「それはっ、その……」
何故か言い出せないシャイラ、その様子を見てアリスは気づいたみたいだった、その魔法を使った人物が誰なのか。
「まさか……お兄様！？お兄様がその魔法を使ったって言うの！？」
「……はい、そうです……人類最後の望みを掛け、あの方は親衛隊達と共に……」
「そんなっ、お兄様は別の世界に行ったって聞いてたのに、嘘だったの！」
「はい、フィリオ様とアリス様にはそう伝えておくように頼まれまして……本当に申し訳ありません！」
頭を下げるシャイラだが、アリスの怒りと驚きはまだ収まろうとしない。
ここで二人だけに喋らせるのは話が進まない、そう思った俺は咄嗟にシャイラに話しかけた。
「それで、その兄とやらは時を越える魔法を使ったんだろ？結果はどうだったんだ」
「……わかりません。魔法を発動した後、突如姿を消し行方がわからなくなりました」
「なるほど、無事過去に戻れたかどうかもわからねえのか」
「はい、その後世界が変わるかと思いましたが。ＥＲＲＯＲの侵食は止まらず、結果的にアルトニアエデンは滅亡してしまいました……」
そうか、例え過去に戻れたとしても、ＥＲＲＯＲがどこから生まれ

てきたのかを突き止め、根絶やしにしなければ未来は変わらない。
それに、もしそれが出来たとしても。今ある世界が全て作り変えられるとは言えない。
パラレルワールド……この可能性が一番高いが、俺は絶対に嫌だな。
必ずこの世界での時系列を辿り過去を変える、そうじゃなけりゃ気がすまない。
「シャイラ、その時を超える魔法について詳しく教えてくれないか？俺は何としても過去に帰る必要があるんだ」
「世界がこうなってしまった以上、隠す必要もないとは思いますが、アリス様の許可が必要です」
何だと？よりにもよってアリスの許可が必要になるのか？
「アリスお嬢様、如何いたしましょう」
先程までは不安な表情をしていたアリスだが、自分の許可が必要と聞くと何だか俺を見下したような目で見てきてる気がする。
「うーん、そうねー。それじゃあ、貴方達がこのＥＤＰに参加してくれたら、教えてあげてもいいわよ」
こんなやりとり前にしたような気がするが、ＥＤＰに参加だと？なるほどな、どうりでＮＦとＳＶが共に行動してる訳だ。
にしてもＥＤＰに参加するのは好都合だ、神楽からレジスタルを集めて来いといわれていた訳だし。
「わかった、参加する。だからこの会議が終わった後その魔法について詳しく教えてくれ、いいな？」
「それは出来ないわよ！方法を知ったら貴方達この世界を見捨てて出て行くんでしょ！？そんなの許さないんだから！」
「おいおい、それこそおかしいだろ。ＥＤＰの途中にお前達が死んだら聞くにも聞けねえだろ。それに準備だって必要になる、今教えろ！」
「時間なら人類がＥＲＲＯＲに勝利した後たっぷりあるじゃない！それに、ＥＤＰの時に貴方が私達を守ればいいだけの話でしょ？」
こ、こいつ。ガキの癖に少しは考えるようになりやがったな、この

俺様を利用する気か？
「あれ、もしかして自信ないの？この世界にいるのが怖いから、早く戻りたいの？」
こいつぐらいだろ、俺をこんなに挑発してくる女って。
ぶち殺してやりたいがそれじゃ過去に帰る為の魔法が聞けなくなる、だからといってこいつの守りをするのは……。
「アリス、甲斐斗さんには教えてもいいんじゃないかな？帰る方法を知ったからってこの人は逃げ出すような人じゃないよ、何せ神にたった一人で挑んだ程の男だからね」
アリスの後方に座っていた愁が突如口にした言葉に、隣に座る葵も小さく頷く。
思わぬ所からの反撃にアリスは後ろを振り向くと、困ったような顔をして俺の方をちらちら見てくる。
「えぇ？で、でもほら、ここはあいつを上手く利用して――」
「会話の途中割り込んですまないが、ＮＦの私達も同意見だ。ここは先に伝えておいて問題はない、奴は逃げ出すような腑抜けではないからな」
先程から黙って話しを聞いていた赤城まで俺に味方してくれるのか！？ああ、ありがとうなお前等、今俺は素直に嬉しいよ。
「え？あー……えーと……」
困惑するアリスは周りをきょろきょろと見渡しながらどう言おうか考えている、これはチャンス！
「アリス、俺は絶対に逃げない。勿論ＥＤＰにも参加する、頼むこの通りだ」
感情を押し殺し俺は小さく頭を下げる。そして顔を上げると、アリスは腕を組むと俺から視線を逸らして小言で答えた。
「わ、わかったわよ……。シャイラ、後でその魔法について教えてあげて」
「畏まりました、それでは甲斐斗様。会議が終わった後、私の所に来てください」

「お、おう。わかった、ありがとな」
よっし！これで良い！さーさっさと会議終わらそうぜー！もう俺にとっちゃこんな会議何の意味も無い！
……という訳でもないか、ＥＤＰに参加する以上色々と知っておかなければならない事もあるし。
「えーと、それで今度はＥＤＰについての話何だけど。今私達は三つあるＥＲＲＯＲの巣の中の一つに向かってるの、場所はここよ」
アリスの横にいるシャイラが机に置かれてある装置を弄り、部屋の中央に３Ｄの映像が映し出される。
「この三つがＥＲＲＯＲの拠点としている巨大な巣よ、今から私達はここに行ってＥＤＰを開始します」
ＥＤＰねぇ、どうやら今回は『ＧＡＴＥ』が無いみたいだ、直接穴掘って巣の中心にまで行く気か？正気じゃねえな、まぁそれしか方法が無いなら仕方無いが。
「そうだ、ねえ貴方ＥＲＲＯＲなんでしょ？巣の位置ってここで合ってるわよね？」
突然アリスが俺の後方に座っている女に話しかける。おいおい、幾ら人間と行動しているからといってそんな易々仲間の情報を教える訳無いだろう。
「ああ、そうだ。全て合っている。その三つの場所には私達の仲間がいる。お前達がその三つ全て潰せば、人類は勝てるかもな」
易々と話しちゃったよこの人……人じゃないけど。
「お、おい。お前一応ＥＲＲＯＲだろ？仲間を裏切っていいのか？」
そう聞いてみるが、女は首を横に傾けいつものように無表情のまま口を開く。
「裏切る？……勘違いをしているみたいだな」
勘違い？どっからどう聞いても仲間の居場所を教えている時点でそうじゃないのか？
「お前達人間があの場所へ行って、生きて帰ってこれる可能性はゼロだ」

俺に向かって言われた言葉だったが、その場にいた人間は全員女の声が聞こえていた。
誰もが息を呑み、女の方をじっと見つめる。
「私の仲間の進化速度をお前達はまだ知らない。核の攻撃を見た私達の仲間は恐らく以前より更に強化され、進化しているだろう。つまり、お前達人類が私達に勝つことはない」
こ……こうも断言出来るとは、余程自信があるんだろうな。
いや、合って当然だ。こいつ等は人類全ての世界を滅ぼしてきた化物、強ち間違っていない。
「以前お前達はゲート内にある私の仲間を消したが、今から行く場所に比べればあの場所など小規模に過ぎない」
人間を絶望に突き落とすかのような台詞に、周りの兵士達は目の色を変えて話を聞いていた。
同じＥＲＲＯＲだからこうも軽々と言えるのだろうが、こいつは自分の言葉で今いる人間が何を思うか理解しているのか？
「だからどうした」
凍りついたような雰囲気の中、赤城の声が皆の注目をひきつける。
「例え今から行く場所が地獄であろうと、私達は行き、絶対に勝つ。もう人類に選択肢は無いのだから、力を合わせ前に突き進むしかないだろう？」
微かにＥＲＲＯＲ女に視線を向ける赤城、それを見て女もまた赤城と視線を合わす。
「そう、俺達はその為に集った。それに今なら甲斐斗さんや神楽さんもいます、戦力はより強力になりました。まずはここのＥＲＲＯＲの巣を破壊し、最後の巣はＢＮと力を合わせて必ず潰します！」
力強い愁の声も強力だな、絶望に負けず、目の前の光を追ってひたすら進み続けるその勇姿、見ない内にまた強くなったな。
「ならば見せてもらおう、お前達人間の可能性と、力を」
言われなくても見せつけてやるはずだ、こいつ等なら出来る。
油断はしない、迷いもしない、全力でＥＲＲＯＲの巣を潰す、俺だ

って同じだ、この人類最後の世界を易々化物などに渡せられるかよ。ちょっとやる気が沸いてきたな、久しぶり化物相手に大暴れしてやるか。

――それからも話は進み、何時間かたった頃、やっと会議は終了した。

皆が席を立ち部屋から出て行くのを見て、俺はミシェルの手を引きながらシャイラの元へ歩いていく。

「さて、それじゃあ教えてもらおうか。その時を超える魔法とやらを」

「わかりました、しかしこの場ではお教えできません。私の部屋に来てもらいますがよろしいでしょうか？」

問題無い、シャイラは俺達に背を向け部屋を出て行き、俺もその後を追おうとした時、突如俺の横に並ぶように神楽が現れた。

「私にも教えてもらおうかしら、その魔法ってもの」

「ええ、構いませんよ。お嬢様からは許可を頂いていますので」

後ろに振り返るシャイラはそう言うとまた俺達の前を歩き始める、たしかに神楽には来てもらったほうがいいだろう、力になってくれるはずだ。

アビアとロア、そしてあの女は先に部屋に戻して正解だった。ややこしいし疲れるからな、あいつ等といると。

その時、ふと後に振り返ると深刻な表情をした赤城が、葵の後ろについて行く姿が一瞬だけ見えた。

「そういや神楽、お前よくあのＥＲＲＯＲの女に手を出さなかったな。お前の事だからてっきり殺すかと思ってたよ」

「元々伊達君はＥＤＰの時死んでたのよ、でもあのＥＲＲＯＲが伊達君を助けたんでしょ？それなら恨む必要なんてない、少なくとも伊達君はあのＥＲＲＯＲに感謝してるはずよ」

意外にも冷静な返答に言葉が出ない、やはりこいつも強いな、何だかんだ言ってちゃんと現実を理解している。

「それより甲斐斗、貴方は気をつけた方がいいわよ」
「ん？何だ？ＥＲＲＯＲか？」
「それもそうだけど、もう一人のカイト。アステルによ」
アステル……しぶとい奴だよな、てっきり死んだかと思っていたら突然現れやがって……。
「あの子の乗る機体の性能は前回の戦闘で思い知ったでしょ、今の貴方の力じゃ絶対に勝てない」
「たしかにそうかもしれねえな……でもあんなのチートだろ、肉眼で追えない程の速さで動くんだぞ」
ちょっと笑いながら言ってみたが、横にいる神楽は深刻そうな表情なのですぐに笑うのを止めた。
「それだけじゃないわよ。あの機体……私の『羽衣』を超える程の力を持ってる」
「はぁっ！？何だよそれ、お前の機体に比べて遥かに小さな機体が、力で負けるだって？」
「あの機体はね、貴方の乗っている機体のデータと細胞、そして貴方自身の細胞を元に開発されたＥＲＲＯＲとの融合機なのよ」
そんな化物機体を作ってやがったのか、道理でおかしな力だと思った。
俺と愁、そして武蔵の三人が簡単に倒されたんだ、操縦者がどうあれあの機体自体は最強かもしれない。
「どうしろっつうんだよ、そんな機体、幾ら俺様でも危ねえじゃねえか……」
「負けるのは確実ね。今は騎佐久の手で何とか殺されずに済んでるけど、あのアステルという子、何するかわからないわよ」
たしかに、今の奴は何をしでかすかわかったもんじゃねえ。
それに俺の周りにいる人間を消すとまで言っていたし、あいつ……。
「……な、なあ神楽。実はその機体に対抗して俺の為に新しい機体を用意してたりは……？」
「寝言は寝て言いなさい」

ああ、そうだよな、あるはずないよな。くそっ、機体の性能が互角なら俺はアステルに負けるはずがないのに。
「今はＮＦの連中がここに攻めてくる事はないみたいだし、今はＥＲＲＯＲとの戦い、そして今から聞かせてもらえる魔法について考えましょう」
神楽と二人で話をしていると、どうやらシャイラの部屋についたらしくシャイラが一人部屋の中に入っていく。
「部屋の中へどうぞ」
言われた通り部屋の中に入ると、シャイラは部屋の中央に置かれてある机と椅子の方に手を伸ばし小さくお辞儀をした。
「こちらの席でお待ちください、今その魔法に関する物を持ってきます」
「へー、そんな大事な書物をお前が管理してるのか？」
「はい、それが私の役目でもありますから。今は無きアルトニアエデンの重要な情報は全て私が管理しております」
見かけによらずすごいな、っと口に出してしまいそうだったが俺は何とか耐えてみせる。
にしても、この艦にそんな重要なもの置いといていいのか？もっと大事な場所にでも保管すればいいのに。
シャイラは奥の部屋に行ってからどれくらいたっただろう、両手いっぱいに書物を積み上げ、それを俺達の目の前に置いた、というより落とした。
更にはポケットから何枚ものディスクを取り出し、それを綺麗に並べていく。
「このディスクは甲斐斗様に渡しておきます、これには貴方の知りたい情報が入っていますから、後で部屋にお戻り次第目を通しておいてください」
そう言ってシャイラは机の上に置かれてある一冊の本を取ると、ページを確認しながら一枚ずつ捲っていく。
「さて、それではこの魔法についての説明を行いたいと思います」

シャイラの指差すページにはある一つの丸い魔法陣が書かれていた、それもかなり複雑で旧式の陣。
「この魔方陣は直接描く事になります、それも一ミリの狂いも無く正確に。後はこの陣の中に人が入り魔法を発動できれば成功です」
「……ん？え？は？……それで終わりか？それで時を越えられるのか？」
「簡単に聞こえると思いますが、この魔法の最大の点はどうやってこの魔法を発動させ、無事指定した過去へ帰られるかです。私達が行った状況では巨大な人工レジスタルの塊の中に空洞を作り、その中で発動させようとしました。ですが、それでも力が足らずに発動させる事が出来ない程です」
「何だと……それじゃ、お前達はどうやってその魔法を発動させたんだ？」
「魔科学を応用しました、魔法だけの力では時を越える事は不可能と考え。時を越える魔法の為にだけ開発された施設、装置の中で実験を行いました。魔法を発動後、陣の中にいた人達は消えていき、無事魔法は成功したと思いましたが、結果はわかりません。それに時を越えた衝撃で施設、装置は全て使い物にならなくなりましたからね」
そんな大掛かりな事をしても、たった一回しか魔法を発動させる事が出来なかったのか。
ったく、こりゃ大量のレジスタルが必要になってくるな、だがその辺は心配無い、神を倒した後に出てきたレジスタルの量は相当のものだ、それに他のレジスタルとは違うより強力な物もあった。
「装置と陣の形成、レジスタルの準備は恐らくこの世界でも出来ます、しかし肝心なものが二つ足りません」
「その二つって何だ？」
「一つ目は無限に魔力を蓄えられる物、そして二つ目は、この魔法を発動させる事の出来る魔力の持ち主です」
「無限に魔力を蓄える物？何だそれは、何でそんな物が必要になる

んだ」
「時を越える為に瞬間的に魔力も必要となりますが、その後は時空を超え異次元の中を進まなくてはなりません、その間にも膨大な魔力を消費されます、それが尽きてしまうと元の過去の世界に戻る所か、そのまま異次元の中を彷徨い続けるかもしれません」
なるほど……魔法に関してなら俺も知識はある方だ、大体の話はわかる。
すると、今まで黙っていた話を聞いていた神楽が突然俺の肩をつついてくる。
「甲斐斗、貴方たしか前にレジスタルから魔力を呼び出して魔法を使うって言ってたわよねぇ」
「ああ、言ったな。それがどうした？」
「Dシリーズはその魔力を電気に近いエネルギーに変換して稼動させてるの、つまり多くのレジスタルがあれば一つのレジスタルに魔力を送り込む事も可能なはず」
「そうだ、だが無限に近い魔力を蓄える物が必要になってくる。シャイラ、お前達はどうやってそんな物を用意したんだ？」
「人工的に作り出したレジスタルを使用し、それに魔力を蓄えました。しかし無限とは程遠い量です、アルトニアエデンの魔科学力をもってしても作る事は不可能でした」
「って事は、お前達は一つ目の条件をクリア出来ずに魔法を発動させちまったのか」
「……はい、私達には時間も無く。それしか方法が……」
その時の様子を思い出しているのだろうか、ふとシャイラの表情が険しくなり、俯いてしまう。
アルトニアエデンにもあったのだろう、この世界と同様に、世界を懸けて戦った人間達の物語が。
「甲斐斗様、誠に申し上げにくいのですが……この世界でこの魔法を発動する事は不可能です」
「まぁ待てシャイラ、魔力を無限に蓄える代物何だが、俺は良い物

を知ってるんだぜ？」
「えっ？」
そう言って俺は手を伸ばし、瞬時に黒剣を出すと、それをシャイラの目の前に突きつけた。
「俺は世界最強の男甲斐斗様だ。そして俺のこの剣が、お前の言う『不可能』を『可能』にする」
今までだってこの剣で不可能を可能にしてきた、そしてこの剣……いや、この俺のレジスタルがあれば、無限の魔力も夢じゃない。
現に俺は持っていたんだからな、無限の魔力を――――。

――――甲斐斗達がシャイラと一室で話をしていた同じ時、赤城は葵に連れられある一室に来ていた。
「ありがとう、後は私一人に行かしてくれ」
赤城はそう言うと暗い表情を浮かべる二人の前に出て部屋の扉を開けた。
それを見た葵は壁にもたれかかると、耳を澄ませて赤城が部屋から出てくるのを待つ。

――――赤城が部屋に入ってまず聞こえてきたのは心電図の音だった。
そして小さな部屋の白いベットの上に、由梨音はいた。
「あ……あかぎ、少佐！」
部屋に入ってきた赤城を見た途端、由梨音の口元は笑みに変わる。
だが赤城の表情は複雑だった、右腕、そして右足の無い由梨音の小さな姿は余りにも悲惨すぎた。
まだ子供だというのに……目を背けたくなる、見たくない、傷ついてしまった、自分の仲間の姿を。
「来てくれたんですね！ずっと待ってたんですよ！」
何も言えない、声をかける事すらできない。赤城はゆっくりと由梨音に近づいていくと、由梨音は笑みを見せながらベットのすぐ横に置いてある皿に手を伸ばした。

「ほら！リンゴ！遅いから自分で切っちゃいました！赤城少佐も食べてください！」
机の上に転がっているボロボロになった林檎の塊。差し出された皿の上にはその林檎が砕かれたように置いてある。
赤城は震える指先で林檎の破片を手に取ると、そっと自分の口元に運んだ。
だが……赤城には味がわからない、それ所か林檎を噛む事すら満足に出来なかった。
どうしらたいい、こんな時。
何て言えばいい、どうやって声をかければいい。
もうわからない、わからなくなってしまった。
頭の中が真っ白になってしまいそうになる。
「き……傷は……痛む、か……？」
ふと言葉が漏れた、赤城には今自分が何を言ったのかすらもう憶えていない。
「平気です！ＳＶの方が助けてくれましたから！これでまたずっと赤城少佐の側にいれますね！」
ずっと側に……赤城は言わなくてはならない、ここに来る前、決心したはずだ。
それでも由梨音を見て言うことができなかった、顔を背け俯くと、赤城は小さく呟いてしまう。
「それは、出来ない……」

「え？」
赤城の一言に、由梨音の表情は一変した。
その光の無い虚ろな目は、じっと赤城を見つめたまま動かない。
「お前を連れて行く事は出来ないんだ……ＢＮの本部に……戻ってもらう……」
由梨音の手から皿が落ち、由梨音が切ったと思われる林檎の破片が赤城の足元に転がった。

「どうしてですか？」
由梨音の質問に赤城は答えない、俯いたまま何も言おうとせず、由梨音は更に言葉を進める。
「私がいないと、赤城少佐のコーヒーは誰が淹れるんですか？」
何も言わない赤城の態度を見て、由梨音は更に言葉を上げる。
「私は戦えます、赤城少佐と一緒に戦えますよ、私。ＳＲＣ機能のある機体を貸してください、私戦います。右腕と右足を失ったって、赤城少佐の側にいられれば平気です」
戦えるはずがない、右腕と右足を失った今の由梨音の体では、とてもじゃないが機体を扱う事は出来ない。
ましてや今からＥＤＰに実行しに行かなければならない、ＳＲＣ機能の搭載した機体があろうと赤城が出撃を許すはずがなかった。
「私赤城少佐の側にいたい、赤城少佐と戦いたい……赤城少佐とずっと、ずっと……赤城少佐……赤城少佐ぁ！」
身を乗り出し赤城に近づく由梨音、その小さく細い左手はしっかりと赤城の服を掴んだ。
「ねえどうして、どうして何も言ってくれないんですか！？赤城少佐、私はもういらないんですか？私の事嫌いになったんですか？私はもう使えないから？もう役に立たないから？赤城少佐にとって私は邪魔なんですか！？」
「違うッ！！」
由梨音の言葉に赤城を声を荒げ即答した、そして包帯の巻かれた由梨音の体を、赤城はそっと抱き締める。
小さくて、弱々しくて、必死に強がる由梨音の姿に、もう赤城は耐えられなかった。
「私は悔しい……由梨音、お前を守れなかった自分が、許せないんだ……」
赤城の言葉に由梨音の手から力が抜けていく、そして自分もまた手を伸ばし片腕で赤城を抱き締めた。
「すまない……本来なら私はお前を元気づけなくてはならないとい

うのに、私は隊長失格だ……」
涙ぐむ赤城の声に自然と由梨音の目から涙が流れる。
「だが言わせてくれ、お前は私にとって掛け替えの無い大切な仲間であり、家族だ。私だってずっとお前の側にいたい」
「赤城少佐……」
「でもお前を連れて行くことは出来ない、今から行く場所がどれほど危険なのか、由梨音、お前にならわかるはずだ」
「うん……」
「だから由梨音、お前には私の帰りを待っていてもらいたい。お前が待っているなら私は必ずお前の元に帰ってくる、そしてこの戦争を終わらせた後……共に暮らし、共に考えようじゃないか、平和な世界になった後、お前にコーヒーを淹れてもらいながら、ゆっくりと……」
「……でも、やっぱり嫌だよ……」
「由梨音……」
「嫌だ……嫌嫌嫌ぁッ！赤城少佐と離れたくない！ずっと一緒にいたい！側にいたい！赤城少佐ぁ！」
本当は由梨音だってわかっている、この身ではもう赤城の側にいられない事ぐらい。
それでも言いたかった、自分の本当の気持ちを、赤城に伝えたかった。
涙を流しながら赤城の胸元で泣き叫ぶ由梨音を見て、勇ましくも思えてくる、片腕と足を失いながらも、共に戦場に出るといってくれた少女に。
「約束だ、必ずお前の元に帰ってくる。だから今はＢＮの本部で安静にして待っていてくれ、私の帰る場所は、お前のいる場所だからな」
由梨音だって悔しい、ずっと側にいると決めたのに、もう離れ離れにならなくてはならなくなってしまったことに。
それに掛け替えの無い腕と足を失ってしまった。だが、それよりも

……由梨音にとっては赤城の側から離れてしまう事の方がショックだった。

「出発は明日になる。だから今日は、ずっとお前の側にいられるからな」

涙で濡れた頬を互いに重ね密着する赤城に、由梨音もまた赤城に甘えるように体を密着させた。

その姿はまるで泣きじゃくる赤子を宥めるかのように、赤城は暖かく由梨音を抱き締め、由梨音は目瞑りじっと身を寄せる。

辛い時、苦しい時、悲しい時、挫けそうになった時……仲間がいれば変わる、変われる、それがこの世界にとってどれだけ力になるか、この世を生きてきた人間なら誰もがわかる。

人間はそうやって成長し、強くなる。互いに支えあえば決して倒れる事は無い。

――……でも、もしそこにＥＲＲＯＲが生じたら……どうする？

全世界はどうして滅びた？何故滅びた？本当に私達だけの力で滅びたのか……？

全ての世界、全ての人間が滅びるのは運命。最後に抗うこの最後の世界もまた、滅びる運命にある。

止められない、変えられない、抗えない。人が消えるのは何の為？

人が生きるのは何の為？

誰も教えてはくれない、誰も答えを知らないから、誰も探さない、誰も調べない……。

――そう、だから私は見たい。人間の姿を。別に意味何てない。

これは私個人の感情……例えその姿がちっぽけで、運命に抗えるものでなくてもいい。興味が湧いてきたんだ、全世界を、全人間を、そして私達を、全てを管理し、全ての運命を決めた存在……見届けたい、最後の世界、最後の人間を、この目で。

……

……

「あ、あの。ちょっと話があるんだけど……」

ロアの声で目を覚ます女性、相手がＥＲＲＯＲとあってかロアも慎重な面持ちで立っていた。

会議の後、また同じ部屋に戻されたロア達は部屋の中で退屈していた、アビアは一人どこかへ行ってしまうし、話せる相手といえばこの女性しかいない。

女性はロアを見つめると、ゆっくりと立ち上がりロアの目の前まで近づいていく。

「わかった、聞こう。話とは何だ？」

「貴方達ＥＲＲＯＲはどうして人間を殺すのですか？僕達の世界では君みたいに意思の疎通が出来なかったから聞きたかったんだ。それにどこの世界から来たのかも知りたい、そして……ＥＲＲＯＲは一体何者で、どうやって生まれたのか知りたい……全部、教えてくれる？」

全ての謎をかき消したい、その為には答えを聞くしかロアには方法がなかった。

すると、ロアの言葉を聞いた女性は小さく溜め息を吐くと、先程座っていた椅子にまた座り始めた。

「残念だがそれは私達にもわからない。どうやって生まれたのかも、どうやってこの世界に来たのかも、わからない。ただ、一言だけ私達は伝えられていた」

「何を……ですか……？」

ロアの首元を掠める刃、よく見ると女性が向けた指が鋭利な刃物へと変わりロアの首元にまで伸びている。

「人間を殺せ。それだけだ」

足の力が抜けその場に座り込んでしまうロアを見て、女性は少し楽しそうな笑みを見せると言葉を続けた。

「人間を殺す理由は仲間達の中でも様々だ、それを教えてほしいな

ら直接に聞きに行く事だな」
皮一枚、もしあと少しでも女性が指を動かしていればロアの首は確実に斬れていただろう。
「そ、そうですか……僕はてっきり、この世界を守る為に人間を消していると思ってました。僕達をＥＲＲＯＲと言ったんだ、それぐらい僕達人間がこの世界にとって害なんだよね」
その問いに女性は無表情のまま腕を組むと、俯きながらその疑問に答えた。
「世界や星、植物、水、大気、数々の生命体の命など……本当はどうでもいいのかもしれない。もっと別の何かの為に、私達はこの世界に下ろされ、動かされているのかもしれないな」
随分と考えるようになったものだ、最初の頃は人間の思考を読むだけしか出来なかったが、今では人間のように悩み考える事が出来る。
だからこそ生まれてきた疑問、謎。
普通にしていればそれらに気づかなかった事だが今は違う、自分だけ特別、自分だけ特殊、自分だけ変わり者……それでいい、それが良い、知りたいから、謎を。
「あの、あと一つだけいいですか？」
色々と考えようと目を瞑ろうとした時、ロアは立ち上がると女性の前に立ち口を開く。
「名前、教えてください。貴方を何て呼べばいいのかわからない」
名前という言葉に女性が微かに反応を示す。武蔵がまだいた頃、名前について話し合った事を思い出す。
大事らしい、名前というのは生物にとって必ず必要になってくる。
だから女性は既に名前を武蔵と考えていた。
「私の名前はエラと決まった、次からそう呼んでくれ」
「エラさん……ですね、わかりました」
話してみてロアも感じた、少し怖い部分もあるが、この女性、エラは他のＥＲＲＯＲとは大分違うことを。
自分達の世界にいなかった会話の出来るＥＲＲＯＲ、その存在は今

までの世界とは全く違う展開なのかもしれない。
絶望の中から希望が稀に生まれる、人類にとって残り僅かな時間、最後に何が待ち受けているのか。
生きていれば何かわかるかもしれない、何か知るかもしれない、例えそれが望む結果でなくても。

第97話　慈悲、責任

――――一日経っただけであれほど広がっていた雨雲は消えてしまい。空には雲一つ無い青空が広がっていた。

各部屋の窓からは朝日が差し込み、基地にいた人達が目を覚ましていく中、甲斐斗と神楽だけは違った。

「お、おい……日が昇ってるぞ……」

「そう、ね。ちょっと張り切りすぎたかしら……」

昨日シャイラに聞かされた話、そして渡してもらったディスクを二人で見て計画を練りあっている内に一日がたってしまった。

後ろのベットではミシェルが毛布に包まって寝ていたが、顔を朝日に照らされゆっくりと目を覚ます。

「そろそろ俺も寝るとするか……こうも眠いと頭が働かねえ……」

ふらふらとした足取りでベットに上に倒れこむ甲斐斗、ちょうど自分の目の前には目を覚ましたミシェルがこちらを見つめていた。

「おやすみ、ミシェル……」

深い眠りにつこうと目を瞑る甲斐斗、すると神楽は台所へ向かい紅茶を作り始める。

「寝るのは勝手だけど。今日ここを出発するのに大丈夫なの？あと、そこ私のベットだから――――」

出発が今日……そんな話、甲斐斗が聞いてるわけがない。

「なんだとっ！？くそっ、なら寝てるわけにはいかねえ、さっさと艦に乗り込む……ぞ……」

ベットから起き上がり声を荒げた甲斐斗だったが、睡魔の攻撃は収まらず意識が遠のいてしまう。

それを見て呆れたように溜め息を吐く神楽は、自分の紅茶を淹れそれを飲み終えた後、ベットの上で目を覚ましたミシェルに近づいていく。

「おはよう！かぐら！」

神楽に気づいたミシェル、まだ少し眠りたいのか、目元を擦りながらも満面の笑みで神楽に挨拶をした。
「えっ？……おはよう、ミシェルちゃん。私の名前覚えてくれたのね」
「うん！」
その表情に神楽は自然と手を伸ばしミシェルの頭を撫でていく、それに対してミシェルも嬉しそうに神楽を見つめていた。
「シャワーを浴びたら朝食作るから、ちょっと待っててね」
そう言って神楽は体に羽織っている白衣を脱ぐと、綺麗に壁に掛けてバスルームの方へと歩いていく。
ミシェルはベットの上に座ったまま、足をふらふらさせ神楽が帰ってくるのを待っており、ふと自分の横で寝息を立てる甲斐斗に視線を向けた。
「かいとー、あさだよー？」
いつもは朝に起きているのに、朝に眠ってしまう甲斐斗に首をかしげてしまうミシェル。
部屋には自分達以外誰もいない、物音もせず、バスルームからは微かに水の音が聞こえていた。
「あ、はみがき……」
前に神楽のいた家にいた時、ミシェルは朝食を食べる前に神楽から歯磨きも教わっていた。
部屋を見渡すが洗面所らしき場所は見当たらない、とすれば水の音がする場所にあるかもしれない。
眠そうに一人部屋の中を歩き、水の音がする部屋の扉を開け中に入ると、そこには洗面所の他にも洗濯機や机があり、下着などが置かれていた。
曇りガラスの付いてある扉の向こうからはシャワーの音が絶えず聞こえてくる、それを見た後洗面台に近づくと、コップの中に置いてある歯ブラシを手を伸ばした。
そして指が歯ブラシに触れた瞬間、突如バスルームから何かの倒れ

る音が聞こえ指を離してしまう。
音の方が気になって振り返ってみるが、先程と同じように水の音しか聞こえてこない。
「かぐら？」
先程まで見えていた人影が見えない、不思議に思いミシェルはバスルームに近づくと、その小さな手で僅かに扉を開けた。
「あっ――――！」
目に飛び込んできた光景にミシェルは言葉を失う、気を失っている神楽が頭から血を流し、壁にもたれ掛かるようにして倒れていたのが見えたからだ。
「か……かいと、かいとっ！」
慌てふためきながら甲斐斗の名を呼ぶが、甲斐斗が来る気配は無い。
ミシェルは急いで甲斐斗の元へ向かい必死に名前を呼び続けるが、深い眠りについた甲斐斗は一向に起きない。
「おきて！かいと！かぐらがたおれてる！」
「んー……どうしたんだぁ……？」
その呼びかけにようやく甲斐斗の目が微かに開いた、そして横目でミシェルの姿を確認すると、その只ならぬ雰囲気にすぐさま飛び起き目元を擦る。
「こっち！はやく！」
甲斐斗の手を引っ張り神楽の元へ案内しようとするミシェルに、甲斐斗も駆け足でバスルームへと向かった。
そこで初めて状況が飲み込めた、開いたままの扉の向こうには倒れている神楽、甲斐斗はすぐさまシャワーのお湯を止めると、近くにあったバスタオルを神楽の体に被せ抱き上げる。
「ったく！眠いのはわかるが寝るならもうちょっと場所考えろよッ！」
先程まで自分が寝ていたベットに神楽をゆっくりと下ろし、先程の場所から何枚ものバスタオルを持ってくると、濡れた神楽の手足や顔についた水を拭き取っていく。

そして頭から僅かに流れる血を止めるようにタオルを軽く当てると、手を離し持ってきてたタオルを手に取った。
「ミシェル、お前も手伝ってくれ」
そう言って手に持っていたタオルをミシェルに渡した甲斐斗は、一人部屋を見渡しながら次々にタンスやクローゼットを開けていく。
そして適当に下着と服を手に取ると、それをミシェルに渡した。
「体が拭き終わったらこれを着させてやってくれ。大丈夫、傷は浅いし呼吸も安定している、ゆっくりと落ち着いてやっていいからな」
未だに落ち着かない様子のミシェルの頭を軽く撫で笑みを見せる甲斐斗に、ミシェルも少し落ち着きを取り戻し頷いてくれた。

――「んっ……」
体が気だるく重みを感じる、少し頭が痛むが目を覚ました神楽はベットから体を起こすと、自分の目元を手で触っていく。
「起きたみたいだな、ほらよ」
その声にふと目線を横に向けると、眼鏡をこちらに差し出す甲斐斗がベットの横に立っていた。
無言で眼鏡を受け取る神楽、早速眼鏡を顔に付けると軽く部屋を見渡していく、するとすぐ近くのソファの上で寝ているミシェルが目に入った。
「ミシェルに感謝するんだな、倒れたお前を見つけてくれたんだ。その服も全部ミシェルが着せた、起きたら礼の一つや二つ言っとけよ」
そう言うと甲斐斗は台所の方へと向かい始めると、神楽は自分の着ている服を見ながら胸に手を当てた。
「見たのね……変態……」
神楽の言葉が甲斐斗に突き刺さる、だが甲斐斗はやれやれと肩を下ろし小さな溜め息を吐くと、手に湯気の立つお茶碗を持って神楽の元に帰ってくる。
「お前のことだから何か言ってくるとは思ってたが。助けてやった

のに酷い言われようだよなぁ俺って」
甲斐斗はそう言いながらも手に持ったお茶碗を神楽に差し出すと、神楽は何も言わずに受け取った。
「腹減ってるだろ？俺様が作ったお粥だ、まずはそれ食って腹を満たす事からはじめろ」
お茶碗と一緒にスプーンも渡した後、甲斐斗はミシェルの寝ているソファに座ると、腕を組んで天井を見上げる。
そのソファの前にある机の上にはお茶碗が二つ置かれており、既にミシェルと甲斐斗は食べた後だった。
手から伝わる暖かさに神楽はスプーンでお粥を掬うと、少し息を吹きかけた後ゆっくりと一口食べてみた。
……本当に甲斐斗が作ったのか不思議なくらいに暖かくて美味しいお粥に少し戸惑いを見せる神楽だが、顔にはそれを出さないようにして静かに食べ続けた。
「美味いだろ？これでも少しは料理作れるんだぜ」
自信有りげな態度の甲斐斗、それを横目で見た神楽はまた一口お粥を食べると小さく呟いた。
「お粥作れたぐらいで料理って言えるのかしら……」
勿論甲斐斗に聞こえる声の大きさ、この言葉を聞いてどんな反応するか神楽は横目でまた甲斐斗を見てみるが、甲斐斗はやや笑みを見せると足を組み大きく背を伸ばす。
「それだけ言えれば心配なさそうだが疲れは溜まってるだろ、今はゆっくり休んどけ」
突っかかってこない、いつもの甲斐斗なら今頃怒って色々と愚痴っている。
というか甲斐斗と神楽の会話はいつもそんなものなのだから、今回もそんな風な会話が続くと思っていた。
「……あら、何かやけに優しいわね……伊達君を殺したから、その罪滅ぼしでもしてるのかしら？」
ちょっとした悪心が神楽の口から漏れる。

さすがにこんな事を言われたら甲斐斗も黙ってはいないはず、そう思いながら甲斐斗に目を向けたが、甲斐斗は俯きながらも真っ直ぐと神楽を見つめ口を開いた。
「別に何もしてねえよ……ただお前を慰めたかっただけだ」
「えっ……？」
一瞬自分の耳を疑った、そしてその言葉を信じてしまいそうになった自分をも。
「ばーか、冗談に決まってるだろ」
からかうように笑ってみせる甲斐斗は組んでいた腕を自分の頭の後ろに回しゆったりとソファでくつろぎながら天井を見上げた。
「お前の体を気遣うのは過去に帰る為にはお前の力が必要になってくるからだ、勝手に体調壊されて死なれたら俺が困るしな……って、おい。どうした？」
ふと甲斐斗が視線を戻すと、ベットでお粥を食べていた神楽は俯き肩を震わせていた。
「ま、待て。嘘、冗談だ、冗談、今のが本当の冗談、信じるなよ？真に受けるなよ!?おい！」
また何か言い返してくると思っていた甲斐斗だったが、神楽の思わぬ態度に自分の態度まで急変してしまう。
肩を震わす神楽は甲斐斗の方を向く事はなく、俯いたまま茶碗を両手で握っていた。
一粒、そして二粒、神楽の目から零れ落ちる涙が次々に神楽の手元に落ちていく。
無言で涙を流し続ける神楽、茶碗の中に涙が落ちても、眼鏡は涙で濡れても、ただひたすら俯き涙を零す。
そんな神楽に甲斐斗もどうしていいかわからず、立ち上がったはいいが驚いた表情で神楽を見つめる事しか出来ない。
すると、突然神楽は手に持っていたスプーンを使って素早くお粥を食べていくと、空の容器を机の上に置き眼鏡も外してしまう。
「お、おい……神楽……？」

甲斐斗の呼びかけに返事をせず、ベットの上で横になると神楽は甲斐斗に背を向けて寝てしまう。
「すまん……ちょっと言い過ぎた」
反省の色を見せる甲斐斗だが、神楽は以前背を向けたままの体勢で寝ている。
「何で……謝るの？」
「えっ？いや、だって……俺が、その……なあ」
背を向ける神楽からの疑問に甲斐斗はたじろぎながら答えようとするが、先に話を進めたのは神楽だった。
「別に、貴方の言葉で泣いてるんじゃないわよ」
口調の強くなる神楽の声に甲斐斗が少し驚いたように反応すると、暗い表情を浮かべその眼差しを神楽の背に向ける。
「ただ私は悔しかった！……一瞬だけでも、貴方を信頼しそうになった自分がいたから……」
神楽の涙が止まってなどいない、今でも甲斐斗に見せないように背を向けたが涙は止め処なく溢れていた。
必死に強がりバレないように神楽はしているつもりだが、震えながら出る声はどうして隠せない。
「私は今まで一人でやってきた。これからもそう、例え目的は同じでも私はいつも一人、でもそれでこそ私は強くなれて、今までやってこれた……でもっ……」
涙ぐむ神楽、自分に背を向けながらも自らの本心を語ってくる神楽に対し、甲斐斗は自然と足が前に出る。
「私が求めてたのはこんなのじゃなかった……ぜんぜんちがう……私は、ただ――」
「優しいな」
甲斐斗の一言が神楽の言葉を止めた、甲斐斗は一歩ずつゆっくりと神楽の寝ているベットに近づいていきながら、更に言葉を続けていく。
「お前だけじゃない、武蔵も、赤城も、本当お人よしばかり集まっ

てやがる。自分の身より仲間の身、そうやってお前達は共に支えて、共に支えられてきたんだろ」

共に……幼き頃から三人は共に必要不可欠な存在であり、軍に来てからは赤城や武蔵の側には更にその仲間達が増えていく。

だが神楽にはそれがいない、神楽には自分を支える存在、支えてくれる存在が赤城と武蔵しかいない。

そしてその二人にでさえ、神楽は本心や本音をぶつける事を控え、自分より二人を優先させてきた。

「お前が俺を嫌っていたのは俺がいる事で武蔵や赤城に被害が及んだからだってこともわかってる。お前は自分より周りにいる人達が傷つくのを見たくない奴だからな」

ベットの横に来て甲斐斗の足は止まった、それでも神楽は後ろに振り向こうとせず耐えるように横を向いたまま動かない。

「だからこそお前は誰よりも望んだ。誰も傷つくことなく、誰も死ぬことのない……『平和な世界』を。……神楽。お前が最も必要としていた武蔵は死んだ、それが今この世界の結果なんだ」

決して揺るぐ事は無い現実、もう元通りにはならず、後戻りもできない。

これは望んだ未来でも、望んだ世界でも何でもない、ただ最悪の結果。

どうしてこうなった?どうして平和な世界で皆と共に生きていけなかった?どうして……。

「だが、俺が過去に帰ることが出来れば。こんな歪んだ未来は無かった事に出来る、お前の望む平和な世界を、本来あるべき世界を作る事が出来る」

神楽の望む、平和な世界。望んでいたさ、例え世界が荒れ、滅び、人類が絶滅の危機に瀕していたとしても。

そこに武蔵が、そこに赤城が、仲間が、友が、家族がいるから、何度でも立ち上がれた。

だが世界が良くなる事は無かった、気づけば家族は消え、共が消え、

仲間が消えていく。
もう立ち上がる意味が無い、消えてしまったのだから、おしまいだ。
「勿論、その前にお前のいる世界を平和にするのが先だがな。……俺に全て任せろ、そして信じてくれ、俺は死なない、俺は消えない、俺はお前を絶対に裏切らない。俺は最強だからな」
それだというのに、甲斐斗の言葉に自然と勇気付けられる。
純粋に嬉しい、でもまだ何処か吹っ切れない、何が自分をそうさせている？何が……。
「お前が俺を必要とするならずっと側にいる、お前が俺に慰めてほしいなら言ってくれ、俺は武蔵みたいに気の利く男じゃねえからな、直接こっち向いて言ってくれないとわかってやれんさ」
相変わらず神楽は背を向けたまま何も答えない、それに対して甲斐斗も頭を掻きながらふと天井を見上げると、神楽に背を向けた。
「……何言ってんだ俺。恥ずいな……ちょっと自惚れてた。頭冷やしてくる」
言い過ぎたかもしれない、甲斐斗も自分じゃ武蔵の代わりなんて務まらないのはすぐにわかる。
でも、ただ神楽を見過ごしておけなかった、こんなにも彼女を知ってしまったのだ、今更見てみぬふりなど甲斐斗には出来ない。
何か出来れば……そう思って言った言葉も結局神楽には届かず、甲斐斗は足を一歩前に踏み出した。
「さむい……」
「ん？て、うわっ！？」
神楽が何か呟いた瞬間、左手を引っ張られ後ろに倒される甲斐斗、ベットの上だったので何ともなく、すぐに起き上がろうとしたが体を引かれ体勢が崩れ、次に目蓋を開けた時は既に神楽に抱き締められていた。
言葉が出ない、涙で少し目元が赤くなっている神楽が甲斐斗の顔を胸元に押し付け抱き締めているのだから。
動く事もできず、甲斐斗は目を丸くして事の状況を読もうとするが、

先に口を開いたのは神楽だった。
「暖かい……お願い、少しの間だけこうさせて……」
いつもの口調などではない、甘く、暖かな神楽の口調に、甲斐斗も自然に起き上がるのをやめた。
自分の、神楽の鼓動が高まっていくのを甲斐斗はすぐに感じた、何処と無く久しい感覚、感情。
「本当なら今、私は平和な世界で伊達君や赤ちゃんと楽しい日々を送ってるはずなのに……」
甲斐斗を抱き締める神楽の目からはまた一滴の涙が零れ落ちた、自分の言っている言葉の虚しさが更に自分を責め、逃げ場を消していく。
平和な世界で、愛する人と共に生活し、子供も生まれ幸せに暮らす自分の姿は、もうどこにもない。
「私は嫌なの、こんな世界。もう……」
「俺だって嫌だ」
神楽の腕の力が少し緩んだのを見て、甲斐斗はベットで寝ている神楽と同じ位置まで上がってくると、左手で神楽の頭を撫でながから口を開いた。
「だからこそ変えるんだろ、この世界を。死んだ奴は戻ってこない、でも自分は生きてる、生きてるなら何だって出来る。世界を変える事も、幸せになる事も。なん、でも、な」
頭を撫でていた腕は優しく神楽を自分の胸元に抱き寄せると、そのまま甲斐斗は神楽の体を優しく抱き締める。
「寒いんだろ?こっちの方が暖まる、これでいいか?」
抱き締めるより、抱き締められる方が何倍も暖かく心地良い、ずっとこのままでいたいという気持ちが大きくなっていく。
これは夢ではない現実、今まさに目の前で自分を抱き締めてくれる人がいる。
初めてだった、互いに本音をぶつけて、言い合える人に出会えたのは――――。

「うん……いいよ……」
そう呟いた神楽はとても幸せそうな表情を浮かべていた、女の子らしく頬を赤らめ小さな笑みをしている。
でも甲斐斗には見せない。今でさえ照れて恥ずかしいのに、今甲斐斗に顔を見られたらまた泣いてしまうかもしれないから――。

――「基地内に残っていた物資は全て艦に積み込めました、後は他の部隊と合流しＥＤＰを決行するだけですね」
朝から昼にかけて基地から艦への物資の運搬が終わった。
気づけば空高くに日が昇り、眩い日差しは甲板の上に立っていたシャイラとアリスを暖める。
「シャイラ、今日は良い天気ね」
広大な青空に広がる小さな雲を寂しそうな表情で見つめるアリス、シャイラもアリスと同じように顔を上げ空を見つめると、シャイラもまたアリスと同様に静かに答えた。
「……はい、そうですね」
「何かさ、こんなにも快晴なんて、前回のＥＤＰと同じよね。これじゃ人類の存亡を懸けた戦いが今から始まるなんて思えないわ」
こんなにも空は晴れ、澄んでいるというのに。心は一向に晴れない。
決戦の前に気持ちを落ち着かせたい、決心したい、だからアリスは今ここでシャイラに伝えておきたい言葉があった。
「シャイラ……」
俯きながらアリスは名を呼ぶと、隣に立っていたシャイラは体をアリスに向け微笑みかけてくれる。
「はい、なんでしょうか」
シャイラの声に俯いていた顔を上げるアリス、そして体をアリスの方に向けると、力拳を握り締めながら堂々と、そして力強く声を出した。
「絶対に死なないでね……もう私、誰も失いたくない」
失う恐怖を知ったアリス、今までずっといられると思ってきた人た

ちは次々に周りから消えていき、現実を思い知らされた。
失い続けたくない……もしかすれば、この望みはこの世界にとってわがままな要求なのかもしれない。
人類の存亡が懸かった戦い、誰も死なずに終わらせられるはずもなく、ましてや人類が滅亡してしまう恐れもある。
だけど、それでも。アリスは皆が生きて帰れることを望んでいた。
アリスの言葉に、シャイラは微笑んだまま跪くと、顔を上げアリスの手をとり自分の手と重ね合わせる。
「お嬢様がそう望むのなら、私は決して死にません。生きてこの戦いを終わらせ、皆と共に行きましょう、平和な世界へ」
決して死なない。たしかにシャイラは言ってくれた、重ね合わせた手を引くアリス、跪くシャイラを力強く立たせると、先程とは違う覚悟した面持ちで空を見上げた。
「うん！……準備は整ったのよね。それじゃ、そろそろ時間だし行きましょ！」
「はい、お嬢様」
アリスは決心がついたのだろう、後ろに振り向くとすぐに艦内に戻り始めるが、シャイラと重ね合わせた手を放さずいた。
二人は何も言わずに互いに手を握り締める、そしてアリスが一歩前に踏み出すと、それに合わせシャイラも共に歩き始めた。平和な世界へ行く為に――。

――「あ、そろそろ時間みたいですね」
そう言って由梨音は車椅子に座りながら艦の方を見つめると、基地の外で待機していた艦隊は格納庫のハッチを閉め、発進の準備に取り掛かろうとしていた。
少しばかりのお別れ、赤城はあの艦に乗るが、由梨音はまた別の小さな艦に乗り込み物資と共にＢＮの本拠地に戻ってしまう。
「そうだな……由梨音、私は――」
「わかってますよ！私のいる場所は赤城少佐の帰る場所、だから絶

対に帰ってきてくださいね！」
「ああ、約束する。この戦いが終わった後、必ずお前の元に帰って来こよう。それまで待っていてくれ」
「はい！赤城少佐、私はこのＥＤＰ何も出来ません。だから赤城少佐が無事である事をずっと祈ってます！」
逞しく、そして強い意思の持ち主。小さな体が傷ついてもなお、由梨音は赤城の前で笑顔を絶やさなかった。
「心強いな、ありがとう……それでは行って来る」
赤城がそう言うと、後ろで待機していたＮＦの女性兵士が一人由梨音の元に近づくと、赤城に変わって由梨音の座る車椅子を押し始める。
ふと過去の振り返ってみれば由梨音には何かと助けられてきた。
いや、お互いに助け合っていたのかもしれない。だからこそ今までずっと一緒に戦えて来れた。
掛け替えの無い大切な存在、でも今はしばし別れの時、自分に背を向け遠ざかっていく由梨音を見て、赤城もゆっくりと振り返り背を向けて進み始めた。
躊躇いは無い、また会えるのだから、これが最後ではないのだから。
「エコ、今のお前にはまだ無理だ。部屋でゆっくり休んどけよ」
赤城は一人自分の乗り込む艦に近づいていくと、聞き覚えのある声と共に葵とエコが視界の中に入ってきた。
「平気……もう大丈夫、だから……っ」
体勢を崩し倒れこむように前のめりになるエコをすかさず葵は受け止めた、それでもなお前に歩こうとするエコを見て、葵は肩に手を掛けエコを止めにかかる。
「っと、やっぱり。歩くだけでもやっとじゃねーか、無理やりにでも俺が艦の病室に連れて行くからな」
そう言ってエコを背負おうと葵がしゃがみ込もうとした時、立っていた赤城に気づき目が合った。
「ん？あんたはたしかＮＦの赤城少佐じゃないか、どうしたんだ？」

軽々とエコを背負う葵、エコはまだ顔色が悪く少しぐったりとした様子で葵の背にしがみ付いていた。
「礼が言いたい、由梨音が意識を取り戻した後もずっと寝ていたと聞いていたから言えなくてな……」
葵が背負っているエコに顔を向ける赤城、声を掛けようとしたが、目を瞑り苦しそうに呼吸をするエコに何も言えずにいた。
「すまねえ、まだエコは不調なんだ。また今度にでも言いに来てくれ」
軽く頭を下げた後、葵は艦に乗り込む為に歩き始める。
「待ってくれ」
赤城に呼び止められ葵は足を止めた、そして少しだけ振り返り赤城の方を見ると、赤城は言葉を続けた。
「私に……背負わせてくれないか？」
せめてもの償い、思い。
何か自分に出来る事があればしてあげたかった。由梨音の命を助けてくれたのだから、せめてもの恩を返したい。
そう思い赤城はそっとエコを手を伸ばそうとしたが、葵は赤城に背を向けたまま強い口調で口を開いた。
「嫌だ」
赤城にはその言葉に逆らえる権限は無い、エコを苦しめてしまったのは自分の不甲斐無さから来ているからだ。
葵の言葉に赤城は手を止め、哀しげな表情で俯いてしまう。
遣り切れない思いに赤城は静かにその場から引こうとしたが、葵の言葉はまだ続いていた。
「大丈夫、あんたの気持ちは十分にわかってるよ。でもな、俺とエコはパートナー、共に助け合ってきた仲間だ。今もこうやって苦しんでるのに、俺は側にいてやることしかできない、たったそれだけの事しかできないんだ」
たったそれだけの事……それがどれだけ互いの心に力を与えてくれるのか、赤城は良く知っていた。

由梨音の側にい続けた昨日、一緒に側にいて、一緒に会話して、たったそれだけで心が暖かくなる。
「だから奪わないでくれ」
葵はそれだけ言い残し後、エコを背負ったまま艦内へと入っていった。
葵とエコの二人の姿に、自分と由梨音の姿を重ね合わさって見える。
もし自分が同じ立場ならどうしていただろうか……。
「奪わないでくれ……か」

――ＥＤＰの開始場所に向けて赤城達の乗る戦艦は動き始めた。
これから最後の会議が行われ、作戦内容もまた皆で確認しあう。
絶対に負けられない戦い、皆それぞれの思いを胸に、決戦の時を待つ。

――「ふっ……んー……あ～、よく寝た……ん、誰もいないのか……」
眠りから目覚め起き上がる甲斐斗、眠そうに頭を掻きながら辺りを見渡すと、自分の枕の隣に一枚の紙が置かれていた。
「基地からの出発は１２時からか、親切だなぁ神楽は、俺の為にちゃんと出発の時間を書いてくれるなんて」
しょうしょ照れくさそうに紙を手に取り、甲斐斗は部屋の壁に掛けられてある時計に目を向けた。
「ふむふむ、今は１２時１０分か」
手に持った紙をもう一度見てみる、そして壁に掛けられていた時計を見て、甲斐斗はホッと息を吐き胸を撫で下ろした。
「何だ、まだ１１時間あるじゃねえか。もう一眠りでもす――」

「る？わけねえだろがぁあああああああッ！わざわざ手紙置くぐらいなら起こせよあの野郎ぉおおおおおおおおッ！」

――「っくしゅん！……ふぅ、そろそろ起きた頃かしら」
EDP開始地に向けての艦隊、その一つの艦に神楽は乗っていた。
「かぐらぁ、かいとどこだろー？」
一室でソファに座りテレビを見ていた神楽の横でミシェルは首を傾げていた。
すると神楽は横に座るミシェルの頭を優しく撫でると、テレビのリモコンを手に取りテレビの電源を消してしまう。
「機体は基地に置いたままだから、すぐに追いついてくるわよ。だから今は私と遊ぼっか」
「そうなの？……うん！あそぼ！」
純粋無垢の可愛げな笑顔に、神楽も自然と笑顔になりミシェルを見つめてしまう。
これは相手がミシェルだから出来ることであって、それ以外の相手では笑顔を見せることなんてまず無い。
もし、この笑顔を他の誰かに見せてしまう時が来るとすれば……それは愛した人の側にいる時ぐらいだろう。

第９８話　化身、震撼

――東部軍事基地からＳＶ、ＮＦの艦隊が発進してから数時間が経ち、各地方から集められた戦力が一箇所に集結しようとしていた。
「これがＮＦ、ＳＶに残された最後の戦力か……」
次々に並列に並んでいく艦隊の光景をＳＶの戦艦の中から見下ろす赤城。
すると、通路からこちらに歩いてくる神楽と、その神楽と手を繋いで近づいてくるミシェルが視界に入った。
「神楽、お前も出るのだろう？」
腕を組みながら神楽の方に体を向けると、神楽は赤城の前で立ち止まりミシェルと手を繋いだまま窓の方に視線を向ける。
「ええ、私の羽衣の役目は本来ＥＤＰでの決戦兵器。それに、過去に帰る為に必要な物も揃えないといけないから」
窓の外から見える戦力、既にどの艦も出撃可能な状態、機体の整備も完了し万全の体制で待機していた。
「所で、甲斐斗知らない？もしかしたら貴方の所に来ているかもしれないと思ってたんだけど」
「それは私の台詞だ、奴の機体はまだここに来ていないらしいぞ。何か作戦でもあるのか？」
一瞬二人の会話が止まる、だが神楽は溜め息を吐くと頭を抱えるように手を当て俯いてしまう。
「あの馬鹿、道にでも迷ったのかしら」
「作戦開始場所は前の会議で話してある、直に来るはずだ……多分」
赤城まで溜め息を吐き俯いてしまうが、顔を上げるともう一度窓の外を眺めた。
その時、ふと視界に黒い機体が颯爽と上空を飛び去る光景が映る。
「神楽、たった今甲斐斗の機体が横切ったんだが」
言わずともその光景は神楽も見ており、呆れた様子のまま立ちつく

していた。

――――「やっと着いたみたいだが……すげー数の戦艦だ、集合地点はここで間違いないな」

出遅れていた甲斐斗もようやく到着、並列する艦隊の前に機体を着地させると辺りを見渡してみる。

「さてと、神楽のいる艦はどれだぁ？一言文句言わねえと気が治まらん」

神楽が乗っていたあの機体も見当たらず、このまま目視で神楽の場所がわかるはずもないのでＳＶの艦に通信を試みようとした時、目の前の戦艦のハッチが開くと１機の機体が姿を現した。

白き装甲に巨大な右腕、そして鋭く細い左腕を持つアギト。艦から勢い良く発進すると甲斐斗の乗る機体の目の前に着地し機体を止めた。

『ずっと待っていたんですよ甲斐斗さん。これからＥＤＰを行うというのにどこに行ってたのですか？』

モニターに映し出される愁の姿は以前のように仮面を付けておらず、柔らかい表情で甲斐斗を見つめていた。

「ちょっとな……それより聞きたい事があるんだが、神楽やミシェル、あとアビア達が乗ってる艦はどこにあるんだ？」

『皆さんなら俺の後ろにある艦に乗っています。そうそう、甲斐斗さんがいないのでアビアさんが酷く退屈してましたよ、早く行ってあげた方が――――』

愁の会話を途中まで聞いた後、甲斐斗の機体はアギトを軽々と飛び越えると、先程アギトが発進した艦の中に強引に乗り込んでいく。

「ありがとよっ！簡単に話し済ませてくるわ」

甲斐斗はそれだけ言って通信を切ると、艦内の格納庫に機体を止めすぐさまハッチを開けて機体から降りてくる。

艦の前で立ちつくすアギト、甲斐斗の乗る機体が艦に入ったのを見た後。愁は軽く機体の両手を動かし調整に入る。

「アギト、俺に迷いなんてもう無いよ。生きて明日を迎えるために砕き、貫こう。フィリオの為、アリスの為……いや、皆の世界の為に、突き進む」

――――「どこだ神楽ぁあああ！でてこいやぁあああッ！」

基地の通路を一人走り回る甲斐斗、冷静に軍の兵士から場所を聞けばいいだけの話しだが今の甲斐斗は神楽への怒りにただひたすら艦内を走り回っていた。

すると、甲斐斗が横切ろうとした一室の扉が突如開くと、部屋の中から出てきた神楽がすかざす足を伸ばし走り過ぎようとする甲斐斗の足を蹴り上げる。

「ぬおっ！？」

当然体勢が崩れ走っていた勢いと共に通路にこける甲斐斗、その様子を見下したように見つける神楽は一本の煙草を取り出すとそれに火をつけ口に銜えた。

「人の名前をそんな大声で呼ばないでほしいんだけど、こっちが恥ずかしいじゃない」

「探したぞてめぇぇぇっ！人を勝手に置いて行きやがって、俺様がどれだけ道に迷ってたのか知らねえだろがぁッ！？」

「迷うって、機体にはちゃんと目的地が入っていたはずよ？」

……言えない、無我夢中に機体を走らせた後、機体のデータにちゃんと目的地が入力されていたことなど。

最初から調べていれば余り時間もとらなかったが、頭に血が上っていた甲斐斗にはそれに気づくことすらできていなかった。

「……まっ、今度からは起こせよ！」

先程の怒りは何処へやら、何事もなかったかのように話を切り替えようとする甲斐斗だが、見下したような神楽の視線が消える事は無かった。

「それと、お前もＥＤＰに出るみたいだが。体調の方は大丈夫なのかよ」

一瞬間が開く、先程まで甲斐斗を見下していた神楽の表情も呆気にとられたようになっている。
「ええ……大丈夫よ」
「そうか、なら良いんだけどな。くれぐれも無理はすんなよ」
「ええ……」
ぼーっと甲斐斗を見つめる神楽の視線に、甲斐斗は腕を組み首を傾けてしまう。
「あーそうだ、ミシェルはどこだ。あとアビアにロア、あとあのＥＲＲＯＲ女」
「……貴方の後ろにある部屋よ」
神楽がそう言った途端、甲斐斗はすぐ後ろにある部屋の扉が開いた音が聞こえてきた。
「甲斐斗ーっ！」
飛び掛るアビアをまたも華麗に交わす甲斐斗、同様に神楽も身をかわすと、アビアは神楽が出てきた部屋に勢い良く入っていってしまう。
「元気そうで何よりだ。って事でアビア、俺は今からＥＲＲＯＲぶっ殺してくるから、その間お前のその有り余る元気でミシェルを守っててくれ」
「えー、いつもそうじゃーん……。つまんない、キスしよ？」
「何でそうなる。あれだ、あれ、無事ミシェルを守れたら俺が何でもしてやる、それでいいか？」
甲斐斗が交換条件を出した途端、アビアは一人ガッツポーズを取ると先程とはうってかわって張り切り始める。
「アビアに全部任せてオッケー！アビア頑張っちゃうよーっ！」
「それでこそお前だッ！ミシェルを絶対に守るようにロアにも伝えておいてくれよ」
「うんうん！それよりこの戦いが終わった後、本当に何でもしてくれるんだよねー？」
「おう、約束は絶対に守る。だからお前も約束を守れよ」

アビアが自分の話に上手く乗ってきた事に満足する甲斐斗、だがアビアが一瞬だけ見せた不敵な笑みに、自分の表情から笑みが消えていく。

「アビア？」

ふと甲斐斗の口からアビアの名前が零れる、するとアビアはまたいつものようにニコニコと笑ってみせる。

「なーに？」

「……いや、なんでもない。そうだ、お前に一つ聞きたい事がある」

甲斐斗にはアビアに聞いておきたい事があった。前日の会議で知り得た事が、アビアの話してくれた事と矛盾していることに気づいたのだから。

「あの男、テトはたしか神がこの世界での魔法を封じているって言ってたよな。だが実際神が消えた後、神がいた時と状況が変わっていない、これはどういうことなんだ？あいつは俺に嘘を言っていたのか？」

テトはあの時、嘘を教えたのか。甲斐斗にはわからない、だからこそ今ここでアビアに聞いておく必要があった。

少なくともアビアなら知っているはずだ、この世界で魔法が制限されている理由、神の力について。

その甲斐斗の真剣な表情に神楽も息を呑みアビアの返事を待つ、すると甲斐斗の前に立っていたアビアの顔から笑みが消えると、一歩前に踏み出した。

「帰ってきたら、教えてあげる」

甲斐斗の耳元でそう囁いた後、またいつものように笑みを見せるアビア。

それを聞いた甲斐斗もまた少し笑ってしまうと、後ろに振り返りアビアに背を向けた。

「わかった、約束だぞ？」

「うん！」

本来なら今からでも喋らせるべきかもしれないが、問題無い。無事

帰ってきて話を聞けばいいだけのこと。
そうと決まればさっさとＥＤＰを終わらせる、早速自分の機体の元に向かおうとした時、神楽が出てきた部屋から眠たそうな表情を浮かべるミシェルが現れた。
「かいとっ……！」
甲斐斗を見た途端眠そうな表情から笑顔に変わるのを見て、甲斐斗はしゃがみ込みミシェルの頭を優しく撫でていく。
「おはよう、突然だが俺は今から戦いに行ってくる。帰ってくるまでアビア達とここで大人しくしてるんだぞ？」
優しく話しかける甲斐斗の言葉、ミシェルは小さく頷いてくれたが、不安な表情で甲斐斗を見つめてくる。
「また……たたかうの？」
「まあな、心配するな。俺は最強だ、必ず帰ってくる。そしたらまた一緒に遊ぼうな」
心配をかけさせたくない、ミシェルの前では甲斐斗も笑みを見せ優しく振舞う。
それに答えるようにミシェルも笑みを見せると、先程よりも大きく頷いてくれた。

――――各兵士が艦の格納庫に待機させてある機体に乗り込んでいく。
既に集った艦隊はＥＲＲＯＲの巣に向けて発進しており、ＥＲＲＯＲの反応と共にいつでも出撃できる態勢で待機している。
甲斐斗も他の兵士達と同様に自分の機体に乗り込み、退屈そうに腕を組んで出撃許可を待っていたが、突如通信が繋げられモニターに愁の姿が映し出される。
『甲斐斗さん……随分と落ち着いていますね。これからＥＤＰだっていうのに』
「お前こそな、それより俺に何か用か？」
『いえ、特に用があるわけじゃないですが……甲斐斗さん、作戦内容理解してます？』

「それなら前日の会議で話してただろ」
『はい、それで作戦内容は――』
「だが忘れた」
『甲斐斗さん……』
「まぁ待て、とりあえず俺達はＥＲＲＯＲを倒してれば良いんだろ？」
『簡潔しすぎです。それにただ倒せばいいだけではありません、大きく三つの部隊に別れてそれぞれ行動していきます』
それから愁の説明が始まったが、甲斐斗は腕を組んだまま平然とした表情でその話を聞いていく。
ＢＮの開発した巨大なレーザー兵器、その兵器を使用し地上と地下に巨大な穴を開けるが、この装置と艦隊を護衛する部隊が葵達のいる部隊である。
そして地下へと続く開けられた巨大な穴を守る部隊が赤城達の属する部隊、主にＮＦの兵士が担当。
その後、開けられた巨大な穴を利用しＥＲＲＯＲの巣へと降下、ＥＬＢ（電子光化爆弾）を設置した後地上へと帰還する、これは愁達の部隊が担当している。
『甲斐斗さんは戦場の状況を見て動いてくれて構いません』
「マジで？わかった、そんじゃ俺は好き勝手動いていいんだな。なーんだ、俺が最初に言った事じゃねえか」
『え、ええ。まぁそうなんですけどね。一応作戦内容の把握をしてもらいたくて……』
「わかってる、ありがとよ」
勿論甲斐斗は愁に感謝している、作戦内容を全く知らなかったわけではないが、甲斐斗にとってはＥＤＰよりも過去に帰る事について考えすぎていた。
互いに見合わせて初めてわかる二人の覚悟、愁から見れば初めて会った時と同様、甲斐斗には不思議な力を感じる。
気配、気迫、存在……力に満ち溢れる勇姿、そして暖かく優しい心

を持つ甲斐斗を愁は尊敬していた。
それは甲斐斗も同じかもしれない、初めて見た時の面影は微かにあるものの、比べ物にならない程の『強さ』を今の愁は持っている。
それはこの世を生き延びてきた経験の表れなのだろうか。経験、覚悟、心、恐らく愁はまだ自覚していないだろう、自分が既に超越した存在である事に。

――『ＳＶ、ＮＦの勇敢な兵士の皆様。ＥＤＰの前にお話があります』
突如全ての艦と機体のモニターに映し出されたアリスの姿に、待機していた兵士達が皆視線を向ける。
会話をしていた甲斐斗と愁も話を止め、モニターに映るアリスに目を向ける。甲斐斗は口には出そうとしないが、モニターに映るアリスの姿を一瞬フィリオと見間違えた。
『私、アリス・リシュテルトは、姉であるフィリオ・リシュテルトから全ての権威を正式に受け継ぎました。これにより全ての指揮を今から私が執らせていただきます』
アリスの言葉に兵士達は動揺など見せない、黙ってアリスの言葉を聞いていく。
何故ならこの場にいる全ての兵士は、アリスの言葉の意味を理解していたからだ。
フィリオの死は皆に知らされている。そしてフィリオが死ぬのと同時に、次期ＳＶの後継者であるアリスがフィリオと同じ地位につくことを理解していた。
『ようやくこの時が訪れました、人類が力を集結させＥＲＲＯＲとの決戦を迎える日が……しかし、今日の戦いはまだ途中です、終わりではありません。だからこそ私達はこの戦い、必ず生きて帰る必要があります』
全員の兵士が必ず生きて帰る……そんなことは絶対に不可能。だがそれは他の兵士達も同じように理解している。

それでもアリスには言う必要があった。このＥＤＰは前回のＥＤＰとは比べ物にならないほどの大規模かつ苦戦をしいられるだろう。それでも、この戦いが最後ではない。自分達が本当に命を投げ出してまで勝利を収めなければならない戦いは、ＮＦ、ＢＮ、ＳＶ全ての戦力を結集させて挑む最後のＥＤＰなのだから。

『この世界の為に散っていた人達の為にも、私達はこの戦い、必ず勝利を掴みとらなければなりません！

もうこの世に神はいない！だから私達の手で未来を切り開きましょう、平和な世界を、人類の手で――――ッ！』

……そこに映っているのは本当にアリスなのだろうかと、ふと甲斐斗が疑問に思ってしまう程の迫力。

アリスの事を幼稚で生意気なガキだと思っていた甲斐斗だったが、この迫力と共に感じられるアリスの思いに甲斐斗も次第にやる気が湧いてきていた。

「良い演説っぷりじゃねえか、お前もそう思うだろ？」

「そうですね、今の彼女からは溢れる程の力を感じる……アリスもようやく決心したんだと思います」

「だな、お前も決心はついてるみたいだし。これで全力全開で戦えるな」

出し惜しみ無しの戦い、今この場にある全戦力を持ってＥＲＲＯＲの巣を潰す。

その時、各機体のモニターに映し出されるＥＲＲＯＲの表示に、全兵士が反応を示す。

『ＥＲＲＯＲ……遂に現れましたね。それではこれより――――ＥＤＰを開始しますッ！』

突き進む艦隊のハッチが次々に開いていくと、中で待機していた機体達が次々に発進していく。

愁の乗るアギト、葵の乗るライダー、赤城の乗るリバイン、そして甲斐斗の乗る魔神ＭＤ。

その４人が乗っている機体のモニターにシャイラが映し出され通信

が繋がると、４人全員の姿が映し出された。
「全体の指揮はアリスお嬢様と私でとらせていただきます、貴方達３人は自分達の部隊の指揮をお願いします」
シャイラの言葉に甲斐斗以外の三人は頷くと、今度は甲斐斗が口を開きはじめる。
「俺は自由に動き回っていいんだろ？まぁお前等、もし俺の力が必要になったらいつでも呼べよな」
「はい、そのように動いてもらって構いません。それと葵様、エコ様とご一緒では……？」
愁に赤城、そして甲斐斗も気づいていた、いつもなら葵の後ろにある操縦席にエコが座っているが、今の操縦席には葵しか座っていない。
「エコはまだ体調が良くねえから寝かせてる。それにライダーは元々俺一人で動かしていたんだ、エコがいなくたって大丈夫だ」
少し強がって見える葵の態度だが無理もない。こんな大事な時にパートナーが欠けているのだから。
「……わかりました。赤城少佐、ＥＬＢ設置地点の地上に到着するでは各機艦隊の護衛に回ってください。前線で戦うのは愁様の率いる部隊に任せます」
「わかった。それで、既にあの装置の準備は出来ているのか？ＥＲＲＯＲの巣にまで穴を開けるあの兵器の……」
「心配いりません。いつでも持ち運べます」
「了解、それではこれよりＥＲＲＯＲ戦を行う。各機、健闘を祈る」
赤城が敬礼をすると、それに続いて葵と愁、そしてシャイラが敬礼を済ませるが、甲斐斗はその様子をただ見つめただけで通信を切った。
それを見ていた葵は一度だけ深呼吸を済ませると、操縦桿を強く握り締め口を開く。
「愁、シャイラ。絶対に死ぬなよ……。葵、アストロス・ライダー、出撃するッ！」

艦内のハッチが完全に開くのと同時に艦から出撃するアストロス・ライダー、それに続いてギフツにリバイン、アストロスが次々に出撃していく。

「それでは俺も……魅剣愁、アストロス・アギト、出撃しますッ！」

艦内から力強く発進するアストロス・アギト、最前線で戦う為に発進後すぐに艦隊の先頭に向かい次々に発進される機体達がアギトを先頭に陣形が組まれていく。

「……俺はポジティブだ、だから葵が俺の名前を言わなかったのはきっと俺が死なないのは当たり前だということだ。そうに違いない」

微妙に引っかかった葵の言葉に突っ込みをいれようとしたが、今からＥＤＰを行うというこの空気の重みに何も言えなかった。

そんな甲斐斗の呟きを聞いて微かに笑みをみせるシャイラ、それを見て甲斐斗は不満そうな表情を浮かべていた。

「何だよ……」

「すみません、やはり甲斐斗様は私が想像していたより楽しい方だと思いまして」

「お前……一度俺に殺されかけたっていうのによくそんな事言えるな……。言っとくが、あの時の事は悪いなんて思ってないからな。まぁ……ちょっと女相手にやり過ぎたってのは今思えばあったかもしれんが……」

「それに強く、逞しい。貴方が共に戦ってくれると思うと自然に勇気が湧いてきます」

「そ、そうか？まぁ俺とお前は仲間になったんだ、協力して頑張ろうぜ、俺もこの力で存分に戦ってやるから任せとけ！」

「頼もしい限りです。私もこの命を懸け全力でＥＤＰを行います」

「おーっと、命を懸けるなんて言っていいのか？アリスは言っただろ、必ず生きて帰れと、命令違反はダメだぜ？」

「す、すみません。その言葉、前にフィリオお嬢様にも言われていました……私はアリスお嬢様を守り、必ず生きて帰ります」

「それでいい。さーて話は終わりだ、俺様も出撃するぞッ！」

魔神発進、艦から高らかに飛翔していくと瞬時に黒剣を出し右手で握り締める。
「愁！手始めに先頭のＥＲＲＯＲをぶっ潰すぞッ！ついてこいッ！」
『待ってください甲斐斗さん、ＥＲＲＯＲの様子がいつもと違います！』
部隊の先頭でＥＲＲＯＲの様子を窺っていた愁、明らかな異変を感じ今場にいるＥＲＲＯＲの映像が甲斐斗の乗る機体にも映し出された。
「たしかに……変だな」
地上に出ているＥＲＲＯＲの異変……それは誰の目から見ても分かる程だった。
地上に無数に現れたＢｅａｓｔ態の群れ、だが獣達は地上に出た途端皆血を吐き出しその場で足掻きながら倒れていく。
『Ｂｅａｓｔ態が……苦しんでる……？』
体毛は抜け落ち、呼吸すらも出来ないのか、口から泡を吹き出し苦しみのたうち回るＢｅａｓｔ態。
その奇妙な光景が当たり一面に広がっており、兵士達は皆困惑した様子だが、甲斐斗だけは違った。
「何か苦しんでるみたいだが別にいいんじゃね？むしろ好都合、攻めるのに好機じゃねえか！」
たしかに甲斐斗の言う通り、地上に見られるＥＲＲＯＲは今の所Ｂｅａｓｔ態しかいない、そしてその地上に出現したＢｅａｓｔ態は皆苦しんでいる。
同情の余地などＥＲＲＯＲ等にはいらない、苦しんでいるならトドメをさすのみ。
それを真っ先に甲斐斗が実行しようと、巨大な黒剣を振り上げ地面に這い蹲るＢｅａｓｔ態目掛け飛び込んだ瞬間、Ｂｅａｓｔ態は大きく口を開けると顎が外れ一瞬で頭が割れていく。
細胞が増殖、血肉は蠢き色形を変え、更に巨大に、更に太く、更に醜く成り果てる。

それは獣の姿などではない。
化物だ。醜い、醜い、人間の顔をした、醜い、化物、化物……。
兵士達の血の気が引いていく、気づけば恐怖に慄き、機体を止める者までいた。
先程までのＢｅａｓｔ態の見る影もない、巨大な人間の頭をし４速歩行の化物がそこに立っていた。
巨大な肉体からは人間の手足のようなものが所々に生え、大きく丸い目玉はぎょろぎょろと辺りを見渡し、その巨大な口は白い歯を見せ、血で真っ赤な歯茎をむき出しでいる。
見たくも無い、化物の醜き姿、吐き気をも催すそのリアルな顔に、兵士達は皆圧倒されていった。
……ただ一人、甲斐斗を除いて。
「気持ち悪いんだよぉおおおおおおおおッ！！！」
黒剣でＢｅａｓｔ態の頭を一刀両断する甲斐斗、その表情は余りにも酷い光景を見たせいでかなり興奮し苛立っていた。
「きもい！てかきめえ！おい何だあれ、何なんだあれはよお！？きもい化物が更にきもくなりやがったぁ？はぁあああ？進化する所か退化してんじゃねえかよおい！そんな面見せるんじゃねえ！ぶった斬りたくて仕方なくなるだろがぁあああああああッ！！！」
今まで見てきた化物が可愛く見えてしまう程、今のＢｅａｓｔ態の成れの果ては醜い。
それも一体所ではない、地上でもがき苦しんでいたＢｅａｓｔ態は皆次々に新たな姿へと変わり果てていく。
「――怯むなッ！各機攻撃を開始！絶対にあの化物を艦に近づかせるなッ！」
愁の声に兵士達が我を取り戻す、機体達はすぐさま手に持っていた銃を構えると、こちらに走り向かってくるＢｅａｓｔ態に向けて引き金を引いていく。
放たれた弾丸は次々にＢｅａｓｔ態の顔に当たり顔の肉片を吹き飛ばしていくが、それでもＢｅａｓｔ態は止まる事無く近づいてくる。

その姿を見て兵士達は僅かに震えながらも必死に狙いを定めＢｅａｓｔ態を撃ち抜いていくが、Ｂｅａｓｔ態の勢いが止まる事は無い。
『く、来るなよっ！近づいて来るなよこの化物ぉ！う、ぁあっぅあああああッ！？』
醜い人の顔をしたＢｅａｓｔ態、顔が銃弾で砕け散り血を噴き出しながらも機体の目の前にまで来ると、その巨大な口を更に大きく開けアストロスの胴体を一瞬で食いちぎる。
その場にアストロスの下半身だけが残され、火花を散らしながらその場に崩れ落ちた。
『ひっ！？あ、あの化物、機体をそのまま喰ってやがる……あぁっ！？俺を見るな！こっちに来るなぁあああああッ！』
次々にＮＦ、ＳＶの兵士達の乗る機体に襲い掛かるＢｅａｓｔ態。
それに負けじと応戦する兵士達だが、咄嗟の出来事と変異したＥＲＲＯＲの前に次々に前線が崩れていく。
その崩れていく前線を必死に立て直そうと、アストロス・アギトに乗る愁はたった一人敵に四方を囲まれようとも決して引かず戦い続けていた。
飛び掛るＢｅａｓｔ態に、アギトの右腕にある『砕く拳』がその巨大な顔を打ち砕いていく。
更に左腕で隙を狙い飛びついてくるＢｅａｓｔ態の腸を貫くと、後方から走り寄るＢｅａｓｔ態に向けて貫いたＢｅａｓｔ態を投げ飛ばす。
だがＢｅａｓｔ態は投げ飛ばされた死体を勢いに任せ吹き飛ばすと、アギト目掛けて巨大な口を開けようとした。
「ＥＲＲＯＲ……何故そこまで人に似せた。お前達は、俺達人類に何を伝えようとしているんだッ！？」
Ｂｅａｓｔ態の左目を貫く拳、苦しむＢｅａｓｔ態の表情をものともせずにアギトは拳を引き抜き蹴り飛ばすと、更に敵の集う場所へと飛び掛り拳を振るっていく。
「人間の醜さを表したつもりか！？それとも情を誘う為かッ！お前

達ＥＲＲＯＲは、一体何を……ッ！」
その時、突如モニターに映し出される赤城の姿に、愁はふと我を取り戻す。
「落ち着け魅剣、余り熱くなるな。まだ戦いは始まったばかりだ、最初から飛ばしていけば身が持たないぞ」
「す、すみません赤城さん。ですが、このまま引き下がれば味方が危険です、俺が敵の注意を引き付けますので、各機体は援護射撃をお願いします！」
愁の言葉を続けるように甲斐斗も通信を繋げると、先程よりも少し落ち着きを取り戻した様子で喋り始める。
「ってことで、俺と愁があの化物をかき乱す。お前らはもう一度前線を立て直して突き進めッ！」
たった2機で無数のＢｅａｓｔ態をなぎ払い、次々に息の根を止めていく二人。
例えアギトがＢｅａｓｔ態の巨大な口に噛まれても、その強力な顎ですらアギトの装甲に傷一つつけることはできない。それ所か、逆にＢｅａｓｔ態の歯の方に亀裂が走り砕け散ってしまう。
それにＢｅａｓｔ態が気づいた時には、既にアギトの拳がＢｅａｓｔ態の肉体を砕くか、貫いているだろう。
そんな愁の勢いに負けじと魔神も黒剣を振り回し醜いＢｅａｓｔ態の頭を斬りおとしていた。
二人は己の力と機体を信じ決して慄く事無く戦い続ける、その二人の勇ましい姿は、その場にいる兵士達にも伝わってきていた。
『前線を立て直し陣形を組め！一斉射撃を行いＢｅａｓｔ態をなぎ払うぞッ！』
『『了解ッ！』』
兵士達は皆互いに声を掛け合い銃を手に取り戦い続ける、最初は圧倒され押されていたＮＦ、ＳＶの兵士達だが次第に勢いづき作戦開始地点へと進んでいく。
「マルチロックオン完了、私の仲間達を死なせはしないッ！」

後方からはシャイラの乗るアストロス・ガンナーによる援護射撃に、機体を襲われそうになる仲間を次々に救い、葵の乗るアストロス・ライダーも仲間に近づくＢｅａｓｔ態を次々に鉤爪で切り裂いていく。

「っけ、好きなだけ姿形を変えやがれ、どんだけ醜くなろうが人間の姿に化けようが。俺達は必ずＥＤＰは成功させてやるからよッ！」

次々にＢｅａｓｔ態を切り裂き華麗に地上を駆け回るライダー、艦を止めようと近づいてくるＢｅａｓｔ態の数も赤城率いるＮＦの後方支援により次々に減らしていった。

「やれやれ、好き放題暴れるのはいいがまだ開始地点にまで辿り着いていないのだぞ。なるべく戦力の消耗は避けたいものだが……」

「――そうね、だからこの戦場。私に任せてもらおうかしら」

赤城への通信、パイロットスーツを身に纏う神楽の姿がモニターに映し出される。

ＥＤＰ決戦兵器である羽衣の降臨、艦隊の並ぶ後方で地上から僅かに浮きながらついてきていた。

「お、やっと来たか神楽。お前のその機体の力、たっぷりと見せてもらうぞ」

「ええ、それじゃまずゴミ掃除をするわよ。貴方達二人は下がりなさい」

そう言ってのけると、神楽の乗る羽衣は右手を前方に突き出し狙いを定める。

その神楽の言葉を聞いて愁と甲斐斗はすぐに後退していくと、それと同時に一本の閃光がＢｅａｓｔ態の群がる戦場へ落ちた。

「羽衣はね、綺麗好きなの」

羽衣の右手から放たれる赤く太長い閃光、ビーム兵器だと思われるその力で羽衣は腕を水平に横へ動かしていく。

射線上にいるＥＲＲＯＲを飲み込む光は、Ｂｅａｓｔ態を次々に塵へと変えて一掃していく。

これがＮＦの最終兵器羽衣の力、あの地上に現れていた無数のＢｅ

ａｓｔ態がたった一発の攻撃で大半が消し飛んだ。
その瞬間、そしてこの光景に兵士達も驚きを隠せない。羽衣の力を見た者は限られており、かつその猛威を振るう場面に出くわした機会は二三度程しかないのだから、羽衣の力を知る者は神楽以外いないだろう。
「存分に震撼しなさい、私の羽衣が戦場に出た今。この戦場に人類の勝利を約束させたわ」
そう言って笑みを浮かべる神楽の姿に甲斐斗もふと笑みを見せたが、少し顔が引きつっていた。
「す、すげえじゃねえかよ……これが羽衣と、お前の力か……」
想像を軽く上回る羽衣の破壊力、そして美しさ、まさに神楽に相応しい機体とも言える。
「まだ羽衣は３０％の力も発揮してないわよ？これからよ、羽衣の真の力を見るのは」
羽衣の力を存分に使えるのが嬉しいのか、神楽はまた微かに笑みを見せるが、既に甲斐斗の顔から笑みは消えていた。

――その光景をＳＶの艦内で見いてたアリスは目が放せなかった。
ギフツ、リバイン、アストロス、見事に陣形を再び組み直し一斉に射撃を行い周りのＥＲＲＯＲを一掃し。
仲間の危機にはすかさず赤いリバインとライダーが助けに入り、ガンナーの後方支援がＥＲＲＯＲを邪魔する。
前線では白き装甲を輝かせながらその豪腕を振るうアギトに、魔神は１機で敵陣に突っ込み次々にＥＲＲＯＲを斬り飛ばしていく。
ＮＦ、ＳＶの兵士達、愁、葵、シャイラ、赤城、甲斐斗、そして神楽――。
勝てる。この戦い、必ず勝利する、勝利させてみせる！人類の命運がかかったこの戦い、絶対に。
すぐにアリスはオペレーターから情報を聞き作戦指示を出すと、各モニターを見ながら戦況を把握していくと、一人の女性の声が後方

から聞こえてきた。
「Ｂｅａｓｔ態……なるほど、奴がな……」
気配すら感じさせずにアリスのすぐ側に立っていたエラ。
女性の姿をしたＥＲＲＯＲであってアリスはまだ慣れておらず、驚きながらもじっとその女性を見つめていた。
「ど、どうして貴方がここにいるのよ！？」
「安心というのをしていい、甲斐斗から許可はもらっている、見届ける為だ。ここなら一番よく見られるのだろ。私は見届ける、この全ての光景を」
エラはアリスを見る事無くじっと前方を見つめたまま動かない、それを見てアリスは不信感を抱きながらも席に座りなおし戦況を確認しなおす。
「私に見せてくれ、私に感じさせてくれ、私に響かせてくれ……あの時のように、私に涙を流させたように――」

第９９話　異常、唐突

――――「ねえマルス、この世界の人達は本当にＥＲＲＯＲに勝てると思うかい？」

ＳＶの艦内にある格納庫の一角に羽を閉じ目を瞑る龍と、その羽に包まれながら龍にもたれ掛かり上を見上げながら座っているロアがいた。

「……もしさ、もしこの戦いで人類が負けたら、僕はどうしたらいいんだろう……。もう他の世界もＥＲＲＯＲに飲み込まれて、残る最後の世界はここだけ……怖いよ……」

蹲り必死に震えを抑えようとするロアだが、恐怖を増大させる音が艦内にいても聞こえてくる、響いてくる。

ＥＲＲＯＲのうめき声、砲弾の爆音、けたたましい銃声……皆戦っている、この世界の人間は今、人類、世界、己の、掛け替えの無いものの為に命を懸けて戦っている。

震える青年はロアだけではない、今若くして戦場に出ている兵士達の中にも震える者は多くいた。

殺されたくない、食われたくない、死にたくない。周囲に細心の注意を向け必死に引き金を引き襲い掛かるＢｅａｓｔ態を撃ち殺していく、平和な世界で生きるために……。

――――『大丈夫、私達人類は必ず勝ちます』

一人の少女の声、今戦場にいる全機体のモニターに姿を映し出されたアリス。

兵士達から見えたその姿はとても凛々しく、真っ直ぐと前を向きまるで本当に目と目を合わせるかのようなアリスの眼差しに、兵士達は黙ってその言葉を聞いていく。

『後方を見なさい。そこには貴方達を支える艦隊と、ＥＤＰ決戦兵器である羽衣がいます』

機体達の後方では艦隊が一斉砲撃を行い迫り来るＢｅａｓｔ態をなぎ払い、羽衣はその絶対的な力で次々にＥＲＲＯＲを消していく。
『前方を見なさい。そこにはたった一人で神に勝ち、貴方達の道を切り開く男が今、人類と共に戦っています』
敵陣に突っ込みたった１機でＢｅａｓｔ態の群れを相手にする魔神。
苦戦などしない、目の前から迫ってくる敵をただひたすら斬り続けるだけ。
『そして、貴方達の周りを見てみなさい。ここには世界を、人類を救うための勇敢な兵士達がおります。私達は一人じゃない、数多くの仲間が、こんなにも側にいて、共に戦っているのです』
連携、陣形、部隊、そこには既にＮＦとＳＶの区別などない、共に戦い、共に助け合い、共に突き進む。
アリスの言葉は兵士達に響いていく、死なない為に戦う？
違う。生きる為に。そして平和な世界で過ごすために、戦う。
共に声を掛け合い、負傷した仲間を助け、人類の力を合わしてＥＲＲＯＲに勝つ。
アリスは言葉を語りかけ兵士達を励ましていく、そんな後姿をエラは表情を変えずじっと見つめ続けていた。

――――「赤城、そろそろ作戦場所に到着するんだろ？しっかり穴開ける装置の準備をしとけよ！」
そう言って赤城との通信をとる甲斐斗は余裕の笑みを浮かべていた、甲斐斗にとって戦場など死なないのは当たり前、生きるのは当たり前、勝つのは当たり前だ。
例えＥＤＰであろうと目的は戦って勝つ事、いつもと変わりない。
「寝言を言うな。お前は一番最前線で戦っておいてあの光景が目に見えないのか……？」
赤城の言葉に甲斐斗は機体を浮上させ自分達の進行方向に目を向けると、また甲斐斗の浮かべていた笑みが徐々に消えていった。
壁の如く生い茂るＰｌａｎｔ態、その根元には無数のＤｏｌｌ態が

待機しており、その前方には綺麗に横一列に並び突進してくる巨大なＷｏｒｍ態の群れの姿があった。
「あの植物！っち、厄介な敵がうじゃうじゃ現れやがって……」
「Ｂｅａｓｔ態で軍隊を囲い攻撃を分散させ、正面にいるＥＲＲＯＲは前方から一気に突破してくるつもりだろう。だが我々も止まる訳にはいかない、このままスピードを落とさず敵陣へ突っ込むぞ」
「俺は別に大丈夫だが、お前らは大丈夫なのか？アレだけの敵の数だ、このまま突っ込めば四方からの攻撃で明らかに不利だぞ」
「そうだな……正面さえ抑えられれば大丈夫だ」
赤城がそう言うと、甲斐斗は小さく笑った後、機体を加速させＢｅａｓｔ態を無視していくと、前方から隙間無く並び進み寄る大群のＷｏｒｍ態の前に出る。
「わかった、まずはあの芋虫をぶち殺す。愁、お前も来い。その後はあの化物機体を――」
『待ちなさい』
魔神とアギトが横に並び迫り来るＷｏｒｍ態を迎え撃とうとしていた時、突如神楽の声が甲斐斗の耳に聞こえてくると、先程まで後方にいたはずの羽衣が突如魔神とアギトの前に現れる。
「なっ！？おまっ、そんなでかい機体で後ろの軍隊全部飛び越えてきたのかよ……！」
『ええ、それよりＰｌａｎｔ態が進路を塞いでるのよね、貴方達じゃ切り開けないでしょ？ここは私に任せて貴方達二人はＷｏｒｍ態だけを相手にしなさい』
平然と神楽は言ってのけたが、１００ｍを軽く超える巨体が遥か後方から飛んで来たことに他の兵士も戸惑いが隠せない。
「本当に芋虫相手だけでいいんだな？相手は植物の他に化物機体もいるんだぞ」
壁を作るように現れたＰｌａｎｔ態の根元には軽く百機を超える程のＤｏｌｌ態が存在している。
『羽衣を信じなさい。それじゃ、Ｗｏｒｍ態の方は頼んだわよ』

そう言って勝手に通信を切る神楽、少し気が乗らないが甲斐斗は羽衣を避けて突き進むと、目前にまで迫り来るＷｏｒｍ態目掛け剣を振り下ろし、前線に出てきたアギトもＷｏｒｍ態の流れを止めようと次々に拳を振り下ろしＷｏｒｍ態の体を砕き貫いていく。

だが二人が同時に戦えるＥＲＲＯＲの数には限度があり、大群で押し寄せるＷｏｒｍ態を全て殺していく事は物理的に不可能、しかし既に艦隊の攻撃目標はＢｅａｓｔ態からＷｏｒｍ態へと切り替わっており、後方からの支援砲撃で殺し損ねたＷｏｒｍ態を吹き飛ばしていく。

それを見ていた神楽は、Ｐｌａｎｔ態とＷｏｒｍ態を消す為の準備にとりかかろうとすると、Ｐｌａｎｔ態の根元で待機していたＤｏｌｌ態が一斉に目を光らせると、浮上して近づいてくる羽衣目掛け一斉に発進していく。

Ｄｏｌｌ態は次々に銃を構え羽衣目掛け引き金を引いていくが、羽衣に接近する弾丸は全て軌道が反れ一発の弾丸も直撃しない。

『Ｄシリーズを利用するなんて……愚かね。消えなさい』

羽衣の背部から次々に放出される無数のフェアリー、一斉にＤｏｌｌ態の元に向かうと、青白いレーザーを放ちＤｏｌｌ態の背部にある動力源を破壊していく。

たった羽衣１機を前にして無残にも次々に落ちていくＤｏｌｌ態、だが羽衣の攻撃はこれだけではない。両腕を前方に突き出し構えた状態を維持すると、丁度壁を作っているＰｌａｎｔ態の中心に向けて照準を合わしていく。

『今からＰｌａｎｔ態を一掃するわよ。赤城、全隊に伝えなさい、Ｐｌａｎｔ態を処理後全機加速して一気に作戦地点にまで突き進むと』

赤城の乗るリバインと通信を繋ぎ突如命令を下す神楽、そして久しぶりに名前を呼ばれた赤城は少し驚いた表情を見せたが、また真剣な表情になると小さく頷いた。

「……わかった、だが油断はするな。お前の羽衣の力がどれだけＥ

ＲＲＯＲに通用するかまだ全てわかったわけではないんだぞ」
ＥＲＲＯＲ、そしてＤシリーズに対して絶対的な力を振るう羽衣。
その力はまさに人類の希望だが、赤城はまだ羽衣の力を信じきったわけではなかった。
『私は二度も同じ過ちを繰り返しはしないわよ……赤ちゃん』
それだけ言い残して通信を切る神楽、少し間が空いたかのように赤城は沈黙していたが、すぐにＳＶの戦艦にいるアリスとシャイラに向けて通信をつなげる。
「今から羽衣がＰｌａｎｔ態を一掃する。全機体と艦隊はそれに合わせて加速し、一気に作戦開始地点に向かおうと思う、何かあるか？」
『……いいえ、問題はないわね。シャイラ、作戦内容を全機に伝えてちょうだい。私はあの装置の発進準備を進めるから』
シャイラはアリスの目を見て頷くと、言われた通り作戦内容を指示していく。
Ｂｅａｓｔ態、Ｗｏｒｍ態は大分蹴散らしてきたが、またいつ何処からＥＲＲＯＲが出てくるかわからない。
壁の如く聳え立つＰｌａｎｔ態、これをなぎ払い前に突き進まなければ集った戦力はＰｌａｎｔ態の巨大な触手により一掃されるだろう。だがその前に羽衣は動き、そして決断した。
『始めるわよ……！』
神楽が引き金を引いた瞬間、羽衣が構えていた両手から放電が始まると、機体の手の平から巨大な閃光が放たれる。
光は射線上にあるもの全てを飲み込みながら一気に広がっていく、その光の眩しさに目を瞑る兵士達もいたが、愁と甲斐斗は最前線でその様子を見つめていた。
そして羽衣の両手から放たれる光が徐々に弱くなり消えていくと、先程まで前方にいたＷｏｒｍ態、Ｄｏｌｌ態、Ｐｌａｎｔ態は全て無となり射線上から消えていた、巻き上げられた土煙の隙間からでもよくわかる。

『当然の結果ね……さ、早く行きなさい。開始地点はすぐそこに――』

「避けろ神楽ぁあッ！！」

甲斐斗の声を聞いた瞬間、一発の弾丸のような赤い物体が羽衣の胸部に直撃した。

『……えっ？』

赤い血肉の塊、羽衣の胸部に直撃した瞬間血肉から触手が伸びてくると、羽衣の機体の表面に徐々に広がっていく。

『―ＥＲＲＯＲ―』

羽衣に乗っていた神楽が見た光景、それは前回のＥＤＰでも見た事のある『―ＥＲＲＯＲ―』という赤い警告表示だった。

モニターに何十にも重なってＥＲＲＯＲの警告表示が表示されていき、赤い光が操縦席全体を照らす。

『そんなっ、私の羽衣に、弾丸が……？』

浮遊していた羽衣が地上に落ちた。側に浮いていたフェアリーも次々と地上へと落ち動きが止まると、羽衣の胸部を侵食し始める塊。

『―ＥＲＲＯＲ―』

土煙が消えていくと、今その場に広がっている光景が徐々に見えてきた。

先程のＷｏｒｍ態やＤｏｌｌ態の数を遥かに上回る大群、だがその大群のＥＲＲＯＲは誰も見たことの無い未知のＥＲＲＯＲだった。

大きさはＤｏｌｌ態よりも少し小さく、Ｐｅｒｓｏｎ態と似たような姿形をしていたが、今までのＰｅｒｓｏｎ態とは全く別のＥＲＲＯＲ。

歯茎を剥き出しにして笑みを浮かべているが、二本の長い足で地上に立ち、顔には幾つもの目玉を見せ、全ての眼球をきょろきょろと動かしている。また、背部からは何本もの長い腕が伸びており、うねうねと触手のように背部から伸びている腕を動かしていた。

「何なんだあの化物！Ｐｌａｎｔ態の後方に隠れていやがったのか！？」

ＥＲＲＯＲは容赦などしない、土煙が晴れた瞬間その新種のＥＲＲＯＲは一斉にしゃがみ込むと、まるでバッタのように両足で地面を蹴り上げ跳んで来る。
赤い波が大群で押し寄せる、それも飛び跳ね、笑みを浮かべながら近づいきている。
兵士達は一斉にＥＲＲＯＲに照準を向け引き金を引くものの、跳びながら近づくＥＲＲＯＲに弾丸が直撃させることができず次々にＥＲＲＯＲに取り付かれる機体達。
取り付かれた機体に乗っている兵士にはこちらを見つめる何個もの目玉と、ニヤニヤと笑みを浮かべる化物の姿しか映らない。
操縦席のハッチは簡単に破壊され取り外されると、もうそこに兵士の逃げ場などなく、震え、叫び、恐怖が、全身を包み、脳を震え上がらせ、呼吸すらままならない。
死、それも、化物に喰い千切られる死。
聞こえてくる、ＥＲＲＯＲとの戦場で絶対に聞こえてくる、人間が殺される間際の叫び声、断末魔が。
死を前にした人間の声は様々で、足を、体を、腕を、躊躇い無く千切られ、喰われていく姿は、兵士達も目を背ける。
恐怖。それしかない、次にあんな風に殺されるは誰だ？仲間か？自分か？
新種のＥＲＲＯＲにより部隊の前線は一気にかき乱され、崩壊していく。羽衣も地上に落ちた後、何の動きも見せない。
『―ＥＲＲＯＲ―』
『何、これっ……頭の中に、い、た……うあっ――――！』
突如頭を抑え必死に頭痛に耐えようとする神楽、だがその激痛は更に強まり神楽を苦しめていった。
『ぁあああッ！いやっ、やめ、てっ――――ぅううッ！！』
まるで脳内はぐちゃぐちゃに混ぜられるかのような感覚、何も考える事が出来ず、気が狂う程の感触。
羽衣を徐々に侵食していく血肉の塊、機体の表面に血管を張り巡ら

せ、蝕んでいく。
ＥＲＲＯＲの前に、崩壊していく。
羽衣は地に落ち、機体達は次々に新種のＥＲＲＯＲにより取り付かれ、兵士が殺されていく。
突破するはずだっただが、誰も加速など出来るはずがない、この状況で突き進む事は間違いなく死を意味していた。

――――「ありがとう、見届けさせてもらったよ」
結果はわかった、ＳＶの艦内で今までの様子を見ていたエラはそう言うと後ろに振り返り司令室から出て行こうとする。
「待ちなさいよ……ッ！」
席に座っていたアリスが立ち上がり出て行こうとするエラに向かって声を上げた、するとエラは立ち止まり、それを見てアリスは言葉を続けていく。
「まだ終わりじゃない！よく見ていなさいＥＲＲＯＲ！私達が一人一人戦っていく様を！その目でしっかり見届けなさいよ！」
「……わかった」
アリスの呼び止めに潔く出て行くのを止めると、エラはゆっくりと後ろに振り返る。
だがその目の中にある瞳は黒く濁り、先程のエラとは全く別の異質な雰囲気を漂わせていた。
「そこまで言うなら見届けよう。お前達一人一人が何も出来ずに喰い殺され、悲痛に涙を流し、血を吐いて死に、人類が敗北する光景を、この『目』で」
そのエラの目にアリスは言葉が出ない、たった一体のＥＲＲＯＲに、怯み、足が竦む。
微かに笑みを見せるエラ、その笑みには恐怖の念しか感じられない、まるでＰｅｒｓｏｎ態が今目の前にいるかのような、自分の命の危機すら感じる。
『おい、好き勝手言ってくれんじゃねえか。だからお前達ＥＲＲＯ

Rには無理なんだよ、俺達人類に勝つ事はな』
艦内に聞こえてくる一人の男の声、アリスはその声に後ろに振り返ると、エラもまた声の方に目を向ける。
「甲斐斗……！」
甲斐斗は余裕の表情で操縦席に座っていた、だが先程と甲斐斗の目付きが違う、より真剣に、より相手を威嚇する目で、エラを見つめている。
『これからだろ、これから人類が反撃を見せるんだよ。その目でよく見とけよ？人類の力、可能性って奴をな』
血が騒ぐ、危機的状況に瀕しているからか。それとも、強大な敵が目の前に現れたからか。
どちらにしろ甲斐斗のやる気が下がる事は無い、どんなに絶望的な状況だろうと絶対に勝つ。
それが甲斐斗の、いや、人類の目的、任務、責任。だから戦うしかない、勝つしかない、絶対に。
そんな甲斐斗の姿をエラは微かに笑みを見せながら見つめていた、そしてその目は既に先程の濁った目ではなくなっている。
「ああぁ……見せてくれ……お前達、人間の力を……！」
通信はそこで切れ、甲斐斗の映像が消える。
もうこの戦いが終わるまでエラがこの部屋から出て行く事は無い、甲斐斗からは武蔵と似た力、可能性を感じた。
そして、その力が本当に通用するものなのかどうかは……今、決まろうとしている。

第１００話　奇跡、助長

――突如現れた新種のＰｅｒｓｏｎ態、瞬く間に前線にいる機体に取り付き兵士を殺し壊滅状態にすると、そのまま一気に艦隊へと近づこうとしていた。
だが簡単に近づかせはしない。無数の誘導ミサイルと青白いレーザーが進行してくるＰｅｒｓｏｎ態を次々に撃ち殺し阻止していく。
アストロス・ガンナーの攻撃は飛び跳ねる敵に対しても絶対的な命中率を誇っていた。
『取り乱してはなりません！落ち着いて照準を合わせるのです！各機後退しても構いません、ＥＲＲＯＲが接近してきたら直ちに引きなさい！』
この状況で無理に前線を上げようとしてもＥＲＲＯＲの餌食になるだけ、一度部隊を引かせまた体制を整える必要があった。
次々に負傷し後退してく機体達、それを追うＰｅｒｓｏｎ態をすかさずアストロス・ライダーが鉤爪で切り裂いていく。
「シャイラの言うとおり一時後退しろ！命を無駄にすんなよ！」
そう言って葵は後退していく部隊の中、たった一人で前に出ると飛び掛るＰｅｒｓｏｎ態を次々に切り裂き、腰に付いてあるレールガンで吹き飛ばしていく。
「なんて数だ、それに今までのＰｅｒｓｏｎ態とは全然違う……！厄介すぎるんだよッ！」
無造作に跳んでくる生命体、その異様な光景は誰もが戸惑い、幾ら殺してもＥＲＲＯＲの数が減った気がしない。
その時、一体のＰｅｒｓｏｎ態がライダーの足元に飛びつくと、その巨大な口で足を噛り付きはじめる。
「くそっ！引っ付いてくんじゃねえよ！」
すぐさま足で振り払おうとしたが、周りから押し寄せるＰｅｒｓｏｎ態は次々にライダーに飛び掛り身動きを封じていく。

「や、ばっ――――！？」

体勢が崩れ地面へと倒れるライダー、それでもＰｅｒｓｏｎ態は次々に飛びつきライダーの身動きを封じると、次々に機体に噛み付き装甲を破壊していく。

もう視界には笑みを見せるＰｅｒｓｏｎ態しか見えない、必死に機体を起こそうとするがまるで動かず、周りからは機体が齧られていく音が絶え間なく聞こえてきていた。

「だ、誰か！？はやく、早くこいつ等を引き離してくれ……ッ！」

葵の呼びかけが誰かに聞こえただろうか、自分の身を守るだけで必死な今の状況で、仲間を助けられる程の兵士は葵の周りにはいなかった。

一気に押し寄せてくる恐怖、身の毛がよだち、どうしていいかわからなく混乱してしまう。

誰も助けてくれない、涙が込み上げ、機体が動く事を必死に願いながら何度も何度もレバーを動かしていく。

「愁！シャイラぁっ！う、嘘だろ……た、助けてくれよ、助けてくれよぉっ！」

見る見る顔色が青ざめていき、目に涙を浮かべてしまう。

震えが止まらない、突如直面した死に、葵は理解できず必死に希望にすがるが、目の前にある機体のハッチが音を立てはじめるのを聞いて涙を零した。

「あああああぁぁぁぁあっ……！！！」

喰い殺される喰い殺される喰い殺される喰い殺される。

まさか？自分が？こんな所で？まだ何もしてないのに？死ぬ？

――――死ぬ。

――――アストロス・ライダーに張り付いていたＰｅｒｓｏｎ態が次々に吹き飛ばされ、瞬く間にバラバラにされた肉片が散っていく。

葵の視界からＥＲＲＯＲが消えていく、そして機体が起こされると、一人の男の姿がモニターに映し出された。

「ったく、何勝手に死のうとしてんだよ。最初に言っただろ？俺の力が必要になったらいつでも呼べって」
そこには平然とした様子の甲斐斗が半泣き姿の葵を見つめていた。
「かっ、かい、と……？」
葵の口から上手く言葉が出ない、たった数秒前に死の恐怖の味わったのだ、まだ落ち着きが取り戻せていない状態なのは仕方がない。
「見ればわかるだろ。さて、酷く機体をやられたみたいだな、俺が艦まで運んでやるよ」
魔神は手に持っていた黒剣を背部に仕舞うと、両手でライダーを抱かかえ艦隊の方に飛んでいく。
そこで葵はようやく落ち着きを取り戻し、咄嗟に口を開いた。
「あ、ありがとな……。助けてくれて……」
「助けるのは当たり前だろ。お前とは色々あったが、今俺とお前は仲間。そうだろ？」
敵に回せば厄介かつ強大な相手になるであろう甲斐斗だが、何だかんだ言いながらも今はこうして皆と共に戦っている。
何せ甲斐斗は知りすぎてしまった、この世界で生き抜き戦っていく人々の姿、生き様を。
「もっと俺を頼れよ。何せこの最強の男が人類の味方になって戦ってるんだぜ？」
その言葉を聞いて葵の表情が笑みに変わると、目元の涙を拭い口を開いた。
「わかったよ！俺はお前を頼る、だからお前も俺を頼れよな！一人じゃない、俺達は力を合わせてあの化物に勝つんだからよッ！」
「勿論だ、最強の俺が頼るんだぞ、しっかり頼むぜ」
「ああ、任せろ！機体を修理したらすぐに俺も戦場に出てサポートしてやるからな！それまで死ぬんじゃねーぞ！」
強がる葵を見て笑みを見せる甲斐斗、「当然だ」と言わんばかりの表情に葵も安心した表情を浮かべた。
甲斐斗の乗る機体は負傷したライダーを艦の格納庫に乗せると、背

部に仕舞っていた黒剣を片手に戦場に向かう。
飛び掛るＰｅｒｓｏｎ態を薙ぎ払い、切り刻み、吹き飛ばす。魔神の黒剣は以前よりも速さが増している、いや、戦場に出るたびに魔神の、甲斐斗の力は上がっているだろう。

――侵食され続ける羽衣、あれから微動だにせず、赤城は通信を繋ぎ必死に神楽に呼びかけるが何も返事はない。
「神楽ッ！応答しろ！一体何が起きたんだ……！」
無音が続いている、恐らく気を失っている。一刻も早く羽衣から神楽を救出しなければ神楽諸共あの血肉の塊に侵食されるだろう、そう考えた赤城は艦を守る役目を部隊の兵士に託し、たった一人ＬＲＢを両手に羽衣の元へ向かっていた。
「一人で特攻なんて危険です赤城さん！後退してください！羽衣の周りにはまだ多くのＥＲＲＯＲがいるんですよ！」
無茶な特攻を続ける赤いリバインを見た愁はすぐに通信を繋げ赤城の説得を試みるが、今の赤城には神楽の身の心配しか考えられなかった。
「そんな事はわかっている！だが……神楽を、このまま見捨てられる訳が無いだろッ！」
飛び跳ね襲い掛かるＰｅｒｓｏｎ態をその大剣で次々に斬りおとしていくリバイン、だがＰｅｒｓｏｎ態は次々に飛び掛りＬＲＢを振った後の隙を狙われ、次第にリバインはその勢いに押されはじめていく。
そして完全に隙を作ってしまった瞬間、一匹のＰｅｒｓｏｎ態がリバインの背後に飛びかかった。
「見捨てろなんて言いません。俺は貴方が一人で行くのは危険だと言ったんです、だから……俺と共に行きましょう」
リバインの背後に着地するアストロス・アギト、飛び掛るＰｅｒｓｏｎ態に左腕を突き出しその肉体を簡単に貫いてみせる。
「私の背中をお前に預けろと言うのか？」

「……いえ、貴方を預かります」
『―ＳＲＣ発動―』
一斉に飛び掛るＰｅｒｓｏｎ態、赤城はすぐさま応戦しようとＬＲＢを構えるが、それよりも早くアギトは飛び出していくと、超高速で拳と蹴りを繰り出しいとも簡単にＰｅｒｓｏｎ態を薙ぎ払う。
オーガよりも素早く機敏に、そして強固で強力な力。アストロス・アギトこそ、愁に、英雄に相応しい機体。
「俺のアギトは、その為の機体です」
血肉の破片が次々に地面に落ちていく中、アギトは堂々とリバインの前に立ち赤城に背を向けていた。
その光景に赤城は一呼吸おくと、少し落ち着きを取り戻した様子で口を開く。
「……わかった、共に行こう。そして絶対に神楽を救出するぞ、いいな？」
「了解です」
守りたい、救いたいという気持ちは愁も同じ。焦る気持ちを抑えながら二機は侵食されていく羽衣の元へと向かって行く。
跳びかかるＰｅｒｓｏｎ態を華麗に避け、次々にＬＲＢで斬りおとし突き進むリバイン。
アギトは対照的に跳びかかるＰｅｒｓｏｎ態を避けず向かってくる相手を次々に蹴散らしながら進んで行く。
「愁、お前の機体で羽衣の胸部に取り付いているあの肉塊を取り除けるか？」
「はい、俺とアギトに任せてください。根こそぎ引き剥がす自信があります」
強気な愁の態度、そしてアギトの戦闘力に赤城も次第に愁の後姿は大きく感じる。
「ふむ……頼もしいな――ッ！？」
巨大なＥＲＲＯＲの反応に赤城と愁がすぐさま機体を動かし瞬時にその場からは離れると、二人を狙っていたかのように槍のような鋭

く白い物体が二本突き刺さる。
突如上空から降りてきた一体のＥＲＲＯＲ、５０ｍ程はあるだろう、目はついていないがＰｅｒｓｏｎ態同様に歯茎を向きだして笑みを見せながら長い二本の足で地面に着地すると、肩から伸びる二本の腕についてある巨大な鎌をふら付かせ、背部からは先端の鋭い８本の触手が蠢かせていた。
そして腹部の両端から二本の太い腕が生えており、その異様な光景に二人は機体を止め見つめてしまう。
「なっ、何だあの化物は！？」
ニタニタ笑いながら触手と鎌を蠢かせ、腹部の左右から生えている腕はこちらに向けて指を動かし始める。
「来ますッ！伏せてください！」
愁の声に赤城はすかさずＬＲＢを構えると、両足を折りたたんだＥＲＲＯＲは突如バッタのように地面を強く蹴り飛ばし一瞬にしてリバインの前に現れる。
「うっ――――！」
擦れ違うＥＲＲＯＲ、リバインの握っていたＬＲＢが宙に舞い地面に突き刺さると、赤いリバインはその場に跪き動きを止めてしまう。
「見切れなかった……だと……？」
間一髪、擦れ違い様に振り下ろされた鎌をＬＲＢを使い直撃は免れたが、そのスピードとパワーに赤城は困惑していた、今までこれ程までにＤシリーズを上回るＥＲＲＯＲが現れた事など無い。
呆然と戦場で立ち尽くしてしまうリバイン、跳びはねたＥＲＲＯＲはすぐに地面に着地すると、すぐ様向きを変え赤いリバインの方に振り向いてしまう。
だが赤いリバインの前には既にアギトが到着しており、リバインに顔を向けるＥＲＲＯＲに向かって拳を構えていた。
「このＥＲＲＯＲは危険です、ここは俺に任せて……」
愁が最後まで言おうとしたが、地面に突き刺さったＬＲＢを引き抜きアギトの横に並ぶリバインの姿を見て言葉が止まってしまう。

「だからこそ二人で倒すのだろ？もう遅れは取らん」
鋭い目付きでＥＲＲＯＲを睨む赤城、その姿を見て愁もまたＥＲＲＯＲに視線を向けると、操縦桿を強く握り締めた。
「……わかりました。倒しますよ、あのＥＲＲＯＲをッ！」
再び足を折り曲げ地面を蹴り上げるＥＲＲＯＲ、その勢いに任せ跳びかかるが、リバインとアギトは瞬時に左右へと別れＥＲＲＯＲの振り下ろす鎌を避ける。
その隙を狙い左右同時にＥＲＲＯＲへと飛びかかる二機、だがＥＲＲＯＲの背部から蠢いている触手が一斉に二機の方に向くと、次々に機体を狙い突き出される。
「そんな物、俺のアギトには通用しない」
次々にアギトに命中する触手、しかし触手はアギトの装甲に傷一つ付けることも出来ず弾き返されていく。
赤城に向けられた触手はＬＲＢの一太刀で斬り落としアギト同様にＥＲＲＯＲの間近に接近していく。
それでもＥＲＲＯＲは笑顔で後ろに振り向いてきた、その身に刃が突き刺さり、拳が肉体を抉ったとしても。
「醜い、な」
赤城がそう呟くと、ＥＲＲＯＲは大きく口を開け一瞬にしてアギトに噛み付き機体を喰い千切りにかかる。
「まだ生きるか化物！？」
アギトを助けようとすぐさまリバインはＬＲＢを振り上げようとしたが、斬り落とした触手がすぐに再生され次々にリバインに襲い掛かる、対応しようと触手にＬＲＢを向けるリバイン、だが赤城は気づかない、足元から接近してくる二本の触手の存在に。
「――――ッ！」
機体を掠める触手、間一髪で回避に成功したが前方から突き出された一本の触手がリバインの握るＬＲＢを弾き飛ばす。
完全に無防備な状態に残りの触手が高速で機体の胸部を目掛け襲い掛かる、リバインはすぐさま背部に付けてある二本のＬＲＳを手に

取るが、その数と速さで襲い掛かる触手を避けながら後退していくことしかできない。
「待っていろ愁！すぐに私が助け出して……なっ……」
赤城が顔を上げ巨大なＥＲＲＯＲの方を見ると、そこには顎から上の無いＥＲＲＯＲが夥しい量の血を噴き出しながら停止していた。
何が起きたか分からない赤城だったが、血を噴き出すＥＲＲＯＲに背を向けこちらに歩いてくるアギトを見てようやく理解できた。
「向こうから俺のアギトに食い付いてくるなんて、お陰で近づく手間が省けました」
無傷のアギトの姿は逆に不気味に見えたかもしれない、ＥＲＲＯＲの攻撃の前に全く傷付けられることなく次々にＥＲＲＯＲを処理していくのだから。
だからと言ってこの戦い、無事に終えられるはずもなく、常に死は迫ろうとしていた。
「馬鹿者がッ！」
赤いリバインは手に持っていたＬＲＳを咄嗟に前方に投げ飛ばすと、腰に付いている手榴弾を手に取り前方に向かって勢い良く投げる。
リバインの動きに愁はすぐにアギトを振り向かせ後方を見ると、既に目の前にまで迫っていたＥＲＲＯＲの大きな鎌が微かに震えながら止まっていた。
ＥＲＲＯＲの両肩に突き刺さるＬＲＳが両鎌の動きを邪魔し、投げられた手榴弾はＥＲＲＯＲの胸部に触れた瞬間強力な爆発を起こしＥＲＲＯＲの胸部を抉るかのように吹き飛ばす。
「ＥＲＲＯＲ……頭部を破壊しても動けるなんて……」
辺りに肉片が飛び散り、腰から上のないＥＲＲＯＲの肉体がゆっくりと後方に倒れていく。
「背後には常に気を配れ、幾ら機体が頑丈であろうと命を落とすぞ」
そう言って赤城はＥＲＲＯＲの肉片が散らばる場所から二本のＬＲＳを回収し背部に戻すと、ＥＲＲＯＲに弾き飛ばされ地面に突き刺さっていたＬＲＢを抜き取りに向かう。

「す、すいません。ですが何とか倒せましたね。急ぎましょう赤城さん。早く神楽さんを助けない……と……」

ＥＲＲＯＲは笑う、人間なら理解できるはず、でも人間はわからない。

目の前に広がる光景を見て言葉を失う愁、アギトの構えていた拳が少しだけ緩み指が開いていく。

先程アギトとリバインが協力して倒したはずのＥＲＲＯＲが、Ｐｅｒｓｏｎ態の群れの中に次々に降りてくる。

何処からともなく上空から降りてきたＥＲＲＯＲは次々に数を増やし、ニタニタと笑いながらこちらに顔を向けてきた。

ＥＲＲＯＲを倒し、進んでいるはずなのに。次第に絶望が込み上げ不安を煽る。

まだ開始地点に到着してもいない、羽衣は停止し、艦隊や部隊はＰｅｒｓｏｎ態の攻撃に困惑している。

幾らこちらが勢いづけ攻めようとしても簡単にあしらってくるＥＲＲＯＲ、次から次へとＥＲＲＯＲが変わり、常に優勢を誇示している。

変異したＢｅａｓｔ態の次は進化したＰｅｒｓｏｎ態、そして現れる巨大ＥＲＲＯＲ、一体次に何が待ち受けるのか……考えたくもない。

このＥＲＲＯＲの広がる光景、果たして本当に地球上で起こっていることなのか疑問にも思えてしまう程だ。

しかし、それでも人類はやり遂げなければならない、逃げ場など無く、決められた選択肢はただ一つ――――。

「行くぞ愁ッ！私は言ったはずだ、例え戦場が地獄であろうとも、絶対に勝たなければならぬとッ！」

ＬＲＢを強く握り締め戦陣を突っ切っていく赤いリバイン、その後ろ姿を見た愁はすぐにアギトを発進させるとリバインの横に並び共に進んで行く。

「それでこそ赤城さんです。俺達は諦めない、どんな敵が現れよう

とも、どんな状況に立たされても、勝ち進むッ！」

――新種のＥＲＲＯＲにより押されていた軍隊、確かに形勢は悪いものの、艦隊は徐々に作戦地点へと近づいてきてはいた。

だが近づくにつれて負傷した兵士達が次々に艦に運びこまれていく、そんな光景を格納庫の一室で見ていた葵は焦りながら機体の修理を待っていた。

「ちくしょう、まだ修理は終わらねえのかよ……こうしている内にも仲間が殺されてるっていうのに……！」

ソファに座り俯いたまま足を揺すり気を紛らわせようとするものの、その行動が自分の焦りを更に引き立てているような気がしていた。

無理もない、次々に現れる新種のＥＲＲＯＲに戦場は混乱し、兵士達が次々に殺されていくのだから。

しかし、それでも兵士達は何とか突き進み作戦地点へと向かっている。これ以上死人を出さずにこの戦いを終わらせるのなら、早急に作戦地点に向かい事を済ませるしかない。

「使うしかねえ、アレを……」

「そう、それなら……私も行く」

葵が呟いた後、一人の少女が扉を開けて部屋の中に入ってきた。

ＳＶ親衛隊のパイロットスーツを身に纏い、前のような弱々しい足取りではなく葵の前に歩いてくる。

「一人で無理ばかりしないで、私達、パートナーでしょ……？」

葵が顔を上げるとそこにはエコが立っていた、だが葵は驚いた様子も見せず俯いてしまうと小さく口を開く。

「エコ、戦いたい気持ちはわかる。でもお前の体じゃまだ無理だ……」

由梨音を助ける為に使った魔法の後遺症は未だにエコを苦しめている、それにもし今の状態でアレを使えばエコの命が更に危うくなる。

「葵、アリスは言ってたよね……必ず生きて帰れって。命令、無視するの……？」

エコにはわかっていた、アレを……アストロス・ライダーのリミッターを解除すれば、操縦者に大きな負担を与える事を。
二人で起動させたとしても危うくなる事を葵は一人で実行しようとしていた、それをエコが許すはずがない。
「葵一人でもだめ、私一人でもだめ、だから、私達は二人いつも一緒……葵は、いやなの？」
そのエコの言葉を聞いて葵は立ち上がると、エコと目を合わした後、一歩前に踏み出し優しくエコを抱き締めた。
「嫌なわけないだろ……」
当然の返事だった、葵がエコを嫌うはずがない、嫌なはずがない。
エコもそれは十分分かっていた。分かっていたが、今の素直な気持ちを言葉にすることがどんなに大切で、大事な事か葵に伝えたかった。
「葵、信じ合おうよ、私達の力を。私は葵を信じる、だから葵も、私を信じて……お願い……」
葵に抱き締められながら涙を流すエコ……もう限界は来ていた。
この戦いをただ見届けるだけなどエコには我慢できない、共に仲間と戦いたい、そして勝利を、人類の勝利を掴み取りたい――。
「……ばかだなぁ、エコは」
葵はそう呟いた後、自分の体からそっとエコを離すと、エコの頭に手を当て優しく頭を撫ではじめた。
「信頼は頼まれてされるものじゃないだろ？俺はエコを信じてるよ。今も、そして……これからもな」
頭を撫でていると、その可愛らしく幼い少女の姿をしたエコがとても愛しく思えてくる。
もしかすると、こうやってエコの頭を撫でるのは今日で最後になるかもしれない。
絶対に生きて帰れる保障などもうこの世界には存在しない、そう思ってしまうと、葵はよりいっそうエコの頭を撫で続けた。
……絶対に死なない、死んでたまるか……必ず生きて平和な地に帰

ってくる、絶対に――――。

――「おいおい、何で戦場に戻ってきたらＥＲＲＯＲが増えてんだよ！おまけにでけえ！」

飛びかかる巨大ＥＲＲＯＲの攻撃を擦れ擦れでかわし大剣で頭を跳ね飛ばす魔神、甲斐斗にとっては小さな敵より大きい敵の方が割りと戦いやすい。

「俺が剣を出してりゃ向こうから勝手に頭突っ込んできやがる、楽だな」

近づいてくるＥＲＲＯＲを簡単に蹴散らしながら甲斐斗が羽衣の元へ向かっていると、既に羽衣の近くに来ていた赤いリバインとアギトの姿が見えてきた。

たった２機の周りにはＰｅｒｓｏｎ態や巨大ＥＲＲＯＲが次々に集い近づいていくが、息のあった二人の動きは次々にＥＲＲＯＲを消していく。

「あいつ等良い動きしやがって……俺も混ぜろ！」

もはや楽しんでいる甲斐斗、勿論神楽を救出する事は忘れていない。停止したまま動かない羽衣の元へ一番に行こうと魔神が飛ぼうとした時、今まで何の動きも見せなかった羽衣が徐に顔を上げはじめた。

「ん、神楽の奴気が付いたのか？」

とにかく通信を繋ぎ神楽と話してみるしかない、通信を試みると先程までは繋がらなかったものの今回はあっさり通信が繋がった。

モニターに映し出される俯いた神楽の姿、特に変わった様子も見られず甲斐斗が口を開いた。

「大丈夫か？変な塊が機体に張り付いてんだぞ……神楽？」

俯いたまま顔を上げず微かに肩を震わしている神楽、その様子を更に甲斐斗が声を掛けようとした時、神楽を顔を上げると手を伸ばし操縦桿を握り締めた。

「ふふっ、は……あはっ…あはは……あぁ……」

口元がニヤけ、神楽は微かに笑っていた。先程と全く様子が違う、

顔には僅かに汗を滲ませ、目は何かに動揺しているかのように開いたままだ。

「かっ、神楽！おい！しっかりしろ！！」

咄嗟に声をかけるものの神楽から返事はこない、それ所か神楽はますます不自然な笑みを見せていた。

羽衣が動き始める、左腕に光を放つ雷が集い攻撃態勢に入ると、その腕を躊躇いも無く甲斐斗の乗る機体に向け攻撃を放った。

「嘘だろッ！？」

機体を急加速させ一気に上昇していく魔神、間一髪で何とか羽衣の攻撃を交わせたものの、付近にいたＥＲＲＯＲや後方から来ていた味方の部隊が次々に光に飲み込まれかき消されていく。

それでも羽衣の攻撃は終わらない、羽衣の背部から次々に放たれるフェアリーは一斉に魔神に向かい攻撃を開始する。

もはや喋る暇も余裕も無い、地上に降りた魔神はＥＲＲＯＲを盾にしながら無数のフェアリーの攻撃を必死に回避していく。

その異変に気づいた愁と赤城はすぐに羽衣の元へ向かおうとしたが、甲斐斗同様に無数のフェアリーに襲われ羽衣に近づくことが出来ない。

「ＥＲＲＯＲが、まさか羽衣を制御して攻撃を仕掛けてくるとは――ッ！」

周りには無数にＥＲＲＯＲがいるとう状況でフェアリーに狙われ続けるリバイン、幾ら赤城であろうとこの状況は余りにも危険すぎる。

「すまない愁、どうやら私では神楽の元には……っ！」

リバインでは明らかに難しく不利、だがアギトは違う、例え羽衣の放つフェアリーだろうとその攻撃で機体に傷を付けることはできない。

「任せてください！もうすぐそこまで来ています！」

アギトが一番羽衣との距離が近く、既にアギトは高く跳び上がると手を伸ばし真っ直ぐ羽衣の胸部に向かって飛んで行く。

だが……アギトが羽衣に触れる事はできない。

猛スピードで羽衣に飛び込むものの、見えない力が羽衣から放たれアギトの軌道は簡単に曲げられ、弾かれていく。
「……そうか、羽衣は弾丸やミサイルを強力な磁力で軌道を捻じ曲げる、それで機体も同じように――ぐっ！？」
軌道を曲げるだけではない、羽衣の放たれる磁力によりアギトはいとも簡単に浮き上げられると、弾丸の如く弾き飛ばされてしまう。
「って！？俺の所に飛んでくるなよ！！」
咄嗟に剣を盾にしてアギトを受け止めようとするものの、アギトの力が止まる事が無く魔神諸共吹き飛ばす。
大きく砂煙を上げながらも何とか踏みとどまった魔神、すぐに愁は甲斐斗と通信を繋ぎ口を開いた。
「す、すみません甲斐斗さん。大丈夫ですか？」
意外と冷静な愁とは裏腹に甲斐斗は小さく溜め息を吐き苛立っている様子だ。
「大丈夫だ、それよりお前の機体でもあの機体に近づけないのか？」
「あの力、俺のアギトでも不可能に近いと思います……」
今までどの戦場も軽々突破してきたアギトも、羽衣の力の前ではどうすることもできない。
羽衣の前に人間の作り出した兵器など通用しない、それは今までの戦いを見てきたらわかることだった。
「無理もねえか、あの機体はお前の機体以上に化物だ。だが、このまま黙ってみてる訳にもいかねえ！」
どうにかしてあの血肉の塊を羽衣から引き剥がすしかない、だが接近する事は愚か、銃弾や砲弾、レーザー兵器すら通用しない。
「……って……どうすりゃいいんだ……？」
まさに無敵、最強ともいえる機体が今自分達の敵になっていることを漸く真剣に理解した甲斐斗。
羽衣なら容易いだろう、たった1機で、今目の前に広がる兵士達の部隊を壊滅させることなど。

――そう、既に勝敗は決していた。
だが皆はまだ気づいていない……いや……ただ、気づきたくないだけだろう……。
時間が立てば薄々気づいてくる、もし羽衣の力が今作戦地点目前へと近づいてきている艦隊に向けられたどうなるのかを。
一瞬で消し飛ぶ、人も、機体も、艦隊も、希望も、未来も、全て――。
人類が生み出した最終兵器で、人類が終わりを迎える。

――「俺とエコを……頼りな」
今解き放たれる真の力。アルトニア・エデン、魔科学兵器の真髄が発動された。
その時、一瞬何かが羽衣の前方を通過した気がした。よく見えず、分からないが、ただ一つだけ先程と違う所があった。
羽衣の胸部に張り付いていた血肉の塊が綺麗に切り取られ、血飛沫を上げながら羽衣の胸部から崩れ落ちる。
すると羽衣の周りを浮遊していたフェアリーが次々に地上に落ちていくと、目を光らせていた羽衣から光が消え、俯きながら停止していく。
「もう情けない面は見せない。何たって俺は、最強の男に頼られてんだからよ」
羽衣の周りにいたＥＲＲＯＲ達が次々に切り刻まれていく、それも常人の目では追えぬ程の速さで。
たしかに、何かが動いているのはわかる。だが次々に血や肉が四散していくその現場の状況に思うように目が追いつかない。

「うん……大丈夫、私達なら出来る。この機体、私と葵、そして皆がいれば、必ず、必ず……――」
ただ1機の機体を除いて、まるで別次元のように周りがスローモーションに見える。
今まで見てきた機体の速さとはまた別の速さ、甲斐斗達もその光景にただただ呆気をとられることしかできない。
「この世界を――」

「「救えるッ！」」
宙に待っていたＥＲＲＯＲの残骸が次々に散り地面へと崩れ落ちていくと、羽衣の周りにいたはずのＥＲＲＯＲは全て血肉の塊となり地面に転がっていた。
辺りが静寂に包まれ、その状況に周辺にいたＥＲＲＯＲでさえ足を止めるものだった。
そして、停止した羽衣の前には1機の機体が腕を組みながら立っていた。
アレだけ無数のＥＲＲＯＲを殺してなお、1滴の血も機体に触れることなく、その荒々しくも綺麗な青緑色の長髪靡かせる機体、その眼は緑に光り鋭い視線を真っ直ぐ向けたまま動かない。
一点を見つめる場所、作戦地点は目前にまで来ていた。残るは艦内に収容されている装置を取り出し、起動させる。
「あ、あれがっ……アストロス・ライダー……？」
ＳＶにいた愁も今まで見た事がなかった、全く別の機体へと容姿が変わったライダーの姿、存在に。
そして知ることになる、三大神機と呼ばれる機体の、本当の力を。
「エコ、俺達の力、奴らに見せ付けてやろうぜ。真の姿を得た、アストロス・ライダーの力をな」
そう言って笑みを見せる葵に、エコはいつものように冷静な面持ち

で操縦席に座っていた。
額に汗を滲ませながら、微かに、笑みを見せて――。

第１００話　奇跡、助長（後書き）

祝１００話、活動報告にて読者様にお礼を言わせていただきます。

第１０１話　天国、地獄

――全く、一瞬目を疑っちまったよ。
羽衣の目の前に現れ、一瞬にして周辺にいたＥＲＲＯＲを八つ裂きにして殺した。
戦場に降臨した一体の機体……いや、一体の獣という言うべきか？
俺は機体の中からその様子の一部始終を見ていたが、余りの素早さと機動力に驚かされるものの、自然と笑みが零れてしまう。
久々に俺の心が震えた。勇ましく、強い、その獣の姿に。
「すげえじゃねえか！葵！エコ！」
俺がそう言ってやると、二人は余裕の笑みを見せ応答する。
「へっ！当たり前だ！俺とエコが力を合わせりゃ敵無しだからなッ！」
話し合いながらも次から次へとＥＲＲＯＲは俺達に襲い掛かる、だが今の俺の眼中に醜い化物など入らない。
意識してなくても勝手に機体はＥＲＲＯＲを殺し続ける、まるで呼吸をするだけのような簡単なほどに。
そして俺は葵とエコの乗る機体から目が離せなかった、もっと見てみたい、あの二人の力を――。
っと、熱くなりすぎるなよ俺。今は葵達の他にも注意しなけりゃいけねえことがあるだろ。
「応答しろ神楽ッ！大丈夫か！？」
葵とエコの乗る機体が羽衣の胸部に張り付いていた肉片を吹き飛ばした後、羽衣を侵食していた血肉は次々に黒ずみ地面へと落ちていき、羽衣の中にいた神楽は頭を抑えると俯いたままだ顔を上げない。
「っ……え、え……だいじょうぶ、よ……」
頭を抑えながらもゆっくりと顔を上げる神楽、どうやら先程より意識は安定しているみたいだが……どう見ても大丈夫そうには見えな

かった。
頭からそっと手を離した神楽はすぐさま機体に異常が無いか調べていくものの、その額には汗が滲み息も荒くなっている。
「羽衣に異常無し……問題無し、よ。作戦を続行して……」
羽衣が体勢を立て直し始めると、近くにまで来ていた機体が羽衣に向けて一斉に銃を向ける。
無理もない、先程までこちらに攻撃を仕掛けてきたんだからな。
俺が止めようと通信を繋げようとしたが、それより先に既に赤城が通信を繋げ兵士達に呼びかけていた。
「羽衣を撃つなッ！既に機体からＥＲＲＯＲは取り除いている！各機目の前の敵に集中しろ！」
小さな油断が命取りになる、戦場はそんなもんだ。ほら、今まさに羽衣に余所見した機体がＥＲＲＯＲに襲われようとしている。
大丈夫、俺が助ける必要は無い。既に気づいていたんだからな、地に落ちたフェアリーが一斉に飛び交っていくのを。
一斉にＥＲＲＯＲを撃ち抜いていくフェアリーの群れ、どうやら羽衣のＳＲＣ機能はまだ使えるみたいだな。
そしてそのフェアリーの動きを司る羽衣を破壊しようと、ＥＲＲＯＲが次々に向かうが、既に羽衣の周りに到着したアギトとリバイン、そして葵とエコが乗るライダーにより一掃されていく。
「大丈夫か神楽、無理をするなよ。機体が無事でもお前の身が危ういなら今すぐ下がれ」
赤城は羽衣の状態より神楽の体調を心配している、勿論俺もだ。ＥＲＲＯＲが機体を侵食する光景はかなり前に見た事はあった、俺の機体もそうだからな、だがあの神楽の不可解な笑みに羽衣の攻撃、一体神楽の身に何があったんだ……。
「ありがとう、赤ちゃん……。でも、下がるわけにはいかないのよ……」
そう言って神楽は俺と赤城、そして愁とシャイラと葵とエコの５機と通信を繋げる。

只ならぬ表情で神楽が俺達を見つめる眼差しは、例えモニターの向こうからでもハッキリと感じられた。
「貴方達、今から私の言うことをよく聞いて……。ＥＲＲＯＲは……羽衣を制御した訳じゃない」
なっ……羽衣を制御していないと言うのか？そんな馬鹿な。
羽衣は俺達に攻撃を仕掛けたのは間違いない、勿論それはＥＲＲＯＲが羽衣に取り付き俺達に攻撃させたんだからな。ＥＲＲＯＲが羽衣に張り付いた理由はそれしかないはず……。
「ＥＲＲＯＲが制御していたのは――私よ」
――その神楽の一言で、俺は先程まで神楽に何が起きていたのか理解できてしまった。
皆も感づいてくるはずだ、神楽の言葉の意味に。
ＳＲＣを使用するには必ず操縦者のデータを必ず入力しなければいけない……そして操縦者の脳波を直接機体に読み取らせ機体に指示を送り操作を可能とするの。
つまりＥＲＲＯＲが直接機体を動かしていた訳ではなく、ＳＲＣ機能を使い羽衣の全てを操る神楽を制御しコントロールしていたんだ。
それでも疑問が一つ残る、一体ＥＲＲＯＲはどうやって神楽を制御し、俺達を攻撃させるように仕向けたのか。
「でもね、私は肉体をＥＲＲＯＲに操られた訳じゃない……貴方達を攻撃したのは、全て私の意志よ……」
お、おいおいどういう事だ。操られた訳でもないし、俺達を攻撃したのは本当に神楽の意思だって言うのか？
その時、神楽の表情が段々と変化していくのがわかった。何かに耐えるように微かに震え、左手で自分の右腕を強く握り締めていく。
「奴らはね……あの化物共はね……私の感覚、知覚……欲求を……弄ってきたのよ……ッ！」
……ああ、そうか……涙を零す神楽を見つめていた俺はやっとわかってやることができた……神楽は今、悔しさで震えているんだと。

「必死に抗ったわよ！……でも、無理だった……押し寄せる欲求を満たしたくて、私は……貴方達に引き金を――――」

「ああ！よくわかった！んじゃあの化物共をぶち殺しに行くぞッ！」

何でだろ、耐えられなかったのかな、俺は。

涙を流し説明してくれている神楽の言葉を最後まで聞かず、俺は声を荒げていた。

「全ての原因はＥＲＲＯＲだ、やられっぱなしってのは性に合わねえだろ？神楽、お前の力も奴らに思う存分見せてやれよ、そして勝利を掴み取ってこんな場所からさっさと帰ろうぜ」

許せねえんだよ、言い知れぬ怒りが込み上げてきやがる。あの化物共、どれだけ俺を苛立たせれば気が済むんだ。

俺にとって大切な人や仲間を傷つけやがって……この戦い勝つだけじゃ満足できねえ、あの化物共全員ぶち殺す。

すると、俺の言葉を先頭に赤城や愁も言葉を続け神楽に話しかけていく。

「大丈夫ですよ神楽さん、ＥＲＲＯＲの仕業には変わりありません。貴方は何一つ悪くない」

「そうさ神楽、お前は何も悪くないし、私達に何もしていないだろ？……行くぞ」

俺だけじゃない、怒りに震えているのは赤城や愁もだ。

その気迫は相当なものだ、これ程まで怒りのオーラに満ちた赤城もそう見たことが無い。

それに赤城なら当たり前か、俺達よりも遥かに神楽の苦痛をわかってやれる。

「貴方達……ありがとう……」

「それに、私にこんな下劣な方法を使ってきたＥＲＲＯＲを放っておけないものねぇ……」

な、何だ。先程まで涙を見せていた泣き顔はどこにいったんだ、またいつもの表情に戻ると、まるで先程のお返しをするかのように羽

衣の攻撃はより一層激しさを増していく。
羽衣の復活により戦場はまた人類が優勢となっていく、すると、葵達の乗る機体がある箇所に立ち動きを止めると、全機体に通信を繋げ声を上げた。
「作戦開始地点に到着ッ！全部隊編成を整えこの地点に集結しろ！」
あ、あいつ、もう一機であの場所まで到達したのかよ！？
恐らく葵とエコが殺ったのだろう。荒野の中心、作戦開始地点に到着するまでの道のりがＥＲＲＯＲの死体だらけになっている。
本当に大した奴らだ、たった１機の機体だけでここまで戦況が変わるなんてよ。
「アリス！例の物を頼むぞ！」
「ええ、任せて。既に発射の準備はしてあるわ！」
例の物、そう言えば俺はまだ見た事も聞いた事も無いぞ、その地上に穴を開ける装置を。
各機作戦指示通りに動き葵の機体を中心に巨大な円を描くような陣形を組んでいく。
遅れている機体や艦隊は羽衣に助けられ、何とか今残っている全ての戦力が揃い始めていた。
すると、アストロス・アギトの元に艦隊から発進されていく見慣れない黒い機体が次々に集まっていく。
「いよいよ始まるんですね……準備は万全、降下部隊は俺に続いて降りてきてくださいね」
愁の言葉で何なのかがわかった、なるほど、ここに辿り着くまでに破壊されては意味がないからな、艦内で待機してんだろう。
おっと、艦から出てきたのは機体だけではない、何かの装置のような物体が艦隊から円の中心に向けて発射されていく。
それを見て葵達はその場から引くと、装置はまるで何かに吸い寄せられるかのように次々に合体していき、一つの巨大な円盤のような物が完成するが、あんなＵＦＯみたいなのが穴を開ける装置だっていうのか？

まぁ見ていればわかるか、あの装置がどれだけの力を発揮してくれるのか。
「愁、俺もお前達と一緒に降下する。奴らに家に行って暴れまわってやろうじゃねーか」
「……すいません甲斐斗さん、自由に動いて良いと前に言いましたが、貴方はここに残っていてください」
「はあっ！？何でだよ！お前俺の力が劣るとでも――――」
「違いますッ！その逆なんですよ、貴方にはこの場に留まってもらいたい、そして皆を守っていてほしいんです」
「てめえ、そうやって言えば俺がここに留まるとでも本気で思って――――」
いや待て……俺は今、何の為に戦っている。
前にこいつに言われたよな、怒りや憎しみで戦うなって。まぁあれだろ、要するに、熱くなりすぎるなとでも言いたいのか。
「……ったく、わかったよ。俺はここで守りを固める、だからお前は絶対にＥＲＲＯＲの巣を根絶やしにしてこいよ」
俺にしてはすんなり受け入れた方だ、本当なら俺だけでもＥＲＲＯＲの巣に乗り込んでるはずなのに。
「ありがとうございます、必ずこの任務、成功させます」
愁がそう言うと、円の中心で浮いたままの円盤型の装置が緑色の光を放ちながら回転しはじめた。
緑の光は次第に大きさを増し、始めに見たときよりも遥かに巨大な円盤となり、砂塵を上げず超高速で回転し続ける。
そして一度上昇した後、円盤は回転しながら垂直に落下していく。
円盤を覆う光は触れた土や砂を次々に掻き消し地下深くまで潜っていく。
そして出来上がった巨大穴を見て、俺や他の兵士達は驚いていた。
こんなに綺麗で歪みのない穴が地面にあいているんだもんなぁ。
すると穴が開いた途端にＮＦ、ＳＶの降下部隊が次々に底の見えない穴の中に降りていく。

「甲斐斗さん、地上は頼みましたよ……それでは」
一言告げた後、愁の乗るアギトは穴の中へと降りていく。
赤城の乗るリバイン、葵とエコの乗るライダー、そして神楽の羽衣に、この俺様ッ！
地上の戦力は十分にある。あるんだが、ＥＲＲＯＲの巣を落とさなければ意味がなく、かなり多くの部隊が地下へとおりている。
地獄に下りて、一体何人戻ってこれるのやら……。

――地上は甲斐斗さんに任せたんだ、きっと大丈夫。それより今はＥＬＢ（電子光化爆弾）をＥＲＲＯＲの巣に設置しなければならない。
この地下がどのような構造なのかは既に調べられてある、後は目標地点へと向かい仕掛けるだけだ。
俺はアギトを加速させ地下深くまで降りていくと、メインカメラを暗視モードに切り替え見渡してみる。
そしてふと上を見上げると、あれ程大きかったはずの穴が消えてしまいそうな程に小さくみえた。
「必ず皆の元に帰る……各機俺に続いてください！行きますよ、ＥＲＲＯＲの本拠地にッ！」
巨大な洞窟はＥＲＲＯＲにとって進行するには都合が良いが、それは俺達も同じ、一気に攻め落とすッ！
各機加速し更にＥＲＲＯＲの巣へと近づいていくと、それにつれて土で出来ていたはずの洞窟の壁が血肉へと変わっていく、周りは赤い肉で覆われ、血管がそこら中に伸びている。だが、そんな異様な光景など既に想定済み、何も驚く事は無い。
そして俺達の進行を防ごうと穴から次々に這い出てくるＰｅｒｓｏｎ態、だがそれも、予想通りの展開にすぎない！
兵士達は一斉に構えていた銃をＥＲＲＯＲに向けて引き金を引き、先頭にいる俺のアギトが前方から向かってくるＥＲＲＯＲを次々にその拳で殺していく。

今この場に集まっている者達はどれだけこの時を待っていただろう、あれだけ人類を苦しめてきたＥＲＲＯＲを、この手で追い詰めることが出来るのだから。

作戦通りに実行していく、丁度俺の機体がこの位置まで進んだ時、一人の兵士が言ってくるだろう。

『魅剣隊長！レーザー兵器準備完了しました！』

予想通り、そして丁度ＥＲＲＯＲの大群が前方から押し寄せてきた所、完璧なタイミングだ。

後方に巨大なレーザー兵器を準備していて正しかった、ＥＲＲＯＲを一掃するのと同時に一直線上にＥＲＲＯＲの巣へと向かう事が出来るのだから。

他の機体が出来ない事、俺の機体に出来る事……無謀と思えるかもしれないが、俺のアギトだからこそ成功する。

「放てぇッ！」

指示通り、巨大なレーザー砲は閃光を放ち一瞬にしてＥＲＲＯＲを飲み込んでいく。

勿論俺の機体も例外じゃない、ＥＲＲＯＲ同様光に飲み込まれた。

周りのＥＲＲＯＲは悲鳴を挙げながら消えていく状況で、俺は更にアギトを加速させ真っ白な光の中を走っていく。

もう誰も俺を、アギトを、人類を、止めることなんて出来ない。

人類の勝利は、目前にまで来ているのだから――。

――「ほら、早く起きて！愁ったらぁ！」

白い光の中に飲み込まれた俺の耳に、誰かの声が聞こえてくる。

目の前に広がる光景は全て白く、頭の中も段々と白くおぼろげになっていくのを感じた。

とても体が軽く、暖かい、俺は今どこにいて、何をしているんだ……？

「授業始まるって！……あ、あー私もう知らないからね……」

さっきから何を言っているんだろう、授業なんて、俺には何も関係無――――痛っ！？

誰かに頭を叩かれた、俺は俯けていた顔を上げてみると、そこには本を丸めて俺を見下ろすセーシュさんの姿があった。

「愁、授業が始まる前から居眠りとは良い度胸をしているな。死ぬか？」

「セーシュさん……？どうしてここにい――――いたいいたい！叩かないでください！」

「何だその態度は！それに教師が教室に来なくてどうやって授業を始めろと言うんだ！？寝ぼけるのもいい加減にしろ！」

セーシュさんが教師？ここは、教室？

教科書で頭をぽかぽかと叩かれた後、不機嫌そうにセーシュさんが教卓に戻り大きな黒板に文字を書いていく。

「だから言ったのに、大丈夫？」

わき腹をつつかれ横を振り向くと、そこには可愛らしい制服を着てこっちを見つめてくるエリルが座っていた。

「エリ、ル？そんなっ、どうして――――」

突如教室の扉が開く、そして一人の青年がカバンを肩に教室の中に入ってきた。

「穿真……！」

「いや～実は道端で困っている老人がっ……ってぇ！？今日一時間目セーシュかよ！……あばよ、皆」

弾丸の如くセーシュさんの手からチョークが投げられると、穿真は薄らと笑みを浮かべたまま吹き飛ばされ教室から姿を消した。

「穿真、貴様は罰として一時間バケツでも持っていろ。私の授業を受ける資格など無い」

そう言うとセーシュさんは何事もなかったかのように新しいチョークを手に取り授業を再開しはじめた。

「愁、お前も穿真みたいになりたくなかったらちゃんと起きとけよ」

後ろから聞こえてきた声に俺は微かに震えた、すぐに後ろを振り向

くと、思っていた通り、そこに彼はいた。
「お、おいおい。そんな急に振り向くなって、驚いただろ……」
羅威……なんで君がここに、それだけじゃない、エリルも彩野も、穿真も、なんで皆ここにいるんだ……！？
「一体どうして、なんで……俺は一体どうなったんだ！？何で皆ここにいる！ＥＲＲＯＲは、戦いの行方は――――」
俺は立ち上がると羅威に問いかけていた、今俺は夢を見ているのか？意味がわからないッ！
だけどその時、俺の背後に誰かが立つのを感じた。
只ならぬ殺気、目の前に座っている羅威も少し憶えた様子で俺を見つめていた。
「貴様等ぁ……人の授業を、何だと思ってるんだぁぁぁあああああっ！！」

それから、俺と羅威と穿真の三人は一時間廊下に立たされることになった。
「ざまーねえな羅威、愁。お前達も立たされるなんて」
「やれやれ、どうして俺までこんな目に……」
俺の隣には羅威、そして穿真が文句を言いながら立っている。
この世界は何なのだろうか、俺はたしか、この世界とは違う別の世界で、何かと戦っていたはず……。
あれ？何だったんだ、俺は、俺のいる世界は、どこだった……？
すると一時間目終了のチャイムが鳴り、羅威と穿真は教室に戻っていくけど、俺はその場に立ったまま動く事が出来なかった。
駄目だ、頭の中が混乱していく。俺は、俺はこんな所でのんびりしている場合じゃなかったはずだッ！
「お、愁じゃん。なに、また立たされていたのか？」
また聞き覚えのある声が聞こえてくる、俺は咄嗟に声のする方を向くと、そこには見覚えのある女性が二人立っていた。
「葵に、エコ……？」

間違いない、ＳＶの親衛隊の服を着てはいないけど、絶対にあの二人だ。どうして二人が、こんな場所に……。

「どうしたの……愁、大丈夫……？」

俺の顔色が悪いのにき気づいたエコは心配そうな表情を浮かべ俺を見つめてくる。

「あ……うん。大丈夫だよ……あはは……」

何で俺は愛想笑いなんてしている。それより二人に事情を聞かないと……！

同じ戦場にいた二人なら何か知っているはずかもしれない、俺は咄嗟に喋ろうとした時、葵とエコの背後から近づいてくる一人の女性と目が合った。

「ありえない……」

し、死んだはずのラティスさんが、書類を両手に俺の目の前に立っている。

「ん？どうした魅剣、何がありえないんだ？」

俺の言葉にラティスさんが反応したが、逆に俺は固まったまま何も言えなかった。

どうして、何でラティスさんがここにいる、わからない、わからない、わからない――ッ！

……結局俺は何も聞けなかった。

一人校舎の屋上に来ていた俺は目の前の広がる光景をじっと眺めている。

町があり、家があり、ビルがあり、人がいる。ふと空を見上げると、澄んだ青い空を一機の飛行機が飛行雲をつくりながら飛んでいた。

銃声も聞こえない、悲鳴も聞こえない、争いのない、平和な世界……。

何をしているんだろう俺は、一人で勝手に混乱して、一人で勝手に悩んで。

教室にいる皆はとても楽しそうに笑っていた、エリルも、羅威も、

穿真も、彩野も、皆。
それに葵達だってそうだ、毎日が充実しているんだろう、きっと。
この世界では皆生きている、平和な世界で、楽しく暮らしている。
もしかして、俺が家に帰れば、死んだ母さんや弟も妹も生きているのではないだろうか。
そうだ、皆生きている、皆幸せに生きている、俺の望んだ世界、俺が作りたかった世界が、今ここにあるんだ……！
何をそんなに悩む必要がある、これで良いんだ、この世界で俺は皆と、また一からやり直せるんだから！
「愁、ここにいたのですね」
この声……ああ、そうだ、死んだ人なんて誰もいない、皆生きているんだ！
俺は何も失っていない、何も失わない！皆と平和な世界で生きていくんだ、これから、ずっと！
「フィリオッ！」
俺は彼女の名を呼んで笑顔で後ろに振り返った、きっとフィリオは笑顔で俺の元に来てくれる。
フィリオとまた話せる、これからずっとフィリオの側にいれるんだ、期待と嬉しさで俺の胸は躍っていた。
――そのフィリオの、真剣な表情を見る前までは。
「え……？」
どうして、何でフィリオは笑っていないんだ？
皆笑っていた、皆楽しそうに、皆愉快に……それなのに、どうして目の前に立っているフィリオは、こんなにも悲しげな目をしているんだ……。
「どうしてフィリオは笑ってないんだい？この世界は、こんなに暖かくて幸せなのに……」
不思議でならない、俺が聞いてみても、フィリオは大きく首を横に振るだけで答えてくれない。
「俺はこの世界で生きていくよ、フィリオも一緒に行こう。ここな

ら皆がいて、平和な世界が広がってるよ」
何も恐れることはない、争いが無いんだ、それに皆一緒にいる、もう誰も悲しむことはない。
「いいえ、愁。この世界はただの幻想です、現実ではありません」
そんなのもうどうだっていい、幻想？現実？今ここに広がっている世界は平和、それは事実だ。
「思い出してください、貴方には帰る場所があり、使命があるはずです」
うるさいうるさいうるさいうるさい。どうしてフィリオは笑わない？何故平和な世界が広がってるのにそれが満足できないんだッ！？
「愁ッ！」
っ――――……フィリオが俺の名を叫んだ。
何故だろう、この世界が一瞬歪んだ気がする、この平和な世界が。
「貴方は仲間達と共に人類の命運を決める戦いをしていたはずです」
一歩ずつ、ゆっくりとフィリオが俺に近づいてくる。
一歩、また一歩、近づいてくるたびに、この平和な世界が終わりを迎えるような感じがする……。
「平和な世界は今、貴方の手にかかっています。例えその平和な世界に私がいなくとも、貴方には掛け替えのない仲間がいます。そして今、貴方の帰りを待っているのです」
フィリオは俺の目の前に立っていた、とても綺麗で、美しく。その長髪は風で微かに靡いていた。
「貴方は一人ではありません、一緒に行きましょう。本当の、平和な世界の為に――――」
無意識に俺はフィリオの顔の位置にまで頭を下げていた、そしてフィリオは優しく手を差し伸べてくれると、互いの額を重ね合わせ、目を閉じた――――。

――――「うっ……」
ここは、どこだ……真っ暗で何も見えない、機体の機能が停止して

いる……？

咄嗟に機体の再起動を行い操縦席に光が戻ると、モニターに映し出された映像に俺は目を疑った。

何十匹ものＰｅｒｓｏｎ態が俺の機体に齧りつき、必死に機体を破壊しようとしている。

その状況を見てすぐに機体を立ち上がらせた俺はすぐに機体に張り付くＥＲＲＯＲを引き剥がしていく。

「一体どうなっているんだ、俺は何故気を失って……っ！？」

機体に張り付くＥＲＲＯＲを全て離した後、ふと洞窟の先に視線を向けると、そこには降下してきたはずの機体達が見るも無残に四散し辺りに散らばっていた。

既にＰｅｒｓｏｎ態に食い散らされた後、兵士達が持ってきたＥＬＢにも無数のＥＲＲＯＲが齧りついている。

「くそっ！アレだけは絶対に破壊されるわけにはいかないんだッ！」

急いでＥＬＢの元に向かおうとした瞬間、突如背後から銃撃を食らいはじめるアギト。

すぐに機体を振り向かせてみると、そこには降下部隊の機体が立っていた。

「何をしている！？俺は味方だぞ！」

呼びかけても機体の攻撃は止まらない。狙いはＥＲＲＯＲではない、間違いなく俺の機体に攻撃してきていた。

ＥＲＲＯＲか！？いや、違う！人間の生体反応を確認、あの機体には人が乗っている！どういう事だ、何故俺を攻撃する、アギトには特に変わった様子も無いし、俺の身も何も変わりないのに……。

『いひ、ひゃはは……あはは、あはははははッ！！』

「なっ……！？」

明らかにおかしい、機体に乗っている兵士達が笑いながら攻撃をしかけてくる。

まさか、これが神楽さんの言っていたＥＲＲＯＲによる『制御』だとしたら――――。

その時、俺に銃を構えていた機体が一瞬にして切り刻まれると、一機の機体が俺の前に姿を現した。
「何やってんだ愁ッ！てめえここに何しにきたのか忘れたのかぁッ！？」
「あ、葵！？どうして君がここに……！」
「仕方ないだろ！降下部隊はほぼ全滅状態だッ！地下に降りた途端味方同士で撃ち合いになりやがったんだよ！」
ぜ、全滅……？そんな馬鹿なっ、俺達の部隊は皆順調に進んでいたはずなのに……。
「強力な念波を感じる……気持ち、悪い……っ……」
エコはそう言うと苦しそうな表情を浮かべ虚ろな目をしていた。
エコと葵の言葉が本当なら、やはりＥＲＲＯＲの力で俺は幻想を見せられていたというのか……？
「愁！急いでＥＬＢを運ぶぞ！まずはあの周囲のＥＲＲＯＲを引き離す！」
「は、はい！了解しました！」
俺のアギトと葵のライダーならＰｅｒｓｏｎ態なんてどうにかできる、ＥＬＢに齧りついていたＰｅｒｓｏｎ態を引き離すと、俺はアギトの拳でその巨大なＥＬＢを引っ張って行く。
それにしても、さすがＥＬＢ、対ＥＲＲＯＲ用の兵器だけはあって頑丈に作られていて傷はあるがまだ十分使える、後はこれを最深部に運ぶだけだ……。
「葵、俺が地下に行っている間地上はどんな状況だったのか教えて」
「……ああ、相変わらず激戦だ。神楽と甲斐斗がいるから何とか現状維持できてるけどいつまで持つか分からねえ、だからとっととこれを設置しに行くぞ」
やはり地上ではあの二人の存在が強力になっている、甲斐斗さんを残してきて正解だったな。
「わかりました、後は俺一人でＥＬＢを設置しに行きます。葵とエコは地上に戻ってください」

「ば、馬鹿言うんじゃねえ！お前1機じゃこの先どうなるかわかんねえだろ！俺達も行くからな」
「駄目です。葵、エコ……二人とも自分でわかっているはずだ、既に肉体と機体に限界がきていることを」
誰が見たってわかる、二人とも顔色が悪いし息が上がっている、それに汗の量だって尋常じゃない。
大体今の葵とエコは不思議な事だらけだ、何故葵達の乗る機体は羽衣に近づけたのか、それにあの機体の素早さは明らかに機体の限界を超えている。
これ以上二人を戦わせる訳にはいかない。俺が一人でＥＲＲＯＲと決着をつけに行く。
「死で得る勝利を望んではいけない。大丈夫、俺を信じて。必ずＥＲＲＯＲの巣を破壊して皆の元に帰ってくるから」
こんな地獄の中にいるというのに、俺は微かに笑みを見せて二人を返そうとした。
またあの時と同じように俺を信じてくれればいい、そうすれば必ず無事皆の元に帰ってこれる。
きっと葵も分かってくれる、そう思っていた俺だったが、葵は俺の言葉を聞いた途端、突然俯き肩を振るわせ始めた。
只ならぬ雰囲気、まるで何かを堪えようと必死に体を震わす葵の姿を見ていると、その後ろに座っていたエコがその力無い眼差しを俺に向けた。
それで初めて俺は気づいた……二人が俺に、何かを隠している事が。
言い知れぬ不安、空気が重く、気が付けば俺の額にも汗が滲んでいた。
何かとても嫌な予感がする、胸騒ぎがしてならない、俺が気を失っていた間、まさか――。
「愁……」
「は、はい」
俯き震える葵に俺の名を呼ばれ咄嗟に返事をするが、その二人の態

度を見ていてすぐ最悪のケースが頭を過ぎる。
俺は願った、勘違いであって欲しいと。今俺が考えている最悪の状況にならないために。
「ごめんなぁ……」

「もう俺達に……帰る場所はねぇんだよぉ……っ……」

――悔しさに涙を流し歯を食い縛る葵、そして後ろに座るエコは脱力して遠くを見つめながら動かない。
葵の言葉の意味、愁になら簡単に想像がついた。が、これは想像などではない現実。
今、もしかすればこの瞬間も夢なのかもしれない。いや、夢であってほしいが、この胸の苦しみは自分が現実にいるという事を刻み付ける。
「嘘……だ……」
目を見開き愁は信じられない様子で葵達を見つめるが、既にその眼は正気を失っていた。
夢と現実を選択し、夢から覚めたら現実が待ち受ける、もう愁は帰れない、あの最高の日常に。
そう、最高の世界から目を覚ました愁を待っていたのは、最悪の世界だった。

第１０２話　脅威、圧迫

――――愁達の率いる部隊が次々に地下へと降下していく状況の中、甲斐斗達はＥＲＲＯＲに周りを囲まれながらも応戦し何とかＥＲＲＯＲを近寄せずにいた。

「これだけ必死になって攻撃をしかけてくるとは……それだけこの場所が大事という訳か」

大分新種のＥＲＲＯＲとの戦闘に慣れてきた赤城、巨大な二本の鎌を振り回すＥＲＲＯＲと距離を縮めると確実に頭を斬り飛ばしていく。

「甲斐斗、愁はお前に地下には行くなと言っていたが万が一の事もある。いつでも行けるようにしておいてくれ」

地上が幾ら応戦し時間を稼ごうとも、地下での作戦が成功しなければ意味が無い。

だが作戦が成功した所で地上の戦力が全滅していても意味が無い……いや、あるのかもしれないが、それは余りにも失う物が多すぎる。

「任せな、地下の奴等に何かあれば俺が行ってやる。まぁその前にこの地上に広がるＥＲＲＯＲをどうにかしないとなぁ」

圧倒的物量で攻めてくるＥＲＲＯＲには幾ら甲斐斗達であろうとも徐々に焦りはじめる、レーダーを見れば赤一色が広がっており、遠くの方からも次々にＥＲＲＯＲが近づいてきているのが見てわかる。

「俺は大丈夫だがお前等の体力がいつまでもつか……その前にさっさと巣を破壊してくれたら世話ねえんだが――――おっと」

話していた隙を狙われＢｅａｓｔ態が大口を開けて魔神を飲み込もうとするが、魔神は避ける事なく握り締める黒剣を突き出し体を貫通させる。

Ｂｅａｓｔ態は血を噴き出し体を痙攣させながら地に倒れる、これでもう何百匹目だろうか、周りの土は血で染まり、無残なＥＲＲＯＲの死体が幾つも転がっている。

「やれやれ、ＥＲＲＯＲの死体が増えてきたな、こりゃ帰り道を確保する為にも処理しとかねえと……」
「それなら私に任せなさい」
神楽の一声で魔神の目の前にあった死体達は羽衣に放たれた光に飲み込まれると、一瞬にして掻き消される。
目の前擦れ擦れの攻撃に唖然とする甲斐斗だったが、すぐに神楽に向かって怒り始める。
「おまっ！さっきの攻撃少しでも照準ズレてたら俺にも当たってたぞ！？」
「あら、貴方ならこれぐらい避けられるでしょ？」
「えっ……ま、まぁな。余裕だぜ？俺は当たらないと分かっていたから動かなかっただけだしな」
そんな甲斐斗に冷たい視線を送る神楽だが、その視線を送る相手は甲斐斗にだけではなかった。
「ＳＶの……葵さんと言ったかしら。聞きたい事があるんだけどいいかしら？」
青緑色の長髪を靡かせ颯爽と戦場を駆け抜けＥＲＲＯＲを切り裂いていくアストロス・ライダー、神楽の言葉を聞いて葵が機体を止めた瞬間、周りに立っていたＥＲＲＯＲが次々に倒れていく。
「あん？俺に何か用か？」
「ええ、貴方の乗る機体なんだけど。それは……何なの？」
素直で単純な質問だった、神楽にはわからない、今二人が、『何』に乗って戦っているのか。
「見たらわかるだろ、俺達の機体だよ。まぁ、ちょっとばかり外見は変わったけどな」
たしかに先程までのライダーとは全く別の機体の用にも見えるが、僅かに面影は残っている。
「機体？それならどうして、羽衣の力が効かなかったのかしら」
神楽の視線は真っ直ぐ葵に向けられていた、その緊迫とした雰囲気に赤城や甲斐斗も聞き耳を立てていた。

「ああ……それならこの戦いが終わった後にちゃんと話してやるよ」
「あらそう、それじゃ今から私に説明する言葉でも考えておくべきね」
今この状況で説明している暇などないのだろうか、葵はこの場でその訳を言い出そうとはしなかった。
すると今度は黙っていた赤城が葵の後の座席に座るエコに声をかける。
「エコ、体調の方はもう大丈夫なのか？」
「うん、戦える……」
「……そうか」
その言葉を聞き赤城と神楽はまた先程と同じように戦場でＥＲＲＯＲを蹴散らしていくが、話の続きが聞きたかった甲斐斗は少し残念そうな表情を浮かべている。
そして甲斐斗とは別に、深刻な面持ちで葵達を見つめるシャイラがいたのを見た甲斐斗はふと声をかけた。
「どうしたシャイラ、そんな顔してよう」
「すみません、二人の体調が心配で……」
「まぁエコもこの戦いがどれだけ大事で大切なのか知ってるから出てきたんだろ。二人に無理はさせたくねえ、だったらあいつ等に負けないぐらい俺達も戦うぞ」
「はい、畏まりました！」
甲斐斗の言葉は人に勇気を与え、そしてその力は、人に希望をも与えていた。
こんな地獄のような場所で、醜い化物がひしめき合う中でも、兵士達は果敢に戦う。
兵士一人一人が自分の感情に露にしていた、一人の兵士は声を上げながら次々にＥＲＲＯＲを撃ち殺し、仲間達と共に戦艦を守り抜いていく。
また別の一人の兵士は、首から提げたペンダントを握り締めた後、帰りを待つ者の為にＥＲＲＯＲに向けて引き金を引く。

必ず作戦を、ＥＤＰを成功させる――人間達は１００年前に思い知らされた、真の、本当の『平和』とは何か、『戦争』とは、何か。『命』の価値観はどうやっていつ決まる？命が削られてる時でしか分からないだろうか。

抗い、戦い、勝つ。そして今度こそ、本当の平和な世界で、その平和に浸りながら、ゆっくり生きていく。

例えそれが全ての人類での意味にならなくとも、人々は皆必要としているはずだ、平和な世界で、溢れんばかりの『愛』を――。

『―ＥＲＲＯＲ―』

ああ……。

レーダーに反応有り、巨大な地響きが起こり始めると、兵士達の乗る機体は大きく揺れ始める。

艦内にいた兵士達も突然の出来事に声を上げその揺れを必死に耐えていた。

降下する為の穴とは遠い場所から地盤が避けて地割れが起きはじめると、砂塵を巻き上げながら次々にＥＲＲＯＲが隙間に落ちていく。

何かが始まり、何かが来る――風に吹かれるように強大なプレッシャーが甲斐斗を覆うと、瞬時に手を伸ばしスイッチを押すと、全機体との通信を繋げた。

「お前等全員下がれッ！来るぞ――ッ！！」

甲斐斗の慌てぶりとその焦り声に兵士達が一瞬動揺した瞬間、巻き

上げられた砂塵の中から赤く長い棘が無数に上空へと放たれた。
兵士達が上空を見上げる、そこには先ほどまで広がっていた青空などなく、赤く、そして黒い空が自分達に落ちてきていた。
その棘の落ちてくる範囲は今広がる光景全てに目掛けられていた、今から下がった所で、逃げた所で、既に手遅れ。
「クソが――――ッ！！」
赤く鋭い雨は降り注がれた、全機体が空目掛けて銃を構え、全艦隊が一斉に砲門を上空に向け攻撃を始めるものの、今落ちてくる赤い棘を全て取り除く事は不可能だった。
葵とエコの乗るアストロス・ライダーは腰の左右に付いてあるレールガンで降り注ぐ赤い雨を吹き飛ばし、また羽衣も必死に抵抗を試みるものの、その機体の大きさが仇となり次々に赤い棘が羽衣に突き刺さっていく。
甲斐斗は大剣を振り上げると、瞬時に赤城の乗るリバインの前に立ち目の前にまで接近してきた赤い棘をその大剣を振り下ろし吹き飛ばす。
……だが、それ以外の機体は、どうすることもできなかった。
目の前にまで赤い棘が近づいてくる、一人の女性兵士が乗るギフツは必死にマシンガンで一掃しようとするが、その余りの多さに恐怖で震え照準が定まらない。
「きゃあああああああッ！！」
次々に突き刺さる赤い棘、機体の頭部、肩、足に突き刺さり、そして一本の赤い棘が簡単に胸部を貫いた。
また一人の兵士が乗るリバインは、盾を構えその攻撃に耐え抜こうと試みるものの、その棘の貫通力は簡単に盾に穴を開け、そのまま胸部を突き刺した。
盾を構えたまま無力に力尽きるリバイン、機体に乗る全ての兵士が各自で必死に赤い雨を防ごうと僅かな時間で考え抵抗したものの、一斉に降り注がれた赤い雨に次々に機体が傷付き、破壊されていく。
そしてそれは機体だけの被害では留まらない、待機していた全ての

戦艦にも赤い雨を降り注ぎ、その鋭い棘が次々に甲板を貫いていく。
「あっ……ああ――――」
口を開いたまま身動き一つ取れないアリスがそこにいた、目の前からは無数の赤い棘が迫ってきており、逃げる事すらできない。
跪き頭を抱え蹲る兵士、一人逃げようと席から立ち上がる兵士、その場にいる誰もがそこで『死』の恐怖に震えた。
ただ一人、エラを除いて。
咄嗟に眼を瞑り俯くアリス、死の恐怖に全身が震え自分の死ぬ姿は脳裏に浮かんだ。
死ぬ、死ぬ、死ぬ……痛いのだろうか、苦しいのだろうか、悲しいのだろうか……嫌だ、嫌だ、死にたくない！
……どれ程目を瞑っただろうか……一向に何も起こらない、ゆっくりと閉じていた目蓋を開けていくと、そこには1機の機体が身を挺して赤い棘からアリス達を守っていた。
背部から突き抜ける赤い棘の数々、火花を散らしながら機体はその場に跪くと、アリスの目の前にあるモニターに頭から血を流すシャイラの映像が映し出された。
「アリスお嬢様……お怪我は、ありませんか……？」
ノイズが入りながらもシャイラの声が聞こえてくる、アリスは何度も頷き自分が無事だという事を伝えると、安心したかのようにシャイラは笑みを浮かべた。
「良かった……」
跪いたままアストロス・ガンナーの体勢が傾いていく、そして甲板から落ちた瞬間、一瞬の閃光と共に機体が爆発を起こした。
爆発の振動が艦に伝うとともにアリスの頭の中は真っ白に染まろうとした、だが先程映っていたモニターに葵の姿が映ると、葵が慌てて声をかける。
「安心しろアリス！シャイラは死んじゃいねえ！脱出装置は作動してる！」

「――――えっ？ほ、本当に……？」
「ああ、だから早く救助するんだ。あと被害状況の確認も忘れるなよ！」
「う、うん！わかった……！」
葵の呼びかけにアリスはすぐに指示を出しシャイラの乗る脱出装置を艦内に収容させ、現在のＮＦ、ＳＶの被害状況を調べさせる。
そんな人間達の姿を、エラは一歩も動く事無く眼だけを向けて見つめていた、
戦艦に突き刺さる赤い棘の本数は十数本程だが、動力源は奇跡的に無事の為爆発の危険は無かった。
艦内では兵士達が慌しく動いている、だが戦場では先程まで戦闘があったかどうかもわからない程静寂に包まれていた。
赤い棘の餌食になったのは人間だけではない、地上にいたＥＲＲＯＲにも全て突き刺さり、殺していた。
ＥＲＲＯＲも止まり、機体も止まるものの、静寂した戦場はすぐに機体の爆発音に飲み込まれた。
赤い棘が動力源に突き刺さった機体は次々に爆発を起こし四散していく、例え動力源が無事でも、機体の胸部に突き刺さった赤い棘は兵士の死を意味する。
葵とエコの乗るアストロス・ライダーは必死に戦場を駆け回り負傷した機体に乗る仲間を助けに向かおうとしたが、目の前に広がるその余りも悲惨な光景に何からしていいのか迷っていた。
機体を捨てて脱出しようとする兵士、炎を上げる戦艦の数々、通信を繋げば兵士達の苦しむ声が聞こえてくる。
「ちくしょうッ！一体どうなってんだよ！何で……何で一瞬で、こんなっ……！」
その時、丁度アリス達の乗る艦の隣に待機していた戦艦が巨大な炎を上げた後爆発を起こし周りの機体達を吹き飛ばしていく。
戦力が減っていく……いや、既に無に等しいかもしれない。
今この戦場に残っている最後の戦力は……神楽の乗る負傷した羽衣、

赤城の乗るリバイン、甲斐斗の乗る魔神、そして葵とエコの乗るアストロス・ライダーのたった４機。
もう守りきる事など出来やしない、湧き出るＥＲＲＯＲの数は止まらず、死んでいったＥＲＲＯＲの屍を超えてやってくる。
負傷し身動きの出来ない機体に乗る兵士に何が出来る？何の為に今まで生き抜き、戦ってきた。
無残に散っていく、希望が、戦友が、未来が。その涙と叫びと共に散っていく。

――だが、それでも決して抗う事を忘れない兵士達もいた。
負傷して動けない機体が次々に『ＬＩＭＤ』を発動させ機体に取り付くＥＲＲＯＲを吹き飛ばしていく、近くの兵士を、戦艦を、守るために、自ら起動させ死に行く兵士達。
「お願いします……この世界を、人類を……救ってください」
一人の女性兵士はそう告げた後、静かに指を伸ばしてＬＩＭＤを起動させる。
「化物どもからこの世界を守ってくれ……頼んだぞッ！」
一人の男性兵士はそう告げた後、勢い良く拳を振り下ろしＬＩＭＤを起動させる。
もう勝つしかない、勝つしかなかった。どんなに犠牲を払っても、勝利しなければ意味が無い。
勇敢な兵士達が次々に死んでいく、そんな光景を前にして、今の葵達に何が出来るだろうか……。
「神楽、お前の機体まだ動くか？」
剣を握り締めたまま動かない魔神、甲斐斗は呟くように神楽に聞くと、少し焦った様子の神楽が口を開いた。
「ええ、何とか……でも、さすがにちょっとキツイわね……」
羽衣に突き刺さる赤い棘を羽衣の力を使い次々に機体から引き抜いていくが、破損した右肩と腕は痛々しく、上げようとしても上がろうとしない。

それでもまだ戦える、次々に湧き出るＥＲＲＯＲに対抗しなければ……そう思いフェアリーを機体から放とうとした時、甲斐斗は冷静な面持ちで口を開いた。

「わかった、お前と赤城は今から艦内にいる生き残った兵士を羽衣に乗せてこの場から離れろ」

甲斐斗の言葉は神楽、赤城、そして葵とエコの思考を一瞬停止させた。

「……は？」

考えもしなかった、そして一番言わないであろう甲斐斗が、この場から去る選択肢を選んだのだ。

「今すぐにだ、負傷した兵士は見捨ててもいい、今生きてる奴だけ助けてこの場から離れろ」

「ま、待て甲斐斗！貴様、自分が何を言ってるのかわかっているのか！？」

赤城が声を上げ、甲斐斗の言葉が信じられないような表情をしていた。

それは羽衣に乗る神楽と、ライダーに乗る葵とエコも同じだった、ここまで来て、逃げなければならないのか……？

「ああ、一番わかっているつもりだ。いいかよく聞け、俺達がここに来た理由は何だ、ＥＲＲＯＲの巣を潰すことだろ？そして今、愁達は地下へと向かったんだ、後はあいつ等次第なんだよ、この戦いの行く末は」

「俺達がこれ以上この場で戦って何になる？後はどれだけ犠牲を出さないようにするか戦うはずだったんだろ？でも地上はこの有様だ、危険を冒してまでここに居座り戦う意味が無い」

聞こえは悪いかもしれない、だが甲斐斗の言う通りだった、この戦場ではもう、戦う意味が無い、戦う意味が一瞬にして消えてしまった。

「地下から帰って来た兵士達はどうするつもりだ！？見捨てて逃げ

ろと言うのか……！」
「ああそうだ」
「なっ……正気か！？」
「地下に行った奴等の大半はどの道戻ってこれねえだろ。地上がこの有様だ、地下だって大体何が起きてるか想像できる。地上で生き残ったのは数十人、地下も同じぐらいか、地上よりもっと少ないはず――――っておい！」
その時、飛び掛ってきた一体の機体の攻撃を間一髪で避ける魔神、剣を構え振り返ると、そこには鋭い鍵爪の刃先を光らせるアストロス・ライダーが立っていた。
「見損なったぞ甲斐斗ッ！てめぇ……何が俺を頼れだ、何が最強だ……何もできてねえじゃねえかッ！」
僅かに涙を零しながら葵が声を荒げる、その悔しさと切なさに遣り切れない気持ちを甲斐斗にぶつけていた。
「お前最強なんだろ！？頼っていいんだろ！？……なぁ、皆を救ってくれよ……見捨てるとか、そんな事言うなよ……！」
もうどうすることも出来ない、次々に機体はＥＲＲＯＲにより破壊され、兵士達は死んでいく。
艦隊もほぼ全てが赤い棘の餌食となり、艦を発進させる事すら出来ない状況の中、もう生き残る方法は羽衣に人を乗せこの場を去る事しかなかった。
葵の言葉に返事が出来ない甲斐斗、悔しさで感情を爆発させたくもなった……だが甲斐斗は必死に堪え、噛み締め……耐えていた。
幾ら力が有ろうと消えた命を取り戻す事は出来ず、この圧倒的に不利な状況の中では足掻く事しかできない。
「……お前等を死なせる訳にはいかねえんだよ。たしかに勝つ事は大事だが、死んだら意味ないだろ。……俺の話が聞こえたかアリス、俺の言った通り今すぐ艦内にいる生きている奴等を全員――――」
通信を繋げていたアリスから返事が来ない、それ所かスピーカーからは叫び声と共に銃声が響いてくる。

「アリス……？おい、どうした！何があった！？アリス！」
必死に呼びかけるが空しくも通信は切れ、何が起きたのかわからない。
アリス達の乗る戦艦に近づいていく羽衣、その中から艦の状況を見た神楽はすかさず声をあげた。
「甲斐斗！この赤い棘、ただの棘じゃないわよ……！」
その神楽の言葉に甲斐斗達は赤い棘の方に視線を向けると、戦艦や機体に突き刺さっている赤い棘に次々に亀裂が入り砕け散り始めると、その中から夥しい数の赤い蛭のような生物が溢れ出てくる。
「何よアレ……かっ、艦内に侵入してる……！」
赤い棘によって穴の開けられた甲板の隙間から次々に赤い蛭が入っていく、その光景を甲斐斗が見た途端、眼の色変えて自分の機体を走らせた。
「あああッ！あの中にまだミシェルが――」
だが甲斐斗の機体は突如立ち止まると、後ろに振り向き剣を構えだした。
消えないプレッシャー、甲斐斗には感じる、あの砂塵の煙の中にいる『何か』の気配を。
「っく、ああ！……っちくしょおおおおッ！！」
「ど、どうした甲斐斗！あの子を助けに行かないのか！？」
声を荒げながら一人特攻していく甲斐斗、それを見ていた赤城が呼びかけてみるものの、甲斐斗は機体を止める事無く突き進み続ける。
「くっ、仕方ない。神楽、私は一度艦内に戻りミシェルを助けに行く。この場を頼んだぞ！」
「ええ、一匹たりともＥＲＲＯＲは近づかせないわ……赤ちゃん、無事帰ってきなさいよ」
「ああ……すぐ戻る」
甲板の上に機体を待機させる赤城、操縦席にある刀を腰に付け、拳銃を手に取ると一人艦内へと乗り込む。
その間、葵は負傷した機体から次々に生き残った兵士達は助けてい

ると、各機体に突き刺さった赤い棘からも赤い蛭が無数に湧き出はじめる。
蛭は次々に機体の隙間の中に入っていくと、やがて操縦席へと辿り着く。
驚いた兵士が赤い蛭の存在に気づいた時、それは既に手遅れな状態を意味していた。
自分の体に次々に赤い蛭が張り付いていくと、体の皮膚を食いちぎり、肉を食い破ると、次々に生きた人間の体内に入っていく。
おぞましい光景だった、兵士達は仲間の醜く死ぬ姿を見て声を上げ、思考が混乱していく。
そして、それは仲間だけではない。ふと足元を見てみれば、すぐそこに奴等はいた。
……もうここは、戦場と呼べる場所ではない。
地獄という呼び名が相応しいだろう、急速な勢いで部隊は壊滅、機体は破壊され、兵士は殺されていく。
誰もこの死の連鎖を止める事は出来なかった、葵とエコが幾ら機体を走らせ仲間達を救おうとしても……。

第１０３話　本性、命運

――――「へー、この本を持ってきてるってことはさ、やっぱりそうなんだねー」

アリス達の乗る艦内のとある一室、部屋の隅でシーツに包まり震えるミシェルをよそに、アビアはミシェルから取り上げた一冊の本に目を通していた。

部屋の外から聞こえてくる銃声と悲鳴にミシェルは目に涙を浮かべ震えているが、アビアは余裕の笑みを浮かべて本のページを捲っていく。

「ねえねえ、これからどうするの？」

そう言って呼んでいた本を閉じその場に投げ捨てると、ミシェルの元へ頭を左右に揺らしながら近づいていく。

「死にたいの？死にたくないの？守りたいの？守りたくないの？どっちなのー？」

笑顔で近づいてくるものの、今のミシェルから見てアビアは恐怖の対象でしかない。

アビアは唯一知っているのかもしれない、ミシェルの思惑、神の存在、Ｄｅｌｔａについて……。

ミシェルの前にまで来るアビア、その場にしゃがみ込みミシェルを見つめるものの、ミシェルは目を逸らして目を合わせようとしない。

「ふーん。アビアはねー甲斐斗の側にずっといて、甲斐斗の力をずっと見たいの。分かる？」

アビアがそう言った途端、何処からともなく小さなナイフを取り出すと、その刃先をミシェルに向けた。

「ひっ！あ、ぁっ……！」

それを見て涙を零し怯えるミシェル、逃げようとしても部屋の墨にいる為これ以上下がれず、アビアはゆっくりと刃をミシェルの顔に近づけていく。

「今のあなたはすーっごい邪魔なの、殺しちゃおっかな？」
その時だった、突如部屋の扉が開くと、アビアの背後に素早く回り刀を首先に突きつける者がいた。
「貴様、何をしている」
少し呼吸が荒い、恐らく走ってこの部屋にまで来たのだろう赤城がそこにいた。
咄嗟に刀を抜きアビアにその刃先を向けてしまったが、赤城には今の状況がよくわからずにいる。
アビアはゆっくりと後ろに振り返り赤城を見つめると、小さな笑みを見せ再び前を向いた。
「今すぐナイフを仕舞え、妙な真似はするなよ。私はただその子を安全な場所に連れて行くだけだからな」
「安全な場所ー？」
「そうだ、ここはもう安全ではない。艦内にＥＲＲＯＲが侵入した、早くしなければ――っ！？何をする！」
赤城が話していた時、突如振り向き様にナイフを振り回すアビア。
咄嗟に後退しナイフを避ける赤城だが、すぐに刀を構えなおし体勢を立て直す。
「じゃーま。ねぇ、あなたは甲斐斗とキスしたことある？」
アビアは薄らと笑みを浮かべながらナイフを片手に赤城を見つめてくるのに対し、赤城は困惑した表情でアビアの様子を窺っていた。
「は、はぁ？何を言っている、訳がわからんぞ！」
「最近甲斐斗の周りに邪魔がいーっぱい、皆ここで消えてくれたら、案外良い結果になるかもー」
「来るか……ッ！」
ナイフを握り締めこちらに向かってこようとしたアビアを見て赤城は刀を構え応戦しようとした時、ふとアビアは顔を上げ声をあげた。
「って、あー……甲斐斗と約束してたんだった。ごめんごめーん、今の無しー」
アビアがそう言うと片手のナイフは既に手元から消え、照れ笑いし

ながら自分の頭を撫で始める。
「な、何？約束……？」
先程まで感じていた殺気がアビアから感じられない、赤城は刀の刃を少し下げるとアビアの話に耳を傾けた。
「うん、約束。だからアビアも一緒に逃げるの手伝うよー」
「……信じて良いんだな？」
「もっちろーん。アビア約束は守るよー」
先程襲ってきたのが嘘かのような振る舞い、疑問は残るもののここに長居するのは危険な為に赤城は刀を鞘に仕舞いミシェルの元へ歩み寄る。
「なら良いんだが……」
アビアを警戒しつつも怯えるミシェルに手を差し伸べる赤城、するとミシェルはすぐに手を伸ばし赤城の手を握り締めると、ぴったりと赤城に引っ付きアビアには近づこうとしない。
「大丈夫だ、お前は私が守る。さぁ、行くぞ」
優しくミシェルにそう言い聞かせた後、赤城はミシェルを抱き上げ走って部屋から出て行く。
部屋に一人残されたアビア、このまま部屋にいてもつまらないので部屋に捨てたあの本を拾った後、すぐに部屋を出ると赤城の後を走って追いはじめた。

――赤い蛭は次々に艦内に侵入し兵士達を殺していく、拳銃を赤い蛭の群れに発砲した所で数匹死ぬ程度、機関銃で一掃しようとしてもそれは赤い蛭の進行を僅かに遅らせる時間稼ぎにしかならない。そしてそれは艦内の格納庫でも起きていた。震えるロア、周りにいた兵士達が次々に赤い蛭の餌食となり殺されていくのを見て腰を抜かし立ち上がれない。
「終わりだ……もう終わりだぁっ！人類はＥＲＲＯＲに負けたんだ、皆殺されるんだ……！」
抵抗する兵士達は諦めず戦い続ける、だがロアが回りを見渡せば兵

士達は次々に殺され、悲鳴を上げながら醜く死んでいく。
そしてその波は今、自分の目の前にまで迫ってきていた。

その時、息吹かれた炎がロアに迫ってくる赤い蛭を一瞬にして灰にしていく。
例えロアが諦めようとも、この龍は決して諦めようとはしない。次々に襲い掛かってくるＥＲＲＯＲをその火炎で次々に焼き殺し、後方から近づくものならその鋭く巨大な尻尾でＥＲＲＯＲを吹き飛ばす。

「マルス、もう無理だよ……外はＥＲＲＯＲに囲まれてるんだ……どうせ僕達は死ぬ運命なんだよ！」
そんなロアの弱音が聞こえてきた時、前方から一人の女性の声が少年の耳に届いた。
「諦めてはなりません！死ぬ運命なんてもの、私は認めないッ！」
何かが動き始める音が聞こえる、ロアは咄嗟に上を見上げると、天井のハッチが徐々に開き始めていた。
太陽の日が格納庫内を照らし始める、それを見た龍は尻尾を使い青年を自分の背部に座らせると、大きく翼を広げた。
その時、青年がふと前を見つめると。そこにはハッチを開閉させるスイッチを押すシャイラの姿があった。
頭からは未だに血が流れ、その手には銃を握り締めている……。
「さぁ、行きなさい。外にはまだ味方がいます……諦めてはなりませんよ、私達人類は生き続けられるのですから」
それだけ言い残しシャイラは背を向けると一人走り去っていく。
「ど、どこに行くんですか！？貴方も早くマルスに乗ってください！」
それを見てロアは大声で叫ぶが、シャイラは振り向く事無く一人艦内を走って行く、その時には既にハッチは完全に開いており、龍はその大きな翼を羽ばたかせ上昇していった。

一方、シャイラは体の痛みに耐えながらも必死に走り続けていた。
行く先は一つ、アリスの元に。息を切らし吐き気を催しても、ただひたすら走り続ける。
通路は既に血で汚れ、前方からはＥＲＲＯＲによって変異した嘗ての仲間が殺しに来る。
申し訳ありません……そう心の中で告げるシャイラは、邪魔するＥＲＲＯＲを次々に手に持った銃で撃ち抜いていく。
それでも足を止める事はない、頭の中は既にアリスの安否で一杯で、涙まで滲んできていた。
ラティスが消え……ゼストが消え……フィリオが消え……次々に仲間が消えていく……。
故郷のアルトニアエデンを離れ世界の希望を背負いこの地に降りたＳＶ。その役目を果たそうと行動したものの……今の結果に至り、希望が消えようとしている。
でも、まだ消えたわけではない。消えようとしていたが、その希望の光は未だに輝き続けていた。
アリスのいる司令室にまで残り僅かの所にまで来た時、前方から押し寄せる赤い蛭の大群にシャイラは腰に着けていた手榴弾を外すと、スイッチを押し全力で赤い蛭の大群へと投げ込む。
それでもシャイラは立ち止まる事無く、物陰に隠れることもしなかった。投げられた手榴弾は赤い蛭の前方に落ちた瞬間、強烈な爆発を起こし赤い蛭の群れを吹き飛ばす。
強烈な爆風、そして破片は走り続けるシャイラの身をも傷つけていく。体に破片が突き刺さり、肩や足に無数の傷跡がつくが、それでもシャイラは止まらない。
だからこそ辿り着けた、アリスのいる司令室に――。
シャイラが扉の前に立つと、扉は自動的に開きはじめる。そして、その司令室の光景は余りにも酷かった。
床や壁、椅子には生々しい血が付着し、天井からも血が滴り落ちている。

人気も無く、もはや生き残っている兵士の姿はどこにもない。その異様な静けさの中、部屋の隅に一人の少女の後ろ姿が見えた。

「アリスお嬢様ぁ！」

アリスの姿を見た途端すぐに駆けつけるシャイラ、そしてアリスの肩に手を置くと、アリスは驚いた様子で後ろに振り返った。

「シャイラ……シャイラぁっ！！」

涙を流し共に名を呼び合う、胸に飛び掛ってきたアリスにシャイラは優しく抱き締めつつもアリスの体に目をやり怪我がないか確かめる。

軍服は汚れ、少し血が付着しているもののアリス自体に怪我は見当たらない。それが確認できて、初めてシャイラは安心して涙を零せた。

「ああ……良かったぁ……本当に、ご無事でっ……！」

アリスを救えた、アリスを失わずに済んだ……後はこの艦を脱出するだけ、そう思いシャイラは体からゆっくりとアリスを放すと、少し微笑みながら口を開いた。

「さぁ、アリスお嬢様。早くこの艦から出ましょう、外には味方の機体が待機しております、もう心配は――」

震えていた。

微笑みかけるシャイラを前に、アリスは恐怖で全身を震わせ、大粒の涙をボロボロと零しながら泣き続けていた。

「シャイラぁ〝……私、死にたくない……死にたぐないよぉ〝ッ！！う〝わ〝ぁあああああああ！！」

泣き叫び跪き頭を抑えるアリス、何が起きたのかわからず困惑するシャイラだが、すぐに跪きアリスに手を伸ばすと、アリスは涙を流し声が嗄れながらもシャイラに訴えてきた。

「ＥＲＲＯＲがっ、あの赤いのがぁっ……私の、私の口の中の入ってぇ、いっぱい吐いたのにい〝！出てこないよお〝お〝っ！！」

ＥＲＲＯＲが……口の中に……？

シャイラはアリスが先程いた部屋の隅に目をやると、そこにはアリ

スの吐いたものであろう嘔吐物が広がっていた。
「シャイラ〝！助けてよぉ〝！助けてっ、助けで……たす、け……
う〝うっ、ぁ〝ぁあ、熱い、熱いぃい〝ーーー！！」
胸元を押さえ苦しみ始めるアリスに……もう、シャイラにはどうすることもできなかった……。
あの頃の笑顔を見たのはいつだろう、ああ、今のアリスの表情は死にゆく兵士達が残したものと同じだった。
虚ろな目を大きく開き、苦しみもがく姿、軍服は床についてある血で見る見る汚れ、呼吸が覚束なくなっていく。
「怖い〝よお！死にたくない〝！い〝い〝あ〝……っ――――！」
だがアリスは息を呑み、動かしていた手足をピタリと止めた。
シャイラがゆっくりと手をさし伸ばしてくれて、優しく抱き締めてくれたからだ。
その温もりに、胸元の熱い痛みは少しだけ和らいだ気がする。
「私は、いつまでもお側にいます……アリスお嬢様の受けるその痛み、悲しみは、私も、共に……」
……シャイラは、これだけはこの世の神に問いたかった。
どうして？なぜ、彼女にこれ程の罰を受けさせたのか。一体彼女が、何をしたというのか……。
平和を望む事はそれ程まで悪なのか？人類は、本当に消えてしまう存在なのか？
死ぬ運命は……本当に必要なのか――――？
「お嬢様……」
「う、ん……？なぁに、シャイラ……」
「申し訳ありません……私は、私はアリスお嬢様を――――っ」
それ以上言わせないように、アリスは自分の唇でシャイラの口を塞ぐ。
「ばかっ……シャイラはいつも謝ってばかり……私だって、いっぱい謝りたいのに……」
生まれた頃からアリスの世話をしてきたシャイラは、兄や姉よりも

ずっと一緒にいる時間が多かった。
アリスが不満を言うと、いつもシャイラは謝りながら機嫌をとろうとしてくれる。
いつも気を使ってアリスの事を守ってくれたシャイラの姿に、アリスは日々感謝してて、そして心の中で謝っていた。
だけど、それをシャイラが分かっていたとは、アリスも思っていなかっただろう……。
ふとシャイラが視線を横に向けると、司令室の扉は開いたまま壊れて止まっており、その通路の奥からは夥しい数の赤い蛭がこちらに向かってきているのが見えた。
床、壁、天井を泳ぐように近づいてくるＥＲＲＯＲ……シャイラはふと腰に着けていた手榴弾を手に取ると、それを自分とアリスの間に持ってくる。
「ねぇ、シャイラ……」
優しいアリスの声、不安と恐怖で心の中は一杯でも、自分をいつまでも抱き締めてくれるシャイラの温もりに体の震えは消えていた。
「はい」
シャイラもまた優しい声で返事をする……その時、既に赤いＥＲＲＯＲの大群は司令室の扉を超え、覆いかぶさるようにアリスとシャイラの二人を飲み込もうとしていた。

「あっちの世界は、きっと平和だよね……」

「……はい」

――何とか艦から抜け出す事が出来た赤城、抱かかえたままミシェルを操縦席に連れてくると、赤城は席に座り機体を起動させる。それに続いてアビアも操縦席に入っていくと、赤城が機体を起動させ発進しようとした時、突如葵から通信がかかってきた。

『おい！アリスとシャイラは助かったのか！？』

「それは……すまない、あの二人はわからない。ミシェルを助け出す事で精一杯だった……」

出来れば艦内をくまなく探し生き残った兵士達を助け出したかった赤城だったが、その余りにも危険な事にミシェルを巻き込む訳にはいかなかった。

『っち、わかったよ！じゃあ俺達が探しに行く！』

そう言うと葵の乗るアストロス・ライダーが向きを変え艦の元へ行こうとした瞬間、無残にも、アリス達の乗っていた艦は巨大な爆発を起こし吹き飛んでいく。

甲板の上に機体を止めていた赤城の乗るリバインは爆風を直に食らい凄まじい揺れと共に機体の装甲を吹き飛ばしていくが、何とか全壊はせず機体の体勢を立て直していく。

その爆風は遠く離れていた葵とエコにも感じられた、間違いなくアリス達の乗っていた艦は今、爆発した。

二人の思考が停止し、一瞬静寂に包まれたものの、葵の後ろに座っていたエコが肩を震わせると、両手で顔を覆いその目から涙が溢れ始める。

「そんな……そんなぁっ、シャイラぁ……アリスぅ……！こんなのって、ないよぉ……ッ！」

エコの泣き声を聞いて葵は止めてしまった機体を走らせた、だが到着した場所にはもう艦など無く、四散した艦の残骸と破片しか残っ

ていなかった。
すると葵は直ぐに羽衣と通信を繋げると、冷静な面持ちの神楽に口を開いた。
「か、神楽！お前の機体にシャイラは、アリスは避難したんだろ！？」
『……いいえ、あの二人は見てないわ……』
「っ――――！」
その言葉を聞いてもなお、葵は諦めない。次は近くにいた友軍機に全てに通信を繋げ声を荒げた。
「おい誰か！？シャイラとアリスを助けた者はいないのか！？本当はいるんだろ！？おい、おい！……何とか言えよッ！！聞こえているかシャイラ！？無事なんだろ！……アリスッ！」
……誰も、何も答えない……目の前の装置に力強く拳を振り下ろす葵、何度も何度も、その怒りと悔しさをぶつけていた。
「嘘だ嘘だ嘘だ！……嘘……なんだろ……？なぁ、誰でもいいから……そう言ってくれよ……」
もう二人に会えない、もう二人を見れない、もう二人と、平和な世界に行けない――――。
悲しみに浸っている場合でも、状況でもないのはわかっている。それでも、二人の目から溢れる涙は止まらなかった。
フィリオの意思を引き継ぎ、ＳＶと共に、世界の平和の為に動き始めたというのに……これから新しい平和な世界で、ＳＶを纏めていくはずだったのに――――。

――『何やってんだお前等ァッ！？さっさとこの場から離れろって言ってんだろがぁあああああああッ！！』
そんな二人を、雰囲気を、吹き飛ばす程の怒鳴り声が聞こえてくる。
通信が繋がれモニターに映し出された甲斐斗、呼吸が荒く、頬や額には汗が流れていたものの、何とか無事でいた。
「甲斐斗！シャイラと、アリスの乗る艦が爆発したんだよッ！あの

二人は、もう――」
葵が次の言葉を言おうとしたが、その面を見た甲斐斗は再び声を荒げはじめる。
『だからどうしたぁッ！？お前等はまだ生きてんだろうがぁッ！このままここに残って死ねばそれで気が済むのかッ？泣いて悲しめば良いのか！？違うだろ！あいつ等の意思を引継ぎ、あいつ等の分まで生き抜く事じゃねえのかよッ！？』
甲斐斗の放つ一つ一つの言葉が、葵とエコ、そして赤城や神楽の胸に深く突き刺さる。
『俺がこの化物の相手をしている内に早く離れろッ！愁だって必ず作戦は成功させる、もし駄目だったとしてもお前らが離れた後に俺が地下に潜ってＥＬＢを起動させてやるよ。だから早くこの場から――』
「だったら！俺とエコは地下に行く！俺の機体はまだ無事だし、さっきから地下にいる部隊に通信を繋ごうとしても繋がらねえ。行って確かめてくる……！」
今度は甲斐斗の言葉を遮るように葵が口を開く、葵のその目には薄らと涙を浮かべていたものの、力強い視線は甲斐斗の目を真っ直ぐと見つめていた。
『お前……』
「地上はお前に任せるぞ甲斐斗……だから、地下はＳＶ親衛隊の俺達に任せてくれ」
『……やれやれ、こればっかりは止めても無駄そうだな。でもな、任せた以上は必ず作戦を成功させて戻って来いよ？俺との約束だからな』
「わかった、ありがとな！必ず巣を破壊して愁と一緒に帰って来る！それじゃ……頼んだぞ！」
そう言って葵はすぐさま機体の向きを変え１機で巨大な穴の中に降りていった。
『行ったか……』

それを確認した後、甲斐斗は少し冷静さを取り戻して赤城に問いかけた。
『赤城、ミシェルは無事か……？』
「安心しろ、助け出して今私の隣にいる」
甲斐斗の声にミシェルが反応し、カメラに映るように顔を出すと、甲斐斗は少し微笑み息を吐いた。
『そうか、ありがとな。代わりに助けに行ってくれて』
「礼には及ばんさ……それとな、甲斐斗。私も一つお前に聞いていいか？」
『ん？』
「お前は今戦ってるＥＲＲＯＲに、勝てるのか……？」
赤城の意外な質問に一瞬だけ間が空いたが、甲斐斗はいつものような強気な態度で答える。
『おいおい、俺が負けるわけねーだろ！大丈夫だ、もう直決着がつく。それじゃあな』
「ま、待て！……くっ、勝手に通信を切りおって……神楽、甲斐斗が何と戦っているのかわかるか？」
「いいえ、相変わらず砂塵で何も見えないわ。甲斐斗の乗る機体が常に動き続けているのは確認できるんだけど……でも、ここは甲斐斗に任せましょう。私達がここに残っていても甲斐斗に不安を与えるだけよ」
そう言って神楽は羽衣を動かし戦場から離れていく。
甲斐斗が今、どんなＥＲＲＯＲと戦っているかはわからない。だが神楽と赤城には大体の予想は出来た。
ミシェルを助けに行かず、ＥＲＲＯＲと戦いに行った訳。その答えは一つしかない。
あの時甲斐斗がミシェルを助けに行っていれば、地上は間違いなく全滅していたからだ。
羽衣の機体の中にある広いスペースには、たった数十人の兵士しかおらず、そこには艦から逃げ出したロアとあの龍の姿もあった。

そして新たに赤城とミシェル、そしてアビアが入っていくと。生き残った兵士達を乗せた羽衣は全速力でその場から離れていく。

……兵士達に悔しさだけが残る、何も出来ず、ＥＲＲＯＲに敗れ、自分達は何もできない。

後は託すしかない、今できる事といえば、作戦が無事成功する事を祈るだけ……そう、祈りとは……力の無い人間がすることなのだと、今になって思い知らされる。

戦場に残る機体の中にはまだ生き残った兵士達も大勢いた、だが次々に仲間が殺され、艦隊が爆発し破壊されていく状況。

ＥＲＲＯＲによる大量虐殺……戦意を失い、力尽きていく兵士達。

生きて帰るはずだった、勝って帰るはずだった……最後に残された時間ではもう、自らの命を絶つ事しかできない。

第１０４話　盾攻、剣守（前書き）

長期にわたり小説を掲載していなくて申し訳ございません。
未だに誤字脱字が目立つ部分があるかと思われますが、次話の更新を望むお言葉がありましたのでまた頑張らせていただきました。
間が開いているのでわかりにくいかもしれませんが、第１０４話は第１０１話の続きという形になっています。

第１０４話　盾攻、剣守

――地上の部隊は壊滅し、葵とエコの乗るアストロス・ライダーは地下へと降りていたが、その光景は地上と然程変わらぬものだった。
仲間同士の機体が次々に同士討ちに遭い、ものの数十分で地下部隊の兵士達もほぼ全滅していたのだ。
無駄な命としか言えない。各兵士達は希望を胸に降り立ったというのに、この有様。
悔しくて涙が止まらない葵とエコ、だがそんな顔をして戦場になど立ってはいられない。
二人は涙を拭いＥＬＢの反応する場所へと進み続ける、そしてそこで漸く出会えた、ただ一人生き残っていた青年、愁に。
だが愁はまだ知らなかった、地下で起きた出来事も、地上で起きた出来事も……。

――「嘘……だ……」
そして地下へと降りた葵から言葉を聞き放心状態の愁、帰る場所が無い……葵のその言葉が何を意味するのかは大体愁には予想がついた。
操縦桿を握る愁の両手は小刻みに震えはじめる……いや、腕だけじゃない、体も、足も……駄目だった、体がまるで動かないっ――。
嘘か、これは現実なのか？もしかすれば、まだ幻想を見せられているのかもしれない。
今の愁は目の前の現実からどうやって逃げようか考えていた、だってそんなっ、目が覚めたら、こんな状況になっているなんてありえない……。
「あ、葵！どういう意味だ！？地上には皆がいるはず！そう簡単に負ける訳がっ――」

「お前が地下に行ってる間に地上にいる部隊は壊滅したんだよ！……なぁ愁、お前が信じられないのはわかる、わかるよ……でもな、今はお前に一々説明してる暇なんてねえ……」

二人が会話を続けている間にも洞窟の穴という穴から次々にＥＲＲＯＲが現れると、二機を見つけた瞬間全力で近づいてくる。

「もうやるしかねえんだ、このまま奴等に負けて終わる訳にはいかねえ。このＥＬＢが今の俺達にとって最後の希望なんだよッ！だから早くこれを、奴等、のぉ……うぅッ！！」

最後の希望……もう残された手はこれしかない、これを巣の奥で起動させ、この地域一体の全ＥＲＲＯＲを消す。

近づいてくるＰｅｒｓｏｎ態を対処しようとライダーが踏み込もうとした時、突如葵は俯き苦しそうに胸に手を当ててしまう。

「葵！？」

咄嗟に愁の乗るアギトがライダーの前に立ちＰｅｒｓｏｎ態を薙ぎ払っていくが、葵は俯いたまま機体を動かせずにいた。

後方に座っているエコはすぐに身を乗り出し葵の側に行くと、心配そうに肩に手を置いた。

「葵……ごめん、私が力不足で……」

「そんな事ねーよ……へへっ……だいじょう、ぶ……大丈夫だ……俺はぁ……」

今にも泣き出しそうになるエコに葵は軽く笑みを見せ頭に手を置くと、ゆっくりと操縦桿を握り締め機体を立ち上がらせる。

「それより愁、早くＥＬＢを巣の奥にもって行くぞ。俺達親衛隊の力を奴等に見せ付けてやろうじゃねえか！」

威勢の良い言葉はいつもの葵だが、愁には葵の弱りきった姿が鮮明に見えていた。

心身ともに力を使い果たそうとしている葵、でも必ずＥＲＲＲＯに勝つ、その闘志もまた本物。

「っ……わかりました、俺が先頭を走ります。ライダーは後ろから着いて来てくださいッ！」

勿論二人に無理はして欲しくなかった愁だが、その葵の闘志を無駄にしてはいけないと思い葵達と共にＥＲＲＯＲの巣の最深部へと向かう決心をし機体を発進させる。
前方から溢れんばかりにＥＲＲＯＲが向かってくるもののアギトは決して止まらない、立ち塞がる全ての敵を、たった二つの拳で道を切り開いていく。
その勢いは加速し続けた、Ｐｅｒｓｏｎ態だろうと、Ｂｅａｓｔ態だろうと、新種のＥＲＲＯＲが現れようとも、今のアギトを止められる者はいない。

そしてついに三人は辿り着く、巣の最深部へと。
肉で出来た洞窟を抜けた場所、そこには地下とは思えぬ程の巨大な空間が広がっていた。
そこもまた何かの体内かのように地面、壁、天井は赤い肉と血管で覆われ、赤い灯りを発しているが僅かに確認できる。
「ここが……最深部……？」
きっと数多くのＥＲＲＯＲが待ち受けているに違いないと思っていた三人だったが、その予想は大きく外れた。
洞窟や通路などでは自分達を止めようと必死にＥＲＲＯＲが立ち塞がり出現していたというのに、この広い空間には一匹のＥＲＲＯＲすらいない。
罠かと思い二機は警戒しながら慎重に進んでいくが、後方から追ってきていたはずのＥＲＲＯＲも姿を見せなかった。
「愁、本当にここが巣の最深部なのか？ＥＲＲＯＲが一匹もいねえぞ」
「そのはずなんだけど……場所は間違いないんだ！ＥＲＲＯＲが何かしら動きを見せる前にＥＬＢを設置する！」
そう言うと愁の乗るアギトは最深部の中央に引っ張ってきたＥＬＢを設置すると、パネルを開きＥＬＢの起爆コードを打ち始める。
「ＥＬＢ設置完了後防護システムを起動、起爆制限時間最長の１５

分にセットするよ。葵、後はここから全速力で離れる準備を……」
そう言って最後の数字を押した瞬間、アギトの手が止まった。
只ならぬ気配を後方から感じる。既にライダーは後方に振り返っており、アギトも同じように後ろに振り向くとその気配を放つ者を確認した。
「機体？」
そこに立っていたのは一機の機体、ＥＲＲＯＲでも何でもなく、そしてそれは、ＳＶの人間なら皆知っている機体だった。
黒色の装甲、赤い瞳に剣と盾を構えるその姿に、愁、葵、エコの三人は驚きを隠せずにいた。
「アストロス・ナイト……！」
どうして、なぜここにゼストの乗っていたはずの機体があるのかがわからない。
だが三人はその疑問を抱くよりも早く、機体の体勢を整え戦闘の構えに入る。
この状況、そしてこの場に現れたのであれば、理由は一つしかない――。
「葵！エコ！ここは俺に任せて先に地上に戻るんだッ！あの機体は俺が相手する！」
敵だ。アストロス・ナイトの姿を似せたＥＲＲＯＲ、それしかない。
「馬鹿野郎！どうしてそういつも自分を犠牲にする考えしかできねえんだよッ！一緒に戦って一緒にお前と生きて地上に戻るからなッ！」
「そうだよ愁。ここまできて、それはないよ！」
葵もエコも味方を見捨てて敵前逃亡などできない。それに、もしここで愁を置いて自分達だけで地上に戻れても、そこにはもう何も無い。
「一緒に戦おう、愁。大丈夫、アギトとライダーがあれば、勝てるよ……！」
葵とエコ、二人はまだ……まだ戦える、手足が震えたって、胸が苦

しくったって、まだ――ッ！
「二人とも……わかったよ。一緒に戦おう、でも俺達は一つ目の任務を終わらせたんだ。今からは二つ目の任務、生きて地上に帰る事を実行する。良いね？絶対だッ！」
必ず生きて地上に帰る。例えそこに何も無くても、希望が無くても、生きてこの作戦を終わらせる事が自分達に課せられた任務であり、使命。
「「了解ッ！」」
目の前に立ちはだかるアストロス・ナイトを必ず倒さなければならない訳ではない、生きて帰る事が第一優先。早く地上へと戻り、そしてＥＬＢの爆発範囲内から逃げなければならない。
制限時間は十五分、その間に全てを終わらせる――。

『リミッター解除。アストロス・ナイト。再起動開始』
アギト、ライダーの前に立ちふさがるアストロス・ナイトが突如黒き光を発し始める。
その見た事の無い光景に愁は目蓋を閉じそうになるものの、微かに目を開きその姿を見つめていた。
「これは――っ！？」
発していたかと思うと、一瞬で機体から光は消え元の明るさに戻る。だがそこに立っていた機体は愁の知るアストロス・ナイトではなかった。
握り締めていた剣と盾は形を変え、機体までも先程の面影を残していながらも変形している。
黒き甲冑とヘルム、微かに靡く赤きマント……まさに『騎士』そのもの。
「どうなってんだよ……おい……」
その機体の姿を驚愕したまま目を見開く葵とエコ、存在してはならないはずの機体の姿を自分の目で見てもなお信じられずにいた。

「どうしたんだ葵!?あの機体を知っているのか……!」
「知ってるも何も、あれはゼスト自身が機体のリミッター解除しねえと発動されない力だぞ」
「リミッター?それって……」
アストロス・ライダーと同じ、リミッター解除により力を解放した機体本来の姿。
しかし、それは誰もが発動できるものではない。
「愁、今俺とエコの乗っている機体も姿を変えているだろ?これは機体に選ばれた人間じゃねえと発動する事が出来ねえ力なんだ。それなのに、あの機体は力を解放してやがる」
選ばれた人間、つまりゼスト以外が機体の力を解放させる事は不可能ということ。
「うん、葵の言う通り。それに、魔力をもたないＥＲＲＯＲみたいな化物が、発動させられるはずがない」
それでも今、三人の前には力を解放し全力全開のアストロス・ナイトが降臨している。
「ちょっと待ってください!という事は、あの機体に乗っているのはＥＲＲＯＲじゃなくてゼストさんじゃ――」
「そんな訳ねえだろッ!?か、仮に。ゼストが生きていたとしてもだ、何で俺達の前に立ちふさがる!?」
「わかりません。ですが、俺や武蔵さんのようにＥＲＲＯＲに利用されているだけで、まだ意識があるかもしれない!」
激しい口調で愁と葵が互いに言い合う中、エコは息苦しい自分の胸元を押さえながら二人に呟いた。
「愁、葵……もう止めよう。相手が立ち塞がる以上、戦うしかないよ……!」
エコの言葉に二人の口が止まると、愁と葵は操縦桿を強く握り締めアストロス・ナイトを見つめる。
「エコの言うとおりだ愁、もうここまできてぐだぐだ言い合うのはやめて。任務を終わらせるぞッ!」

「わかりました、時間も余りありません。速攻で行きます！」
そう愁が言った途端、アギトとライダーは二手に分かれ左右同時にナイトへ接近していく。
アギトは右腕の砕く拳を振り上げ、ライダーは大きな爪を光らせながら左腕を振り上げた。
「「速攻で――――ッ！」」
二機の目にも留まらぬスピードに、ナイトはただ立ち尽くしたままの状態。
そのナイト目掛けて二機は渾身の一撃を同時に振り下ろすと、今まで動きを見せなかったナイトが手に持っていた剣と盾を僅かに動かしはじめた。
ほんの僅かな移動……ただそれだけで、アギトの拳は盾に弾かれ軌道を逸らし、ライダーの爪が砕け散る。
愁が気づいたのも束の間、アギトの体勢を立て直そうとした瞬間ナイトに頭部を横から蹴られ更に体勢を崩される。
更にナイトは攻撃の手を緩めることなく、今度はライダーに接近すると爪を砕かれ動揺した隙を狙い胸部に向けて剣を突き出した。
「んな攻撃、当たるかよぉおおおおおッ！！」
ライダーの素早さは伊達じゃない、瞬時にナイトの剣先を回避すると、右手に残された爪をナイトの胸部目掛けて振り下ろす。
だが、まるでその動きを見透かしていたかのようにナイトもまた瞬時に避けると、ライダーの右をすれ違うかのように通り抜け背後へと回り込む。
「なっ……」
本当にたった一瞬の隙で終わってしまう。ライダーとナイト、その力の差は歴然だった。当たり前だ、心身ともに傷つき、力を使い果たそうとし弱ってきている葵とエコに、覚醒したナイトを止められる術は無い。
それにもし今戦っている相手が本当にゼストであれば、例え力が残っていても葵とエコには勝てない。

それだけゼストが強い事を知っている、だから今の二人では勝てない事ぐらいわかっていた。
「たしかに俺とエコだけじゃ勝てねえかもしれねえ……でも、俺達には仲間がいるッ！」
ライダーは瞬時にしゃがみ込み体勢を低くすると、ナイトの目の前には目を光らせ左腕を振り下ろしたアギトの姿があった。
タイミングは完璧だ、後はアギトの拳がナイトの胸部を貫ければそれで良い。
きっとライダーに止めを刺そうとナイトは剣を構えているはず、愁はそう思っていたが、目の前のナイトは全く違っていた。
右手に持っていた剣は無く、背部に付けていたはずのレーザー砲を握り締めそして今、アギトに向けて引き金を引く。
銃口から放たれた巨大な赤い光は一瞬にしてアギトを飲み込み軽々と吹き飛ばす。
「愁ッ！！」
赤い光は射線上にある物体、血肉の壁にすらも巨大な穴を開け、銃口から光が消える頃にはもうそこにアギトの姿は無い。
アギトの硬度を考えればまだ機体は破壊されていない、だが壁に出来た巨大な穴から出てきたアギトの装甲は複数の傷が付き、肩や腹部が焼き焦げ黒ずんでいた。
「俺のアギトが……がっ、ぐ……」
ダメージを受けたのは機体だけではない、機体に乗り組んでいた愁にも及んでおり、先程の衝撃で全身に痛みが走る。
口からは血が滴り落ち、それでもなお操縦桿を握る愁、この程度で負けていられない、倒れてはならない……そう思うものの、ナイトから受けた強大な一撃は余りにも大きく、愁は機体も思うように動かせずにいた。
「あ……ぁああ……てめぇ、よくも……よくも愁をぉおおおおおおッ！！」
しゃがみ込んでいたライダーはすぐさま立ち上がり振り向き様に右

手の爪でナイトに襲い掛かるが、軽々と持ち替えた右手の剣で薙ぎ払われると、接近してきたライダーの胸部目掛け盾を突き出す。
「止めろ葵！一機だけじゃ危険すぎるッ！！」
その愁の言葉が通じたのか、果敢に攻めようとしていたはずのライダーが突如後方に飛び上がりナイトとの距離をおく。
その行動に一番驚きを見せたのは葵だった、自分の意思で下がった訳ではない、後ろに座っているエコが機体を下がらせたのだから。
「なっ、おい！何で機体を引かせた！？俺はまだ――」
戦える……そう思っていた葵が後方に振り向いたのと同時に、後ろの席に座っていたエコはその場に崩れるように倒れた。
「エコ！？」
すぐさま席を立ちエコの元に向かう葵、そこにはもう衰弱して呼吸も小さい弱々しいエコが虚ろな目で葵を見つめていた。
「あおい……」
もうエコには何の力も残されていなかった、まだ体調も回復していないにも関わらず、ライダーの力を解放してここまで戦えてこれた事が奇跡に近い。
「今まで……ありが、とう……」
目に涙を浮かべるエコのその言葉に、葵はすぐにエコを抱かかえると、エコの額の汗を拭き取り先程まで座っていた席にゆっくりと座らせる。
「やめろよ！何だよ急に……嫌だからな俺は……絶対にお前と生きて地上に戻るんだ、そうだろ？エコ……」
帰る場所が無くたって必ず生きて戻る、前々から二人は約束していたはず、命令だって出されたんだ。
平和な世界が無ければつくればいい……そして必ず生きて、共に平和な地で暮らす――。
「あと少しで平和な世界になるんだ。約束しただろ？一緒に平和な世界に行くって……」
葵だって苦しくて、痛くて、辛いはずなのに、それでもエコに笑み

を見せてくれる。
そうしてエコを席に座らせた後、エコの目の前にあるモニターの電源を消った葵は席に戻り操縦桿を握り締めた。
「あおい、まって……一人じゃ、ライダー……はっ……」
二人ですらもう満足に動かす事が出来ない機体を、葵一人で動かす事には無理があった。
もういつ葵が倒れてもおかしくない。顔色も悪く、汗の量も増え、意識だって朦朧とし始めているのに……。
「エコ、少し休んでてくれ……必ずお前を連れて行ってやるんだからな、平和な世界に――」
……葵とエコの乗るライダーはナイトから離れた所に移動していた。
だが、既にナイトはライダーとの距離を縮めてきていた。
そう、葵が操縦席に戻る頃には、ナイトが剣を振り上げライダーに止めの一撃を振り下ろそうとしている状況だった……。

――「葵……エコ……二人を、絶対に……死なせない！」
ナイトの剣を左手で受け止めるアギトがそこにいた、間一髪間に割り込みライダーを守る事が出来たが、ナイトは左手の盾をアギトの胸部に押し付けてくる。
「う〝あ〝ぁあああああああああああッ！！？」
強烈な電流は機体と愁を襲いその全身に流れる激痛で断末魔を上げる愁だが、決してナイトの剣を放さない。
それ所か右腕を振り上げると、その巨大な手でナイトの左腕を掴むと更に自分の機体に盾を押し付ける。
「行けえ葵いぃッ！早くここから離れるんだぁッ！！」
モニターに映し出された愁との通信状態は悪く、映像は乱れたままよく見えない。
だが愁のその言葉ははっきりとたしかに聞こえた。しかし、それを聞いても動揺している葵は未だに動けずにいる。そんな葵の様子を見て愁は更に声を上げた。

「二つ目の任務を忘れたのか！？生きて地上に帰る事を実行しろぉッ！！」

もう、何も言えない。愁の思いを無駄にすることはできないのだから、葵は黙って機体を走らせるしかなかった。

「愁……愁ぅ……ごめんな、俺達に、力が無くてぇっ……くっ……」

共に戦いたい、共に行きたい、それなのに……それが叶わない。今の自分達の力ではどうする事もできないのだから。

悔しくて涙が零れる、だがこれは愁は作ってくれた最後のチャンス、地上に戻るなら今しかない。

後ろを振り向けばエコが目を閉じ苦しそうに呼吸している、息使いも荒く危険な状態。

一歩機体が後ろに下がった後、ライダーは勢い良く走り先程通ってきた通路に入っていった。

「そんな事は無いよ葵……二人はよく頑張ってくれた……だから後は、全て、俺に」

愁を一人、最深部へと置いていく、残り十分でＥＬＢが起動してしまうのに――。

それを見ていたナイトは、ライダーを止めようとアギトの胸部に蹴りを一撃当てると、強引にアギトを引き離しライダーの後を追おうとする。

だが、それを愁は決して許さない。アギトは離れようとするナイトの左足を掴むと、渾身の力を込めて地面へと叩きつけた。

「お前の相手は俺だ……っ……葵とエコは絶対に俺が守るんだ……殺したければ先に俺を殺してみろ……」

その愁の言葉が通じたのだろうか、ナイトは自機の足を掴む手を振り払うと、剣と盾を構え体勢を立て直した。

「そうだ、それで良い……そして来い。俺に止めを刺しに……来い――」

両手を下ろし無防備な状態を晒すアギト、そんな状態の機体を前にして、ナイトが動きを見せないはずがない。

愁の息の根を止めに、剣先を確実にアギトの胸部に向け一瞬で懐に飛びかかる……それでも、最後までアギトは何の動きも見せなかった。

操縦席に座る愁も動揺などしてない、目の前から剣先が向かってこようとも、愁は瞬き一つせず見つめている。

そして一言、剣先がアギトの装甲に触れる直前に愁は呟いた。

「壊せるものならな」

砕け散る音と共にナイトの剣は剣先から折れていく、特にアギトが何かをした訳ではない。

ナイトも予想外だったであろう、これ程の速さでご自慢の剣を機体の最大の急所である胸部に突き出したというのに、その刃はいとも簡単に砕け散ったのだから。

「お前の剣は折れた……終わりだ……」

速攻で拳を構えるアギト、瞬時に右腕を突き出しナイトを殴り飛ばすと、アギトは地面を強く蹴り飛ばし吹き飛ばされるナイトの目の前に現れる。

その行動にナイトは左手に残された盾を構えるが、アギトが攻撃を躊躇う事は無い。

「貫け、アギト」

アギトの突き出す左手の拳は盾に触れた瞬間激しい火花を散らしたものの、簡単に盾に穴を開けそのままナイトの腹部を貫いて見せた。

そのまま地面に叩きつけられるナイト、腹部、そして盾から激しい火花を散らすものの抵抗する動きを見せようとしない。

ナイトも理解したのだろうか、この状況ではもう、抵抗した所でどうする事もできない事が。

力無く横たわるナイトから、アギトはゆっくりと拳を引き抜くが油断はせず動かないままのナイトを見つめていた。

後はすぐにも地上に戻ればいい、だがアギトは左手をナイトの胸部に伸ばすと、胸部の装甲を剥ぎハッチを無理やり開け始めた。

「一体誰が機体を……」

胸部のハッチを取り外し、その場に投げ捨てると、愁はカメラをズームさせ操縦席のいる者をモニターに映し出す。
そして、そこに映し出された映像を見て愁は思わず息を呑んだ。
「ゼスト……さん……？」
間違いない、そこにいるのは紛れも無くゼスト本人だった。
だが、これは飽くまでもＥＲＲＯＲが姿を似せているだけに過ぎないかもしれない。
動揺を誘う為か、それとも他の、違う意味でゼストの姿に――。
『俺もここまでか……』
音声をマイクが拾う、その声もまたゼスト本人の声……愁は驚きを隠せず戸惑ったまま何もできない。
『ＥＲＲＯＲ、貴様らは何れ負ける。それも、そう遠くない未来でな』
ＥＲＲＯＲ？ゼストはアギトを睨みつけながらたしかに言った、だがアギトはＥＲＲＯＲでもなく、ゼストの言葉の意味がわからない。
『愁、フィリオとアリスを……頼んだぞ』
「えっ？」
今度は自分の操縦席についてあるモニターを見つめながらゼストは喋った、たしかに愁の名は出たが、愁のモニターにゼストは映っておらず、通信すら繋げていない。
「何で俺の名を……ゼストさんは、誰と喋っているんだ……っ！？」
ゼストは言葉を告げると、操縦席の横置いてあった拳銃を手に取り銃口を自分の頭に向けた。
「止めろ！！」
止めさせないと……そう思ってアギトが手を伸ばした瞬間、ゼストは躊躇い無く自分の頭目掛けて引き金を引く。
「――ッ！？」
弾丸は簡単に頭部を貫き血が噴き出すと、ゼストの手から力無く拳銃が落ち目を開けたまま息絶える。
どういうことなのか……今、愁の目の前で何が行われていたのか…

…。

段々と理解し始めていく、前にも見たであろう光景の一つ一つが、脳裏で一致された。

ＥＲＲＯＲの巣へと降りた部隊の自滅、自分が見せられた幻、それらから結びつくものは、一つしかない。

「そんなっ……」

機体に乗って戦う兵士達は、もしＥＲＲＯＲに襲われ死にそうになった時、拳銃で自らの頭を撃ち抜く。

今ゼストは何と戦っていたのか、何の為に戦っていたのか、ゼストの言葉、行動によって理解できる。

理解できるが、愁は震えていた、そして自分の口元を手で押さえ、モニターに映り続けるゼストの死体を見た。

「ＥＲＲＯＲ、なのか……これは全部、ＥＲＲＯＲが……仕組んで……」

寒気が全身を覆い、恐ろしさで身の毛がよだつ、これ程までＥＲＲＯＲに恐怖を感じた事はない。

気づくと自分の目から涙が零れ落ちていた、何粒も何粒も、悔しさで涙が止まらない。

「ゼストさん……任せて、くださいっ……フィリオの夢、ＳＶの夢……必ず叶えてみせます」

そう言った後、ふと愁がＥＬＢに目を向けると、正常に稼動し爆発までの時間を表示している。

それを確認してアギトはナイトに背を向けた、もうここに用は無いのだから……。

――――1機だけで地上へと戻るアストロス・ライダー、来た道を辿りただひたすら進み続ける。

この戦いが終われば平和な世界へと近づける、そして最後の戦いにも勝ち、平和な世界で暮らしていく。

葵とエコ、また一緒に学んで、また一緒に遊んで、また一緒に笑っ

て……楽しみでしょうがない、アルトニアエデンにいた頃のように、また楽しく暮らしていく。
友達も増える、恋人も出来る、家族も出来て、親友と一緒に幸せな世界で生きていく素晴らしい人生。
そんな世界を前にして……辿り着けなかった。
崩れ落ちるアストロス・ライダー、その場に跪き勢い良く倒れこんでまい体勢を崩すと機体の機能が停止していく。
「あおい……？」
意識が朦朧としていたエコもその機体の衝撃で目を覚ます。
ふと前を見れば椅子に座ったままの葵の後ろ姿が見えた。
エコには何が起きたのかわからない、ふと瞬きをしてもう一度葵の姿を見ようとした時、葵の体は力無く横に倒れた。
「えっ……？あおい？あおい……？」
倒れた時頭は強く打ちつけ、そのまま動かない葵を前に、エコの顔色は見る見る青ざめていく。
名前を呼んでも反応しない。エコは衰弱しきった体を一生懸命起こすと、その震えるか弱い足でゆっくり立ち上がり一歩ずつ葵に近づいていく。
「起きて……あおい、平和なせかいに、いくんだよね……」
葵の側に座り込み倒れている葵の肩を揺さぶるエコ、それでも葵から返事がこない。
「約束、したよね。皆と、たくさん……ほら、甲斐斗とも約束した……必ず、戻ってくるって……」
肩を揺さぶりながらエコは話し続ける、それが葵の耳に届いているかはわからないが、エコは決して止めない。
「だからっ……あおいだけでも、生きて……ゃっ！？」
その言葉を葵が聞いた途端、突如体の向きを変えると横に座っていたエコを抱き締めた。
「エコ……生きろ、よ……」
葵の口から聞こえてきた言葉はとても弱々しく、か細いものだった。

エコの目から涙が止まらない、抱き締めてくれているはずの葵の腕からまるで力が感じられなかった。
抜け殻のように軽い葵の体、そして抱き締められているのに、葵の肌は氷のように冷たくなっている。
「平和な世界で……幸せになるんだろ……？弱音、吐くなよ……絶対に、諦めるなよ……」
ゆっくりとアストロス・ライダーが立ち上がろうとしていく、エコの意思ではない、葵の最後の意思と力で、必死にエコを地上に帰そうとしていた。
「まってよあおい……わたしを、一人にしないで……もう一人は、嫌ぁ……」
ライダーは立ち上がる、回りにはＥＲＲＯＲの死骸や機体の破片が散乱する中、一歩ずつ歩き進んでいく。
自分達が今どの辺りにいて、どの通路を選び、あとどれだけ歩けば地上に帰れるかなんて、今の二人にはわからない。
その時、ライダーの右腕に亀裂が走ると、歩いた衝撃で崩れ落ちその場で塵へと変わっていく。
次は左腕に亀裂が走る、崩れ落ちはしないが、機体は徐々に色を失い塵へと変わりつつあった。
魔力が枯渇し枯れ果てていくかのように機体の崩壊が始まる、だがそれでも葵は歩かせ続けた。
エコを、平和な世界に連れて行く為に。
「……ねぇ、葵……私の幸せ、知ってる……？」
エコの幸せ――遠のく意識の中でも、葵の頭の中には残っている。
平和な世界で楽しく暮らしていく事。
エコの過去は知っている、だからこそ葵はエコに教えたかった、伝えたかった。苦しい日々だけではない、辛い毎日は無い……楽しくて、幸せな日だってあることを……。
そんな感情が生まれたのは、葵がエコと初めて出会ったあの時から始まっている。

まだ終わらない、人生を、まだ終わらせる訳にはいかない。エコの幸せを叶える為にも。

……それでも、次のエコの一言で。ライダーはふと足を止めてしまった。

「葵の側に、いられることだよ」

ああ、そっか――。

同じだ、それなら葵も、同じだ……。

一番の幸せは、こんなにも近い所にあった。

当たり前のようにいつも一緒にいられること、それが二人にとって、一番の幸せ。

別に忘れていた訳でもない、知らない訳でもなかった。

幸せだったんだ、ずっと。アルトニアエデンを出てこの世界に来た時も、世界の為にＥＲＲＯＲと戦っている時も、エコが側にいてくれたから、葵が側にいてくれたから幸せだった。

――自分をずっと抱き締めてくれる葵を、エコは放そうとはしない。

葵の座っていた操縦席のモニターを見れば、映像は繋がらないものの、愁の声が微かに聞こえてくる。

『葵！エコ！聞こえるか！？ナイトは俺が倒した！ＥＬＢも無事に作動！後はもう地上に帰るだけだッ！』

……良かった、愁は無事なんだ。それなら後は、無事に地上に帰るだけ。

「うん、わかった……愁。私も葵も、もう地上にいるから、早く、上がってきてね……」

何も心配はいらない。これで愁は無事地上に戻り、エコは一人幸せに浸れる。

動かなくなった葵をそっと抱き締めるエコは目を瞑ると、段々と呼吸が小さくなりはじめた。

「葵……大好きだよ……」

――見る見る塵へと変わり果てていくアストロス・ライダー、色も失い灰色の装甲が崩れ散っていく。

すると、そんな壊れかけの機体を1機の機体が抱かかえると、一直線に洞窟の中を進み始めた。

「諦めちゃダメだ、死んじゃダメだ……生きて、生きて生きて！皆の分まで生き抜いていく事が一番大切な事じゃないのかッ！？葵ッ！エコッ！！」

地上へと帰っていた愁、エコとの通信を聞いた時から怪しいと感じていた。

聞こえてくる声はエコの声しか聞こえず、葵の返事がまるでない、それに、あの時のエコの言葉を聞いた時の只ならぬ不安は愁の、アギトの足を止めさせたのだ。

レーダーを頼り必死に辺りを探してきたアギト、幸いにもライダーは地上へと上る通路から近く、後はこの地上にまで伸びる巨大な穴から浮上し脱出するだけだ。

「俺は絶対に諦めないッ！二人が立ち止まるなら、俺が無理やりにでも平和な世界に連れて行く！」

アギトの腕の中で朽ち果てていくライダー、既に両腕は崩れ落ち、両足もまた亀裂が走ると色を失い塵へと変わっていく。

あと少しだった、出口に近づいていくと太陽の光はアギトとライダーを強く照らしだしている。

地上はもう、すぐそこに――。

――そして、ついに地上へと生還した愁、空は地下に行く前と変わらず澄んだ青空が広がっていた。

素晴らしい世界、毎日見ている空が今、こんなにも美しいと思った事はないだろう。

その青空の下にある、地上の光景を目にするまでは。

辺りに散らばる無残な機体の残骸、ＥＲＲＯＲに侵食され破壊された艦隊、そして愁が穴から出てくるのを待っていたかのように数千匹のＥＲＲＯＲが地上に広がっていた。
上を見上げれば青い空が広がっているというのに、下を見れば赤い空が辺り一面に広がっている。
……何だろう、ふと葵の声が聞こえたような気がした。
エコの声も、聞こえてきたような気がした。
その二人の声を聞いて、ゆっくりと抱き締めているライダーに目を向けるアギト。
抱き締めていたはずなのに、側にいたはずなのに……もうそこに、アストロス・ライダーは存在していなかった。
「葵……エコ……？」
葵もエコも、もうどこにもいない。アギトの腕に僅かに積もる塵も風に流されていき、愁はアギトの腕を静かに下ろした。
「俺は……諦めないよ、皆。ＳＶの夢、皆の願い……絶対に、絶対に俺は、俺はぁ……っ……」
わかってはいても涙が止まらない、もう迷わないと決めたのに、皆を絶対に守ると決めたのに、まるでそれが果たせない。
非力な自分がここにいる、いや、力はあるのかもしれない。だがその力で愁は、未だに人を守れず、人を救えない。
全ての人を守り、救うには、絶対的な力が必要なのだろうか？それも、『最強』と言われる程の完全無敵の力を。
「最強……」
地上はどうなっていたのか、愁には詳しい事がわからない。
「甲斐斗さんは……？」
愁は地下に行く前に、地上を甲斐斗に託したはず……それなのに、この有様は……。
その時、突如視界に入っていたＥＲＲＯＲの大群が吹き飛び、肉片が宙を舞う。
そこに魔神はいた、黒き剣を豪快に振り回し、魔神に近づくＥＲＲ

ＯＲが次々に散っていく。しかし魔神は自分の周りにいるＥＲＲＯＲなど眼中にないかのように、何かを見つめ続けていた。
甲斐斗はまだ戦っている、それに気づいた途端に愁は甲斐斗との通信を繋げると、即座に叫んだ。
「甲斐斗さん！ＥＬＢの設置が完了しました！今すぐこの場から離れて……っ！？」
モニターに映し出された甲斐斗の姿を見て愁は言葉を止めてしまう。頭や口から血を流し、虚ろな瞳をした甲斐斗が力無くそこに座っていたからだった。
地下に行く前、あれ程覇気のあった甲斐斗が、まるで死ぬ一歩手前にまで、追い詰められている。
「うぅ……よお愁、どうやら……無事、みたいだなぁ……」
まるで力を感じられない、それこそ葵やエコのように。いつ死んでもおかしくない程に。
地上で一体何が起きたのか、何故甲斐斗がここまで追い詰められているのか、愁にはわからない。
だがここで迷い、立ち止まれば。自分達が死ぬという事だけはわかっている。だから理由を聞く前に、まずは安全な場所に向かう必要があった。
「しっかりしてください甲斐斗さんッ！ＥＬＢは後二分で起動します！早くここから逃げないと！」
すぐさまアギトは魔神の側に駆け寄ると、肩を貸し跪いた魔神を立ち上がらせ、出力を上げその場から走り去っていく。
「くっ……俺が運びます！しっかり掴まっていてください！」
「あ？……あぁ、わかっ……た……」
アギトが走り去る間にも、周りにいるＥＲＲＯＲは次々にアギトに向かって襲い掛かる。
愁の乗るアギトだけならこの場から離れるのは何の問題も無い、だが今魔神に肩を貸していてはＥＲＲＯＲの避けれる動きも避けられずにいた。

次々にＰｅｒｓｏｎ態が魔神とアギトに飛びつき張り付いていくと、魔神の装甲だけを噛み千切り剥がしていく。

「このままでは間に合わない！？クソッ！！そこをどけぇえええええええッ！」

今はもう気にしている暇は無い、一刻も早くこの場から離れなければならなかった。

一か八か、アギトはＥＲＲＯＲを避けるのを止め一直線に特攻しはじめる。

高速で接近するアギトを次々に止めにかかるＥＲＲＯＲ、だがアギトの勢いは止まることなく突き進んでいく。

衝撃が次々に二人を襲うものの、ＥＲＲＯＲの攻撃でアギトが傷を追う事はない、だがアギトの側にいる魔神は次々に腕や足、肩が吹き飛び、後はもうアギトを掴む一本の腕と、甲斐斗のいる胸部しか残っていない状態にまできていた。

「ぐうううぅッ！……耐えてください甲斐斗さん……！最強が死ぬには、まだ早すぎる！」

ＥＲＲＯＲの群れの中を突き進むアギト、幾ら突っ切ってもＲＲＯＲが広がっている光景しか見えない状況の中、モニターに映し出されていたカウントが『０』を示した。

「ＥＬＢが……起動する！」

――――愁と葵、そしてエコの設置した人類の希望『ＥＬＢ』。

地下の最深部にいたＥＲＲＯＲ達はＥＬＢを１５分以内にＥＬＢを止める事は出来なかった、破壊を試みようとＤｏｌｌ態が射撃しようとも弾丸は全て蒸発し、Ｐｅｒｓｏｎ態が近づけば体内の血液が一瞬で沸騰し肉体が破裂する。

その理由はＥＬＢに搭載されている防護システムによるものだった。

超強力なマイクロ波を放ち如何なる外敵からの攻撃を防ぎ、近づかせない。そして起動の時が来た今、ＥＬＢは真の力を発揮する。

ＥＬＢを覆っていた硬く厚い装甲が花開くかのように剥がれ落ちる

と、そこには巨大な光学電子魔石が姿を露にした。
とても美しく、その透き通るような透明度の魔石の中に眩い光は凝縮されていくと、溜められた力は突如解放された。

――光の速さ、真っ白な光が一瞬にして洞窟内の全空間に飲み込んでいく。
何も、誰も抵抗することはできない。光に飲み込まれＥＲＲＯＲの姿が次々に消えていく。
その光の矛先は地上にいたＥＲＲＯＲにも向けられた。巨大な穴を中心とした亀裂が次々に地面に広がっていき、眩い光は天を貫く程巨大で、空に広がる青い景色すら白く覆う。
空気、空間が振動していくのがわかった。それも高速で、波動のように広がっていく。
その振動は愁の乗るアギトにも伝わってくる、爆発範囲内から何とか逃れたものの、その想像を絶する程の威力は愁の予想を超え、波動はアギトのいる距離にまで伝わった。
また全て消えていく。前回のＥＤＰのように、憎きＥＲＲＯＲと共に仲間達は消えていく。
多くの兵士達が死んでいった、皆それぞれ心があり思いがあったのに、一人一人生きていたというのに。
跡形も無く、そこでは本当に戦いが行われていたのかもわからない程の無残な結果だけが残る。
……これで良かったのか、それはわからない。ただＥＲＲＯＲには勝利できた。それこそがここで散っていった兵士達へのせめてもの償いになれるのだろう。

――ＥＬＢは無事起動し使命を果たした。
ＥＲＲＯＲの本拠地が在ったとされる場所には、まるで隕石が落ち

たかのように巨大なクレーターが出来ており、その地表からは幾つもの白い煙が昇っていた。
そして、そのクレーターが出来た範囲から少し離れた場所に、力無く横たわる魔神と、アギトの姿があった。
二人ともＥＬＢの衝撃に気を失い動きをみせないが、愁はふと目蓋を開けると、ゆっくりと機体を起こし意識が朦朧とする中機体の状態と周囲の状況を確認していく。
「やったんだ……」
レーダーに反応無し、完全にＥＲＲＯＲの反応は消えている。
周りからは何の物音も聞こえてこない、目の前にはただ青空が広がり、眩い光が自分を照らす。
愁には未だにＥＲＲＯＲに勝利した実感が湧いてこない、嬉しさや達成感も込み上げてこなかった。
「何人、死んだ……？」
余りの多すぎる仲間の死。勇猛果敢に戦った彼等はもういない。
生きる為に、世界を守る為に、今の、この未来の為に……人は消えていく。
何も成し遂げる事無く死んでいった兵士だっていた。
これからも生きていたかったのに、生きられなかった兵士もいた。
「葵、エコ……ごめんね……俺に……力が無くて……」
考えるだけで苦しくて切なくなる、余りにも生き残る人間が少なすぎるこの現実。
むしろこれだけの犠牲を払ったからこそ、勝利に価値が出るのか……？
……もういい。何にしろ、これで未来が開かれたこともまた事実。
傷ついた機体を立ち上がらせる愁、そこに広がっていた光景は、本当に先程まで自分達が戦っていた場所なのかわからない程跡形も無く消えていた。
ＥＲＲＯＲの死体も、機体の残骸も、何も残されてはいない。
愁は目を瞑りその光景に背を向ける、そして隣に倒れている上半身

だけが残った魔神を拾おうとした時、突如目の前のモニターに一人の女性が映し出された。
「なっ……貴方は……」
そこにはアリスと同じ艦に乗っていたはずのＥＲＲＯＲの女性、エラが映っていた。
涼しそうな表情を浮かべたまま愁を見つめるエラ、その後ろには愁が見ていたのと同じ青空が映っている。
『おめでとう。と、言えばいいのかな？お前は人類の目標の一つである、巣を完全に消滅させたのだから』
エラの言葉に、愁は黙ったまま聞き流していた。
不安な気持ち、何故ここでＥＲＲＯＲである女性が自分に通信してきたのか……。
『お前達人間の力は不思議だな。とても興味深い、もうじき私も理解しつつある。……それにしても、お前達人間は余りにも力の差が離れすぎている。それ故に今、この場に生き残っているのはお前達二人だけとなった』
たしかに愁と甲斐斗は他の人々より強い力があるかもしれない。だからといって、今ここに生き残っているのは二人だけの力でもない。力……人間は様々だが、ＥＲＲＯＲの場合はどうなる。ＥＲＲＯＲには生まれてこないのだろうか、強弱という差のある生物が……。
『心配というのをしなくていい、我々も同じだ。人間と同じように強弱が別れている。
しかし……人間の「強さ」と、我々の「強さ」には、決定的な違いがあった』
そうエラが言った瞬間、エラの背後を巨大な影が通り過ぎていく。
何が通ったかはわからない、黒く巨大な物体……その時、背後から地面に何かが落ちた衝撃と轟音が同時に体を伝ってくる。
……ありえない。全てのＥＲＲＯＲはＥＬＢにより完全に消滅したはず、それにレーダーにもＥＲＲＯＲの反応は無い。
だったらこの衝撃は音は、何だと言うのか……振り返るしかない、

確かめるしかない。
意を決して愁はアギトを振り返らせる、そして見た、自分達の前に何が現れたのかを。
「なんだ……これはっ……」
赤い箱、それも機体の大きさを軽く上回る程の巨大で真っ赤な四角い箱がアギトの前に落ちていた。
よく見れば赤い箱の表面は動いており、そこには所々に黒い点のような模様が浮き出ている。
そしてその姿を見た途端に、愁は言い知れぬ不安とプレッシャーに覆われていた。間違いなく目の前に現れた巨大な物体は敵……だがどうして、何故目の前にいるのか、まさかこれに、甲斐斗は負けたのか……？
様々な思考が脳裏に飛び交う中、まるで愁を起こすかのようにエラが口を開く。
『どうした人間。戦わないのか？』
「戦えと言われても……これは、まさかＥＲＲＯＲなのか……？」
『ああ、そうだ。お前達の言うＥＲＲＯＲで間違いない。しかも、こいつは『オリジナル』だ』
「な……ということは……っ！？」
『人間ならわかるだろ？この意味が』
オリジナル。その言葉を聞いて思い浮かぶ事は一つ、これがＥＲＲＯＲの正体であり、本物の姿。
この赤い箱が、ＥＲＲＯＲの生みの親であり、世界の破滅を齎す元凶……。
「これが、ＥＲＲＯＲの本当の姿……なのか……？」
だが愁は未だに理解できない、目の前にある物体……いや、生命体なのだろうか、この存在が本当にＥＲＲＯＲであるのかが。
『本当の姿？どうした人間、我々に本当も嘘も無い、お前達は言うだろう、ＥＲＲＯＲと』
そんなエラの愁を惑わしからかうかのような発言は、更に愁を混乱

させていく。
「ＥＲＲＯＲ……！」
其の時、現実が愁を襲う。考えている場合ではないのが、何故わからない。
今自分の目の前にいるのは、全人類の敵、仲間達を残酷に殺してきた化物だということを、自覚しなければならない。
あれだけの犠牲を払い、起動したＥＬＢ。それでもＥＲＲＯＲは消えず、こうして目の前に現れた。
それも最悪最強の生命体がだ、たった一人の人間の前に、現れたのだから……。
『さぁ人間、いよいよだな。今から思う存分始めるといい……「ＥＤＰ」を』
絶望。
それしか言葉がみつからない。この状況に立たされた人間は普通、思考がまともに働かない。
噴き出す汗、零れ落ちる涙、絶望に飲み込まれ顔を押さえつけながら絶叫するだろう。
エラは知っている、人間とはどういう生物なのか、何せ理解しつつあるだから、人間という生物を……。

――「愁だ」
『……ん？』
一言、そう聞こえてきたエラは首を傾げ理解できずにいた。
すると、そこに言葉を付け足すように愁は更に言葉を続ける。
「俺の名は愁、ＳＶ親衛隊隊長。魅剣愁」
アストロス・アギトが拳を構え、目を光らせる、その真っ直ぐな視線は目の前に立ちはだかるＥＲＲＯＲを睨みつけた。
戦いの闘志は消えていない。それ所か先程より増していた、愁の闘志がＥＲＲＯＲを目の前にして消える事は絶対に無いであろう。

この世に平和を齎す神になろうとは思わない。最強の男になろうとも思わない。
だが、もし平和な世界がその存在を必要とするなら……なるさ、神にだって、最強にだって。
皆の願いを、気持ちを、意思をぶつける格好の敵の登場だ。皆の希望が詰まった、この震えの止まらないこの拳を今、解き放つ。
「今からお前達を消す人間の名だ」
愁の眼差しは衰えない。
その強く鋭い視線にエラは眼を輝かせニヤニヤと笑っていた、鳥肌というものが立ち、全身を巨大な何かが飲み込むような感覚、新しい、感覚。
言葉に出来ない、だがエラはとても満足していた、そしてその眼でエラは見届けるだろう、この戦場での最後の戦いを。
「ＥＲＲＯＲの生存を確認、これより……ＥＤＰを続行する」

第１０５話　真、降臨

――――「これが、これがＥＬＢの威力……人間の扱える代物じゃないわね……」

ＥＬＢの起爆後、ＥＲＲＯＲの猛攻を受けながらも何とか爆発範囲内から離れる事に成功した羽衣。

その機体の操縦席では神楽が状況を確認しようとするものの、辺り一帯の地域は強力な電磁派によりあらゆるレーダー装置が正常に機能せずにいた。

そして……羽衣の内部にある部屋、その空間にいた兵士達はＥＬＢの爆発の振動で壁に縋りより必死に耐えていたが、揺れが収まると皆体の力が抜け横たわっていく。

一つの歓声も、喜びの声も出やしない。ＥＬＢが起動したということは、この戦場で人類は勝利したというのに、誰一人笑みを見せるものもいなかった。

「あの、すいません」

ミシェルを抱き締めながら壁にもたれかかる赤城の前に、一人の青年ロアが現れた。

「戦いは……終わったんですか……？」

ロアの質問に赤城は顔を上げるが、また顔を下げると口を開く。

「終わったはずだ。ＥＬＢの起動はＥＲＲＯＲの敗北を意味する……神楽、聞こえるか？」

その赤城の言葉に、何処からとも無く神楽の声が部屋の中から聞こえてくる。

『ええ、聞こるわよ。今の状況が知りたいんでしょ？』

恐らくこの場にいる者全員がそうだろう、今戦場は、どうなっているのか。

『戦場はＥＬＢで何もかも消し飛んだわ、恐ろしい光景よ……あと、残念だけどＥＬＢの影響でレーダーは使えないの。まぁ、これ程の

威力なら生き残った兵士もＥＲＲＯＲも皆いないわね』
「甲斐斗は……愁はどうなった？葵とエコだって、今どこにいるかわからないのか？」
『あの子達を信じるしかないわね。一応辺りを探してみようと思うけど――』
その時、ふと神楽達の乗る羽衣が揺れた気がした。
地震？いや、地上から浮いている羽衣には通じない。
また揺れる、響いてくる、何度も、何度も機体を揺らしていくその振動は徐々に大きくなり始めていた。
「なっ、この揺れは何だ……」
ズドン、と。何度も何度も、まるで何かを打ち付けるような轟音が聞こえてくる、だがこの音の正体は赤城達にはわからない。
だが神楽は見てしまった、この音、そして振動の正体を。目を開けたままただ見つめ続ける神楽、その光景にを前にして視線を逸らすことができなかった。
『うそっ……何よ、これ……』

――空気、空間を伝ってくる衝撃。その音のする方を見れば、振動が地上を伝い地面を裂き、空気がまるで震えるかのように波が見える。
そして、そこに奴はいた。
巨大な赤く四角いＥＲＲＯＲを、ただひたすら左右の拳で交互に殴り続けるアストロス・アギトの姿が。
何度も、何度も、何度も、アギトは決して諦める事なく、その偉大な拳を思う存分ＥＲＲＯＲに叩きつけていく。
「砕けろ、砕けろっ、砕けろッ！砕けろッ！！砕けろぉッ！！」
微動だにしないＥＲＲＯＲ、だがその時、一本の小さな亀裂がＥＲＲＯＲに入ると、次々に小さな亀裂が拳の衝撃で広がっていく。
勝てるッ！何の抵抗も見せないＥＲＲＯＲだが、それなら全力で殴らせてもらうまでのこと。

「トドメだ！」
渾身の力をアギトの右手の拳に込め、勢い良く振りかぶった巨大な拳は更に巨大な衝撃波を発しながらＥＲＲＯＲに直撃した。
亀裂は表面全てに達し、最後の一撃と共にバラバラに砕け散っていく。
赤い破片が飛び散り、原型が崩れていくＥＲＲＯＲ。それは愁の目にもはっきり見えた、一つ一つの欠片が宙を舞う光景を。
そして、その破片が全て液体になるように丸みを帯びると、一瞬にして欠片同士が引かれあい合体していく現実を。
「なっ！？」
アギトの目の前にいたＥＲＲＯＲは四角く、たしかに砕け散ったはずだった。
しかし数秒後には、丸みを帯びた液体のような形になっており、その表面は柔らかそうに波をたてている。
「液体化に再生能力！？くそっ！」
もう一度、アギトは拳を大きく振りかぶると、先程と同じように右腕の砕く拳をＥＲＲＯＲに叩き付ける。
すると拳は簡単にＥＲＲＯＲの体内に入り何事も起こらない、まるで血溜まりの中に腕を入れただけかのように、何の変化も起きない。
衝撃が全て吸収されている。次々に拳を繰り出すアギトだが、その拳は全て液体になったＥＲＲＯＲの前には通用しなかった。
蹴り、拳も、幾ら高速で殴っても、液体化したＥＲＲＯＲにダメージは与えられず、少し液体が飛び散ろうともまた引かれあい合体していく。
（考えろ俺！どうすれば、どうすればいいんだ……ッ！？）
液体化したＥＲＲＯＲが突如形を変えていく、そしてアギトの前にはまるで金槌のような形になったＥＲＲＯＲが立っていた。
……今まで一番大きい衝撃、そして轟音が辺りを吹き飛ばすかのような勢いで波動が伝わった。
赤い金槌は振り下ろされていた、それも地上に亀裂を走らせ、地面

をへこませる程の強力な勢いで。
ゆっくりと振り上げられる赤い金槌、叩きつけられた場所には、間接の方向が見るも無残に曲がり機体の所々に亀裂の入ったアギトが横たわっていた。
目を開けたまま閉じられない愁、全身の筋肉が硬直し体を動かす事はおろか、思考すら覚束ない。
「あ、あ……」
今まで体験した事の無い感覚。この危機的状況に置かれた愁は、何とかＥＲＲＯＲの攻撃を避けようと機体を立たせようとするものの、ＥＲＲＯＲの攻撃は容赦なく続いた。
何度も、何度も、何度も。赤い血のような金槌がアギトに向けて振り下ろされる。
その時、一本の青白いレーザーが金槌の側面に直撃すると、軌道が僅かにずれアギトの真横に落ちた。
『しっかりしなさい！何なのよアレ……まさかＥＲＲＯＲだとでも言うの？』
羽衣の攻撃、その隙に愁は何とか機体を立ち上がらせると出力全開で一気にＥＲＲＯＲから距離を取る。
全身が痛い……それも意識が遠のいてしまうほど。
顔から何か違和感を感じる、下を見れば自分の足元に血が滴り落ち、咄嗟に頭に触れるが流血しているものの滴り落ちてはいない。
ぽたぽたと、愁の鼻から血が滴り落ちる。それに気づくと愁は少し鼻を押さえると顔を上げ正面を向いた。
「は、はい……あれは間違いなくＥＲＲＯＲです……。それに、あのＥＲＲＯＲの女性がそう言っていました、オリジナル、と」
『オリジナル？まさか、あのＥＲＲＯＲが親……』
赤い金槌の形状を保っていたＥＲＲＯＲは、アギトが離れるとすぐにまた液体状に戻りはじめる。
「神楽さん、あのＥＲＲＯＲに物理的な攻撃が効きません。ですが時間を稼ぐ事なら可能なはず。その間にバリオン砲の準備をしてい

てください」
愁は一度見た事がある、羽衣が放つあの大都市すら一撃で無に変えた力を。
幾ら再生能力を持つＥＲＲＯＲとてあの攻撃に耐えられるとは考えにくい。
『……その間に貴方が死なない保障はあるのかしら？』
「死ぬ気はありません、それより早く準備を――」
愁も神楽も、戦いに集中していなかった訳ではなかった。このＥＲＲＯＲに勝つにはどうすればいいか、今それを必死に考えている。
だがその時生まれた小さな隙が、戦場では命取りになる。
液体化したＥＲＲＯＲが、突如猛スピードで羽衣へ近づいてくる。
それも、まるでガラス板の上を水滴が滑るかのように速く。
『あら、私を先に狙うなんて賢いわね……！』
羽衣がＥＲＲＯＲに両手を向けると、手の平から巨大なレーザーを砲を放ち忽ち接近してくるＥＲＲＯＲを飲み込んだ。
『でもただ真っ直ぐ進むだけじゃ、賢いなんてやっぱり言えな――っ！？』
レーザー砲を撃ち終えた後、何事も無かったかのようにＥＲＲＯＲは滑るように羽衣まで接近していた。
このままではまずい……。すぐにでも羽衣はＥＲＲＯＲから離れようとしたが、今から後退したのではあのＥＲＲＯＲの速度ではすぐに追いつかれるのは目に見えている。
「俺が止めるッ！」
何とか間に合いＥＲＲＯＲの前に立ち塞がるアギト、右手の拳を振り上げ、ＥＲＲＯＲが目の前に来た瞬間振り下ろす。
が、ＥＲＲＯＲは何事も無くアギトを飲み込んだ後、そのまま通り過ぎていく。
「え……？」
液体化したＥＲＲＯＲの前に成す術もない、１秒も、一瞬もＥＲＲＯＲを止められず、振り向けば羽衣のすぐ目の前にまでＥＲＲＯＲ

は接近してきていた。
死ぬ……レーザー兵器も打撃も通用しないＥＲＲＯＲに、殺される。
「また俺の目の前で、人が死ぬのか……？」

――その時だった、一本の黒い物体が上空から落ちてくると、液体化したＥＲＲＯＲを貫いた。
羽衣に触れるその手前にまで来ていたＥＲＲＯＲが、何かに刺さったのを反応して暴れ始める。
だが幾ら動いてもＥＲＲＯＲはその場から動けずにいた、その隙に羽衣は後退し、何が起こったのかわからないアギトは蠢くＥＲＲＯＲを見たまま立ち尽くしている。
突き刺さった物体、愁はそれが何なのかをようやく理解した瞬間、一体の機体から通信が繋がった。
『おい……愁ぅ……』
モニターに映し出された甲斐斗、だがその姿は余りにも痛々しく、弱々しいものだった。
力強く自分の胸を手を当て、苦しそうに呼吸をしながら何かに耐えているかのように表情を歪ませる。
「甲斐斗さん！？まさかあれは、貴方の剣で……」
愁の思った通り、ＥＲＲＯＲの動きを止めていたのはあの甲斐斗の持つ黒い剣だった。
だがまだわからない事がある、アギトが直接触れて止められなかったＥＲＲＯＲを、何故甲斐斗の剣で止められたのか。
ＥＲＲＯＲの体諸共黒い剣は地面に深く突き刺さっており、まるでそのせいでＥＲＲＯＲは動けないような状態。
一体甲斐斗が何をしたのか、それを聞こうとした時、甲斐斗は苦しそうに両手で頭を押さえると俯き唸りはじめた。
『ぐっ、くう……クソッ、あの、糞化物、がァ……！』
立ち上がる魔神。足は既に吹き飛んでいたはずだというのに、目に見える程の再生能力で魔神は再び元の姿に戻ろうとしていた。

蠢いていたＥＲＲＯＲも、その魔神の再生に気づくと、刺さっていた剣を地面から抜き取り吹き飛ばすと、また滑る程の勢いで魔神に接近していく。

『この俺様を、誰だと思ってやがる……？』

魔神が手を出した瞬間に吹き飛ばされたはずの黒剣が手元に現れ、それを握り締めた魔神もまたＥＲＲＯＲと同様に走り寄っていく。

『最強だ。俺は、最強の男、最強なんだよ……てめえみたいな化物如きが、この俺様に勝てるわけねえんだよぉおおおおおおおッ！！』

甲斐斗の叫び声と共に、魔神は黒剣を大きく振り上げＥＲＲＯＲ目掛け振り下ろす。

するとＥＲＲＯＲは魔神の振り下ろした剣に触れないように自らの液化した肉体の形状を一瞬で変形をさせ、魔神が振り下ろした剣は何にも触れる事無く地面に突き刺さる。

『ぐッ！？』

そしてＥＲＲＯＲは、まるで魔神を取り込むかのように液化した肉体を大きく広げ魔神を包み込もうとしていた。

「甲斐斗さんッ！！」

間一髪、飛び込んできたアギトが一瞬にして魔神を捕まえその場から離れＥＲＲＯＲとの距離をとる。

二人とも息が荒く、意識は朦朧としていた。だがそれでも、今目の前にいるＥＲＲＯＲとの決着をつけなければならない。

どうする……液体化したＥＲＲＯＲ、拳は効かず、レーザー兵器も通用しない。だが、甲斐斗がいつも使っていたあの剣はＥＲＲＯＲに効いていたはず……。

「教えてください。あのＥＲＲＯＲには攻撃が効きません、ですが甲斐斗さんの剣はたしかにＥＲＲＯＲの動きを止めていました。……奴に勝つには、甲斐斗さんの剣が必要なんですか……？」

『……レジスタルだ』

「レジスタル？」

愁にとっては聞き覚えの無い言葉だが、通信を聞いていた神楽には

理解できた。
光学電子磁鉱石、機体の燃料であり原動力を作る物体。そしてそれは、人間から生み出される物……。
『光学電子磁鉱石の事だ。これを使えば奴に攻撃が通用する……お前、魔法使えたか？』
「い、いえ。俺には……」
『じゃあ無理だ。今すぐ羽衣と共に引け』
余りにも呆気ない結果に、愁は歯を食い縛り操縦桿を強く握り締める。
当たり前だ、ここまできて魔法が使えないなら戦えないなどと、そんな事を言われても納得がいかない
「なっ……俺には、何も出来ないんですか！？」
何か、何かあるはず。そう思い甲斐斗に聞こうとするものの、甲斐斗は冷静な面持ちで愁を見つめていた。
『仕方無えだろ……それにな、俺とＥＲＲＯＲとの戦いは、まだ終わっちゃ……っ……』
いない……これからまたＥＲＲＯＲと戦い、そして勝つ。
それが甲斐斗の描いていた未来の図だった。だが現実は、そんなちっぽけな未来など知りもしない。
『……あ？』
見えない。目の前が霞み、今まで広がっていた光景がおぼろげになっていく。
『おいおいおい、おい。ンだよこりゃ』
少し慌てたものの、甲斐斗は小さな笑みを見せて目元を擦るが、それでも視界が元に戻る事はない。
段々と焦り始める、何度擦っても何度擦っても、視界は白くぼやけハッキリ見えてこない。
「甲斐斗さん……？」
甲斐斗の不振な行動に愁が声をかけるものの、甲斐斗の呼吸は更に荒く加速していく。

こんなに、こんな大事な時に、体は悲鳴を上げ、目は霞み、侵入され、少しずつ、消えていく。
甲斐斗の力、生命力、魔力が……まるで込み上げてこない。
『だ、だからどうした……俺は……負けねえ……！』
再び剣を握り締める魔神、今度こそ確実に攻撃を当てる。そう思い剣を構えてみせたものの、その魔神の姿に愁は愕然としていた。
ＥＲＲＯＲに背を向け剣を構える魔神……既に甲斐斗には、どこにＥＲＲＯＲがいるのかすらわからなかった。
これが、こんな姿が、本当に最強と言えるのか……今の甲斐斗には、何の力も感じられない。
このまま戦いが続けば、確実に魔神は、甲斐斗は――――死ぬ。
その時、二人の操縦席に神楽の声が響いた。
『――――甲斐斗！愁！今すぐ引きなさい！バリオン砲を発射するわよッ！！』
「っ！了解ッ！」
神楽の声に愁はすぐさま機体を走らせ魔神を捕まえると、全速力でＥＲＲＯＲから離れ始める。
肝心のＥＲＲＯＲの方は、離れる魔神を確認した後、遠くの方から攻撃態勢に入っている羽衣の元にまた滑り寄りはじめる。
『最大出力は撃てなくても、あのＥＲＲＯＲ一匹掻き消すぐらいの威力なら……ッ！』
エネルギーはまだ完全に集まった訳ではない、だが出力を最大に出来る程の時間の有余など1秒も無い。
羽衣の胸部に集う何千もの黒い稲妻、球形に圧縮されていくその黒き雷電を放つ空間を、目の前に迫ってきているＥＲＲＯＲ目掛けて解き放つ。
『貴方達の負けよ！消えなさい！！』
引き金は引かれた、羽衣の胸部から放たれたバリオン砲は真っ直ぐＥＲＲＯＲの元に向かって行く。
直撃すれば勝利は望みから確信へと変わる。これで今度こそ、この

戦いに決着を着けるッ！
アギトがＥＲＲＯＲのいた場所から走り去る間からもそれは見えた、バリオン砲がＥＲＲＯＲに向けられて放たれそしてＥＲＲＯＲがいとも簡単に飲み込まれていく光景を。
「よしッ！」
思わず右手で小さくガッツポーズを取る愁、見ればＥＲＲＯＲは一瞬にして飲み込まれると、周囲にあるもの全てを引き寄せて凝縮されていく。
その間にＥＲＲＯＲは何もする事が出来ない、苦しむかのように色々と蠢き逃げようとするものの、バリオン砲の前に成す術は無い。
『そう、これがデルタの力。直撃すれば最後、消し炭すら残させはしないわ』
それ程にまで神楽は羽衣の攻撃に絶対的な自信があった。それは愁も同じ、今広がっている光景を見れば勝利も確信へと変わる。
……だが、もしもこの一撃にＥＲＲＯＲが耐え抜いたらどうなるか。
それも脳裏の何処かには考えていた。
考えにくいが、万が一の事もある。最悪の場合だって想定しておかなくてはならない。
そして、それは神楽も同じ。絶対的な自信を持ちつつも、心の奥底では恐怖が微かに滲んでいる。
それでも撃ち、勝ち、勝負を決するしかない。これが最後の切り札とも言えるものなのだから――。
――バリオン砲が全て吸い込み、全て吹き飛ばす。
強烈な波動が辺りの大地を裂き、空間を捻じ曲げる程の速い勢いで衝撃波が拡散していく。
その衝撃波は羽衣、アギトにも伝わるものの。二機は決して後退することなく、ある一点を集中して見つめていた。
愁、神楽もまた息を呑みじっと見つめ続ける。そこに、『ＥＲＲＯＲ』は存在するか、しないか……ただそれだけを確認する為に。

「……終わり……ましたね」
その現実をもう一度再認識し、確認する為に愁はあえて一言言葉を漏らした。
もうそこに、あの赤い物体は、ＥＲＲＯＲは……消えてなくなっているのだから。
ＥＲＲＯＲはいない……それが確認できても神楽の緊張が未だに体を硬直させている、それを紛らわせようとするかのように震える手でポケットから煙草を取り出すと、火を付け吸い始める。
『ええ、終わったわね……』
終了。
戦いは終わった、それは勿論ＥＲＲＯＲの敗北、人類の勝利という形で。
多くの犠牲を払いそれでもＥＲＲＯＲに勝つ事が出来た、人類は掴みつつある、平和な世界を。
そうやって人間は勝手にそう思い込んだ。
勝手に戦いは終わったと判断して。
勝手に勝ったと判断して。
勝手に安心して。
……勝手に絶望へと落ちる。
戦き、思考が停止して、現実との区別がつかなくなる。
目の前の光景に言葉も出ない、抵抗する気すら起こらない。

――――バリオン砲の直撃後……一滴の赤い液体が地上に落ちた。
その瞬間、瞬く間に液体は膨れ上がり形を整えていく、たった一滴の液体が、百メートルを軽く超える程の大きさに。
そして気づく、今までの丸い形ではない、また新たな形にＥＲＲＯＲが変形している事に。
その見覚えのある赤い液体、『ＥＲＲＯＲ』の姿、形は。人類滅亡に相応しいものだった。
『赤い羽衣』液体化してあるＥＲＲＯＲが綺麗にその機体の姿を真

似て作り完成させる。
そして赤い羽衣の両腕を前方に突き出すと、胸部から出てきた赤い剣、その剣先に何百、何千もの稲妻が走り始めた。
その行動が何を意味するか……分かったにも関わらず、もうどうする事もできない。
『嘘よおぉッ！！ありえないッ！ありえないぃッ！！』
神楽が加えていた煙草は簡単に足元に落ちると、目の前の機器に両腕を何度も振り下ろし必死に叫び始める。もう神楽には、ＥＲＲＯＲの意味がわからなかった。
吹き飛んだはず、消し飛んだはず、バリオン砲は直撃したのに、奴は今、生きている。
しかもそれだけではない。何故あのＥＲＲＯＲが、緻密に計算され、最高の技術力で作り上げたこの羽衣と、全く同じ事をしようとしているのか。
現実で起こりえるのだろうか、こんな事が……あの赤い羽衣の構え、どう見てもバリオン砲の発射準備に取り掛かっているとしか見えない。
それもハッタリやフェイクなどでもなく、正真正銘のバリオン砲を――。
「逃げてください神楽さん！早くッ！！」
愁が叫ぶものの、無駄だった。この距離からではもうどうする事も出来ない。
それなら今バリオン砲の発射準備を進めているあのＥＲＲＯＲが作り上げた羽衣に直接攻撃を与える必要があった。
『行きなさい！フェアリー！！』
当然、神楽の乗る羽衣は攻撃の手を緩めようとしない。とりあえず、攻撃してＥＲＲＯＲの攻撃を阻止する必要がある。
羽衣の後部から放たれる無数のフェアリーは、一斉に羽衣の形をしたＥＲＲＯＲの元へ向かいレーザー攻撃を仕掛けていく。
『そんな見せ掛けの紛い物、今すぐ破壊してあげるわよッ！』

フェアリーは一瞬にしてＥＲＲＯＲを取り囲み攻撃を放つ。
もう回避は不可能、全てのレーザーがＥＲＲＯＲに直撃する……はずだった。
当たらない、フェアリーから放たれた青いレーザーは全てＥＲＲＯＲに当たる前に曲線を描き軌道が逸れていく。
それは紛れも無く、羽衣本来の力だった。その本来の力を今、ＥＲＲＯＲがいとも簡単に発動し攻撃を全て回避する。
それでも神楽は攻撃を緩めようとしない、羽衣本体からの攻撃、フェアリーの攻撃、次々に攻撃を放ちＥＲＲＯＲを止めようとするものの、全ての攻撃は掻き消され、軌道を曲げられ、ＥＲＲＯＲ本体には何一つ攻撃が当たらない。
『何でよ……何で当たらないの！？どうして！！』
既に神楽の思考はまともじゃない、混乱し思うように考える事が出来なかった。
無理もない、ＮＦの最高傑作の機体が、ほんの数秒でＥＲＲＯＲに再現されたのだ、能力も、性能も、全て。
信じられる訳がない、そんな事が出来るはず無い……。
もうどうしていいかわからない、焦りと困惑に、気づけば神楽の目から涙が零れ落ちはじめていた。
すると、ＥＲＲＯＲで作られた赤い羽衣の元へ拳を構えながら走り寄るアギト、例えダメージを与える事が出来なくとも、バリオン砲の発射を止められる事は可能なはずだった……その拳が、羽衣に触れられればの話だが。
今ＥＲＲＯＲは羽衣の同じ能力が使える。つまりアギトが幾ら近づこうと接近しても、強力な磁力によりアギトの機体は羽衣に近づけず、拳を当てる事が出来ない。
それでもアギトは近づこうと機体を進めようとする、諦めない、諦めてたまるか。ここまで来て、そんな簡単に終わらされる訳にはいかない。
たった一人、愁だけは吼え続ける。どんなに絶望的な状況に立たさ

れようとも決して諦めない。
その思いが通じたのか、愁の乗るアギトは本来近づけないはずの距離にまで足を進めていた。
一歩ずつ、確実に……だがアギトの頑丈な装甲が次々に剥がれ吹き飛ばされていく、いつ機体がバラバラに散ってもおかしくない状況。
それでも愁の闘志が消える事は無かった……。
赤い羽衣が、バリオン砲を発射しようとしたまでは。
「やめろぉおおおおおおおおおおおッ！！」
全て消え、全て終わる。この一撃を放たれたら最後、羽衣に乗っている人間は皆死ぬ。
神楽も赤城も、生き残った兵士達、仲間、ミシェル……皆、消える。
――が、その時だった。青空に広がる一つの太陽から、一体の機体が加速しながら落ちてくると、その機体はＥＲＲＯＲの力で軌道が反れる事無く赤い羽衣の胸部に現れた。
その機体に愁は見覚えがあった、魔神ではない、穴の開いた盾、折れた片手剣を握り締め、そして今、折れた剣で羽衣の胸部を突き刺す。
「アストロス・ナイト……ゼスト、さん……？」
赤い羽衣の胸部に突き刺さった剣、バリオン砲は発射寸前までエネルギーを溜めていたが、剣が刺さった事によりけたたましい量の電気を放電し始めると、空間を歪める程の爆発と同時に眩い閃光がその場にいる者達を包み込んだ。
――「……ここは、どこだ……？」
真っ白な空間で一人、愁は立ち尽くしていた。
思うように頭が回らない、たしかアギトに乗ってＥＲＲＯＲと戦っていたはず……。
まさかまたＥＲＲＯＲが自分に幻覚を見せてきているのではないか、ふとそう思ったものの、何故かこの空間にいると心が安らいでいく

ような感じがする。
「まさか、死んだのか？俺……」
バリオン砲の誤爆により爆発に飲み込まれたんだ、死んでいてもおかしくない。
白い空間にいる理由はわからないが、愁は既に己の死を覚悟しており、焦る気持ちは消えていた。
「ばーか、死んでねーよ！」
すると、突如誰かに背中を押される愁。その声を聞いてすかさず振り返ってみると、そこには腕を組みこちらを見つめる葵が立っていた。
「葵！？」
「お前は生きてる、諦めんなっ！」
咄嗟に葵に手を伸ばす愁、だが次に瞬きした瞬間、目蓋を開けばもうそこに葵の姿は無かった。
「っ！……」
死んだはずの葵がたしかに目の前にいたはずだった、それに声だって……。
「愁」
今度は左からエコの声が聞こえてきた、すぐに顔を向けると、そこには先程の葵と同じように澄んだ目をしたエコが立っており、愁をじっと見つめていた。
「エコ！！」
今度こそ……そう思って愁はエコに手を伸ばす、するとエコもまた手を伸ばし、二人の手は簡単に触れ合えた。
「大丈夫、だからね」
暖かい手の温もり。たしかにエコの手に触れていたけど、エコの一言が聞こえた時にはもうエコの姿は消えていた。
「魅剣、ＥＲＲＯＲが……怖いか？」
懐かしい声、それもずっと前に聞いた声、ラティスの声が聞こえてくる。

「ラティスさん……いえ、恐れていません」
「それで良い。お前はもう、迷わないのだろ？……それなら、信じろ」
「信じる……？」
ラティスの言葉に、愁は自分の力を信じればいいのだろうかと思った。
だけど自分が信じた力は今、ＥＲＲＯＲに何も通用しない。そこには無意味で無力な自分しかいなかった。
「いいえ、そんな事はありませんよ」
優しい声でシャイラが愁の側に立っている。もう不思議に思いはしない、愁は自分の本音を淡々と語り始める。
「でもシャイラさん、俺はあのＥＲＲＯＲに勝てなかった……結局俺は、誰も守れていない……」
「愁様……私は守りたい人を最後まで守れませんでした。もう私には、何も出来ない……けれど貴方は違う、貴方にはまだ守る力が、命があります」
愁は幾度と無くその可能性を自らの力で掴もうとしてきた、しかし全て手からすり抜けていく現実に、薄々と心の中にある希望が薄れていくような気がしてきた。
「貴方は生きている、だから守れるのです。それを忘れないでください」
「待ってください！生きていれば守れる……それなら今俺は、何を守れば良いんですか！？」
シャイラに手を伸ばす愁、しかしもうそこにシャイラは立っておらず、そこには怒ったような表情をしたアリスが立っていた。
「約束に決まってるでしょ！」
情け無い愁を見て怒っているのだろうか、アリスは不満気にそう言うと愁は手を下ろし何かに気づかされたかのように目を見開いていた。
「約束……」

「そう、約束。……大丈夫よ、皆ついているんだから！だから……ね、皆で守ろうよ、愁」
優しそうな笑みを薄らと浮かべアリスが微笑んでくれる。すると愁も自然に笑みが零れた。
久しぶりに笑ったような気がした……愁がふとそう思うと、目の前には鋭い目付きで愁を見つめるゼストが立っている。
「ゼストさん、俺は――」
「何も言うな」
多く語る必要は無い、今までの事を思い出していけば、何れにせよ辿り着くはず。
「お前は今までその目で見て決断してきたはずだ……今もまた、一つの決断をするだけのこと」
それだけ言うと、ゼストは愁に背を向け一言も喋らない。
それでもゼストの思いは愁に伝わっていた、段々と体に力が入ってくる、先程まで諦めかけていた自分は、もういない。
背を向けていたゼストは、何も言わないままた振り向くと、ゆっくりと愁に近づいてくる。
そしてゼストは自分の拳をそっと愁の胸元に当てると、最後に一言だけ呟いた。
「良い拳だったぞ」
その言葉を聞いて、愁は微かにゼストが笑ったような気がした。
そんな気がしただけだ、もうゼストは目の前にいない、また自分だけが白い空間に一人だけ立っている。
「皆が、いる」
自分は……一人じゃなかった……。
見える、愁には見える、この白い空間に、大勢の兵士達が自分を見つめてくれている、応援してくれている。
聞こえる、皆の声が、言葉がしっかり耳に届いてくる、そこには先程まで自分に声をかけてくれていた葵にエコ、ラティスにシャイラ、アリス、そしてゼストも立っていた。

胸が熱い、ふと俯き自分の胸元を見てみると、優しく、そして強い光の塊が自分の胸の前に出ていた。
それを手にとってみると更に感じてくる。ＳＶの、皆の力の鼓動が。
「愁、それが貴方のレジスタルですよ」
聞こえてきた声に愁は目を見開くと、すぐに顔を上げてみせる。
皆の一番前、そして自分に一番近い距離に、フィリオは立っていた。
「それは心、それは意思、それは力。皆のレジスタルを、合わせましょう」
そう言ってフィリオは愁に近づいてくると、今愁が握り締めているレジスタルにそっと手を翳した。
「私も愁と共に行きます」
感じる、伝わってくる。フィリオの暖かさが、自分の中に入ってくる。
心が満たされていく、熱い思い、優しい思い、信じる思いが、全身を漲らせる。
「ありが……とう……！」
愁はそう言って目の前にいるフィリオを強く抱き締める、目の前のフィリオは消えず、抱き締めてくれる愁を抱き締め返す。
そしてフィリオと愁が同時に腕を解くと、今度は愁は皆の前に立ち叫んだ。
「ありがとう！みんな、みんな……ありがとう……ッ！」
涙が止まらない、目の前にいる皆は優しそうに微笑み愁を見つめ、信じてくれている。
すると葵が勢い良く拳を前に突き出すと、親指を立たせ叫び返した。
「勝てよ！愁ッ！！」
涙を流していたって、愁は笑みを浮かべその葵の言葉に対して自分もまた拳を突き出し親指を出す。
その葵と愁の表情は――最高の笑顔だった。
――バリオン砲の誤爆により周囲は一変していた、爆発の衝撃で

羽衣は地に落ち、所々間接から火花を散らしている。
「どうなったの……ＥＲＲＯＲは、消え、た……？」
砂塵や煙は爆発と共に全て吹き飛ばされており、神楽の知りたい結果はすぐにでも目視で確認できた。
もう何も残されていない、負傷した羽衣で勝つのは不可能、それにもう、神楽の心に限界が来ていた。
「生ぎ……てる……っ……う゛ぅ……」
『赤い羽衣』ＥＲＲＯＲは、無傷でそこに立っていた。
そして何事も無かったかのように落ち着いた様子でＥＲＲＯＲは再びバリオン砲の発射に準備に取り掛かり始めた。
涙でよく見えないものの神楽にはわかる。今度こそ……殺される。
「伊達君、ごめん……赤城……ごめんね……」
信じてきたもの、意思、約束などＥＲＲＯＲの前では何事もなく消される。
悔しさと切なさで涙を流しながら神楽は謝りつづけた、ここで終わりになって、ごめん、と。
もうアギトも、魔神の姿も無い。皆消えた、皆死んだ、そして自分達ももうすぐ死んで消える……。
が、神楽のその不安は一瞬にして消え去ってしまった。
風が通り過ぎていったかのように今抱いている感情が流されていったのだ。
「えっ？」
不安じゃない、死ぬとも思えない、負けるとも思えない。
逆だ、勝つ、この戦い、必ず勝てる。
「でも、誰が……？」
そう、だれが勝てると言うのか。ＥＬＢもバリオン砲も通用しないあの化物に、誰が勝てるのか？
だから答えを知る為に、神楽は眼鏡を外し涙を拭う。
そして見た、その答えが、何なのかを。

――アストロス・アギト。
宙に浮き、右腕を空へと高らかに上げ、その姿を露にしている。
すると大地から次々に光る鉱石のような物が次々に浮かび上がってくると、まるでアギトに引き寄せられるかのように集っていく。
レジスタル。ここで命を失った兵士達のレジスタルが今、具現化して現れている。
ここで命を失った葵、エコ、アリス、シャイラ、ゼストのレジスタルもまた、アギトに元へ行く。
ラティスのレジスタルは既にアギトの中に存在している、フィリオも今、愁と共にいる。
膨大な数のレジスタルだった、埋もれていたはずの物も全て、アギトの元へと向かっていくのだから。
そして集められた全てのレジスタルがアギトの右腕に集うと、大きく右腕の拳を広げた。
「皆が……揃ったッ！！ぅぁあああああああああ――――――――ッ！！！」
愁の咆哮と共に広がる大地、漂う空気、そしてこの大空を震撼させる。
その大地、大空には超巨大な魔法陣が浮かび上がり光を発しながら互いに引かれあうと、アギトの右手に集ったレジスタルが共鳴するかのように光を放ちはじめる。
アギトを囲むように増え続ける魔法陣、それも複雑で高度なものが、互いに重なり合い、更に光の鼓動を加速させていく。
ＥＲＲＯＲがそれを止めようとはしなかった、まるでこれから起きる事に興味があるかのように、赤い羽衣はバリオン砲の発射の準備をしつつアギトを見つめたまま動かない。
気づけば、大地と大空に浮かび上がった魔法陣は既にアギトの足先と頭上にまで来ている。
そして二つの陣が重なった瞬間、アギトの右手に集っていたレジスタルが太陽の如く強烈な光を放った後、アギトの右手から跡形も無

く消えてしまった。
……が、決して消滅した訳ではない。あの集ったレジスタルは今、愁と、アギトと共にいる。
その光景の一部始終を見ていた神楽は目を見開いたままその場を見つめ続けていた。
「あれが……アギトだって言うの……？」
似たような現象を経験した事がる、前々回のＥＤＰの時、甲斐斗の乗る機体が覚醒したあの時のように今、宙に浮いていたはずの時のアストロス・アギトはもういない。
そこにいるのは……覚醒し、本当の力を持つ者の姿……。

――真・アストロス・アギト。
先程までと違い、アギトの形状は一変していた。
機体の装甲には所々レジスタルが埋め込まれ、機体がやや大きくなっている。
闘神、覇王……とでも言うのだろうか、その姿は鬼神や魔神などとは決して違う属性を感じる。
右腕の砕く拳と、左腕の貫く拳の形状も変化しており、その機体からは只ならぬ闘志、そして覇気を感じる。
だがその時だった、赤い羽衣が溜めていたバリオン砲の照準をアギトに合わせると、躊躇い無くバリオン砲を放った。
するとアギトは、右腕をゆっくりと前方に突き出すだけで一向に避けようとしない。
「何してるの!?早く逃げなさいッ！」
神楽が咄嗟に呼びかけるものの、愁の乗るアギトは微動だにせずただただ接近してくるバリオン砲を見つめている。
愁が避けないには理由がある、アレだけ驚異的な力を振るうＥＲＲＯＲが怖くない、恐れていないのだ。
信じている、自分を、仲間達を、アギトを。
次の瞬間、アギトの目の前にまで来ていたバリオン砲がアギトの拳

に触れた瞬間、一瞬にして砕け散ると、何の力も発動されないまま無となり消えていく。
「……は？」
何事も無かったかのようにアギトは立っていた、だがその現実に頭の整理がつかない神楽。
普通ならバリオン砲の力が発動し全ての物を吸い込み巨大な爆発を起こすはずのバリオン砲が、何事も無く消えていた。
圧縮された巨大なエネルギー、それが解放されることなく無となり消えた事事態、この世の科学では説明のしようがない。
常識を超越した存在、真・アストロス・アギト。その圧倒的な力は今の光景を見ただけでわかる。
しかしＥＲＲＯＲは何事も無かったかのように攻撃態勢に入ると、今度は背部から無数の赤いフェアリーを生み出し始める。
そして赤い羽衣がもう一度バリオン砲の発射準備に取り掛かろうとした時、既にアギトはＥＲＲＯＲの視界から消えていた。
目標を確認できず周囲を見渡そうとするＥＲＲＯＲ、だがその必要は全く無い。
既にアギトは赤い羽衣の懐に入り込み、強力な一撃を与える為に拳を構えていたのだから。
「み……見えなかった……」
神楽の目に、アギトが一瞬で赤い羽衣の懐に入っていることなど見えない。
気づけばアギトはその場から消えており、そしてふとＥＲＲＯＲをみればそこに立っていたのだ。
この速さ、アステルの乗っていたあの黒いリバインにも引けを取らない。
そして放たれるアギトの『砕く拳』、その強力な一撃は赤い羽衣を軽々と殴り飛ばすと、周りに漂っていたフェアリーが全て砕かれ塵となっていく。
殴ったのはＥＲＲＯＲだけではない、あの空間そのものを殴り衝撃

を与えたのだ、その証拠に拳の先にあった雲でさえ穴を開け吹き飛ばされている。
だがＥＲＲＯＲ本体は、この一撃に耐えて見せた。
殴り倒され宙に浮いているものの、赤い羽衣の形をしていたＥＲＲＯＲはまた液化し球体のような形になると、アギトに覆いかぶさるように上から落ちてくる。
するとアギトはまた拳を構えると、今度は左腕にある『貫く拳』を高らかに振り上げた。
触れていないにも関わらず、その衝撃波でＥＲＲＯＲに巨大な空洞が作られ液体が弾け飛び散っていく。
アギトの攻撃はたしかに強力でＥＲＲＯＲに触れる事が出来る、しかしＥＲＲＯＲに物理攻撃が通用しているのかがわからない。
ＥＲＲＯＲは穴を開けたままアギトの元に落ちてくると、まるで筒の中にアギトを閉じ込めたかのように形を変えていく。
筒の中に作られていく夥しい程の刃の数、歯車のような刃が何百枚も重なり、電動の鋸（のこぎり）のように一斉に回転し始める。
刃が次々にアギトの装甲に触れていくと、その鳴り響く耳障りな音に神楽も何が起きているのかは理解できた……が、それも束の間。
アギトの身動きを封じていたはずのＥＲＲＯＲは一瞬にして砕け散り辺りに四散していくと、先程まで攻撃を受けていたはずのアギトは平然と立ち尽くしていた。
四散したＥＲＲＯＲの破片、勿論再び集合し一つの塊になっていくと、今度は赤い金槌の形となり、再びアギトに襲い掛かる。
「ＥＲＲＯＲ……もう無駄だ」
ＥＲＲＯＲがもし優秀で知能が高いならわかるはずだった、この戦い、もうＥＲＲＯＲに勝ち目のない事が。
地面を強く蹴りアギトからＥＲＲＯＲの元に向かうと、拳を一撃振るうだけでまたＥＲＲＯＲはバラバラに散り姿が崩れていく。
すると、再び再生したＥＲＲＯＲがまたも見覚えのある物に変形しはじめる。

ＬＲＢを握り締める機体、それは普段赤城が乗っているリバインの形だった。
が、問答無用。変形した途端にアギトの拳がリバインの胸部を殴り飛ばす。
その時、ＥＲＲＯＲを殴り飛ばしたはずなのに、何故か赤城の悲鳴が聞こえてきた。
そしてまたＥＲＲＯＲは形を変え、今度は我雲となりアギトに襲い掛かる。
これもまたアギトは殴り機体を粉砕させると、先程とは違う、今度は彩野の悲鳴が聞こえてくる。
それから何度もＥＲＲＯＲは変形を繰り返した、無花果、白義、ハルバード、神威、エンドミル、アストロス、ライダー、ナイト、大和……だが、アギトの拳が躊躇う事は決してない。
ＥＲＲＯＲが生み出し、勝手に作り上げた機体に、自分の精神を揺さぶるような攻撃をしてこようとも、今の愁にそんなもの通用しない。
数々の変形と再生を繰り返してきたＥＲＲＯＲ、砕け散り、またも再生を試みようとした時、思うように再生が行われず、それ所か機体に変形する事すらできないでいた。
あれだけ蠢いていたはずのＥＲＲＯＲもまるで疲れ果て力を失っていくかのように弱々しくなり、何とか時間をかけて変形してみせた機体はあの『魔神』の姿だった。
「まさか……」
神楽の脳裏にまた一回目のＥＤＰの時の光景が蘇る。
魔神の姿をしたＥＲＲＯＲはゆっくりと体勢を立て直すと、前方にいるアギトに向けて右腕を突き出す。
魔神の右手に現れる無数の魔方陣、ＥＲＲＯＲの突き出した右手には黒い光が集まり雷光を纏っていく。
「ＥＲＲＯＲが……魔法を……？」
間違いない、あの構えは以前甲斐斗の乗る機体が魔法を発動した時

のものと同じ。
一瞬にして数千、数万のＥＲＲＯＲを掻き消し、神の右腕すら吹き飛ばせる程の強力な魔法。
それを今、ＥＲＲＯＲが発動しようとしている。
ただ地を這い蹲り人々を襲うだけの化物がこれだけの力を持っている、これがＥＲＲＯＲの進化した結果なのか？これ程までにＥＲＲＯＲという存在は、計り知れない存在なのか……？
ＥＲＲＯＲの放つ魔法に飲み込まれれば羽衣だろうと一瞬にして塵と変わり消えるだろう、だが今更回避する事も出来ず、抵抗する事も出来ない。
だとそれば頼るしかなかった。今、自分達の目の前に立ち、その拳を振り上げる男を。
アギトが天へと右腕を高らかに伸ばすと、拳を中心に巨大な光の魔方陣が描かれると、次々に拳の周りに陣が描かれ、その陣から放たれる光がアギトの右腕を集まっていく。そしてそれは一本の光で形成されていく巨大な右腕を作り上げていった。
天を貫き、雲を散らす程巨大で神々しい拳。
「ＥＲＲＯＲ、俺は神でもなければ最強でもない。たった一人の人間なんだ」
気づけば愁の目からは涙が流れている、それでも構うことなく愁はＥＲＲＯＲを見つめた。
アギト拳からは眩い光が放たれており、その光は周囲を全て飲み込み一瞬にして白く輝く空間へと変貌させる。
真っ白な空間だった、青空や大地、何の物もない、真っ白な世界。
羽衣に乗る神楽は手で光を遮りながら必死にアギトの後ろ姿を見ていたが、次第に操縦席までもが白い光に飲み込まれていく。
「でもね、人間は一人じゃない。皆がいる」
そして魔神の姿をしたＥＲＲＯＲもまた光に飲み込まれようとした時、魔神は無言のまま更に勢い良く右腕を突き出すと、辺りの白き光を一瞬にして覆い隠し飲み込む程の巨大な黒き波動を放った。

「だから俺は……戦える！」
愁はそう言うとアギトが黄金の拳を構えてみせた、目の前からは巨大な黒き光が向かってくるが、愁は冷静な面持ちで見つめ、拳を振り下ろす。
巨大な拳は軽々とＥＲＲＯＲへと振り下ろされる、だがＥＲＲＯＲの放つ魔法がアギトの拳を触れると、その覆いかぶさるように振り下ろされた拳を弾き返そうとする。
が、アギトの拳は決して揺るがない。ＥＲＲＯＲの姿をした魔神の足元に地面に亀裂が走ると、両足が徐々に地中へと埋まっていく。
「だから俺は、こんなにも強くなれたッ！」
だがＥＲＲＯＲも抵抗を見せ始める、右腕から放つ強力な魔法でアギトの振り下ろされた巨大な拳を徐々に鈍らせ、止めに入ろうとしていた。
魔神の放つ波動、アギトの振り下ろす拳は互いにぶつかりあい、白と黒の空間が極限まで歪められていく。
「俺の強さは一人じゃないこと、それが俺とお前の差だ」
その時だった……ついにＥＲＲＯＲが限界に達した。
右腕から放っていた魔法が突如消え、ＥＲＲＯＲは力無くその場に跪いてしまう。
そうなればアギトの拳がＥＲＲＯＲに直撃するはずだった……が、何故か、先程まで迫ってきていたはずの拳が無い、それ所がアギトの姿も見えず、辺りは白い空間から一変して先程の荒野が広がる景色へと変わっていた。
まさか……アギトにも限界が来ていた……？
互いの力は相殺され、また元の状に戻ったのか？それならまだＥＲＲＯＲに勝機はあった。
だが現実は違う。ＥＲＲＯＲ、生命の危機から脱出した訳でもなければ、戦いに勝った訳でもない。
魔神の姿をしたままのＥＲＲＯＲは、跪きながらもふと頭上を見上げた。

眩い光、太陽が自分の下に落ちてくるかのような光景を見てはじめてＥＲＲＯＲは理解できた。
高らかに飛翔したアギトが、ＥＲＲＯＲの上空から一直線に拳を振り下ろした状態で向かってきている事に。
「奴の全てを砕き散らせぇえええッ！アギトォォオオオオオオオオオオオッ！！」
ＥＲＲＯＲに光の鉄槌が下ろされた。拳に触れたＥＲＲＯＲの肉体に巨大な亀裂が次々に走ると、白い光りのような塵となり跡形も無く消えていく。
もはや再生能力など無意味。砕かれ、散っていくＥＲＲＯＲに成す術は無い。
あれだけ人間を殺し、何度も生き返ってきた最悪の生物も、終わりは呆気ないものだった――――。

――全てを終えた後、アギトはゆっくりと大地に下りて着地した。
拳が触れたはずの大地には、亀裂所か傷一つ入っておらず、アギトの右腕にはもう先程の光りは無い。
ただそこには真の姿をしたアギトが立っているだけ、そしてこの目の前に広がる大地と大空を見て、愁は疲れた表情を見せながらも涙を流しながら口元だけ笑って見せた。
「ＥＤＰ、終了……」
脳裏に浮かぶ皆との思い出……もう失った笑顔を取り戻す事はできない、見る事もできない。
愁は俯き目から涙が零れ落ちるが、それでも顔を上げると愁は涙を拭うことはなく広大な青空を見つめ続けた――――。

第１０６話　鬼畜、天使

――ＮＦ・ＳＶが開始したＥＤＰは見事成功し、ＥＲＲＯＲの拠点である一つの巣を破壊する事に成功した。
戦闘が終わった大地には何も残っておらず、傷ついた機体と共に東部軍事基地へと生き残った者達は帰還する。
そして東部軍事基地に到着した頃には既に日が暮れており、羽衣からは生き残った兵士達が降りてくるものの、疲れて果ててしまっており皆その辺の壁にもたれ掛かり床に座り込んでいた。
ロアもまた浮かない顔で羽衣から降りると、龍もまたゆっくりと降りてロアの側に近寄っていく。
そして赤城もまた、ミシェルを抱かかえながら羽衣から降りてくると、それを待っていたかのように既に機体から降りていた神楽が近づいてくる。
「神楽……終わったんだな」
先に話しかけたのは赤城だった。ＥＤＰの終了後聞かされた神楽の話、それを聞いて初めて外の出来事が理解できた。
「ええ。……でも、余りにも犠牲が多すぎたわね……」
二つの組織の全戦力ともいえるものが、今ではたった十数人程しか残っていない。
あの戦場で起きていたのは、本当に戦いと言えるものだったのだろうか、今ならそれも疑問に思えてきてしまう。
「でも私は嬉しいわよ、赤ちゃんが生きているんだもの」
そう言うと神楽はそっと手を伸ばし赤城の頬に触れると、今度は微笑みかけながらミシェルの方を向いた。
「勿論ミシェルちゃんもね」
優しくミシェルの頭を撫でる神楽に、ミシェルもまた笑みを見せると嬉しそうに頭を撫でられる。
その時、格納庫に入ってきたアストロス・アギトの胸部のハッチが

開くと、中から魅剣愁が降りてきた。
「っ……」
愁の姿を見て咄嗟に目を逸らしてしまう二人。今この中で一番辛い人間のはずだからだ。
数多くのＳＶの兵士達が死に、シャイラとアリスを守れず、葵とエコまで救えなかった。
残されたＳＶ親衛隊は彼一人、いや、もう親衛隊でもなんでもない、ただの一人の青年だ。
「赤城さん！良かった、無事だったんですね。それにミシェルも」
赤城とミシェルの姿を見て安心した様子の愁、その表情に辛そうな感情は見えなかった。
「ああ、何とかな……。愁、お前こそ、大丈夫か……？お前が地下に行っている間に、地上にいた皆は――」
「大丈夫です、皆はここにいます」
心配そうな赤城をよそに、愁は笑みを見せると自分の後方に立っているアギトに視線を向けた。
「肉体は消えても、皆の思いはここにある……だから大丈夫です、心配はいりません」
愁は無理などしてもいなければ、その場しのぎの事を言っているわけでもない。
本心だった、そして実際、愁の機体には皆が存在している。
赤城もその外見の変化したアギトを見つめ、機体の各場所に埋め込まれたレジスタルを見ていた。
すると今度は神楽が赤城の方に向くと、二人に話し始める。
「赤ちゃん、前に甲斐斗が言ってたじゃない。レジスタルは人の中にある物って、きっと何らかの力が働いて命を失った人達をレジスタルに変えたのよ。そしてそれが今、アギトの中にある……」
「魔法か……愁、お前は魔法が使えるのか……？」
「魔法……いえ、それはよくわかりません。ですが今の俺にはレジスタルがあります」

アギトを見つめたまま愁は言葉を続ける、それにつられて赤城もまたアギトの方に目を向けた。
「感じます、胸の奥底から込み上げてくる力の感覚。とても暖かい」
そう言って笑顔で赤城の方に振り向くと、愁は疲れ果てている兵士達の元に向かおうとした時、１機の機体が格納庫に荒々しく入ってきた。
機体、それは甲斐斗の乗る魔神だった。魔神は格納庫に入った途端すぐに立ち止まり、胸部のハッチを開けると、中から甲斐斗が現れる。
「出て来いアビアぁッ！」
……今の甲斐斗に、声を掛けられる雰囲気でないことはその場にいた者ならすぐにわかった。
明らかに焦り、苛立ちを感じる。赤城や神楽の事など目もくれず、必死に辺りを見渡しアビアを探している。
「なーにー？」
すると、羽衣から最後に出てきたアビアが姿を見せると。甲斐斗は機体の胸部に立ったまま話し始める。
「俺は帰ってきた。今すぐ真実を教えろ！神の事も、魔法の事もな、なんで魔法が使える奴がいたりするんだ？全部教えろッ！！」
アビアを睨み返答を待つ甲斐斗、赤城は無意識にミシェルの手を強く握ると、ミシェルはそれに反応して心配そうに赤城の方を見上げていた。
いつものように笑みを見せながらアビアは羽衣から降りてくると、甲斐斗も胸部から飛び降り軽々と地面へ着地する。
殺気をも漂わせる甲斐斗、赤城や神楽の事など眼中に無く、アビアをただ一人を睨みつけたまま視線を逸らさない。
「アビアはね、最初知らなかったんだー」
「あ？……何をだ？」
アビアは落ち着いた様子で歩き始めると、赤城達と甲斐斗のいる間まで歩き足を止め甲斐斗に背を向けた。

「甲斐斗が、カイトだって事」
そう言いながらアビアは僅かに舌を出し自分の唇を舐めると、後ろに振り返りいつもの笑顔を見せる。そのアビアの言葉に、が甲斐斗は眉をひそめアビアを睨んだ。
「お前、俺が何者なのか、知ってるのか……？」
「今はねー。最初はただのアルトニアエデンの人と思ってたけど、色々見せてもらったもん……でも、まさかカイトが……んふふ。複雑だね」
最後の方は呟くように言うと、一人でまた笑みを浮かべ笑ってみせるアビア。
「色々ねぇ……まぁ、今はそんなのどうでもいいんだよ。それより教えろ、この世界について」
御託は良い、甲斐斗は自分の中にあるもどかしい気持ちを早く晴らしたくて苛立っている。
「じゃーまず、どうして『今』この世界では魔法が使えないか教えてあげる」
後ろに手を組み甲斐斗の方を向くアビア、そして甲斐斗に微笑みかけると、首を少し傾けてみせた。
「魔法を使うには何が必要でしょーか？」
「魔力、つまりレジスタルだな。それがどうした？」
質問を質問で返すアビアだったが、甲斐斗は何の躊躇いも無く言ってみせる。
「それがないだけだよ」
そんな甲斐斗の質問に呆気なく、そして簡単に返事するアビア。
「ふざけんじゃねえぞ……」
一瞬場の空気が硬直したが、甲斐斗は納得のいかない表情を浮かべ再びアビアを睨みつける。
「ふざけてないよ？魔法が使えた人は、レジスタルがちょびっと体内に残ってたからだもん」
アビアの言葉を甲斐斗は簡単に信じはしない。しかしここでアビア

が本当に嘘を言っているのだろうか……それもまた納得ができなかった。
「ＳＶは魔力を制限されてるって思ってたみたいだけど。それも間違いじゃないからねー結果的に使用量は制限されてたもんなんだし」
「使用量に制限っておい、魔力は普通回復するもんだろ」
「所が～この世界でレジスタルは回復しませーん。消費すれば消費しただけ消えてなくなるの、無いのに無理して使うと簡単に死んじゃうのは甲斐斗も知ってるよね？」
「それじゃあ、魔力さえあれば魔法が使えるのか？」
「使えるよ？テトが使ってたのがしょーこ！」
たしかにテトは平然と魔法を使っていた、しかし魔力が回復しないとなればテトがどれだけの魔力を持った実力者なのかがよくわかる。
「回復しないのはアビアにもわからない。一番自然なのわ神の仕業って考えることなんだけどねー」
「あ、でも甲斐斗って第１ＭＧの力で魔法が使えないよね……ね、なんで第１ＭＧがいると甲斐斗が魔法使えないか知ってる？」
「ミシェルが俺の力を抑えている理由？たしかそれは、神が俺の力を抑えるために送り込んで……」
「アビア言ったよね？別に神が第１ＭＧを送り込んだ訳じゃない、第１ＭＧが逃げてきただけって。神は甲斐斗の力を抑えようとして第１ＭＧを解放した訳じゃないんだよ？」
「あ、ああ。そう言っていたな……」
甲斐斗の疑念を晴らす答えが少しずつ近づいてくる。
神は第１ＭＧが甲斐斗の力を抑えている事を知っていたのだろうか……いや、そもそも何故第１ＭＧの力で甲斐斗の力を抑えられているのかもわからない。
テトは言っていた、この世の秩序を守る為に強力すぎる魔力を持つ甲斐斗の力を抑える役割が、第１ＭＧなのだと。しかしこれが偽りとしたら……？
「じゃあ甲斐斗の魔法はどうして使えないのか。とっても簡単なこ

と！」
そう言ってアビアはミシェルを指差すと、甲斐斗の視線も自然に指先の方に向いた。
「第１ＭＧ……ううん、『ミシェル』の意思で、カイトの力を抑えてるんだよ」

――「……は？」
数秒の間が開いた後、慌てた様子で甲斐斗が声をあげる。
アビアの言葉の意味が理解できず、何度もアビアの発した言葉が脳内を駆け巡る。
第１ＭＧの意思、つまりそれはミシェル本人の意思で甲斐斗の力を抑えている事になる。
「あ、いや、おいまて！なんでミシェルが俺の力を抑える！？おかしいだろ！！」
意味がわからない。もしミシェルにそれだけの力があったとしても、何故ミシェルは甲斐斗の力を抑える必要があるのか。
ミシェルが危険な時はいつも命を懸けて甲斐斗が守ってきた、それに今までこの世界を一緒に過ごしてきた仲。信頼だって厚くお互いがお互いを必要としていたはず。
傷ついた甲斐斗にミシェルは優しく微笑んでくれる、そして自分の事を純粋に見てきているものだと、甲斐斗は信じていたが……。
「おかしい？そんなことないよ、凶悪で危険な力を封じたいって第１ＭＧが思ってるだけだもん」
アビアの話は構わず続けられていく、甲斐斗は愕然としたまま信じられない様子で話を聞いていた。
目を見開き、固まったまま赤城の後ろに隠れるミシェルを見つめ続ける。
「え……って、ことは……ミシェルが、自分の意思で俺の力を抑えているだけなのか？」
「うん、そだよ」

たった、それだけのことだったのか。
今まで魔法が使えず散々苦労してきていた、どうやって力を取り戻し、どうすれば過去に戻れるのか。
この世界に来て長い日々を過ごしてきたが、まさか、そんな簡単で、単純な事で魔法が使えるようになるなんて、甲斐斗は思ってもいなかった。
「じゃ、じゃあ、今からでも、ミシェルが俺に力を使わせてくれたら、俺はまた魔法が使えるようになるんだよな……？」
「うん。でもそれはありえないかな」
「何故だッ！？」
「最強の力を持った邪悪な魔神を、野放しにしたいと思う？」
「ミシェルは、俺をそんな風に見ているのか……？」
「うん、そして第１ＭＧは今の甲斐斗の心情を分析して理解してる。だからああやって弱気で、笑顔をすれば甲斐斗が自分にやさしく接してくれるって知ってるんだもん」
「ありえねえ……そんな訳ねえだろ？ははっ、それじゃあミシェルの今までの態度は全部作り物とでも言うのか？」
「今更気づいたの？」
そのアビアの口調は強く、既に顔からはいつもの笑顔が消えていた。
アビアは嘘を言っている……そう思っていた甲斐斗だったが、アビアのその真剣な態度に見る見る表情が曇っていく。
「そう、第１ＭＧは最初からそのつもりだよ。甲斐斗に見せてた笑顔の裏はね。軽蔑して、罵って、嫌って、早く消えて欲しい……そう思ってたんだよ？」
「ありえねえ……」
「本当姑息で汚いよね、それなのに甲斐斗にいつもべったりついてきてさ、『私を守って』ってアピールしてるんだもん」
「死ねばいいのに」
そう言って冷たい視線をミシェルに向けるアビア。
話を聞いていた甲斐斗は既に放心状態に陥り微動だにできず、立っ

ているのもやっとだった。
「ありえねえって……」
自分の心臓の鼓動が大きく感じ、段々と速さが増していくのが甲斐斗自信にもわかった。
アビアの言っていることが嘘偽りなく、全て真実なのだとしたら。
甲斐斗はミシェルの手のひらの上で踊らされていたことになる、なるが……今までのミシェルとの思い出が全て作り物だったとは未だに甲斐斗には思えなかった。
神、そうだ。神の存在はどうなるというのだろう。
あの時の『観察者』はあの時の『ミシェル』は何だったというのか。あれも全て演技だったというのか。あのまま神が甲斐斗に勝てていればそれで良い、もし負けそうになればまた甲斐斗と側に近づき力を封じて死を待てばいい、と……。
「あえりえない……」
だがもし、神との戦いでMGの思惑通りに進めば甲斐斗とミシェルの仲は絶対に切れない絆が生まれるはず。
そうなればもう甲斐斗の矛先がミシェルに向くことは無い、例えミシェルが甲斐斗の力を抑えていると知っていても、甲斐斗はミシェルを傷つけないだろう。
ミシェルの本心で、力を抑えられていると知るまでは――。
「第1MGにとって最大の脅威はERROでも人間でもない。甲斐斗の持つ……最強の力なんだよ」
「アビア」
そう一言呟いた甲斐斗は、肩の力を抜き脱力した状態で俯いていた。
「ははっ……お前の話……どこまでが本当なんだ……？」
そんな甲斐斗の問いを、アビアは笑顔を止めて小さく呟き答えた。
「甲斐斗。全て真実だよ」
初めてミシェルに出会った時。甲斐斗は運命というものを感じた。
自分の名前も知らないか弱い不思議少女。甲斐斗が咄嗟に考えた名前を気に入ってくれて、いまではそれが本当の名前かのように呼ん

でいる。
そしていつの日かその少女が第１ＭＧだという事を知る。
最初は戸惑っていたが、ＭＧだろうとなんだろうと関係ない、ミシェルには生きる喜びを教えると言ったのだから。今まで通り二人は接する事が出来ていた。
「ん……そうか」
可愛くて優しくて健気なミシェル、戦いに疲れ寝ている時、いつもミシェルが側に来て添い寝してくれた。
たった数ヶ月の期間だが、甲斐斗とミシェルとの思い出は今では数え切れない程存在する。
そしてこれからもその思い出は、時間と共に増えていくはずだった。

――アビアの返事を聞いた瞬間、甲斐斗は顔を上げると右腕を伸ばし瞬時に黒剣を出現させた。
だが、その黒剣はいつもの剣と違ってい剣全体から異様な黒い光を放っている。
「ック、ククク…ふふ、あひゃ、あひゃひゃひゃひゃッ！！」
笑みを浮かべ赤い瞳を光らせる甲斐斗は先程とはまるで雰囲気が違い、変貌していた。
その変わり様にその場にいた誰もが困惑すると、すかさず愁が神楽と赤城の前に移動する。
「信じては駄目だ甲斐斗さん！あの人の言っていることは間違っている、正気に戻ってください！」
間違いない、黒剣を握り締めた甲斐斗がこれから何をしようとするのか。
それを推測するには余りにも簡単で容易だ、その剣先が振り下ろされるのは、ミシェルしかない。
「貴方が一番よく知っているはずだ！ミシェルが貴方にそんな事するはずがない、それに甲斐斗さんだって――」

違う。今自分の目の前に立っているのは、愁が知っている甲斐斗ではない。
異質な雰囲気を放ち、甲斐斗の背後からは黒い殺気のオーラが溢れ出している。
そしてその赤く光る瞳はもはや人間のものではない、それこそ悪魔、魔神に等しいものだった。
「甲斐斗……さん……？」
人間じゃない。愁がそう思った瞬間、突如甲斐斗は愁との距離を縮め懐に入ると、右足を振り上げ愁の腹部を蹴り上げる。
「ぐがっ――――！？」
吐血が甲斐斗の顔にかかるものの、甲斐斗は表情一つ変えず今度は左足を振り上げ愁の頭部を狙った。
すかさず愁は右腕を振り上げ甲斐斗の蹴りを防ごうと身構えたが、甲斐斗の足が愁の腕に触れた途端軽々と蹴り飛ばされ格納庫の壁に叩きつけられた。
「かはっ……」
ＥＤＰで既に力を使い果たしていた愁に、今の甲斐斗を止められる事はできない。
それ所か甲斐斗は衰弱していたはずなのにＥＤＰでは感じられなかった程の『力』を感じる。
「ひゃひゃヒャひゃヒャッ！あアァぁあ？魔法ガ使エるぐらイで調子乗ってンじゃネえぞ餓鬼がァ！？」
壁にもたれ掛かり動く事の出来ない愁に言葉を吐き捨てる甲斐斗、その様子を見た神楽は一歩後ろに下がると、動揺している赤城の前に静かに立った。
「あひゃひゃひゃ！友ジョウ？あイ情？ンなもんで世界変エるダぁ？結局ダレも救エてねえジャねえかァッ！？あおイ？エコ？シャイラ、アリス！？お前ハ救エたのかァ！？アひゃひャひゃ！」
今まで溜め込んでいた感情を爆発させるかのような甲斐斗の発言。
その甲斐斗の言葉に悔しさが込み上げるものの、今の愁には何も言

い返せない。
たしかに救えなかったのは事実。しかし、それでも愁は明日の為に立ち上がり、戦い続けている。
「救エネえ『力』に価値はネえヨッ！ひゃひゃヒゃ！！」
そう言うと甲斐斗は再びミシェルの方に顔を向けるが、前方に立っている神楽のせいでミシェルの姿が見えない。
甲斐斗を止めたい、そしてミシェルを殺させたくない。その思いで甲斐斗の前に立った神楽だが、もう一つ理由はある、こんな甲斐斗の姿をミシェルに見せたくなかったからだ。
「ドけよ神楽ァ、オ前の望み通リ、過去ニ戻って世界を変エてきテやるんだゼぇ？」
そのどす黒いオーラは神楽にもハッキリと見える、先程から足の震えが徐々に増していくのが自分でもわかっていた。
「ええ、でもね甲斐斗。もし貴方がその剣をあの子に振るえば、必ず後悔するわよ……！」
それでも神楽は強い眼差しで甲斐斗を見つめ訴えた、自分の言葉で今の甲斐斗を変えられることを信じて。
「アヒゃヒゃひゃ！後悔ダぁ？ソウだなァ、最後の最後デ剣を振らなカった事ニ後悔するかモなァ！」
もはや今の甲斐斗に言葉は通じないのだろうか、それでも神楽は甲斐斗の前に立ち塞がり一向に動こうとしない。
すると、後ろから肩に手を置かれ過剰に反応してしまう神楽。すぐに後ろに振り向くと、そこには落ち着いた様子の赤城が小さく頷いた。
「大丈夫だ神楽、心配ない。道を明けてやってくれ」
赤城から恐怖などが何も感じられない……神楽はそんな赤城の態度と言葉に無意識に甲斐斗の前から離れてしまった。
そして、とうとう赤城とミシェルの目の前にまで近づいてきた甲斐斗。
赤い眼光、鋭い眼差しがミシェルに突き刺さると、ミシェルは目か

ら涙を零しながら大きく体を震わせ赤城にしがみ付いていた。
「ミ〝シェル……よクもテメエ、俺様を騙シやガったナァ……」
「あ、う…ああ……っ……」
恐怖の余り喋ることすら出せないミシェル、そんなミシェルの頭にふと赤城の手が乗ると、ミシェルは驚いた様子で顔を上げた。
そこには焦りも緊張もしていない、普段通りの赤城が薄らろ笑みを浮かべ見つめてくれている。
「ミシェル、甲斐斗を見てやってくれ」
そう言うと赤城は視線をミシェルから甲斐斗に向けると、甲斐斗は右手で握る黒剣を強く握り締め口を開く。
「俺ガ今まデどんな思イデお前を助ケてきたノかァ、ワかッてンのカァ？……今かラでもイイ……俺ノ力を解キ放て、大丈夫ダぁ……ソウすレば殺シはシネエ……」
甲斐斗がそう言うものの、ミシェルは先程から怯え震え泣くことしかしていない。
「かいとぉ……こわい〝よぉっ！……うぅっ……」
明らかにミシェルは甲斐斗に怯えている。今まで自分に暖かく接してくれて、助けてきてくれた甲斐斗が今では剣を片手に自分を殺そうとしている。
そこに立っているのは悪魔でしかなかった、邪悪な力を持った、悪魔……。
ミシェルの体は恐怖で硬直しもう走って逃げる事もできない、必死に赤城にしがみ付き何とか立っているような姿だった。
しかし対称的に赤城はしっかりと甲斐斗を見つめその場に立ち止まっていた。
「ミシェル、どうして甲斐斗が怖いんだ？」
「えっ……？」
赤城の言葉にミシェルが反応するが、目の前に立っている甲斐斗からの邪気は更に増し続けている。
「ソろそろドイてクれねえか赤城ィ、邪魔なンダヨォ……マとめて

ブッ殺スゾ……？」
脅しでも何でもない、ただ邪魔だから殺す。既に甲斐斗にとってはこの場にいる人間など眼中にないのだろうか。
「ああ、かまわん」
本来なら誰もがその場から逃げるに違いない。それなのに赤城はその場に留まったままじっと甲斐斗を見つめたまま視線を逸らさない。
「アヒゃひゃひゃ！ワカったァ、安心しロ、一瞬で殺シテやル。別にイイだロ？俺様ガ過去に帰リゃあ全テ済むンだからヨォッ！ひゃヒゃひャヒゃッ！！」
だが甲斐斗もまた赤城の態度に困惑することもなければ、言うとおりに右手に握り締める巨大な黒剣を振り上げ、赤城とミシェル目掛けて簡単に振り下ろした。
「赤城！？お願い早く逃げてッ！！」
「駄目だ……赤城さん、早く逃げ……っ……」
その思いもよらぬ赤城の行動に神楽が声を上げる、愁も起き上がろうとしながら必死に腕を伸ばし逃げるように伝えるが、赤城は一向に逃げる様子も、剣を避ける気配も無い。
「嫌ぁあああああ――――！！」
殺される。神楽も愁も、その場にいた兵士達は皆そう思った。
愁は手を伸ばしたまま目を見開き、神楽は腰が抜けその場に座り込んでしまうものの、赤城に手を伸ばし最後まで赤城を逃がそうとした。

――神楽の悲鳴の後、格納庫内は静寂に包まれていた。
誰も声が出せず、目の前に広がる光景をじっと見つめたまま動けない。
「ミシェル」
赤城の声にミシェルが赤城の方に顔を向けると、赤城は前を見つめたまま言葉を続けた。
「目は瞑らなかったか？」

その赤城の問いにゆっくり頷いてみせるミシェル。
「しっかり見ていたな?」
今度は地から強く何度も頷くと、赤城はミシェルの頭にそっと手を乗せ優しく頭を撫でた。
「そうだ、それでいい。そして分かってやってくれ、甲斐斗という一人の男を」
甲斐斗の振り下ろした剣は、赤城の頬に触れる寸前で止められていた。
それを見て赤城は一歩前に出ると、腕を伸ばし甲斐斗の頬をそっと手の平で触れた。
「甲斐斗が、私やミシェルを殺すはずがないだろう?何も心配することなど無い」
そう言って赤城が笑みを見せた瞬間。甲斐斗は驚くように後ろに下がると、左手で自分の頭を抑え俯いてしまう。
「ソう、ダヨね……!」
ヨロヨロと体を揺らし、足元が覚束ないものの、ゆっくりと赤城から離れていく甲斐斗。
「僕ハ、ボくは……っ……」
そのまま背を向けると、剣を引きずりながら一人東部軍事基地の中へと姿を消していく。
それからすぐに神楽が起き上がると、赤城の前に立ち両手で肩を掴み前後に大きく揺らした。
「バカっ!何であんな危険な事するのよ!」
「危険?いいや、私はそうは思わなかった」
この場にいたただ一人赤城だけが甲斐斗の見方が違っていた。
周りからは魔神だの悪魔だの恐れられる甲斐斗だが、赤城にはいつも一緒にいる甲斐斗にしか見えなかった。
だがいつもと違うのは、今の甲斐斗を見ていると心の奥から悲しさが自然に込み上げてくること。
「私は甲斐斗を信じている、それだけだ」

そんな赤城の言葉に、神楽は唖然としていたが、何かを悟ったかのように赤城の方から手を離す。
「甲斐斗が心配だ……私は先に基地に行って甲斐斗を探してくる」
「ええ、でも気をつけて赤ちゃん。今の甲斐斗は危険よ……」
神楽の言葉に赤城は頷くと、自分の体に引っ付いているミシェルをそっと体から離しミシェルの手を取ると、神楽の手を握らせ後ろに振り向き一人東部軍事基地へと向かって行く。
「あーあ……」
その一部始終を見ていたアビアは、つまらなさそうな表情でその場にいた神楽達を見つめていた。
すると視線を感じた神楽はそのふてぶてしいアビアの態度に苛立ってしまう。
「貴方ね、自分が何を言ったのかわかってるの!?」
「甲斐斗が話せって言ったから話しただけだよ。アビアは何も悪い事してないけど?」
「嘘もいい加減にしなさいよ。これ以上甲斐斗を惑わす事は言わないで……」
「……じゃあ嘘って思ってればいいよ?別にアビアはそれでもいいもん」
甲斐斗以外は眼中に無いのだろうか、アビアはそう言い残し甲斐斗の向かった基地へと歩いていこうとした時、ふと愁がアビアの前に立ち塞がる。
「今のでハッキリと分かった。ミシェルは甲斐斗さんを恐れているんじゃない、甲斐斗さんの持つ未知の力、魔神の……『最強の力』を恐れているだけだと」
「んー、さぁ、それはどうかな~?第1MGは甲斐斗の力を封じているだけであって魔神の力を封じている訳じゃないんだけど」
「やはり……甲斐斗さんの持つ力と魔神の持つ最強の力は別物と思ってもいいわけですね」
「……第1MGから見れば一緒のようなもんだけどねー。貴方は最

強を知らないからそんな態度かもしれないけど、『最強』がいかにすごい存在かわかってるの？」

アビアに言われてみたものの、『最強』とは何なのかを考えた事もなかった愁。

そんな愁の様子を見てアビアは溜め息を吐くと、愁を見つめながら人差し指を愁の頭に指し口を開いた。

「想像してみなよ。例えば甲斐斗と、もう一人別の人間がいて、素手同士で戦わせる。すると甲斐斗が勝ち残るよね？そこに今度は機関銃を持った人間と勝者を戦わせる。結果はどうなるか、普通は機関銃を持った人が勝つと思うけど、最強の存在の甲斐斗はこれに勝つ」

甲斐斗なら素手や機関銃相手になら最強がどうこう以前に余裕で勝てそうな気もするが、愁は黙ってアビアの言葉を聞いていく。

「じゃあ次、今度は国一つを滅ぼせる程の力を持った存在と甲斐斗を戦わせる。結果はどーなると思う？簡単だよね、甲斐斗の方が強いんだから甲斐斗が勝つ」

「国一つ……？」

次にアビアが甲斐斗と戦わせたのは、国一つを滅ぼせる程の存在だった。

これは先程までの相手とは遥かに強さが増しているのがわかる、そもそも国を一つ滅ぼせる存在といったらどんな力を持っているのか、愁には想像もつかない。

「じゃあもっと上に行こうか、惑星を一瞬で消せる程の存在と甲斐斗が戦う。結果は……言わなくてもわかるよね」

今度の例えもまた格段に甲斐斗の敵の強さが増す、が……惑星を消す程の存在と効いても、愁はいまいち理解できない。

兵器や魔法等を使って消すという意味なのだろうか、だとしても、そんな存在が甲斐斗と戦えば普通は甲斐斗が負けるはずだが……。

「それでも甲斐斗さんが、勝つと言うんですか……？」

「当たり前じゃん。『最強』なんだから。後はそれを延々と繰り返

していくといいよ」
延々と繰り返す。つまり今度はその惑星を消せるほどの者より、更に強い者と甲斐斗を戦わせるということになる。だがこれにも甲斐斗は勝つのだろう、とすれば、今度は先程戦った者より更に強い者を戦わせる必要がある。
延々と想像してみてほしい、限界が来るか？想像する人間の脳に限界があるだけで、『最強』に限界は無い。
「神なんて簡単に超越してるんだよ。貴方達みたいな底辺の存在である『人間』が想像できるわけないんだけどね」
一瞬だけ、愁を見つめていたアビアの瞳の色が変化していた。
ただ愁が瞬きをすると、またいつもの瞳の色に戻っており相変わらず笑みを浮かべて立っていた。
「それじゃ、アビアはもう行ってもいいかな？」
「……はい、でも甲斐斗さんの所には行かないでください」
愁を避けて一人基地に歩いていくアビアだったが、愁の最後の言葉に足を止めると軽く後ろに振り向いてみせた。
「どーして？」
「今は赤城さんと甲斐斗さんを二人っきりにさせてあげたいんです。それと、もしよければアビアさんからもっと話しを聞きたい、ミシェルや甲斐斗さんの事、そして貴方自信についても……！」
アビアの正体、これが一番の謎と言えるかもしれない事に愁は気づいていた。
しかしそれだけでアビアの話を聞きたいと思っている訳ではない。
何故甲斐斗と行動を共にしたり、先程のような話を甲斐斗にしたのか、一体何を考え、何の為に動いているのか。愁は知りたかった。
愁は後ろに振り向きアビアの返事を待った、だがアビアの方はまるで愁の心境を見透かしているかのような不適な笑みを見せると、前に向きなおし愁から目を逸らす。
「欲張りすぎは身を滅ぼすよ？ほどほどがいいってーこういう話は……それに、後はどーするかは甲斐斗次第だもんね。甲斐斗の所に

はまだ行かないよ、アビアは一人でゆっくり待つとするよー」
そう言って一人基地に向かって歩いていこうとするアビア。
「待ってください！」
だがまた愁に呼び止められ、小さな溜め息を吐いた後めんどくさそうに振り向いた。
「もぉー、なにー？」
「貴方は甲斐斗さんの本当の力が見たいと言っている。それなのに何故貴方はミシェルに手を出さないんですか！？貴方の力なら簡単なはず……！」
たしかに、それだけ知っているならアビアがすぐにミシェルを殺せばいいだけの話。
アビアの持つ力なら一瞬でミシェルの命を奪えるだろう。しかしアビアは未だミシェルを殺しておらず、ずっと甲斐斗の行動を見ているだけだった。
甲斐斗の力に拘るアビア、それなのに何故……。
神楽も愁と同じ事を思っていた。二人は無言でアビアを見つめ答えを待っていると、アビアはまたいつものように笑顔を見せて答えた。
「ＭＧ殺して……それで甲斐斗は、アビアの事を好きになってくれると思う？」
「えっ――――」
愁の思っていた答えとはまるで違っていた……これが、アビアがミシェルを殺さない理由なのだろうか。
時分が求めてきた答えよりアビアは今、甲斐斗の気持ちを優先している。
その一途な思いを知って愁は再認識させられた、この女性もまた一人の人間であり、本気で甲斐斗を愛しているのだと。
「……じゃ、ばいばい」
そしてアビアは行ってしまった、今までアビアとの会話をしたことがなかった愁にとって、アビアがどのような人物なのかが大体分かってきていた。

「アビアさん、貴方はどうしてそこまで……ん？」
ふと時分の足元に視線が下りると、先程までアビアが立っていた場所に一冊の本が置かれていた。
まるで新品のように傷や汚れは一切見当たらない綺麗な本……こんな場所に落ちていなかったはず……そう思いながら愁は本を手に取ると、無意識に本の１ページを捲っていた。
そこにまず描かれていたのが、両面のページを使って盛大に書かれた宮殿の全体図だった。
普通に見てみればただの宮殿の図だろう、だが愁は宮殿の壁に描かれていた記号を見て顔色を変えた。
「どうしてこの記号が……」
宮殿の壁に描かれていた記号、それは以前甲斐斗と戦った神の表面に無数に刻まれていた記号と同じものだった。
そして更に次のページを捲った時、愁はそのページに描かれているものを見て目を見開いた。
宮殿の正面が描かれた図、宮殿の正面には巨大な門が聳え立っているが、その門にはある物が描かれていた。
大きく、巨大な剣……それはまさに、先程甲斐斗が握っていたばかりのあの黒剣の絵だった。

第１０７話　無能、有能

――――日は沈み、赤城達のいる基地の周りは既に真っ暗な夜へと化していた。
東部軍事基地には僅かに残っていた電力で微かに灯りが点いているものの、廊下は薄暗く、格納庫内が一番明るく照らし出されている状態だった。
そんな薄暗い廊下を一人赤城は歩いていた、窓の外を見れば本来町の綺麗な灯りが見渡せるはずが、今では見る影もなく暗闇しか広がっていない。
その時、扉が開いたままのある一室から物音がしたのを聞き、赤城の足がその部屋の前で止まる。
部屋には一つも灯りが点いておらず、廊下の灯りが微かに室内を照らしているだけ。そんな薄暗い部屋の中に赤城は一歩足を踏み入れると、静かに一番奥の部屋に向かって歩いていく。
「ううぅ……ぼくは、どうしてぇ……」
部屋の奥にある寝室、そのベットの上で甲斐斗は咽び泣いていた。
今まで見たことのない甲斐斗の姿だったが、赤城は意を決して寝室に入った時、部屋の扉の横に立ててある黒剣の存在に気づいた。
薄気味悪い異様な黒い光が蠢き、まるで見てみる者を惑わすかのようなその闇の深さに、赤城は無意識にその黒剣に手を伸ばしていた。
「触るなぁッ！！」
赤城の指先が剣に触れる前に、甲斐斗の言葉で目が覚めたかのように赤城は手を引き声のする方を向くと、ベットの上に座りこちらを睨みつける甲斐斗がいた。
ふと、赤城は甲斐斗と目が合うと、突然甲斐斗は俯き手を伸ばし出口の方に指差すと、先程と同じような大声を上げた。
「ぼくを見るなっ！でていけよ！早くでていけ！！」
目に涙を浮かべ、見つめられる事が気に入らないのか甲斐斗は声を

荒げ赤城を部屋から出そうとするが、赤城は静かに甲斐斗を見つめたまま出て行こうとはしない。
「甲斐斗……」
それは、本当にあの甲斐斗なのかと疑う程弱々しい青年だった。
威厳も力も気迫も何も無い、一人涙を流し咽び泣く泣く姿は、何の力ないただの一人の男にすぎない。
赤城は甲斐斗の名を呟くとまた少しずつ歩き甲斐斗に近づいていく、それを見た甲斐斗は怯えるように身を引いてしまう。
決して目を合わせようとせず、真っ直ぐ近づいてくる赤城に対し甲斐斗は俯き赤城が近づいてくるのを怖がっていた。
そして赤城が甲斐斗の座っているベットの前に立つと、赤城は無言で甲斐斗の横に座り小さく息を吐いた。
「後悔しているのだろう？」
「えっ……」
赤城の呟いた言葉に甲斐斗は反応した、それは今自分が何で悩み、苦しんでいた事を見透かされていたからだ。
「あの時剣を振り下ろした事に……違うか？」
そう言いながら赤城は甲斐斗の方に顔を向けるが、甲斐斗は赤城から顔をそらし目を合わせようとしない。
「二人っきりで話し合おう、大丈夫。私はお前を怖がってなどいない」
その言葉に甲斐斗は少し安心したのだろうか、赤城の方を見ることはないが甲斐斗は目に浮かぶ涙を拭い話しはじめた。
「ぼくは……怖がられて当然なんだ、あんな事言ったし、ぼくは本気であの子を殺そうとしていた……」
『あの子』、という言葉を聞いて赤城はすぐにミシェルの事を言ったのだと分かったが、何故ミシェルの名を呼ばないのか少し疑問に感じてしまう。
「最低だ……前もこんな事があったんだ、そして信じるって言ったのに……」

俯いたまま甲斐斗は黙ってしまう、赤城が何か言おうすると、甲斐斗はまた口を開き話始める。
「もう嫌だ。誰も救えないし、何も守れない……ＳＶにいた彼女達だって……ぼくは誰一人守れなかった……」
まるで別人だ、普段は自分の事を「俺」と呼んでいる甲斐斗が、「僕」と言いいながら話をしているのだから。
一体、甲斐斗は何者なのだろうか……ふと赤城の脳裏に過ぎる様々な甲斐斗の姿。
己を最強と言い、魔法使いと言い、過去に帰り、世界を変えると言っている男。
しかし、そこには最強とは程遠い力しかなく、魔法も使えず、一人苦しみもがく青年しかいない。
それでも甲斐斗は今まで戦い、生き続けてきた。それまで様々な出会いや別れ、喜びや悲しみがあっただろう。
「甲斐斗、お前は私を救い守っているというのに……何を言っているんだ？」
赤城の言葉に甲斐斗は無言のまま何も言ってこない。
「それにお前は今まで数多くの人達を守り、救ってきただろう？全てお前の力だ」
「ぼくの、力か……」
「そうだ、そしてお前は直にＥＲＲＯＲから人類を守り世界を救うだろう」
世界を救うだろう、なんて。きっと平和な世界で言った所でただの笑い話にしかならないだろう。
しかし今、この世界で生きる人々にとって『世界を救う』という言葉の重さと大きさは計り知れない。
「く……」
赤城の言葉に甲斐斗が反応する、まるで何かを堪えるかのように肩を震わせる甲斐斗だったが、突如顔を上げ赤城を見つめると口を開いた。

「くくく……お前、何言ってんの？」
強引に赤城の両肩を掴むとベットに押し倒し赤城との顔の距離を近づかせる甲斐斗、その赤く濁った黒い瞳で赤城を見つめ続ける。
「お前の望みは何だ？何故俺に近づく？」
先程の弱々しい甲斐斗から一変し、自分の事を『俺』と呼ぶいつもの甲斐斗に戻っていた。
「お前を知りたくなってな」
押し倒されても赤城は落ち着いた様子でいた、両肩を掴まれたままだが決して振り解こうともせずに会話を続けていく。
実際は両肩を掴む甲斐斗の力が尋常ではなく赤城は痛みを堪えながら必死に平静を装っていた。
「あっそ、だがなぁ赤城。俺を知った所で何も変わらんだろ？」
そう言うと甲斐斗は赤城の両肩から手を離すと、ベットの横に置いてある椅子を掴み赤城の目の前に置いた。
「世界が救われる訳でも無え、誰かを守れる訳でも無え。力になるわけでもなんでもねえ事だ」
そう言いながら椅子に座り赤城と面と向かう甲斐斗、もうその目に涙は無く濁った瞳を光らせ微かに笑みを浮かべているほどだ。
「それとも楽しいか？人の過去を興味本位で探るのは？」
「違うッ」
まるで自分が軽い気持ちで甲斐斗の事を知ろうとしているような発言に赤城は一言だけ力強く否定するものの、それを聞いてもなお甲斐斗は態度を変えようとしない。
「赤城、これ以上俺に関わるな」
「嫌だな」
「……は？」
思いもよらぬ赤城の言葉に呆気にとられる甲斐斗、すると赤城は徐に立ち上がると壁に掛けてある黒剣の方に向かうとそっと手を伸ばし黒剣に触れようとした。
「おまっ！？止めろ！！」

その赤城の行動にすぐさま甲斐斗は立ち上がり赤城を止めようと手を伸ばすが、赤城の指先は既に剣の寸前にまで近づいていた。
「何故だ？」
「その剣に触れたら終わりだ……死ぬぞ」
甲斐斗の表情は真剣そのものだが、何か焦るような表情を見てあえて赤城は強気の態度に出る。
「ふーん、本当かぁ？」
「く……頼む赤城、お願いだ……もうこれ以上俺に関わらないでくれ……ッ！」
そう言って赤城に手を伸ばす甲斐斗、赤城が剣を触れる事に明らかに恐れており、力ずくでも触れさせないつもりだ。
「これ以上お前には見て欲しくないんだ！！」
今にでも飛び掛りそうな甲斐斗を見て赤城は更に剣に近づくと、そっと剣に手を翳してみせる。
「最強としてのプライドか？なぁ甲斐斗、私は思うんだ。お前の事を一人でも理解してくれる人がいたら、きっとお前は前に進んでいける……とな」

――赤城の指先が剣に触れた途端、黒剣から発された黒い光が一瞬にして赤城を包み込むと、先程まで室内にいたはずがいつの間にか真っ暗な世界へと連れてこられていた。
「ここは……？」
見渡す限り闇が広がる世界、壁も天井も無い無の空間に一人取り残された赤城だが落ち着いた様子で事が始まるのを待とうと瞬きをした瞬間、無数の『風景』が赤城を囲んでいく。
先程まで暗闇に立っていたはずの赤城が、今では荒れ果てた町の中心に立ち呆然としている。
周りを見渡せば民間人と思われる人達が何かから逃げるかのように必死になって走り去っていく。
その光景はまるでＥＲＲＯＲに襲撃された町のようだった、道路に

は建物が崩れ瓦礫が広がり、いたる所に人の死体が散乱。子供の泣き声や女性の悲鳴が町中に響くまさに地獄のような景色。
今まで平和に暮らしていた人達が命の危機を感じ恐怖するその様は、どこの世界とて変わりはしないのだろう。
ふと上を見上げれば何十機もの戦闘機が空を飛び、後ろに振り向けば銃を持った軍人と横に並び進軍してきていた。
兵士の後ろには戦車が列を作り、瓦礫や死体の上を走っていく。
『なんて有様だ……アルトニアエデンの町がこんな事になるなんて……！』
兵士達が赤城の横を通り過ぎていく時僅かに声が聞こえてくる、兵士達は皆銃を強く握り締めこの状況を作り出した元凶の元へと向かっていた。
『おい！大丈夫か！？しっかりするんだ！』
町のあちこちでは負傷した民間人が倒れ、軍人達は必死に応急処置をして助け出そうとしていく。
それは軍人だけではない、町の人達も互いに助け合いながらこの場から逃げようとしている。
また一人、負傷した民間人を見つけ軍人が近づいていくと、右手を負傷している箇所に翳した途端見る見る傷が癒えていくのが見えた。
「魔法……」
映し出されているこの世界が赤城達のいる世界ではない事はすぐに理解できた、そして魔法が存在する世界……つまりここは――。
『危ない！全員空に向かってシールドを張れッ！』
「っ！？」
兵士の声に慌てて空を見上げると、先程まで空を飛んでいたはずの戦闘機が次々に煙を上げて落ちてくるのが見えた。
兵士達はその上官の声に次々に右手を上げると、薄らと光を放つ透明な壁を頭上に張り巡らしていく。
落ちてくる機体の残骸はシールドに触れた途端爆発し破片が周囲に飛び散るものの、シールドの下にいた兵士達や民間人は無傷のまま

で済んでいた。
『なっ、何ぃ!?町に飛ばした戦闘機が１０機全て撃墜された!?馬鹿言えッ!あれはＡ級の対魔戦兵器だぞ!?』
情報が入ってきたのだろうか、一人の軍人が無線機を片手に慌てた様子で震えていた。
が、次に聞こえてきた報告を聞いた途端その兵士の手から無線機が零れ落ちる。
そして赤城は遂に出会い見えてしまう、『最強』の存在を――。
戦闘機が落ち爆煙が辺りを飲み込んでいたがやがて晴れていくと共に見えてくる、一人の男……いや、一体の『魔神』が立っている事に。
全身を黒い甲冑で包むような格好をしており、身長は軽く２ｍを超えている。
全身の黒い鎧のような物は肉体そのものなのか、それともただ単に鎧を身に纏っているのだろうかわからない。目と思われる場所は赤い光を放ちじっと兵士達を見つめている。
人間の形に似た『魔神』。兵士達が進軍しようとしていた巨大な道の真ん中に一人立ち塞がったまま動こうとしない。
「これが……甲斐斗なのか……？」
赤城から見た魔神、まるで甲斐斗があの黒剣を自ら身に纏っているかのような姿に驚きを隠せない。
周りの兵士達も同様に驚きが隠せず困惑していた。自分達が今から殺すはずの目標が部隊の目の前に立っているのだから。
「何だこの気配っ……強大な存在は感じるが、甲斐斗からは何も感じられないだと……？」
それは『無』の領域。赤城にも分からない、最強と聞かされていた魔神から威圧や殺気が微塵も感じられないのだ。
『最強』を前にして死どころか恐怖すら感じない、兵士達も攻撃命令は下されているもののその魔神を見ても銃を構えるだけで引き金が引けなかった。

そう、魔神は余りにも大人しすぎた……町の各地で悲鳴が飛び交い人々が混乱しながら逃げていく状況だというのに、魔神は暴れる様子も力を振るう様子も一切見せない。

『こいつが……こいつがあの『魔神』!?全隊攻撃を開始ッ!奴の息の根を絶対に止めろぉッ!!』

その上官の命令に銃を構えていた兵士達が一斉に引き金を引いた、銃から放たれた弾丸は次々に魔神に命中していくが、魔神は避けようともせず浴びせられる弾丸の嵐をただただ身に受けていた。

だが魔神に放たれたのは銃弾だけではない、後方に待機していた戦車隊からの一斉放火が開始される。

放たれた砲弾は次々に魔神に命中し爆煙を上げる、すると今度は戦車隊の後方から杖を持った兵士達が前に出てくる。

次は魔道隊の集中砲火が始まる、杖の上部には宝石のように輝く物が埋め込まれており、魔道隊は杖を突き出すそれを魔神の方向へと向けると、杖の先端からは魔法陣が広がり一斉に光を放ちはじめた。

放たれた光は煙をも掻き消し魔神の立っていた場所へと次々に放出されていく。

『一時攻撃を止めろ、奴がいるか確認するんだ!』

全部隊からの集中砲火に辺りはまた煙に包まれようとしていたが、魔道隊が杖を空へと翳すと、中に漂っていた煙が吹き飛ばされ一気に視界が良好になっていく。

魔神が立っていた辺りの煙も忽ち消えていき、その場にいた兵士達が息を呑みながら結果を待った。

――魔神は立っていた。……何事もなかったかのように、先程から立っている場所から一歩も動いていない。

跪いているのか?傷付いているのか?もう死んでいるのか?……全て違う。

魔神は立っている、跪きもせず、傷一つなく、赤く光る目をでじっとこちらを見たまま生きている。

その場にいた兵士達は皆、目の前の現実に何も言えず、ただ武器を構えて次の命令が来るのを待つのみ。
『全く……酷い有様だな』
その一言が耳に届いた時、既に彼等は魔神の前に現れていた。
白い軍服を身に纏い、腰には剣を着けた十人程の男達。
『アルトニアエデン本部直属の白騎隊！あなた方たちが援軍に来られたのですか！？』
今までこの場を指揮していた兵士が声を上げると、その白騎隊の隊長と思われる男が答え始めた。
『ああ、事の重大さは既に本部にも伝わっている。……それで、この者がその『魔神』と言われる者か……』
立ったまま動かない魔神を睨みつける男、白騎隊のメンバーが次々に鞘から剣を引き抜き構えてみせると、その男もまた鞘から剣を引き抜き魔神を睨みながら口を開いた。
『なるほど、情報通りたしかに人外だ。そして魔神と言われるだけの事はある……強いな』
僅かな時間で魔神の実力を理解したかのような発言、白騎隊は迂闊に近づく事無くじわじわ接近し距離を詰めていく。
『だが我々とて弱くはない――行くぞ』
男が一言呟いた瞬間、剣を構えていた白騎隊の兵士達が一斉に飛びかかろうと……思った。
「ん？」
これから激戦が繰り広げられるのかと思っていた赤城。だがそれは違った。
『ん？』
次々に兵士達が踏み出し魔神の剣を振り下ろそうと思った、が……誰一人一歩も足が前に出ない。
……というより、足が無い。いや、足どころか……既に首から下は無くなり消えていた。
ごとっ、と。自分の頭が地面に落ちてぶつかった音とその痛みが伝

わってくる。
そして、その音一度だけではない、音だけなら無数に聞こえてくる。
ごと、ごと、ごと……と、何十個もの頭が地面に落ちていく音が聞こえてきた。
「ぁ……ぁあ……っ……！」
悲鳴を上げたくても赤城は声が出せなかった、一体何が起きたのかもわからず、この目の前に広がる光景を目にして、何を考えれば良いのか――。

――全滅した。
ほんの一瞬の出来事……いや、その一瞬すら赤城や兵士達は理解できなかった。
もう何を思い何を願えばいい、気づけば自分たちは首だけの存在となり死んでいるのだから。
理解できずに意識が飛んで死ねば楽だろう、だがそうはいかなかった人間もいた。
転げ落ちた首から見える光景……ああ、想像絶する程恐ろしくおぞましいものだ。
そして死ぬ前の走馬灯とはほんの一瞬で見えるものだ、それぞれ兵士達は何を見たか。
……まさかこんな簡単に自分達が殺されるとは思っていなかっただろう。
戦車の中にいる兵士達もそうだ、何が起こったのか、何をされたのかもわからない。
装甲車の中にいて、車本体は何の異常も無いというのに自分たちの首から下が無くなっているのだから。
……その余りの非常識な光景に赤城が魔神から離れようと後方に一歩下がってしまう、すると後ろには誰かが立っており赤城は後ろにいる者に受け止められてしまう。
すぐに後ろに振り返ると、そこには赤い瞳を濁した甲斐斗が不適な

笑みを浮かべながら見つめていた。
『俺を見たいんだろぉ？ほらぁ、もっと見ろよぉ！！』
そう言って甲斐斗は赤城の頭を掴むと強引に前に向かせた。
「うっ――――！？」
前を向けば町の景色が変わっていた、そこに『魔神』はいないが、赤く濁った目で逃げ惑う人々の前に瞬時に現れる甲斐斗の姿があった。
『アひャヒャひャ！コの俺さマから逃ゲレるとデも？ひひヒャはハハはァッ！！』
両手は赤い血で塗られ、黒い影を漂わせ狂気を放つ甲斐斗の姿に逃げていた人達は震え上がっていた。
『地獄ニようコそォオおオオォ！マズはコれダァッ！』
そう言って甲斐斗は指を軽く鳴らしてみせると、黒い輪が人々の手首や足首、胴体や首にと次々に付けられていく。
人々は必死に黒い輪が自分たちの体に付けられているのを見て必死に外そうと試みるものの触れる事が出来ず、黒い輪を取り外すことができない。
『く、くそッ！なんなんだよお前！いい加減にしろよ！』
一人の男が腕を振り上げ甲斐斗に立ち向かおうとした、すると甲斐斗はそれを見てもう一度指を鳴らしてみせた。
一瞬にして男の首が飛ぶ、首から吹き出る血は周りにいた子供にかかると、それを見た母親は見せまいと我が子を守るように抱き締めた。
『ヤベ、一瞬デこロシちマっタ……マ、いイカ、ひゃひャヒャ！！』
そう言って甲斐斗はもう一度指を鳴らすと、周りの人々に付いている黒い輪が徐々に締まり始めた。
ある男性は手首の輪が、ある女性は腹部の輪が、ある子供は首の輪が――――。
『止めてくれぇっ！いてえ〝、いでえ〝んだよぉおおお！ぁあああッ！』

男の右手は千切れ落ち、夥しい量の血が吹き出始める。
それを見て甲斐斗は大笑いしていた、最高だと言わんばかりの表情を浮かべ次々に体のあちこちがちぎれる人間達の悲鳴を聞いていく。
『お願いしますッ！この子だけは、この子だけは助けてくださいぃ！！』
一人の女性が我が子を抱かかえ甲斐斗の前に跪く、甲斐斗は首を傾けながら女性を見てみると、首に黒い輪が付けられている子供が目に見えた。
母親の胴体にも黒い輪が付けられ徐々に締まってきているものの、涙を流しながら必死に我が子を抱かかえ甲斐斗の元に来たのだ。
『マ、マ……苦、しぃ……ょ゛……』
少年の首に徐々に食い込んでいく黒い輪、顔色は既に青ざめており母親は我が子を見るたびに甲斐斗に頭を下げ続けた。
『ンー？ガキノ命が大セつカァ？じャア……』
甲斐斗は首をかしげたまま手を伸ばし一人の少女に指を指すと、不適な笑みを見せながら呟いた。
『アいツ殺セ』
簡単に言ってのけた甲斐斗だったが、母親は少女を一度見て首を大きく横に振ると甲斐斗を見つめながら口を開く。
『そんなっ！？無理です！！』
『アひャヒャ、ジャあオ前のガキは死ヌぜ？ドーせアノがキも死ヌんダ、ソれナラお前ガ殺シた方が良イんじゃネェ？』
甲斐斗の指差した少女の足首黒い輪により切断していたが、まだ息があり生きている。それに今から応急処置をすればまだ助かるかもしれない状態だった。
『ホらホラァ……早ク殺サナイと、大事ナ我ガ子が死ぬゼェ？』
我が子を守るために母親が取った決断、そして行動。足元に落ちているコンクリートの瓦礫を持つと、甲斐斗が指差した少女の方へと全力で走っていった。
「嘘だ……」

放心状態のまま赤城はその場に立ち尽くしていた。
あの甲斐斗が、これ程まで残酷なだったのか、これ程まで、冷酷で、人間とは思えぬ行動に、赤城の心は段々と黒く沈んでいく……。
そして母親は帰って来る、血塗れの瓦礫をその場に捨て、今にも死にそうな我が子を抱かかえて甲斐斗の目の前にまで寄ってきた。
『早ぐぅッ！！この子が死んじゃう〝でしょぉおッ！！？』
血眼になった母親を見て甲斐斗はヘラヘラ笑うと、面倒臭そうに自分の手を母親が抱きしめている子に伸ばした。
『アヒャひャ、ショーがネーなァ……ホレっ』
そう言って甲斐斗が指を鳴らした瞬間、子供の首に掛っていた輪が一瞬に縮まり子供の首を簡単に千切り落とした。
『？』
母親は思考が止まり動けず、首の無い我が子をただただ見つめている。
『……ヤベ、間違エた。アひャヒャヒャッ！！』
もう一度甲斐斗が指を鳴らすと、その場にいた人間達に取り付けた黒い輪が全て縮まり消えていく。
その場にいた人間達は皆殺された、それも痛みで苦しみ、恐怖で顔を引きつらせながらだ。
「う〝、うぅえ〝ぇ！……げほ、けほっ……！」
目の前に広がる光景に赤城は口元を手で抑えたものの、我慢しきれずその場に吐き散らしてしまう。
そして口元を拭った赤城は甲斐斗を……いや、甲斐斗の姿に似た存在を睨みつけた。
「違う、違う違うっ……お前は甲斐斗じゃない、甲斐斗じゃない！」
赤城は頭の中で何度も否定し続けた、今目の前にいるのが本当の甲斐斗ではないことを。
「魔神でもなければ甲斐斗でもない……お前は……『邪神』だ……ッ！」

『……セーカイだ！オメでとう赤城ィ！』
「なっ！？」
その瞬間、赤城の手足や首、そして胴体にあの黒い輪が次々についていく。
「あ、あああああっ！？」
外そうにも外せない、幾ら触ろうとしてもまるで実態が無いかのように触れられないのだ。
『アっひゃー、オ前なラここニ来てクレると思ったゼぇ！！』
徐々に黒い和が全身を締め付けていく、これは映像でも記憶でもなんでもない、現実だ。
「うぐぅ！が、か…はっ……」
肉体の限界などあっという間だった。黒い輪が緩む事も無く赤城の体を締め付け、それを見て『邪神』は楽しそうに笑っていた。
脳に酸素が行き渡らず意識が霞んでいく、だが激痛でまた呼び戻される、地獄のような苦しみ。
そしてまた一つの命が消えようとした時、赤城の目の前に黒剣を握り締めた甲斐斗が現れた。
もう赤城には声も出せないが、目の前に現れた甲斐斗が自分に何をしようとしているのかはかろうじで理解できた。
自分に黒剣を振り下ろす、その甲斐斗の姿を。

――――「ばっか野郎！！だから危ないっつっただろッ！！」
赤城の両肩を掴み前後に揺らす甲斐斗、心配そうな表情を浮かべるものの怒ったような目付きで赤城を見つめていた。
「かい、と？……ん、私は……斬られたんじゃ……？」
「お前を斬るわけ無えだろ！お前の体に付いている黒い輪だけを斬ったんだよ」
……たしかに甲斐斗の剣は自分の体の中に入った、それは分かっていたが……剣は赤城の肉体をすり抜け赤城の体に付いていた黒い輪

だけを断ち切っていた。
「心配させやがってぇ、だから触るなって言ったんだよぉ！」
一安心したのだろうか、甲斐斗はそのまま赤城を抱き締めると、赤城も安心したかのように甲斐斗に身を委ねる。
暖かい思いが伝わってくる……間違いない、今自分を抱き締めてくれている人が本当の『甲斐斗』だった。
『……あヒゃ？久シぶりダなァ、デも邪魔シてンジャねーヨー。一人グラい別ニ良イじゃネーカ？』
突如現れた甲斐斗に邪神は声をかけると、甲斐斗はゆっくりと赤城を離し邪神の方を向いた。
「よくねーよカスが、てめえ次に赤城に何かしたらわかってんだろうな？」
『アヒャひゃ！何だなんダァ～？お前もしかシテソいつに――』
その時、邪神が一瞬でその場から消えたと思うと、隣に建ってある高層ビルが破壊されていき崩壊しはじめる。
「っち、あいつも来ちまったか……」
非常事態に甲斐斗も不安の色を隠せない、赤城は何が起こっているのかわからなず甲斐斗の後方に隠れるように立っていた。
「か、甲斐斗。この世界は一体どうなってるんだ！？」
「お前は昔の俺の姿を見ていただけだ、が……『あいつ』がお前の侵入に気づいて遊びに来たんだろうな」
軽く説明する甲斐斗の言葉は、やはり今の赤城には理解が苦しんでしまう。
この世界は甲斐斗の心が作り出し、過去を赤城に見せようとした幻想の世界なのだろうか。
『アヒャひゃ！久々ジャねーカァ！元キそウだなァ！』
邪神の声が聞こえてくると、崩壊したビルの前方に建っている建物で面白そうに笑う邪神の姿がそこにあった。
そして先程まで邪神が立っていた場所には、あの全身黒い鎧を纏う『魔神』の姿があった。

一人喋りかける邪神だが、魔神は一切口を利くとこなく邪神を見た後、前方にいる甲斐斗と赤城を見つめている。
すると魔神はふと視線の先を別の方に向ける、それにつられ邪神や甲斐斗もその方を向くと、建物のわき道から一人の少年が現れた。
『え……どうして皆ここにいるの？』
「なっ！？甲斐斗が二人！？」
その少年の姿に赤城が咄嗟に声を上げてしまう、脇道から現れたのは甲斐斗の姿だった……が、目の前にいる甲斐斗とは違いどこか弱々しく覇気を感じない。
『赤城さん？どうしてここに……』
「おいおい、『カイト』まで来ちまったかじゃねえかよ。あーややこしい！お前等一度に全員出てくるなよ！！」
半ば切れ気味の甲斐斗に、邪神はケラケラと笑い、魔神は無言、カイトは突然怒鳴られ戸惑っていた。
『ナーんだァ？殺シテ良イ奴じゃネーのカぁ？』
「お前からまず消えろ！一番邪魔だッ！」
そう言って甲斐斗は邪神に指差すと、邪神はケラケラと笑いながら甲斐斗に背を向ける。
『アヒャひゃ、ンじャまタ何カアったラ呼ンデくれェ。ヒャヒャヒャ――――』
邪神はそういい残した後全身に纏う闇に覆いこまれ瞬く間に姿を消した。
「……最初から呼んでねえだろ」
邪神が消えると、今まで広がっていた世界が闇に包まれ消え一番最初の景色、全てが暗闇へと変わっていく。
「行ったか、やれやれ。後は……お前だ。悪いけど赤城はお前の相手をしに来た訳じゃねえんだ。すまんな」
両手を腰にあて溜め息を吐いた後甲斐斗が魔神にそう言うと、魔神もまた甲斐斗に背を向け一瞬でその場から姿を消す。
すると甲斐斗は赤城の手を握ると赤城を誘導するかのように一緒に

闇の中を歩き始めた。
「さっさと帰るぞ、ここはお前の来る場所じゃねえ」
「ま、待て待て甲斐斗。今のは何だったんだ、これはっ、どういう事なんだ……？」
「お前は何も知らなくてもいい、黙って俺についてくればそれで問題無い」
そう言って甲斐斗は赤城の話しを聞こうとはせず、まるで出口へ向かうかのように途方も無い闇の中を歩き進んでいく。
すると赤城は強引に腕を振り払い甲斐斗から離れると、鋭い目付きで甲斐斗を睨み大声をあげた。
「いい加減説明したらどうなんだ甲斐斗！？これ以上、私にお前の謎だけを見せないでくれ……！」
「……説明、か」
その鋭い目付きとは裏腹に薄らと涙を浮かべる赤城を見て甲斐斗は小さな溜め息を吐くと、面倒そうに頭を掻きながら一言呟いた。
「じゃあ……紹介してやるよ」
そう言って右に腕を伸ばし指を指すと、先程姿を消したはずの邪神がこちらを見つめながら立っていた。
「あいつがカイトの邪心から生み出された存在」
右腕を下ろし、次に左腕を伸ばし指を指すと今度はその場所にあの魔神が立っている。
「あいつがカイトの無心から生み出された存在」
そしてその右腕を自分の方に向け親指を立てると、自分を指差し甲斐斗は答えた。
「そして俺が。カイトの真心が生み出した存在だよ」
何処と無く寂しそうな表情を浮かべる甲斐斗、その言葉を聞き赤城は甲斐斗から目が放せない。
「生み出した、存在……」
「そう、つまり俺達三人は『元』じゃねえ。んで、元になる男が…

…」

甲斐斗が力強く腕を前方に向け指を指すが、その指先は赤城に向けられているものではなく、赤城の後方にいる一人の男に向けられたものだった。

「そこにいる奴。名前はカイト・スタルフ。馬鹿で弱虫、魔法も使えない落ちこぼれのガキだ」

赤城が後ろに振り返ると、そこには甲斐斗と同じ姿をした男、カイト・スタルフが立っていた。

見た目は同じ、しかしカイトの方はやや俯き加減で赤城と目を合わせようとしない。

「本当情けなるぐらい泣き虫でな、一人でよくめそめそ泣いてたねぇ」

そう言いながら甲斐斗はあの日、あの時の記憶を思い出していく。

最強の力を得た時の記憶を……。そしてその記憶は、この暗闇の空間にいる赤城の脳にも直接伝え、過去の出来事を見せていく。

……とある実験室で、何十人もの学者達がカメラを通して実験の様子を見つめていた。

窓一つ無いその実験室はとても広く壁や天井、床一面は全て黒色の石版で形成されていた。

そして巨大な陣の模様が部屋全体に描かれており、部屋の中心には一人の少女が倒れていた。

女性が倒れているすぐ側には一人の少年が座っている、少年の顔色は蒼白としており、無言で横になっている少女の体を揺すり続ける。

何度も何度も、けれど女性は一向に起きず、動かない。すると少年は女性の体を掴み引き寄せると、大粒の涙を流しながら震える両腕で力強く少女の体を握り締めた。

少年は女性を呼び続ける、けれど反応はしない。

こんなにも暖かく、こんなにも綺麗で、美しく、優しい、掛け替えの無い大事で大切な少女が。

息をしておらず、心臓は止まり、死を迎え、もう動くことはない。

もうあの日のような生活が送れない……少年の、たった一つの生き甲斐は消えた。
たった一つの希望は消えた、たった一つの恵みは消えた、たった一つの癒しは消えた。
その少年にとってたった一つしかない『光』が消えてしまった。
「そしてそんなガキが、ある日手に入れちまったんだよ」
部屋中の黒い石版が一斉に黒い光を放つと、石版に描かれていたものが陣が闇を放ち少年を覆っていく。
突如地震が研究員達を襲う、慌てふためき研究室にある機器に向かって何か操作を試みるものの、全ての装置は火花を散らし次々に破裂し壊れていく。
モニターに映し出されていたあらゆるゲージが限界値を超えると、突如研究室にあるモニターに映っている映像が全て切り替わり、闇の中に佇む一人の少年だった者を映し出した。
「最強の力をな」
赤城にも少年の姿が薄らと見えてくる、しかし周り漂う闇が邪魔し、更に段々と視界が掠れていく。
しかし、目に映る過去とは違い、その闇を見ていると今までの甲斐斗の過去が滲み出しているかのように映像となって様々な記憶が赤城の脳裏を駆け巡っていた。
「カイトが最強の力を手に入れた瞬間に俺達は生まれた。そのカイトの『心』の変化に応じてな。さ、帰るぞ。これ以上はお前の身も心も持たない――」
その甲斐斗の言葉を最後に、赤城の視界は突如闇に包まれた。

――目蓋を開けば薄暗い光はすぐに差し込んできた。
「よう」
目の前には甲斐斗が座っている、赤城が薄らと目を開けながらふと回りを見てみると、暗い空間ではなく、剣を触れる前の一室に戻ってきていた。

そして赤城は自分が剣を立て掛けていた壁を背にして座り込んでいるのに気づき、ようやく自分が元の世界に戻ってこれた事を認識する。

「まだ意識がハッキリしてないか、無理もねえ。ゆっくり休むことだな」

まだ虚ろな目をしている赤城に甲斐斗はそう言うと、赤城をベットに運ぼうと腕を伸ばした瞬間、突然赤城も腕を伸ばし甲斐斗を抱き締めた。

その余りにも思いがけない出来事に甲斐斗も驚きを見せ、赤城に抱き締められたまま何も言いだせず動けない。

「甲斐斗……」

耳元で名前を囁かれ緊張した面持ちの甲斐斗は黙って赤城の言葉を聞いていた。

「ありがとう……」

涙を流しながら囁いた赤城の一言に、甲斐斗も自然と自分の腕を赤城の体に回し抱き締めていた。

「おいおい、お前って奴は……」

今度はもっと力強く暖かい、二人は互いに抱き締めあい甲斐斗も赤城の耳元で囁き返した。

「……ありがとよ」

恐らく赤城は見てしまったのだろう、カイトが甲斐斗になる前のまでの記憶を。

不幸で退屈で、毎日が辛いのに、たった一つの光を見つめてきたカイトの小さな小さな思い出を。

第１０８話　質問、接点

――――「失った記憶を取り戻す方法？」
夜も更けた頃、東部軍事基地にある自室に戻っていた神楽は一人考え事に更ける中、一冊の本を手にした愁が部屋に訪れていた。
そして愁の言葉を聞くと椅子に座ったまま神楽は腕を組み愁に視線を向け、愁は手に持っていた本を神楽の机の上に置き言葉を続けた。
「はい。ミシェルと甲斐斗さんの過去には必ず接点があるはずです。しかし二人はそれを覚えていない……消えた記憶を取り戻せばミシェルと甲斐斗さんとの関係がわかるかもしれません」
「こんな時間に何かと思ったら……豪い自信ね。二人の過去に接点があると考える理由はあるのかしら？」
「この本のページを捲ってみてください。そして宮殿の正門に描かれている物を見てもらえばわかります」
神楽が机の上に置かれた本を手に取ると愁に言われた通り数ページ捲ってみる、するとそこには巨大な宮殿の正面が描かれており、見覚えのある剣の絵が刻まれた門が目に入った。
「これって甲斐斗の剣じゃない。それにこの宮殿に描かれている模様って、神にも描かれてたわよね。これをどこで手に入れたの？」
「アビアさんが落としていったんです……と言っても、俺に拾わせる為わざとだとは思いますけどね」
「ふぅん、あの子がね」
アビアの名前を聞いてから神楽の表情がどうも疑り深くなると、今度は一ページ一ページしっかり見つめながら捲っていく。
「後で甲斐斗さんにも見てもらおうと思っているんですが、その前にミシェルにもこの本の見せたいんです。たしかミシェルは神楽さんが連れて行きましたよね、今どこにいますか？」
「こんな晩いのに無理よ、今寝てるんだから。また明日に……あら」
神楽がそう言いながら次のページを捲ろうとした時、眠たそうな表

情で目元を擦りながら隣の部屋から歩いてくるミシェルを見て言葉をとめてしまう。
神楽の視線に気づき愁が振り返ってみると、思ったとおりミシェルが起きてこちらを見つめながら立っていた。
「ほん……」
眠たそうにミシェルが一言そう呟いた、愁は驚いた様子を見せ神楽が手に持っている本に視線を向ける。
「やはりミシェルは何か知っているみたいだ。すいません神楽さん、今すぐミシェルに見てもらいますね」
そう言って神楽が読んでいる本を簡単に取り上げてしまう。そんな愁の態度に神楽は不満を漏らすが、既に愁は神楽に背を向けミシェルに本を手渡していた。
「ちょっと、いきなり渡したと思ったら取り上げるなんて失礼じゃない？それに今すぐ見せなくたっていいじゃない」
「たしかに神楽さんの言う事もわかりますが……どうミシェル、何か見覚えはあるかい？」
「ありがとう……」
手渡された本を両手で受け取りミシェルはお礼を言うと、本を開くことなくまた先程の部屋に戻っていってしまう。
「え……えっ？ミシェル？」
ミシェルの戻っていった部屋に急いで愁が入ると、既にミシェルはベットの上ですやすやと寝息をたてながら眠りについていた。
両手でしっかりと本を抱き締める様子を見てとても大事で大切な物なのはわかるが、今のミシェルから無理やり本を奪おうとは思えなかった。
すると先程の部屋からくすくすと神楽の笑い声が聞こえ、今度は落ち着いた様子で自分のもといた部屋に戻っていく。
「あらあら、寝ぼけたミシェルちゃんに持っていかれちゃったようね。今日は貴方だって疲れてるでしょ？もう休みなさい」
そう言って神楽は小さなあくびをした後、着ていた白衣を壁に掛け

てあるハンガーに掛け、電灯の明かりを少し暗くしてからミシェルの寝ている部屋に歩いていく。
「二人の記憶とさっきの本についての話しはまた明日しましょ。それじゃおやすみ」
「あ、はい。おやすみなさい……」
重要で重大な話しをしたはずの愁だったが、神楽に軽くあしらわれるだけで結局何の情報もミシェルから聞き出す事は出来なかった。
とは言うものの、部屋の壁に掛けられている時計を見れば既に零時を超えており、生き残った兵士達も皆体力を使い果たし寝ている為戦場に行ってまともに起きているのは愁ぐらいである。
このまま部屋にいても仕方なく愁は部屋を出て行くと、当てもなく通路を歩いていく。
「休みなさい。か……」
神楽はそう言ってくれたが、今の愁に休息など必要無い。神楽に会いに行く前に愁は既に休息をとっており、今の愁の体調は良好、最高の健康状態になっていた。
ただそれが、たった数十分眠っていただけで起こった事については未だに愁は考えていた。
不思議な力が体の傷を治し、疲労を消して体力を回復させていた事についてこれもレジスタル、魔法の影響なのだろうと思っているが、不思議な事に眠気すら感じなくなっている。
薄暗い通路を歩いていく愁、ふと窓ガラスの割れた窓の外を見てみると、夜空には三日月が昇っており薄らぐい電灯の灯りより明るく自分を照らしていた。
その月を見た後、愁はふと近くにある階段を上り始める。そして最上階まで上りきると静かで物音一つ無い屋上に出てきていた。
そして静かに、大きく深呼吸して夜空を見上げ耳を済ませた。
誰もいない。暗くて静かで、ひんやりと冷えた風が自分の体を擦り抜けていく、ベットの上で寝るより今の愁にはとても心地良い感覚だ。

このままずっとこの場に立ち止まり夜風を受けていたい……そう思って目蓋を閉じようとした時、突然後ろから声をかけられた。
「あの、こんな時間にどうしたんですか？」
突如声を掛けられ咄嗟に愁が後ろに振り向くと、そこには腰に剣を掛けたあの少年ロアが立っていた。
「君はたしかロア……だったよね。突然後ろから声掛けられたからびっくりしたよ」
「ご、ごめん。別に驚かそうとしたわけじゃないんだけど、こんな時間に人が来るなんて思ってなくてね」
ロアがそう言っていると後ろから龍がゆっくりと近づきロアの背後で立ち止まった。
「大丈夫だよマルス、英雄の愁さんだった」
笑いかけながらロアは龍に話すと、龍は広げていた翼を閉じ愁を見つめていた。
睨んでいるわけではなく見つめている状態、愁は龍の視線に得に悪い気持ちはしないが、まるで自分の心を見透かすかのような瞳の美しさにふと視線を龍から少年に戻した。
「えーっと、俺が英雄？」
「だって今日の戦いで勝利できたのは貴方のお陰だよ。たった一人でＥＲＲＯＲを倒した英雄じゃないか」
「それは違うよ」
冷たく切り捨てるような愁の言葉は簡単にロアの口を止めた。
「ＥＲＲＯＲと戦ってきた人達全員が英雄なんだ。それに俺一人で倒したわけでもないからね」
その後はまたいつものように優しい表情に戻っており、愁のその態度と言葉を聞いたロアは少し俯くと後ろに立っている龍に寄り添いもたれかかった。
「やっぱりすごいや」
顔を上げ龍を見つめながらロアは一言呟くと、もう一度愁をの方を見つめて再び口を開く。

「この世界で戦ってる人達は皆とても強い。本当にすごいし、羨ましい……」

単に力が強いだけではない、揺るがない信念を持ち世界の為人類の為に戦う人達を見てきたロアには苦しい程理解できた。

ＥＲＲＯＲとの戦いで生き残ったＳＶの兵士は僅か数人、艦内で出会ったあの女性、シャイラも死んだことを伝えられ、ロアは酷く後悔していた。

あの時何故助けに行かなかったのか。行こうと思えば行けたはずなのに、死ぬのが怖くてすぐにでもあの場から逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

一人の女性は愛する人を助ける為にたった一人でＥＲＲＯＲと立ち向かっていった。

一人の男性は世界を守る為にたった一人で強大なＥＲＲＯＲに抗い、そして勝利を収めた。

一人の女性は世界を救う為に自らの身を犠牲にしても任務を真っ当した。

一人の男性は皆の為に、そして自分の為に己の力を発揮し尊い命を守った。

「でも僕は……僕は何もしてない。ただ逃げ続けることしかしてない……そんな僕の生きる意味は何だろう、ただ死ぬのが怖いから生き続けてるだけでさ……。この世を生きていくだけの価値ある人間じゃないよね……」

今までずっと逃げてきた、自分の元いた世界からもＥＲＲＯＲから逃げ出し、最後の望みをかけてこの人類最後の世界に辿り着いた少年ロア。

だが彼はこの世界に来てもＥＲＲＯＲとの戦いを選ばなかった。周りがＥＲＲＯＲとの戦いの最中、一人自分の身を心配して震え続ける日々。

安心できた日など一日もない、いつもの心の奥底でＥＲＲＯＲに怯え毎日を生きてきたのだから。

そんな傷心しているロアを見ていて愁の表情から次第に優しい表情は消えていた。
そして愁は目を瞑りながら首を小さく横に振ると、目を開け真っ直ぐとロアを見つめ返す。
「ロア、自分の命に価値なんてつけちゃいけないよ……それに戦うことが全てじゃない。戦う力は正しいことに使われるとも限らないんだ」
罪は、一生背負い続けなくてはならない。
幾ら自分が強い力を得ようと、その力で人類を救ったとしても。
罪が消えることはない、罪から逃れることはできない、他人が自分を許しても、自分が自分を許しても。決して消えることはない。
昔からの親友、そして大切な仲間彩野を踏み潰し。親友の妹、玲を自らの拳で殺した。
そんな自分が英雄？こんな自分が真の強さか？……わからない。
悔やめば悔むほど後悔できる、だが後悔した所で罪は消えない。
懺悔しても、人を救っても、不幸になろうとも、幸せになろうとも、何をしても。罪は消えない。
「それでも選ばなければいけなくて、それでも進まなければならなくなった時に、俺は戦いを選んだ。それだけだよ。だから君が選べばそれで良いんだ。例えどの選択をして後悔することになろうとも、自分に嘘をついてはいけない。君が選択し、君が選んだ道をゆっくりとでもいい、進んでいけばいい」
今の自分がまさにそうだ、だから今を迷い、悩み苦しむロアの姿を見て愁はそっと手を伸ばすと、更に一言ロアに言葉をかけた。
「それと、君は一人じゃない。それも忘れないでね」
勇敢で逞しい愁、そんな愁が今自分に手を伸ばしてくれるのを見てロアは自分の意思で手を伸ばすと愁の手を掴み握手を交わす。
「愁さん……ありがとう！ありがとうございます！」
目に涙を浮かべながら今度は両手で愁の手を力強く握り締め、何度も頭を下げはじめた。

「あ、いやぁ。うん、ははは……」
まさかお礼の言葉を言われる思っていなかった愁にとっては少し照れくさいものの、ロアの苦しみを少しでも取り除けたと思うと安心して笑みが零れる。
「僕決めました！僕も愁さんと一緒にあのロボットに乗ってＥＲＲＯＲと戦いますッ！」
「……えっ？」
顔を上げ笑顔でそう言い放ったロア。最初は何を言われたのか理解できず表情が固まっていたが、ようやく理解した時更にロアが愁に詰め寄りってくる。
「もう逃げない！僕は戦う！だから僕に残っている機体を使わせてください！操縦方法も教えてください！」
突然の頼みとロアの気迫に押されて１歩後ずさりしてしまう愁、更に詰め寄っていくロア、すると後方に立っていた龍が首を伸ばすと鼻先でロアの肩をつついた。
「マルス……心配してくれてありがとう。でも僕は変わりたいんだ、だからマルスには今から進んでいく僕を応援してほしい、背中を押されて歩くだけの人生はもう終わりさ！」
ロアのやる気に満ち溢れた表情に偽りはない、いつもＥＲＲＯＲに震え憶えていたロアが、今は自分の力で運命に抗おうとしている。
龍から見ればそれはとても久しい姿だった、幼き頃見せてくれていた勇敢な剣士の姿。
ロアの言葉を聞き終えた龍は突如二枚の巨大な翼を大きく広げると、長い首を空高く突き上げ口を開けると、まるで犬の遠吠えをするかのように声を上げ夜空を切り裂くように辺りに響いていく。
静かな夜に響くその龍の遠吠えはとても耳に心地よく入り、決して騒がしいものではなかった。

「素晴らしいな」
その時、一人の女性の声が闇夜から聞こえてくると、まるで闇の中

から現れたかのように一人の女性が愁とロアの方へと歩いてきていた。
軍服に身を纏い赤紫色の髪を靡かせる女性、それは紛れも無く女性の姿をしたＥＲＲＯＲ、エラだった。
「これが人間か。我々には無く、人間に有るもの。とても素晴らしい」
そう言いながらエラは二人に近づいていくと、ロアの後方にいた龍が翼を広げると牙をむき出し低い唸り声を上げながらエラは睨みつける。
「警戒というのをしなくていい。私は見届けるだけだ、お前達に直接手出しはしない」
そう言われて簡単にエラの言葉を信じるわけにはいかず、愁もロアも警戒しながら真剣な面持ちでエラの方を向き黙って言葉を聞いていた。
「人間、昨日のＥＤＰでの戦いは全て見せてもらった。『魔法』というのはとても奇妙な力だな、とても興味深い。人間に有るものに対して反応するその『力』。是非もっと見たいものだ」
オリジナルのＥＲＲＯＲに圧倒的力で勝利した真・アストロス・アギト、それは紛れも無く『魔法』の力で手に入れた勝利。
愁が魔力を手にする前、あの時の状況を見ていれば間違いなくＥＲＲＯＲが勝利していただろう。
しかしその予想を簡単に打ち砕いた『魔法』の力にエラは興味を示していた。
伊達武蔵、彼は魔力を持たない人間だったにも関わらず他の人々より『強い』。
そんな人間がこの世に存在していた関わらず、今度はアレほどの『力』を扱う『強い』人間が存在する。
見たい、知りたい、得たい。人間の力、人間の可能性、人間にあって自分達にない強さを。
「そうですか……見るのは貴方の勝手です。好きにしてください、

行こうロア」
エラの言葉を聞き終えると愁は素っ気無く言葉を返しエラに向けて背を向けて歩き始める。
「え？あ、うん……」
まるでエラの姿を見たくないかのような、そんな感じの愁を見てロアも愁の後に続くと一緒に屋内に入ろうとした時、エラは無表情のまま愁に突き刺すような口調で口を開いた。
「人間、私が憎いのか？」
そのエラの一言に愁は足を止めてしまった、しかし後ろを振り向く事なく黙ったまま立ち尽くしている。
「私はあの艦内にずっといたのだからな。お前達の仲間が次々にＥＲＲＯＲに殺されていく姿も見させてもらった」
そう、あの時エラはアリス達のいる艦内にずっと残っており、ＥＲＲＯＲに抗い抵抗する兵士達の最後の姿をじっと見つめていた。
それはとても呆気ないものだった、侵入してきた赤い蛭のようなＥＲＲＯＲに忽ち兵士達は飲み込まれ、寄生されていく。
人間の原型を留めることなく化物へと変わり果てる嘗ての人間、アリスもその内の一人になろうしていたが、シャイラの手によってそれは阻止された。
「そうそう、その中に二人、お前の親しき仲であった女もいた。不思議だった、これから死ぬというのに二人の顔には笑みというものがあって、そしてとても安らかな表情を浮かべて抱き締めあっていた」
不思議なものだった、ＥＲＲＯＲが迫ってくるのを見た人間の表情を見慣れていたエラ。
ほとんどの人間達は恐怖で顔を引きつらせ絶叫しながら死んでいく、それなのに何故か、アリスとシャイラだけはそんな死に方をしなかった。
「アリス……シャイラさん……」
親しき仲、二人の女性……その二つですぐにエラがアリスとシャイ

ラのことを言っているのがわかり愁は小声で二人の名を無意識に呟いていた。
「人間にとって死とは最大の恐怖のはずだ。しかしあの女達は恐怖に怯えてなどいなかった、まるであの男と同じだ」
死は生物にとって最大の恐怖のはず。それなのに死を恐れない生物が存在することにエラは未だに理解に苦しんでいる。
「それなのに何故だ?私にとってそんな人間が手榴弾を互いの体に挟み自爆する姿はとても印象的だった。肉片が辺りに飛び散り頭部が私の足元に転がってきたんだが、その女の表情は――」
「やめろォッ!!」
後ろに振り返り一心不乱な愁の声を聞きエラは続きを話すのを止めると、愁はエラを睨みつけながら更に言葉を続ける。
一瞬でも想像してしまった、血塗れの艦内で二人が抱き合い、最後の時を迎えるアリスとシャイラの姿を。
「もう、それ以上喋るな」
「前から思っていたのだが、その怒りという感情はとても素晴らしいな。きっとそれも魔法を扱うにおいて何かしら意味があるのだろう?」
「黙れ。お前は見届けるだけだ、だから俺達の仲間を殺しもしないが助けもしない、それだけのことだったんだろう?だったら黙って最後まで見ていればいい」
自分の内から込み上げてくる怒りを抑える愁、助けなかったERRORを憎む気持ちが全くないと言えば嘘になる。
だがそれ以上に助けられなかった自分の情けなさが腹立たしく思う一番の原因だった。
無意識に拳を強く握り締め、真っ直ぐ睨むようにエラを見つめる愁。
そんな愁を見ていてもエラは何とも思っていないかのように表情を変えず愁を見ていた。
が……一粒の涙がその目から零れ落ちると、エラはその場に跪き俯いてしまう。

「すまない……」
涙を流しながらもエラは顔を上げ愁に謝った、しかしその表情はいつもと変わらず無表情のままだ。
その思いがけない言葉に愁も唖然とすると、先程まで湧いていた怒りが薄れ自然と拳を緩めていた。
「お前達人間から見れば、今の私は最低最悪の存在だな」
「……わかりません。俺と貴方の考え方が違うように、俺達人間と貴方達ＥＲＲＯＲは全く違う生物だ。俺達人間の常識は通用しないし、貴方達がどのような生物で、どのような思考の持ち主なのかもわからない。ただ、わかろうとしないだけかもしれませんが」
ＥＲＲＯＲの常識とは何か。ＥＲＲＯＲから見て人間はどうのように見えているのか。
人を利用し人を殺し人を消していく、ＥＲＲＯＲがそこまでして人間を殺す理由が未だにハッキリしない。
人の命を奪う事を、ＥＲＲＯＲは何とも思わない。まるで雑草を引き抜いていくかのように何の感情も持たずに淡々と処理していく。
「ただ……俺が見てきた中で人の命が消えた時に涙を流したＥＲＲＯＲは貴方だけだ。貴方は他のＥＲＲＯＲと違うのかもしれない。しかしそれが答えであるかどうかはまだ俺にはわからない」
唯一人間とのコミュニケーションが取れるエラ。人間を知り、そして伝わった、安易に人間を殺してはいけないと。
人間の姿は生物として素晴らしい反応ばかりだ。感情豊かで好奇心旺盛、何十億人もいながら一人一人が別々の意思を持ち活動する。
それが生物。それなのに自分たちＥＲＲＯＲは何なのか、ただただ人間を殺すためだけ活動している。
これが本当に生物なのか、生物本来の姿はこうではないはずだ。そこに疑問を持ったからこそエラは今人々と同じ目線に立って活動している。
「俺達人間を見たいなら好きなだけ見ていてください、様々な人間がいるはずですから」

それだけ言い残してこの場から去ろうとエラに背を向ける愁、それを見てエラは手を伸ばし声を掛けた。
「魅剣愁。私に……人間を教えてくれないか？」
その問いかけに愁は振り向くことなく、エラに向かって一言問いかけた。
「それじゃあ、俺にＥＲＲＯＲを教えられますか？」
愁の言葉をきいた時。はっ、と口を半開きに開けて驚いた様子すると、愁は見てもいないのにそんなエラの様子が思い浮かんだ。
「冗談ですよ。俺は別にＥＲＲＯＲに興味はありません。でも貴方には興味があります。また今度何か話しでもしましょう、それじゃ」
今の愁からは既にエラを憎む気持ちは消えていた。
彼女は人類にとって敵ではない、人間を……生物を理解しようとする唯一の存在だ。
だからこそエラに委ねなければならない、この先の人類の行く末を見つめ続ける存在を。
愁とロアが屋上から立ち去った後、エラは一人夜風に当たりながら真っ暗な外の景色を見ていたが、ふと後ろに振り向き上を見上げると、屋上にある一本のアンテナの上に一人の女性が立っていた。

――――「お話はおわったかなー？」
見下すように優越した笑みをしながらアビアはエラを見つめ、対してエラは然程驚いた様子も見せずアビアに視線を向けた。
「前から考えていたんだが、お前は……人間か？」
他の人間とは何かが違う。アビアもまた魔力を持ち魔法を扱える存在だが、今まで見てきた人間とは違い異様な気配を感じていた。
いつも笑い楽しそうにしているアビア、この女性から『恐怖』や『焦り』といった感情がまるで感じられない。
ＥＲＲＯＲを前にしても驚きもせずにこうして平然と話している。
「すごいおばかさんだね。人間がわからないのに、アビアが言った

ってわかるわけないじゃん」
そう言うとアビアの手に握られたナイフの刃が月の光に照らされると、エラは簡単にその後の展開を予想した。
「その刃物でこの肉体を切り刻む気か。好きにしろ、仮の肉体など幾らでも復元、再生できる。私を殺した所で私は消えない」
恐らく今アビアはエラを殺しにきたのだろう、理由はわからないが好きにすればいい。
ここで反抗してアビアと戦ってもエラにとっては何のメリットもないのだから。
……エラはそう思うものの、もしこれが人間の立場ならどうなるのかふと考えてみた。
苦痛、そして死を恐怖し感情に大きな変化が出るに違いない、が。
やはり今のエラには何も感情が湧かなかい。
「ふーん。それじゃ、好きにするね」
そう言ってニヤリと笑みを見せた途端、アビアの周囲に次々に青白い光を放つナイフが現れ始める。
「魔法か」
魔法により具現化されたナイフ、一度この身で受けておくのも悪くない。一斉に無数のナイフがエラに向かってとんでくるものの、エラは避ける素振りを見せる事無く無数のナイフをその身に浴びた。
次々にナイフの刃が自分の腕や足、体に突き刺さる……だが、ナイフの突き刺さる箇所からは痛みなどが一切感じられない。
光る刃はたしかに身に突き刺さってはいるが痛み所か傷一つついておらず、出血すらおきていない。
「なん、だっ……こ……ぇ……？」
舌が上手く回らない、体を動かそうとするも指先すら微動だに出来ず、完全に体が固まり動けなくなっている。
今までに体感した事のない感覚に表情を変えないエラも動揺の色を隠せず必死に体を動かそうと手足に力を入れるものの全く動かない。
そしてふとアビアがエラの目の前に着地すると、右手に持っていた

一本の青白い光を放つナイフを振り上げ躊躇無くナイフの刃先をエラの胸元に突き刺した。
「ばぁーか」
いつもの笑みを浮かべながらアビアは一言呟くが、その瞳はいつもと違い月夜のような青白い輝きを見せている。
そしてアビアはエラの胸元に突き刺したナイフをまるで扉の鍵を開けるかのようにゆっくりと捻ると、突き刺された箇所から青白い光が放たれはじめた。
その瞬間、エラの脳裏を今まで憶えてきていた知識や情報が駆け巡り始める。その情報量は膨大かつ精密だが、まるで吸い取られるかのように『全て』の情報が胸元に突き刺されたナイフを伝わりアビアが流れている感覚がしていた。
今まで見てきたもの、感じてきたこと、憶えてきたこと……それだけではない、自分という存在すらも一つの情報として見られている。
「へぇー、誕生してまだ1年もたってないのにこの世界について色々調べたんだねー」
そう言ってアビアはエラの胸元から突き刺していたナイフを引き抜くと、エラの体に突き刺さっていた無数のナイフも消えてなくなっていく。
それでもエラの体には全く力が入らず、膝から崩れ落ちる前のめりに倒れてしまい起き上がることもできなかった。
「女……お前には見えたはずだ……私達の存在理由、そして、どう生まれてきたかが……私は……いや、お前は何者なんだ……？」
「あったま悪いなーもー。だからさっきも言ったよねー。貴方にはわからない、理解することもできない存在。それが人間ってことなんだけど」
「私が、人間を理解できないっ……？どういうことだ、私は少しずつだが人間を理解してきている……」
「ふーん、あっそーどーでもいい。ただアビアの邪魔だけはしないでねー。特に、甲斐斗には指一本触れないでね」

面倒くさそうにアビアはエラから視線を逸らすと、やる事も済んだので一人基地の中に戻ろうとする。
「何故お前は私の情報を見た？お前は何を企んでいるんだ……？」
倒れたままアビアは微かに声を出し最後まで問い続けるが、アビアの方はそんなエラを横目で見つめつまらなさそうに言葉をかける。
「別に、アビアはただ甲斐斗と一緒にいたいだけ。ＥＲＲＯＲとかどーでもいい」

――アビアが屋上から去った後、あれから何分たったのか、エラはようやく自力で立ち上がれるまでに回復し一人屋上で外の景色を眺めていた。
とは言っても、ただ荒野が広がっているだけの何もない場所を見つめているだけで、とても見ていられる程の景色というものでもない。
そんな殺風景を一人見つめていたエラは、ふと自分の口元を指先で触れると自分が無意識に笑みを浮かべていることに初めて気づいた。
「ふふっ、そうか。これが、感情か……私はまた一つ、得たのか……」
ペタペタと手の平で何度も自分の顔に触れて確かめていくエラ。
「おもしろい……」
しかし、目を見開き薄らと笑みを浮かべながら呟くその表情は、純粋な笑みとは程遠いものだった。

第１０９話　一刻、時

――ＥＤＰから一日。既に夜は明け日が昇り、眩しい光が東部軍事基地を照らしはじめていた。
その朝日は神楽の寝ている薄暗かった寝室も、カーテンの隙間から差し込む光で徐々に明るくなりはじめており、ミシェルと一緒のベットで寝ていた神楽も目蓋をゆっくりと開きながら目を覚ました。
「っ……！」
が……目が覚めて一番初めに飛び込んできた光景に神楽は思わず息を呑んだ。
そこには平然とした様子で甲斐斗が立っており、神楽が目を覚ましたのに気づいた甲斐斗は下ろしていた手を咄嗟に上げ始めていた。
「おう、起きたか。おはよ……ってぇ！？」
甲斐斗が軽く手を挙げ挨拶しようとした瞬間、今まで寝ていたとは思えない程の速さで神楽はシーツを放り投げ、まず甲斐斗の視界を奪うと、軽く上げていたその腕を掴みそのまま間接にそって曲げ甲斐斗の背中に押し当てると強引にその場に跪かせた。
「甲斐斗ッ！貴方またミシェルちゃんを殺しに来たの！？しかも寝ている時を襲うなんて……最ッ低の男ね」
「ふがッ！？もがもがぁっ！？」
何かを伝えようと甲斐斗が喋ろうとするが、顔を覆ったままシーツが邪魔で何を言っているのかさっぱりわからず、抵抗しようと動こうにも神楽に腕を回され身動きがとれずにいた。
「本当見損なったわよ。さて、これからどうしてあげようかしら？まずこの腕をこー……」
甲斐斗の背中に押し当てていた腕を間接と逆方向にゆっくりと進めていく神楽、このままでは洒落にならないと思った甲斐斗は強引に立ち上がった後大きく体を振るい神楽から離れると、自分の顔に掛っていたシーツをようやく外す事が出来た。

「痛ッてえぞおい！！それに俺は殺しに来たんじゃねえ、ただちょっとミシェルの様子を見にきただけだ！」
「はぁ？昨日あんな事しておいて、貴方の言葉を素直に信じる私だと思う？」
「……うん、まぁ考えてみればそうだな。腕を捻られる所か機関銃で撃たれてもおかしくねえなぁ」
頷きながら腕を組み一人で納得する甲斐斗、すると神楽はしゃがみこむとベットの下から小型の機関銃を取り出すと躊躇無く銃口を甲斐斗に向けた。
「いやおかしいだろッ！！」
甲斐斗が手を前に出し撃つのを止めようとしたが、簡単に引き金が引かれ機関銃からは無数の弾丸が放たれる。
甲斐斗も止めようとしたものの恐らく撃たれることは日頃の神楽を見ていて何となくわかっていた為逃げ腰のまま寝室から急いで出ると、神楽の部屋の出口の前にまで移動し、いつでも神楽の部屋から出られる場所に立った。
「わかった、わかった……。わかったからそれ仕舞え、マジで。なんで朝から撃たれなきゃならねえんだ」
「そんなの聞かなくても分かりきってる事でしょ？ミシェルちゃんや赤ちゃんにした事を考えればまだまだぬるいわよ、こんなの」
眼鏡を掛け寝室から出てきた神楽の手には先程と同じ機関銃がもう一丁握られており、両手に銃を握り締める神楽を見てますます甲斐斗の顔からは血の気が引いていた。
「た、たしかにその通りだしお前の言っていることもわかるが落ち着け！昨日はな……アレだ、俺じゃないんだ。いや俺だけど、俺の中の俺が俺じゃなかったっていうかなんというか……とりあえずその手にもってる物騒な物を下ろしてくれないか？」
甲斐斗がまたいつでも神楽の部屋から逃げれるように心の準備をしていると、突然部屋の扉が開きそこには赤城と愁が息を切らせて立っていた。

恐らく先程の銃声を聞き二人は駆けつけたのだろう。まず部屋の扉が開き甲斐斗の慌てた様子と神楽の姿を見て大体の事情は察する事ができた。

「甲斐斗さん！？貴方またミシェルを……！」

「だあああ！お前もそう来るか！？まぁそう思うよな、当然だ！けど俺はミシェルに何かしにここに来た訳じゃねえ。その……アレだ、俺がこう言うのも変だけど、心配なんだよミシェルが！」

訴えるように必死に身振り手振りで自分の意思を伝えようとする甲斐斗に、赤城は小さく溜め息を吐くと神楽の方を見て呆れながら口を開いた。

「……だ、そうだ。神楽、その銃を下ろしたらどうだ？お前の銃声でミシェルも目を覚ましたみたいだしな」

そう言われてふと後ろに振り返ると、怯えた表情をしたミシェルが本を握り締めたまま神楽の後ろに立っていた。

だがミシェルは銃を手にしている神楽を見て怯えている訳ではなく、その前にいる甲斐斗を見つめて怯えていたのだ。

昨日の出来事が再び脳裏を過ぎる……自分に剣を振り上げ、悪魔のような恐ろしい表情をする甲斐斗。

震えが止まらず、無意識に涙が零れ落ち恐怖で胸が苦しく息が出来なかったあの、出来事――。

『そうだ、それでいい。そして分かってやってくれ、甲斐斗という一人の男を』

ふとあの時の光景の終わりに、その赤城の言葉が聞こえてきた。

今でも赤城の言ったことはハッキリと憶えている。そしてその言葉で、ミシェルは前とは違う、別の見方で甲斐斗を見るようになっていた。

――「なるほど、朝起きたらまずは朝食か。そうだよな」

一人呟く甲斐斗。

神楽の部屋にあるテーブルにはご飯に味噌汁、漬物といい簡単な和

食料理が広がっていた。
それを無言で食べていく神楽、赤城も上手に箸を使い小鉢に入ってる煮豆を摘み食べている。
愁は少しぎこちない様子で席に座っており、ちらちらと横目で甲斐斗を見ながら料理を頂いていた。
ミシェルも練習した通り上手に箸を使いなが小さな口で料理を頬張っていく。
「美味そうだな。というか美味いだろそれ、良いなぁ俺も昨日から何も食べてないんだよ。腹減ったな、あー腹減った。……所でだな、何で俺が拘束されなきゃならねえんだ……？」
両手両足に手錠をされ、一人部屋の隅で椅子に座らされていた甲斐斗は途方に暮れていた。
昨日の一件で神楽から全く信用されていないため、ミシェルの安全を最優先して今こうして拘束されている。
ミシェルの方も今日起きてから一度も甲斐斗と目を合わせず、少し甲斐斗の方に視線を向けたかと思うとすぐ顔を背けてしまう。
「無理もねえな。俺は嫌われて当然の行為を行った、今更ミシェルに何言ったって信用されねえか……」
一度ならず二度までもミシェルに刃を向けた甲斐斗、もはやミシェルが許す、許さないの話しではない。
自分が自分を許せない、そして自分の無様な姿に自分自身が愛想尽きていた。
「甲斐斗さん、これを」
俯いていた甲斐斗だが、ふと声を掛けられ顔を上げるとそこには食事を終えた愁が一冊の本をこちらに指し伸ばしていた。
「本？何で俺にそんなものを？」
「これはただの本ではありません。甲斐斗さん、そしてミシェル。二人の過去に関係すると思われる貴重な物です。是非目を通してみてください」
「俺とミシェルの過去……？」

――俺とミシェルの過去ねぇ、考えたこともない。大体ミシェルはＭＧだ、謎に謎、更に謎に包まれた正体不明の存在、マスターガーディアン。
そんな謎だらけの存在が、昔俺と何か関係があったとしたら。それは俺が俺である時よりも、更に前ということか？
「なぁ……さすがに本を読む時ぐらい手錠外してくれるよな？」
「勿論です。ちゃんと神楽さんから鍵は頂いてきました」
そう言って手錠の鍵を軍服のポケットから取り出し愁は俺の両手に嵌められていた手錠を外してくれたが、両足に付けられている錠は外してくれない。
「足に嵌めてるのは外してくれねえのかよ……まぁいいか。じゃあまず、茶碗と箸持ってきてくれ」
「え？」
「飯食わせろ、腹減ってんだよ」
なんでコイツはそんな以外そうな表情をしているんだ、お前等だけ飯食べて満足かもしれんが俺はそうじゃない。大事な話しがあるなら尚更だ、飯を食わねえと頭も回らんだろ。
「すいません甲斐斗さん、それが神楽さんが人数分しか作ってなくて……」
愁が申し訳なさそうな表情を見せると、その後ろから白衣を身に纏った神楽が不貞腐れた様子で俺の前に現れた。
「神楽……俺の分の飯は……？」
何だかんだ言ったって飯ぐらいはちゃんと用意してくれているはず。と思っていたが神楽の表情を見てその可能性すら無いのだと初めて気づいた。
「愁、私これから医務室に行って皆の様子を見てくるから、後はお願いね。くれぐれもミシェルちゃんを甲斐斗に近づかせないでね」
完全に俺無視の方向で愁にそう話すと神楽は足早に部屋から出て行ってしまう。

生き残った兵士達の容態を診に行くのだろう、まぁそれなら朝早くから出て行くのは仕方ないと思うが……。
腹の虫が鳴いている、拘束されていることより飯が食べれない事の方が俺にとって何倍もの苦痛だった。
「あの」
そんな俺を見かねてか、愁は急いでキッチンの方に向かい何かを取ってくると、右手に味噌味、左手に醤油味のカップラーメンを手に俺の前に現れた。
「カップラーメン……作りましょうか？」
「醤油味で頼む」

――お湯を入れて三分、あの頃から１００年たってもカップメンは何も変わってない。
いや、変わった点が一つあると言える。前までは火薬やら液体スープやら面倒なものが多かったが、今は四角いゼリー状のブロックが容器の中に入っておりお湯を注ぐと解けるというものになっていた。
「腹減ってるとカップ麺もより美味く感じるな。んで、俺とミシェルの過去が書かれてる本をなんでお前が持ってるんだ？」
ラーメンを食べながら唐突に愁に質問を投げかけてみるが、愁は落ち着いた様子で俺の足元に置かれてある本を手に取りページを捲り始めた。
「アビアさんが落としていったんです。しかもわざと……これはきっと何かありますよ」
へぇ、アビアがそんな物を持っているとはな。しかし何故今になってそんな物を俺に？あいつは秘密や謎をどこまで知ってるんだ？
面倒くさいけどやっぱり直接会って聞くしかないのだろう、あいつの事だから焦らし続けて中々本題に入ってくれないと思うけど。
「ほら、このページを見てください。この門に描かれている剣の絵、これは甲斐斗さんの剣ですよね？」
ラーメンを食べている俺に愁が本を開いて見せてくる、たしかにそ

のページには巨大な宮殿の門に描かれた俺の剣があった。
「たしかに俺の持ってる剣だな……ほれ」
とりあえず比較しやすいように俺は手を横に伸ばし剣をその場に出し壁に立て掛けると、本に描かれている剣と見比べて見る。
こう見比べてみてもよくわかる。同じだ、描かれたもの全てが一緒。
一体全体どうなってんだ……。
「ん？たしかにこの本には俺の剣が描かれてるけど。なんでミシェルが関係してるんだ」
「はい、宮殿が描かれているページがあるんですけど、その模様がこの世界に現れた神の体に描かれていた模様が同じなんです。それにミシェルはこの本を見つけた後大事そうに抱き締め肌身離さず持っていました」
また神か。たしかにあの神とやらの装甲にはびっしりと変な模様が刻まれていたがあまり印象に残ってない。大体神とか言われる奴はああいう神秘的な格好してるもんだしな。
「なるほどねぇ、大体わかった。わかったが、俺は何も知らん。結局はミシェルに聞かないといけないな」
ラーメンを食べ終わりスープを残したカップメンの容器を椅子の下に置くと、俺はミシェルがいないか軽く辺りを見渡して見る。
すると壁に隠れながら顔を半分だけ出して俺を見ているミシェルがいた。だが目が合うとわかるとすぐに引っ込んでしまい完全に隠れてしまう。
「……ありがとうな愁。お前はお前で俺達の為にやってくれてるけど、この本に興味は無い」
「えっ！何でですか！？」
「俺とミシェルの過去なんてもうどうでもいい。それに過去が分かった所で今は何も変わらんだろ？」
「変わります！もし本当にミシェルが甲斐斗さんの力を封じているのであれば、甲斐斗さんの事を誤解しているからです！真実を伝えればミシェルも必ずわかってくれます、そうなれば甲斐斗さんの力

は戻るんですよ！？」
……複雑な気持ちだ。
たしかに魔法が使えるようになれば過去に帰る為に必要な条件も揃うし、この世界のＥＲＲＯＲだってすぐにでも消してみせる。
その為にはミシェルが本当に俺の力を封じているのだとしたら、何とかしてミシェルを説得し俺の力を復活させなければならないが……ミシェルが俺の力を封じる理由が昨日言っていた事だとしたら……。
「ミシェルが俺の正体を知っているなら恐れても無理はねえ……けど、どこでどうやって知ったのかが気になるな」
「甲斐斗さん、俺は力の強さより、その力を使う人こそが肝心だと思います。甲斐斗さんは邪悪でもなければ悪人でも無い、優しい心の持ち主だと俺は思っています」
そう言ってもらえるのは別に良いんだがよく真顔でよくそんな恥ずかしい事を平気で言えるなぁコイツは……。
「お前には俺がそう見えるか……」
「甲斐斗さんの周りの人は皆そう思っていますよ。強くて暖かくて優しくて、皆を引っ張ってくれてとても頼りにしてます」
頼り、ねぇ。愁、それはお前の仲間を救えなった俺に対して言えることなのか？
結局俺は葵もエコも、シャイラもアリスも誰一人守れなかった。お前は地下に行ってある間に、何も出来ないまま仲間を失ったんだぞ……それなのにお前は俺を恨みもせず、こうやって親身に話してくる。
お前は俺の胸倉を掴み何度も顔面を殴ったって構わないんだぞ。何故助けなかった、どうして救えなかったって、怒りに身を任せるもんだろ普通。
「愁、ミシェルを……呼んできてくれないか？」
「わかりました」
物陰に隠れながら俺を見てくるミシェル、そんなミシェルの元に愁

は行くとしゃがみ込みミシェルと同じ視線で話しかけると、小さく頷いたミシェルは愁と手を繋いで俺の前に出てきてくれた。
ミシェル。ああ、こうやってはっきりと目の前に立ったお前の姿を見たのは久しぶりだ。
こんなにも小さくて、弱々しくて、おどおどしていて。でもいつも俺に笑みを見せてくれたよな。
俺はゆっくりと手を伸ばしミシェルの頬に触れようとしていた。だがミシェルは愁の手を強く握り締めると、俺の手を避けるように一歩後ずさりしてしまう。当たり前だな……。
「ミシェル、お前は俺を知っていたか？」
出来るだけゆっくりと、優しく問いかけてみる。するとミシェルは小さく首を横に振ってみせる。
「わからない……」
わからない、か。……なあアビア、お前はこれでもミシェルが嘘をついてるって言うのか？
本当にミシェルは俺を最初から騙し、利用していたのか？ミシェルは本当に俺の事を嫌っているのか？
俺もわかんねえよ。でも、それって俺がミシェルを信じてないからだよな……疑ってるから、俺はこうやって悩んでるんだよな。
「でも……」
ミシェルの言葉は続いていた。愁の手を強く握り締めながら何かを言い出そうと勇気を振り絞りながら何かを伝えようとしている。
「こわい……かいとじゃなくて、かいとのなかにいる、なにかが……」
俺の中にいる何かが怖い？まさかミシェルは俺の中にいる複数の力の存在に気づいているのか？
だがこれでようやく理解できた、はっきりと分かってやる事が出来た、ミシェルの一言で確信がもてた。
「だから、わたしは……かいとのこと……きらいじゃ……う、うぅ……ぇぐ……」

泣いている……ミシェルが俺を見ながらぽろぽろと涙を零しながら泣いている。
それでも俺から目を逸らしたりせずに、まるで何かを訴えかけようとするその瞳を見て俺は……。
「ミシェル！！」
わからない。何なんだろう、こういう感情って。胸あっつし、苦しいし、頭が回らん。真っ白だ。
俺はミシェルを名を呼ぶと座っていた椅子から降りそのままミシェルを抱き締めていた。
ダメだよな。突然抱き締めたりなんかして。驚いただろうな……。
「か、かいとぉ……ごめ、ん……ごめんなさぃ……！」
咽び泣きながらミシェルは俺の耳元で何度も謝ってくれている。
もしかすると、ミシェルは俺と出会った頃から俺の中から何か恐ろしいがある事を分かっていたのかもしれない。
それでも俺と日々を過ごしていくにつれて俺自身を一人の男として見てくれていたのだろ。だから俺とミシェルの思い出は嘘や偽りなんて一つも無い。それにミシェルは知らなかったはずだ、自分がふと抱いていた恐怖に対しての警戒心が、俺の力を封じている元凶だなんてことを。
ああ、恐れられて無理は無い。当然だ、俺はこの手で何千何万……数え切れない程の命を奪ってきた。
俺の中にある何かにミシェルが恐怖しているのであれば、ミシェルの恐怖を取り除く事は不可能に近い。
俺の中に俺がいるように、ミシェルの中に俺を恐れるミシェルがいるのかもしれない。
でも、今目の前にいるミシェルは俺を恐れているわけでも無いし、嫌いでもないんだ。それが分かっただけで俺は……。
「謝るのは俺の方だ……ごめん……そして、話してくれてありがとな……」
これでまた一歩、大きく前に前進できた。

勿論俺だけじゃない、ミシェルと一緒にだ。そしてこれからも一緒に解決していく。
ミシェルと話し合わなければならない、そして俺達の知っている事を出来限り伝え合い、謎や疑問点を解決していく。
そして帰るんだ。俺がもといた世界、俺がもといた時間、俺がもといた場所に。
「甲斐斗さん、ミシェルと一緒に過去の事を思い出していきましょう。二人はこんなにも仲が良いんです、きっと力も取り戻せますよ。後は神楽さんに頼んで過去を思い出させる方法を考えてもらわないと……」

「それは無理だよー」
……思い出した。もう一人、問題を解決しなければならない奴がいたな。
ミシェルを抱き締めながら見上げてみれば、愁の後ろから相変わらず笑みを浮かべるアビアが近づいてきていた。
「二人の過去と記憶は、誰も干渉できないもん……ねぇ、アビアが前に甲斐斗にキスした時あったよね」
アビアに言われて思い出した、ミシェルを助け出したついでにアビアまで連れてきてしまった時の事だ、たしかあの時はミシェルを助ける為に嫌々口付けをしたような……あの時の出来事はテトの野郎にボコボコにされて余り憶えていない。
「ああ、あったな……そう言えばあの時ミシェルが頭を抱えて苦しそうにしてたが……」
「あれはねー、アビアが甲斐斗の記憶を呼び戻して見てみようとしたからなの」
なっ……にを突然言い出すかと思えば、こいつやっぱり色々と隠してやがったんだな。
「なんでお前が俺の過去を戻す必要があるんだ？俺の過去に興味あんのか？」

「うん、だってアビアは本当の甲斐斗が見たいんだもん……記憶を取り戻せたら、また一つの甲斐斗が見れる。……けど、それは無理みたい」
「無理って、なんでだ？」
「無理に引き出そうとすれば第１ＭＧがどうなるかわからない。多分だけどー、甲斐斗が記憶を取り戻す事で第１ＭＧは何かを恐れてるのかもねー」
何かを恐れている？それはもう一人のミシェルが俺が記憶を失う前の俺を恐れているということか？
しかし俺は学生の頃の記憶はたしかに残っている、となると記憶が曖昧なガキの頃か、それより前の記憶が何か関係しているのか……？くそっ、ここにきてまた謎が増えやがる。
「それともー。二人の大事な思い出を見られたくないのかも～？」
そう言って視線を下げるとミシェルを見つめ首を傾ける。するとミシェルはアビアから目を逸らし何も言えないまま立ち尽くしていた。
「にしてもアビア、お前にそんな力があるなんて知らなかったぞ。そろそろ教えてくれても良いんじゃないか？お前が何者なのか」
正体がわからないのはＥＲＲＯＲとお前ぐらいなんだよ、人の記憶を覗き見る力に、無数のナイフを自在に操る力、そして殺されてもすぐ生き返る再生力。そろそろお前が何者で、何の目的で俺に近づいているのか正直に話してもらいたいものだ。
「アビアは、アビアだよ」
惚けたような言い方をするアビアだが、ここまで言ってそんな態度を本気で貫き通す気なのか？こいつは……。
「そう言うことじゃねえ。わかるだろ？話してみろよ、互いを理解しあう事って大事だろ」
「アビアは……アビアだもん……ねぇ、アビアは甲斐斗に今まで沢山の事教えてきたよね」
「ああ、お前には色々な事を教えられ助けられてきてるよ、感謝してる」

「そっか。ね、アビアの約束憶えてる？」
約束？たしか俺がＥＤＰに行く前、ミシェルを守っていてくれれば何でもすると言った話しだな。
「ああ、憶えてる。お前に何でもしてやるって言ったな、今ここで言うか？」
「うん、じゃあ甲斐斗に一つだけ、アビアに教えて欲しい事があるの」
「おう、俺が知ってる事で良ければ何でも話す。言ってみろ」

「ありがとう、甲斐斗」
アビアが笑みを見せたその瞬間だった、俺の胸に強い衝撃を感じたのは。
何をされたのか分からない、ただいつの間にか目の前に立っていたアビアの右手が俺の胸元にあった。
まるで何かを振り下ろしたかのような、ふと視線を下げると、青白く光るナイフの刃が根元まで俺の胸に突き刺さっていた。
……どういうことだ？思考が上手く働かない、アビアにお礼を言われて、それで何を俺から聞いてくるのかと思ったら、どうして俺の胸にナイフを突き刺すという結果になるんだ。
「教えて。アビアが何者なのか」
は？……アビアの一言で俺の思考がさらに混乱していく。
今まで楽観的な態度で、何もかもお見通しと言わんばかりに謎を吹っかけてきたアビア。
しかし、こいつは自分が何者なのか今までわからずに生きていたというのか？いや、アビア自信、自分に関しての記憶を失っているのかもしれん。
……って、だから何でそれで俺にナイフを突き刺さないと――ん？
ナイフを刺された所から痛みや出血は無い、だがその代わりに白い光を発行しながら俺の胸元から今まで過ごしてきた記憶の光景があふれ出してくる。

それはまるで写真のフィルムのように、何枚もの繋がった記憶の場面が映し出された光景が繋がっており、その記憶は全てアビアの胸に吸い込まれていた。
俺の記憶を知る事がお前を知る為の手がかりになるのか？それってつまり、俺とお前は遠い昔、出会っていた事があるってことじゃねえか……！何故それをお前は知っている！？
俺がアビアから記憶を吸い取られていた時、自分の左手を強く握り締める感触が伝わってきた。
「う、ううっ……ぁ……」
そこには苦しそうな表情を浮かべ今にもその場に倒れてしまそうなミシェルがいた。
やはり、俺の過去、そして記憶に他者が干渉するとミシェルに影響が及ぶらしい。
それをさっき俺の前で言ったばかりなのに、なんでお前は俺の過去に見ようとしてんだよ！まさかお前これは約束だから強制的に俺の同意無しでも見たいって言うのか！
このままではまずい、だが俺に止める権限は無い。何でもすると約束したのだから……しかし、このままミシェルを苦しませる訳には――ッ！？

――その時だった、一枚の記憶の映像が俺の目の前に飛び込んできていた。
一瞬にして目の前の光景が変化し、先程まで室内の光景ではなく、どこかの建物の中庭に俺は立っていた。
真っ白い建物の中にある中庭、噴水があり、花畑が広がり、この囲っている建物は城か、宮殿のようなものに見える。
そして聞こえてくる微かな笑い声、その声を聞いて俺が後ろに振り返ると、そこにも花畑が広がっており、そしてその中には幼い少女達が座っていた。
一人でシャボン玉を吹いている少女がいれば、二人で走り回る少女

もいる、……ん？ミシェル、ミシェルがいるぞ……。
数人いる少女達の中に、帽子を被った少女と話しをしているミシェルがいた。
楽しそうに会話して笑っている、相手は誰だ？ミシェルの顔は見えるものの帽子の少女は俺に背を向けて顔が見えない。
無意識に俺はその少女に近づき、座って話している少女の肩に手を置いた。
すると少女は俺に気づき後ろに振り向いてくれる、その時風が吹き少女の被っている帽子が簡単に飛ばされた。
桃色の髪……その少女が見せる笑みを俺はいつも見ている、今と何も変わっていない、アビアの可愛らしい笑みだった。
そしてその瞬間、俺の右腕が、誰かに掴まれた。

――――「もうやめて！アビアちゃんッ！」
ミシェルが声を荒げアビアの名を叫んだ。その声を聞いて俺は瞬きをすると、先程まで見ていた光景は消え去り、自分が元いた室内で立ち尽くしていた。
体には何の異常も無いが、ただ一つだけ変わったことと言えばアビアが俺の胸元に顔を埋め抱きついている。
手を握っていたミシェルはアビアを涙目で見つめ続けている。
しかしアビアは何の反応もしない、というか……気を失っているのか？これは……。
そう思うとアビアの体重が徐々に俺にかかってくるのがわかる、少し後ろに下がりアビアが倒れるのを防ごうとしたが、今まで足に錠をしているの忘れていた俺は大きく倒れてしまった。
咄嗟に左手を放しミシェルを巻き込まないようにしたが、後ろに椅子があったにも関わらずど派手にこけてしまった……。
「だ、大丈夫ですか！？」
愁が急いで俺の元に来てアビアを抱き上げると、俺は今さっき打った腰を撫でつつ先程まで座っていた椅子に再び座りなおす。

「腰が痛てえ、とりあえずアビアをベットまで運んでくれ、どうやら気を失ったみたいだ」
全く、一体なんだって言うんだよ。
たしかに今まで俺は自分の過去について興味は無かった、別に今が楽しければ俺はそれで良いからな。
けど、ここまで俺の過去が複雑で何か謎ーな感じになっているなんて……痛い痛い、頭痛い。
それに、少なからずミシェルとアビアとの関係が俺にはあるみたいだしな……。
「ミシェル、大丈夫か？」
ふと棒立ちしたままのミシェルの肩に触り声を掛ける、するとミシェルの体は簡単に倒れそうになり、俺は急いでミシェルの体を引き寄せ受け止めた。
「お前も気を失ったのか……」
やれやれ……一体この先どうなる事か、俺にはわからん。
俺の過去、ミシェルやアビアとの関係はそんなに急いで知りたいわけでもない。
それにそれでミシェルを傷つけることになるのなら尚更だ。急がば回れという奴だな。
しっかし俺が過去に戻った後はやる事がいっぱいだな、ＥＲＲＯＲを止めなきゃならんし、それに俺の過去について、少なからず知っておかなければならん。忙しくなりそうだ。
忙しくなると言えば俺もこれから過去に帰る為の準備をしなきゃならんな、俺達のＥＤＰは残り２回、その内の１回はＢＮだ。ＢＮがＥＤＰをしている間にでも過去に帰る為の準備を終わらせておきたい。
「おーい愁、ミシェルも気を失ったみたいだ。ベットに寝かせといてくれ」
本当なら俺が抱かかえて連れていきたいが、足の自由も奪われている今ぴょんぴょん跳んでいく訳にもいかず、結局戻ってきた愁にミ

シェルを渡して俺はまた椅子に座った。
腕を組み何かしら考えようとしてみるが、頭は思うように働かず何も思い浮かばない。
こういう時は目を瞑って眠るに限る、大体考え事は余り好きじゃないからね、俺は椅子の背もたれに体重を掛けると腕を組んだまま静かに目蓋を閉じた。

第１１０話　導火、予兆

――ＮＦ・ＳＶが実行したＥＤＰは多大な犠牲を払ったものの任務を達成。
ＥＤＰの戦闘時に発生した強力な電磁波によりＢＮと連絡の取れなかったＮＦ・ＳＶだったが、ＥＤＰから三日後、初めてＢＮとの交信に成功していた。
東部軍事基地の司令室で赤城は一つの席に立てかけられてあるモニターの前に立ち、真剣な面持ちでモニターに映る男、風霧紳を見つめていた。
『なるほど、ＮＦもＳＶも壊滅状態か……』
赤城の報告を聞いても顔色一つ変えない紳、だが心情は表情とは逆で焦りと迷いが交差していた。
たしかに今回のＥＤＰでＮＦとＳＶが甚大な被害を蒙ることは予想できていた、できていたが……まさか全滅に近い状態になるとまでは予想を反していた。
ＳＶの親衛隊の『アストロス・ライダー』、『アストロス・アギト』が存在し、対ＥＲＲＯＲ用戦闘兵器である『羽衣』の出撃、更には神をたった１機で勝利した『魔神』が戦場に出ていたというのに、このＥＤＰの結果は明らかに酷いものだ。
「ＥＲＲＯＲを見縊っていたわけではない、が……まさかここまで叩き潰されるとは想定外だったな。もう我々の残存勢力と言えばアストロス・アギトが１機と、私の乗るリバインが１機、後は甲斐斗が乗る機体ぐらいだ」
赤城の言葉に紳の視線は鋭くなる、ＮＦとＳＶに残された戦力はたった３機。残る最後のＥＤＰはＢＮとＳＶ、そしてＮＦの合同作戦になるはずだったが、これでは余りにも数が少なすぎる。
『全てはＢＮに掛かっている。とでも言いたそうだな』
もし、ここでＢＮがＮＦ・ＳＶと同じような結果になれば最後のＥ

ＤＰがどうなるか、そんな事は簡単に予想が出来る。
間違いなく人類は敗北する。数機でＥＤＰを実行しＥＲＲＯＲに勝てるはずが無い、相手が圧倒的物量で押してくるのに対し、こちらはたった数機で立ち向かわなければならない。それはもはや戦争と呼べるものではない、ただの悪あがきだ。
「当たり前だ、ＢＮが勝利してもらわないと我々の勝利が無駄になる。例え生き残りが一人だとしても……必ずＥＤＰを成功させろ」
紳の問いに赤城の視線を鋭くなる、両者は睨みあうように視線を合わせると、そのままじっと見つめあい口を開かない。
『当然だ。俺達は必ずＥＤＰを成功させＥＲＲＯＲをこの世から排除する。無論、最後のＥＤＰも同じ事だが……結果は目に見えている、『人類の勝利』。これしかない』
「ああ、人類の勝利……それしかないさ」

――「で、お前一人で全部説明してきたのかよ」
神楽の部屋に戻ってきた赤城の話しを聞いた甲斐斗は腕を組みながらソファに座ってくつろいでいた。
「まあな、それに報告など一人で出来る。大勢もいるまい」
キッチンに置かれてあるコーヒーメーカーを使いカップにコーヒーを注ぐ赤城、それを手に取り甲斐斗の座るソファに座ると、背もたれにもたれ掛かるとゆっくりとカップを口にする。
「そりゃそうだが……にしても、次はＢＮのＥＤＰか……あいつ等本当に勝てんのかよ、まぁ勝ってくれねえとこっちが困るんだが……どうした愁、そんな面して」
甲斐斗の前のソファに座っている愁は先程から俯いたまま深刻な表情をして眉一つ動かさない、なにか考えに没頭してるのはわかるが余りにもリアクションが無いので甲斐斗から声をかけてみた。
「えっ？あ、すみません。今回のＥＤＰを見る限り、恐らくＢＮにも相当な被害が出ると思いまして……」
「ＢＮにはお前の仲間がいるんだろ？心配するのも無理はねえが…

…そうだ、ＢＮのＥＤＰが終わるまでは俺達自由なんだ。それなら俺はここで過去に帰る為の準備に取り掛かる、もし良ければだが愁や赤城も手伝ってくれるか……？」

準備と言っても具体的に何をするかまだ決まって無いが、とりあえず人手が多い方が楽が出来ると甲斐斗は思っている。

「すまない甲斐斗、私は一度ＢＮの本部に戻ろうと思う」

「おお、ＢＮの本部にか。なんでだ？」

「由梨音が私の帰りを待っているんだ、ＮＦのＥＤＰは成功した事を自らの口で伝えたい」

そう言うと赤城は由梨音の姿を思い浮かべていた、きっと今ごろ病院のベットの中で自分の無事を心配しているに違いない、だからこそ早く出会い由梨音に安心してもらいたかった。

「なるほど、わかった。んじゃＢＮの本部でゆっくりしてこい、俺達もＢＮのＥＤＰが終わるまではここにいると思うが、どーせまたＢＮの本部に戻らなきゃならんからな」

「すまんな、力を貸せなくて」

赤城がどれだけ由梨音のことを心配しているのかなど、この場にいる甲斐斗と愁は十分に理解している。むしろ早く由梨音に会って二人でゆっくり過ごして欲しいとも思うくらいだ。

「そこまで気にしなくていいっての。それに赤城の代わりに愁が１０倍動いてくれればいいことだし。な！」

「その、すみません甲斐斗さん。実は俺も用事がありまして……」

「えー……」

「ロアに機体の操縦を教えたいんです。彼も俺達と共に戦ってくれると言ってくれましたからね」

「ほぉ、あいつがそんな事を……少しは男になったって訳か、わかった。んでもここに残ってる機体って俺達の機体以外に何かあったか？」

「その機体について何ですが――」

急に黙り込み俯いてしまう愁、そして徐々に顔を上げると赤城の方

を向いて口を開いた――。

――一方、現在ＢＮはＥＤＰの開始地点へと向かうべく艦隊は列を作り現地に向かっていた。

ＥＤＰの開始地点に到着するまでにはまだ6時間以上掛るものの、既に艦内はＥＤＰへの緊張で張り詰めた空気が立ち込め、兵士一人一人が落ち着かない様子だ。

……ただ一人、穿真を除いて。

「おい羅威！レジェンドクロスの１２話が再放送してるぞ！」

羅威の部屋に入ってきた穿真の第一声がこれだ。羅威は一人椅子に座り考え事をしている途中だったが、穿真の言葉を聞いて今まで自分の考えていた事が綺麗に消える程呆れ返ってしまう。

が、これも穿真らしいといえばそうだ。穿真は羅威の部屋にあるテレビの電源をつけると、リモコンを使いチャンネルを回していく。

そして再放送を見つけると部屋に置いてある椅子に座り肘をついて淡々とアニメを見ていく。

穿真に釣られて羅威もふとテレビを見つめると、そこには一度見たことあるテレビアニメが再放送されており、丁度ロボットの合体シーンが映っていた。

「やっぱロボットは合体だよな～」

合体したロボットの姿を見て腕を組み満足そうに頷く穿真、そしてこれからロボットの戦闘シーンが始まろうとした時、突如アニメ番組は終わり臨時ニュースの画面へと切り替わる。

『――により、ＮｅｗＦａｃｅ・Ｓａｖｉｏｒｓの合同で行われたＥＤＰは甚大な被害を蒙りましたが無事作戦を成功を収めました。ＥＲＲＯＲの増殖ラインは一つ消え、残るはＥＲＲＯＲの巣となる箇所は残り2箇所となっております』

ＮＦ・ＳＶの行ったＥＤＰの結果がニュースとして全世界に放送されている、ＮＦとＳＶの受けた被害は短く伝えられ、勝利という結果を出した事によるＮＦとＳＶの兵士としての勇猛さと果敢さを称

えていた。
「なあ、お前も聞いたと思うけど。今話してるＥＤＰの生存者が何人か知ってるか？」
問いかけてみるものの羅威は無言でテレビを見つめ続ける、それを見た穿真は構わず言葉を続けた。
「１５人。ＥＤＰの戦場で生き残った兵士がたったの１５人しかいねえんだよ……十数万もいた兵士が、この様だ……その中でＳＶの生存者は５人、その内一人に愁がいるんだってよ。あいつすげーな」
「ああ、そうだな」
「……もう無理だよな。仲直りなんて」
その穿真の言葉に二人の沈黙が続く。どんな理由があろうと彩野と玲を殺したのは愁の他にいない。
もう今更笑顔で語り合える仲などではない、今更協力などできるはずがない、今更『親友』などと呼ぶことなどできない。
もし次に会う時、どんな顔をして会えばいいのかわからない、なんて言葉を交わせばいいのかわからない。
「まっ、今はあいつの事はいいか！俺達は来たるＥＤＰの為に勇気と情熱を抱いてないとな！」
無邪気に明るく振舞う穿真に、羅威は小さく笑って見せると一言呟いた。
「ありがとな」
「ん？」
突然の礼の言葉に穿真は首を傾げるものの、羅威は構わず言葉を続けた。
「穿真にはいつも助けられてばかりだからな。本当、お前がいてくれると心強いよ」
「おお、まさか羅威が普通に俺を褒めるとは……大丈夫か？」
「何がだよ！……ったく、やれやれ……」
穿真と話している内にまたいつもの雰囲気に戻っていることに羅威は気づいた。

「これから決戦が始まるんだ、元気出しとけよ！俺は元気をチャージする為に飯食べに行ってくる、羅威も行くか？」
「いや、もうすぐアリスが来るんだ。お前は一人でカレーを食べてきてくれ」
「カレー限定かよ！まぁ元気をチャージするにはもってこいの飯だし……んじゃ食べてくるわ、あーばよっ」
そう言うと穿真は椅子から立ち上がり部屋の出口まで向かうと、ひらひらと手を振りながら部屋を後にしようとした時、一人の女性が羅威の部屋に入ってくる。
「噂をすれば何とやら。ようアリス」
「こんにちは。穿真君もいたんだ、二人で何話してたの？」
「なーに、いつもどおり下らない話をしてただけだぜ」
「お前が言うなっ」
穿真の言葉にいち早くツッコミを入れる羅威、いつもと何一つ変わらない雰囲気にアリスもふと笑みが零れた。
「んじゃ、俺はカレーを食べる任務が残ってるから」
穿真はまた軽く手を振るとそのまま部屋から出て行ってしまう、部屋の扉が閉まり部屋には羅威とアリスの二人きりとなった。
「皆緊張してピリピリしてるのに、穿真君は相変わらずだね」
安心したようにアリスが口を開くと、手に持っていた医療鞄をベットの上に置き自分もまたベットの上に腰を下ろした。
「それが穿真の良い所であって強さでもある……俺もあいつには何度も助けられたよ」
羅威は着ていたシャツのボタンを一つずつ外し脱いだシャツをソファに掛けると、上半身裸のままアリスに背を向けるようにして横に座った。
そしていつも通りアリスは羅威の背中や肩、そして腕に触れ診察を始める。
「大分動かせるようになったみたいね、感覚も取り戻してるみたいだし」

あれこれマッサージをしつつ今度は羅威の正面にアリスは座ると、羅威の腕がどれほど回復しているのか確かめていく。そんな彼女の姿を羅威はじっと見つめ続けていた。

「ね、腕が完治したら何かしたいな～ってことある？」

そんな羅威の視線も露知らずアリスは熱心に羅威の両腕をマッサージしながら口を開く。

「ある」

一言羅威が呟くと、アリスはマッサージを止め胸元に止めていたボールペンを摘むと、それを羅威の前に出した。

「はい、いくよー」

答えたのに何の反応も見せないアリス、そしてボールペンを見てまた例のあれをするのだと思い、羅威は握り締めた右手を出し、人差し指と中指だけを突き出す。

それを見てアリスはその指の間に目掛け摘んでいたボールペンを落とした。

見事に羅威の指はボールペンを挟み落ちるのを阻止、リハビリを続けてきて初めての成功だった。

「うん、もう大丈夫みたいだね」

「……何か、すごい大雑把な診断だな」

本当にこれだけの事で大丈夫と言い切るアリスに複雑な面持ちの羅威だが、アリスは笑顔で鞄の中から取り出したカルテに内容を書き込んでいく。

「いいのいいの、この前精密検査した時から既に羅威の両腕は大分良くなってきてたもん。今の羅威なら何でもできるよ！」

ＥＤＰ結構前、既に羅威の体は精密な検査を通し両腕自体は完治している事が明らかになっていた。

だが以前と同様な動きが出来るとは限らない、腕の機能が回復したからと言って今まで不自由な腕を動かしていた後遺症は少しは残っている。

「さーて、腕も完治したってわかったことだし。一番初めにしたい

事は何かな～？」
嬉しそうにカルテに書き込むアリス、羅威は指で挟んだペンをくるくると回してみると、今度は左手で華麗にペンを回しはじめる。
一見すれば完全と言えるほど羅威の両腕は回復した。腕は自由に動き、指に力が入る、今まで感じていた違和感はアリスのマッサージが終わった後から綺麗に消えていた。
「私が当ててみようか、羅威のことだから腕が完治したってわかったらすぐ機体に乗って操縦の練習をする！」
今まで神威の能力によって腕を動かしてきた羅威だが、それに頼らずとも自らの意思と力で機体を操縦する為にＥＤＰの前に軽く慣らしておくのも悪くない。
それにアリスは羅威が真面目なことを知っているから、きっと直に機体の所にでも向かうと思っていた。
「あ、それとも以外に穿真君とテレビゲームでもするのかな――」
色々と羅威のやりたそうな事を並べながらカルテを書いているアリス、その途中に羅威の様子を見ようと正面を向いた瞬間、そのか弱い体は力強い腕で軽々と引き寄せられていた。
「これが俺の、一番初めにしたかった事だ……今までありがとう、アリス」
突如ベットの上で抱き締められ羅威から囁かれた言葉に、アリスは思考がついていけず抱き締められたまま微動だにできず、一言も言葉が出せない。
「お前がいつも側にいてくれたお陰だ。俺が両腕の自由を失う前からそうだ、いつもその明るい笑顔に俺は助けられてきた。親身になって俺の世話をしてくれて、本当にありがとう」
そう告げて抱き締めていたアリスをそっと離し顔を見つめると、放心状態のアリスの目からはポロポロと涙が零れ落ちていた。
「あ、あれ。あはは、どうしよぅ、びっくりしたからかな……涙が、勝手に……」
またいつもの笑顔でアリスは白衣の袖で目元の涙を拭っていく。

「これからも、よろしくな――――」
「羅威……んっ」
二人は見つめあい、羅威にそっと両肩を掴まれ優しくベットの上に押し倒されても、アリスは自分の全てを羅威に委ねるかのように何の抵抗もせずベットの上に寝かされる。
その頃には羅威の顔も赤く火照り、互いに赤い顔をしたまま見つめあっていた。でも動いてる、二人の顔の距離はゆっくりと近づいているから、そっと目蓋を閉じ、暖かくて優しくて、二人のやわらかいものが触れたら、きっとその後彼女は答えてくれる。だから彼も言うんだ、答えてくれた彼女に負けないぐらい、自分の素直な気持ちを――――。

――羅威の部屋を出た後、一人艦内にある食堂に向かう穿真。艦内では慌しくＥＤＰの最終準備に取り掛かる兵士達がいるが、先程見ていたアニメのＯＰ（オープニング）曲を鼻歌で歌いながら相変わらずの態度で歩いていく。
すると、携帯電話を片手に誰かと喋りながら歩いている香澄を発見。丁度自分と向かう方向が同じなので電話で会話している香澄の後ろをついていくように歩き始めた。
いつも人前で、特に羅威の前では不貞腐れた態度の香澄だが、今は誰かと楽しそうに喋っているのを見て新鮮味を感じる。
「うんうん、私は大丈夫だから。ユニカちゃんも気をつけてね、うん……えっ？……わかった、伝えとくね」
それを最後に香澄は通話を切り携帯電話を軍服のポケットにしまうと、急に立ち止まり後ろに振り返った。
その表情は当然険しく、盗み聞きをしていた穿真をただただ黙って睨んでいる。
「ま、まぁそう睨むなよ。偶々進行方向が同じだっただけじゃねえか」
「ふぅん。それで、後をついてくるってことは私に何か用なの？」

「いんや、別に用という用はねえけど……お前って可愛らしい表情もできんじゃん」
「……は？」
羅威の前では見せたことのない香澄の笑みを見て穿真はそう言うと、突然思いもよらぬ言葉を聞いて香澄は呆気にとられると、穿真は更に言葉を続ける。
「羅威の前でもそうやって楽しく笑ってやれよ。俺達は同じ部隊、仲間なんだからよ。まっ、それはお前もわかってると思うけどなぁ」
「あんたねぇ……！」
「おっと」
殴りかかろうと前に詰め寄ってくる香澄の横を軽々と擦り抜ける穿真、いつものようにへらへらと笑いながら香澄と少し距離をとる。
「羅威のどこが気に食わないんだ？クロノの事を未だに気にしてるのか？今のままだと苦しいだけだろ？……いい加減素直になっとけ。俺ぁ羅威の命令でカレーを食べて来るからよ、それじゃーな！」
言いたい事を言うだけ言うと、穿真は香澄の返答を聞くことなくまた一人通路を歩き去ってしまう。
「ちょっと！穿真！……何なのよアイツ……！」
電話の最中の笑顔は何処へやら、険しく不機嫌な表情の香澄は去っていく穿真の後ろ姿を睨んでいた。
だが、先程穿真に言われた台詞が深く胸に突き刺さり、穿真が去った後も香澄はその場に立ちつくしたまましばらく動こうとしなかった。
「素直、か……」
――今度はＥＤ（エンディング）曲を鼻歌で歌いつつ、ようやく食堂に辿り着いた穿真。
まだ朝方で１０時を回ったばかりであり食堂に人気は余りないものの、気にせず穿真はカウンターの前に並ぶとおぼんを手にとりカレーを注文する。

熱々のご飯にカレーを装い、どこに座ろうかと辺りを見渡してると、雪音とエリルが一緒にランチを食べているのを見て近づいていく。丁度雪音は穿真に背を向けた状態で気づかなかったが、エリルは近づいてくる穿真に気づき軽くを手を挙げ挨拶をすると、穿真のおばんの上に置かれたカレーを見て軽く呆れていた。

「よーう、エリルに雪ちゃんじゃないか。何だ、二人も元気をチャージする為に飯食べてたのか」

「穿真……朝からカレーだなんてどうしたのよ、羅威じゃあるまいし……」

「羅威からの命令だからな！それに元気をチャージするにはもってこいの飯だろ？」

そう言って穿真は雪音の横の席に座る。テーブルを見ると皿の上に2枚ほどサンドイッチが並んでおり、雪音はサンドイッチを食べている途中だった。隣に穿真が座ったことに気づいた雪音は急いで口の中にあるサンドイッチを飲み込むと、隣にいるにも関わらずペコペコと頭を下げて挨拶をしてきた。

「おはようございます！」

「おはよー、ごめんなぁ朝から隣でカレー食べちまって」

既に穿真はスプーン片手にカレーを頬張っていると、雪音は笑みを見せながら首を軽く横に振る。

「いえいえ気にしないですよ！ご飯は一緒に食べたほうがおいしいですもんね」

「雪、無理しなくていいのよ。女の子同士で楽しく喋ってる所に朝からカレーの匂い漂わす穿真が来たらちゃんと嫌ですって言わないと」

雪音の優しい言葉とは裏腹にエリルは言いたい事を言っていく、カレー以前に穿真の名が出ている時点で既に限定されているわけだが、穿真はエリルの言葉を耳にして動揺していた。

「女の子同士……だと……？」

「それどういう意味よッ！」

「ふ、二人とも喧嘩はだめですよ！」
信じられないと言った様子でエリルを見つめる穿真の視線に吼えるエリル、その二人の間に割って入りエリルを宥めようとする雪音。何とも騒がしい様子に食堂で食事をとっている兵士達の視線が集中してしまう。
「飯ぐらい静かに食べないとな」
その視線に耐え切れず三人は黙って俯くと、穿真は黙々とカレーをほおばり始めた。
するとエリルはお皿の上に残っていた最後のサンドイッチを口に入れると、コップを手に取り強引に流し込んだ。
「勝手に一人で食べてるといいわ、行きましょ」
すっかり機嫌を損ねたエリルはそのまま立ち上がり席から離れると、雪音も立ち上がり穿真に小さく頭を下げた後、トコトコとエリルの後についていってしまう。
その場に一人取り残された穿真は話したくても相手はおらず、黙ってカレーを食べる事しかできなかった。

――ＥＤＰの作戦決行の時間が迫る中、ＢＮ総司令官、風霧紳もまた自室で一人席に座り静かにその時を待っていた。
無音の室内、目を瞑りまるで眠るかのように椅子に座っている紳だが、その意識ははっきりとしていた。
今回行ったＮＦ・ＳＶの共闘で行われたＥＤＰの結果。そして今から始まるＢＮのＥＤＰについて、紳の脳裏に様々な思考が交差していく。
本来人類と神との戦いのはず、神に勝利することが人類の目的であり人類滅亡の危機を脱する使命だった。
しかし、何時からかＥＲＲＯＲという生命体がこの地に現れ、再びこの世界の……人類の危機が迫っている。
「問題無い……勝てばいい、人類が力を合わせ、勝てば……」
まるで自分に言い聞かせるかのようにそう呟くと、薄らと目蓋を開

き机の上に立て替えている一枚の写真を見つめる。
自分を中心とし、その周りには大勢の仲間達の姿が映る写真。
唯にダン。今は亡きセーシュと両親の姿もそこに有る、何とも懐かしい写真だ。
ふと、その写真を手に取ろうと紳が手を伸ばそうとした時、突如部屋の扉が開き外から唯が入ってくる。
「唯か。どうした突然、何か用か？」
紳は咄嗟に伸ばしていた手を引き、何事もなかったかのように椅子に座りなおすと、唯は紳の席に横においてある椅子に腰を下ろした。
「少し、お話がしたくて……」
……珍しかった。唯が黙って自分の部屋に入ってくる事など一度も無かったこと。
話をしたくて来たと言ってはいただが、唯は軽く俯いたまま何を言い出そうとせず、ちらちらと紳を見ては黙っている。
「もうすぐだ。もうすぐで争いの無い世界が来る……俺達の目の前には、１００年前から望んできた世界がすぐそこまできているんだ」
先に口を開いたのは紳だった、唯の不安な表情を見れば何を言いたいかはすぐに理解できる。
「覚悟は出来ています」
「共に平和な未来を築くぞ。１００年前、たった一人で神と戦い、散っていった先祖に代わってな……」
「お兄様……」
共に。という紳の何気なく暖かい言葉に唯の表情が明るくなると、紳の元へ歩み近寄ろうとした時、突如部屋の入り口の扉が開くと、煙草を口に銜えたダンが部屋の中に入ってきた。
咄嗟のことに歩もうとしていた足を急に止め少し体勢を崩す唯。
「兄妹仲良くお喋りしている所邪魔して悪いが、紳。今すぐ司令室に来たほうがいい」
「どうした」
ダンは紳に視線を向けると、腰に手をあて銜えていた煙草を摘み大

きく息を吐いた。
「ＮｅｗＦａｃｅ……奴等が堂々と待ち構えてやがるぜ」
その言葉に紳と唯の表情が強張る。ＮＦに残された最後の戦力、それは赤城や甲斐斗達だけではない。
騎佐久率いるＮＦ最後の大隊が残っている。そして今、その最後の大隊はある一つの目的を成し遂げようと動いていた。
人類の、勝利の為に。

第１１１話　天秤、理

――ダンの言う通り、ＢＮがＥＤＰへと向かう道先の上空にはＮＦ最大級の空中戦艦、アルカンシェルが待機していた。
艦のレーダーには反応しないものの、司令室からはハッキリと肉眼で確認できる程の距離にまで近づいており、艦内の兵士達はその情報は放送で知り、慌しく戦闘準備に取り掛かろうとしている。
所が、突如艦内放送が消えると。先ほどまで聞こえてきた女性の声ではなく、ある男性の声が流れ始める。
『おはようＢＮの諸君、今頃我々の存在に気づいて慌てていると思うが落ち着いてほしい。我々は争いに来たわけではない。話しに来たんだ』
その声は司令室に到着していた紳と唯にも聞こえていた、そしてこの声の主が誰なのかは、モニターに映された姿を見る前から二人は知っていた。
「騎佐久……なんの用だ……」
『言っただろう？話しに来たと、ＥＲＲＯＲの残る最大の巣は残り二つ、今から君達が向かう所、そして残り最後の巣はＮＦ、ＳＶの生き残った者達と合同で行われる……が、しかしだ。お前も内心気づいているはずだ、このままだと人類は敗北する……と。ＮＦ・ＳＶで行われたＥＤＰの結果を知っているにも関わらず兵を進めるか？今、お前には心底呆れてるんだよ』
呆れている、そう言われて紳は騎佐久が何を言いたいのかが理解できた、だがそんな紳の表情一つ変えない姿を見て騎佐久は声を荒げる。
『わからないか？余りにも犠牲が多すぎるだろ！？生き残った兵士はたった１５人……一体お前たちは最後のＥＤＰを何十人の兵士で挑む気だ？』
騎佐久が呆れるのも当然だった、それにこの思いは少なからず兵士

達も気づいていた。
たしかに今ここでＢＮがＥＤＰを行い、仮にＥＲＲＯＲに勝利したとしよう。……実際何人の兵士が生き残るのか。最終決戦に向けての兵力が明らかに足りないのは明白。
「騎佐久、俺は今ＥＤＰへと向かうＢＮの兵士達の数に、１５人足した数で行うつもりだ。貴様は勘違いしていないか？俺達は死にに行くわけじゃない、戦う前から死人の数を数える程俺は諦めていない」
『綺麗言を並べるな。それはお前の自己中心的な考えに過ぎない。我々の所有する『核』の力があれば、無駄な犠牲は出さずに済む。お前達が今から落とすであろう命の価値はなく、無意味ということだ』
「それで……敵地へと歩を進めている俺達が、敵前で今更引き返すとでも思っているのか？」
『……やはりこうなったか、残念だよ。だがな、消える命とわかっていて……戦場に行かせる程私は冷酷でもなければ、お前のような馬鹿でもない』
話し合いだけで本当に今の紳を止められるなどと、騎佐久は考えてもいなかった。
全ては大義名分の為。人類を守るために行くＢＮを妨害すれば、それは明らかにＮＦは人類として過ちとなるだろう。
しかしこれは違う、ＮＦは人類を一人でも多く守る為に今、ＢＮの前に立ちはだかり、その力を人類に向けようとしていた。
空中要塞アルカンシェルの砲門が次々と出てくると、全ての砲門が進軍するＢＮの艦隊に向けられていく。
「俺達を止める気か。だが騎佐久、今ここで俺達が戦うこと自体が最大の過ちのはず。違うか？」
『安心しろ。お前が死ねばそれで終わる、被害は最小限に食い止め、我々がＥＲＲＯＲの巣に『核』を放とう。そうすればお前達の兵士は全員生き残り、ＥＲＲＯＲの巣を壊

滅できる……良かったな、人類は救われ。世界が平和になる、お前の望んだ世界にな』

今にも砲撃を開始してきそうなアルカンシェル、既に司令室のオペレーター達にはいつでも砲撃が開始できるように命じられている。

だがその時、突如アルカンシェル内のモニターの映像が乱れ始めた。機器は操作を全く受け入れず、ほとんどのモニターが電源が切れたかのように黒い映像しか映らない。

「何事だ？」

「レーダー機器が全て機能不能に陥りました！こ、この現象は……あの時と同じ――」

――「どうやら……間に合ったか、よくやったエリル。そのまま艦の上で待機し、不振な行動が見えたら阻止しろ」

「はい、了解です！」

全ては騎佐久の命令通り、姿を消している必要ももう無くなった為、今まで消していた機体の姿をゆっくりと露にしていく。

形勢は逆転した、アルカンシェルの上で紫色に光る翼を靡かせ、いつでも戦艦を攻撃できる圧倒的有利な位置に今、エリルの乗る紫陽花は立っているのだから。

「さすが紫陽花。無花果からのステルスフレームも受け継いでるなんて、私と紫陽花が力をあわせれば相手に気づかれずに近づくなんて朝飯前なんだから……もう食べたけど」

艦内に騎佐久の声が流れ、紳と会話している僅かな間。既にエリルは紫陽花に搭乗し出撃していたのだ。

これでもうＮＦは何もする事が出来ない、ＢＮの艦隊達は速度を落とすことなく目的地へと進んでいく。

「それにしても、何が奇麗事を言うな～よ。ＢＮの本部襲撃を指揮した人間がよく言えるわね。あんた達がいなければラースだって本当は今頃……」

紫陽花に乗るエリルは、ＮＦの戦艦を見つめながら一人文句をつぶ

やいていた。
正直ここで引き金を引き、ＮＦの戦艦を沈めたい気持ちも無いわけではない。
ここでこの戦艦を落とせば、もうＢＮを敵視する『人間』はいなくなり、心置きなく戦える。
引き金にかけていた指が少しずつ引かれていく。このままＮＦを放置した所で、また何か妨害や邪魔をされるに決まってる、それならいっそここで抵抗できないようにしておけば――。
その時、紫陽花のレーダーにＮＦの機体反応をあり。アルカンシェルから１機の機体が発進されていたのだ。
「機体？……ありがとね、わざわざ抵抗してくれてッ！！おかげで攻撃できる理由が出来たわよ！」
これでもう迷いも躊躇いもない。狙うは戦艦の前方に位置する司令室、両翼の光を瞬時に向けエリルが引き金を引こうとした時その指先よりも早く、突如１機の黒い機体が目の前に降臨する。
その余りにも速すぎる敵機の登場にエリルの思考がついていけず、驚きと共に引き金を引く指が１秒程とまっていた。
「えっ、速――」
呟く間さえなかった。リバインに似た黒い機体が紫陽花の胸部へと突き出した手から黒色の電磁波と共に衝撃波を放つと、紫陽花は紙くずのように転がりながら吹き飛ばされ先ほどまで立っていたアルカンシェルから落ちていく。
「きゃぁあああーーーッ！」
吹き飛ばされ落ちていく紫陽花。
「何なのよぉ、今の！」
エリルはすぐさま機体を操縦しその場で立て直すと、両翼から紫色に輝く花びらを広範囲に散布し始めた。
「冗談じゃないわよ……あんな速い機体見たことない。……でも、あの武器はそんなに強くないわね」
吹き飛ばされれ転がり落ちたものの紫陽花に目立った損傷は無く、

機体の状態も正常。本来あれ程の近距離で攻撃されては一溜まりもない。

『違うよ、全然違うよ』

そのエリルの言葉を否定するように青年の声が突如紫陽花の操縦席に流れた。

『今の……本来の威力の５％も出してないよ。だって……機体を破壊するなって、今は……言われてるから……ね』

自分と大して歳の差はないであろう声でわかるが、上からものを言うような言い方にエリルもつい強気に切り返してみせる。

「勝手に無線繋いでくるなんて強引ね。それにさっきのがたった５％って、さすがにそれは言いすぎじゃ……」

が、そのエリルの強気は次に放たれた一撃だけでいとも簡単に圧し折られてしまう。

青年の乗る機体が一瞬にして紫陽花の目の前に現れると、先ほど突き出した腕を紫陽花にではなく地面に向け、先ほどと同じ黒色の波動を機体の手から放った。

波動は地面に触れた直後、轟音と共に震え上がり地面に亀裂が走り広がるよりも早く巨大なクレーターを作り上げていた。

ＢＮの艦隊の進行方向上に作られた巨大なクレーターに、艦長達は一斉に戦艦の緊急停止を指示する。

一斉に急停止していくＢＮの艦隊。間一髪、艦隊は巨大なクレーターに落ちずに一歩手前で立ち止まっていた。

『これで……３０％。どう……？すごいよ、ね？強いよね……言わなくてもわかる、君の表情を見れば……すごく、伝わってくるから』

もし、あの力を今いるＢＮの艦隊に向けられたら。間違いなくＢＮはこの場で全滅していただろう。

『僕が戦場に出てきたんだ……君達に勝ち目はないよ……』

機体の速さ、そして火力。現実からかけ離れすぎているその機体の力を見てエリルは生唾を飲み、僅かな汗を額に滲ませていた。

「化け物ッ……」

青年の乗る機体が明らかに尋常でないのはＢＮの艦から2機の様子を見ていた兵士達にも直ぐに理解できた。
勝てない。
今まで幾つもの戦場を見て、戦ってきた兵士達だからこそ。その絶望感は半端ではなかった。
そして、その艦内の様子を見ていた騎佐久は再び口を開く。
『お前達にもわかったはずだ……我々に抵抗した所で傷を増やすだけ。大人しく引き下がれ、もし抵抗すれば……』
次は無い。そう言うかのように黒い機体は紳と唯の乗る艦に接近して艦首の上に立つと、紳達のいる司令室に右腕を向けた。
艦にだけは近づけさせたくはなかった。だが、エリルが黒い機体の動きに気づいた時には既に黒い機体は艦首に立っており、今の紫陽花ではもはやどうすることもできなかった。
『―ＳＲＣ発動―』

――コンコン、と。機体の肩を突付かれる音に、アステルの乗る機体がふとその方に目を向けると、先程まで何もいなかった場所に紫陽花が立っていた。
何が起きたのか理解できず、アステルはこちらに手を振る紫陽花を呆然と見ている。
『……ッ！？』
その余りの唐突な出来事に瞬時に頭が回らなかったが、要約事態を理解できたアステルはすぐさま機体の右腕を紫陽花に向けなおした。
『脅かさないでよ……』
一体、何故、どうして。自分に気づかれずにこれほどまで近い間合いに近づけたのかアステルは疑問に思っている。
たしかに紫陽花は敵機のレーダーをかく乱することは可能、姿を消す事だって出来る。しかし、何故こうも易々と間合いに……。
思考をめぐらせていたアステルだが、既に彼の想像を遥かに上回る現象が起きている事に未だ気づいていない。

コンコン、と。先程と同じ、今度は背後の突付かれる音にアステルはすぐさま機体を振り返らせると、ひらひらとこちらに手を振る紫陽花が堂々と立っていた。

……意味がわからない。先程と同じ、思考を巡らせ現状を把握しようとする。

何故物音一つ立てずに背後に近づける？ＢＮの紫陽花は２機存在するのか？……どちらにしろ、今この場に止まるのは得策ではない。一度上空まで引き、状況を確認する他ない。そう思い瞬時に機体を飛び上がらせるアステル。

しかし、これでアステルは気づく事になる。今まで気づかなかった現象、そして異様な光景を目の当たりにするのだから。

『花……畑……？』

アステルの発言に戸惑う者、疑う者、驚く者は、既にこの戦場には誰一人いなかった。

と、言うより。既に戸惑い、疑い、驚く者……そして、その美しさに魅了される者しかこの場にはいなかったのだ。

地面一面を覆いつくす程の量の紫陽花の夥しい数。全機紫色の光の翼を靡かせ、百機軽くは超える程の『紫陽花』が立ち尽くしていた。

それは地上だけではない、上空を見れば青空を覆い隠す程の紫陽花が存在し、じっとこちらを見つめている。

花びらが舞う……その光景はアステルの言う通り、まさに紫陽花の花畑であった。

――――「えっ、ええ！？どうなってるのコレ！？」

その異様な光景、状況に一番驚いていたのは。騎佐久でもなく紳でもない、紫陽花のパイロット。エリル・ミスレイアだった。

「紫陽花が、いっぱい……」

周りを見渡せば自分の乗っているはずの紫陽花が無数に空を漂っている。

ＳＲＣを発動させた後、エリルが機体を発進させようとした時には

既に自分の紫陽花とは違う別の紫陽花が戦艦の艦首に立ち、アステルの乗る黒い機体の真横に立っていたのだ。
「もしかして、これも紫陽花の能力……？」
紫陽花に乗りＳＲＣを発揮した事などＢＮの本部襲撃以来一度も無かった事ではあったが、それ以前に紫陽花の能力の数や能力が未だに未知数であり、その紫陽花の力はエリル本人にも全てを把握できずにいる。
「ラース……ありがとう……」
紫陽花の力がまた一つ発揮された、そして今相手の最強とも呼べる機体の操縦者は少なからず動揺している。
戦い、早期決着をつけるなら……今が絶好のチャンス！
「行くよ！紫陽花！」
花びらは舞う……エリルの思うがままに、無数の紫陽花は一斉に動き始める。
地上に立っている紫陽花は一斉に機関銃を構え、上空に浮かんでいる黒い機体目掛け一斉に引き金を引く。
けたたましい銃声、回避は不可能の等しい、それ程の夥しい数の弾丸がアステルに向けて撃たれている。
だからと言ってアステルは特に慌てる様子はない。当たり前だ、機関銃の弾丸などこの機体の、『デルタ』の力を発揮すれば弾丸の方から全て逸れていくのだから。
そう、恐れる事はない。この機体の力さえあれば……徐々に表情にも余裕が戻ってくる、相手の機体が、自分の機体に勝てるはずが……。
無い。そう思った瞬間、無数の弾丸が次々に機体に直撃していく光景を目の当たりにする。
『そんな、どうしてっ……！？』
何故弾丸が逸れない！？弾かれない！？その疑問が浮かんだ矢先、もう一つ別の疑問が前の疑問を上書きしていく。
振動が、まるで伝わってこない。これほどの弾丸を受ければ幾らこ

の機体でも損傷し、機体が振動するはず。
なのに、何も感じない。機体が振動するはず。
に直撃しているはずなのに……。
それで初めて全てが繋がった。何故音も無く紫陽花が接近できたのか、どうして無数の紫陽花が存在しているのか。
決心した顔つきでアステルは突然機体の操縦席のハッチを開けにかかる、今開ければ無数の弾丸の餌食になるのは間違いない。だがアステルはすぐさま機体のハッチを開け、真実の光景をその自分の肉眼で目撃した。
そしてアステルの思った通り、目の前に広がっているはずの紫陽花の光景はそこには無く、更地の広がる大地しか存在していなかった。
『やっぱり、幻影……！』
紫陽花の花びらが戦場に舞っていた時点で、機体のメインカメラから録られた光景はジャミングされ、モニターに映し出される映像は全て紫陽花の能力によって描きかえられていた映像に過ぎなかった。これでわかった、つまり紫陽花はたった1機しか存在せず。これはただの幻影と幻聴で、苦し紛れの誤魔化しに過ぎないのだと。
「そ、幻影よ」
肉眼で確認しているはずなのに、アステルの目の前には1機の紫陽花が現れていた。
これは幻影などではない、本物の、エリルの操縦する紫陽花。戦場は既に紫陽花によって飲み込まれ、支配し……終わりを迎えていた。
「でもこれは現実」
その言葉を聞き終えた瞬間、アステルの乗る機体から切断された四肢が火花を上げながら吹き飛んでいった。
切断された箇所からは高圧電流と火花が噴出し、機体の浮力を保つことも出来ず地面に落下していく。
『うそ……嘘、嘘っ。違うよ、全然違うよ、僕が、僕の機体、僕は、さいきょ、最強に、僕ぅはぁあああ！！！！』
呆気ないものだった。あの武蔵、愁、甲斐斗と三人同時に戦い、圧

倒的勝利を収めた機体が、今は手足を失いゴミのように地面に転がっているのだから。
まるであの時の、甲斐斗がテトの黒薔薇を倒した時のように、それはとても無様な光景だった。

――NF、BNの兵士達はその勝負をただ呆然と見守ることしか出来ずにいたが、NFの機体が地面に落ちた事で一つ決定的な事が理解できた。
信じられないと言わんばかりの表情の騎佐久に、紳は力強い声で喋り始めた。
「BNの勝利だ、文句はあるまい。俺達は先を急がせてもらう」
BNの艦隊はクレーターを避けながら目的地へと向かうべく艦を進ませた。
NFの戦艦などもはや眼中にない、今この場で戦いは終わった。
今から交渉？何を、どう交渉すれば良い。そもそも騎佐久はアステル一人でこの場を沈められる事を確信していたのだ。
絶対に負けるはずがない。あの機体の力を使えば必ずBNに勝てる、そして引き下がらせる事も容易なはず。
それなのに、何だこの光景は。勝利し立っているのはBNの機体で、敗北し地面に転がっているのはNFの機体……。
アステルの機体が動かない今。もうBNを止める術は無い、元々NFはBNと戦いにこの場に来た訳ではない、人類同士で戦い戦力を削る事など愚の骨頂。
騎佐久達はBNの艦隊が進んでいく光景をただただ見つめることしかできなかった。
『化け物がッ……』
「違う」
小さく言葉を吐き捨て、通信を終えようとした騎佐久だったが。紳の言葉に思わず指を止めてしまう。
「紫陽花だ」

紳がそう呟いた後、ＮＦとの通信をＢＮから静かに切られた。

――ＢＮの艦隊が去った後、アステルの乗っている機体は無事ＮＦの戦艦に無事回収され機体の修理に取り掛かろうとしていた、が……。

「どうしたお主ら、何を慌てておる」

「菊大佐！それが、アステル少尉の機体が……」

アステルの様子が気になった菊は司令室に騎佐久を残し、アステルの機体が収容された格納庫に来ていた。

すると格納庫内にいる兵士や整備士達が何やらざわめき普段とは違う様子、皆１機の機体に目をやりながら口々に疑問を出している。

それもそのはず、先程まで両手足を切断され損傷していたはずの機体が、艦内の格納庫に収容された時点で、ないはずの手足が存在し、一切の傷が見当たらない。

「無傷？馬鹿な、先程まで手足が無かったはずじゃっ……これがあのＭＤを元に改良され作られた機体の力なのか……」

収納された機体は跪き胸部のハッチが開く、そして操縦席からは無表情のアステルが一人降りてくる。

そして地面に着地すると、一人淡々と歩き格納庫から出て行こうとする。その異様な気配に誰も声をかけられず見つめ続けることしかできない。

出口の前に立つ菊、出口へと向かって歩くアステル。互いが擦れ違う時、アステルは足を止める事無く口を開いた。

「疲れました……部屋に、戻りますね……うひゃ」

ぞくり……と、気持ち悪い異質な空気が菊の背後から包み込むように動いたように感じた。

殻にひびが入り、中からどろどろとしたぬめり気のある気配が漏れ出そうとしている……。

「他の兵士達に伝えておけ、絶対にアステル少尉に近づくなと。今のあやつは危険じゃ……」

アステルが去った後、近くにいた兵士にそう告げると、菊もまた一人格納庫を後にした。

一人喋り続ける。

「ねっえさ～ん、ルッフィス～。ぼっくはねー、さっいきょうひゃ、最強～……」

一人話し続ける。

「大丈夫さ、だいじょうぶぅ。僕は負けひぃ～、はは、ん～～時間時間時間時間時間」

自分の部屋に向かう途中の通路で、アステルはひたすら口を動かし続けていた。

「時間時間時間時間時間時間。僕も過去行きたいなぁ～」

しかし、その表情は気持ち悪いほど至って普通だ。

普通に歩き、目はしっかりまっすぐ向いて、言葉だけ異常。

「姉さんのクッキー食べたいな～ルフィス、ルフィス可愛い。優しいルフィスは僕のルフィスは僕と一緒に」

部屋の前に到着すると、アステルはカードキーを使い自室の扉の鍵を開け部屋の中に入っていく。

室内はとても整理整頓されており、生活に最低限必要な物しか置いていない。

そして自室のベットに座ると、無防備に机の上に置いてある錠剤や小さなカプセルを適当に何粒か口に入れ水も無しに噛み砕きながら飲み込みはじめた。

「うん。姉さんとルフィスの作ったクッキーとっても美味しいよ」

そう言いながらアステルはベットの上に横たわり真っ白な天井を見つめ続ける。

「これで良いんだよ」

口元だけがニヤリと笑い、まるで誰かに話しかけるように言葉を続ける。

「僕はＢＮの人達一人一人に聞いていくつもりなんだ」

ああ、今からでも想像できる。ＥＲＲＯＲの圧倒的力に次々に死んでいくＢＮの兵士達。
だから強制的に通信を繋げてその様子を見ながら聞いていくんだ。
もうすぐ死ぬね、今の気持ちはどう？感想は何？どういう気分？ねぇ、教えてよ。
痛い？辛い？怖い？悔しい？ねぇ、ねえねえ、あの時引き下がっていたらこうならなかったんだよ？
ねえねえ、ねえねえ。ねえねえねえ今どんな気持ち？ねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえ。
君の家族は？
友達は？
恋人は……？
あっ、泣いてる。ああ、とっても悔しそう。あー、拳銃で自分の頭を……うひゃ、うひゃひゃ！！
うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！！
「うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3855c/

Deltaプロファイル

2011年9月18日18時21分発行